

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第8集
KITANISHINOKUBO SITE

北西の久保

—南部台地上の調査—

長野県佐久市岩村田北西ノ久保遺跡第2次発掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター



1 北西ノ久保遺跡北部地区全景（南西方向より、水間正氏撮影）



2 北西ノ久保遺跡北部地区全景（南西方向より、水間正氏撮影）



1 北西ノ久保遺跡の地形、および南部地区全景（株式会社 協同測量社撮影）



1 北西ノ久保遺跡南部地区の遺構分布 (株式会社 協同測量社撮影)



1 北西ノ久保遺跡の弥生時代中期後半の土器群



2 北西ノ久保遺跡の弥生時代後期前半の土器群

凡 例

- 1 本書は、事業年度等の関係から限定された期間内での、迅速な刊行を基本的編集方針とし、調査により検出された遺構、遺物の資料をできるだけ多く図化し、また、最大限わかりやすく記録することに努めて作成した。
- 2 竪穴住居址（以下、本文中においても特別な場合を除いて住居址とする。）の記述については、検出位置⇒検出層序⇒重複関係⇒平面形態⇒覆土⇒壁（壁溝を含む）⇒床面⇒柱穴⇒炉（位置⇒残存状況⇒平面形態⇒層位⇒構材⇒その他）⇒その他の付属施設⇒遺物の出土状況⇒その他の観察事項の順に記載し、他の遺構についても基本的に住居址の記載順序を踏襲した。

また、報文中・遺構一覧表に掲示した遺構規模の測定値は以下のような規準で計測した。

住居址 規模を長軸長と短軸長で表示し、東・西・南・北壁長は形態の数量計測値として記載した。

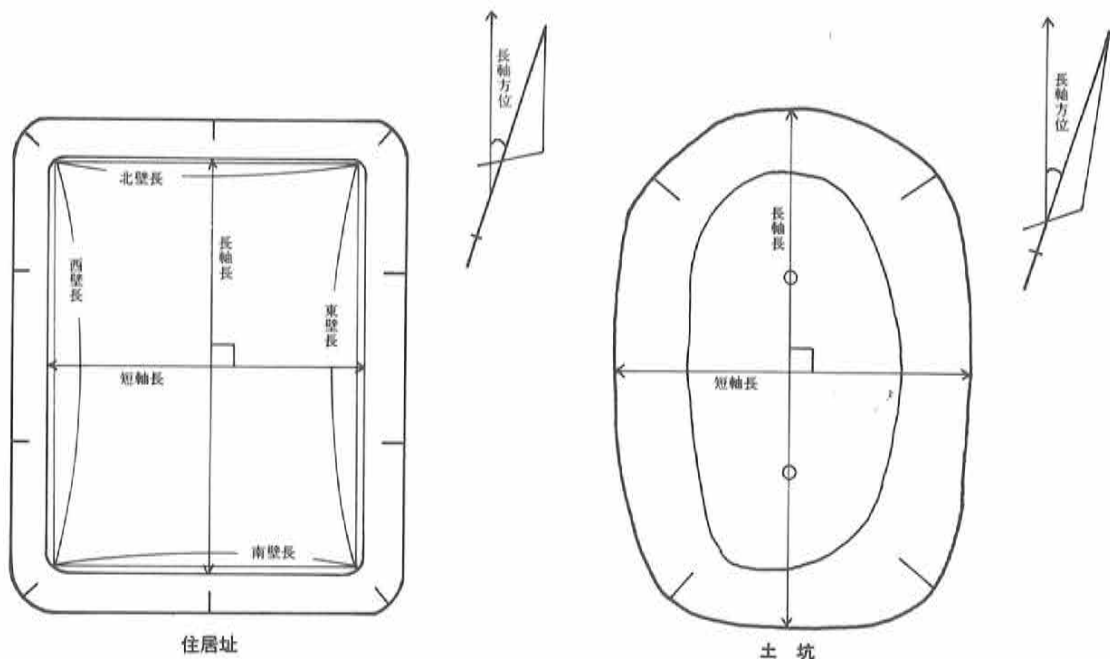
面積は壁下端により囲まれた空間をプランメーターを用いて3回計測し、その平均値を掲示した。

その中に含まれるピット等の付属施設の面積を差し引かず、単純に掘り込み床面面積をあらわしている。

壁残高は、確認面から床面までの最小値～最大値をあらわした。

長軸方位の表示は方形プランの場合、北と最も鋭角に交わる軸方位をあらわした。

土 坑 プランの中心点付近を通る最長軸を長軸とし、その直角二等分線のプラン上端の交点間を短軸として掲示した。深さは確認面からの最深部をあらわすことを基本とする。



3 遺構の略称

竪穴住居址（弥生時代）⇒Y、周湮⇒S、古墳⇒OT、特殊遺構⇒T、溝状遺構⇒M、土坑⇒D、礫群⇒L、ピット列⇒P

4 水系レベルについては、各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。

5 土器観察表において（ ）は推定値、〈 〉は残存値を示す。

土器実測の方法については下記の5種類に分け、各個体毎に観察表に記した。

完全実測 完存品に対して用いる。第三角投影法の応用に従う実測法。

回転実測A ½以上の残存品に対して用いる。

回転実測B ½付近～½未満の残存品（主として口縁部か底部）に対して用いる。

破片実測A ½以下の残存品に対して用いる。土器形態・直径が信頼性のある精度で推定できることを基準とする。

破片実測B ½以下の残存品に対して用いる。直径が推定できない破片に対して用いる。

石器の実測は第三角法に基づく。

6 挿 図

1) 重複遺構については、上端のみを実線で表示した。

2) 縮 尺

竪穴住居址、礫群、ピット列、溝状遺構（M3・4・5・6）⇒1/80、炉址⇒1/30、周湮、溝状遺構（M1・2・7）⇒1/160、古墳、特殊遺構⇒1/40、土坑⇒1/60、土器⇒1/4、土製品、金属器⇒1/3、石器（鏃、錐等）⇒2/3、石器（斧等）⇒1/3、石器（台石）⇒1/6、写真図版中の遺物の縮尺は、上記に準拠する。

3) 遺構全体図は協同測量社作成の航空測量図を使用した。

4) 遺構、遺物実測図に用いたスクリントーンは、下記の内容の表現である。

遺構実測図

地山 

炉 


焼土 

遺物実測図

赤色塗彩 

須恵器断面 

灰釉 

土師器内面黒色研磨 

- 7 本書の編集は小山岳夫が行い、執筆は付編を除き、高村博文、三石宗一、羽毛田伸博、篠原浩江、小山が、それぞれ分担し、文末に記して文責を明らかにした。
- 8 本書および北西ノ久保遺跡第2次調査出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において大井一治氏他、地元の方々には、発掘調査中、数々のご協力、およびご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

岩崎卓也、白田武正、堤 隆、花岡 弘、福島邦男、山下誠一、桜井弘人、笹沢 浩、相京建司、木下 亘、橋本博文、市川隆之、原 明芳、前原 豊、伊藤敏行、及川良彦、比田井克仁、村田健二、橋本裕行、中山誠二、石黒立人、鈴木敏弘、坂本和俊、千野 浩、直井雅尚、山田成洋、宮腰健司、森嶋 稔、坂井秀弥、桐原 健、立花 実、矢島宏雄、小林正春、土肥富士夫、島田恵子、青木和明、由井茂也

目 次

本 文 目 次

卷頭図版

例 言

凡 例

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機…………… 1

第 2 節 調査日誌…………… 2

第 II 章 基本層序…………… 4

第 III 章 遺構と遺物…………… 5

第 1 節 竪穴住居址…………… 9

1) Y 62号住居址…………… 9	24) Y 85号住居址……………86	47) Y 108号住居址……………159
2) Y 63号住居址……………10	25) Y 86号住居址……………90	48) Y 109号住居址……………161
3) Y 64号住居址……………11	26) Y 87号住居址……………93	49) Y 110号住居址……………164
4) Y 65号住居址……………16	27) Y 88号住居址……………97	50) Y 111号住居址……………164
5) Y 66号住居址……………20	28) Y 89号住居址……………100	51) Y 112号住居址……………165
6) Y 67号住居址……………26	29) Y 90号住居址……………104	52) Y 113号住居址……………165
7) Y 68号住居址……………29	30) Y 91号住居址……………107	53) Y 114号住居址……………166
8) Y 69号住居址……………34	31) Y 92号住居址……………110	54) Y 115号住居址……………168
9) Y 70号住居址……………38	32) Y 93号住居址……………112	55) Y 116号住居址……………172
10) Y 71号住居址……………42	33) Y 94号住居址……………117	56) Y 117号住居址……………175
11) Y 72号住居址……………44	34) Y 95号住居址……………120	57) Y 118号住居址……………177
12) Y 73号住居址……………47	35) Y 96号住居址……………121	58) Y 119号住居址……………178
13) Y 74号住居址……………49	36) Y 97号住居址……………122	59) Y 120号住居址……………179
14) Y 75号住居址……………55	37) Y 98号住居址……………125	60) Y 121号住居址……………182
15) Y 76号住居址……………59	38) Y 99号住居址……………128	61) Y 122号住居址……………185
16) Y 77号住居址……………62	39) Y 100号住居址……………130	62) Y 123号住居址……………191
17) Y 78号住居址……………67	40) Y 101号住居址……………136	63) Y 124号住居址……………193
18) Y 79号住居址……………72	41) Y 102号住居址……………139	64) Y 125号住居址……………194
19) Y 80号住居址……………74	42) Y 103号住居址……………141	65) Y 126号住居址……………201
20) Y 81号住居址……………78	43) Y 104号住居址……………144	66) Y 127号住居址……………206
21) Y 82号住居址……………80	44) Y 105号住居址……………150	67) Y 128号住居址……………209
22) Y 83号住居址……………82	45) Y 106号住居址……………153	68) Y 129号住居址……………212
23) Y 84号住居址……………84	46) Y 107号住居址……………155	

第2節 弥生時代の石器について	213
第3節 古墳および周埴	235
1) 北西ノ久保2号古墳	235
2) 第7・8・9号周埴	248
3) 第10号周埴	252
4) 第11号周埴	259
5) 第12号周埴	260
6) 第13号周埴	263
7) 第14号周埴	264
8) 第15号周埴	268
9) 第16号周埴、第168・169・175号土坑	271
第4節 特殊遺構	274
1) 第1号特殊遺構	274
2) 第2号特殊遺構	276
3) 第3号特殊遺構	285
第5節 溝状遺構	285
1) 第1・2・7号溝状遺構	285
2) 第3号溝状遺構	286
3) 第4号溝状遺構	286
4) 第5号溝状遺構	289
5) 第6号溝状遺構	290
第6節 土坑	291
1 弥生時代の土坑	291
1) 第110号土坑	291
2) 第120号土坑	291
3) 第121・122号土坑	292
4) 第123号土坑	292
5) 第124号土坑	293
6) 第129・133・134号土坑	293
7) 第131号土坑	295
8) 第132・135号土坑	295
9) 第136号土坑	296
10) 第137号土坑	296
11) 第141号土坑	296
12) 第146・147・155号土坑	297
13) 第150号土坑	298
14) 第149・151号土坑	298
15) 第161号土坑	299
16) 第171号土坑	299
17) 第176号土坑	300
2 中世及び中世以降と考えられる土坑	300
1) 第116号土坑	300
2) 第148号土坑	301
3 時期不明の土坑	302
第7節 礫群およびピット列(東部南斜面)	316
1) 第1号礫群	316
2) 第2号礫群	316
3) 第3号礫群	318
4) 第4号礫群	319
5) 第5号礫群	319
6) 第6号礫群	319
7) 第1号ピット列	320
8) グリッド・表採遺物	321
第8節 グリッド及び表採遺物について	322
第IV章 総括	
第1節 弥生時代	328
1) 遺構	328
2) 遺物	337
第2節 古墳時代	369
第3節 奈良・平安時代および中・近世	374
引用参考文献	375
付 編	
森本岩太郎 佐久市北西ノ久保遺跡出土人骨について	
三辻 利一 北西ノ久保・大井城跡(黒岩城)出土須恵器・埴輪の胎土分析	

挿 図 目 次

第1図	北西ノ久保遺跡の位置……………	1	第55図	Y74号住居址炉址実測図……………	51
第2図	整理作業行程図……………	3	第56図	Y74号住居址出土土器実測図……………	52
第3図	北西ノ久保遺跡台地上基本層序模式図……………	4	第57図	Y74号住居址出土土器拓影図……………	54
第4図	第2次調査発掘区設定図……………	6	第58図	Y74号住居址出土土器実測図……………	54
第5図	北西ノ久保遺跡第2次調査全体図……………	7	第59図	Y75号住居址実測図……………	55
第6図	Y62号住居址実測図……………	9	第60図	Y75号住居址炉址実測図……………	55
第7図	Y62号住居址出土土器実測図……………	9	第61図	Y75号住居址出土土器実測図……………	57
第8図	Y62号住居址出土土器拓影図……………	9	第62図	Y75号住居址出土土器実測図……………	58
第9図	Y63号住居址実測図……………	10	第63図	Y76号住居址実測図……………	59
第10図	Y63号住居址炉址実測図……………	10	第64図	Y76号住居址炉址実測図……………	60
第11図	Y63号住居址出土土器拓影図……………	11	第65図	Y76号住居址出土土器実測図……………	61
第12図	Y64号住居址実測図……………	12	第66図	Y76号住居址出土土器拓影図……………	61
第13図	Y64号住居址出土土器実測図〈1〉……………	13	第67図	Y77号住居址実測図……………	62
第14図	Y64号住居址出土土器実測図〈2〉……………	14	第68図	Y77号住居址炉址実測図……………	63
第15図	Y64号住居址出土土器拓影図……………	14	第69図	Y77号住居址出土土器実測図……………	64
第16図	Y65号住居址実測図……………	16	第70図	Y77号住居址出土土器拓影図……………	65
第17図	Y65号住居址炉址実測図……………	16	第71図	Y78号住居址実測図……………	67
第18図	Y65号住居址出土土器実測図……………	18	第72図	Y78号住居址炉址実測図……………	68
第19図	Y65号住居址出土土器拓影図……………	19	第73図	Y78号住居址出土土器実測図……………	69
第20図	Y65号住居址出土土器実測図……………	19	第74図	Y78号住居址出土土器拓影図……………	71
第21図	Y66号住居址実測図……………	21	第75図	Y78号住居址出土土器実測図……………	71
第22図	Y66号住居址炉址1・2実測図……………	22	第76図	Y79号住居址実測図……………	72
第23図	Y66号住居址出土土器実測図〈1〉……………	23	第77図	Y79号住居址出土土器実測図……………	73
第24図	Y66号住居址出土土器実測図〈2〉……………	24	第78図	Y79号住居址出土土器拓影図……………	74
第25図	Y66号住居址出土土器拓影図……………	24	第79図	Y80号住居址実測図……………	75
第26図	Y66号住居址出土土器実測図……………	24	第80図	Y80号住居址炉址実測図……………	75
第27図	Y67号住居址実測図……………	27	第81図	Y80号住居址出土土器実測図……………	76
第28図	Y67号住居址炉址実測図……………	27	第82図	Y80号住居址出土土器拓影図……………	76
第29図	Y67号住居址出土土器実測図……………	28	第83図	Y81号住居址実測図……………	78
第30図	Y67号住居址出土土器拓影図……………	28	第84図	Y81号住居址炉址実測図……………	78
第31図	Y68号住居址実測図……………	29	第85図	Y81号住居址出土土器実測図……………	79
第32図	Y68号住居址炉址実測図……………	29	第86図	Y81号住居址出土土器拓影図……………	79
第33図	Y68号住居址出土土器実測図……………	31	第87図	Y82号住居址実測図……………	80
第34図	Y68号住居址出土土器拓影図……………	33	第88図	Y82号住居址出土土器実測図……………	81
第35図	Y69号住居址実測図……………	34	第89図	Y82号住居址出土土器拓影図……………	81
第36図	Y69号住居址炉址実測図……………	34	第90図	Y82号住居址出土土器実測図……………	81
第37図	Y69号住居址出土土器実測図……………	35	第91図	Y83号住居址実測図……………	82
第38図	Y69号住居址出土土器拓影図……………	35	第92図	Y83号住居址炉址実測図……………	82
第39図	Y69号住居址出土土器実測図……………	36	第93図	Y83号住居址出土土器実測図……………	83
第40図	Y70号住居址実測図……………	38	第94図	Y83号住居址出土土器拓影図……………	83
第41図	Y70号住居址炉址実測図……………	39	第95図	Y84号住居址実測図……………	84
第42図	Y70号住居址出土土器実測図……………	40	第96図	Y84号住居址出土土器実測図……………	85
第43図	Y70号住居址出土土器拓影図……………	40	第97図	Y84号住居址出土土器拓影図……………	85
第44図	Y71号住居址実測図……………	42	第98図	Y84号住居址出土土器実測図……………	85
第45図	Y71号住居址出土土器実測図……………	43	第99図	Y85号住居址実測図……………	86
第46図	Y71号住居址出土土器拓影図……………	43	第100図	Y85号住居址炉址実測図……………	86
第47図	Y71号住居址出土土器実測図……………	43	第101図	Y85号住居址出土土器実測図……………	88
第48図	Y72号住居址実測図……………	45	第102図	Y85号住居址出土土器拓影図……………	88
第49図	Y72号住居址出土土器実測図……………	46	第103図	Y85号住居址出土土器実測図……………	89
第50図	Y73号住居址実測図……………	47	第104図	Y86号住居址実測図……………	90
第51図	Y73号住居址出土土器実測図……………	48	第105図	Y86号住居址出土土器実測図……………	91
第52図	Y73号住居址出土土器拓影図……………	48	第106図	Y86号住居址出土土器拓影図……………	91
第53図	Y73号住居址出土土器実測図……………	48	第107図	Y86号住居址出土土器実測図……………	92
第54図	Y74号住居址実測図……………	50	第108図	Y87号住居址実測図……………	93

第109图	Y 87号住居址炉址实测图	94	第167图	Y 102号住居址实测图	139
第110图	Y 87号住居址出土石器实测图	95	第168图	Y 102号住居址炉址实测图	139
第111图	Y 87号住居址出土石器拓影图	96	第169图	Y 102号住居址出土石器实测图	140
第112图	Y 87号住居址青铜製品实测图	96	第170图	Y 102号住居址出土石器拓影图	140
第113图	Y 88号住居址实测图	97	第171图	Y 103号住居址实测图	141
第114图	Y 88号住居址出土石器实测图	99	第172图	Y 103号住居址炉址实测图	142
第115图	Y 88号住居址出土石器拓影图	99	第173图	Y 103号住居址出土石器实测图	143
第116图	Y 88号住居址出土石器实测图	99	第174图	Y 103号住居址出土石器拓影图	144
第117图	Y 89号住居址实测图	100	第175图	Y 104号住居址实测图	145
第118图	Y 89号住居址炉址实测图	101	第176图	Y 104号住居址炉址实测图	147
第119图	Y 89号住居址出土石器实测图	102	第177图	Y 104号住居址出土石器实测图	148
第120图	Y 89号住居址出土石器拓影图	102	第178图	Y 104号住居址出土石器拓影图	148
第121图	Y 90号住居址实测图	105	第179图	Y 105号住居址实测图	150
第122图	Y 90号住居址炉址实测图	106	第180图	Y 105号住居址炉址实测图	151
第123图	Y 90号住居址出土石器实测图	106	第181图	Y 105号住居址出土石器实测图	152
第124图	Y 90号住居址出土石器拓影图	106	第182图	Y 105号住居址出土石器拓影图	152
第125图	Y 91号住居址实测图	107	第183图	Y 106号住居址实测图	153
第126图	Y 91号住居址出土石器实测图	108	第184图	Y 106号住居址炉址实测图	154
第127图	Y 91号住居址出土石器拓影图	108	第185图	Y 106号住居址出土石器实测图	154
第128图	Y 92号住居址实测图	110	第186图	Y 106号住居址出土石器拓影图	154
第129图	Y 92号住居址炉址实测图	110	第187图	Y 107号住居址实测图	155
第130图	Y 92号住居址出土石器实测图	111	第188图	Y 107号住居址炉址实测图	156
第131图	Y 92号住居址出土石器拓影图	111	第189图	Y 107号住居址出土石器实测图	157
第132图	Y 93号住居址实测图	112	第190图	Y 107号住居址出土石器拓影图	158
第133图	Y 93号住居址炉址 1 实测图	113	第191图	Y 108号住居址实测图	159
第134图	Y 93号住居址炉址 2 实测图	113	第192图	Y 108号住居址炉址实测图	160
第135图	Y 93号住居址出土石器实测图	114	第193图	Y 108号住居址出土石器拓影图	160
第136图	Y 93号住居址出土石器拓影图	114	第194图	Y 109号住居址实测图	161
第137图	Y 93号住居址出土石器实测图	116	第195图	Y 109号住居址炉址实测图	162
第138图	Y 94号住居址实测图	117	第196图	Y 109号住居址出土石器实测图	162
第139图	Y 94号住居址炉址实测图	118	第197图	Y 109号住居址出土石器拓影图	163
第140图	Y 94号住居址出土石器实测图	119	第198图	Y 109号住居址出土石器实测图	163
第141图	Y 94号住居址出土石器拓影图	119	第199图	Y 110号住居址实测图	164
第142图	Y 95号住居址实测图	120	第200图	Y 110号住居址出土石器拓影图	164
第143图	Y 95号住居址出土石器拓影图	120	第201图	Y 111号住居址实测图	164
第144图	Y 96号住居址实测图	121	第202图	Y 111号住居址出土石器实测图	165
第145图	Y 96号住居址出土石器实测图	121	第203图	Y 111号住居址出土石器拓影图	165
第146图	Y 97号住居址实测图	122	第204图	Y 112号住居址实测图	165
第147图	Y 97号住居址出土石器实测图	124	第205图	Y 112号住居址出土石器拓影图	165
第148图	Y 97号住居址出土石器拓影图	124	第206图	Y 113号住居址实测图	165
第149图	Y 98号住居址实测图	125	第207图	Y 114号住居址实测图	166
第150图	Y 98号住居址炉址实测图	126	第208图	Y 114号住居址炉址实测图	167
第151图	Y 98号住居址出土石器实测图	127	第209图	Y 114号住居址出土石器拓影图	167
第152图	Y 98号住居址出土石器拓影图	127	第210图	Y 115号住居址实测图	168
第153图	Y 98号住居址出土石器实测图	128	第211图	Y 115号住居址 P ₁ 内壶棺微细图	169
第154图	Y 99号住居址实测图	129	第212图	Y 115号住居址炉址实测图	169
第155图	Y 99号住居址炉址实测图	129	第213图	Y 115号住居址出土石器实测图	170
第156图	Y 99号住居址出土石器拓影图	129	第214图	Y 115号住居址出土石器拓影图	170
第157图	Y 100号住居址实测图	130	第215图	Y 115号住居址出土石器实测图	171
第158图	Y 100号住居址炉址实测图	131	第216图	Y 116号住居址实测图	172
第159图	Y 100号住居址出土石器实测图 < 1 >	132	第217图	Y 116号住居址炉址实测图	173
第160图	Y 100号住居址出土石器实测图 < 2 >	133	第218图	Y 116号住居址出土石器实测图	174
第161图	Y 100号住居址出土石器拓影图	133	第219图	Y 116号住居址出土石器拓影图	174
第162图	Y 101号住居址实测图	136	第220图	Y 116号住居址出土石器实测图	174
第163图	Y 101号住居址炉址实测图	137	第221图	Y 117号住居址实测图	176
第164图	Y 101号住居址出土石器实测图	138	第222图	Y 117号住居址出土石器实测图	176
第165图	Y 101号住居址出土石器拓影图	138	第223图	Y 118号住居址实测图	177
第166图	Y 101号住居址出土石器实测图	138	第224图	Y 118号住居址炉址实测图	177

第225図	Y118号住居址出土土器実測図	178	第283図	北西ノ久保2号古墳出土金属器実測図	243
第226図	Y118号住居址出土土器拓影図	178	第284図	第7・8・9号周濠実測図	249
第227図	Y119号住居址実測図	178	第285図	第7・9号周濠出土土器実測図	251
第228図	Y119号住居址出土土器実測図	179	第286図	第7・8・9号周濠出土土器拓影図	251
第229図	Y119号住居址出土土器拓影図	179	第287図	第10号周濠コンタ測量図	253
第230図	Y120号住居址実測図	180	第288図	第10号周濠実測図	255
第231図	Y120号住居址出土土器実測図	181	第289図	第10号周濠内出土土器実測図	257
第232図	Y121号住居址実測図	183	第290図	第10号周濠内出土土器拓影図	258
第233図	Y121号住居址炉址実測図	183	第291図	第10号周濠出土埴輪片実測図	258
第234図	Y121号住居址出土土器実測図	184	第292図	第11号周濠実測図	259
第235図	Y122号住居址実測図	186	第293図	第12号周濠実測図	260
第236図	Y122号住居址炉址実測図	187	第294図	第13号周濠実測図	261
第237図	Y122号住居址出土土器実測図	188	第295図	第13号周濠内VI区土坑実測図	263
第238図	Y122号住居址出土土器拓影図	190	第296図	第13号周濠内出土土器実測図	264
第239図	Y122号住居址出土土器実測図	190	第297図	第13号周濠内出土土器拓影図	264
第240図	Y122号住居址出土土製品実測図	190	第298図	第14号周濠実測図	265
第241図	Y123号住居址実測図	191	第299図	第14号周濠出土土器実測図	266
第242図	Y123号住居址出土土器実測図	192	第300図	第14号周濠内出土土器拓影図	266
第243図	Y123号住居址出土土器拓影図	192	第301図	第15号周濠実測図	268
第244図	Y124号住居址実測図	193	第302図	第15号周濠出土土器実測図	269
第245図	Y124号住居址炉址実測図	194	第303図	第15号周濠内出土土器拓影図	271
第246図	Y124号住居址出土土器拓影図	194	第304図	第16号周濠、第168・169・175号土坑実測図	272
第247図	Y125号住居址実測図	195	第305図	第169・175号土坑出土土器実測図	273
第248図	Y125号住居址炉址実測図	197	第306図	北西ノ久保遺跡周濠内出土金属器及び土製品実測図	273
第249図	Y125号住居址出土土器実測図	198	第307図	第1号特殊遺構実測図	274
第250図	Y125号住居址出土土器拓影図	198	第308図	第1号特殊遺構出土土器実測図	275
第251図	Y125号住居址出土土器実測図	200	第309図	第1号特殊遺構出土金属器実測図	275
第252図	Y126号住居址実測図	201	第310図	第2号特殊遺構実測図	276
第253図	Y126号住居址炉址実測図	202	第311図	第2号特殊遺構A土坑内出土人骨実測図	277
第254図	Y126号住居址出土土器実測図	203	第312図	第2号特殊遺構B土坑内出土人骨実測図	278
第255図	Y126号住居址出土土器拓影図	205	第313図	第2号特殊遺構C土坑内出土人骨実測図	279
第256図	Y126号住居址出土土製品実測図	205	第314図	第2号特殊遺構内出土土器実測図	281
第257図	Y126号住居址出土土器実測図	205	第315図	第2号特殊遺構内出土土器拓影図	281
第258図	Y127号住居址実測図	206	第316図	第2号特殊遺構B・C土坑内出土 貨幣拓影図〈1〉	282
第259図	Y127号住居址炉址実測図	207	第317図	第2号特殊遺構C土坑内出土貨幣拓影図〈2〉	283
第260図	Y127号住居址出土土器実測図	208	第318図	第3号特殊遺構実測図	284
第261図	Y128号住居址実測図	209	第319図	第3号特殊遺構内出土土器拓影図	284
第262図	Y128号住居址炉址実測図	210	第320図	第3号溝状遺構実測図	286
第263図	Y128号住居址出土土器実測図	211	第321図	第4号溝状遺構実測図	286
第264図	Y128号住居址出土土器拓影図	211	第322図	第1・2・7号溝状遺構実測図	287
第265図	Y129号住居址実測図	212	第323図	第4号溝状遺構内出土土器拓影図	289
第266図	Y129号住居址出土土器拓影図	212	第324図	第5号溝状遺構実測図	289
第267図	北西ノ久保遺跡出土土器実測図〈その1〉	214	第325図	第6号溝状遺構実測図	290
第268図	北西ノ久保遺跡出土土器実測図〈その2〉	215	第326図	溝状遺構内出土土器実測図	290
第269図	北西ノ久保遺跡出土土器実測図〈その3〉	216	第327図	第1号溝状遺構内出土土器拓影図	290
第270図	北西ノ久保遺跡出土土器実測図〈その4〉	217	第328図	第110号土坑実測図	291
第271図	北西ノ久保遺跡出土土器実測図〈その5〉	219	第329図	第120号土坑実測図	291
第272図	北西ノ久保遺跡出土土器実測図〈その6〉	221	第330図	第121・122号土坑実測図	292
第273図	北西ノ久保遺跡出土土器実測図〈その7〉	224	第331図	第123号土坑実測図	292
第274図	北西ノ久保遺跡出土土器実測図〈その8〉	225	第332図	第124号土坑実測図	293
第275図	北西ノ久保遺跡出土土器実測図〈その9〉	226	第333図	第129・133・134号土坑実測図	294
第276図	北西ノ久保遺跡出土土器実測図〈その10〉	227	第334図	第131号土坑実測図	295
第277図	北西ノ久保2号古墳石室内遺物分布図	236	第335図	第132・135号土坑実測図	295
第278図	北西ノ久保遺跡南部南斜面全体図	237	第336図	第136号土坑実測図	296
第279図	北西ノ久保2号古墳石室実測図	239	第337図	第137号土坑実測図	296
第280図	北西ノ久保2号古墳出土土器実測図	241	第338図	第141号土坑実測図	296
第281図	北西ノ久保2号古墳出土土器拓影図	241	第339図	第146・147・155号土坑実測図	297
第282図	北西ノ久保2号古墳出土土玉類・耳環実測図	242			

第340図	第150号土坑実測図	298
第341図	第149・151号土坑実測図	298
第342図	第161号土坑実測図	299
第343図	第171号土坑実測図	299
第344図	第176号土坑実測図	300
第345図	第116号土坑実測図	301
第346図	第116号土坑出土貨幣拓影図	301
第347図	第148号土坑実測図	301
第348図	第101号土坑実測図	303
第349図	第102号土坑実測図	303
第350図	第103号土坑実測図	303
第351図	第104号土坑実測図	303
第352図	第105・106号土坑実測図	303
第353図	第107号土坑実測図	303
第354図	第108号土坑実測図	303
第355図	第109号土坑実測図	303
第356図	第111号土坑実測図	303
第357図	第112号土坑実測図	303
第358図	第113号土坑実測図	304
第359図	第114号土坑実測図	304
第360図	第115号土坑実測図	304
第361図	第117号土坑実測図	304
第362図	第118号土坑実測図	304
第363図	第119号土坑実測図	304
第364図	第125号土坑実測図	304
第365図	第126号土坑実測図	305
第366図	第127号土坑実測図	305
第367図	第128号土坑実測図	305
第368図	第130号土坑実測図	305
第369図	第138号土坑実測図	305
第370図	第139号土坑実測図	305
第371図	第140号土坑実測図	305
第372図	第142号土坑実測図	306
第373図	第143号土坑実測図	306
第374図	第144号土坑実測図	306
第375図	第145号土坑実測図	306
第376図	第152号土坑実測図	306
第377図	第153号土坑実測図	306
第378図	第154号土坑実測図	306
第379図	第157号土坑実測図	306
第380図	第156号土坑実測図	307
第381図	第158号土坑実測図	307
第382図	第160号土坑実測図	307
第383図	第159号土坑実測図	307
第384図	第162号土坑実測図	307
第385図	第163号土坑実測図	308

第386図	第164号土坑実測図	308
第387図	第166号土坑実測図	308
第388図	第172号土坑実測図	308
第389図	第165号土坑実測図	308
第390図	第167号土坑実測図	308
第391図	第170号土坑実測図	308
第392図	第173号土坑実測図	309
第393図	第174号土坑実測図	309
第394図	第177号土坑実測図	309
第395図	土坑内出土土器実測図	312
第396図	土坑内出土土器拓影図〈1〉	314
第397図	土坑内出土土器拓影図〈2〉	315
第398図	土坑内出土金属器及び土製品実測図	315
第399図	南部南斜面全体図	317
第400図	第1号礫群実測図	318
第401図	第2号礫群実測図	318
第402図	第3号礫群実測図	318
第403図	第4号礫群実測図	319
第404図	第5号礫群実測図	319
第405図	第6号礫群実測図	319
第406図	第1号ビット列実測図	319
第407図	第2・3号礫群出土土器実測図	320
第408図	第3号礫群出土土器拓影図	320
第409図	東部南斜面表採土器拓影図	321
第410図	東部南斜面表採石器実測図	321
第411図	グリッド・表採土器実測図〈1〉	323
第412図	グリッド・表採土器実測図〈2〉	324
第413図	グリッド・表採土器拓影図	327
第414図	グリッド出土貨幣拓影図	327
第415図	北西ノ久保I・II期(弥生時代中期後半)住居址分布図	329
第416図	北西ノ久保III期(弥生時代後期前半)住居址分布図	333
第417図	弥生時代住居址間接合関係図	338
第418図	中期後半弥生土器壺A分類図	343
第419図	中期後半弥生土器壺B・C分類図	344
第420図	中期後半弥生土器壺D・E・無頸壺分類図	345
第421図	中期後半弥生土器甕A分類図	346
第422図	中期後半弥生土器甕B分類図	347
第423図	中期後半弥生土器台付甕・鉢・高坏・甌分類図	348
第424図	北西ノ久保遺跡後期弥生土器壺類分類図	358
第425図	北西ノ久保遺跡後期弥生土器壺類・鉢類・高坏類分類図	359
第426図	北西ノ久保遺跡後期弥生土器甕類分類図	360
第427図	北西ノ久保遺跡後期弥生土器甕類・蓋類・甌類分類図	361
第428図	佐久地方の吉田式と報告されている資料(1)	364
第429図	佐久地方の吉田式と報告されている資料(2)	366
第430図	佐久地方の吉田式と報告されている資料(3)	367
第431図	佐久市内古墳群分布図	371

付 表 目 次

第1表	Y62号住居址出土土器観察表……………	9	第47表	Y116号住居址出土土器観察表……………	175
第2表	Y64号住居址出土土器観察表……………	15	第48表	Y117号住居址出土土器観察表……………	176
第3表	Y65号住居址出土土器観察表……………	18	第49表	Y118号住居址出土土器観察表……………	178
第4表	Y66号住居址出土土器観察表……………	25	第50表	Y119号住居址出土土器観察表……………	179
第5表	Y67号住居址出土土器観察表……………	28	第51表	Y120号住居址出土土器観察表……………	182
第6表	Y68号住居址出土土器観察表……………	32	第52表	Y121号住居址出土土器観察表……………	185
第7表	Y69号住居址出土土器観察表……………	36	第53表	Y122号住居址出土土器観察表……………	189
第8表	Y70号住居址出土土器観察表……………	41	第54表	Y123号住居址出土土器観察表……………	192
第9表	Y71号住居址出土土器観察表……………	43	第55表	Y125号住居址出土土器観察表……………	199
第10表	Y72号住居址出土土器観察表……………	46	第56表	Y126号住居址出土土器観察表……………	204
第11表	Y73号住居址出土土器観察表……………	48	第57表	Y127号住居址出土土器観察表……………	208
第12表	Y74号住居址出土土器観察表……………	53	第58表	Y128号住居址出土土器観察表……………	211
第13表	Y75号住居址出土土器観察表……………	58	第59表	北西ノ久保遺跡出土石器一覧表〈1〉 ……	229
第14表	Y76号住居址出土土器観察表……………	61	第60表	北西ノ久保遺跡出土石器一覧表〈2〉 ……	230
第15表	Y77号住居址出土土器観察表……………	65	第61表	北西ノ久保遺跡出土石器一覧表〈3〉 ……	231
第16表	Y78号住居址出土土器観察表……………	70	第62表	北西ノ久保遺跡出土石器一覧表〈4〉 ……	232
第17表	Y79号住居址出土土器観察表……………	73	第63表	北西ノ久保遺跡住居址出土石器組成一覧表 ……	233
第18表	Y80号住居址出土土器観察表……………	76	第64表	北西ノ久保2号古墳出土土器観察表 ……	241
第19表	Y81号住居址出土土器観察表……………	79	第65表	北西ノ久保2号古墳出土ガラス小玉一覧表 ……	244
第20表	Y82号住居址出土土器観察表……………	81	第66表	北西ノ久保2号古墳出土丸玉一覧表 ……	244
第21表	Y83号住居址出土土器観察表……………	83	第67表	北西ノ久保2号古墳出土白玉・管玉・切子玉・ 勾玉・藁玉一覧表 ……	245
第22表	Y84号住居址出土土器観察表……………	85	第68表	北西ノ久保2号古墳出土耳環一覧表 ……	245
第23表	Y85号住居址出土土器観察表……………	89	第69表	第7・9号周湮出土土器観察表 ……	251
第24表	Y86号住居址出土土器観察表……………	91	第70表	第10号周湮内出土土器観察表 ……	257
第25表	Y87号住居址出土土器観察表……………	95	第71表	第13号周湮内出土土器観察表 ……	265
第26表	Y88号住居址出土土器観察表……………	99	第72表	第14号周湮出土土器観察表 ……	267
第27表	Y89号住居址出土土器観察表……………	103	第73表	第15号周湮出土土器観察表 ……	270
第28表	Y90号住居址出土土器観察表……………	106	第74表	第169・175号土坑出土土器観察表 ……	273
第29表	Y91号住居址出土土器観察表……………	109	第75表	第1号特殊遺構出土土器観察表 ……	275
第30表	Y92号住居址出土土器観察表……………	111	第76表	第2号特殊遺構内出土土器観察表 ……	281
第31表	Y93号住居址出土土器観察表……………	115	第77表	第2号特殊遺構B・C土坑内出土貨幣一覧表 ……	283
第32表	Y94号住居址出土土器観察表……………	119	第78表	溝状遺構内出土土器観察表 ……	290
第33表	Y96号住居址出土土器観察表……………	121	第79表	北西ノ久保遺跡土坑一覧表〈1〉 ……	310
第34表	Y97号住居址出土土器観察表……………	124	第80表	北西ノ久保遺跡土坑一覧表〈2〉 ……	311
第35表	Y98号住居址出土土器観察表……………	127	第81表	土坑内出土土器観察表 ……	313
第36表	Y100号住居址出土土器観察表……………	134	第82表	第2・3号礫群出土土器観察表 ……	320
第37表	Y101号住居址出土土器観察表……………	138	第83表	グリッド・表採土器観察表 ……	325
第38表	Y102号住居址出土土器観察表……………	140	第84表	グリッド出土貨幣一覧表 ……	327
第39表	Y103号住居址出土土器観察表……………	143	第85表	北西ノ久保遺跡住居址一覧表〈1〉 ……	334
第40表	Y104号住居址出土土器観察表……………	149	第86表	北西ノ久保遺跡住居址一覧表〈2〉 ……	335
第41表	Y105号住居址出土土器観察表……………	152	第87表	北西ノ久保遺跡炉址一覧表 ……	336
第42表	Y106号住居址出土土器観察表……………	154	第88表	北西ノ久保遺跡跡生中期後半住居址新旧分類表 ……	349
第43表	Y107号住居址出土土器観察表……………	157	第89表	他地域との併行関係表 ……	356
第44表	Y109号住居址出土土器観察表……………	162	第90表	佐久市内古墳群一覧表 ……	374
第45表	Y111号住居址出土土器観察表……………	165			
第46表	Y115号住居址出土土器観察表……………	171			

写真図版目次

図版 一	航空写真、北西ノ久保遺跡の立地	図版 二十七	1 Y76号住居址
図版 二	北西ノ久保遺跡第2次調査航空写真		2 Y77号住居址
図版 三	1 Y62号住居址 2 Y63号住居址	図版 二十八	1 Y76号住居址炉址 2・3 Y77号住居址炉址 4 Y77号住居址遺物分布状況
図版 四	1 Y64号住居址 2 Y63号住居址炉址 3 Y64号住居址炉址 4・5 Y64号住居址遺物出土状況	図版 二十九	1~4 Y77号住居址遺物出土状況 5・6 Y76号住居址出土遺物 7・8 Y77号住居址出土遺物
図版 五	1~6 Y64号住居址出土遺物	図版 三十	1~8 Y77号住居址出土遺物
図版 六	1 Y65号住居址 2~4 Y65号住居址炉址	図版 三十一	1 Y78号住居址 2 Y78号住居址遺物分布状況
図版 七	1・2 Y65号住居址炉址 3 Y65号住居址遺物出土状況 4~7 Y65号住居址出土遺物	図版 三十二	1 Y78号住居址炉址 2~8 Y78号住居址遺物出土状況
図版 八	1 Y66号住居址 2・3 Y66号住居址炉址1 4・5 Y66号住居址炉址2	図版 三十三	1~8 Y78号住居址出土遺物
図版 九	1~8 Y66号住居址遺物出土状況	図版 三十四	1 Y79号住居址 2 Y80号住居址
図版 十	1~6 Y66号住居址遺物出土状況 7・8 Y66号住居址出土遺物	図版 三十五	1・2 Y80号住居址遺物出土状況 3~5 Y79号住居址出土遺物 6~9 Y80号住居址出土遺物
図版 十一	1~7 Y66号住居址出土遺物	図版 三十六	1 Y81号住居址 2 Y82号住居址
図版 十二	1 Y67号住居址 2 Y67号住居址完掘 3 Y67号住居址炉址 4~6 Y67号住居址出土遺物	図版 三十七	1 Y81号住居址炉址 2 Y82号住居址P ₂ 内粘土 3 Y82号住居址遺物出土状況 4 Y81号住居址出土遺物 5・6 Y82号住居址出土遺物
図版 十三	1 Y68号住居址 2 Y68号住居址遺物出土状況	図版 三十八	1 Y83号住居址 2 Y84号住居址
図版 十四	1~6 Y68号住居址遺物出土状況 7~9 Y68号住居址出土遺物	図版 三十九	1 Y83号住居址炉址 2 Y84号住居址遺物出土状況 3・4 Y85号住居址
図版 十五	1~5 Y68号住居址出土遺物	図版 四十	1・2 Y85号住居址遺物出土状況 3 Y83号住居址出土遺物 4 Y84号住居址出土遺物 5~7 Y85号住居址出土遺物 8~10 Y86号住居址出土遺物
図版 十六	1 Y69号住居址 2 Y69号住居址炉址 3~5 Y69号住居址遺物出土状況	図版 四十一	1 Y87号住居址 2 Y87号住居址炉址 3 Y87号住居址遺物出土状況 4・5 Y87号住居址出土遺物
図版 十七	1 Y69号住居址遺物出土状況 2~6 Y69号住居址出土遺物	図版 四十二	1 Y88号住居址 2・3 Y88号住居址遺物出土状況 4~6 Y88号住居址出土遺物
図版 十八	1 Y70号住居址遺物出土状況 2 Y70号住居址 3 Y70号住居址炉址 4・5 Y70号住居址遺物出土状況	図版 四十三	1 Y89号住居址 2 Y89号住居址炉址 3 Y89号住居址遺物出土状況 4~8 Y89号住居址出土遺物
図版 十九	1・2 Y70号住居址遺物出土状況 3~8 Y70号住居址出土遺物	図版 四十四	1 Y90号住居址 2 Y90号住居址炉址1・2 3 Y90号住居址炉址1 4 Y90号住居址炉址2 5 Y90号住居址出土遺物
図版 二十	1 Y71号住居址 2・3 Y71号住居址出土遺物	図版 四十五	1 Y91号住居址 2 Y92号住居址
図版 二十一	1 Y72号住居址 2・3 Y72号住居址遺物出土状況 4・5 Y72号住居址出土遺物	図版 四十六	1 Y92号住居址炉址 2~5 Y91号住居址出土遺物 6 Y92号住居址出土遺物
図版 二十二	1 Y73号住居址 2 Y74号住居址		
図版 二十三	1 Y73号住居址遺物出土状況 2 Y74号住居址ベッド状遺構? 3・4 Y74号住居址遺物出土状況 5~11 Y74号住居址出土遺物		
図版 二十四	1 Y75号住居址 2 Y75号住居址遺物分布状況		
図版 二十五	1・2 Y75号住居址炉址 3~8 Y75号住居址遺物出土状況		
図版 二十六	1~5 Y75号住居址出土遺物		

図版 四十七	1 Y93号住居址 2 Y93号住居址炉址1 3 Y93号住居址炉址2 4・5 Y93号住居址遺物出土状況		
図版 四十八	1・2 Y93号住居址遺物出土状況 3～8 Y93号住居址出土遺物	図版 七十	1 Y114号住居址 2 Y115号住居址
図版 四十九	1 Y94号住居址 2 Y95号住居址	図版 七十一	1 Y114号住居址炉址 2 Y115号住居址炉址 3 Y115号住居址壺棺検出前 4 Y115号住居址壺棺検出状況 5 Y115号住居址遺物出土状況 6～9 Y115号住居址出土遺物
図版 五十	1 Y94号住居址炉址 2 Y94号住居址出土遺物 3 Y96号住居址 4 Y96号住居址炉址	図版 七十二	1 Y116号住居址 2 Y116号住居址炉址 3～5 Y116号住居址出土遺物
図版 五十一	1 Y97号住居址 2 Y97号住居址遺物分布状況	図版 七十三	1 Y117号住居址 2 Y118号住居址
図版 五十二	1・2 Y97号住居址遺物出土状況 3～6 Y97号住居址出土遺物	図版 七十四	1 Y119号住居址 2 Y120号住居址
図版 五十三	1 Y98号住居址 2 Y98号住居址炉址 3～5 Y98号住居址遺物出土状況	図版 七十五	1・2 Y120号住居址遺物出土状況 3～6 Y120号住居址出土遺物
図版 五十四	1・2 Y98号住居址出土遺物 3 Y99号住居址	図版 七十六	1 Y121号住居址 2 Y121号住居址遺物分布状況
図版 五十五	1 Y100号住居址 2 Y100号住居址遺物分布状況	図版 七十七	1 Y122号住居址 2 Y121・122号住居址完掘
図版 五十六	1 Y100号住居址炉址 2 Y100号住居址入口施設ピット 3～8 Y100号住居址遺物出土状況	図版 七十八	1 Y121号住居址炭化物検出状況 2 Y122号住居址炉址 3～7 Y122号住居址遺物出土状況
図版 五十七	1～5 Y100号住居址出土遺物	図版 七十九	1～4 Y121号住居址出土遺物 5・6 Y122号住居址出土遺物
図版 五十八	1～5 Y100号住居址出土遺物	図版 八十	1～6 Y122号住居址出土遺物
図版 五十九	1 Y101号住居址 2 Y101号住居址炉址 3～5 Y101号住居址遺物出土状況 6 Y101号住居址出土遺物	図版 八十一	1 Y123号住居址 2 Y123号住居址遺物出土状況 3・4 Y123号住居址出土遺物
図版 六十	1 Y102号住居址 2 Y102号住居址炉址 3・4 Y102号住居址遺物出土状況 5 Y102号住居址出土遺物	図版 八十二	1 Y124号住居址 2 Y125号住居址
図版 六十一	1 Y103号住居址 2 Y103号住居址炉址 3 Y103号住居址遺物出土状況 4～7 Y103号住居址出土遺物	図版 八十三	1 Y124号住居址炉址 2 Y125号住居址炉址1・2・3検出状況 3 Y125号住居址炉址1 4 Y125号住居址炉址2 5 Y125号住居址入口施設ピット 6・7 Y125号住居址出土遺物
図版 六十二	1 Y104号住居址 2 Y104号住居址遺物分布状況	図版 八十四	1 Y126号住居址 2 Y126号住居址炉址 3・4 Y126号住居址遺物出土状況
図版 六十三	1・2 Y104号住居址炉址 3～5 Y104号住居址遺物出土状況 6・7 Y104号住居址出土遺物	図版 八十五	1～7 Y126号住居址出土遺物
図版 六十四	1 Y105号住居址 2・3 Y105号住居址炉址 4・5 Y105号住居址出土遺物	図版 八十六	1 Y127号住居址 2 Y127号住居址炉址 3 Y127号住居址遺物出土状況 4～6 Y127号住居址出土遺物
図版 六十五	1 Y106号住居址 2 Y107号住居址	図版 八十七	1 Y128号住居址 2 Y128号住居址遺物分布状況
図版 六十六	1 Y106号住居址炉址 2 Y107号住居址炉址 3・4 Y107号住居址遺物出土状況 5～8 Y107号住居址出土遺物	図版 八十八	1 Y128号住居址炉址 2～4 Y128号住居址出土遺物 5 Y129号住居址
図版 六十七	1 Y108号住居址 2 Y109号住居址	図版 八十九	1・2 北西ノ久保2号古墳遠景 3 北西ノ久保2号古墳周辺遠景 4 北西ノ久保2号古墳石室検出状況 5 北西ノ久保2号古墳 6 北西ノ久保2号古墳 7 北西ノ久保2号古墳石室内棺床検出状況 8 北西ノ久保2号古墳周濶?
図版 六十八	1 Y109号住居址遺物分布状況 2 Y108号住居址炉址 3 Y109号住居址 4 Y109号住居址遺物出土状況 5・6 Y109号住居址出土遺物	図版 九十	1 石室内遺物分布状況
図版 六十九	1 Y111号住居址		

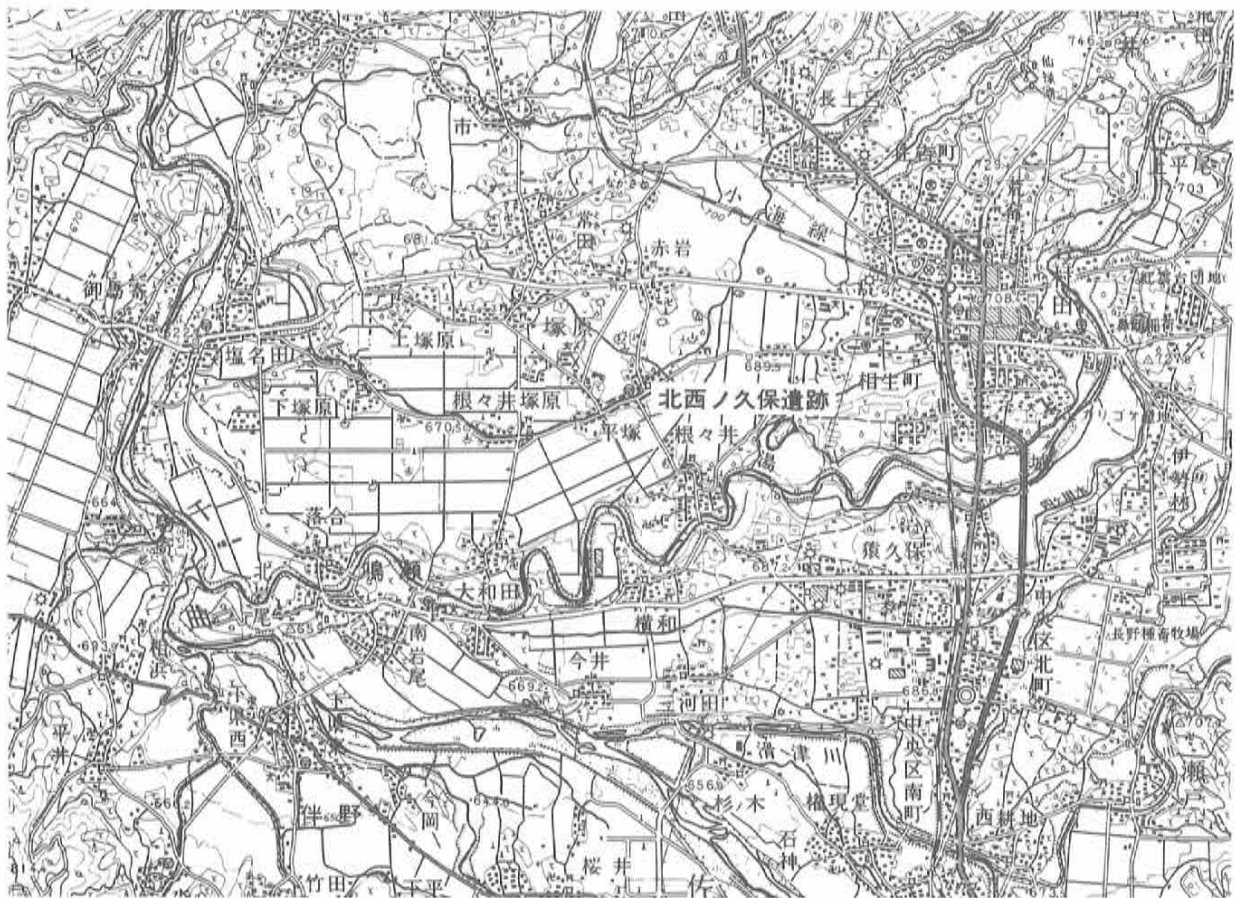
	2	棺床上人骨検出状況			7	第108号土坑	8	第109号土坑
	3~8	石室内遺物検出状況	図版	百十	1	第110号土坑	2	第112号土坑
図版	九十一	1~3 北西ノ久保2号古墳出土遺物			3	第115号土坑	4	第117号土坑
図版	九十二	1~5 北西ノ久保2号古墳出土遺物			5	第116号土坑	6	第116号土坑北宋銭出土状況
	6・7	北西ノ久保2号古墳出土の人の歯						
	8	北西ノ久保2号古墳出土人骨			7	第118号土坑	8	第119号土坑
図版	九十三	1 第7・8・9号周濠	図版	百十一	1	第120号土坑	2	第121・122号土坑
	2	第7号周濠			3	第123号土坑	4	第124号土坑
	3	第8号周濠			5	第125号土坑	6	第126号土坑
	4	第9号周濠			7	第127号土坑	8	第128号土坑
	5	第8号周濠遺物出土状況	図版	百十二	1	第130号土坑	2	第136号土坑
図版	九十四	1 第10号周濠			3	第137号土坑	4	第140号土坑
	2~4	第10号周濠検出状況			5	第140号土坑遺物出土状況	6	第142号土坑
	5	第10号周濠遺物出土状況			7	第144号土坑	8	第145号土坑
図版	九十五	1 第11号周濠	図版	百十三	1	第143号土坑	2	第146・147・155号土坑
	2	第12号周濠			3	第146号土坑	4	第155号土坑
図版	九十六	1~4 第12号周濠珪石検出状況			5	第149号土坑	6	第150号土坑
	5	第13号周濠			7	第151号土坑	8	第154号土坑
図版	九十七	1~3 第13号周濠検出状況	図版	百十四	1	第164号土坑	2	第167号土坑
	4	第13号周濠内土坑上遺物出土状況			3	第170号土坑	4	第171号土坑
	5	第14号周濠			5	第171号土坑	6	第172号土坑
図版	九十八	1 第15号周濠			7	第173号土坑	8	第174号土坑
	2	第14号周濠遺物出土状況	図版	百十五	1	第176号土坑		
	3~5	第15号周濠遺物出土状況			2	第176号土坑遺物出土状況		
図版	九十九	1 第16号周濠			3	第162号土坑	4	第177号土坑
	2	第16号周濠、第168・169号土坑	図版	百十六	1	第133号土坑出土遺物		
	3	第16号周濠遺物出土状況			2	第140号土坑出土遺物		
	4	第168号土坑			3	第151号土坑出土遺物		
	5	第169号土坑			4	第171号土坑出土遺物		
図版	百	1・2 第9号周濠出土遺物			5	第116号土坑出土遺物		
	3	第10号周濠出土遺物			6	土坑内出土金属器及び土製品		
	4・5	第13号周濠出土遺物	図版	百十七	1	北西ノ久保遺跡東部南斜面遠景		
	6~8	第14号周濠出土遺物			2	北西ノ久保遺跡東部南斜面全景		
図版	百一	1~7 第15号周濠出土遺物			3	第1号礫群	4	第2号礫群
図版	百二	1 第169号土坑出土遺物			5	第4号礫群	6	第5号礫群
	2	第175号土坑出土遺物	図版	百十八	1	第3号礫群		
	3	周濠内出土金属器及び土製品			2・3	第3号礫群遺物出土状況		
図版	百三	1~3 第1号特殊遺構			4	第3号礫群出土遺物		
	4	第1号特殊遺構遺物出土状況			5	第1号ピット列		
	5	第2号特殊遺構	図版	百十九	1~8	グリッド・表採遺物		
図版	百四	1~4 第1号特殊遺構出土遺物	図版	百二十	1~4	グリッド・表採遺物		
	5	第2号特殊遺構			5	グリッド出土貨幣		
	6・7	第2号特殊遺構A土坑・人骨出土状況	図版	百二十一		北西ノ久保遺跡出土石器		
図版	百五	1 第2号特殊遺構B土坑・人骨検出状況	図版	百二十二		北西ノ久保遺跡出土石器		
	2	B土坑出土人骨に抱かれていた毛髪と寛永通宝	図版	百二十三	1・2	北西ノ久保遺跡出土石器		
	3	B土坑出土人骨に抱かれていた毛髪と寛永通宝	図版	百二十四	1・2	北西ノ久保遺跡出土石器		
	4	第2号特殊遺構C土坑	図版	百二十五	1・2	北西ノ久保遺跡出土石器		
	5	第3号特殊遺構	図版	百二十六	1・2	北西ノ久保遺跡出土石器		
図版	百六	1 第2号特殊遺構C土坑・人骨検出状況	図版	百二十七	1~9	北西ノ久保遺跡出土石器		
	2	第2号特殊遺構C土坑・人骨検出状況			10	Y109号住居址出土獣骨		
図版	百七	1 第2号特殊遺構出土貨幣			11	Y65号住居址出土炭化米		
図版	百八	1 第3号溝状遺構			12	Y126号住居址出土炭化米		
	2	第5号溝状遺構	図版	百二十八		発掘スナップ		
	3	第7号溝状遺構						
	4	第4号溝状遺構						
	5	第7号溝状遺構出土遺物						
図版	百九	1・2 第101号土坑						
	3	第102号土坑						
	4	第103号土坑						
	5	第104号土坑						
	6	第107号土坑						

第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

北西ノ久保遺跡は、佐久市の中央部の標高680m代の南北に伸びる細長い台地に位置している。昭和41・45年の2回にわたり、駒沢大学によって台地の南斜面から、南方へ伸びる段丘の基部が調査され、昭和54年には佐久市教育委員会によって、台地上全域にわたって重要遺跡緊急確認調査が行われ、相当数の遺構の存在が周知された。こうした状況下で昭和57年に学校法人佐久学園によって短期大学の建設が計画され、本遺跡の破壊が余儀なくされる事態となった。このため、佐久学園より調査を委託された佐久市教育委員会によって台地の北東部約7,000㎡が緊急に調査され、記録保存がはかられた。遺構の内訳は住居址92棟（弥生時代中期後半45棟、後期18棟、古墳前期1棟、中期18棟、奈良時代1棟、平安時代8棟、時期不明1棟）、方形周溝墓1基、古墳址2基、周溝6基で、ぼう大な量の土器・埴輪等の遺物も検出され、本遺跡の重要性が再確認された。

今回は、このあとをうけた短大建設に伴う第2次調査にあたり、佐久学園が佐久市教育委員会に委託し、佐久市教育委員会からの委託を受けた、佐久埋蔵文化財調査センターが調査を実施することになり、南部南斜面に存在する石室残存古墳の確認調査と、東部南斜面を含めた、台地の南西部約14,000㎡の記録保存をはかることとなった。



第1図 北西ノ久保遺跡の位置（1：50,000国土院地形図による）

第2節 調査日誌

5月16日（木）～26日（日）

下草刈り、器材搬入等を行い、5月22日より重機による表土除去作業を開始する。
レベル原点（686m）の移動を行う。

5月27日（月）～6月11日（火）

南部南斜面の古墳の清掃発掘を開始。また、グリッドの設定を行う。

6月12日（水）～6月26日（水）

プラン確認作業開始。

7月4日 古墳の清掃発掘終了。

6月27日（木）～11月11日（月）

遺構の掘り下げ開始。以後4カ月にわたり、竪穴住居址69棟、古墳址9基、土坑70余基、特殊遺構2基の掘り下げ、実測作業及び写真撮影を行う。（7月18日プラン確認作業終了。）

11月12日（火）

航空測量を実施する。

11月13日（水）～15日（金）

最終チェックを行い北西ノ久保遺跡第2次調査第1期作業を終了する。

11月16日（土）～18日（月）

「北西久保だより」を作成する。

11月19日（火）～23日（土）

第2次調査第2期分、東部南斜面の調査を開始する。まず、発掘区の設定を行い、重機を搬入、表土の除去作業を始める。

11月25日（月）～26日（火）

プラン確認作業を開始する。重機による表土除去作業は継続する。

11月27日（水）～12月2日（月）

台地の裾部にトレンチを設定し、文化層の把握につとめる。平面プランの確認作業および重機による表土除去作業は29日に終了する。

レベル原点の移動〔12月2日（BM1）681m （BM2）679.5m〕

12月3日（火）～12月5日（木）

トレンチの掘り下げ作業を継続する。各層より礫群が検出され始めたため、トレンチの拡張作業も行う。また、トレンチの層序断面図作成も開始する。

12月6日（金）～12月9日（月）

礫群の平面図作成、及び写真撮影を開始する。拡張作業は継続する。

12月10日（火）～12月12日（木）

礫群の平面図作成を継続する。ピット列の掘り下げも開始し、図面作成、写真撮影を行う。また、全体図の作成、全体写真の撮影を行い、第2期分の調査を終了する。

12月13日（金）

現場の残務処理、およびプレハブ・テントの解体を行い、器材を撤収する。

整理調査については第2図を参照のこと。

作業行程 年月日	遺物水洗	遺物注記	遺物 接合・復元	遺物 実測図作成	図面修正 下図作成	遺物 トレース 図版作成	遺構図トレース 図版作成	写真図版作成	遺物写真撮影	原稿 表作成
昭和61年										
1	■	■								
2		■								
3					■					
4			■		■					■ 住居址・土坑表
5			■							
6			■				■			
7			■	■			■			
8			■	■						
9			■	■						
10				■		■				■ 土器表
11						■				
12						■		■	■	■
昭和62年										■
1										■
2										■
3								■		■

第2図 整理作業行程図

第II章 基本層序

第1節 基本層序

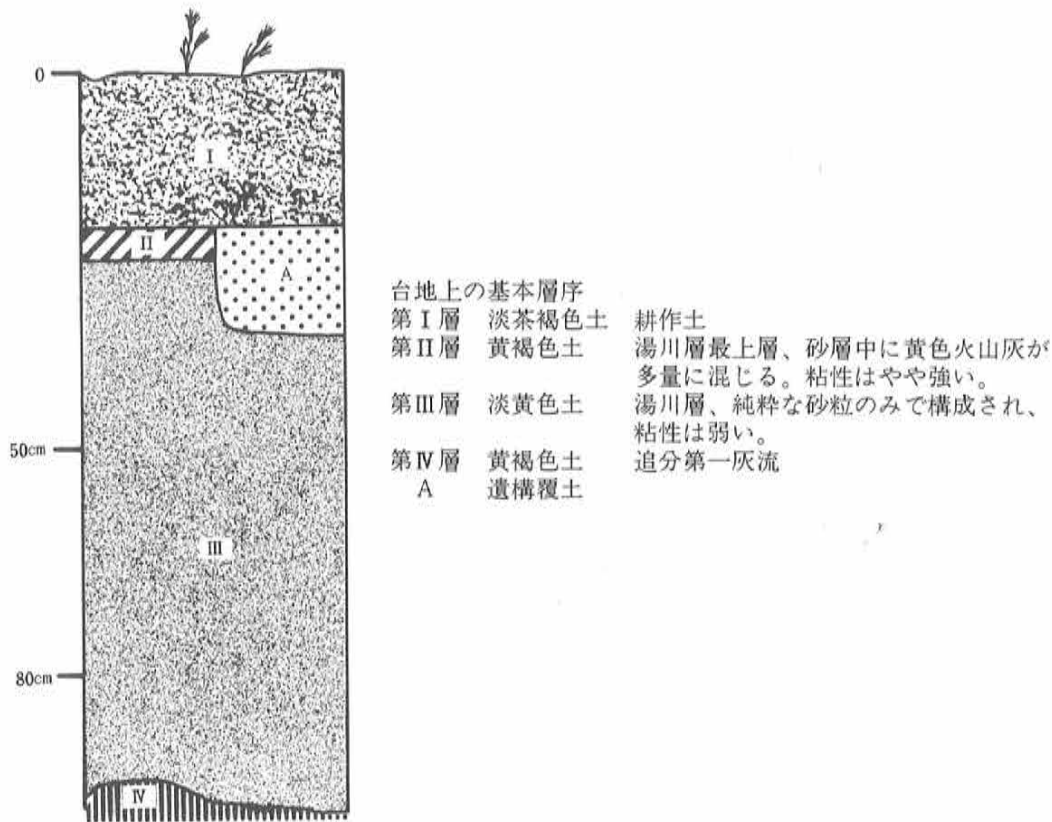
南部南斜面、東部南斜面については第III章の第3・7節において詳述しているので、台地上の基本層序について述べておきたい。

台地上の耕作土は一様に極めて浅く、20~30cmを測るにすぎない。耕作土（第I層）直下は湯川層最上層（第II層）にあたり、台地上の全遺構の確認面になる。第II層は5cm内外の厚みしかもたないが、湯川層砂粒中に多量の黄色火山灰がまじり、黄色火山灰が風化・分解しているために第II層全体が比較的粘性に富む。従って、第II層層を利用する掘り込みの浅い遺構は床面・壁等が比較的堅固である。第III層からは純粹な湯川層のみの砂層となり、第IV層追分第一灰流上に70cm以上の厚い堆積を示す。掘り込みが深く、第III層にまで達する遺構の床面・壁等は軟弱で崩壊し易い状態となっている。

本遺跡の台地上では、この第III層を掘り抜いて第IV層（追分第一灰流）にまで達する遺構は皆無であった。

遺構覆土は、弥生時代の遺構は茶褐色土をベースとするものと、黒褐色土をベースとするものがあり、古墳時代の周濠は一様に漆黒に近い黒色土をベースとする。峻別できる程ではないが、弥生時代中期後半の遺構に茶褐色土をベースとするものが多く、弥生時代後期前半の遺構に黒褐色土をベースとするものが多い傾向があるようである。これは遺構の深浅によって変わるものであるのかもしれない。

(小山)



第3図 北西ノ久保遺跡台地上基本層序模式図

第三章 遺構と遺物

検出された遺構・遺物の概要（第2次調査分）

遺構

台地上	竪穴住居址	68棟	弥生時代中期後半	47棟
			弥生時代後期前半	20棟
			時期 不明	1棟
	周 湟	10基	古墳時代中期	10基
			特殊 遺構	2基
	溝状 遺構	6基	古墳 時代 (?)	1基
			江戸 時代	1基
	土 坑	77基	時期 不明	6基
			弥生時代以前	24基
			古墳 時代	3基
中世・近代			各1基	
時期 不明			48基	
南部南斜面				
(清掃調査)	古 墳 址	1基	古墳時代後期	1基
	特殊 遺構	1基	平安 時代	1基
	土 坑	1基	時期 不明	1基
東部南斜面				
	礫 群	6基	時期 不明	1基
	ピット 列	1基	時期 不明	1基

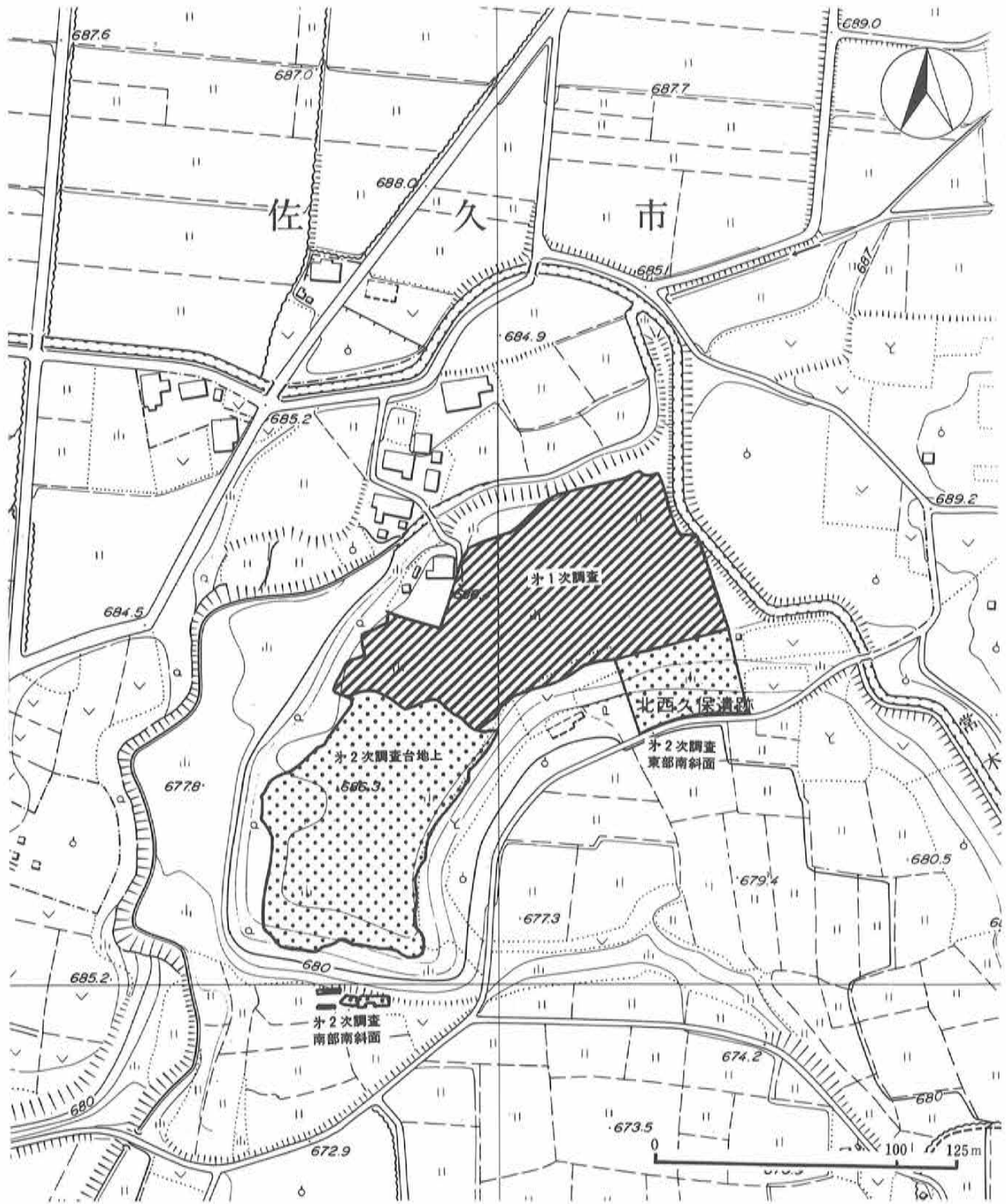
遺物

土 器	弥生時代中期後半	壺・甕・台付甕・甌・鉢・高坏
	弥生時代後期前半	壺・甕・台付甕・甌・鉢・深鉢・脚付鉢・高坏
	古墳時代中・後期	土師器 壺・甕・埴・坏・高坏・埴
		須恵器 壺・甕・坏・甌
	平安 時代	土師器 坏・高台付坏
		須恵器 坏・高台付坏
		灰釉陶器 碗
石器・石製品・土製品	弥生 時代	打製（石鏃・石槍・石錐・石斧）、磨製（石鏃・石斧・石包丁）、砥石、敲石、台石、容器形土偶、土製スプーン
	古墳 時代	玉類（勾玉・白玉・管玉・切子玉・ガラス小玉・土製丸玉）、埴輪
鉄器・鉄製品・青銅製品	弥生 時代	銅釧（?）
	古墳 時代	鉄製品 鉄鏃、鉄刀、刀子、馬具、青銅製品 耳環・匙形製品、釣針（?）
貨 幣	北宋銭、寛永通宝	
自然遺物	弥生 時代	炭化米、炭化材、獣骨（猪・鹿）
	江戸 時代	人骨

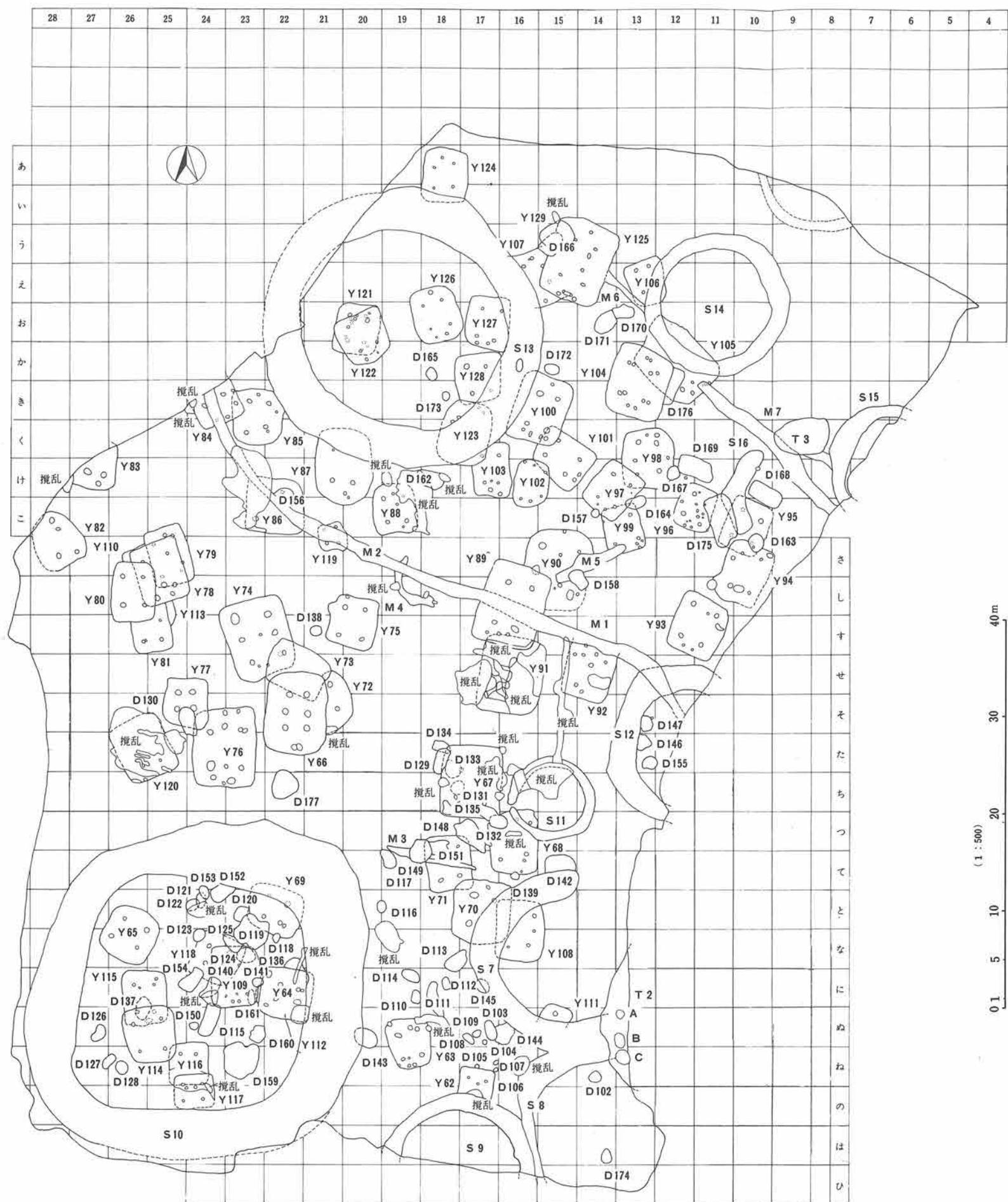
第2次調査の発掘区（第4図）

今回の調査対象地区は第4図のように舌状台地上の南半部、南部南斜面、東部南斜面のおよそ8600㎡におよぶ。台地上、東部南斜面は全面調査、南部南斜面は保存目的の清掃確認調査が行われた。

舌状台地上の調査はグリッド方式で行い、発掘区全体に4m×4mの方眼を組み、東西ラインを数列とし、西から1・2・3……、南北ラインは北から、あ・い・う……と番号をつけ、各グリッドの北東交点をそのグリッド名とした。



第4図 第2次調査発掘区設定図（1：2,500 佐久市基本図）



第5図 北西ノ久保遺跡第2次調査全体図 (1:500)

第1節 竪穴住居址

1) Y62号住居址

遺構 (第6図、図版三)

本住居址は、台地の最南端部にあたる、ね・の-17・18グリッド内に位置し、中期後半の弥生集落址の中でも、最も南側に所在する住居址である。

第9号周溝、第5・6号土坑と重複関係を持ち、北壁部を2箇所と南半部のほとんどを破壊されている。また、耕作等によって壁体もほとんどが削平されているため、住居址プランの全容は明らかにできない。かろうじて残存していた床面および壁体から測定し得た東西長は361cmをはかり、南北に長い長方形のプランを有する住居址であったことが推定される。

床面および壁体は、地山の黄褐色火山灰層をそのまま利用し、たたきしめて構築されており、おおむね平坦で堅固である。

ピットは2個検出され、本住居の主柱穴であったと考えられる。いずれも径36cm前後の円形を呈し、断面形は深さ30cmの緩いU字形を呈する。

炉址は、住居中央部が後世の攪乱によって破壊されているため、検出されなかったが、おそらく、住居址中央に位置していたものと考えられる。

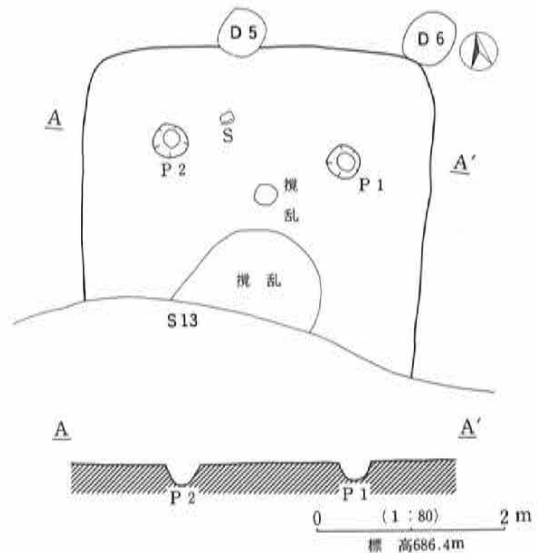
遺物は極めて少なく、床面上に土器の小破片が散漫に分布する程度である。

遺物 (第7・8図)

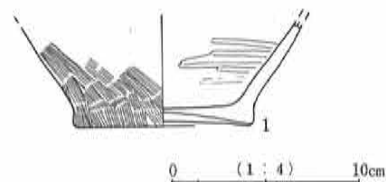
本住居址からは弥生土器が出土している。図化したものは4点のみであり、器種には壺・甕がある。

壺には8-1・2があり、8-1は楕円垂下文の周囲に篋描文が巡る胴部片であり、8-2はしっかりした受口状の口縁部に、LR縄文、篋描波状文2条が施される小片である。甕は7-1、8-3があり、7-1は刷毛目調整の底部片、8-3は、楕円斜走直線文が施される胴部片である。

以上、遺物出土量は少ないが、本住居址の所産は弥生時代中後期半と考えると大過ない。(小山)



第6図 Y62号住居址実測図



第7図 Y62号住居址出土土器実測図



第8図 Y62号住居址出土土器拓影図

第1表 Y62号住居址出土土器観察表

種番	器種	法量	成形及び器形の特徴	調	整	備考
7-1	壺	(5.4) 9.6	底部に粘土板はりつけがされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケミ調整が施されている。底部ははっきりとした調整がわからない。		回転実測B 床

2) Y63号住居址

遺構 (第9・10図、図版 三・四)

本住居址は、台地の南端中央ぬ・ね-18・19グリッド内に位置している。遺構の北東コーナーおよび床面は攪乱をうけており、また、壁体は耕作等によって完全に削除されており、床面範囲のみの検出に留まった。

プランは推定で南北515cm、東西440cmの長方形を呈し、床面積は21.77m²を計測する。長軸方位はN-8.5°-Wである。

床面は、黄褐色火山灰層をそのまま利用して構築され、おおむね平坦なつくりであるが、北東部は、レベルが若干高い。

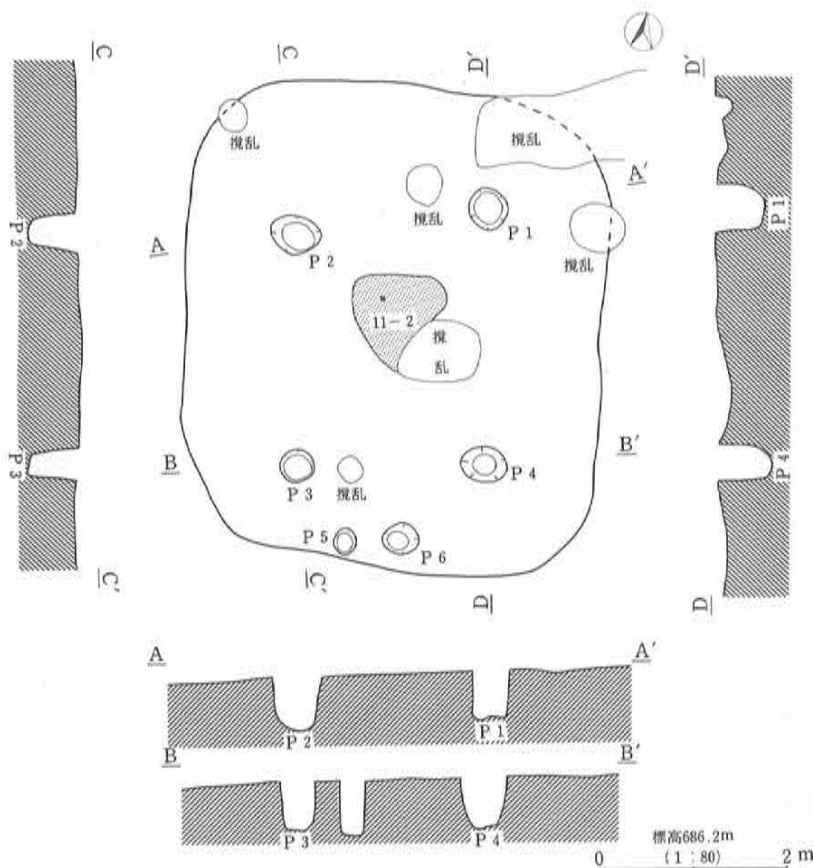
ピットは、比較的整然と位置する4本の主柱穴(P₁~P₄)と南壁下の中央部の入口施設と考えられる位置に2本(P₅・P₆)、計6個が検出された。

主柱穴P₁~P₄は、径37~55cmを測り、ほぼ円形を呈する。深さは、50~56cmとほぼ一様な深度を示し、断面はおおむね「U」字状を呈する。

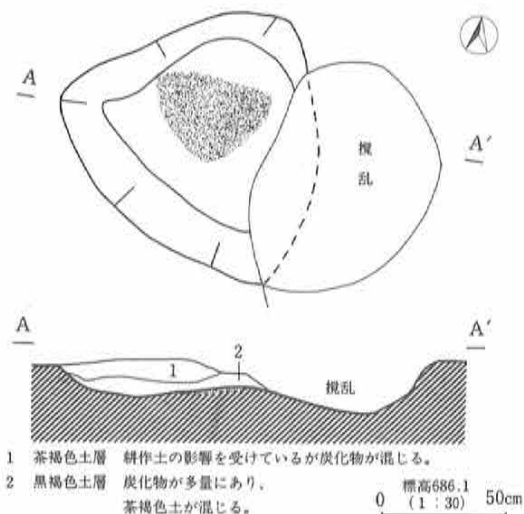
炉址は、住居址の長軸・短軸線の交点上つまりほぼ中央部に位置する。南東部が攪乱されているものの、長軸108cm、短軸91cmの逆三角形を呈するものと推定される。掘り込みは最深部で12cmを測り、ほぼ平坦な底面から、立ち上がり部は緩い傾斜をもつ。底面の中央部北寄りには、40cm内外の不整形の焼土の広がりがみられる。地山にあたる砂層をそのまま利用した火床部と考えられるが、焼け込みは浅く、長期間にわたって使用されたものとは考え難い。覆土は2層から成るが、第1層は耕作の影響をうけており、第2層のみが純粋な炉址の覆土である。第2層は、炭化物が多量に含まれる黒褐色土であり、本遺跡の大方の弥生時代住居址の最上層にあたる土である。

遺物の出土状況

本住居址の場合、覆土がおおむね削除されているため、遺物は少なく、分布状況も極めて散漫なものである。炉址上より出土した11-2が唯一の大型破片である。(小山)



第9図 Y63号住居址実測図



第10図 Y63号住居址炉址実測図

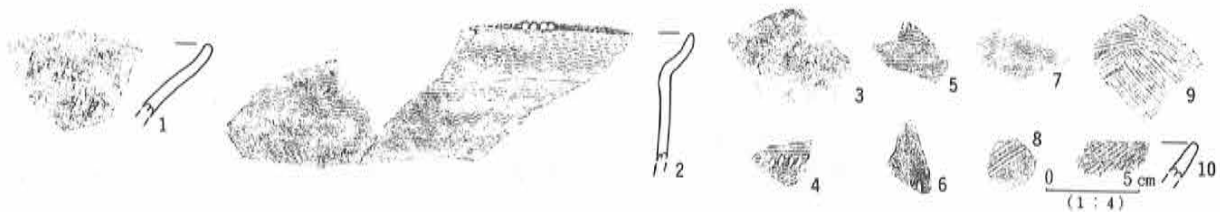
遺物 (第11図)

本住居址からは、弥生土器が出土している。器種には壺・甕がある。

壺には、11-1・10がある。11-1は頸部から外反して立ち上がり、端部で内弯する。調整は刷毛目調整の後、ヘラミガキが行われ、口唇部には縄文が施される。11-10は内面にヘラミガキが行われ、外面及び口唇部にLR縄文が施される。この他、外面に赤色塗彩が施され、肩部に突起を有する無頸壺と考えられる小片がある。

甕には2個体あり、11-9は胴部に楕円斜走直線文を施文した後、頸頭に楕円波状文が施される。11-2~8は同一個体と考えられ、口縁部は頸頭から外反した後、上位で受口状に立ち上がるが、受口部には稜がなく丸味を帯びる。胴部は張りをもたず、口径が最大径となる。文様は、口縁部に6本一組の楕円波状文(右回り)が2帯施され、胴部には同単位の楕円横走平行線文と楕円波状文が右回りに交互に施文される。また、11-4・6には刺突文が観察でき、11-2の口唇部には4単位一組の楕円状工具による刻目がある程度の間隔をもって施される。

以上、本住居址の出土遺物には、口縁部・口唇部に縄文の施される壺、口縁部が受口状を呈する甕などがあり、本住居址の所産期は弥生時代中期後半に位置づけられると考える。(三石)



第11図 Y63号住居址出土土器拓影図

3) Y64号住居址

遺構 (第12図、図版 四)

本住居址は、台地の南端部中央西寄りのな-22、に・ぬ-21・22・23グリッド内に位置している。第10号周溝と重複関係を持ち、東壁部を破壊されている。また、第136・141・161号土坑、Y112号住居址と重複関係を持ち、これらを破壊している。

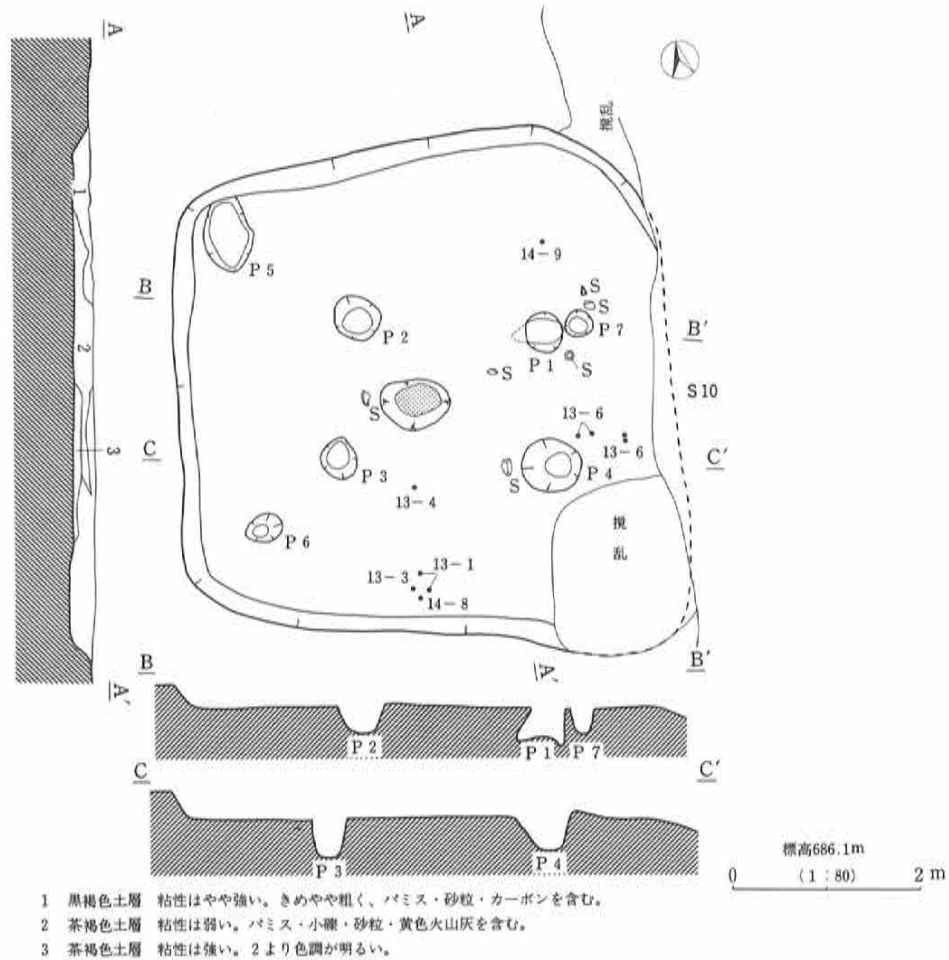
プランは、南北495cm、東西495cm(推定)、東壁長460cm(推定)、西壁長380cm、南壁長480cm(推定)、北壁長447cmを計測し、西壁が短い台形状を呈し、長軸方位はN-5.5°-Eをさす。床面積は22.7m²を測る。

覆土は、三層から成る。第1層は砂粒、パミス、カーボンを含む、ややきめの粗い黒褐色土、第2層は小礫、パミス、砂粒を含む茶褐色土、第3層は第2層と近似する茶褐色土である。最終堆積層の黒褐色土(第1層)が挿図を参照すると明らかのように、南北壁下まで達しており、自然堆積とは言い難い堆積状況を示している。

確認面からの壁高は22~31.5cmを測り、床面からの立ち上がりは比較的緩い。壁体は上半部は地山の黄褐色火山灰層、下半部は地山の砂層を利用して構築されているが、砂層でつくられた下半部はもろく、崩れ易い。従って地山をそのまま利用して壁体を形成したとは考え難く、他に何らかの構材を用いて補強を加えていたことも十分に考えられる。壁溝は検出されなかった。

床面は、地山の砂層上に黄褐色火山灰と黒色土の混合土を全面に薄く敷いて、叩きしめた(叩き床)が施されている。全体に堅固な構築状況であるが、凹凸が著しい。

ピットは、7個検出された。4本の支柱穴は整然とした配置とは言い難く、住居址プランの東西・南北軸ともずれがみられ、該期の他の遺構と比べても中央に集約された位置にあることが看取される。規模は、P₁が41×38cmの円形、P₂が50×44cmの楕円形、P₃が44×39cmの不整形円形、P₄が47×65cmの楕円形と大きさも不揃いである。



第12図 Y64号住居址実測図

深さはP₁が40cm、P₂が30cm、P₃が42cm、P₄が40cmを測り、P₂~P₄の断面形はおおむねU字形を呈する。P₁の断面形は西側にオーバーハングしており、不整な形状を示している。P₅~P₇は性格を明確にすることはできない。P₅は北西コーナー、P₆は南西コーナー、P₇はP₁の東側に位置している。P₅は78×52cmの楕円形、P₆は28×40cmの楕円形、P₇は29×28cmの円形を呈し、深さはそれぞれ、12cm、19cm、30cmを測る。

炉址は住居址の長軸・短軸線の交点よりもやや南寄りに設けられている。南北55cm、東西77cmの崩れた楕円形を呈し、深さは最深部でも3cmと浅い。すり鉢状に凹む浅い底面には、32×48cmの楕円状を呈する焼土範囲がみられるが、堆積は極めて薄い。

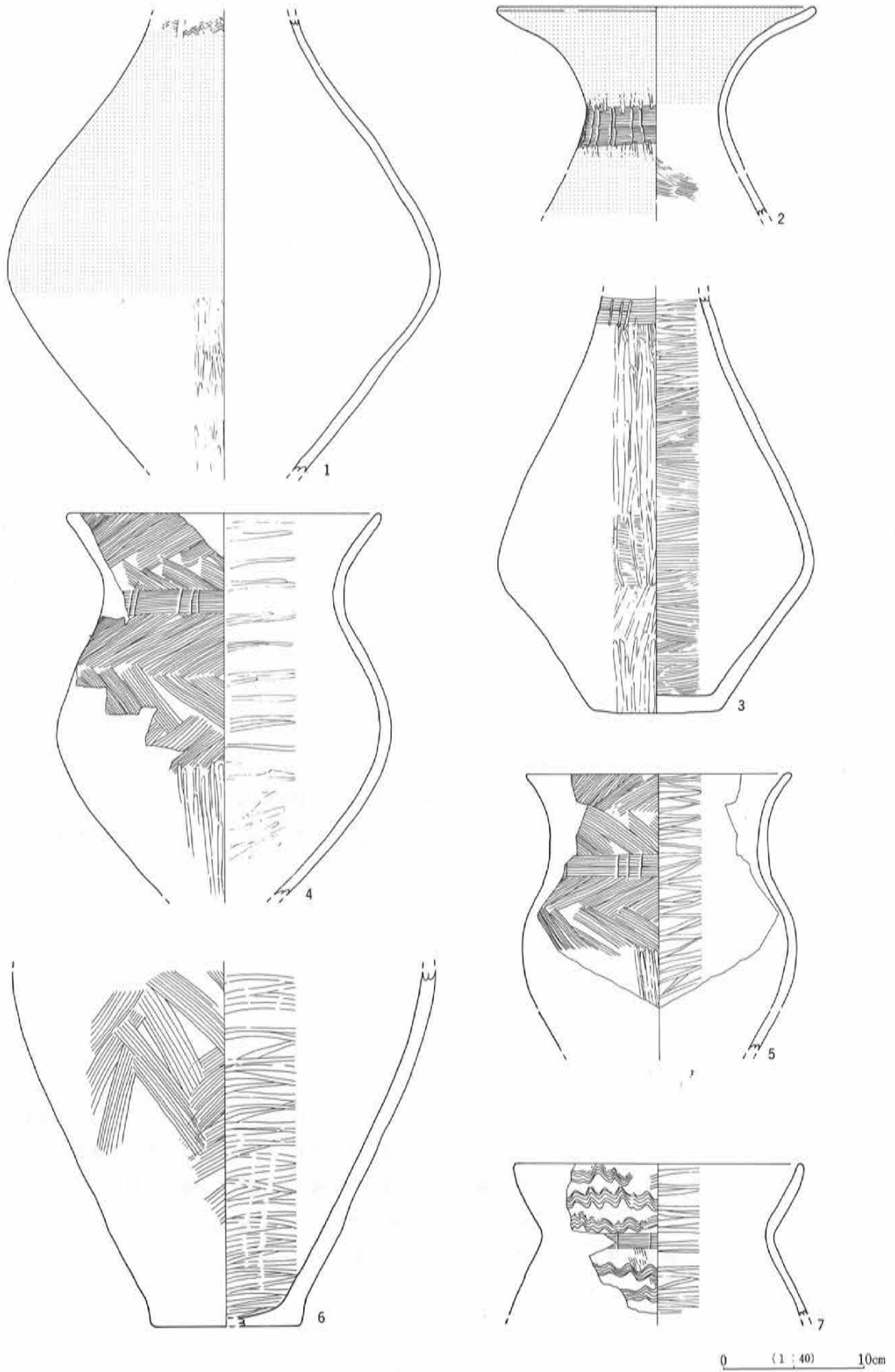
遺物の出土状況

床面上から出土したものは比較的少ない。床面上の遺物分布状況は北東コーナー付近(14-9)、P₄北東付近(13-6)、南壁中央下(13-1・3、14-8)などに散布する程度である。 (小山)

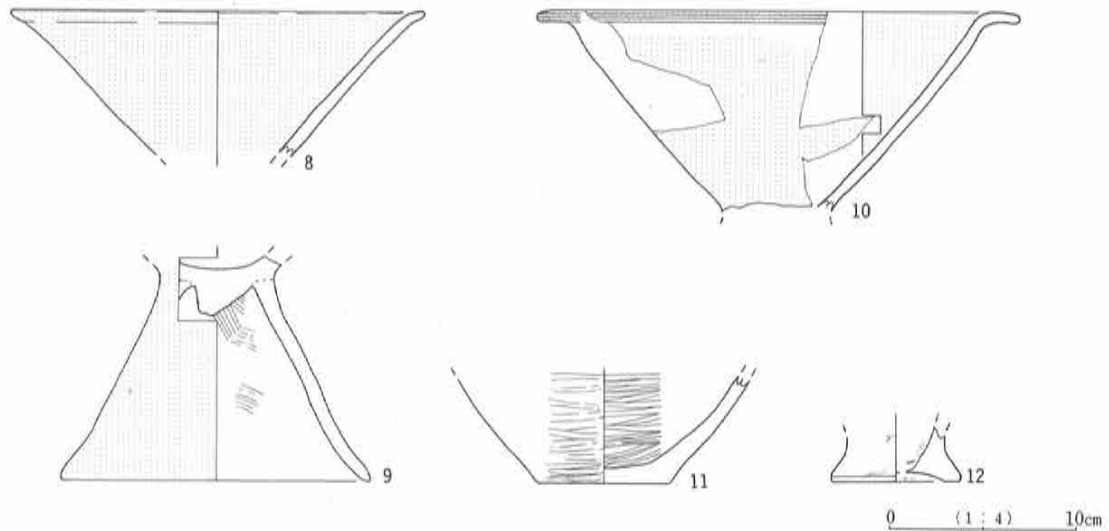
遺物 (第13・14・15図、図版 五)

本住居址からは、弥生土器が多量に出土している。器種には、壺・甕・台付甕・高坏がある。

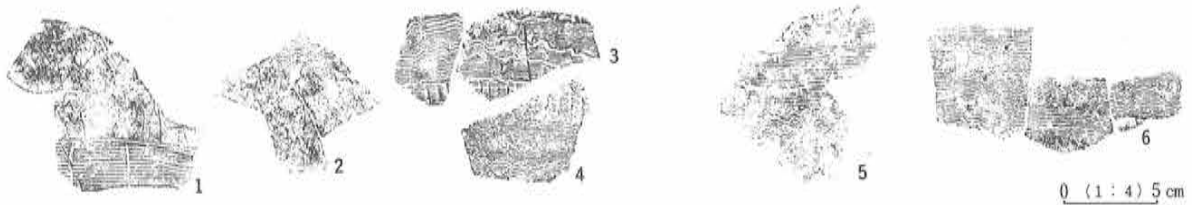
壺は、赤色塗彩の施される13-1・2と無彩の13-3、15-1・2・5に分けられる。13-1は頸部から上と底部を欠損しているが、大型品であると思われる。胴部は中位まで大きく張り出し、最大径(30.6cm)を胴中位に有するが、下位でくびれをもたない「無花果形」を呈する。調整は胴上半部に赤色塗彩、下半部に縦位のヘラミガキが施されるが、内外面共に剝離・磨滅の著しい状態である。文様は頸部が欠損をしているため、楕描波状文がわずかに観察できるのみである。13-2は口縁部から胴上端部までの破片で、口縁部は大きく外傾外反する。頸部文様帯を除く残存する外面全体と口縁部内面に赤色塗彩が施され、頸部から胴部内面は刷毛目調整の後、ナデ調整が行われている。文様は頸部に10本一組の楕描簾状文(2連止め)が2帯、右回りに施文される。13-3



第13图 Y64号住居址出土土器实测图 <1>



第14図 Y64号住居址出土土器実測図〈2〉



第15図 Y64号住居址出土土器拓影図

は無彩の壺で、口縁部を欠損する。胴部は下位に胴部最大径を有する「無花果形」を呈する。外面調整は刷毛目調整の後、縦位及び斜位のへラミガキ、内面は横位の粗い刷毛目調整が施される。文様は、頸部に5本一組の櫛描横走平行線文を2帯以上巡らし、篔描垂下文3条で区画した「T字文B」が施文されている。15-1・2・5は、赤色塗彩の施されない頸部付近の破片で、15-2・5は同一個体と考えられる。15-1は櫛描横走平行線文に篔描垂下文の加えられる「T字文B」が施文され、15-2・5は櫛描横走平行線文の下に櫛描波状文が加えられる。

甕は、口縁部と胴部に櫛描斜走直線文の施される13-4・5・6と櫛描波状文の施される13-7、15-3・4・6に大別される。13-4・5は、口縁部と胴部に櫛描斜走直線文が横位羽状（右回り）に施文された後、頸部に櫛描簾状文（3連止め）が右回りに施文される点で一致し、また、形態においても、口縁部が緩く外反し、口径をわずかに上回る最大径が胴中位に位置する点においても共通する。13-6は底部から胴下半のみの破片であるが、かなりの大型品である。13-4・5の櫛描斜走直線文が横位羽状に施されるのに対し、13-6は縦位羽状に施される。また、13-4・5の胴部が大きくふくらみ、中位に最大径を有するのに対して、13-6の胴部はあまりふくらみをもたないと思われる。13-7は口縁部から胴上端の破片であり、口縁部は「く」の字状に外傾し、わずかに内弯する。文様は頸部に7本一組の櫛描簾状文（右回り）が施された後、口縁部と胴部に5本一組の櫛描波状文（右回り）が施文される。15-3・4・6は同一個体と考えられ、口縁部は緩く外傾し、端部でわずかに内弯する。文様は頸部に櫛描簾状文（等間隔止め）を右回りに施した後、口縁部と胴部に櫛描波状文（右回り）で施文される。

高坏には坏部2点（14-8・10）と胴部1点（14-9）がある。14-8はほぼ直線的に開く坏部で、端部は短く外反する。内外面とも赤色塗彩が施されるが、坏下部内面は剥離が著しい。14-10はやや内弯気味に立ち上がる坏部で、端部は大きく、ほぼ水平に屈曲する。14-8同様、内外面ともに赤色塗彩が施されるが、外面屈曲部

には赤色塗彩は認められない。14-9はほぼ直線的に開く脚部で、端部でやや外反する。調整は外面に赤色塗彩が施され、内面は粗い刷毛目調整の後、ナデ調整が行われる。

14-11は甕の底部片で、内面調整は丁寧な横位のヘラミガキが施され、外面は一部横位ヘラミガキが観察されるが磨滅の著しい状態である。14-12は台付甕の台部に位置する破片と思われ、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施される。

以上、本住居址より出土した壺には、頸部文様帯に「T字文B」の施文されたものが多く、また、胴部の下位にくびれをもたないなどの特徴が見られることから、本住居址の所産期は、弥生時代後期前半に求めることができる。

(三 石)

第2表 Y64号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
13-1	壺	— <32.0> —	胴部の中位で大きく張り、最大径にあたる。	内) 磨滅が著しく不明。 外) 胴部上半に赤色塗彩・縦位のヘラミガキ、胴部下半は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に櫛描波状文と櫛描垂下文?が施されている。	破片実測A No 4-7、IV区
13-2	壺	(22.2) 14.5 —	口縁部は大きく開き、上半でわずかに内弯気味となる。	内) 口縁部に赤色塗彩・縦位のヘラミガキ、頸部から胴部はハケメ調整の後ナデが施されている。 外) 口縁部から胴部は文様を施文した後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に10本1組の櫛描波状文(2連止め)が2帯施されている。	回転実測B W区、D136
13-3	壺	— <8.9> 7.2	最大径を胴部下位に有し、所謂「無花果形」を呈する。	内) 頸部から胴部上位に横位のヘラミガキ、以下は粗い横位のハケメ調整が施されている。 外) ハケメ調整→斜位及び縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に5本1組の櫛描横走平行線文が上から下へ、少なくとも2帯施され、その文様帯上にヘラ描の直線文を3本垂下させ、所謂「T字文B」を形成している。	回転実測A No 2、W区
13-4	甕	(22.0) <27.0> —	最大径は胴部中位にあり、口縁部は「弓」状に外反し、胴部は大きくふくらむ。	内) 口縁部から胴部中位に横位の丁寧なヘラミガキ、胴部下位は斜位のヘラミガキが施される。 外) 文様が施文された後、胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部中位に8-9本1組の櫛描斜走直線文が横位羽状(右回り)に上から下へ施された後、頸部に11本1組の櫛描波状文(3連止め・右回り)が施されている。	回転実測B No 8、W区 胴部の箇所には煤が付着している。
13-5	甕	(18.6) <19.5> —	最大径は胴部中位にあり、口縁部は「弓」状に強く外反する。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施文された後、胴部下位に縦位のヘラミガキが施される。 文) 口縁部から胴部中位に5-8本1組の櫛描斜走直線文が横位羽状(右回り)に施された後、頸部に5本1組の櫛描波状文が2帯施される。	破片実測A め44グリッド内耕作土
13-6	甕	— (25.0) 10.6	胴部は、大きくはふくらまないと考えられる。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施される。 外) ハケメ調整→文様施文→胴部下位に丁寧な縦位のヘラミガキが施される。 文) 櫛描斜走直線文が横位羽状(右回り)に施されている。	回転実測B No 9・10
13-7	甕	(20.2) <10.6> —	口縁部は「く」の字状に外反するが内弯気味で、胴部はふくらむ。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から胴部にハケメ調整が施されている。 文) 頸部に7本1組の櫛描波状文が施された後、口縁部と胴部に5本1組の櫛描波状文が施されている。	回転実測B W区 外面に煤が付着している。
14-8	高環	21.8 <7.7> —	坏部上位はほぼ直線的に開き、短く外に折れ曲る。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。内面の下部は磨滅が著しい。	回転実測A No 6
14-9	高環	— <12.0> 16.2	脚部はほぼ「ハ」の字状に開く。	内) 粗いハケメ調整→ナデが施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No12
14-10	高環	(25.6) 10.6 —	坏部は僅かに内弯して開き、口縁部は短くほぼ水平に屈曲する。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 屈曲する口縁部を除き、赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	破片実測A E区、W区、ベルト内
14-11	甕	— <6.4> (7.0)		内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 内面よりもやや雑な横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B W区
14-12	台付甕?	— <2.9> (6.8)		内・外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。	回転実測B ベルト内

4) Y65号住居址

遺構 (第16・17図、図版 六・七)

本住居址は、台地の南端部西側の、と・な-25・26・27グリッド内に位置し、重複関係はもたない。

プランは、南北525cm、東西523cm、東壁長394cm、西壁長379cm、南壁長463cm、北壁長455cmの隅丸方形を呈し、長軸方位はN-27°-Eをさしている。床面積は19.4m²を計測する。

覆土は三層からなり、プライマリーな堆積状態を示す。第1層は、パミス・砂粒・黄色火山灰を多量に含む明褐色土、第2層はパミスと砂粒を含む暗褐色土、第3層は黄色の砂粒が主体を占める黄褐色土である。

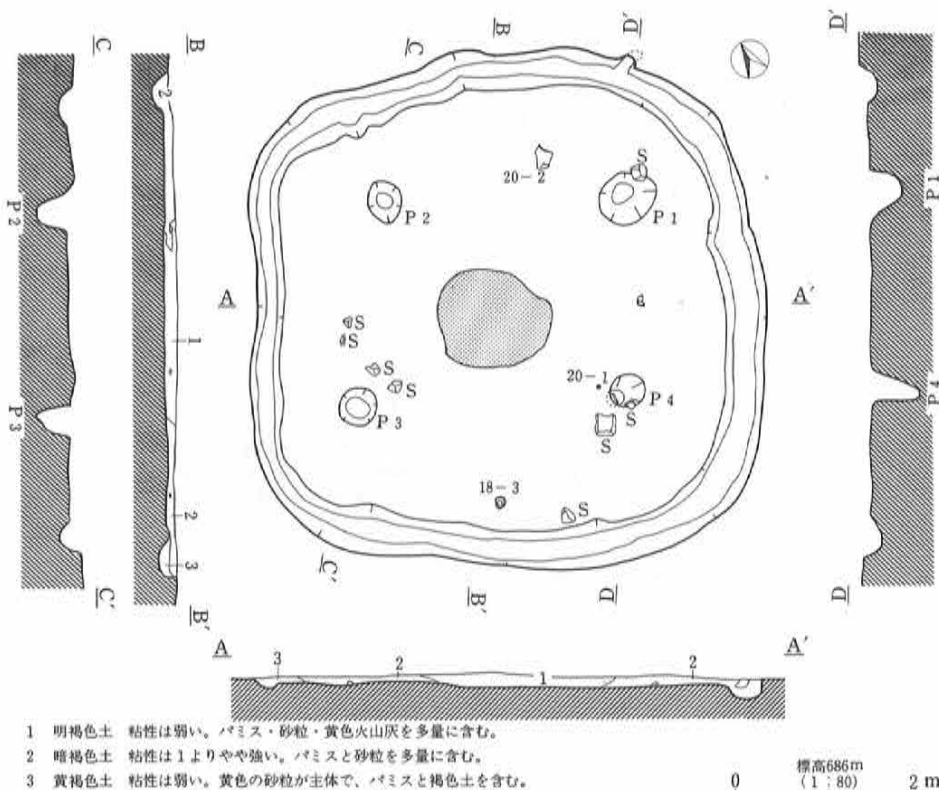
確認面からの壁高は、4.5~16.5cmを測り、壁溝底面からの立ち上がりは割合急な傾斜である。壁体は上半部は地山の黄色火山灰、下半部は地山の砂層を利用して構築されるが、堅牢なものとはいえない。壁溝は幅17~40cmを計測する大規模なもので、住居壁下を

全周する。深さは8~14.5cmを測り、断面形は緩い「U」字状を呈する。

床面は地山の黄褐色の砂層の上に、茶褐色土と、黄色火山灰をまぜ合わせた土を構材として、住居内の全面に薄く敷き、叩きしめた叩き床が施されている。堅牢な構築状態ではあるが凹凸の著しい面が各所にみられる。

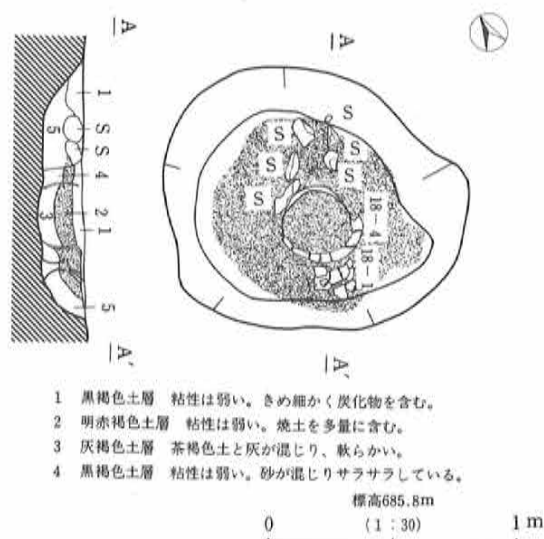
ピットは主柱穴が4本整然とした配置で検出された。P₁は56×61cmの円形を呈し、38cmの深度を有する。P₂は41×37cmの円形を呈し、30cmの深度を有する。P₃は39×40cmの円形を呈し、30cmの深度を有する。P₄は35×37cmの円形を呈し、51cmの深度を有する。P₁からP₃の深度はほぼ近似値を示し、断面形も一様に「U」字状を呈するのに対し、P₄は20cm近くも深く、断面も南西側へオーバーハングしている。

炉址は、住居址の長軸・短軸線上の交点上、住居址



- 1 明褐色土 粘性は弱い。パミス・砂粒・黄色火山灰を多量に含む。
- 2 暗褐色土 粘性は1よりやや強い。パミスと砂粒を多量に含む。
- 3 黄褐色土 粘性は弱い。黄色の砂粒が主体で、パミスと褐色土を含む。

第16図 Y65号住居址実測図



- 1 黒褐色土層 粘性は弱い。きめ細かく炭化物を含む。
- 2 明赤褐色土層 粘性は弱い。焼土を多量に含む。
- 3 灰褐色土層 茶褐色土と灰が混じり、軟らかい。
- 4 黒褐色土層 粘性は弱い。砂が混じりサラサラしている。

第17図 Y65号住居址炉址実測図

のほぼ中央に位置する。長軸長124cm、短軸長104cmの不整な楕円形を呈し、18cmの深度を有する。本遺跡の炉址の中でも最も深い方の炉であり、断面形は逆台形状を呈する。掘り込み内のほぼ中央には径54cmの底部を欠く大型の甕18-4が埋設されており、所謂「埋甕炉」の形態を有している。埋甕に近接する南側には口縁部を底面に接した逆位の状態で胴部の中位以下を欠く壺が置かれ、これらを第4層にあたる黒褐色土、第5層にあたる黄褐色の砂によって埋め戻している。この作業によって甕及び壺は固定され、火床にあたる使用面が形成される。(使用面の床面からの深さは11cmを測る。)埋甕内は、中位まで灰(第3層)が充填され、その上位には焼土(第2層)が5cmの厚さで堆積する。また、埋甕周囲にも80×74cmの範囲で焼土が5cm前後堆積し、焼土中(使用面上)埋甕北側には、礫が5個並べられている。焼土の堆積状態からみれば、本炉址は長期にわたる使用が考えられる。また最上層には他の住居址と同様黒褐色土が堆積している。

遺物の出土状況

床面上から出土した遺物は少ない。土器は18-3が南壁の中央下、18-1・4が炉址内から出土している。また、石器類は20-1がP₄の両側、台石20-2が、P₁とP₂の間より北東側から検出されている。

(小山)

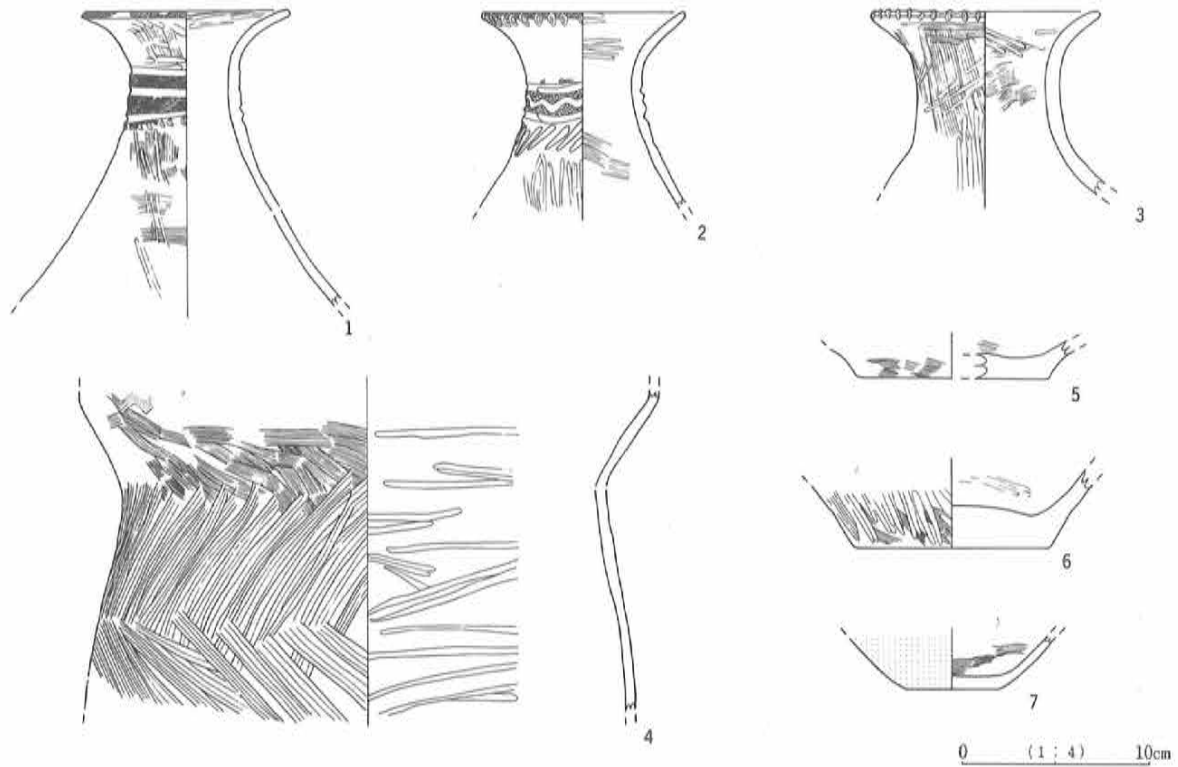
遺物(第18・19・20図、図版七)

本住居址からは、弥生土器・石器・炭化米が出土している。弥生土器の器種には壺・甕がある。

壺には18-1・2・3の3個体がある。18-1・2は細頸壺であり、口縁部から胴上端部が残存する。18-1は頸部から大きく外傾外反し、ラッパ状に開く口縁部を有する。内面調整は、口縁部に横位の丁寧なヘラミガキ、胴上部は粗略なヘラミガキが施される。外面は刷毛目調整の後、口縁部に横位、胴部に縦位のヘラミガキが行われる。文様は、面取りされた口唇部にLR縄文が施され、頸部にはLR縄文を地文として篋描横走平行線文が3条施文され、さらに直下に竹管状工具による刺突文が施される。18-2は頸部から外傾外反して開く口縁部を有し、内面調整は口縁部に横位のヘラミガキ、胴部は刷毛目調整の後、ヘラミガキが施され、外面は口縁部にヨコナデ、胴部は刷毛目調整の後、縦位のヘラミガキが行われる。文様は口唇部と頸部にみられる。いずれの部位にもLR縄文が施文される。口唇部には指頭による押捺が加わり、頸部は2条の篋描横走平行線文によって区画された中に篋描連続山形文が1条巡り、さらに篋描横走平行線文の直下に篋描斜走短線文が施文される。また外面にわずかではあるが赤色顔料の付着が観察できる。18-3は太頸壺と細頸壺の中間的なもので、頸部は直立気味に立ち上がり筒状を呈し、口縁部は短かく外傾外反する。内面調整は横位の刷毛目調整が行われた後、口縁部にナデ調整が行われる。外面は縦位の刷毛目調整が施された後、口縁部にヨコナデ、頸部に縦位及び斜位のヘラナデが行われる。文様は口唇部に篋描による刻目文が施されているのみで、頸部に文様が施されておらず、本遺跡出土資料において非常に稀な存在である。18-5は底部片で、内外面ともに横位の刷毛目調整が見られる。18-7は小型壺の底部片と考えられ、内面は刷毛目調整が行われ、外面には赤色塗彩が施される。

壺にはこの他、頸部に2条の篋描横走平行線文を巡らし、その区画の中に竹管状工具による刺突文を施す19-1、頸部にLR縄文を地文として、篋描連続山形文・篋描横走平行線文・篋描垂下文の施文される19-2、胴部にLR縄文を地文として、篋描横走平行線文・篋描連続山形文の施される19-3・4、櫛描垂下文を篋描文によって区画している19-5、櫛描横走平行線文と櫛描列点文の施される19-6などがある。

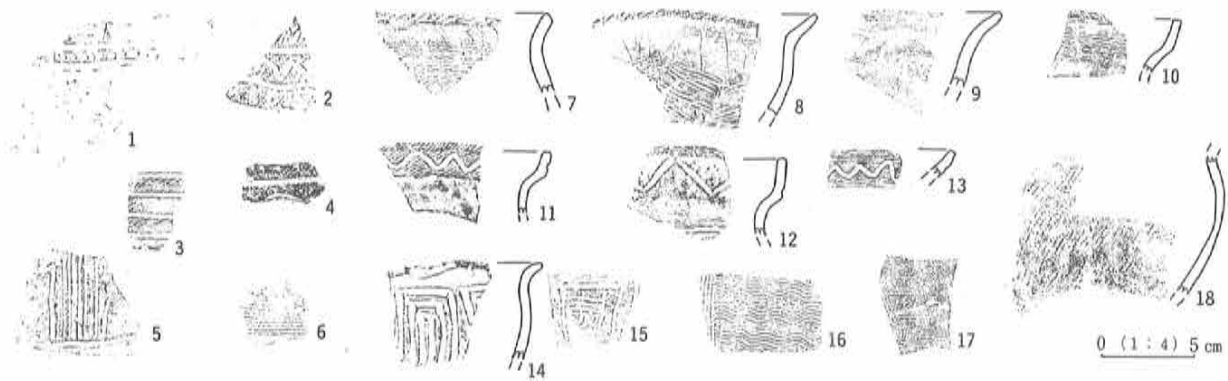
甕には18-4・6がある。18-4は口縁部と胴下半を欠損しているが、かなりの大型品である。胴部はあまり張りをもたず、口縁部は頸部から緩く外傾して立ち上がり、上位で内弯して受口状を呈すると考えられる。埋甕炉として使用されていたものであり、内外面ともに煤の付着が認められる。内面調整は刷毛目調整の後、横位の丁寧なヘラミガキが施され、外面には全体に刷毛目調整が行われている。文様は、欠損している口縁部にわずかに櫛描波状文が観察でき、胴部には4~5本一組の櫛描斜走直線文が横位羽状(左回り)に上から下へ施文されている。18-6は底部片で、外面調整は刷毛目調整の後、縦位のヘラミガキが行われている。



第18図 Y65号住居址出土土器実測図

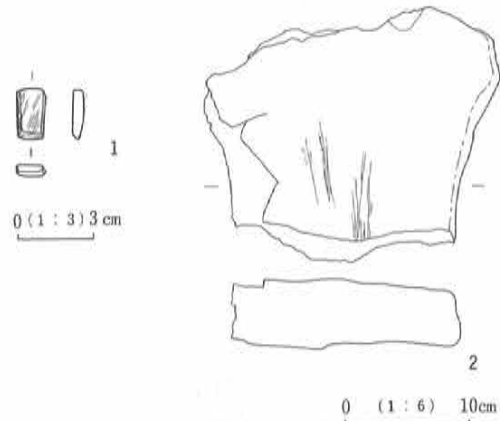
第3表 Y65号住居址出土土器観察表

押番 図号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 査	備 考
18-1	壺	10.8 <15.5> -	最大径は胴部にある。口縁部は頸部から外傾し、強く外反してラッパ状に開く。	内) 口縁部に丁寧な横位のヘラミガキ、胴部上位は粗略なヘラミガキが施されている。 外) 口縁部に横位のハケメ調整→横位のヘラミガキ、胴部は横位のハケメ調整→縦位のヘラミガキ、頸部には文様が施文された後ヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文、頸部はLR縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文が3条施され、その直下にヘラ描による刺突文が施されている。	回転実測A No.6
18-2	壺	10.8 <10.4> -	口縁部は頸部から外反しラッパ状に開く。	内) 口縁部に丁寧な横位のヘラミガキ、頸部以下は横位のハケメ調整→雑なヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナガ、胴部にヘラミガキ。 文) 口唇部にLR縄文が施文された後、指頭による押捺が施されている。頸部はLR縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文が2条施され、その間はヘラ描連続山形文1条で埋められている。またヘラ描横走平行線文下にヘラ描斜走短線文が施文されている。	回転実測A III区覆土、III区1層、IV区、26グリッド内 外面に赤色顔料の付着がある。
18-3	壺	12.0 <9.9> -	頸部は垂直に立ち筒状を呈し、口縁部は短く外反する。	内) 口縁部から頸部に横位のハケメ調整が施された後、口縁部に雑なヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部に縦位のハケメ調整が施された後、口縁部にヨコナガ、頸部に斜位および縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にヘラ描の刻目が施されている。	回転実測A No.3 胎土は赤味を帯びている。
18-4	甕	- <16.8> -	口縁部は頸部から緩く外反し、上位で内弯して受口状となる	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 全体にハケメ調整が施されている。 文) 受口状の口縁部に波状文、頸部以下は4~5本一組の柳描III区1層。	回転実測A No.5 内面は漆黒色を呈している。 埋甕炉で使用されていた。
18-5	壺	- <2.1> -		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。	回転実測B IV区
18-6	甕	- <4.3> 10.8		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) ハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B
18-7	小型壺	- <2.8> 5.0		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 赤色塗彩・ヘラミガキが施されている。	回転実測B No.2



第19図 Y65号住居址出土土器拓影図

甕にはこの他、破片資料として口唇部にLR縄文を施し、胴部に櫛描波状文の施される19-7、櫛描斜走直線文の施される19-8、口縁部に櫛描波状文の施される19-10、口縁部にLR縄文と篔描連続山形文の施される19-11、篔描連続山形文のみの19-12・13、胴部に櫛描斜走直線文の施される19-9、胴部に篔描「コ」の字重ね文の施される19-14、胴部にLR縄文を地文として、篔描「コ」の字重ね文の施される19-15、胴部に櫛描波状文の施される19-16・17、胴部にLR縄文の施される19-18などがある。



第20図 Y65号住居址出土土器実測図

この他、小片のため図示し得なかったが、口唇部に縄文が施され、内面口唇部にわずかに赤色塗彩が施される壺、篔描文の施された後、円形浮文の貼付される甕、口唇部に三角状の突起が2個並列して貼付される高坏、手捏ね成形による赤色塗彩の施された小型鉢などが出土している。

石器類で本住居址との共伴性が強いものでは、20-1の磨製石斧と20-2の台石がある。20-1はチャート製の小型の扁平片刃石斧で、刃部はやや円刃気味である。20-2は安山岩製の台石で、煤の付着が観察できる。

以上、本住居址の所産期は、共伴性の強いと考えられる図示した遺物の特徴から、弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

(三石)

5) Y66号住居址

遺構 (第21・22図、図版 八・九・十)

本住居址は台地の南側の中央よりやや西側、セ・ソ・タ-21・22、セ・タ-23グリッド内に位置している。Y72・73号住居址と重複関係を持ち、これらを破壊している。

プランは南北765cm、東西560cm、東壁長672cm、西壁長633cm、南壁長510cm、北壁長480cmの隅の丸い長方形を呈し、長軸方位はN-5°-Eをさしている。本遺跡内でも最大規模を有する住居址の一つであり、床面積は40.05m²を計測する。

覆土は五層からなり、プライマリーな堆積状態を示す。第1層はパミスを含む黒褐色土、第2層はパミスを多量に含み、砂質の暗褐色土、第3層は砂粒とパミスを含む黒褐色土、第4層は火山灰粒を含む明褐色土、第5層は第1・3層よりも粗大なパミスを含む黒褐色土で第1次堆積土である。

確認面からの壁高は29~50cmを測り、東壁が深く、西壁はやや浅い。壁体は上位は地山の黄褐色火山灰層、下位は地山の砂層を利用し、平滑に構築され、床面からの傾斜は緩い。また、砂層を利用する部分が多いため堅固な構築状態とは言い難く、もろく崩れ易い。壁溝は検出されなかった。

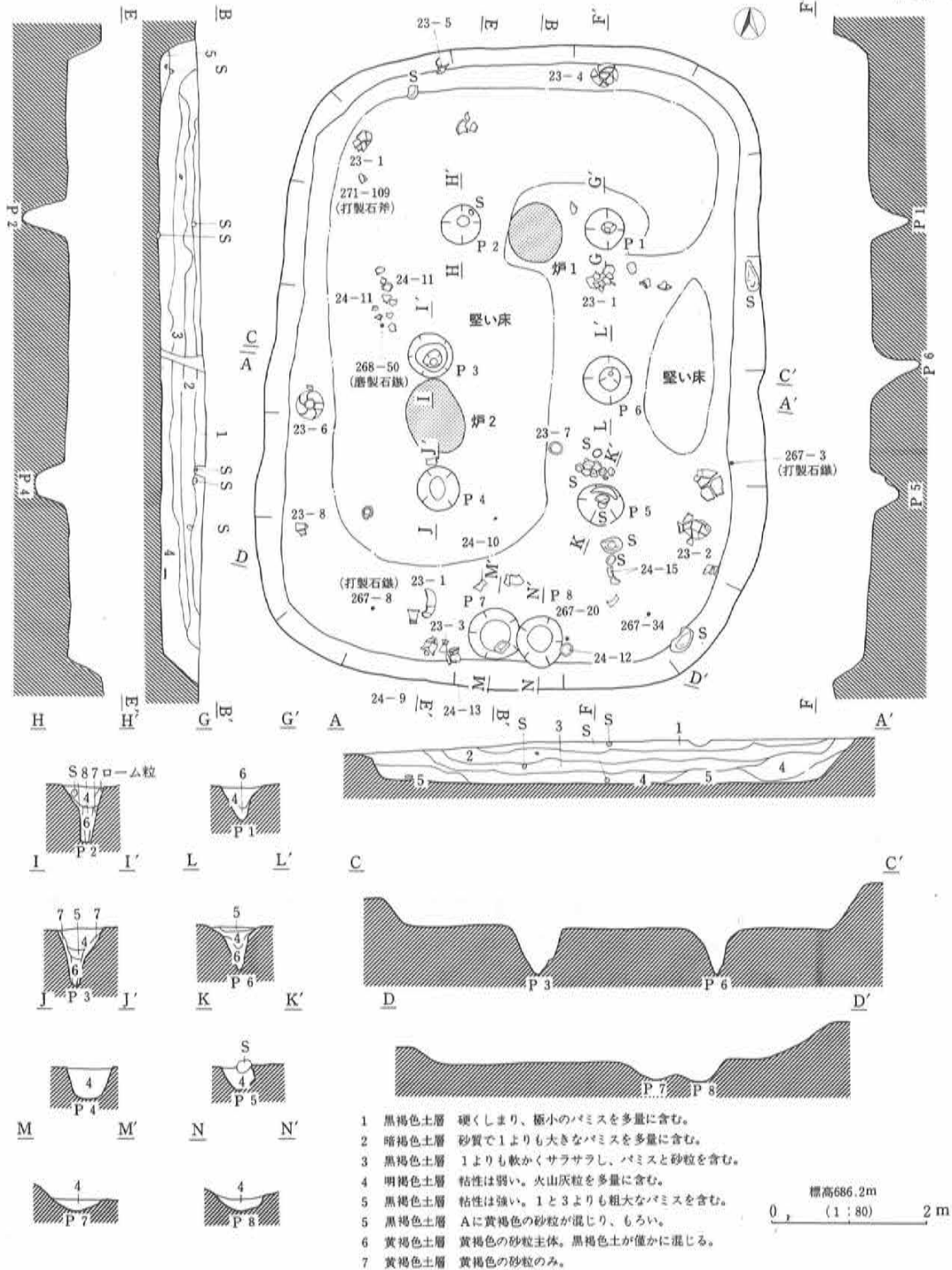
床面は地山の砂層上に、赤茶褐色土を全面にわたって5mm前後の厚さで敷きつめて叩きしめた叩き床が施されている。構築状況は、住居中央部が柔らかく、周辺部は堅固で、特にP₁・P₂よりも北側、P₂・P₃・P₄の周辺部、及びP₆の東側はしっかりと踏み固められた状態であった。

ピットは8個検出された。主柱穴は6本(P₁~P₆)整然と配置されている。P₁は51×50cmの円形を呈し、47cmの深度を有する。断面形は下端部が尖り気味の「U」字状を呈するが、東側には一段の稜を有する。P₂は50×50cmの円形を呈し、72cmの深度を有する。断面形は底面が平坦な、円錐状を呈し、断面図には径15cm前後の柱痕が明瞭に残る。P₃は58×57cmの円形を呈し、72cmの深度を有する。断面形はP₂と同様であり、断面図にもP₃と同様な柱痕が明瞭に残る。P₄は58×54cmの円形を呈し、40cmの深度を有する。断面形はU字状を呈する。P₅は52×58cmの楕円形を呈し、30cmの深度を有する。断面形は緩いU字形を呈する。P₆は62×63cmの円形を呈し、58cmの深度を有する。断面形は漏斗状を呈し、先端部から細く尖り気味である。P₁~P₆の堆積状態で共通するのは上部部に住居址の第2次堆積土第4層が存在することであり、P₄・P₅は第4層一層のみが充填される。柱痕が残るP₂・P₃の場合、木柱を固定するための土には第7層黄褐色の砂粒を用いており、柱を抜き去った後、第6層黒褐色土がわずかにまじる黄褐色の砂粒が流入している。P₇・P₈は南壁下中央に整然と並ぶ。P₇は64×64cm、P₈は67×60cmの円形を呈し、深さはそれぞれ14cm・24cmを測る。断面形はいずれも鍋底状を呈し、住居址第4層によって埋没している。検出位置から見る限り、入口施設に関連するピットであることを想定できるが、他の住居址から検出されている柱穴とは断面形、規模などに異なりがみられ、確定はできない。

炉址は北側の主柱穴P₁・P₂の間、と南西の主柱穴間P₃・P₄の間の2箇所から検出された。北側の炉1は73×66cmの楕円形を呈し、長軸方位は真北をさす。掘り込みは9cmと浅く、断面形は鍋底状で丸味を帯びる。炉内の南側と西側には円柱形の炉縁石が、「L」字状に組まれて配置されており、その内側に41×23cmの不整楕円形を呈する地山の砂層が焼け込んだ焼土範囲(火床部)がみられる。炉2は139×99cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-40°-Wをさす。掘り込みは、最深部で7cmとやはり浅く、断面形は鍋底状を呈し丸味を帯びる。炉内の南側と西側には炉1と同様に円柱形の炉縁石が2個、「L」字状に組まれて配置されており、その内側に48×52cmの円形を呈する地山の砂層が焼け込んだ焼土範囲(火床部)がみられる。炉1・2とも、覆土は漆黒に近いきめの細かい黒色土のみで構成される。

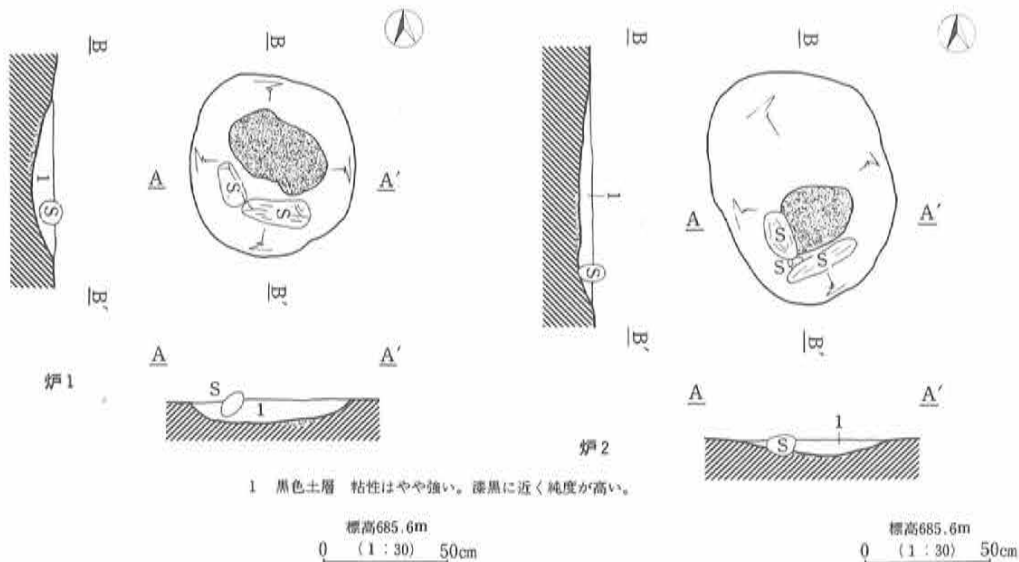
遺物の出土状況

本住居址からは弥生時代の遺物が大量に出土している。このうち住居址層序第1層~第4層にかけて出土した



第21図 Y66号住居址実測図

土器は弥生中期後半の小破片が主体を占め、本住居址の時代性と一致せず、共伴遺物と見做せない。また、石器も多量にみられるが出土層位が前述の土器と同様のものが多く、共伴遺物とできるものは少ない。従って、ここで説明する遺物の出土状況は、床面上から出土し、その出土位置を図面に明示した遺物、つまり本住居址の共伴遺物と明確に見做せるもののみを対象とする。床面出土の土器は、住居址のほぼ全域に分布する。23-1のように一つの個体が、P₁の南側、北西コーナー、南壁下中央の西寄りの3箇所に散在する傾向もみられ、本住居址の出土遺物が多くは住居廃絶直後に投棄されたものであることを想起させる。北壁下には23-1・4・5が散在し、P₁南側に23-1、P₃北西部に24-11、267-50(石鏃)、西壁下の中央南寄りに23-6、P₄の南西部に23-8、



第22図 Y66号住居址炉址1・2実測図

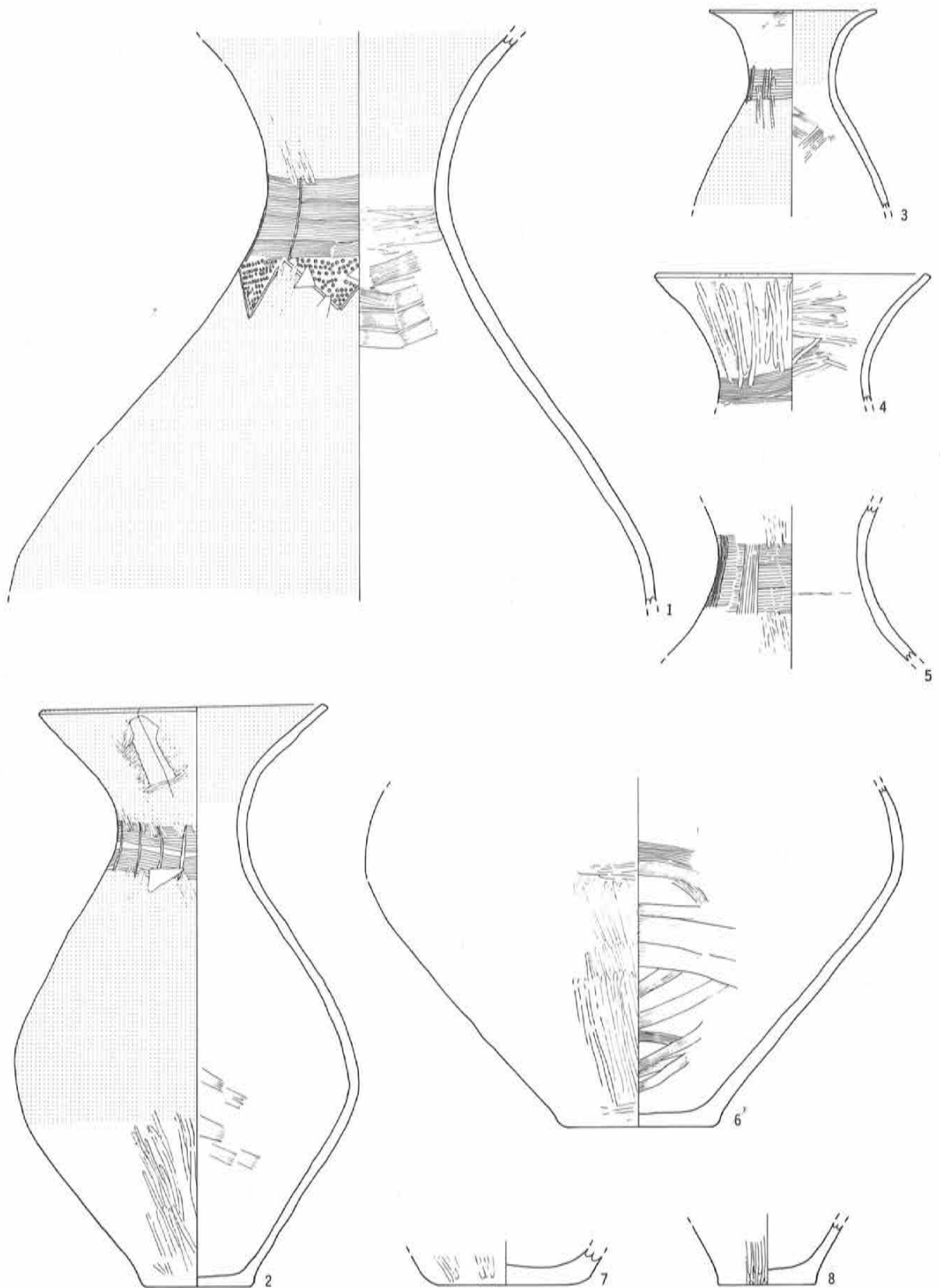
P₅・P₆間に23-7、東壁下の南側に23-2、P₅の南側に24-15、南東コーナーに267-34(石鏃)、P₆東側に23-12、267-20(石鏃)、P₇の西側周縁部に23-1・3・8、24-9・10・13が分布している。この他、IV区の第2層から273-3(石鏃)、IV区第1層から273-152(砥石)、III区第1層から274-164などが出土している。また、P₅の北側に集中的に分布する礫群は、床面よりも10cm以上高位から出土している。

遺物(第23~26図、図版 十・十一)

本住居址からは弥生土器・石器が出土している。弥生土器は完存品、それに近いものが多く、遺存率は良い。弥生土器の器種には壺・甕・台付甕・高坏がある。

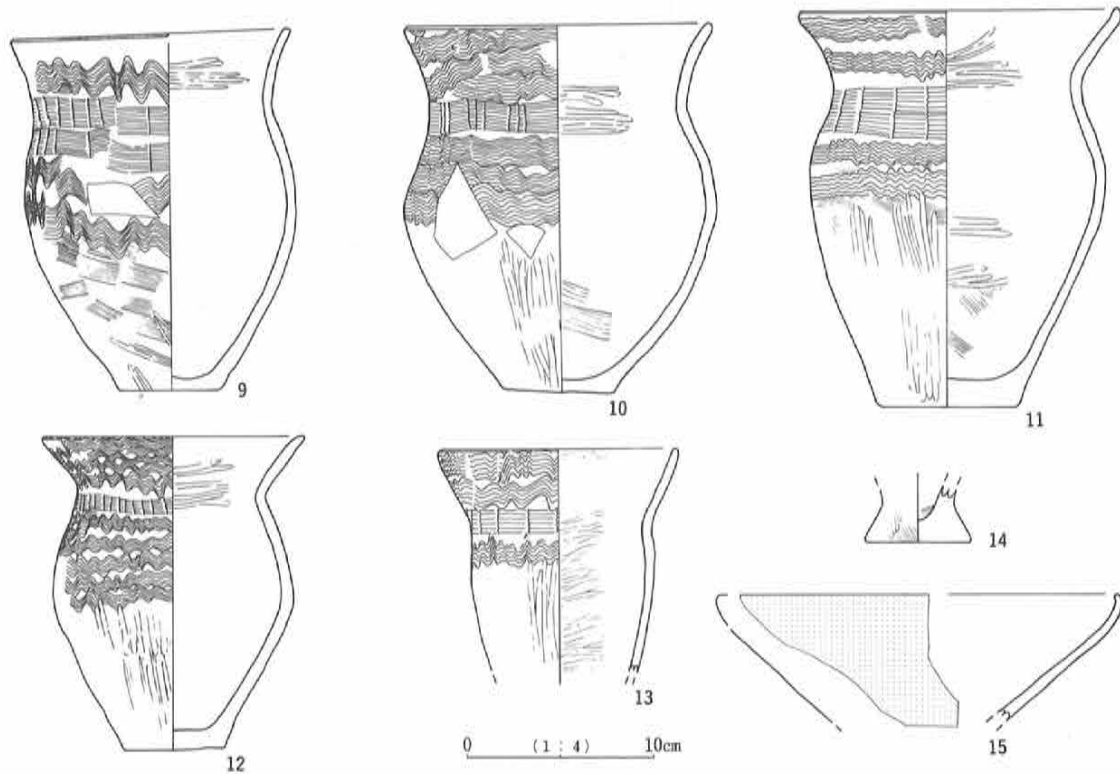
壺は、赤色塗彩が施される23-1・2・3と無彩の23-4・5・6にわけられる。23-1は口縁部と胴部中位以下を欠損するが、かなりの大型品である。口縁部は大きく外反し、胴部も中位下方まで大きく張り出す無花果形を呈するものと推測される。残存する外面の全体と、口縁部内面には赤色塗彩、丁寧なヘラミガキが施されている。文様は頸部に集中し、9本一組の櫛描横走平行線文を4帯施文ののち、八等間隔の篋描垂下文で区画し「T字文B」を形成している。更にこの文様帯下には、篋描鋸歯文が施され、文様内は竹管状工具による刺突文が施されている。内面調整は、頸部まではヘラミガキ、以下は刷毛目調整が施されている。23-2は口縁部がラップ状に大きく外反し、胴部は中位下方に最大径を有する「無花果形」を有する形態で、口径19.8cm、器高39.7cm、胴部最大径23.5cmを計る大型品である。口唇部はしっかりと面取りされ、口縁部は成形時に生じたと考えられるヒビ割れを補修した赤色塗彩が分厚く施されている。赤色塗彩は胴部中位下方から口縁部、内面は口縁部まで丁寧に施されている。文様は頸部に集中し、9本一組の櫛描横走平行線文2帯を篋描垂下文で区画した、「T字文B」が施されている。23-3は、口径11.4cm(推定)を測る小型品で、口縁部の外反度は小さい。赤色塗彩は、口縁部内面、胴部外面に施され、口縁部外面にはみられない。頸部に10本一組の櫛描横走平行線文を篋描垂下文2条で区画した「T字文B」が施されている。23-4・5は、赤色塗彩の施されない口縁部~頸部の破片で、頸部に櫛描横走平行線文(23-4)のみか、櫛描垂下文が加えられる「T字文C」(23-5)が施されている。23-4の口唇部には面取りがしっかりと施されている。23-6は胴部中位以上を欠く。かなりの大型品になるものと考えられる。23-7・8は底部の破片資料である。また、破片資料ではあるが、頸部に櫛描波状文(24-1)、や篋描斜走直線文を横位羽状に組み合わせた(24-2)、篋描斜格子目文(24-3)、櫛描簾状文(24-4)などが施される破片もみられる。

甕は実測図にあらわしたものの24-9~13はすべて中型品で口縁部と胴部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施



0 (1:4) 10cm

第23图 Y66号住居址出土土器实测图 <1>

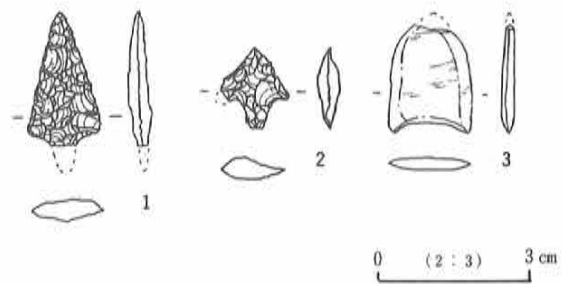


第24図 Y66号住居址出土土器実測図 <2>



第25図 Y66号住居址出土土器拓影図

される点で一致する。施文順序も頸部に簾状文を施文したのち、口縁部は波状文が下から上へ、胴部は上から下へ施されるパターンで統一されている。形態は、24-9~13それぞれ微妙に異なる。24-9・10は口径と胴部最大径がほぼ等しく、口縁部が緩く外反し、胴部は中位やや上方にふくらみをもつ点で共通するが、24-10の方が器高に対して口径、胴径の幅が広く、ずん胴な感を受ける。また、24-9の口唇部には面取り



第26図 Y66号住居址出土石器実測図

がしっかりと施される。24-11は口縁部の外反度が24-9・10より強く「く」の字状に近くなる。口唇部はつまみ上げれるようにわずかに立ち上がり、胴部は上位に張りをもつ。24-12は、口縁部がしっかりした「く」の字状に外反し、胴部は中位に張りをもつ。24-13は、口縁部が大きく、胴部が小さい形態で、口縁部は内弯気味に緩く外反する。胴部はほとんど張りをもたない。甕ではこの他、櫛描斜走直線文が施される破片も出土している。25-5は頸部の櫛描簾状文下に斜走直線文が縦位羽状に、25-6は口縁部に斜走直線文が横位羽状に施される破片である。櫛描斜走直線文が施される破片は本資料の中では稀な存在と言える。

台付甕は24-14一点のみである。底部を肥厚させ、台形状の底部を成形しているため台付甕の台部とした。高坏は一点のみで、坏部が椀状を呈し、赤色塗彩が施される24-15が出土している。

25-7・8は中期後半の土器であり、他の資料との共伴性は薄い。25-7は赤色塗彩が施される壺の破片で頸

第4表 Y66号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調	整	備考
23-1	壺	— (39.0) —	最大径は胴部にあると思われる。	内)	胴部は横位のハケメ調整。口縁部から頸部は、赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施文された後、口縁部と胴部は赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に9本一組の櫛描横走平行線文を4帯施された後8本のヘラ描による「T字文B」が形成されている。その下に鋸歯文が施され竹管による刺突文が充填されている。	破片実測A No4・7・23
23-2	壺	19.8 39.7 7.5	最大径は胴部中位下方にある。 頸部は細くぐびれ、口縁部は大きく外反しラッパ状に広がっている。 口唇部は面取りされている。 胴部のふくらみがゆるい。	内)	頸部以下はハケメ調整、口縁部は赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施文された後、口縁部から胴部中位まで赤色塗彩・丁寧な縦位のヘラミガキ、胴部下位は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に9本一組の櫛描横走平行線文が2帯施された後、ヘラ描文で区画し、所謂「T字文B」が形成されている。	回転実測A No14・15 口縁部にヒビが入り、それを補修したと思われる痕がある。
23-3	壺	(11.4) (13.5) —	最大径は胴部にある。 頸部から口縁部は「ラッパ」状に外反する。	内)	口縁部は赤色塗彩・横位のヘラミガキが施され、頸部以下はハケメ調整の後、横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施文された後、口縁部はハケメ調整、胴部は赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に10本一組の櫛描横走平行線文が施された後、ヘラ描沈線による「T字文B」が形成されている。	回転実測B No26
23-4	壺	18.4 (9.0) —	口縁部は頸部から外反し、上半でわずかに内弯する。口唇部は面取りされている。	内)	横位のハケメ調整の後、横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整の後、頸部に文様が施文、更に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に12本一組の櫛描横走平行線文が2帯施されている。	回転実測A No1
23-5	壺	— (10.1) —	頸部下半の割れ口がほぼ水平に近いため輪積みによるとと思われる。	内)	斜位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施されているが、単位不明。 外) 文様が施文された後、頸部上位は縦位のヘラミガキ、下位も縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に9本一組の櫛描横走平行線文が3帯右回りに施された後、櫛描垂下文を組み合わせ、「T字文C」を形成している。	回転実測B No3
23-6	壺	— (23.0) 10.8	底部は平底。胴部で大きくふくらんでいる。	内)	横位のハケメ調整が施されている。 外) 胴部中位に横位のヘラミガキが施された後、胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No31 黒斑あり。
23-7	壺	— (2.4) 11.0		内)	磨滅著しく調整不明。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No11
23-8	甕	— (4.3) 6.5		内)	底面付近は丁寧なヘラミガキ、他もヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No29
24-9	甕	14.8 19.2 5.6	最大径は口縁部と胴部中位がほぼ等しい。口縁部は弓状にゆるく外反し直立気味。口唇部は面取りされている。	内)	横位の丁寧なヘラミガキが施されている。 外) 口縁部はヨコナデ、頸部以下は横位のハケメ調整、文様施文の後胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に10本一組の櫛描簾状文(等間隔止め・右回り)を2帯施された後、10本一組の櫛描波状文が口縁部に1帯、胴部に2帯施されている。	回転実測A No25・27 かなり重んだ器形である。
24-10	甕	16.0 19.6 5.8	胴部の中位上方のふくらみに最大径がある。口縁部は頸部から弓状にゆるく外反する。	内)	胴部下位には縦位の粗いヘラミガキ、上位には横位の丁寧なヘラミガキ、口縁部にはヨコナデの後ヘラミガキが施されている。 外) 胴部下位に縦位のヘラミガキが施され、その上から文様が描かれている。 文) 頸部に10本一組の櫛描簾状文(3連止め)が施された後、口縁部・胴部に8-10本一組の櫛描波状文が3帯ずつ施されている。	回転実測A No22、I区3層、III区3層、III区4層、III区ベルト4層、外面に煤が付着している。
24-11	甕	16.8 21.2 7.4	最大径は口縁部にある。口縁部は頸部から外反した後端部でやや内弯する。 胴部は上位でふくらむ。	内)	口縁部から胴部に横位のハケメ調整の後丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部はヨコナデ、胴部は横位のハケメ調整、文様施文の後、縦位のヘラミガキ。 文) 頸部に6本一組の櫛描簾状文(等間隔止め・右回り)が2帯、口縁部と胴部には6本一組の櫛描波状文(右回り)が2帯施されている。	回転実測A No34・36・37・38・39・40、II区3層、II区4層、P2、P3
24-12	甕	13.8 16.7 5.3	最大径は口縁部にある。口縁部は頸部から「く」の字に強く外反し大きく開く。胴部は中位で張る。胴部下位はゆるい。	内)	口縁部はヨコナデが施され、口縁部から胴部下位まで丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部下位に縦位のハケメ調整が施された後、文様施文、さらに縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に7本一組の櫛描簾状文(等間隔止め・右回り)が施された後、5-6本一組の波状文が口縁部に5帯、胴部に5帯施されている。口唇部には、ヘラによる刻目が施されている。	完全実測 No20
24-13	甕	12.2 (11.9) —	口縁部はゆるく外反し、ほぼ直線的に開く。胴部は僅かにふくらむ。最大径は口縁部にある。	内)	丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施文された後、胴部中位以下に丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に6本一組の櫛描簾状文(等間隔止め・右回り)を施文の後、同単位の櫛描波状文が口縁部に2帯、胴部に1帯施されている。	回転実測A No27

24-14	台付環？	— (3.0) (5.6)	甕の底部が厚く、台部のように見える。	内) ハケメ調整が施されている。 外) 縦位のハケメ調整が施された後、縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測 B I 区 2 層
24-15	高杯鉢	(21.2) (6.8)	口辺部は大きく開き、端部付近で内弯する。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・口辺部上位は横位のヘラミガキ、下位は斜位羽状のヘラミガキが施されている。	破片実測 A No.16

部に篋描横走平行線文が施されている。25-8は壺の頸部片で、LR縄文を地文として、篋描横走平行線文と、押引文が施されている。

石器類で本住居址と共伴性が強いものは267-20・34の打製石鏃と、268-50の磨製石鏃である。267-20・34はいずれも黒曜石製であり、267-20が平基有茎鏃、267-34は小形の凹基有茎鏃に分類できる。268-50は千枚岩製の磨製石鏃で、先端部を欠損し、穿孔はみられない。この他住居址内からは、打製石鏃267-3・8(いずれも黒曜石製)、打製石斧271-109(安山岩製)、砥石273-152(砂岩製)、粘板岩の搬入礫274-164、磨製石鏃を作る用材となった粘板岩274-169なども出土しているが、遺構との共伴性は薄い。

以上、本住居址は出土した壺の頸部文様帯に「T字文B」が用いられるものが多いこと、篋描鋸歯文が施文される個体がみられること、また、形態は、胴部の下位にくびれをもたないことなど、壺を中心とした文様・形態の特徴からみて、後期でも前半代に所産期を求めることができる。(小山)

6) Y67号住居址

遺構 (第27・28図、図版 十二)

本住居址は台地の南側の東寄り、た・ち・つ-16・17・18グリッド内に位置している。掘り込みの浅い住居址のため、各所を攪乱され、壁体は既に削除されている。また、第129・131-135号土坑と重複関係を持ち、これらを破壊している。

プランは、推定で、東西617cm、南北733cm、東壁長696cm、西壁長650cm、南壁長590cm、北壁長550cmの隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-5.5°-Eをさしている。本遺跡内でも最大規模を有し、床面積は推定で41.85㎡を計測する。

覆土は第1層の暗褐色土が辛うじて残る。土圧を著しく受けているため、非常に堅い。

壁体は先述したように削除されており、壁溝も検出されなかった。

床面は、地山の黄褐色火山灰層を利用し、叩きしめられたと考えられる。現況では極めて堅くしまっているが、これは数年前の土木工事の際、かなりの土圧が加わったために生じたものであり、往時の状態は留めていない。また、攪乱が床面各所にみられるため、的確な説明はできないが、往時はほぼフラットな構築状態であったと推定される。

ピットは主柱穴が4本検出された。おおむね整然とした配置であり、平面プラン、断面形、深度もほぼ等しい。計測値は、P₁が31×40cm、深さ40cm、P₂が28×33cm、深さ30cm、P₃が44×34cm、深さ38cm、P₄が32×36cm、深さ39cmで、断面形は、いずれもU字状を呈する。

炉は、P₁・P₂の北側の主柱穴間の中央よりも東寄りから検出された。長軸長139cm、短軸長99cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-29°-Eをさす。床面からの掘り込みは最深部で15cmを測り、断面形は鍋底状に丸味を帯びている。覆土は三層からなり、最上層(第1層)に橙褐色の焼土が被覆している。従って、本炉址の使用面は、床面とほぼ同一レベル上にあることが自明である。焼土範囲は炉のプラン内の中央より南西側に30cm内外の範囲で存在し、その南側に炉縁石3個が1列に並べられている。この他、炉のプラン上面には6個の礫が散在し、炉址の構造に何らかの関わりがあることが推定されるが、原位置を保っているか否かは定かではない。

遺物の出土状況

本遺構からは、弥生土器が出土しているが、遺構との共伴性を指示できるものは少ない。29-1がP₃の西側、

29-2がIV区、29-3がP₄の北西側から出土している。(小山) 遺物(第29・30図、図版 十二)

本住居址からは弥生土器が出土している。器種には、壺・甕・高坏・甑・蓋があるが、本住居址と積極的に共伴性が指示されるものには図化した甕がある。

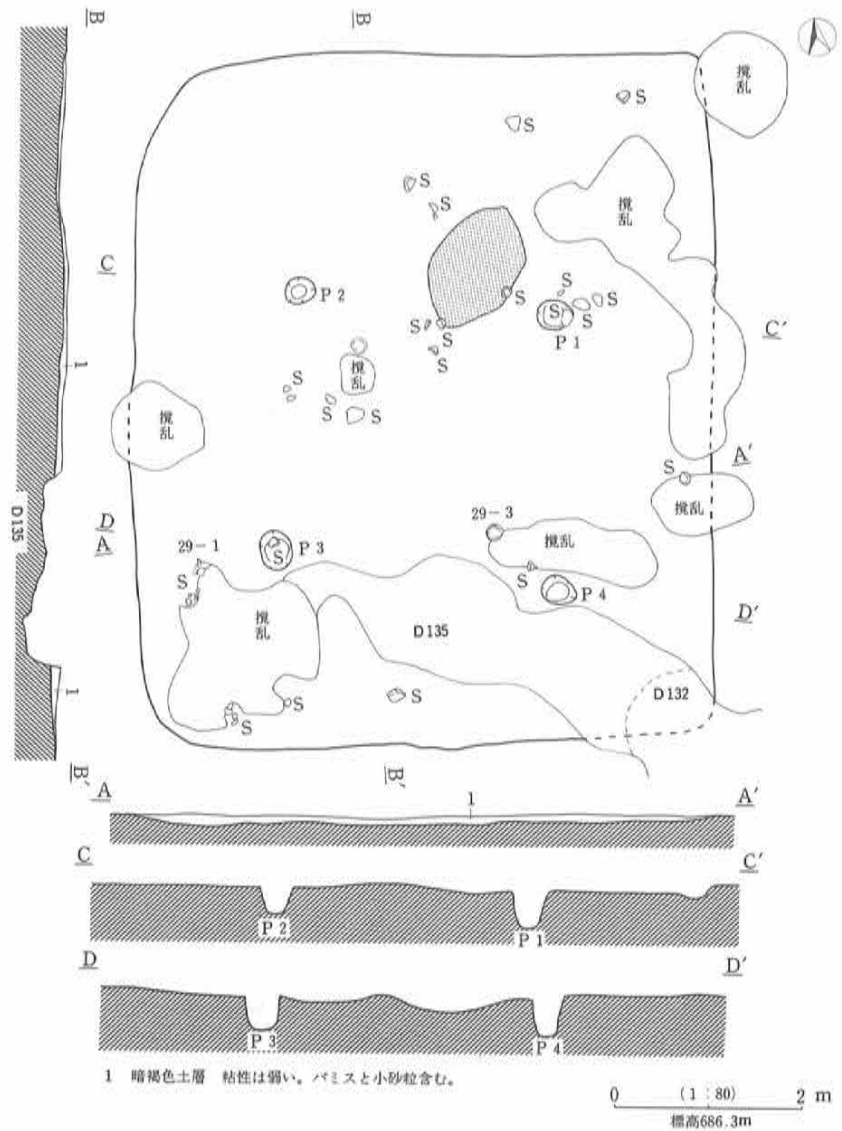
壺は、29-5・6がある。両者とも口縁部が外反し、口唇部にLR縄文が回転押圧されている。文様帯を残存するものは、29-5で頸部に突帯を有し、LR縄文が充填されている。29-6も頸部に横走する沈線を僅かに残存する。壺には他に、赤色塗彩が施され、胴部下位に強い稜を有するものが在るが、グリッド遺物であるため遺構と共伴する可能性があるという程度にとどめたい。

甕は、文様帯を残存する29-1・2と底部資料29-3がある。文様はいずれも胴部上半に集中し、口縁部から胴部に櫛描文が施された後、頸部に櫛描簾状文2連止め(右回り)が施されている。

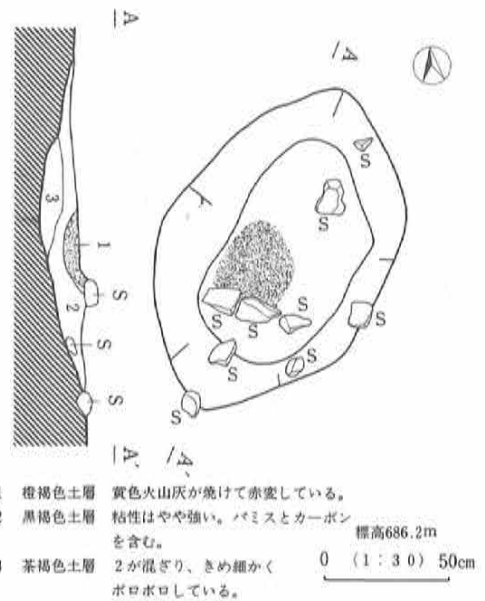
口縁部および胴部の文様は、29-1が6本~10本一組の櫛描波状文(右回り)が上から下へ施され、29-2は4本一組の櫛描斜走直線文が横位羽状(右回り)に施されている。内面調整は両者とも横位のヘラミガキが施され、外面調整が観察できる29-1は、文様施文の後、胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。29-3の底部も内面に横位のヘラミガキ、外面に縦位のヘラミガキが施されている。形態は、口縁部が「弓」状に外反し、最大径を口縁部に有し、胴部は中位でふくらんでいる。他には、櫛描波状文の施された胴部破片(30-1)がある。

高坏には、口縁部に突起を有する口縁部破片、坏部と脚部の接合部に稜を有する脚部破片などがあり全て赤色塗彩が施される。

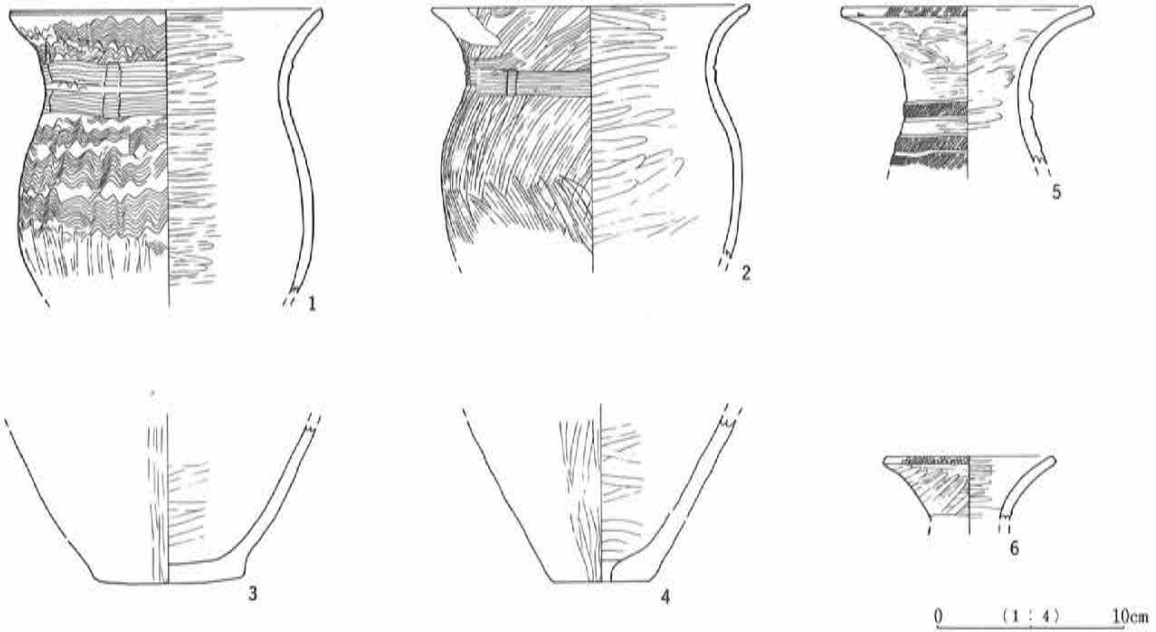
甑は29-4が出土している。内面に横位のヘラミガキ、外面に縦位のヘラミガキが施された、底部から直線的に開く胴部下半を残存するもので、底面中央に焼成前に施された一孔を有している。



第27図 Y67号住居址実測図



第28図 Y67号住居址炉址実測図



第29図 Y67号住居址出土土器実測図

第5表 Y67号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
29-1	甕	16.4 (15.1) —	最大径は口縁部にある。口縁部は長い「弓」状に外反し、胴部は中位でふくらむ。口唇部に一条の沈線がみられる。	内) 横位のヘラミガキが丁寧に施されている。 外) 文様を施した後、胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部に6~10本一組の櫛描波状文(右回り)が上から下へ5帯施された後、頸部に6本一組の櫛描簾状文(2連止め・右回り)が2帯施文されている。	回転実測A No.1、II区1層、III区1層、IV区1層 外面に煤が付着している。
29-2	甕	17.0 (13.4) —	最大径は口縁部にある。口縁部は長い「弓」状に外反し、胴部は中位でふくらむ。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 口縁部から胴部中位に、4本一組の粗い櫛描斜走直線文が横位羽状(右回り)に施された後、頸部に9本一組の櫛描簾状文(2連止め・右回り)が1帯施文されている。	回転実測B IV区1層 内・外面の器面全体に多くの小孔が認められる。
29-3	甕	— (8.3) 8.0		内) 斜位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.2
29-4	瓶	— (8.8) 5.3	底部に焼成前の一孔を有する。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A III区1層
29-5	壺	13.2 (8.6) —	口縁部は細い筒状の頸部から強く外反しラップ状に開く。口唇部は面取りされている。	内) 口縁部から頸部に横位のヘラミガキ、それ以外はナデが施されている。 外) 口縁部に横位および斜位のハケノ調整→横位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文を施し、頸部はLR縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文を強く施すことにより、突帯状を呈している。	回転実測A III区1層 共伴しない。
29-6	壺	(8.8) (3.4) —	口唇部はラップ状に開く。	内・外面ともにヨコナデ→横位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文、頸部にヘラ描横走平行線文が施されている。	回転実測A III区1層、IV区 共伴しない。



第30図 Y67号住居址出土土器拓影図

尚、穿孔は主に内面から施されたものであるが、外面からも多少工具をあてている。

蓋は、台形状の大きなつまみを有する破片資料で、調整は磨滅が著しく不明である。

以上、本住居址からは、多器種の弥生土器が出土しているが、積極的に遺構との共伴性を指示し得るのは、甕の頸部にしっかりした櫛描簾状文が施され、胴部に櫛描波状文および斜走直線文が施される29-1・3のみである。これらから本住居址の所産期は弥生時代後期前半に求められよう。

(篠原)

7) Y68号住居址

遺構 (第31・32図、図版 十三・十四)

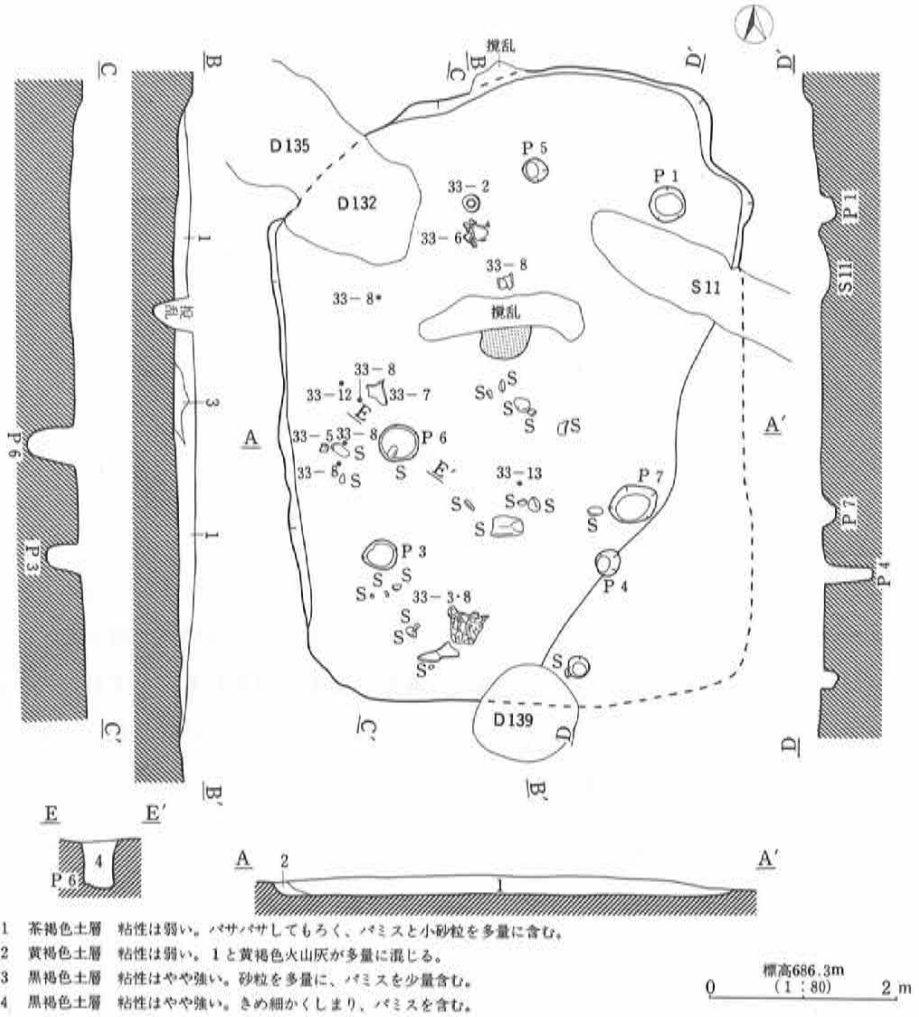
本住居址は台地の南部東寄りの、ち・つ・て-16・17グリッド内に位置している。第132・139号土坑、Y67号住居址、第11号周溝と重複関係を持ち、これらに、北西コーナー、及び北東の床面・南壁中央を破壊されている。また、東壁の南半から、南壁の東半及びその周辺部の床面は、既に削除され現存しない。

プランは、推定で484cm、南北670cm、東壁長594cm、西壁長537cm、南壁長440cm、北壁長380cmのやや歪んだ隅の丸い長方形を呈し、長軸方位はN-2°-Wをさす。床面積は推定で29.02㎡を測り、本遺跡内では平均的な規模を有している。

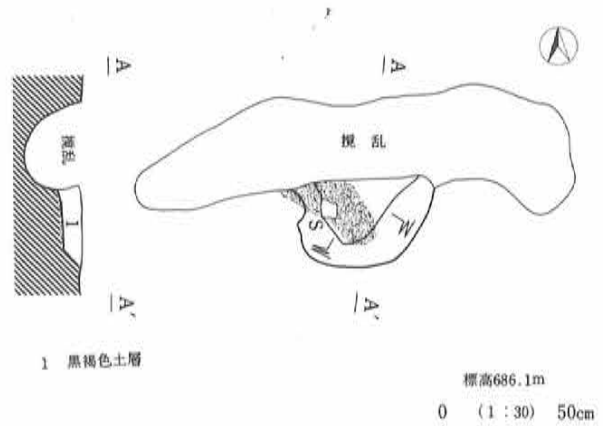
覆土は三層からなるが、大方は、パミス・小砂粒を多量に含む茶褐色土(第1層)で構成される。西壁隅に壁体が崩落したと考えられる黄褐色の火山灰層(第2層)、床面中央部に黒褐色土(第3層)の堆積が僅かにみられる。

確認面からの壁高は、0~13.5cmを計測し、先述したように、南東部の壁体は後世の攪乱によって存在しない。壁体は上位を黄褐色火山灰、下位を砂層といずれも地山を利用して構築されているが壁面は平滑とは言いがたく、凹凸が激しく、また、軟弱で崩れ易い状態である。壁溝は検出されなかった。

床面は、住居内全面にわたって叩き床が施されていたと考えられる。残存部の構築状況は、地山の砂層上に、白色粒子を含む黒褐色土と、黄色火山灰を混ぜた土を薄く敷きつめたのち、叩きしめられており、極めて堅固で平坦である。堅固な状況は往時からのもの



第31図 Y68号住居址実測図



第32図 Y68号住居址炉址実測図

であったと考えられるが、近年の土木工事の土圧の影響もあることを付記しておきたい。

ピットは6個検出された。主柱穴と言い得るのは、住居南側に並ぶ2本（ P_3 ・ P_4 ）のみである。 P_3 は32×38cmの楕円形を呈し、36cmの深度を有する。 P_4 は28×27cmの円形を呈し、52cmの深度を有する。 P_5 は棟持柱とも考えられるが位置関係は一般的なあり方と比べ、北壁下の中央よりも東側にずれる。21×27cmの円形を呈し、42cmの深度を有する。 P_6 は P_3 の北側2mの距離に位置する。37×43cmの楕円形を呈し、48cmの深さを有する。パミスを含むきめの細かい暗褐色土（第4層）が充填されている。その他、 P_1 は東壁の北寄り、 P_7 は P_4 の北東側に位置している。

炉址は住居址の中央よりもやや北側から検出された。北側の半分を攪乱されているため全体の形状は明らかでないが歪んだ円形か楕円形を呈していたと考えられる。南西側には、礫が一個みられるが、本炉址との関係は定かではない。また、掘り込み残存部の西側の底面に偏在する焼土範囲は本炉址の火床面にあたる。覆土は黒褐色土一層のみからなる。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が多量に出土した。床面上から出土した遺物も多い。甕33-8のように炉址の北側、及び西側周辺、西壁下中央など住居内各所に散在し、接合関係をもつ資料もみられる。33-1・2・6・8・11が炉址の北側、33-4が炉址の南東側、33-5・7・8・12が西壁下中央、33-13が住居中央南寄り、33-3が南壁下中央より出土しており、住居址の西側半分に偏在する傾向がみられる。

遺物（第33・34図、図版 十四・十五）

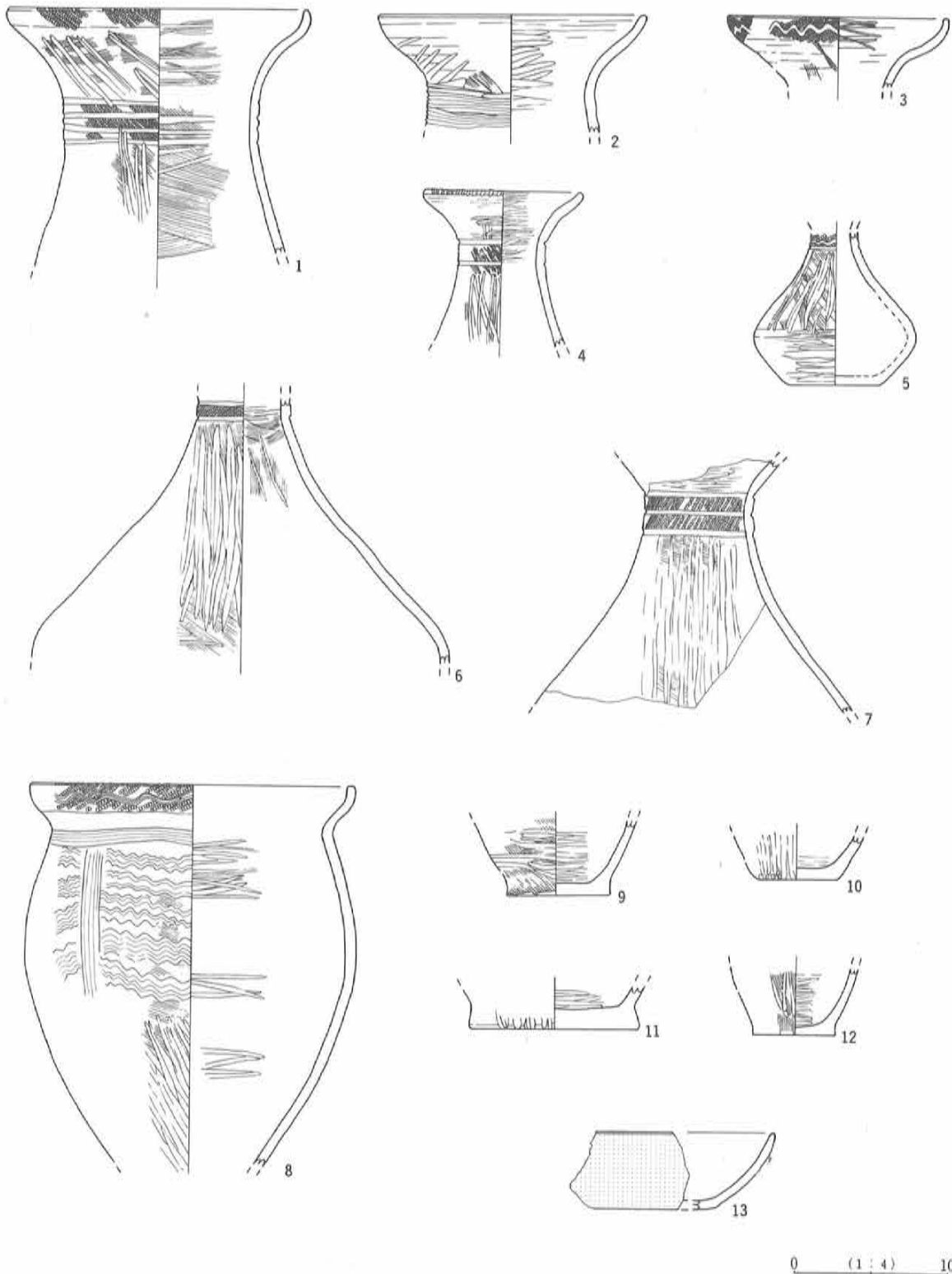
本住居址からは、弥生土器が出土している。器種には、壺・甕・鉢がある。

壺は、頸部の太い壺（以下太頸壺と呼ぶ。）と頸部の細い壺（以下細頸壺と呼ぶ。）の2系統に大別される。

太頸壺には、33-1・2の2個体がある。33-1は胴部中位以下を欠損する。径12.3cmを測る太い頸部から口縁部は外反したのち、上位で受口状に立ち上がる。受口部には明瞭な稜がなく、丸味を帯びている。また、口唇部には、面取りが施されている。文様は口縁部と頸部に施される。いずれの部位にもLR縄文が施され、頸部には篋描横走平行線文が4条、太くしっかりと施されている。外面調整は、刷毛目調整ののちやや粗略なヘラミガキ、内面調整は、刷毛目調整ののち口～頸部までヘラミガキが施されている。33-2は太い頸部から、口縁部は内弯気味に外反する。頸部に7本一組の篋描横走平行線文が2帯施され、その上位を1条の篋描横走平行線文で区画している。内外面ともにヘラナデが雑に施されている。

細頸壺には、口縁部が受口状を呈するもの33-3と単純口縁のもの33-4がみられる。また、小型の33-5も存在する。33-3は口縁部のみが残存する。受口状を呈する口縁部は、明瞭な稜がなく、丸味を帯びる。文様は口縁部の受口部にみられ、LR縄文を地文として篋描連続山形文が1条施されている。33-4は口縁部が僅かに内弯気味に外反する。文様は頸部と口唇部に施されている。頸部には、不規則な単位の細かい斜走沈線を地文として、篋描横走平行線文が2条施されている。また、口唇部には篋描の刻目文がみられる。33-5は残存高9.7cmを測る小型品である。胴部下位が強く張り出し、最大径を有する。文様は頸部に集中し、LR縄文を地文として、篋描連続山形文、横走平行線文が施文されている。33-4・5はいずれも口縁部及び胴部下位以下を欠くが単純口縁を呈するものと考えられる。頸部は細く筒状を呈し、胴部は下位で強く張り最大径を有する。以上、壺の資料33-1～7までの説明を加えたが、外面調整はいずれも刷毛目調整ののちやや粗略ではあるが、ヘラナデが施される点で一致している。壺はその他、細い頸部に篋描横走平行線文を篋描横走平行線文で区画した文様帯をもつ34-1、篋描横走平行線文のみの34-2、胴部に篋描連続山形文・横走平行線文が施文される34-3、LR縄文を地文として、篋描横走平行線文・連弧文が施される34-4、胴部の中位に篋描横走平行線文と篋描列点文が一段毎に施文される破片もみられる。

甕は、口縁部が受口状を呈する33-8、34-5・16と、単純口縁の34-6・9・10・11・12・19に分けられる。



第33図 Y68号住居址出土土器実測図

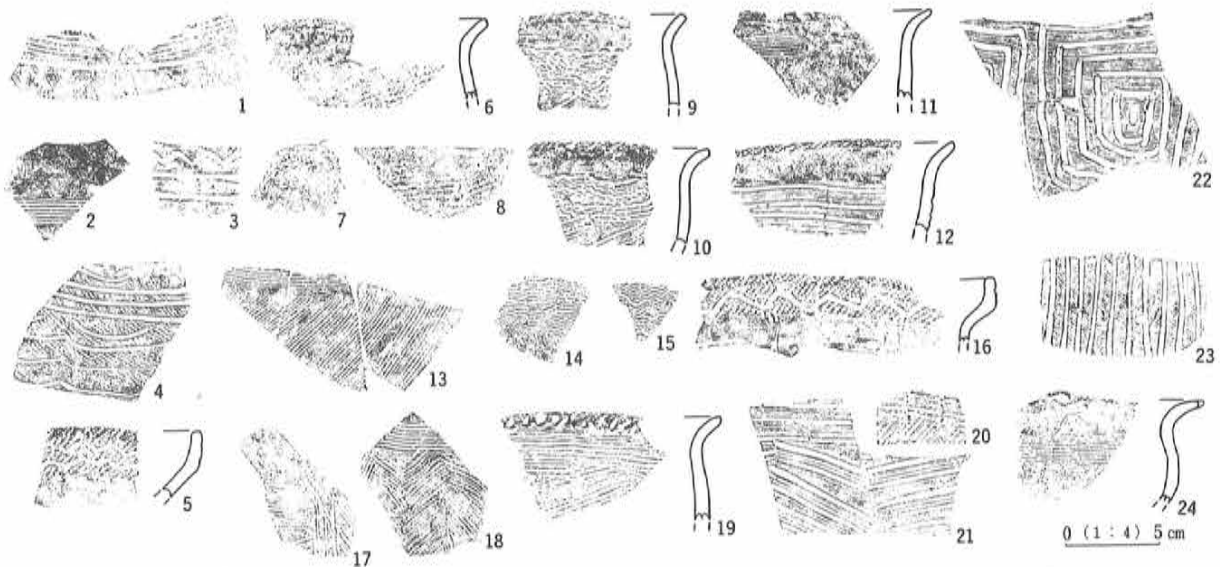
受口状口縁を呈する33-8は口径20.8cmを測る大型の形態で、口縁の受口部には明瞭な稜がなく、丸味を帯びる。胴部は中位上方で軽くふくらみ、最大径を有するが、口径と大差はない。文様は口縁部と胴部に施文される。口縁部はLR縄文を地文として、2本一組の櫛描波状文(右回り)が施され、頸部には5本一組の櫛描横走平行線文(右回り)、胴部には6本一組の櫛描波状文が5帯施されたのち、同単位の櫛描垂下文で区画されている。この他、受口部にLR縄文を地文として、篋描連続山形文が1条施される34-16、2条施される34-5もある。34-

第6表 Y68号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
33-1	壺	19.2 <17.0> —	口縁部は外反し上端で内弯して受口状となる。頸部は太く筒状を呈する。口唇部は面取りされている。	内) 口縁部から頸部にかけて横位のヘラミガキ、胴部はハケメ調整が施されている。 外) 文様が施文された後、口縁部から胴部にかけては斜位のハケメ調整がやや粗めに全体に施されさらに斜位のヘラミガキが、粗めに施されている。 文) 口縁部はLR縄文、頸部はRL縄文を地文としてヘラ描の横走平行線文が4条施されている。	回転実測A No 5
33-2	壺	16.9 <7.5> —	口縁部は太い頸部から上半でわずかに内弯し受口状となる。	内) 口縁部はヨコナデの後、横位のヘラミガキが施され、頸部以下はナデが施されている。 外) ヨコナデの後にハケメ調整、更に粗雑な横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に7本一組の櫛描横走平行線文が上から下へ2帯施された後、最上部がヘラ描の横走平行線文で区画されている。	回転実測A No 2
33-3	壺	13.9 <4.5> —	口縁部は頸部から外反し、上半で内弯して受口状となる。口唇部は面取りされている。	内) 口縁部は粗雑なヨコナデの後、斜位のヘラミガキが施されている。 外) 全体に粗雑なヨコナデ、ハケメ調整の後ヘラミガキが施されている。 文) 口縁部にLR縄文が施された後、ヘラ描波状文が1条施されている。	回転実測A No23、III区
33-4	壺	(10.0) <10.0> —	口縁部は細い筒状の頸部から外傾し、上半で内弯気味となる。口唇部は面取りされている。	内) 口縁部は横位のヘラミガキ、頸部から胴部はナデが施されている。 外) 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ調整の後、口縁部には横位の、胴部には縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部は不整な斜走沈線地文として、ヘラ描横走平行線文2条で区画されている。口縁部はヘラ描による刻目が施されている。	回転実測B I区、炉
33-5	壺	— <9.7> 5.8	頸部は筒状を呈し、胴部は下位で強く張り最大径を有する。	内) ナデが施されている。 外) 胴部は全体にハケメ調整が施された後、胴上半部に斜位、下半部に横位のヘラミガキが施されている。 文) LR縄文を地文として、ヘラ描波状文、横走平行線文が施されている。	回転実測A No19
33-6	壺	— <16.8> —	頸部は筒状を呈し、胴部は下位で張りをもつ。	内) 頸部は横位のヘラミガキ、胴部上位はハケメ調整の後、単位の大きいヘラミガキが施されている。胴部下位は磨減著しく不明。 外) 頸部から胴部上位は縦位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施され、胴部中位以下は斜位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にLR縄文を地文として、ヘラ描横走平行線文が施されている。	回転実測B No 3
33-7	壺	— <17.0> —	口縁部はラッパ状、頸部は筒状を呈し最大径は胴部にあると考えられる。	内) 全面を粗いハケメ調整の後、口縁部は横位のヘラミガキが施されている。 外) 全面をハケメ調整、頸部に文様施文の後、口縁部に横位のヘラミガキ、胴部に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にLR縄文を地文として、ヘラ描横走平行線文が3条施されている。	破片実測A No15
33-8	甕	(20.9) <24.5> —	口縁部は外傾し、上半で内弯して、受口状を呈する。最大径は胴部中位にある。	内) 口縁部から胴部上位はヨコナデが施された後、丁寧な横位のヘラミガキが施されている。それ以下はやや雑なヘラミガキが施されている。 外) 口縁部はヨコナデ、胴部以下はハケメ調整が施された後下位に丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部はLR縄文が施文された後、2本一組の櫛描波状文(右回り)が施されている。頸部は5本一組の櫛描横走平行線文(右回り)、胴部は6本一組の櫛描波状文が5帯施された後、6本一組の櫛描垂下文が施されている。	回転実測B No 4・5・12・14・18・20、I区、II区
33-9	甕	— <4.7> 6.7		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整の後、横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No26
33-10	甕	— <2.8> 5.0	底部周辺に4箇所凹みが見られる。	内) 横位のヘラミガキがやや雑に施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A I区
33-11	甕	— <2.7> 11.1	底部は粘土版を用い、胴部との接合痕が明確に残る。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 接合痕上は横位のヘラミガキ、底部は縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No 6
33-12	甕	— <4.3> 8.0		内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のハケメ調整が施された後、やや雑な縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No16
33-13	鉢	— 5.0 —	口縁部は内弯気味に開く。	内・外面ともに赤色塗彩・丁寧なヘラミガキが施されている。	破片実測B No21

5・16の受口部にはいずれも明瞭な稜が残る。

単純口縁を呈するものはすべて破片資料であるが、口縁部が短く外反する形態はいずれも共通する。また、34-11を除き、口唇部に面取りが施されている。文様は各資料毎に異なる。34-6は、口唇部と胴部にLR縄文が施



第34図 Y68号住居址出土土器拓影図

される。34-7・8も同一個体と考えられる。34-9・10は口唇部にLR縄文、頸部～胴部上位に櫛描波状文、それ以下に櫛描斜走直線文が施されている。34-11は頸部に櫛描横走平行線文が施されるが頸部周囲を全周していない。頸部に櫛描横走平行線文か簾状文、胴部に櫛描斜走直線文が施される甕は比較的多く34-12・13・18・19・20・21があるが、施文は細部にわたると異なりがみられる。34-12・21は同一個体と考えられ、頸部に簾状文、胴部に縦位羽状の斜走直線文が施され、口唇部にLR縄文が押捺される。34-18・19は頸部の文様が横走平行線文で簾状文でない点が異なり、34-19の口唇部には篋描の刻目文が加えられている。また、34-13・20には、胴部の斜走直線文（横位羽状になると考えられる）上に34-13には横走平行線文、34-20には簾状文が施されている。34-17は頸部文様帯をもたず、粗雑な縦位羽状櫛描斜走直線文が施されている。34-14・15は櫛描波状文のみが施される胴部破片である。

34-22・23は同一個体と考えられ、「コ」の字重ね文をもつ形態と同一の範ちゅうに属すると思われる。一般にみられる「コ」の字重ね文と異なる点は、通常「口」字状となる文様が、完全な四角形「口」字状となっていることであり、中央部の列点を取りまいて「口」字文が5重にめぐっている。外面調整は刷毛目調整がしっかりと施されており、縄文地文はみられない。甕はこの他、33-9～12のような底部片が多量に出土しており、底部の調整はいずれもヘラケズリである。

鉢は、33-13、34-24がみられる。33-13は口辺部が内弯気味に開く、椀状の形態を有し、内外面ともに丁寧なヘラミガキ、赤色塗彩が施されている。34-24は本住居址内出土の他の土器と同時期のものかどうかははっきりとはわからない。口縁部は短く強く外反し、胴部は上位で強く張り、そろばん玉状を呈する。また、口唇部には三角形の突起が貼付されている。文様は頸部にあり、櫛描簾状文（右回り）が施されている。外面と、内面の口縁部には丁寧なヘラミガキ、赤色塗彩が施されている。同様な器形の資料は、脚付のものと平底のもの二系統がみられ、本資料の場合は、いずれであるかは判断しかねる。

以上、本住居址の所産期は、共伴性が積極的に示めされる図示した遺物の特徴からみて弥生時代中期後半に位置づけて大過ないと考える。尚、弥生時代中期後半の土器組成において主体を占める細頸壺とともに太頸壺が伴出している事実は本住居址に詳細な時間的位置づけを与える上で、重要なキーポイントを内包しているものと考えられる。

(小山)

8) Y69号住居址

遺構 (第35・36図、図版 十六・十七)

本住居址は台地の南側の中央よりやや西方の、て・と・な-22・23グリッド内に位置している。第10号周滄、第118・119・120号土坑と重複関係を持ち、これらに、住居址の北側と、南壁及びその下部の床面を破壊されている。

このためプランはいずれも推定値であり、東西535cm、南北447cm、東壁長407cm、西壁長410cm、南壁長420cm、北壁長450cmの長方形を呈するものと考えられる。長軸方位はN-73°-Wをさし、南北に長軸をもつ住居址の多い本遺跡の中にあつて、東西に長軸を有する本例は、僅少な例といふことができる。床面積も推定で、22.46m²を測り、本遺跡の中では平均的な規模を有する。

覆土は二層に分割されたが、大方は第1層が占めている。第1層はパミスと、砂粒を含む黒褐色土、第2層は、黄褐色火山灰が主体で礫を少量含み、東西両壁下に逆三角形に堆積する状況がみられることなどから、壁体の崩落層と考えることができる。

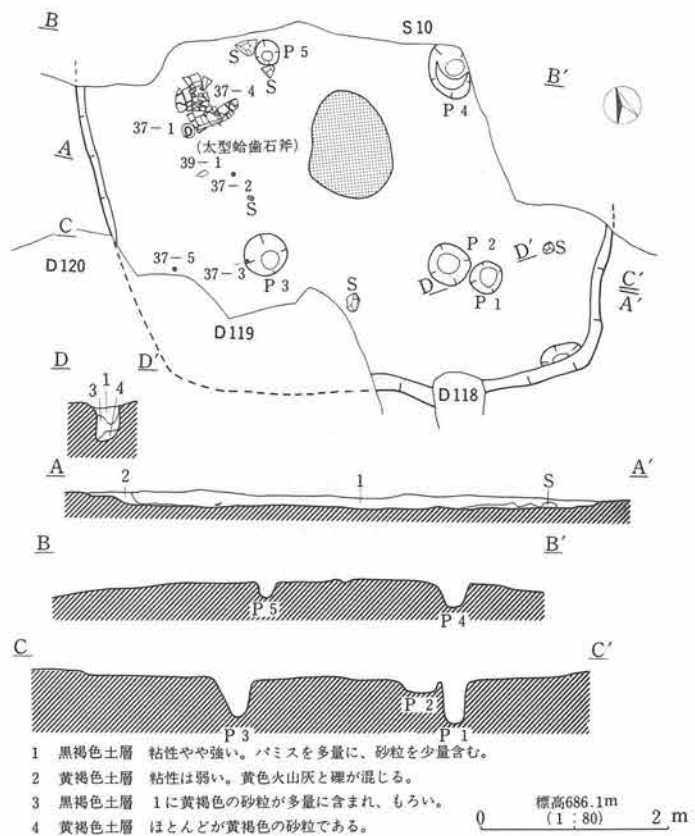
確認面から壁高は、残存部で、3.5~14cmを測るが南壁を除き、東・西両壁の残存状況は極めて悪い。壁体は、大方が地山の砂層を利用して構築されているため、軟弱で崩れ易い。床面からの立ち上がりも緩やかであり、壁面も平滑とはいふ難い。

壁溝は検出されなかった。

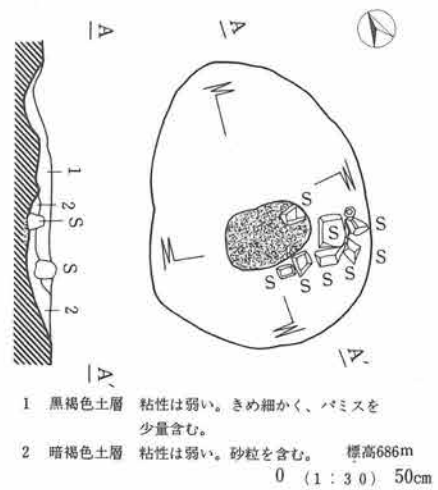
床面は、地山の黄色の砂層上にパミスと白色粒子を含む暗褐色を住居内全面に薄く敷いて叩きしめた「叩き床」であり、ほぼ平滑で堅固な構築状況であるが、南から北へ向かつて僅かに傾斜している。

ピットは5個検出された。支柱穴はP₁・P₃・P₄・P₅の4本である。整然とした配置とは言い難く、P₄~P₅間の北辺が短く、P₁~P₃の南辺が長い台形状の配置となっている。P₁は32×32cmの円形を呈し、44cmの深度を有する。P₂は44×45cmの円形を呈し、37cmの深度を有する。P₄・P₅は床面が第10号周滄の影響により若干削平されているため、往時の形状、深度は保っていない。P₄は61×41cmの楕円形を呈し、32cmの深度を有する。南側にはテラスが一段認められる。P₅は28×25cmの円形を呈し、17cmの深度を有する。P₂はP₁の西側に存在する。44×44cmの円形を呈し、深さは14cmを測る。P₁よりも平面プランは大きいものの、深度は低い。断面形はP₁~P₅のすべてがU字形を呈する。

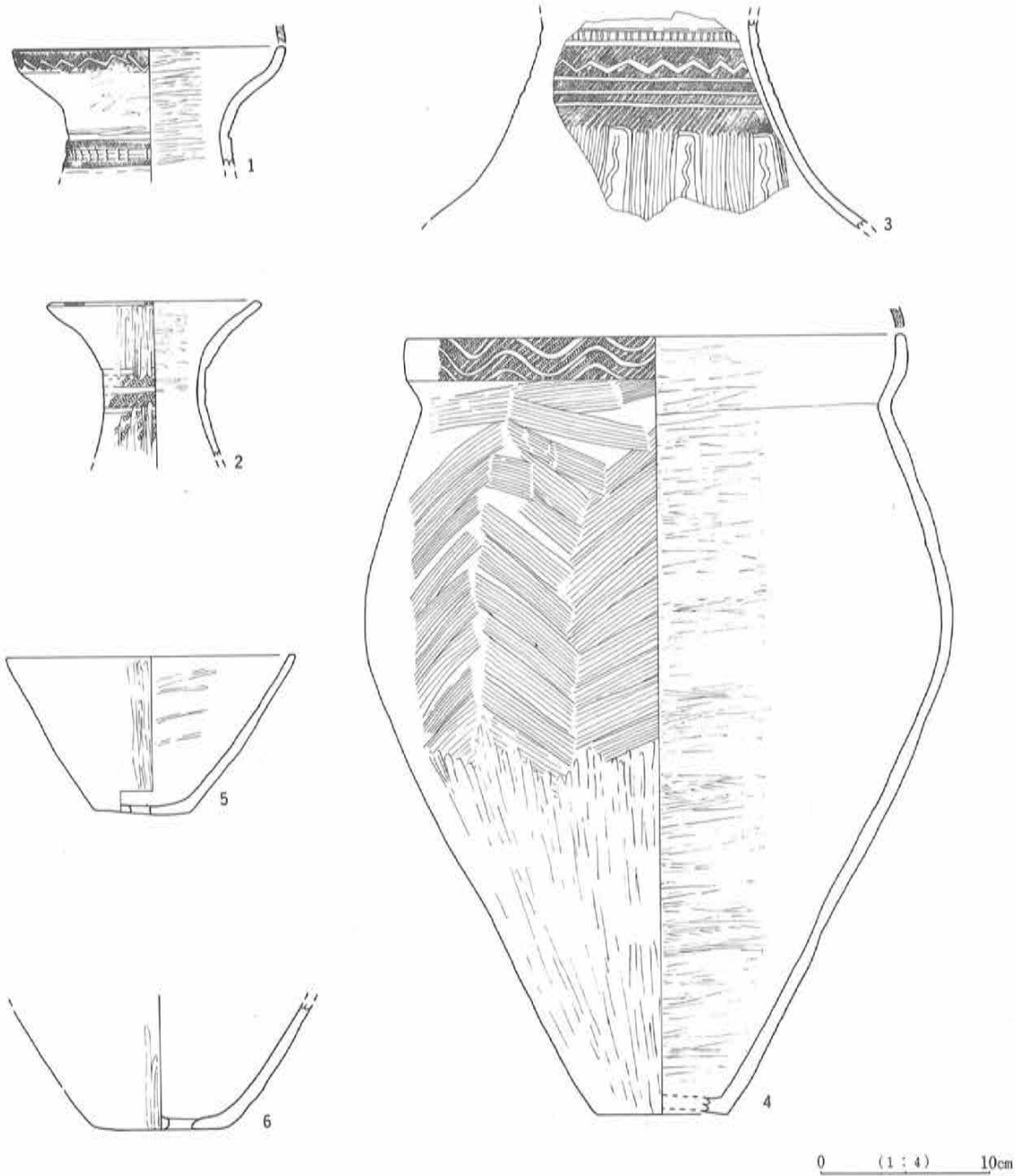
炉址は住居址のほぼ中央に位置する。長軸長117cm・短軸長85cmの楕円形を呈する比較的大規模なプランをもつ。長軸方位はN-12.5°



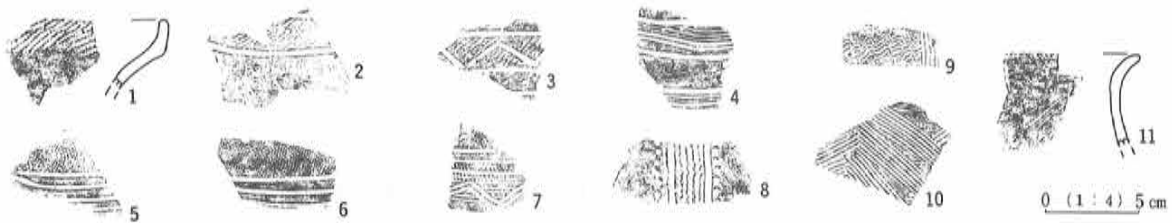
第35図 Y69号住居址実測図



第36図 Y69号住居址炉址実測図



第37図 Y69号住居址出土土器実測図



第38図 Y69号住居址出土土器拓影図

—Eをさし、ほぼ南北に長軸を有している。床面からの掘り込みは最深部でも8cmと浅い。断面形は南側に片寄る鍋底状で丸味を帯び、北側にも一箇所の凹みをもつ。焼土範囲は掘り込みの中央より南東寄りであり、23×35cmの東西に長い楕円形の広がりを見せる。この焼土範囲は地山の砂層が焼け込んで生じたものであり、火床部にあたる。火床部の周縁の南東側には角礫が6個配置されており、炉縁石の役割を果たしたと考えられる。また、

第7表 Y69号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
37-1	壺	16.0 <7.3> -	口縁部は太い頸部から外反し、上半で内寫して受口状となる	内) 赤色塗彩(顔料付着か?)・横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のハケメ調整→文様施文→粗かな横位および斜位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部と頸部はLR縄文を地文とし、口縁部にヘラ描連続山形文、頸部はヘラ描横走平行線文と3本一組の櫛描簾状文(等間隔止め・右回り)が施され、口唇部にもLR縄文が施されている。	回転実測A No 2
37-2	壺	12.0 <9.1> -	口縁部は外反してラッパ状に開き、端部は面取りされている。	内) 口縁部にヨコナデ→横位のヘラミガキ、胴部はナデが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、文様が施された後、口縁部・胴部に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部はLR縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文が3条施文されており、口唇部にもLR縄文が施されている。	回転実測A No 3
37-3	壺	- <13.2> -		内) 頸部にヘラミガキ、胴部にハケメ調整が施されている。 外) 胴部にハケメ調整が施されている。 文) 頸部にLR縄文を地文とし、上からヘラ描横走平行線文が2条、2本一組の櫛描連続山形文、ヘラ描横走平行線文が3条施されている。胴部は全面にヘラ描・櫛描による垂下文が施され、ヘラ描垂下文には2本一組の櫛描波状文が垂下しており、櫛描垂下文は7本一組である。	破片実測A No 6, S区 全面にまばらではあるが赤色顔料が付着している。
37-4	甕	(29.4) 45.9 (7.8)	胴部は中位上方で大きく張り最大径にあたる。口径部は「く」の字状に外反した後、上半で内寫し受口状を呈する。	内) ハケメ調整→ヘラミガキが施されている。 外) 文様が施された後、胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部にLR縄文を地文とし、ヘラ描波状文が3条、胴部は7本一組の櫛描斜走直線文が縦位羽状(右回り)に施されている。	回転実測B No 1
37-5	甕	17.0 9.4 5.6	口辺部は逆「ハ」の字状に開き、底部に焼成前の一孔を有する。	内) ナデ→やや雑な横位のヘラミガキが施されている。 外) ナデ→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No 5
37-6	甕	- <7.2> 8.1	底部に焼成後の一孔を有する。甕から甕への転用か?	内) ナデが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	内面に赤色顔料が付着している。

焼土範囲内の北東にも礫がみられ、炉址の構造と関わりをもつことが想起できる。覆土は二層からなる。第1層はパミスを含むきめの細かい黒褐色土、第2層は砂粒を含む暗褐色土である。

遺物の出土状況

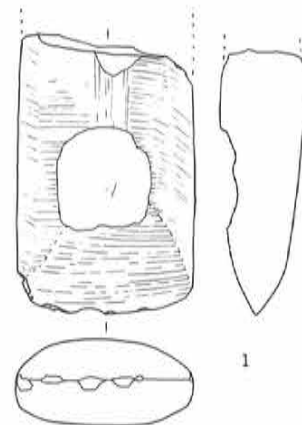
本住居址からは弥生土器・石器が出土しているが、量は少なく、床面上から出土しているものは更に少ない。床面上から出土した土器には37-1・2・3・4・5があり、石器には39-1がある。268-68(磨製石鏃)や、37-6(甕)、北区より検出された打製石鏃(267-40・41)は床面よりも浮いた状態で検出されており、確実に本址と共伴する資料とは言い難い。出土位置は37-1・2・4、39-1が住居址の北西部、37-3がP₃内、37-5がP₃の西側から検出されており、全般的な分布状況は住居址の西側に偏在する傾向が看取される。

遺物(第37・38・39図、図版 十七)

本住居址からは弥生土器・石器が出土している。

弥生土器の器種には壺・甕・甕があり、ほぼ全形態が伺えるのは37-4・5の2点のみである。

壺には受口状の口縁部を有するもの37-1、38-1、単純口縁を有するもの37-2がある。37-3は受口状の口縁部を有する壺の範ちゅうに含まれるものと思われる。受口口縁を有する37-1はやや太めの頸部をもち、受口部は外稜がとれて、やや丸味を帯びる。口縁部・口唇部・頸部にLR縄文を施したのち、口縁部は、篋描連続山形文を施し、頸部は篋描横走平行線文で縄文帯を区画したのち、文様帯の中央部に櫛描簾状文を施文している。これに対し38-1はしっかりした外稜を有する受口口縁を有し、LR縄文帯がめぐらされている。37-3は太頸



0 (1:3) 5cm

第39図 Y69号住居址出土土器実測図

化しており、頸部はLR縄文を施文して5条の篋描横走平行線文で文様帯を画し、上二段に篋描の刻目、篋描連続山形文を充填している。胴部は2帯一組の櫛描垂下文と矩形区画の篋描垂下文が交互に限なく施文されている。矩形区画内には連続山形状の垂下文が充填されている。単純口縁の37-2は細い頸部を有し、口縁部は単純に外反するが上端部ではわずかに内弯する。文様は口唇部・頸部にLR縄文を有し、頸部には三条の篋描横走平行線文が施されている。受口口縁の壺にくらべると文様が簡素である。この他、壺にはLR縄文を地文として篋描横走平行線文が施される38-2の頸部片、LR縄文上に篋描横走平行線文・連続山形文が施される38-3、櫛描横走平行線文を篋描文で区画した文様帯を数帯もつ38-4、擬縄文下に篋描横走平行線文を数条もつ38-5・6(同一個体)、LR縄文上に篋描横走平行線文・櫛描横走平行線文・連続山形文が施される38-7、波状の櫛描垂下文の周囲を篋描文で区画し、更にその周囲に篋描列点文をめぐらした38-8などの胴部片がある。

甕にも受口状の口縁部を有する37-4、単純口縁の38-11がある。受口口縁の37-4は口径29.4cm、器高45.2cmをはかる大型品である。口縁部はしっかりとした外稜をもつ受口状を呈し、胴部は中位上方で張って最大径を有する。文様は受口部にはLR縄文を施した後、3条の篋描波状文、頸部にはやや乱れた櫛描横走平行線文を施したのち、胴部に櫛描斜走直線文が縦位羽状に施されている。単純口縁の38-11は短く外反する口縁部の端部に縄文を施し、胴部に櫛描斜走直線文が施されている。甕にはこの他櫛描波状文を櫛描垂下文が区画した38-9、櫛描斜走直線文を縦位羽状に施した38-10などの胴部片がみられる。

甗には37-5と6の2点がある。37-5は焼成前の一孔を有し、口辺部は「ハ」の字状に開き、ほぼ直線的に立ち上がる。37-6は焼成後に一孔が穿たれたと考えられ、甗からの転用が考えられる。形態は上部を欠損するためわからない。

以上、上述したすべての土器の外表面調整は、刷毛目調整ののちに、ヘラミガキを丁寧に施して刷毛目痕を消去したものがあつた。

石器の器種には磨製石斧がある。

磨製石斧39-1は閃緑岩製の太型蛤刃石斧で基端部を欠損する。重量は481.6gをはかる。基部裏面は磨滅が著しく、刃毀が観察できる。

以上、本住居址出土の土器は中期後半に位置づけられるが、頸部が太頸化し、受口口縁の外稜がとれる37-1や3などの存在には留意すべきであろう。これらの土器群が遺物の出土状況からみても本住居址の所産期をおおむねあらわしているものと考えられる。

(小 山)

9) Y70号住居址

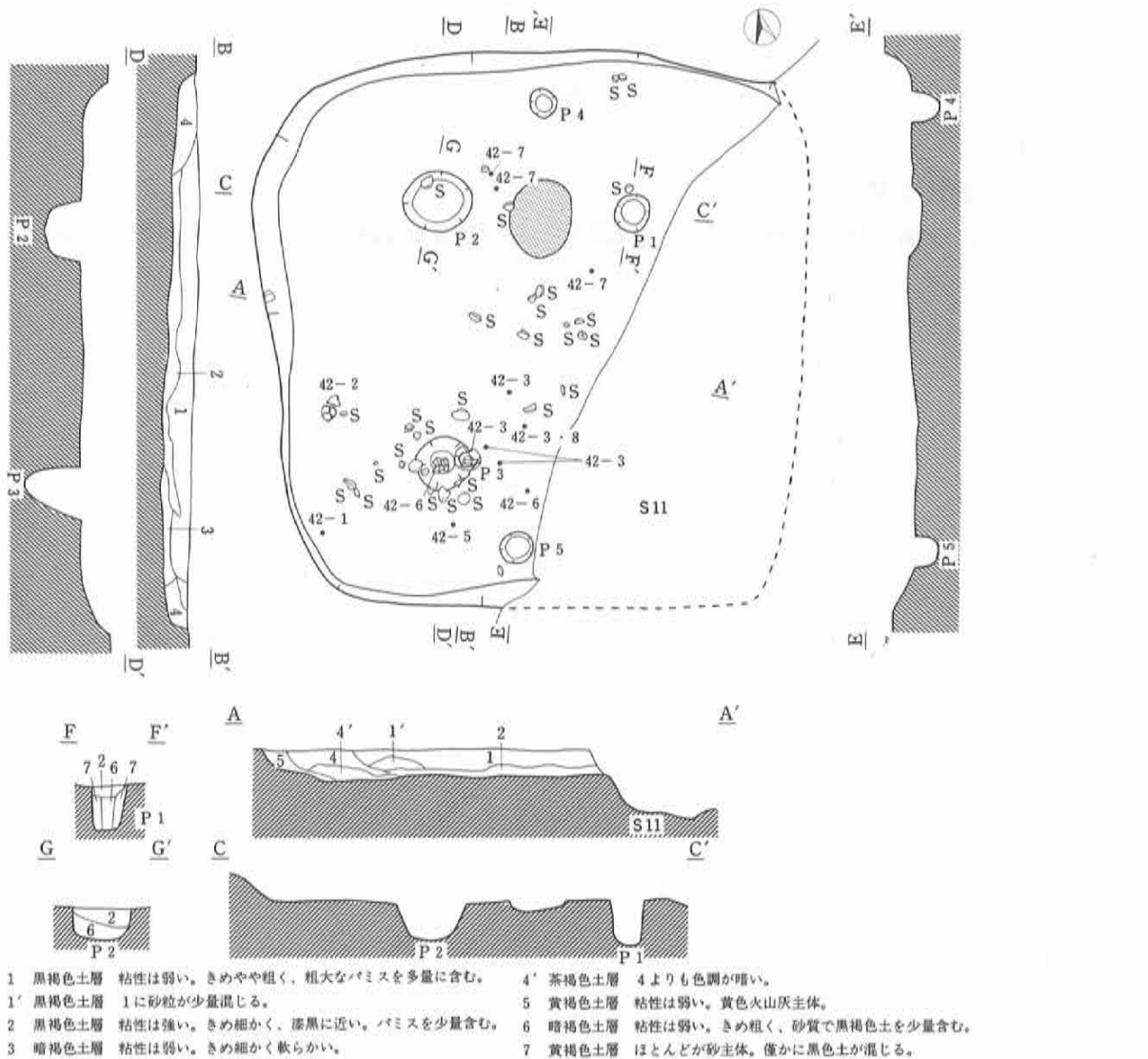
遺構 (第40・41図、図版 十八・十九)

本住居址は台地の南側の中央より東寄り、て・と・な-16・17・18グリッド内に位置している。第7号周溝、Y71号住居址と重複関係を持ち、第7号周溝に破壊され、Y71号住居址を破壊している。このため、住居址の南東の半分は既に失われている。

プランは推定で東西565cm、南北570cm、東壁長540cm、西壁長463cm、南壁長480cm、北壁長540cmを測る隅丸方形を呈している。長軸方位はN-12°-Eをさし、床面積は推定で31.38m²を測る。

覆土は大別で五層、細別で七層に分けられ、プライマリーな堆積状態を示す。第1・2層がレンズ状堆積、第3・4・5層が逆三角形堆積にあたる。第1層は粗大なパミスを多量に含む黒褐色土で、砂粒が少量まじる第1'層が細別される。第2層も黒褐色土であるが、第1層とくらべきめ細かく漆黒に近くなる。床面中央に8cm前後の厚さで堆積する。第3層はきめの細かい暗褐色土で南壁下の床面付近にしかみられない。第4層は茶褐色土でパミスと砂粒を含む。色調がわずかに暗い第4'層と細別される。第4層は北・南壁下においては第1次堆積土、西壁下においては第2次堆積土である。第5層は黄褐色土で、西壁下にのみ認められる。黄褐色火山灰主体であり、壁体の崩落層と考えることができる。

壁高は残存部で14.5~27cmを測り、残存状況は良い。壁体は上位が黄褐色火山灰、下位が砂層とすべて地山を



第40図 Y70号住居址実測図

標高686.3m
 (1:80) 2m

利用して構築されている。砂層部分は軟弱で崩れ易いが、壁面はほぼ平滑で丁寧に造られている。床面からの立ち上がりは緩い。

壁溝は検出されなかった。

床面は黒褐色土を住居址内全面に2～3cmの厚さで埋めもどし、叩きしめて「叩き床」を形成している。全面的にはほぼ平坦な構築状況であるが、南壁下中央に堅固な箇所が認められる以外は、おおむね軟弱な床面である。

ピットは5個検出された。P₁～P₃の3本が支柱穴にあたり、4本目にあたる箇所は破壊されている。P₁は44×40cmのほぼ円形を呈し、50cmの深度を有する。断面図から、径13cm内外の木柱を抜き取った痕が明瞭である。柱痕にあたる第6層は砂質の暗褐色土、柱を支えるため充填された第7層は黄褐色の砂粒が主体である。断面形はU字形を呈している。P₂は65×74cmの楕円形を呈し、43cmの深度を有する。断面形はつぶれたU字形を呈し、柱痕は残らない。P₃は60×63cmの円形を呈し、60cmの深度を有する。断面形はほぼU字形を呈する。P₃の周囲には礫が分布し、P₃の覆土上面には土器が分布している。P₅は入口施設に付属する柱と考えられ、東側の破壊された箇所に2個一対になる柱がもう1個存在すると考えられる。35×37cmの円形を呈し、27cmの深度を有する。P₄は北壁下中央に位置する。棟持柱とされるもので、32×31cmの円形を呈し、30cmの深度を有する。

炉址は北側の支柱穴(P₁・P₂間)より検出された。長軸長86cm、短軸長70cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-18°-Eをさす。床面から掘り込みは鍋底状を呈し、最深部にあたる中央部での深さは10cmを測る。掘り込み内の中央西寄りには「L」字状に組まれた炉縁石があり、過熱のためか円柱状の礫が2本とも真二つに割れている。また、これに近接し、東側には円礫が一個検出されている。火床にあたる焼土範囲は炉縁石南側に径13cm内外の範囲で見られる以外は存在しない。覆土は二層からなり、第1層はきめの細かい黒褐色土、第2層は1層に砂が少量まじる。炉縁石を固定するための材料とも考えられる。

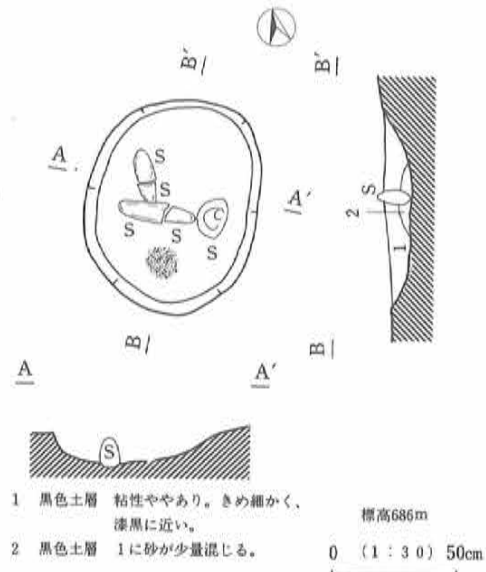
遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器、石器が出土しており、床面上から出土した遺物を本住居址の共伴遺物とした。この結果、石器については267-10(打製石鏃)、271-100(磨製石器)、273-156(敲石)については本住居址の共伴遺物と見做せない。図化された弥生土器はその出土位置を記録してドット化された遺物であり、本住居址の共伴遺物と認定できる。42-7(甑)が炉址の周辺、北西および南東部、42-6(甕)がP₃の上、42-5(甕)がP₃の南部、42-4(鉢)がP₅の北部、42-1(垂下口縁壺)が南西コーナー一部、42-2(壺)が西壁中央より南側の床面上に分布しており、42-3(壺)はP₃の東側周縁に散在する。全体的には、P₃の周縁に集中的に分布する傾向が看取される。

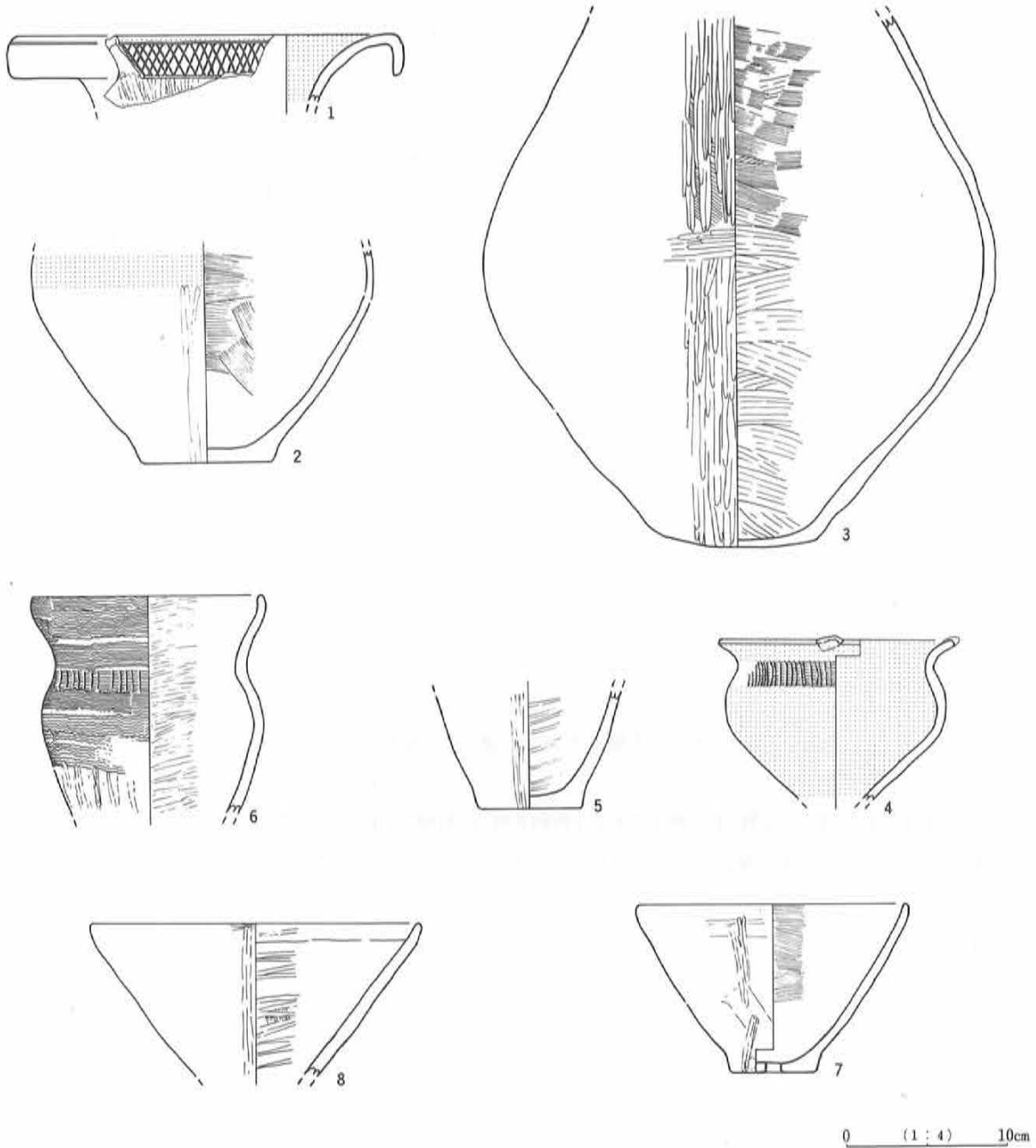
遺物(第42・43図、図版 十九)

本住居址出土の弥生土器の器種には、壺・甕・鉢・甑などがある。

壺は3個体が図化されたが、全形態を知り得るものはなく、42-1は口縁部、42-2・3は胴部以下が残存する。壺42-1は口縁部が端部で折れ曲がり、下方へ「L」字状に垂下する、所謂「垂下口縁」をもつ。外側に面する口縁端部の内側には鋭い篋状工具による斜格子目文・横走平行線文が施文され、その他の内側には、赤色塗彩及びヘラミガキが丁寧に施されている。外面はやや雑なヘラミガキが施されている。胎土及び、赤色塗彩の色



第41図 Y70号住居址炉址実測図



第42図 Y70号住居址出土土器実測図



第43図 Y70号住居址
出土土器拓影図

調は明らかに在地の後期弥生土器の中に見い出せるが、形態は当地方の土器組成中に見ることはできず、外来系土器と見做すことができる。このような形態をもつ土器は東海西部、近畿地方などにみられるようであるが、明確な結論は、ここでは導けない。これに対して、36-2・3は在地系の土器である。2は胴部の下位に張りを持ち、以下は僅かにくびれ気味になるが、明瞭な稜はもたない。張りを境に上部には赤色塗彩・ヘラミガキ、下部にヘラミガキが施されている。また、底部には靫の圧痕が残っている。3は胴部の中位下方で大きく張る。底部は丸味を帯び不安定である。赤色塗彩は施されず、外面調整は刷毛目調整ののち、ヘラミガキが丁寧に施されている。

鉢42-4は口縁部が短く外反し、胴部は上位で強く張る。底部は欠損するため、平底か台付かはわからない。口縁端部には等間隔4箇所三角形状の突起が貼付されている。頸部には楯描簾状文（多連止）が右回りで施さ

第8表 Y70号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
42-1	壺	23.2 <4.5> —	口縁部は外反し、端部で折れ曲り、下方へ「L」字状に垂下する。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) ヨコナデ→細かいヘラミガキが粗く施されている。 文) 端部内面にヘラ描斜格子目文が施された後、上部にヘラ描横走平行線文が施文されている。	破片実測A No12 橙褐色(在地の土か?) 外来系土器
42-2	壺	— <13.0> 7.8	胴部下位で張り、以下は僅かにくびれ気味になる。	内) 横位および斜位のハケメ調整が施されている。 外) 胴部中位以上に赤色塗彩、下位は縦位の細かいヘラミガキが施されている。	回転実測A No15 底部にモミ圧痕がある。
42-3	壺	— <15.0> 10.6	底部は丸味を帯びている。 胴部は中位下方に最大径を持つ。	内) 斜位のハケメ調整が施されている。 外) 縦位の細かいヘラミガキが施されている。	回転実測A No13
42-4	鉢	(14.2) <9.9> —	最大径は口縁部にあり、口縁部は強く外反し、胴部は上位で張り、口縁端部の4箇所に三角形状の突起が貼付されている。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施文された後、赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に9本一組の櫛描簾状文(等間隔止め・右回り)が1帯施されている。	回転実測B No11、III区、IV区 外面は一部が黒色化している。
42-5	甕	— <7.0> (6.4)		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No10
42-6	甕	14.1 <13.6> —	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しい。 口縁部はゆるく外反した後、上部でわずかに内弯し、胴部は上位で張り。	内) 口縁部から胴部に丁寧な斜位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施された後、赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部10本一組の櫛描簾状文(等間隔止め・右回り)が1帯施された後、口縁部から胴部中位は10本一組の振幅の浅い櫛描波状文(右回り)が6帯施文されている。	回転実測A No14
42-7	甕	(16.4) 10.4 5.2	底部に焼成前の一孔を有する。 口辺部は「ハ」字状に内弯気味に開く。	内) 口縁部から体部中位に横位のハケメ調整、下位はナデが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、体部はヘラミガキ→縦位の細かいヘラミガキがまばらに施されている。	回転実測B No1-3、II区
42-8	甕?	21.2 <9.5> —	肉厚が所々異なり、全体的にやや雑な作りである。	内) 口縁部にヨコナデ、体部はハケメ調整→横位の粗いヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No6

れており、他は内外面ともに赤色塗彩・ヘラミガキが丁寧に施されている。

甕は3個体分が図化されているが、形態を推測できるのは、42-6のみである。6は口縁部が緩く、長く外反したのち、上端部でわずかに内弯する。胴部は上位で割合強く張り、以下は直線的に底部へ至ると思われる。文様は同単位の工具を用いて口縁部～胴部中位にまで施される。まず、頸部に櫛描簾状文(等間隔止め)を右回りで施したのち、口縁部では振幅の細かい櫛描波状文を下から上へ3帯、胴部では同様の波状文を上から下へ3帯、右回りで施している。43-1は頸部に櫛描簾状文(等間隔止め)が2帯、胴部に櫛描波状文が2帯以上右回りで施されている。42-5は底部の破片である。

甕は2個体あるが42-8は底部を欠損しているため、鉢になることも考えられる。42-7は底部に焼成前の丸い一孔を有する。口辺部は「ハ」字状に大きく内弯気味に開く。外面調整はややまばらであるが縦位のヘラミガキ、内面調整は上半部は刷毛目調整、下半部はナデが施されている。42-8とはほぼ同様な形態を有すると考えられる。

この他、図化はしなかったが、口縁部に2孔一対の穿孔を有する椀状の形態を有すると考えられる赤色塗彩の施された鉢の破片などもみられる。

以上、説明を加えた本住居址の出土遺物は、胴部の下位以上に赤色塗彩が施される壺37-2、赤色塗彩されないものの、太頸化した頸部をもつと考えられる壺37-3、頸部に櫛描波状文、口縁部・胴部に櫛描波状文が施される甕37-6、38-1など当地方の後期前半の弥生土器を象徴する器形をもつ土器がみられる。これらの遺物を本住居址の所産期とするにはやや難があるものの、住居址の床面が完全に埋没する以前に投棄あるいはもち込まれた遺物であることは確実である。従って、本住居址の所産期はおおむね後期前半と考えておきたい。

(小 山)

10) Y71号住居址

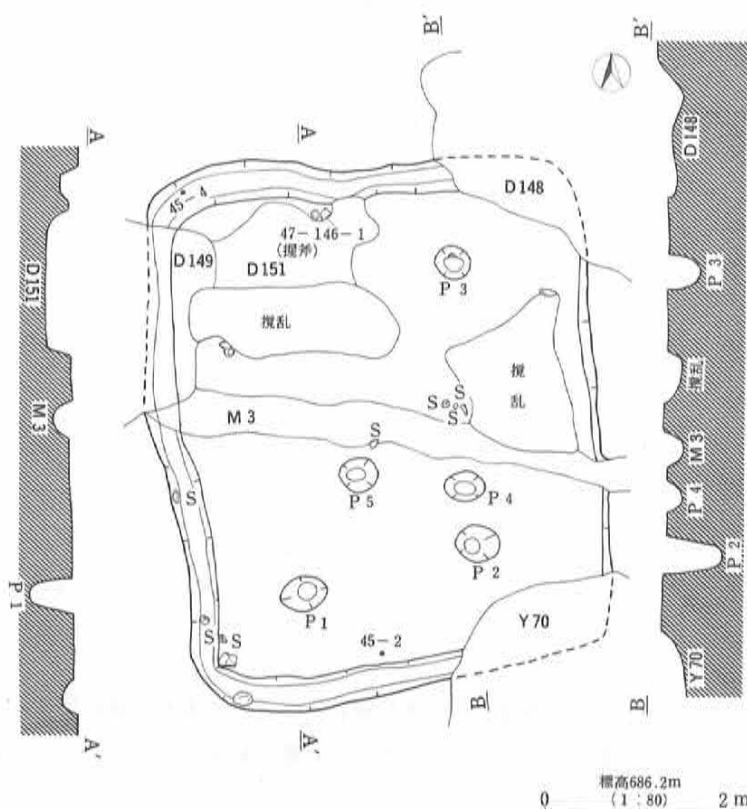
遺構 (第44図、図版 二十)

本住居址は台地の南側の中央東寄りのつ・て・とー17・18グリッド内に位置している。Y70号住居址、第148・149・151号土坑、第3号溝状遺構に住居址の中央部を分断され、また、北西・北東・南東コーナー部も破壊されている。

プランは、東西の短軸長453cm、南北の長軸長535cm、東壁長487cm、西壁長535cm、南壁長405cm(推定)、北壁長392cm(推定)の隅丸長方形を呈している。長軸方位はN-4°-Wをさし、ほぼ南北方向に長軸をもつ。床面積は20.12㎡(推定)を計測し、平均的な規模を有する。

覆土は、耕作によって削平されていたことと、住居址の掘り込みが往時から浅かったことにより、ほとんどが残存していなかった。

確認面からの壁高は、0~18cmを測り、床面からの立ち上がりは、緩い傾斜をもつ。壁体は、おおむね地山の黄褐色火山灰を利用して構築されたと考えられるが残存部が少なく、構築状態について詳細な説明を加えることはできない。



第44図 Y71号住居址実測図

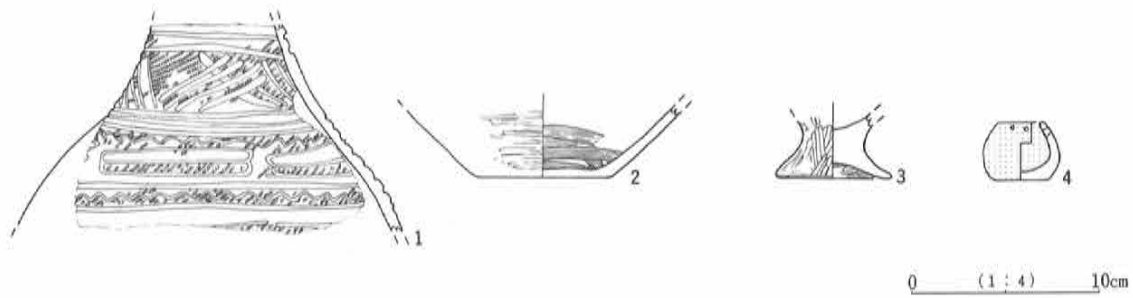
壁溝は北・西・南壁の三壁下をめぐる。幅22~32cm、深さは10cm内外を計測し、断面形は緩いU字形を呈する。床面は黄褐色の砂層(地山)上に茶褐色土と火山灰を混ぜた土を構材として、住居址全面に薄く敷き、たたきしめて「叩き床」を形成している。構築状態は平坦とは言い難く、かなり凹凸があり、北側部分のレベルが低く傾斜している。

ピットは5個検出された。主柱穴はP₁~P₃の3本が検出され、北西部分の主柱穴は、151号土坑によって破壊されている。P₁~P₃は整然とした配置とはいえず、住居址の長軸方位と比較しても若干北西にズレているように思われる。P₁は35×51cmの楕円形を呈し、44cmの深度を有する。P₂は39×45cmの楕円形を呈し、62cmの深度を有する。P₃は35×37cmの円形を呈し、38cmの深度を有する。断面形はいずれもU字形を呈する。P₄・P₅はP₁・P₂の北側、住居址の中央部寄りに位置する。性格については不明である。P₄は31×43cmの楕円形を呈し、18cmの深度を有する。P₅は35×40.5cmの楕円形を呈し、12cmの深度を有する。主柱穴P₁~P₃に比べると深度が浅く、柱穴としての機能を果たしたものとは考えられない。

炉址は検出されなかった。一般的に炉址が存在する住居址の中央部が、東西に横走る第3号溝状遺構によって破壊されているためである。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器、石器が出土しているが量は多くない。また、本住居址との共伴性を積極的に肯定で



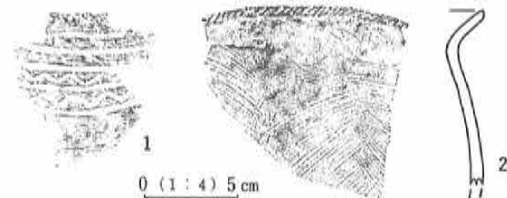
第45図 Y71号住居址出土土器実測図

第9表 Y71号住居址出土土器観察表

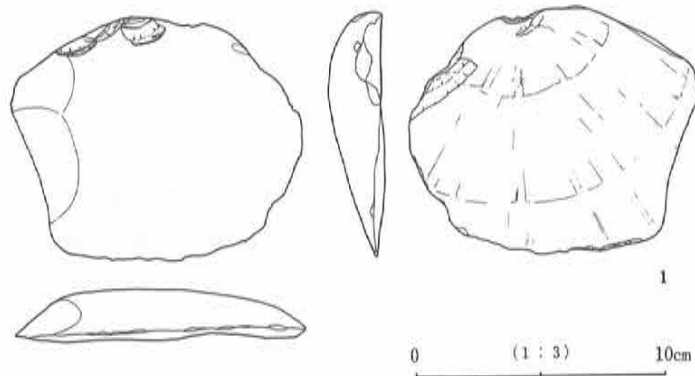
挿 番 号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
45-1	壺	(10.8)	最大径は胴部にあると考えられる。	内) 頸部は縦位のハケメ調整、胴部は横位のハケメ調整が施されている。 外) 横位および斜位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部から胴部はしR縄文を地文とし、頸部は3条のヘラ描横走平行線文で区画された中に4-5本のヘラ描連続三角文が施され、胴部はヘラ描波状文、平行線文の区画の中に「工字文」風のヘラ描の矩形区画を充填している。	破片実測B No.4、KNま39耕作土
45-2	甕?	(3.8) (7.0)		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No.6
45-3	台付 甕	(3.5) 6.6		内) ヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A III区
45-4	小型無 頸壺	(2.4) 2.8 2.8	小型手捏土器で口唇部に面取りがされている。口縁部付近に焼成前の外面よりの穿孔が2孔観察できる。	内) 赤色塗彩(顔料付着か?)・横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.1

きるものも多くない。打製石鏃267-10・29、268-47は明確に本住居址に帰属するとは言い難い。北西コーナーの壁溝内から出土した45-4(ミニチュア鉢)、北壁下の中央部より出土した47-1(握斧)、46-2(甕)、西壁下の中央北寄りから出土した46-1(壺)、南西コーナーに存在する無文の壺の胴部片、南壁下中央の45-2(壺底部)などを共伴遺物と見做しておきたい。全体的にみた遺物の分布状況は、住居址の西半分にあたる壁下の周縁部に偏在する傾向が看取される。

(小山)



第46図 Y71号住居址出土土器拓影図



第47図 Y71号住居址出土土器実測図

遺物 (第45・46・47図、図版 二十)

本住居址からは、弥生土器・石器が出土している。器種には、壺・甕・台付甕・ミニチュア鉢がある。

壺は、45-1・2、46-1が出土している。45-1は単節LR縄文を地文とし、頸部には3条の篋描横走平行線文で区画された中に、4~5条の篋描直線三角文が施され、胴部には篋描波状文・平行線文の区画中に工字文風の篋描矩形区画が施されている。46-1は頸部資料であるが、45-1の胴部に施された篋描波状文・平行線文の区画が用いられている。壺は図示し得なかったが、外面に丁寧なヘラミガキ、内面に刷毛目調整が施された無文の胴部破片が出土している。45-2の底部資料は外面に横位ヘラミガキ、内面に横位の刷毛目調整が施されている。形態は残存部が少ないため不明確であるが、45-1は胴部に最大径を有すると考えられ、46-1は口縁部に向け外反し、45-1のような胴部へ続くと思われる。

甕46-2は、口縁部が外反し、口唇部には単節LR縄文が施され、あまり張り出さない胴部に櫛描斜走直線文が縦位羽状に施文されている。

台付甕46-3は、台部資料であるが、内・外面ともにヘラナデが施されている。

ミニチュア鉢46-4は、手捏ね成形によるものであり、器高は3.4cmを測る。形態は、体部中位で最大径となり、口縁部は内弯している。底部は比較的大きく、平底で安定性が有る。口縁部付近には、焼成前に外面より施された穿孔が2孔在り、口唇部は面取りされている。外面は口唇部から底面に及ぶ全面に赤色塗彩が施されており、内面には赤色顔料の付着が顕著である。

47-1の握斧は、玄武岩製で正面左上方向からの加撃による第1次剝離を施しただけのもので、正面に自然面離面に主要剝離面をそのまま残し、刃部は磨滅が著しい。

以上、本住居址の所産期は、共伴性を指示する遺物の特徴より、弥生時代中期後半に求められよう。

(篠原)

11) Y72号住居址

遺構 (第48図、図版 二十一)

本住居址は台地の南側のほぼ中央部せ・そ-20・21グリッド内に位置している。Y66・73号住居址と重複関係を持ち、これらに住居址の南西約半分以上を破壊されている。

このため、平面プラン、規模、長軸方位、床面積等は全く不明であり、東壁長か510cmの規模を有することが知れるのみである。

覆土は三層からなる。第1層はパミスとカーボンと砂粒を含む黒褐色土で住居址内覆土の主体を占める。第2層はパミスと砂粒を含む黒褐色土で、住居内の床面の残存部に4cm前後の厚さで広い広がりをもつ。第3層は黄褐色火山灰主体で、北側の壁溝内に認められる。壁体の崩落層と考えられる。自然堆積か、人為堆積であるかは判然としない。

確認面からの壁高は、2.5~15cmを測る。壁体は黄褐色火山灰層(地山)をそのまま利用して構築され、堅固である。壁面は平滑とは言えず、凹凸があり、床面からの傾斜度は緩い。

壁溝は住居残存部の壁下のすべてに認められる。幅21~35cm、床面からの深さは7~14cmを測り、大規模である。断面形はU字形を呈する。

床面は地山の黄褐色火山灰層上に黒褐色土を2~5mmの厚さで埋め戻し、叩きしめて「叩き床」を形成している。構築状況は割合堅固であり、全体的にフラットであるが、Y66号住居址の重複箇所中央部がやや凹んでいる。

ピットは3個検出された。P₁・P₂が支柱穴にあたると思われる。P₁は59×52cmの楕円形を呈し、62cmの深度を有する。断面形はほぼU字形を呈する。P₂は33×31cmの円形を呈し、P₁に比べると平面プランは小さい。深度は52cmを測り、断面形はU字形を呈する。P₃は南東コーナー付近の壁溝内から検出された。21×23cmの小規模

な円形プランを有し、壁溝底面からの深さは20cmを測る。断面形は半楕円状を呈し、南側へのふくらみが強い。

炉址は、住居の半分以上が破壊されているため検出されなかったが、住居址の中央部に設けられていたと考えられる。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているが、量は少ない。このうち、図化した遺物は床面上に押しつぶされるような出土状態を示したものであり、本住居址の共伴遺物と考えて大過ない。49-1(壺)はP₁の上の北側に分布し、土圧により押しつぶされている。49-3(壺底部)も同様な出土状態を示し、P₁の南側に分布する。49-2(壺口~胴部上位)は49-3よりも南西側、Y66号住居址との重複箇所付近に分布している。49-4(甕口~底部)は49-2の南側、住居址の中軸線上に分布し、土器の残存状況からみて、口~胴部の半分以上はY66号住居址構築時において失われたものと判断

できる。また、49-4の上には径40cm内外の大型の礫が置かれており、その出土状態には注意する必要がある。

全体的には本住居址の遺物出土状況は極めて散漫なものと言え、住居址残存部では北側半分に偏在する傾向が看取される。

(小山)

遺物(第49図、図版 二十一)

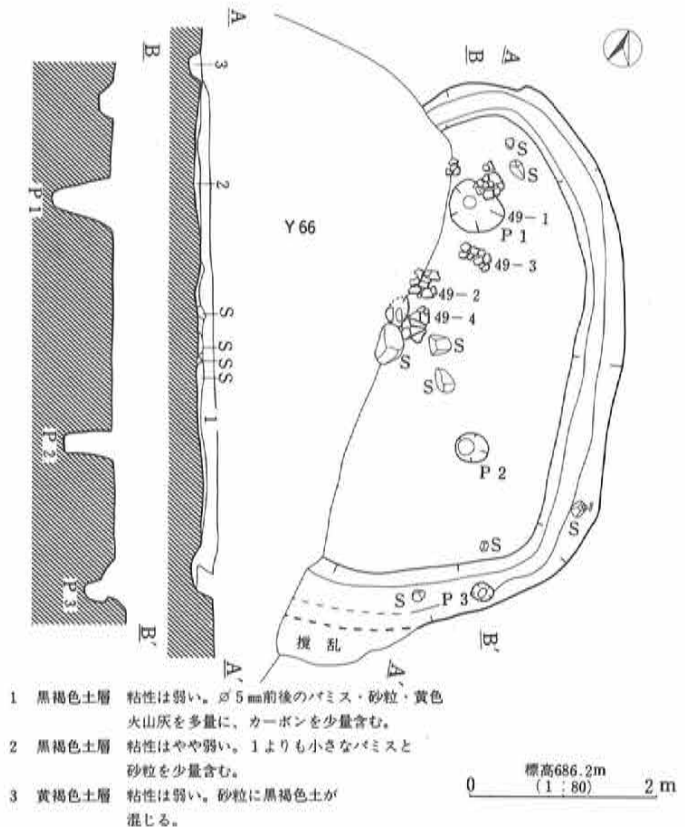
本住居址からは、弥生土器が出土している。図化したのは4点のみである。器種には壺と甕がある。図化できなかった土器に赤色塗彩された高坏の脚部と坏部がある。

49-1の壺は、頸部から底部までであり、最大径を胴下位に有し、胴最大部から頸部まで内側に弓なりになる特徴を有し、本遺跡で同様な器形をもつ壺は他に見当たらない。文様構成は、弥生時代中期後半の細頸壺に一般的に見られる、頸部にだけ縄文を地文とした篋描横走直線文が施されている。

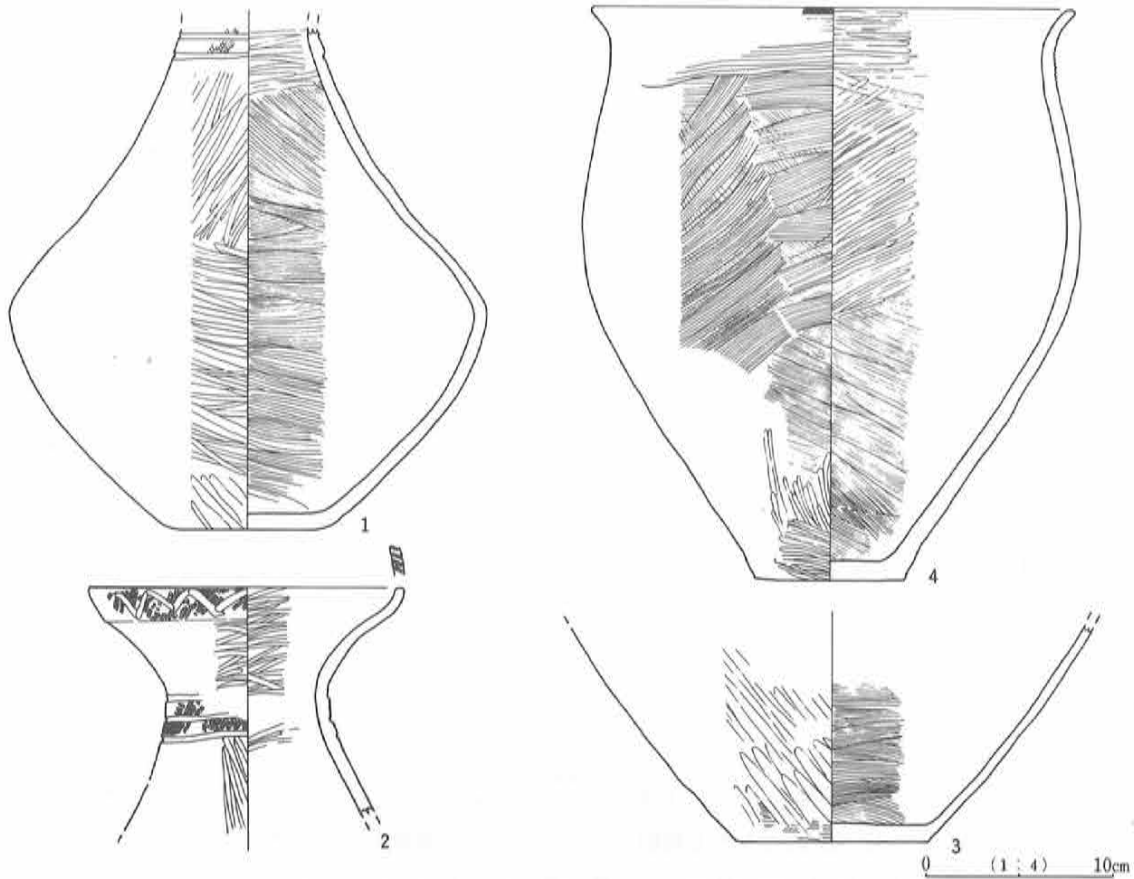
49-2の壺は、口縁部から胴上部までであり、受口状の口縁部である。口唇部・口縁部・頸部にLR縄文が施されており、口縁部と頸部にはさらに篋描連続山形文・篋描横走平行線文がなされている。受口状の口縁部は、外面に明瞭な稜を有するが内面はあまりはっきりしない。口縁部の外面に施されるLR縄文を地文として、篋描連続山形文を施す手法は、該期の受口状口縁をもつ壺の特徴とみられ、第68・69・75・122・126・128号住居址出土の壺にも見られる。

49-3の壺の底部は、底部からやや内弯気味に外傾して立ち上がり、内面の調整は刷毛目調整が見られ、外面には胴中位に縦位のヘラナデが、下位は横位の刷毛目調整の後、縦位のヘラナデが施されている。

49-4の甕は口縁部から底部までの $\frac{1}{4}$ 程度も残存しており、全器形がほぼ復元できた。最大径は胴部中位上方にあり、口縁部は短く外反する。口唇部にLR縄文が施され、頸部に7~8本一組の篋描横走平行線文がなされており、胴部上位から中位は篋描斜走直線文が縦位羽状に施されている。篋描斜走直線文が縦位羽状に施される甕は弥生時代後期にその例を見ることはなく、中期後半の特徴として挙げることもできるかもしれない。



第48図 Y72号住居址実測図



第49図 Y72号住居址出土土器実測図

第10表 Y72号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
49-1	壺	— (26.5) 8.8	胴部は下位で強く張り最大径にあたり、頸部は筒型を呈する。	内) 頸部に横位のヘラミガキ、胴部上位は斜位のハケメ調整、中位から底部は横位のハケメが施されている。 外) ハケメ調整の後、胴部上位に縦位のヘラミガキ、中位から底部は横位のヘラミガキ。 文) 頸部には縄文が施文されているものと思われるが磨滅のため縄文の種類は、はっきりしない。ヘラ描横走平行線文が施されている。	回転実測A No 4
49-2	壺	16.8 (13.0) —	口縁部は外反したのち上半部で受口状に立ち上がる。 口唇部は面取りされている。	内) 口縁部から頸部に横位のヘラミガキ、それ以下はナデが施されている。 外) 口縁部から胴部にハケメ調整が施された後、口縁部から頸部に横位のヘラミガキ、胴部上位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部と頸部はLR縄文を地文とし、口縁部にヘラ描連続山形文、頸部にヘラ描横走平行線文が3条施されている。口唇部にもLR縄文が施文されている。	回転実測A No 2
49-3	壺	— (11.3) 10.2		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 胴部中位に縦位のヘラミガキ、下位は横位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No 3
49-4	甕	25.6 30.4 8.0	最大径は胴部中位上方にあり、口縁部は短く外反する。 口縁部は面取りされている。	内) 斜位ハケメ調整→斜位ヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部は斜位のハケメ調整が施されており、その後胴部下位に斜位ヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文が施文され、頸部に7~8本一組の櫛描横走平行線文、胴部上位から中位は櫛描斜走直線文が縦位羽状(右回り)に施されている。	回転実測A No 1

その他、赤色塗彩の施された高環の坏部と思われる破片で、口縁部に貼付による耳状の突起を有しており、同様な例として竹田峯遺跡第2号住居址出土の高環がある。

以上、本住居址の所産期は、壺と甕の特徴などから弥生時代中期後半と考える。

(高 村)

12) Y73号住居址

遺構 (第50図、図版 二十二・二十三)

本住居址は、台地南側の中央わずかに西寄りのす・せ・そー21・22グリッド内に位置している。Y66・72・74号住居址と重複関係をもち、Y66号住居址に住居址の南側の約半分を破壊され、Y72・74号住居址の一部を破壊している。

プランは推定箇所が多いが、東西の長軸長585cm (推定)、南北の短軸長474cm (推定)、東壁長383cm (推定)、西壁長400cm、南壁長450cm (推定)、北壁長518cm (推定)の隅丸長方形を呈している。長軸方位はN-68°-Wをさし、ほぼ東西方向に長軸方向をもつことがわかる。床面積は推定で25.95㎡を測り、ほぼ平均的な規模を有する。

覆土は黒褐色土一層のみからなり、薄い。パミスと小礫を多量に含む土でザラザラとし、極めて固くしまっているが、この固いしまりは後世の土木工事で強い土圧をかけられたことによるとも考えられる。

確認面からの壁高は残存部で4~11.5cmを測り、浅い。壁体は地山の黄褐色火山灰層をそのまま利用して構築され、平滑な造りである。また、極めて堅固な状態であるが、これも覆土と同様に後世に強い土圧をうけたことが一つの要因となっているように思われる。

壁溝は検出されなかった。

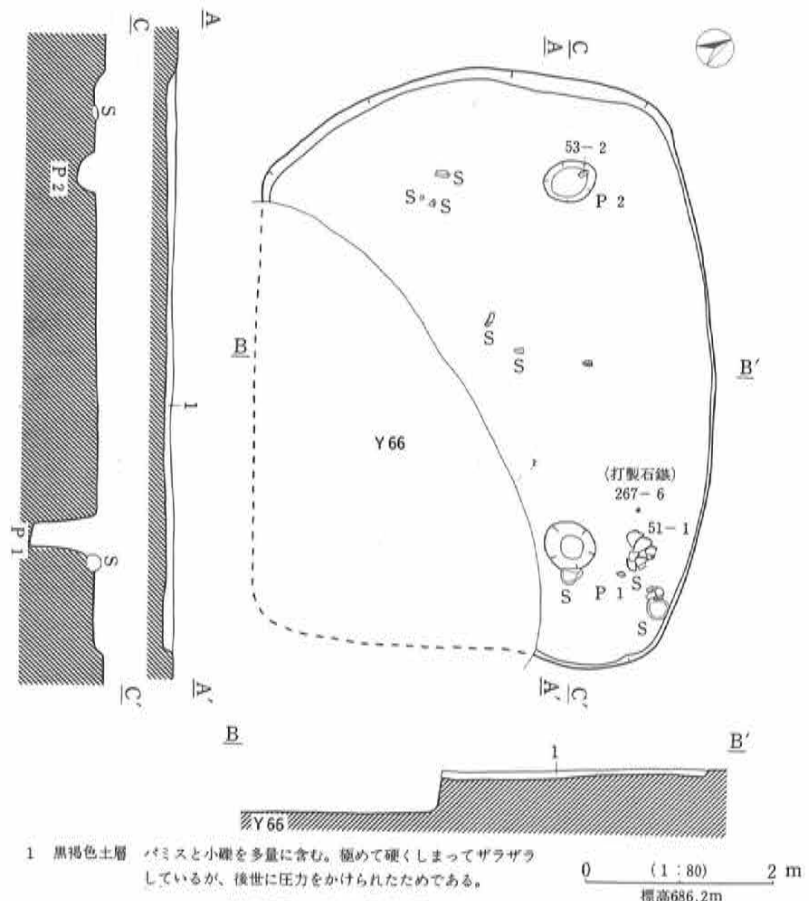
床面は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築され、ほぼ平坦であるが南東から北東に向かって徐々にレベルを低下させている。住居址の西壁下および東壁下の一部はやや軟弱な構築状況であり、他は極めて堅固である。これも覆土・壁と同様、後世の影響も関わっていると考えられる。

ピットは2個検出された。位置関係からみればP₁・P₂いずれも主柱穴と判断されるべきものであるが、P₂は深度が不十分で柱穴として確実に位置づけることはできない。P₁は53×51cmの円形を呈し、70cmの深度を有する。断面はU字形を呈し、プラン上面の東側の縁辺に埋め込まれた礫がみられる。P₂は56×44cmの楕円形を呈し、18cmの深度を有する。断面形は半円状を呈している。

炉址は検出されなかった。

遺物の出土状況

本住居址の遺物の出土状況は、特に集中する箇所がみられず、住居址全体に散布する状況が看取される。遺物の総出土量は住居址の掘り込みが薄いにもかかわらず多い。51-1 (壺)が北壁下とP₁の北側の中間、53-1 (打製石斧)・53-2 (石台)がP₁上、北東コーナーからそれぞれ出土している。この他、267-6、268-66、273-147などの打製・磨製



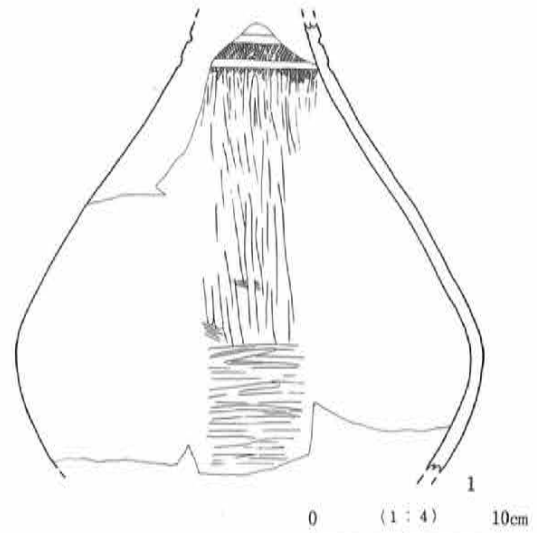
第50図 Y73号住居址実測図

石鏃、砥石も本住居内出土である。 (小 山)

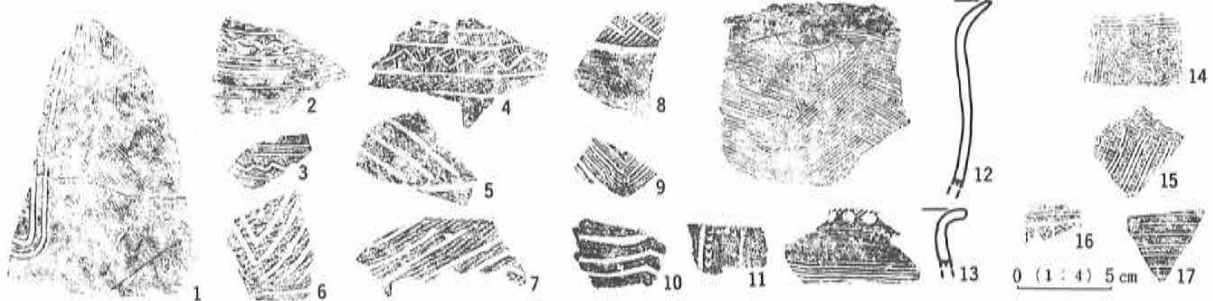
遺物 (第51・52・53図)

本住居址からは、弥生土器・石器が出土している。そのうち弥生土器1点、石器2点を実測した。弥生土器の拓影図は17点を載せた。弥生土器の器種には、壺と甕がある。

51-1の壺は頸部から胴下半までの部位で、頸部にL R縄文を地文とし、篋描横走平行線文を施した細頸壺である。最大径を胴部下半に有し、大きくふくらむ器形をなしている。52-1~11・17はいずれも壺の頸部から胴部の破片である。52-1の頸部から胴上部の破片には篋描垂下文がみられる。52-2・3・17は同一個体と思



第51図 Y73号住居址出土土器実測図

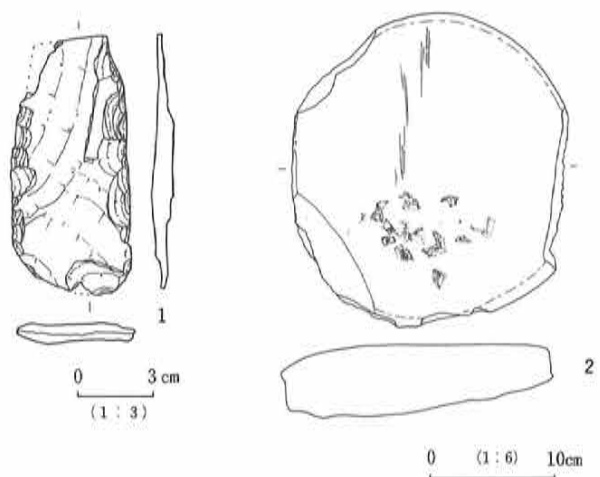


第52図 Y73号住居址出土土器拓影図

第11表 Y73号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
52-1	壺	<23.8>	胴部は大きくふくらみ、下位に最大径を有する。	内) ナデが施されている。 外) ハケメ調整→文様地文→縦位および横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にL R縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文が2条施されている。	破片実測A No.4 頸部に赤色顔料付着か?

われ、胴上部の破片で、篋描横走平行線文が幾条も廻らされた中に、縄文を地文とした篋描連続山形文がなされている。52-4は頸部の破片であるが、前述と同様なモチーフによる文様構成と思われる。52-10胴下部の破片で篋描連弧文が施されている。52-11は頸部付近の破片で篋描垂下文で区画された中に半裁竹管状の工具により刺突文がなされている。52-12~16は甕の破片で、52-12は頸部から胴部に篋描斜走直線文が縦位羽状に施文されている。53-1の打製石器は、安山岩で作られており刃部に僅かに使用による磨滅がみられ、打製石包丁の可能性がある。53-2の安山岩台石には煤が付着している。



第53図 Y73号住居址出土石器実測図

拓影図で載せた弥生土器は、確実に本住居址に共伴するものとは見做せないが、53-1の壺から所産期は弥生時代中期後半と思われる。 (高 村)

13) Y74号住居址

遺構 (第54・55図、図版 二十二・二十三)

本住居址は台地南部の西寄り、し～せー22・23、し・すー24グリッド内に位置している。Y73号住居址と重複関係を持ち、南東コーナー周辺の上面を破壊されている。

プランは、東西の短軸長635cm、南北の長軸長755cm、東壁長692cm、西壁長686cm、南壁長505cm、北壁長596cmを測り、隅丸長方形を呈している。床面積は41.38㎡を計測し、長軸方向はN-15°-Wをさす。

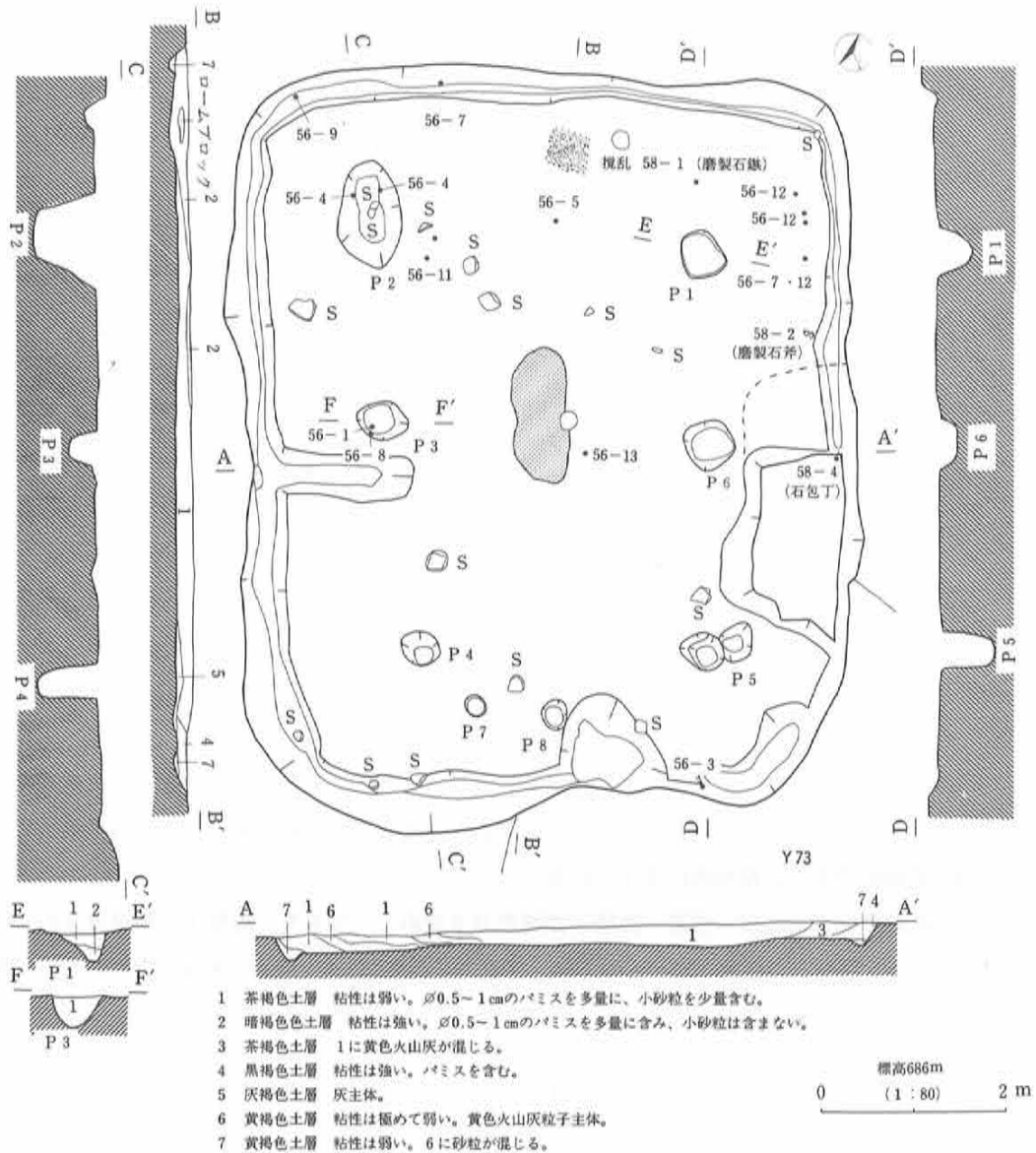
覆土は七層からなる。第1・2層は茶褐色土を基調として、1層はバミスと砂粒、2層はバミスを含む。第1層は住居址中央でレンズ状堆積が認められる反面、西壁側では第6層と交互に逆三角形堆積を形成している。第2層は住居址の北壁下周辺に認められ、本住居址の最終堆積土である。第3層は第1層の茶褐色土に黄褐色の火山灰がまじる。東壁下にのみ認められる堆積土であり、壁際に逆三角形の堆積を示す第4層(黒褐色土)を被覆して堆積している。第4層は東壁、南壁下に逆三角形に堆積する第1次的な覆土である。黒褐色土を基調としてバミスを含む。第5層は灰主体で、南壁下の中央に薄く堆積する。第6層は黄褐色火山灰主体で、先述した如く第1層と断続的な堆積を2度繰り返している。第7層は砂粒がまじる黄褐色火山灰主体で、壁溝内に堆積が認められる。以上のような堆積状況を概観する限り、本住居址の覆土は純粹にプライマリーな堆積状況とは言い難く、人為的な営力が加わっているものと判断される。特に第1層・第6層の断続的な堆積、第2層の存在は、これを強く示唆するものである。

確認面からの壁高は9～24cmを測るが、ベッド状遺構と考えられる構築土が存在する東壁中央南寄りでは、2～8cmの壁高を計測するのみである。壁体は、地山の黄褐色火山灰層を利用しておおむね堅固で平滑に構築されるが、南壁側面に直線的でなく、曲面状に歪んでいる。

壁溝は東壁下の北側半分から北壁・西壁・南壁の西側半分までめぐっており、南壁下中央東寄りの土坑状の落ち込みと交わっている。西壁下の壁溝の中央部からは、直交する長さ134cmの溝が、床面中央に向かって掘り込まれている。また、南東コーナーにも壁溝がみられる。溝幅は8～48cmを測り、一定した掘り込み幅ではない。深さも2～10cmを測り、一定しない。断面形はU字形を呈している。

床面は地山の黄褐色火山灰層をそのまま利用し、叩きしめて構築されている。おおむねフラットな面を形成しているが、東半部には凹凸がわずかにみられる。炉を中心とした住居址の中央部は、極めて堅固であり、その周辺部はやや軟弱である。また、住居東壁下の中央から南側には7cm内外の厚さで、黄褐色火山灰と茶褐色土の混合土の堆積がみられる。南北200cm、東西120cmの長方形のフラットな広がりを持ち、上面は固くしまっている。確定的根拠はもたないが、所謂「ベッド状遺構」とも考えられる。

ピットは8個検出された。主柱穴は東側と西側にそれぞれ3本ずつ割合整然と配置されている。P₁は52×45cmの楕円形を呈し、38cmの深度を有する。覆土は二層からなり、上層は住居址覆土の第2層、下層は砂粒主体で、黄褐色火山灰がまじる。断面は緩いU字形を呈する。P₂は117×67cmの楕円形を呈し、63cmの深度を有する。断面形は底面が平坦な逆台形を呈する。P₃は41×56cmの楕円形を呈し、34cmの深度を有する。覆土は灰まじりの茶褐色土一層のみである。断面形は緩いU字形を呈する。P₄は38×40cmの円形を呈し、61cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₅は41×49cmの楕円形を呈し、59cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₆は54×58cmの円形を呈し、18cmの深度を有する。断面形は逆台形を呈する。以上、本住居址の主柱穴は東列・西列のそれぞれ中間にあたるP₃とP₆が他に比べ浅い傾向がみられ、P₁・P₂・P₄・P₅の4本の柱穴の補助的な役割を果たしていたことが想定できる。P₇・P₈の性格は判然としない。南壁下の西寄りに並んで掘り込まれており、P₇は24×25cmの円形を呈し、30cmの深度を有する。P₈は33×30cmの円形を呈し、30cmの深度を有する。P₇・P₈とも平面プラン・深度に共通性がみられ、一般的な例とは位置関係に相異があるものの、入口施設に関わる柱穴であ



第54図 Y74号住居址実測図

ることが想定される。

南壁下中央の土坑は、104×114cmの不整円形を呈し、9cm内外の浅い掘り込みをもつ。性格については不明である。

炉址は住居址の長軸、短軸の交点（住居址の中央）よりもやや北側から検出された。平面形態は長軸長146cm、短軸長59cmの細長い楕円形を呈し、南側に細長い半楕円のテラスを有している。長軸方位はN-4.5°-Wをさしている。床面からの掘り込みは最深部で5cmを測る程度で浅く、断面形は緩い丸味を帯びている。火床部は炉址の北側の最深部にあたる凹みにあり、地山が焼けこんだ33×18cmの不整形の広がりをもつ。覆土はきめ細かく漆黒に近い黒色土が一層のみ薄く堆積している。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が出土しているが完存品はなく、ほとんどが欠損品で、住居廃絶後に廃棄された遺物と理解できる。分布の傾向は住居東壁下の北半部に最も多くの遺物56-7・12（甕、鉢）58-2・4（磨製石斧・磨製石包丁）、57-21（甕）が集中し、その他、北壁下の西半部壁溝内56-9（甕）、57-1・2・5（壺）、P₂上及びその周辺部に56-4・11（壺・脚付鉢）、57-2（壺）、P₃上に56-1・8（壺・台付甕）、炉址の

東側に56-13(鉢)、P₁の北側に58-1(磨製石鏃)、P₁・P₂間に56-5(鉢)が分布し、全体的な遺物分布は住居址の北半部に集中する傾向が看取される。(小山)

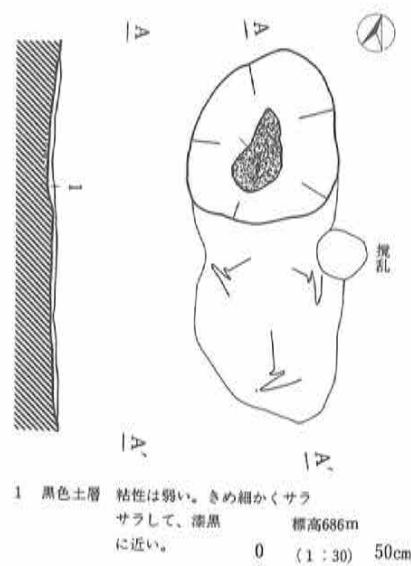
遺物(第56・57・58図、図版二十三)

本住居址からは弥生土器・石器が出土している。器種は壺・甕・台付甕・鉢・脚付鉢・手捏の高坏がある。

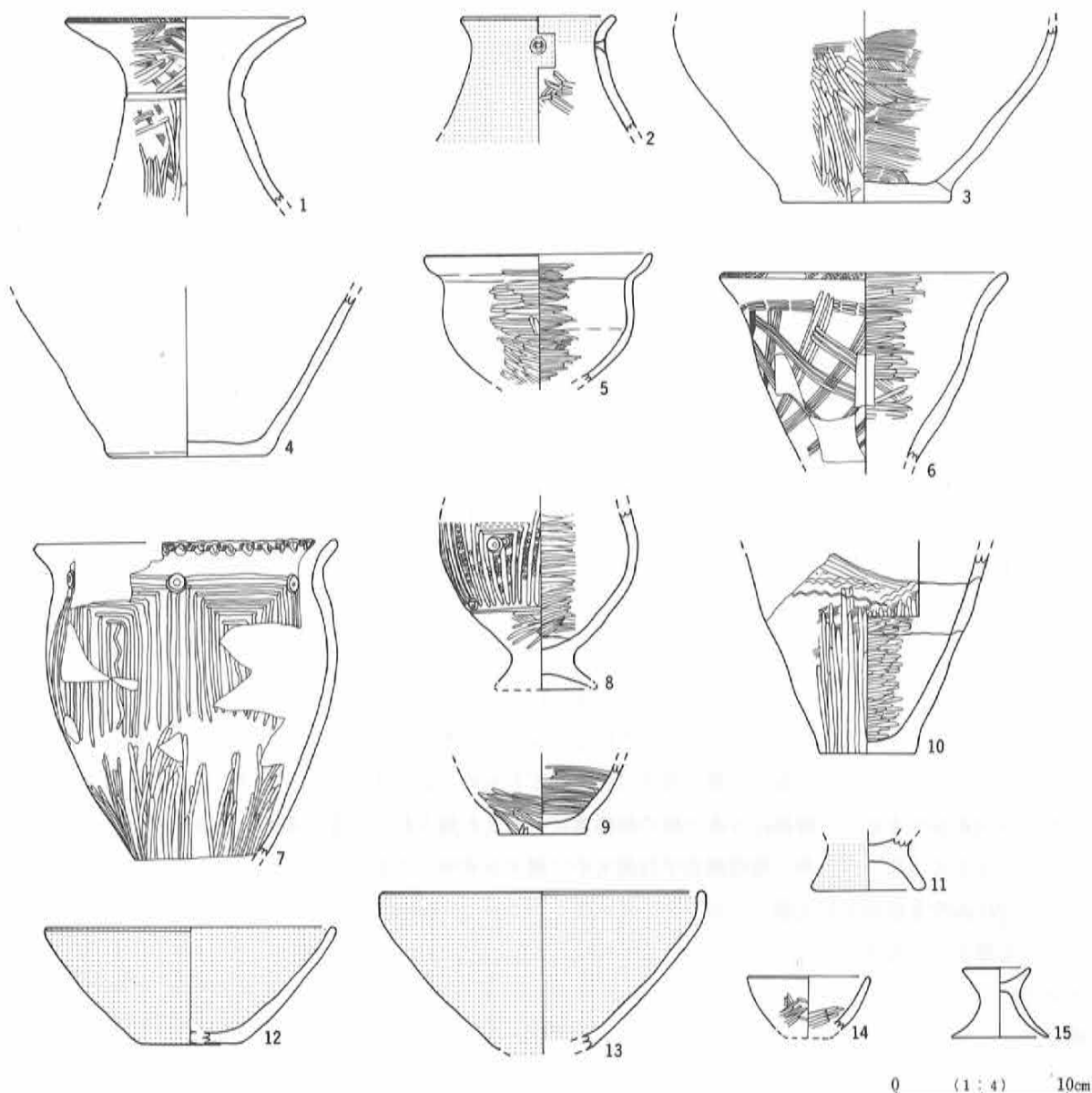
壺は、赤色塗彩が施されるもの56-2と無彩のもの56-1・3がある。56-2は頸部から口縁部まで短く外反し、胴部に最大径を有すると推測される。頸部に焼成後に施したと思われる径0.3cm大の穿孔が一孔認められる。穿孔は主に外面から施されたものであるが、僅かに内面からも工具をあてている。残存する外面全体と内面の口縁部から頸部に赤色塗彩・丁寧なヘラミガキ、内面の頸部以下は斜位のヘラナデが施されている。

56-1は口縁部が強く外反しており、残存部では口唇部に単節LR縄文が回転押圧され、頸部に横走する1条の篋描沈線が施されるのみである。56-3は22.4cm(推定)を測る胴部最大径部から、径10.0cmを測る底部にかけての資料である。文様は施されておらず、内面に斜位の刷毛目調整が、外面は横・斜位の刷毛目調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。56-2は内面の頸部以上にヘラミガキが施されているが、頸部以下の調整は、内・外面ともに56-3と共通している。他に破片資料ではあるが、受口状の口縁を呈するもの(57-3・4)があり、口唇部から口縁部にはLR縄文が回転押圧され、口縁部は3条一組の篋描連続山形文が施されている。頸部には横走する1条の篋描沈線が施されるもの(57-5)や、篋描横走平行線文中に縄文を充填したもの(57-11)がある。胴部には篋描横走平行線文区画中を山形文で充填した57-2、櫛描垂下文を施した57-10、両者を組み合わせた57-1や、縄文を地文とし篋描文が施される57-6・7、そこに横走する連続刺突文を加えた57-8、あるいは円形浮文を組み合わせた57-9などがある。

甕は、篋描文を主に施すもの(56-7、57-12・13・15・16・33・34・35)と櫛描文を主に施すもの(56-10、57-14・17~22・25~32)がある。56-7は、円形浮文が7等間隔(残存3つ)で貼付されており、浮文間を1モチーフとして篋描「コ」の字重ね文が施されている。口縁部は波状を呈し、口唇部にはLR縄文を回転押圧した後、指頭によるおさえ、更に篋描刺突文が施されている。57-33~35の破片資料も同様に、円形浮文と篋描「コ」の字重ね文が施されているが、縄文を地文としている点で異なる。57-12・13・15・16は口縁部の破片資料であるが、全て受口状を呈し、篋描山形文が描かれており、57-16以外は全て縄文を地文としている。また、57-12には円形浮文が施されている。56-10は櫛描文を施すものであり、胴部上半を欠損しているが、櫛描斜走直線文と波状文の両者が施されている。57-22も櫛描斜走直線文と波状文が施されているが、斜走直線文が主であり、施文順序は波状文の方が後である。他に斜走直線文を主としたものには57-21・31・32がある。57-21は波状口縁を呈し、口唇部にLR縄文を押圧した後、指頭によるおさえ、更に篋描刺突文が施されており、斜走直線文は頸部以下に施されている。57-31は上方に簾状文が施され、その下方に斜走直線文が続いている。57-32は頸部に横走する櫛描文が施され、斜走直線文は頸部以下に施されている。尚、これらの主となる斜走直線文は全て縦位の羽状構成をとっている。主として波状文を施すものは、口縁部に施す57-14・17、波状文下に横走する連続刺突文が施される57-25・26、波状文を施文した後、櫛描垂下文が施される57-27・28、波状文だけが残存する57-29・30などがある。その他の甕には、口唇部にLR縄文が施され、頸部以下に櫛描平行線文が施される57-18や、口唇部に縄文が施されるだけの57-23・24などがある。器形は、全体を窮える57-7は、口縁部がみじかく外反



第55図 Y74号住居址炉址実測図



第56図 Y74号住居址出土土器実測図

し、胴部は上位で僅かに張り、胴部上位径と口径がほぼ等しい。口縁部の形態は、受口状を呈する57-12~17と外反する56-7、57-18~22の2通りがあり、外反するものの中にも、指頭おさえにより波状化する56-7、57-21がある。57-9は甕の底部と思われるが、内・外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。

台付甕(56-8)は、胴部上半と台部先端を欠損するが、「ハ」の字状の台部を有している。文様は、単節LR縄文を地文とし、篋描「コ」の字重ね文が4単位で1周している。文様帯は横走る篋描沈線で区画され、その沈線に沿ってモチーフ間の境に計4個の円形浮文が配されている。また「コ」の字重ね文の中心にも1モチーフ毎に同様の浮文が貼付されている。

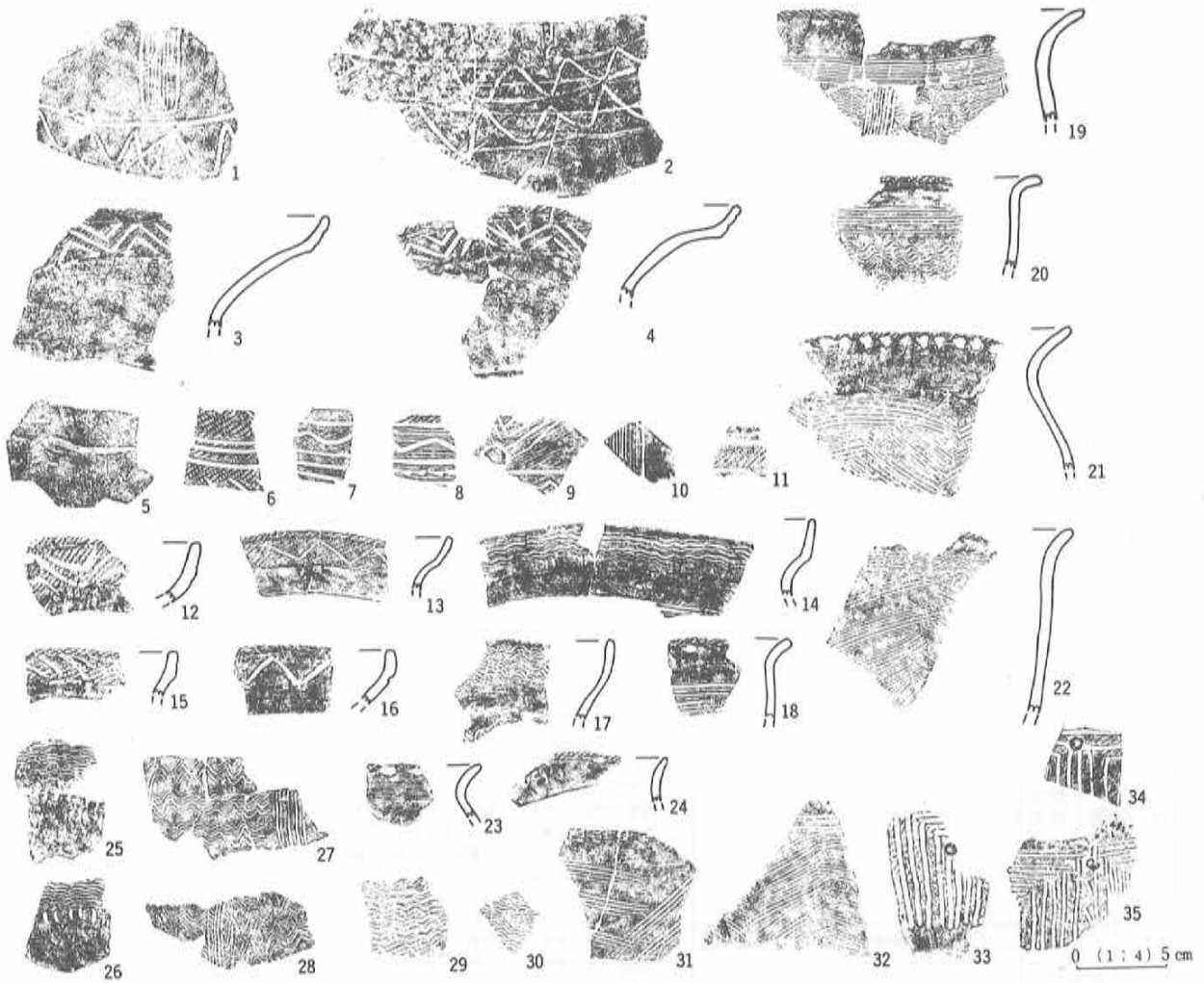
鉢は、赤色塗彩が施された56-12・13と無彩の56-6・14がある。56-12・13は内・外面ともに赤色塗彩される点で共通するが、器形は多少異なり、56-12は口辺部が内弯気味に大きく開くのに対し、56-13は口辺端部が直立気味となっている。56-6は、口唇部に単節LR縄文を施文しており、頸部に3本1組の太めの櫛描簾状文を施文の後、体部に3本1組の太めの櫛描斜格子目文が施されている。器形は、口縁部で極く僅かに外反し、深

第12表 Y74号住居址出土土器観察表

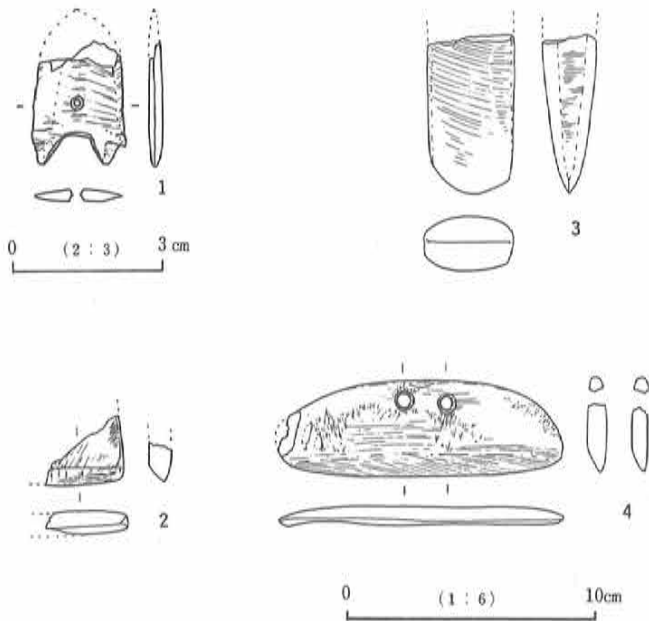
番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調	整	備考
56-1	壺	13.8 <10.6> —	口縁部は頸部から強く外反する。	内) ヘラミガキが施されているが、磨減著しく不明。 外) 口縁部から頸部は斜位のハケメ調整の後、横位および斜位のヘラミガキが施されている。頸部以下は斜位のハケメ調整の後、縦位および斜位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にR L縄文が施され、頸部にヘラ描横走平行線文が1条施されている。		回転実測A No16
56-2	壺	(9.2) <6.8> —	頸部から口縁部までは短かく外反し、頸部に径0.3cmの一孔を有する。尚、穿孔方法は主に外面からあげ、内面からもわずかに工具をあてている。	内) 頸部以上は赤色塗彩、それ以下は斜位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩、横位のヘラミガキが施されている。		回転実測B II区1層一括
56-3	壺	— <10.2> 10.0		内) 横位及び斜位のハケメ調整が施されている。 外) 横位のハケメ調整の後、縦位および斜位のヘラミガキが施されている。		回転実測B No19、IV区
56-4	甕	— <9.3> 9.8		内) 磨減著しく不明。 外) わずかに縦位のヘラミガキらしき痕が観察できるが磨減著しく不明。		回転実測B No12・13、II区2層
56-5	台付鉢	(13.4) <7.6> —	口縁部は頸部から外傾内弯して開き、受口状を呈する。胴部はあまり張らずに収束する。	内) ハケメ調整の後、細かい単位のヘラミガキが施されている。 外) 内面よりやや大きい単位の斜位および横位の丁寧なヘラミガキが施されている。		回転実測B No7
56-6	深鉢	(16.3) <11.0> —	胴部半ばに器肉の厚さが異なる部分があり、粘土の接合部分と思われる。口縁部は極く僅かに外反する程度で、深鉢形を呈する。口唇部は面取りされている。	内) ハケメ調整の後、丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部は雑なヘラミガキ、胴部以下は斜位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部はL R縄文、頸部は3本一組のための描描簾状文(等間隔止め・右回り)が施され、胴部には3本一組のための描描斜格子目文が施されている。		回転実測A II区1層、III区1層、III区2層 外面に煤が付着している。
56-7	甕	(19.0) <18.5> —	口縁部は波状を呈す。最大径は口縁部と胴部上位ではほぼ等しい。口縁部は短かく外反し、胴部は上位でわずかに張る。	内) ハケメ調整の後、丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から胴部にかけて斜位および横位のハケメ調整、胴部下位はその後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にL R縄文施文の後、指頭によるおさえ更にヘラ描の刺突文が施されており、頸部には頸部径の丁度7等間隔でボタン状貼付が配置される。(但し現存は3つのみ。)頸部から胴部上位はヘラ描「コ」の字重ね文が、貼付文間を1モチーフとして描かれている。		破片実測A No2、I区、I区1層、III区、III区1層
56-8	台付甕	— <10.4> —	「ハ」の字状の台部を有する。	内) 横位のヘラミガキ、台部内面はナデが施されている。 外) 甕胴部下半は横位のハケメ調整の後、ヘラミガキが施されている。 文) 胴部下半はL R縄文施文の後、ヘラ描「コ」の字重ね文が施され、無文部との境にはヘラ描横走平行線文が施されている。		回転実測A No22、覆土 外面に一部煤が付着している。
56-9	甕?	— (4.1) 5.2		内・外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。		回転実測A No10 外面の黒色は黒色処理を、内面の赤色は赤色塗彩を施したと思われるが定かではない。
56-10	甕	— <5.6> 6.0		内) ヘラミガキが施されている。 外) ハケメ調整の後、縦位のヘラミガキ、底部には更に細かい単位の斜位のヘラミガキが施されている。		回転実測B II区、III区1層
56-11	脚付鉢	— <3.0> 6.2	底面は凹レンズ状を呈している。	内) 鉢部は赤色塗彩が施され、台部は磨減著しく不明。 外) 赤色塗彩が施されている。		
56-12	鉢	(17.0) 6.8 (5.8)	口辺部は内弯気味に大きく開く。	内・外面ともに赤色塗彩・斜位および横位のヘラミガキが施されている。		回転実測B No2・4・5、I区1層、I区2層
56-13	鉢	(19.0) <9.2> —	口辺部は内弯気味に開き端部で直立気味となる。	内・外面ともに赤色塗彩・斜位および横位のヘラミガキが施されている。		回転実測B No17、IV区
56-14	鉢	— (3.7) —	口辺部は内弯気味に開く。	内・外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。		回転実測B III区1層
56-15	高坏?	4.0 4.1 (6.0)	手握ねによる成形と考えられるミニチュア土器。坏部はわずかに内弯して小さく開き、脚部は大きく広がる。	内・外面ともにナデが施されている。		全面において赤色顔料の付着が観られる。

鉢形を呈している。56-14も無彩であるが、無文で、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。器形は、口辺部が内弯気味に開き、口径7.2cm(推定)を測る小型のものである。

脚付鉢(56-11)は、脚部しか残存していないが、内・外面ともに赤色塗彩が施されている。56-5は口縁部が受口状を呈し、体部はあまり張らず収束している。胴部以上は残存していないが、内・外面とも丁寧なヘラナ



第57図 Y74号住居址出土土器拓影図



第58図 Y74号住居址出土石器実測図

デが施されており、無彩で無文の脚付鉢になる可能性がある。

手捏の高杯（56-15）は、口径4.0cm、底径6.0cm（推定）、器高4.1cmを測る。器形は、坏部が僅かに内弯して小さく開き、脚部は大きく広がり、所々に赤色顔料の付着が観察できる。

石器には、中央に小孔を有す磨製石鏃（58-1）、磨製石斧（58-2・3）、直刃半月型磨製石包丁（58-4）がある。

以上、本住居址から出土した遺物の特徴から、所産期は弥生時代中期後半に求められる。（篠原）

14) Y75号住居址

遺構 (第59・60図、図版 二十四・二十五)

本住居址は台地南側のほぼ中央し・す-20・21グリッド内に位置している。他遺構との重複関係はもたず、単独で検出された。

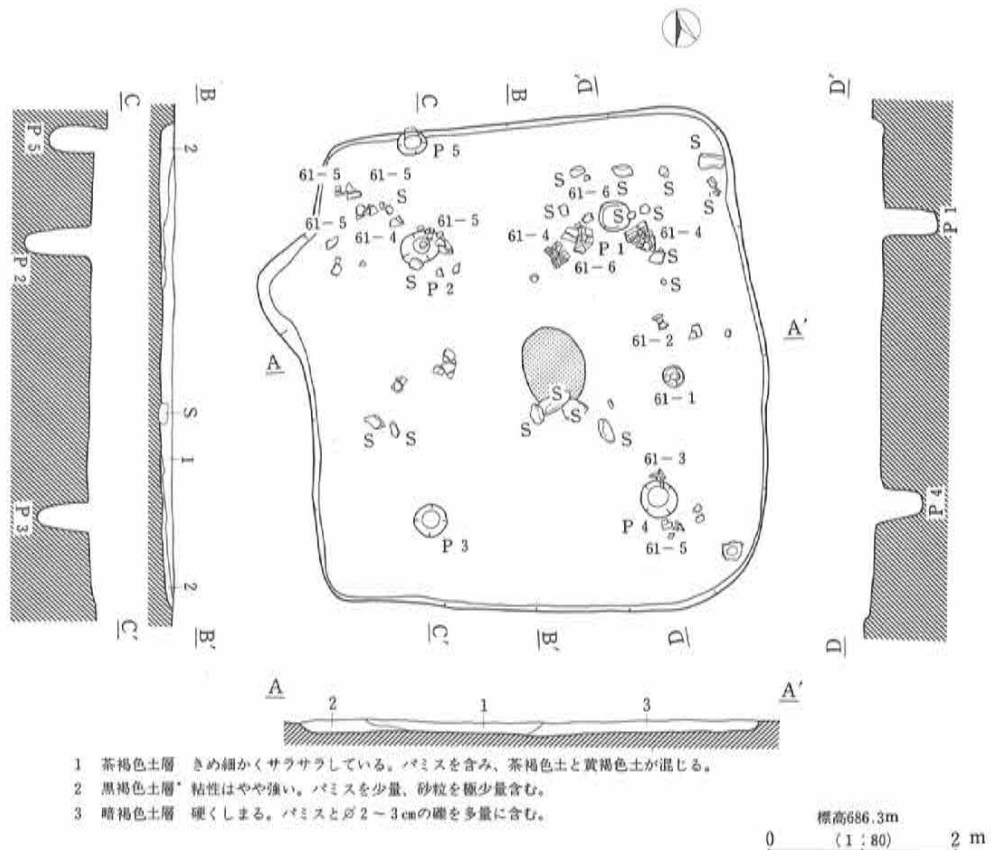
プランは東西の短軸長480cm、南北の長軸長508cm、東壁長469cm、西壁長463cm、南壁長423cm、北壁長407cmの隅丸方形を呈しており、西壁の北半部には半円状の張り出し部を有する。床面積は22.38m²を計測し、長軸方位はN-14.5°-Eをさす。

覆土は三層からなる。第1層は住居址中央部にレンズ状の堆積を示す最終埋没層であり、きめの細かい茶褐色土と黄色土がまざっている。第2層は逆三角形堆積を示す第一次堆積層で、北・西・南壁下に認められる。主体土は黒褐色土である。第3層は礫とパミスを多量に含む暗褐色土、やはり第一次的な堆積土である。住居址内の東半部にも認められる。

確認面からの壁高は4.5~16.5cmを測り、北半部の残存状態がより良好である。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して、平滑で堅固に構築されており、床面からの立ち上がりは比較的緩い。

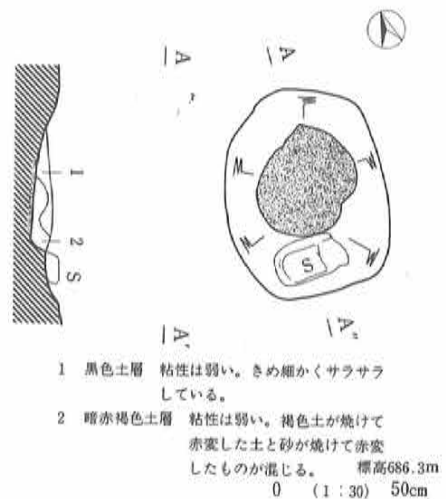
壁溝は検出されなかった。

床面は、地山の黄褐色火山灰層上に茶褐色土と黒褐色土の混合土を1cm前後の厚さで住居内全面に埋めもどして叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね、フラットな面を形成しているが、細部にわたると起伏が多く、踏みしまって堅固な状態ではあるが、粘性



- 1 茶褐色土層 きめ細かくサラサラしている。パミスを含み、茶褐色土と黄褐色土が混じる。
- 2 黒褐色土層 粘性はやや強い。パミス少量、砂粒を極少量含む。
- 3 暗褐色土層 硬くしまる。パミスと径2-3cmの礫を多量に含む。

第59図 Y75号住居址実測図



- 1 黒色土層 粘性は弱い。きめ細かくサラサラしている。
- 2 暗赤褐色土層 粘性は弱い。褐色土が焼けて赤変した土と砂が焼けて赤変したものが混じる。 標高686.3m

第60図 Y75号住居址炉址実測図

に欠け、もろく崩壊し易い。

ピットは5個検出された。主柱穴は4本整然と配置されている。P₁は31×32cmの円形を呈し、57cmの深度を有する。断面はU字形を呈している。P₂は33×43cmの楕円形を呈し、71cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は34×35cmの円形を呈し、55cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は39×39cmの円形を呈し、47cmの深度を有する。断面形はU字形を呈している。P₅は北壁下の西寄りに掘り込まれている。25×32cmの楕円形を呈し、49cmの深度を有する。断面形は北側にふくらんだU字形を呈している。P₅の機能については不明であり、他の住居址にはこのようなあり方はみられない。

炉址は住居址の長軸、短軸の交点（住居址の中央）よりもやや東寄りから検出された。平面形態は長軸長84cm、短軸長64cmの楕円形を呈し、掘り方は南側に一段のテラスを有している。長軸方位はほぼ真北をさす。床面からの掘り込みは最深部で7cmを測り、断面形は火床部に当たる北側半分以上を深く掘り込んで階段状となっている。火床部は炉址のほぼ中央の深く掘り込まれた箇所に、褐色土と砂を混ぜた土（第2層）を44×41cmの円形状の範囲で埋めもどして形成されており、熱を受けて赤変した状態であった。また、炉址の南端には長さ28cm、幅16cmの長方形の扁平な礫を利用した炉縁石が置かれている。覆土は炉址の構材（第2層）を除くと第1層のみからなる。きめ細かく粘性の弱い黒色土である。

遺物の出土状況

本住居址からは比較的まとまった弥生土器と少量の石器が出土しているが、全体量は少ない。P₁の周辺部に61-4・6（甕）が、また、P₂周辺には61-4・5（甕）の破片が散乱している。P₄周辺には61-3・5（壺・甕）が分布し、この他壺の口縁部片61-1・2は住居址中央より東側の床面上に分布している。61-1は口縁部を床面上に密着させた逆位の状態で出土している。全体的にみると本住居址の遺物分布は、P₃を除く主柱穴の周辺に集中する傾向が看取されるほか、61-4・5（甕）にみられるように同一個体の破片が住居址内の広範囲にわたって散在する傾向がみられる。このことから本住居址の出土遺物が、住居廃絶後の一括放棄遺物であることが想起できる。

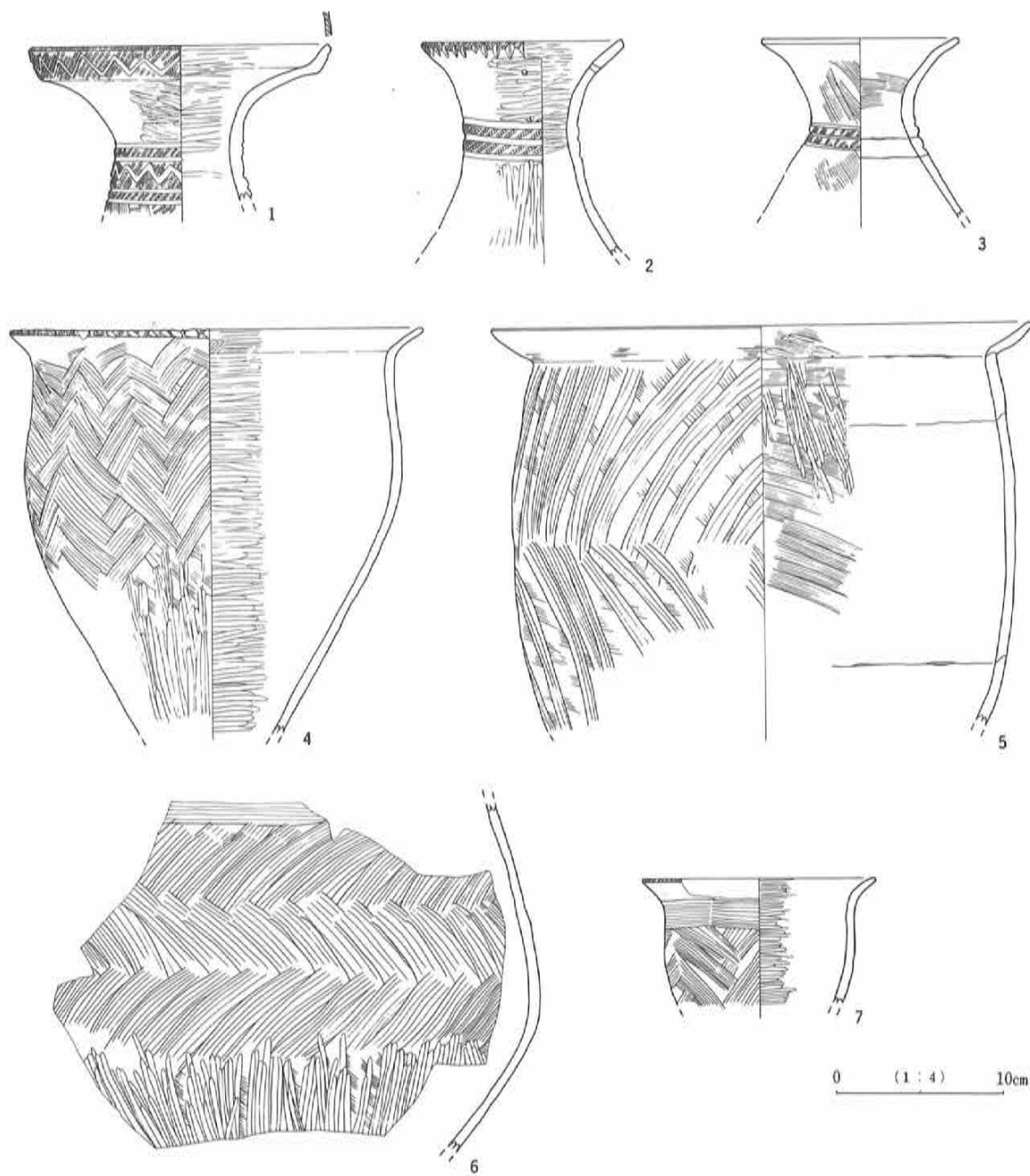
遺物（第61・62図、図版 二十六）

本住居址から出土した弥生土器の器種は、壺・甕のみである。壺は3点、甕は4点を図化した。また、石器は打製石鏃のみである。

壺には61-1・2・3がある。受口状の口縁部を有する61-1と単純口縁の61-2・3がある。

受口口縁の61-1は筒状の細い頸部から口縁部は強く外反し、上端部でしっかりとした外稜を有して受口状に立ち上がる。胴部以下は欠損するが、中位下方か、下位に最大径を有するものと考えられる。口唇部は面取りされている。文様は口縁部、頸部に施され、胴部上位から下位までも施されるものと考えられる。口縁部はLR縄文を地文とした篋描連続山形文が1条、受口部に施されている。頸部もLR縄文を地文として、上・下に篋描横走平行線文を各2条、中段に篋描連続山形文を1条施文している。胴部上位から中位にかけては2単位で一組の櫛描垂下文を等間隔で施したのちその間隙を矩形区画の篋描垂下文で充填し、全面に限なく文様が施文されていたと考えられる。外面調整は刷毛目調整のちヘラミガキ、内面調整は口縁部は外面と同様で頸部以下は磨滅のため不明である。

単純口縁の61-2・3は頸部は細く筒状を呈し、口縁部は外反してラッパ状を呈する。胴部以下は欠損しており、中位下方か、下位に最大径をもつ61-1と同様な形態になるものと考えられる。61-2の口唇部は面取りが施されている。文様は口唇部、頸部にのみ集約され、胴部には施されないと考えられる。61-2は口唇部にLR縄文を施したのち、篋描の刻目をめぐらし、頸部はLR縄文を地文として、篋描横走平行線文が3条施されている。61-3は口唇部に文様はもたず、頸部にLR縄文を地文とした篋描横走平行線文を3条施している。外面



第61図 Y75号住居址出土土器実測図

調整は61-2は刷毛目調整をヘラミガキで丁寧に消しているのに対し、61-3は刷毛目調整痕が明瞭に残っている。また、61-2の口縁部中位には焼成前の一孔がみられる。

甕はいずれも単純口縁を有するもので、受口状のものはない。大型の61-5・6、中型の61-4、小型の61-7がある。

61-4は栗林式土器組成中でも最も一般的な形態、文様を有する甕である。最大径は口縁部にあり、口縁部は短く外反し、胴部は中位上方でわずかにふくらむ。文様は口唇部はLR縄文を施文したのち、指による押捺、胴部には櫛描斜走直線文が縦位羽状に施されている。調整は内外面ともにヘラミガキが丁寧に施されている。

61-5は口縁部に最大径(32.8cm)をもつ。口縁部は短く、強く外傾し、肥厚することもあってやや内湾し、

第13表 Y75号住居址出土土器観察表

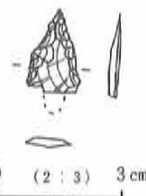
挿番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
61-1	壺	18.0 <9.8> -	口縁部はしっかりした受口状、頸部は細い筒状を呈する。口唇部は面取りされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位および斜位のハケメ調整→斜位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部と頸部にLR縄文を地文とし、口縁部はヘラ描連続山形文、頸部はヘラ描横走平行線文4条とヘラ描連続山形文が1条施されている。口唇部にもLR縄文が施されている。	回転実測A No17
61-2	壺	12.0 <12.8> -	口縁部は筒状の頸部から外反し、ラッパ状を呈する。口唇部は面取りされている。口縁部中位には焼成前の一孔がみられる。	内) 口縁部から頸部に外面よりやや細かい横位のヘラミガキ、頸部以下はナデが施されている。 外) 口縁部から頸部に横位のヘラミガキ、頸部以下は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部と頸部にLR縄文を地文とし、口唇部はヘラ描による刻目、頸部はヘラ描横走平行線文が3条施されている。	回転実測A No15
61-3	壺	11.5 <10.3> -	頸部内面の粘土紐接合部の様子より、輪積み成形と思われる。口縁部は頸部より外反し、ラッパ状を呈する。	内) 口縁部から頸部に横位のハケメ調整が施され、頸部以下は磨減著しく不明。 外) 口縁部にヨコナデ、以下は斜位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部にLR縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文が3条施されている。口唇部は磨減のため不明。	回転実測A No19
61-4	甕	24.8 <24.2> -	最大径は口縁部にある。口縁部は短く外反し、胴部は中位上方で僅かにふくらむ。所謂、深鉢形に近い。口唇部は面取りされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部に横位のハケメ調整→ヨコナデ、胴部下位は文様が施された後、斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文を施した後、指頭による押捺、頸部から胴部中位は6本一組の櫛描斜走直線文が縦位羽状(左回り)に施されている。	回転実測A No2・4・6
61-5	甕	(32.0) <23.0> - (32.0)	最大部は口縁部にあり、口縁部は短く外傾し、やや内弯する。胴部は中位で僅かにふくらみをもつ。	内) 全面に斜位のハケメ調整が施された後、口縁部から胴部上半に斜位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部は斜位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部以下に4本一組の櫛描斜走直線文が横位羽状(右回り)に上から下へ施されている。	回転実測B No5・8・9・10、II区1層 内面に粘土紐の接合部が3箇所観察できる。
61-6	甕	- <20.8> -		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に櫛描横走平行線文、胴部に7本一組の櫛描横走平行線文が横位羽状(左回り)に上から下へ施されている。	破片実測B No3
61-7	甕	(14.0) <7.5> -	最大径は口縁部にあり、口縁部は短くややゆるく外反する。胴部は中位上方で僅かにふくらみ、所謂深鉢状を呈する。口唇部は面取りされている。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) ヨコナデが施されている。 文) 口唇部にLR縄文が施され、頸部に櫛描横走平行線文(右回り)、胴部に櫛描斜走直線文が縦位羽状(右回り)に施されている。	回転実測B No3

胴部は軽くふくらみ、全体にはややずん胴な形態である。文様は胴部に櫛描斜走直線文が横位羽状、右回りで二段大雑把に施されている。内面調整は全面に刷毛目調整が施されたのちに、口～胴部上半にかけて、斜位のヘラミガキが施されている。

61-6は頸～胴部の破片である。相当大形の甕と考えられるが、全形態は推測しかねる。文様は頸部に櫛描横走平行線文、胴部に櫛描斜走直線文が横位羽状に3段施されている。調整は内外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。

61-7は口縁部は短くややゆるく外反する。胴部は中位上方でわずかにふくらみ深鉢型に近い。口縁部は面取りされている。文様は頸部に櫛描横走平行線文、胴部に櫛描斜走直線文が縦位羽状にいずれも右回りで施されている。内面調整はヘラミガキが丁寧に施されている。

石器は62-1がある。黒曜石製の打製石鏃で片側の逆刺を欠損する。小形で凹基有茎鏃の形態を有し、先端部は小さくくびれている。



第62図 Y75号住居址出土石器実測図

以上本住居址の出土遺物は36-1～3の細頸壺、36-4・7の縦羽状の施される甕などは、粟林式土器を代表するものと言える。これらをもってそのまま本住居址の所産期とするには出土状態からみてやや難があるが、床面が完全に埋没する以前に放棄された土器であることは自明であり、土器群と住居址の所産期はかなり近いと考えられる。従って、本住居址の所産期は弥生時代中期後半としておきたい。

(小山)

15) Y76号住居址

遺構 (第63・64図、図版
二十七・二十八)

本住居址は台地の南部の
西側、そ・た・ち-23・24
グリッド内に位置している。

Y77号住居址、第130号土
坑と重複関係を持ち、これ
らに住居址の北西コーナー
周辺を破壊されている。また、
住居址の掘り込みが浅
いために、床面も数箇所を
攪乱されている。

プランは、東西長642cm、
南北長750cm、東壁長は737
cm、西壁長645cm (推定)、
南壁長582cm、北壁長560cm
(推定)の隅丸長方形を呈し
ており、床面積41.62㎡を計
測する大型規模の住居址で
ある。長軸方位はほぼ真北
をさす。

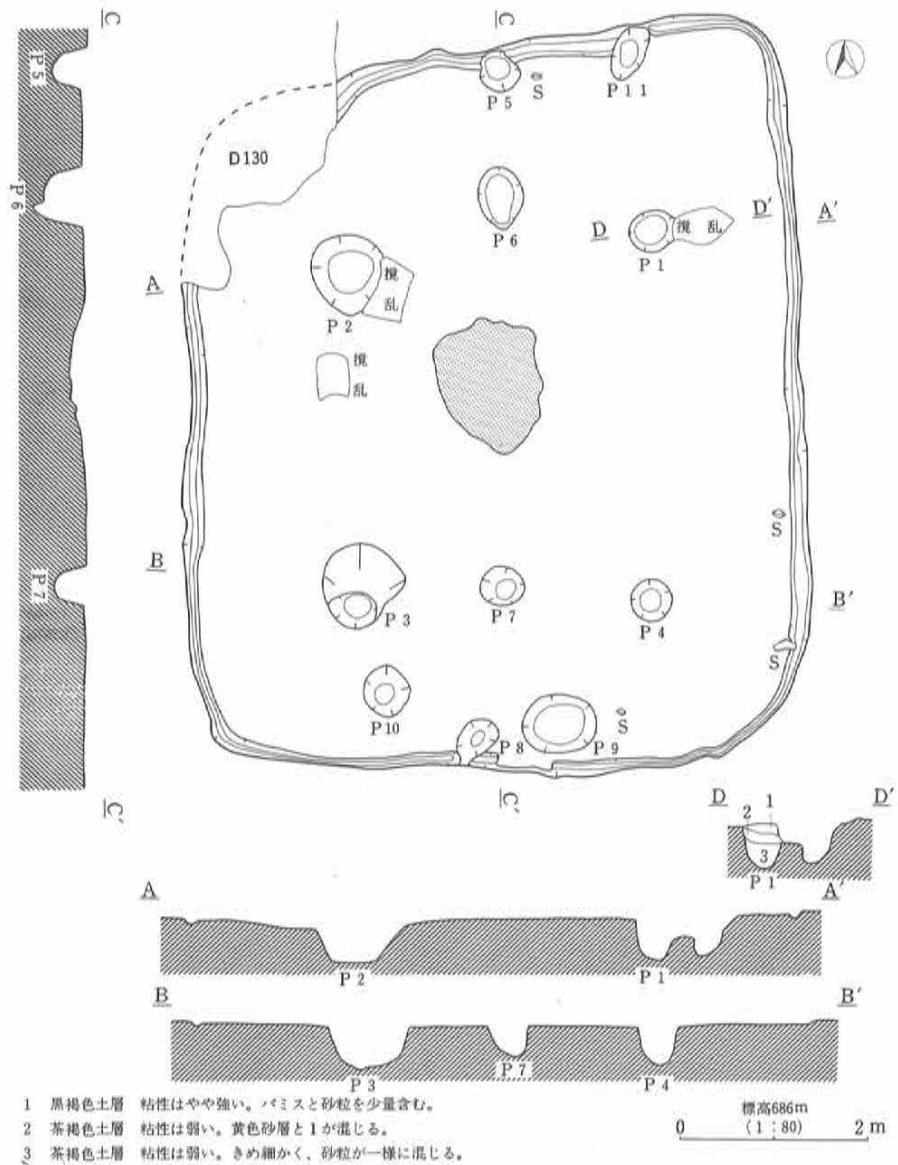
覆土は住居址プラン確認
時においてすでに大方が削
平されており、P₁の第1層
砂粒を含む黒褐色土が床面
上にわずかに残存している
程度であった。

確認面からの壁高は0～6cmをはかり、北壁を除き壁体の残存状態は極めて悪い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、床面からの立ち上がりは緩い。

壁溝は、住居址の壁下をほぼ全周していたと考えられるが、南壁下の中央部で約60cm程の断絶がみられる。壁溝幅は5～12cmを測り、深さは2～7cmと極めて浅い部分が多い。断面形は緩いU字形を呈しており、溝内は凹凸に富む。

床面は地山にあたる黄褐色火山灰層をそのまま利用して構築されている。おおむね平坦な構築状態であるが、やや軟弱で堅緻な箇所は少ない。

ピットは合計で11個検出された。このうちP₁～P₆の6本が主柱穴と考えられ、北側と南側に各々3本ずつ配置されている。北側に位置する主柱穴は東側配置のP₁と西側配置のP₂を結ぶ中間地点よりもやや北側にP₆が配置されているのに対し、南側に位置するP₃・P₄・P₅はほぼ直線的に配列されている。これはP₆を炉址から意識的に遠ざけた結果によるものとも理解できる。規模はP₁が42×51 (推定) cmの楕円形を呈し、深さは45cmを測る。



第63図 Y76号住居址実測図

P₂は83×77cmの円形を呈し、39cmの深度を有する。断面形は逆台形状を呈する。P₃は90×88cmの不整形円形を呈し、南側に東西に長い楕円形の更に深い掘り込みをもつ。深度は60cmを計測する。P₄は43×43cmの円形を呈し、39cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₆は68×46cmの楕円形を呈し、46cmの深度を有する。断面形はおおむねU字形を呈するが、南側には更に深い掘り込みがみられる。P₇は40×45cmの楕円形を呈し、50cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。

この他、P₅・P₁₁は北壁下、P₈・P₉は南壁下、P₁₀はP₈の北西付近に位置する。このうち、北壁下中央に位置するP₅は所謂「棟持柱」と考えられる。43×41cmの不整な円形を呈し、30cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₅の東側に位置するP₁₁は56×33cm

の楕円形を呈し、32cmの深度を有する。柱穴とも考えられ、西側の破壊された箇所には、P₅をはさんで対応する柱穴が存在したことも想定される。P₈・P₉は入口施設に関連するピットと考えられる。P₈は50×34cmの楕円形を呈し、11cmの深度を有する。P₉は61×77cmの楕円形を呈し、22cmの深度を有する。P₁₀の性格は不明である。53×49cmの円形を呈し、40cmの深度を有する。規模、形態からみると柱穴的な性格も想定できる。ピットの覆土はP₁のみを抽出した。三層からなり、第1層は先述した黒褐色土、第2層は黒褐色土と黄色砂粒がまじる茶褐色土、第3層は黄色砂粒が多量にまじる茶褐色土である。他のピットもこれとほぼ同様な堆積状態を示しており、柱痕を有するものはない。

炉址は住居址の長軸、短軸の交点（住居址の中央）よりもやや北側から検出された。長軸長140cm、短軸長110cmの不整な楕円形を呈し、長軸方位はほぼ真北をさす。床面からの掘り込みは、最深部で11cmを測り、断面形はやや凹凸が認められるもの、おおむね「弓」状を呈している。火床部は掘り込みの北寄りに編在し、94×54cmの楕円形の広い範囲を有している。地山の砂層上に5cm内外の厚さで埋めもどされた黄褐色火山灰が構材となっており、現状では加熱をうけたための赤変が著しい。炉縁石は火床部の南側にあり、径26cm内外の角礫を中心として両脇に径12cm弱の礫を置き、半円状に配置されている。礫が円柱状を呈するものであるならば、「コ」の字状石囲い炉となる。覆土は漆黒に近いきめの細かい黒色土1層のみからなる。

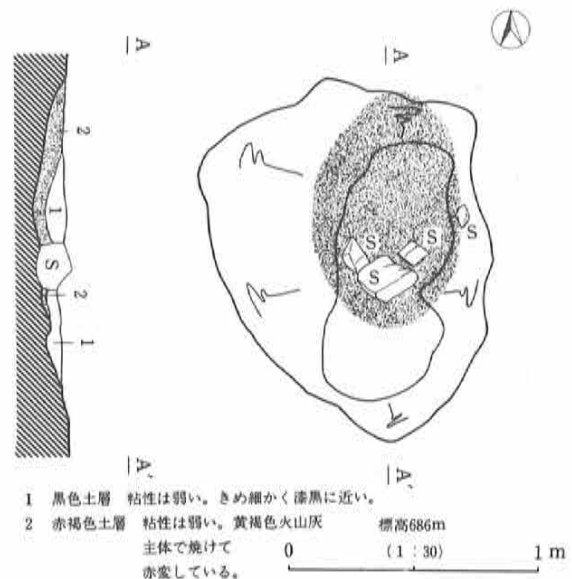
遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているが、後世に破損された小破片が多いが、図化したものはほぼ床面上、ピット内から出土したものであり、本住居址の共伴遺物と考えて大過ない。65-1（甕）がP₁・P₃内、65-2（甕）、65-3（甕）、66-9（甕）がP₇内、66-5（壺）がP₂内、66-6（甕）がP₈内などのピット内から出土しており、65-3（甕）、66-1・7・8（壺・甕）がII区床面上、66-2・3（壺）がIII区床面上、66-4（壺）がIV区床面上に分布している。全体に散漫な遺物分布と言える。（小山）

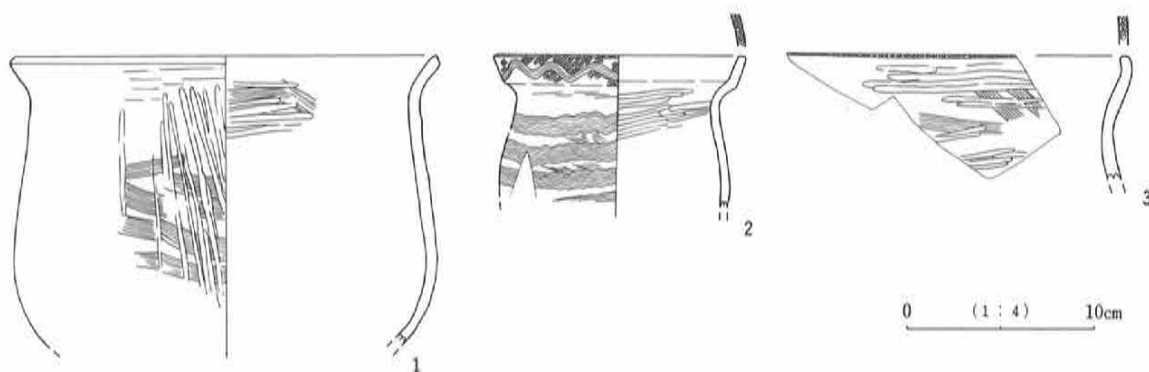
遺物（第65・66図、図版 二十九）

本住居址からは、弥生土器が出土している。器種には、壺・甕がある。

壺は、いずれも破片資料である。66-1は口縁部が頸部から大きく外傾外反し、上端で受口状を呈する。文様は、口唇部から口縁部にLR縄文が回転押圧され、口縁部に3条一組の篋描山形文が施されている。胴部片に



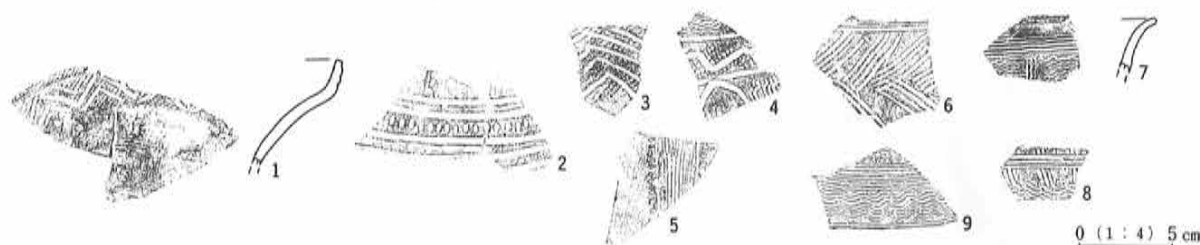
第64図 Y76号住居址炉址実測図



第65図 Y76号住居址出土土器実測図

第14表 Y76号住居址出土土器観察表

標 番	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
65-1	甕	(23.0) <15.4> — (23.0)	最大径は口縁部にあり、口縁部は短く外反し、胴部下位でややふくらむ。口唇部に雑な面取りがされている。	内) ハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整→密度の薄い縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B P ₁ 、P ₂ 外面が黒色化している。
65-2	甕	13.4 10.0 — 13.4	最大径は口縁部にある。胴部はややふくらみ、頸部から外反した口縁部は上半でしっかりした受口状に立ち上がる。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部にヨコナデ、胴部は斜位のハケメ調整が施されている。 文) 口縁部にLR縄文を地文とし、4本一組の櫛描波状文が一条施され、口唇部にもLR縄文が施されている。胴部は8本一組の波状文が帯状に施されている。	回転実測A P ₂ 外面に煤が著しく付着している。
65-3	甕	— <6.5> —	口縁部はゆるく外傾外反し、口唇部でやや内弯している。	内・外面ともにハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文が施されている。	破片実測B II区床



第66図 Y76号住居址出土土器拓影図

は、篋描横走平行線文の区画中に横走る篋描連続刺突文を充填した66-2や、LR縄文を地文とし、数重の篋描山形文を施した66-3、篋描横走平行線文・山形文、横走あるいは縦走する櫛描波状文、縄文を組み合わせた66-4、櫛描垂下文の周囲に篋描刺突文を施した66-5などがある。

甕は、器形・文様とも様々であるが、残存する限りでは胴部はあまり張らない傾向にある。65-1は、無文で外面には刷毛目調整の後、密度の薄い縦位のヘラミガキが施されている。器形は、口縁部が短く外反し、胴部下位でややふくらみ、下ぶくれの感を受ける。口唇部には雑な面取りが施されている。65-2は、口唇部から口縁部にLR縄文を回転押圧し、口縁部は縄文を地文とし、4本一組の櫛描波状文が、胴部には8本一組の櫛描波状文が施されている。器形は、受口状の口縁を持ち、口径13.4cmを測る比較的小型品である。尚、外面には煤付着が著しい。65-3は、口唇部にLR縄文が施されているが、口縁部以下の残存部は刷毛目調整の後に横位のヘラミガキが施され、無文である。口縁部は、緩く外傾外反し、口唇部でやや内弯している。甕は他に、櫛描斜走直線文が横位羽状に施される66-6や、櫛描横走平行線文と波状文を組み合わせた66-9、更に櫛描垂下文を加えた66-7、あるいは斜走直線文を加えた66-8などがあり、66-7は口縁部が短く外反する。

以上、本住居址の所産期は共伴遺物の特徴より、弥生時代中期後半に求められる。

(篠原)

16) Y77号住居址

遺構 (第67・68図、図版 二十七・二十八・二十九)

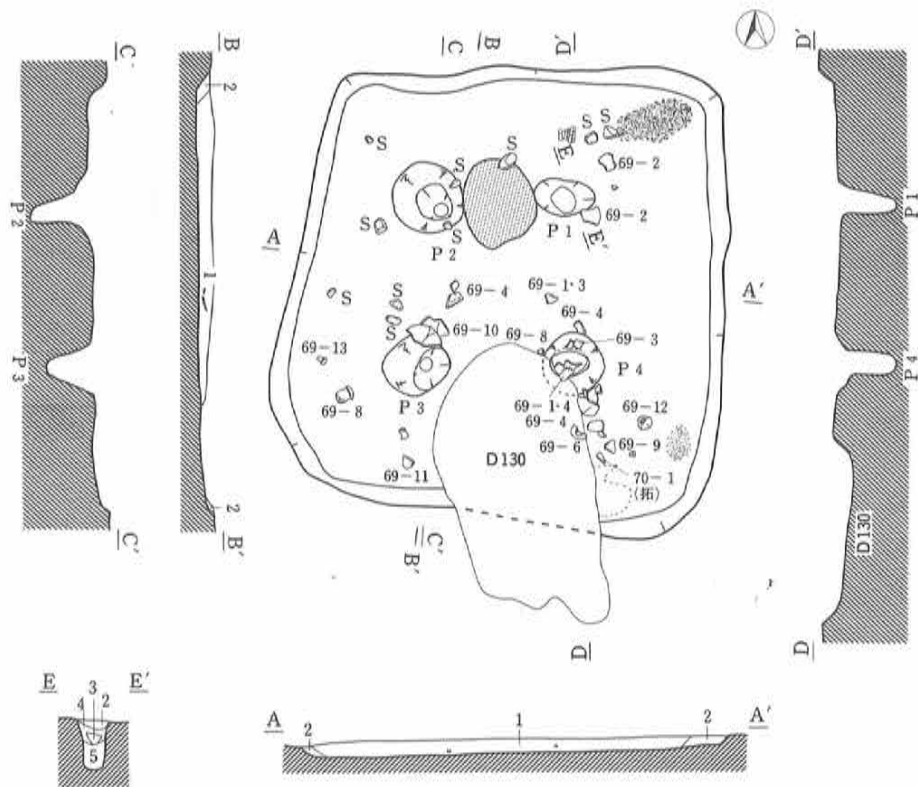
本住居址は台地南部の西側、セ・ソー24・25グリッド内に位置している。Y76号住居址、第130号土坑と重複関係を持ち、第130号土坑に南壁中央、及びその周辺の床面を破壊され、Y76号住居址の北西コーナーを破壊している。

プランは、東西の短軸長401cm、南北の長軸長402cm (推定)、東壁長418cm、西壁長346cm、南壁長418cm、北壁長373cmの隅丸方形を呈し、床面積は17.94㎡ (推定) を計測する比較的小規模な住居址である。長軸方位はN-6.5°-Eをさす。

覆土はおおむねプライマリーな堆積状態を示し、二層からなる。第1層はパミスを多量に含んでかたくしめる黒褐色土、第2層はパミスを少量、黄褐色火山灰粒子を多量に含む茶褐色土で、第1層はレンズ状堆積を、第2層は逆三角形堆積を示す。

確認面からの壁高は9.5~17cmを測り、おおむね良好な残存状態である。壁体は上位を地山の黄褐色火山灰、下位を地山の砂層を利用して構築され、床面からの立ち上がりは緩い。壁面は平滑であるが、もろく崩れ易いため、往時は何らかの補強施設が必要であったと考えられる。壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層まで掘り窪め、平坦化したのち、茶褐色土を一様に薄く埋めもどし叩きしめた「叩き床」が

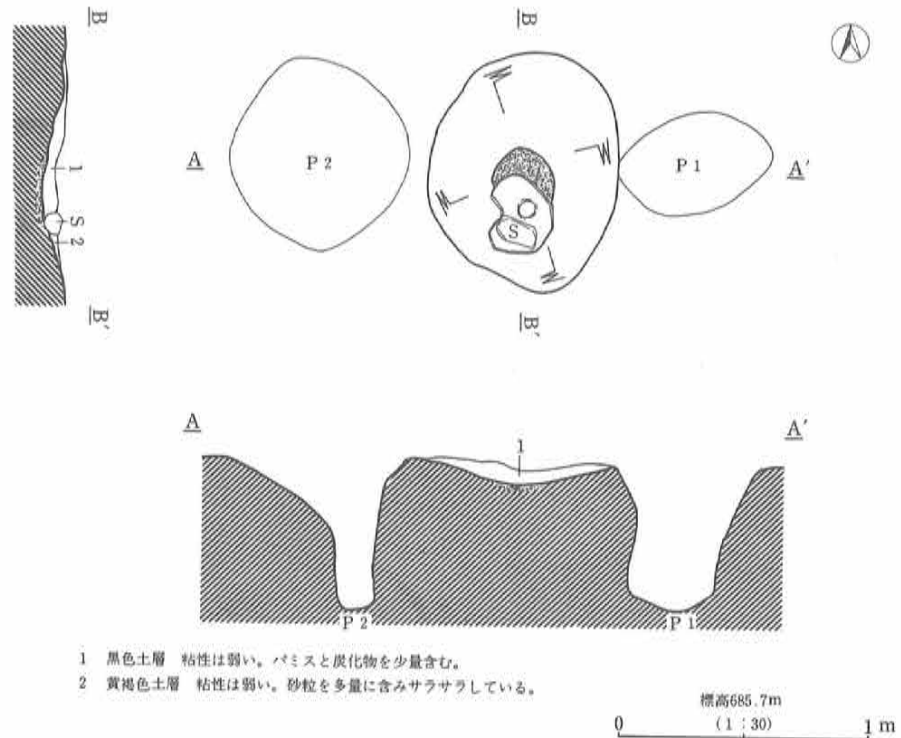


- 1 黒褐色土層 粘性は強く、堅くしめる。パミスを多量に含む。
- 2 茶褐色土層 粘性は弱く、サラサラしている。黄色火山灰粒子を多量に、パミスを少量含む。

標高685.9m
(1:80) 2m

第67図 Y77号住居址実測図

全面に施されている。堅固な構築状態とは言い難く、もろく、剥がれ易い。ピットは計4個検出された。いずれも支柱穴であり、整然と配置されている。P₁は37×64cmの楕円形を呈し、60cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は74×74cmの円形を呈し、60cmの深度を有する。断面形は漏斗状を呈する。P₃は63×71cmの楕円形を呈し、西側には一段の稜を有する。深度は50cmを測り、断面形はU字形を呈する。P₄は64×65cmのほぼ円形を呈するものと考えられ、63cmの深度を有する。断面形は漏斗状を呈している。ピット内覆土は、P₁のみから抽出した。



- 1 黒色土層 粘性は弱い。バミスと炭化物を少量含む。
2 黄褐色土層 粘性は弱い。砂粒を多量に含むサラサラしている。

第68図 Y77号住居址炉址実測図

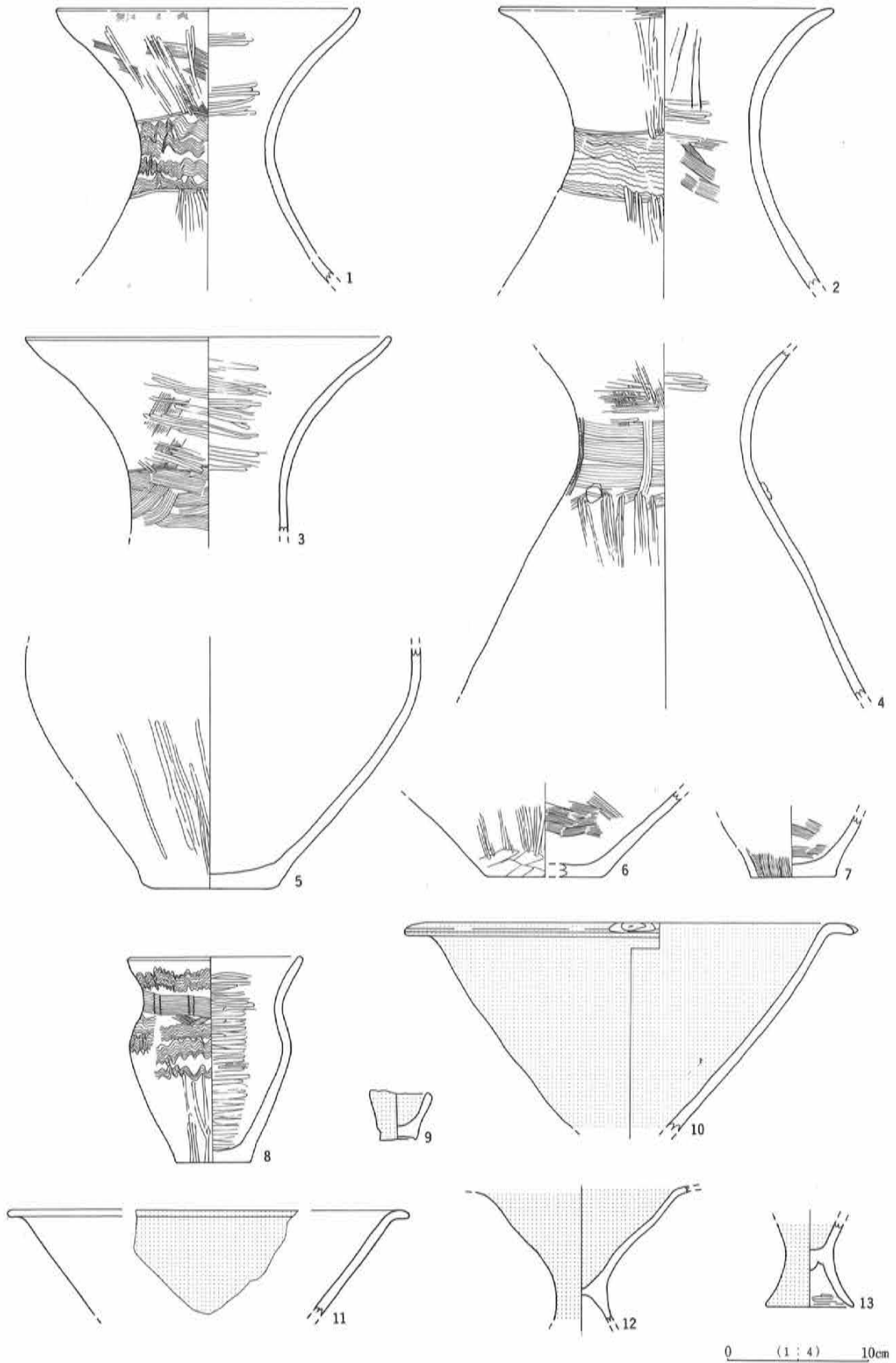
最上層は住居址覆土の第1

層、以下砂粒主体で、茶褐色土を少量含む第4層、茶褐色土主体で砂粒が少量含む、第4層内にブロック状に存在する第3層、砂粒主体で茶褐色土がまじる暗茶褐色土（第5層）の五層からなる。他のピットの堆積状態もおおむねこれと同様であり、柱痕が確認できたものはない。

炉址はP₁・P₂北側の支柱穴間の中央から検出された。長軸長90cm、短軸長76cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-15°-Eをさす。床面からの掘り込みは最深部で7cmをはかり、断面形は「弓」状を呈する。火床部は掘り込みの中央よりもやや南側にあり、29×24cmの楕円形の焼土の広がりをもつ。地山の砂層をそのまま利用して構築されたものであり、強い熱をうけたために赤変が著しい。炉縁石は火床部の南側に置かれており、長さ15cm、厚さ8cm程の円柱状を呈する。覆土は二層からなる。第1層は本遺跡の弥生時代住居址に通常みられるきめの細かい黒色土、第2層は、炉縁石を南側から固定するために充填されたと考えられる砂粒を多量に含むサラサラとした黄褐色土である。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が比較的まとまって出土しているが全体量は少ない。このうち、267-18（打製石鏃）はベルト内、272-119（不定形石器）はII区フク土内からの出土であり、確実に本住居址に共伴する遺物とは見做せない。その他の図化した土器については床面よりはやや高位から出土しているものはあるものの、おおむね床面近くから出土したものであり、共伴遺物と見做すことができる。まず、図化した遺物を中心とした、床面、床近くから出土した遺物の分布状態をみておきたい。全体的にみると、P₂を除く、P₁・P₃・P₄の支柱穴周辺に集中して分布する傾向が看取される。また、住居址の各所に破片が散在している個体が数多くみられ、本住居址の共伴遺物と見做したものの大半が、住居廃絶後の投棄遺物であることが理解できる。以下、個々の遺物の

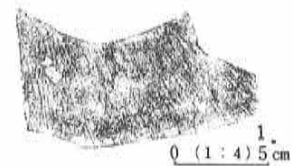


第69図 Y77号住居址出土土器実測図

第15表 Y77号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
69-1	壺	(21.2) <19.3> -	頸部はくびれ、口縁部は大きく外反し、端部で内弯気味となり、受口状を呈する。	内) 口縁部から頸部に丁寧な横位のヘラミガキ、以下はナデが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→文様施文→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に7本一組の櫛描波状文(右回り)が施された後、その上下を2条のヘラ描横走平行線文で区画されている。	回転実測B No.4・7・8
69-2	壺	23.5 <19.7> -	口縁部は太い頸部から大きく外反している。	内) 胴部以下に横位のハケメ調整が施された後、口縁部から頸部に横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施文された後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に4本一組の櫛描波状文(右回り)が施された後、その上下を2条のヘラ描横走平行線文で区画されている。	回転実測A No.1・2 口縁部に縦位の黒色の線が数本認められる。
69-3	壺	(25.5) <13.8> -	口縁部は頸部から大きく外反し、上位で僅かに内弯している。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→文様施文→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に7-10本一組の不揃いな櫛描斜走直線文が施された後、その上方に1条のヘラ描横走線文が施されている。	回転実測B No.6・8・14、IV区覆土
69-4	壺	- <24.5> -	頸部は太くくびれている。	内) 横位のヘラミガキが施されているが、磨減が著しい。 外) 口縁部に縦位のハケメ調整→文様施文→縦位のヘラミガキ、胴部は横位のハケメ調整→文様施文→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に8本一組の櫛描横走平行線文が3帯施された後、4本一組の櫛描文の垂下により、櫛描「T字文C」が構成されている。その直下の4箇所は等間隔に円形の貼付文があり、円形中央には横位の沈線が施されている。	回転実測B No.5・7・10・22、IV区
69-5	壺	- <16.8> 9.6		内) 磨減著しく不明。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No.23
69-6	壺	- <6.0> (8.3)		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 底部と立ち上がり部にヘラケズリが施され、胴部に縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No.16
69-7	壺	- <4.3> 6.2		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 縦位のハケメ調整が施されている。	回転実測A No.23
69-8	甕	12.2 14.5 5.2 12.2	最大径は口縁部にあり、胴部上位で張りもち、口縁部から頸部はゆるく弓状に外反している。口唇部は面取りされている。	内) 全面に丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、頸部にハケメ調整が施され、胴部下位は文様が施された後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に11本一組の櫛描簾状文(右回り・2連止め)が施された後、口縁部に1帯、胴部に3帯の櫛描波状文が施されている。	完全実測 No.15・20 外面に煤が付着しており、胴部下位は剥落が著しい。
69-9	鉢	4.4 3.5 2.6	手捏ね成形による小型品。	内・外面ともに赤色塗彩、雑なヘラミガキが施されている。	完全実測 No.12
69-10	高 環	32.0 <14.5> -	坏部は急傾斜で立ち、端部では直角に折れ曲がる。口縁部4箇所突起が貼付されている。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・口縁部に横位のヘラミガキ、以下は縦位のヘラミガキが施されている。	完全実測 No.19
69-11	高 環	(20.6) <7.5> -	坏部は大きく開き、端部で屈曲して偏平になる。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・口縁部に横位のヘラミガキ、以下は縦位のヘラミガキが施されている。	破片実測A No.17
69-12	高 環	- <10.2> -	坏部の底は細く深い。口縁部は上位で外反し偏平になる。	内) 坏部に赤色塗彩・横位のヘラミガキ、脚部はナデが施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No.9
69-13	高 環	- <6.0> 6.2	脚部は小さく、坏部は鋭角的に立ち上がる。	内) 坏部に赤色塗彩、脚部は上位にナデ、下位にヨコナデ→横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.21

散布状況をおきたい。69-1(壺)はP₄周辺の3箇所、69-2(壺)はP₁の西側の2箇所、69-3(壺)はP₄上および周辺の3箇所に散在する。また、69-4(壺)はP₄周辺に3箇所と、P₃北側に1箇所、69-8(甕)はP₄西側とP₃南西側に各1箇所の広範囲にわたって分布している。この他、69-5・7(壺)は炉址上に、69-9(ミニチュア鉢)・12(高環)が南東コーナー周辺に、69-10・13(高環)がP₃周辺、69-11(高環)が南壁下西側より出土している。



第70図 Y77号住居址出土土器拓影図

この他、P₁の北側の床上には張りついた状態で炭化材が出土しており、また、北東コーナーには80×41cmの範

囲、東壁下南寄りの床面上には、36×24cmの範囲をもつ焼土塊がみられ、南壁下東寄りには灰の塊まりが床面に密着した状態で出土している。(小山)

遺物(第69・70図、図版 二十九・三十)

本住居址からは、弥生土器・石器が出土している。弥生土器の器種には、壺・甕・ミニチュア鉢・高坏がある。壺は、残存する部分において全て櫛描文を主とし、頸部に集中して施されており、その点では共通しているが、文様施文の後、更に篋描横走平行線文により、文様帯区画される69-1・2・3と、文様帯区画を持たない69-4の両者が存在する。69-1・2は、区画内に櫛描波状文(右回り)を施している。69-3は、不揃いな櫛描斜走直線文を施文した後に、文様帯の上限を横走する篋描沈線で区画すると云う69-1・2と同様の手法をとっており、恐らく頸部文様帯に篋描横走平行線文の区画を有するものであろう。69-4は、8本一組の櫛描文を3帯施した後、4本1組の櫛描文を垂下させ「櫛描T字文C」を形成しており、頸部下位には、中央に横位の沈線を持つ円形状貼付文を有し、文様帯区画は成されていない。これらの最終調整は全てヘラミガキであり、文様施文の後に施されている。尚、69-1・3・4には、施文以前に施された刷毛目調整が観察できる。口縁部の器形は、頸部から大きく外反し、そのまま端部に至る69-2と、端部でやや内弯する69-1・3がある。69-5は、大きく張り出した胴部から底部にかけての資料であり、内面調整は磨滅しているため不明であるが、外面上方には赤色塗彩と縦位のヘラミガキが施されている。69-6・7は、内面に刷毛目調整が施され、外面は69-6が、立ち上がり部に刷毛目調整、以上に縦位のヘラミガキ、69-7は刷毛目調整が施されている。壺は他に、細い篋描鋸歯文中を篋描斜走直線文で充填した70-1の胴部破片が出土している。

甕は、69-8の完存資料がある。頸部に11本一組の櫛描簾状文が2連止め(右回り)で施され、その後、口縁部と胴部上位に7~11本一組の櫛描波状文が施されている。内面調整は横位のヘラミガキ、外面調整は口縁部にヨコナデ、胴部中位以下には文様施文の後に縦位のヘラミガキが施されている。器形は、胴部上位に張りを持ち、口縁部は頸部から緩く「弓」状に外反する。最大径は口縁部にあり、口唇部は面取りが施されており、口径12.2cm、器高14.5cmの比較的小型品である。尚、外面は剝離が著しく、煤が付着している。

ミニチュア鉢(69-9)は、口径4.5cm、器高3.5cm、底径2.6cmを測る手捏ね成形によるものである。内・外面の赤色塗彩は底面にまでおよび、雑なヘラミガキが施されている。

高坏は、全て赤色塗彩が施されている。69-10は、口径32.0cmを測る大型品である。坏部は急傾斜で立ち上がり、端部ではほぼ直角に折れ曲がり、口縁端部には4等間隔に突起が貼付されている。赤色塗彩は、内・外面の全体に施されており、外面口辺部に横位のヘラミガキ、以下は縦位のヘラミガキ、内面は横位のヘラミガキが施されている。69-11は、破片資料であるが、やはり坏部は大きく開き、端部ではほぼ直角に折れ曲がっている。赤色塗彩も内・外面に施され、ヘラミガキも外面口辺部は横位、以下が縦位、内面は横位に施されており、69-10と近似している。69-12は、前二例に比して小型である。坏部は端部を欠損するが、上位で外反し偏平になり、底は細く深い。赤色塗彩は内・外面に施されるが、外面の塗彩は、かなり弱めである。やはり、外面口辺部には横位のヘラミガキ、以下は縦位のヘラミガキ、内面は横位のヘラミガキが施されている。尚、脚部内面の調整はナデが施されている。69-13は、底径6.2cmを測る小さな脚部である。坏部は大半を欠損するが、鋭角的に立ち上がると考えられる。赤色塗彩は、外面全体と、坏部内面に施されており、外面に縦位のヘラミガキ、脚部内面は上位にナデ、下位にヨコナデの後、横位のヘラナデが施されている。坏部と脚部の接合には、ホゾが用いられているが、詳細は不明である。

以上、本住居址出土の壺に口縁部が上端でやや内弯するものが多いこと、細い篋描充填鋸歯文が施された胴部破片が観られることなどから、本住居址の所産期は、弥生時代後期でも前半代に求められる。(篠原)

17) Y78号住居址

遺構 (第71・72図、図版 三十一・三十二)

本住居址は、台地南部の西側し-24、き・し-25・26グリッド内に位置している。Y79・80・81・110・113号住居址と重複関係を持ち、Y80号住居址に西壁のほとんどとその周辺の床面、南壁の西側一部とその周辺の床面を破壊され、その他のY79・81・110・113号住居址を破壊している。後期の住居址Y80を除くと中期後半では最も新しい住居址である。

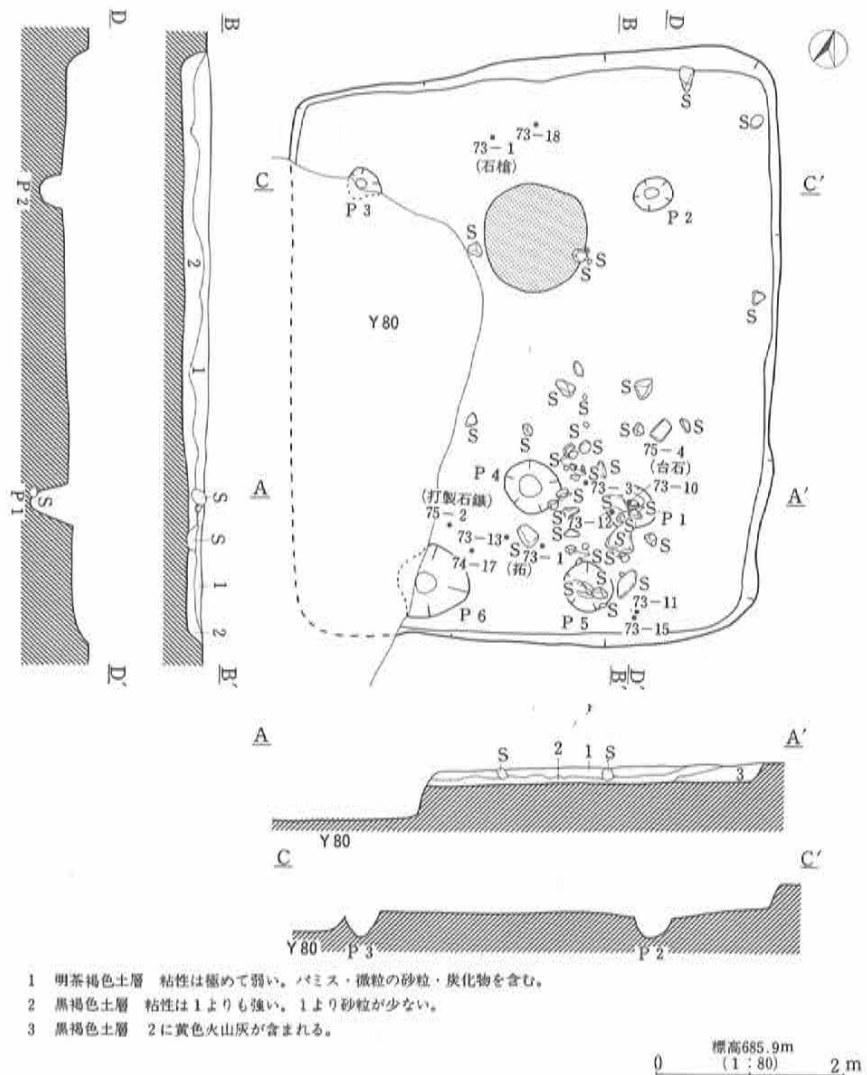
プランは、東西の短軸長500cm(推定)、南北の長軸長588cm、東壁長579cm、西壁長535cm(推定)、南壁長430cm(推定)、北壁長465cmの隅丸長方形を呈し、床面積は28.27㎡をはかる。長軸方位はN-17°-Wをさす。

覆土は三層からなり、プライマリーな堆積状態を示す。第1層は多少の起伏は認められるものの、おおむねレンズ状の堆積状態であり、最終堆積土と理解できる。小砂粒・パミス・炭化物を含む明茶褐色土である。第2層は床面中央部上を中心として10~20cmの厚さで広がりを持ち、壁に近づくに従ってレベルがあがる。砂粒を少量含む黒褐色土である。第3層は東・南壁際に逆三角形状に認められる第1次堆積土であり、北壁際にはみられない。第2層と近似するが、黄褐色火山灰を含有する点で異なる。

壁高は5.5~27.5cmをはかり、北・東壁の残存状況はおおむね良好であるが、南壁の中央から西側はやや不良である。壁体は他遺構との重複箇所については上位にY110・79・81・113号住居址の覆土を利用し、下位は、地山の砂層を利用している。また、重複関係のない南東コーナ一付近は、上位に地山の黄褐色火山灰層、下位に地山の砂層を利用して構築されている。おおむね、平滑で堅固な構築状況であり、床面からの立ち上がりは割合急である。

壁溝はいずれの壁下からも検出されなかった。

床面は、地山の黄褐色の砂層まで掘り窪めて平坦化したのちに、茶褐色土と、黄褐色火山灰を混ぜた土を薄く埋めもどして叩きしめて平坦化された「叩き床」が施されている。全体的みると南壁際から、北側へ向



第71図 Y78号住居址実測図

てレベルを低下させる傾向にあり、特に北西コーナー付近のレベルは低い。また細部にわたると床面の全面に細かい凹凸がみられる。構築状態は特に堅緻な箇所を認められず軟弱である。

ピットは6個検出された。支柱穴と考えられるのは位置関係のみからみるとP₁・P₂・P₃が該当するが、P₁を除くP₂・P₃は深度が浅く、柱穴としたものか判断に苦しむ。P₁は46×56cmの楕円形を呈し、38cmの深度を有する。断面形はU字状を呈する。P₂は34×40cmの楕円形を呈し、24cmの深度を有する。断面形は半円状を呈する。P₃は平面形態は不明で28cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。この他、南壁下周辺にP₄・P₅・P₆が集中して掘り込まれている。P₅・P₆は南壁下中央に整然と並んでおり、入口施設に関連する柱穴であることも想定できるが、他の類例と比べると規模があまりにも大きい。P₄はP₅・P₆間の北側に位置し、56×60cmの円形を呈し、36cmの深度を有する。P₅は52×52cmの円形を呈し、40cmの深度を有する。P₆は径80cm内外の円形か楕円形を呈すると考えられ、56cmの深度を有する。

炉址はP₂・P₃の柱穴間の中央よりもやや南側から検出された。ほぼ中央に設けられることが多い中期後半の住居址の中にあつて特異なあり方を示している。115×110cmの円形を呈し、長軸方位はN-2°-Eをさす。床面からの掘り込みは最深部で9cmを測り、断面はなだらかな傾斜であるが起伏に富む。火床部は掘り込みの南西側に偏在し、地山が焼け込んだ65×40cmの焼土範囲を有する。火床部の南端には長さ20cm以上の礫が2個並んで置かれており、炉縁石と考えられる。覆土は砂を含む黒色土のみからなる。

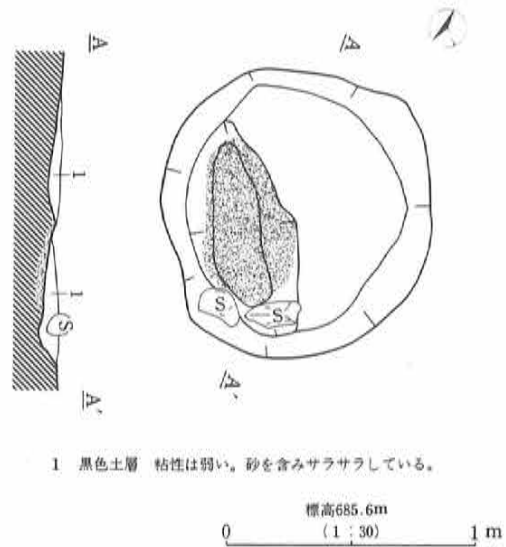
遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が多量に出土しているが、土器の完存品はみられず、破損品が多い。遺物分布はIV区に特に集中する傾向がみられ、多量の礫もこの中に分布している。他のI～III区はIV区に比べると散漫な分布を示すが、IV区の遺物と接合関係がある資料もみられる。また、垂直分布をみると大方の資料が床面よりも高位から出土しており、床面上遺物は少ないが覆土中と床面上出土遺物の間にも接合関係がみられる(73-3の壺など)。以上を勘案すると73-18(和泉式の高坏)を除く、本住居址出土の大方の遺物が、住居廃絶後に一括して放棄された遺物と見做すことができる。しかし、廃棄された時期が同じ遺物の場合、古い要素と新しい要素が混ざりあっていることも考えられるため、総べてが同時期に製作され、使用されたものとは考え難い。各区別から出土した土器の内容は、I区からは73-9・14・15・18(壺・高坏)、74-7・15・16・19・20(壺・甕)、II区から75-1(石槍)、74-8・13・14・20(壺・甕)、III区から75-2(石鏃)、73-2(壺)、74-3・10・11・17・18(壺・甕)、IV区から74-2・3・4・6・7・8・9・10・11・13・16・17(壺・甕・鉢)、75-4(台石)、74-1・3・6・12(壺)が出土している。また、73-1・5(壺)はI・II・IV区、73-9(壺)、73-12(壺?)はII・IV区の広範囲にわたる接合関係がみられる。

遺物(第73・74・75図、図版 三十三)

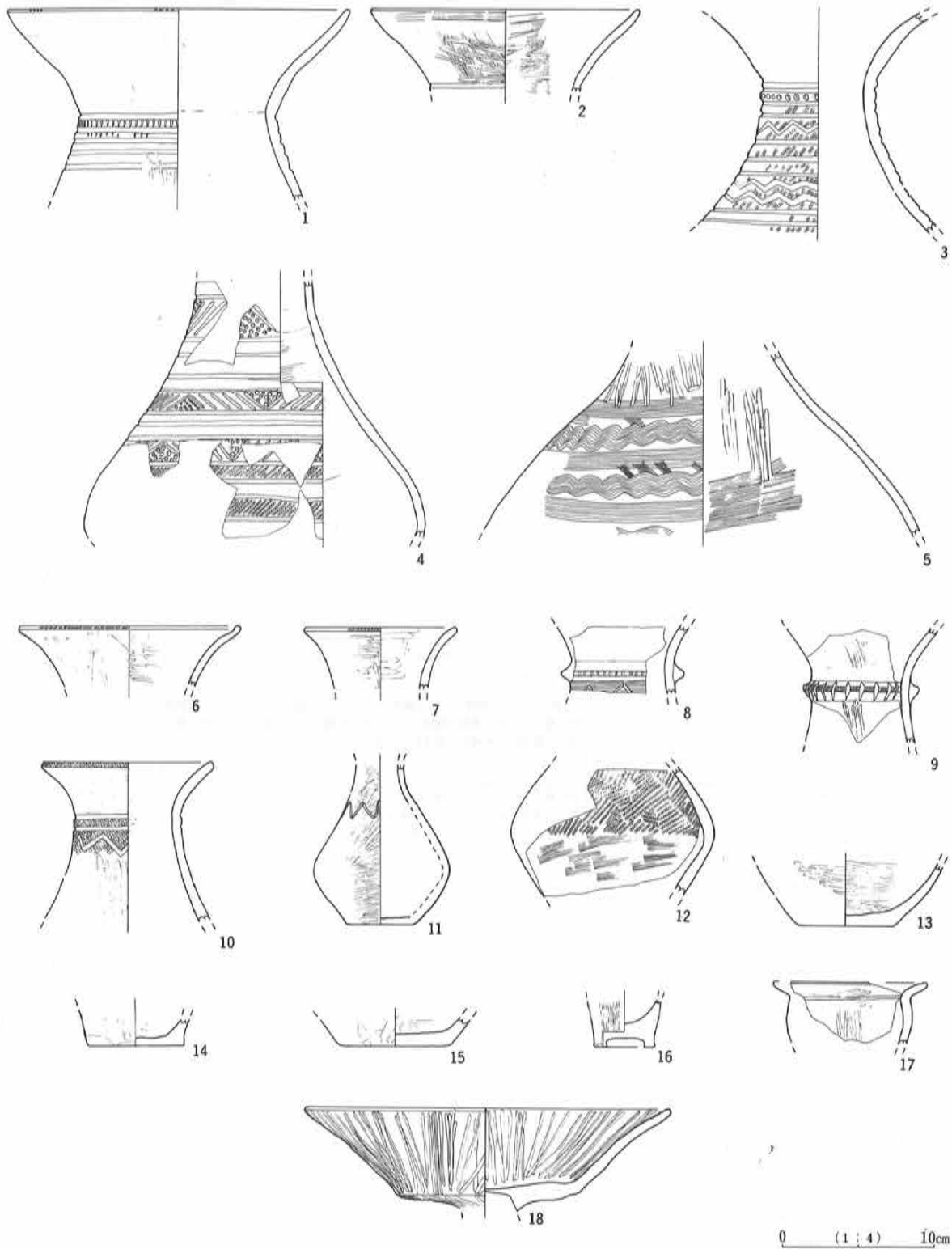
本住居址出土の弥生土器の器種には壺・甕・鉢がある。このうち、図化したのは壺26点、甕11点、鉢1点である。混入遺物73-18は古墳時代中期の柱状の脚部をもつ高坏である。

壺には太い頸部を有する73-1・2と細い頸部を有する73-3～11があり、細頸壺が圧倒的に多い。また細頸



1 黒色土層 粘性は弱い。砂を含みサラサラしている。

第72図 Y78号住居址炉址実測図



第73図 Y78号住居址出土土器実測図

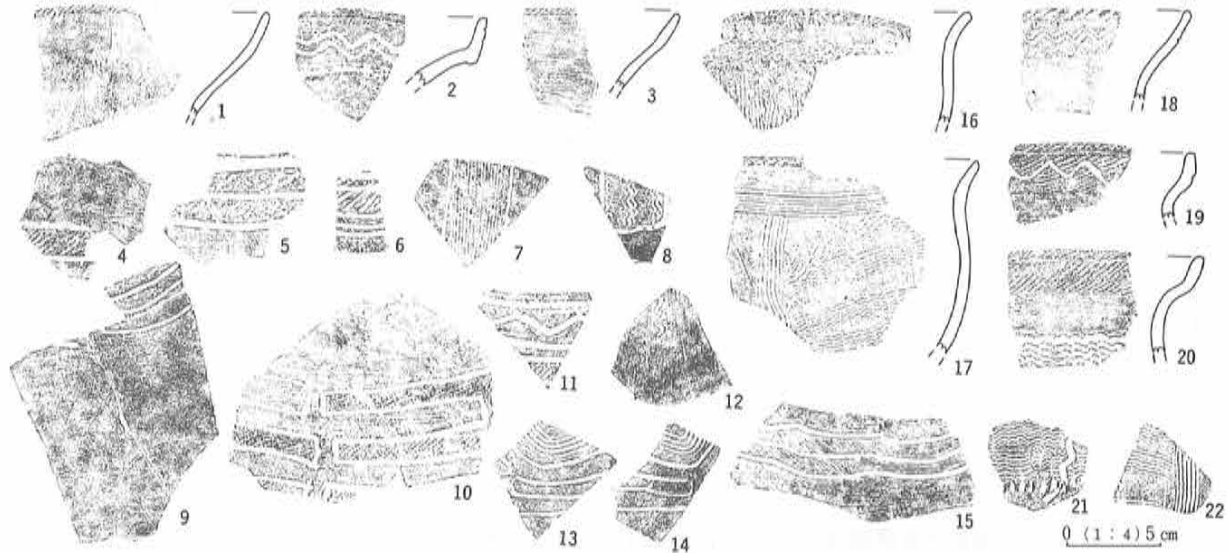
壺には単純口縁の73-6・7・10と受口口縁の74-1・2・3がある。

太頸壺73-1は太い頸部から口縁部は外反し、上半部でやや内弯気味となる。文様は口唇部に四つの単位一組の櫛描の刻目が一定の間隔をおいて施され、頸部には5条の篋描横走平行線文で文様帯が画され、上二段に篋描の刻目が充填されている。外面調整は口縁部には刷毛目調整が明瞭に残るが、胴部はヘラミガキで消されている。73-2は太い頸部から口縁部は外反し、やや内弯気味に開く。頸部に篋描横走平行線文がみられ、内外面の調整

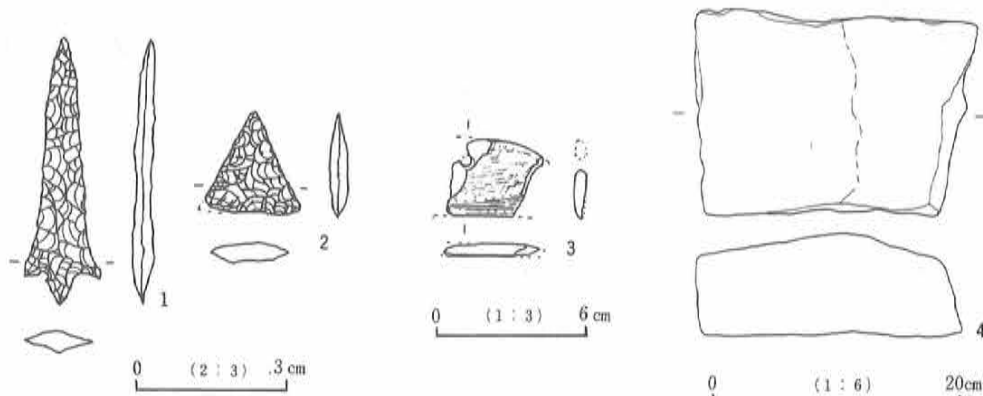
第16表 Y78号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
73-1	壺	(22.2) <12.4> —	口縁部は外傾した後、上半で内弯気味に開く。頸部はかなり太い。	内) 口縁部上端にヨコナデ、以下頸部までハケメ調整が施されている。胴部のハケメ調整はやや粗い。 外) 口縁上部にヨコナデ。以下ハケメ調整、胴部は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部に4単位の櫛歯の刻目、頸部は5条のヘラ描横走平行線文を巡らせ、最上部の文様帯中にヘラ描の刻目を充填している。	回転実測B No.4、I区覆土、II区覆土、II区ベルト内
73-2	壺	(17.5) <5.5> —	太い頸部から口縁部は外反し、やや内弯気味に開く。	内) 横位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部上端にヨコナデ。以下は縦位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にヘラ描横走平行線文が施されている。	回転実測B IV区覆土
73-3	壺	— <14.1> —	比較的厚めである。頸部は細く筒状を呈する。	内) 頸部上位に横位のヘラミガキが施されており、以下は磨滅著しく不明。 外) 頸部以上に横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部以下には単筋LR縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文と連続山形文が施されており、文様帯の最上部は竹管状の指突文が施されている。	回転実測B No.11、床、L25グリッド
73-4	壺	— <11.5> —	頸部は細く、胴部は下位で張る。	内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) ヘラ描連続三角文で充填された部分は横位および斜位のハケメ調整、それ以外は斜位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部から胴部中に3-4条を単位とするヘラ描横走平行線文で一次区画された文様帯の3-4帯毎にヘラ描連続三角文を充填し、中央の三角形の空間は竹管状の刺突文で充填されている。胴部下半にはLR縄文による縄文帯が2帯認められる。	破片実測B IV区覆土
73-5	壺	— <13.7> —		内) 横位のハケメ調整→胴部上位に縦位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→文様施文→頸部に丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 文) 胴部に10本一組の櫛歯横走平行線文(右回り)と10本一組の櫛歯波状文(右回り)が交互に施されている。	回転実測B No.3、I区覆土、IV区覆土、II区ベルト
73-6	壺	(14.4) <4.0> —	口縁部はやや内弯気味である。	内) 横位のハケメ調整→丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文が施されている。	回転実測B IV区覆土
73-7	壺	(10.0) <4.0> —	口縁部は外反する。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部上半に斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキ、それ以下は横位のヘラミガキ→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文が施されている。	回転実測B IV区覆土
73-8	壺	— <4.6> —	頸部に突帯を1帯有する。	内) ハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にハケメ調整→ナデが施されている。 文) 突帯上にヘラ描の刻目、突帯下に櫛歯横走平行線文とヘラ描山形文(?)が施されている。	破片実測A IV区覆土
73-9	壺	— <7.4> —	頸部に突帯を1帯有する。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にハケメ調整→横位のヘラミガキ、以下はナデが施されている。 文) 頸部に突帯を1帯有し、突帯にLR縄文を施文の後、ヘラ描の刻目が施されている。	回転実測A I区
73-10	壺	(11.0) <10.3> —	口縁部はラッパ状に外反する。	内) 口縁部から頸部にハケメ調整→横位のヘラミガキ、以下はナデが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ→ハケメ調整、胴部にハケメ調整→やや雑な縦位のヘラミガキ。 文) 口唇部にLR縄文、頸部はLR縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文が3条、連続山形文が1条施されている。	回転実測A No.10
73-11	壺	— <10.5> 15.5 9.9	頸部は筒状を呈し、胴部は下位で大きく張る。	内) ナデが施されている。 外) ハケメ調整→文様施文→頸部から胴部上半に横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にヘラ描波状文が施されている。	回転実測A No.17
73-12	壺	— <8.5> —		内) 横位および斜位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部下半に横位のハケメ調整が施されている。 文) 胴部上半にLR縄文が施されている。	破片実測A No.9、II区覆土 内面は黒色
73-13	壺	— <4.2> 6.3		内) ハケメ調整が施されている。 外) 斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.3
73-14	甕	— <2.4> 6.4		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) ハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B I区覆土
73-15	甕	— <1.9> (6.8)		内) ハケメ調整が施されている。 外) ヘラケズリが施されている。	回転実測B No.18

73-16	疑? (3.0) 3.8	底部は中央が径2.5cmにわたって凹み、高台状を呈する。	内) ナデが施されている。 外) 縦位のへらミガキが施されている。	回転実測A III区覆土
73-17	(10.0) <4.0> -	口縁部は強く外反する。	内) ナデが施されている。 外) へらミガキが施されている。	破片実測A IV区覆土 赤色粒子が付着している。
73-18	高坏 24.0 <6.8> -	口縁部は外反し、大きく開く。ホゾは胴部に属すると思われる。	内・外面ともに丁寧な縦位の暗文が施されている。	回転実測A No.19, II区覆土



第74図 Y78号住居址出土土器拓影図



第75図 Y78号住居址出土石器実測図

は刷毛目が明瞭に残る。細頸壺で単純口縁の73-6・7・10は口縁部がラッパ状に開き、口唇部に縄文が施される。また、10は頸部にLR縄文を地文として上段に篋描横走平行線文が2条、下段に篋描連続山形文が施される。受口口縁を有する壺は外稜が明瞭に残る74-2と、消失し丸味を帯びる74-1・3がある。2には口縁部にLR縄文を地文とした篋描連続山形文が2条施されるが、1・3には口唇部に縄文が施されるのみである。この他、細頸壺には口縁部形態は不明であるが、頸部～胴部にかけてLR縄文を地文とした篋描横走平行線文、連続山形文と竹管状の刺突文が隈なく充填される73-3、頸部～胴部下位にかけて12条の篋描横走平行線文で文様帯を一次区画したのち、上から1・4・7帯内に篋描連続三角文、竹管状の刺突文を充填し、8・10帯内にLR縄文を充填した73-4、胴部上位から中位にかけて揃描横走平行線文帯、波状文帯が交互に施される73-5、頸部に断面三角形の突帯を1条有する73-8・9、頸部下位に篋描波状文が1条施される73-11などがある。また、形態は知り得ないがLR縄文地文上に篋描横走平行線文が施される頸部片74-4・5、篋描横走平行線文、斜走短線

文、刺突文が施される頸部片74-6、櫛描垂下文を篋描文で区画した74-7・8（7は直線、8は波状）、篋描連弧文が施される74-9・15、LR縄文地文上に篋描の工字文状の区画をもつ74-10、LR縄文地文上に横走平行線文、連続山形文が施文される74-11、曲線状の櫛描、篋描文をもつ74-13・14、胴部上位に波状の篋描垂下文をもつ74-12などの胴部片がみられ、バラエティーに富む。

甕にも単純口縁の74-16・17・22と受口口縁の74-18~20がある。単純口縁の16・17は口唇部に縄文をもち、16・22は頸部に櫛描波状文、胴部に櫛描垂下文（直線状）、17は胴部に櫛描波状文・垂下文（直線状）、頸部に横走平行線文が施されている。受口口縁の18~20は外縁がとれ、18は特に直線化が著しい。18は口唇部に篋描の刻目、口縁部に2本一組の櫛描波状文、19・20は口縁部にLR縄文が施され、19には篋描連続山形文が1条加わる。また、20の頸部には櫛描波状文が施されている。この他、櫛描波状文、篋描刺突文上に波状の篋描垂下文施文の74-21やLR縄文のみの73-12がある。73-13~16は底部片で16は完全な上げ底である。

鉢73-17は口縁部が短く、強く外反する小形品で、赤色粒子が付着している。

以上、壺には新しい様相の73-1・2と古い様相の73-4がみられるが、本住居址の所産期は一応、中期後半とすることができる。(小山)

18) Y79号住居址

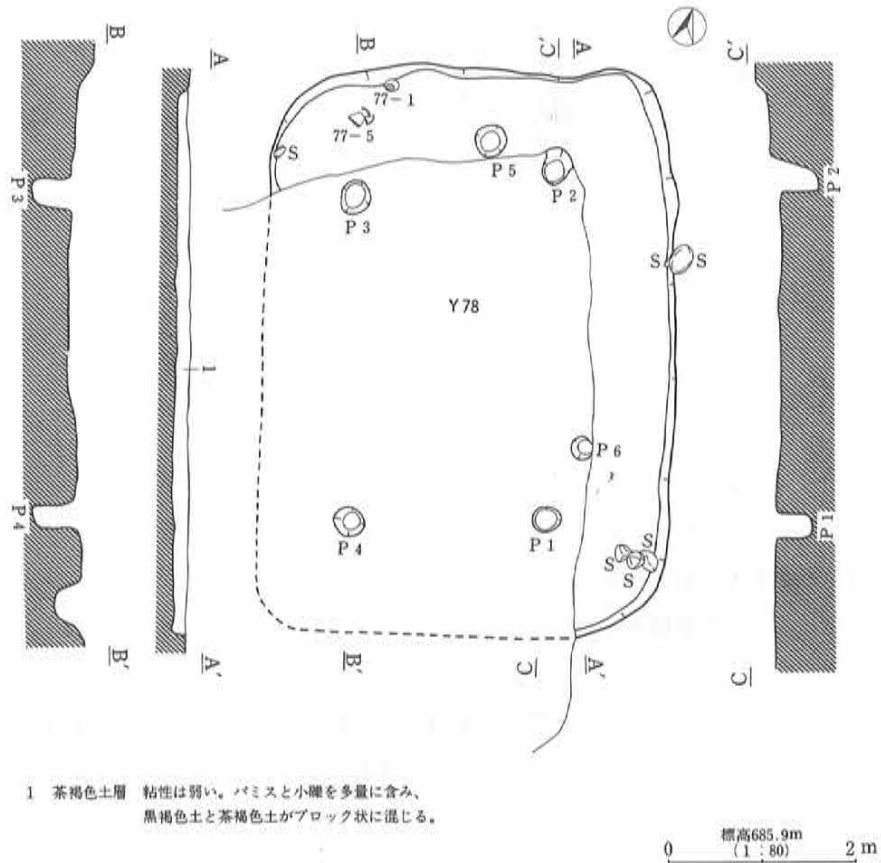
遺構（第76図、図版 三十四）

本住居址は台地の南部の西側、さ・し-24、こ・さ・し-25、こ・さ-26グリッド内に位置している。Y78・80・81・110・113号住居址と重複関係をもち、Y78・80号住居址に西壁・南壁の大半と床面中央部の大半を破壊されている。プランは東西の短軸長402cm（推定）、南北の長軸長557cm（推定）、東壁長560cm、西壁長528cm（推定）、南壁長370cm（推定）、北壁長346cmの隅丸長方形を呈し、床面積23.53㎡（推定）をはかる。長軸方位はN-14.5°-Wをさす。

覆土は、黒褐色土と茶褐色土がブロック状にまざった土であり、人為的な堆積状態を示していると理解される。

確認面からの壁高は7.5~21cmを測り、壁体は上位を地山の黄褐色火山灰、下位を地山の砂層を利用して構築しており、平滑で堅固な壁面を構成している。床面からの立ち上がりは緩い。

床面は地山の砂層上に黒褐色土を埋めもどして、平坦に叩きしめた「叩き床」



第76図 Y76号住居址実測図

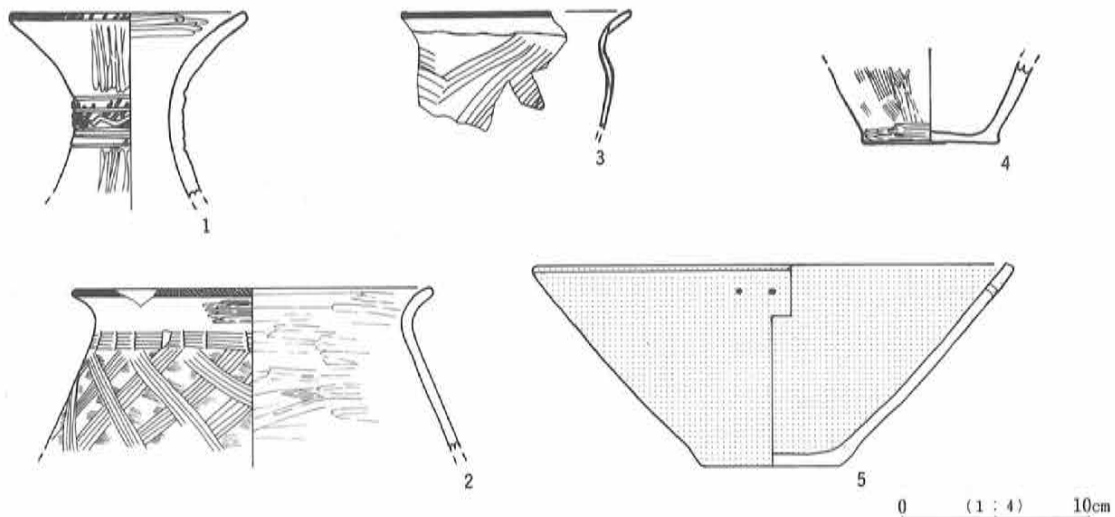
が全面に施されている。南壁際から北側へ向ってレベルが下がる傾向にあり、北西コーナー付近は特に低い。あまり堅固な構築状況と言えない。

ピットは6個検出された。支柱穴はP₁～P₄の4本が整然と配置されている。平面形態及び規模はこれらの支柱穴がY78号住居址に破壊された箇所からの検出であるため、残存値を示す。P₁は26×31cmの楕円形を呈し、28cmの深度を有する。P₂は42×28cmの楕円形を呈し、52cmの深度を有する。P₃は36×36cmの円形を呈し、42cmの深度を有する。P₄は32×33cmの円形を呈し、44cmの深度を有する。断面形はいずれもU字形を呈する。この他P₅はP₂・P₃の北側の支柱穴間の北西寄りに位置し、棟持柱と考えられる。33×33cmの円形を呈し、20cmの深度を有する。P₆はP₁の北東側に位置し、25×22cmの円形を呈する。深さは35cmを測る。

炉址は破壊部にあるため、検出されなかった。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が少量出土している。特に集中して分布する箇所はみられない。77-1（壺）が北壁下中央の西寄りから、77-3（鉢）もその近辺から、また、77-2（甕）が西区から出土している。いずれも共伴性は強い。
(小山)



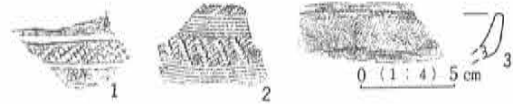
第77図 Y79号住居址出土土器実測図

第17表 Y79号住居址出土土器観察表

神 番 号	器種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
77-1	壺	12.4 < 9.5 -	口縁部は筒状の細い頸部より大きく外反する。口唇部は面取りされている。	内) 口縁部に横位のハケメ調整が施され、それ以下は磨減著しく不明。 外) 口縁部から頸部に横位のハケメ調整→縦位のヘラミガキ、頸部以下は斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にLR縄文を地文とし、4条のヘラ描横走平行線文と1条のヘラ描連続山形文が施され、口唇部にもLR縄文が施されている。	回転実測A No.1
77-2	甕	(19.2) < 9.0 -	最大径は胴部にある。口唇部は短く外反し、胴部は大きくふくらむ。口唇部は面取りされている。	内) ハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部に丁寧な横位のヘラミガキ、頸部以下は斜位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部にRL縄文、頸部に5本一組の櫛描縹状文（等間隔止め・右回り）、胴部以下は5本一組の櫛描斜格子目文が施されている。	回転実測B W区
77-3	甕	(15.6) < 6.4 -	最大径は口縁部にある。口唇部は面取りされている。	内・外面ともに、横位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部にLR縄文、胴部は4本一組の櫛描斜走線文が縦位羽状に施されている。	破片実測B 頸部外面に粘土紐の接合部が観察できる。
77-4	甕	- < 4.3 (7.0)	底部はやや張り出し気味である。	内) ヘラミガキが施されている。 外) 底部に横位のヘラミガキ、それ以上は縦位および斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B
77-5	鉢	(25.4) 10.7 7.2	口縁部は直線的に大きく開き、口唇部は面取りされている。口辺部に2孔1対の穿孔が施されている。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No.2

遺物 (第77・78図、図版 三十五)

本住居址からは、弥生土器が出土している。器種には壺・甕・鉢がある。



第78図 Y79号住居址出土土器拓影図

壺(77-1)は、口縁部が筒状の頸部から大きく外

反しており、頸部に文様帯を有する。頸部の文様は、LR縄文を地文とし、4条の篔描横走平行線文と、連続山形文が施されており、口唇部にもLR縄文が回転押圧されている。その他には、LR縄文を地文とする篔描横走平行線文の施された頸部破片(78-1)、LR縄文を地文とし、横走する櫛描文と櫛描連続刺突文を組み合わせた胴部破片(78-2)などがある。

甕は、77-2・3があり、両者とも口唇部にLR縄文が回転押圧され、櫛描斜走直線文が主として施されているが、その文様は、77-2が斜格子目文を、77-3が縦位羽状をそれぞれ構成している。また77-2は頸部に櫛描簾状文(右回り)が等間隔止めて施されている。器形では、口縁部が外反する点では共通するが、77-2の最大径は胴部に在り、77-3の最大径は口縁部に在る。他に、口縁部が受口形態をとり、櫛描波状文の施された78-3の口縁部破片や、内面にヘラミガキの施された底部資料(77-4)がある。

鉢(77-5)は、内・外面ともに赤色塗彩が施され、口辺部は大きく開き、口唇部は面取りが施されている。また、口辺部には、焼成前に施された2孔一対の穿孔を有する。

以上、本住居址の所産期は、伴出する遺物の特徴より、弥生時代中期後半として考えられる。(篠原)

19) Y80号住居址

遺構 (第79・80図、図版 三十四・三十五)

本住居址は台地南部の西側、さ・し・す-25・26グリッド内に位置している。Y78・79・81・110号住居址と重複関係をもち、これらを破壊している。

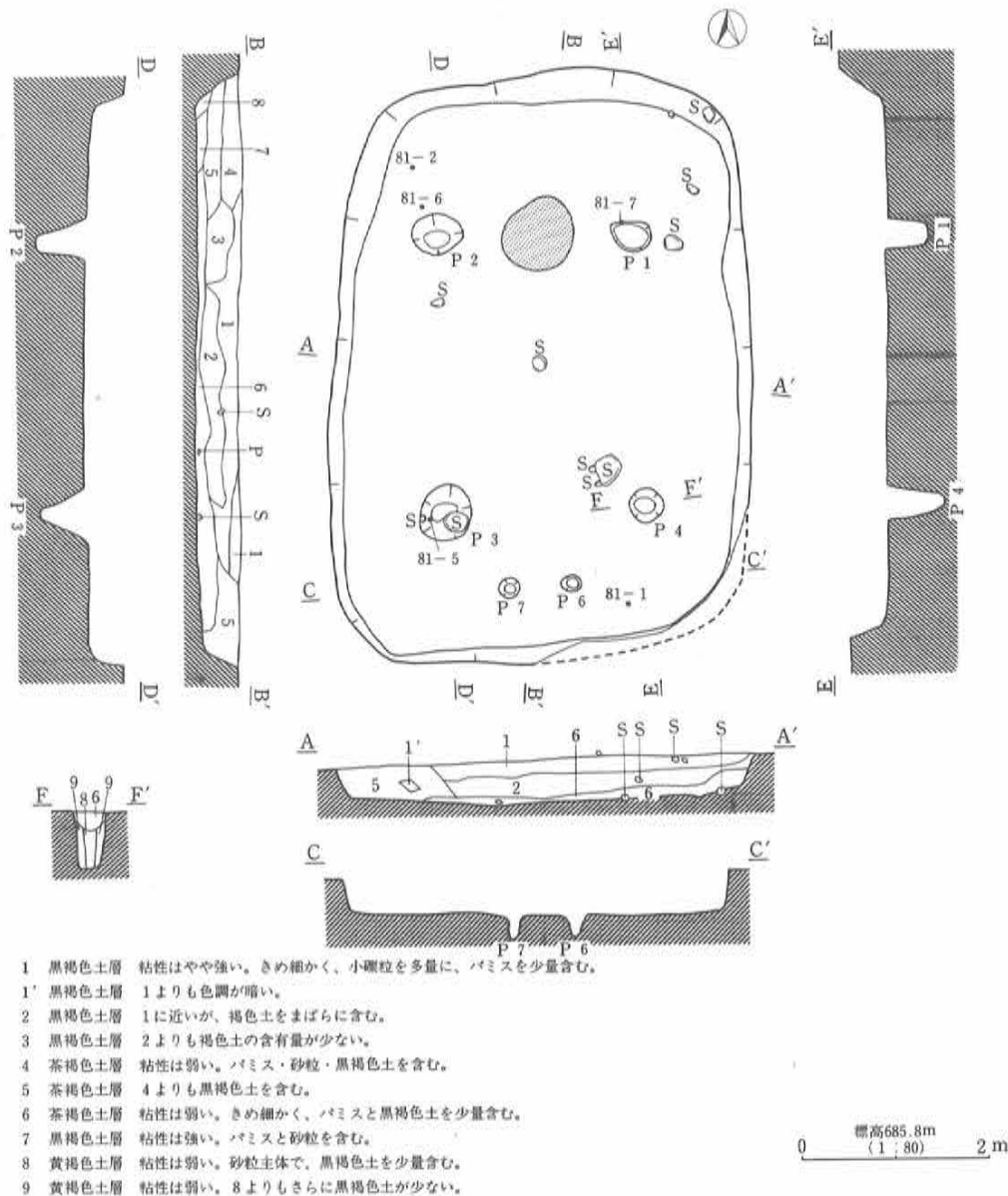
プランは、東西の短軸長413cm、南北の長軸長577cm、東壁長476cm、西壁長545cm、南壁長364cm、北壁長325cmの隅丸長方形を呈し、床面積は21.92㎡をはかる。長軸方位はN-3.5°-Eをさす。

覆土は大別で四層、細別で七層からなり、プライマリーな堆積状態を示していると理解したい。上層部の第1・1'・2・3層は住居址の中央部に最も厚く、住居址壁に近づくに従って薄い堆積を示すレンズ状の堆積土である。いずれも黒褐色土をベースとし、第1層はパミスを少量、砂粒を多量に含む。第1'層は第1層よりも色調が暗い。第2層は第1層と近似するが、褐色土をまばらに含み、第3層は褐色土の含有量が更に少ない。第4・5層は北・西・南壁際に堆積し、東壁側にはみられない。また、第4層は北壁際にのみみられる。ベースとなるのは茶褐色土であり、パミス、砂粒、黒褐色土を含む。第5層は第4層にくらべ黒褐色土が多い。第6層は床面上に5~20cmの厚さで広く堆積する。きめ細かい茶褐色土で黒褐色土とパミスをごく少量含む。第7層はパミスと砂粒を含む黒褐色土、第8層は砂粒主体で黒褐色土を含む黄褐色土で、北壁下の床面上に薄く分布し、壁体の崩落に関わるものと考えられる。

確認面からの壁高は31.5~49cmを測り、極めて良好な残存状態である。壁体は、重複箇所の上位はY78・81・110号住居址の覆土を、下位は地山の砂層を利用して構築されており、重複関係のない箇所の上位は地山の黄褐色火山灰層、下位は地山の砂層によって構築されている。床面からの立ち上がりは割合急傾斜である。壁面はおおむね平滑であり、堅固な構築状況である。

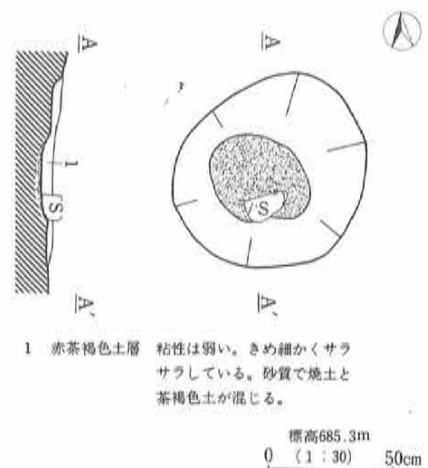
床面は、地山の砂層まで掘り窪めたのち、平坦化し、茶褐色土を薄く埋めもどして、叩きしめた「叩き床」が全面に施されている。全体にフラットな面が構築されており、凹凸も少ないが、粘性に欠け、薄く施されているためにもろく、剥がれ易い。

ピットは6個検出された。主柱穴P₁~P₄は4本、住居址の四隅に整然と配置されている。P₁は31×44cmの東

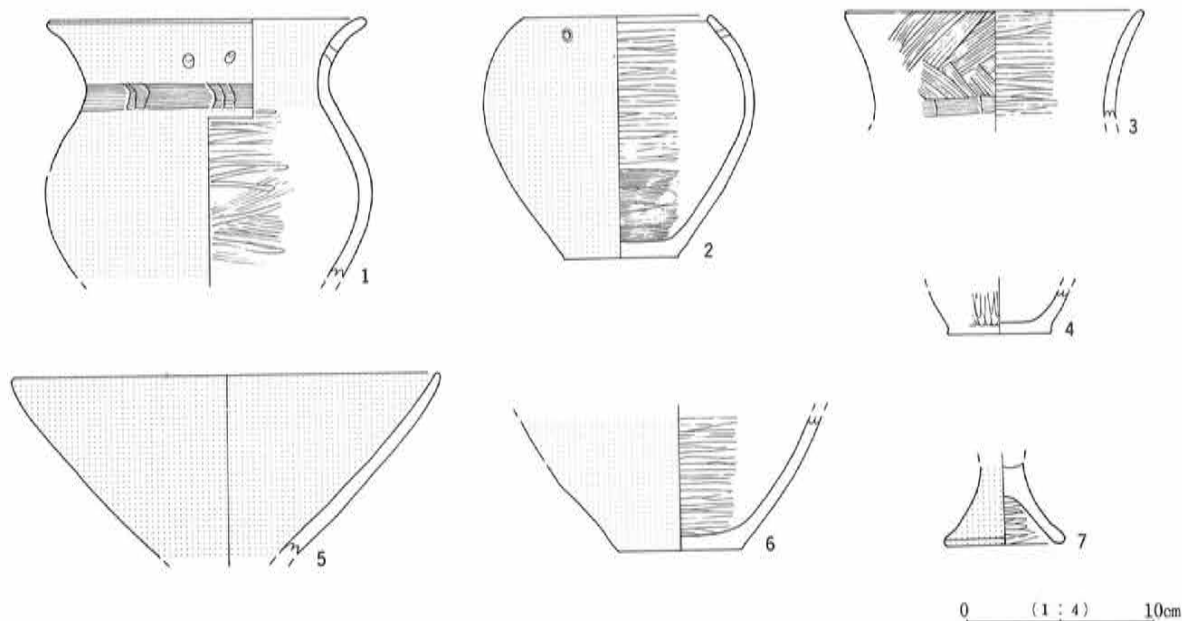


第79図 Y80号住居址実測図

西に長い楕円形を呈し、43cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は45×55cmの東西に長い楕円形を呈し、52cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は61×54cmの円形を呈し、45cmの深度を有する。断面形は底面は丸味をもつもの、おおむねU字形を呈する。P₄は37×38cmの円形を呈し、61cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。支柱穴内覆土は柱痕の残るP₄のみを観察した。最上層は住居址第6層で、半円状に堆積する。第8層は柱痕にあたり、黄褐色の砂粒主体で黒褐色土を少量含む。第9層は木柱を設置したのちに柱穴内を充填した土と考えられ、黄褐色土主体で、黒褐色土の含有量は更に少ない。P₆・P₇は南壁下中央に整然と並んでおり、入口施設に関わる柱穴と考えられる。極めて小規模でP₆は16×21cmの楕円形、P₇は22×22cmの円形を呈する。深さはそれぞれ24cm、25cmを測り、断面形はU字形を呈する。



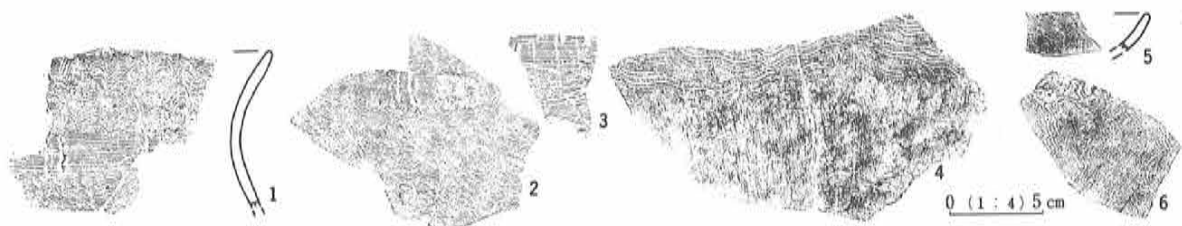
第80図 Y80号住居址炉址実測図



第81図 Y80号住居址出土土器実測図

第18表 Y80号住居址出土土器観察表

挿 番	回 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
81-1		深鉢	16.2 <13.7> - 17.4	最大径は胴部中位にある。口縁部は緩く外反し、胴部は球形を呈する。また口縁部中位に2孔一対の穿孔が対称2箇所施されている。	内) 口縁部から頸部は赤色塗彩・丁寧な横位のヘラミガキが施され、胴部上半は横位のヘラミガキ、下半はハケメ調整が施されている。 外) 全体に赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に10本一組の襷状文(3通止め)が施されている。	回転実測A No.8 外面に煤の付着が著しい。
81-2		無頸壺	(10.0) <12.8> 6.0	最大径は胴部上位にある。また上部に焼成前の一孔を有する。	内) 胴部上半に横位のヘラミガキ、下半に横位のハケメ調整が施されている。 外) 全体に赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.2、I区ベルト内
81-3		壺	(15.8) <5.7> -	口縁部は長く緩く外反する。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 口縁部に6本一組の柵斜走直線文が横位羽状(右回り)、頸部は7本一組の柵襷状文が施されている。	回転実測B II区、III区ベルト内
81-4		壺	- <2.3> 5.5		内) ミガキが施されている。 外) 丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B P ₁
81-5		高杯	22.4 <9.5> -	杯部は逆「ハ」の字状に大きく開く。	内・外面ともに赤色塗彩・斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.6
81-6		鉢	- <6.9> 6.5		内) 横位のヘラミガキが施され、数箇所赤色塗彩痕が残る。 外) 全体に赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.3
81-7		高杯	- <4.3> (6.1)	脚部は「ハ」の字状に開き、下端部で外反する。	内) 横位のヘラミガキが施され、赤色塗彩痕がわずかにみられる。 外) 赤色塗彩・丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.1



第82図 Y80号住居址出土土器拓影図

炉址はP₁・P₂北側の主柱穴間の中央に位置する。77×77cmの円形を呈しており、長軸方位はほぼ真北をさす。床面からの掘り込みは最深部で8cmを測り、断面は弓状を呈して丸味を帯びる。火床部は掘り込み内の中央よりもやや南西寄りにあり、33×44cmの楕円形の焼土の広がりをもつ。この焼土範囲は地山の砂層が焼け込んだものであるが、あまり強い燃焼をうけていないように思われる。火床部の南側には長さ18cmの角礫が置かれ、炉縁石と考えられる。覆土は、砂質で焼土と茶褐色土がまざったきめの細かい土1層がみられる。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が割合多量に出土しているが、覆土中から出土した土器、石器は弥生中期後半のものとの混入が著しいため、床面上あるいはその真上の遺物を共伴遺物と見做し、図化してある。遺物分布は特に集中する箇所はみられない。82-7（高坏）がP₁の北側、81-2・6（無頸壺・鉢）がP₂の北側、81-5（高坏）がP₃上、81-1（深鉢）が南壁下の中央よりも東寄り、81-3（甕）がII・III区ベルト内、81-4（甕）がP₁内から出土している。この他、I区からは82-3・4（甕）、III区からは82-1・2・5（甕・壺）が出土している。82-6は共伴遺物とは見做せないが、類例の稀少な資料であるため図化した。IV区からの出土である。（小山）

遺物（第81・82図、図版 三十五）

本住居址からは、弥生土器が出土している。器種には、壺・甕・鉢・高坏がある。

壺は、81-2と82-5があり、共に赤色塗彩が施されている。81-2は、無頸壺で、最大径は胴部上位にあり、上部には焼成前の1孔を有する。赤色塗彩は外面に施され、内面調整は下位に横位のハケメ調整、それ以上は横位のへらミガキが施されている。82-5は、口縁部上端でやや内湾する破片資料であるが、口縁部上位には櫛描波状文が施され、赤色塗彩は施文部以外の内外面に施されている。

甕は、頸部を残存する81-3、82-1・2・3は全て頸部に櫛描簾状文（右回り）を施している。81-3は口縁部に6本一組の櫛描斜走直線文を横位羽状（右回り）に施した後、頸部に等間隔止めの櫛描簾状文が施されている。82-1は、上方から下方に4～6本一組の櫛描波状文を施した後、頸部に11本一組の櫛描簾状文が2連止めで施されている。82-2は、12本一組の櫛描簾状文が3連止めで施された後、頸部の上・下にそれぞれ12本一組の櫛描波状文が施されている。82-3も多連止めの簾状文を施した後、櫛描波状文が施されている。甕は他に、内面に横位のへらミガキ、外面に縦位のへらミガキが施された底部（81-4）、櫛描波状文施文後に、縦位のへらミガキが施された胴部破片（82-4）がある。口縁部形態は、頸部から緩く、長く外反している。

鉢は、81-1・6共に赤色塗彩が施される。81-1は、口縁部が緩く外反し、胴部は球形を呈し、最大径は胴部中位にある。また、口縁部中位に2孔一対の穿孔が対象2箇所に施されている。赤色塗彩は、内面頸部以上と外面全体に施されており、頸部には10本一組の櫛描簾状文（3連止め・右回り）が施文されている。81-6は内面に横位のへらミガキ、外面に赤色塗彩が施された体部下半の資料である。

高坏は、81-5・7で共に赤色塗彩が施されている。81-5は、直線的に開き、端部で僅かに内湾する坏部で、赤色塗彩は内・外面の全体に施されている。81-7は「ハ」の字状に開き、下端部で僅かに外反する小さな脚部である。赤色塗彩は外面全体に施され、内面は横位のへらナデが施される。

尚、稀少資料として図化した82-6は、3～4本一組の波状文が垂下しており、その上方には横走すると思われる櫛描文が、下方には横走する櫛描波状文が施文されている。

以上、本住居址出土の遺物は、赤色塗彩の傾向が顕著で、甕の頸部にしっかりした櫛描簾状文の施される資料が多く、本住居址の所産期は弥生時代後期前半と考えたい。（篠原）

20) Y81号住居址

遺構 (第83・84図、図版 三十六・三十七)

本住居址は台地南部の西側し・すー25・26グリッド内に位置している。Y78・80・113号住居址と重複関係を持ち、Y78・80号住居址に北側を破壊されており、Y113号住居址の大半を破壊している。

プランは北側が破壊されているため、全容が推定できず、南壁長が346cmをはかることが知られるのみである。従って、面積も形態も長軸方位も不明である。

覆土は2層からなる。後世に強い土圧をうけているために、いずれも極めて固い。第1層は第2層堆積ののちに堆積しており、住居址の東側半分以上に広く分布している。パミスを多量に、小砂粒を少量含む黒褐色土である。第二層は住居址の西側に分布する。黄褐色火山灰と砂粒がまじったものである。

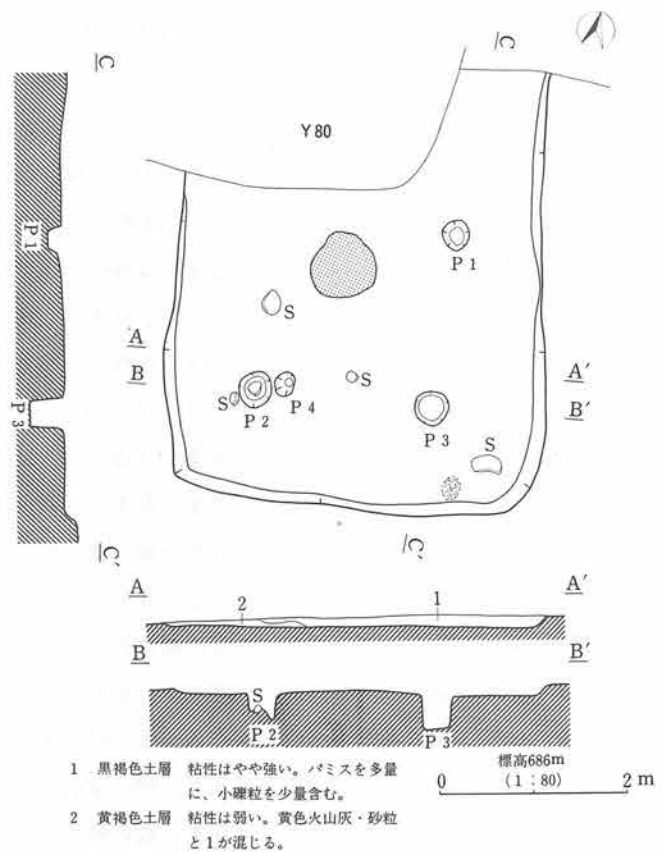
確認面からの壁高は2.5~13.5cmをはかり、南壁の残存状態が良好である。壁体は、地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、極めて堅固で平滑なつくりである。床面からの立ち上がりは割合緩い。

壁溝は検出されなかった。

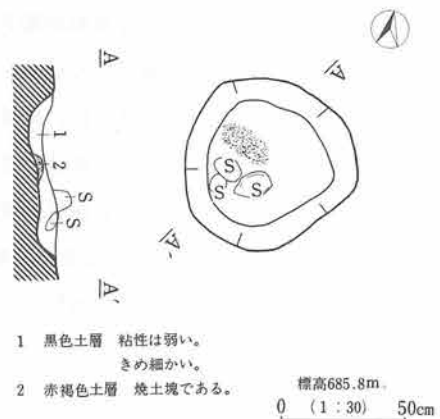
床面は、地山の黄褐色火山灰層上に茶褐色土を薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が全面に施されている。非常に堅緻につくられており、また、極めて平坦でもある。

ピットは4個検出された。南側にならぶP₃・P₄は支柱穴と考えられる。P₂は38×35cmの円形を呈している。掘り込み内底面に強固に突きささった礫を、結局引き抜くことができなかつたため、深度、断面形は明らかでない。P₃は36×36cmの円形を呈し、38cmの深度を有する。断面形は底面がほぼ平坦な逆台形状を呈する。この他、P₁は炉址の東側に位置している。33×30cmの円形を呈し、14cmの深度を有する。断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。何の機能をもっていたかは不明である。P₄はP₂の東側に近接する。25×21cmの楕円形を呈する小規模なものであり、深さも11cmと浅い。P₂を補助する役割を果していたとも考えられる。

炉址は住居址のほぼ中央に位置すると考えられる。平面形態は70×69cmのほぼ円形を呈し、長軸方位はN-2°-Eをさし、ほぼ真北を向く。床面からの掘り込みは最深部で9cmを測り、断面形はおおむね逆台形状を呈するが、中央部に若干の盛り上がりをもつ。本炉址の場合はこの掘り込み内で機能していた可能性が少なく、掘り込み内に床面とほぼ同レベルにまで充填された黒色土上で機能していたと考えられる。この黒色土上の南側には長さ20cmを最大とする角礫が3個置



第83図 Y81号住居址実測図



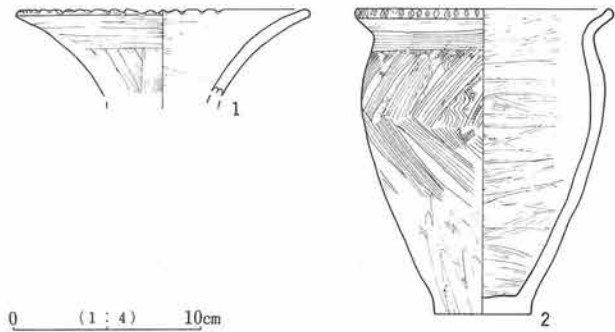
第84図 Y81号住居址炉址実測図

かれており、炉縁石として使われていた可能性は強い。火床部に当たる部分は、黒色土上では焼土範囲がはっきりとわからないため、不明である。黒色土の下の焼土塊（第2層）は火床部とは考え難い。

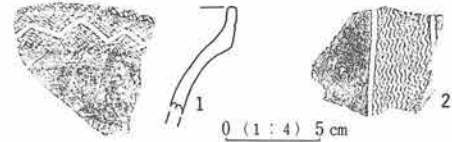
遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているが、その量は少ない。遺物分布の傾向も特に集中する箇所はみられず、極めて散漫な分布傾向を示している。

図化した85-1（壺）は北区と南区の間で接合関係をもつ。床面上からの出土である。85-2（甕）は炉内と北区の床面上に分布する。また、86-1（壺）は南区から、86-2（壺）は北区から出土している。本住居址の出土土器はいずれも住居廃絶後の投棄遺物と考えられるが、本住居址の所産期を決定する資料と考えて大過ない。



第85図 Y81号住居址出土土器実測図



第86図 Y81号住居址出土土器拓影図

(小山)

遺物（第85・86図、図版 三十七）

本住居址からは、弥生土器が出土している。器種には壺・甕がある。

壺は、口縁部が大きく外反する85-1と、受口状を呈する86-1がある。85-1は、口唇部に篋描の刻目が施され、頸部に横走る篋描沈線が僅かに残存している。内面には横位の刷毛目調整の後、横位のヘラミガキが施されており、外面は縦位の刷毛目調整の後、口縁部上位にヨコナデが施されている。86-1は、口縁部にLR縄文を地文とする篋描連続山形文が施され、口唇部にもLR縄文が回転押圧されている。調整は、内面に横位の刷毛目調整の後、横位のヘラミガキが施され、外面は磨滅が著しく不明である。その他には、垂下する櫛描波状文の左右端を篋描沈線で区画する胴部破片（86-2）がある。

甕（85-2）は、口唇部に篋描の刻目をもつ。文様は頸部から胴部下位に集中しており、LR縄文を地文とし、頸部に7～8本一組の櫛描横走平行線文を一巡させた後、頸部以下に櫛描斜走直線文が横位羽状に施されている。また、一部に斜走直線文の施文以前に櫛描波状文が2帯程垂下されている。器形は、口縁部が短く外反し、端部でつまみ上げるように立ち上がっており、胴部は上位でややふくらむが、最大径は口縁部にある。色調は黒色を呈しており、他に比して異様である。

以上、本住居址の所産期は、出土遺物の特徴より、弥生時代中期後半に求められる。

(篠原)

第19表 Y81号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
85-1	壺	15.6 < 4.6 -	口縁部は大きく外反する。	内) 横位のハケメ調整→横位および斜位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のハケメ調整の後、口縁部にヨコナデが施されている。 文) 口唇部にヘラ描による刻目が施されている。	回転実測A N区、S区床面上
85-2	甕	13.6 16.2 5.2 13.8	最大径は口縁部にある。口縁部は短く外反し端部でつまみ上げるように立ち上がる。胴部は上位でややふくらむ。	内) ハケメ調整→横位の粗いヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にヘラ描の刻目、口縁部から胴部中にLR縄文を地文とし頸部に7～8本一組の櫛描横走平行線文(右回り)、胴部に櫛描斜走直線文が横位羽状に施されている。また、斜走直線文が施される前に櫛描波状文が垂下された痕も観られる。	回転実測B N区、炉内

21) Y82号住居址

遺構 (第87図、図版 三十六・三十七)

本住居址は台地南部の最西端、こ・さ-27・28グリッド内に位置している。他遺構との重複関係はもたないが、住居址の南西側は既に削平されている。

このため、プランを推定することも不可能であり、東壁長560cmを計測するにすぎない。従って、床面積、長軸方位も不明である。

覆土はパミスと砂粒を少量含む茶褐色土(第1層)が、南壁下周辺に認められたのみで、他はほとんど削平されている。

確認面からの壁高は残存する東・南壁で3.5~28.5cmを測り、東壁の残存状態は比較的良く床面からの立ち上がりは緩い。壁体は上位を地山の黄褐色火山灰層、下位を地山の砂層によって平滑に構築されているが、もろく崩れ易い。

壁溝は壁体の残存部の直下のほとんどにめぐっており、住居址を全周していたことも考えられる。南東コーナー下に2箇所の断絶をもち、壁溝幅は10~17cmを測る。床面からの深さは、3~15cmを測り、断面形はU字形を呈する。

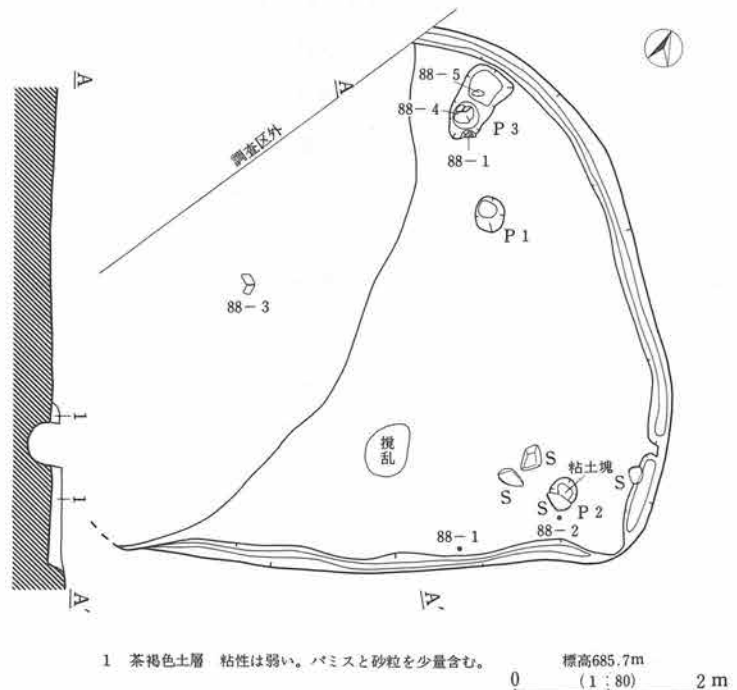
床面は地山の砂層上に茶褐色土を埋めもどし、平坦にたたきしめた「叩き床」が施されており、残存部はおおむねフラットで堅い。

ピットは3個検出された。主柱穴と考えられるのはP₁のみで、住居址北側に位置する。37×32cmの楕円形を呈し、69cmの深度を有する。P₂は南東コーナー付近に位置し、29×28cmの円形を呈する。深さは28cmを測り、掘り込み内には3.04kgの重さをもつ粘土塊が検出されている。P₃は84×41cmの不整楕円形を呈し、南側が深いテラス状の掘り込みを有する。深さは最深部で61cmを測る。P₂は粘土貯蔵施設としての機能が考えられるが、P₃については不明である。

炉址は検出できなかった。

遺物の出土状況

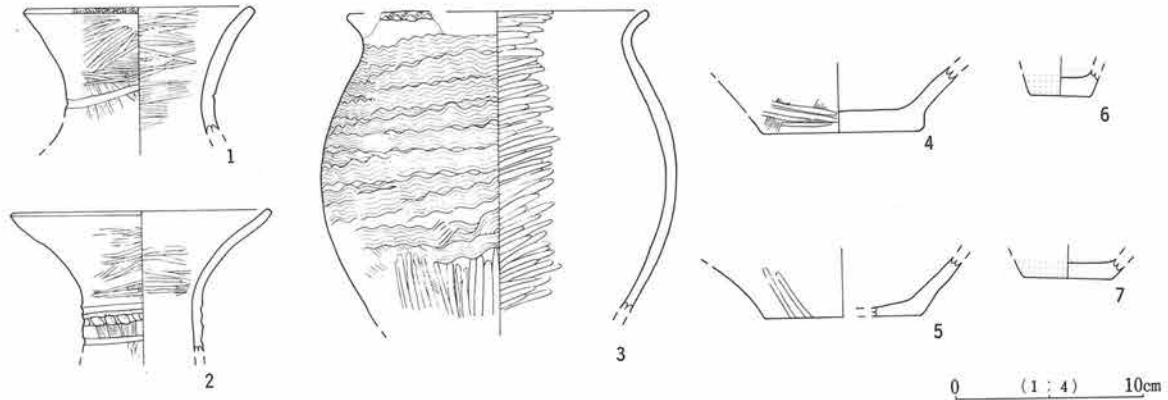
本住居址からの遺物の出土量は少なく、上面を近年の耕作等による影響を受けているために、同一個体の破片が各所に散乱する。付近に他の遺構がないため、往時の住居エリア内から、出土した遺物も残存する床面範囲外からの出土であっても共伴遺物とみなしたい。遺物分布はP₃上に集中し、88-1・4・5(壺)が出土している。この他、南壁下西側に、90-1・2(磨製石斧・台石)、また、88-2・3・6・7(壺・甕)、89-1(壺)が西区(床面範囲外も含む。)に散在する。



第87図 Y82号住居址実測図

遺物 (第88・89・90図、図版 三十七)

本住居址の出土遺物には弥生土器・石器



第88図 Y82号住居址出土土器実測図

第20表 Y82号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
88-1	壺	12.3 < 6.8> —	口縁部は緩く外反し、口唇部は面取りされている。	内) 横位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文、頸部にヘラ描横走平行線文が施されている。	回転実測A No 2、W区1層
88-2	壺	(13.8) < 7.5> —	口縁部は筒状の頸部から外反し、端部でやや内弯する。口唇部は面取りされている。	内) 横位のハケメ調整→丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部上位にヨコナデ、下位は縦位のハケメ調整→横位のヘラミガキ、頸部は縦位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部に2条のヘラ描横走平行線文によって区画された中に、ヘラ描による刺突文が充填されている。	回転実測B W区1層
88-3	甕	(15.8) < 16.1> — (18.7)	口縁部は短く外反し、胴部は大きくふくらみ中位で最大径を以って球形を呈する。	内) 横位および斜位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位ハケメ調整→文様施文→胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文を地文としヘラ描による刻目が施され、頸部以下は6本一組の描描波状文(右回り)が基本的には上から下へ施されている。	回転実測B No 5、な46グリッド内覆土
88-4	壺	— < 3.4> 8.4		内) 磨減著しく不明。 外) 縦位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No 1
88-5	壺	— < 3.2> (8.4)		内) 磨減著しく不明。 外) 雑な縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No 3
88-6	鉢	— < 1.2> 4.8		内・外面とも赤色塗彩・ヘラミガキが施されている。	回転実測A W区1層
88-7	小型甕?	— (1.5) (3.2)		内) ハケメ調整→ヘラミガキが施されている。 外) ナデが施されている。	回転実測A W区

がある。

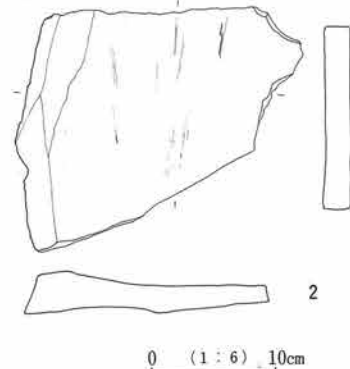
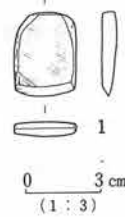
弥生土器の器種には壺・甕・

鉢がある。

壺はいずれも単純口縁を有する細頸壺で、口唇部は面取りされている。88-1は口縁部がゆるく外反する。胴部以下は欠損している。文様は口唇部に縄文、頸部に篋描横走平行線文が1条施されている。88-2は、口縁部が大きく外反したのち上位でやや内弯気味に立ち上がる。頸部は2条の篋描横走平行線文の区画内に



第89図 Y82号住居址出土土器拓影図



第90図 Y82号住居址出土土器実測図

篋描刺突文が充填されている。1・2とも刷毛目調整をへらミガキで消している。また、細片ではあるが、89-1も単純口縁の壺で口唇部に縄文施文のち、篋描の刻目を施している。88-4・5は底部片である。

甕で形態を知り得るのは88-3のみである。短かく外反する口縁部から胴部は球形に大きくふくらむ。口唇部はLR縄文を地文として篋描の刻目、頸~胴部下位までは櫛波状文が9帯隈なく施される。88-7は小型の甕の底部片である。鉢88-6も底部片であるが、内外面に赤色塗彩が施されている。

石器には磨製石斧90-1と台石90-2がある。1はチャート製の小型偏平片刃石斧、2は安山岩製である。

以上、本住居址の所産期は上記の共伴遺物から弥生時代中期後半と考えられる。(小山)

22) Y83号住居址

遺構 (第91・92図、図版 三十八・三十九)

本住居址は台地南部の西端、く・けー26・27・28グリッド内に位置し、北西部の半分以上は調査区外のため、未調査である。また、南壁の西側も攪乱されている。このため、平面プラン、規模、長軸方位は不明である。

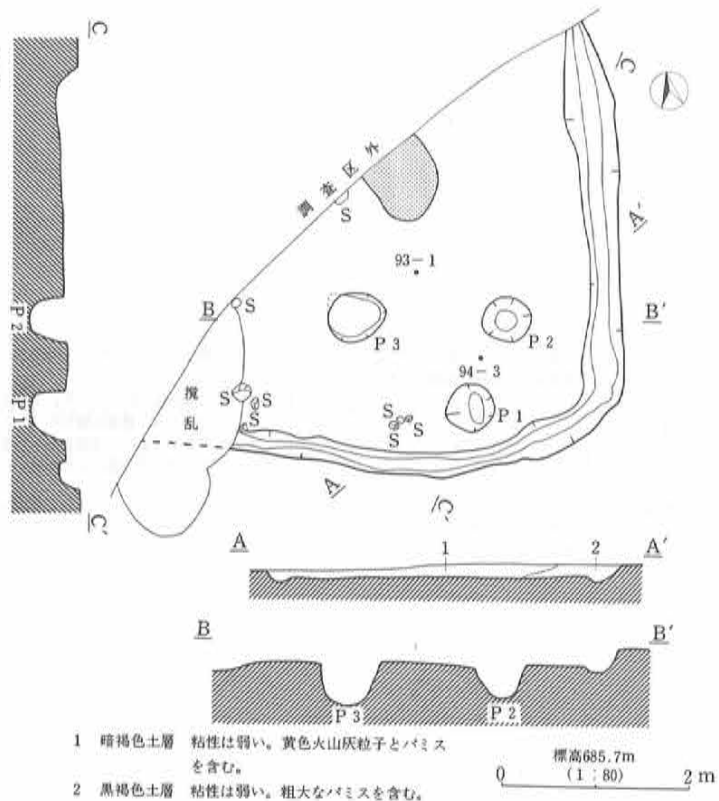
覆土は二層からなる。第1層は暗褐色土、第2層は黒褐色土である。

確認面からの壁高は残存部で6~22cmを測り、東壁の残存状態が良い。壁体は地山の黄褐色火山灰層、砂層を利用して構築され、床面からの立ち上りは緩い。

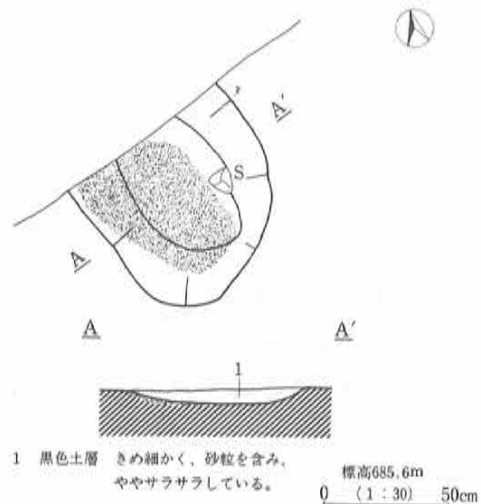
壁溝は、残存する壁直下を全周する。壁溝幅は11~39cmを測り、断面形はU字状を呈する。深さは4~8cmを測る程度で割合浅い。

床面は黄褐色の砂層まで掘り込んで、平坦化したのちに、茶褐色土を薄く埋めもどして叩きしめた「叩き床」が全面に施されている。おおむね平坦で堅固な構築状態であるが、南壁側から、北側へ向ってレベルを低下させている。

ピットは3個検出された。いずれも住居址の南側に掘り込まれている。このうち、P₂が主柱穴と考えられる。46×52cmの東西に長い楕円形を呈し、32cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃もP₂の西側に並んでおり、柱穴と考えることもできる。50×61cmの東西に長い楕円形を呈し、47cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₁は南壁下の東側に位置し、機能については判然としない部分が多い。49×52cmの円形を呈し、36cmの深度を有する。断面形はU字形を呈



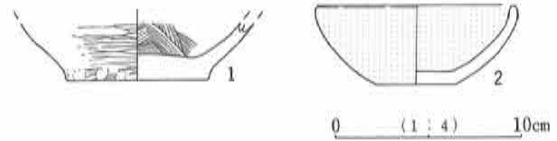
第91図 Y83号住居址実測図



第92図 Y83号住居址炉址実測図

する。

炉址は住居址のほぼ中央に位置していると考えられる。全体の形状は北西の一部が未調査区に存在するため不明であるが、楕円形を呈するものと判断される。断面形は弓状を呈し、床面からの掘り込みは最深部でも4cmと浅い。火床部は掘り込みの南西部に偏在し、長さ57cm以上、幅41cmの楕円状の地山がそのまま焼け込んだ焼土範囲を有する。



第93図 Y83号住居址出土土器実測図

焼土範囲の北東及び北部には各1個ずつの礫が分布しているが、この位置で使用時に機能していたものかは判断できかねる。覆土は、砂粒を含むややサラサラとした、きめ細かい黒褐色土1層のみからなる。



第94図 Y83号住居址出土土器拓影図

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているがその量は極めて少ない。また、全体の遺物の分布傾向も、特に集中的に分布する箇所はみられず、散漫な分布傾向を示す。93-1 (壺の底部) が炉址南側の床面よりも2cm浮いたレベルから出土し、93-2 (鉢) が北区の第1層内から出土している。また、93-3 (甕) はP₁・P₂間に位置し、ほぼ床面上から出土している。この他、94-1・2・4 (甕) は南区の1層内から出土している。これらの遺物は垂直分布からみれば、大きなレベル差はみられず、大方が同一時期に投棄されたものと見做すことができる。従って、本住居で直接使用されたものではないと理解されるものの、本住居址の所産期を推定する資料にはなり得よう。

(小山)

遺物 (第93・94図、図版 四十)

本住居址からは、弥生土器が出土している。そのうち2点を実測し、4点を拓影して図化した。弥生土器の器種には壺・甕・鉢がある。

壺には93-1の底部があり、平底で外傾して立ち上がる。内面の調整は刷毛目調整がなされており、外面は粗い横位のヘラナデが施されている。底部の外周縁には成形の時行われたと思われる指頭圧痕が明瞭に残っている。94-1の胴部の破片は篋描横走平行線文で区画し、篋による刺突文が平行に走っている。その他、図化できなかったが、頸部には篋描平行線文がみられる細頸壺の口縁部がある。

甕には、94-2の口縁部があり、口唇部面取りされてLR縄文が押捺されており、外面にはLR縄文を地文とし、篋描連続山形文が施されている、やや受口状となる口縁部である。94-3の胴部破片は、篋描斜走直線文が横位に施された後、篋による刺突文が横位に見られる。94-4も甕の胴部破片で篋描垂下直線文を施した後、帯状に篋描波状文が施されている。

93-2の鉢は、全器形がわかり、底部平底で口辺部内湾して端部で屈曲して直立する。内外面とも赤色塗彩されており、横位のヘラミガキにより調整されている。

以上、本住居址の所産期は、遺構の項で述べたように、これらの土器が同一時期に投棄されたものと見做すと、甕の文様構成等から弥生時代中期後半と考えて大過ないと思われる。

(高村)

第21表 Y83号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
93-1	壺	— (3.0) 7.7	底部の外縁に指頭圧痕が顕著である。	内) ハケ目調整が施されている。 外) 粗い横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No 2
93-2	鉢	(10.5) 4.2 (4.2)	口辺部は内湾気味に開き端部で屈曲し直立する。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B NE区1層

23) Y84号住居址

遺構 (第95図、図版 三十八・三十九)

本住居址は、台地南部の西端、か・き・く-23・24・25グリッド内に位置している。第2号溝状遺構、Y85号住居址と重複関係を持ち、住居址の中央部を2m内外の幅で南北に縦走する第2号溝によって、南壁の中央部、および住居址中央部の覆土を破壊され、Y85号住居址を破壊している。また、西壁の中央部、東壁のコーナー付近も攪乱されており、住居址の北側半分以上は調査区外のため未調査である。

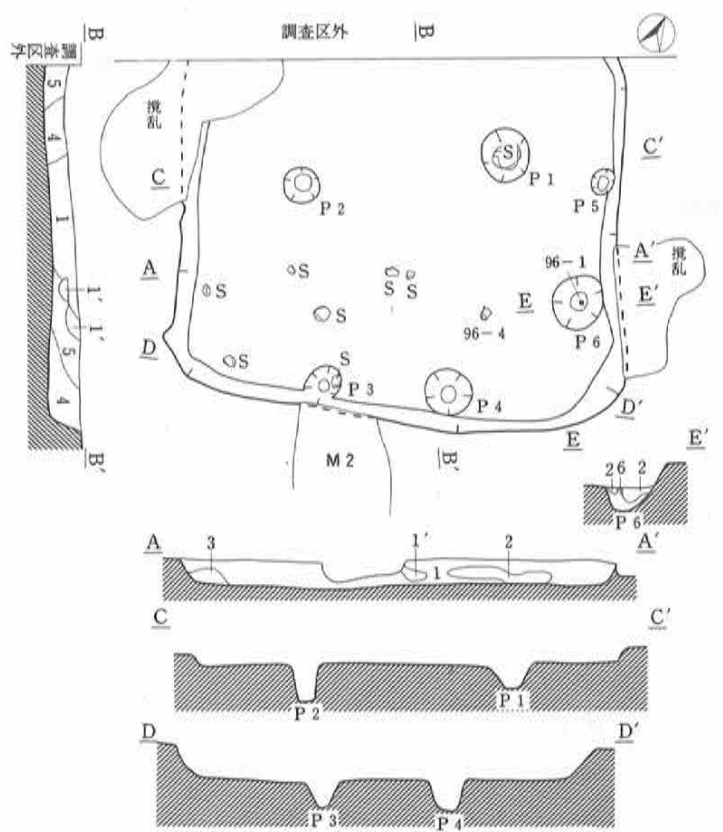
このため、住居址の正確な全体規模、平面プラン、長軸方位は不明であり、南壁長443cmが計測できるのみであるが、長方形を呈することは推定できる。

覆土は五層からなる。第1層は暗褐色土で微粒の砂粒とパミスを多量に含み、住居址残存部中央の東西にわたって広く堆積する。第2層は住居残存部中央東側の床面上に小範囲で堆積し、第1層に包括される。微粒パミスと黄褐色砂粒を含む黒褐色土である。第3層は西壁残存部の中央直下に堆積する。きめの細かい黒褐色土である。第4、5層は住居址の南壁下及び、北側に堆積がみられ、北・南、2方向からの流入であったことがわかる。第4層は、砂粒主体の暗褐色土、第5層は砂粒のみの黄褐色土である。

確認面からの壁高は9.5~38cmを測り、残存状況は割合に良い。壁体は上位を地山の黄褐色火山灰層、下位を地山の砂層を利用して構築されており、床面からの立ち上がりは緩い。壁面はおおむね平滑であるが、砂層部分はおろく崩れ易い。

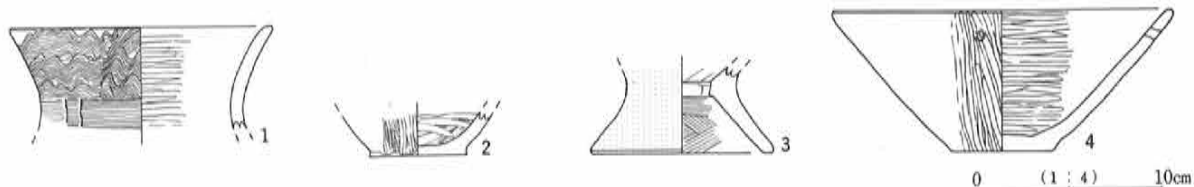
床面は、地山の砂層まで平坦に掘り窪めたのち、茶褐色土を全面に薄く埋めもどしてたたきしめられた「叩き床」が施されている。おおむね平坦であるが、特に堅固とは言えず、剥がれ易い。

ピットは6個検出された。このうち、主柱穴はP₁・P₂と考えられ、通常住居址全体の中にあつては南側に位置するものである。P₁は58×52cmの楕円形を呈し、25cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は35×37cmの円形を呈し、42cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃・P₄は南壁下中央に整然と並び入口施設に関連する柱穴と考えられる。P₃は33×36cmの円形を呈し、24cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は48×47cmの円形を呈し、33cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₅は東壁残存部の中央に位置する。26×25cmの円形を呈し、33cmの深度を有する。P₆は南東コーナー付近に位置する。56×53cmの円形を呈し、床面からは25cmの深度を有する。断面形は緩いU字形を呈する。覆土は上層部に第2層がみられる他は、



- 1 暗褐色土層 粘性は極めて弱い。微量の砂粒と $1\sim 3\text{cm}$ の小礫を多量に含む。
- 1' 暗褐色土層 砂粒主体。
- 2 黒褐色土層 粘性はやや弱い。微粒パミスと黄色砂粒を少量含む。
- 3 黒褐色土層 粘性はやや強い。きめ細かく、砂粒を含む。
- 4 暗褐色土層 粘性は極めて弱い。砂粒主体。
- 5 黄褐色土層 砂粒主体。
- 6 黄褐色土層 粘性は極めて弱い。黄色砂粒が主体で黒褐色土を極少量含む。

第95図 Y84号住居址実測図



第96図 Y84号住居址出土土器実測図

第22表 Y84号住居址出土土器観察表

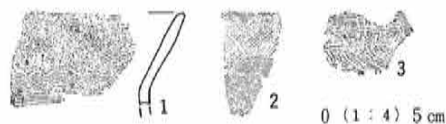
挿番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
96-1	甕	13.8 < 5.3> —	口縁部は「弓」状に外反し、口唇部は面取りされている。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 口縁部に10本一組の櫛描波状文(左回り)が上から下へ施文された後、頸部に11本一組の櫛描簾状文(2連止め・右回り)が施されている。	回転実測B II区、III区
96-2	甕	— < 2.2> 5.2		内) 斜位のハケメ調整→粗い横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A III区
96-3	台付鉢?	— < 4.4> —	台部は「ハ」の字状を呈し、台部と鉢部(?)が貫通している。	内) ハケメ調整が施されている。 外) 赤色塗彩・縦位および横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B II区
96-4	鉢	(18.0) 7.5 5.4	口辺部はほぼ直線的に開き、上位に焼成前の一孔を有する。	内) ハケメ調整→丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) ハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.1、II区、III区

第6層が主体を占める。黄褐色砂粒主体で黒褐色土をわずかに含む。

上層部からは偏平片刃石斧が出土している。

遺物の出土状況

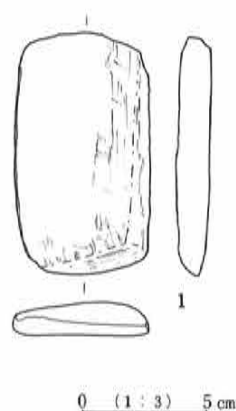
本住居址からは弥生土器・石器が出土しているが、全体の出土量は少なく、特に集中的に分布する箇所もみられない。また、床面上から出土した遺物も少なく、本住居址の所産期を決定できる内容をもつ資料に欠ける。覆土中から出土した遺物が多いが、一応図化した遺物を相伴遺物と見做しておきたい。96-2(甕)がIII区、96-3(台付鉢)、97-3(甕)がII区、97-1(甕)がIV区、97-2(甕)がI区からの出土である。また、96-1(甕)はII・III区、96-4(鉢)はII・III・IV区の広範囲にわたって分布する。98-1(偏平片刃石斧)はP。内からの出土である。(小山)



第97図 Y84号住居址出土土器拓影図

遺物(第96・97・98図、図版 四十)

本住居址からは、弥生土器・石器が出土している。弥生土器の器種には、壺・甕・台付鉢?・鉢がある。壺は無彩の平底の大きく外傾して立ち上がる底部がある。甕には96-1の口縁~頸部の部位があり、「弓」状に外反し、口唇部面取りされている。口縁部に10本一組の櫛描波状文が上から下へ施文された後、頸部には11本一組の2連止めの櫛描簾状文がなされている。内面調整は横位のヘラミガキが行われている。96-2の底部は平底で、丁度、粘土紐のつなぎ目で破壊している。内面の調整は斜位の刷毛目調整の後、粗い横位のナデが施されており、外面は縦位の刷毛目調整の後ヘラミガキがなされている。97-1の口縁部は櫛描波状文と櫛描簾状文がみられ、97-2・3は頸部から胴部の破片で横位羽状の櫛描斜走直線文が施文されている。96-3の台付鉢?は外面赤色塗彩されており、脚部と鉢部(?)が貫通した穴が見られるが、これはつなぎ目のホゾがぬけた跡と思われる。96-4の無彩の大形の鉢は、口辺部ほぼ直線的に開き、上位に焼成前の一孔がみられる。98-1はほぼ完形の凝灰岩質(?)偏平片刃石斧で刃部・片側辺・基部表面片側が研磨されている。以上の出土遺物から本住居址は弥生時代後期の所産と考える。(高村)



第98図 Y84号住居址出土石器実測図

24) Y85号住居址

遺構 (第99・100図、図版 三十九・四十)

本住居址は台地の内部の南部き・く-22・23グリッド内に位置している。Y84号住居址、第13号周溝と重複関係をもち、これらに、北東コーナー部、西壁の北半分、およびその周辺の床面を破壊されているが、全容を推定することは可能である。

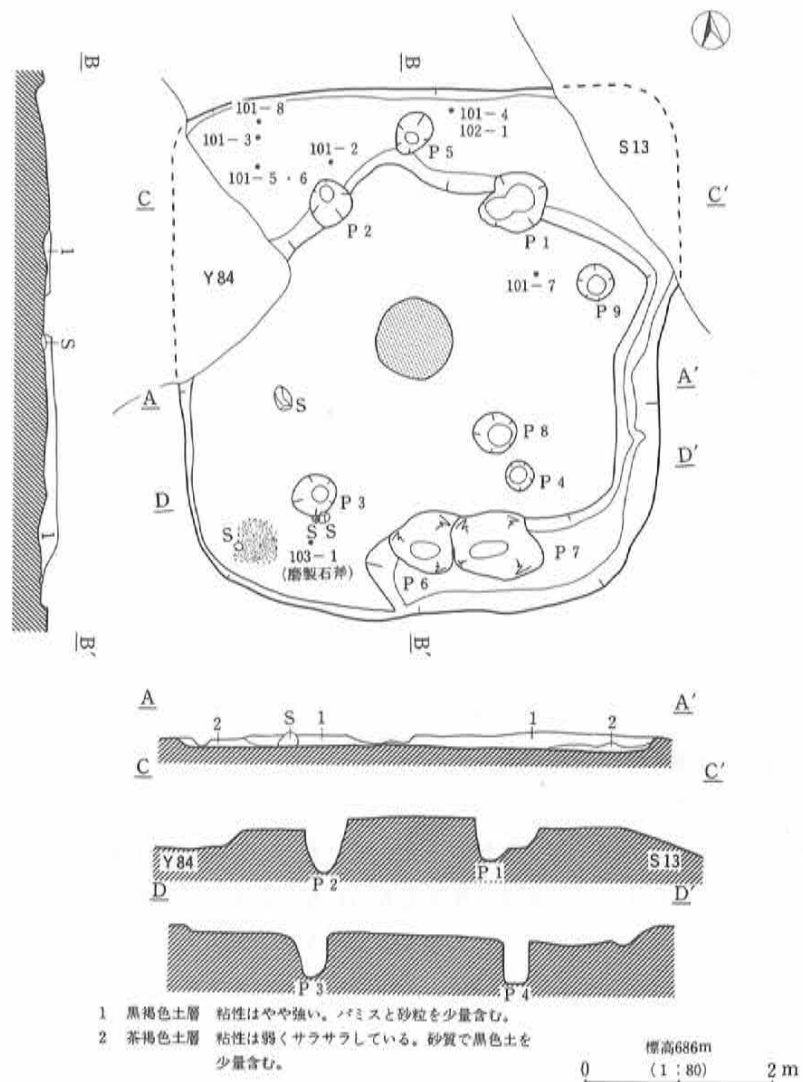
プランは東西の短軸長482cm (推定)、南北の長軸長537cm、東壁長467cm (推定)、西壁長450cm、南壁長427cm (推定)、北壁長482cmの隅丸長方形を呈するが、より方形に近いプランである。床面積は25.17㎡を測り、長軸方位はN-4°-Eとほぼ南北をさしている。

覆土は二層からなるが、極く薄い堆積で、既に削平されてしまっている部分もある。第1層はバミスと砂粒を少量含む黒褐色土であり、住居址の中央部を中心としてレンズ状に広範囲におたって堆積する。第2層は、北・東・南壁下にみられる第一的な堆積土であり、砂質で黒褐色土を少量含む茶褐色土である。おおむね、プライマリーな堆積状態と考えたい。

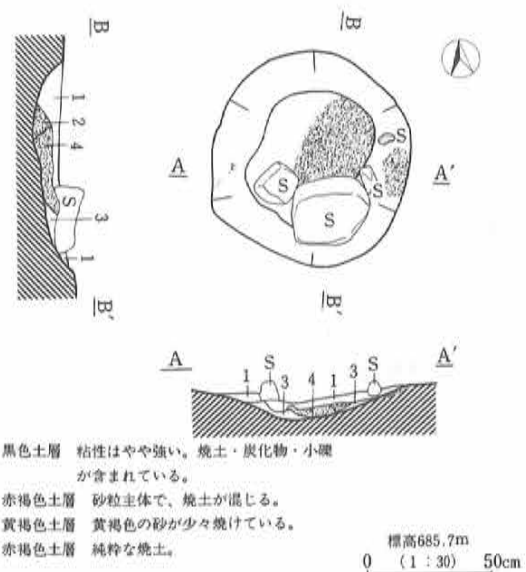
確認面からの壁高は8~16cmを測り、床面からの立ち上がりは、割合緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、おおむね平滑な壁面を形成している。また、割合に堅固であり、遺存状態も良い。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の黄褐色火山灰層、その下の砂層まで掘り窪めたのち、黒褐色土を埋めもどして平坦化し、叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね、平坦な構築状態であるが、やや軟弱で特に堅緻な箇所はみられない。尚、本住居址の床下は他遺構の状況とは異なり、北・東・南壁下に5~15cmの



第99図 Y85号住居址実測図



第100図 Y85号住居址炉址実測図

「コ」字状の掘り込みがみられる。北壁下における掘り込みの幅は広く、86~160cmの広がりを持ち、北側の支柱穴部分にまで及ぶ。東壁下の幅は狭く、25cm内外を測るのみであるが、南壁下においては掘り込み幅が更に拡大し、65cm内外を計測する。このような掘り方をもつ住居址は本遺跡内では他に類例がみられず、注目される資料である。

ピットは、9個検出された。支柱穴P₁~P₄の4本は整然と配置される。P₁は65×63cmの不整形円形を呈し、46cmの深度を有する。断面形は東側に一段のテラスを有する。P₂は51×45cmの円形を呈し、58cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は43×48cmの楕円形を呈し、48cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は、32×29cmの円形を呈し、46cmの深度を有する。断面形は円柱状を呈する。P₅は北壁下の中央に位置し、所謂「棟持柱」と考えられる。47×37cmの楕円形を呈し、48cmの深度を有する。P₆・P₇は南壁下中央より東寄りに接して並ぶ。P₆は67×66cmの不整形円形を呈し、30cmの深度を有する。P₇は73×94cmの楕円形を呈し、25cmの深度を有する。位置関係からみて入口施設に関連するピットと考えられる。P₈はP₄の北西側に近接する。43×47cmの円形を呈し、60cmの深度を有し、支柱穴のP₄よりも、規模が大きい。P₉は東壁下中央北寄りに位置する。39×39cmの円形を呈しており、20cmの深度を有する。

炉址は住居址の長軸、短軸の交点（住居址の中央）から検出された。88×80cmの円形を呈し、長軸方位はN-2°-Wをさす。床面からの掘り込みは弓状を呈し、深さは最深部で11cmを測る。火床部は掘り込みの中央からやや北東寄りに設けられており、31×25cmの焼土の広がりをもつ。砂粒（第2層）、火山灰（第3層）を5cm内外の厚さで埋めもどして構築されたものであり、強い加熱のために真っ赤に赤変した状態であった（焼土範囲は更に東側の立ち上がり部の地山上にも認められ、非常に強い加熱のあったことが伺われる。）。火床部の南側には、長さ30cm、幅26cm、厚さ8cmの偏平な大礫を中心として計3個の礫が置かれ、炉縁石となっている。炉縁石は第3（黄褐色の砂）・4層上に置かれており、この炉が掘り込み面をそのまま利用して使用されたものでないことが理解できる。覆土は第2・3・4層などの炉の構築材を除くと、第1層、焼土、小礫、炭化物がまじる黒褐色土のみからなる。

遺物の出土状況

本住居址からは、まとまった弥生土器・石器が出土しているが、全体的な出土量は多くない。図化した遺物はいずれも床面上あるいはその直下から出土したものであり、本住居址の共伴遺物と見做すことができる。遺物の分布は特に北壁下西側に集中する傾向が看取され、101-2・3（壺）、5・6（甕）、8（高坏）などがみられる。この他、P₅の東側に101-4（壺）、101-1（壺）、P₉西側に101-7（ミニチュア鉢）、P₃南側に103-1（磨製石斧）が散布している。また、第Ⅲ区からは102-4・6（壺）、第Ⅳ区からは102-2・5（壺）、ピット内から102-3・7・8・9・10（壺・甕）が出土している。

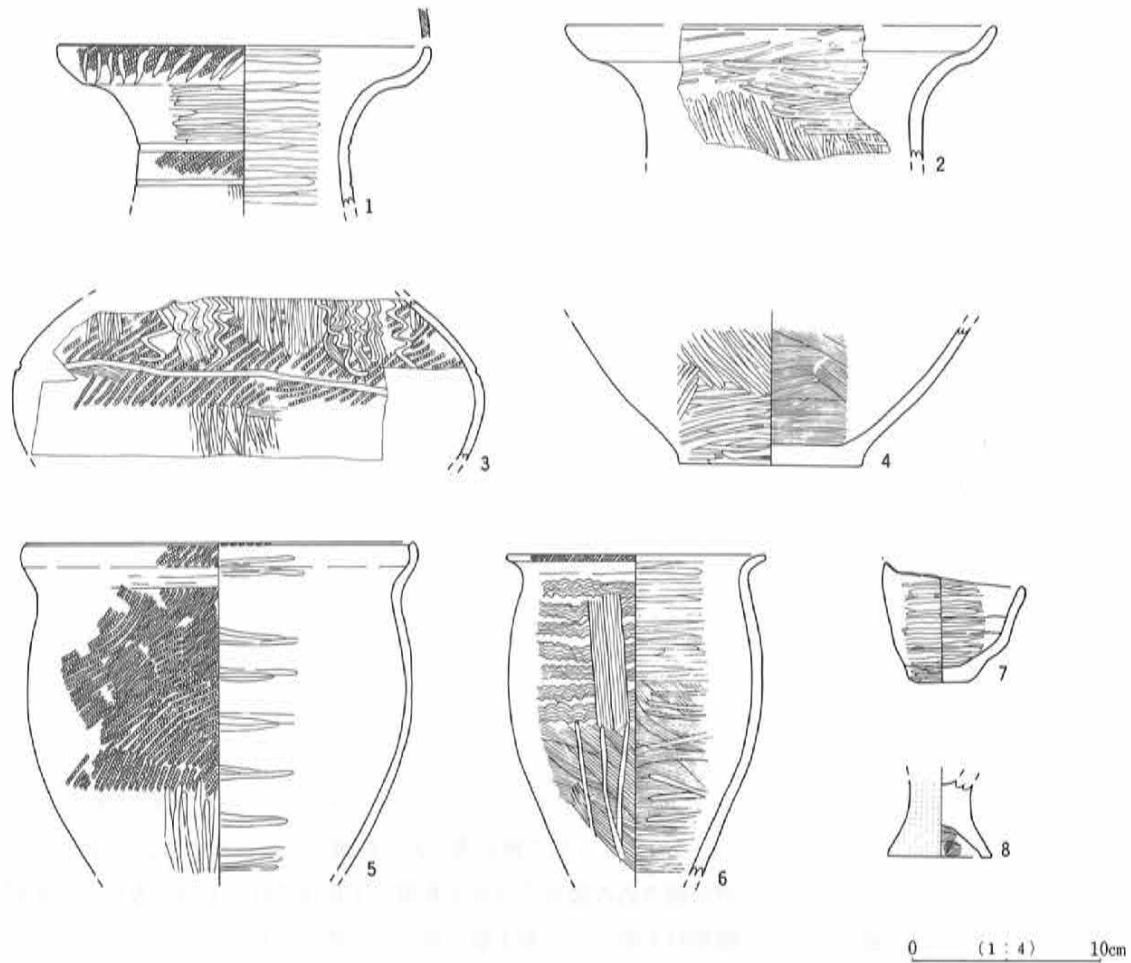
遺物（第101・102図、図版 四十）

本住居址の出土遺物には弥生土器・石器がある。

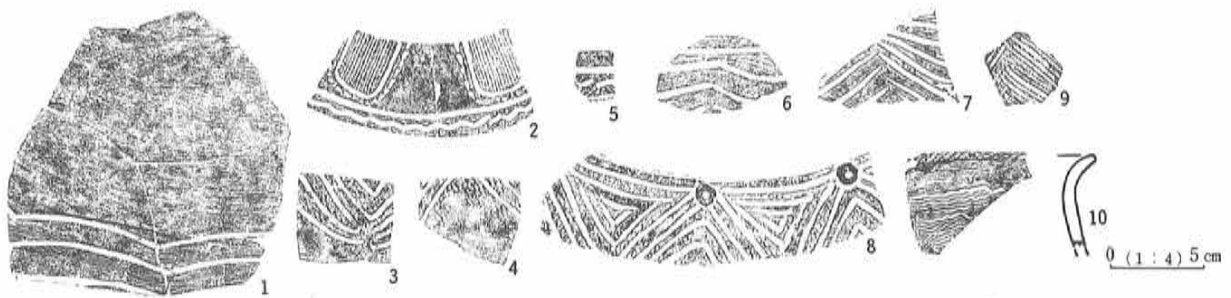
弥生土器の器種には壺・甕・深鉢・鉢・高坏があり、壺10点、甕4点、深鉢2点、鉢1点、高坏1点が図化できた。

壺には全形態を伺えるものがない。口縁部形態は受口口縁のもの101-1・2のみで、頸部はいずれも太頸化している。101-1は受口口縁に明瞭な外稜を有し、口唇部は面取りされている。文様は口縁部の受口部にLR縄文を地文とした篋描の斜走短線文がめぐり、頸部にはLR縄文が2条の篋描横走平行線文で区画されている。外面調整はヘラミガキが丁寧に行われている。101-2は1にくらべると受口口縁の外稜がやや丸味をおびる。文様は全く施されず、内外面に丁寧なヘラミガキが施されている。

この他、形態は知り得ないが、LR縄文上に篋描横走平行線文、斜状の押し引き文がめぐる頸部片102-1、LR



第101図 Y85号住居址出土土器実測図



第102図 Y85号住居址出土土器拓影図

縄文地文とした胴部の中位にやや乱れた篔簹横走平行線文を1条めぐらし、その上位に波状の櫛描垂下文を同じく波状の篔簹垂下文で区画した101-3、胴部の中～下位に篔簹連弧文を3条めぐらし、全体に赤色顔料が付着する102-1や6などの胴部片、胴部中～下位に篔簹連続山形文、横走平行線文を数条めぐらし、胴部上～中位にかけては直線状の櫛描垂下文の周囲を篔簹文で区画し、更に篔簹刺突文をめぐらした102-2、縄文地文上に篔簹文を山形状に施した102-3・4などがみられる。また、104-4は胴下部から底部の破片で、外面には丁寧なヘラミガキが施されている。

甕は受口状の口縁部を有する101-5と単純口縁の101-6、102-10がある。受口口縁を有する101-5の受口部は外稜がとれ、丸味を帯びる。胴部は中位上方で軽くふくらむ。口縁部の受口部、胴部の上位～中位下方にかけてはLR縄文が隈なく施されている。胴部における縄文施文は帯を意識して行なわれたものでなく、斜状に何回に

第23表 Y85号住居址出土土器観察表

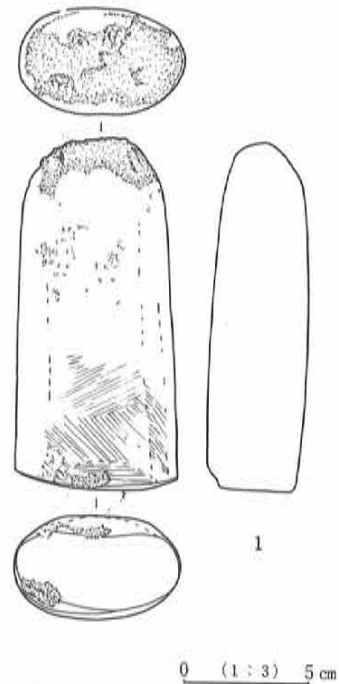
挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
101-1	壺	(19.9) <8.3> —	口縁部は太い頸部から外反し、上端で段を以って受口状に立ち上がる。 口唇部は面取りされている。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) ハケメ調整→口縁部に横位のヘラミガキ、頸部以下に縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B ビット内
101-2	壺	— <7.1> —	口縁部は太い頸部から外反し、上端で受口状に立ち上がる。	内) 丁寧な横位ヘラミガキが施されている。 外) 横位および縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.4
101-3	壺	— <8.4> —		内) 粗いハケメ調整が施されている。 外) ハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) LR縄文を地文とし、胴部中位にヘラ描横走平行線文が1条施され、胴部上半に櫛描波状文が垂下され、ヘラ描波状文で区画されている。	破片実測A No.2、II区
101-4	壺	— <7.5> (9.7)		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) ハケメ調整→横位および斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.5
101-5	甕	(20.4) (17.6) — (20.4)	最大径は口縁部にあり、口縁部は受口状に内弯し、胴部は中位で軽くふくらむ。口唇部は面取りされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施された後、胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部内面・口縁部・胴部上位から中位にLR縄文が施されている。	回転実測B No.3
101-6	甕	(13.6) (17.0) — (13.6)	最大径は口縁部にあるが胴部中位と大差は無い。口縁部は短く外反し、胴部は僅かにふくらみ、口唇部は面取りされている。	内) 横位および斜位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文、胴部は5本一組の櫛描波状文が7帯上から下へ施された後、6本一組の櫛描垂下文が2帯一組で施されている。	回転実測A No.3 外面の口縁部から胴部上半は黒色化している。
101-7	鉢	7.3 6.5 3.2 7.5	ゆがみの著しい輪積み成形による手捏土器である。口縁部から底部にかけて逆台形状を呈する。	内) 粗雑な横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のハケメ調整→粗い横位のヘラミガキが施されている。	完全実測 No.6
101-8	高 坏	— (4.2) 5.3	脚部はスリムで半円状に凹む。	内) 粗いハケメ調整が施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.1

もわたって施されている。単純口縁の101-6は口縁部がごく短く、強く外反し、胴部は中位で軽くふくらむ。口唇部は面取りされ、縄文が施されている。胴部上位から中位にかけては櫛描波状文が帯状に7帯施されたのち、直線状の櫛描垂下文(2帯1組)によって区画されている。102-10は101-6よりも口径が大ききずん胴な形態になると考えられる。口唇部に縄文、胴部に櫛描波状文が施されている。この他、櫛描斜走直線文が縦位羽状に施される102-9の胴部片もみられる。

深鉢には102-7・8がある。7は本来の甕形の形態を有すると考えられる頸-胴部の破片であるが、内面に赤色塗彩が施されているため、深鉢とした。文様は櫛描斜走直線文が縦位羽状に施されている。102-8は受口口縁を有して胴部が大きくふくらむ、壺と甕の折衷的な形態をもつと考えられる胴部上位片である。LR縄文地文上に櫛描の重三角形区画を施し、三角形の頂部には真中に穴のあいた円形浮文が貼付されている。

鉢はミニチュアで輪積み成形の手捏ね土器101-7がある。形態は平底で器高が高く、口辺部は内弯気味に立ち上がる。高坏は脚部片101-8があり、小型で「ハ」字状に開く。外面は赤色塗彩が施されている。

石器には磨製石斧がある。103-1は閃緑岩製大型蛤刃石斧で破損ののち、基端部を敲石として再利用したらしい。以上の出土遺物から本住居址の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。(小山)



第103図 Y85号住居址出土石器実測図

25) Y86号住居址

遺構 (第104図)

本住居址は台地南部の西側、け・こー22・23グリッド内に位置している。第156号土坑、第2号溝状遺構と重複関係を持ち、南東コーナーから北西コーナーにかけて斜走する部分を第2号溝状遺構に、住居北東部の床面を第156号土坑に破壊されている。また、攪乱が著しく、住居址の北東部の一部と、南壁・南壁西側の床面の一部を除く、住居址の大半が破壊されている。

このため、以下に掲示する平面形態、計測値はすべて推定である。プランは東西の長軸長575cm、南北の短軸長527cm、東壁長480cm、西壁長435cm、南壁長553cm、北壁長485cmの台形に近い隅丸方形を呈すると考えられ、床面積は28.40㎡をはかる。長軸方位はN-88°-Eをさす。

覆土は北壁の中央部に残存するのみであるため、全体の埋没状態を知り得ない。第1層はパミスを含む黒褐色土、第2層はパミスを含む茶褐色土である。

確認面からの壁高は残存部で2~6.5cmをはかり、南壁の残存状態は割合良い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築され、堅固であり、床面からの立ち上がりは緩い。

壁溝は南壁の西側にのみ確認された。幅は45cm内外、深さは10cm内外を計測する。他の住居に比べるとかなり大きな規模を有する。

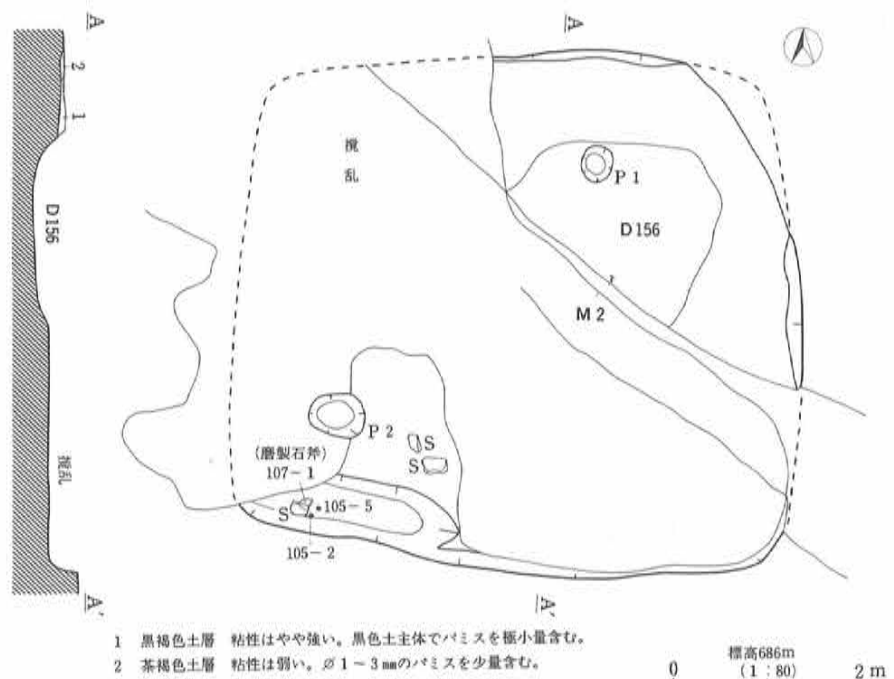
床面は地山の砂層まで掘り窪めたのちに平坦化し、茶褐色土を薄く埋めもどし、叩きしめた「叩き床」が全面に施されていたと考えられる。残存部の構築状態はおおむね堅固であり、東側から西側へ向ってわずかにレベルが下がる。

ピットは2個検出された。いずれも支柱穴と考えられる。P₁は北東側、P₂は南西側に位置する。北西側、南東側にあたる支柱穴は、攪乱が著しいため、検出できなかった。P₁・P₂の規模はいずれも破壊された箇所内からの検出であるために残存値を示すにすぎない。P₁は39×32cmの楕円形を呈し、30cmの深度を有する。P₂は46×58cmの楕円形を呈し、45cmの深度を有する。

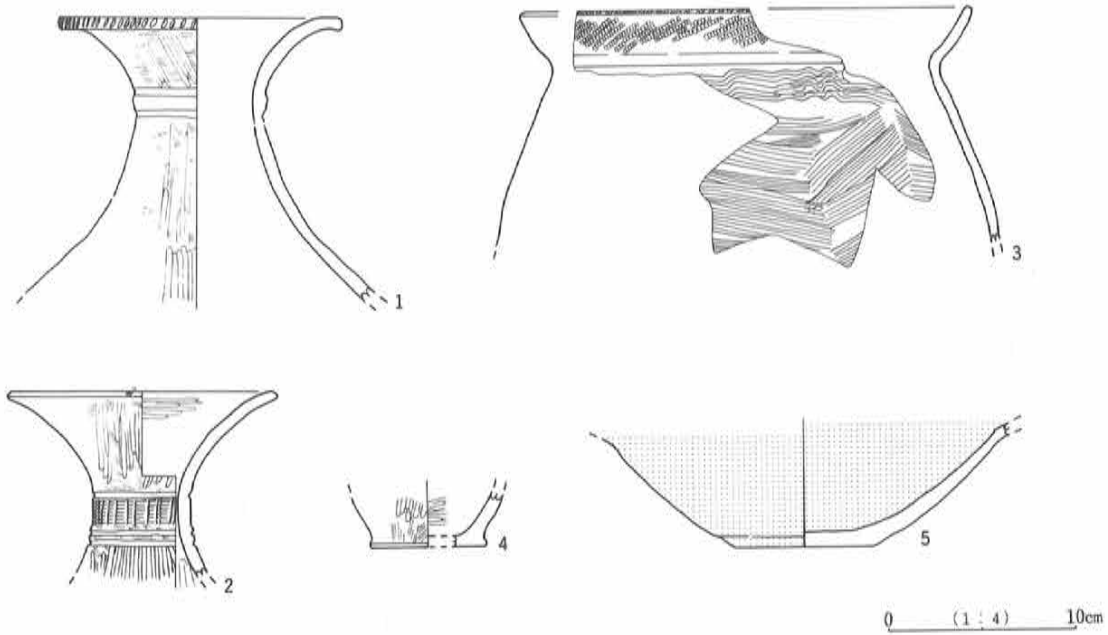
炉址の存在も住居中央が破壊されているため、わからなかった。

遺物の出土状況

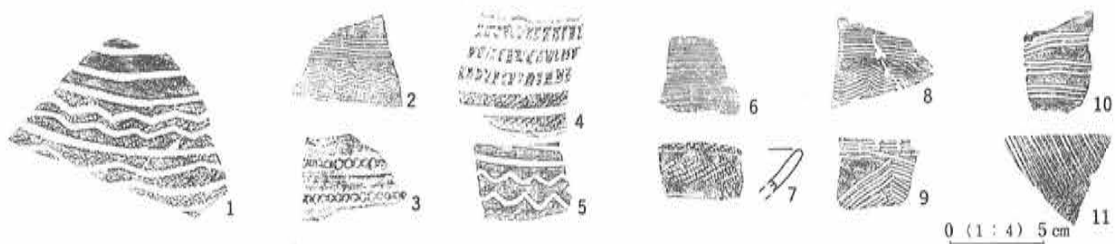
本住居址からは弥生土器・石器が出土しているが、全体の出土量は少ない。遺物分布の傾向は、壁溝内の西側に比較的集中するが、全体的には散漫な分布である。図化した遺物は床面上・壁溝内から出土したものを主とするが、住居址エリア内の攪乱層中から出土したものも一部含まれる。弥生時代遺構相互の重複関係をもたない住居址であるため、



第104図 Y86号住居址実測図



第105図 Y86号住居址出土土器実測図



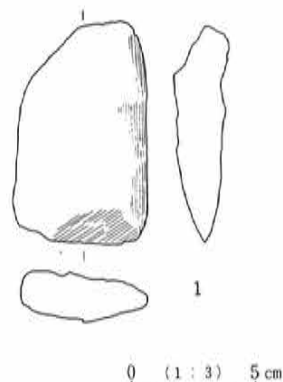
第106図 Y86号住居址出土土器拓影図

第24表 Y86号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
105-1	壺	(15.2) <14.5> —	口縁部は頸部から大きくラップ状に外反する。最大径は胴部にある。	内) 口縁部から頸部にかけて横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部には横位のハケメ調整の後、斜位のヘラミガキ、胴部上位は横位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキ、胴部中位は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部に刻目文、頸部へラ描横走平行線文が2条施されている。	回転実測A な41グリッド 内面に炭化物の付着が著しい。
105-2	壺	(14.3) <9.2> —	頸部は細く口縁部はラップ状に外反する。口唇部は面取りされている。	内) 口縁部から頸部にかけては横位のヘラミガキ、頸部以下は縦位の雑なヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部にかけては斜位のハケメ調整の後縦位のヘラミガキ、頸部以下も斜位のハケメ調整の後縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に櫛描麗状文(多連止め)が施され、3条のへラ描横走平行線文で上下を区画され、それ以下に櫛描垂下文施文の後、外周をへラ描沈線で区画されている。口唇部に縄文が不鮮明ながら施されている。	回転実測A No 2 外面に赤色顔料が付着している。
105-3	甕	(24.0) <12.5> —	最大径は胴部にある。口縁部は受口状に立ち上がり胴部は大きくふくらむ。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部はヨコナデ、胴部はハケメ調整が施されている。 文) 口縁部にL R縄文、頸部には7本一組の櫛描横走平行線文(波状文?)が1帯、頸部以下に4~7本1組の櫛描斜走直線文が縦位羽状(右回り)に施されている。	破片実測A Ⅲ区床上
105-4	甕	— <2.7> (6.0)		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位および斜位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B Ⅲ区床上
105-5	鉢	— <5.8> (7.3)	口辺部は内弯気味に開き、端部で外反する。	内・外面ともに赤色塗彩・横位および斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No 3, R

これらの総てを本住居址の共伴資料と見做しておきたい。

105-1 (壺) は昭和54年の試掘調査中において、本住居址の覆土中から出土した。106-2 (壺)・5 (鉢)、107-1 (砥石) は南壁下の壁溝内から、また、105-3・4 (甕)、106-7・8 (壺・甕) はIII区床面上から出土している。この他、106-1・4・6・11 (壺・甕) がI区の床面上、106-9 (甕) がII区、106-2・10 (壺・甕) がIV区、106-3・5 (壺) が攪乱層中から出土している。



第107図 Y86号住居址出土石器実測図

遺物 (第105・106・107図、図版 四十)

本住居址から出土した遺物には弥生土器・石器がある。

弥生土器の器種には壺・甕・鉢があり、壺9点、甕6点、鉢1点が図化できた。

壺には単純口縁の105-1・2と受口口縁の106-7がある。形態はいずれも細頸壺である。

単純口縁の105-1は口縁部が強く外反し、大きくラップ状に開く。胴部は中位下方か、下位に最大径を有すると考えられる。105-2は1よりも更に細い頸部から口縁部はラップ状に外反する。口唇部には面取りが施されている。文様は1が口唇部、頸部に集約されるのに対し、2は頸部から胴部にまで施される。1は口唇部に篋描刻目、頸部に篋描横走平行線文が2条施されている。2は頸部の上位に1条、下位に2条の篋描横走平行線文を施したのち、その間に櫛描簾状文(多連止め)を充填し、胴部には篋描文で区画された2帯一組の直線状の櫛描垂下文が間隔をおいて施されている。外面には各所に赤色顔料の付着もみられる。外面調整は1・2いずれもヘラミガキが施されている。

受口口縁の106-7は受口部の外稜がほぼ完全に消失し、直線化する。文様は口唇部、口縁部にLR縄文が施文されている。

この他、壺にはLR縄文地文上に篋描横走平行線文・連続山形文を組み合わせ、最下位に篋描連弧文を施した106-1や、平行線文・山形文を組み合わせた106-5などの胴部片、櫛描波状文・横走平行線文を1帯ごとに交互に組み合わせた106-2・8(同一個体とも考えられるが、2には煤が付着、8には赤色顔料が付着している。)の胴部片、頸部に2帯の突帯を有し、突帯上に篋描の刻目がめぐる赤色顔料の付着した106-3、LR縄文地文の頸部に6条以上の篋描横走平行線文を施し、上三段の文様帯内に櫛描の刻目を施した106-4、頸部に櫛描横走平行線文のめぐる106-6などがある。

甕には受口口縁を有する105-3がある。105-3はほとんど外稜を失ない直線化した受口口縁を有し、胴部は球状に大きくふくらむ。口唇部は面取りされ、縄文が施される。また、口縁部にはLR縄文のみ、胴部には櫛描斜走直線文が縦位羽状に施されたのち、頸部に櫛描波状文が施されている。内面はやや雑ではあるがヘラミガキが施されている。この他、底部片105-4や、頸部に櫛描簾状文、胴部に斜走直線文が縦位羽状に施される106-9、頸~胴部にかけて櫛描横走平行線文が带状に数帯施される106-10、胴部に櫛描斜走直線文が横位羽状に施される106-11などがある。

鉢には105-5がある。平底の底部から口辺部は内弯気味に開き、端部で外反して鐔状に張り出す。内外面に赤色塗彩が丁寧な施されている。

石器の器種には砥石がある。107-1は約半分を欠損している。砂岩製で片側面が両刃状に磨滅している。

以上、本住居址の共伴遺物は弥生時代中期後半に位置づけられる。従って、本住居址の所産期もおおむね弥生時代中期後半と考えられる。

(小山)

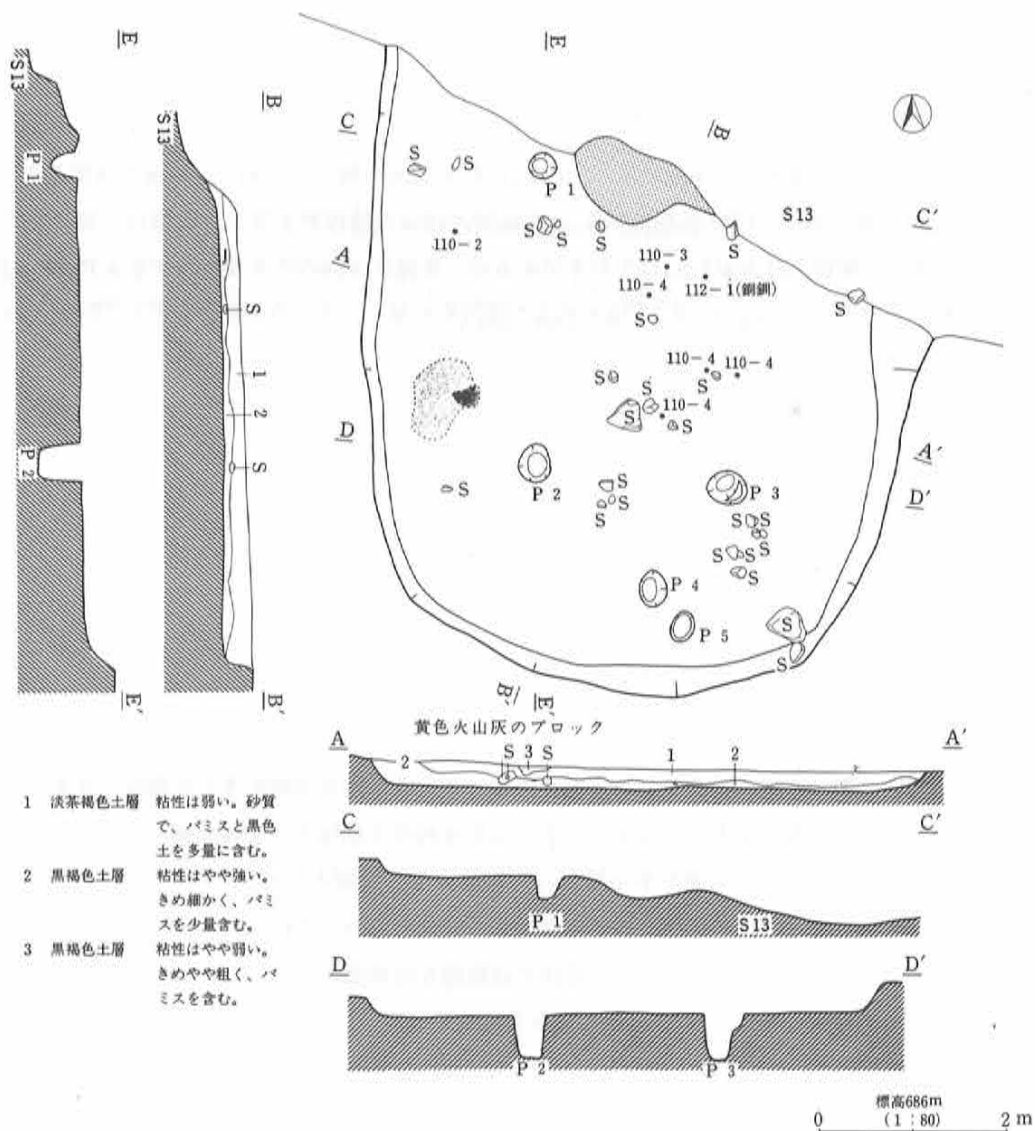
26) Y87号住居址

遺構 (第108・109図、図版 四十一)

本住居址は、台地南部の中央から西寄りの、く・け・こ-20・21グリッド内に位置している。第13号周溝と重複関係を持ち、住居の北側を破壊されている。

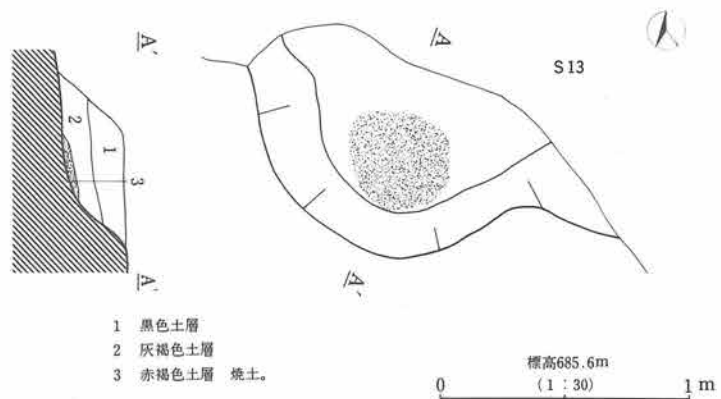
プランは、東西の短軸長520cm、南北の長軸長700cm (推定)、東壁長630cm (推定)、西壁長630cm (推定)、南壁長410cm、北壁長441cm (推定)の隅丸長方形を呈すると考えられ、床面積は推定で33.92㎡を測る。長軸方位はN-2°-Wをさす。

覆土はおおむね二層からなる。住居址の中央西側の最上層には第3層の黒褐色土が薄く堆積するが極く僅かに広がりをもつ程度である。第1層は覆土上層にあたり、住居址内の全面にわたって広く、厚い堆積を示す。パミスと黒色土を多量に含む砂質の淡茶褐色土である。第2層は覆土下層にあたり、第1層と同様住居址内全面にわたり広く、厚い堆積を示す。きめの細かいパミスを少量含む黒褐色土である。自然堆積か、人為堆積であるかは判然としない。



第108図 Y87号住居址実測図

確認面からの壁高は10～42cmを測り、東・南壁の遺存状態は良好であるが、西壁の北側の遺存状態はやや不良である。壁体は上位を地山の黄褐色火山灰層、下位を地山の砂層を利用して構築されており、床面からの立ち上がりは緩い。壁面はおおむね平滑に形成されているが、下位の砂層部分はもろく崩れ易く、何らかの補強材が必要であったことが想起される。また、東側中央は若干のふくらみをもつ。



第109図 Y87号住居址炉址実測図

壁溝は検出されなかった。

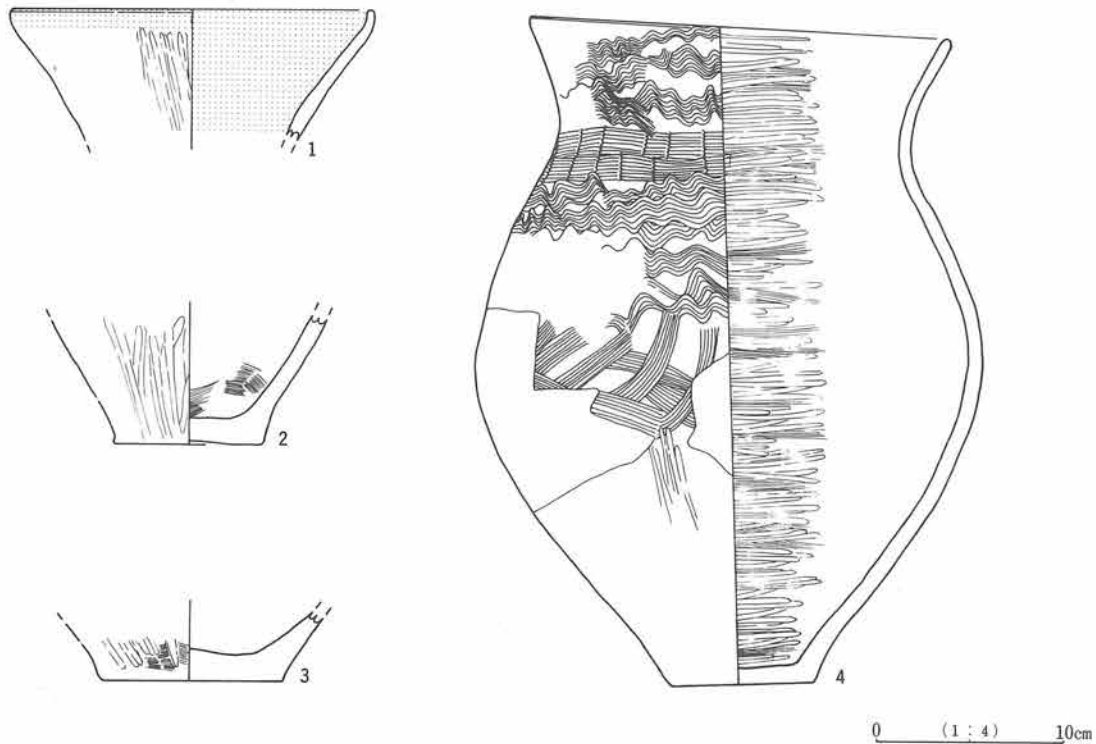
床面は地山の砂層まで掘り窪めたのちに、茶褐色土を住居址の全面に薄く埋め戻して平坦に叩きしめられた「叩き床」が施されている。おおむね、フラットな面が形成されているが、遺存状態は良好でなく、もろく、剥がれ易い。特に堅固な箇所も認められない。

ピットは5個検出された。支柱穴は $P_1 \sim P_3$ の3本が検出された。北東部の柱穴は、第13号周溝による破壊部に存在するため、未検出であるが、往時は4本が整然と配置されていたと考えられる。 P_1 は26×28cmの円形を呈し、26cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。 P_2 は40×35cmの楕円形を呈し、44cmの深度を有する。断面形は底面がおおむね平坦であり、円柱状を呈する。 P_3 は36×42cmの楕円形を呈し、東側に一段のテラスを有する。深さは50cmを測り、断面形はおおむねU字形を呈するが、東側に一段のテラスを有する。 $P_4 \cdot P_5$ は南壁下中央に位置するが整然とは並んでいない。 P_4 は39×29cmの楕円形を呈し、37cmの深度を有する。 P_5 は33×25cmの楕円形を呈し、30cmの深度を有する。

炉址は北側の支柱穴間に位置する。北側の約半分を第13号周溝に破壊されているため、全容は明らかでないが、形状は径100cm以上の円形か楕円形を呈することが考えられ、かなり大規模なものであったことが想起される。深さも最深部で25cmを測り、他の例に比べるとかなり深い掘り込みをもつ炉と言える。火床部は掘り込みの南側に偏在する可能性が強く、39cm×40cmの円形の範囲で焼土が分布している。この焼土は黄褐色火山灰が焼けて赤変したもの（第3層）であり、3cm内外の厚さで地山上に埋めもどされたものである。炉縁石は検出されておらず、単純な地床炉であった可能性は強い。炉址の構材（第3層）を除く、覆土は二層からなる。第1層は黒色土、第2層は灰主体の灰褐色土である。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器・青銅製品が多量に出土しているが破片資料が多く、復元しても完存品になるものは一点しかない。また、第1層中から出土したものは弥生時代中期後半の土器の細片が多量に混入しているため、第2層中、及び床面上出土の土器を本住居址の共伴遺物として図化した。このため、石器の268-59（磨製石鏃未成品）、274-158（敲石）は本住居址の共伴遺物からは除外した。共伴遺物の分布状態をみると、住居中央の東寄りにやや集中する傾向が看取されるが、全体には散漫な分布状態を示している。また、110-4（甕）のような同一個体の破片が住居址内に広く分布する資料に代表されるように、共伴遺物としたものも多くは住居廃絶後の投棄遺物であったことが推測される。110-3・4（壺・甕）、112-1（青銅製品）が住居址中央の東側に分布し、110-2（壺）が西壁下中央付近に分布する。その他、110-1（壺）がIV区の2層から、110-3（甕）が、I区2層から出土している。111-1・2（甕）は、II・III区の間で接合関係をもつ。これらの土器の他、住居址の南東コーナー周辺、炉址南西周辺などに礫の分布がみられるが、本住居址との関連は明らかでない。また、



第110図 Y87号住居址出土土器実測図

第25表 Y87号住居址出土土器観察表

持番 図号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
110-1	壺	(19.2) <7.0> —	口縁部は端部で内弯し受口状を呈する。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁端部は赤色塗彩・横位のヘラミガキ、以下は縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B IV区2層
110-2	壺	— <7.0> 8.0		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) ハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.6、II区2層
110-3	壺	— <3.7> 9.8		内) 磨滅著しく不明。 外) 底部下位に横位のハケメ調整が施された後、縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.7
110-4	甕	22.0 35.8 8.0 27.0	最大径は胴部中位にある。口縁部は「弓」状にゆるく外反し、胴部は中位で大きくふくらむ。	内) 横位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施された後、胴部下位から底部に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に8本一組の櫛描簾状文(等間隔止め・右回り)が2帯施された後、胴部上半に8本一組の櫛描波状文(右回り)が施された後、下半に8本一組の櫛描斜走直線文が施されている。口縁部は6~8本一組の櫛描波状文が3帯施されている。	回転実測A No.1・2・3・5、I区、III区、IV区

西壁下中央の南寄りの床面上には88×65cmの範囲で、灰の薄い広がりが見られるが、これについても住居址との関連は明らかでない。(小山)

遺物(第110・111・112図、図版 四十一)

本住居址からは、弥生土器・石器・青銅製品が出土している。弥生土器の器種には壺・甕がある。

壺には110-1・2・3があるが、いずれも破片資料である。110-1は口縁部に位置する破片であり、頸部から外傾外反して立ち上がり、端部で内弯してほぼ直立気味となる。内面調整は、赤色塗彩・横位のヘラミガキが施され、外面は約1cmの幅で赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されるが、以下は縦位のヘラミガキが行われているのみで、赤色塗彩は施されない。このように壺の口縁部内面と外面の端部のみに赤色塗彩が施される例は、本遺跡の出土資料の中では他に見られず、非常に稀有な存在であると言えよう。110-2・3は底部片で全体の器形

は知り得ないが、110-2は内面に横位の刷毛目調整が施され、外面には縦位のヘラナデが行われている。110-3は外面に刷毛目調整の後、縦位のヘラミガキが施されるが、内面調整は、剥離が著しく不明である。

甕には110-4がある。110-4は本住居址の出土遺物の中で唯一の完形に復元された資料である。口縁部は頸部から緩やかに外傾外反して立ち上がり、胴部は中位で大きくふくらみ、最大径は胴中位に位置する(27.0cm)。内面調整は、横位の刷毛目調整の後、横位のヘラミガキが行われる。外面は胴上半部に文様が施文された後、胴下半部に縦位のヘラミガキが施される。文様は、頸部に8本一組の櫛描簾状文(等間隔止め)が右回りに2帯施された後、口縁部と胴上半部に同単位の櫛描波状文が右回りに上から下へ施文される。さらにその後、胴中位下方に同単位の櫛描斜走直線文が施文される。

甕にはこの他破片資料として、頸部に櫛描簾状文(等間隔止め)が右回りに施され、胴部に櫛描波状文の施される111-1・2・3がある。111-2・3はいずれも櫛描簾状文の後、胴部に櫛描波状文が施文される点で、110-4と共通する。

この他、小片のため図示し得なかったが、内外面ともに赤色塗彩され、ほぼ直線的に立ち上がり、端部で内弯する高坏の坏部、外面に赤色塗彩が施され、内面は刷毛目調整の行われる高坏の脚上部に位置する破片がある。

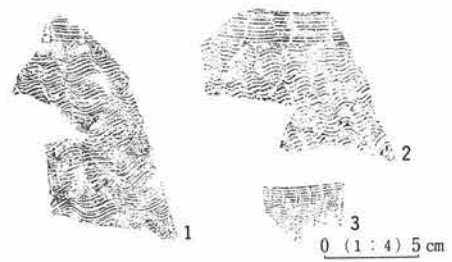
青銅製品としては銅釧と考えられる破片がある。小片であるため旧状は知り得ないが、残存部で長さ2.2cm、幅1.0cm、厚さは最厚部で0.2cm、重さは1.3gを測る。

石器類は、本住居址との共伴性は薄いと考えられるが、磨製石鏃未成品(268-59)、敲石(274-158)が出土している。268-59は千枚岩製の磨製石鏃の未成品で、長さ2.0cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmで、重さは1.9gを測る。両面研磨の段階で破損したものと考えられる。274-158は安山岩製の敲石で、長さ13.8cm、幅5.3cm、厚さ3.8cmで、重さは423.5gを測る。河原石を利用したもので、端部に敲打痕が観察できる。

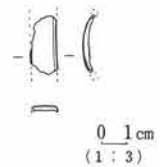
この他混入遺物として、口唇部に縄文の施される壺、LR縄文を地文として、篋描文の施文される壺、竹管状工具による刺突文の施される壺、篋描横走平行線文によって区画された中にLR縄文の施される壺、受口状の口縁部を有する甕など弥生時代中期の細片が多量に出土している。また、外面に叩き目のみられる須恵器甕の胴部と考えられる破片も出土している。

以上、本住居址に共伴すると考えられる遺物に、口縁端部の内弯する壺(110-1)、櫛描波状文と櫛描斜走直線文の施文される甕(110-4)などがみられることから、本住居址の所産期は弥生時代後期前半と考える。

(三石)



第111図 Y87号住居址出土土器拓影図



第112図 Y87号住居址青銅製品実測図

27) Y88号住居址

遺構 (第113図、図版 四十二)

本住居址は台地の中央部よりもやや南西寄りの、け・こー19・20グリッド内に位置している。他遺構との重複関係はもたないが、北東コーナーと東壁の一部、南東コーナー、住居址床面の中央東寄りを攪乱によって破壊されている。

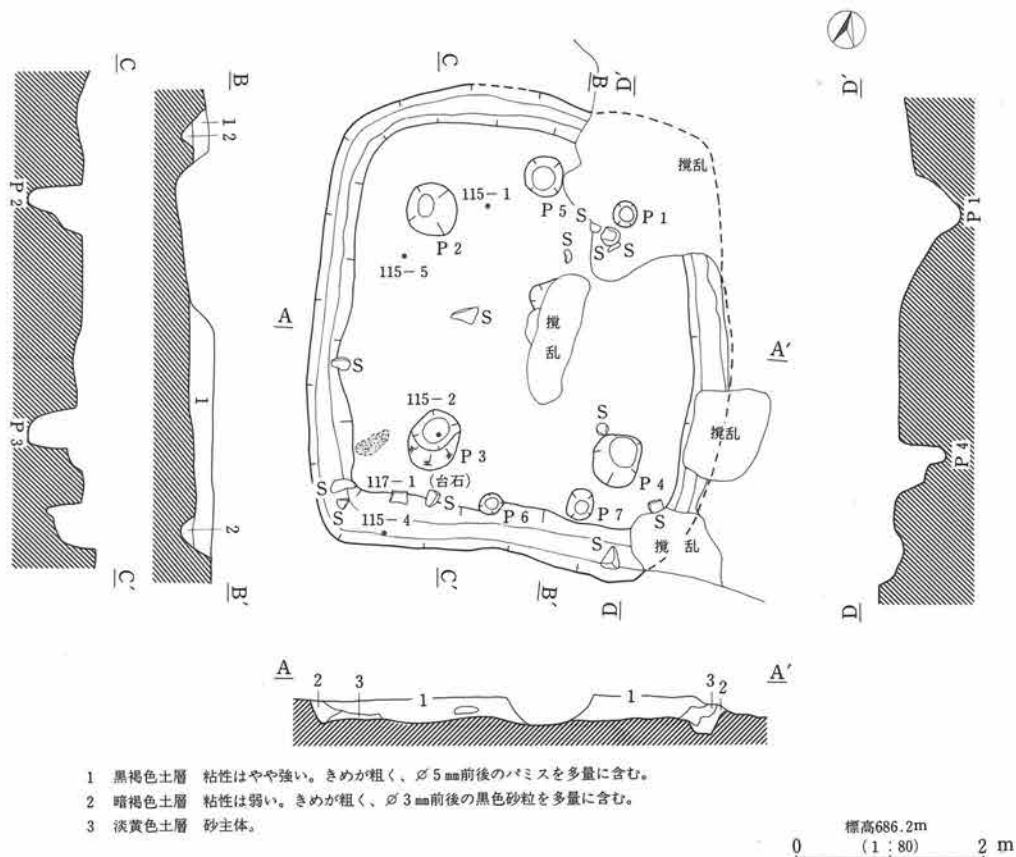
プランは東西の短軸長420cm、南北の長軸長465cm、東壁長410cm (推定)、西壁長428cm、南壁長353cm (推定)、北壁長343cm (推定)の隅丸長方形を呈するが、より方形に近い。床面積18.10㎡ (推定)を測るやや小規模な住居址で、長軸方位はN-8.5°-Wをさす。

覆土は三層からなり、プライマリーな堆積状態を示す。第1層はバミスを多量に含むきめの細かい黒褐色土で、住居内のほぼ全域にわたってレンズ状に堆積する。第2・3層は住居址の壁下および壁溝内に堆積する。第2層は、各壁下に一樣にみられるが、第3層は東・西両壁下だけに認められる。第2層は黒色砂粒を多量に含む暗褐色土、第3層は砂主体の淡黄色土である。

確認面からの壁高は残存部で15~21cmをはかり、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は上位を地山の黄褐色火山灰層、下位を地山の砂層を用いて構築されており、上位は堅固であるが、下位はもろく崩れ易い。壁面はおおむね平滑である。

壁溝は、壁の直下を全周すると考えられる。溝幅は19~43cmを測り、床面からの深さは、1~17cmを測り、断面形はU字形を呈する。

床面は、地山の砂層まで掘り込んで平坦化したのち、茶褐色土を全面に薄く埋めもどし、叩きしめて構築され



第113図 Y88号住居址実測図

ている。あまり凹凸はないが、各壁下から床面の中央に向って徐々にレベルを低下させる傾向がある。構築状態はおおむね、堅固であるが、特に踏みしまった箇所はみられない。

ピットは7個検出された。

主柱穴は4本（ $P_1 \sim P_4$ ）整然と方形配置されている。 P_1 は残存値のみをあらわす。27×27cmの円形を呈し、58cmの深度を有する。 P_2 は56×52cmの円形を呈し、58cmの深度を有する。断面形は南側壁に若干の稜を有する。 P_3 は65×53cmの楕円形を呈し、58cmの深度を有する。断面形はおおむね「U」字形を呈するが、南側にテラスを一段有している。 P_4 は56×50cmの楕円形を呈し、51cmの深度を有する。断面形は、南側に一段のテラスを有している。

P_5 は北壁下中央に位置し、「棟持柱」と考えられる。43×41cmの円形を呈し、29cmの深度を有する。 $P_6 \cdot P_7$ は南壁下中央に整然とならぶ、入口施設に関連するピットと考えられる。 P_6 は22×26cmの楕円形を呈し、20cmの深度を有する。 P_7 は33×27cmの楕円形を呈し、34cmの深度を有する。

炉址は、住居址中央やや北寄りに設けられているが、ほとんど後世の攪乱によって破壊されているため、詳細は明らかでない。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が出土しているが、量はあまり多くない。図化した遺物はほとんどが床面上、あるいはその直上から出土したものであり、本住居址に共伴する遺物と見做すことができるが、267-42(打製石鏃)は明確さを欠くため除外した。

共伴遺物の分布は、散漫な状況を示しており、特に集中的に分布する箇所はみられない。

114-1・5(壺・甕)が P_1 の周辺、114-2(壺)が P_3 上、114-4(台付甕)、116-1(台石)が南壁西側の壁面上から出土している。

また、I区からは114-7(鉢)、II区からは115-1・5(壺・甕)、III区からは115-2・6・7(壺・甕)、IV区からは115-6・8(甕・高坏)、116-3・4(壺・甕)が出土している。

遺物(第114・115・116図、図版 四十二)

本住居址出土遺物には弥生土器・石器がある。

弥生土器の器種には壺・甕・台付甕・鉢・高坏、石器の器種には台石がある。壺6点、甕6点、台付甕1点、鉢1点、高坏1点、台石1点が図化できた。

壺には受口口縁を有する114-1・3と、単純口縁を有する114-2がある。受口口縁の壺114-1は太頸化の傾向がみられ、114-3は完全に太頸化している。114-1は受口部の外稜が完全に消失しており、丸味をもって立ち上がる。口唇部には擬縄文、口縁部には篋描連続山形文が3条、頸部には、擬縄文上に篋描横走平行線文が4条施されている。外面調整はヘラミガキが丁寧に施され、刷毛目が消されている。

114-3は無文で、ヘラミガキが丁寧に施されている。

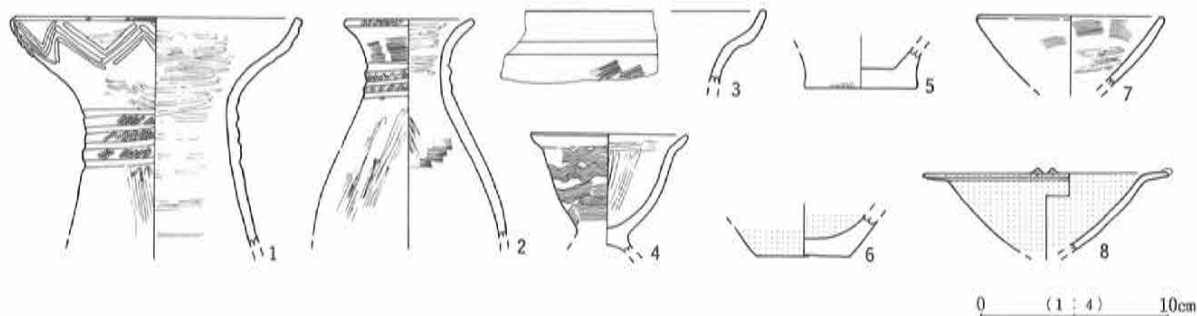
単純口縁の114-2はやや小形の細頸壺で口縁部はラッパ状に外反する。文様は口唇部に縄文、頸部は縄文地文上に、篋描横走平行線文が3条施されている。

この他、縄文地文上に篋描横走平行線文が施される115-1、篋描文区画の直線状の櫛描垂下文の周囲に櫛描の刻目をめぐらす115-2、篋描横走平行線文、押し引き文、櫛描横走平行線文が施される115-3などの胴部片がある。

甕は縦位羽状の櫛描斜走直線文が施される115-5~7と、外稜のとれた受口口縁を有する115-4がある。

台付甕114-4は小型で櫛描波状文が施されている。

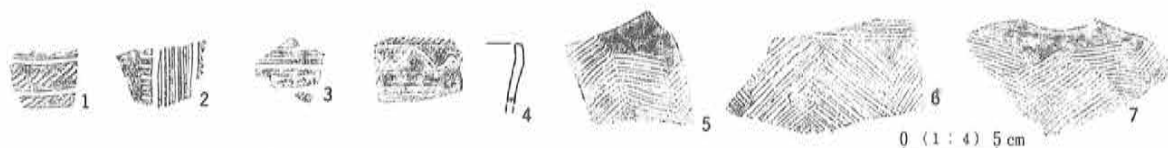
鉢は小型で碗状を呈する114-7、高坏は小型で鐔状の張り出しをもち、2個一対の突起が貼付される赤彩品



第114図 Y88号住居址出土土器実測図

第26表 Y88号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
114-1	壺	15.6 <12.3> -	口縁部は上半で内弯し受口状を呈する。 口唇部は面取りされている。	内) 頸部まで丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部から上は横位のヘラミガキ、下は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部は擬縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文が4条施され、口縁部はヘラ描連続山形文が3条施され、口唇部には擬縄文が施されている。	回転実測A No 1、II区
114-2	壺	7.0 <11.6> -	最大径は胴部にある。口縁部は短く外反し、筒状の頸部から胴部は大きくふくらむ。口唇部は面取りされている。	内) 横位および斜位のハケメ調整の後、口縁部には丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部は横位のハケメ調整、胴部は縦位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にL R縄文が施され、頸部にはL R縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文が3条施されている。	回転実測A No 3
114-3	壺	- <3.8> -	口縁部は受口状を呈する。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。	破片実測B IV区
114-4	台付 甕	8.2 <6.2> -	最大径は口縁部にある。口縁部は短く「く」の字状に外反し、胴部はあまりふくらまず、深鉢形を呈する。	内) 口縁部は横位のハケメ調整の後、横位のヘラミガキが施され、胴部は縦位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 頸部から胴部下位まで7本組の襷描波状文が充填されている。	回転実測A No 4
114-5	甕	- <2.3> 5.0		内) ヘラミガキが施されている。 外) ハケメ調整の後、ナデが施されている。	回転実測B No 2
114-6	鉢	- <2.3> 5.0		内・外面ともに赤色塗彩が施されている。	回転実測A IV区
114-7	鉢	(10.0) <3.8> -	口辺部はほぼ直線的に開く。	内) 横位のハケメ調整の後、横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。	回転実測B I区
114-8	高 杯	(13.0) <4.3> -	坏部は内弯気味に開き、端部で外反して水平となる。口唇部に三角形の突起が2個一対貼付されている。	内) 赤色塗彩・丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩が施されている。	回転実測B IV区



第115図 Y88号住居址出土土器拓影図

114-8がある。

石器は安山岩製の台石116-1がある。

以上の出土遺物から本住居址は弥生時代中期後半の所産と考えられる。

(小山)



第116図 Y88号住居址出土石器実測図

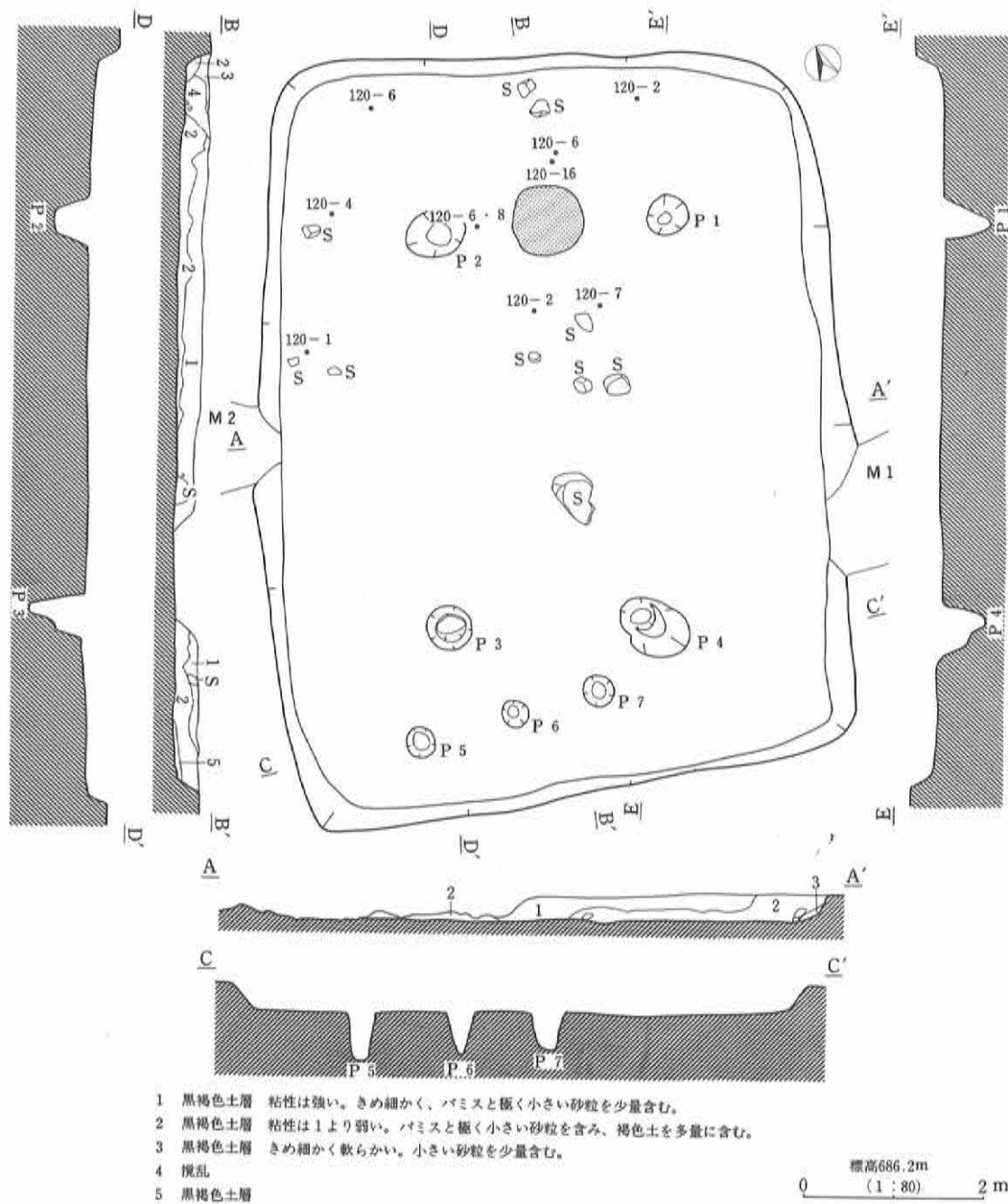
28) Y89号住居址

遺構 (第117・118図、図版 四十三)

本住居址は、台地の南側のほぼ中央、さ・し・す-15・16・17グリッド内に位置している。Y90号住居址と第1・2号溝状遺構と重複関係を持ち、上面での確認からY90号住居址を破壊している。第1・2号溝状遺構には、住居址のほぼ中央付近を破壊されているものの床面までは達していない。

平面プランは、東西596cm、南北787cm、東壁長673cm、西壁長763cm、南壁長565cm、北壁長527cmの隅のやや丸まった長方形を呈し、長軸方位はN-17.5°-Eを示す。本遺跡内でも大きい規模の住居址の一つであり、床面積は45.54㎡を計測する。

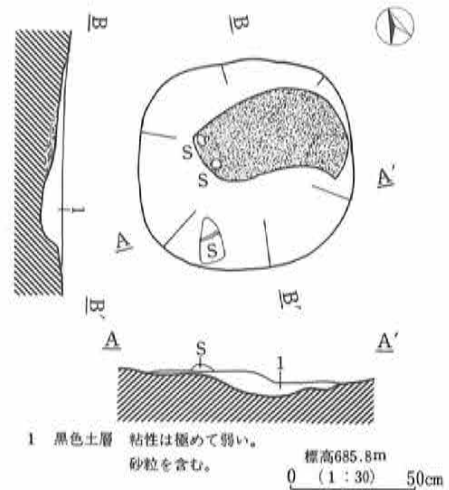
覆土は二層からなり、自然堆積と考えられる。第1層はパミスを含み粘性が強い黒褐色土、第2層はパミスと褐色土を含み粘性が弱くなる黒褐色土である。



第117図 Y89号住居址実測図

確認面からの壁高は22.5~32.5cmを測り、床面からの傾斜はやや緩やかに立ち上がっている。壁溝は検出されなかった。床面の状況は全体に平坦であり、特に固く叩きしめられた床面は存在しなかった。

ピットは、7個検出された。支柱穴は4本(P_1 ~ P_4)を4隅に整然と配置されている。 P_1 は42×48cmの円形を呈し、深さ41~43cmを測る。断面形は先の丸まった「V」字形を呈する。 P_2 は50×68cmの楕円形を呈し、深さ34.5~37.5cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。 P_3 は径48cmの円形を呈し、深さ61.5~64.5cmを測る。断面形は先の平坦な「V」字形を呈するが、南側は一段のテラスを有する。 P_4 は60×85cmの楕円形を呈し、深さ47.5~55cmを測る。断面形は「V」字形を呈するが、南東側に一段のテラスを有する。 P_6 と P_7 は、南壁と P_3 ・ P_4 の中間程に整然と並んで存在し、入口施設の柱穴



第118図 Y89号住居址炉址実測図

と考えられる。 P_5 は P_6 の西側、南西隅に位置し、その性格については不明であるが、 P_6 と P_7 と同規模をもち、それらのピットと何らかの関連を持った柱穴かもしれない。 P_5 は径32cmの円形を呈し、深さ52.4~54cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。 P_6 は径30cmの円形を呈し、深さ46~46.5cmを測る。断面形は先の丸まった「V」字形を呈する。 P_7 は径33cmの円形を呈し、深さ41~41.5cmを測る。断面形はややふくらみをもった「V」字形を呈する。

炉址は、北側の支柱穴 P_1 ・ P_2 間に位置し82×84cmの方形に近い円形を呈しており、長軸方位はN-80°-Wを示す。掘り込みは、南側が深く8cmを測り、北方に向かって緩やかに立ち上がっている。炉址の覆土は、砂粒を含んだ粘性の極く弱い黒褐色土1層で、北側に約2cmの厚さをもった焼土(火床部)が不整形に存在している。また、南西部に炉縁石があることから、この炉址の形態は地床炉+炉縁石と判断する。

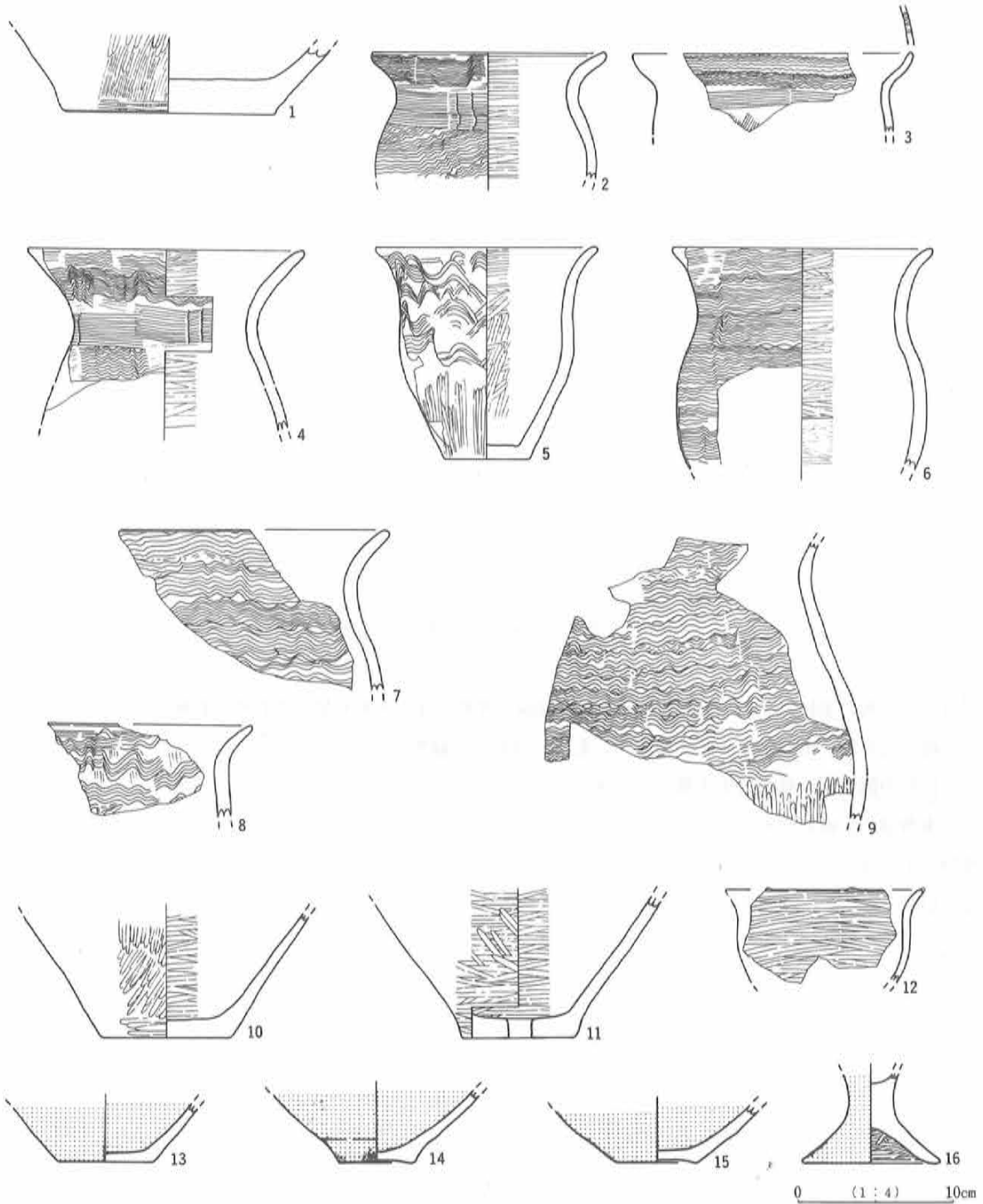
遺物の出土状況は、119-3の甕と119-13の鉢がI区1・2層内より、119-12の鉢がI区1層より出土している。119-5の甕と119-14の鉢と119-16の高坏はII区1・2層内より、119-9の甕はII区1・2層内と炉址内の破片が接合しており、119-10の甕がII区2層内より、119-11の甕はIII区1層内より出土している。119-1の壺はII区西壁下床面直上から、119-2の甕はII区炉址の南側床面より、119-4の甕はII区西壁寄りの床面より、119-6の甕はII区の床面から、119-7の甕はI区炉址の南側床面より、119-8の甕はII区 P_2 の東側床面より、119-15の鉢はI区の床面より出土している。このことから図化できた土器は、119-11の甕を除きすべて平面的にみてI・II区の炉址の存在する北側に偏在する傾向が看取できる。本住居址に共伴する可能性が最も高い遺物は床面あるいは床面直上出土の119-1・2・4・6・7・8・15の7個体である。尚、石器については、覆土内の出土であり、本住居址に確実に共伴すると見做せないため、第2節において一括して扱ってある。

遺物(第119・120図、図版 四十三)

本住居址からは、弥生土器・石器が出土している。弥生土器の器種には、壺・甕・甗・鉢・高坏がある。

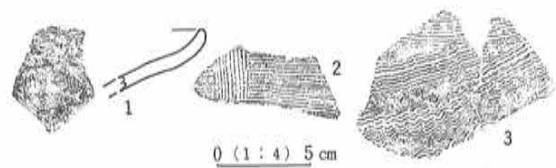
壺は119-1の大型の壺底部と120-1の受口口縁部と120-2の頸部がある。119-1の内面は磨滅著しく不明であり、外面は斜位の刷毛目調整の後ヘラミガキにより調整されている。120-1は内外面赤色塗彩が施されており、屈曲した口縁部外面に波状文がなされている。

甕は単純口縁のもの(119-2・4~8)と受口口縁のもの(119-3)がある。単純口縁の甕にも頸部に櫛描簾状文が施されるものと施されないものがあり、櫛描簾状文の施される119-2は口縁部と胴部に13本一組の櫛描波状文が4帯施された後、頸部に2連止めの8本一組の櫛描簾状文が2帯施されている。119-4は口縁部が



第119図 Y89号住居址出土土器実測図

ら頸部に上から下へ12本一組の櫛描波状文が施され、頸部に2連止め12本一組の櫛描簾状文が施されている。この119-2と4の甕は振幅の小さい波状文が口縁部と胴部に密に施されているという特徴をもっている。櫛描簾状文の施されない単純口縁の甕で119-5は全器形が知り得て、最大径は口縁部にあり、口縁部緩やかに外反し、胴部は中位で僅かにふくらむ。内面の調整は口縁部から頸部に丁寧な横位のヘラミガキ、胴部以下は縦位のヘラミガキが施されており、外面は口縁部から頸部に横位の



第120図 Y89号住居址出土土器拓影図

第27表 Y89号住居址出土土器観察表

押番 器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
119-1	壺 — < 5.1 13.2	底面が極めて厚い。	内) 磨減著しく不明。 外) 斜位のハケメ調整の後、胴部に縦位のヘラミガキ、底部下位は横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.11
119-2	甕 (14.9) < 8.0 —	最大径は口縁部にある。口縁部は強く外反し、胴部は偏球状を呈する。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部に横位のハケメ調整が施されている。 文) 口縁部と胴部に13本一組の櫛描波状文(右回り)が4帯施された後、頸部に8本一組の櫛描麗状文(2連止め・右回り)が2帯施されている。	回転実測A No.1・12
119-3	甕 (17.9) < 5.0 —	最大径は口縁部にあると思われる。口縁部は外反し、やや内弯気味に立ち上がり受口状を呈する。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部に6本一組の櫛描横走平行線文が施された後、口縁部に6本一組の櫛描波状文、頸部以下は櫛描斜走直線文が施されている。また、口唇部に刻目が4箇所施されており、全周に敷設所施されていたと思われる。	破片実測B I区1・2層
119-4	甕 17.8 (11.3) —	最大径は口縁部にあり、口縁部は「弓」状に外反する。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。 文) 口縁部から頸部に上から下へ12本一組の櫛描波状文(右回り)、頸部に12本一組の櫛描麗状文(2連止め・右回り)、胴部に12本一組の櫛描波状文(右回り)が施されている。	回転実測B No.10
119-5	甕 (14.2) 13.5 5.4	最大径は口縁部にあり、口縁部は緩やかに外反し、胴部は中位で僅かにふくらむ。	内) 口縁部から頸部に丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部に横位のハケメ調整、胴部下位は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部中位に5本一組の櫛描波状文が不規則に施されている。	回転実測A II区1・2層
119-6	甕 (16.5) (14.1) —	最大径は口縁部にあるが胴部と大差は無い。口縁部は「弓」状に外反し、胴部は中位でふくらむ。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。 文) 12本一組の櫛描波状文(右回り)が下から上へ施されている。	回転実測B No.4・6・7
119-7	甕 (20.6) < 9.9 —	口縁部は「弓」状に外反する。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。 文) 9本一組の櫛描波状文が上から下へ施されている。	回転実測B No.13
119-8	甕 (13.2) < 5.8 —	口縁部は外反する。	内) 口縁部にヨコナデ、以下は丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部に横位のハケメ調整、頸部以下は縦位のハケメ調整が施されている。 文) 5本一組の櫛描波状文が不規則に施されている。	回転実測B No.6
119-9	甕 — (17.4) —		内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部以下に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 5本一組の櫛描波状文(右回り)が上から下へ施されている。	破片実測A II区1・2層、炉内
119-10	甕 — (7.7) (8.2)		内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 丁寧な斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B II区2層
119-11	瓶 — (8.6) 7.1	底部に焼成前の一孔を有する。	内・外面ともに丁寧な横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A III区1層
119-12	鉢 (12.6) < 5.9 —	最大径は口縁部にあり、口縁部は緩く外反し、胴部はあまりふくらまない。口唇部に推定6ヶの突起がある。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。	破片実測A I区1層
119-13	鉢 — (3.4) (3.0)		内・外面ともに赤色塗彩・丁寧な横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A I区1・2層
119-14	鉢 — (4.2) (4.8)		内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A II区1・2層
119-15	鉢 — (3.3) (5.0)		内・外面ともに赤色塗彩・横位および斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B I区床
119-16	高坏 — (5.7) (8.8)	脚部は偏平に開き、接合部は細長い。	内) 坏部に赤色塗彩・ヘラミガキ、脚部は丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・ヘラミガキが施されている。	回転実測A No.3、II区1・2層

刷毛目調整、胴部下位は縦位のヘラミガキが施されている。文様は口縁部から胴部中位に5本一組の櫛描波状文が不規則に振幅も大きく雑に施されており、同時期の本遺跡出土甕では特異な施文方法である。119-6は12本一組の櫛描波状文が下から上へ施されており、119-7は9本一組の櫛描波状文が上から下へ施されている。119-6・7は最大径が口縁部と胴部でほぼ同じになる器形で外面に施文される波状文は振幅が小さく、規模的に帯状

で密になされている。その他に器形はやや異なるものの、単純口縁になると思われるもので、頸部に櫛描簾状文の施されない119-9がある。文様は、119-6・7と同じく振幅の小さい波状文が帯状に密に施されている。

受口口縁の119-3は、口縁部内外面とも明瞭な稜をもたず、緩やかに弯曲して頸部に至っており、中期に特徴的に見られる受口口縁からの退化形態とも考えられる。内面の調整は、丁寧な横位のヘラミガキが施されており、外面は横位の刷毛目調整が観察できる。文様は口縁部外面に振幅の小さな波状文が、頸部には6本一組の櫛描横走平行線文がなされており、胴部には櫛描斜走直線文が横位羽状に施されている。また、口唇部は縄文が施文されておらず、4ヶ組の刻目が観察できる。

119-11の甗は底部から直線的に大きく外傾し、内外面とも丁寧な横位のヘラミガキが施されており、やや大形の甗になりそうである。

鉢は2形態が見られ、119-12のように無彩で小形甗に似た器形をもつものと、内外面赤色塗彩された119-13・14・15がある。

119-16は外面赤色塗彩された高杯の脚部で、裾部「ハ」の字状に開く。

以上のことから、甗の器形が口縁部で短かく外反せず、やや立ちぎみに長く外傾外反することと、文様に櫛描波状文が大部分を占めること、119-3の甗に見られる弥生時代中期の系譜を引くのが存在することなどから、本住居址の所産期は弥生時代後期前半と考える。 (高村)

29) Y90号住居址

遺構 (第121・122図、図版 四十四)

本住居址は台地中央の南東寄り、こ・さ・し-14・15・16グリッド内に位置している。Y89号住居址、第5号溝状遺構、第158号土坑によって住居址の南西部および東壁中央から床面の中央部にかけて破壊され、床面上各所も攪乱されている。また、東壁中央から、南東コーナーにかけては既に削平されているため、壁体は存在しない。

プランは東西の短軸長700cm、南北の長軸長767cm (いずれも推定)、東壁長637cm (推定)、西壁長697cm (推定)、南壁長650cm (推定)、北壁長535cmの隅丸方形を呈するが、より長方形に近い。床面積は48.36㎡をはかり長軸方位はN-5.5°-Eをさす。

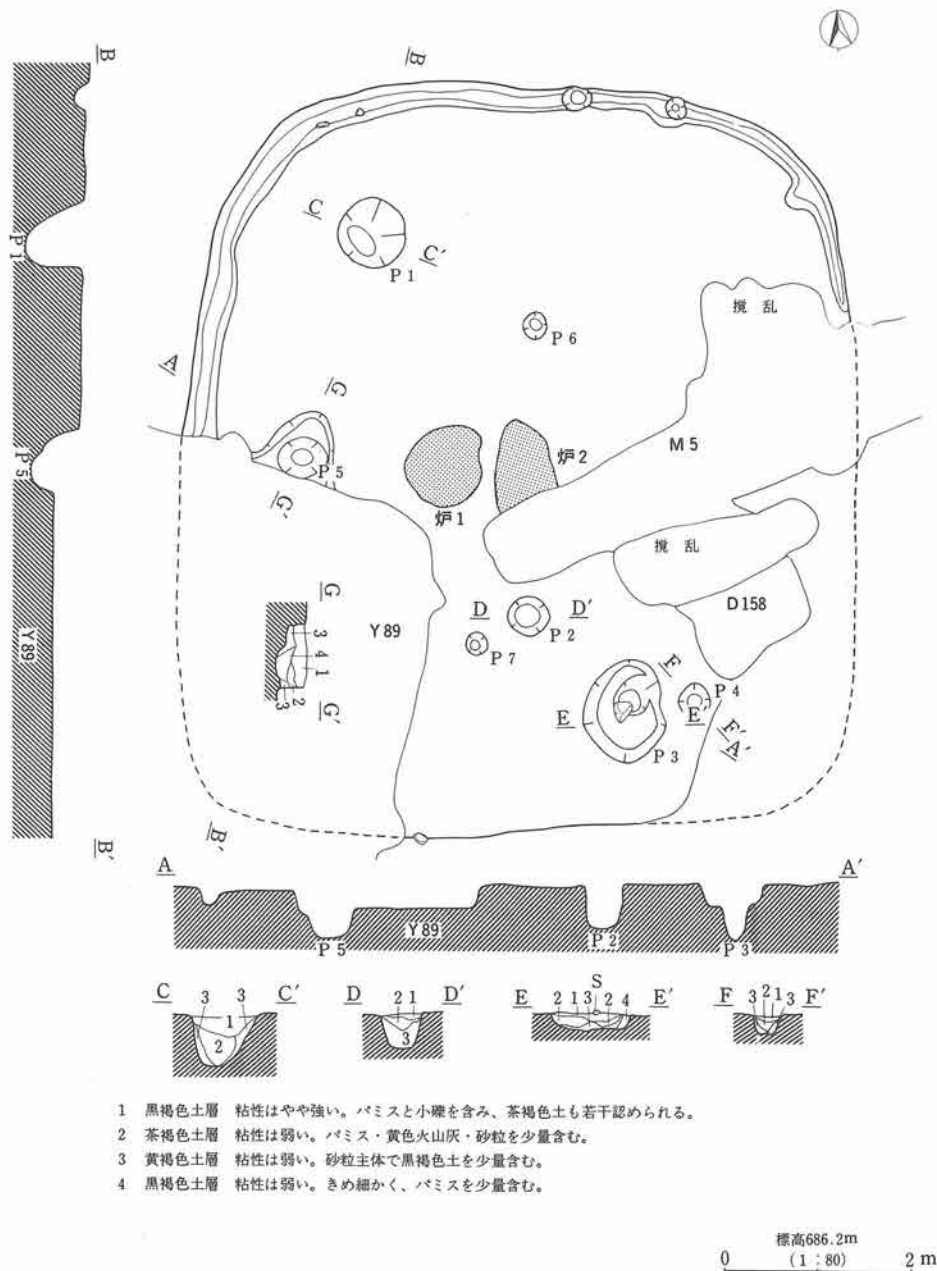
覆土は大方が削除されているため観察できなかつた。

確認面からの壁高は0~6cmを測り、遺存状態は極めて不良である。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用しておおむね平滑に構築され、床面からの立ち上がりは非常に緩い。壁溝は住居址内を全周していたと考えられる。

床面は地山の黄褐色火山灰層上に茶褐色土を薄く埋めもどして叩きしめた「叩き床」が全面に施されており平坦で堅固に構築されている。

ピットは7個検出された。極めて不規則な配置であるため、いずれが支柱穴であるかわからない。以下、番号順に形態、規模の説明を加える。P₁は北西コーナー付近に位置する。74×69cmの円形を呈し、58cmの深度を有する。断面形はV字形を呈する。P₂は炉址2の南側に位置する。42×47cmの楕円形を呈し、38cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は南壁下東寄りに位置し、109×82cmの楕円形の大きな掘り込み内に、41×35cmの楕円形の小さな掘り込みをもち、60cmの深度を有する。断面形は漏斗状を呈する。P₄はP₃の東側に隣接し、37×35cmの円形を呈する。深さは19cmを測り、断面形はU字形を呈する。P₅は西壁下中央に位置し、形状はY89号住居址に破壊されるため、不明である。50cmの深さを有し、断面は半円状を呈する。P₆は住居中央から北側に位置し、28×25cmの円形を呈する。深さは40cmを測る。P₇はP₂の南西側に位置し、25×24cmの円形を呈する。深さは28cmを測る。ピット内覆土は大方が三層に分けられ、P₃のみが四層を有する。柱痕が存在するものはない。第1層が黒褐色土、第2層が茶褐色土、第3層が黄褐色土、第4層が黒褐色土である。

炉址は住居中央西寄りに2つの炉が並んで設けられている。西側を炉1、東側を炉2とした。炉1は82×79cm



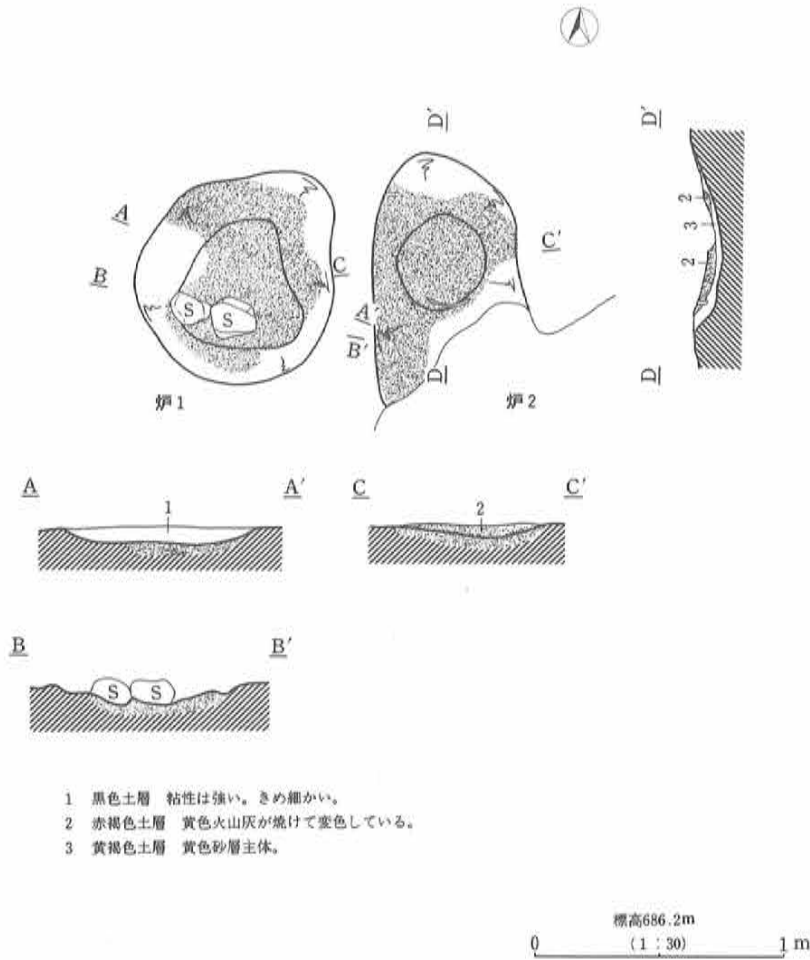
第121図 Y90号住居址実測図

の楕円形を呈し、長軸方位は真北をさす。深さは最深部で7.5cmをはかり、断面は弓状を呈する。掘り込みのほぼ全面にわたり、地山がやけた焼土分布（火床部）がみられ、火床部内南側に長さ17cm内外の円礫を2個おいて炉縁石を設けている。覆土は黒褐色土一層のみである。炉2はM5に破壊されるため全容は不明であるが、短軸は58cmを測る。最深部で10cmを測る掘り込み内に黄褐色火山灰（第2層）、黄色砂粒（第3層）をうめもどして、床面とほぼ同一レベルの火床部を構築している。火床部は真赤に焼けている状態であった。

遺物の出土状況

本住居址から出土した遺物は極く少なく、分布も散漫である。P₁内から123-1（台付甕）が出土している。
 (小山)

遺物（第123・124図、図版 四十四）



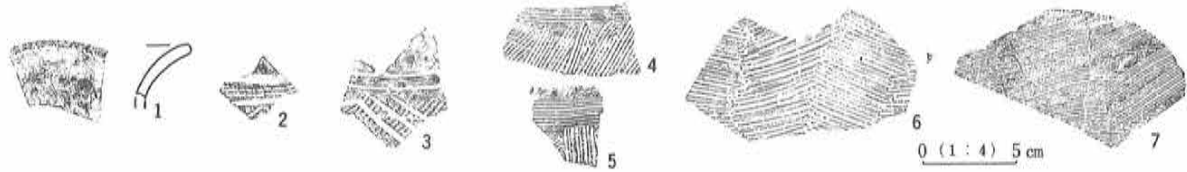
第122図 Y90号住居址炉址実測図



第123図 Y90号住居址出土土器実測図

本住居址からは、弥生土器が出土している。そのうち実測1点、拓影7点を図化した。弥生土器の器種には、壺・甕・台付甕がある。

壺には124-1の細頸壺の口縁部と124-2の頸部と124-3の胴下部の破片がある。125-1は口唇部に縄文が押捺されており、124-2には篋描横走平行線文と多連止簾状文がなされている。甕には124-4~7までの頸部から胴部の破片がある。124-4は



第124図 Y90号住居址出土土器拓影図

第28表 Y90号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
123-1	台付甕	- <6.4> 6.0		内) 黒色処理・丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキの後、横位のヘラミガキが施されている。 文) 胴部下半にLR縄文を地文とし、ヘラ描の菱形沈線文が施されている。	回転実測A II区、P1

横位羽状の櫛描斜走直線文が、124-6は縦位羽状の櫛描斜走直線文が施されている。124-5は櫛描垂下文（直線）と横位に带状の櫛描波状文がなされる頸部から胴部の破片がある。123-1の台付甕は脚部から胴下部の部位で、脚部短かく「ハ」の字状に開き、内面黒色化傾向のみられる小形のものと考えられる。

以上、壺・甕の破片から本住居址の所産期は弥生時代中期後半と思われる。（高村）

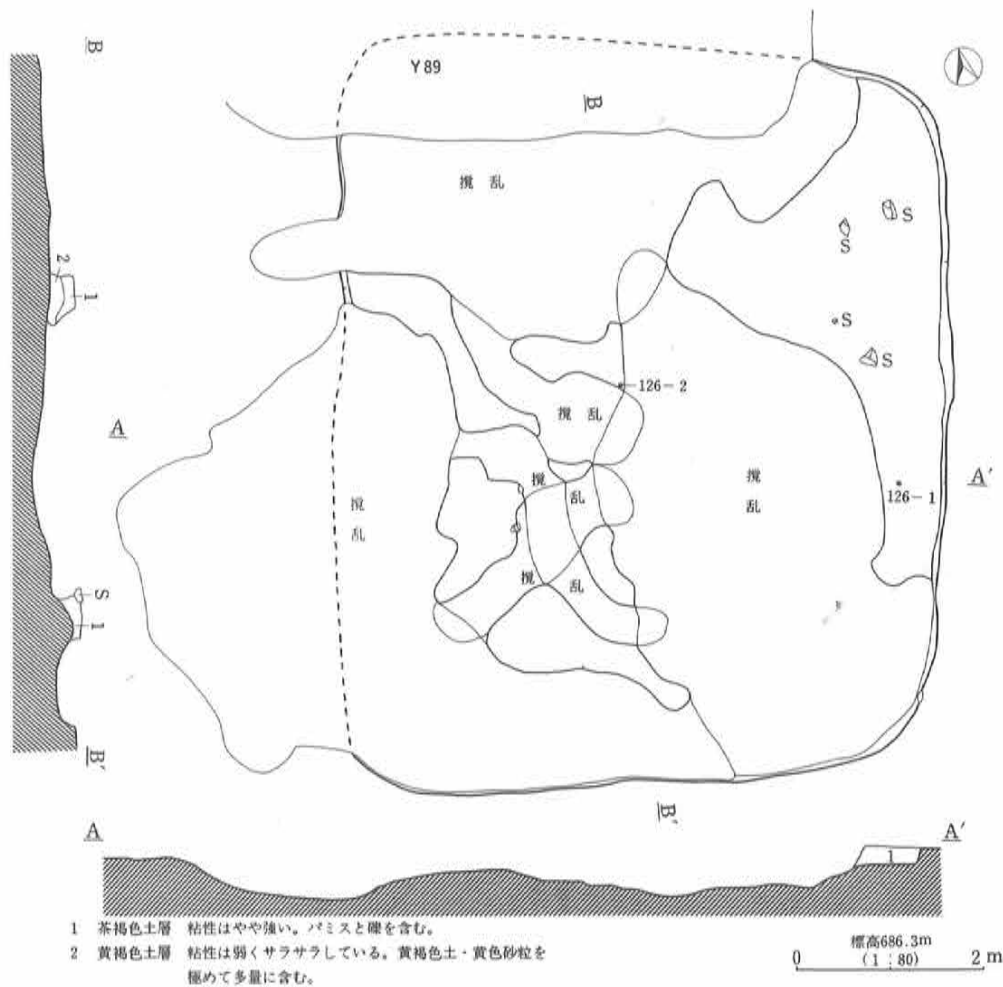
30) Y91号住居址

遺構（第125図、図版 四十五）

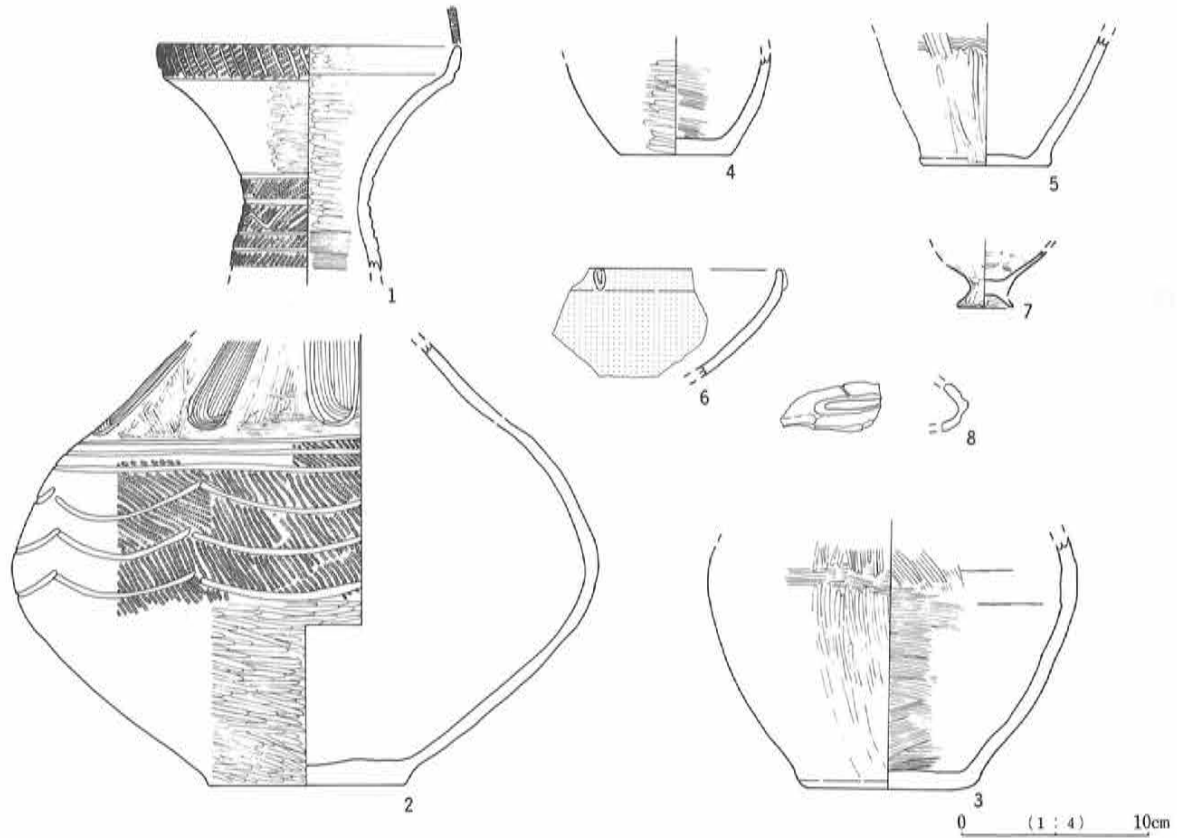
本住居址は台地南部の東側、す・せ・そー15・16・17グリッド内に位置している。Y89号住居址と重複関係を持ち、北壁部の大半を破壊されている。また、近代、当所において神社が建てられていたために、これによる攪乱も著しく、東壁とその付近の一部の床面、南壁、住居址西側の一部の床面の他は、大半が破壊されているが、形態の推定は可能である。

プランは東西の短軸長605cm、南北の長軸長775cm、東壁長650cm、西壁長757cm、南壁長560cm、北壁長585cm（計測値はいずれも推定である。）の隅丸長方形を呈しており、床面積は46.21㎡（推定）を測る。長軸方位はN-11°-Eをさす。

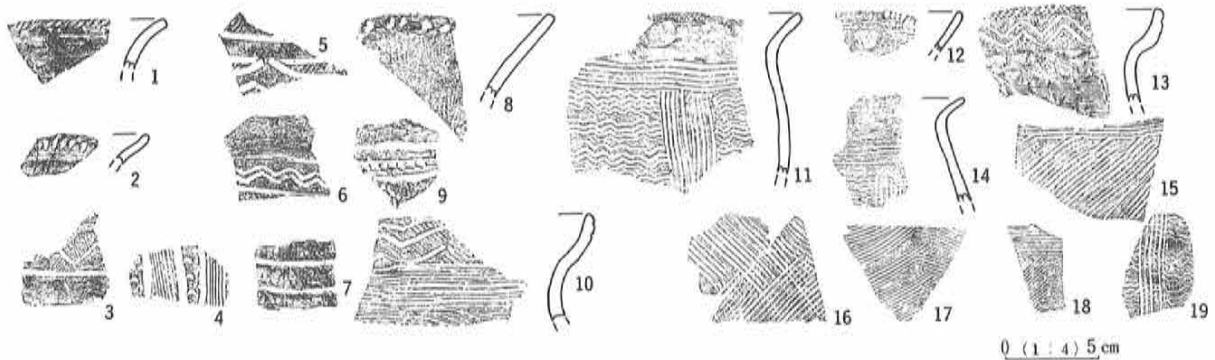
覆土はパミスと礫を含む茶褐色土（第1層）のみからなるが、残存しているのは住居址でも極く一部の範囲である。



第125図 Y91号住居址実測図



第126図 Y91号住居址出土土器実測図



第127図 Y91号住居址出土土器拓影図

確認面からの壁高は残存部で4.5~16cmを測り、床面からの立ち上がりは急傾斜である。壁体は大方が地山の黄褐色火山灰を利用して構築され、平滑で堅固である。壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層まで掘り窪めたのち、茶褐色土を埋め戻してたたきしめた「叩き床」が全面に施されていたものと考えられ、残存部は非常に堅固である。ピット及び炉址も検出されなかった。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が多量に出土しているが、大方が攪乱層の中からの出土である。従って、明確に共伴遺物と見做せるのは残存する床面上から出土している126-1・2（同一個体と考えられる壺）のみであるが、本住居址のプラン内から出土している遺物は共伴遺物に近いものと考え、図化してある。従って、石器についても同様なことが言えるが、これについては第2節石器についてを参照されたい。267-30・37（打製石鏃）、270-90（磨製石斧）、272-135（砥石）が住居址の北西部、273-143（砥石）が南西部から出土している。この他126-1（壺）が東壁下中央から南寄り、126-2（壺）が住居中央の床面上、126-4・5（壺・甕）が西壁下

第29表 Y91号住居址出土土器観察表

挿 図 番 号	器種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
126-1	壺	16.0 <11.8> —	口縁部は筒状の頸部から大きく外反し、上位で外稜をもち、受口状を呈する。	内) 口縁部から頸部に丁寧な横位のヘラミガキ、以下は横位のハケメ調整が施されている。 外) ハケメ調整の後、丁寧な横位および斜位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部と頸部にLR縄文を地文とし、口縁部にヘラ描斜走短線文、頸部に5条のヘラ描横走平行線文と1条のヘラ描連続山形文が施され、口唇部にもLR縄文が施されている。	回転実測B No.6、III区、ベルト内
126-2	壺	— <23.5> 10.4	胴部は中位やや下方で大きくふくらみ、頸部に向かって収束する。	内) 磨滅著しく不明。 外) 頸部に斜位ハケメ調整→縦位のヘラミガキ→斜位のヘラミガキ→横位のヘラミガキ、胴部下位は丁寧な横位および斜位のヘラミガキが施されている。 文) 胴部上位に5本一組の櫛描垂下文が施され、周囲はヘラ描沈線線で区画されている。胴部中位はLR縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文が3条、その下方にヘラ描連弧文が3条施されている。	回転実測Bにより図上復元 No.5、II区1層、攪乱 外面の所々に赤色顔料が付着している。
126-3	壺	— <13.5> 7.5		内) 斜位のハケメ調整→横位のハケメ調整が施されている。 外) 胴部中位に横位のハケメ調整が施された後、その上下に縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A III区、IV区、攪乱 内面に粘土帯と思われる粘土の接合部が観られる。
126-4	壺	— <5.4> 6.0		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 丁寧な斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.3
126-5	甕	— <6.9> 7.0		内) 磨滅著しく不明。 外) 胴部下位に文様が施された後、斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 胴部に櫛描波状文が施された後、櫛描垂下文が施文されている。	回転実測A No.7
126-6	鉢	— <7.0> —	口唇部に突起の貼付がある。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	破片実測B I区
126-7	高 坏	— <3.1> (3.0)	手捏成形による小型の土器であり、坏部に比して脚部は小さい。	内) 細かい縦位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A III区
126-8	不 明	— <5.3> —		文) 楕円状のヘラ描沈線が施されている。	破片実測B II区覆土 土製品か?

の南側、126-6 (鉢)、127-12 (甕) がI区、127-3~5・17 (壺・甕)、126-8 (不明) がII区、126-7 (高坏)、127-2・6・8~11・14・18 (壺・甕) がIII区、126-3 (壺) がIII・IV区の攪乱層中から出土している。地区不明の126-7・13・15・16・19 (壺・甕) も攪乱層出土遺物である。

遺物 (第126・127図、図版 四十六)

弥生土器の器種には壺・甕・鉢・高坏・不明品がある。壺には受口口縁の126-1・2 (同一個体) と単純口縁の127-1・2・8があり、いずれも細頸壺である。126-1・2は口縁部はしっかりとした外稜をもち、受口状を呈し、胴部は下位で強く張る。口縁から胴部下位まで施文され、口縁部はLR縄文上に篋描斜走短線文、頸部はLR縄文上に篋描横走平行線文・連続山形文、胴部上位は篋描文で区画された櫛描垂下文、胴部中~下位はLR縄文上に篋描横走平行線文・連弧文が施されている。単純口縁127-1・2・8は口唇部に文様をもち、1は縄文、2は縄文上に篋描の刻目、8は篋描の刻目が施される。この他、頸部の篋描横走平行線文区画内に連続山形文が施される127-6、櫛描刺突文が施される127-9、縄文地文をもち篋描連続山形文が施される127-3、全面に赤色塗彩される127-7と胴部にLR縄文を地文として篋描連弧文・横走平行線文が施文される127-5、篋描文で区画された櫛描垂下文の周囲に篋描刺突文をめぐらした127-4などがある。甕にも受口口縁の127-10・12・13と単純口縁の127-11・14がある。10・12は外稜がとれ、13は外稜が明瞭に残る。12には櫛描波状文、11・13には縄文上に篋描連続山形文が施され、11の口唇部には擬縄文が施されている。頸部文様は10・11・14・15・18に櫛描横走平行線文、13に簾状文が施され、胴部文様は10・17・18に縦位羽状の斜走直線文、15・16に横位羽状の斜走直線文、11・19、126-5に櫛描波状文・垂下文が施されている。鉢は碗状を呈し、口縁部に突起を有する赤彩品126-6、高坏は手捏成形で小型の126-7がある。126-8は不明品である。

以上の出土遺物から本住居址の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。

(小山)

31) Y92号住居址

遺構 (第128・129図、図版 四十五・四十六)

本住居址は台地南部の東側、す・せー13、す・せ・そー14・15グリッド内に位置している。第2号溝状遺構に住居址の北側、攪乱溝に住居址の西側を破壊されており、また、壁体のすべてが削平されてしまっているため、床面範囲のみが把握された。

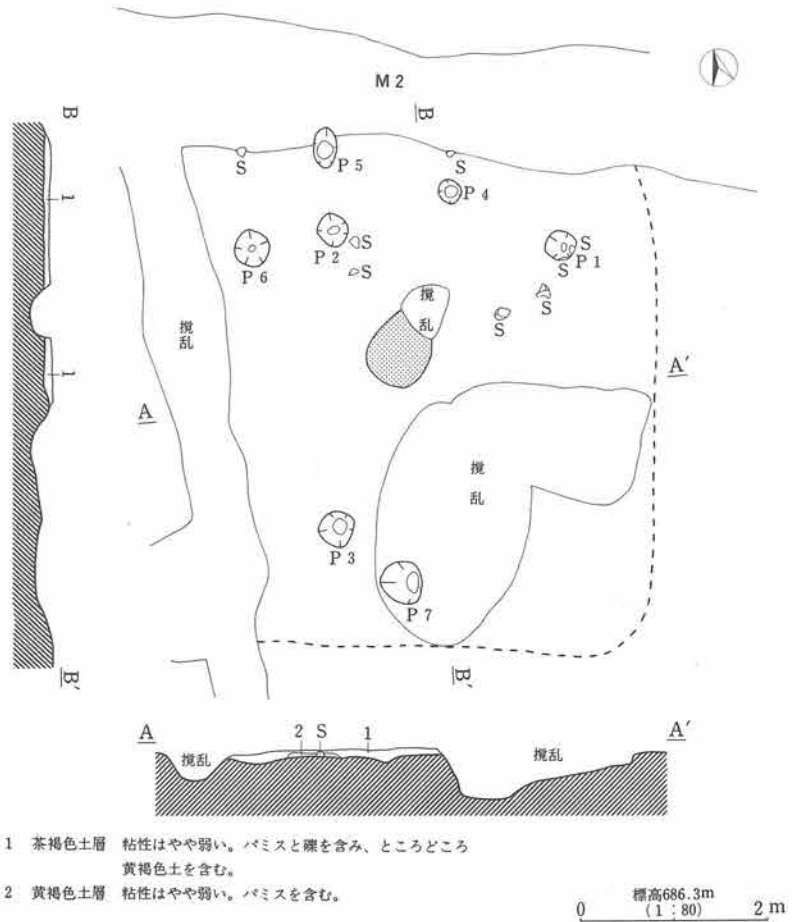
従って、平面形態、規模は明らかでない。

覆土も大方が削平されており、辛うじて第1・2層が確認できた。第1層は礫、パミスとブロック状の黄褐色土を含む茶褐色土であり、第2層はパミスを含む黄褐色土である。第1層は住居址内に広く分布していたことが想定されるが、第2層は極部的な堆積であったと考えられよう。

壁体は先述したように存在せず、壁溝も検出されなかった。

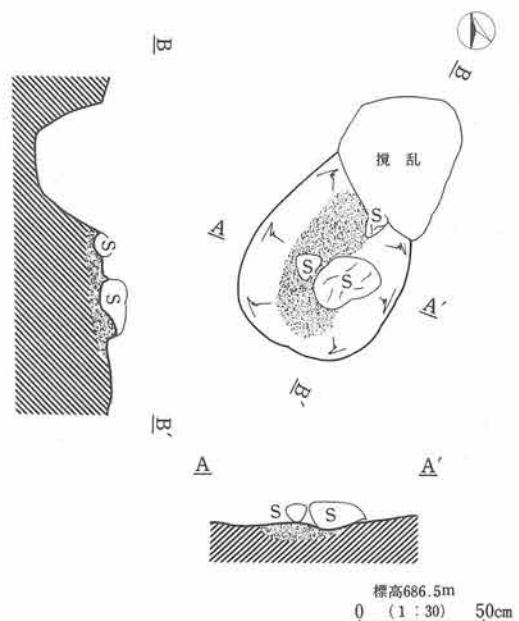
床面は地山の砂層上に茶褐色土を薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が全面に施されていたと考えられるが、破壊が南東部の土坑状の大きな攪乱をはじめ、各所にわたっており、遺存状態は極めて悪く、凹凸が激しい。また、特に堅緻な箇所も認められない。

ピットは7個検出されたが、不規則な配置で、深度も不十分なものが多い。従って、明確に支柱穴とできるピットがない。P₁は北東部に位置し、31×34cmの円形を呈する。19cmの深さを有する。P₂は北西部に位置し、38×33cmの楕円形を呈し、32cmの深度を有する。P₃は南西部に位置し、39×39cmの円形を呈する。深さは44cmを測る。P₄はP₁・P₂間の中央北側に位置し、25×24cmの円形を呈する。深さは28cmを測る。P₅はP₂の北側に位置し、43×25cm(残存値)の楕円形を呈する。P₆はP₂の西側に位置し、40×39cmの円形を呈する。深さは30cmを測る。P₇は住居南端の中央に位置し、44×42cm(残存値)の不整形円形を呈する。深さは39cmを測る。



- 1 茶褐色土層 粘性はやや弱い。パミスと礫を含み、ところどころ黄褐色土を含む。
- 2 黄褐色土層 粘性はやや弱い。パミスを含む。

第128図 Y92号住居址実測図



第129図 Y92号住居址炉址実測図

炉址は住居址の中央と考えられる位置から検出された。

北東側を破壊されるものの、82×66cmの楕円形を呈することが推定でき、長軸方位はN-11°-Eをさす。床面からは最深部でも4cmと浅い掘り込みであり、断面形も掘り込みの中央部に向って極くなだらかに傾斜する程度である。火床部は地山の砂層をそのまま利用しており、掘り込み中央部には63×22cmの長楕円形の地山砂層が焼け込んだ焼土範囲が広がる。火床部東側には、長さ27cm、幅18cmの円礫、その西側に近接して径11cm前後の角礫が置かれており、炉縁石と考えられる。また、炉縁石北側にも礫が分布しているが、この礫が原位置を保っているものかは定かでない。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているが量は少なく、散漫な分布傾向を示す。図化したものは大方が床面上から出土したものであり、共伴遺物と見做したい。130-1(壺)はIII・IV区の間で接合関係がみられ、131-5(甕)がII区、131-1・2・3・4・6(甕)がIV区から出土している。(小山)

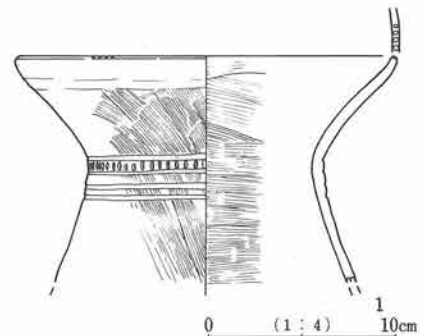
遺物(第130・131図、図版 四十六)

本住居址からは、弥生土器が出土している。弥生土器の器種には壺・甕がある。

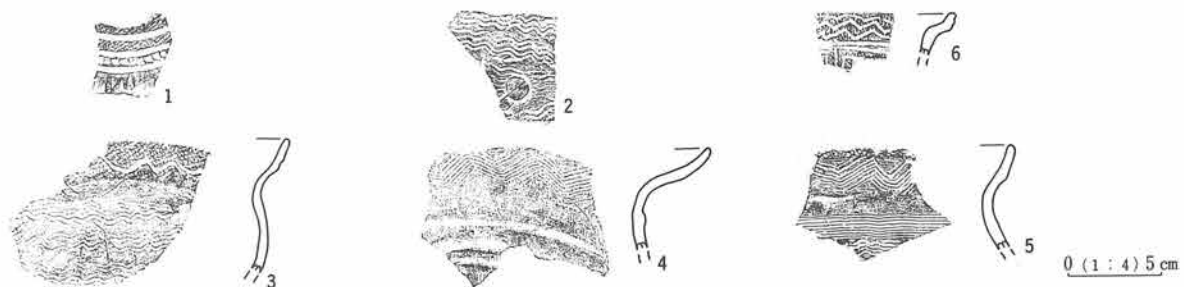
壺には太頸壺の130-1と細頸壺の131-1がある。130-1は口縁部から頸部の破片で、口縁部は頸部から外傾して立ち上がり、端部でわずかに内弯する。文様は、頸部と口唇部に施され、頸部は4条の篋描横走平行線文で区画され、その区画の最上段に篋描による刺突文が施文される。また口縁部には4単位一組の篋描による刻目文が等間隔8箇所施される。131-1は頸部に位置する破片で、LR縄文を地文として、篋描横走平行線文が3条、篋描の押引文が1条観察される。

甕には131-2・3・4・5・6がある。131-2は胴部に櫛描波状文が施文され、円形浮文が貼付される。131-3~6はいずれも受口状の口縁部を有しており、131-3・4は口縁部にLR縄文を地文として篋描連続山形文が施され、131-5・6は口縁部に櫛描波状文が施文される。また、131-4・6は口唇部に縄文が観察できる。

以上、本住居址の所産期は、出土した壺・甕の特徴から弥生時代中期後半に位置づけられる。(三石)



第130図 Y92号住居址出土土器実測図



第131図 Y92号住居址出土土器拓影図

第30表 Y92号住居址出土土器観察表

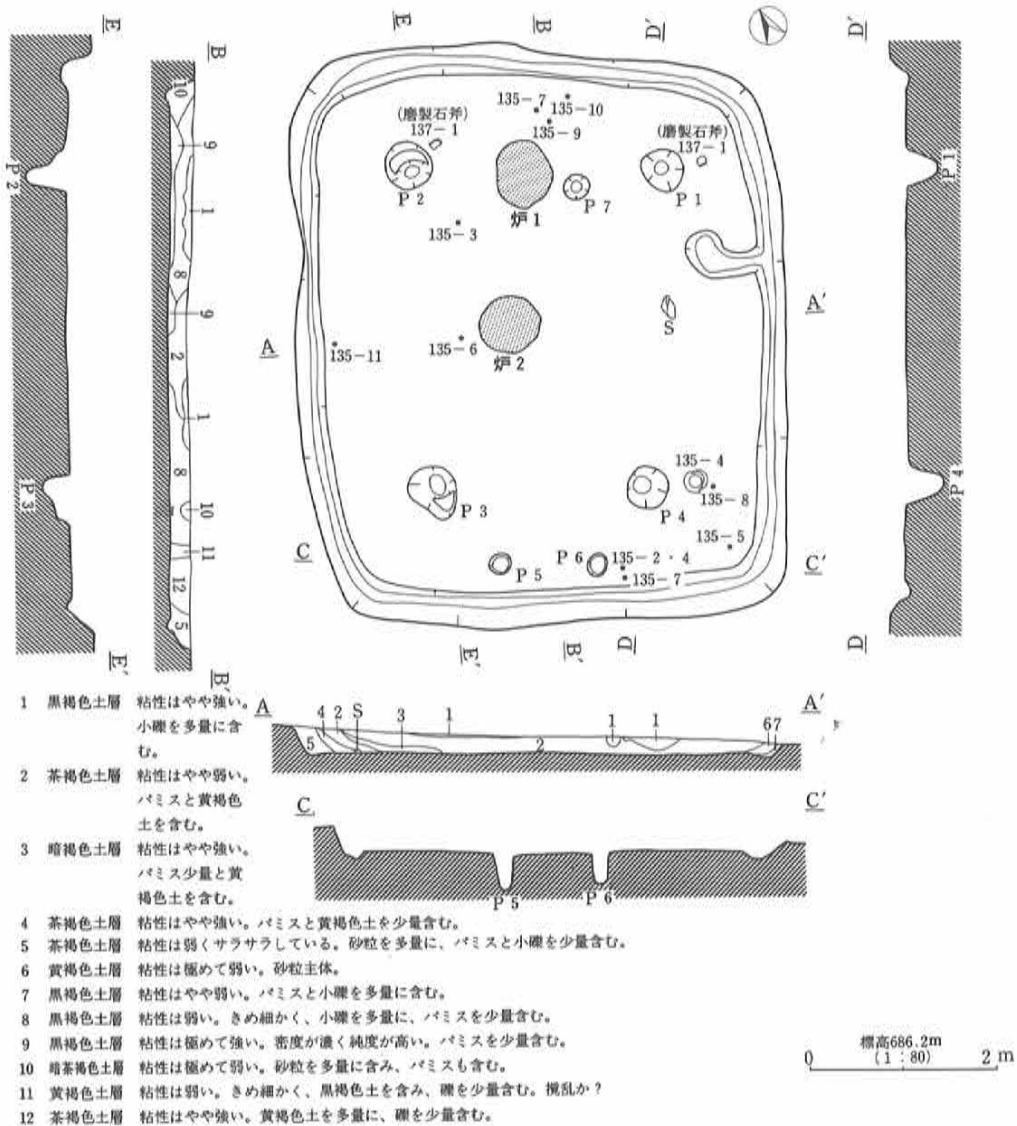
挿番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
130-1	壺	(20.2) (12.0)	頸部は太く、口縁部は外反し端部で僅かに内弯する。	内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 口縁部にヨコナデ→斜位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部にへら描による刺突文が施され、その上下は4条のへら描横走平行線文により区画されている。また、口唇部に4個一組のへら描による刻目が等間隔8箇所に施されている。	回転実測B III区、IV区

32) Y93号住居址

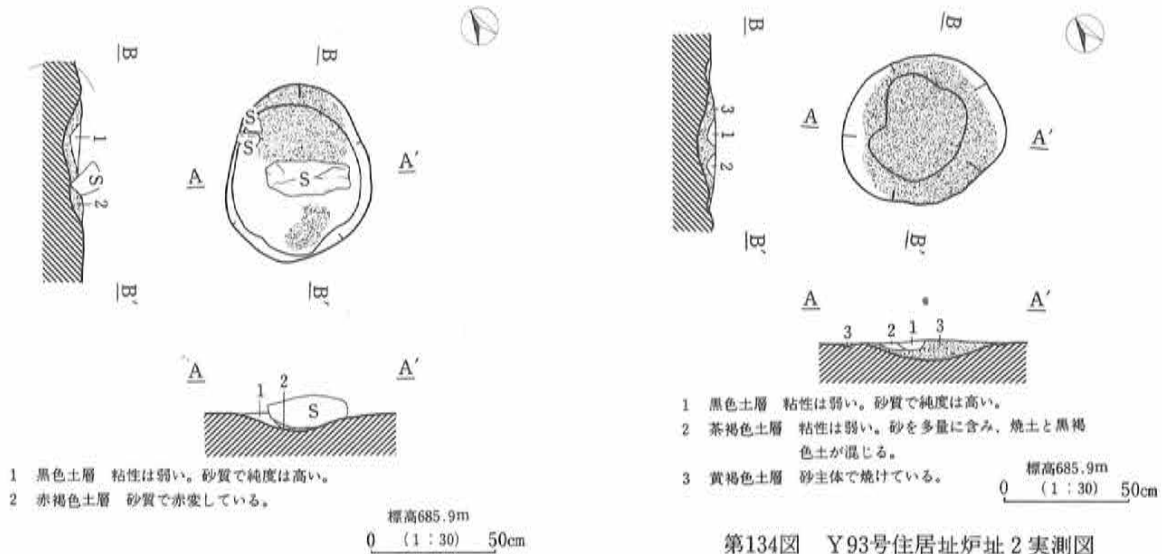
遺構 (第132・133・134図、図版 四十七・四十八)

本住居址は、台地南部の東端、し・す・せー11・12グリッド内に位置している。他遺構との重複関係はもたず単独の検出である。プランは、東西495cm、南北572cm、東壁長592cm、西壁長534cm、南壁長420cm、北壁長444cmの隅丸長方形を呈し、床面積は23.61㎡をはかる。長軸方位はN-23°-Eをさす。

覆土は大別して三層、細別で十二層よりなる。大別三層は第2・7層を中心とする最終埋没土(第1・2・3・7・10層)、壁際を中心として堆積する第1次的な埋没土(第4・5・6・9・11・12層)、床面上に小範囲にわたって堆積する埋没土(第8層)に分けられ、プライマリーな堆積状態を示すと思われる。最終埋没土のうちでも第1・10層はその最上面に僅かにみられる。第1層は小礫を多量に含む黒褐色土、第10層は砂粒を多量に含む暗茶褐色土である。第2層は東西に広く、南北に狭く堆積する。パミスと黄褐色土を含む茶褐色土である。第3層は西壁下のみ認められ、第2層にサンドイッチ状にはさまれて堆積する。パミスと黄褐色土を少量含む暗褐色土である。第7層は住居址の北・南の両方向からの流入が認められ、東・西方向からの流入はみられない。小礫とパミスを多量に含む黒褐色土である。第1次的な堆積土は各壁下によって僅かずつ異った埋没状態を示す。第



第132図 Y93号住居址実測図



第133図 Y93号住居址炉址1実測図

第134図 Y93号住居址炉址2実測図

5層は北壁下を除く、東・西・南壁下に堆積する。砂粒を多量、パミスを少量含む粘性の弱い茶褐色土である。第6層は東壁に密着して堆積する砂粒主体の黄褐色土で壁体の崩壊層と考えられる。他の壁下にはみられない。第9層は北壁下にもみられ、パミスを少量含む密度が濃く、純度が高い黒褐色土である。第11層は黒色土を少量含む黄褐色土で攪乱層とも考えられ、住居中央より南側に円柱状の堆積を示す。第12層も南壁側、第5層よりも住居中央に堆積する黄褐色土を多量に含む茶褐色土である。床面上に薄く堆積する第8層は、住居址の北側にもみられる。小礫を多量に、パミスを少量含む黒褐色土である。

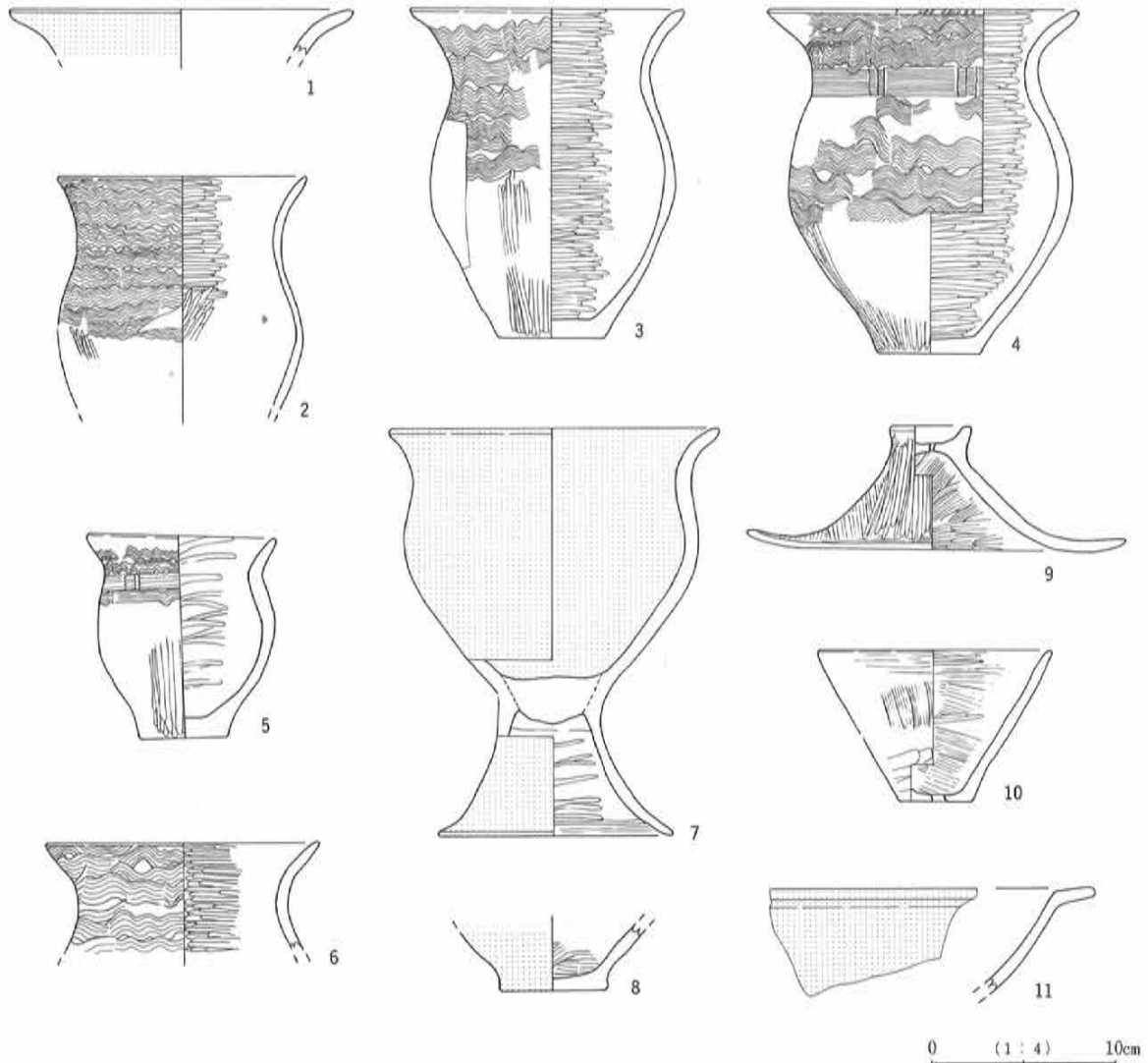
確認面からの壁高は5～32cmをはかり、東壁の残存状態がやや悪いものの、おおむね良好な遺存状態である。床面からの立ち上がりは割合急斜面である。壁体は上位を地山の黄褐色火山灰層、下位を地山の砂層を利用して構築されている。おおむね、堅固で平滑な構築状態である。

壁溝は住居の壁下を全周し、東壁下中央北寄りに、床面中央に向かって伸びる70cmの溝が交差している。溝幅は11～28cmを測り、4.5～8.5cmの深度を有する。断面は緩いU字形を呈する。

床面は地山の砂層まで掘り窪めたのちに茶褐色土を薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が全面に施されている。非常に平坦に構築されており、おおむね堅固である。

ピットは7個検出された。支柱穴は4本(P₁～P₄)が整然と配置される。P₁は44×45cmの円形を呈し、33cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は49×51cmの円形を呈し、42cmの深度を有する。断面形は北側に一段のテラスを有する。P₃は59×49cmの楕円形を呈し、31cmの深度を有する。断面形は南側に一段のテラスを有する。P₄は45×45cmの円形を呈し、39cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₅・P₆は南壁下中央に整然と並ぶ。入口施設に関わる柱穴と考えられ、P₅・P₆間は110cmをはかる。P₅は23×25cmの円形を呈し、38cmの深度を有する。P₆は23×22cmの円形を呈し、33cmの深度を有する。断面形はいずれもV字形を呈する。P₇は炉1の東側に近接する。25×27cmの円形を呈し、12cmの深度を有する。

炉址は北側の支柱穴(P₁・P₂)間中央に位置する炉1と住居中央西寄りに位置する炉2の複数の炉が検出された。炉1は71×58cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-35°-Eをさす。床面からの掘り込みは最深部で、7cmを測り、断面形は弓状を呈するが、この掘り込みをそのまま利用して使われた炉ではない。火床部は掘り込みのほぼ中央部に断面三角形の礫を置いて炉縁石を設置したのち、黄褐色火山灰を4～5cmの厚さで掘り込み内全面に埋め戻して構築されている。焼土の広がり炉縁石を境として北側にあり、30×42cmの範囲を有し、真赤に焼け込んでいる。焼土分布は炉縁石の南壁にもみられ、20×12cmの範囲を有する。覆土は純度の高い黒色土一層の



第135図 Y93号住居址出土土器実測図

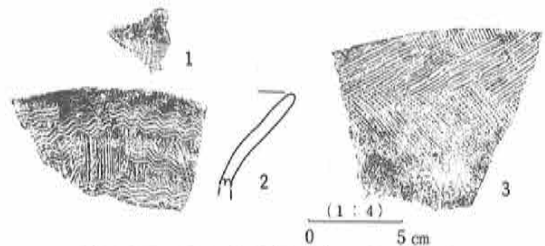
みがわずかに認められる。

炉 2 は65cm×60cmの円形を呈し、長軸方位はN-60.5°-Wをさす。床面からの掘り込みは最深部で7cmを測り、これに黄褐色の砂（第3層）を埋め戻して火床部を構築している。火床部は掘り込みプランのほぼ全面

にわたっており、真赤に焼け込んだ状態であった。覆土は、黒褐色土、茶褐色土（第1・2層）からなる。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器のまとまった資料が多量に出土している。このうち、図化したものは大方が床面上、あるいはそれに近いレベルから出土したものであり、本住居址の所産期を決定し得る共伴遺物と見做すことができる。〔267-26（打製石鏃）は除外した。〕しかし、135-2（甕）がIII・IV区、135-7（脚付鉢）が北壁下中央と南壁下中央東寄り、137-1（握斧）がP₁周辺とP₂周辺など住居址内の広範囲にわたる接合関係がみられる資料が多いこと、また、本住居址のIV区から出土した甕の破片が直線距離で約58m離れたY120号住居址の135-3・4（甕）と接合することを勘案すると、本住居址出土資料が住居使用時に使われていたものではなく、住居廃絶後に投棄されたものであることが想起される。住居内における遺物の分布傾向は、特に炉1の周辺、135-



第136図 Y93号住居址出土土器拓影図

第31表 Y93号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
135-1	壺	(18.6) <3.0> —		内) ミガキが施されている。 外) 赤色塗彩が施されている。	回転実測B II区 外面は磨滅著しい。
135-2	甕	(13.4) <12.5> —	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しい。 口縁部は「弓」状に強く外反し、胴部は中心でふくらむ。	内) 口縁部から頸部は丁寧な横位のヘラミガキ、その後頸部以下は縦位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部下位には丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部中位に7本一組の櫛描波状文(右回り)が上から下へ9層施されている。	回転実測A No10、III区、IV区
135-3	甕	14.8 12.7 5.6	最大径は口縁部にある。口縁部は「弓」状に外反し、胴部は中位でふくらみをもつ。	内) 全体に丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部は横位のハケメ調整、胴部下半は文様施文の後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部上半に9本一組の櫛描波状文(右回り)が上から下へ施されている。	回転実測A No6・7、II区
135-4	甕	16.8 18.5 5.6	最大径は口縁部にある。口縁部は「弓」状に外反し、胴部は中位で大きくふくらむ。口唇部は面取りされている。	内) 全体に丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部下半は文様施文の後、丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部はLR縄文、頸部に12本一組の櫛描籐状文(3連止め・右回り)施文の後、口唇部から頸部には10~12本一組の櫛描波状文(右回り)が施されている。	回転実測A No10・12、III区、IV区
135-5	甕	10.0 11.2 4.6	最大径は口縁部、胴部中位ではほぼ等しい。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は中位でふくらむ。	内) 全体に横位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部下半は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に櫛描籐状文(3連止め・右回り)施文の後、口縁部から胴部上位に4本一組の櫛描波状文が施されている。	回転実測A No14、IV区
135-6	甕	(14.2) <5.9> —	口縁部は「弓」状に外反する。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 6本一組の櫛描波状文(右回り)が上から下へ施されている。	回転実測B No9、III区
135-7	脚付鉢	18.0 22.0 12.8	鉢と脚部の接合部のホゾは独立してあったと思われる。最大径は口縁部にある。口唇部は「弓」状に外反し、胴部は中位上方でふくらむ。脚部は「ハ」の字状を呈する。	内) 鉢部は赤色塗彩・横位のヘラミガキ、脚部は横位のハケメ調整が施されている。 外) 全面赤色塗彩・鉢部は横位のヘラミガキ、脚部は縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No1・11、III区、IV区
135-8	壺	— (3.2) (6.0)		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No13
135-9	蓋	4.5 6.7 20.5	つまみ部は凹状を呈し、中央に内面から穿孔したと思われる一孔がある。	内) 斜位のハケメ調整の後、口縁部に横位のヘラミガキが施されている。 外) 粗い斜位のハケメ調整の後、口縁部に横位のハケメ調整、一部に縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No3、I区
135-10	甗	(12.6) 8.2 4.0	底部中央に焼成前の一孔を有する。口縁部はほぼ直線的に開く。	内) 横位のハケメ調整の後、横位のヘラミガキが施されている。 外) 体部上半はヨコナデ及び縦位のハケメ調整、下半は横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No2、I区、II区、III区
135-11	高坏	— <7.0> —	口縁部上端で強く外反し、偏平となる。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	破片実測B No8

3・7・9・10(甕・脚付鉢・甗・蓋)と、南東コーナー一部135-2・4・5・7・8(甕・脚付鉢・壺)に集中する傾向が看取され、この他137-1(握斧)が、P₁とP₂の東側2箇所、135-6(甕)が炉2の西側、135-11(高坏)が西壁下中央に分布している。(小山)

遺物(第135・136・137図、図版 四十八)

本住居址からは、弥生土器・石器が出土している。弥生土器はまとまった資料が出土しており、器種には、壺・甕・脚付鉢・蓋・甗・高坏がある。

壺には135-1・8がある。135-1は口縁部に位置する破片で、頸部から大きく外傾外反し、ラッパ状に開くものと考えられる。内面調整はナデ調整が行われるが、外面は剝離・磨滅が著しい状態で、赤色塗彩が極く僅かに観察できるのみである。135-8は小型壺の底部片で、内面調整は刷毛目調整、外面は赤色塗彩が施されている。

壺にはこの他、頸部に櫛描籐状文(2連止め)が右回りに施文され、内外面とも赤色塗彩が施される136-1がある。

甕には135-2・3・4・5・6の5点があり、小型品の135-5を除くと他は全て中型品である。文様構成は、頸部に櫛描籐状文、口縁部と胴部に櫛描波状文の施される135-4・5と頸部に櫛描籐状文が施文されず、櫛描波

状文のみの135-2・3・6に分けられる。135-4・5の櫛描簾状文はいずれも3連止めで右回りに施文されており、施文順序も頸部に簾状文を施文したのち、口縁部と胴部に波状文が施される点で一致する。また、135-4に施される波状文は口縁部・胴部とも上から下へ施文されており、本遺跡内における他の住居址出土の資料と同様な傾向が認められる。簾状文の施されない135-2・3・6も波状文が上から下へ施文される点で一致する。形態は135-2～5の4点ともいずれも口径が胴部最大径をわずかに上回る点で共通するが、135-4は口縁部の外反度が強く、「く」の字状に近くなり、胴部は中位で張りをもつ。甕にはこの他破片資料として、口縁部に櫛描波状文の施される136-2、胴部に櫛描斜走直線文の施される136-3がある。

脚付鉢は135-7の一点のみである。口縁部は短かく外傾外反し、口径が最大径となる。脚部は中位上方でふくらみをもち、脚部は「ハ」の字状に開き、端部で外反する。調整は、鉢部内面に赤色塗彩・横位のへらミガキが施され、脚部内面は刷毛目調整の後、ナデ調整で端部はヨコナデが行われる。また、わずかに赤色顔料の付着が観察できる。外面は鉢部・脚部とも赤色塗彩が施される。

蓋は135-9が一点出土した。つまみ部は凹状を呈し、中央に内面からの穿孔と思われる径2mmの孔がみられる。体部は「ハ」の字状に開き、端部で大きく外反する。内面調整は刷毛目調整の後、横位のへらミガキが行われ、外面は粗い刷毛目調整の後、一部に縦位のへらミガキが施される。

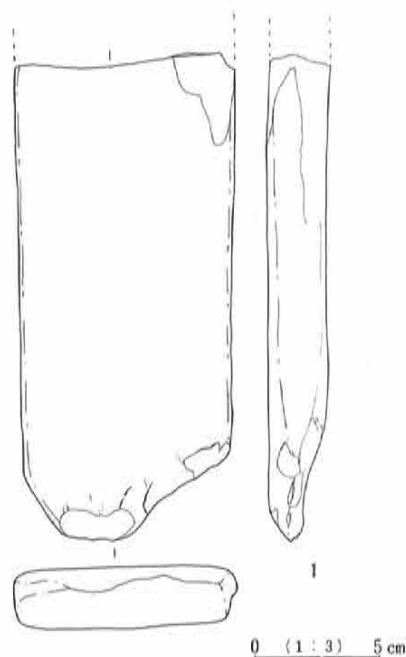
甑には135-10がある。体部は直線的に外傾して開き、底部には内面からの穿孔と思われる径7mmの一孔を有する。調整は内面に横位の刷毛目調整が行われる。外面は縦位の刷毛目調整が行われ、口縁部にヨコナデ、底部付近にへらナデが施される。

135-11は高坏の坏部に位置する破片である。小片のため全体の器形は不明であるが、内弯して立ち上がり、端部で強く外方に屈曲し、内稜を有する。調整は内外面とも赤色塗彩が施される。

この他小片のため図化し得なかったが、内面に刷毛目調整の施される壺の底部、内外面とも赤色塗彩の施される鉢の底部、内面に丁寧なへらミガキが行われ、内面からの穿孔と思われる径1.0cmの一孔を有する甑の底部、内弯気味に立ち上がり、端部で内弯して直立気味となる口縁部を有し、内外面とも赤色塗彩された高坏の坏部などがある。

石器類では、本住居址と共伴性が強いものとして137-1の握斧がある。137-1は安山岩製で、自然石を利用したものである。基端部を欠損するが、残存部で長さ18.8cm、最大幅8.7cmを測り、側辺と刃部にわずかに使用痕が認められる。また、本住居址との共伴性は薄いと考えられるが267-26の打製石鏃がある。267-26は黒曜石製の凹基有茎鏃で、長さ2.0cm、最大幅1.9cmで重さは0.72gを測る。

以上、本住居址の所産期は、出土した壺・甕などにみられる特徴から弥生時代後期前半に位置づけられると考える。



第137図 Y93号住居址出土石器実測図

33) Y94号住居址

遺構 (第138・139図、図版 四十九・五十)

本住居址は台地南部の東端、さ・し-10・11、さ-9グリッド内に位置している。第163号土坑と重複関係を持ち、北壁中央部を破壊されている他、南西コーナー部を攪乱されている。また、住居址の南東側は既に削平されているため現存しない。

プランは東西の短軸長462cm、南北の長軸長617cm (いずれも推定)、東壁長590cm、西壁長460cm、南壁長440cm、北壁長443cm (いずれも推定)の隅丸長方形を呈し、床面積は27.42㎡をはかる。長軸方位はN-69°-Eをさす。

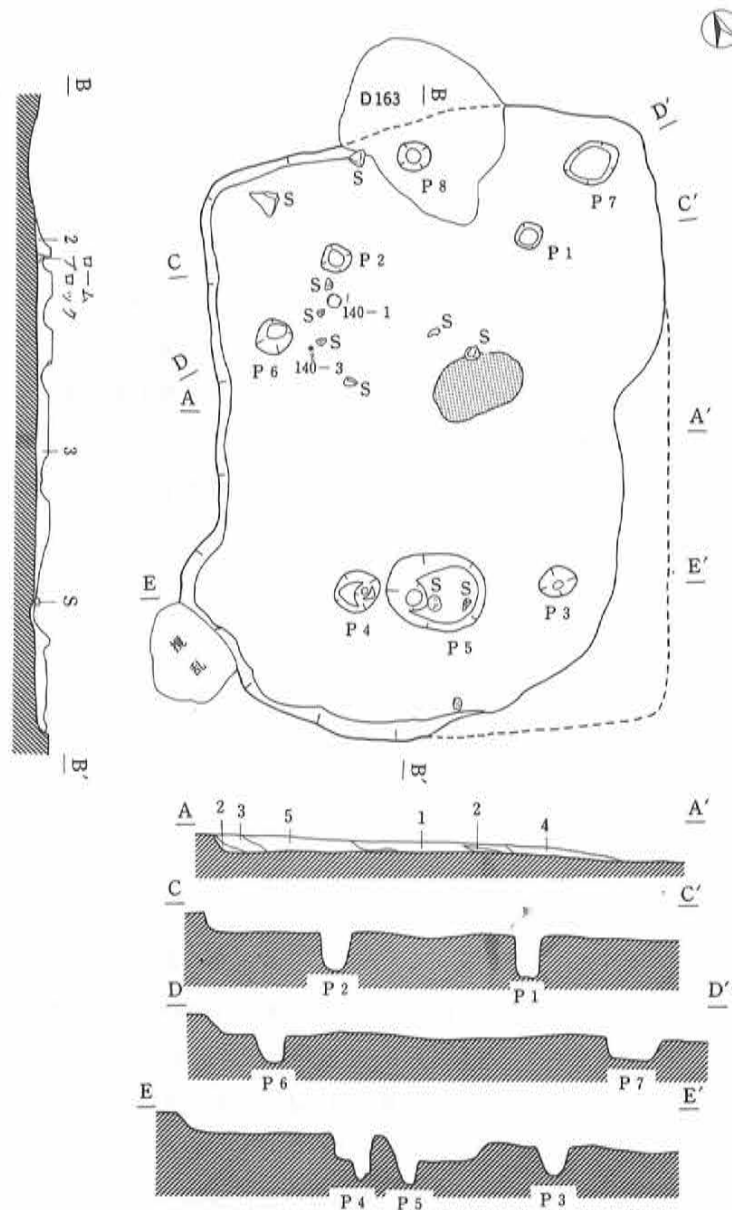
覆土は五層からなる。第1層は住居址の中央部に堆積するパミスと砂粒を多量に含む明茶褐色土、第2層は、西壁下、及び床面上の各所に薄く小範囲で分布する砂粒主体の黄褐色土、第3層は西・南壁下周辺に堆積するパミスを含む黒褐色土、第4層は住居址東側床面上に堆積する耕作土の影響をうけた淡褐色土、第5層は西壁側の第3層よりも床面中央側に堆積する茶褐色土である。おおむね、プライマリーな堆積状態と判断したい。

確認面からの壁高は0~20.5cmをはかり、西壁を除く、北・南・東壁の遺存状態は悪い。壁体は上位に黄褐色の火山灰層(地山)、下位に砂層を利用して構築されており、南西コーナー付近でふくらみをもつが、おおむね、平滑で堅固な構築状態である。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層まで掘り穿めたのち、黒褐色土を薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が全面に施されている。概ね、平坦化されており、堅固な構築状態であるが、西壁ぎわから東壁ぎわに向って若干レベルを低下させている。

ピットは7個検出された。支柱穴は4本(P₁~P₄)が整然と配置されている。P₁は28×29cmの円形を呈し、45cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は30×33cmの円形を呈し、40cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は32×39cmの東西に長い楕円形を呈し、33cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は43×47cmの円形を呈



- 1 明茶褐色土層 粘性は弱い。パミスと砂粒を多量に含む。
- 2 黄褐色土層 粘性は弱い。砂粒主体で褐色土を含む。
- 3 黒褐色土層 粘性はやや強い。パミスを多量に含む。

標高686.1m
(1:80) 2m

第138図 Y94号住居址実測図

し、53cmの深度を有する。断面は東・西両側にテラスを一段有している。P₅はP₃・P₄間の西寄りに位置している。81×106cmの東西に長い楕円形を呈しており、平坦な底面の西側には径約30cmの更に深い掘り込みがみられる。深さは平坦な底面で20cm、最深部では52cmを測る。P₆は西壁ぎわの中央北側に位置し、37×39cmの円形を呈する。深さは29cmを測り、断面形はU字形を呈する。P₇は北東コーナー部に位置し、44×61cmの楕円形を呈する。断面形は底面が平坦な、逆台形状を呈する。P₈は北壁下中央に位置する。第163号土坑による破壊部にあたるため、残存値を示すにすぎないが、所謂「棟持柱」と考えられる。31×37cmの楕円形を呈し、21cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。

炉址は住居址の長軸、短軸の交点（住居址の中央）よりも北東寄りから検出された。長軸98cm、短軸61cmの東西に長い楕円形を呈し、長軸方位はN-85°-Wを

さす。床面からの掘り込みは最深部で15cmを測り、断面形は、鍋底状を呈する。火床部は掘り込み底面をそのまま利用した箇所（西側）と、黄色の砂粒（第5層）を埋め戻した箇所（東側）がある。いずれの箇所も強く焼け込んでおり、焼土範囲は78×38cmの広がりをもつ。炉縁石はみられず、単なる「地床炉」であった可能性が高い。炉址内覆土は四層からなり、上層中には砂粒主体の焼土塊（第2層）の分布がみられる。第1層の炭化物を多量に含み漆黒に近い黒色土は最上層にあたり、極く僅かな堆積をもつにすぎない。第3層は本炉址の中でも最も多量に堆積している。パミスと多量の砂粒を含む黒褐色土である。第4層は火床部上位に堆積し、黒色土と黄色の砂粒がまざり合っている。

遺物の出土状況

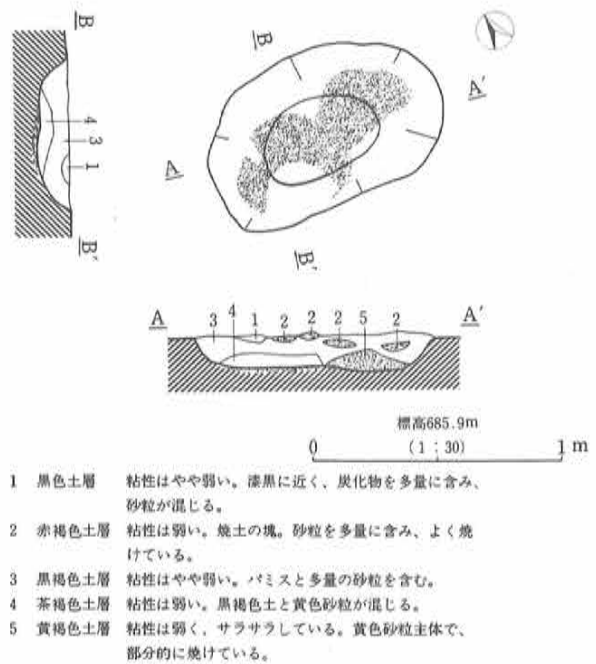
本住居址からは弥生土器が出土しているが、その量は多くない。また、遺物分布も特に集中する箇所は認められず、全体的に散漫な分布傾向を示す。図化した遺物のうち、I区覆土上層から出土した140-2（甕）、II区覆土から出土した140-4（鉢）は本住居址の共伴遺物とは言い難く、他の遺物が本住居址の所産期を決定する資料と判断される。140-1・3（甕）がP₂・P₆間の床面から若干浮いた覆土中、141-1・2（壺）がII区、141-4・5・9（甕）がIII区、141-3・6・7・8（甕）がIV区の覆土中から出土している。（小山）

遺物（第140・141図、図版 五十）

本住居址からは、弥生土器が出土している。弥生土器の器種には壺・甕・鉢がある。

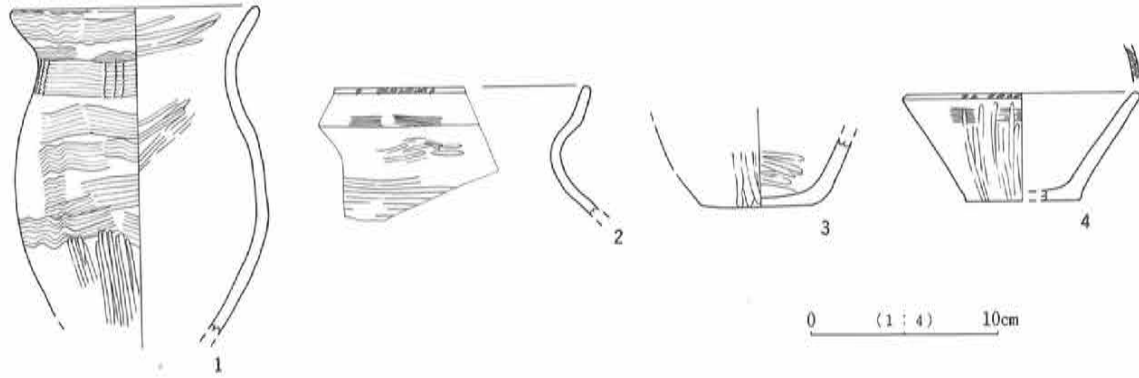
壺には破片資料であるが141-1・2がある。141-1は頸部から外傾外反して立ち上がる口縁部の破片で、頸部に櫛描横走平行線文がみられる。141-2は頸部に位置する破片で、櫛描簾状文（2連止め）が右回りに施文され、口縁部内面と、文様帯を除く外面全面に赤色塗彩が施される。

甕には140-1・2・3がある。140-1は口径と胴部最大径がほぼ等しく、口縁部は緩く外傾外反し、胴部は中位でふくらみをもつ小型品である。調整は内面に横位・斜位のヘラミガキが行われ、外面は胴部に櫛描波状文の施文された後、胴下半部に縦位のヘラミガキが施される。文様は、口縁部から胴上半部にかけて振幅の小さい7本一組の櫛描波状文（右回り）を施文した後、頸部に9本一組の櫛描簾状文（3連止め）が右回りに一帯施される。140-3は底部破片で、内外面ともにヘラミガキが行われる。140-2は口縁部から胴上端部に位置する破片

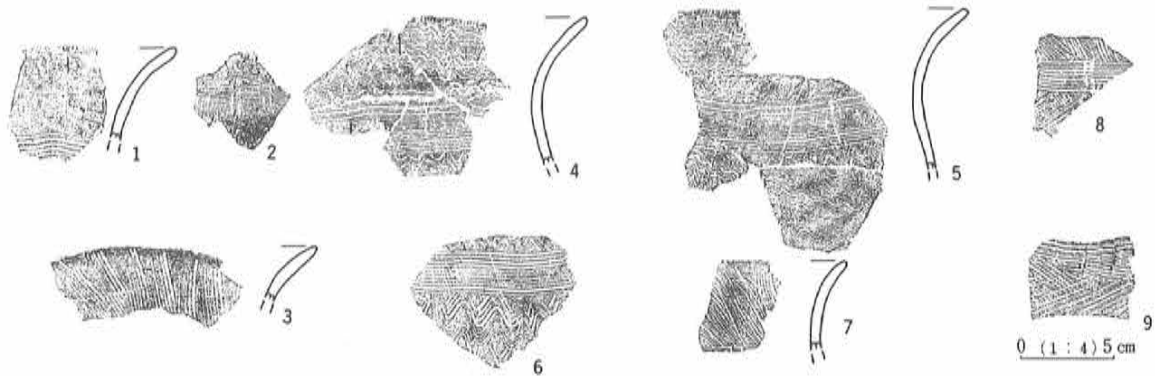


第139図 Y94号住居址炉址実測図

- | | | |
|---|-------|-----------------------------------|
| 1 | 黒色土層 | 粘性はやや弱い。漆黒に近く、炭化物を多量に含み、砂粒が混じる。 |
| 2 | 赤褐色土層 | 粘性は弱い。焼土の塊。砂粒を多量に含み、よく焼けている。 |
| 3 | 黒褐色土層 | 粘性はやや弱い。パミスと多量の砂粒を含む。 |
| 4 | 茶褐色土層 | 粘性は弱い。黒褐色土と黄色砂粒が混じる。 |
| 5 | 黄褐色土層 | 粘性は弱く、サラサラしている。黄色砂粒主体で、部分的に焼けている。 |



第140図 Y94号住居址出土土器実測図



第141図 Y94号住居址出土土器拓影図

第32表 Y94号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調	整	備考
140-1	甕	13.1 (17.5) —	最大径は口縁部と胴部中位でほぼ等しい。口縁部は「弓」状に外反し、胴部は中位でよくらむ。	内) 口縁部から胴部下に横位および斜位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施された後、胴部下に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部に7本一組の櫛描波状文(右回り)を施した後、頸部に9本一組の櫛描籐状文(3連止め・右回り)が1帯施されている。		回転実測B No 1、I区、II区
140-2	甕	— <6.9> —	口縁部は頸部から外反し受口状に立ち上がる。口唇部は面取りされている。	内) 横位のハケメ調整→ヘラミガキが施されている。 外) 口縁部に横位のハケメ調整→ヨコナデが施されている。 文) 頸部に櫛描文が施されている。		破片実測B I区 共伴しない。
140-3	甕	— <3.5> 6.4		内) ハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。		回転実測A No 2
140-4	鉢	(12.6) 5.7 6.0	ほぼ逆「ハ」の字状を呈する。口唇部は面取りされている。	内) ヘラミガキが施されているが単位は不明。 外) 横位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文が施されている。		回転実測B II区

で、本住居址の共伴遺物とは考え難い。口縁部は外反し、外稜をもって内弯する受口状を呈しており、文様は口唇部にLR縄文、胴部に櫛描横走平行線文が施文される。甕にはこの他破片資料として、櫛描籐状文と櫛描波状文の施される141-4・5・6、櫛描籐状文と櫛描斜走直線文の施される141-7・8・9などがある。

鉢には140-4が一点ある。体部は直線的に立ち上がり、口唇部にLR縄文が施されており、本住居址に共伴する遺物とは言い難い。

この他小片のため図示し得なかったが、頸部に櫛描籐状文(2連止め)の施される壺、内外面に赤色塗彩の施される高坏の坏部、外面に赤色塗彩され、すかし(破片資料のため形態は不明、Y100号住出土の160-13と同様なものと思われる)を有する高坏の脚部が出土している。また混入遺物として、櫛描の横走平行線文・波状文・垂下文の施される甕、円形浮文の貼付される甕などがある。

以上、本住居址に共伴性の認められる甕の形態・文様から、本住居址の所産期は弥生時代後期前半に位置づけられると考える。 (三石)

34) Y95号住居址

遺構 (第142図、図版 四十九)

本住居址は台地の南部東側、こ・さ-10・11グリッド内に位置している。Y94号住居址、第16号周溝、第163・164・175号土坑と重複関係をもち、これらのすべてに破壊され、また、後世の攪乱も受けているために住居址の遺存状態は極めて悪く、北壁部の周辺が一部残るのみである。

プランは、支柱穴、炉址の残痕が辛うじて検出されたため、ある程度の復元が可能である。東西の短軸長462cm、南北の長軸長520cm、東壁長405cm、西壁長484cm、南壁長407cm、北壁長440cm (計測値はいずれも推定) の隅丸長方形を呈し、床面積は22.90㎡をはかる。長軸方位はN-26°-Eをさす。覆土は未確認である。

確認面からの壁高は、北壁の残存部でも2cmを測るのみである。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、床面からの立ち上がりは緩い。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層上に黒褐色土を薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が全面に施されていたと考えられ、残存部も割合堅固である。

ピットは破壊部から4個検出された。いずれも支柱穴であり、4本(P₁~P₄)が整然と配置されている。以下に記す計測値はいずれも残存値である。P₁は55×40cmの楕円形を呈し、55cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は35×41cmの楕円形を呈し、43cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は32×19cmの楕円形を呈し、33cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は35×33cmの円形を呈し、43cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。

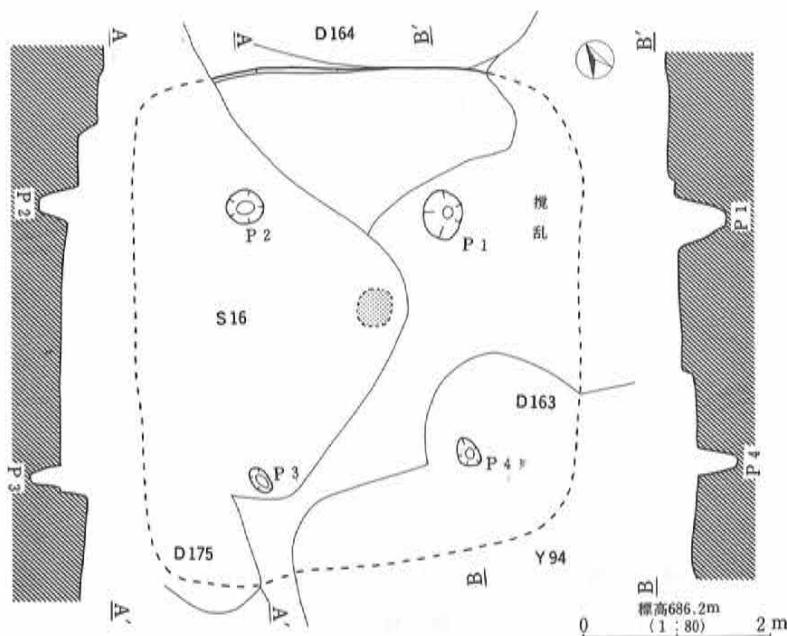
炉址は住居址の中央より北東寄りに残骸がみられる。地山が焼け込んだ焼土範囲であり、39×37cmの円形状の広がりをもつ。

遺物の出土状況

本住居址から出土した遺物は極めて少なく、総数でも弥生土器18片を数えるにすぎない。

遺物 (第143図)

本住居址出土の弥生土器は壺・甕があり、頸部に突帯をもつ壺、口縁部に刻目、胴部に楕円斜走文施文の甕143-1・2などから中期後半のものとする。 (小山)



第142図 Y95号住居址実測図



第143図 Y95号住居址出土土器拓影図

35) Y96号住居址

遺構 (第144図、図版 五十)

本住居址は台地南部の東側、け・こ-11・12グリッド内に位置している。第175号土坑と重複関係を持ち、住居の北東部を大幅に破壊されている。また、床面の各所もピット状の攪乱を受けており、壁体は大方が削平され、北西の極く一部が残存するにすぎない。

プランは東西の短軸長395cm、南北の長軸長470cm、東壁長365cm、西壁長407cm、南壁長375cm、北壁長317cmの隅丸長方形を呈し、床面積は16.90㎡を測る。長軸方位はN-27.5°-Eをさす。

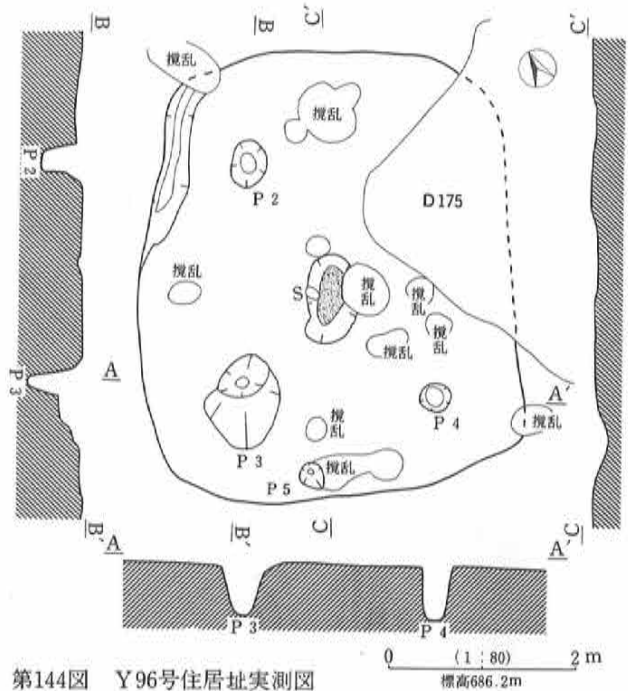
覆土は残存していなかった。

壁体もほとんど残っていないが、黄褐色火山灰層(地山)を利用して構築されていたと考えられる。壁溝は西壁の北半部にのみあり、幅25cm内外を測る。

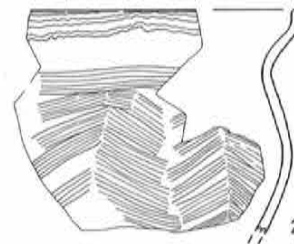
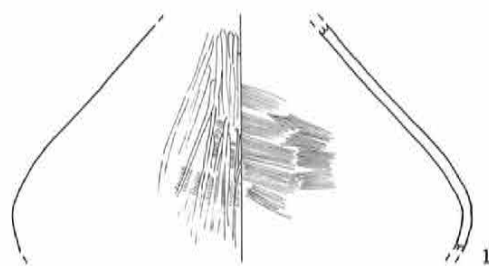
床面は地山の黄褐色火山灰層を叩きしめて構築されているが、やや軟弱で起伏に富む。

ピットは4個検出された。支柱穴は3本(P₂~P₄)検出され、北東側の支柱穴は破壊のため検出されなかった。P₂が50×38cmの楕円形、P₃が42×59cmの楕円形で南壁に長さ52cmの半円状の浅いテラスをもち、P₄は30×35cmの楕円形を呈する。深さはそれぞれ、43・60・56cmを測る。

炉址は住居中央よりやや南西寄りにあり、94×54cmの楕円形プランをもつ地床炉である。



第144図 Y96号住居址実測図



0 (1:4) 10cm

第145図 Y96号住居址出土土器実測図

第33表 Y96号住居址出土土器観察表

種番	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
145-1	壺	- <12.0> - 24.5	胴部は下位で大きくふくらみ、頸部は細くくびれると思われる。	内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 横位のハケメ調整→丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測 B P ₂
145-2	甕	- <11.8> -	口縁部は頸部から外反し、上半で内弯し受口状を呈する。	内) 横位のハケメ調整→単位不明だがヘラミガキが施されている。 外) 頸部にヘラミガキが施されているが単位不明。 文) 口縁部に5本一組の帯状波状文が1帯、胴部に4~6本一組の帯状斜走直線文が縦位羽状に施された後、頸部に6本一組の帯状横走平行線文が1帯施されている。	破片実測 B P ₂

遺物の出土状況

本住居址から出土した土器の量は極めて少なく、分布状況も極めて散漫である。大方が床面上出土土器のため、本住居址の共伴遺物と見做すことができる。図化した145-1・3（壺・甕）はいずれも支柱穴P₃内からの出土である。
 (小山)

遺物（第145図）

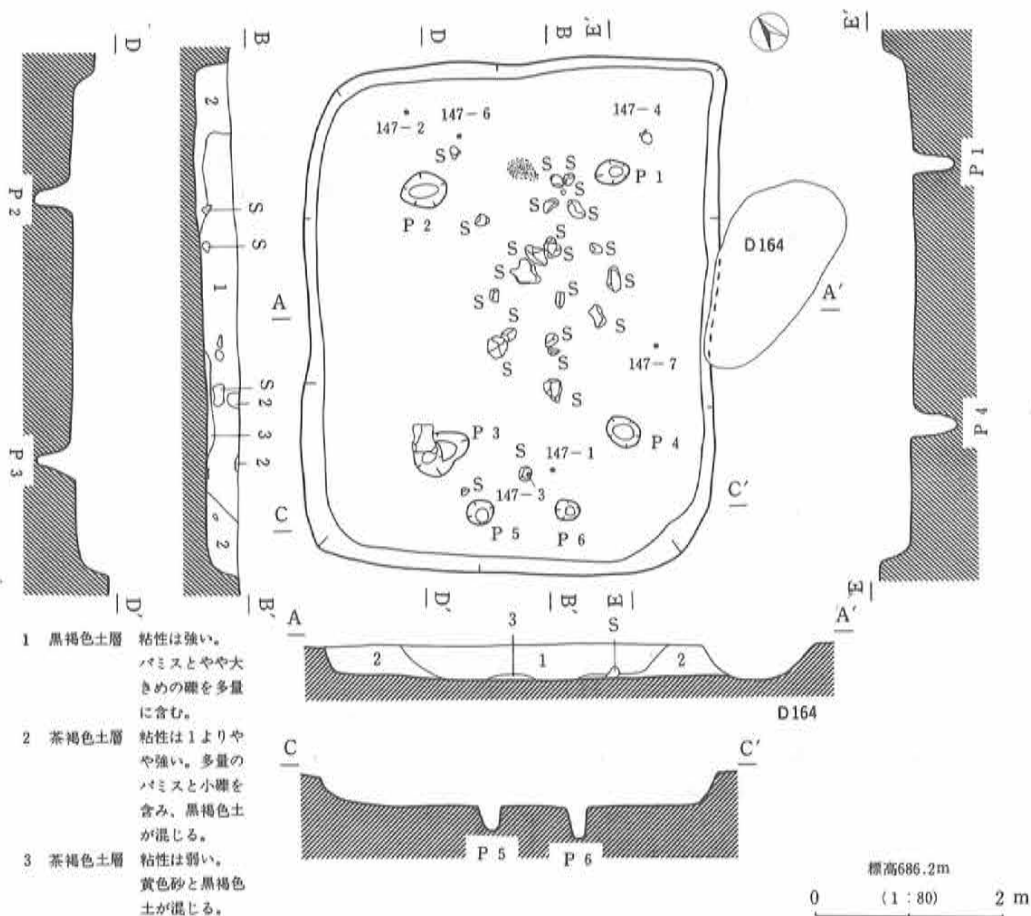
本住居址からは、弥生土器が少量出土しており、器種は壺・甕がある。頸部に篋描文を有すると思われ、胴下位で大きくふくらむ、壺の胴上半部(145-1)、受口状の口縁部を有し、口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描横走平行線文、胴部に櫛描斜走直線文の施文される甕（145-2）などが出土していることから、本住居址の所産期は、弥生時代中期後半と考える。
 (三石)

36) Y97号住居址

遺構（第146図、図版 五十一・五十二）

本住居址は台地南部の東側、け・こ-13・14グリッド内に位置している。Y98・99号住居址、第157・164号土坑と重複関係を持ち、第164号土坑に東壁の中央部を破壊される他は、他遺構を破壊している。

プランは東西の短軸長388cm、南北の長軸長507cm、東壁長480cm、西壁長433cm、南壁長356cm、北壁長396cmの



第146図 Y97号住居址実測図

隅丸長方形を呈し、床面積は20.18㎡を測る。長軸方位はN-42°-Eをさす。

覆土は三層からなり、プライマリーな堆積状態を示す。第1層はパミスとやや大きめの礫を多量に含む黒褐色土で住居中央を中心としてレンズ状の堆積を示す。第2層は多量のパミスと小礫を含み、黒褐色土がまじる茶褐色土で、各壁下にみられる第1次堆積土である。第3層は黄色の砂と黒褐色土がまざり合っており、住居址中央から南側へかけての床面上にみられる。

確認面からの壁高は21.5~33.5cmをはかり、良好な残存状態である。壁体上位は地山の黄褐色火山灰層、下位は地山の砂層を利用して構築されている。壁面は極めて平滑に形成されており、床面からの立ち上がりも急傾斜である。構築状態は上位は堅固であるが、下位は崩れ易く、往時は板状の補強材を当てがう必要があったことを想定させる。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層まで掘り窪めたのち、黒褐色土と砂粒を混ぜた土を全面に2~3cmの厚さで埋めもどし、平坦に叩きしめた「叩き床」が施されている。構築状態は全面にわたって軟弱であり、埋め戻された混合土も剥がれ易い。また、おおむねフラットであるが中央部が僅かに窪んでいる。

ピットは6個検出された。主柱穴は4本(P₁~P₄)が整然と配置されている。平面形態は東西に長軸をもつ細長い楕円形で統一されており、P₁は26×39cm、P₂は39×51cm、P₃は44×62cm、P₄は30×38cmの規模を有する。深さは、P₁が44cm、P₂が36cm、P₃が35cm、P₄が45cmを測り、西側に比べると東側柱穴の方がより深い。断面形はいずれもU字形を呈するが、P₃は北東側にテラスを有する。P₅・P₆は南壁下中央に並んでおり、入口施設に関わる柱穴と考えられる。P₅は28×30cmの円形を呈し、25cmの深度を有する。P₆は23×26cmの楕円形を呈し、33cmの深度を有する。断面形はいずれもU字形を呈する。

炉址は明確なものが検出されなかった。北側主柱穴(P₁・P₂)間中央の床面上には、わずかな焼土範囲がみられるが、炉であるという根拠に乏しい。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているがその量はあまり多くない。遺物分布も特に集中する箇所はみられず、全搬に散漫な分布状況を示している。図化した遺物はいずれも床面上、第2層中から出土したものであり、本住居址の共伴遺物と見做すことができる。共伴遺物の分布状況も特に集中する箇所はみられず、住居址内の各所に散在する傾向がみられる。147-1・3(壺・甕)がP₆の北側、147-2・6(壺・鉢)が北壁下西側、147-4(甕)がP₁の北東側、147-7(鉢)が東壁下中央南寄りに分布している。また、147-5(甕)はII区2層、148-2・3・4(甕)はIII区2層、148-1(甕)はIV区2層からの出土である。この他、住居中央部には多量の礫の分布がみられるが、これらは大方が覆土第1層からの出土であり、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

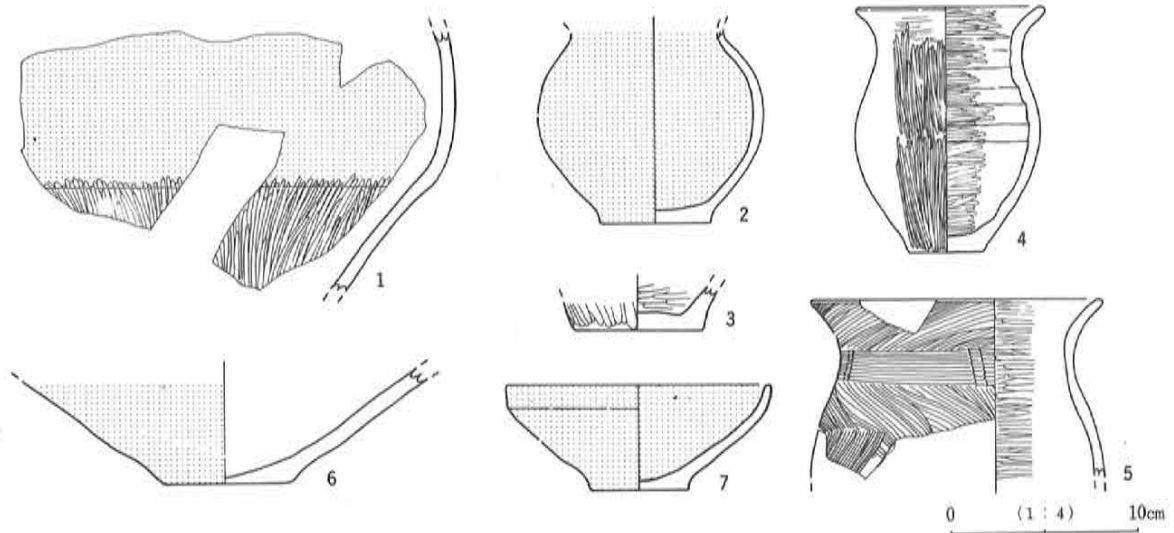
(小山)

遺物(第147・148図、図版 五十二)

本住居址からは、弥生土器が出土している。そのうち7点を実測し、4点を投影して図化した。弥生土器の器種には、壺・甕・鉢がある。

壺には3個体が存在し、147-1は胴部の破片で、胴下部でくびれ(弥生時代後期によく見られる特徴)、その変換点まで外面赤色塗彩が施されている。内面の調整は刷毛目調整がなされ、多くの壺の内面に見られるように大部分剥離している。147-2の壺は胴部が球形を呈する小形のもので内外面、さらに底部まで赤色塗彩が施されている。147-6の大形の底部は外面赤色塗彩がなされ、内面は剥離が激しく不明である。壺の塗彩の場合、外面は、胴下部のくびれ部までの塗彩が一般的であり、この壺のような例は稀であろう。内面の剥離状況及び器形から壺としてあるが、鉢の可能性もないとはいえない。

甕には147-5の口縁から胴上部までのものがあり、口縁部「弓」状に反り、口縁部から胴部に7本一組の描



第147図 Y97号住居址出土土器実測図

第34表 Y97号住居址出土土器観察表

挿 番	図 号	器種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
147-1		壺	— (13.7) —	最大径は胴部にあり稜をもち、くびれる。	内) 横位および斜位のハケメ調整が施されている。 外) 上半に赤色塗彩・横位のヘラミガキ、下半は丁寧な縦位のヘラナデが施されている。	破片実測B Na 6、Ⅲ区 1層
147-2		壺	— (10.2) 6.0	胴部が球形を呈する小型の土器である。	内) 赤色塗彩・雑な横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A Na 1
147-3		甕	— (2.4) 6.6		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A Na 7
147-4		甕	9.8 13.0 4.0	輪積み成形による小型の土器である。 最大径は口縁部と胴部中位ではほぼ等しく、口縁部は「弓」状に外反し、胴部は中位でふくらむ。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナデが施された後、頸部以下に丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。	完全実測 Na 3 外面に朱がまばらに付着。
147-5		甕	15.6 (9.5) —	最大径は口縁部と胴部中位ではほぼ等しく、口縁部は「弓」状に外反し、胴部は中位で軽くふくらむ。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 口縁部から胴部に7本一組の櫛描斜走直線文が横位羽状(右回り)に施された後、頸部に10本一組の櫛描簾状文(2連止め・右回り)が1帯施されている。	回転実測B Ⅲ区 2層
147-6		壺?	— (6.1) (7.4)	底部に向かって器内が擦り鉢状に薄くなっている。	内) 磨滅著しく不明。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B Na 2
147-7		鉢	(14.0) 5.7 5.0	口辺部は内弯気味に開き、端部で折れ曲がり直立気味となる。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A Na 5

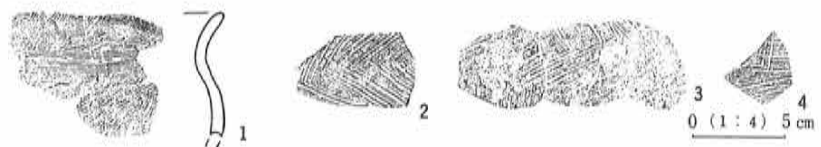
斜走直線文(横位羽状)になされた後、頸部に10本一組の2連止め櫛描簾状文が施されている。147-3は甕の底部で平底である。148-1は口縁部から胴部の破片で雑な櫛描波状文を施した後、14本一組の2連止め櫛描簾状文がなされている。148-2・3は胴部の破片で櫛描斜走直線文(横位羽状)が施されている。147-4はほぼ完形のもので、器形的には壺とも甕ともとらえられる要素をもっているが、ここでは甕として扱う。内面の観察から輪積みによって成形されていることがうかがえ、最大径は口縁部と胴中位ではほぼ等しく、胴中位でふくらむ器形を呈している。外面に部分的に赤色顔料の付着が認められる。

147-7は内外面赤色塗彩された鉢で、平底で内弯気味に立ち上がり、口縁端部で屈曲して直立気味となる。

以上、本住居址の所産期は、

147-1の赤色塗彩の施された壺及び147-5の甕の器形などから弥生時代後期と考えられる。

(高村)



第148図 Y97号住居址出土土器拓影図

37) Y98号住居址

遺構 (第149・150図、図版 五十三)

本住居址は台地南部の東側、く・け-12・13グリッド内に位置している。Y97号住居址、第167号土坑と重複関係を持ち、住居址の南西部、東壁の南側を破壊されている。

プランは東西の短軸長502cm、南北の長軸長592cm、東壁長512cm、西壁長490cm (推定)、南壁長442cm (推定)、北壁長408cmの隅丸長方形を呈し、床面積は22.69㎡をはかる。長軸方位はN-0.5°-Wとほぼ真北をさしている。

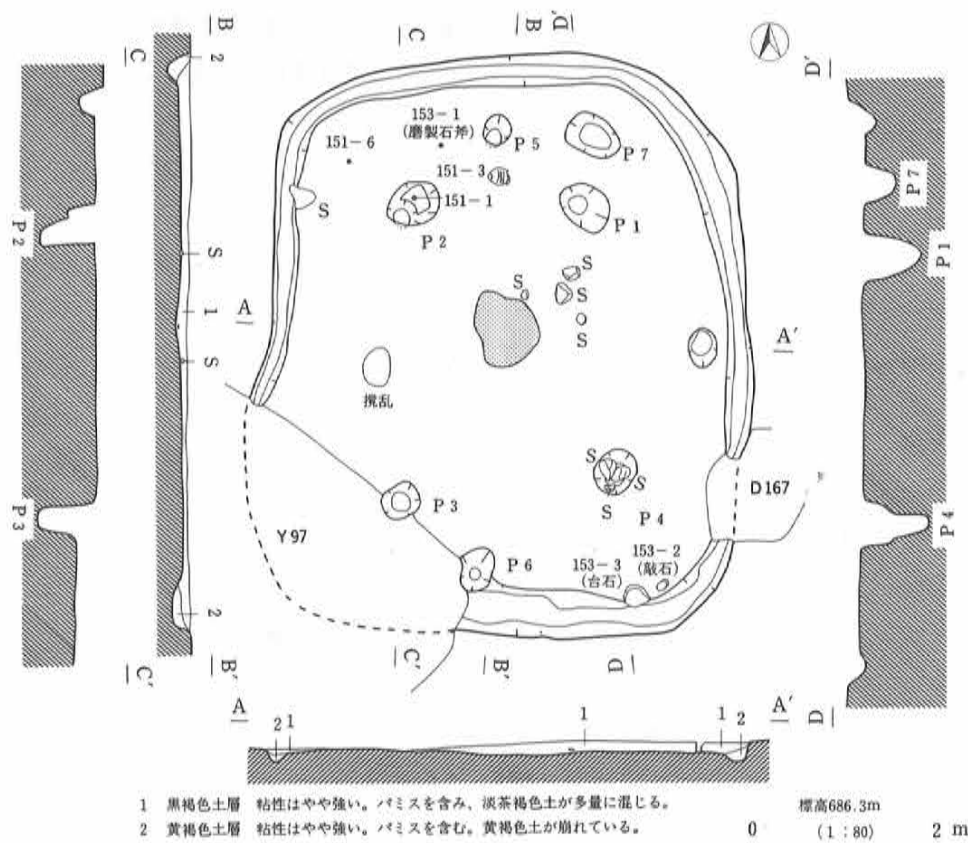
覆土は二層からなり、極めて薄い。第1層は住居址覆土の大方を占める。淡茶褐色土が多量にまじり、パミスを含む黒褐色土である。第2層は壁溝内に堆積する。黄褐色火山灰が主体を占めており、壁体の崩落層と考えられる。

確認面からの壁高は3~25cmを測り、おおむね良好な残存状態であるが、西壁南側は残高がやや低い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、床面からの立ち上がりは緩い。構築状態は堅固であり、壁面はおおむね平滑である。

壁溝は壁直下を全周すると考えられる。溝幅は12~37cmをはかり、南壁下においてより幅が広がる。床面からの深さは7~14cmをはかり、断面形は緩いU字形を呈する。

床面は地山の黄褐色火山灰層まで掘り窪め、平坦化したのち、きめの細かい明茶褐色土を全面に薄く埋めもどし、叩きしめた「叩き床」が施されている。構築状態は全面にわたって極めて堅固であり、また、凹凸もほとんどみられない。

ピットは8個検出された。主柱穴は4本 (P₁~P₄) 整然と配されている。P₁は55×44cmの楕円形を呈し、61



第149図 Y98号住居址実測図

cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は46×59cmの東西に長い楕円形を呈し、58cmの深度を有する。断面形は北東側に一段のテラスを有する。P₃は36×40cm（残存値）の円形を呈し、61cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は59×47cmの楕円形を呈し、73cmの深度を有する。断面形は漏斗状を呈する。P₄内からは礫が3個検出されている。P₅は北壁下中央に位置しており、「棟持柱」と考えられる。33×29cmの楕円形を呈し、59cmの深度を有する。掘り込み底面は南側へオーバーハングしている。P₆は南壁下中央やや西寄りに位置し、入口施設に関わる柱穴とも考えられる。48×31cm（残存値）の円形を呈し、26cmの深度を有する。P₇は北東コーナー部に位置し、貯蔵庫的な役割を果たしたピットとも考えられるが、これを首肯する要素は何もない。38×58cmの東西に長い楕円形を呈し、32cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₈は東壁下中央に位置している。42×31cmの楕円形を呈し、39cmの深度を有する。性格は不明である。

炉址は住居址の長軸・短軸線の交点よりもやや東寄りから検出された。平面形態は長軸80cm、短軸59cmの不整な楕円形を呈し、長軸方位はN-25°-Wをさす。床面からの掘り込みは最深部で10cmをはかり、断面形は若干の起伏を有するものの、おおむね弓状を呈する。火床部は掘り込み面にあたる地山をそのまま利用しており、掘り込み底面の中央に51×31cmの広がりをもつ。火床部の地山の砂層は強い熱をうけており、真赤に焼け込んだ状態であった。炉縁石は検出されず、単純な「地床炉」であったと考えられる。覆土は白色粒子を含み、きめの細かい黒褐色土一層のみからなる。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が出土しているが、その量は多くない。図化した遺物は床面上、あるいはそれに近い覆土中から出土したものであり、本住居址の年代を決定する共伴遺物と見做すことができる。また、図化した遺物の分布はP₂・P₆周辺など住居址の北半部は比較的集中する傾向がみられ、その他、南東コーナー下にも分布する。151-1（壺）がP₂内、153-1（磨製石斧）がP₂の北側、151-6（台付甕）がP₂の北西部に分布している。151-3（甕）は完存品に近い個体であるが、P₅南側に近接して床面上に横転するような状態で検出された。南東コーナー下床面上からは153-2（敲石）、153-3（石台）が並んで検出されており、151-3（甕）と合せ、本住居址の廃絶時の様相を示しているようにも思われる。この他、151-2（壺）はI・IV区の間で接合関係を持ち、151-4（鉢）、152-3（壺？）がI区、152-5（甕）、152-2（甕）がII区、152-1・4（壺・甕）がIV区に分布している。

遺物（第151・152・153図、図版 五十四）

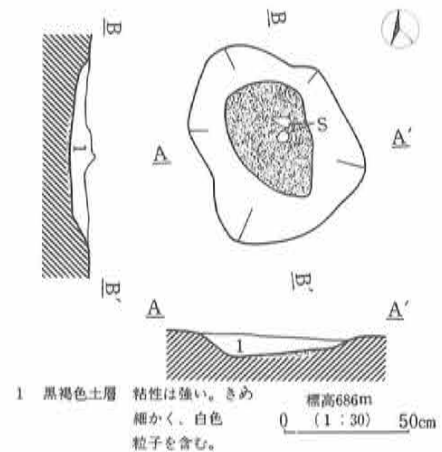
本住居址から出土した遺物には、弥生土器・石器がある。

弥生土器の器種には壺・甕・台付甕・鉢がある。壺4点、甕3点、台付甕1点、鉢2点を図化できた。

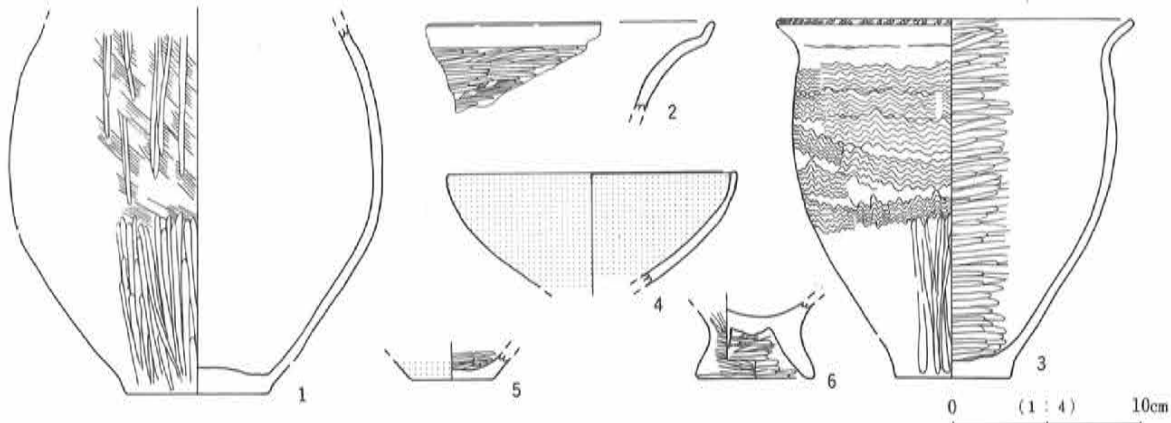
壺は全形態を知り得る資料に恵まれなかったため、個々に説明を加える。

151-1は胴部上位以上を欠損する。胴部は中位でふくらむが、あまり強くは張らず、通常みられる栗林式の細頸壺にくらべるとややスリムな感を受ける。文様はなく、外面調整はヘラミガキが施されているが、先に行われた刷毛目調整も完全に消されてはいない。

151-2は太頸の受口口縁を有する壺と考えられる。受口部の外稜はとれ、丸味を帯びている。文様はなく、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。



第150図 Y98号住居址炉址実測図



第151図 Y98号住居址出土土器実測図

第35表 Y98号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
151-1	壺	— (19.5) 7.6	最大径は胴部中位にある。	内) 横位のハケミ調整が観察できるが、磨減著しく単位不明。 外) 胴部上半は斜位のハケミ調整の後、雑な縦位のヘラミガキが施され、胴部下半は丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測 A No.5
151-2	壺	— (4.8) —	口縁部は受口状を呈する。太頸の壺と考えられる。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) ヨコナデの後、横位のヘラミガキが施されている。	破片実測 B I区、IV区
151-3	甕	(18.8) 19.0 6.0	最大径は口縁部にある。口縁部は短く外反し、胴部は上半でふくらむ。頸部のくびれ部外面に、粘土帯の接合痕が観察できる。口唇部は面取りされている。	内) 全体に丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部はヨコナデが施され、胴部に文様施文の後、胴部下半に幅の広い縦位のヘラミガキが施されている。 文) 胴部上半に6本一組の櫛描波状文(右回り)が5帯上から下へ施されている。	回転実測 A No.3、I区、II区ベルト内
151-4	鉢	(15.4) (6.8) —	口辺部は内弯して開く。口唇部は面取りされている。	内) 赤色塗彩が施されている。 外) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測 B I区
151-5	甕	— (1.5) (4.4)		内) 黒色処理・横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測 B II区
151-6	台付 甕	— (4.0) 6.2	台部と甕部の接合部にホゾがある。	内) 斜位のハケミ調整の後、横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のヘラミガキが施されている。	回転実測 A No.4 内面に赤色顔料が付着している。

この他、壺では頸部にLR縄文を地文として篋描横走平行線文で文様帯が区画される152-1、外稜のとれた受口口縁を有し、篋描連続菱形文と刺突文が施される152-3がある。152-3の内面には、赤色塗彩が施されており、壺の中では希有な器形である。



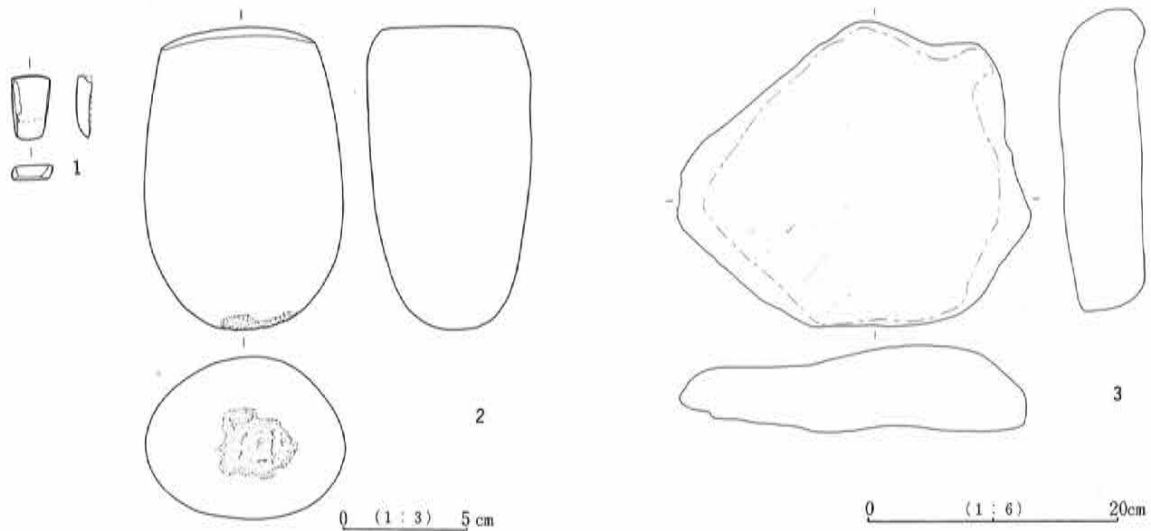
第152図 Y98号住居址出土土器拓影図

甕は単純口縁を有するもののみがみられる。

151-3は全形態を知り得る。最大径は口縁部にあり、口縁部は短く、緩く外反し、胴部は上半で軽くふくらむ。文様は口唇部と胴部上位から中位下方までもち、口唇部にはLR縄文が押捺されている。胴部は右回りの櫛描波状文が5帯、上から下へ施されている。外面調整は文様施文ののち、胴部下位に縦位のヘラミガキ、内面調整は横位のヘラミガキが施されている。

この他、甕には同じ単純口縁をもつ152-2と縦位羽状の櫛描斜走直線文が施される胴部片152-4がある。152-2は口唇部に篋描の刻目を有し、頸部に櫛描波状文が施されている。

台付甕151-6は台部だけの破片である。「ハ」の字状を呈する台部で、台部と甕部の接合部にはホゾを有する。鉢は151-4と5がある。151-4は碗状を呈し、内外面に赤色塗彩、ヘラミガキが丁寧に施されている。151-5も4と同様な形態を有すると考えられる。外面は赤色塗彩、ヘラミガキが施されるが、内面には黒色処理がみ



第153図 Y98号住居址出土石器実測図

られ、雑ではあるがヘラミガキも施されている。

石製品は磨製石斧・敲石・台石がある。磨製石斧153-1は粘板岩製で極小型の偏平片刃石斧である。敲石153-2は安山岩製、台石153-1は花崗岩製である。

以上の共伴遺物から本住居址の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。

(小山)

38) Y99号住居址

遺構 (第154・155図、図版 五十四)

本住居址は台地南部の東側、こ・さ-13・14グリッド内に位置している。Y97号住居址、第164号土坑、第5号溝状遺構と重複関係を持ち、Y97号住居址、第164号土坑に住居址の北側を、第5号溝状遺構に南壁西側を破壊されている。また、東壁も既に削平され、現存しない。

プランは東西の短軸長400cm、南北の長軸長460cm、東壁長420cm、西壁長360cm、南壁長392cm、北壁長340cm(計測値はいずれも推定値。)の隅丸長方形を呈し、床面積は17.19m²の小規模な住居址である。長軸方位はN-15°-Wをさす。

覆土は既に削平されていたため、確認できなかった。

確認面からの壁高は0~8.5cmを測り、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されているが、やや軟弱である。壁面も凹凸が著しい。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の黄褐色火山灰層まで掘り下げて平坦化したのち、黒褐色土を全面に埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね、堅固でフラットな構築状態であるが、数箇所凹凸がみられる。また、床面の北西部、南東部には、土坑状・ピット状の攪乱がみられる。

ピットは6個検出された。位置関係のみを根拠としてP₁・P₂・P₃・P₄を支柱穴と仮定したが、深度の差がそれぞれ大きく異なり、また、配置も整然としたものとは言い難い。P₁は31×33cmの円形を呈し、51cmの深度を有する。断面形は底面がおおむね平坦な、円柱状を呈する。P₂は東半分を攪乱によって破壊されているため、推定値を示す。31×29cmの円形を呈し、16cmの深度を有する。断面形は緩いU字形を呈する。P₃は33×39cmの楕円形を呈し、57cmの深度を有する。断面形は細長いU字形を呈する。P₄も北側が攪乱によって破壊されているため、推定値を記す。34×33cmの円形を呈し、9cmの深度を有する。断面形は緩いU字形を呈する。この他、P₅・P₆は如何なる機能を有していたのか全くわからない。P₅はP₄の南東部に位置し、22×28cmの楕円形を呈する。深さ

は21cmをはかる。P₆は南壁下の東側に位置し、35×35cmの円形を呈する。深さは52cmを測り、支柱穴P₂・P₄よりもより柱穴的である。

炉址は住居址の長軸・短軸の交点（住居址の中央）よりもやや西側から検出された。平面形態は長軸長80cm、短軸長56cmの整った楕円形を呈しており、長軸方位はN-16.5°-Eをさす。床面からの掘り込みは浅く、最深部でも5cmを測るのみである。断面形は弓状を呈する。火床部はこの掘り込み内に黄褐色の砂層（第1層）を埋めもどし、平坦化したのちに設けられており、埋め戻し土上に長さ75cm、幅31cmの南北に細長い焼土範囲を有する。この焼土は第1層の黄褐色土砂粒が焼けて赤変したものであり、著しい加熱をうけたことをあらわしている。炉縁石は見あたらず、単純な「地床炉」である。覆土は確認できなかった。

遺物の出土状況

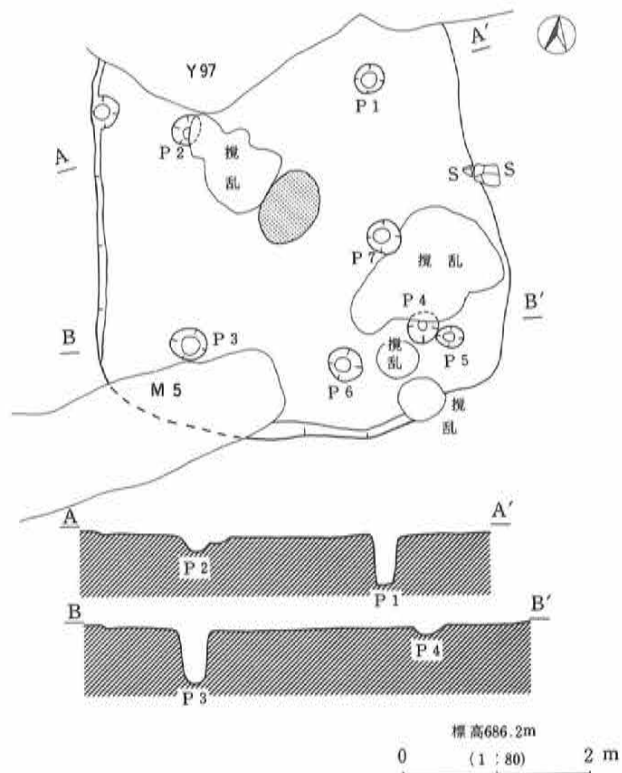
本住居址からは弥生土器が極く少量出土しているが、いずれも細片であり、完存品は全くみられない。遺物分布も極めて散漫であり、特に集中する箇所はみられない。図化した遺物156-1・2・3（甕）は床面上から出土したものであり、本住居址の年代を推定するための、ある程度の手掛りとなると考えられるため、掲示することとした。（小山）

遺物（第156図）

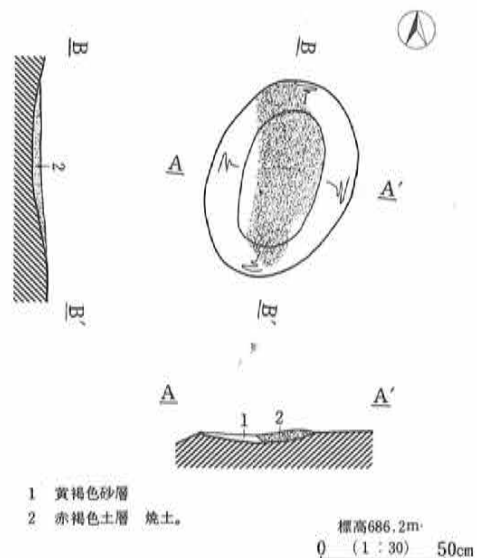
本住居址からは弥生土器が少量出土しており、器種には甕がある。甕は3点が図化できた。いずれも破片資料であるが、受口状の口縁部を有し、口縁部にLR縄文を地文として篋描連続山形文が施文され、さらに口唇部にLR縄文、頸部に櫛描横走平行線文の施される156-1、単純口縁で、口唇部にLR縄文、頸部に櫛描横走平行線文の施される156-2、胴部に櫛描斜走直線文の施される156-3などがある。

この他小片のため図示し得なかったが、口唇部にLR縄文の施される壺、外面に赤色塗彩される高杯の脚部などがある。

以上、本住居址より出土した遺物から、所産期は弥生時代中期後半に求められる。（三石）



第154図 Y99号住居址実測図



第155図 Y99号住居址炉址実測図



第156図 Y99号住居址出土土器拓影図

39) Y100号住居址

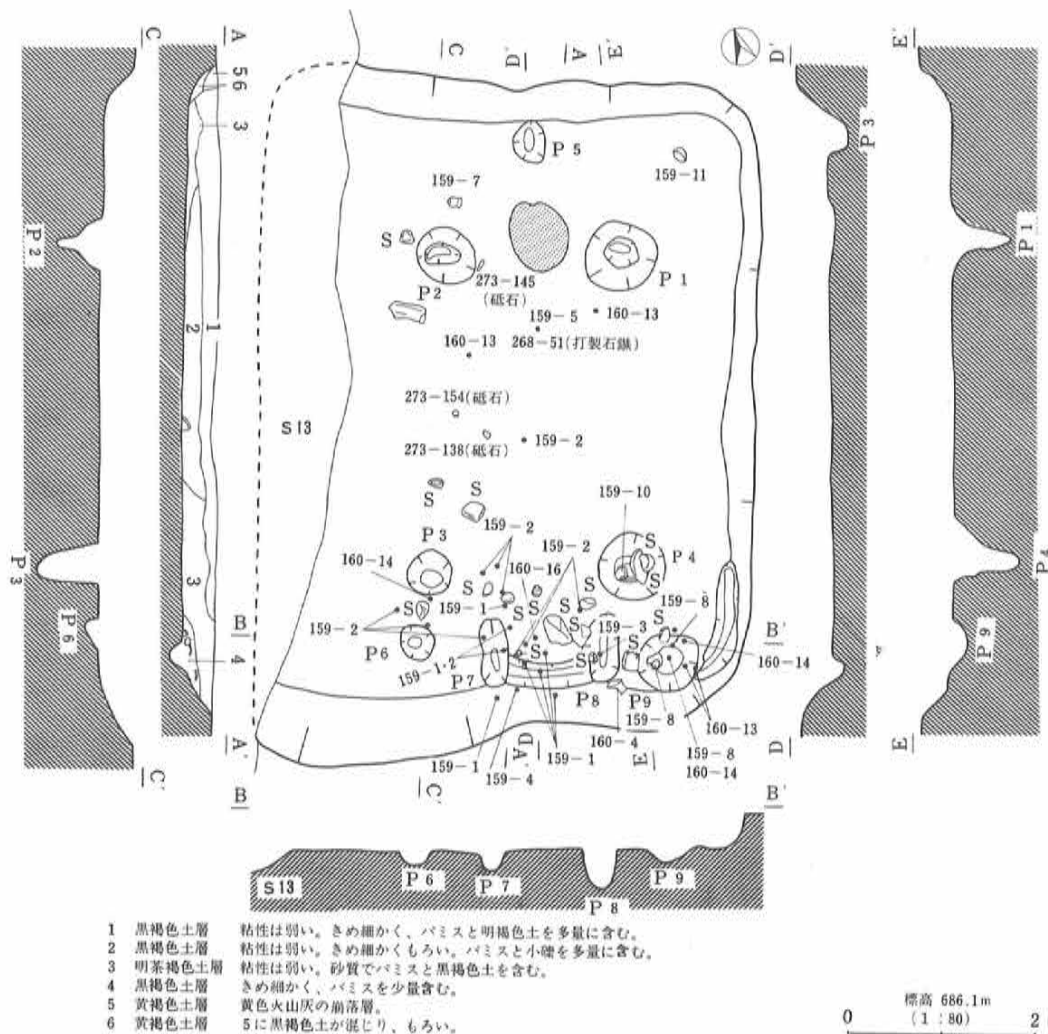
遺構 (第157・158図、図版 五十五・五十六)

本住居址は台地南部の中央部、か・き・く-15・16グリッド内に位置している。第13号周濠と重複関係を持ち、住居址の西壁部のすべてを破壊されている。

プランは東西の短軸長460cm (推定)、南北の長軸長598cm、東壁長566cm、西壁長600cm (推定)、南壁長480cm、北壁長435cm (推定) の隅丸長方形を呈し、床面積は28.35m² (推定) をはかる。長軸方位はN-23'-Eをさす。

覆土は六層からなり、プライマリーな堆積状態を示す。第1層は明褐色土とパミスを多量に含む黒褐色土で、覆土上半部の大半を占める最終埋没土と考えられる。第2層はパミスと小礫を多量に含む黒褐色土で、覆土下半部の住居址中央にレンズ状に堆積する。第3層はパミスと黒褐色土を含む明茶褐色土で、南・北両壁の端から住居内中央に向かって流入する。第4層はパミス少量含むきめの細かい黒褐色土で南壁下にみられる。第5・6層は北壁下にみられる。いずれも黄褐色火山灰を主体土としており、住居址の壁体が崩落した土層と見做すことができる。

確認面からの壁高は15~36cmを測り、おおむね良好な遺存状態である。床面からの立ち上がりは緩い。壁体の上位は地山の黄褐色火山灰層、下位は地山の砂層を利用して構築されており、上位は割合堅固であるが、下位はもろく崩れ易い。従って往時は何らかの補強材が必要であったことが想起される。壁面はおおむね平滑であり、



第157図 Y100号住居址実測図

凹凸は少ない。

壁溝は南東コーナーにのみみられる。

床面は地山の砂層まで掘り窪め、平坦化したのちに、黒褐色土を全面に薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。全面にわたって丁寧に叩きしめられているため、堅固な構築状態であり、かつ平坦でもあるが、埋め戻した土が薄いため、崩壊しやすく、また、剥がれ易い。

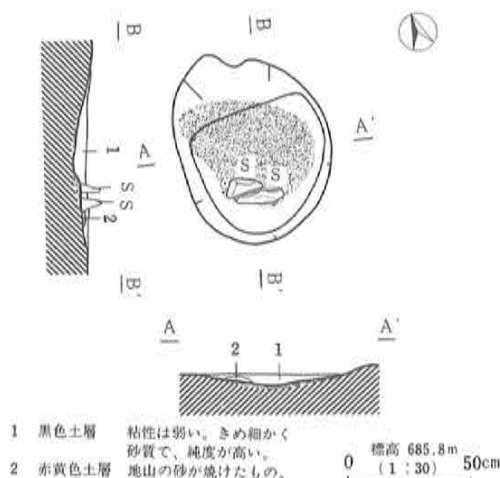
ピットは9個検出された。主柱穴は4本(P₁~P₄)が整然と配置されている。平面形態は他の住居址と比較すると大規模なものが多い。P₁は74×77cmの円形を呈し、63cmの深度を有する。断面形は漏斗状を呈する。P₂は59×63cmの円形を呈し、48cmの深度を有する。断面形は漏斗状を呈する。P₃は43×46cmの不整形円形を呈し、64cmの深度を有する。断面形はU字型を呈する。P₄は71×71cmの円形を呈し、68cmの深度を有する。断面形は漏斗状を呈する。P₄の東側の側壁には礫が2個あてがわれるような状態で検出されている。P₅は北壁下中央に位置し、「棟持柱」と考えられる。45×34cmの南北に長い楕円形を呈し、22cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₆はP₃の南側に位置する。35×35cmの円形を呈し、12cmの深度を有する。断面形は緩いU字形を呈する。P₇・P₈は南壁下中央に並んでおり、入口施設に関わる柱穴の良好な例と言える。P₇・P₈間は幅27cm内外、深さ8cm内外の溝で連結されている。平面形態はP₇が72×27cm、P₈が71×38cmの南北に長い楕円形を呈しており、深さはそれぞれ30cm、45cmを測る。断面形はいずれもU字形を呈する。P₉は南東コーナーに位置し、貯藏的な機能も考えられる。58×63cmの円形を呈し、15cmの深度を有する。断面形は緩いU字形を呈する。

炉址は北側主柱穴(P₁・P₂)間の中央からやや北寄りの位置から検出された。平面形態は長軸78cm、短軸59cmの北側がやや瘦けた楕円形を呈しており、長軸方位はN-2°-Eをさす。床面からの掘り込みは最深部で8cmを測り、断面形は若干の凹凸は有するものの、おおむね弓状を呈する。火床部は掘り込みの底面にあたる地山の砂層をそのまま利用しており、底面中央部に41×51cmの不整形な焼土範囲を有する。焼土範囲中の南側には板状の礫が2枚壁状に立てた状態で置かれており、炉縁石となっている。覆土はきめの細かい砂質で純度の高い黒色土一層のみからなる。

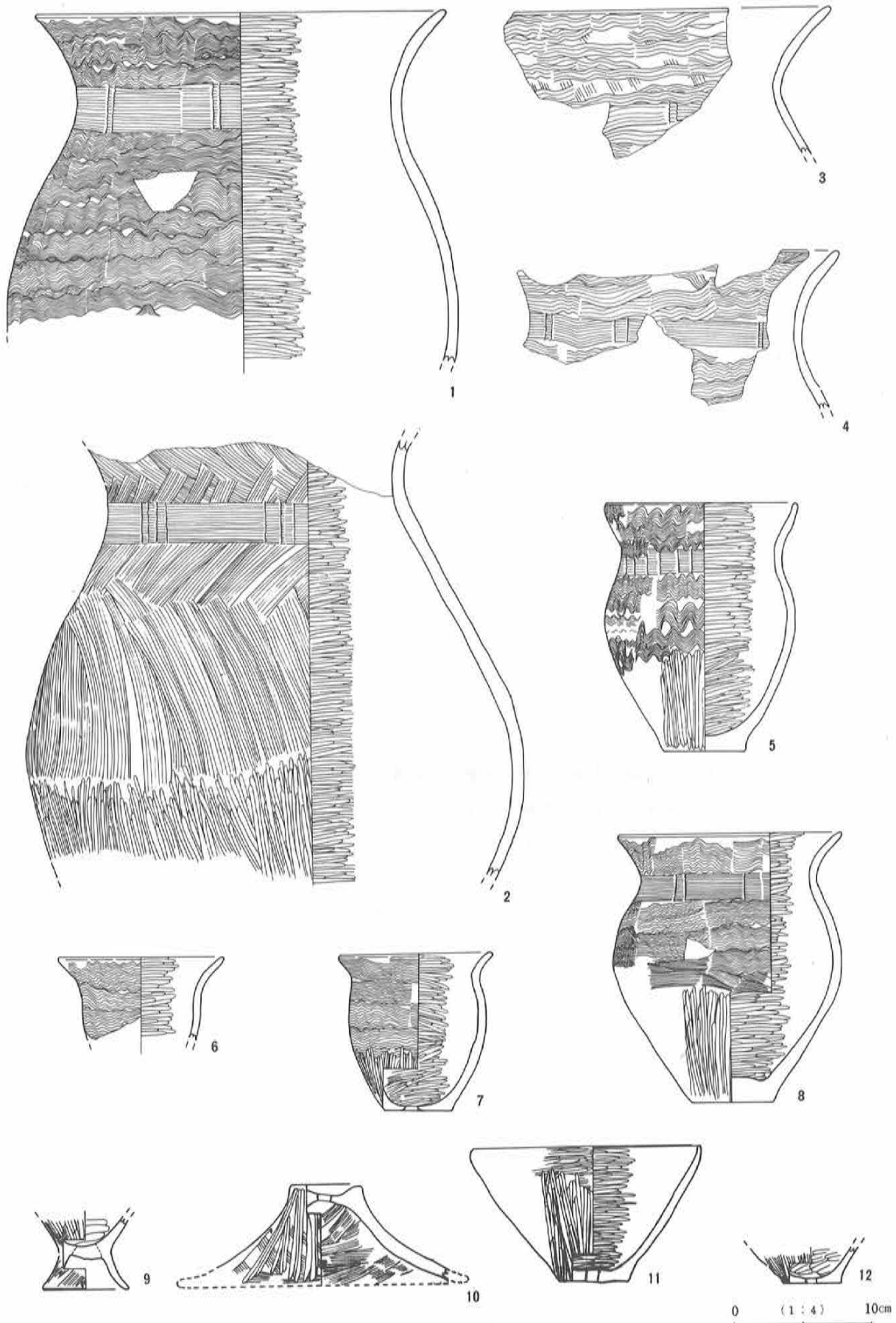
遺物の出土状況

本住居址からは多量の弥生土器と少量の石器が出土している。このうち、石器268-51(磨製石鏃)、272-134、273-145・151(砥石)は床面よりもかなり高位の覆土上層から出土したものであるため、本住居址の共伴遺物からは除外した。図化した弥生土器は床面上、あるいはそれに近い層序から出土したものであり、本住居址の共伴遺物と見做すことができるが、160-13(高杯)の接合関係(床面中央部と南西コーナー間で接合)に代表されるように住居址の広範囲にわたって散在する資料も数多くみられ、本住居址出土土器の大半が、住居廃絶後に一括して投棄されたものであることがわかる。

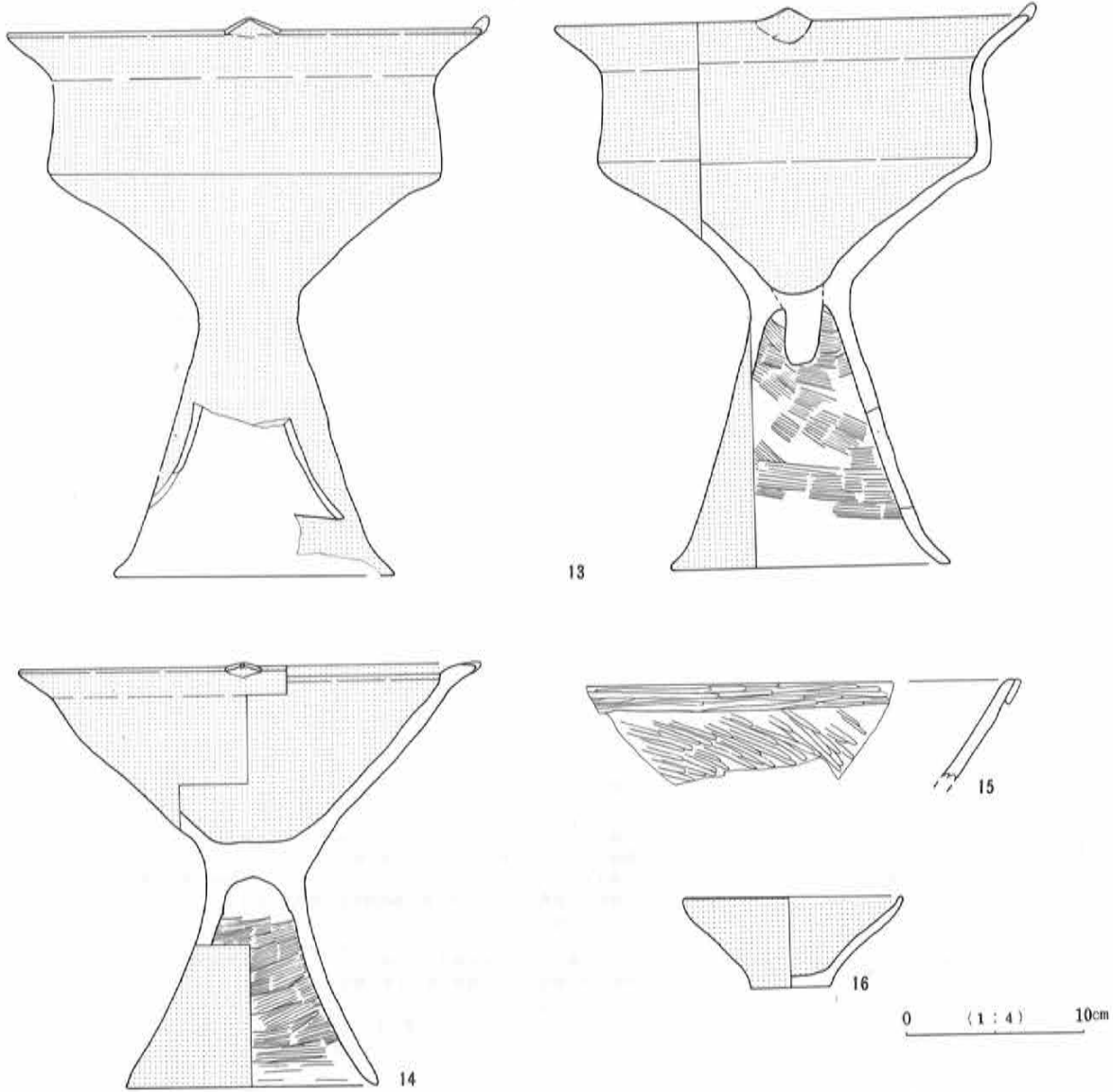
遺物の分布は南壁下に特に集中する傾向が看取される。159-1・2(大甕)の破片はP₇の周辺に比較的広範囲に分布し、これらの破片の分布圏内に159-4・160-16(甕・鉢)も含まれる。159-3(甕)はP₈上、159-8、160-13(甕・高杯)はP₉上に分布し、160-14(高杯)はP₃南側、P₉上、P₉南西側と広範囲にわたって分布する。また、159-10(甕)はP₄上にある。この他、159-11(甕)が北東コーナー、159-7(甕)がP₂の北側、159-5、160-13(甕・高杯)がP₁・P₂間の南側など住居北側の各所に点在している。



第158図 Y100号住居址炉址実測図

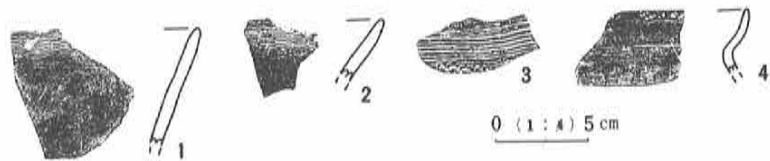


第159图 Y100号住居址出土土器实测图〈1〉



第160図 Y100号住居址出土土器実測図〈2〉

各区毎に取り上げた遺物は、
159-6・9・12、160-15（甕・
台付甕・甌・鉢）、161-1・2・
3（壺）が東区から出土している。



第161図 Y100号住居址出土土器拓影図

遺物（第159・160・161図、図版 五十七・五十八）

本住居址から出土した弥生土器の器種には壺・甕・台付甕・蓋・鉢・甌・高杯などがある。

壺は形態の伺える資料を欠き、口縁部片2点と頸部片1点を図化した。161-1は無彩、161-2・3は赤色塗彩されている。1・2は口縁部上端に楕描波状文、3は頸部に楕描簾状文が施されている。1・2の口縁部形態はほぼ直線的に外傾する。

甕には大型の159-1・2、中型の159-5・8、小型の159-6・7がある。破片資料ではあるが159-3・4は大型品の中に含まれる。文様は口縁部から胴部中位まで施されるのが基本で、159-2は楕描斜走直線文、他は

第36表 Y100号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
159-1	甕	29.6 (25.3) - 32.6	最大径は胴部中位にある。口縁部は弓状に外反し、胴部は中位で大きくふくらむ。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 口縁部から胴部に15本一組の断続的な櫛波状文(右回り)が上から下へ施された後、頸部に15本一組の櫛波状文(2連止め・右回り)が施されている。	回転実測A No.8・10・11・13・15・16・17・18・20・40、E区、W区、ベルト内 外面に煤が付着
159-2	甕	- (31.8) -	胴部は中位で大きくふくらみ、口縁部も大きく開くと考えられる。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部下半に文様施文の後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部中位に、9本一組の櫛波斜走直線文が横位羽状(右回り)に上から下へ施された後、頸部に16本一組の櫛波状文(4連止め・右回り)が施されている。	回転実測A No.2・3・5・6・7・9・10・11・12・24・39、W区、ベルト内 外面に煤が付着している。
159-3	甕	- (10.7) -	口縁部は弓状に大きく外反する。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部に7本一組の櫛波状文(2連止め・右回り)が施されたのち、口縁部、胴部に4本一組の櫛波状文が斜で、断続的に施されている。	破片実測B No.22
159-4	甕	- (11.3) -		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 頸部に10本一組の櫛波状文(2連止め・右回り)が施された後、6本一組の櫛波状文(右回り)が口縁部には下から上へ、胴部には上から下へ施されている。	破片実測B No.19、E区 Y89II区1層・2層
159-5	甕	14.0 17.9 5.8	最大径は口縁部と胴部中位でほぼ等しい。口縁部は頸部から緩く外反し上半でわずかに内湾する。胴部は中位で軽くふくらむ。	内) 全体に丁寧な斜位および横位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部中位以下には文様施文の後に、丁寧なヘラミガキが施されている。 文) 頸部に11本一組の櫛波状文(等間隔止め・右回り)が施された後、9本一組の櫛波状文(右回り)が口縁部に下から上へ、胴部には上から下へ施されている。	完全実測 No.1 外面に煤が付着している。
159-6	甕	12.0 (6.0) -	口縁部は緩く外反して開き、胴部は軽くわずかにふくらみ底部へ収束する。深鉢型を呈する小型の土器である。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 口縁部から胴部に12本一組の櫛波状文(右回り)が上から下へ施されている。	回転実測B E区、ベルト内
159-7	甕	11.0 11.5 4.6	最大径は口縁部にある。口縁部は短く外反し胴部は中位で軽くふくらむ。底部中央に、約1×1.7cmの楕円形をした焼成後の穿孔が一孔あり、瓶への転用とも考えられる。	内) 全体に丁寧な斜位および横位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部中位以下には文様施文の後に、丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部上位に、11本一組の櫛波状文(右回り)が上から下へ施されている。	完全実測 No.45 外面に煤が付着している。
159-8	甕	16.2 19.4 5.8	最大径は胴部中位にあるが口縁部径と大差ない。口縁部は弓状に外反し、胴部は中位上方で大きくふくらむ。	内) 全体に丁寧なヘラミガキが施されている。 外) 胴部下半は横位のハケメ調整の後、丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部上半に14本一組の櫛波状文(右回り)が上から下へ施された後、頸部に14本一組の櫛波状文(2連止め・右回り)が施されている。	完全実測 No.27・28・30・32、E区、W区、P、 内外面に赤色顔料が付着している。
159-9	台付甕	- (5.2) -	台部および甕部にホゾとの接合部と考えられる割れ目が観察でき、これよりホゾは逆三角形をした独立するものと考えられる。	内) 台部は横位のハケメ調整が施され、甕部は横位のヘラミガキが施されている。 外) 台部は斜位のハケメ調整が施され、甕部は斜位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A E区、ベルト内
159-10	蓋	つまみ部 5.2 (7.1) 口縁部 (20.8)	つまみ部はU字状に凹み、中央に焼成前の穿孔が一孔ある。	内) 斜位および横位のハケメ調整が施されている。 外) 斜位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.36 内面全体に煤の付着が著しい。
159-11	瓶	16.6 9.2 5.0	口辺部は内湾気味に「ハ」の字状に開く。底部中央に焼成前の穿孔が一孔ある。	内) 全体に丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口辺部は横位のハケメ調整の後、丁寧な横位のヘラミガキ、その後体部に丁寧な横位のヘラミガキが施されている。	完全実測 No.44、E区 内外面に赤色顔料が付着している。 外面に煤が付着している。
159-12	瓶	- (1.6) 4.2	底部中央に焼成前の穿孔が一孔ある。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A E区
160-13	高坏	26.6 30.7 15.8	坏部は大きく外反し、中位で接を呈して直立し、上位で外反する。脚部は細く開き下部で外反し、ラッパ状を呈する。脚部に透し孔が施されるが、残存部のみからはその形は不明。口縁部端部にはほぼ等間隔で4ヶ所に三角形の突起を有する。坏部と脚部の接合部は、土器の割れ方から棒状の独立したホゾが用いられたと思われる。	内) 坏部は赤色塗彩・斜位および横位のヘラミガキが施され、脚部にはヨコナデの後、斜位のハケメ調整が施されている。 外) 坏部は赤色塗彩・斜位および横位のヘラミガキが施され、脚部には縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.33・34・42・43、E区、W区、ベルト内
160-14	高坏	26.2 23.6 14.2	坏部はほぼ直線的に開き、口縁部端部ではほぼ水平に屈曲する。脚部は「ハ」の字状に開き脚部も高い。口縁部端部にはほぼ等間隔で三角形の突起を4つ有すると思われる(残存は2つ)。ホゾは独立したものであると思われる。	内) 坏部は赤色塗彩・横位のヘラミガキが施され、脚部は横位のハケメ調整が施されている。 外) 坏部は赤色塗彩・横位のヘラミガキが施され、脚部は赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.4・21・29・30、E区、W区、ベルト内

160-15	鉢	(27.8) < 5.6 —	口縁部は粘土紐による貼付口縁。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位および横位のヘラミガキが施されている。	破片実測B E区、ベルト内、S13IV区
160-16	鉢	12.4 5.2 4.4	口辺部は外反気味に開き、端部でわずかに内弯する。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	完全実測 No14、E区、W区

すべて櫛描波状文が施されている。

大型の159-1・2は、最大径は胴部中位(32.6、35.8cm)にあり、口縁部は弓状に外反する同様な形態を有すると考えられる。1は口縁部から胴部中位にかけて右回りの櫛描波状文が上から下へ10帯以上施されたのち、頸部に右回りの櫛描簾状文(2連止め)が1帯施されている。2には口縁部から胴部中位にかけて櫛描斜走直線文が3段にわたって施されたのち、頸部に櫛描簾状文(4連止め)が右回りで1帯施されている。この他、159-3・4は頸部に櫛描簾状文が施されたのちに口縁部、胴部に櫛描波状文(右回り)が断続的に施されている。

中型の159-5・8は口縁部径と、胴部最大径がほぼ等しく、5は口縁部が内弯気味に外反し、8は大きく単純に外反する。施文順序は頸部に櫛描簾状文を施したのち、口縁部は下から上へ、胴部は上から下へ櫛描波状文(右回り)が施されている。櫛描簾状文はいずれも右回りであるが、5は等間隔止め、8は2連止めである。

小型の159-6・7は、最大径を口縁部にもち、口縁部はゆるく外反し、胴部はわずかにふくらむ7と、最大径を有する口縁部は外反して大きく開き、胴部はほとんどふくらみをもたず、深鉢型を呈する6で形態が異なる。口縁部から胴部中位にかけてはいずれも右回りの櫛描波状文のみが施されている。尚、7の底部には焼成後に一孔が穿たれており、甑への転用が考えられる。

台付甕159-9は台部のみで、逆三角形のホゾを有する。

蓋159-10は全体形は山形を呈し、「ハ」の字状に開き、つまみ部はU字状に凹み、中央に焼成前の一孔を有する。外面は雑なヘラミガキで刷毛目調整を消し、内面は刷毛目調整痕が明瞭に残り、煤の付着が著しい。

甑は焼成前の一孔を有する159-11・12がある。11は完存品、12は底部片である。11は口辺部が逆「ハ」の字状に開き、内外面にヘラミガキが施される。

高杯は160-13・14がある。13は杯部が脚部から大きく外反して開いたのち、中位ではほぼ垂直に立ち上がり、上位(口縁部)はまた外反する。脚部は細く長く開き、端部でわずかに外反する。口縁部には三角形の突起が等間隔で4箇所貼付され、脚部中央2箇所には少なくとも三角形ではない形状不明の大きな透し孔が設けられている。杯部と脚部の接合は棒状(ソケット状)のホゾが用いられている。杯部内外面、脚部外面に丁寧なヘラミガキ赤色塗彩が施されている。14は杯部は逆「ハ」の字状に大きく開き、上端部で外反し、鐔状に張り出す。脚部は「ハ」字状に長く開き、透し孔はもたない。口縁端部には三角形状の突起が等間隔4箇所に貼付されている。杯部内外面、脚部外面にはヘラミガキ、赤色塗彩が丁寧に施されている。

鉢は貼付口縁を有する160-15と、小型の160-16がある。15は椀状の形態を有すると考えられ、内外面にヘラミガキが施されている。16は口辺部はわずかに外反したのち、上半部で内弯気味となり、端部は軽く屈曲して立ち上がる。内外面ともに丁寧なヘラミガキ、赤色塗彩が施されている。

以上、本住居址の出土遺物は投棄されたものではあるが、住居廃絶時からの時間差がごく短いものであったことは出土状態からも明らかである。従って、本住居址の所産期は、これらの遺物をもって弥生時代後期前半に位置づけて良いと思われる。

(小山)

40) Y101号住居址

遺構 (第162・163図、図版 五十九)

本住居址は台地の南部中央、く・け-14・15・16グリッド内に位置している。Y100・102号住居址と重複関係を持ち、北壁の東側周辺と、西壁の北側周辺を破壊されている。

プランは東西の長軸長555cm (推定)、南北の短軸長430cm、東壁長433cm、西壁長343cm (推定)、南壁長485cm、北壁長523cm (推定) の隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-52°-Eをさす。床面積は20.98㎡をはかる平均的な規模をもつ住居址である。

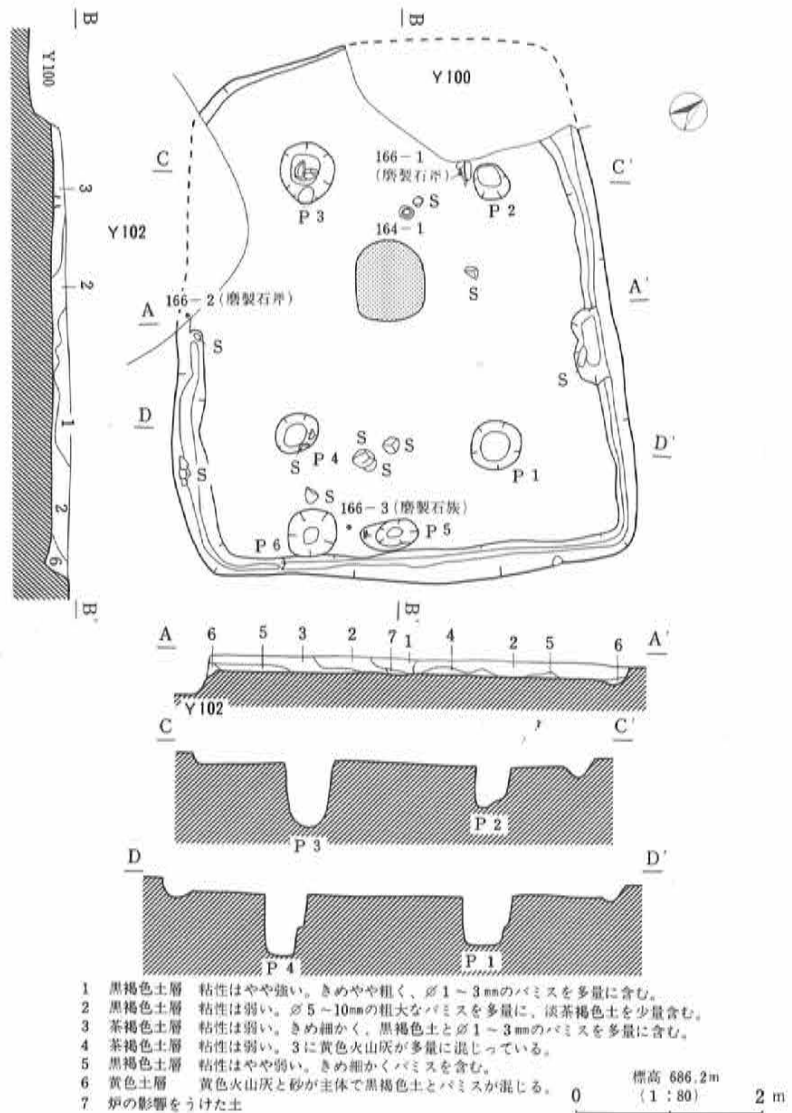
覆土は六層からなり、プライマリーな堆積状態と理解される。第1・2層は住居址の中央よりも南東寄りに偏在する最終堆積土である。共に黒褐色土をベースとしており、第1層はパミスを少量、第2層はパミスを多量、淡茶褐色土を少量含む。第3層は北西部の壁ぎわから床面にかけて堆積する。黒褐色土とパミスを多量に含む茶褐色土である。第4層は床面中央部に薄く小範囲で分布する。黄色火山灰が多量にまじる茶褐色土である。第5層も、床面中央東寄りと西壁ぎわに薄く小範囲で分布する。パミスを含む黒褐色土である。第6層は各壁、及び壁溝内に堆積する。黄色火山灰と砂粒が主体で黒褐色土とパミスがまじる。壁体の崩落層と理解される。

確認面からの壁高は4.5～22.5cmをはかり、北壁の遺存状態が若干悪いが他は良好である。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、おおむね、平滑で堅固な構築状態で床面からの立ち上がりは緩い。

壁溝は北壁下にはなく、他の東・南・西壁下の南側までめぐる。溝幅は7～31cmをはかり、床面からの掘り込みは3.5～19cmの深度を有する。また、東壁下中央南寄りには長さ77cm・幅30cm内外、深さ20～26cmの一段深い掘り込みがみられる。

床面は地山の黄褐色火山灰層まで掘り窪めたのち、黒褐色土を薄く全面に埋めもどして叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね平坦に構築されており、また極めて堅固な床面である。

ピットは6個検出された。主柱穴は4本(P₁～P₄)が割合整然と配置されている。P₁は50×54cmの円形を呈し、50cmの深度



第162図 Y101号住居址実測図

を有する。断面形は底面が平坦な円柱状を呈する。
 P₂は39×37cmの円形を呈し、41cmの深度を有する。
 断面形は崩れたU字形を呈する。P₃は63×56cmの楕円形を呈し、69cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。掘り込み内には2個の礫がみられる。P₄は40×41cmの楕円形を呈し、64cmの深度を有する。断面形はおおむねU字形を呈するが東側に一段のテラスをわずかに有する。P₅・P₆は南壁下西側に並んでおり、入口施設に関連する柱穴とも考えられる。P₅は30×58cmの東西に長い楕円形を呈し、42cmの深度を有する。P₆は49×51cmの円形を呈し、25cmの深度を有する。

炉址は住居址の長軸・短軸の交点(住居址の中央)よりもやや北側から検出された。88×87cmの丸味をおびた方形を呈しており、長軸方位はN-11°-Wをさす。床面からの掘り込みは最深部で11cmをはかる。

断面形はやや起伏に富むものの、おおむね弓状を呈する。火床部はこの掘り込みの底面に当たる地山の砂層上にあり、41×51cmの楕円状の真赤に焼け込んだ焼土範囲を有する。炉縁石は焼土範囲の南側にあり、長さ16~22cmの礫が3個置かれている。火床部の中央にも長さ11cmの礫がみられるが、これが原位置を保っているものであるかは定かでない。覆土は二層からなり、第1層は掘り込みの南側に偏在する黄色火山灰の埋め戻し土、第2層は白色粒子がまざった黒褐色土である。

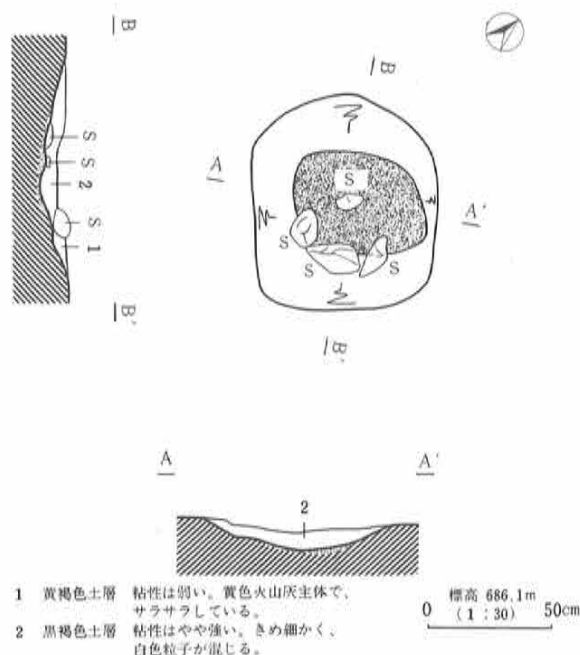
遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が出土しているが、量は少ない。全体的な遺物分布も特に集中する箇所はみられず、散漫な分布傾向を示す。図化した遺物は床面上、あるいはその直上覆土内から出土したものであり、本住居址の相伴遺物と見做すことができる。164-1(甕)は炉址の北側の床面上に口縁部を密着させた逆位の状態で検出され、166-1(大型蛤刃石斧)はP₂北西側の床面上から、周囲を板状の礫に包まれるような状態で検出されている。また、166-2(偏平片刃石斧)は西壁下中央、166-3(磨製石鏃未成品)はP₅・P₆間の床面上から検出されている。この他、164-2(甕)、165-3(甕)はII区、165-3(甕)はIII区、165-1・2・4(壺・甕)はI区から検出されている。

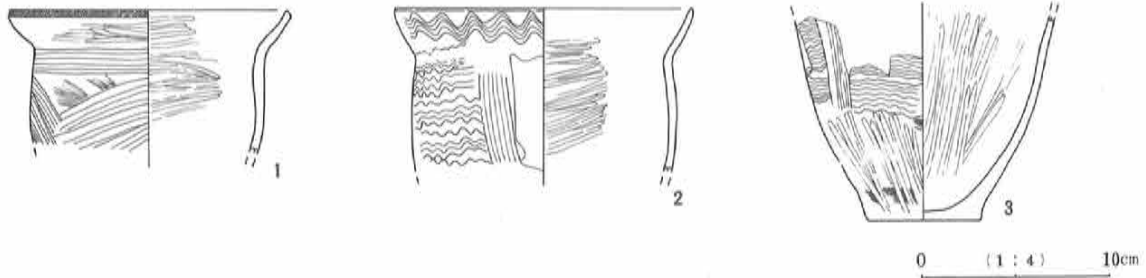
遺物(第164・165・166図、図版 五十九)

本住居址の出土遺物には弥生土器・石器がある。弥生土器の器種には壺・甕・鉢がある。壺は形態の伺えるものではなく、破片資料165-1・2がある。1は外稜のとれた受口口縁を有し、LR縄文を地文として、篋描連続山形文が1条施されている。2は頸部を強く押しつけて横ナデし、2帯の隆帯を造り出し、隆帯上にLR縄文を施している。甕は受口口縁の164-1~3、165-4と、単純口縁の165-3がある。受口口縁の甕はいずれも外稜が完全に消えた内弯気味の受口口縁を有する。164-1は口唇部に縄文、頸部に櫛描横走平行線文、胴部に斜走直線文が縦位羽状に施されている。164-2・3(同一個体と考えられる)は口縁部、胴部に櫛描波状文が施され、胴部は櫛描垂下文(直線)で画されている。165-4は口縁部の櫛描波状文上に櫛描連続山形文が施されている。単純口縁の165-3は口唇部に篋描の刻目、胴部に櫛描波状文施文ののち、櫛描垂下文(直線)が施されている。

石器の器種には磨製石斧166-1・2、磨製石鏃未成品166-3がある。1は閃緑岩製大型蛤刃石斧で基端部を



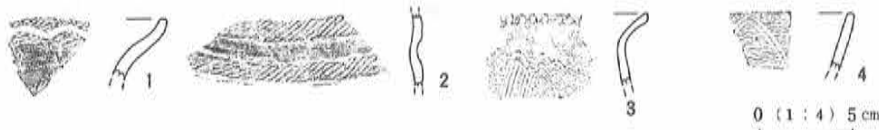
第163図 Y101号住居址炉址実測図



第164図 Y101号住居址出土土器実測図

第37表 Y101号住居址出土土器観察表

挿番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
164-1	甕	15.0 <7.7> — 15.0	最大径は口縁部にあり、口縁部は緩く外反し受口状に内弯し、胴部は軽くふくらむ。口唇部は面取りされている。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部に横位のヘラミガキ、胴部上位は斜位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部にLR縄文、頸部に6本一組の櫛播横走平行線文が1帯、胴部は4-5本一組の櫛播斜走直線文が縦位羽状(右回り)に施されている。	回転実測A No.1
164-2	甕	(15.9) <8.8> — (15.9)	最大径は口縁部にあり、口縁部は内弯気味に立ち上がり受口状を呈する。胴部は軽くふくらむ。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部に横位のハケメ調整が施されている。 文) 口縁部に5本一組の櫛播波状文が1帯、胴部は7本一組の櫛播垂下文が施文された後、4本一組の櫛播波状文が数帯施されている。	回転実測B Ⅲ区床上
164-3	甕	— <10.8> 6.4		内) 丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部に横位のハケメ調整→文様施文→胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 6-7本一組の櫛播波状文が施された後、7本一組の櫛播垂下文が施されている。	回転実測B Ⅲ区床上

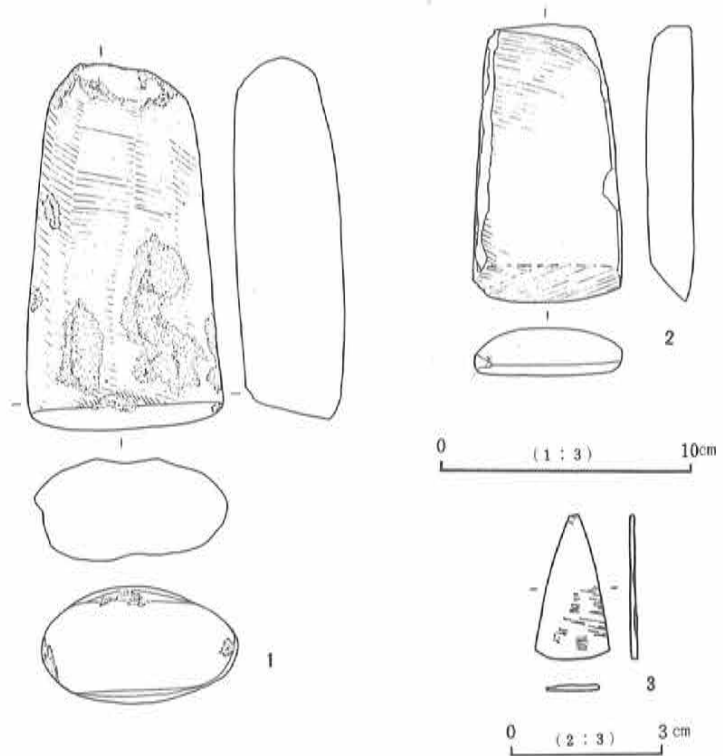


第165図 Y101号住居址出土土器拓影図

敲石として再利用している。2は閃緑岩製偏平片刃石斧である。3は粘板岩製で両面側辺、基部研磨段階で中止している。

以上の共伴遺物から本住居址の所産期は、弥生時代中期後半と考えられる。

(小山)



第166図 Y101号住居址出土石器実測図

41) Y102号住居址

遺構 (第167・168、図版 六十)

本住居址は台地の南部中央、け・こー15・16グリッド内に位置している。Y101号住居址と重複関係を持ち、これを破壊している。

プランは東西の短軸長306cm、南北の長軸長398cm、東壁長325cm、西壁長340cm、南壁長249cm、北壁長235cmの隅丸長方形を呈し、床面積10.64㎡をはかる小規模な住居址である。長軸方位はN-10°-Eをさしている。

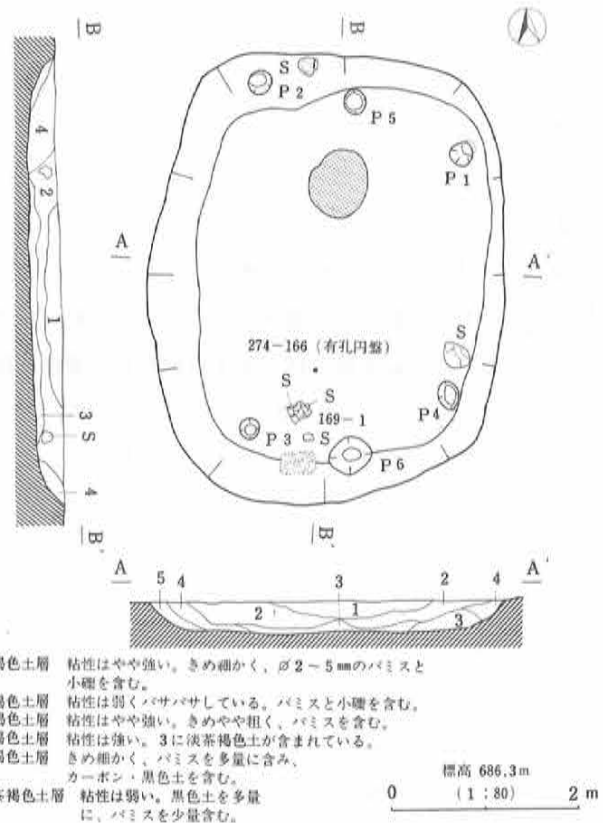
覆土は五層からなり、プライマリーな堆積状態を示す。第1・2層は住居址内中央を中心としてレンズ状の堆積を示す。最上層にあたる第1層はパミスと小礫を含むきめの細かい黒褐色土、第2層はパミスと小礫を含む暗褐色土である。第3層は住居址床面中央部の床面上に広く薄く堆積する。パミスを含むきめの粗い黒褐色土で、東側に淡茶褐色土がまじる第3'層がある。第4・5層は各壁下にみられる第1次堆積層である。第4層はパミスを多量にその他、カーボンと黒色土を含む茶褐色土で、第5層はパミス少量、黒色土を多量に含む明茶褐色土である。

確認面からの壁高は、23~36cmをはかり良好な遺存状態である。壁体はY101号住居址との重複箇所の北東部はY101号住居址の覆土及び地山の砂層、他は上位に地山の黄褐色火山灰層、下位に地山の砂層を利用して構築されており、床面からの立ち上がりはきわめてなだらかな傾斜である。壁面は平滑とは言い難く、凹凸に富み、構築状態は軟弱であり、もろく崩れ易い。

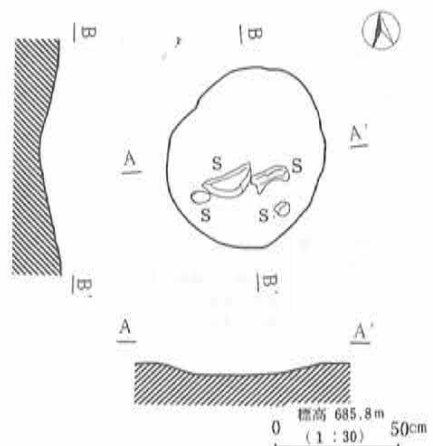
壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層まで掘り窪めたのち、黒褐色土を全面に薄く埋め戻し、叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね、平坦な床面を形成しているが、南から北へ向ってわずかに傾斜している。また、やや軟弱な構築状態であり、「叩き床」自体ももろく剥がれやすい。

ピットは6個検出された。明確に支柱穴となり得るものはなく、ピットの配置にも規則性はみられない。P₁~P₄は住居址の四隅の床面上、壁体に掘り込まれている。P₁は23×25cmの円形を呈し、59cmの深度を有する。P₂は25×26cmの円形を呈し、52cmの深度を有する。P₃は23×21cmの円形を呈し、30cmの深度を有する。P₄は32×22cmの楕円形を呈し、26cmの深度を有する。いずれも小規模なピットである。P₅は北壁下中央に位置し、棟持柱と考えられる。25×23cmの円形を呈し、57cmの深度を有する。P₆は南壁下中央に位置し、40×47cmの楕円形を呈し、43cmの深度を有する。P₁~P₄にくらべ



第167図 Y102号住居址実測図

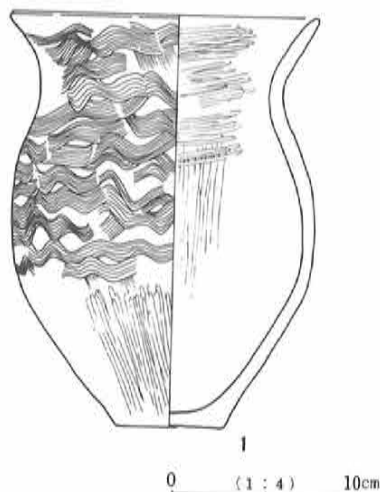


第168図 Y102号住居址炉址実測図

るとより柱穴としての機能が強く伺われる。

炉址は住居址の中央よりも北側に位置している。73×63cmの楕円形を呈しており、長軸方位はN-1.5°-Eをさす。床面からの掘り込みは最深部でも5cmをはかる程度で極く浅く、断面形はおおむね弓状を呈する。火床部は掘り込みの地山の砂層上に設けられていたと考えられるが、焼土範囲はみられず、使用された痕跡がない。炉縁石は掘り込みの中央よりやや南壁に細長い角礫が東西一直線状に並べて置かれている。覆土は、黒褐色土が一層のみ薄く堆積している。

以上、本住居址は、床面がほとんど踏みしめられていないこと、炉址の使用痕跡がないことなどを勘案すると、ほとんど生活されないうちに廃絶された住居であった可能性が強く伺われる。



第169図 Y102号住居址出土土器実測図

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が出土しているが、その量は極めて少ない。全体的な遺物分布も極めて散漫である。274-166（有孔円盤）は覆土最上層からの出土であるため、本住居址の共伴遺物からは除外し、他の床面上から出土している土器資料を本住居址の共伴遺物と見



第170図 Y102号住居址出土土器拓影図

做すことにした。169-1（甕）は南壁下中央西寄りの床面上に押しつぶされたような横位の状態で出土している。また、170-1（壺）がIII区、170-2・3（壺・甕）がIV区から出土している。（小山）

遺物（第169・170図、図版六十）

本住居址からは、弥生土器・石器が少量出土している。弥生土器の器種には壺・甕がある。

169-1は口径と胴部最大径がほぼ等しく、口縁部は緩く外傾外反し、胴部は中位やや上方でふくらみをもつ中型の甕である。内面調整は胴部に縦位のヘラミガキ、口縁部に横位のヘラミガキが行われる。外面は刷毛目調整が行われ、口縁部から胴上半部に文様が施文された後、胴下半部に縦位のヘラミガキが施される。文様は、口縁部から胴上半部に櫛描波状文が施文される。甕にはこの他、胴部に櫛描波状文と櫛描斜走直線文の施される170-3がある。

壺には口縁部に櫛描波状文の施される170-1と櫛描横走平行線文を櫛描垂下文で区画した「T字文C」の施文される170-2がある。

石器類は本住居址と共伴するとは考え難いが274-166の滑石製の有孔円盤が一点出土している。

以上、本住居址より出土した遺物から所産期は弥生時代中期後半に求められる。

（三石）

第38表 Y102号住居址出土土器観察表

挿 番	図 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
169-1		甕	16.3 21.8 5.6	最大径は口縁部と胴部中位でほぼ等しく、口縁部から頸部は「弓」状に大きく外反し、胴部は中位で大きくふくらむ。	内) 胴部中位から下位に縦位のヘラミガキが施された後、胴部上位から口縁部に丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から胴部中位に縦位のハケノ調整→文様施文→胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部下位に4～8本一組の櫛描波状文が短かい単位で基本的には下から上へ施されている。	完全実測 No 2、III区

42) Y103号住居址

遺構 (第171・172図、図版 六十一)

本住居址は台地南部のほぼ中央、く・け-16・17グリッド内に位置している。Y123号住居址、第13号周湟と重複関係をもち、北西部の周辺を破壊されている。

プランは東西の短軸長376cm、南北の長軸長530cm (推定)、東壁長504cm、西壁長466cm (推定)、南壁長311cm、北壁長332cm (推定)の隅丸長方形を呈し、床面積は18.54㎡をはかる。長軸方位はN-2°-Wをさし、ほぼ南北方向をむいている。

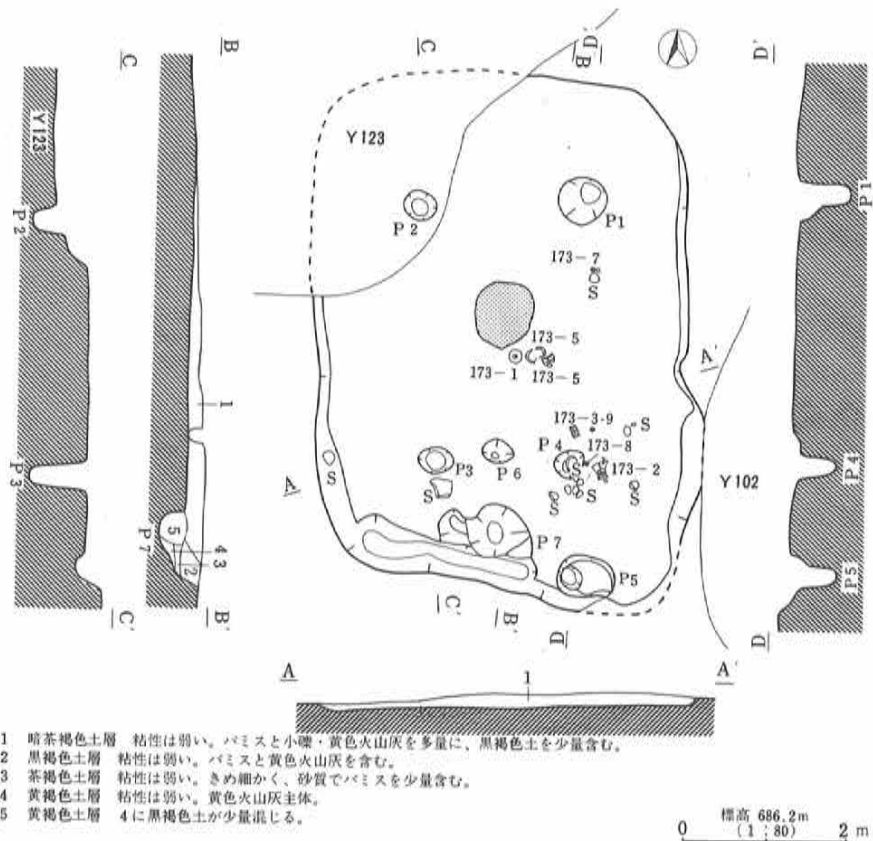
覆土は五層からなり、北側はほとんど削平されている。南壁下を除き、住居址内のほとんどのに第1層暗茶褐色土 (パミス、小礫、黄色火山灰を多量に含む。) が埋没し、第2～5層は南壁下のみみられる。第2層はパミスと黄色火山灰を含む黒褐色土、第3層はパミスを少量含む、砂質できめ細かい茶褐色土、第4層は黄色火山灰主体の黄褐色土、第5層は4層に黒褐色土が少量まじる黄褐色土である。

確認面からの壁高は1～17cmをはかり、北壁・南東コーナーはほとんど削平されている。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されている。壁面は平滑とは言えず、特に東壁の南側は大幅なふくらみをもつ。他の壁も直線的でなく、起伏が著しい。床面からの立ち上がりは緩く、構築状態はやや軟弱である。

壁溝は南壁下西側にのみみられる。溝幅は22～46cm、深さ10～23cmをはかり、底面は起伏が激しい。また側面も直線的でなく、凹凸が激しい。

床面は地山の黄褐色火山灰層まで掘り窪めたのち、黒褐色土を全面に薄く埋めもどして叩きしめた「叩き床」が全面に施されている。おおむね、平坦な床面を形成しており、構築状態も堅固であるが、特に踏みしめた箇所はみられない。

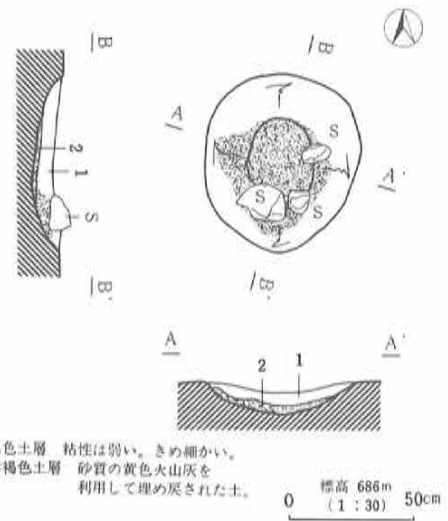
ピットは7個検出された。主柱穴は4本 (P₁～P₄) あるが、あまり整然とした配置ではない。特にP₄が西側にずれている。P₁は50×53cmの円形を呈し、56cmの深度を有する。断面形はU字形を呈するが、南側に稜を有する。P₂は破壊部から検出されたため、残存値を示す。32×34cmの円形を呈し、58cmの深度を有する。P₃は29×39cmの楕円形を呈し、60cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は26×29cmの不整円形を呈し、46cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₆は住居址南側のP₃・P₄間に位置している。24×32cmの



第171図 Y103号住居址実測図

円形を呈し、21cmの深度を有する。P₅・P₆は南壁下中央に位置し、入口施設に関わる柱穴と考えられる。P₅は44×62cmの楕円形を呈し、西側に偏在する更に深い小規模な掘り込みがみられる。深さは最深部で50cmをはかる。P₆は58×60cmの楕円形を呈し、40cmの深度を有する。

炉址は住居址の長軸・短軸の交点(住居址の中央)よりもわずかに北側から検出された。長軸長71cm、短軸長61cmの楕円形を呈し、長軸方位はほぼ真北をさす。床面からの掘り込みは最深部で13cmをはかり、断面はおおむね弓状を呈する。火床部はこの掘り込みの底面に砂質の黄褐色火山灰(第2層)を4cm内外の厚さで埋め戻して造られている。埋め戻された黄色火山灰は47×46cmの不整形の広がりをもっており、現状は真赤に焼け込んだ状態であった。火床部の南側には角礫2個をならべた炉縁石が設けられている。炉内の覆土は、きめの細かい黒色土一層のみからなる。



第172図 Y103号住居址炉址実測図

遺物の出土状況

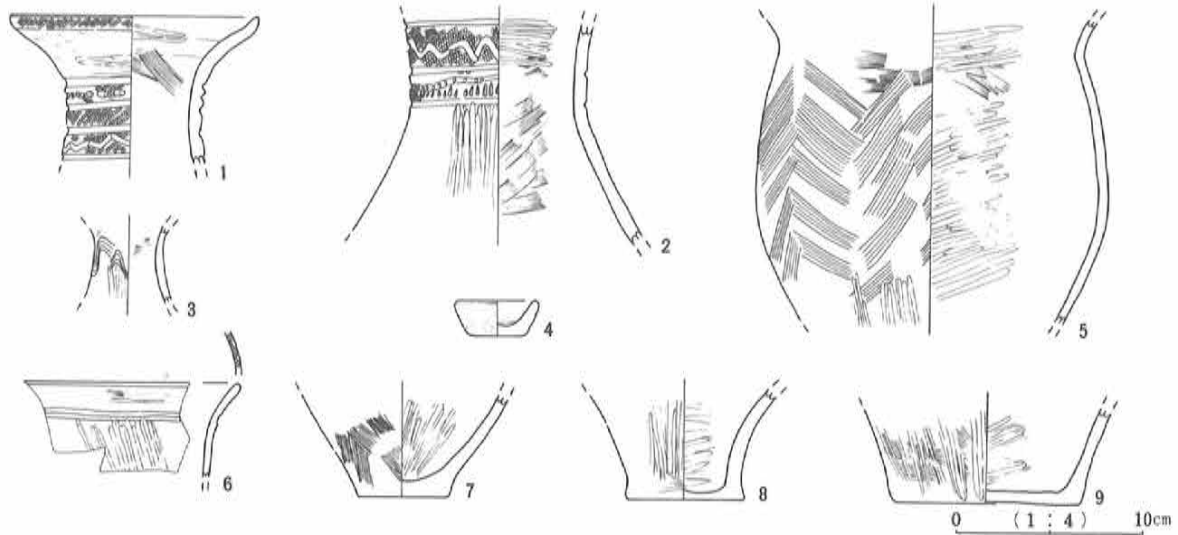
本住居址からは弥生土器が出土しているが、量は少ない。遺物の分布はP₄の東側と、炉址の南側に比較的集中する傾向が看取される。図化した遺物は床面上、あるいはその直上の覆土中から出土したものであり、本住居址の年代を決定し得る資料と考えられる。173-1・5(壺・甕)が炉址の南側、173-2・3・8・9(壺・甕)がP₄の東側、173-7(甕)がP₁の南側に分布している。また、173-4(手捏鉢)はP₅内、174-1・9(壺・甕)がI区、174-5・6・11(甕)がII区、173-6(甕)、174-3・7・8(壺・甕)がIII区、174-2・4・10(壺・甕)が覆土内から出土している。

遺物(第173・174図、図版 六十一)

本住居址からは、弥生土器が出土している。器種には壺・甕・ミニチュア鉢がある。

壺は、篋描文を主として施す173-1・2、174-2・3、櫛描文を主とする173-3、両者を組み合わせた174-1がある。173-1は、頸部にLR縄文を地文とし、篋描横走平行線文による区画中に、篋描連続刺突文・山形文が施され、口縁部にもLR縄文が回転押圧されている。器形は、口縁部が筒状の頸部から強く外反し、端部で受口状に立ち上がっている。173-2も筒状の頸部に、篋描横走平行線文による区画中に、篋描山形文・押し引き文・刻目文が施されている。174-2は、LR縄文を地文とし、弧状の篋描文が施された胴部破片で、174-3は、篋描横走平行線文が施された頸部破片である。174-3は、筒状の細い頸部で、4本一組の櫛描波状文が一带施されている。174-1は、横走する篋描文下に6~7本一組の櫛描波状文を垂下させた後、左右を篋描文で区画した胴部破片である。

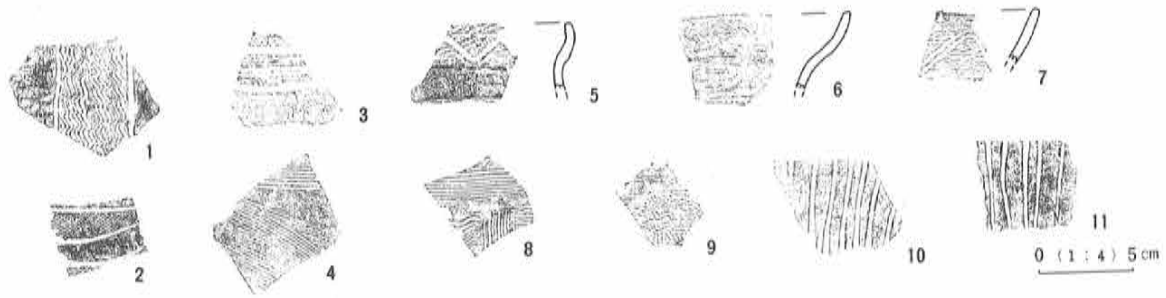
甕は、櫛描文を主に施す173-5、174-4・6・8・7と、篋描文を主とする173-6、174-5・10・11、両者を組み合わせた174-7がある。173-5は、6本一組の櫛描斜走直線文が縦位羽状(右回り)に施されており、胴部は中位でふくらむ。174-4は、8本一組の櫛描斜走直線文が施される胴部破片、174-8は、8本一組の櫛描横走平行線文下に、櫛描波状文と垂下文が施された頸部から胴部の破片、174-9は、櫛描波状文の施される胴部破片で、174-6は、櫛描波状文の施された受口状を呈する口縁部破片であり、口唇部に面取りが施されている。173-6は、頸部に2条の篋描横走平行線文が施され、口唇部にはLR縄文が施されている。器形は、口縁部が緩く外反し、口唇部は面取りが施され、最大径は口縁部にあると思われる。174-5は、口縁部にLR縄文を地文とする篋描山形文が施され、面取された口唇部にLR縄文、頸部に横走する篋描文が施される受口状の口縁



第173図 Y103号住居址出土土器実測図

第39表 Y103号住居址出土土器観察表

神 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
173-1	壺	13.1 < 7.8 >	口縁部は強く外反し端部で受口状に立ち上がる。	内) 口縁部にヨコナデが施された後、斜位のハケメ調整、粗雑なヘラミガキが施されている。 外) 口縁部はヨコナデの後、横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部はL R縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文4条(4条しか確認できない)で区画した後、最上位の文様帯中にヘラ描刺突文、3段目の文様帯中へラ描連続山形文が施され、口縁部上端にはL R縄文が施されている。	回転実測A No.6
173-2	壺	(12.0)	頸部は筒状を呈する。	内) 全体に横位のハケメ調整の後、頸部上位には丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部は縦位のハケメ調整の後、文様地文、胴部は文様地文の後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部はL R縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文3条で一次区画し、上の文様帯にはヘラ描連続山形文、下の文様帯にはヘラ描押し引き文と刻目を各1条巡らされている。	回転実測A No.1
173-3	壺	(3.9)		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 頸部上位は横位のハケメ調整、下位は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 4本一組の櫛描波状文が一帯施されている。	回転実測B No.3、IV区
173-4	鉢	(4.5) 1.9 (3.0)	底部は平底で、全体に逆台形状を呈する。手捏成形。	内・外面ともかはいナデが施されている。	回転実測B P ₁
173-5	甕	(16.2)	胴部は中位でふくらむ。	内) 頸部は横位のハケメ調整の後、横位のヘラミガキが施されている。胴部は横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部は横位のハケメ調整の後、文様地文、胴部下位は文様地文の後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 6本一組の櫛描斜走直線文が縦位羽状(右回り)に施されている。	回転実測B No.4・5
173-6	甕	4.9	最大径は口縁部にあると思われる。口縁部は強く外反する。口唇部は面取りされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部に横位のハケメ調整の後文様地文、その下位は文様地文の後縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にヘラ描横走平行線文2条が施されている。	破片実測B III区
173-7	甕	(5.4) 5.0		内) 縦位の丁寧なヘラミガキが施されている。 外) 縦位のハケメ調整が施されている。	回転実測B No.8
173-8	甕	(5.9) 6.2		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.2
173-9	甕	(5.2) 10.0		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No.3



第174図 Y103号住居址出土土器拓影図

部破片である。174-10・11は篋描直線文が数条平行して描かれている胴部破片である。174-7は、櫛描波状文を地文として、平行する2条の篋描山形文が施された口縁部破片である。器形を察知できる資料は少ないが、口縁部は上端でやや内弯する174-5・6と、内弯せずに外反する173-3がある。底部には、内弯気味に開く173-7と、外反気味に開く173-8・9がある。173-7は、内面調整に丁寧な縦位のヘラナデ、外面に縦位の刷毛目調整が施されており、173-8・9は内面に横位のヘラミガキ、外面に横位の刷毛目調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。

ミニチュア鉢(173-4)は、手捏ね成形によるものであり、口径4.5cm(推定)、底径3.0cm(推定)、器高1.9cmを測る。内・外面ともに軽いナデが施されている。

以上の出土遺物から本住居址の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。

(篠原)

43) Y104号住居址

遺構(第175・176図、図版 六十二・六十三)

本住居址は台地南部中央のやや東寄り、か・き-12・13・14、く-12・13グリッド内に位置している。Y105号住居址、第176号土坑と重複関係を持ち、第176号土坑に東壁の大半を破壊され、Y105号住居址を破壊している。

プランは、東西の短軸長521cm、南北の長軸長662cm、東壁長580cm(推定)、西壁長555cm、南壁長490cm、北壁長467cmの隅丸長方形を呈し、床面積は33.93㎡をはかる比較的大型規模の住居址である。長軸方位はN-20°-Eをさす。

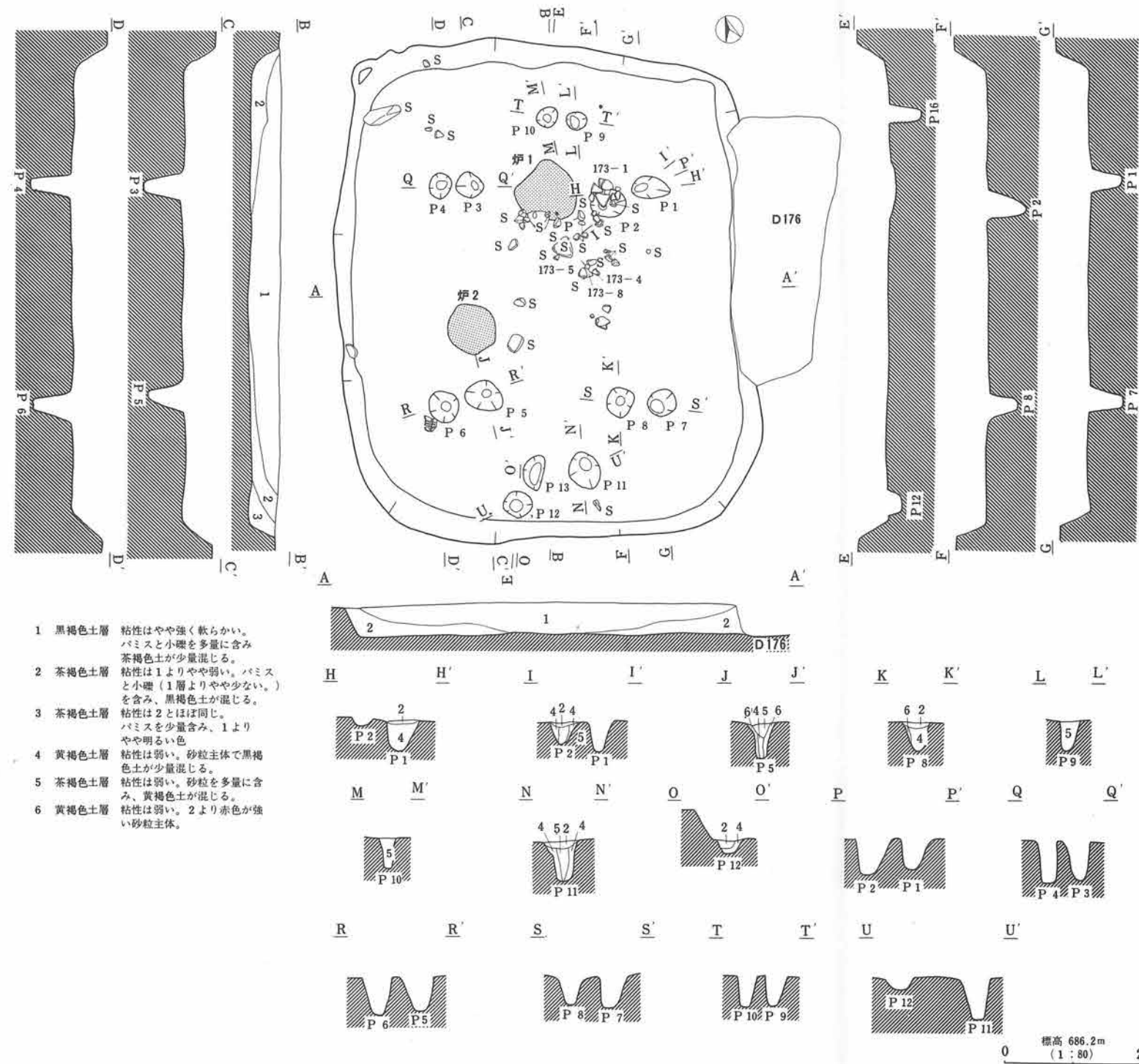
覆土は三層からなり、プライマリーな堆積状態を示す。第1層は住居址の中央を中心として、レンズ状に厚く堆積する。パミスと小礫を多量に含み、茶褐色土が少量まじる黒褐色土である。第2層は各壁下に逆三角形の堆積を示す。1層よりも少量のパミスと小礫を含み、黒褐色土がまじる茶褐色土である。第3層は南壁下にのみみられる。パミスを少量含む茶褐色土である。

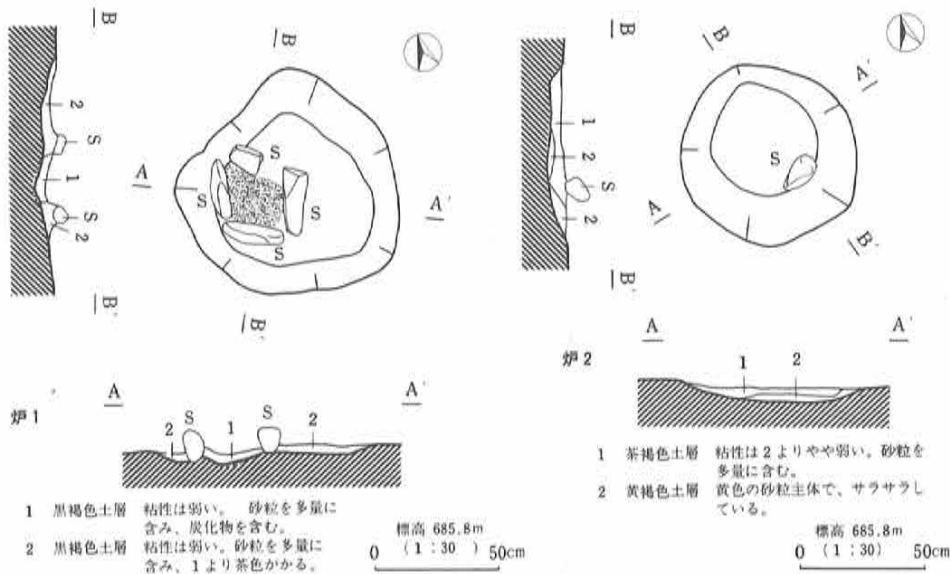
確認面からの壁高は32.5-49.5cmを測り、極めて良好な遺存状態である。床面からの立ち上がりは、割合緩やかな傾斜で、壁面はおおむね平滑であるが、北西コーナーの上面にわずかな張り出しをもつ。構築状態を壁体上位は地山の黄褐色火山灰層を利用するため、堅固であるが、壁体下位は地山の砂層を利用するため、もろく崩れ易い。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層まで深く掘り窪め平坦化したのちに、黒褐色土を全面に薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。全体的にやや軟弱な構築状態であり、堅く残っている面は極く僅かしかない。また、南側がわずかに高いが、おおむねフラットであり、細部にわたっても凹凸が少ない。

ピットは13個検出された。主柱穴・棟持柱は各所にそれぞれ2本一対になっており、他に類例をみない。主柱穴は4箇所に2本ずつ、合計8本(P₁-P₈)が整然と配置されている。北東側で対になっているP₁・P₂は、P₁





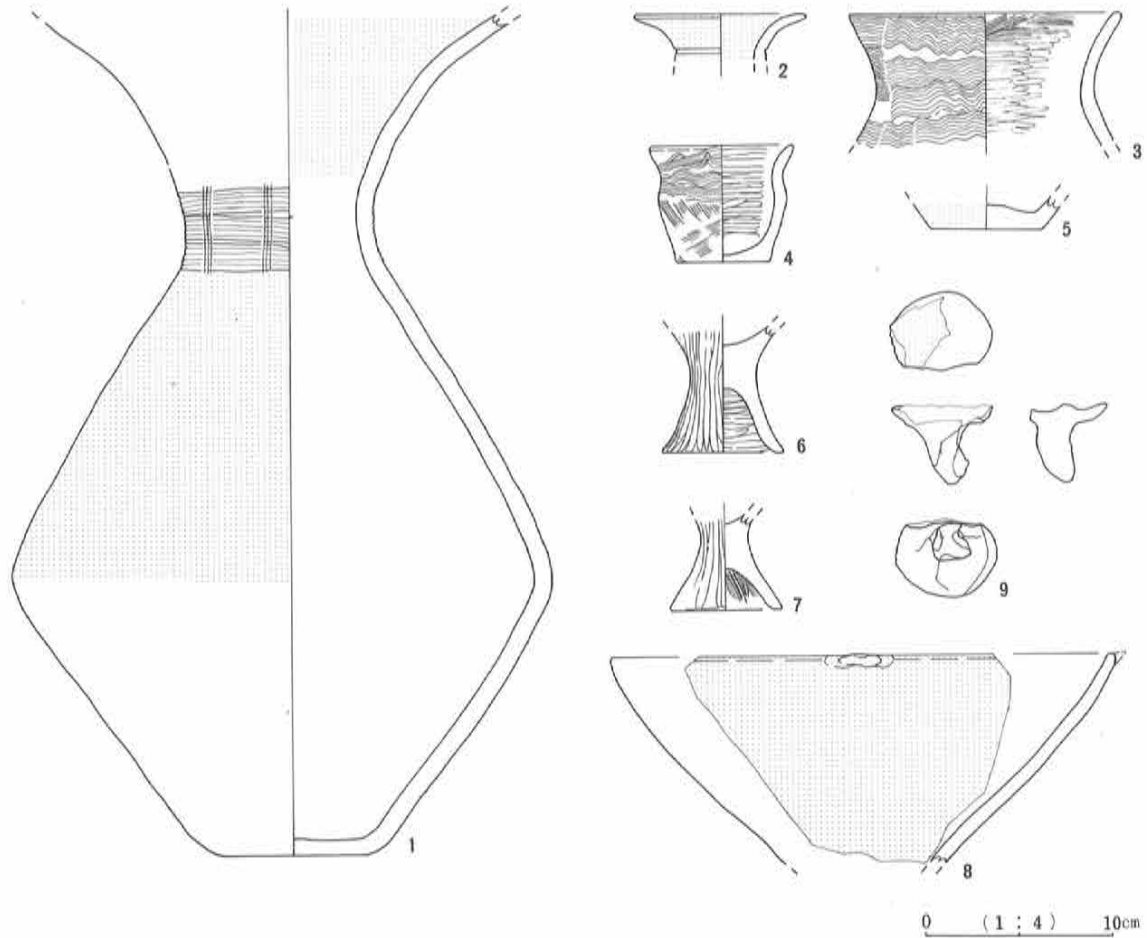
第176図 Y104号住居址炉址実測図

が 32×55 cmの東西に長い楕円形、 P_2 が 40×52 cmのやはり東西に長い楕円形を呈し、深さはそれぞれ、44cm、50cmをはかる。断面形はいずれもU字形を呈する。覆土は P_1 が二層、 P_2 が三層からなり、 P_2 には柱痕が残る。柱痕の径は14cmをはかり、木柱の規模が推定できる。北西側の $P_3 \cdot P_4$ は、 P_3 が 37×40 cmの円形、 P_4 が 37×34 cmの円形を呈する。深さはそれぞれ56cm、60cmを測り、断面形はいずれもU字形を呈する。南西側の $P_5 \cdot P_6$ は、 P_5 が 44×57 cmの東西に長い楕円形、 P_6 が 45×45 cmの円形を呈する。深さはそれぞれ49cm、56cmをはかり、断面形はいずれもU字形を呈する。 P_5 は三層（第4・5・6層）からなり、柱痕が残る。径9cm内外の細い木柱が使われていたことが想定できる。南東側に位置する $P_7 \cdot P_8$ は、 P_7 が 39×41 cmの円形、 P_8 が 42×39 cmの円形を呈する。深さはそれぞれ46cm、40cmをはかり、断面形はいずれもU字形を呈する。 P_8 は三層（第2・4・6層）からなり、柱痕が残る。北壁下中央に2個並んで位置する $P_9 \cdot P_{10}$ は棟持柱と考えられる。 P_9 は 25×29 cmの楕円形、 P_{10} は 29×30 cmの円形を呈し、それぞれ43cm、44cmの深度を有する。断面形はいずれもU字形を呈し、覆土は第5層一層のみからなる。 $P_{11} \cdot P_{13}$ は南壁下中央に位置し、入口施設に関わる柱穴と考えられる。 P_{11} が 54×44 cmの楕円形、 P_{12} が 49×26 cmの南北に細長い楕円形を呈し、それぞれ60cm、56cmの深度を有する。断面形はいずれもU字形を呈する。 P_{11} は三層（第2・4・5層）からなり、柱痕が残る。径12cm内外の木柱が存在したことを想定できる。 P_{12} は P_{13} の南西側、壁直下に位置し、性格は不明である。 35×39 cmの楕円形を呈し、18cmの深度を有する。断面形は緩いU字形を呈し、覆土は二層（第2・4層）からなる。

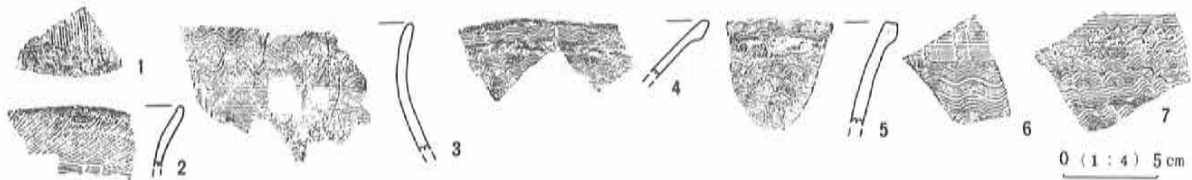
炉址は北側の支柱穴間（ $P_1 \cdot P_2$ 、 $P_3 \cdot P_4$ ）の中央と、 $P_5 \cdot P_6$ の北側の2箇所から検出された。北側支柱穴間に位置するものを炉1、 $P_5 \cdot P_6$ 北側に位置するものを炉2とする。

炉1は 91×88 cmの不整形を呈し、長軸方位は $N-25^\circ-E$ をさす。所謂「石囲炉」である。床面からの掘り込みは最深部で6.5cmをはかり、断面形は中央部が一応深くなるが、凹凸が激しい。火床部は掘り込み内西側の柱状の礫を4個方形に配した石囲の区画内にあり、 21×19 cmの不整形の焼土範囲をもつ。この火床部は、地山の砂層をそのまま利用したものであり、真赤に焼け込んでいる。石囲の周囲には第2層の砂粒を多量に含む黒褐色土が充填されて床面とはほぼ同一レベルになっており、石囲の礫を固定していたものと考えられる。覆土は砂粒、炭化物を含む黒褐色土（第1層）のみからなる。

炉2は 72.5×68 cmの円形を呈し、長軸方位は $N-40^\circ-W$ をさす。床面からの掘り込みは最深部で7cmをはかり、断面形はおおむね弓状を呈する。火床部にあたる焼土は検出されておらず、全く使用された痕跡が残っていない。



第177図 Y104号住居址出土土器実測図



第178図 Y104号住居址出土土器拓影図

ない。覆土は二層からなり、上層が砂粒を多量に含む茶褐色土、下層が黄色砂粒主体の黄褐色土でやはり火を受けた痕跡はみられなかった。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が多量に出土しているが、その多くは細片で弥生時代中期後半の混入遺物である。図化した遺物もすべてが床面上出土遺物はなく、覆土1層から出土したものであり、例えば177-1 (壺) が17cm、177-4 (甕) が49cm、177-6 (高坏) が15cm、177-8 (高坏) が11cm床面よりも浮いている。これはこれらの遺物が第1層黒褐色土埋没過程において投棄された遺物であることを示しており、本住居址の共伴遺物になる確実な根拠はもたないが、一応本住居址の年代を推定できる資料を抽出してある。このうち、より確実性が強いのは177-1 (壺)、177-3・4 (甕)、177-8 (高坏) の4点と178-1~7 (壺・甕) の7点で、その他の177-2・5・6・7・9 (壺・高坏) は本住居址との共伴性が薄い。また、石器の267-40 (打製石鏃)、273-153 (砥石)、274-165 (搬入礫) についても同様である。全体の遺物分布の傾向は、P₂周辺に最も集中し、177-1・4・5・6・8 (壺・甕・高坏) が出土している。この他、I区から178-1・5 (壺・甕)、II区から178-

第40表 Y104号住居址出土土器観察表

挿 番	図 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
177-1		壺	— (44.6) 7.6 28.6	口縁部は大きく外反し、胴部は中位下方で強く張り、所謂「無花果形」を呈する。	内) 口縁部に赤色塗彩・ヘラミガキが施され、以下は磨滅著しく不明。 外) 口縁部に粗いヘラミガキ、以下は縦位のヘラミガキのみ施されている。 文) 頸部に6本一組の櫛描横走平行線文が3帯施された後、ほぼ8等間隔で3本一組の櫛描垂下文により「T字文C」を形成している。	回転実測A No.7
177-2		壺	(9.1) (2.1) —		内・外面ともに赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B I区1層
177-3		甕	(14.4) (7.0) —	口唇部に面取りがされている。	内) 全面に縦位のヘラミガキ→口縁部に細かい単位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナアが施されている。 文) 8~11本一組の櫛描波状文(右回り)が、基本的には上から下へ施文されている。	回転実測B な31グリッド内覆土
177-4		甕	(7.5) 6.2 5.0	口縁部に最大径をもつ。口縁部は短く外反し、胴部は上位でふくらみ、底部は偏平で大きい。	内) 縦位のヘラミガキが施されている。 外) ハケメ調整が施されている。 文) 口縁部から胴部上位に5本一組の櫛描波状文(右回り)が上から下へ施されている。	回転実測B No.5
177-5		壺	— (1.8) 6.0		内) ナデ→ハケメ調整が施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.4
177-6		高 環	— (6.6) 6.4	脚部はスリムで下端で外反する。	内) 縦位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.8
177-7		高 環	— (5.0) (5.8)	脚部は台形状を呈している。	内) 縦位のハケメ調整が施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B IV区1層
177-8		高 環	(26.7) (11.0) —	坏部は内弯気味に開き、口縁部端部に三角形の突起が貼付されている。	内・外面ともに赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	破片実測A No.10、S区、ベルト内
177-9		高 環	— (4.2) —	手摺ね成形と考えられ、坏部のホゾでソケット状にしぼり込まれている。	内) 赤色塗彩・ヘラミガキが施されている。	破片実測B II区1層

2・9 (壺・高環)、178-7 (甕)、IV区から177-7 (高環)、178-3・4・6 (甕) が出土している。

(小山)

遺物 (第177・178図、図版 六十三)

本住居址からは、弥生土器・石器が出土している。弥生土器の器種には壺・甕・高環がある。

壺には177-1・2・5の3点がある。177-1は大型品で、口縁部は頸部から大きく外傾外反して開き、胴部は下位で大きくふくらみ、最大径となる(28.6cm)。内外面とも剥離・磨滅が著しい状態であるが、内面口縁部と外面胴上半部に赤色塗彩が施され、外面口縁部は無彩である。文様は頸部に6本一組の櫛描横走平行線文を3帯施文したのち、3本一組の櫛描垂下文で八等間隔に区画した「T字文C」が施される。177-2は内外面とも赤色塗彩され、頸部に一条の櫛描横走平行線文が認められる。177-5は小型壺の底部片で外面に赤色塗彩が施される。甕には中型品の177-3と小型品の177-4がある。177-3は頸部から緩く外反する口縁部で、櫛描波状文が右回りに上から下へ施文される。177-4は頸部から短かく外反する口縁部を有し、胴部はあまりふくらみをもたず、底部は器高と比較して大きい。文様は口縁部から胴上半部に振幅の小さい粗雑な櫛描波状文が施文される。

高環には177-6・7・8・9がある。177-6・7は無彩の脚部で、外面に縦位のヘラミガキが行われ、177-7は外面に赤色顔料の付着が観察される。177-8は大型の坏部で、わずかに内弯気味に立ち上がり、端部で内弯し、口唇部に三角形の突起が貼付される。177-9は内面に赤色塗彩されており、接合部のホゾと考えられる。

この他破片資料として、壺には「T字文C」の施される178-1があり、甕には櫛描簾状文と櫛描波状文の施文される178-2・6・7、櫛描簾状文と櫛描斜走直線文の施される178-2、折り返し口縁で口唇部が面取りされ、櫛描波状文の施文される178-4・5がある。

以上、本住居址の所産期は出土した遺物から弥生時代後期前半と考える。

(三石)

44) Y105住居址

遺構 (第179・180図、図版 六十四)

本住居址は台地の南部東寄り、お・か・き-11・12・13グリッド内に位置している。Y104号住居址、第176号土坑、第14号周溝、第6号溝状遺構と重複関係を持ち、Y104号住居址、第176号土坑に西部の北側大半と南側の一部、第14号周溝に東半部の大半、第6号溝状遺構に南壁の中央とその周辺を破壊されており、残存部は少ない。

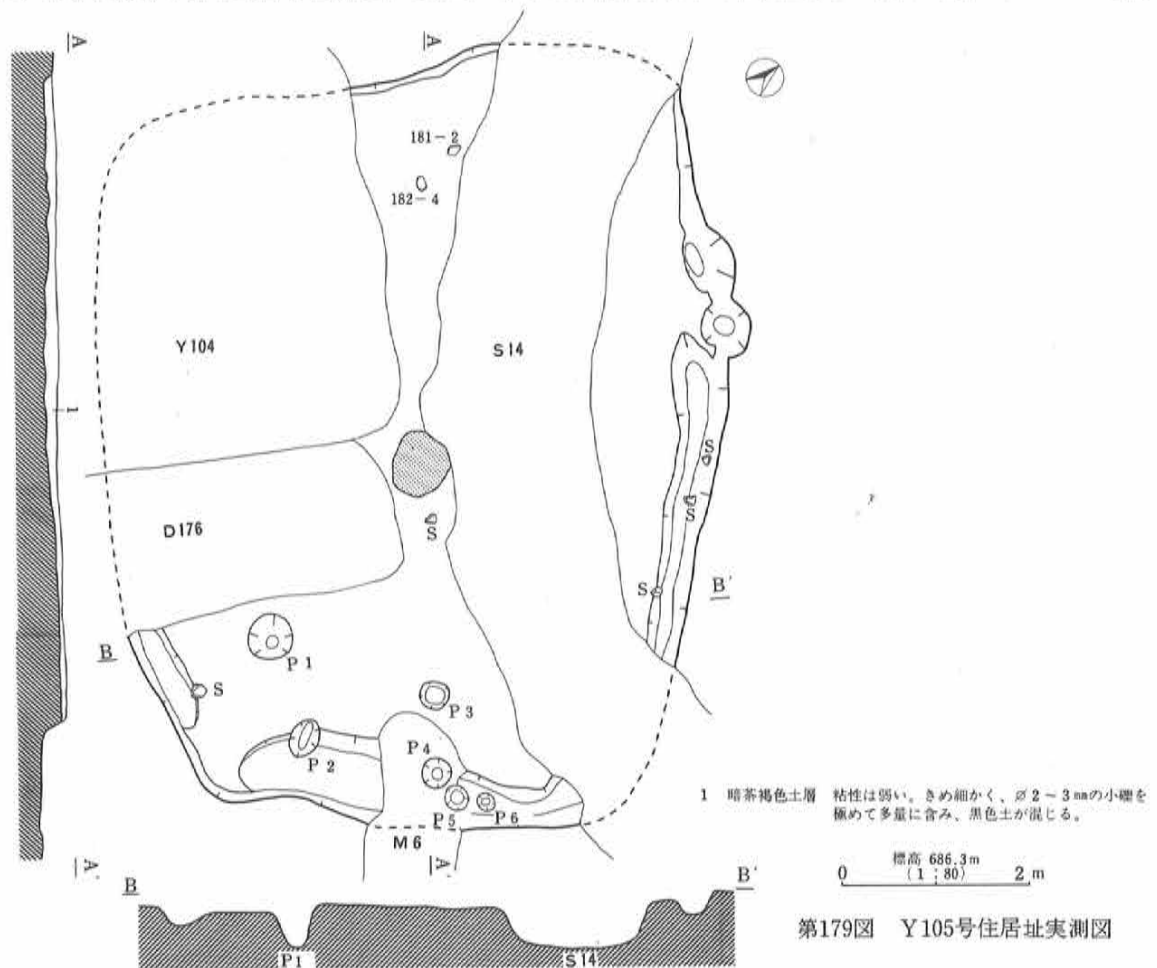
プランはいずれも推定値である。東西の短軸長622cm、南北の長軸長780cm、東壁長748cm、西壁長682cm、南壁長405cm、北壁長572cmの歪んだ隅丸長方形を呈し、床面積40.8㎡をはかる大型規模の住居址である。長軸方位はN-51°-Wをさす。

覆土は大方が破壊・削平されており、黒色土がまざり、小礫を極めて多量に含むきめの細かい暗茶褐色土一層のみからなる。

確認面からの壁高は3~13cmをはかり、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、やや軟弱である。壁面は直線的とは言えず、起伏に富み、東壁の北側ではピット状の張り出しを2箇所有する。

壁溝は西壁の残存部、南壁、東壁の南側から断続的に検出された。西壁の壁溝は幅30cm内外、深さ5cm内外を計測する。南壁下の壁溝は大規模であり、幅26~74cm、深さ8~15cmをはかる。東壁下の壁溝は南壁下の壁溝と連結していたとも考えられ、幅19~37cm、深さ9~15cmをはかる。

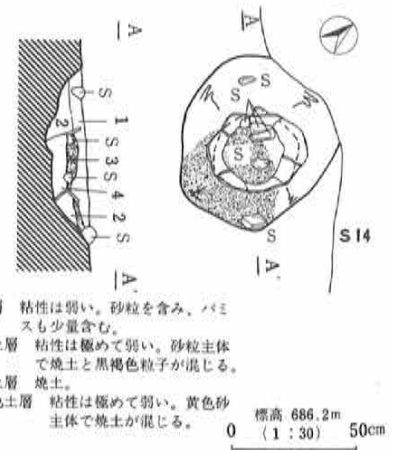
床面は地山の黄褐色火山灰層まで掘り窪めたのち、茶褐色土を全面に薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されているが、軟弱であり堅固な箇所はみられない。また、南壁ぎわから、北壁ぎわへ向って徐々にレベルを低



第179図 Y105号住居址実測図

下させ、傾斜する傾向がみられる。細部にわたると細かい凹凸が各所にみられる。

ピットは6個検出された。主柱穴は南西部から1本(P₁)のみ検出された。47×47cmの円形を呈し、47cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は南壁西側の壁溝北側面上に位置する。42×31cmの南北に長い楕円形を呈し、40cmの深度を有する。P₃は南壁下中央の壁溝よりも北側に位置する。30×31cmの円形を呈し、17cmの深度を有する。P₄~P₆は南壁下中央東寄りの壁溝内にまとまって位置する。P₄が31×31cmの円形、P₅が27×25cmの円形、P₆が20×19cmの円形を呈し、18cmの深度を有する。P₂~P₆は南壁下に集中するが、その性格については明らかではない。



第180図 Y105号住居址炉址実測図

炉址は住居址の長軸・短軸の交点(住居址の中央)よりもやや東側から検出された。長軸長69cm、短軸長63cmのやや不整な楕円形を呈する「埋甕炉」でプランの北東側の一部を破壊されている。長軸方位はN-54°-Eをきす。床面からの掘り込みは最深部で15cmをはかり、断面形は細かい起伏は有するものの、おおむね、鍋底状を呈する。火床部はこの掘り込みの中央部の底面に大型の甕形土器の口縁部~胴部中位までの残存品を正位の状態置き、その周囲に砂粒主体の茶褐色土(第2層)を最も厚い部分で10cm程、また、甕形土器内にも黄色砂粒主体の明茶褐色土(第4層)を6cm程埋めもどし、火床の主体部となる甕形土器を固定して、設定されている。従って、往時の使用面は床面から最深部でも7cm低位の位置にあったことになる。甕形土器内、及びその南西周辺には42×37cmの不整形の焼土の広がりがあり、真赤に焼け込んで、相当長期にわたって使用された痕跡が伺われる。また、焼土範囲内の南端には長さ9cm程の礫が置かれており、これも何らかの形で炉の機能の役割の一端を担っていたことが考えられる。炉址の構築土以外の覆土は一層のみからなる。砂粒を含み、パミスも少量含む黒色土である。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているが、その量は少なく、また、細片が多いがその多くは床面上から出土したものであり、大方が本住居址の共伴遺物として見做し得るものである。全体の遺物分布は極めて散漫であり、特に集中する箇所はみられない。

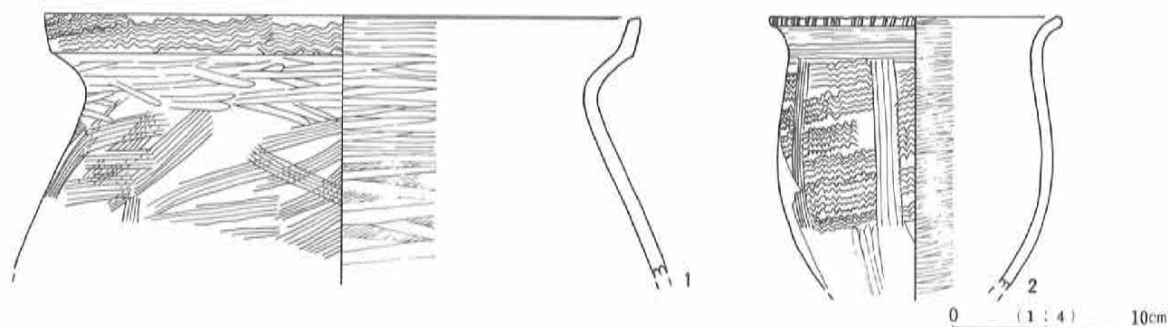
181-1(甕)は先述した炉址の埋甕として利用されていたものである。181-2(甕)、182-4(甕)は北壁下中央の床面上から出土している。この他、182-8(台付甕)がP₁内、182-5・6・7(甕)が北区、182-4(甕)は北壁下中央の床面から出土している。この他、182-8(台付甕)がP₁内、182-5・6・7(甕)が北区、182-1・2・3・9(壺・甕)が南区から出土している。

遺物(第181・182図、図版 六十四)

本住居址から出土した弥生土器で、図示し得たものは11点(実測図2点、拓影図9点)である。

器種については、甕・台付甕・壺がある。

甕181-1は受口状の口縁を呈し、口唇部面取りがなされている。外面調整及び文様は、口縁部ヨコナデの後7本一組の波状文が施され、胴上部は縦位の刷毛目調整の後、粗い櫛描斜走直線文が施文、頸部は横位のヘラミガキが施されている。内面調整は横位のヘラミガキが施されており、特に口縁部は丁寧に行なわれている。甕181-2は口縁部短かく、素口縁であり、口唇部に櫛による刻目を有す。外面調整及び文様は、口縁部ヨコナデ、頸部に5本一組の櫛描横走平行線文が施され、その後頸部から胴部に8箇所、略等間隔に5本一組の櫛による垂下文が施文され、その後垂下文の間を5本一組の振幅の小さい櫛描波状文が施文されている。内面調整は横位のヘラ



第181図 Y105号住居址出土土器実測図



第182図 Y105号住居址出土土器拓影図

第41表 Y105号住居址出土土器観察表

種番	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
181-1	甕	(31.6) (13.5) -	口縁部は外反し上端でしっかりした受口状を呈する。 口唇部は面取りされている。	内) 口縁部から頸部に丁寧な横位のヘラミガキ、頸部以下はハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、頸部にハケメ調整→ヘラミガキ、頸部以下は縦位のハケメ調整が施されている。 文) 口縁部に7本一組の櫛描波状文、頸部以下は5-8本一組の櫛描斜走直線文(右回りを基本として)施されている。	回転実測A No.3
181-2	甕	(13.4) (14.4) -	最大径は口縁部にあり、口縁部は短く外反し、胴部は中位で軽くふくらむ。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部にヨコナデ、胴部下位は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部に櫛描による刻目、口縁部に5本一組の櫛描横走平行線文が施された後、頸部から胴部に8箇所等間隔で5本一組の櫛描直線文が垂下された区画内に、5本一組の櫛描波状文が充填されている。	回転実測B No.1、S区

ミガキであり、調整・文様・胎土・出土位置より、182-4・9は接合関係にあると考えられる。尚、2・8の表面には著しい煤の付着が観察できる。

拓影図182-1~3・5~8はいずれも小片のため全器形を知り得ないが、甕182-6は口縁部破片であり、口縁短く、強く外反し、口唇部LR縄文と篋による刻目が施され、頸部ヨコナデ、僅かではあるが胴上部に櫛描斜走文の痕跡を留める。甕182-8は胴上部破片であり、振幅の小さい櫛描波状文が施文され、内面ヘラミガキが施されており、内外面共に煤の付着が観察できる。壺182-1は頸部破片であり、櫛描横走平行線文が施文されており、内面頸上部はヘラミガキが観察でき、下部はナデ調整である。壺182-2は胴上部破片と思われ、沈線によって区切られ、中に櫛による縦の波状文が懸垂状に施文されており、赤色塗彩が観察できる。壺182-3は胴中央部の破片であり、変形「工」字文と篋による沈線が施され、文様体の中にLR縄文が観察できる。182-5・7は台付甕と思われ、5は口縁部破片であり、受口状の口縁であり、口唇部にLR縄文、口縁部LR縄文を施した後、篋による山形文が施文されており、ドーナツ状の貼付文を有し、頸部は篋による横走平行線文が走っているが、「コ」の字重ね文の断片とも考えられる。内面はヘラミガキ調整であり、僅かに赤色顔料の付着が観察できる。7は胴部破片であり、「コ」の字重ね文とドーナツ状の貼付文を有し、内面はヘラミガキ調整である。以上、遺物において櫛描波状文・櫛描斜走文が施文されているが、181-2、182-4・9の甕に垂下文が施されていることと、台付甕182-5・7の「コ」の字重ね文が施文されていることから、本住居址の所産期を弥生中期後半と考えておきたい。

(羽毛田伸)

45) Y106号住居址

遺構 (第183・184図、図版 六十五・六十六)

本住居址は台地南部中央よりやや東側の、う・え・おー12・13グリッド内に位置している。第14号周溝、第6号溝状遺構と重複関係を持ち、住居址の南東部の大半と、南西コーナー部を破壊されている。

プランは東西の短軸長352cm、南北の長軸長462cm、東壁長370cm、西壁長428cm、南壁長268cm(以上、いずれも推定値)、北壁長358cmの隅丸長方形を呈するが、東壁から、南東コーナーにかけては歪みがかなり激しく、全体的には不整な形状を呈している。床面積は推定で15.60㎡と小規模な住居址であり、長軸方位はN-7°-Wをさす。

覆土は薄く、また削平されている部分が多い。砂質で粘性の弱い茶褐色土一層のみからなる。

確認面からの壁高は0.5~15.5cmをはかり、床面からの立ち上がりは極くなだらかである。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用し、やや軟弱で壁面も凹凸に富む。

壁溝は検出されなかった。

床面は、地山の黄褐色火山灰層上に茶褐色土を薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が全面に施されており、おおむねフラットであるが、やや軟弱である。

ピットは3個検出され、いずれも支柱穴である。P₁は39×40cm、P₂は36×39cm、P₃は31×29cmの円形を呈し、それぞれ、57・53・52cmの深度を有する。断面形はいずれもU字形を呈する。

炉址は住居中央の北西寄りから検出された。74×59cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-10.5°-Wをさす。床面からの掘り込みは大方は弓状に浅く掘り込まれているが、南東部に38×27cmの楕円形の落ち込みがあり、最深部で51cmをはかる。この落ち込み

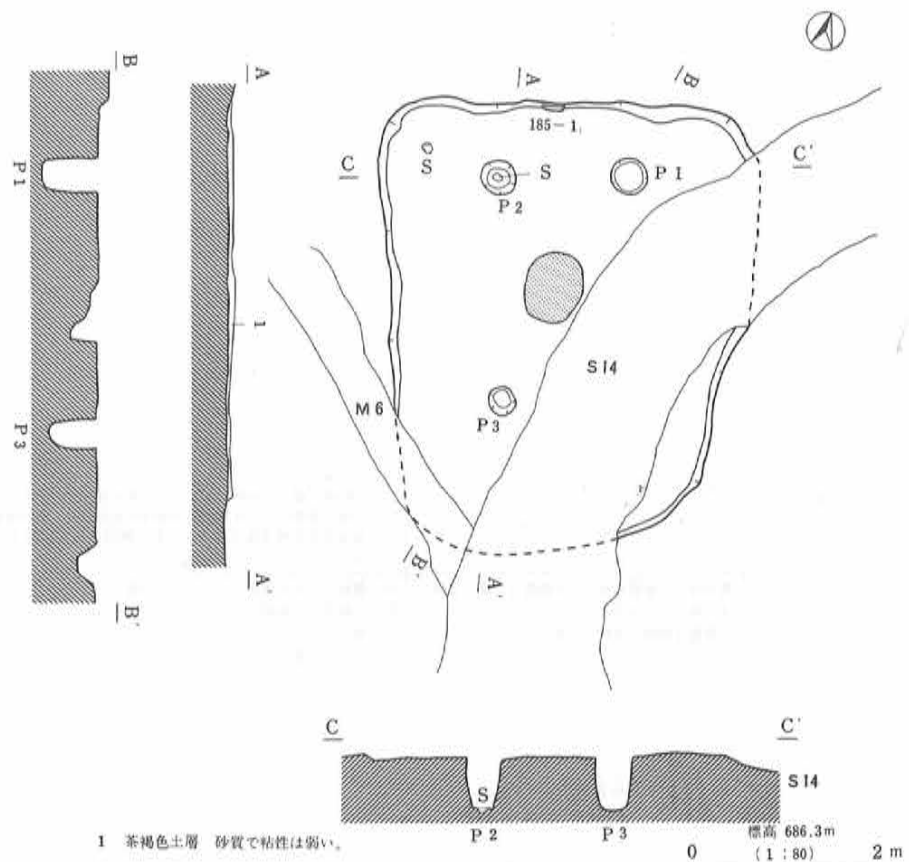
み内には焼土(第4層)が充填されている。火床部はこの落ち込み範囲も含めた、掘り込み低面の南東側にあり、56×41cmの不整な焼土の広がりをもつ。覆土は三層からなり、第1層が黒色土、第2層が暗赤褐色土、第3層が暗褐色土である。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が極く少量出土しており、分布は散漫である。185-1(甕)が北壁下中央、185-2・3(甕)がP₁内、186-1~3(壺・甕)が東区から出土している。(小山)

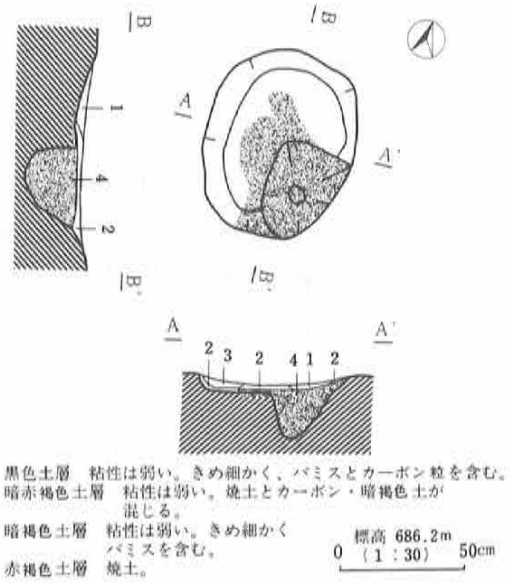
遺物(第185・186図)

本住居址から出土した遺物で、図示し得たものは6



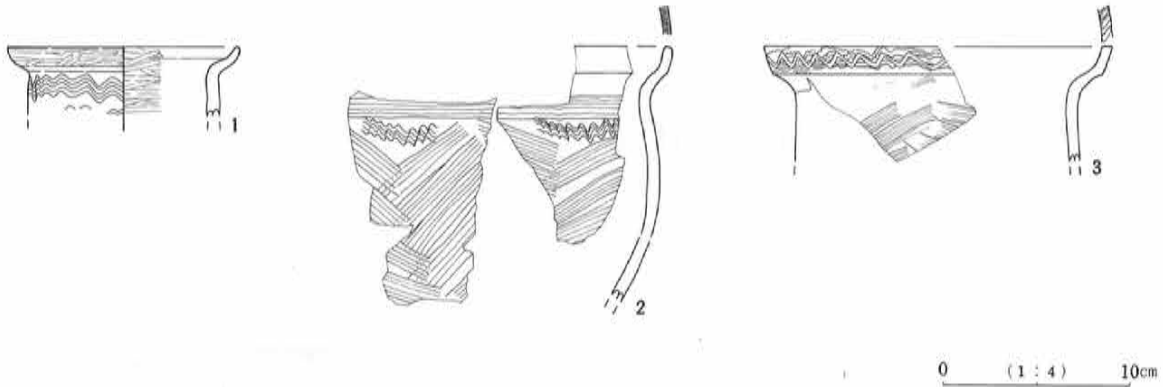
第183図 Y106号住居址実測図

点(実測図3点、拓影図3点)である。器種については、甕・壺がある。甕185-1・2・3は受口状の口縁を有す。1は小形甕であり、胴部に櫛描波状文が施文されており、2は口唇部縄文、頸部櫛描横走平行線文、胴上部櫛描斜走直線文を施した後、頸部に近い位置に1帯の櫛描波状文が施文されている。3は口唇部縄文、口縁部に振幅の小さい櫛描波状文を施した後、篋による山形文が施文されており、胴部櫛描斜走直線文が施されている。1・2・3共に外面に煤の付着が観察できる。拓影図186-1・2・3はいずれも小片のため、全器形を知り得ないが、1は壺胴部破片であり、篋描の横走平行線文と山形文の組み合わせで、中にLR縄文が充填されている。2は壺頸部破片で篋描の横走平行線文と、櫛描による垂下文の組み合わせであ



- 1 黒色土層 粘性は弱い。きめ細かく、パミスとカーボン粒を含む。
 - 2 暗赤褐色土層 粘性は弱い。造土とカーボン・暗褐色土が混じる。
 - 3 暗褐色土層 粘性は弱い。きめ細かくパミスを含む。
 - 4 赤褐色土層 焼土。
- 標高 686.2m
0 (1:30) 50cm

第184図 Y106号住居址炉址実測図



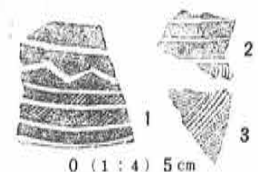
第185図 Y106号住居址出土土器実測図

第42表 Y106号住居址出土土器観察表

挿入番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調査	備考
185-1	甕	(12.2) (3.6) — (12.2)	最大径は口縁部にあり、口縁部は外反し上半でやや内弯気味に立ち上がり、受口状を呈する。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部にヨコナデ→丁寧な横位のヘラミガキ、頸部以下に横位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部以下に5本一組のハケメ調整が施されている。	回転実測B Na 2
185-2	甕	— (13.6) —	最大径は口縁部にあり、口縁部は外反し上半で内弯気味に立ち上がり受口状を呈する。口唇部は面取りされている。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部に丁寧な横位のヘラミガキ、頸部から胴部に斜位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部に縄文、頸部に6本一組の櫛描横走平行線文が施された後、頸部以下に6本一組の櫛描斜走直線文、その後更に櫛描横走平行線文直下に4本一組の櫛描波状文が施されている。	破片実測B E区、P ₁ 内
185-3	甕	(18.4) <6.1> — (18.4)	最大径は口縁部にあり、口縁部は外反し上半で受口状に立ち上がる。口唇部は面取りされている。	内) 横位のハケメ調整→ヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部にヨコナデ、頸部以下に斜位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部に櫛描による刻目、口縁部に4本一組の櫛描波状文を地文とし、ヘラ描縞線文が施され、胴部は6本一組の櫛描斜走直線文が縦位羽状(右回り)に施文されている。	破片実測A E区、P ₁ 内

る。3は甕胴部破片で櫛描斜格子目文が施される。以上の遺物をもって本住居は弥生中期後半に比定されよう。

(羽毛田伸)



第186図 Y106号住居址出土土器拓影図

46) Y107号住居址

遺構 (第187・188図、図版 六十五・六十六)

本住居址は台地のほぼ中央部、う・え・お-15・16グリッド内に位置している。Y125号住居址、第166号土坑、第13号周溝と重複関係を持ち、Y125号住居址、第166号土坑に住居址の東側、第13号周溝に住居址の西側を破壊され、住居址の中央部のみが残る。

プランはこのため明らかにできないが、南北長は524cmをはかる。

覆土も大方が削平されているため、未確認である。

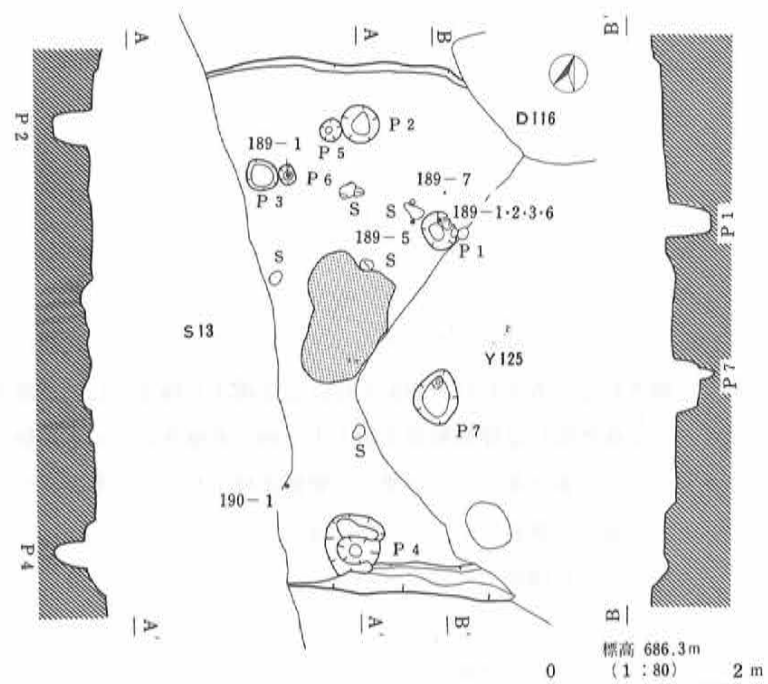
確認面からの壁高は残存部で4.5~13.5cmをはかり、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されているが、やや軟弱であり、壁面も凹凸に富む。

壁溝は南壁下の東側から検出された。溝幅12~20cm、深さ3.5~8cmをはかり、床面、および側面は凹凸に富む。

床面は地山の黄褐色火山灰層上に茶褐色土を全面に薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね、平坦で堅固な構築状態であるが、炉址の北側に若干の起伏がみられる。

ピットは7個検出された。支柱穴と考えられるものは3本(P₁・P₃・P₇)検出されているが、整然とした配置とは言い難い。P₁は39×37cmの円形を呈し、49cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は33×33cmの円形を呈し、33cmの深度を有する。P₃東側に近接してP₆があり、P₃の補助的な役割を果たしたとも考えられる。P₆は21×17cmの楕円形を呈し、11cmの深度を有する。P₇はY125号住居址との重複部にあり、上面を破壊されているため、残存値のみをあらわす。58×47cmの楕円形を呈し、23cmの深度を有する。断面形は底面が平坦な逆台形状を呈し、北側に小規模な落ち込みを有する。この他、北壁中央に位置するP₂は棟持柱と考えられる。40×39cmの円形を呈し、40cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂西側に近接してP₅が位置する。P₂の補助的な役割を果たしたとも考えられる。23×23cmの円形を呈し、26cmの深度を有する。P₄は南壁下中央に位置し、入口施設に関わる柱穴とも考えられる。58×56cmの円形を呈し、42cmの深度を有する。断面形は漏斗状を呈する。

炉址は住居址のほぼ中央に位置すると考えられる。南東部の一部を破壊されるものの、長軸長135cm、短軸長80cmの不整な広がりを持ち、長軸方位はN-29°-Wをさす。床面からの掘り込みは北側の最深部で11.5cmをはかり、すり鉢状の断面には凹凸が著しい。火床部の主体は掘り込みの北側の角礫がL字状に組まれた箇所にあたると思われるが、地山が焼け込んだ焼土範囲は、南側へも大きな広がりを持ち、85×51cmの長方形を呈する。覆土は二層からなり、第1層は極小礫と白色粒子を少量含むきめ細かい黒褐色土で、砂粒がまじる第1層も存在する。第2層は、



第187図 Y107号住居址実測図

焼土とパミスを含む淡茶褐色土である。

遺物の出土状況

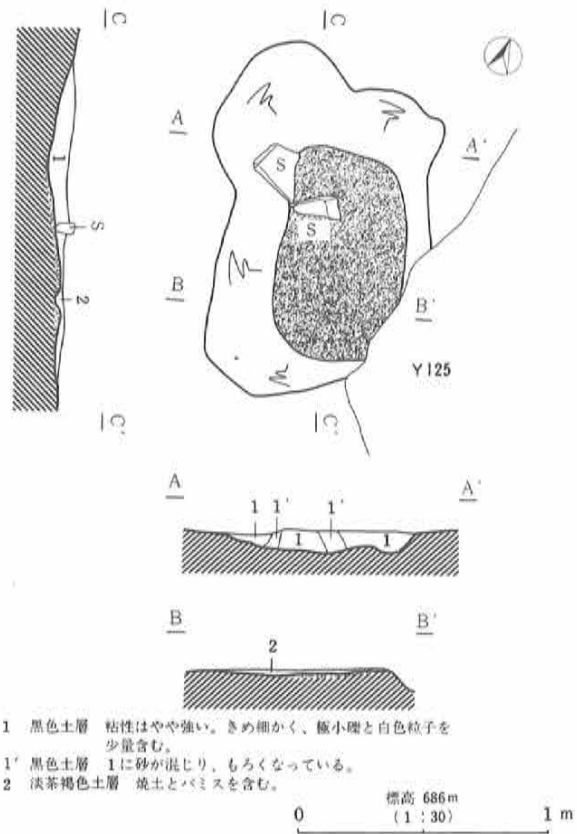
本住居址からは破壊箇所が多いにもかかわらず、多量の弥生土器が出土している。これらの遺物は床面上、あるいはその直上の覆土中から出土したものであり、本住居址の共伴遺物と見做すことができる。図化した遺物の分布は、P₁内・その周辺に特に集中する(189-1・2・3・5・6・7)傾向がみられる他は比較的散漫な分布である。

189-1・2・3・6(壺・甕)がP₁の覆土上層内、189-5(甕)がP₁の西側、189-7(甕)がP₁の北側から出土している。また、189-4(甕)がP₆の底面、190-1(壺)が南側の床面上に分布している。190-1(壺)はS13との重複部に接する箇所に位置しているため、同一個体の破片190-2・3・4(壺)などが、S13内に陥落している。この他、190-7・16(壺・甕)が北区から、190-10・13・14・15・17・19(壺・甕)が南区、190-5・6・8・9・11・18(壺・甕)が覆土内から出土している。

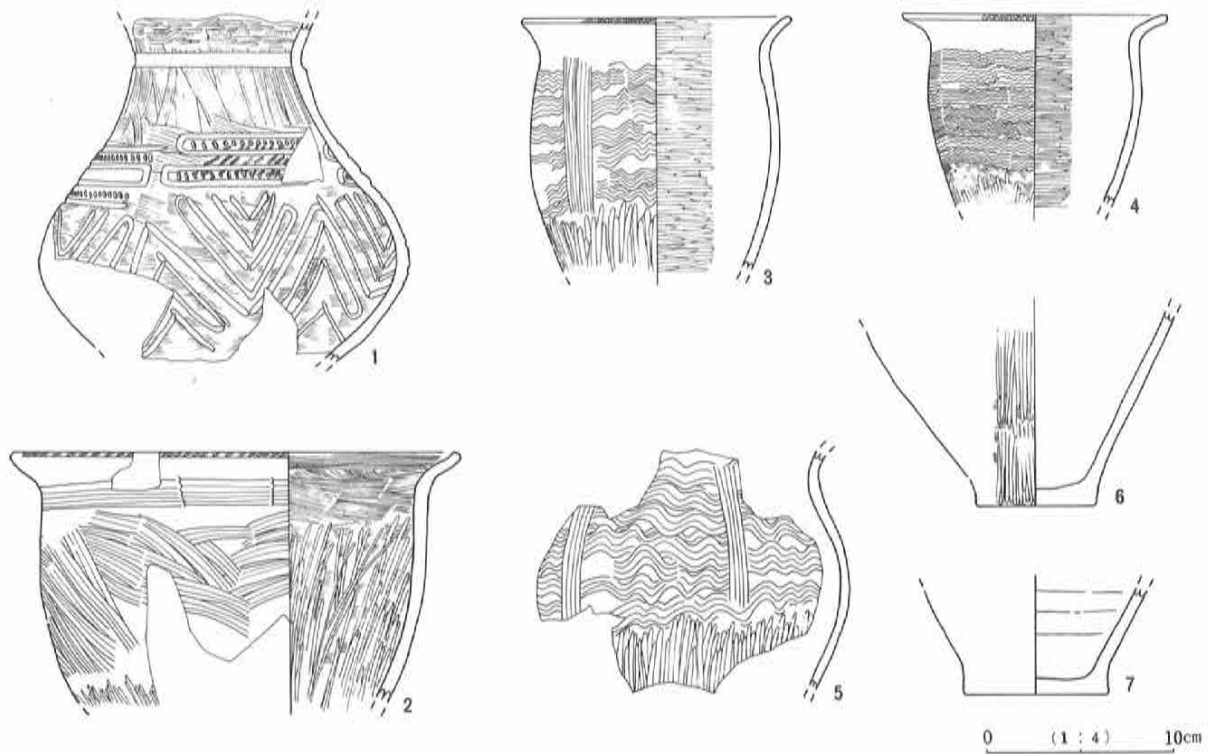
遺物(第189・190図、図版 六十六)

本住居址の出土遺物には弥生土器があり、器種には壺・甕がある。

壺は全形態がわかる資料はない。口縁部形態は受口口縁をもつ190-5・6がみられる。5は単純に外反する口縁部が上端でやや内弯して、受口状となるもので、外稜はもたない。6はしっかりとした受口状を呈するが、立ち上がり部の外稜はやや不明瞭である。いずれも口縁部はLR縄文を地文とした篋描連続山形文が、5には1条、6には2条施されている。189-1は頸部から底面までの形態はわかるが、口縁部が受口になるか単純に外反するかわからない。頸部はやや太く、胴部は強く張り出し、下位で最大径をもつ。文様は頸部はごく太めの篋描横走平行線が1条施され、胴部は上位にLR縄文を地文とした篋描流水文状の2段の矩形区画内に篋描刺突文が充填されている。また、胴部中～下位にかけては篋描連続三角文が施されている。外面調整は胴部中～下位にかけてはヘラミガキが施されるため、刷毛目調整が磨消されているが、胴部上位は刷毛目調整が明瞭に残っている。190-1は190-2・3・4と同一個体であり、細頸壺と考えられる。文様は欠損する頸部、残存する胴部上位～下位まで隔なく施されると考えられ、胴部上位はLR縄文を地文とした直線状の篋描垂下文が斜位に施されて文様帯が区画され、文様帯間には篋描刺突文が上下一列に充填されている。胴部中位はLR縄文を地文として上・下に篋描横走平行線文が各3条、その空間に、篋描連続山形文が2条施されている。胴部下位はLR縄文を地文とした篋描連弧文を施し、連弧文下端を篋描沈線で結んで、三角形に区画している。外面調整はヘラミガキが顕著であり、部分的に赤色顔料の付着がみられる。この他、頸部にLR縄文を地文として篋描横走平行線文を3条施して文様帯を区画し、上位の文様帯中に、篋描刺突文をめぐらした190-7、頸部にLR縄文を地文として篋描横走平行線文を4条施して文様帯を区画し、中段の文様帯中に篋描連続山形文を1条めぐらせた190-9、胴部に明瞭に残る刷毛目調整痕上に篋描横走平行線文・連続山形文・鋸歯状の連続三角文(斜走文充填)が施される190-8、胴部の篋描横走平行線文で区画された文様帯中に竹管状の刺突文を充填した篋描連続山形文が施される190-



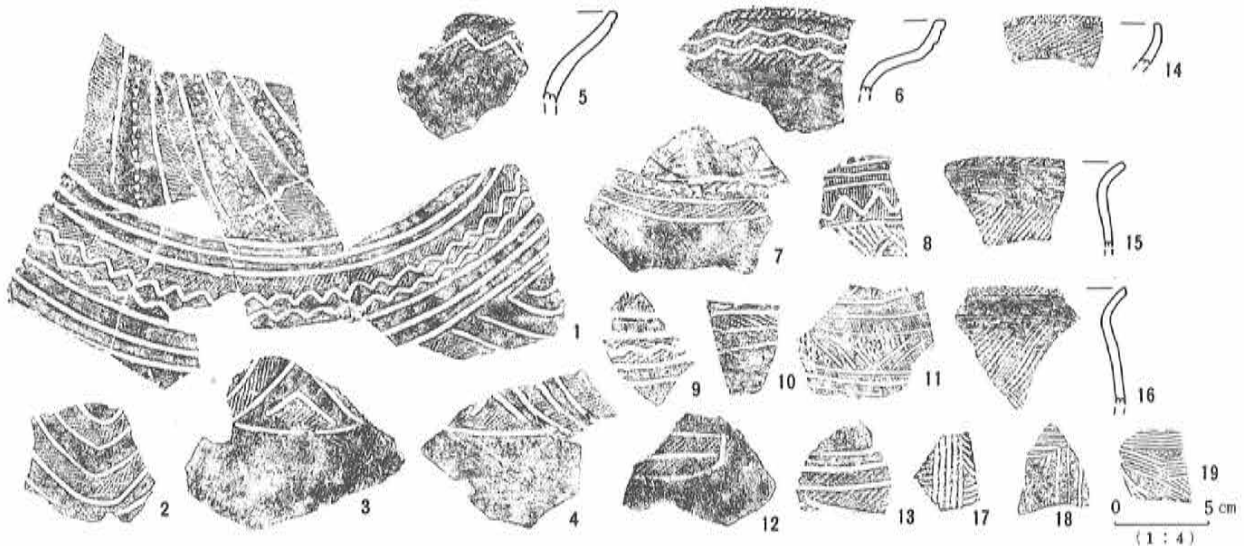
第188図 Y107号住居址炉址実測図



第189図 Y107号住居址出土土器実測図

第43表 Y107号住居址出土土器観察表

標号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調	整	備	考
189-1	壺	— <18.5> — (19.6)	頸部はやや太く、胴部は下位で強く張り最大径を有する。	内) 頸部に横位のヘラミガキ、胴部以下は横位のハケメ調整が施されている。 外) 斜位および横位のハケメ調整→頸部に横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に1条の太い横走沈線が施され、胴部に径を5等分するヘラ描流水文状矩形区画の下にヘラ描連続三角文が施されている。流水文状矩形区画の内部には、LR縄文が施された後、ヘラ描による連続刺突文が充填されている。		破片実測A No 5	
189-2	甕	24.0 <13.2> —	口縁部は内弯気味に外反し、胴部はほとんどふくらまずに収束し、口唇部は面取りされている。口径に比して器高はあまり高くない。	内) 斜位および横位のハケメ調整→胴部以下に縦位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位および横位のハケメ調整→文様施文→胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文、頸部に不規則で不連続性の6本一組の描描横光平行線文、胴部は雑な4本一組の描描斜走直線文が施されている。		回転実測A No 5、N区	
189-3	甕	14.4 <13.4> —	口縁部は短く外反し、胴部は中位で軽くふくらむ。口唇部は面取りされている。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部以上にヨコナデ、以下は斜位のハケメ調整→文様施文→胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文、頸部から胴部に5本一組の描描波状文(右回り)が上から下へ施された後、等間隔4箇所5本一組の描描垂下文1条ないし2条により縦割り区画されている。		回転実測A No 5、N区	
189-4	甕	(14.0) <10.4> —	最大径は口縁部にある。口縁部は短く強く外反し、胴部は中位上方で僅かにふくらみ、口唇部は面取りされている。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部以上に横位のハケメ調整、胴部下位は斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にキメの粗いLR縄文、頸部から胴部に5本一組の描描波状文(右回り)が上から下へ施されている。		回転実測B No 3	
189-5	甕	— <12.4> —	胴部中位は割合大きくふくらむ。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施された後、胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 5本一組の描描波状文が基本的には上から下へ施された後、5本一組の描描垂下文が施されている。		破片実測B No 4	
189-6	甕	— <10.3> 6.4		内) 磨減著しく不明。 外) 斜位のハケメ調整→丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。		回転実測A No 5、N区、S区	
189-7	甕	— <6.2> 3.8	内面に粘土紐の接合痕が観察できる。	内・外面とも磨減著しく不明。		回転実測B No 1	



第190図 Y107号住居址出土土器拓影図

11、胴部にLR縄文を地文とした楕円形の区画をもつ190-12、胴部にLR縄文を地文とした篋描横走平行線文が施される190-10・13などがある。

甕は口径が大きく、器高がやや低い、ずん胴でやや大形の形態をもつ189-2と、口径に対して器高が高くスリムで中形の形態をもつ189-3・4があり、いずれも単純口縁である。破片資料も190-15・16は単純口縁を有し、受口口縁はごく細片の190-14のみである。

189-2は口縁部は短く内弯気味に外反し、胴部はあまりふくらまない。口唇部は面取りされて、縄文が施され、頸部は櫛描横走平行線文（右回り）、胴部は粗雑な櫛描斜走直線文が施されている。189-3・4は口縁部が短く外反し、胴部は中位で軽くふくらむ。口唇部はいずれも面取りされ、胴部には中位まで櫛描波状文が施されており、3には櫛描垂下文（直線状）が加えられる。3と同様な文様構成は189-5、190-17などにもみられる。この他、単縁口縁の189-15・16は口唇部は面取りされて縄文、胴部は櫛描斜走直線文が横位羽状に施されている。受口口縁の189-14はLR縄文のみが施されている。

この他、甕には明瞭に残る刷毛目調整上に櫛描の「コ」の字重ね文（最も内側の「コ」の字重ね区画内には櫛描波状文を垂下させている。）が施される190-18、頸部に櫛描横走平行線文、胴部に櫛描斜走直線文が縦位羽状に施される190-19や、189-6・7などの胴部下位から底部までの破片もみられる。

尚、本住居址内からは、鉢・高坏などの赤色塗彩される破片がほとんど出土していないことには注目すべきであろう。

以上、本住居址の相伴遺物は弥生時代中期後半に位置づけられる。これらの遺物が本住居址の所産期をそのままあらわすとするにはやや難がある。しかし、住居址の床面が埋没する以前に投棄された遺物であることは明らかであり、このような出土状態を尊重して、本住居址の所産期は出土遺物とほぼ同時期の弥生時代中期後半としておきたい。

(小山)

47) Y108号住居址

遺構 (第191・192図、図版 六十七・六十八)

本住居址は台地南端の東側、と・な-15・16・17グリッド内に位置している。第7号周溝と重複関係を持ち、北西部を大幅に破壊されている。また、東壁の北側の壁は既に大方が削平されている。

プランは東西の短軸長479cm (推定)、南北の長軸長612cm (推定)、東壁長558cm、西壁長565cm (推定)、南壁長388cm (推定)、北壁長416cm (推定)の隅丸長方形を呈し、床面積は27.35㎡をはかる。長軸方位はN-7°-Eをさしている。

覆土は薄く、削平されている箇所が多く、一層のみ確認できた。パミスを少量、黄色火山灰を多量に含む、茶褐色土である。

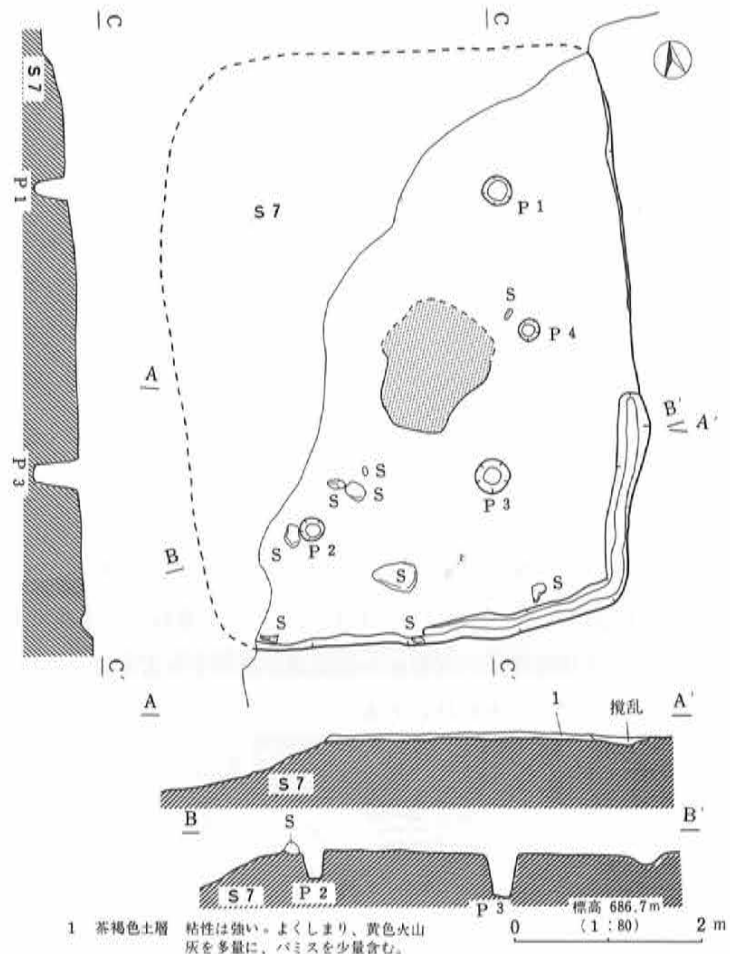
確認面からの壁高は0.5~10.5cmをはかり、先述したように東壁北側は削平されているため、極く僅かしか残っていない。南壁の残りは比較的良好で、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されているが、やや軟弱で、壁面も平滑なつくりとは言い難い。

壁溝は東壁南側から、南壁中央にかけて検出された。溝幅11~22cm、深さ1~9.5cmをはかり、東壁側にくらべ南壁側の方が浅い。

床面は地山の砂層まで平坦に掘り窪めたのち、茶褐色土を全面に薄く埋め戻し、叩きしめた「叩き床」が施されている。やや軟弱な構築状態であり、細かい凹凸が各所でみられる。また、南壁ぎわから北壁に向って徐々にレベルが下がり、傾斜する傾向がみられる。

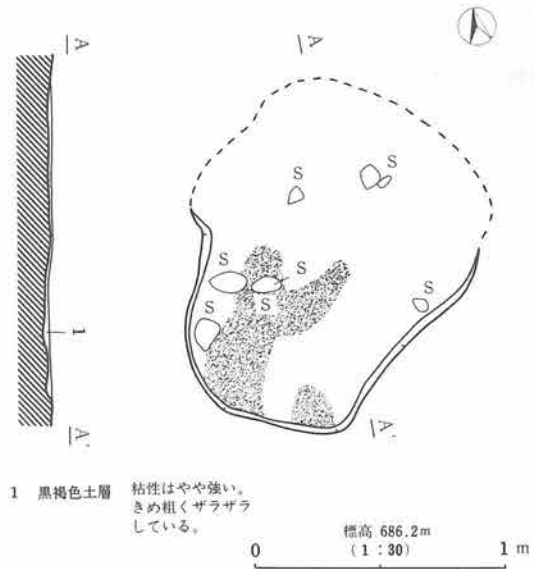
ピットは4個検出された。このうち、P₁~P₃が支柱穴であり、北西側の柱穴を第7号周溝の破壊によって欠くものの、往時は整然とした配置であったことが推定される。P₁は31×31cmの円形を呈し、33cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は24×25cmの円形を呈し、29cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂の西側には礫が置かれている。P₃は36×37cmの円形を呈し、45cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は炉址の東側に位置する。性格については不明である。極めて小規模で22×22cmの円形を呈し、20cmの深度を有する。

炉址は住居址の長軸、短軸の交点(住居址の中央)よりもわずかに南東寄りから検出された。床面からの掘り込みが最深部でも4cmと浅いため、北側の立ち上がりが不明確でプランも推定の域を脱しないが、長軸長137cm、短軸長104cmの不整な楕円形を呈すると考えられ、長軸方位はN-28°-E



第191図 Y108号住居址実測図

をさす。床面からの掘り込みは先述したように最深部でも4cmをはかる程度で、床面をわずかに削り取った程度の状態である。このため、断面形もほぼ直線的である。火床部は掘り込みの南側に偏在していたと考えられる。掘り込み南側には、長さ73cm、幅21cmの二又に分かれる不整な焼土の広がりが見られ、地山が真赤に焼け込んだ状態であった。焼土の範囲内には3個、範囲外には4個の礫が分布しているが、この性格については不明で、原位置を留めているものであるかは判然としない。覆土はやはり極く薄く、きめが粗くザラザラした黒褐色土一層のみからなる。いずれにせよ、遺存状態の極めて悪い炉址である。



1 黒褐色土層 粘性はやや強い、きめ粗くザラザラしている。

第192図 Y108号住居址炉址実測図

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているが、量は極めて少なく。総数でも36片にすぎない。完存品は全く存在せず、細かく破損した土器片ばかりであるが、大方は床面から出土したものであり、本住居址の相伴遺物と考えて大過ない。

全体の遺物分布はやはり極めて散漫な状態であり、集中して分布する箇所もみられない。

193-3・4（壺・甕）が北区から、193-1・5（壺・甕）が南区から、193-2・6（壺・台付甕）が床面上からそれぞれ出土している。

（小山）

遺物（第193図）

本住居址からは、弥生土器・石器が出土している。そのうち6点を拓影し図化した。弥生土器の器種には壺・甕・台付甕がある。

壺には、193-1の頸部から胴部の破片があり、篋描平行直線文が2本みられ、その中に竹管状の工具による刺突文がなされており、その下方には、櫛描斜走直線文が施されている。内面は刷毛目調整が行われており、黒色化の傾向がみられる。193-3の口縁部破片は、口唇部面取りされてLR縄文が押捺されており、細頸壺の口縁部と思われる。内面の調整はヘラミガキがみられる。193-4は壺の胴部の破片で、篋描平行直線文が幾本か廻っており、その中にLR縄文が施されている。内面は剝離が激しく調整は不明である。

甕には193-2の受口口縁部破片があり、外面に明瞭な陵を有し、内面は緩やかに屈曲している。外面の文様は、地文としてLR縄文が施されており、連弧文風の篋描連続山形文が3本横位に施されている。193-5の胴部破片は、櫛描波状文と櫛描斜走直線文が施された甕の破片である。

193-6は円形浮文が貼付けられた「コ」の字重ね文の小片であるが台付甕になる可能性がある。

以上、本住居址出土の土器から所産期を決定することは、たいへん難しく、これらの破片は弥生時代中期後半の特徴を有しているとだけいえる。

（高村）



第193図 Y108号住居址出土土器拓影図

48) Y109号住居址

遺構 (第194・195図、図版 六十七・六十八)

本住居址は台地の南端部の中央西寄り、な・に・ぬ-23・24グリッド内に位置している。第119・125・140・141号土坑に北壁、東壁中央、西壁南半を破壊されている。また、北・西壁は削平をうけているため、全く残っていない。

プランは東西の短軸長460cm (推定)、南北の長軸長564cm (推定)、東壁長550cm、西壁長568cm (推定)、南壁長380cm (推定)、北壁長382cm (推定) の隅丸長方形を呈し、床面積は23.92㎡をはかる。長軸方位はN-1°-Wをさし、ほぼ南北を向いている。

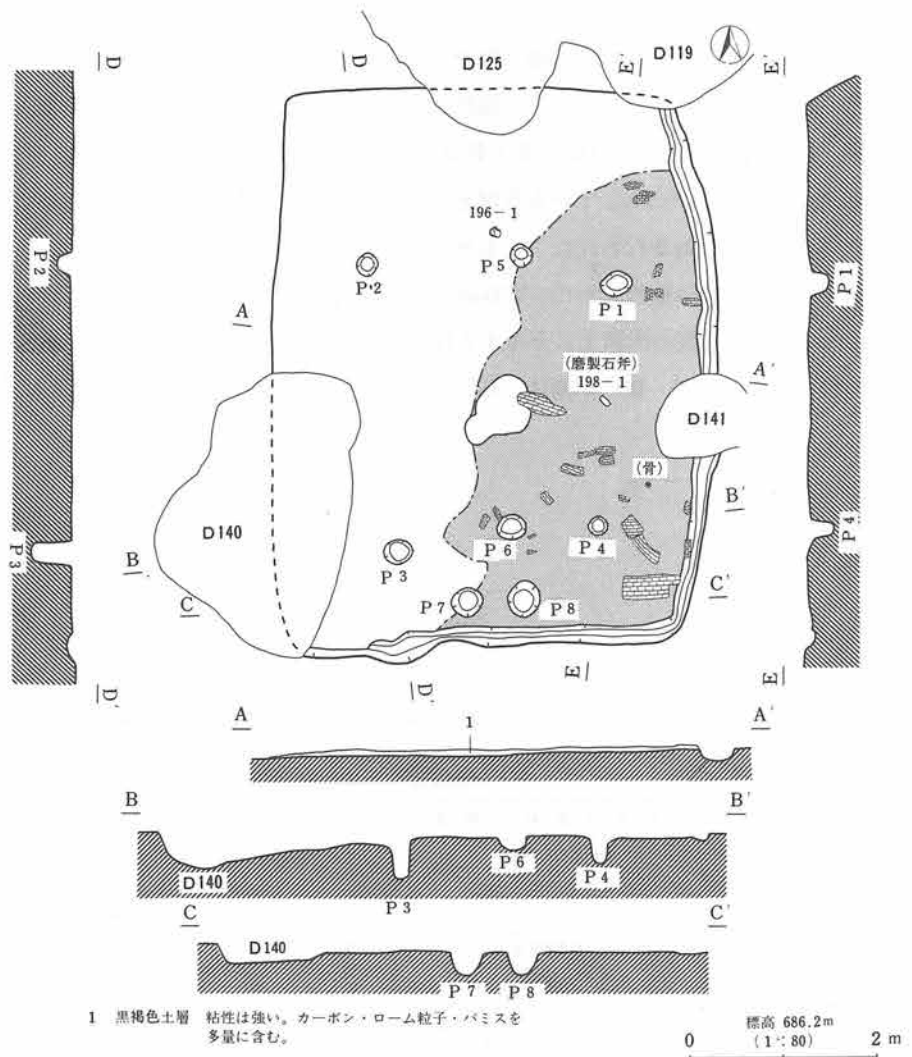
覆土は薄く、削平されている箇所が多い。カーボン、ローム粒、パミスを多量に含む黒褐色土一層のみからなる。

確認面からの壁高は1~10cmをはかり、南壁の残存状態が比較的良好で、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層をそのまま利用して構築されているが、やや軟弱である。壁面はおおむね平滑であり凹凸も少ない。

壁溝は東壁下から南壁下のコーナー付近までめぐる。溝幅9~13cm、深さ1~6cmをはかり、南壁下が若干深い。

床面は地山の黄褐色火山灰層まで掘り窪めたのち、黒褐色土を全面に薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が全面に施されている。おおむね、フラットな構築状態で、全面にわたって極めて堅固であった。

ピットは8個検出された。主柱穴と考えられるのは、P₁~P₄の4本であり、整然とした配置ではあるが、南側へ全体的に片寄っている。P₁は25×33cmの東西に長い楕円形を呈し、17cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は25×23cmの円形を呈し、15cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は25×31cmの楕円形を呈し、41cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は19×19cmの円形を呈し、26cmの深度を有する。断面形はU字形



第194図 Y109号住居址実測図

を呈する。P₅・P₆は、P₅がP₁・P₂間の中央やや北側、P₆がP₃・P₄間に位置している。支柱穴に準じる役割を果たしていたことも想定できる。P₅が23×21cmの円形、P₆が26×30cmの楕円形を呈し、それぞれ15cm、14cmの深度を有する。以上、本住居址の柱穴と考えられるピットは、平面形態、深度ともに小規模なものが多い。P₇・P₈は南壁下中央に並んで位置しており、入口施設に関わる柱穴と考えられる。P₇が29×32cmの円形、P₈が37×33cmの楕円形を呈し、深さはそれぞれ、21cm、23cmをはかる。支柱穴にくらべると大規模である。

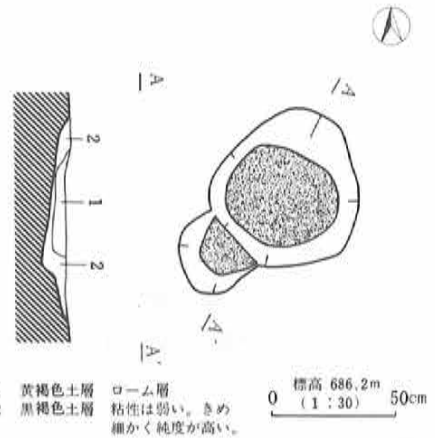
炉址は住居址の長軸・短軸の交点上（住居址の中央）の南寄りから検出された。プランは長軸64cm、短軸56cmの円形を呈してお

り、南西側にテラス状の長さ24cmの張り出し部を有する。床面からの掘り込みは最深部で11cmをはかり、断面形はやや起伏を有するものの、おおむね弓状を呈する。火床部は掘り込み底面の地山砂層をそのまま利用しており、ほぼ中央部に位置する。25×31cmの楕円形の焼土範囲を有しており、赤く焼け込んでいる。炉縁石はみられない。焼土範囲はテラス部分にもあり、広範囲にわたって燃焼がおよんでいたことが伺われる。覆土は二層からなり、第1層はローム主体の黄褐色土、第2層はきめの細かい黒褐色土である。

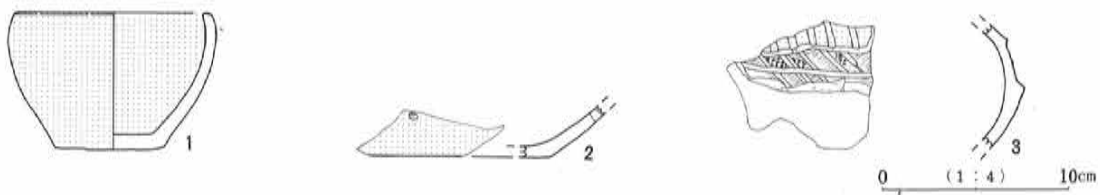
遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器、獣骨、炭化材が出土しているが、量は多くない。炭化材の分布は住居址の東半分のおよそ全域にわたっており、微粒化したカーボン粒とともに床面に密着した状態であった。確定はできないが、炭化物範囲内から、196-3土製品や、猪の幼獣骨、鹿の角・四肢骨、磨製石斧198-1などの祭祀的な内容も含まれる遺物が出土している状況を考えると、本住居址内において、住居使用時か、廃絶時、廃絶後いずれかの時期に祭祀行為が行われたことも考えられる。

弥生土器の分布は散慢でかつ、完存品はなく細片が多い。図化したものは一応共伴遺物と考えられる。196-1（鉢）がP₅の北西側の床面上に分布する他、197-3・7・8・10・11・12・18（壺・甕）が北区、197-2・5・6・13・14・15（壺・甕）が南区、197-1・4・9（壺）が床面上から出土している。



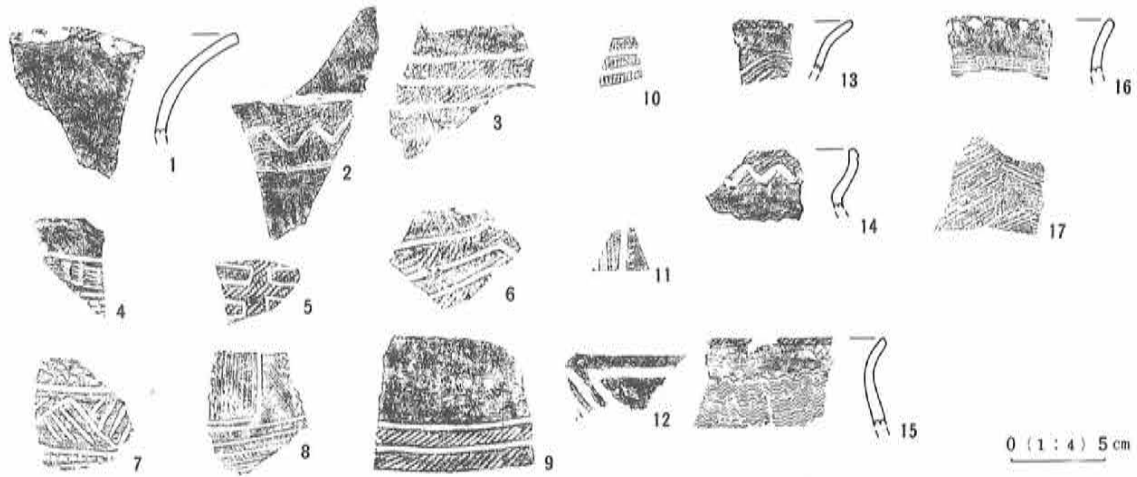
第195図 Y109号住居址炉址実測図



第196図 Y109号住居址出土土器実測図

第44表 Y109号住居址出土土器観察表

標号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調	整	備	考
196-1	鉢	10.6 7.3 6.2	口縁部は内弯気味に立ち上がる。	内・外面ともに赤色塗彩・斜位のヘラミガキが施されている。		図転実測B Na2、N区	
196-2	鉢	- <2.4> -	口辺部に焼成後の1孔を有する。	内) 磨滅著しく不明。 外) 赤色塗彩・ヘラミガキが施されている。		破片実測B	
196-3	?	-	破片中央は剥落しているが、剥落した表面下にもヘラ描による文様が施されている。	剥落前の文様部分には赤色塗彩が施され、無文部分は横位のヘラミガキが施されている。		破片実測B S区	



第197図 Y109号住居址出土土器拓影図

遺物 (第196・197・198図、図版 六十八)

本住居址の出土遺物には弥生土器、土製品、石器、獣骨がある。土器は完存品が少なく、破片品が多い。

弥生土器の器種には壺・甕・鉢がある。壺には単純口縁の口唇部に縄文、篋描の刻目が施される197-1、頸部にLR縄文を地文として篋描横走平行線文・連続山形文が施される197-2、LR縄文を地文として篋描横走平行線文が施される197-3、3と同様な文様が胴部に施される197-9・10、頸部に篋描横走平行線文・刺突文、櫛描簾状文が施される197-4、胴部に工字文状の篋描矩形区画がみられる197-5、LR縄文を地文として篋描連弧文が施される197-6、篋描横走平行線文・連続三角文・刺突文を施した197-7などがある。197-8・11は胴部の櫛描垂下文(直線状)を篋描文で区画しており、8には篋描の刺突文が周囲にめぐらされ、11の胴部中位には擬縄文上に篋描横走平行線文がめぐらされている。

197-12は器肉が厚く、縄文土器かもしれない。

甕には単純口縁の197-13・15・16・17と受口口縁の197-14がある。単純口縁の13・15・16・17はいずれも口唇部が面取りされ、縄文をもつ。16・17には篋描の刻目が加えられている。頸～胴部文様は13・17に縦位羽状の櫛描斜走直線文、15には櫛描波状文、16には櫛描横走平行線文が施されている。197-18は13・17と同様の文様をもつ。受口口縁の197-14は口縁部にLR縄文、篋描連続山形文が施されている。

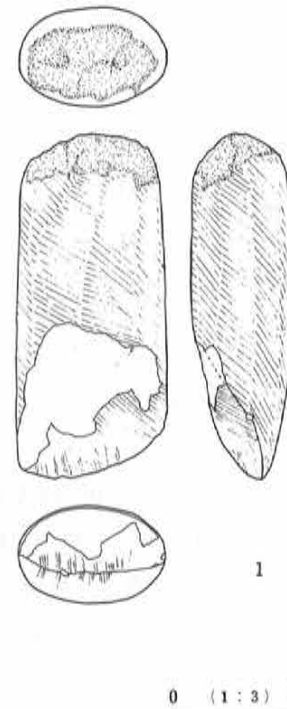
鉢196-1は椀状を呈し、内外面に赤色塗彩、ヘラミガキが施されている。196-2は口辺部下位に焼成前の1孔が施される。

土製品196-3は剝落した器表面の内側にも文様を有する。何であるかはわからない。

石器は磨製石斧198-1がある。閃緑岩製太型蛤刃石斧である。

獣骨は猪の幼獣の下顎骨と鹿の角・四肢骨がある。1000°C以上の加熱があったと考えられ、猪の下顎骨は皮と肉が付いた状態で焼かれたためか歪みが著しい。

以上の出土遺物から本住居址の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。(小山)

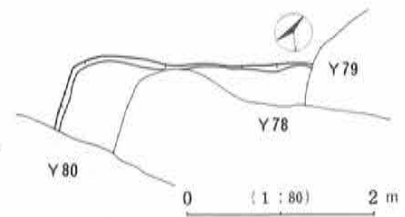


第198図 Y109号住居址出土石器実測図

49) Y110号住居址

遺構 (第199図)

本住居址は台地の南部東側の、さ-26グリッド内に位置している。Y78・79・80号住居址と重複関係をもち、これらのすべてに破壊されているため、北西コーナーから北壁の西側の一部とその周辺の床面が残存するのみである。このため、平面形態・規模は不明である。



第199図 Y110号住居址実測図

覆土は確認できず、確認面からの壁高は3~21cmをはかる。壁体は地山の黄色火山灰層を利用して構築されており、軟弱で細かい凹凸がみられる。床面からの立ち上がりは緩く、壁溝は検出されなかった。

床面は西側は地山の黄褐色火山灰層、東側は黒褐色土を埋め戻して構築されており、西側は軟弱であるが、東側は黒褐色土を強く叩きしめており、堅固である。

ピット・カマドは検出されなかった。

遺物は極く少量で散布する程度である。住居址との共伴性も薄い。

(小山)

遺物 (第200図)

本住居址からは弥生土器が少量出土しており、器種には壺・甕がある。

壺には篋描横走平行線文の施される200-1、櫛描垂下文(波状)の周囲を篋描垂下文で区画される200-2、LR縄文を地文として、篋描連続山形文の施される200-3、櫛描波状文と櫛描垂下文(波状)の施文される200-5があり、甕には櫛描横走平行線文の施される200-4があることから、本住居址の所産期は中期後半と考える。(三石)



第200図 Y110号住居址出土土器拓影図

50) Y111号住居址

遺構 (第201図、図版 六十九)

本住居址は台地の南東端、に・ぬ-15グリッド内に位置している。第7号周濠と重複関係をもち、北側を残して大半が破壊されている。

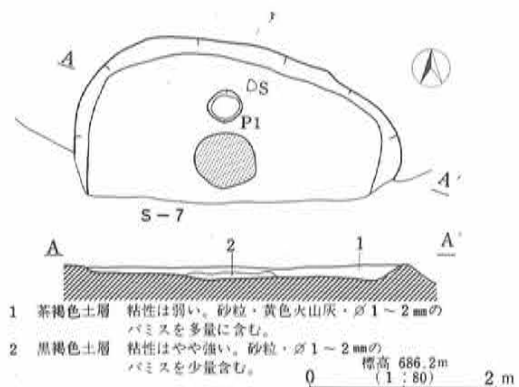
プランは北壁長299cmを測るやや小型の住居址であるが、詳細については不明である。

覆土は二層からなる。第1層は覆土の大方を占める茶褐色土、第2層は住居床面中央に小範囲で薄い広がりをもつ黒褐色土である。

確認面からの壁高は5.5~16.5cmを測り、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は大方が地山の砂層を利用して構築されており、もろく崩れ易い。壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層上に黒褐色土を全面に薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されており、軟弱である。

ピットは炉址の北側から1個検出されており、棟持柱と考えられる。33×39cmの円形を呈し、44cmの深度を有する。



第201図 Y111号住居址実測図

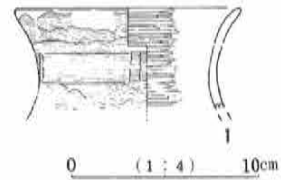
炉址は住居址の北側にあり、65×58cmの楕円形を呈する地床炉である。長軸方位はN-73°-Wをさす。遺物分布は極めて散漫である。(小山)

遺物(第202・203図、図版六十九)

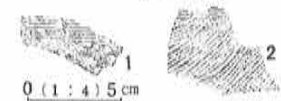
本住居址から出土した弥生土器は極めて少量であり、器種には甕がある。202-1は暖く外傾外反する口縁部を有し、口縁部と胴部に楕描波状文が施された後、頸部に楕描簾状文(2連止め)が右回りに施文される。この他、楕描簾状文、楕描斜走直線文の施文される203-1・2が出土している。

以上、本住居址の所産期は、出土した遺物から弥生時代後期と考える。

(三石)



第202図 Y111号住居址出土土器実測図



第203図 Y111号住居址出土土器拓影図

第45表 Y111号住居址出土土器観察表

挿番号	図号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
202-1		甕	(12.0) < 5.3 -	口縁部は「弓」状に外反する。	内) 横位のヘラミギキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 9本一組の楕描波状文が上から下へ施された後、頸部に11本一組の楕描簾状文(2連止め・右回り)が施されている。	回転実測B N区、S区

51) Y112号住居址

遺構(第204図、図版 六十九)

本住居址は台地の南端中央、ぬ・ね-21・22グリッド内に位置している。Y64号住居址、第10号周溝と重複関係を持ち、これらに大半を破壊されているため、西壁の一部とその周辺の床面のみしか残存していない。

このため、平面形態、規模は全く不明である。

確認面からの壁高は1.5~13cmをはかり、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、軟弱である。

壁溝は西壁残存部の北側半分以上にあり、11~30cmの幅、2~6cmの深さを有する。

床面は地山の黄褐色火山灰層上に茶褐色土を埋め戻し、叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね、フラットで堅固だが、各所に細かい凹凸がある。

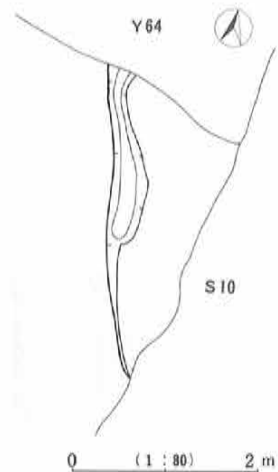
炉址、ピットは検出されなかった。遺物の分布は極めて散漫で量も少ない。

遺物(第205図)

本住居址からは弥生土器が極く少量出土しており、器種には甕がある。

甕には楕描斜走直線文の施される205-1、楕描波状文を楕描垂下文で区画される205-2などがあることから中期と考えるが明確ではない。

(三石)



第204図 Y112号住居址実測図

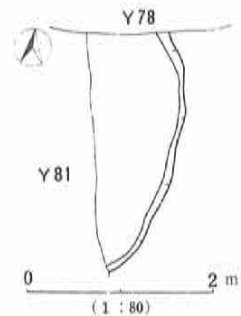


第205図 Y112号住居址出土土器拓影図

52) Y113号住居址

遺構(第206図、図版 六十九)

本住居址は台地南部の西側、し・す-25グリッド内に位置している。Y78・81号住居址と重複関係を持ち、これらに大半を破壊されるため東壁の一部及びその周辺の床面のみしか残存しない。このため、平面形態、規模は不明であり、ピット、炉址も検出されていない。確認面からの壁高は3~6cmを測り、壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築され、軟弱である。床面も地山の黄褐色火山灰層を叩きしめて構築されており、おおむね、堅固で平坦である。遺物は検出されず、所産期も決し難い。(小山)



第206図 Y113号住居址実測図

53) Y114号住居址

遺構 (第207・208図、図版 七十・七十一)

本住居址は台地の南西端、に・ぬ・ね-25・26グリッド内に位置している。Y115・116号住居址と重複関係を持ち、これらを破壊している。

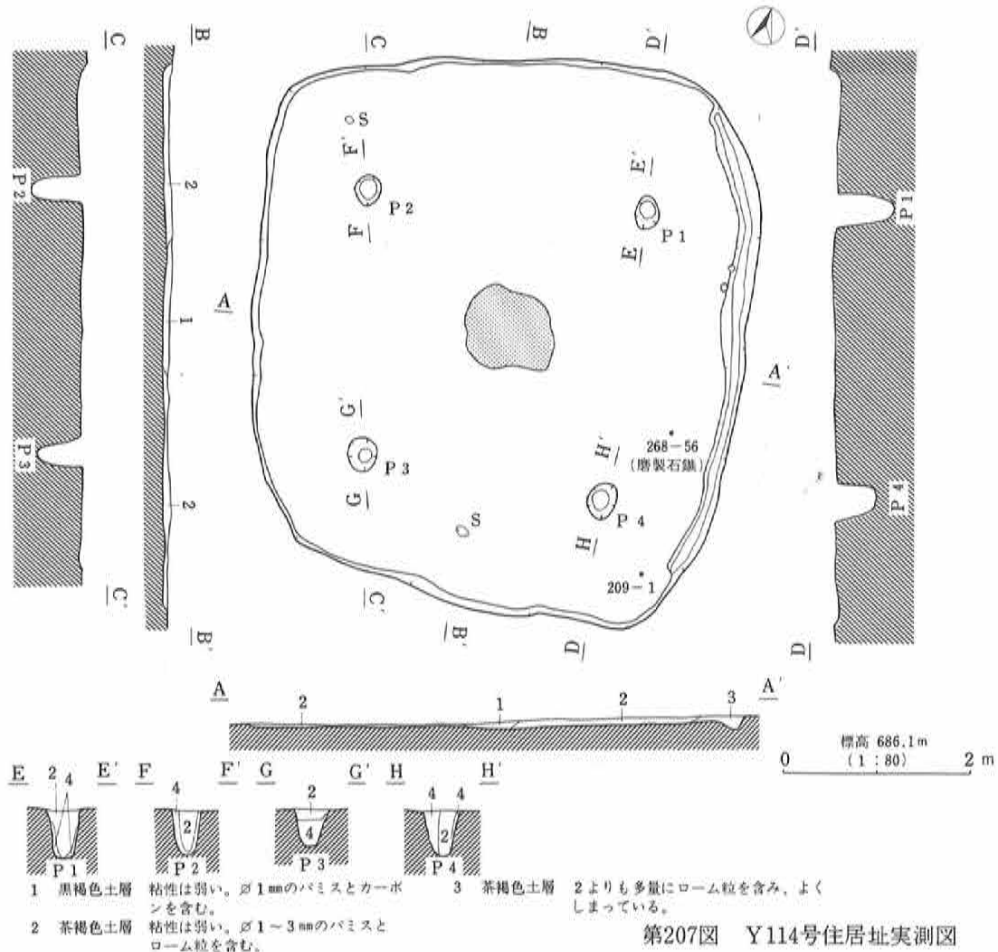
プランは東西の短軸長495cm、南北の長軸長566cm、東壁長554cm、西壁長466cm、南壁長362cm、北壁長466cmの歪んだ隅丸長方形を呈し、床面積は25.87㎡をはかる。長軸方位はN-12.5°-Wをさしている。

覆土は薄く、三層からなる。第1層は住居の中央部に堆積する。カーボン・パミスを含むきめの細かい黒褐色土である。第2層は中央部を除いて住居内に広い範囲で堆積する。パミスとローム粒子を含む茶褐色土である。第3層は東壁下にのみみられる。ローム粒子を多量に含む茶褐色土である。

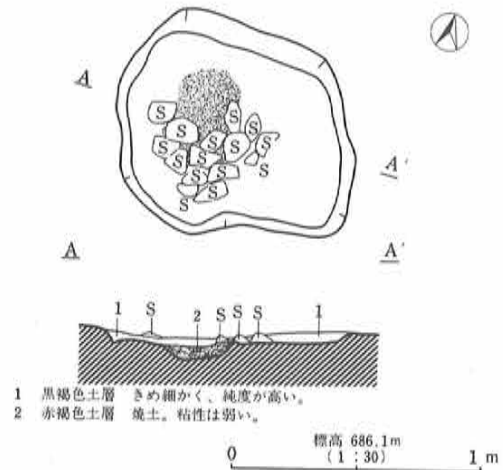
確認面からの壁高は2~12cmをはかり、西壁から南壁にかけては削平が著しく、全体的に床面からの立ち上がりは緩い。壁体はY115号住居址と重複する北壁と、Y116号住居址と重複する南東コーナーはそれぞれの住居址の覆土を利用し、他は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されている。いずれもおおむね堅固な構築状態であるが凹凸がみられ、平滑とは言い難い。

壁溝は東壁下のみから検出された。溝幅10~20cm、深さ3~5.5cmをはかり、側面、底面の掘り込みはおおむね平滑である。

床面は地山の黄褐色火山灰層の上に茶褐色土を全面に薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。Y115号住居址と重複する北側部分はこの茶褐色土がやや厚く埋めもどされており、また、Y116号住居址との重複箇所はY116号住居址の覆土2層、茶褐色土を利用して構築されている。おおむね、平坦な構築状態であり、また、堅固であるが、Y116号住居址との重複部分については極めて軟弱である。



ピットは4個検出された。いずれも主柱穴であり、4本(P₁～P₄)が整然と配置されている。P₁は37×27cmの南北に長い楕円形を呈し、59cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は34×27cmの楕円形を呈し、52cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は35×31cmの楕円形を呈し、47cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は39×32cmの楕円形を呈し、43cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。ピット内覆土はいずれも二層からなり、パミスとローム粒を含む茶褐色土(第2層)と砂粒主体の黄褐色土(第4層)によって構成されている。P₁・P₂・P₄は柱痕を有しており、P₁で23cm、P₂で18cm、P₃で15cmの径を有する木柱の存在が想定できる。



第208図 Y114号住居址炉址実測図

炉址は住居址の長軸・短軸の交点(住居址の中央)よりもやや東側から検出された。長軸長117cm、短軸長58cmの不整な楕円形を呈し、長軸方位はN-67°-Wをさす。床面からの掘り込みは火床部にあたる西側部分は一段低く掘り込まれており、12cmの深さを有する。他はおおむね5cmの深さで掘り込まれ、底面は平坦である。火床部は先述したように掘り込みの西側に設定されている。一段深い掘り込み内に黄褐色火山灰土を埋め戻して平坦化し、南側周辺には15個の円礫が密集した状態で置かれている。黄褐色火山灰、円礫はともに焼け込んでいる。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が出土しているが、量は極めて少ない。全体の遺物分布も極めて散漫であり、集中する箇所はみられない。209-4(壺)が南東コーナー床面上、268-56(磨製石鏃)が東壁中央よりやや南寄りから検出されており、その他209-4・5・6(甕)がI区、209-1・2・3(壺)がIV区から出土している。(小山)

遺物(第209図)

本住居址から出土した弥生土器で図示し得たものは、拓影図7点のみであり、器種は甕・台付甕・壺・鉢であった。拓影図209-1～6は小片のため全器形を知り得ないが、甕においては胴部櫛描斜走直線文の施された7と、帯と帯の間に間隔を有す櫛描波状文の施文された6。壺は1～4があり、1は篋描横走平行線文とLR縄文の組み合わせ、2は横位に走る3条の沈線の中に、櫛による刻目が連止め風に施文され、3は篋描横走平行線文と山形文の組み合わせ、4は櫛描横走平行文と、略等間隔の櫛による列点文の組み合わせ、5は台付甕であり、口唇部縄文、口縁部縄文と篋による山形文、胴部「コ」の字重ね文と円形浮文が施されている。他に赤色塗彩の鉢、無頸壺の破片がある。以上の遺物をもって本址は弥生中期後半に比定できる。(羽毛田伸)



第209図 Y114号住居址出土土器拓影図

54) Y115号住居址

遺構 (第210・211・212図、図版 七十・七十一)

本住居址は台地の南西端、に・ぬ-25・26グリッド内に位置している。Y114号住居址と重複関係を持ち、住居址の南側の上面を破壊されている。

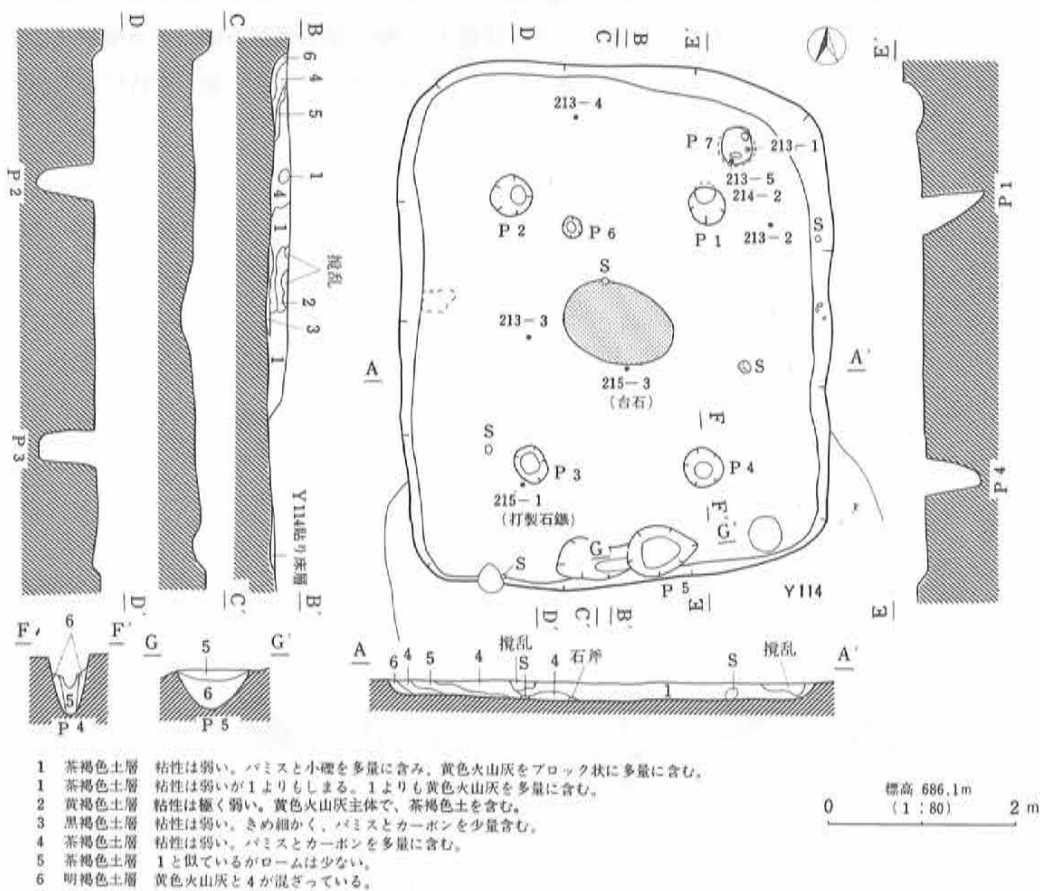
プランは東西の短軸長420cm、南北の長軸長524cm、東壁長426cm、西壁長476cm、南壁長414cm、北壁長354cmの隅丸長方形を呈し、床面積は21.05㎡をはかる。長軸方位はN-5°-Wをさす。

覆土は六層からなり、自然堆積とは考え難い。第1層は住居址の南東側に偏在する。ブロック状の黄色火山灰と小礫、パミスを多量に含む茶褐色土である。黄色火山灰が多めの第1'層もある。第2層は住居址の中央北寄りの最上層部に小範囲に堆積する。黄褐色火山灰主体で茶褐色土を含む。第3層は住居址の中央北寄りの床面上に小範囲に薄く堆積する。カーボンとパミス少量含むきめの細かい黒褐色土である。第4層は住居址の北西側に偏在し、第5層をサンドイッチ状にはさんで堆積する。パミスとカーボンを多量に含む茶褐色土である。第5層は第1層よりもロームブロックの含有量が少ない茶褐色土である。第6層は住居址の北、西壁ぎわに認められる。黄褐色火山灰と第4層がまざった明褐色土である。

確認面からの壁高は3~25.5cmをはかり、Y114号住居址との重複部の壁体もわずかではあるが残る。床面からの立ち上がりは緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、おおむね、平滑で堅固な状態である。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の黄褐色火山灰層まで掘り窪めたのち、明茶褐色土を全面に薄く戻して叩きしめた「叩き床」



第210図 Y115号住居址実測図

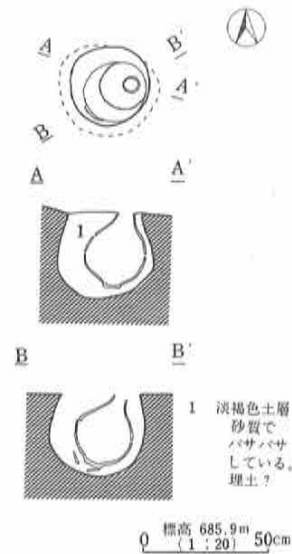
が施されている。おおむね、フラットで堅固な構築状態である。

ピットは7個検出された。支柱穴は4本(P₁~P₄)が整然と配置されている。P₁は42×39cmの円形を呈し、65cmの深度を有する。断面形はU字形を呈するが、垂直な掘り込みでなく、全体には南側へ傾いている。P₂は43×46cmの円形を呈し、61cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は40×34cmの楕円形を呈し、60cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は41×43cmの円形を呈し、59cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。ピット内の堆積状態はP₄のみ抽出した。第5・6層の二層からなり、明瞭な柱痕が残る。P₅は南壁下中央に位置する。77×52cmの楕円形を呈し、西側に溝状の広がりをもつ。深さは42cmをはかり、断面形は先端部が尖り気味のV字形を呈する。覆土は第5・6層の二層からなり、下層にあたる6層内からは酸化第二鉄と、それが付着した礫(215-2)が出土している。P₆はP₂の南東側に位置し、22×20cmの円形を呈する。深さは50cmをはかる。

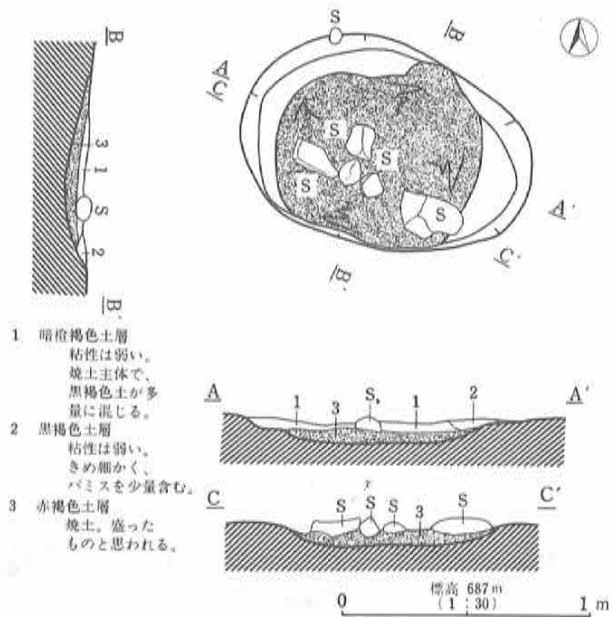
P₇は北東コーナーに位置する屋内埋葬用の墓坑である。30×32cmの円形を呈し、深さは32cmをはかる。断面形は袋状に内側が広がっている。墓坑内には壺棺がやや傾いた状態で埋設されている。壺棺は完形の1個体の壺形土器を口~頸部、頸~胴部上位、胴部上位~底部にきれいに打ち欠いて形成されている。頸部~胴部上位、胴部上位~底部は、遺骸を収納するため、広い間口を必要としたために打ち欠かれたものと考えられる。収納口の径は約19cmをはかる。これに先に打ち欠いた頸~胴部上位破片を蓋として被覆しており、上端部にあたる頸部の口元は、床面上に露出している。棺内は検出時においてほぼ空洞の状態であったことから、往時はこの上に何らかの有機質の蓋が覆われていたものと理解される。口縁部~頸部の破片は壺棺の底部に当てがわれており、台座的な役割を果し、壺棺を固定している。墓坑内の埋土は砂質で粘性がほとんどない淡褐色土を利用しておりよくしまっている。棺内から骨片は検出されなかったが、被葬対象は遺骸をそのまま葬ったものであるならば、胎児か幼児、洗骨葬

であるならば、胎児、幼児~成人までを想定することができる。壺棺内から人骨が検出される事例が少ないため、明確な位置づけはできないが、県内では唯一人骨が検出された竹田峯遺跡第2号特殊遺構の後期の壺棺内では、6カ月程の胎児骨が埋納されており(三石他 1986)、本住居址の壺棺も胎児か幼児が被葬されていた可能性が高いことを一応指摘しておきたい。

炉址は住居址中央より、わずかに東寄りから検出された。東西の長軸長117cm、南北の短軸長58cmの楕円形を呈



第211図 Y115号住居址P₇内壺棺微細図

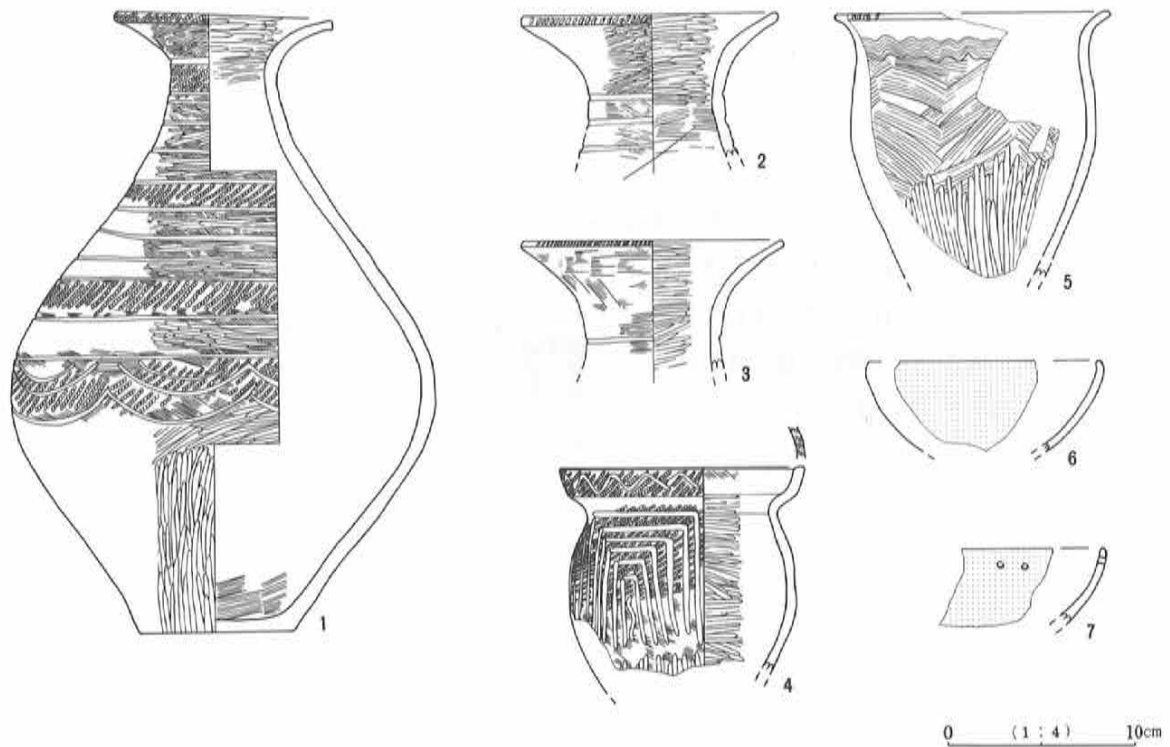


第212図 Y115号住居址炉址実測図

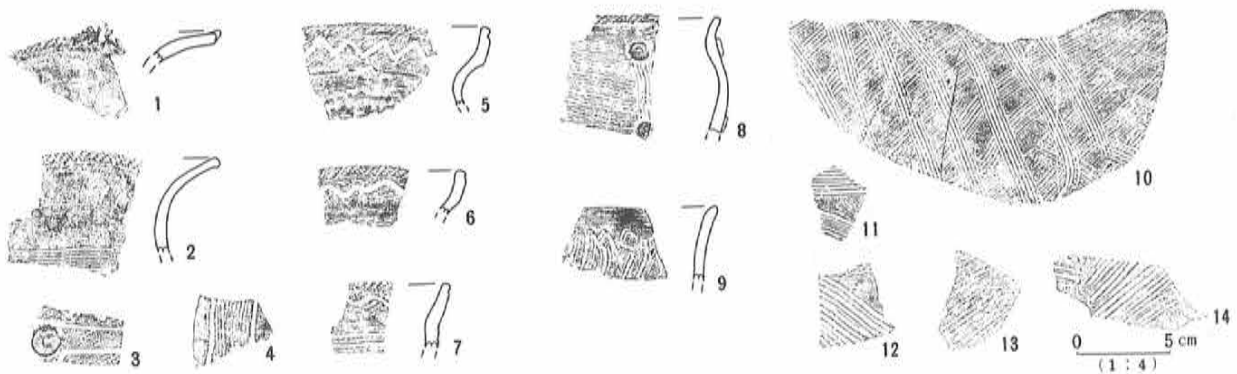
し、長軸方位はN-72°-Wをさす。床面からの掘り込みは最深部で11cmをはかり、断面形は弓状を呈する。掘り込み内底面には93×76cmの楕円状に黄褐色火山灰（第3層）が5cm内外の厚さで埋め戻され、火床部が設けられている。火床部は真赤に焼け込んでおり、東西方向横一列に4個、その中央北側に1個の礫をL状におき、炉縁石としている。覆土は薄く、暗橙褐色土（第1層）、黒褐色土（第2層）の二層からなる。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器・酸化第二鉄（赤色顔料）が出土しており、量が多い。土器・石器とも床面上、ピット内から出土したものを共伴遺物として図化したため267-39（打製石鏃）、270-80（剥片利用石器）は除外した。213-1（壺）は壺棺として利用されたものでP₇内から出土しており、213-5（甕）、214-2（甕）はP₇上から出土している。また、P₅内からは213-6・7（鉢）など赤色塗彩された土器とともに、酸化第二鉄（赤色顔料）のかたまり、酸化第二鉄（赤色顔料）が付着し、土器調整に使用された可能性がある搬入礫215-2などが出土しており、暗示的である。この他213-2（壺）も出土している。213-4（台付甕）が北壁下のほぼ中央、213-3（壺）が炉址南西側、215-1（打製石鏃）がP₅南側にみられる他、215-3（台石）は炉縁石として利用されていたものである。他に214-1・3・4・5・7・11・13がI区、214-6・8がII区、214-9・14がIII



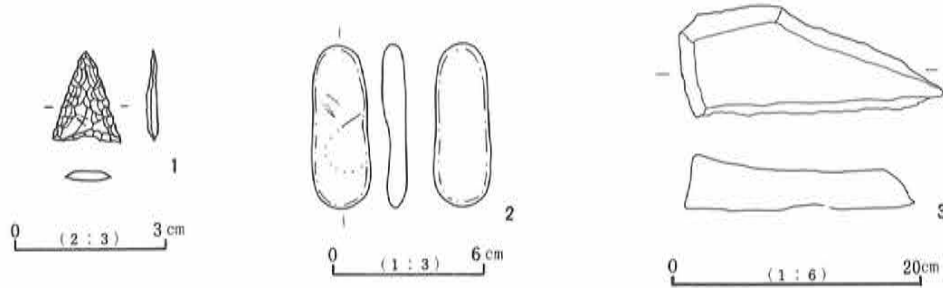
第213図 Y115号住居址出土土器実測図



第214図 Y115号住居址出土土器拓影図

第46表 Y115号住居址出土土器観察表

挿番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
213-1	壺	11.6 33.0 8.0 22.6	最大径は胴部中位下方にある。口縁部は細い頸部から強く外反し、胴部で大きく張りソノパン玉状を呈する。口唇部は面取りされている。	内) 頸部以上は横位のヘラミガキ、頸部以下は横位のハケメ調整が施されている。 外) 胴部下位以下は丁寧な縦位および斜位のヘラミガキ、それ以上は斜位のハケメ調整の後、横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部以下胴部中位以上はヘラ描横走平行線文11条によって一次区画され、その下にヘラ描連弧文が施され、最上位の文様帯から3帯毎にLR縄文が地文として使用され、連弧文もLR縄文を地文としている。口唇部には簡描刻目文が施されている。	完全実測 No.1
213-2	壺	13.6 <7.6> -	口縁部はラップ状に外反し、口唇部は面取りされている。	内) 頸部以上は丁寧な横位のヘラミガキ、頸部は横位のハケメ調整が施されている。 外) 口縁部は丁寧な斜位および横位のヘラミガキ、頸部は斜位および横位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部に簡描刻目文、頸部にヘラ描横走平行線文(残存3条)が施されている。	回転実測A No.4
213-3	壺	(14.0) <6.8> -	口縁部はラップ状に外反し、口唇部は面取りされている。	内) 丁寧な斜位および横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位および横位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部にヘラ描横走平行線文、口唇部にヘラ描刻目文が施されている。	回転実測B No.11、III区、Y114I区
213-4	台付甕	13.0 <11.0> -	最大径は口縁部と胴部では等しい。口縁部は太い頸部から外反し、上端でしっかりした受口状に立ち上がる。胴部は中位でふくらみ偏球状を呈する。口唇部は面取りされている。	内) 口縁部は斜位および横位のハケメ調整、頸部以下は丁寧な斜位および横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部は横位のハケメ調整、以下は斜位のハケメ調整、その後胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部、口縁部、胴部上位にLR縄文を施した後、口縁部にヘラ描連続山形文、胴部に6重のヘラ描「コ」の字重ね文が施されている。	回転実測B No.7
213-5	甕	(14.6) (14.1) -	最大径は口縁部にある。口縁部は短く外反し、胴部は中位よりやや上方でかくふくらむ。	内) 胴部中位以上は丁寧な横位のヘラミガキ、中位以下は丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部は横位のハケメ調整、胴部は斜位のハケメ調整、その後胴部下位は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 胴部上位に7本一組の簡描斜走直線文が縦位羽状(右回り)に上から下へ施され、その後頸部に7本一組の簡描波状文が施されている。	破片実測A No.2
213-6	鉢	(6.2) (4.8) -	口辺部は内弯して開く。口唇部は面取りされている。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・口辺部上位は横位のヘラミガキ、下位は縦位のヘラミガキが施されている。	破片実測A P ₅
213-7	鉢	- (4.1) -	口辺部に焼成後の穿孔が2孔ある。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	破片実測B P ₅



第215図 Y115号住居址出土石器実測図

区、214-2・12がIV区から出土している。

遺物(第213・214・215図、図版 七十一)

本住居址の出土遺物には、弥生土器・石器・酸化第二鉄(赤色顔料塊)がある。

弥生土器の器種には壺・甕・台付甕・鉢がある。

壺はすべて単純口縁を有する細頸壺である。213-1は先述したように意図的に三分割され、壺棺として利用されたものである。口縁部は細い頸部から強く外反してラップ状に開き、胴部は中位下方で大きくふくらみ、最大径をもつ。口唇部は面取りされ、縄文が施されている。また、頸部から胴部中位まで11本の簡描横走平行線文で区画して文様帯を形成し、上から1帯目、5帯目、9帯目の文様帯内にLR縄文を充填し、他の文様帯内は丁寧にヘラミガキされている。胴部中位下方は3段構成のLR縄文を地文とした簡描連弧文が施されている。

213-2・3は口縁部から頸部までは残存し、以下は欠損する。いずれも口縁部はラッパ状に外反し、口唇部は面取りされ、櫛描の刻目文が施されている。頸部文様帯もほぼ同様と考えられ、篋描横走平行線文のみが施され、2は3条、1は1条まで確認できる。

この他、面取りされた口唇部上に縄文が施された後に篋状工具によって二つに分割された三角形状の突起をもつ214-1、面取りされた口唇部に縄文、頸部に櫛描横走平行線文、全面に赤色顔料の付着がみられる214-2、胴部に篋描文で区画された直線状の櫛描垂下文が施される214-4などがみられる。また、外面調整はすべての壺が、ヘラミガキによって刷毛目調整を消している。

甕は全形態がわかるのは213-5のみであるが、単純口縁を有する213-5、214-8・9と受口口縁を有する214-5・6・7がある。

単純口縁の213-5は口縁部は短く外反し、胴部は中位上方で軽くふくらむ、ややスリムな形態を有する。口唇部には4単位で一組の櫛描の刻目文が一定の間隔をおいて施され、胴部に縦位羽状の櫛描斜走直線文、頸部に櫛描波状文(右回り)が施されている。同様な文様構成は214-12にもみられる。214-8は口縁部がゆるく、短く外反し、胴部は中位で大きくふくらむ小型品である。口唇部は面取りされ、縄文が施され、頸~胴部の櫛描波状文(右回り)は直線状の櫛描垂下文で区画されている。垂下文の上・下端はそれぞれに円形浮文(ドーナツ状)が貼付されている。214-9は口縁部がほとんど外反せず、直線的に胴部へ連なる深鉢形の形態を有する。頸部に櫛描波状文、以下に櫛描斜走直線文が施されている。

受口口縁の甕は受口部の外稜が明瞭な214-5・6、稜がとれて直線的となる214-7がある。文様は口縁部がLR縄文を地文として篋描連続山形文が1あるいは2条施される点で一致し、頸部文様は6に櫛描波状文、7に篋描横走平行線文が施されている。甕にはこの他、櫛描斜走直線文が斜格子目状に施される214-10と縦位羽状に施される胴部片214-11・13・14がみられ、13には櫛描の刻目が加えられている。

台付甕213-4はしっかりとした外稜をもつ受口口縁をもち、胴部は中位でふくらむ。小型の台部がつくと考えられる。文様は口縁・胴部ともLR縄文を地文とし、口縁部に篋描連続山形文が1条、胴部に「コ」の字重ね文が施されている。鉢213-6・7は碗状を呈し、内外面にヘラミガキ、赤色塗彩が施されている。213-7には2孔一対の穿孔がみられる。石器は、黒曜石製打製石鏃215-1、赤色顔料付着の砂岩215-2、安山岩製台石215-3がある。本址の所産は弥生時代中期後半と考えられる。

55) Y116号住居址

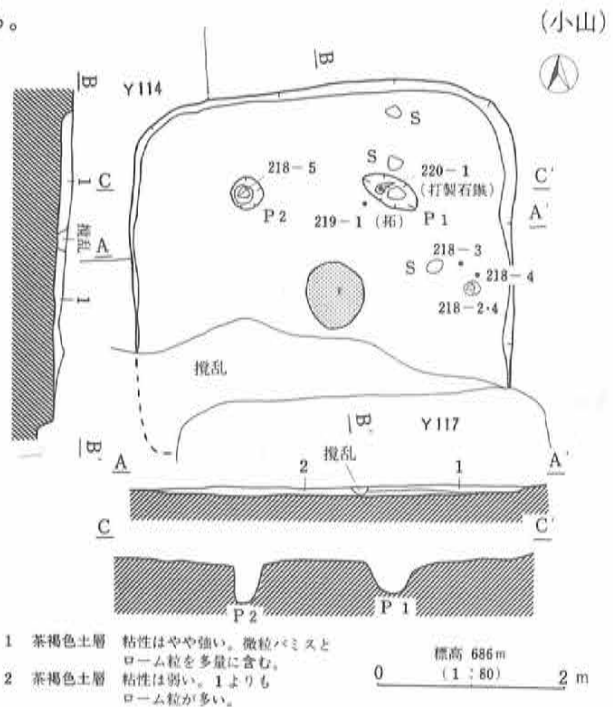
遺構(第216・217図、図版 七十二)

本住居址は台地の南西端、ぬ・ね-24・25グリッド内に位置している。Y114・117号住居址と重複関係をもち、北西部及び南側を破壊されている。また、南半部は住居址の掘り込みが浅く削平される。

プランは北壁長354cmが知られるのみで、平面形態、規模の詳細は不明である。

覆土は二層が観察された。第1層は微粒パミスとローム粒を多量に含む茶褐色土、第2層は第1層よりもローム粒子が多量に含まれる茶褐色土である。残存する部分が少ないため、自然堆積か人為堆積であるかは不明である。

確認面からの壁高は0.5~13.5cmをはかり、床面か



第216図 Y116号住居址実測図

らの立ち上がりは緩い。壁体は主に地山の黄色砂層を利用して構築されている。極めて軟弱で崩れ易く、壁面も平滑とは言い難い。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層上に黒褐色土を全面に薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。残存部は起伏が多くやや雑な構築状態であるが、軟弱であり、堅固な箇所は認められない。

ピットは2個検出された。北側2箇所に並ぶ支柱穴と考えられる。P₁は30×64cmの東西に長い楕円形を呈し、33cmの深度を有する。断面形は緩いU字形を呈する。P₂は33×33cmの円形を呈し、39cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。

炉址は住居址のほぼ中央に位置すると考えられる。70×61cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-3°-Wをさす。床面からの掘り込みは、最深部で7cmをはかり、断面形は細かい凹凸がみられるものの、おおむね弓状を呈する。火床部は掘り込み内の中央やや南側の地山上に設けられており、43×37cmの不整な焼土の広がりをも有する。覆土はきめの細かい黒褐色土一層のみからなり、覆土上北側には礫が一個出土している。炉址との関連性はうすい。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が出土している。量はあまり多くない。ピット内、床面上から出土したものは少なく、大体が覆土中からの出土であるが、床面上からはあまり高い位置にはないため、共伴遺物と見做すことができる。II区出土の272-112（打製石斧）のみを除外した。

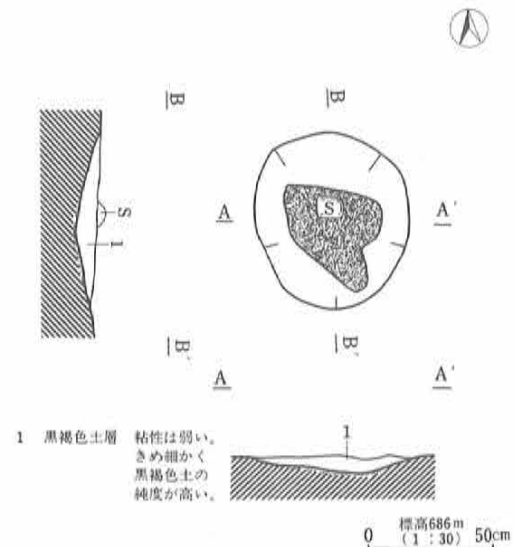
218-5（甗）はP₂内底面から出土した。本住居址内唯一の完存品である。220-1（打製石鏃）はP₂内、218-1（壺）がP₁南側から出土している。また、218-2・3・4（壺・甗）は東壁下中央からまとめて出土している。この他、219-7・11（甗）がI・II区、219-2・4・9（壺・甗）がI区、219-3・5・6（壺・甗）がII区、219-10（甗）がIV区から出土している。

遺物（第218・219・220図、図版 七十二）

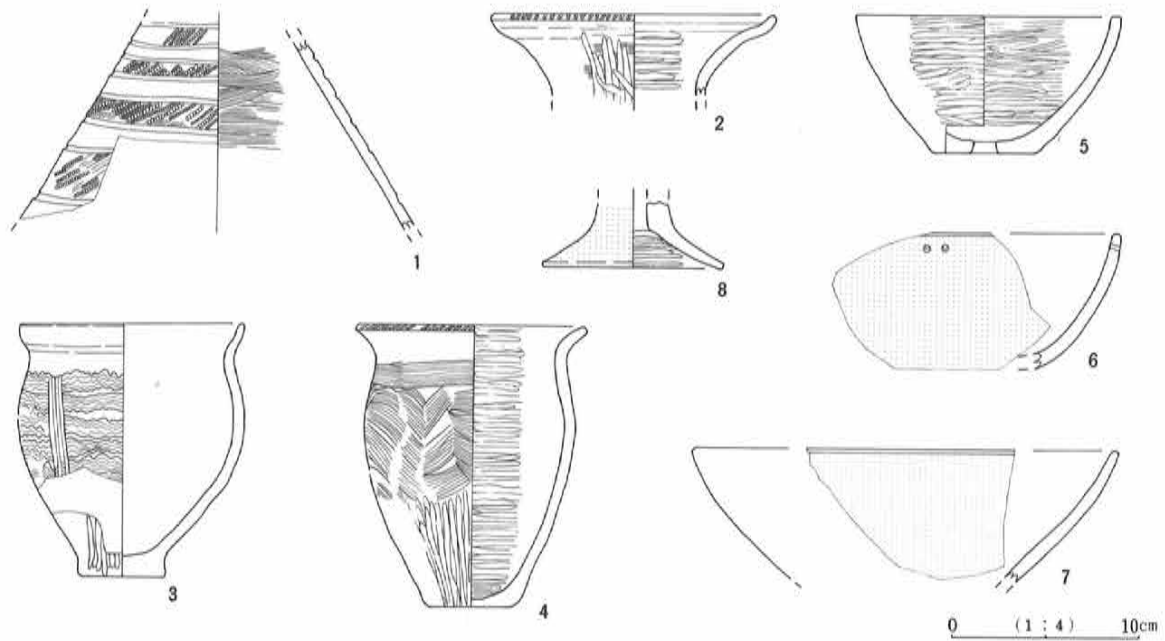
本住居址から出土した遺物には弥生土器・石器がある。

弥生土器の器種には壺・甗・甗・鉢・高坏がある。壺は受口口縁を有する218-2と単純口縁の219-4がある。218-2は口縁部が外反したのち、上端で内湾する。口唇部に縄文をもつ以外、文様はみられない。219-4は口縁部がラッパ状に外反し、口唇部に縄文が施される。この他、頸～胴部にかけて篋描横走平行線文で区画された文様帯内の一帯毎に縄文が充填されている218-1、胴部中位に篋描横走平行線文・斜走短線文が施される219-1・2、胴部に篋描横走平行線文・重弧文が施される219-3などがみられる。

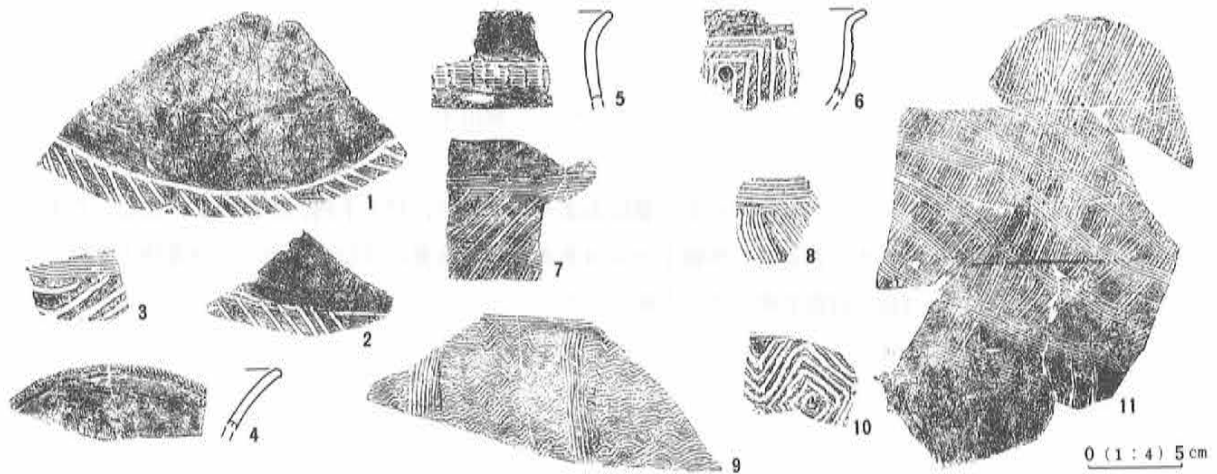
甗も受口口縁を有する218-3と、単純口縁の218-4、219-5・6・7がある。219-6は台付甗となることも考えられる。219-3は外稜がほぼとれて丸味をおびる受口口縁をもち、胴部は、中位でふくらむ。文様は胴部に篋描波状文（右回り）が施されたのち、等間隔で直線状の篋描垂下文を施して区画している。218-4は口縁部は短かく外反し、胴部は中位で小さく張る。口唇部は面取りされて縄文が施され、頸部には篋描横走平行線文、胴部には篋描斜走直線文が縦位羽状に施されている。219-5は面取りされた口唇部に縄文、頸部には篋描簾状文（等間隔止め、右回り）、胴部にはL R縄文が施されている。219-6は面取りされた口唇部に縄文、胴部にはL R



第217図 Y116号住居址炉址実測図



第218図 Y116号住居址出土土器実測図



第219図 Y116号住居址出土土器拓影図

縄文を地文とし「コ」の字重ね文が施されている。「コ」の字重ね区画の上位の頂部及び真中には円形浮文が貼付されている。また、219-7には櫛描横走平行線文・斜走直線文が施されている。同様な文様は219-8にもみられる。この他、頸部に櫛描横走平行線文、胴部に櫛描垂下文を施したのち、櫛描波状文を充填した219-9、頸部に櫛描横走平行線文、胴部に櫛描斜走直線文を斜格子目状に施した219-11、胴部に櫛描重菱形文を充填した219-10(台付甕?)などもみられる。

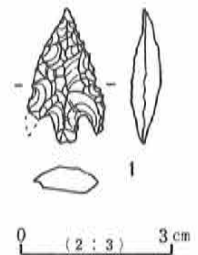
甕218-5は椀状を呈し、底部に焼成前の穿孔がみられる。内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。

鉢218-6・7は椀状を呈し、7には2孔一対の穿孔がみられる。内外面ともにヘラミガキ、赤色塗彩が施されている。高坏218-8は小型の脚部で「ハ」の字状に開き、外面に赤色塗彩が施されている。

石器は打製石鏃がある。220-1は黒曜石製の凹基有茎鏃である。

以上の共伴遺物から、本住居址の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。

(小山)



第220図 Y116号住居址出土石器実測図

第47表 Y116号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
218-1	壺	— (9.6) —		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 斜位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部から胴部は数条のヘラ描横走平行線文で一区画され、文様帯一帯毎にLR縄文で充填されている。	回転実測A I区、II区1層
218-2	壺	14.7 (5.2) —	口縁部は外反した後、上位で内弯し受口状を呈し、口唇部は面取りされている。	内) 横位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整→縦位および斜位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文が施されている。	回転実測A No.6
218-3	甕	11.9 13.5 4.3	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しく、口縁部は内弯気味にはほぼ直立し、胴部は中位上方でふくらむ。	内) 全体に丁寧なナデが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 胴部上半に5本一組の櫛描波状文(右回り)が上から下へ施された後、5本一組の櫛描垂下文が施されている。	回転実測A No.4、IV区、Y90P ₁ ・P ₂
218-4	甕	12.0 14.9 4.3	最大径は口縁部にあり、口縁部は短く外反し、胴部は中位で小さく張る。口唇部は面取りされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が施文された後、胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部に縄文、頸部に櫛描横走平行線文、胴部に櫛描斜走直線文(縦位羽状)が施されている。	回転実測A No.5・6、IV区
218-5	瓶	14.0 7.3 5.3	口辺部は内弯して開き、口唇部は面取りされている。底部に焼成前の外面から穿孔された一孔を有する。	内・外面ともに粗い横位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。	完全実測 No.1
218-6	鉢	— 7.2 —	口辺部は内弯して開き、口辺端部に2孔一対の穿孔を有する。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	破片実測B I区、II区
218-7	鉢	(22.0) (6.9) —	口辺部は内弯気味に大きく開き、口唇部は面取りされている。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	破片実測A III区
218-8	高 環	— (3.5) —	中央の孔は粘土版貼付でふさいでおり、坏部・脚部を分けず一連の成形で作られたものである。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A III区

56) Y117号住居址

遺構 (第221図、図版 七十三)

本住居址は台地の南西端、ね・の-24・25グリッド内に位置している。Y116号住居址、第10号周湮と重複関係を持ち、Y116号住居址との重複関係は明確でなく、第10号周湮に南側を削平されている。

プランは長方形か、方形を呈すると考えられるが、推定可能なのは北壁長のみで298cmを測る。詳細な規模については不明である。

覆土は既に大方が削平されていたため、未確認である。

確認面からの壁高は0～8cmをはかり、遺存状態は極めて不良である。壁体は大方が地山の砂層を利用して構築されており、床面からの立ち上がりは緩い。壁面はおおむね平滑に構築されているが、極めて軟弱で崩れ易い。

壁溝は残存部の壁下のすべてから検出されており、旧状では住居内を全周していたことも考えられる。溝幅7～36cm、深さ0～10.5cmをはかる。

床面は地山の砂層上に黒褐色土を薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が全面に施されている。凹凸が著しく、軟弱な構築状態である。

ピットは6個検出された。主柱穴は南側の破壊部分からも検出され、4本(P₁～P₄)が整然と配置されている。P₁は37×36cmの円形を呈し、34cmの深度を有する。断面形は崩れたU字形を呈する。P₂は33×35cmの円形を呈し、27cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃・P₄は残存値をあらわす。P₃は27×29cmの円形を呈し、31cmの深度を有する。P₄は29×27cmの円形を呈し、31cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。

P₅・P₆はP₁・P₂間南側に約90cmの間隔をおいて並んでいる。本遺跡内の弥生時代住居址にはこのような類例をみることができず、極めて特異な存在である。機能については全く不明である。P₅は33×36cmの円形を呈し、24cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₆は31×39cmの東西に長い楕円形を呈し、22cmの深度を有す

る。断面形はU字形を呈する。

炉址は削平部分にあたるため、検出されなかったが、住居址の中央に位置していたものと考えられる。

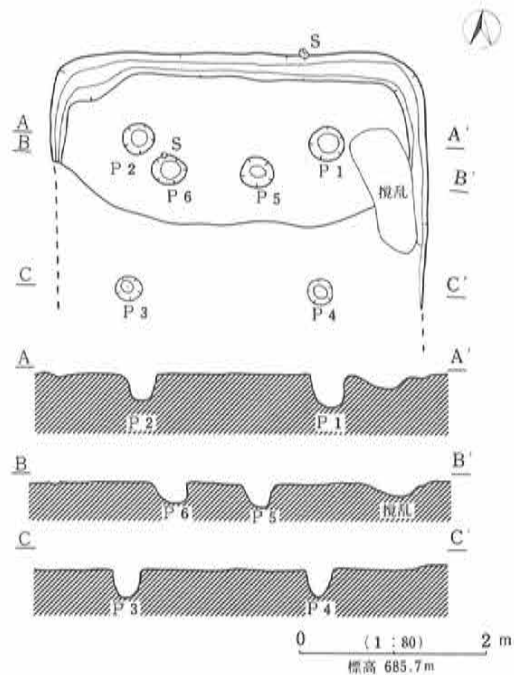
遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているがその量は極めて少なく、いずれも細片ばかりである。全体の遺物分布も極めて散漫であり、特に集中する傾向はみられない。

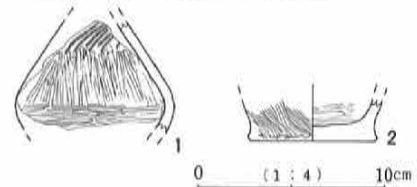
図化した遺物は本住居址の時期判定に共するものを抽出したが、確実に共伴する資料とは言い難い。

222-1 (壺)・222-2 (甕) はともに住居址覆土内から出土したものであるが、詳細な出土地点については不明である。

(小山)



第221図 Y117号住居址実測図



第222図 Y117号住居址出土土器実測図

遺物 (第222図)

本住居址から出土した遺物で、図示し得たものは、実測図2点である。

器種としては、甕と壺がある。

壺222-1は小型壺であり、残存部は頸部から胴中央にかけてであり、全器形は知り得ないが、外面の調整及び文様は、頸部にLR縄文が施こされている。胴上部から胴中央にかけて縦位のへらミガキ、

第48表 Y117号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
222-1	壺	— (5.8) — (8.4)	最大径は胴部下位にある。	内) ハケメ調整が施されている。 外) ハケメ調整→胴部上位に縦位のへらミガキ、下位に横位のへらミガキが施されている。	破片実測A
222-2	甕	— (2.2) (6.6)		内) 横位のへらミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整が施されている。	回転実測A

胴最大径の付近から下部に横位のへらミガキが施こされており、内面調整は横位の刷毛目調整がみられる。222-2は甕底部と考えられ、外面調整は斜位の刷毛目調整の後、縦位のへらミガキが粗く施こされている。内面調整は横位のへらミガキである。外面底部周縁には煤の付着が著しく観察できる。また、図示し得なかった土器片には無文の壺破片、粗い赤色塗彩の壺破片が出土しているが、櫛描文が1片も出土していないことと、1の小型壺の出土していることから、少ない遺物からではあるが、本住居址の所産期も弥生中期後半と判断しておきたい。

(羽毛田伸)

57) Y118号住居址

遺構 (第223・224図、図版 七十三)

本住居址は台地の南西部、な・に-23・24グリッド内に位置している。Y109号住居址、第123・124・125・140・154号土坑と重複関係を持ち、第124号土坑を破壊する他は、住居址の北壁東側周辺、西壁北側周辺、南壁の大半を破壊されている。

プランは東西の短軸長460cm、南北の長軸長485cm (推定)、東壁長391cm、西壁長422cm、南壁長375cm (推定)、北壁長435cmの隅丸方形を呈し、床面積は20.94㎡をはかる。長軸方位はN-29°-Eをさす。

覆土は既に大方が削平され、確認できなかった。

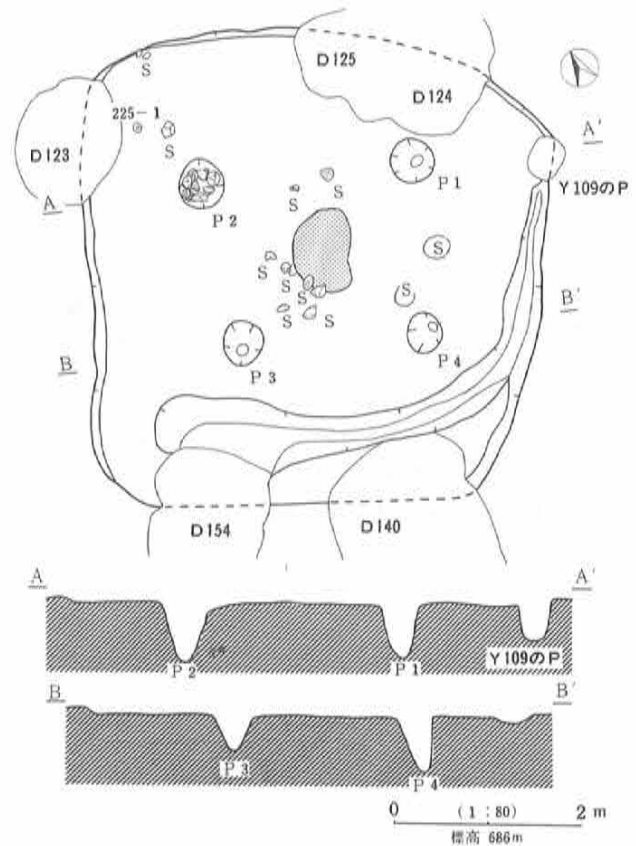
確認面からの壁高は残存部で2.5~11.5cmをはかり、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、軟弱な状態であった。

壁溝は東壁下から南壁下にかけて検出された。東壁下では壁の直下に掘り込まれているが、南東コーナー付近から、壁下よりもかなり内側の床面上に掘り込まれるようになり、溝幅も拡大する。溝幅は東壁下では11~30cm、南東コーナーから南壁下では30~82cmをはかり、床面からの掘り込み4~9cmをはかる。

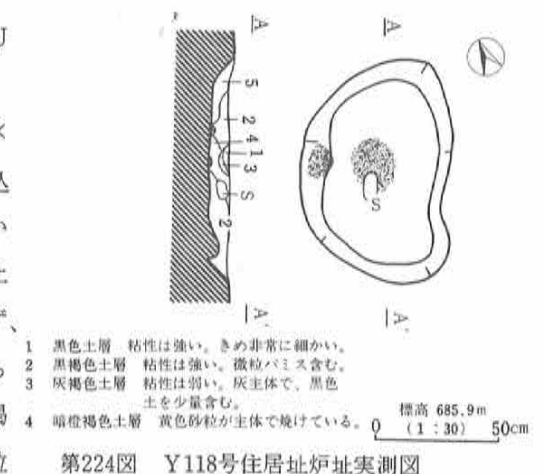
床面は地山の砂層上に黒褐色土を薄く埋め戻して平坦に叩きしめた「叩き床」が全面に施されている。おおむね堅固な構築状態であるが、凹凸の著しい箇所もみられる。

ピットは4個検出された。いずれも支柱穴であるが、配置は住居址プランに対して傾いている。P₁は48×47cmの円形を呈し、55cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は52×47cmの円形を呈し、65cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂内には拳大の礫が密集する状態で充填されている。P₃は47×43cmの円形を呈し、37cmの深度を有する。P₄は43×38cmの円形を呈し、58cmの深度を有する。断面形はいずれもU字形を呈する。

炉址は住居址の長軸・短軸の交点よりも北東側から検出された。85×59cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-48°-Eをさす。床面からの掘り込みは最深部で10cmをはかり、断面形は底面が平坦な逆台形状を呈している。火床部は掘り込みの中央部周辺に設定されていたと考えられ、焼土ブロックが小範囲で2箇所点に存在する。地山はあまり焼け込んでおらず、長期にわたる利用は考え難い。覆土は複雑な堆積を示し、五層に分けられる。第1層はきめの細かい黒色土、第2層は微粒のパミスを含む黒褐色土、第3層は灰主体で黒色土は少量含む灰褐色土、第4層は黄色砂粒



第223図 Y118号住居址実測図

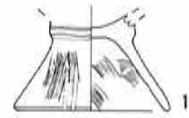


第224図 Y118号住居址炉址実測図

が主体土である。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているが、その量は多くない。また、集中して分布する箇所もみられない。225-1（台付甕）が北西コーナー床面上、他は覆土内からの出土である。



0 (1:4) 10cm

(小山) 第225図 Y118号住居址出土土器実測図

遺物（第225・226図）

本住居址から出土の弥生土器で、図示し得たものは7点（実測図1点、拓影図6点）であり、器種には甕・台付甕・壺・鉢・高坏がある。台付甕225-1は台部が残存しており、接合部に一条の凸帯を有し、外面に煤の付着が観察でき、脚付鉢の可能性もある。拓影図においては弥生中期後半の様相を示した土器である。図示し得な



第226図 Y118号住居址出土土器拓影図

ったものにY78住出土の73-6と類似した壺胴上部破片があるが、刺突文は工具の違いからか、痕跡が三角形を呈す。以上の遺物から本住居址の所産期も弥生時代中期後半に比定されよう。（羽毛田伸）

第49表 Y118号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
225-1	台付甕	— (5.0) 8.4	台部は「ハ」の字状にはほぼ直線的開き、接合部に突帯が貼付されている。	内) 台部に縦位のハケメ調整、鉢部に黒色研磨風のミガキが施されている。 外) 縦位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.1

58) Y119号住居址

遺構（第227図、図版 七十四）

本住居址は台地南部の中央西寄り、こ・さ-20・21グリッド内に位置している。第2号溝状遺構と重複関係を持ち、北西コーナーから南東コーナーにかけて斜走する第2号溝状遺構によって住居址の中央部をほとんど破壊されている。

プランは東西の短軸長251cm（推定）、南北の長軸長281cm、東壁長268cm（推定）、西壁長248cm（推定）、南壁長240cm、北壁長200cmの平行四辺形に近い隅丸方形を呈し、床面積は6.85㎡（推定）をはかる超小規模な住居址である。長軸方位はN-16°-Wをさす。

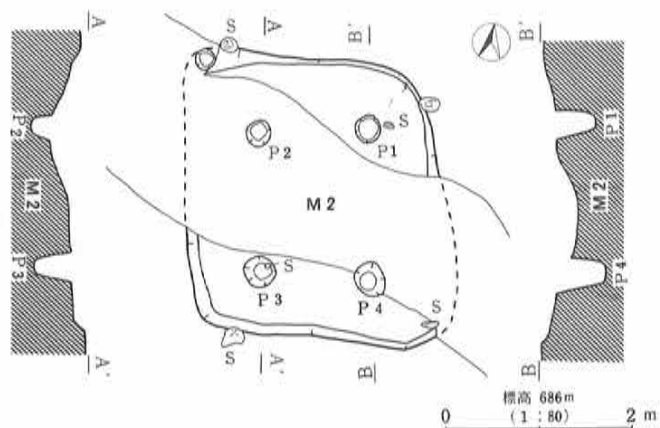
覆土は既に削平されており、未確認である。

確認面からの壁高は2.5~10cmをはかり、床面からの立ち上がりは極めて緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されており、軟弱である。

壁溝は検出されなかった。

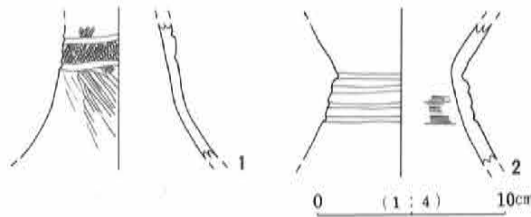
床面は地山の黄褐色火山灰層上に茶褐色土を薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。やや軟弱な構築状態で、住居壁ぎわから床面中央部へ向って徐々にレベルを低下させ、すり鉢状を呈する。

ピットは4個検出され、いずれも支柱穴と考えられる。比較的整然と配置され、P₁は



第227図 Y119号住居址実測図

29×26cmの楕円形、P₂は28×26cmの円形（残存値）、P₃は33×33cmの円形、P₄は36×33cmの円形を呈し、深さはそれぞれ、43cm・22cm（残存値）・37cm・51cmをはかる。



第228図 Y119号住居址出土土器実測図



第229図 Y119号住居址出土土器拓影図

炉址は検出されず、遺物もあまり多くなく、いずれも覆土中からの出土である。

(小山)

遺物（第228・229図）

本住居址出土の弥生土器は7点（実測図2点、拓影図5点）図示し得た。器種は甕・壺・鉢・高坏がある。228-1は頸部、篋描横走平行線文と縄文の組み合わせ、2は篋描の4条の横走平行線文が施文、拓影図229-1・2・3は甕の破片で、櫛描波状文と櫛描斜走直線文が施される。229-5は垂下文の周りに刺突文施文と考えられる。以上、遺物は主に弥生時代中期後半の様相を示し、本住居址もこれに比定されよう。

(羽毛田伸)

第50表 Y119号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調	整	備	考
228-1	壺	— (7.1)		内) 磨減著しく不明。 外) 頸部から胴部に斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にLR縄文を地文とし、ヘラ描横走平行線文が2条施されている。			回転実測A N区
228-2	壺	— (9.2)		内) 頸部に僅かなハケメ調整が施されている。 外) 口縁部は磨減著しく不明。胴部は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にヘラ描横走平行線文が4条施されている。			回転実測B 掘削、た26グリッド内

59) Y120号住居址

遺構（第230図、図版 七十四・七十五）

本住居址は台地の南部西端、そ・た・ち-25・26グリッド内に位置している。他遺構との重複関係はもたないが、住居址の北側半分以上を耕作等による攪乱によって破壊されている。このため、残存部は南東コーナー周辺と、南西コーナー周辺のみである。

プランはいずれも推定ではあるが、東西の短軸長514cm、南北の長軸長628cm、東壁長560cm、西壁長540cm、南壁長460cm、北壁長441cmの隅丸長方形を呈し、床面積は30.92㎡をはかる比較的大規模な住居址である。長軸方位はN-30°-Wをさす。

覆土は削平されているため、薄い。パミスを多量に含むきめの細かい黒褐色土である。

確認面からの壁高は残存部で5~11.5cmをはかり、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層をそのまま利用して構築されているが、軟弱である。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の黄褐色の砂層の上に黒褐色土を薄く埋め戻し、叩きしめた「叩き床」が全面に施されている。残存部はおおむね平坦であり、堅固である。

ピットは3個検出された。このうち、南側の床面上に並ぶP₁・P₂は主柱穴と考えられる。P₁は26×31cmの楕円形を呈し、40cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は54×26cmの南北に長い楕円形を呈し、52cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。北側部分の柱穴は破壊されたため、検出されなかった。P₃は南壁下西側に位置する。52×59cmの楕円形を呈し、30cmの深度を有する。貯蔵ピットとも考えられる。

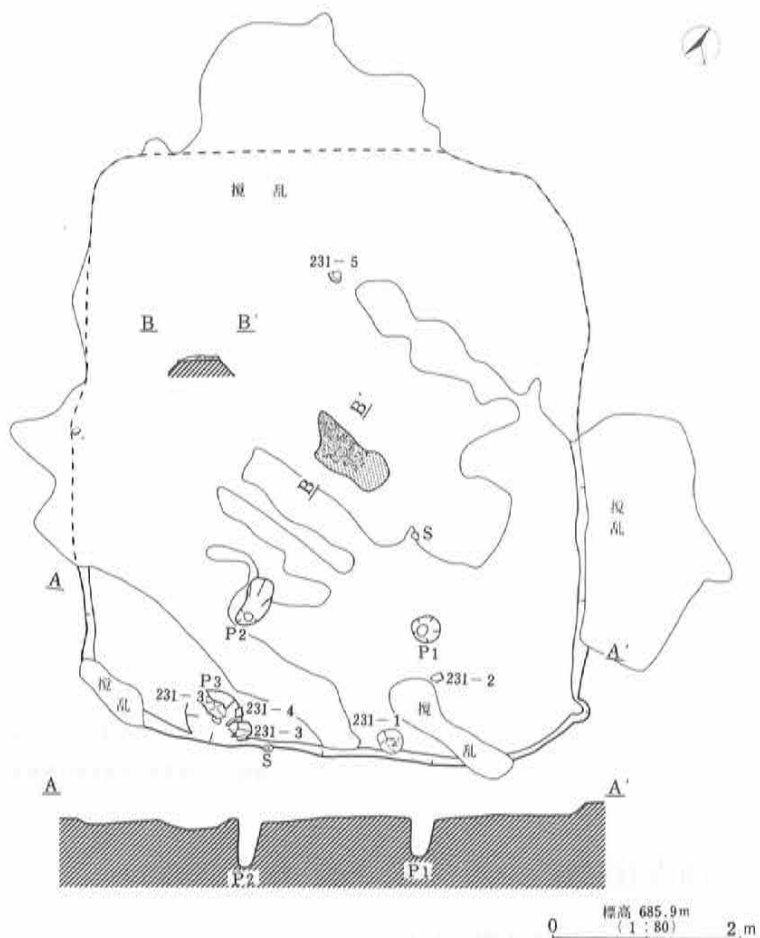
炉址は住居址の長軸・短軸の交点（住居址の中央）にほぼ位置する。周囲を破壊されているため、形状は不明であるが、真赤に焼け込んだ焼土範囲が検出されており、長期にわたって使用された炉址であることが想起され

る。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているが、多くは攪乱層内から出土したものである。このため、南壁下の床面上に集中して分布する遺物を中心として図示し、本住居址の共伴遺物と見做しておきたい。

231-3・4(甕)は南壁下のP₃内に位置し、58cm北東方向にはなれたY93号住居址のII・IV区出土資料と接合関係を有する。このことから、本住居址の出土遺物の多くが、住居廃絶後の投棄遺物であることが伺える。231-1(壺)は南壁下中央やや東寄りの床面上に正位の状態分布する。また、231-2はその北東方向に近接して分布する。その他、231-5(無頸壺)は覆土内、231-6(甕)は住居北側中央の攪乱層中から出土している。(小山)



第230図 Y120号住居址実測図

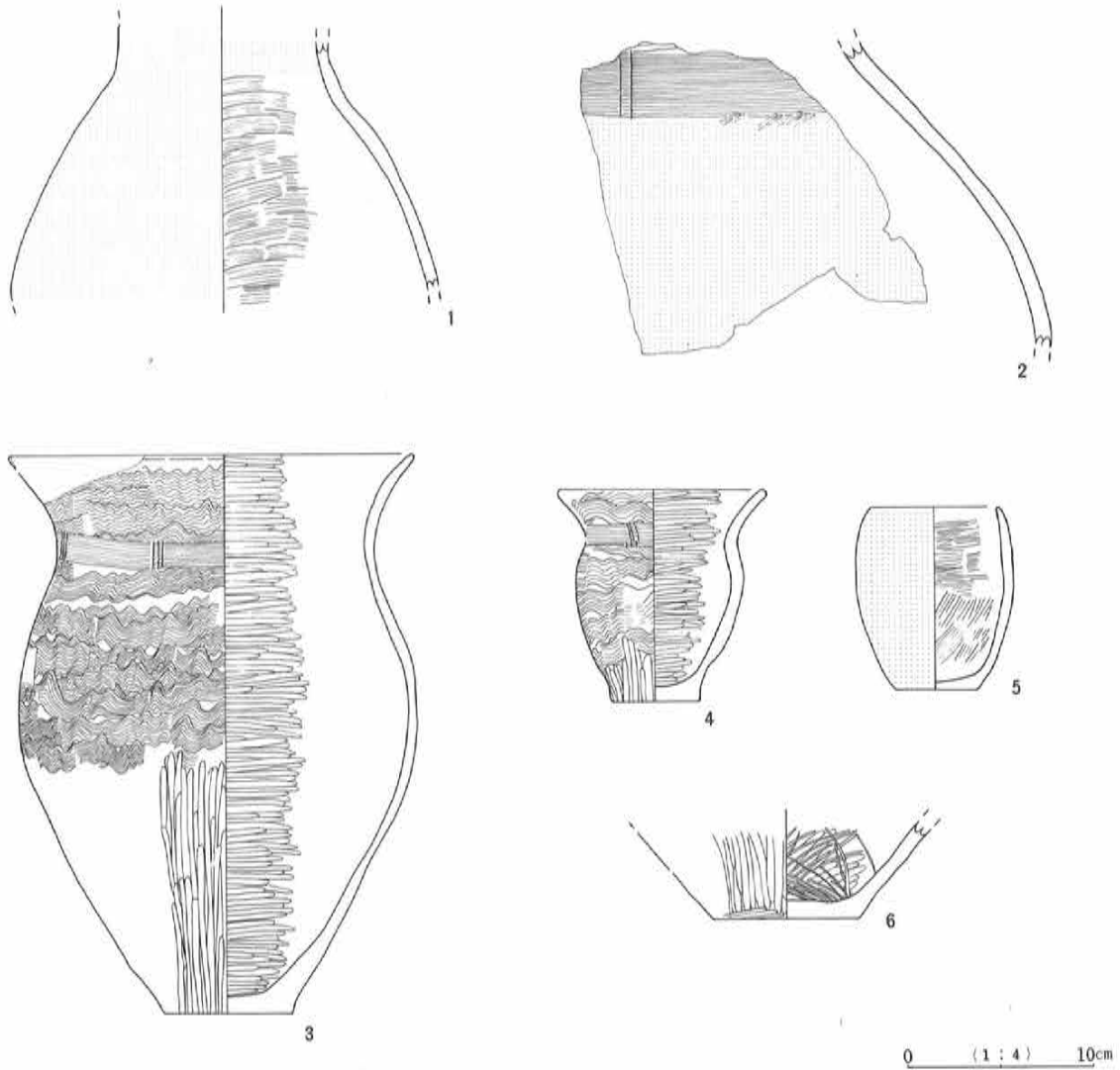
遺物 (第231図、図版 七十五)

本住居址からは弥生土器が出土している。そのうち6点を図化した。弥生土器の器種には壺・無頸壺・甕がある。

壺には231-1の頸部から胴上部の個体と231-2の胴上部から頸部の破片がある。231-1の壺は外面赤色塗彩されており、頸部に文様帯がないもののように思われる。内面の調整は横位の刷毛目調整が施されており、頸部以上は赤色塗彩が施されていることが窺える。231-2の壺は大型のもので肩部から頸部にかけて12本一組の2連止め櫛描簾状文が施されており、外面には赤色塗彩がなされている。内面の調整は剝離が著しく不明である。

231-5の無頸壺は外面赤色塗彩されており、円筒状の形態で胴部中央付近でややふくらんでいる。内面の調整は胴部中位以上は横位の刷毛目調整の後、粗めの横位のヘラナデがなされており、中位以下は雑な刷毛目調整がみられ、底部付近には指頭によるナデ調整がみられる。

甕には全器形がほぼわかる231-3と231-4、底部付近の231-6がある。231-3は最大径口縁部と胴部でほぼ等しく、口縁部弓状に外反して、胴部最大径は上位にある。文様は口縁部から胴部中位に、10本一組の櫛描波状文が右回りに上から下へ施された後、頸部に10本一組の3連止め櫛描簾状文が施文されている。内面の調整は横位のヘラナデがなされている。この甕の器形が該期の甕形態の中で一番多いものと思われる。231-4の甕は小型甕で最大径を口縁部に有し、胴部であまりふくらまない器形である。外面の文様は、口縁部から胴部下位に7本一組の右回りの櫛描波状文が上から下へ施された後、頸部に6本一組の3連止め櫛描簾状文が施文されている。



第231図 Y120号住居址出土土器実測図

内面の調整は横位のヘラミガキがなされており、胎土が赤褐色の焼成の良い土器である。231-6は大きく逆「ハ」の字状に開く甕の底部で、外面に縦位のヘラミガキがなされ、内面は斜位のヘラナデが施されている。

その他、弥生時代中期後半の壺形土器破片が出土しているが、混入遺物と考える。

以上、本住居址から出土した土器群は、壺・甕の特徴などから弥生時代後期と考える。

(高村)

第51表 Y120号住居址出土土器観察表

挿 番	図 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
231-1		壺	— (15.0) —		内) 横位のハケメ調整、頸部以上は赤色塗彩・ヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・丁寧なヘラミガキが施されている。 文) 頸部に文様帯が見られない。	回転実測 A No.3
231-2		壺	— (18.8) —		内) 磨減著しく不明。 外) 赤色塗彩・斜位および横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に12本一組の櫛描縹状文(二連止め・右回り)が少なくとも2帯上から下へ施されている。	破片実測 B No.4・8
231-3		甕	(21.8) 29.2 7.0	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しい。口縁部は弓状に外反し、胴部は中位上方で大きくふくらむ。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部下位は縦位のヘラミガキが、文様施文の後に施されている。 文) 口縁部から胴部中位に、10本一組の断続的な櫛描淡状文(右回り)が上から下へ施された後、頸部に10本一組の櫛描縹状文(3連止め・右回り)が施されている。	回転実測 A No.1・2 Y93II区と接合。
231-4		甕	(11.2) 11.4 4.8	最大径は口縁部にある。口縁部は広い頸部から大きく弓状に外反し、胴部は上位で張る。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様施文の後、底部に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部から胴部下位に、7本一組の断続的な櫛描淡状文(右回り)が上から下へ施された後、頸部に6本一組の櫛描縹状文(3連止め・右回り)が施されている。	回転実測 A No.1・2・10、Y93IV区と接合。
231-5		無頸壺	7.0 9.8 4.4 8.4	最大径は胴部中央にある。頸部を持たず内写気味に立ち上がり、全体には胴張りの長方形状を呈する。	内) 胴部中位以上は横位のハケメ調整の後、粗めの横位のヘラナデ、中位以下は縦位のハケメ調整が施されている。 外) 全体に赤色塗彩、胴部上位以上は横位のヘラミガキ、上位以下は縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測 B 覆土内
231-6		甕	— (4.8) 8.0		内) 斜位のヘラミガキの後、みこみ部周辺は細かい単位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測 A No.5

60) Y121号住居址

遺構 (第232・233図、図版 七十六・七十七・七十八)

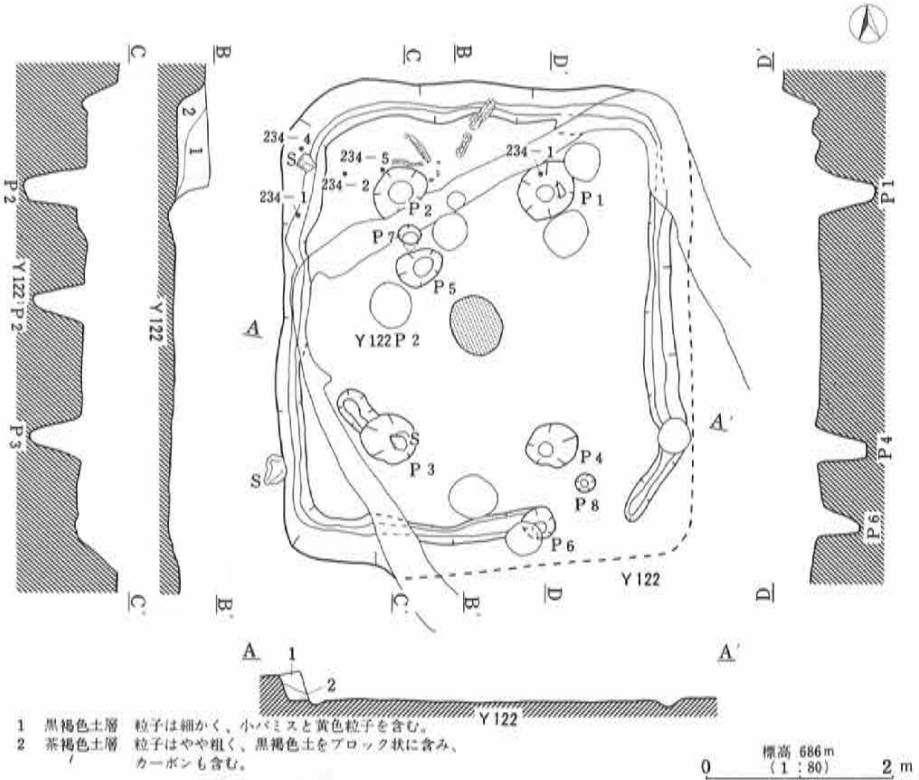
本住居址は、台地の南側の北西部、お・か-20・21グリッド内に位置している。Y122号住居址と重複関係にあり、当初プラン確認の際はY122号住居址を切っているものと判断して掘り下げ作業を開始したのであるが、床面まで達したところで、重複関係が逆であることがわかり、Y122号住居址により、本住居址の東壁と南壁の大部分が破壊されていた。

Y122号住居址に東壁と南壁の大部分が破壊されているものの、住居址をほぼ全周している壁溝から住居址の規模は推定でき、平面プランは東西415cm、南北464cm、東壁長414cm、西壁長362cm、南壁長345cm、北壁長288cmの長方形を呈し、長軸方位N-6°-Eを示す。住居址の規模は小さい方で、床面積は14.85㎡を計測する。

覆土は二層からなり、第1層はパミスと黄色粒子を含む黒褐色土で、第2層は炭化物を含む赤褐色土である。残存した北部の床面から炭化材が検出されており、本住居址は焼失住居址の可能性が高い。確認面からの壁高は3~37cmを測り、壁溝の底面から緩い傾斜をもって立ち上がっている。幅15~45cmで深さ1~8cmの壁溝が住居址の南東部分でなくなるが、ほぼ全周している。床面はY122号住居址の床面がわずかに深かったため、大部分が破壊されており、残存した北西部と南西部はほぼ平坦であった。

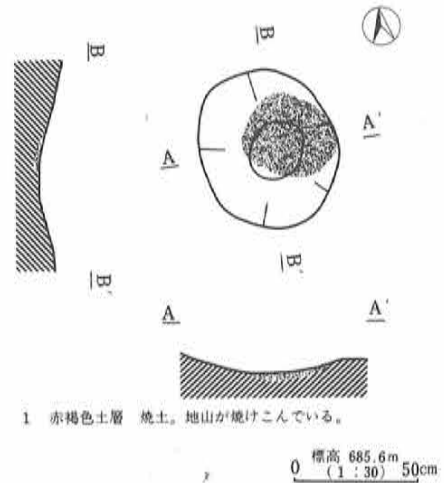
ピットは8個検出された。P₂を除き他のピットはすべて、固く引き締まった張り床を取り除いて検出された。主柱穴は4本(P₁~P₄)で整然と配置されている。P₁は径60cmの円形を呈し、深さ75~77cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。P₂は45×55cmの円形を呈し、深さ66~70cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。P₃は50×58cmの楕円形を呈し、深さは55~61cmを測る。断面形は「V」字形を呈する。P₄は49×58cmの楕円形を呈し、深さは54~55cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。P₅とP₇は、P₂と炉址の間にあり、P₅は35×48cmの楕円形を呈し、深さ50cmを測り、P₇は20×25cmの楕円形を呈し、深さ34cmの袋状になるピットである。P₆は壁溝が西から巡ってきた終息部に位置し、径30cmの円形で深さ37cmを測る。P₈はP₄の南東に位置し、径20cmの円形で深さ33cmを測る。

炉址も大部分のピットと同様、Y122号住居址の張り床を取り除いて検出された。炉址の位置は、住居址のほぼ中央に当り、64×54cmの楕円形を呈しており、長軸方位はN-8°-Wを示す。掘り込みは、中央付近が深く、約15cmを測り、鍋底状を呈している。焼土(火床部)が約5cmの厚さで地山をそのまま焼き込んで炉址の北東寄りに中心を持つ楕円形状に存在する。炉址の形態は、炉縁石もなく、床面をそのまま掘り込んで構築された地床炉である。



第232図 Y121号住居址実測図

遺物の出土状況は、234-1の壺の底部付近破片が北西の壁溝内より出土しており、本住居址に共伴する可能性が強い土器と考えられ、234-2の壺の頸部から胴上部は、Y122号住居址と重複関係を有さない北西隅床面より出土している。234-4・5の甕は234-2の壺と同様、重複関係のない部分で、234-4の甕は北西隅の壁溝より、234-5の甕はP₂に近接した北西の床面より出土している。234-3の壺はII区の覆土から、234-6の甕はIII区の覆土から出土しており、本住居址に確実に共伴する遺物と断定することはできない。遺物の出土分布の傾向は、Y122号住居址に大部分を破壊されているため言及できず、本住居址に共伴する可能性の高い土器は、234-1・2・4・5の4点といえる。



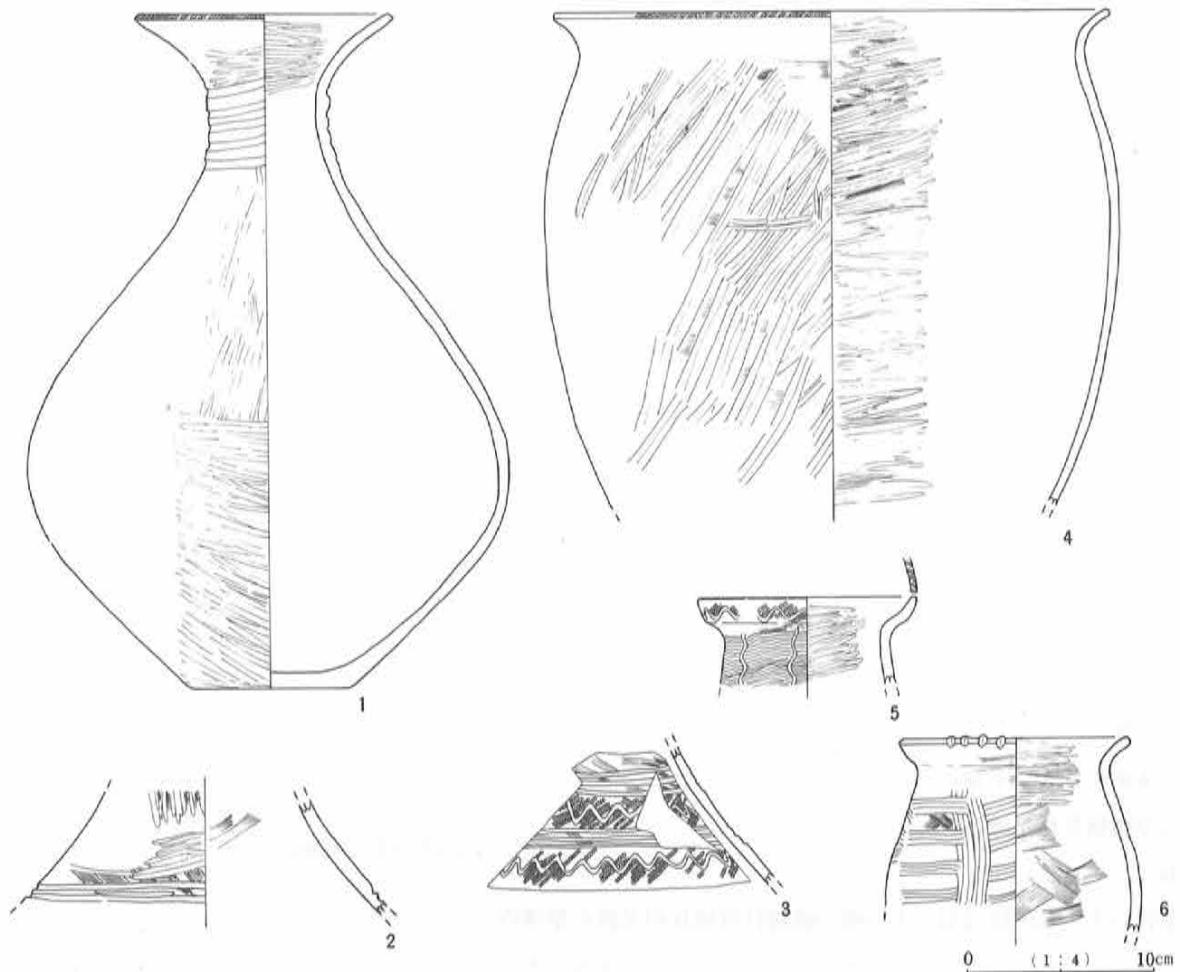
第233図 Y121号住居址炉址実測図

遺物 (第234図、図版 七十九)

本住居址からは、弥生土器・石器が出土している。石器については覆土内の出土であり、本住居址に確実に共伴すると見做せないため、第2節において一括して扱ってある。

弥生土器の器種には、壺・甕がある。

234-1の壺は、全器形がわかり、最大径は胴下位にあり、口縁部は筒状の頸部から外反してラップ状に開き、胴部は下位で強く張りソロバン玉状を呈している。内面の調整は口縁部から頸部は横位の刷毛目調整の後、丁寧な横位のへらナデ、以下はナデが施されており、外面は口縁部ヨコナデ、頸部から胴中位までは縦位の刷毛目調整の後、縦位のへらナデ、胴部下位には横位のへらナデが施されている。文様は頸部のみにあり、5状の篋横横走平行線文が施文されている。また、口唇部にはLR縄文が施されている。この細頸壺の施文パターン



第234図 Y121号住居址出土土器実測図

遺跡の弥生中期後半期においては、最も多い形態といえる。

234-2の壺の頸部から胴上部破片は、内面刷毛目調整がなされ、外面には斜位の刷毛目調整がなされた後、上位は縦位の、下位には横位のヘラナデが施されている。文様は3条（観察できただけで）の篋描横走平行線文が肩部に施文されていることが観察できる。

234-3の壺の頸部から胴上部破片は、内面下位には横位の刷毛目調整が、上位には横位のヘラナデが施されており、外面は横位の刷毛目調整がなされている。文様はおそらく、胴下位まで施文されていたものと思われ、観察できる部分では、3条の篋描横走平行線文で区切り、その空間にLR縄文を地文とした篋描連続山形文を施文してある。

234-4の大型の甕は、胴部に最大径を有し、口縁部短かく外反し、胴部は上位でかるくふくらみ、口唇部面取りがなされており、口径の広いずん胴な器形となろう。内面の調整は横位のヘラミガキがなされており、外面は横位の刷毛目調整が施されている。文様は3～5本一組の櫛描斜走直線文が右回りで上から下へ施文されている。この大型甕と類似した器形をもつ甕にY75号住居址出土の234-5がある。胴部の文様は櫛描の横位羽状文と異なるが同系統の甕と言えよう。

234-5の小型甕は、口縁部受口状に立ち上がり、口唇部は面取りされて、LR縄文が施文されている。内面の調整は横位のヘラミガキが施されており、外面には横位の刷毛目調整がなされている。文様は口縁部外面にLR縄文施文の後、2本一組の櫛描波状文が施されている。胴部には12本一組の櫛描波状文施文の後、2本一組の櫛描垂下文が施されている。この小型甕と同系統の系譜と思われる土器に、Y106号住居址の185-1の小型甕がある。

第52表 Y121号住居址出土土器観察表

押番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
234-1	壺	(13.8) 35.8 (8.6) 25.6	最大径は胴部下位にある。口縁部は筒状の頸部から外反しラッパ状に開く。胴部は下位で強く張りソロバン玉状を呈する。	内) 口縁部から頸部は横位のハケメ調整の後、丁寧な横位のヘラミガキ、以下はナデが施されている。 外) 口縁部はヨコナデ、頸部から胴部中位までは縦位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキ、胴部下位には横位のヘラミガキが施されている。 文) 調整の後、頸部にヘラ描横走平行線文が5条施され、口唇部にLR縄文が施されている。	回転実測A No.1・7、II区、ベルト内
234-2	壺	- <6.8> -		内) ハケメ調整が施されている。 外) 斜位のハケメ調整が施された後、上位は縦位のヘラミガキ、下位は横位のヘラミガキが施されている。 文) ヘラ描横走平行線文が3条(3条しか観察できない)施されている。	回転実測B No.3
234-3	壺	- <7.2> -		内) 下位は横位のハケメ調整、上位は横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。 文) ヘラ描横走平行線文を上位・下位にそれぞれ3条施して一次区画し、その空間にLR縄文を地文としたヘラ描連続山彩文が施されている。	回転実測B II区、Y122IV区
234-4	甕	(29.5) <26.2> - 30.3	最大径は胴部にある。口縁部は短く外反し、胴部は上位でかるくふくらむ。口唇部は面取りされている。口径の広いずん胴を呈。	内) 横位のハケメ調整の後、横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。 文) 3〜5本一組の櫛描斜走直線文が右回りで上から下へ施されている。	回転実測B No.4、II区、ベルト内
234-5	甕	(11.2) <4.6> -	口縁部は受口状に立ち上がる。口唇部は面取りされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。 文) 胴部に12本一組の櫛描波状文地文の後、2本一組の櫛描垂下文が施され、口唇部はLR縄文、口縁部はLR縄文地文の後、2本一組の櫛描波状文が施されている。	回転実測B No.2
234-6	甕	(12.3) <10.3> -	最大径は胴部中位下方にある。口縁部は短く外反し、胴部は中位でふくらむ。	内) 斜位および横位のハケメ調整が施された後、口縁部から頸部は横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部はヨコナデ、胴部は斜位のハケメ調整が施されている。 文) 胴部は4本一組の櫛描垂下文2帯で区画された後、横走平行線文が少なくとも4帯施されている。口唇部は左方向からのヘラ描の刻目が施されている。	回転実測B III区 外面に煤が付着している。

234-6の甕は、最大径を胴部中位下方に有し、口縁部は短く外反し、胴部は中位でふくらむ器形である。内面の調整は斜位および横位の刷毛目調整がなされた後、口縁部から頸部は横位のヘラナデが施されている。外面は口縁部から頸部はヨコナデ、胴部は斜位の刷毛目調整が施されている。口唇部には篋による刻目が廻っている。文様は胴部に4本一組の櫛描垂下文で区画された中に櫛描横走平行線文が観察できる限り4帯施文されている。

以上のことから、234-1の壺形土器及び234-4・5の甕形土器の特徴などから本住居址の所産期は弥生時代中期後半と思われ、Y122号住居址より古い時期であることは確実である。(高村)

61) Y122号住居址

遺構(第235・236図、図版 七十七・七十八)

本住居址は、台地の南側の北西部、お・か-19・20・21グリッド内に位置している。Y121号住居址と重複関係にあり、Y121号住居址でも記したように、プラン確認の際は、Y121号住居址により切られているものと判断したが、掘り下げ作業を行った時点で、重複関係が逆であることが判明し、Y121号住居址の東壁及び南壁を破壊して構築されている。

平面プランは、東西432cm、南北472cm、東壁長395cm、西壁長358cm、南壁長350cm、北壁長390cmで南方部にややふくらみを有する方形を呈し、長軸方位はN-20°-Wを示す。本遺跡内でも小さい方で、床面積は16.93m²を計測する。

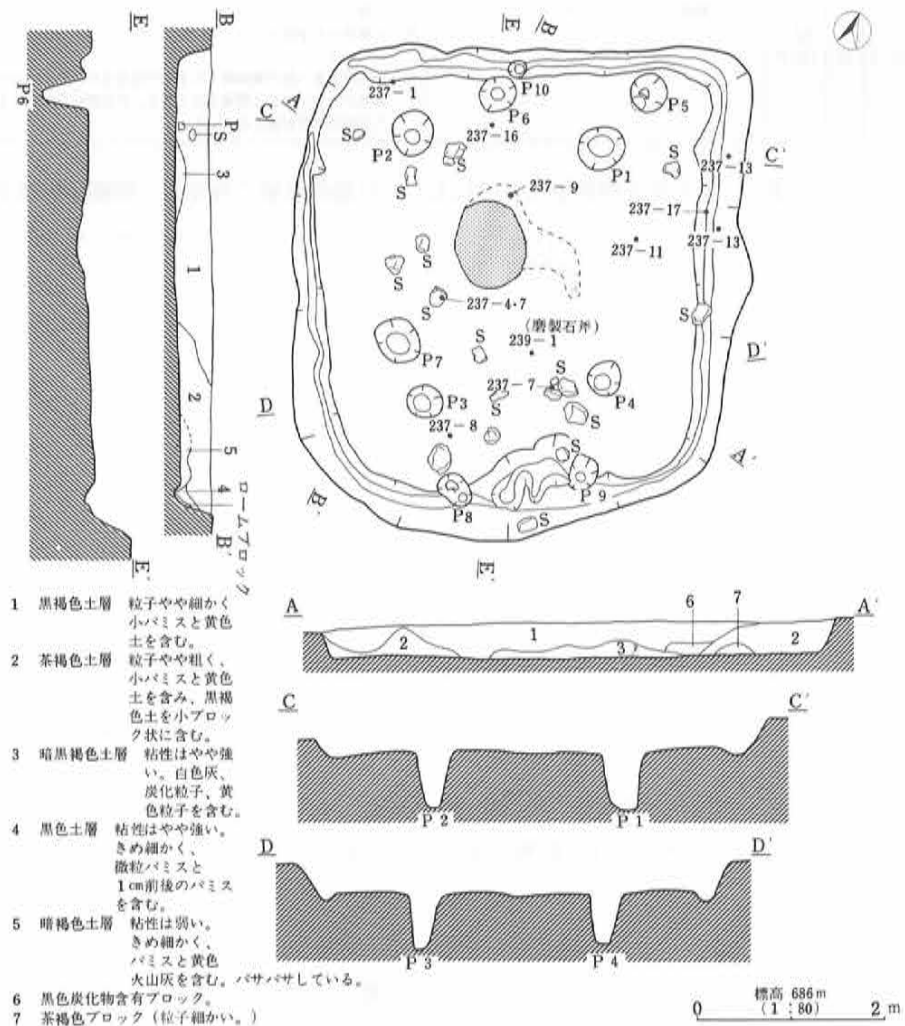
覆土は七層からなり、自然堆積と思われる。第1層は小パミスを含む黒褐色土、第2層は小パミスを含む茶褐色土で、第1・2層は遺構全体に見られる。第3層は白色灰・炭化粒子・黄色粒子を含む暗黒褐色土で床面近くに存在する。第4層はパミスを含む黒色土、第5層はパミス・黄色火山灰を含む暗褐色土で南壁際に見られる。第6層は炭化物を含む黒色ブロック、第7層は茶褐色ブロックで東壁付近に存在する。

確認面からの壁高は1~39cmを測り、壁溝底面から緩かな傾斜をもって立ち上がる。幅15~30cmで深さ3~10cmの壁溝が住居址の北西隅でなくなるも、ほぼ全周している。床面は、固く引き締まった張り床が大部分を占め、平坦であった。床面直上あるいは床面より僅かに浮いた状態で礫が存在したが、やや西側に多く見られる傾向はあるものの、その性格については不明である。

ピットは10個検出された。そのうち支柱穴と考えられるピットはP₁~P₄で四隅に整然と配置されている。P₁は径50cmの円形を呈し、深さ54~60cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。P₂を44×46cmの円形を呈し、深さ59~60cmを測る。断面形は先の方が細くなる「U」字形を呈する。P₃は35×40cmの楕円形を呈し、深さは58~61cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。P₄は径35cmの円形を呈し、深さは54~56cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。P₆は、P₁とP₂の中間の北壁溝と接する位置にあり棟持ち柱ではないかと思われる。規模と形態は、径40cmの円形を呈し、深さ42~50cmを測る。断面形は先の丸まった「V」字形を呈する。P₈とP₉は南壁下に規則的に並列で存在しており、入口施設と関係した柱穴と考えられる。P₈は23×40cmの楕円形を呈し、2ヶの底面を有する。P₉は30×40cmの楕円形を呈し、深さ28cmを測る。P₇はP₃の北側に位置し、46×52cmの楕円形で深さ15~18cmの浅いピットである。P₅はP₁の北東、壁溝近くに位置し、径30cmの円形で、深さ29~31cmを測る。P₁₀は北壁の中央、壁溝内にあり、径20cmの円形を呈し、深さ44cmを測る。P₆の棟持ち柱のすぐそばにあり、棟持ち柱を補強した柱穴かもしれない。

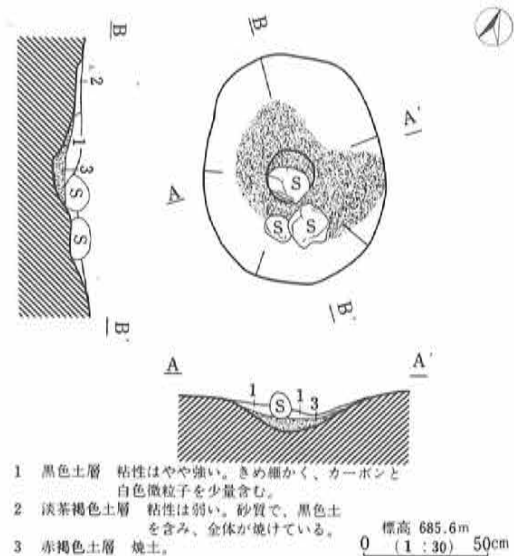
炉址は、住居址の中央よりやや西北に偏よって構築されており、93×72cmの楕円形を呈しており、長軸方位はN-30°-Wを示す。掘り込みは中央が深く10cmを測り、鍋底状を呈している。焼土(火床部)が5cmの厚さで中央を中心に東側に伸びる不整形に存在し、また、炉址の中央及び南方に炉縁石と思われる礫が3ヶ存在し、この炉址の形態は地床炉+炉縁石と判断する。

遺物の出土状況は、237-4の壺が炉址の西南方の床面より、237-7の壺が覆土と炉址の西南方の床面とP₄の西方の床面より、237-8の甕がP₃の南東の床面より、237-9の甕が炉址と近接した北方の床面とI



第235図 Y122号住居址実測図

区・IV区の覆土内から、237-11の甕がI区P₁の南方の床面より、237-16の台付甕がP₀と近接した南方の床面より出土している。237-3の壺は東壁北方寄りの壁とII区覆土内から、237-13の甗が東壁の中央付近から出土している。237-1の壺がII区P₂の北方の床面からやや浮いた状態で、237-17の高坏が東壁やや北方寄りの壁溝上より浮いた状態で出土した。237-6の壺と237-12の鉢はI区覆土内より、237-2の壺と237-18の高坏はIII区の覆土内より、237-5の壺と237-19の器種不明土器はIV区覆土より、237-14の鉢はI区とIII区の覆土より、237-10の甕と237-15の鉢はI区とIV区の覆土より出土している。239-1の小型扁平片刃石斧がIV区P₄の西方の床面より、239-2の打製石斧がIII区P₃の東方床面より出土している。遺物の出土分布は、住居址全般より出土しており、偏よりは見られない。また、本住居址に共伴する可能性の高い土器は、床面からの出土である237-4・7・8・9・11・16、238-1・2の8点と考える。



第236図 Y122号住居址炉址実測図

遺物 (第237・238・239・240図、図版 七十九・八十)

本住居址からは、弥生土器・石器が出土している。弥生土器の器種には、壺・甕・鉢・甗・台付甕・高坏があり、石器には、磨製の小型扁平片刃石斧と打製石斧がある。

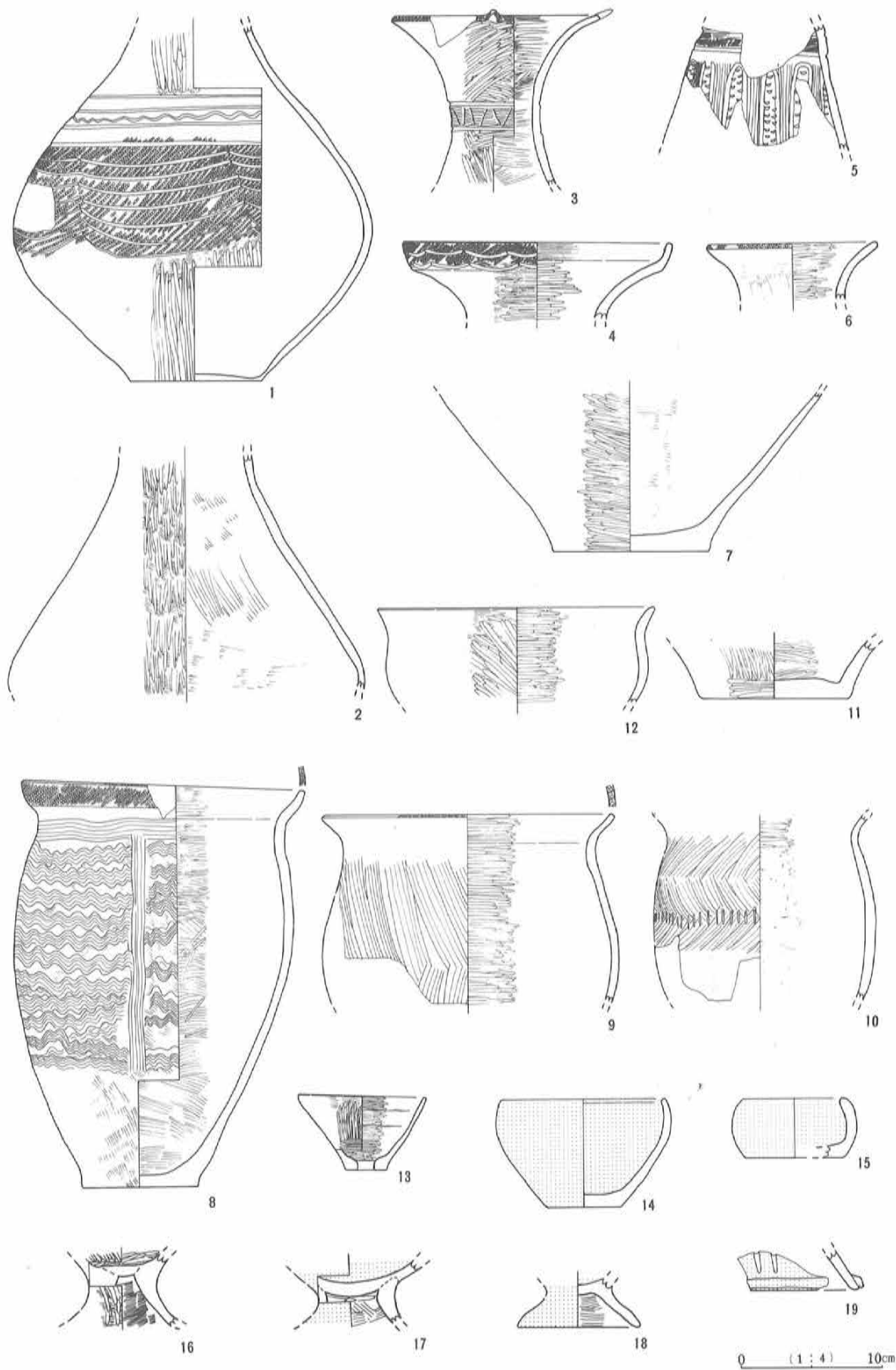
壺には、頸部から胴部中位まで文様の施された237-1のものと、237-2のように胴部には文様を施さないものが存在し、237-5は前者に、237-3・6などは後者に属するものと思われる。また、口縁部も単純口縁の237-3・6があり、受口口縁の237-4がある。単純口縁の237-3は口唇部にほぼ等間隔に突起を4箇所有している。壺の内面調整は、概ね刷毛目調整が多く、外面においても刷毛目調整が見られヘラナデなどが行われている。壺は本住居址においてバラエティーに富んだ器形が検出されている。

甕には、全器形のわかる237-8があり、最大径は口縁部と胴部でほぼ等しく、口縁部はしっかりした稜をもたない受口状に立ち上がり、胴部は中位上方で軽くふくらむ器形となっている。文様は、頸部に右回りの6本一組の櫛描横走平行線文が施された後、6本一組の櫛描直線文が垂下され、縦割りに4等分されている。区割された空間には、5本一組の櫛描波状文が上から下へ施されている。また、口唇部から口縁部にはL R網文が施文されている。この甕は、受口状の口縁部が明瞭な稜をもたず緩やかに頸部に至っており、中期でも新しい様相をもつものかもしれない。単純口縁の237-9の甕は口縁部短かく外反しやや内弯して立ち上がり、胴部中位でふくらむ器形を有し、胴部に6本一組の櫛描斜走直線文が横位羽状に施文されている。237-10の甕も237-9の甕と同様な施文パターンを有しているものと思われるが器形が胴部あまりふくらみを有さない甕となる。

鉢には、237-12の大型の無彩の鉢があり、頸部に括れをもち内面へラミガキが施される。237-14の内外面赤色塗彩される鉢は、口辺部強く内弯し、最大径を体部上位に有する弥生時代には一般的な形態の鉢である。237-15も内外面赤色塗彩されているが、器形に特異性があり、口辺部内弯して体部中位に最大径を有する小型の鉢であり、本遺跡出土のものの中で、この器形に類似した鉢は他に見られない。

甗は237-13の小型のものがある。この甗は大きさから、煮沸器とセットとしての蒸器の用途は考えにくく、濾す道具として使用されたかもしれない。

台付甕には237-16の接合部から脚部にかけてのものがある。内面の調整は台部に横位の刷毛目調整が、甕部に

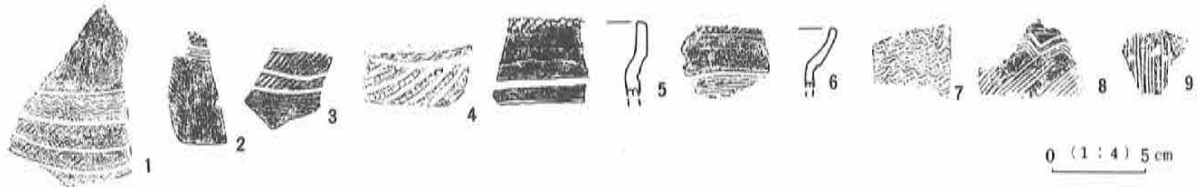


第237図 Y122号住居址出土土器実測図

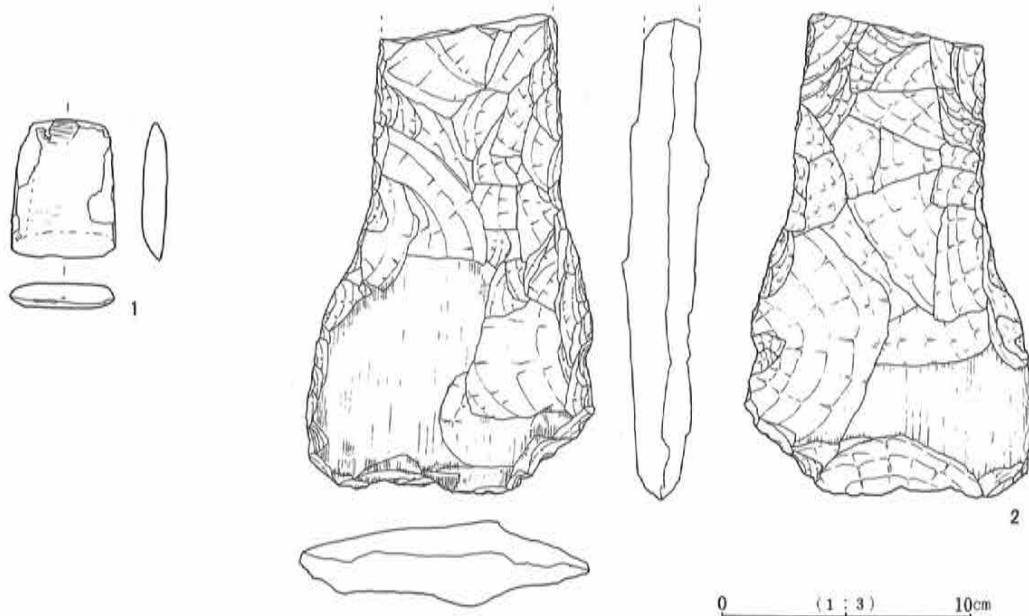
第53表 Y122号住居址出土土器観察表

排 番	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
237-1	壺	— (24.8) 9.2 25.2	最大径は胴部下位にあり、強く張る。頸部は細くくびれる。	内) 磨減著しく不明。 外) 頸部以上に斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキ、胴部下位以下は横位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 胴部中に4条のヘラ描横走平行線文が施された一次区画中の中央にヘラ描連続山形文、以下はL R縄文を地文とした7重のヘラ描弧文(左回り)が施されている。文様は胴部中位から下位に集中し乍ら頸部にも施されていたと考えられる。	回転実測A No.5
237-2	壺	— (16.5) — 25.0	最大径は胴部下位にあると思われる。	内) 斜位および横位のハケメ調整が施されている。 外) 斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B III区
237-3	壺	14.6 (12.0) —	口縁部は細い頸部から大きく外反し、ラッパ状を呈し、口唇部にはほぼ等間隔4箇所に突起を有する。口唇部は面取りされている。	内) 横位のハケメ調整→口縁部に横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→斜位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に2条のヘラ描横走平行線文で区画された文様帯内に8本一組の帯描連続同心円弧文が充填されている。	回転実測A No.1、II区、Y126II区
237-4	壺	(19.0) (5.4) —	口縁部はしっかりした受口状に立ち上がる。	内) 口縁部にヨコナデ、以下は横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部にL R縄文を地文とし、二重のヘラ描弧文が施されている。磨減が著しいが、口唇部にもL R縄文が施されている。	回転実測B No.12、IV区
237-5	壺	— (8.7) —		内) ハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にヘラ描横走平行線文が2条施され、その空間はL R縄文で充填されている。胴部は6本一組の帯描直線文が垂下された後、ヘラ描沈線による区画内に半截竹管文が充填されている。	破片実測A IV区
237-6	壺	(12.0) (4.0) —	口縁部は外反する。	内) 横位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位および横位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部にL R縄文が施されている。	回転実測B I区覆土、ベルト内
237-7	壺	— (11.1) 11.0		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 斜位のハケメ調整→斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No.10・12、覆土
237-8	甕	20.0 28.7 8.2 20.0	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しく、口縁部はしっかりした縁を持たない受口状に立ち上がる。胴部は中位上方で軽くふくらみ、あまり収束はしない。左右が多少ゆがんでいる。	内) 全面に横位のハケメ調整→口縁部から頸部に横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部にヨコナデ、胴部下位に斜位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部に6本一組の帯描横走平行線文(右回り)が施された後、6本一組の帯描直線文が垂下され、器体が縦割り4等分された空間は5本一組の帯描波状文が上から下へ施され充填されている。口唇部から口縁部はL R縄文が施されている。	完全実測 No.6、IV区、覆土
237-9	甕	20.6 (13.3) — 21.0	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しい。口縁部は短く外反しや内湾して立ち上がり、胴部は中位でふくらむ。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部に横位のハケメ調整が施されている。 文) 6本一組の帯描斜走直線文が横位羽状(左回り)に上から下へ施されている。	回転実測A No.7、I区、IV区、ベルト内
237-10	甕	— (12.7) —	胴部は中位でふくらみ、口縁部は短く外反すると考えられる。	内) 胴部上位に横位のヘラミガキ、下位は斜位のハケメ調整が施されている。 外) 斜位のハケメ調整が施されている。 文) 5本一組の帯描斜走直線文が横位羽状(左回り)に上から下へ施された後、胴部最大径位に横位の帯描による刺突文が施されている。	回転実測A I区、IV区、ベルト内
237-11	甕	— (4.2) 10.4		内) 斜位のハケメ調整→斜位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキ→底部立ち上がり部に横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No.4
237-12	鉢	(19.4) (6.7) — (19.4)	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しく、口縁部は短くゆるく外反し、胴部は上位で張る。	内) 斜位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整→斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B I区
237-13	甕	9.0 5.3 2.8 9.0	逆台形状を呈する小型土器で底部中央に焼成前に内面から穿孔された1孔を有する。内面2箇所粘土紐の接合部が観察できる。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口辺部に横位のハケメ調整→縦位のヘラミガキ→底部に横位のヘラミガキが施されている。	完全実測 No.3
237-14	鉢	(11.6) 7.6 (5.2) (12.4)	口縁部は強く内湾して開き、口唇部は面取りされている。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B I区・III区
237-15	鉢	(7.2) 4.3 (7.0) 8.8	最大径は体部中央で口辺部が内湾している小型土器である。口唇部は面取りされている。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B I区・IV区

237-16	台付甕	— (5.2) —	接合には独立するホゾが用いられたと思われる。	内) 台部に横位のハケメ調整、甕部は横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.8
237-17	高坏	— (4.5) —	ホゾは坏部に属すると思われる。	内) 脚部に横位のハケメ調整、脚部と坏部の接合部付近に横位のヘラミガキ、坏部は赤色塗彩・ヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.2
237-18	高坏	— (3.4) 8.6	脚部は「ハ」の字状に開く。	内) 脚部に横位のハケメ調整、坏部は赤色塗彩・ヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測A III区
237-19	不明	— (3.3) —	脚部の端部に貼り付けによる突帯がめぐっている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・横位および斜位のヘラミガキが施されている。ヘラ描洗線あり。	破片実測B IV区



第238図 Y122号住居址出土土器拓影図



第239図 Y122号住居址出土土器実測図

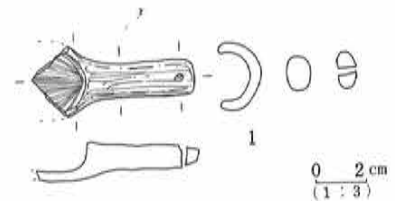
は横位のヘラナデがなされている。外面は斜のヘラナデが行われている。感覚的に雑な作りのように見られる。

高坏は、脚部の短い237-18があり、坏部の内外面と脚部の外面に赤色塗彩がなされている。他に237-17の接合部がある。

237-19の外面赤色塗彩された脚部と思われる土器は、小片であることと初見の器形なため器種が不明で、今後の資料の検出に待ちたい。

石器には、粘板岩の小型扁平片刃石斧239-1と玄武岩の撥形大形打製石斧が床面より出土している。

以上のことから237-1を初めとする壺および238-8・9・10の甕などから本住居址の所産期は弥生時代中期後半と考えるが、重複関係からY121号住居址より新しい時期のものといえる。(高村)



第240図 Y122号住居址出土土製品実測図

62) Y123号住居址

遺構 (第241図、図版 八十一)

本住居址は台地南部のほぼ中央、き・く・け-17・18グリッド内に位置している。北東から南西方向へ斜走する第13号周溝と重複関係を持ち、住居址の中央部を分断されている。

プランはいずれも推定値であるが、東西の短軸長445cm、南北の長軸長601cm、東壁長494cm、西壁長534cm、南壁長400cm、北壁長372cmの隅丸長方形を呈し、床面積は25.53㎡をはかる。長軸方位はN-13°-Eをさしている。覆土は未確認である。

確認面からの壁高は残存部で25-36cmをはかり、床面からの立ち上がりは緩い。壁体上位は地山の黄褐色火山灰層、下位は地山の砂層を利用して構築されている。上位は割合堅固であるが、下位は軟弱で崩れ易く、何らかの補強材が必要であったことが想定できる。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層まで掘り窪めたのち、黒褐色土を全面に薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。やや軟弱な構築状態であり、起伏にも富む。

ピットは4個検出された。P₂は支柱穴と考えられ、北西部に位置する。37×38cmの円形を呈し、67cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。他の支柱穴は破壊された部分にあったことが想像されるため、検出されなかった。この他、3個のピットの性格については不明である。P₁はP₂の南西側にあり、30×39cmの東西に長い楕円形を呈する。深さは32cmをはかる。P₃は北壁下東側に位置する。48×32cmの南北に長い楕円形を呈し、32cmの深度を有する。P₄は北壁下中央東寄りにあり、P₃と近接する。他に比べ小規模であり、23×31cmの楕円形を呈する。深さは16cmをはかる。

炉址は破壊部分にあったと考えられるため、検出されなかった。

遺物の出土状況

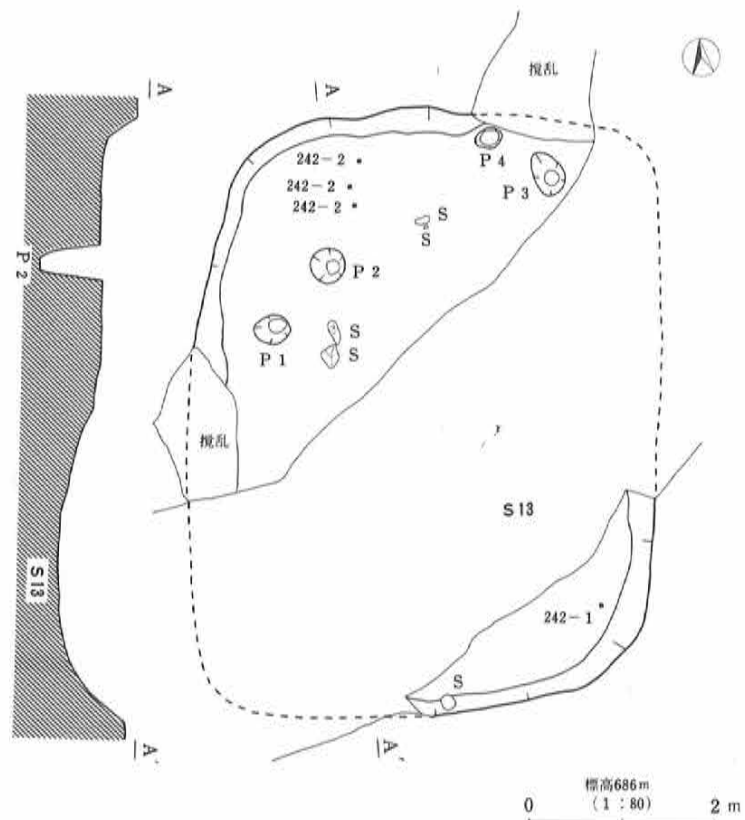
本住居址からは弥生土器が出土しているが、その量は極めて少ない。

また、全体の遺物分布も散漫な状態であり、特に集中して分布する箇所はみられない。

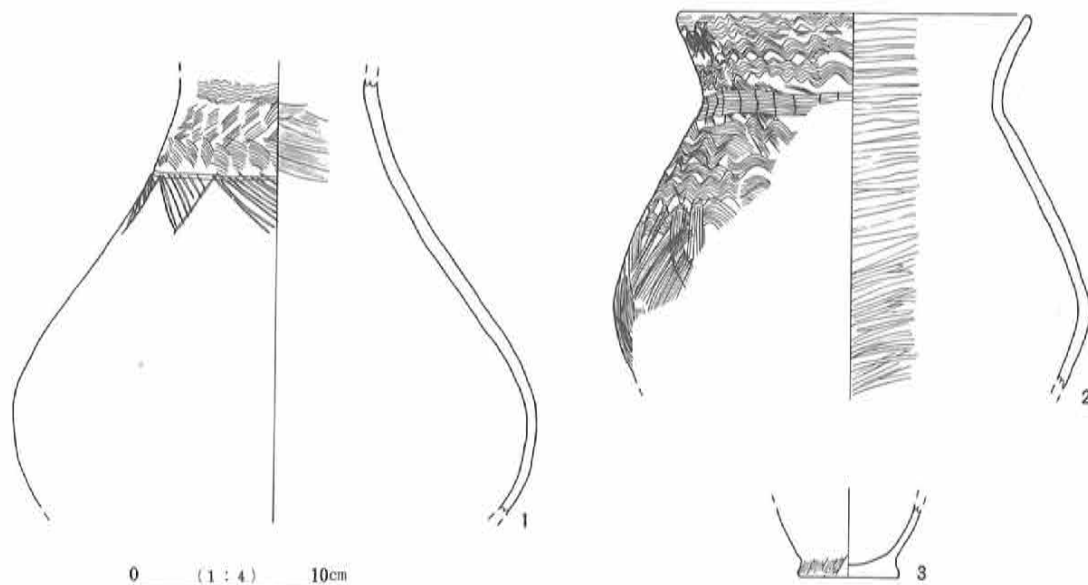
図化した遺物は、いずれも床面よりも高位の覆土中から出土したものであるが、本住居址の所産期を推定する目安となる資料と考えられるため、掲示した。

242-1 (壺) は南東コーナーに分布し、床面からは26cm浮いている。242-2 (甕) は北壁下西寄りに細かく破碎した状態で散在する。床面からは5cm位浮いている。この他、243-1・2 (甕) は住居址の覆土内からの出土である。

(小山)



第241図 Y123号住居址実測図



第242図 Y123号住居址出土土器実測図

第54表 Y123号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調	整	備考
242-1	壺	<22.3>		内) ハケメ調整が施されている。 外) 全面にハケメ調整→胴部上位から中位に斜位のヘラミガキ、胴部下位に横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部のヘラ描横走沈線を境に、上位に櫛描波状文・櫛描斜走短線文、下位はヘラ描鋸歯文が施され、その中はヘラ描斜走文が充填されている。		破片実測A No.4
242-2	甕	18.8 <19.7> — 25.5	最大径は胴部中位にあり、口縁部は緩く「弓」状に外反し、胴部は中位で強く張る。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位および横位のハケメ調整が施されている。 文) 口縁部に6~8本一組の櫛描波状文、頸部に8本一組の櫛描籐状文(右回り)が施され、胴部は上位から中位に6~8本一組の櫛描波状文(右回り)が施された後、中位以下に6~7本一組の櫛描斜走直線文が縦位羽状に施文されている。		回転実測A No.1~3、S13V区、き18グリッド内
242-3	甕	— <4.0> 5.6	底部周辺に指押え痕がある。	内) 磨減著しく不明。 外) 底部にハケメ調整が施され、その他は磨減著しく不明。		回転実測A No.1

遺物 (第242・243図、図版 八十一)

本住居址から出土した遺物で図示し得たものは5点(実測図3点、拓影図2点)である。器種には甕・壺・鉢・高坏がある。甕242-2は胴中央で強く張り、文様構成は口縁部櫛描波状文、頸部櫛描籐状文(等間隔止め)、胴



第243図 Y123号住居址出土土器拓影図

上部櫛描波状文、胴中央部櫛描斜走直線文である。拓影図243-1・2も甕胴部破片であり、1は頸部櫛描籐状文(等間隔止め)が僅かに観察でき、胴部櫛描波状文が施文、2は櫛描による斜格子目状の斜走直線文が施されている。壺242-1は無花果形を呈すと思われ、頸部櫛描横走直線文を境に上部は振幅の小さい櫛描波状文と櫛描斜走短線文を施し、下部は櫛描鋸歯文を施し、中に櫛描斜走文が充填されている。その他、図示し得なかった甕において櫛描波状文、櫛描斜走直線文が主流を占めており、櫛描文は僅かである。また、壺において口縁部内面赤色塗彩の施されている破片、鉢・高坏の全面赤色塗彩の施こされている破片等が出土しており、以上の遺物をもって、本住居址の所産期を弥生時代後期前半としておきたい。

(羽毛田伸)

63) Y124号住居址

遺構 (第244・245図、図版 八十二・八十三)

本住居址は台地中央の西端、あ・い-17・18グリッド内に位置している。第13号周濠と重複関係をもち、住居址の南側の一部を破壊されている。また、北壁から東壁にかけては削平されており、壁体は残っていない。

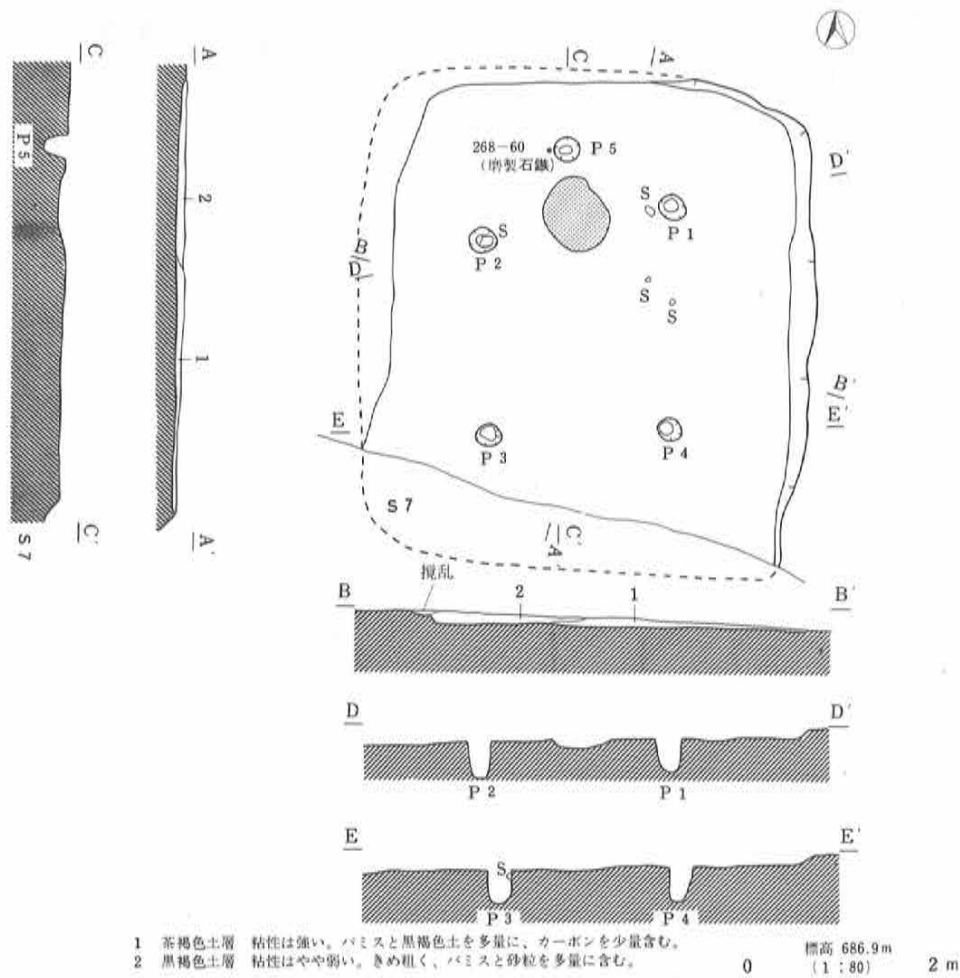
プランは東西の短軸長422cm (推定)、南北の長軸長510cm (推定)、東壁長457cm (推定)、西壁長458cm (推定)、南壁長390cm (推定)、北壁長380cmの隅丸長方形を呈し、床面積は21.00m²をはかる。長軸方位はN-7.5°-Eをさす。

覆土は薄く二層からなる。第2層は北西側に偏在する、パミスと砂粒を多量に含む黒褐色土である。第1層は南東側に偏在する黒褐色土、パミスを多量に、カーボンを少量含む茶褐色土である。

確認面からの壁高は0~15cmをはかり、遺存状態が比較的良好な東壁は床面からの立ち上がりが緩い。壁体は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されているが、軟弱である。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の黄褐色火山灰層まで掘り窪めたのち、黒褐色土を主体とする粘性の強い土を住居内全面に1~2cm薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね、フラットな構築状態であり、また、堅くし



第244図 Y124号住居址実測図

まっている。

ピットは5個検出された。主柱穴は4本(P₁~P₄)が整然と配置されている。P₁は28×29cmの円形を呈し、26cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は28×30cmの円形を呈し、39cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は25×30cmの楕円形を呈し、37cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は27×27cmの円形を呈し、37cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₅は北壁下の中央西寄りに位置し、炉址に近接する。棟持柱と考えられ、26×28cmの円形を呈する。深さは25cmをはかり、断面形はU字形を呈する。

炉址はP₁・P₂北側主柱穴間の中央から検出された。長軸長80cm・短軸長66cmの歪んだ楕円形を呈し、長軸方位はN-5°-Eをさす。床面からの掘り込みは最深部で9cmをはかり、火床部設定箇所が一段深く掘り込まれている。火床部は掘り込み内の南東箇所にあたる一段深い部分に黒褐色土が少量まじる砂質の土(第2層)を埋め戻して構築されており、そのほぼ中央には円柱状の細長い礫が炉縁石として置かれている。覆土はカーボンと砂粒を含む黒色土(第1層)のみからなる。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が出土しているが、いずれも量は少なく、分布傾向も散漫である。268-55(磨製石鏃)がP₁西側から出土している他、246-2・3・5(甕)、268-60(磨製石鏃未成品)がI区、246-4・6(甕)がIII区から出土している。

遺物(第246図)

本住居址出土遺物で図示し得たものは拓影図6点のみであった。246-1は受口状の甕、口縁部破片であり、口唇部に縄文、口縁部にLR縄文を施した後、篋描山形文を2条施し、頸部僅かに横走直線文が観察でき、内面に赤色塗彩が施されている。246-2・3・4・5・6何れも櫛描文であり、5は胴部に櫛描垂下文が施されている。これらの遺物をもって、本住居址の所産期は弥生時代中期後半と考えたい。(羽毛田伸)

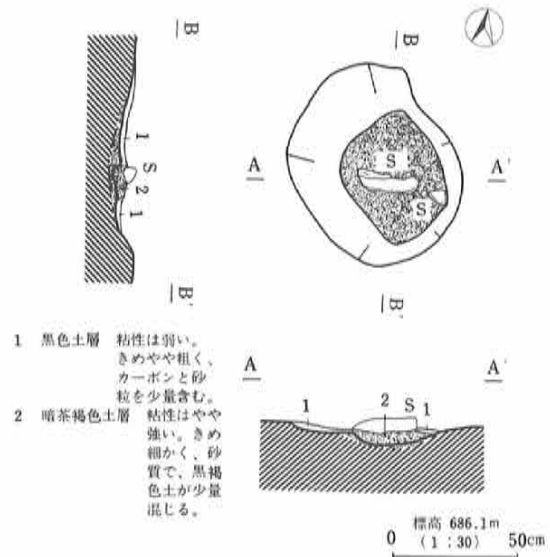
64) Y125号住居址

遺構(第247・248図、図版 八十二・八十三)

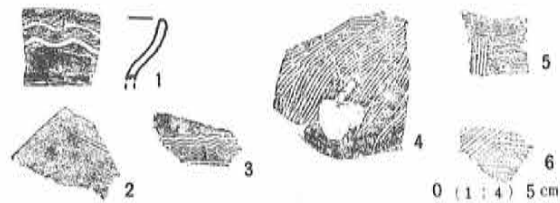
本住居址は台地のほぼ中央部、い・う・え・お-14・15、い-13グリッド内に位置している。Y129号住居址、第166号土坑と重複関係を持ち、住居址の西壁の北側を破壊されている。

プランは東西の短軸長600cm(推定)、南北の長軸長803cm、東壁長704cm、西壁長713cm(推定)、南壁長542cm、北壁長554cmの隅丸長方形を呈し、床面積45.52㎡をはかる本遺跡内弥生時代住居址の中でも最大規模を有する住居址である。長軸方位はN-23°-Eをさす。

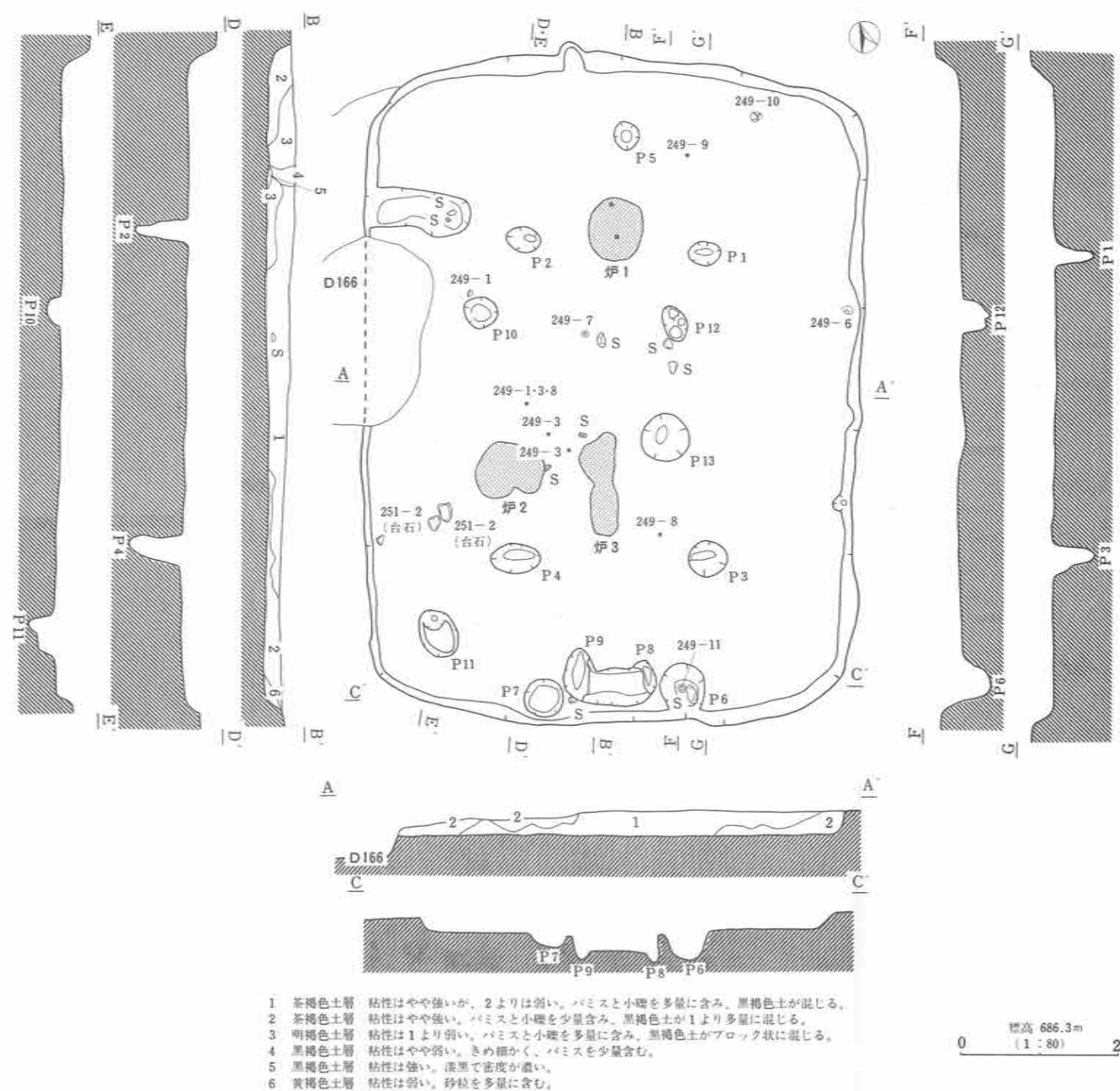
覆土は厚く、六層からなる。おおむね、プライマリーな堆積状態を示していると思われる。第1層は住居中央に最も厚く、レンズ状の堆積を示す。黒褐色土がまじり、パミスと小礫が多量に含まれる茶褐色土である。第2・3層は住居址の壁ぎわに主に堆積する。第3層は北壁下のみにもみられ、黒褐色土がブロック状に混ざり、パミス



第245図 Y124号住居址炉址実測図



第246図 Y124号住居址出土土器拓影図



第247図 Y125号住居址実測図

と小礫を多量に含む明褐色土である。第2層は各壁下に堆積する。第1層よりも黒褐色土が多量にまじる反面パミスと礫の含有量が少ない茶褐色土である。第4層は攪乱層とも考えられ、北壁下の第3層の流れを分断している。パミス少量含むきめの細かい黒褐色土である。第5層は第4層直下の床面上に小範囲で薄く堆積する。漆黒で密度が濃い黒色土である。第6層は南壁下にのみ認められる。砂粒を多量に含む黄褐色土で、壁体の崩落層と理解することができる。

確認面からの壁高は未重複箇所では15.5~35cmをはかり、良好な遺存状態

である。床面からの立ち上がりは緩く、壁面はおおむね平滑である。壁体の上位は地山の黄褐色火山灰層、下位は地山の砂層を利用して構築されており、下位はもろく崩れ易い。

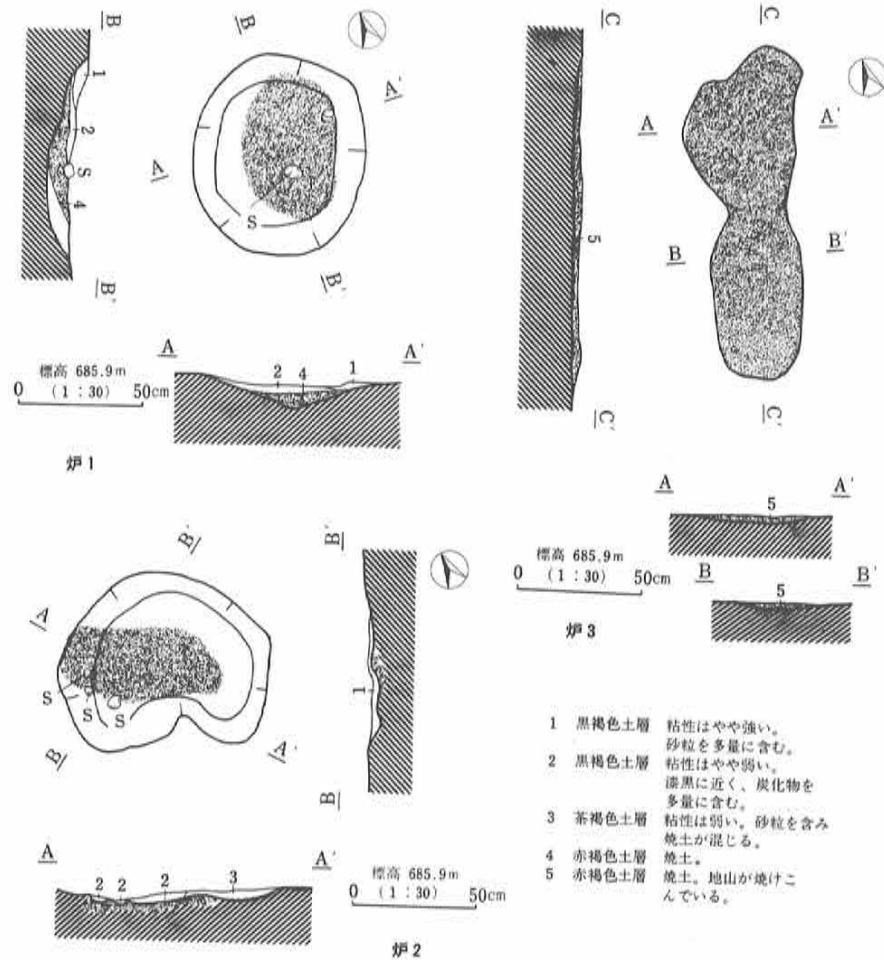
壁溝は検出されなかった。

床面は地山の砂層まで掘り窪めたのち、粘性の強い黒褐色土を住居址内全面に1~2cmの厚さで薄く埋め戻し、叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね、フラットな構築状態であり、全体的にはやや軟弱であるが、炉址の周辺はよく踏みしまっている。

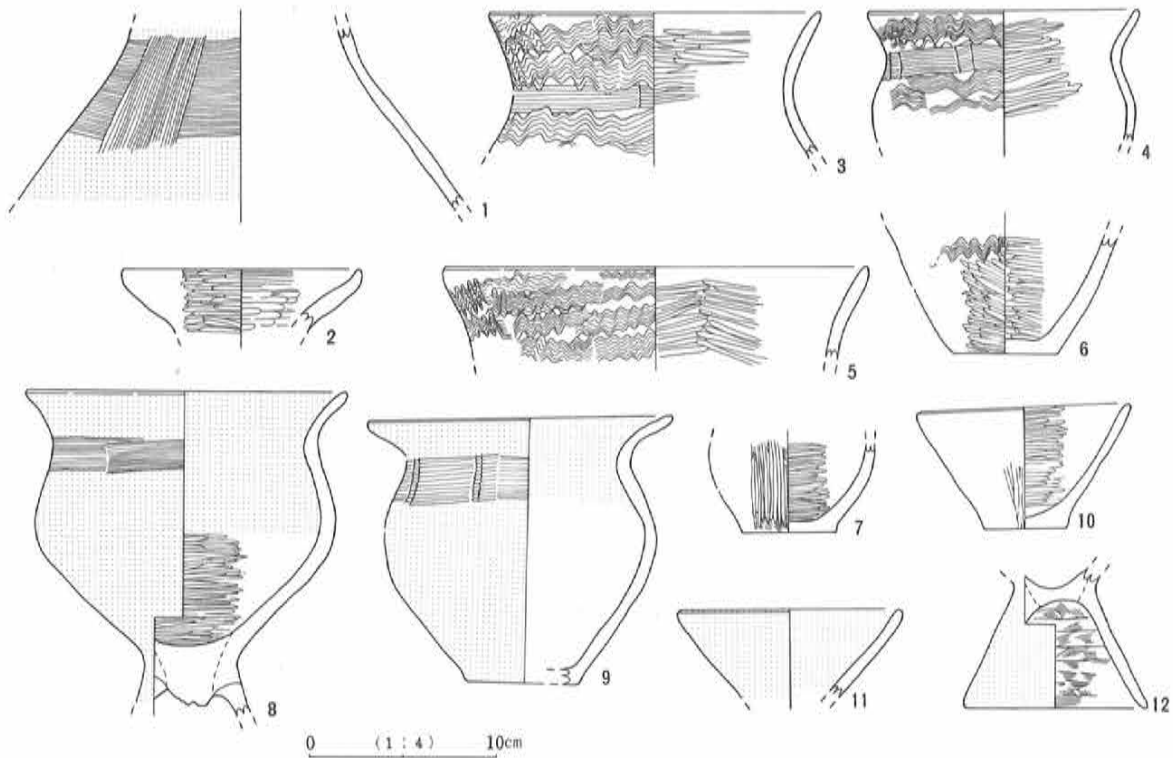
ピットは13個検出された。支柱穴は4本(P₁~P₄)が整然と配置されている。平面形態はいずれも東西に細長い楕円形で一致している。P₁は31×42cm、P₂は33×45cm、P₃は45×51cm、P₄は37×63cmの規模を有し、深さはそれぞれ、47cm・62cm・68cm・53cmをはかる。また、断面形はいずれも細長いU字形を呈する。

P₅は北壁下中央に位置し、炉址1と近接する。棟持柱と考えられ、33×31cmの円形を呈する。深さは41cmをはかり、断面形はU字形を呈する。

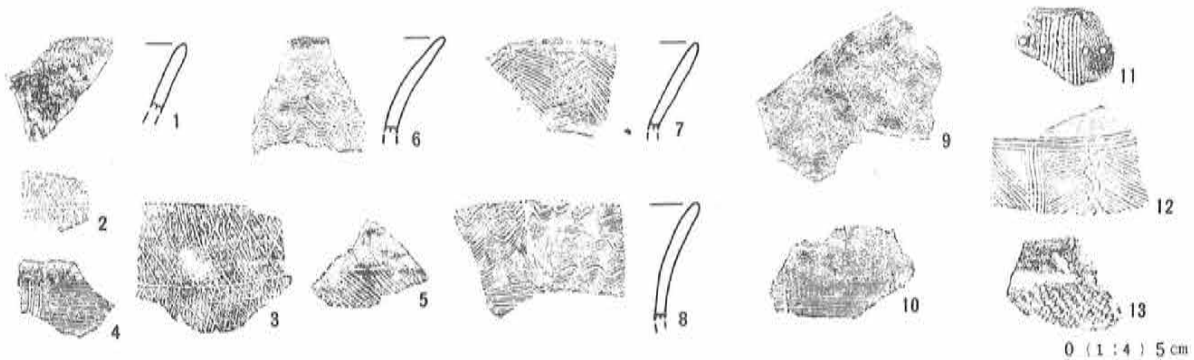
P₆~P₉の4個は南壁下中央に位置し、入口施設に関連する柱穴およびピットと考えられる。外側のP₆・P₇、内側のP₈・P₉がそれぞれ同様な形態を有しており、それぞれ2個一対となっている。P₆は58×57cmの円形を呈し、37cmの深度を有する。断面形は緩いU字形を呈する。P₇は47×48cmの円形を呈し、17cmの深度を有する。断面形は鍋底状を呈する。P₈・P₉はともに南北に細長い楕円形を有し、両者の空間は幅45cm内外、深さ23cm内外の溝で連結されている。P₈は42×18cm、P₉は65×31cmの規模を有し、床面からの掘り込みはそれぞれ35cm・29cmをはかる。断面形はいずれも細長いU字形を呈する。P₆・P₇は入口階段下の貯蔵用ピット、P₈・P₉は階段用の柱



第248図 Y125号住居址炉址実測図



第249図 Y125号住居址出土土器実測図



第250図 Y125号住居址出土土器拓影図

穴と理解することができる。

この他、P₁₀、P₁₁、P₁₂、P₁₃の性格については不明である。P₁₀はP₂南西側に位置し、41×45cmの円形を呈する。深さは18cmをはかり、断面形は半円形を呈する。P₁₁は南西コーナーに位置し、63×48cmの楕円形を呈する。掘り込みの底面北側には更に深い落ち込みがあり、最深部は30cmをはかる。P₁₂はP₁の南西側にあり、47×31cmの楕円形を呈する。深さは35cmをはかる。P₁₃はP₃の北西側にあり、60×61cmの円形を呈する。深さは17cmをはかる。

炉址はP₁・P₂北側の支柱穴間（炉1）、P₄の北側（住居址の南西部）（炉2）、住居址の中央南寄り（炉3）の三箇所から検出された。

炉1は79×68cmの楕円形を呈し、長軸方位は真北をさす。床面からの掘り込みは最深部で14cmをはかり、断面形はおおむね弓状を呈する。火床部はこの掘り込み内に黒褐色土（第1層）と黄色火山灰（第4層）を埋め戻して構築されており、主体は掘り込みの北東側に偏在する真赤にやけた楕円状の焼土範囲にあったと考えられる。焼土範囲内の南側には長さ15cmの円礫が置かれており、炉縁石とも考えられる。覆土は薄く、二層（第1・2層）

第55表 Y125号住居址出土土器観察表

神 番	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
249-1	壺	— (9.0) —		内) 磨滅著しく不明。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。 文) 単位不明の櫛描「T字文C」が施されている。	回転実測B No.3・4、I区
249-2	甕	12.8 (3.4) —	口縁部は受口状に立ち上がる。	内) ヨコナデおよび横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整の後、横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B 覆土
249-3	甕	17.8 (7.7) —	口縁部は弓状に外反する。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口唇部はハケメ調整が施されている。 文) 頸部に7本一組の櫛描波状文(2連止め・右回り)が施された後、口縁部には5~7本一組の櫛描波状文(下から先に描かれている)、胴部にも6本一組の櫛描波状文が施されている。	回転実測B No.4・5・6、I区、III区、IV区
249-4	甕	(14.4) (6.9) —	最大径は口縁部と胴部とはほぼ等しい。口縁部は弓状に外反し、胴部は上位で張る。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 口縁部から胴部まで7~9本一組の櫛描波状文が施された後、頸部に9本一組の櫛描波状文(2連止め)が一帯施されている。	回転実測B I区
249-5	甕	(22.4) (5.0) —		内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) ハケメ調整の後、文様が施されている。 文) 口縁部に5~7本一組の櫛描波状文が施されている。	回転実測B I区、な31グリッド
249-6	甕	— (6.2) 5.2		内) 黒色処理・丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様施文の後、丁寧な斜位および横位のヘラミガキが施されている。 文) 櫛描波状文(本数不明)が施されている。	回転実測B No.11
249-7	甕	— (4.7) 5.0		内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整の後、丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.10
249-8	脚付鉢	17.0 (17.0) —	最大径は口縁部と脚部とはほぼ等しい。口縁部は弓状に外反し、胴部は中位で張る。鉢部と脚部の接合には独立したホゾが用いられたと思われる。	内) 鉢部上半は赤色塗彩・横位のヘラミガキが施され、下半は横位のヘラミガキが施されている。 外) 鉢部は赤色塗彩・横位のヘラミガキが施され、脚部は赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。 文) 14本一組の櫛描横走平行線文(右回り)が施されている。	回転実測A No.4・9、III区、IV区
249-9	鉢	(16.2) 14.3 (6.0)	最大径は口縁部にある。口縁部は広い頸部から強く外反する。胴部は上位で張りを持つ。平底である。	内) 口縁部から胴部上位は赤色塗彩・ヘラミガキが施され、それ以下は磨滅著しく不明。 外) 全面に赤色塗彩・ヘラミガキが施されている。 文) 頸部に12本一組の櫛描波状文(2連止め・右回り)が施されている。	回転実測A No.12
249-10	鉢	11.4 6.6 4.4	口辺部は内湾気味に逆「ハ」の字状に開く。口唇部は面取りされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.7 外面は赤色塗彩されているか?
249-11	鉢	(12.0) (4.6) —	口辺部は逆「ハ」の字状に開く。口唇部は面取りされている。	内・外面ともに赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B III区、IV区
249-12	高坏	— (7.4) 9.8	坏部と脚部との接合は独立したホゾに依るものと思われる。内面に粘土紐の接合部が観察できる。	内) 坏部は赤色塗彩・脚部は横位および斜位のハケメ調整が施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.8

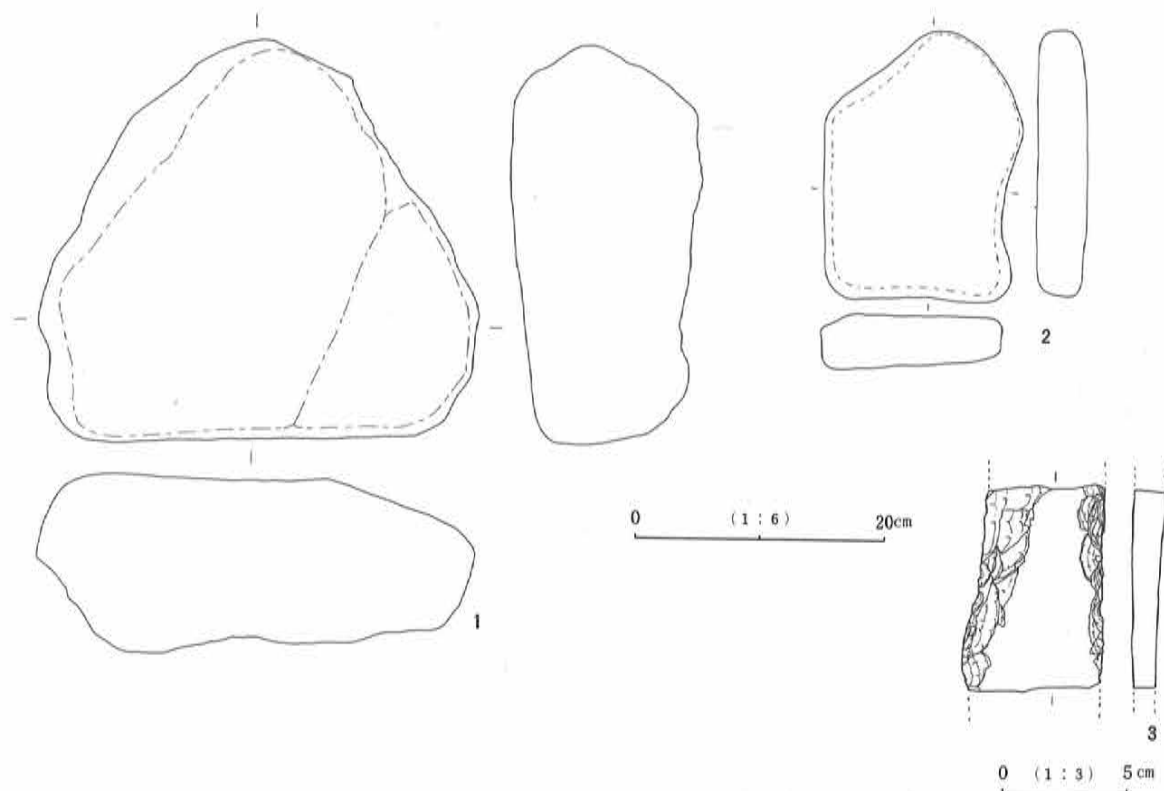
のみからなる。

炉2は85×59cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-85°-Eをさす。床面からの掘り込みは最深部で6cmをはかるが概して浅く、断面形は起伏に富む。火床部の主体は掘り込み内の西寄りにあり、地山が真赤に焼け込んだ焼土範囲がみられる。覆土は第1・2・3層からなる。

炉3は、床面が赤く焼け込んだ状態で掘り込みはもたない。長さ130cm、幅22cmの細長い不整形の範囲を有し、長軸方位はN-19°-Eをさす。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器・石器が多量に出土しているが、完存品は少なく破損品が多い。図化した遺物は249-2・4・5・7(壺・甕・鉢)、250-1~13(壺・甕)が覆土内、他は床面上、ピット内からの出土である。このうち、249-2(壺)、250-11~13(壺・甕)は本住居址への混入遺物であり、この他の遺物が本住居址の所産期を決定する目安となる。249-1(壺)はP₁₀北側から炉2北側へかけて幅広く分布し、249-3(甕)も炉2北側に散在する。この他、炉2周辺には249-8(脚付鉢)、251-1・2(台石)も分布する。249-8(脚付鉢)



第251図 Y125号住居址出土石器実測図

は炉3の東側にも分布し、249-11（鉢）はP。内から、249-6（甕）は東壁下中央北寄り、249-9・10（鉢）は北壁下東側から出土している。図示した遺物の分布傾向からもわかるように、本住居址内では特に遺物が集中する傾向はみられず、散在する傾向が強いことがわかる。また、炉1内からは獣骨が出土している。

遺物（第249・250・251図、図版 八十三）

本住居址出土遺物には弥生土器・石器・獣骨がある。弥生土器の器種には壺・甕・鉢・脚付鉢・高坏がある。

壺は良好な資料に乏しいがいずれも赤色塗彩される。頸部文様はT字文Cが施される249-1・4、篋描横走平行線文の区画内に櫛描斜走直線文が横位羽状に施される250-5、篋描横走平行線文の区画内に篋描斜格子目文が施される250-2・3、口縁部上端に櫛描波状文が施される250-1などがある。また、胴部下位に明瞭な外稜を有する破片もみられる。

甕には櫛描波状文が施される249-3・4・5・6、250-6・8・9・10と縦位羽状の斜走直線文が施される250-7がある。249-3・4・5、250-6・8・9・10はいずれも口縁部が弓状に外反する。頸部には、249-3に等間隔止めの櫛描簾状文、249-4、250-10に2連止め簾状文、250-8に不明の簾状文が施されている。施文順序は249-3が頸部に簾状文を施したのち、口縁部では下から上へ、胴部では上から下へ櫛描波状文が施され、249-4は口縁部から胴部にかけて上から下へ櫛描波状文が施されたのち、頸部に簾状文が施されている。また、250-6の口唇部には擬縄文が施されている。

鉢には口縁部が強く外反し、胴部は中位上方で張る249-9がある。外面全面と内面の口～頸部に赤色塗彩、頸部に右回りの櫛描簾状文が施されている。同様な形態で脚付の249-8もある。また、口辺部が逆「ハ」の字状に開く249-10・11もあり、10は無彩、11は赤色塗彩が施されている。249-12は赤彩の高坏脚部片である。

石器は花崗岩製の台石251-1・2、安山岩製の打製石斧251-3がある。

以上の共伴遺物から本住居址の所産期は弥生時代後期前半と考えられる。

（小山）

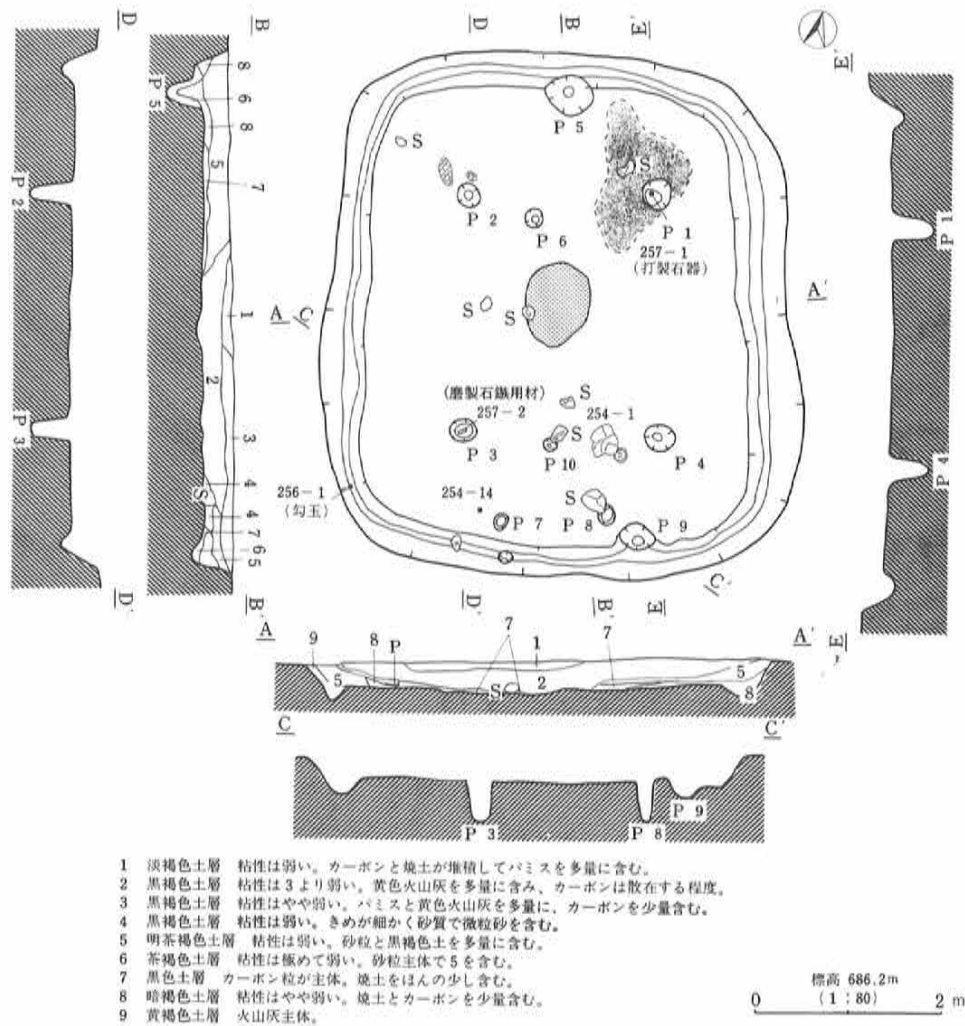
65) Y126号住居址

遺構 (第252・253図、図版 八十四)

本住居址は台地中央の西側、え・お-18・19、か-18、お-17グリッド内に位置している。他遺構との重複関係はもたない。

プランは東西の短軸長403cm、南北の長軸長528cm、東壁長403cm、西壁長423cm、南壁長392cm、北壁長306cmの隅丸長方形を呈し、床面積は18.30㎡をはかる。長軸方位はN-18°-Wをさす。

覆土は九層からなる。おおむね、プライマリーな堆積状態を示すと思われるが、住居址埋没過程において、数回にわたって火入れ行為が行われたことが、焼土、カーボン粒主体の最上層(第1層)や、カーボン粒主体で焼土が含まれる第7層の存在から想定することができる。この他、第3層は第1層とともに本遺構の最上層にあたる。パミスと黄色の火山灰を多量に、カーボンを少量含む黒褐色土である。(第2層は住居址中央を中心としてレンズ状に厚く堆積する。黄色火山灰を多量に含み、カーボンも極く少量まじる黒褐色土である。)第4層は砂質できめの細かい黒褐色土で、南壁下壁溝前の床面上に小範囲で薄く堆積する。第5層は砂粒と黒褐色土を多量に含む明茶褐色土で、住居址の各壁下に堆積する東・西・南壁下は薄く、北壁下は厚い堆積である。第7層は第5層の埋没過程と有機的なつながりをもって形成されたものと考えられ、北・東側では第5層の下に、南・西側では第5層の上に堆積している。第6層は南・北壁下の壁溝底面にみられる。砂粒主体で第5層がまじる。第8層は北・東・



第252図 Y126号住居址実測図

西壁下に極く僅かにみられる。焼土とカーボン少量含む。第9層は西壁下の壁溝内のみ堆積する。火山灰主体で壁体の崩落層と考えられる。

確認面からの壁高は19.5~34cmをはかり、本遺跡の弥生時代中期後半の住居址の中では非常に深い掘り込みをもち、良好な遺存状態である。床面からの立ち上がりは急な傾斜である。壁体の上位は地山の黄褐色火山灰層、下位は地山の砂層を利用して堅固に構築されている。壁面も極めて平滑である。

壁溝は住居址の壁下を全周する。溝幅13~33cm、深さ10~20.5cmの整った掘り込みを有する。

床面は地山の黄褐色砂層まで掘り窪めたのち、粘性の強い黒褐色土を全面に1~2cmの厚さで薄く埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね、平坦で丁寧な構築状態であり、堅固で良く踏みしめられている。

ピットは9個検出された。支柱穴は4本(P₁~P₄)が整然と配置されている。P₁は33×31cmの円形を呈し、45cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₂は26×25cmの円形を呈し、43cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃は24×29cmの楕円形を呈し、42cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₄は29×33cmの円形を呈し、44cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。

P₅は北壁直下のほぼ中央に位置し、棟持柱と考えられる。43×53cmの楕円形を呈し、断面形はU字形を呈する。

P₇・P₈は南壁下中央西寄りに並ぶ。入口施設に関連する柱穴と考えられる。P₇は20×15cmの楕円形を呈し、34cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₈は21×19cmの円形を呈し、43cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。

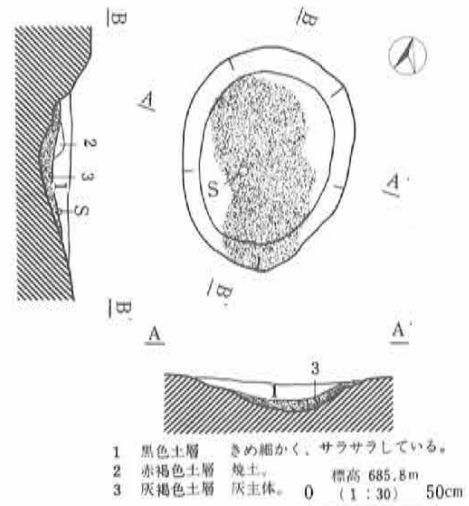
その他、P₆はP₂の南東側に位置し、20×19cmの円形を呈する。断面形はU字形を呈する。P₉は南壁下の東寄りに位置し、30×38cmの楕円形を呈する。深さは43cmをはかり、断面形はU字形を呈する。いずれも性格は不明である。

炉址は住居址の長軸・短軸の交点(住居址の中央)から検出された。長軸89cm、短軸66cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-12°-Wを示す。床面からの掘り込みは最深部で23cmをはかり、断面形は弓状を呈する。火床部は掘り込み内に黄褐色火山灰(第3層)を5cm程の厚さで埋め戻して設けられている。77×34cmの細長い不整形の真赤に焼けた焼土範囲を有し、炉縁石はみられない。火床部内の北側には灰の堆積(第2層)がみられ、覆土はきめの細かい黒色土一層のみからなる。

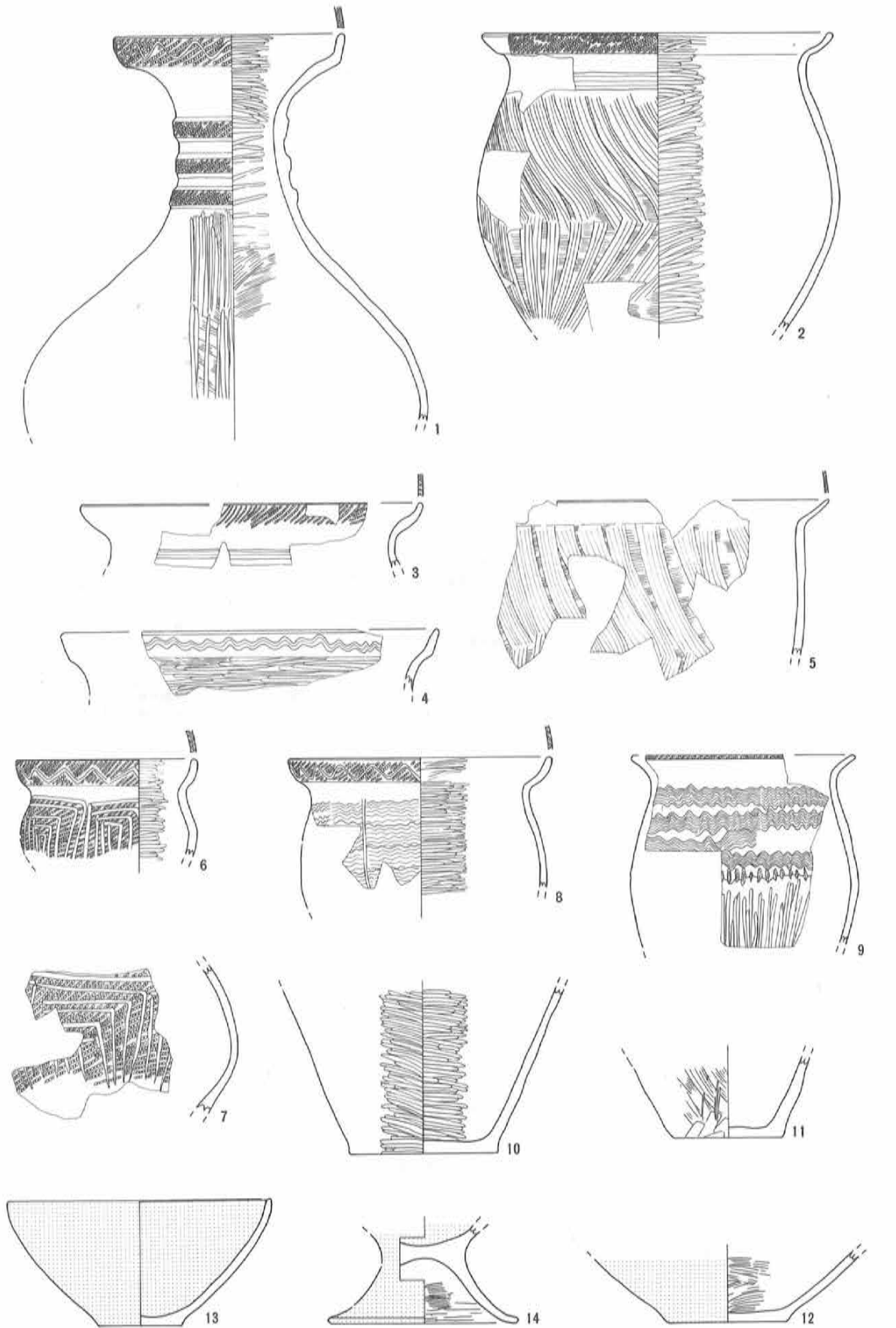
遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器、土製品、石器が多量に出土している。土器は形態を知ることのできる資料が多いが完存品はなく、ほとんどが投棄遺物と見做すことができ、II区覆土内から出土した破片が、西側に近接するY122号住居址出土の237-3(壺)と接合関係をもつ。図化した遺物は床面上、ピット内、覆土内から出土したもののすべてが含まれるが、おおむね一括性を首肯できる資料である。

254-1(壺)はP₄西側の床面上、257-2(磨製石鏃用材)はP₃内、254-14(脚付鉢)はP₇西側の床面から5cm浮いた覆土内、257-1(打製石器)はP₁内、256-1(土製勾玉)は南西コーナー覆土内から出土している。その他、254-2・3(甕)がP₂内、254-5・8(甕)がII・III区の覆土内、及び床面上、254-9・11(甕)、254-6(壺)がI区、254-4・6・7・10(甕)、255-1・12・15・16(壺・甕)がII区、255-4・



第253図 Y126号住居址炉址実測図



第254图 Y126号住居址出土土器实测图

第56表 Y126号住居址出土土器観察表

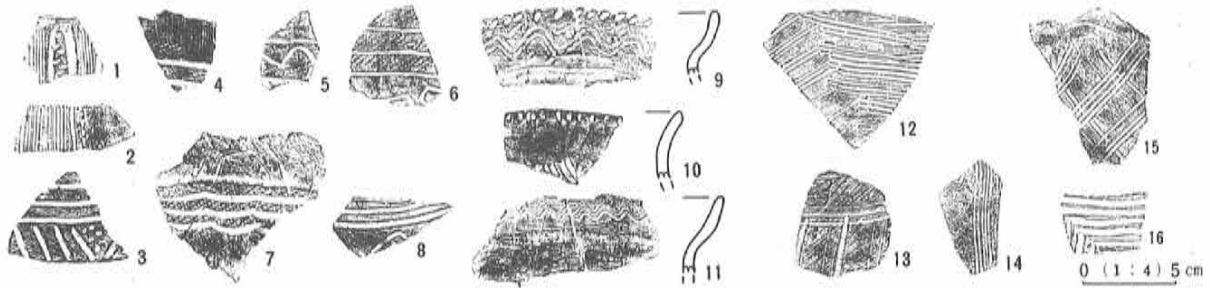
押番 図号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
254-1	壺	16.4 <27.2> — (28.4)	最大径は胴部中位にあり、口縁部は細い筒状の頸部から明瞭な段を有し受け口状に立ち上がる。口唇部は面取りされている。	内) 口縁部から頸部に横位のヘラミガキ、頸部は雑な横位のヘラミガキ、頸部より下は斜位のハケメ調整が施されている。 外) 頸部から上にヨコナデ、胴部上半は縦位のハケメ調整→縦位のヘラミガキ、下半は斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部にLR縄文を地文とし、ヘラ描連続山形文が施され、口唇部にもLR縄文が施されている。頸部は三帯の隆帯上にLR縄文が施文されている。	回転実測A No 6、IV区、Eベルト、Sベルト
254-2	甕	(24.6) <21.0> — (25.4)	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しく、口縁部は広い頸部から受け口状に立ち上がり、胴部は中位でふくらみ偏球状を呈する。口唇部は面取りされている。	内) 横位のハケメ調整→斜位および横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部と口縁部にLR縄文、頸部に5本一組の帯描横走平行線文が1帯、胴部に4本一組の帯描斜走直線文が横位羽状(右回り)に上から下へ施されている。	回転実測B I区、II区、P ₃
254-3	甕	(24.2) <4.5> —	口縁部は広い頸部から受け口状に立ち上がり、口唇部は面取りされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部と口縁部にLR縄文、頸部は帯描横走平行線文が施されている。	破片実測A II区、P ₁ 、床土
254-4	甕	(26.8) <4.4> —	口縁部は広い頸部からしっかりした受け口状に立ち上がり、胴部はあまりふくらまない。口唇部は面取りされている。	内・外面ともに横位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部に3本一組の帯描波状文が1帯施されている。	破片実測A II区
254-5	甕	(23.4) <12.7> —	口縁部は短く外反し内弯気味に立ち上がり、胴部はあまりふくらまない。口唇部は面取りされている。	内・外面ともに横位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部に「E」の捺糸文、頸部以下は6本一組の帯描斜走直線文が横位羽状(右回り)に上から下へ施されている。	破片実測B I区、II区、床土
254-6	台付甕	12.8 <6.8> —	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しく、口縁部は受け口状に立ち上がり、胴部は中位で張りを持つ。口唇部は面取りされている。	内) ハケメ調整→丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整が施されている。 文) 口縁部と胴部にLR縄文を地文とし、口縁部に2本一組の帯描連続山形文、胴部に5重のヘラ描「コ」の字重ね文が施され、口唇部にもLR縄文が施文されている。	回転実測A II区
254-7	甕	— <10.5> —		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 磨滅著しく不明。 文) LR縄文を地文とし、ヘラ描「コ」の字重ね文が施されている。	破片実測B II区、ベルト内
254-8	甕	18.6 <9.7> —	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しく、口縁部は受け口状に立ち上がり、胴部は中位でふくらむ。	内) 横位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部にヨコナデが施されている。 文) 口縁部にLR縄文を地文とし、2本一組の帯描波状文が1帯、胴部は6本一組の帯描波状文が垂下されている。口唇部にもLR縄文が施されている。	回転実測A II区、III区、Wベルト内、床土
254-9	甕	(15.6) <13.5> — (16.0)	最大径は口縁部と胴部ではほぼ等しく、口縁部は広い頸部から短く外反し、胴部は中位でふくらむ。口唇部は面取りされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整→胴部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文、胴部に8本一組の帯描波状文(右回り)が上から下へ施され、胴部中位のヘラ描による刺突文により文帯帯が区切られている。	破片実測A I区、ベルト内
254-10	甕	— <11.6> (10.4)		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B II区
254-11	甕	— <5.7> 7.8		内) 磨滅著しく不明。 外) 斜位のハケメ調整→ヘラケズリ→粗いヘラミガキが施されている。	回転実測A I区
254-12	壺	— <4.6> 8.2		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B IV区
254-13	鉢	(18.6) 8.8 6.0	口辺部は逆「ハ」の字状に開き、内弯気味に立ち上がる。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B IV区
254-14	脚付鉢	— <6.9> (13.6)	脚部は「ハ」の字状に開く。鉢部と脚部の接合方法は不明。	内) 鉢部に赤色塗彩・横位のヘラミガキ、脚部は横位のハケメ調整→端部にヨコナデが施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No 5

5・7・13・14(壺・甕)がIII区、254-12・13(甕・鉢)、255-2(壺)がIV区から出土している。

遺物(第254・255・256・257図、図版 八十五)

本住居址の出土遺物には弥生土器・土製品・石器・炭化米がある。

弥生土器の器種には、壺・甕・鉢・脚付鉢がある。壺には外稜が明瞭に残るしっかりとした受口口縁を有する254-1がある。頸部は細く、筒形を呈し、胴部は中位で大きくふくらむ。口唇部は面取りされ、縄文が施され、

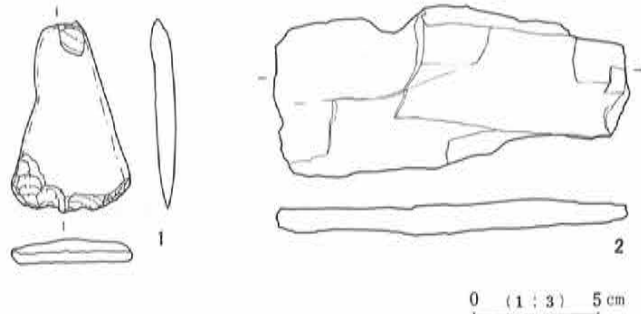


第255図 Y126号住居址出土土器拓影図

口縁部はLR縄文を地文として篋描連続山形文が1条、頸部は横ナデを強く行った結果形成された3帯の隆帯上にLR縄文が施されている。この他、壺には篋描文で区画された櫛描垂下文の周囲に篋描刺突文もめぐらす255-1・2、篋描横走平行線文の文様帯内に竹管状の刺突が施された連続三角文が施される255-3、LR縄文を地文とした篋描横走平行線文の文様帯下に篋描の矩形区画をもつ255-6、篋描横走平行線文・連続山形文が施される255-8などの胴部片、LR縄文地文上に篋描横走平行線文が施される255-4、篋描横走平行線文・連続山形文が施される255-5、篋描横走平行線文・連続山形文が施される255-7などの頸部片がある。



第256図 Y126号住居址出土土製品実測図



第257図 Y126号住居址出土土器実測図

甕には単純口縁を有するものと受口口縁の甕は受口部の外稜が不明瞭なもの(254-2・3・5・8、255-11)が多く、明瞭なもの(254-4、255-9)は少なく、口唇部は面取りされ、縄文が施され、胴部は右回りの櫛描波状文が上から下へ施文され、直下に櫛描刻目文がめぐっている。250-10は口唇部に篋描の刻目、胴部に櫛描斜走直線文が施されている。受口口縁の甕は受口部の外稜が不明瞭なもの(254-2・3・5・8、255-11)が多く、明瞭なもの(254-4、255-9)は少ない。特に254-5は直線化が著しい。口縁部文様は縄文をもつ254-2・3・8と縄文地文なしで櫛描波状文が施される254-4、255-9・11、無文の254-5などがみられる。254-8には縄文地文上に篋描連続山形文、255-9には口唇部に篋描刻目文が加えられている。頸部文様は254-2・3、255-9は櫛描横走平行線文帯をもつが、他は文様帯をもたない。胴部文様は横位羽状の櫛描横走平行線文が施される254-2・5、上から下へ施される櫛描波状文帯上に2本一組の櫛描文を垂下させる254-8などがみられる。この他、甕には櫛描斜走直線文が縦位羽状に施される255-12・13、斜格子目状に施される255-15、櫛描垂下文の区画内に櫛描波状文が充填される255-14などの胴部片がみられる。

台付甕には受口口縁を有し、口縁部にLR縄文を地文とした篋描連続山形文、胴部にLR縄文を地文とした篋描「コ」の字重ね文が施される254-6、同様な胴部文様をもつ254-7、縄文地文をもたない255-16などがある。鉢には内外面に赤色塗彩が施される椀状を呈する254-13がある。脚付鉢254-14は外面に赤色塗彩が施される脚部である。

土製品には勾玉256-1があり、焼成前の1孔を有する。

石器は安山岩製の打製石器257-1、千枚岩製の磨製石鏃の用材257-2がある。

以上の出土遺物から本住居址の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。

(小山)

66) Y127号住居址

遺構 (第258・259図、図版 八十六)

本住居址は台地中央の西寄り、え・お・か-16・17グリッド内に位置している。第13号周濠と重複関係を持ち、住居址の東側を破壊されている。

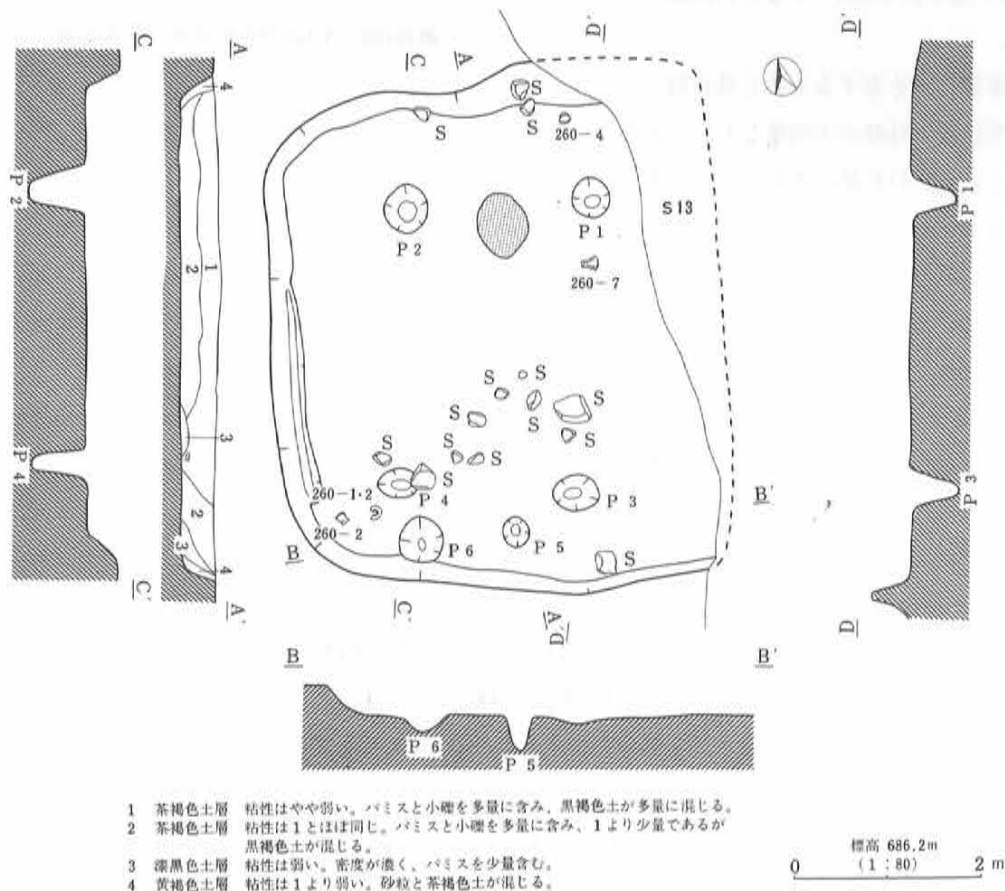
プランは東西の短軸長398cm (推定)、南北の長軸長488cm、東壁長480cm (推定)、西壁長400cm、南壁長398cm、北壁長406cm (推定) の隅丸長方形を呈し、床面積は20.56㎡ (推定) をはかる。長軸方位はN-11°-Eをさす。

覆土は四層からなり、プライマリーな堆積状態を示していると思われる。第1・2層は住居址中央を中心として、レンズ状に広く厚く堆積する。第1層は黒褐色土が多量にまじり、パミスと小礫を多量に含む茶褐色土、第2層は黒褐色土が少量まじり、パミスと小礫を多量に含む茶褐色土である。第3層は南壁下にみられ、北壁下にはみられない。粘性が強く、パミスを含む黒色土である。第4層は北・南両壁下にみられる。砂粒と茶褐色土がまざっており、壁体の崩落層と理解される。

確認面からの壁高は残存部で2~40cmをはかり、南壁東側の遺存状態は極めて悪い。床面からの立ち上がりは急傾斜であり、壁面はおおむね、平滑である。壁体の上位は地山の黄褐色火山灰層、下位は地山の砂層を利用して構築されており、下位は軟弱で崩れ易い。

壁溝は西壁下の南側から検出され、他には存在しない。溝幅11~18cm、床面からの掘り込みは深さ4~6cmをはかり、割合整った掘り込みをもつ。

床面は地山の黄褐色砂層まで掘り窪めたのち、茶褐色土を全面に1~2cmの厚さで薄く埋め戻し、叩きしめた「叩き床」が施されている。箇所凹凸がみられるが、おおむね堅固な構築状態と言える。



第258図 Y127号住居址実測図

ピットは6個検出された。

支柱穴は4本($P_1 \sim P_4$)が検出されたが、整然とした配置でなく、住居址プランの長軸方位に比べると東側への傾きが著しい。 P_1 は41×39cmの円形を呈し、48cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。 P_2 は50×46cmの円形を呈し、59cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。 P_3 は37×47cmの東西に長い楕円形を呈し、52cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。 P_4 は30×39cmの東西に長い楕円形を呈し、55cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。

$P_5 \cdot P_6$ は南壁下西側に並ぶ。入口施設に関わる柱穴である可能性が高い。 P_5 は32×28cmの楕円形を呈し、36cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。 P_6 は49×47cmの円形を呈し、20cmの深度を有する。断面形は緩いU字形を呈する。

炉址は $P_1 \cdot P_2$ 北側支柱穴間のやや南寄りから検出された。68×55cmの整った楕円形を呈し、長軸方位は $N-6^\circ-E$ をさす。床面からの掘り込みは最深部でも4.5cmと浅く、断面形は弓状を呈する。火床部は地山の砂層をそのまま利用しており、長さ23~26cmの大礫を北側に開口する「コ」の字状に囲って設定されている。石囲内の地山は37×32cmの楕円状に焼け込んでおり、長期にわたる使用が想定できる。覆土は砂粒とパミスを含む茶褐色土一層のみからなる。

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているが、その量は少ない。全体の遺物分布も、南西コーナーに若干集中する以外は、特に集中する箇所はみられず、散漫な分布状況を示している。

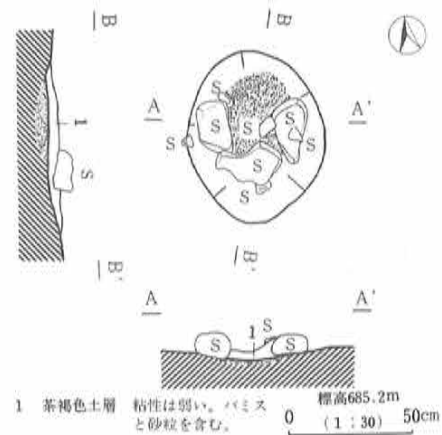
260-1・2(甕)は住居址の南東コーナーに分布する。260-2の接合関係をみると壁に近い破片ほど床面よりも高いレベルにあり、中央に向かってレベルを低下させ床面上に位置するようになる。260-4(甕)は北壁下の東側にあり、床面から6cm浮いている。260-4(高坏)は P_1 の南側にあり、床面からは5cm浮いている。この他、260-5(甕)が床面上、260-3(甕)は東区、260-6(台付甕)は西区から出土している。

いずれも、本住居址の年代を推定する目安となる資料と考えて大過ない。

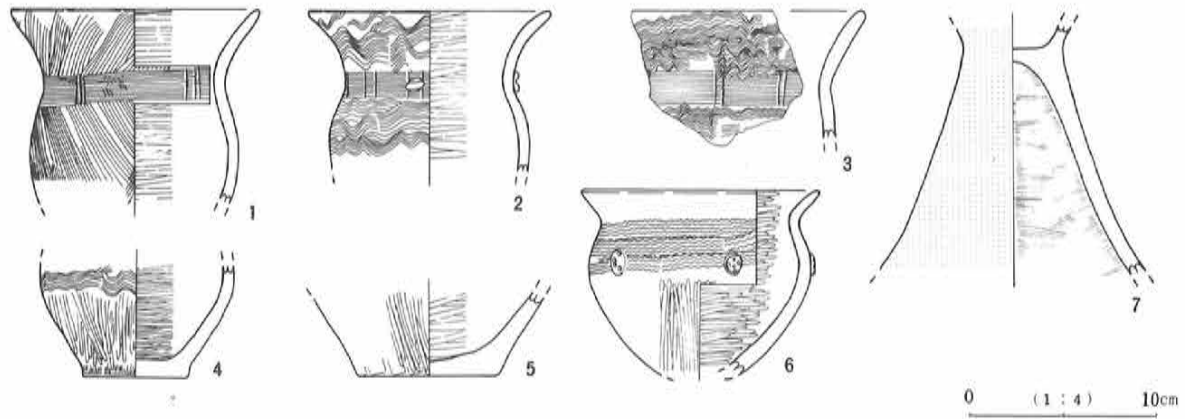
(小山)

遺物(第260図、図版 八十六)

本住居址出土遺物のうち、実測図7点が図示し得た。器種については、甕・台付甕・壺・鉢・高坏等がある。甕260-1の文様構成は口縁部から胴中央部まで楕描斜走直線文を施した後、頸部に3連止めの楕描簾状文が施文されており、内面は横位のへらミガキが施されて、外面全面に煤の付着が観察できる。甕260-2・3は口縁部・胴部楕描波状文、頸部2連止めの楕描簾状文が施文されており、2は楕描波状文を施した後、楕描簾状文が施文してあり、3は施文順序が逆である。また、2は頸部等間隔に4個の円板を横切る沈線を有した貼付文を有す。甕260-4は胴中央部まで楕描波状文が施文されていたと思われ、胴下部は縦位のへらミガキ、内面は刷毛目調整の後、丁寧な横位のへらミガキが施されており、内外面共に煤の付着が観察でき、外面には黒曜石の細片が器面に減り込んでいる。260-5は甕底部であり、外面縦位のへらミガキ、内面横位のへらミガキが施されている。台付甕260-6は胴上部が張り出しており、口縁部「く」の字状に強く外反する。文様及び調整は胴上部振幅の小さい楕描波状文が施文されており、無文になるところとの境に6個(3個残存)、円板に刺突の施された貼付文を有していると考えられ、内面は横位のへらミガキが施されている。また、外面には著しい煤の付着が観察できる。



第259図 Y127号住居址炉址実測図



第260図 Y127号住居址出土土器実測図

第57表 Y127号住居址出土土器観察表

番号	器種	法種	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
260-1	甕	13.2 <10.3> -	最大径は口縁部にある。口縁部は緩く「弓」状に外反し、胴部は中位でふくらむ。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部はヨコナデ、胴部は斜位のハケメ調整が施されている。 文) 口縁部から胴部は8~12本一組の櫛描斜走直線文、その後頸部に12本一組の櫛描簾状文(2連止め・右回り)が施されている。	回転実測B No 3、W区
260-2	甕	(12.8) <9.7> -	最大径は口縁部にある。口縁部は緩く「弓」状に外反し、胴部は中位でふくらむ。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部は横位のハケメ調整、頸部以下は縦位のハケメ調整が施されている。 文) 口縁部から頸部は10本一組の櫛描波状文(右回り)の後、頸部に10本一組の櫛描連状文(2連止め)、等間隔で4ヶ所に沈線をもつ円形浮文が施されている。	回転実測A No 1・2、W区
260-3	甕	- <6.8> -		内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様が充填されているため不明。 文) 頸部に12本一組の櫛描波状文(2連止め・右回り)施文の後、口縁部と胴部に12本一組の櫛描波状文(右回り)が施されている。	破片実測B E区
260-4	甕	- <6.0> 5.6		内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位および斜位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 胴部に7本一組の櫛描波状文が施されている。	回転実測A No 5、E区
260-5	甕	- <4.1> 7.6		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A 床上
260-6	甕	(12.6) <9.8> -	最大径は口縁部と胴部中央ではほぼ等しい。口縁部は広い頸部から「く」の字状に強く外反する。胴部は上位で張る。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部はヨコナデ、胴部以下は縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部から胴部上位に4~5本一組の櫛描波状文(右回り)が上から下へ施された後、器体をほぼ6等する辺りに円形浮文が貼付されている。	回転実測B W区 音が付くと考えられる。 煤の付着が著しい。
260-7	高坏	- <13.0> -		内) 斜位および縦位のハケメ調整が施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No 4

260-7は高坏脚部であり、外面赤色塗彩が施され、内面刷毛目調整が施されている。その他、図示し得なかった甕破片は、櫛描波状文・櫛描斜走直線文・櫛描簾状文の組み合わせによる文様構成が主流を占めていた。壺においては、無彩の壺と赤色塗彩の壺が共存しており、塗彩の頸部には、T字文C、櫛描波状文、二条の櫛描横走平行線文の間に縦位の直線文が二条施され、上部に櫛描斜走直線文の観察できる破片の3タイプが出土しており、頸部文様体は、何れも櫛描文であるがバラエティーに富んでいる。また無彩壺に僅かに籠描文を有する土器片が出土している。高坏・鉢については何れも全面赤色塗彩の破片であり、塗彩土器を再利用したと思われる40×45mmの楕円形を呈す土製円板が出土している。以上、本住居址出土の遺物は弥生時代後期前半の特徴を有していることから、本住居址の所産期もこれに比定されよう。(羽毛田伸)

67) Y128号住居址

遺構 (第261・262図、図版 八十七・八十八)

本住居址は台地の中央やや西寄り、か・き-16・17・18グリッド内に位置している。第13号周溝と重複関係を持ち、住居址の東側を破壊されている。また、南壁の東側は削平されている。

プランはいずれも推定値で、東西長454cm、南北長454cm、東壁長410cm、西壁長444cm、南壁長356cm、北壁長398cmの隅丸方形を呈し、長軸方位はN-6°-Wをさす。床面積は18.68㎡をはかる。

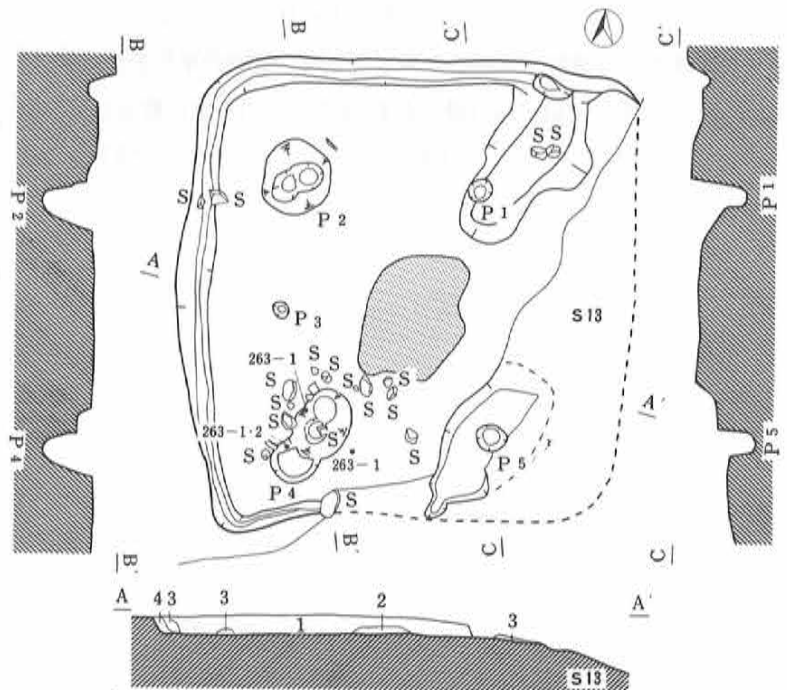
覆土は四層からなる。第1層は住居址覆土の大方を占める。パミスと小礫を多量に、カーボンを少量含み、黒褐色土が多量にまじった茶褐色土である。第2層は床面上の中央に薄く小範囲で堆積する。パミスを含み、黒褐色土、茶褐色土がブロック状にまじった土である。第3層は西壁ぎわと床面上各所に薄く小範囲で堆積する。きめの細かい黒色土である。第4層は茶褐色土と黄褐色土がまじっており、西壁に接して堆積することからみて、壁体の崩落層と考えられる。

確認面からの壁高は1~22.5cmをはかり、特に南壁の遺存状態が悪い。床面からの立ち上がりは割合に急傾斜であり、壁面はおおむね、平滑である。壁体の上位は地山の黄褐色火山灰層、下位は地山の砂層を利用して構築されており、上位は堅固であるが下位はもろく崩れ易い。

壁溝は残存する壁の直下を全周している。旧状は住居址の壁直下を全周していたことも想定できる。溝幅9~23cm、深さ4~15cmをはかる。

床面は地山の黄褐色砂層上に茶褐色土を全面に薄く埋め戻し、叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね、フラットな構築状態であり、割合堅固である。

ピットは5個検出された。主柱穴は4本(P₁・P₂・P₄・P₅)が整然と配置されている。P₁は25×27cmの円形を呈し、56cmの深度を有する。P₁は幅64~105cm、深さ20~26cmの溝状の掘り込み内にある。P₂は80×75cmの円形を呈する広い掘り込み内の中央部に、2箇所の落ち込みを有する。最深部は東側で54cm、西側で32cmをはかる。P₄は78×59cmの楕円形を呈する掘り込み内の南側に29×26cmの楕円状の小さい落ち込みを有する。深さは最深部で49cmをはかる。また、P₄範囲の南東側には径48cmの半円状に掘り込んだ広がりが見られる。P₅もP₁と同様に溝状の大きな落ち込み内に掘り込まれている。28×33cmの楕円形を呈し、床面からは58cmの深度を有する。断面形はU字形を呈する。P₃はP₂・P₄間に位置している。19×19cmの円形を呈し、13cmの深度を有する。

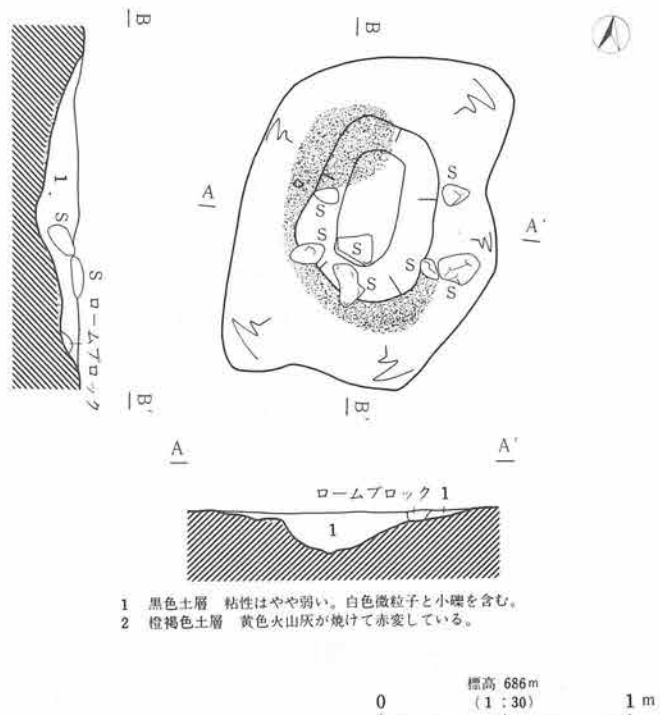


- 1 茶褐色土層 粘性は弱い。パミスと小礫を多量に含み、カーボンも含む。黒と茶の褐色土がまじりに混ざる。
- 2 茶褐色土層 粘性は弱い。きめ細かく、パミスを少量含み、黒と茶のブロック(10~15cm)状になっている。
- 3 深黒色土層 粘性は1よりやや強い。きめ細かく、パミスを微量に含む。
- 4 明茶褐色土層 粘性は3とほぼ同じ。パミスを少量含み、茶褐色土と黄褐色土が混ざる。

第261図 Y128号住居址実測図

炉址は住居址の長軸・短軸の交点（住居址の中央）からわずかに南寄りで検出された。

長軸157cm、短軸104cmの不整楕円形を呈し、長軸方位はN-33.5°-Eをさす。床面からの掘り込みは最深部で17cmをはかり、断面形は中央部が尖り気味のすり鉢状を呈する。火床部は掘り込みのほぼ中央部に設けられていたと考えられるが、焼土（第2層）の広がり「C」字状を呈しており、中央部にその分布がみられない。このことは、本炉が住居廃絶時において、何らかの意図によって中央部が破壊されたことを意味しているように思われる。炉址の覆土上、覆土中には礫が8個散乱している。炉の構造と何らかの関わりをもっていたと考えられるが、原位置を留めていないためはっきりとしたことがわからない。覆土は白色粒子と小礫を含む黒色土一層のみからなるが、攪乱はみられない。



第262図 Y128号住居址炉址実測図

遺物の出土状況

本住居址からは弥生土器が出土しているが、その量は多くない。全体の遺物分布はP₄周辺に礫とともに集中する傾向がみられ、住居址北区にくらべ、南区の方が出土量が多い。

また、263-2（壺）はY122号住居址出土破片と接合関係をもつ。このことから、本住居址の出土遺物が住居廃絶後に投棄された遺物と見做ことができるが、遺構の年代を推定するに足る資料である。

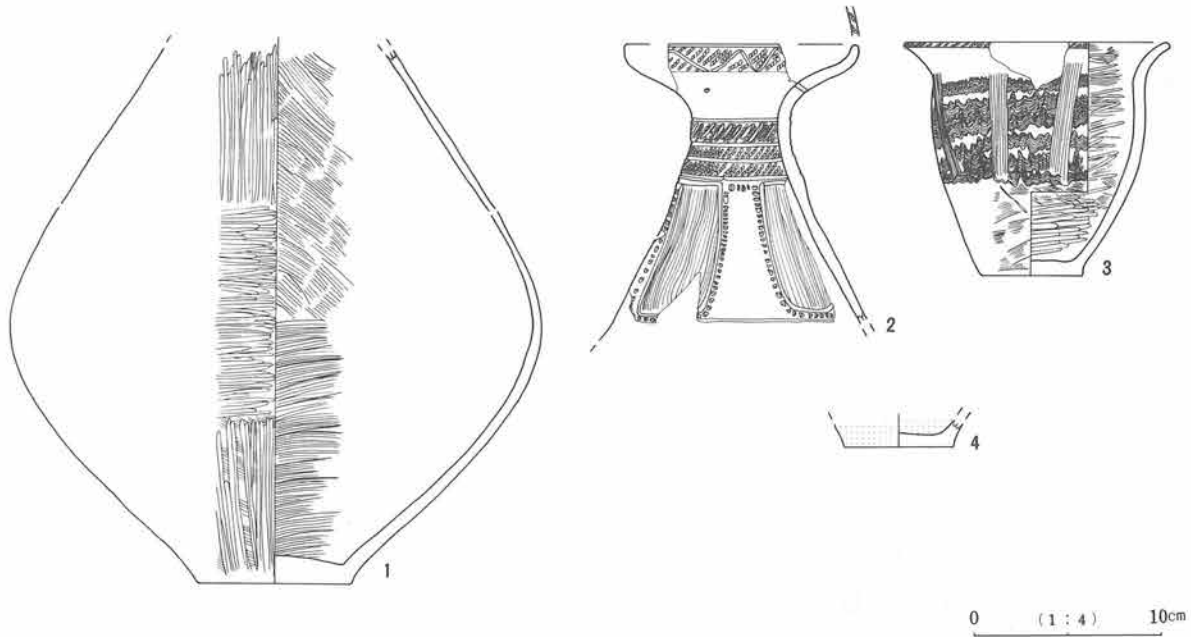
263-1・2（壺）、263-11（甕）がP₄上及びその周辺に散在し、263-3（甕）が南区および床面上に分布している。また、263-4（甕）が床面上、264-6・7（壺）が北区、264-1・2・3・4・5・8・9・10（壺・甕）が南区から出土している。

遺物（第263・264図、図版 八十八）

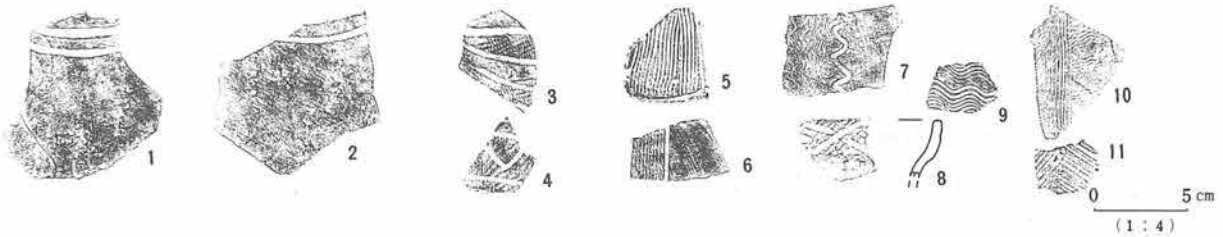
本住居址の出土遺物には弥生土器があり、器種には壺・甕がある。

壺はいずれも細頸壺で、口縁部形態は受口口縁を有する263-2がある。263-2は外稜がや不明瞭な受口口縁を有し、文様は口縁部、頸部～胴部に限なく施される。口縁部にはLR縄文を地文として篋描連続山形文、頸部にはLR縄文を地文として篋描横走平行線文・斜走短線文、胴部には篋描文で区画された櫛描垂下文の周囲に篋描刺突文が施されている。263-1は胴部上位以上を欠損する。胴部は中位下方で大きく張る。文様はみられない。この他、頸部に篋描横走平行線文が施される264-1・2、胴部にLR縄文を地文として篋描連弧文が施される265-3、篋描横走平行線文・連続山形文が施される265-4、胴部に篋描文で区画された櫛描垂下文が施される265-5・6、波状の櫛描垂下文を、波状の篋描文で区画した265-7などがある。

甕は単純口縁の263-3、受口口縁の264-8がある。263-3は口縁部は外反し、胴部中位上方で軽くふくらむ。口唇部は面取りされて、縄文が施され、胴部は右回りの櫛描波状文が上から下へ6帯施されたのち、櫛描垂下文が施されている。同様な文様は265-10にもみられる。受口口縁の265-8は口縁部にLR縄文を地文として篋描の連続菱形文が施されている。この他、櫛描波状文が施される265-9、縦位羽状の櫛描斜走直線文が施され



第263図 Y128号住居址出土土器実測図



第264図 Y128号住居址出土土器拓影図

第58表 Y128号住居址出土土器観察表

挿番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
263-1	壺	— <28.3> 8.0	胴部は中位下方で張りを持ち、所謂「無花果形」を呈する。	内) 斜位および横位のハケメ調整が施されている。 外) 斜位ハケメ調整の後、胴部上位と下位に縦位のヘラミガキ、中位は横位のヘラミガキが施されている。	回転実測Bによる図上復元 No.1・3・5、Pa、S区床上
263-2	壺	(12.4) <14.7> —	口縁部は細い頸部から強く外反し受け口状に立ち上がり、口唇部は面取りされている。口縁部に前焼の2孔が内面より施されている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部に斜位のヘラミガキ、胴部に横位のハケメ調整→ヘラミガキが施されている。 文) 口縁部と頸部はLR縄文を地文とし、口縁部にヘラ描連続山形文、頸部に4条のヘラ描横走平行線文とヘラ描による刺突文が施されている。胴部は5本一組の櫛描垂下文がおよそ3〜4帯一組で施された後、周囲はヘラ描沈線と刺突文で区画されている。口唇部にもLR縄文が施文されている。	回転実測A No.1、覆土 Y122フク土内出土破片と接合。
263-3	甕	14.0 12.4 5.4	最大径は口縁部にあり、口縁部は短く緩く外反し、胴部は上位で若干ふくらむがほとんど張りを持たない。口唇部は面取りされている。	内) 斜位および横位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部下位から底部は斜位および横位のハケメ調整→僅かにヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文、頸部から胴部中央に8本一組の櫛描波状文(右回り)が上から下へ施された後、器体の8等間隔でやはり8本一組の櫛描直線文が垂下されている。	回転実測A S区、床上
263-4	鉢	— <1.2> 5.8		内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B 床上

る265-11などの胴部片がある。263-4は甕の底部片である。

以上の共伴遺物から、本住居址の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。

(小山)

68) Y129号住居址

遺構 (第265図、図版 八十八)

本址は台地の中央より西側、い・う-15グリッド内に位置している。Y125号住居址、第169号土坑と重複関係を持ち、これらを破壊している。また、北東コーナー付近の一部は攪乱によって破壊されている。

プランは東西の長軸長285cm、南北の短軸長231cm、東壁長190cm、西壁長235cm、南壁長221cm、北壁長250cmの隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-47°-Eをさす。床面積は6.28㎡をはかる、極めて小型の住居址である。

覆土は複雑な堆積を示し、人為的な埋没状態を示しているように思われる。第1~4層は色調、含有物に若干のちがいがみられるが、いずれも灰層である。第5層はパミスを含む黒褐色土、第6層はパミスと火山灰を含む茶褐色土、第7層は黒色土である。

確認面からの壁高は1~10cmをはかり、床面からの立ち上がりは緩い。壁体は北東コーナーから、南東コーナー、南西コーナーにかけてはY125号住居址との重複箇所にあたるため、この覆土を利用し、西壁の大部分は第169号土坑の覆土を利用して構築されている。重複のない北壁は地山の黄褐色火山灰層を利用して構築されている。各壁ともに、構材のちがいはあるものの、いずれもやや軟弱な構築状態を呈している。

壁溝は検出されなかった。

床面は北壁下の一部の小範囲のみ地山を利用し、他はY125号住居址、第169号土坑の覆土上に、貼床が施されている。貼床は粘性が極めて強い、ブロック状の漆黒色土をしきつめて構築したもので、凹凸が極めて著しい。また、全体的に軟弱なつくりではあるが、床面中央部の小範囲に限ると極めて堅固な状態である。本址を住居址として記載した最も有力な根拠である。

ピット及び炉址は検出されなかったが、南東部の床面上には極小範囲ながら焼土の広がりが見られる。これが何の機能をもっていたかはわからない。

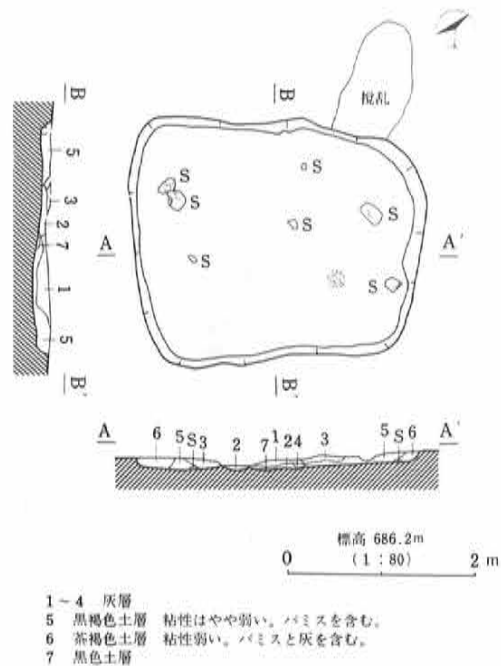
遺物の出土状況

本住居址からは、弥生土器・土師器・須恵器が混在して出土しているが、その量は極めて少ない。また、このうち弥生土器については明らかに混入遺物と見做すことができ、土師器・須恵器を本住居址の所産期を推定する根拠としたい。

土師器・須恵器の分布状況は極めて散漫であり、集中する箇所はない。土師器4点、須恵器4点のいずれも覆土内からの出土である。

遺物 (第266図)

本住居址から出土した遺物には土師器・須恵器がある。土師器には小型甕・高坏の偏平な脚部片・柱状部片などがみられる。須恵器は外面に平行叩き、内面にすり消しが施される甕片266-1・2がある。以上の出土土器は古墳時代中期(和泉併行期)の様相を示しており、本址の所産期はそれに近いと考えられる。(小山)



第265図 Y129号住居址実測図

標高 686.2m
(1:80) 2m

- 1-4 灰層
- 5 黒褐色土層 粘性はやや弱い。パミスを含む。
- 6 茶褐色土層 粘性弱い。パミスと灰を含む。
- 7 黒色土層



第266図 Y129号住居址出土土器拓影図

第2節 弥生時代の石器について (第267～276図、図版 百二十一～百二十七)

本遺跡は弥生時代中期後半～弥生時代後期前半、古墳時代の複合遺跡で、第2次調査で検出された住居址は弥生時代中期後半47棟、弥生時代後期前半20棟、和泉期1棟であり、石器組成を知る上で、住居址出土石器を中心に考えた時、ある程度、時間の幅を絞ることができるため、特にここでは弥生時代の石器組成についてまとめてみたい。

〔石質からみた器種〕

まず、石器に用いた石質は、黒曜石・粘板岩・頁岩・千枚岩・玄武岩・安山岩・花崗岩・チャート・砂岩・硬砂岩・泥岩・輝緑凝灰岩・閃緑岩・滑石等が使われており、石材は用途により選択されたと考えられる。

原材料の取得方法を知る上で、母岩及び石器の自然面を観察すると、黒曜石には和田峠産出のものが圧倒的に多く、粒子密・透明感があり、自然面には僅かに気泡のぬけた跡が残り、人の手が加えられた角礫状態であることから、原産地からの運び込み(交易?)と考えられる。器種としては打製石鏃・石錐・剥片石器に限定される。

また、僅かに多孔質の浅間山産出の黒曜石があり、円磨作用をうけていることから、湯川からの搬入礫で、弥生時代の石器用材としては斑晶が多いことから不適當であり、古墳時代の周湊、古墳等の構築材に使用されたと考えられる。

玄武岩は荒船火山の最終末の火山活動によって出来た火山岩であり、田口・清川・内山・香坂・志賀等荒船山の造山活動によって出来た、山地の所々に露頭しており、入手方法としては、石器及び母岩の自然面が円磨作用をうけていることから、河原石を選択して、比較的簡単に入手したと考えられ、原産地から運び入れたとは考えにくい。器種としては打製石斧・横刃型石器・剥片利用石器であり、僅かに飛行機鏃267-30、石錐269-76が含まれる。

安山岩には産地の異なる3系統の安山岩が使用されたと考えられる。浅間山産出のやや粒子の粗い安山岩、黒斑山の噴火に伴い形成された多孔質な安山岩(溶岩泥流として流れた折、礫を含む集塊岩)で赤色と黒色の二種ある。その他、平尾山産出の緻密で青味のおびた、板状節理のある安山岩がある。浅間山産出と平尾山産出の石はいずれも円磨作用をうけ、亜角礫の状態であり、河川(湯川)から持ち込んだものと考えられる。

また、黒斑山の噴火に伴う安山岩は本遺跡の付近に露頭して「流れ山」という地形を造っているが、多孔質なため、弥生時代の石器としては使用されておらず、僅かに炉縁石に使われている。

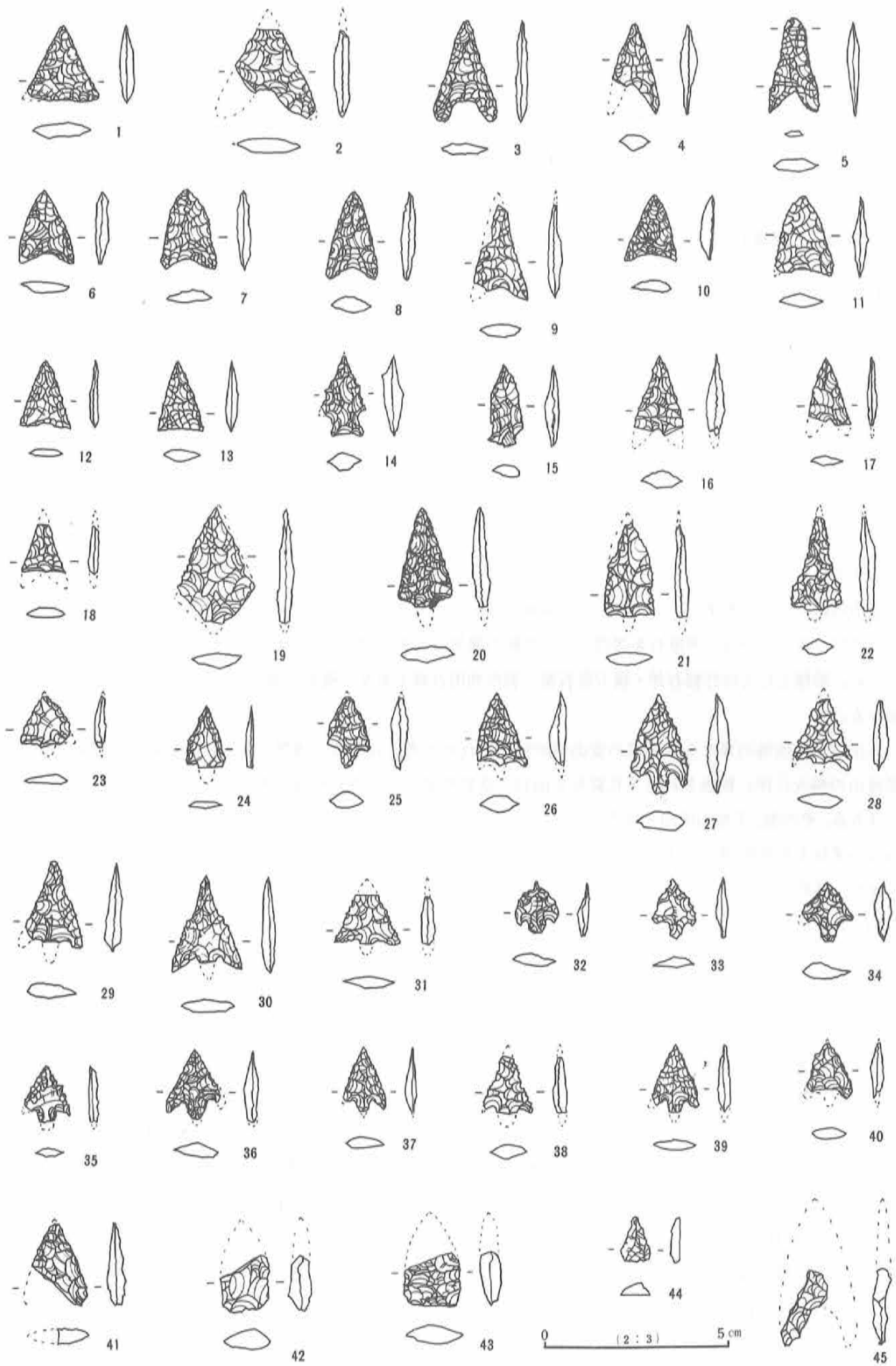
器種としては台石・敲石・磨石・炉縁石があり、僅かに局部磨製扁平小型片刃石斧271-96を含む。ここで注意したいのは本調査において安山岩の打製石斧・剥片が出土しなかったことで、硬度・加工のしやすさ等安山岩より優る玄武岩が容易に入手できることが、その要因と考えられる。

花崗岩は金峯山を峰とする山地に産するが、本調査出土の台石は円磨作用をうけた亜角礫であることから、河川からの運び込みと考えられる。

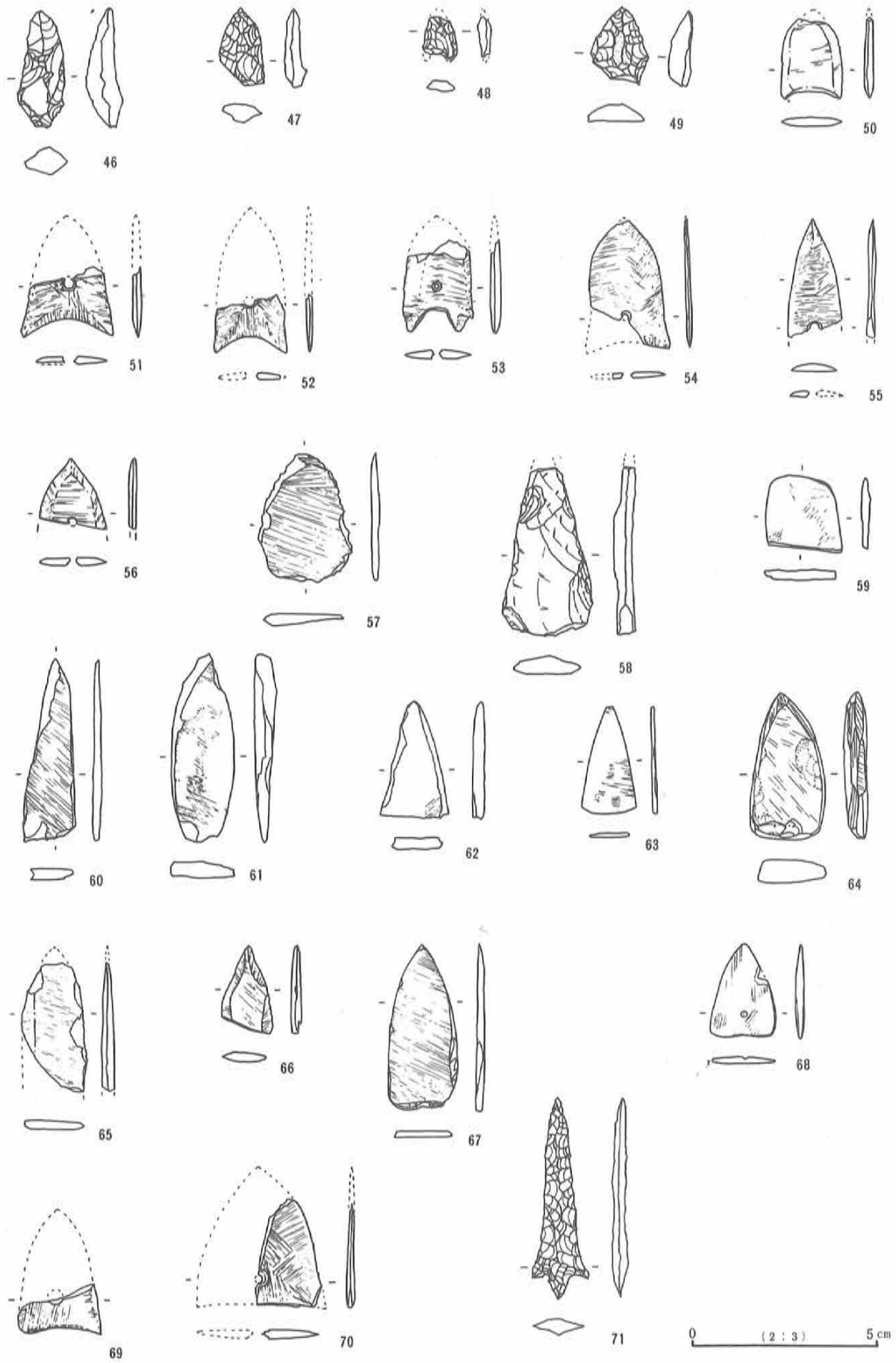
チャートの産地を絞るには多少困難があるが、千曲川の支流を考えた時、大日向・相木・川上等の古生層～中生層にチャートは産し、そのいずれかを原産地とした河原石を利用したと考えられ、色相は黒色～灰色～青色と色々である。器種としては主に小型・極小型扁平片刃石斧で、僅かに打製石鏃にも使用されている。その他石槍268-71とY104住出土274-115の緑色を帯びたペンダントが出土した。

粘板岩の産地は古生層～中生層中によく産出することから、チャート産出地と同様と考えられ、また入手経路も河川からの運び込みと考えられる。器種としては、磨製石鏃・磨製石包丁、僅かに極小型磨製扁平片刃石斧271-98が出土した。

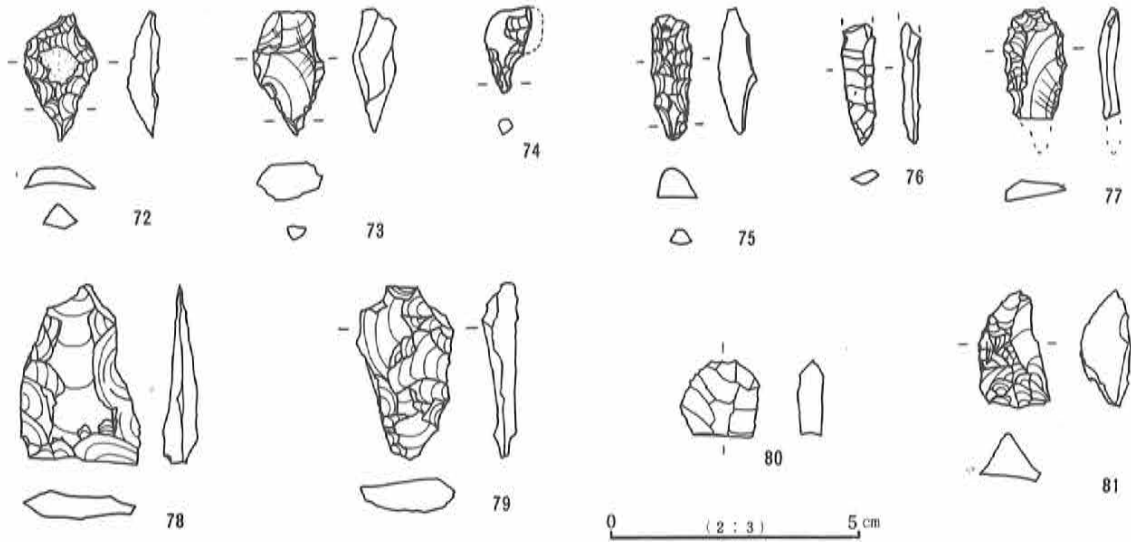
千枚岩の産地は粘板岩のもっと変成作用を受けた結果として成立するものであり、秩父古生層地域に産するこ



第267図 北西ノ久保遺跡出土石器実測図〈その1〉



第268図 北西ノ久保遺跡出土石器実測図〈その2〉



第269図 北西ノ久保遺跡出土石器実測図〈その3〉

とから、チャート・粘板岩と略同一地域が産出地と考えられ、入手方法も河川からの運び込みと考えられる。器種としては主に磨製石鏃であり、本遺跡において僅かに粘板岩製の磨製石鏃より出土例は多い。

砂岩の産地は当佐久地方は太古に湖であったこともあり、堆積層の至る所に存在し、石器の自然面を観察すると、円磨作用を受け、手の掌に定まる大きさの扁平な円礫が多く使用されていることから、河原石を利用したことが推測される。器種としては主に砥石である。

閃緑岩は大日向・田口等に産し、自然面に円磨作用をうけていることから河原石と考えられ、ある程度石器にできやすい礫を取捨選択し加工したと考えられる。器種として大型蛤刃石斧・大型蛤刃石斧の再加工品・扁平片刃石斧があげられる。

その他、輝緑凝灰岩の石器が認められ、第三紀層内山や志賀等に産し、千曲川の河原石として持ち込み、利用したと考えられる。器種としては扁平片刃石斧があげられる。また、滑石は蛇紋岩出土地域に産出し、大日向等があげられるが、入手経路は判明できない。器種としては有孔円盤があげられる。尚、製品としての出土はなかったが、鉄石英剥片・碎片が出土している。

〔打製石鏃について〕(第267図1～45、第268図46～49)

前時期、¹⁾縄文晩期～終末にかけての中部・東海地方の普遍的な特徴をあげてみると、無茎鏃は凹基鏃のものが大半であり、平基鏃は少なく、凹基鏃のなかには側辺が有段で五角形・変形鏃・飛行機鏃になるものも現われ、先端のみが小さくくびれ、側辺鋸歯状となるものもあり、有茎鏃には凸基・凹基・平基いずれも存在するが、晩期も終末になると凹基有茎鏃の占める割合が高くなる。これらの傾向をより強く継承し、弥生時代の打製石鏃が形成されたと推測される。

(弥生時代中期の打製石鏃について)

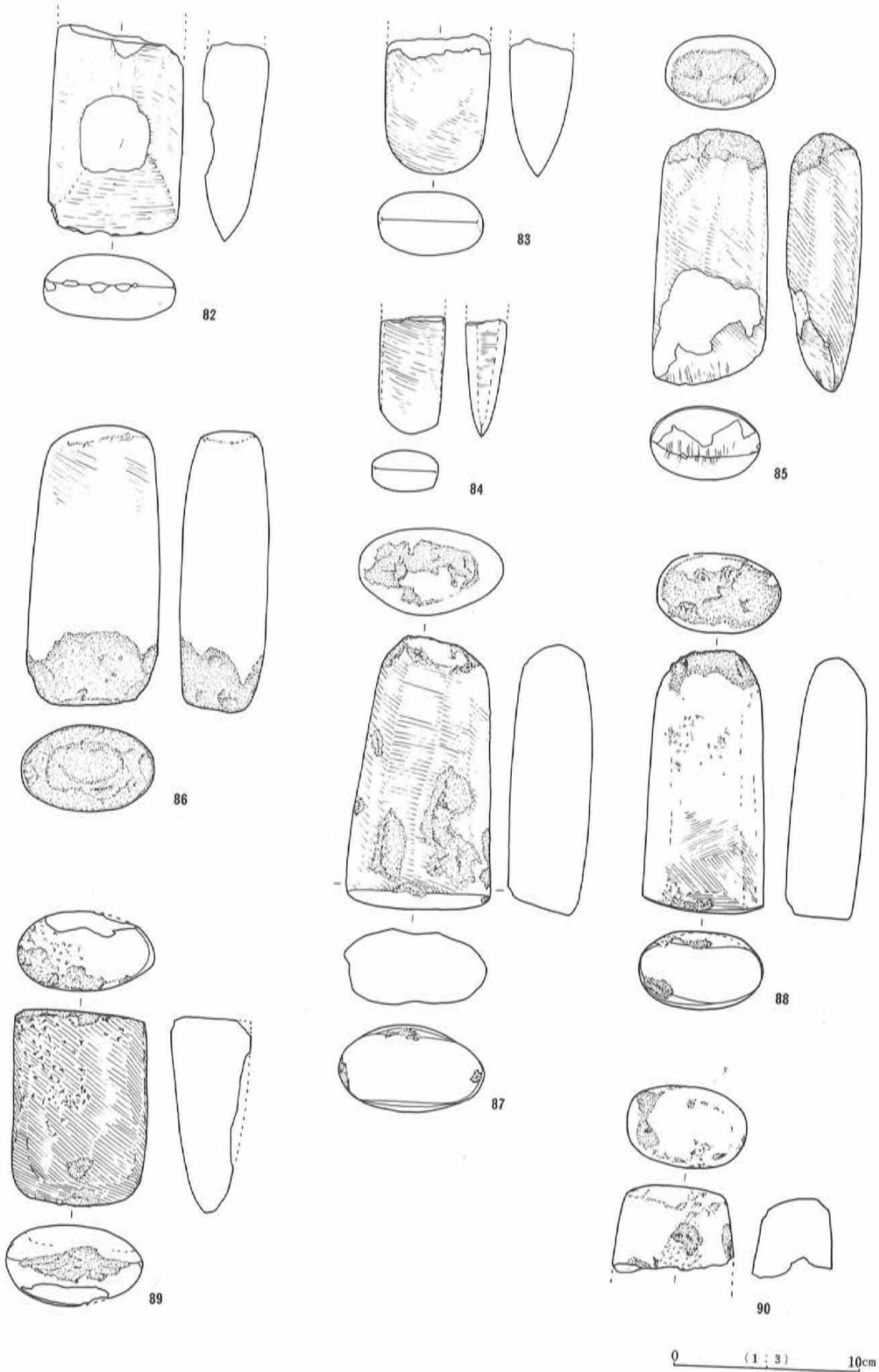
無茎鏃

中型品(鏃身20～30mm)

- 平基鏃(二等辺三角形を呈し、側辺直線的で先端鋭角に収束) ————— 267-1 (Y78)
- 凹基鏃(抉りやや深く、逆刺やや鋭く、側辺内弯気味に先端で収束) ————— 267-6 (Y73)

小型品(鏃身20mm以下)

- 凹基鏃(抉り浅く、逆刺やや鈍く、側辺直線気味に先端で収束) ————— 267-12 (Y115)
- 変形五角形鏃 ————— 267-14 (Y109)・15 (Y71)



第270図 北西ノ久保遺跡出土石器実測図〈その4〉

有茎鍬

大型品 (鍬身30mm以上) 凸基鍬	267-19 (Y74)
中型品 (鍬身20~30mm)	
平基鍬	幅狭く、側辺直線気味で鋭角に収束。 267-20 (Y66)
平基鍬	幅狭く、側辺僅かに有段を呈し、やや鋸歯状で鋭角に収束。 267-22 (Y74)
凹基鍬	側辺やや鋸歯状で、内弯気味収束、先端小さくくびれる。 267-27 (Y116)
凹基鍬	側辺僅かに有段を呈し、やや鋸歯状で鋭角に収束。 267-29 (Y71)
飛行機鍬	267-30 (Y91)
小型品 (鍬身20mm以下)	
平基鍬	267-24 (Y75)
凹基鍬	幅広く、側辺内弯、鋸歯状で、先端小さくくびれる (ハート形)。 267-32 (Y76)・33 (Y78)
凹基鍬	幅広く、側辺直線気味、鋸歯状で、先端小さくくびれる。 267-34 (Y66)
凹基鍬	幅広く、側辺内弯、鋸歯状で先端収束。 267-35 (Y74)・36 (Y76)
凹基鍬	幅狭く、側辺直線気味、鋸歯状で先端収束。 267-37 (Y91)
凹基鍬	幅狭く、側辺有段を呈し先端収束。 267-39 (Y115)

以上のことから、弥生時代中期後半の石鍬について、有茎鍬・小型化・側辺鋸歯状・先端小さくくびれる等の傾向が看取できる。

(弥生時代後期前半の打製石鍬について)

弥生時代後期前半の住居址から5点出土したが、そのうち中型品の凹基無茎鍬が4点、267-2 (Y89)・3 (Y66)・8 (Y66)・10 (Y70) と、小型品の平基有茎鍬267-25 (Y89) の1点で、形態の不明な石鍬が1点であった。以上のことから傾向は看取できないが、小単位の集落から同盟集落へと内乱・統一の繰り返す時期であり、中国・朝鮮から金属器の入ってくる時期でもあることから、磨製石鍬とも考え合せて、弥生時代後期石鍬の出土数の増すのを待って傾向を見出したい。

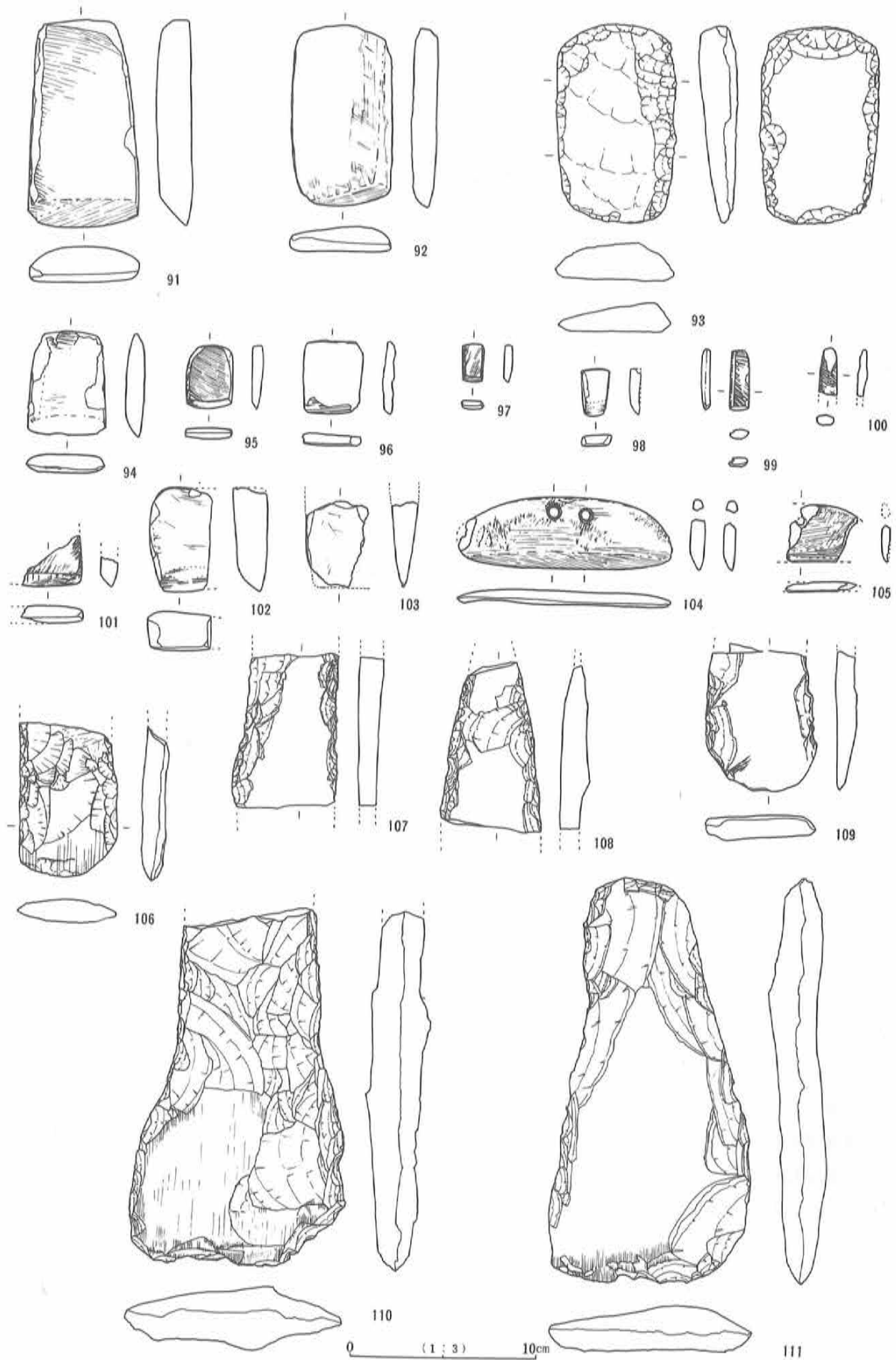
〔磨製石鍬について〕(第268図50~70)

本調査において、弥生時代中期前半の住居址から8点、弥生時代後期前半の住居址から4点、周湟10・11・12・13内から各1点出土し、また、未成品が14点出土した。用材は千枚岩と粘板岩があり、石器組成表からも看取できるが、千枚岩の母岩・剥片・細片・碎片は弥生時代後期前半の住居址に集中する傾向がみられ、粘板岩は弥生時代中期後半の住居址に集中する傾向がみられるが、磨製石包丁の用材とも考えあわせ速断は避けたい。

(弥生時代の磨製石鍬について)

脚部形態	逆刺鈍く、浅い抉り。 268-50 (Y66)
	逆刺鋭く、やや浅い抉り。 268-51 (Y100)・52 (S16)
	重ね逆刺、抉り台形。 268-53 (Y74)
基部形態	幅広く、側辺「S」字状で先端に鈍く収束。 268-54 (S13)
	幅広く、側辺内弯気味、鈍く収束。 268-50 (Y66)・51 (Y100)・56 (Y114)
	幅狭く、側辺内弯気味、鋭く収束。 268-55 (Y124)

以上のことから弥生時代中期後半~弥生時代後期前半の磨製石鍬はそれぞれの時期別の傾向を指摘するに至らない。また、打製石鍬とはまるで異った形態を示しており、打製と磨製の両者が全く別系譜で発達したものであることが推測される。また、磨製石鍬未成品が14点出土していることから製作工程を知る手懸りになると思われる。



第271図 北西ノ久保遺跡出土石器実測図〈その5〉

I	粗割	268-57 (と23G)
II	剝離調整	268-58 (表採)
III	両面研磨	268-59 (Y87)・60 (Y124)
研	両面+側辺研磨	268-61 (S10)・62 (S11)・63 (Y101)・64 (Y115)
	両面+側辺鏝	268-65 (L22G)・66 (Y74)
磨	両面+側辺+抉り	268-67 (Y78)
IV穿	片抉り段階で中止	268-68 (Y69)・69 (Y123)
孔	両抉り段階で破損	268-70 (S12)

以上、磨製石鏃において、穿孔は最終段階に行なわれたと考えられる。

〔石槍について〕(第268図71~77)

本調査Y78住弥生時代中期後半の住居址から268-70が1点出土した。石質はチャートで「V」字状の有茎、逆刺は側辺より僅かに突起、基部断面菱形を呈す。用途として不明の点も多く、より多くの出土例を待ちたい。

〔石錐について〕(第269図72~77)

本調査において6点出土した。そのうち弥生時代中期後半の住居址内から2点出土した。石質は黒曜石が殆んどで、僅かに玄武岩による269-76がある。形態分類を行ってみると

- 不定形な剥片利用、1端に両端から加工調整し、錐部作り出す涙滴状のもの—A
269-72 (Y119)・73 (T3)・74 (Y115)・77 (S13)
- 断面三角形、もしくは菱形の細身棒状のもの—B 269-75 (S13)・76 (き25G)

以上、本調査において摘み部と錐部を明確に分かつ石錐は出土していない。A・B2タイプの形状の違いは、穿孔される用材とも考え合せ注意したい。

〔磨製石斧〕(第270図82~90、271図91~103)

(大型蛤刃石斧と大型蛤刃石斧再加工品について)

本調査において大型蛤刃石斧5点と大型蛤刃石斧再加工品2点は弥生時代中期後半の住居址より出土した。石質は総て閃緑岩であり、大型蛤刃石斧の形態は2タイプに分けられる。

- A類 大型で幅広く厚い
 - 刃部円刃—270-82 (Y69)・83 (Y115) —A₁
 - 刃部偏刃—270-85 (Y109) —A₂
- B類 小型で幅狭くやや厚い—刃部偏刃—270-84 (Y74) —B₂

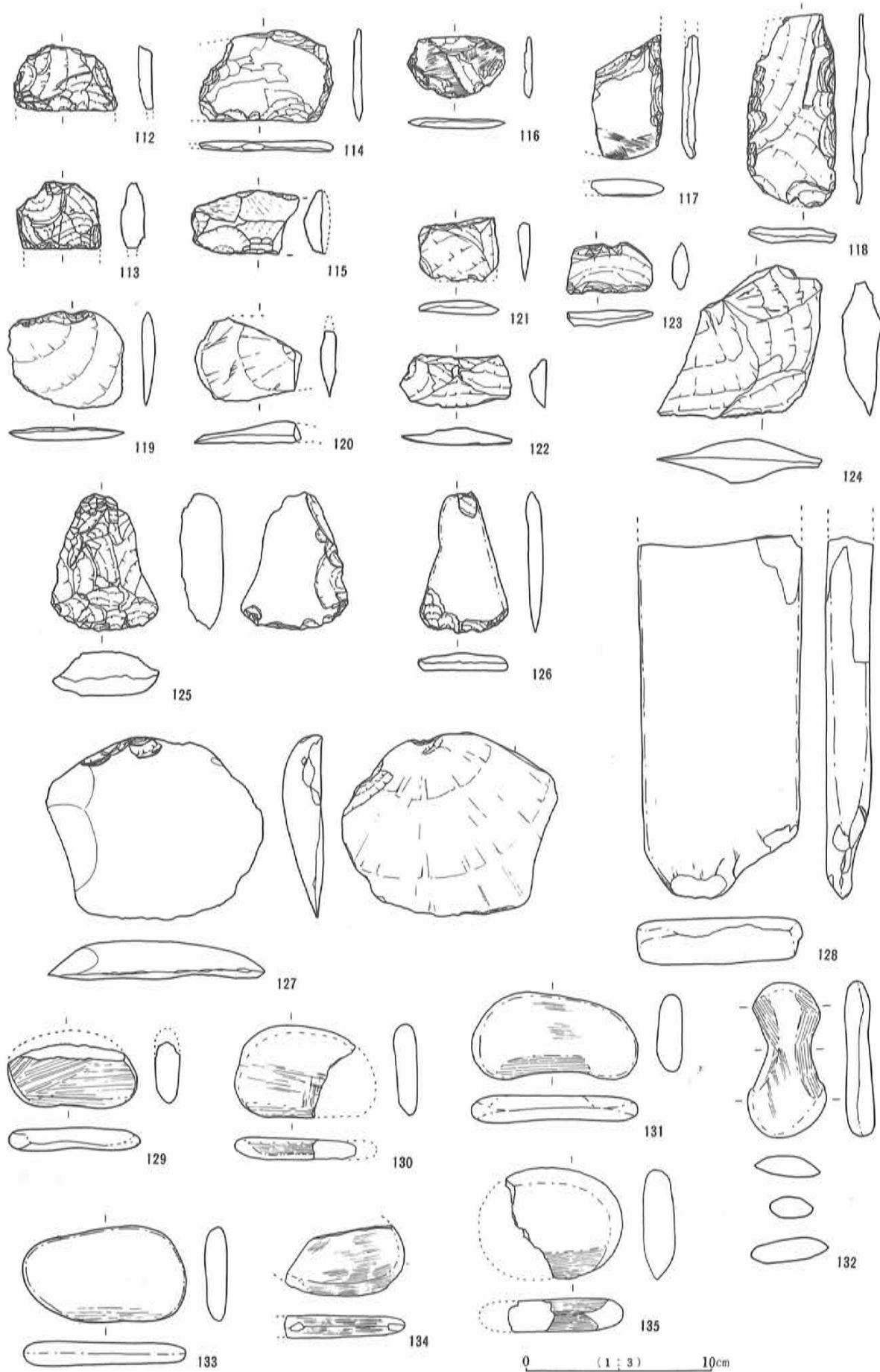
以上A₂・B₂の属する石器を観察すると、旧態の刃部研磨痕が観察でき、刃毀等により再研磨の結果、刃部偏刃化がすすむと考えられる。また、ここで特筆されるものはA類に属するものの再加工品であり、その形状を分類すると3タイプに分かれる。

- 刃部平坦に研磨+基端部敲打痕。 —270-87 (Y101)・88 (Y85)
- 基端部平坦に研磨+刃部旧状を留める。 —270-89 (D140)
- 刃部敲打面 —270-86 (M2)

以上、大型蛤刃石斧再加工品の用途は本来の用途に適さなくなった結果、再利用(磨石・敲石等)のために再度加工したものと考えられる。尚、本調査において弥生時代後期前半の住居址からは大型蛤刃石斧が出土しなかったことは、大型蛤刃石斧の用途を代用する工具(金属器)の出現する時期を考える上で貴重な資料といえよう。

(扁平片刃石斧について)

本調査の弥生時代中期後半の住居址から6点、弥生時代後期前半の住居址から局部磨製扁平片刃石斧が2点出土した。石質は閃緑岩・粘板岩・チャート・輝緑凝灰岩・硬砂岩とバラエティーに富んでいるが、いずれも硬質



第272図 北西ノ久保遺跡出土石器実測図〈その6〉

であり、形態を中型（7 cm以上）、小型（4～7 cm）、極小型（4 cm以下）の3つに分類し細分化してみた。



以上のように細分ができ、271-99には擦り切り技法の痕跡が観察できる。尚、271-93は石質閃緑岩で、扁平片刃石斧の製作工程の調整剥離段階と考えられ、製作工程を知る上で良い資料といえよう。また弥生時代後期前半の住居址からは全面研磨の扁平片刃石斧が出土していないことから、大型蛤刃石斧同様弥生時代後期前半に入ると、減少傾向にむかうと思われ、これは何に起因し、代用の工具は何か、金属器の普及率とも考え合せ、今後の研究を待ちたい。

〔石包丁について〕（第271図104・105）

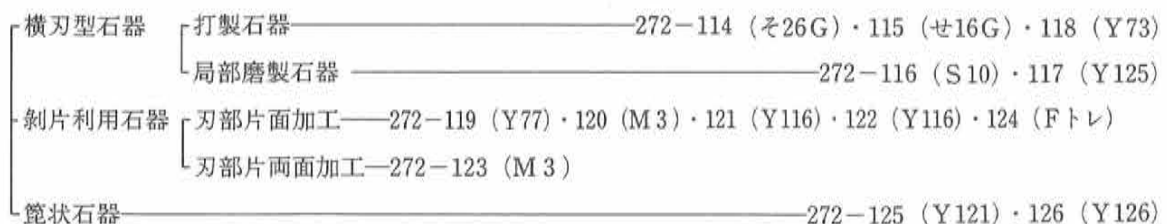
本調査において、弥生時代中期後半の住居址から2点出土し、稲作文化としている弥生時代には非常に少なく他の佐久の弥生時代遺跡にも、同じ傾向がみられる。このことは、他の道具（打製横刃型石器、剥片石器）等で代用した可能性もあり、今後の研究を待ちたい。尚、本調査の2点の石質は粘板岩であり、中部地方²⁾の特徴の直線刃半月型態である271-104 (Y74) と一部残存の271-105 (Y78) が出土した。

〔打製石斧について〕（第271図106～111、第272図112・113）

縄文時代からの系譜をひく打製石斧は、本調査において全部欠損した状態で出土し、弥生時代の住居址から4点271-107 (Y125)・109 (Y66)、272-112 (Y116)・113 (Y126)、その他271-106 (表採)・108 (S9) の2点と出土点数が少なく、石質は殆んどが玄武岩であった。形態は短冊形と思われるもの106・107、撥形と思われる108の2タイプが出土している。また、弥生時代の特徴である大型打製石斧（石鋏）が弥生時代中期後半の住居址から1点271-110 (Y122)、Eトレンチから1点271-111の計2点出土しているが、農耕社会の定着化する段階において、耕作具の出土数の少ないことは、耕作具の材料（木工具・金属器）、生産場所等を考慮に入れる必要があると思われる。

〔不定形石器について〕（第272図114～126）

本調査においては大きく3タイプに分かれ、側辺・両面に略加工が観察でき、刃部両面加工のものを横刃型石器とし、第1剥離面をそのまま生かし、片面再加工・刃部片面加工・刃部片面両面加工のものを剥片利用石器とし、小型の撥形を呈し、肉厚で、刃部略両面加工のものを他の1形態（筥状石器）として分類してみた。



以上これらの石質は玄武岩のもの115・118・119・120・121・122・123・124、粘板岩のもの114・116・117であり、粘板岩のものは磨製石包丁未成品の可能性もある。また、横刃型石器・剥片利用石器は、稲作に共う、穂を摘ぐ用途として使用されたことも推測され、今後これらの遺物を細分研究する必要性が感じられる。

〔剥片石器〕（第269図78～81）

ここでは、石質・大きさ及び再調整をしてあるかどうかで、上項の剥片利用石器と分けて述べてみたい。石質は黒曜石・チャート等の剥片を利用したもので、269-78（D172）・79（表採）・80（Y115）・81（S13）があり、用途としては剥ぐ・切る等に使用されたと考えられる。

〔握斧について〕（第272図127・128）

本調査において2点出土し、いずれも弥生時代住居址内の出土であった。272-127（Y71）は石質玄武岩の河原石の第1剥離片を利用したと考えられる。272-128（Y93）は円磨作用をうけた亜角礫の安山岩で、刃部剣先形を呈し、僅かに使用痕が観察できる。

〔砥石について〕（第272図129～135、第273図136～155）

本調査から27点出土し、2タイプに分類した。1つは手の掌に定まるもので、手持ち砥石とし、他は握れないもので、概ね、平坦面を3つ以上有しており、置き砥石とした。手持ち砥石は弥生時代中期後半の住居址から12点、後期前半の住居址から3点出土している。置き砥石は弥生時代中期後半の住居址から1点、弥生時代後期の住居址から4点出土している。手持ち砥石の形態を細分化してみると、扁平な円礫であり、側辺両刃状に磨滅したものをA類とし、略全面に被研磨痕の観察できる方柱状の砥石をB類、断面楕円形で棒状の砥石をC類、小型で握るといよりも摘んで用いると思われる砥石をD類とし4類に分けてみた。

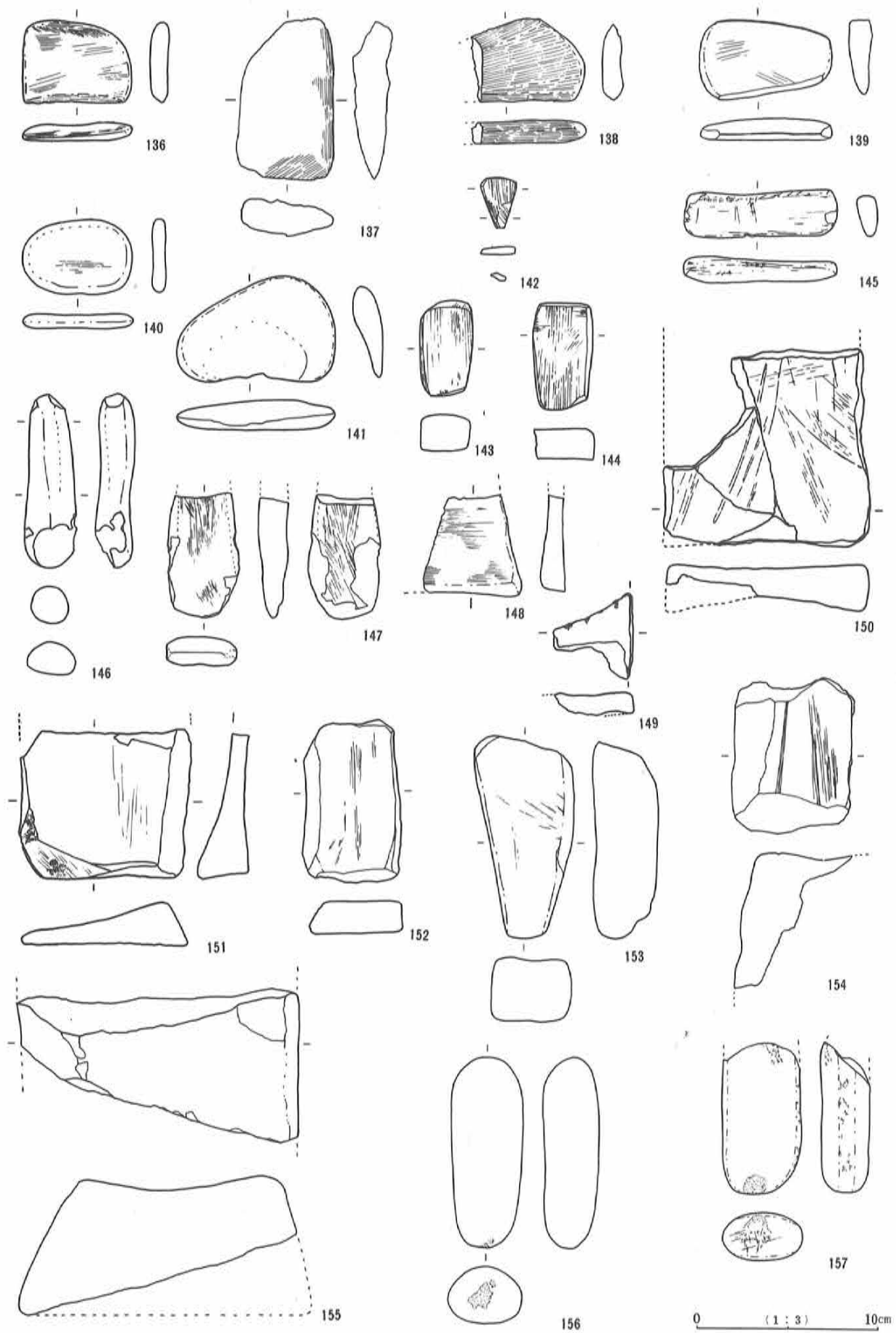
A類	片側辺内弯両刃状	272-129（Y77）・130（Y128）・131（そ26G）・133（D52）	A ₁
	両側辺内弯両刃状	272-132（そ26G）	A ₂
	片側辺外弯両刃状	272-134（Y78）・135（Y91）	A ₃
	側辺直線的な両刃状	273-136（Y78）・137（Y88）・138（Y100）・139（の18G）	A ₄
	側辺両刃状の磨滅なく両面のみ被研磨痕の観察できるもの。	273-140（Y78）・141（Y108）	A ₅
B類	方柱状砥石	273-143（Y91）・144（S10）	
C類	棒状砥石	273-145（Y100）・146（Y73）・147（Y73）	
D類	小型摘み砥石	273-142（Y121）	

A類の両面の被研磨痕を観察すると

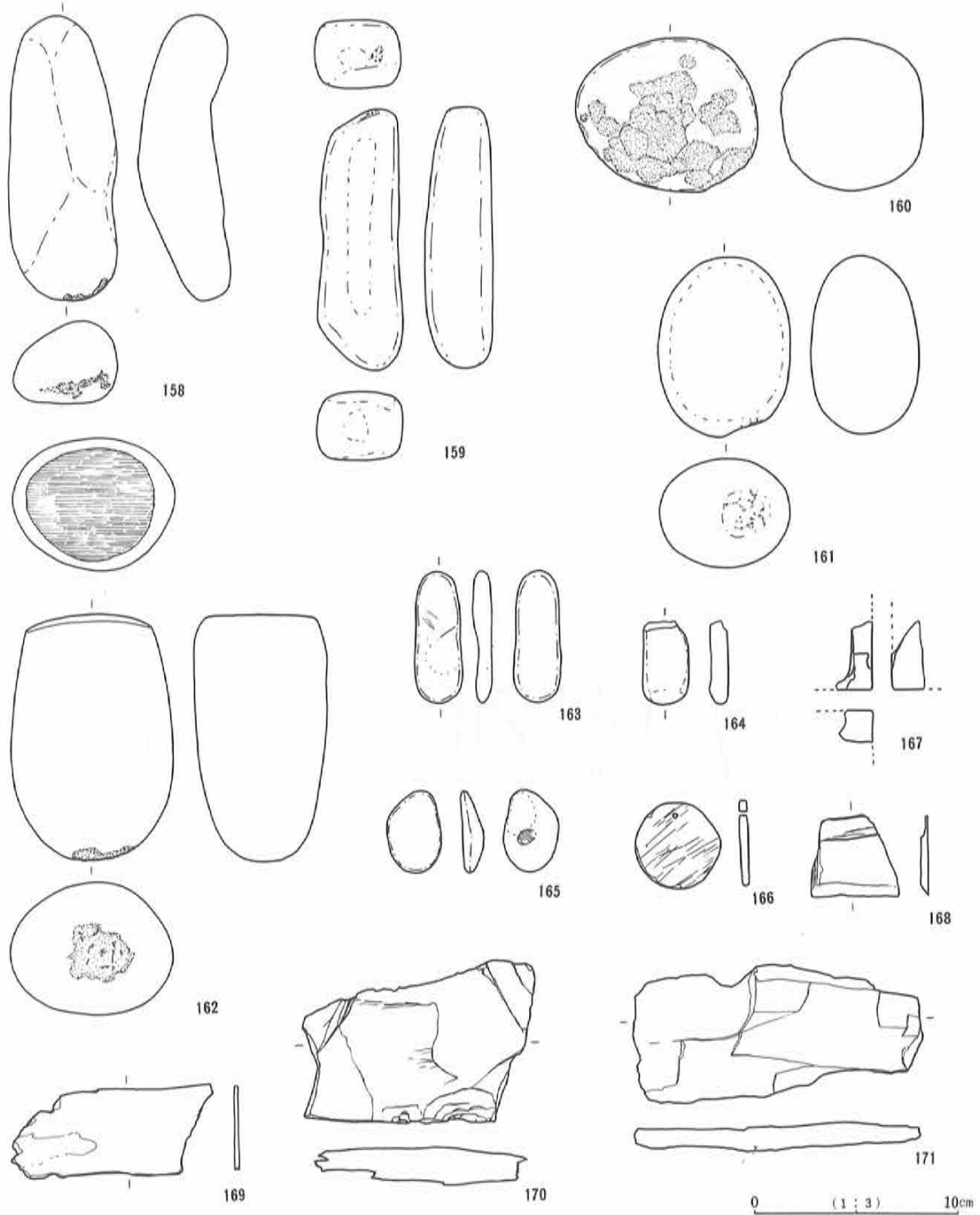
A類の両面の被研磨痕を観察すると	両面被研磨痕	129・130・131・132・134・136・138・139・140・141
	片面被研磨痕	133
	研磨痕無し	135・137

A類の両面、若しくは片面に被研磨痕が観察できるものは、使用により僅かに凹状になっている。これらの砥石は太型蛤刃石斧の研磨に用いたとは考えにくく、小型の磨製石器（磨製石鏃、小型・極小型扁平片刃石斧）の研磨に用いられたと考えられる。また、側辺両刃状に磨滅していることから、特異な用途として側辺は用いられたと推測される。尚、弥生時代後期前半になると磨製石器の減少する傾向が本調査では認められ、それと同様にA類の砥石も減少する傾向が看取でき、なにか因果関係があると考えられる。D類は1点のみであるが、その形状は特異で、扇状を呈し、側辺がねじれており、用途は判明できなかった。

置き砥石は欠損したものが多く、旧状を留めている砥石が少ないが、使用面は磨滅により凹状になっており、扁平な形で両面使用の砥石273-148（Y89）・149（さ11G）・150（D140）・151（ね17G）・152（Y66）、四角錐状で、底面以外全面使用の砥石273-153（Y104）、大型で厚く不定形の砥石273-154（Y100）・155（Y108）が出土している。尚、149は煤の付着が観察できる。以上本調査において種々の形態の砥石が出土したが、研磨され



第273図 北西ノ久保遺跡出土石器実測図〈その7〉

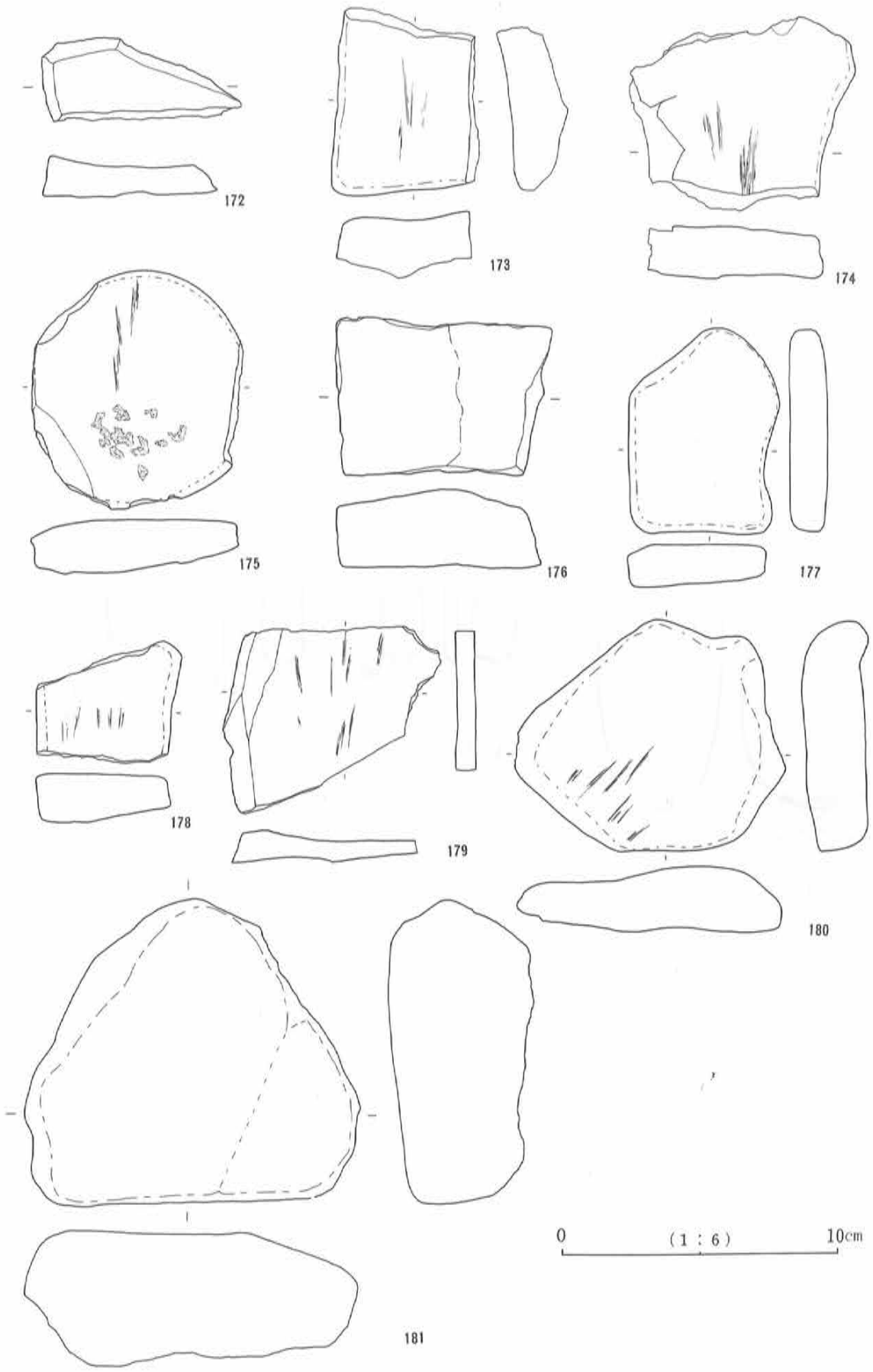


第274図 北西ノ久保遺跡出土石器実測図〈その8〉

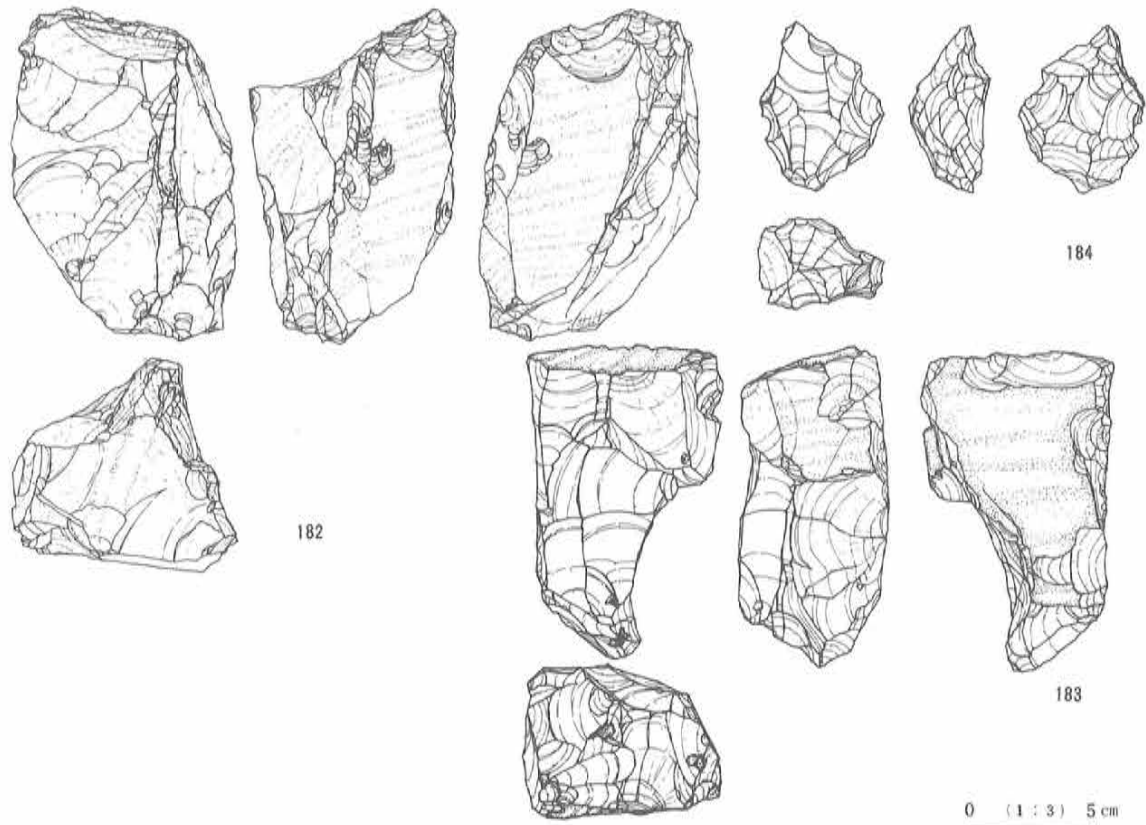
る道具の用材との関係を知る上で、より多くの出土例を待って検討を加えたい。

〔敲石、磨石について〕（第273図156・157、第274図158～162）

本調査から8点、そのうち弥生時代中期後半の住居址から1点274-162（Y98）、弥生時代後期前半の住居址から3点273-156（Y70）・157（Y64）、274-158（Y87）が出土した。石質は硬砂岩・砂岩・安山岩等があるが、ある程度の硬度を有すれば、石質にはあまり限定せず、握れる大きさが限定条件と考えられ、自然面を観察すると河原石を利用したことが窺われる。また、敲打痕と擦過痕が石の両端に存在し、磨石と敲石との用途を1つの



第275図 北西ノ久保遺跡出土石器実測図 <その9>



第276図 北西ノ久保遺跡出土石器実測図〈その10〉

石で併用したものが多く、そのよい例として274-162が挙げられよう。形状としては柱状のもの156・157・158・159、球状のもの160・161の2タイプに分かれ、162は大型蛤刃磨製石斧の再加工品とよく形状・使用状態が似ており、大型蛤刃磨製石斧の再加工品の用途を知る上でよい資料といえよう。

〔土器調整道具について〕（第274図163・164）

弥生土器において調整道具として、木片・竹・貝殻・石・皮・縄等挙げられるが、本調査において274-163は石質粘板岩の薄い柱状の円碟で、弥生時代中期後半のY115号住居址より出土した。同住居址からは赤色顔料の付着が観察できる炉縁石275-172が出土し、またP₅内より赤色顔料の塊が出土していることから、163の石器を詳細に調べてみると、先端に擦過痕と共に赤色顔料の付着が観察でき、塗彩土器の器面ミガキに使われた可能性が強く考えられ、速断は避けたいが、土器調整道具を知るよい資料と言えよう。尚、同じ形態の274-164（Y66）も土器調整道具と考えられよう。

〔装飾品について〕（第274図165・166）

本調査において弥生時代後期前半の住居址から2点出土した。274-165はY104号住居址からの出土で、全面研磨が施され、緑色のチャートで、弥生人の緑色に対する憧憬趣向が窺われる。274-166はY102号住居址からの出土で、中心より上向にφ2mmの穿孔を1つ有し、円板形を呈し、全面に研磨の施された滑石製の有孔円板である。

〔台石について〕（第275図172-184）

本調査において、弥生時代中期後半～弥生時代後期前半の住居址の床面ないし直上に固定された状態で10点出土し、殆どが僅かに凹気味の平坦面をもつ扁平な河原石で860g以上の重さを測る。また、加工面や著しい使用痕を有するものが少なく、台石と認定するのに困難なものも多く、ここでは、出土状態と形状・使用痕等の観察に

よって抽出を行った。

形状は円磨作用をうけた亜角礫で、厚さ3.5～15.2cmを測る扁平な河原石であり、石質は主に安山岩であるが、275-180は花崗岩である。

使用痕及び付着物を観察してみると、使用面に擦過痕が認められるもの275-173 (Y65)・174 (Y65)・175 (Y73)・178 (Y88)・179 (Y82)・180 (Y98)、敲打痕が認められるもの275-175、器面が磨滅しているもの275-176 (Y78)・177 (Y125)・181 (Y78)、赤色顔料付着が観察できるもの275-172 (Y115)・173、煤付着が観察できるもの275-174・175がある。

以上これらの台石の用途は赤色顔料の粉碎 (172・173)、糞叩き台、粘土の練り台、踏み台、擦り台、食物の叩き台等に使用されたと考えられるが、出土位置・状態とも考え合せ、住居址内の空間利用を知る1つの手懸りになると思われる。

〔石器用材及び石核について〕 (第274図168～171、第276図182・183)

石器組成一覧表 (第63表) でも看取できるが、佐久において弥生時代中期になると、新たに磨製石鏃・磨製石包丁等を作るため、薄く剥れ、ある程度硬度のある用材 (粘板岩・千枚岩) が必要になったことが窺われ、その用材を千曲川から入手したと考えられる。また石器の母岩が出土している住居址からは剥片・細片・碎片も多く出土する傾向が窺われ、住居址の性格・生活の分担化等を知る手懸りになると思われる。

石核の黒曜石276-182・183は共に周滄 (S7) から出土しているが、弥生時代の剥片剥離技術を知るうえでよい資料といえよう。剥片を取った痕跡は斉一性のない剥離面が多数残っており、ある箇所では縦長剥片跡であったり、横長剥片跡であったりする。チャート276-184 (表採) においては、剥片を取った残存型態は2極を有し、略多角型の紡錘形を呈すことから、縦長剥片を取ったと思われる。

(羽毛田 伸)

註(1) 鈴木道之助『石器の基礎知識III』石鏃の項より

註(2) 酒井 龍一1985「6農具・磨製石包丁」『弥生文化の研究5 道具と技術I』

第59表 北西ノ久保遺跡出土石器一覧表〈1〉

標図番号	器種	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	欠損状態	出土遺構	備考
267-1	打製石鏃	黒曜石	2.1	<2.0>	0.4	1.5	片逆刺僅欠	Y78 Na 1	平基無茎鏃(三角鏃)
267-2	打製石鏃	黒曜石	<2.3>	<2.2>	0.4	<1.2>	先端片逆刺欠	Y89 II区1層・2層	凹基無茎鏃、逆刺凹く、挟り深い。
267-3	打製石鏃	黒曜石	2.7	1.7	0.3	0.8	完形	Y66 Na12、IV区2層	凹基無茎鏃、逆刺凹く、挟り「U」字状に深い。
267-4	打製石鏃	黒曜石	2.4	1.8	0.5	0.6	片逆刺欠	S13 IV区1層	凹基無茎鏃、逆刺鋭く、挟り深い。
267-5	打製石鏃	黒曜石	2.5	1.4	0.3	0.6	完形	S13 III区	凹基無茎鏃、逆刺やや鋭く、挟り「V」字状にやや深い。先端部急に収束する。
267-6	打製石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.4	0.85	完形	Y73 Na 5	凹基無茎鏃、逆刺やや鋭く、挟りやや浅い。
267-7	打製石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.7	完形	S13 V区2層	凹基無茎鏃、逆刺鋭く、挟りやや浅い。
267-8	打製石鏃	黒曜石	2.4	1.9	0.4	0.9	完形	Y66 Na28	凹基無茎鏃、逆刺やや鋭く、挟り浅い。
267-9	打製石鏃	黒曜石	<2.5>	<1.5>	0.4	<0.8>	先端部、片側辺、片逆刺僅欠	表採	凹基無茎鏃、逆刺やや鋭く、挟りやや浅い。
267-10	打製石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.4	0.6	完形	Y70 II区	凹基無茎鏃、逆刺やや鋭く、挟り浅い。裏面やや凹、表面凸。
267-11	打製石鏃	黒曜石	2.1	1.6	0.4	0.85	片逆刺僅欠	S16 VII区	凹基無茎鏃、逆刺やや鈍く、挟り非常に浅い。
267-12	打製石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.2	3.5	完形	Y115 Na 9	凹基無茎鏃、逆刺やや鈍く、挟り非常に浅い。
267-13	打製石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.3	0.45	完形	さ25 グリッド	凹基無茎鏃、逆刺やや鈍く、挟り非常に浅い。
267-14	打製石鏃	黒曜石	2.1	1.2	0.6	0.85	片逆刺僅欠	Y109 N区	小形五角形鏃、側辺鋸歯状を呈す。
267-15	打製石鏃	黒曜石	2.2	0.9	0.4	0.6	完形	Y71 III区	変形五角形鏃(打製石鏃未成品?)
267-16	打製石鏃	黒曜石	<2.1>	<1.3>	0.5	<0.8>	両脚部欠	Y89 I区1層	凹基無茎鏃
267-17	打製石鏃	黒曜石	<1.8>	<1.2>	0.3	<0.3>	両逆刺欠	D162	凹基無茎鏃
267-18	打製石鏃	黒曜石	<1.3>	<1.2>	<0.3>	<0.3>	先端、両脚部欠	Y77 ベルト内	無茎鏃
267-19	打製石鏃	チャート	<3.1>	<2.1>	<0.45>	<2.2>	基部、片基部欠	Y74 IV区	凸基有茎鏃
267-20	打製石鏃	黒曜石	<2.1>	1.5	0.5	1.15	基部欠	Y66 Na18、IV区4層	平基有茎鏃
267-21	打製石鏃	チャート	<2.5>	1.4	0.3	1.2	先端、片逆刺、基部欠	Aトレ 砂層(1層)	平基有茎鏃、側辺やや鋸歯状を呈す。
267-22	打製石鏃	黒曜石	<2.5>	1.4	0.3	<1.1>	基部 先端部欠	Y74	平基有茎鏃、側辺やや鋸歯状気味で、先端鋭く収束。
267-23	打製石鏃	チャート	<1.8>	<1.8>	0.3	<0.45>	先端、基部、片逆刺欠	そ24 グリッド	小型平基有茎鏃
267-24	打製石鏃	黒曜石	<1.7>	1.1	0.2	0.3	基部欠	Y75 IV区1層	小型平基有茎鏃
267-25	打製石鏃	黒曜石	<1.9>	1.2	0.5	<0.7>	先端欠	Y89 II区1層	小型平基有茎鏃、逆刺鈍い。
267-26	打製石鏃	黒曜石	<2.0>	<1.9>	—	<0.72>	完形	Y93 IV区	凹基有茎鏃、逆刺鈍い。
267-27	打製石鏃	黒曜石	2.7	<1.6>	0.6	1.25	片逆刺欠	Y116 Na 7	凹基有茎鏃、側辺やや鋸歯状で、先端で小さくくびれる。
267-28	打製石鏃	黒曜石	<1.9>	<1.6>	0.4	0.6	先端、基部、片逆刺欠	S15 Na 2	凹基有茎鏃、側辺やや鋸歯状を呈す。
267-29	打製石鏃	黒曜石	<2.2>	<1.6>	0.5	<1.0>	基部、片逆刺欠	Y71、M 3	凹基有茎鏃、側辺上部段を有し、先端で収束する。
267-30	打製石鏃	玄武岩	<2.6>	1.9	0.4	<0.5>	基部欠	Y91 Na 1	飛行機鏃、逆刺鋭く、側辺僅かに鋸歯状を呈し、鋭く先端部に収束する。
267-31	打製石鏃	チャート	1.3	1.8	0.4	0.55	先端、基部欠	S15 Na 2	凹基有茎鏃、挟り非常に浅く、側辺鋸歯状を呈す。
267-32	打製石鏃	黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.25	完形	Y76 ベルト内1層	小型凹基有茎鏃、側辺鋸歯状で、先端で急に収束する。
267-33	打製石鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.35	完形	Y78	小型凹基有茎鏃、側辺鋸歯状で、先端で急に収束する。
267-34	打製石鏃	黒曜石	1.6	<1.3>	0.4	0.5	片逆刺欠	Y66 Na19、IV区3層	小型凹基有茎鏃、先端で小さくくびれる。
267-35	打製石鏃	黒曜石	<1.5>	<1.2>	<0.25>	<0.3>	基部部欠	Y74 III区2層	小型凹基有茎鏃、逆刺やや鋭く、側辺鋸歯状を呈す。
267-36	打製石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.5	基部部、片逆刺欠	Y76 P 4	小型凹基有茎鏃、挟り深く、側辺鋸歯状を呈す。
267-37	打製石鏃	黒曜石	<1.7>	<1.1>	0.3	<0.35>	基部部、片逆刺僅欠	Y91 Na 2	小型凹基有茎鏃、逆刺やや鋭く、側辺鋸歯状を呈す。
267-38	打製石鏃	黒曜石	<1.4>	<1.8>	0.4	0.5	先端、基部、片逆刺欠	S16 Na 2	小型凹基有茎鏃、側辺やや鋸歯状気味。
267-39	打製石鏃	黒曜石	<1.8>	<1.3>	0.3	0.55	基部部、片逆刺僅欠	Y115 Na 2	小型凹基有茎鏃、側辺僅有段を呈し、先端に収束。
267-40	打製石鏃	黒曜石	<1.5>	<1.2>	0.3	0.35	逆刺僅、基部欠	Y104 I区	凹基有茎鏃
267-41	打製石鏃	黒曜石	<2.2>	<1.3>	<0.4>	<0.9>	片脚、先端部欠	Y69 N区	
267-42	打製石鏃	黒曜石	<1.5>	<1.3>	<0.7>	<1.0>		Y88 III区	(打製石鏃未成品?)
267-43	打製石鏃	黒曜石	<1.4>	1.5	<0.5>	<0.9>	先端欠	Y78 IV区	平基無茎鏃
267-44	打製石鏃	黒曜石	1.3	0.8	0.3	0.25	両脚部欠	Y111 S区	
267-45	打製石鏃	黒曜石	<2.0>	<1.3>	<0.5>	<0.4>	片脚部僅残存	Y126 II区	
268-46	打製石鏃未成品	黒曜石	3.1	1.3	0.9	2.9		S10 VIII区1層	押圧剥離段階で中止
268-47	打製石鏃未成品	チャート	<2.1>	<1.2>	0.6	<1.1>		Y71 I区	押圧剥離段階で破損

第60表 北西ノ久保遺跡出土石器一覧表〈2〉

標図番号	器種	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	欠損状態	出土遺構	備考
268-48	打製石鏃 未成品	黒曜石	1.1	0.9	0.4	0.35		S14 II区	
268-49	打製石鏃 未成品	黒曜石	<2.0>	1.6	0.6	1.45		つ16 グリッド	側面押圧剥離段階で破損。
268-50	磨製石鏃	千枚岩	<2.15>	<1.15>	2.2	<1.3>	先端部欠	Y66 Na33 II区4層	凹基鏃 逆刺鋭く、挟り浅い。側面から先端部に内弯気味で収束。穿孔なし。
268-51	磨製石鏃	千枚岩	<1.8>	2.5	<0.2>	<1.2>	刃部欠	Y100 Na1	凹基鏃 逆刺鋭く、挟りやや浅い。両挟りによる内径2mmの小孔を有す。
268-52	磨製石鏃	千枚岩	<1.6>	<1.9>	<2.0>	<0.7>	端部欠	S16 V区1層	凹基鏃 逆刺鋭く、挟りやや浅い。両挟りによる内径2.5mmの小孔を有す。
268-53	磨製石鏃	粘板岩	<2.4>	<1.9>	<2.2>	<1.4>	先端部欠	Y74 Na6	凹基鏃 逆刺二枚を有し、挟り「台形」状を呈す。両挟りによる内径1.5mmの小孔を有す。
268-54	磨製石鏃	千枚岩	<3.4>	<2.9>	<2.0>	<2.0>	片逆刺欠	S13 IVE区2層	凹基鏃 逆刺鈍く、挟り浅い。側面鏃有す。両挟りによる、内径2.5mmの小孔を有す。
268-55	磨製石鏃	粘板岩	<3.15>	<1.4>	-	<1.05>	両脚部欠	Y124 Na1	両挟りによる内径<2mm>の小孔を有す。先端部、接をなし断面変形を呈す。
268-56	磨製石鏃	粘板岩	<1.9>	<1.75>	<0.2>	<0.7>	両脚部欠	Y114	両側面鏃有す。両挟りによる内径1.5mmの小孔を有す。
268-57	磨製石鏃 未成品	千枚岩	3.4	2.5	0.3	2.6		と23 グリッド	調整剥離段階で中止。
268-58	磨製石鏃 未成品	粘板岩	4.5	2.4	0.6	5.6		表採	調整剥離段階で中止
268-59	磨製石鏃 未成品	千枚岩	2.0	2.1	0.3	1.9		Y87 IV区	両面研磨段階で破損
268-60	磨製石鏃 未成品	粘板岩	<5.0>	<1.4>	<0.3>	<2.7>		Y124 I区	両面研磨痕有す。片側面敲打が施されている。
268-61	磨製石鏃 未成品	粘板岩	5.0	1.7	0.6	5.0		S10 VIII区3層	側面研磨段階で中止。
268-62	磨製石鏃 未成品	粘板岩	<3.1>	<1.8>	<3.0>	<2.6>		S11 IV区	側面敲打の後、僅かに研磨痕残る。
268-63	磨製石鏃 未成品	粘板岩	2.9	1.4	1.2	0.7		Y101 Na2	両面、側面、基部研磨段階で中止。
268-64	磨製石鏃 未成品	粘板岩	3.9	2.0	0.6	6.5		き18 グリッド	表、裏面研磨、側面研磨段階で中止。
268-65	磨製石鏃 未成品	粘板岩	<3.4>	<1.7>	<3.5>	<2.3>	両脚部欠	し22 グリッド	両面、側面、両端研磨段階で中止。
268-66	磨製石鏃 未成品	粘板岩	<2.2>	<1.4>	<3.0>	<1.0>	両脚部欠	Y73 I区1層	表、裏、両側面研磨段階で中止。
268-67	磨製石鏃 未成品	粘板岩	4.4	1.8	0.2	2.9		Y78	表、裏、両側面、基部研磨段階で中止。
268-68	磨製石鏃 未成品	粘板岩	2.5	1.15	0.18	1.1		Y69 Na7	表裏面、側面、基部、平滑に研磨。穿孔段階で中止。
268-69	磨製石鏃 未成品	千枚岩	<1.3>	<2.2>	<0.2>	<0.7>	端部欠	Y123 E区	両挟りの一方終了後、もう一方の穿孔を始めた時点で破損
268-70	磨製石鏃 未成品	粘板岩	<3.0>	<1.7>	<2.5>	<2.0>	先端、片側面、片逆刺欠	S12 I区1層	両挟りによる穿孔時に、破損したと思われる。
268-71	石 槍	チャート	5.4	1.5	0.5	2.0	完 形	Y78 Na2	基部は「V」字状に突起。逆刺は側面より僅かに突起し、挟りはやや浅い。
269-72	石 錐	黒曜石	1.5	1.4	0.6	1.4	完 形	Y119 視乱	錐部断面変形を呈す。
269-73	石 錐	黒曜石	2.4	1.5	0.9	1.2	完 形	T3 I区	不定形削片の一部に両端から加工調整して錐部を作り出す。
269-74	石 錐	黒曜石	1.7	<0.9>	-	<0.7>	橋み部僅残存	Y115 III区	錐部磨滅著しい。
269-75	石 錐	黒曜石	2.5	0.8	0.8	1.35	完 形	S13 II区1層	棒状を呈す。
269-76	石 錐?	玄武岩	<2.4>	<0.7>	0.4	<0.6>	錐部残存	き25 グリッド	棒状を呈す。
269-77	石 錐?	黒曜石	<2.2>	1.2	0.4	<0.9>	錐部欠	S13 III区1層	
269-78	削片利用石器	チャート	3.6	2.4	0.7	4.4		D172 Na1	刃部両面加工。
269-79	削片利用石器	黒曜石	<3.5>	<1.9>	0.8	3.5		表採	刃部刃痕が認められる。
269-80	削片利用石器	粘板石	<1.5>	<1.6>	<0.5>	<1.2>		Y115 II区	側面加工が施されている。
269-81	削片利用石器	黒曜石	2.3	1.9	1.1	2.0		S13 VIII区1層	断面三角形を呈す。
270-82	磨製石斧	閃緑岩	<11.2>	<7.0>	<3.5>	<481.6>	基部部欠	Y69 Na4	大型蛤刃石斧、基部表面磨滅が著しい。刃痕が観察できる。刃部円刃。
270-83	磨製石斧	閃緑岩	<7.4>	<5.65>	<3.4>	<220.0>	基部半欠	Y115 Na10	大型蛤刃石斧、刃部僅かに刃痕が観察できる。
270-84	磨製石斧	閃緑岩	<6.3>	<3.5>	<2.2>	<73.4>	基部欠	Y74 Na1	刃部偏った丸刃で蛤刃、使用痕と僅かに刃痕が観察できる。
270-85	磨製石斧	閃緑岩	13.6	6.0	3.9	560.5	完 形	Y109 Na3	大型蛤刃石斧、使用により破損。再度片面、片刃をつけ利用。刃部刃痕が観察できる。
270-86	磨製石斧	閃緑岩	15.0	7.0	4.6	965.1	完 形	M2 Na1 視乱	大型蛤刃石斧を敲石として再利用、使用痕著しく、下部磨滅著しい。
270-87	磨製石斧	閃緑岩	14.5	7.8	4.7	924.5	完 形	Y101 Na4	大型蛤刃石斧の刃部破損のため、刃部平坦に研磨。基部部敲石として再利用。
270-88	磨製石斧	閃緑岩	14.1	6.6	4.1	746.0	完 形	Y85 Na7	大型蛤刃石斧の刃部破損のため、刃部平坦に研磨。基部部敲石として再利用。
270-89	磨製石斧	閃緑岩	10.4	7.2	4.2	511.5	完 形	D140 2層	大型蛤刃石斧の再利用。基部部研磨した後敲石に転用したと思われる。
270-90	磨製石斧	閃緑岩	<4.9>	<6.4>	<4.3>	<203.5>	基部部残存	Y91 II区視乱	大型蛤刃石斧
271-91	磨製石斧	閃緑岩	11.0	5.8	1.9	229.4	完 形	Y101 Na3	扁平片刃石斧、刃部やや円刃である。刃部、錐部やや使用痕観察できる。
271-92	(局部) 磨製石斧	凝灰岩?	9.1	5.4	1.4	139.4	完 形	Y84 土坑内	扁平片刃石斧、刃部、片側面、基部表面片側研磨されている。
271-93	磨製石斧 未成品	閃緑岩	10.5	6.3	2.1	195.0		表採	扁平片刃石斧未成品、調整剥離段階で中止。
271-94	磨製石斧	粘板岩	5.5	4.2	1.0	43.8	完 形	Y122 Na11	小型扁平片刃石斧、刃部円刃で表裏面僅かに磨らみを有す。

第61表 北西ノ久保遺跡出土石器一覧表〈3〉

種目番号	器種	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	欠損状態	出土遺構	備考
271-95	磨製石斧	チャート	3.4	2.4	6.0	9.6	完形	Y82 No7	小型扁平片刃石斧、刃部僅かに内刃、使用による刃毀が観察できる。
271-96	局部磨製石斧	安山岩	3.9	3.2	5.0	11.8	完形	表採	小型扁平片刃石斧、長方形で側辺と基部部、裏面に研磨痕が観察できる。
271-97	磨製石斧	チャート	2.0	1.1	0.4	2.1	完形	Y65 No1	極小型扁平片刃石斧、刃部やや内刃気味
271-98	磨製石斧	粘板岩	2.5	1.5	0.6	4.5	完形	Y98 No1 II区	極小型扁平片刃石斧、刃部僅かに刃毀が観察できる。
271-99	磨製石斧	チャート	3.2	1.0	4.5	3.0	完形	OT3 表採	極小型扁平片刃石斧、擦切り技法を用いている。
271-100	磨製石器	粘板岩	<2.5>	<0.9>	<0.5>	<7.65>	半欠損	Y70 II区	極小型扁平片刃石斧、全面に使用痕観察できる。
271-101	磨製石斧	チャート	<2.7>	<3.2>	<1.0>	<8.5>	刃部僅残存	Y74 No20	扁平片刃石斧 刃部使用痕が観察できる。
271-102	磨製石斧	輝緑凝灰岩?	<5.6>	<3.2>	<1.8>	<65.4>	片刃部、片側辺基部、基部部欠	の28 グリッド	扁平片刃石斧 刃部刃毀が観察できる。
271-103	磨製石斧	硬砂岩	<4.5>	<3.3>	<1.4>	<18.4>	片刃一部残存	表採	刃部両平刃と思われる。
271-104	石包丁	粘板岩	3.8	11.3	7.5	47.1	完形	Y74	磨製の片刃直線刃半月型、両挟りによる内径0.6cmの二つの穿孔を有す。
271-105	石包丁	粘板岩	<3.1>	<3.7>	<0.5>	<7.3>	紐孔-刃部一部残存	Y78 床土	紐孔、両挟りによる内径4mmの小孔を有し、刃部やや内刃気味の片刃である。
271-106	打製石斧	玄武岩	<8.2>	<5.3>	<1.3>	<83.8>	基部半欠	表採	横刃型石器として利用された可能性有。刃部磨滅著しい。
271-107	打製石斧	安山岩	<8.3>	<5.6>	<1.3>	<93.5>	基部部、刃部欠	Y125 P3	短冊形と思われ、側辺両面加工、基部下方に使用痕が観察できる。
271-108	打製石斧	安山岩	<9.1>	<5.4>	<1.6>	<98.6>	刃部欠	S9 II区	撥形と思われる。側辺両面加工。
271-109	打製石斧	安山岩	<7.8>	<5.7>	0.9	<75.4>	基部欠	Y66 No5	扁平な石材を利用、刃部磨滅著しい。
271-110	打製石斧	玄武岩	<19.5>	<11.2>	3.4	<261.7>	基部部、刃部一部欠	Y122 No13	大型打製石斧、撥形、刃部磨滅著しい。
271-111	打製石斧	玄武岩	21.7	10.8	3.1	715.5	完形	Eトレンチ黒色土	大型打製石斧、撥形を呈し、刃部両面加工で磨滅著しい。
272-112	打製石斧	玄武岩	<3.6>	5.5	<0.7>	<21.2>	基部部残存	Y116 II区	
272-113	打製石斧	玄武岩	<3.6>	<4.5>	<1.3>	<27.4>	基部部残存	Y126 II区	
272-114	打製石器	粘板岩	5.0	<7.1>	0.6	<29.0>	略半欠	せ26 グリッド攪乱	横刃型石器(磨製石包丁未成品?)
272-115	打製石器	玄武岩	<2.4>	<5.7>	<0.9>	<22.3>	略半残存	せ16 グリッド	横刃型石器
272-116	局部磨製石器	粘板岩	3.3	5.2	0.6	11.5	完形	S10 X区3層	刃部両面加工(石包丁未成品?)
272-117	局部磨製石器	粘板岩	<6.6>	<3.9>	0.9	<24.0>	片刃部残存	Y125 I区	刃部片刃で磨滅著しい。打製石包丁の可能性有。
272-118	打製石器	玄武岩	10.3	4.7	<0.9>	<47.3>	基部部僅欠	Y73 No20	短冊形 刃部僅磨滅。打製石包丁の可能性有。
272-119	不定形石器	玄武岩	5.2	6.1	0.7	30.3	完形	Y77 II区	剥片利用、刃部片面加工、刃毀が観察できる。
272-120	不定形石器	玄武岩	<6.8>	4.5	1.2	<33.7>		M3 E区	剥片利用、刃部片面加工、刃毀が観察できる。
272-121	不定形石器	玄武岩	3.4	4.3	0.7	<10.5>		Y115 II区	剥片利用、刃部片面加工、刃毀が観察できる。
272-122	不定形石器	玄武岩	2.9	6.0	0.9	15.0	完形	Y116 I区	剥片利用、刃部弧状片面加工、刃毀が観察できる。
272-123	不定形石器	玄武岩	4.7	2.7	0.9	11.7	完形	M3 覆土	剥片利用、刃部片面加工
272-124	不定形石器	玄武岩	8.2	8.8	2.4	122.4	完形	Fトレンチ地張	剥片利用、刃部片面加工、刃毀が観察できる。
272-125	打製石器	粘板岩	7.4	5.8	2.4	107.8	完形	Y121 IV区	寛状石器、頭部が尖り刃部に向けて大きく開き、刃部両面加工で磨滅
272-126	打製石器	安山岩	7.6	4.8	9.5	36.5	完形	Y126 No1	表面自然面を利用、頭部から刃部にかけて大きく開き、刃部丸刃、両面加工。
272-127	握斧	玄武岩	9.8	11.6	2.2	275.4	完形	Y71 No2	刃部磨滅著しい。河原石の第1剥離利用。
272-128	握斧	安山岩	<18.8>	<8.7>	<2.4>	<730.9>	基部部欠	Y93 No15・16	自然石利用、刃部偏刃、凸凹刃で僅かに両面加工、側辺使用痕、刃部僅かに使用痕。
272-129	砥石	砂岩	<7.0>	<3.3>	<1.3>	<33.1>	片側辺欠	Y74	石包丁様石器、側辺内弯両刃状で、表面凸状。
272-130	砥石	砂岩	5.0	<6.5>	1.3	<44.3>	半欠	Y128	石包丁様石器、側辺内弯両刃状、扁平、表面被研磨痕観察できる。
272-131	砥石	砂岩	4.7	8.9	1.4	76.5	完形	せ26 グリッド	石包丁様石器、側辺内弯両刃状。
272-132	砥石	砂岩	8.3	4.2	1.6	52.0	完形	せ26 グリッド	分銅状を呈し、両面内弯両刃状。裏面僅凹状に被研磨痕観察。
272-133	砥石	砂岩	5.1	8.8	1.3	66.8	完形	D152	石包丁様石器、扁平な河原石利用、構内を呈し、僅かに両刃状に磨滅。
272-134	砥石	砂岩	<3.8>	<6.5>	<1.2>	<38.0>	半欠	Y78 IV区	石包丁様石器、片側外弯両刃状に磨滅。
272-135	砥石	砂岩	6.0	<6.2>	1.8	<73.9>	半欠	Y91 II区 攪乱	石包丁様石器、小判形、片側外弯両刃状に磨滅。
273-136	砥石	砂岩	6.0	4.5	1.0	35.8	完形	Y78 III区	石包丁様石器、片側両面両刃状に磨滅し、やや内刃気味。裏面やや凹状。僅擦過痕。
273-137	砥石	砂岩	<8.9>	<5.4>	<2.5>	<114.6>		Y86 No4	石包丁様石器、片側両面両刃状に磨滅。
273-138	砥石	砂岩	<6.0>	<4.5>	<1.4>	<49.0>	一部残存	Y100 No41	石包丁様石器、両面両面両刃状に磨滅。片側やや内刃気味。表面平坦。裏面やや凹状。
273-139	砥石	砂岩	4.2	7.2	1.2	56.8	完形	の18 グリッド	石包丁様石器、表面やや凸状、裏面凹状、片側両面両刃状に磨滅。
273-140	砥石	砂岩	6.0	4.0	8.0	24.0	完形	Y78 I区	構内を呈し、側辺磨滅著しい。両面僅凹状になり、擦過痕観察できる。
273-141	砥石	砂岩	5.8	8.7	1.6	77.7	完形	Y108 S区	表面凹状で被研磨痕、裏面やや凸状で被研磨痕観察できる。

第62表 北西ノ久保遺跡出土石器一覧表〈4〉

標図番号	器種	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	欠損状態	出土遺構	備考
273-142	砥石	砂岩	<2.8>	2.0	0.4	<2.1>	略完形	Y121 IV区	屑状を呈し、全面に被研磨痕残る。
273-143	砥石	砂岩	5.2	2.9	2.0	48.6	完形	Y91 III区	方柱状を呈し、全面に被研磨痕残る。
273-144	砥石	砂岩	5.9	3.3	1.7	3.0	完形	S10 II区2層	方柱状を呈し、全面に被研磨痕残る。表面僅刻線残る。
273-145	砥石	泥岩	8.4	2.5	1.6	39.6	完形	Y100 No47	扁平で棒柱状を呈し、片面片刃状に磨減している。表面両側面擦過痕有す。
273-146	砥石	砂岩	9.5	3.0	2.2	<58.3>		Y73 No21	棒柱状を呈し、僅使用痕認められる。
273-147	砥石?	泥岩?	<6.8>	<3.9>	<1.6>	<59.4>	基端部欠	Y73 No19	自然石を利用、両面に被研磨痕が観察できる。
273-148	砥石	砂岩	<5.4>	<5.6>	<1.3>	<64.6>		Y89 I区2層	両面、側面被研磨痕残る。
273-149	砥石	砂岩	<4.7>	<4.4>	<1.2>	<18.3>	僅残存	き11 グリッド	表面凹状に磨減、僅に火熱をうけた跡が観察できる。
273-150	砥石	砂岩	<11.1>	<7.2>	<1.4>	<181.9>		D140	表裏面被研磨痕著しい。扁平置き砥石。火熱による煤付着。
273-151	砥石	砂岩	<7.9>	<9.1>	<2.8>	<258.2>	略半残存	ね17 グリッド	置き砥石、表裏面被研磨痕残る。
273-152	砥石	砂岩	<8.9>	<5.5>	<1.8>	<140.9>		Y66 IV区1層	扁平置き砥石、表裏面被研磨痕残る。
273-153	砥石	砂岩	11.1	5.5	3.5	271.5	完形	Y104 I区1層	四角錐状を呈し、4面に被研磨痕残る。
273-154	砥石	砂岩	<8.6>	<6.7>	<7.5>	<329.5>		Y100 No41	表面に数条の刻線残る。
273-155	砥石	砂岩	<8.4>	15.5	<7.5>	<866.8>		Y108	置き砥石、表面、両側面被研磨痕が観察できる。
273-156	敲石	硬砂岩	10.5	4.0	3.0	184.0	完形	Y70	河原石利用。端部敲打痕が観察できる。
273-157	敲石・磨石	砂岩	<8.3>	4.4	2.7	<147.1>		Y64 W区	先端部、敲打痕、擦過痕が観察できる。河原石利用。
274-158	敲石	安山岩	13.8	5.3	3.8	423.5	完形	Y87	端部、敲打痕が観察できる。河原石利用。
274-159	敲石	凝灰岩	12.8	4.2	3.4	305.4	完形	表採	僅敲打痕観察できる。河原石利用。
274-160	敲石	安山岩	7.5	8.9	7.0	685.5	完形	Fトレンチ黒色土	握り拳大の河原石。
274-161	敲石	安山岩	8.8	6.5	5.3	442.1	完形	表採	握り拳大の河原石、端部、敲打痕、擦過痕観察できる。
274-162	磨石(敲石)	安山岩	12.0	7.9	6.5	815.0	完形	Y98 No8	両端を磨石と敲石に再利用。
274-163	搬入礫	砂岩	6.4	2.3	0.9	18.5	完形	Y115 P5	赤色顔料付着、土器調整道具に使われた可能性有。
274-164	搬入礫	粘板岩	<4.1>	2.3	0.9	<11.9>		Y66 III区1層	
274-165	搬入礫	チャート	4.0	2.7	1.1	14.5	完形	Y104 No9	
274-166	有孔円盤	滑石	4.2	4.1	0.4	13.85	完形	Y102 No1 III区	片挟り、両面研磨、側面粗い研磨
274-167	硯	粘板岩	<3.3>	<1.6>	<1.7>	<8.5>	片耳の部分僅残存	た15 グリッド	
274-168	磨製石鏃を作る用材	千枚岩	3.9	4.2	0.4	12.5		Y80 II区	
274-169	磨製石鏃を作る用材	粘板岩	9.7	-	0.2	5.7		Y66 III区4層	
274-170	磨製石鏃を作る用材	粘板岩	7.9	11.5	1.7	214.5		Y87 I区	
274-171	磨製石鏃を作る用材	千枚岩	6.8	14.1	1.4	156.3		Y126 No4	
275-172	台石?	安山岩	20.9	8.8	4.5	860.0		Y115 伊緑石	赤色顔料付着
275-173	台石	安山岩	19.6	15.5	7.5	3400.0		Y65 No4	赤色顔料付着
275-174	台石	安山岩	20.3	23.5	5.6	3830.0		Y65 No4	煤付着
275-175	台石	安山岩	25.0	22.1	5.8			Y73 No23	煤付着
275-176	台石	安山岩	16.6	22.6	8.3			Y78 No14	磨減痕有
275-177	台石	花崗岩	21.4	15.3	4.5	2460.0		Y125 No15	磨減破損
275-178	台石	安山岩	12.9	15.2	5.1	1590.0		Y88 No5	磨減痕有
275-179	台石	安山岩	19.8	23.0	3.5	1470.0		Y82 No4	粘土塊がP内より出土していることから粘土の磨り台の可能性有。
275-180	台石	花崗岩	24.2	28.3	6.9			Y98 No7 W区	
275-181	台石	安山岩	32.3	35.1	15.2			Y78 No8	
275-182	石核	黒曜石	-	-	-	801.9		S7 No1	
275-183	石核	黒曜石	-	-	-	601.2		S7 No1	
275-184	石核	チャート	-	-	-	87.6		表採	

第3節 古墳及び周溝

1) 北西ノ久保2号古墳 (第277~279図、図版 八十九・九十)

墳丘

北西ノ久保2号古墳は、浅間火山の初期黒斑火山噴出物塚原泥流の流出による台地が、湯川の浸蝕によって形成された2段の河岸段丘の間の南傾斜面上に所在し、標高は680mを測る。第1段丘である南側水田面との比高差は3mで、第2段丘である遺跡の存在する台地上との比高差は約6mを測る。また台地上のほぼ中央東寄りに位置する第1号古墳とは約125mの距離を有する。

墳丘は、台地の斜面を利用して構築された、所謂「山寄せの古墳」であるが、現状ではすでに崩壊しており、往時の形態を全く留めず、奥壁の一部がわずかに露出している状態であった。

本古墳は、昭和54年度の佐久市教育委員会による台地上の確認調査の際に試掘調査が行われており、耳環・馬具などが出土している¹⁾。今回の調査では、台地の南部斜面の地形図作成、周溝確認のためのトレンチの設定・掘り下げ、土層断面図作成を行い、石室の遺存状態を確認し、実測・写真撮影等を行った後、埋め戻しが行われた。

調査の結果、本古墳東側のトレンチより幅約2m、深さ約25cmの溝が検出され、周溝の可能性も考えられることから、この溝状遺構を本古墳の周溝と考えると、本古墳の墳丘は径15~20mの規模を有していたと考えられる。また、石室の南西斜面上に約1.4m・1.8mの集塊岩が2個並列して露出しており、当初南西に開口すると考えられたが、調査の結果、南東に開口する横穴式石室であることが判明した。

以上、本古墳は墳丘は崩壊し、石室の上部は大半が破壊され、さらに羨道と西側側壁は失われているなど著しい破壊を受けていることが看取された。

内部構造

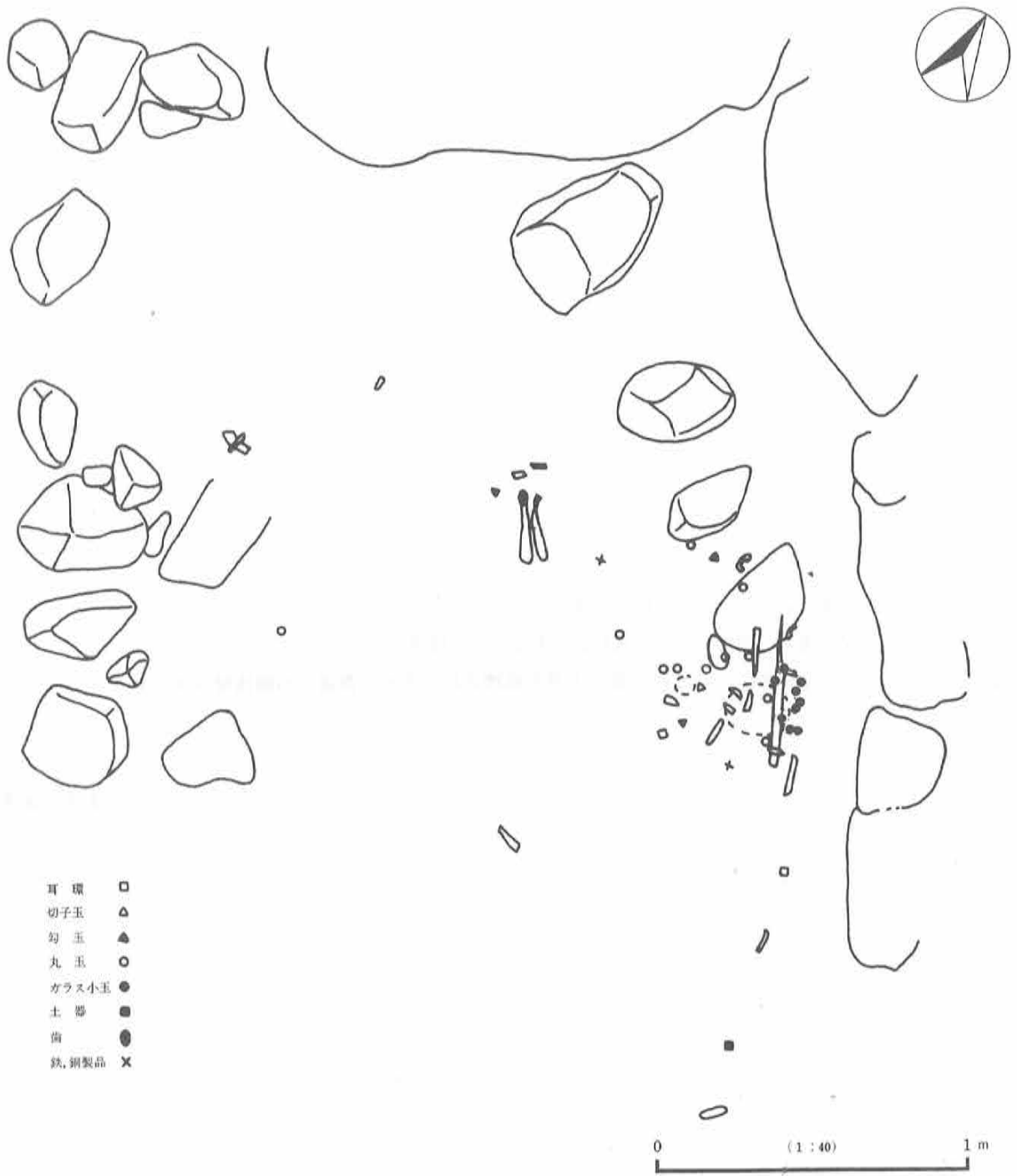
石室の内部構造は、南側に開口する横穴式石室である。石室の上部及び羨道は既に失われ、玄室の右壁も破壊を受けており旧状を留めない。

奥壁には164×110cmの集塊岩の大石1枚が使用され、石室壁は自然石を用いた乱石積むで、左壁は120×105cmの安山岩の大石1枚と長さ約90cmの集塊岩と輝石安山岩の二石が平坦面を壁面にして根石として配されている。右壁は既に破壊されており、側壁に用いられたと考えられる約40cm大の安山岩が散乱している状態であった。また、左壁には安山岩の小礫による裏込めが約1mの幅で検出され、裏込めの被覆には約40~50cm大の安山岩が用いられたと思われる。

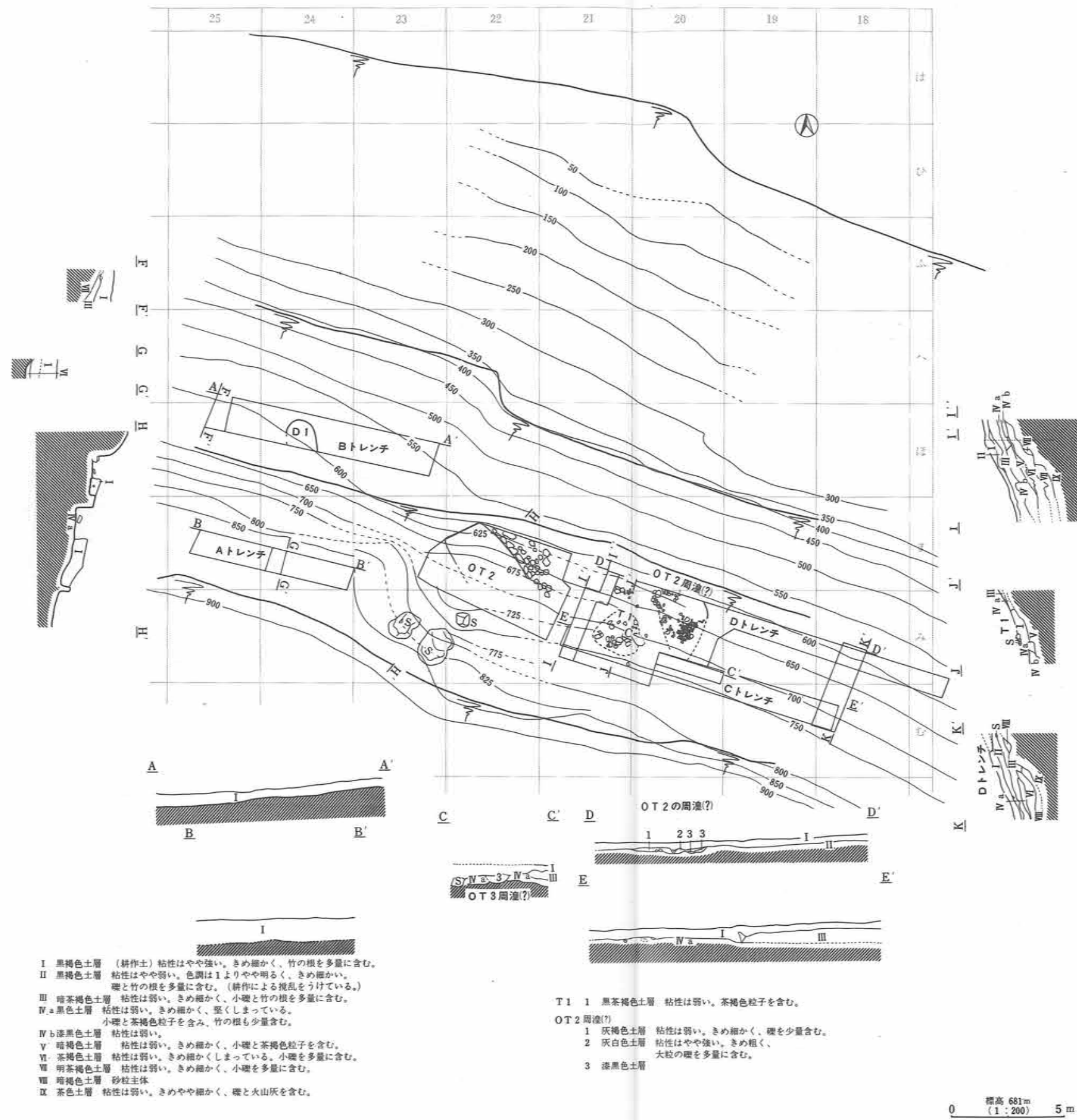
玄室の形態は、右壁が破壊されているため明確ではないが、長方形を呈すると考えられ、玄室の中央部に最大幅を有する胴張りがわずかにみられる。規模は推定で、奥壁幅174cm、最大幅234cm、長さは左壁残存部で264cmを測る。主軸方位はN-30°-Wを示す。

石室構築の使用尺度には、高麗尺(1尺=35cm)、唐尺(1尺=30cm)、普尺(1尺=24cm)がある。本古墳各部の計測値は推定値であるため明確ではないが、奥壁幅174cmと高麗尺に近い数値(約5尺)を示しており、本古墳構築の使用尺度は高麗尺であると考えるのが妥当であろう。

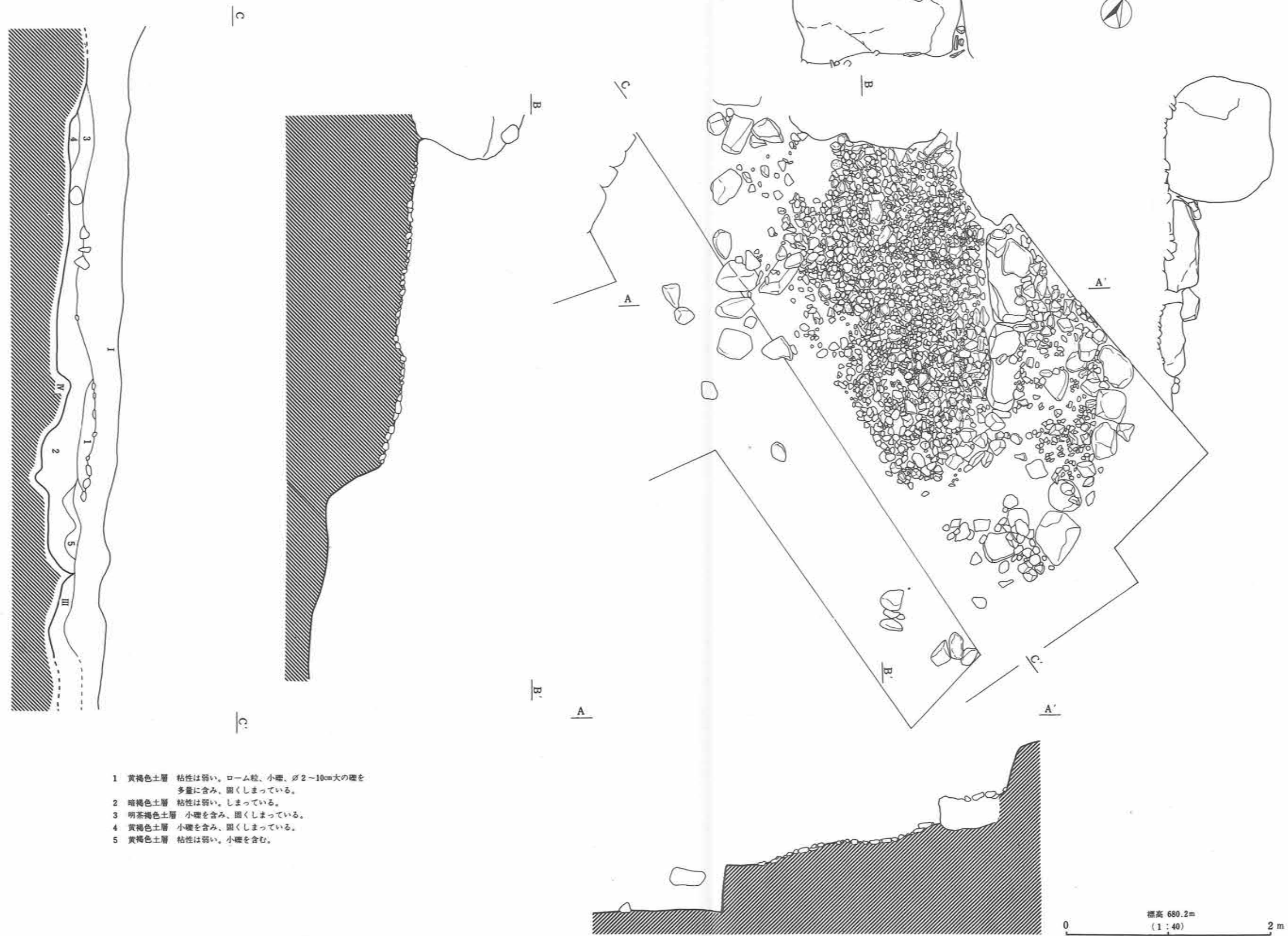
棺床は、地山を掘り込んだ後、14~34cmの厚さで暗褐色土(2層)・明茶褐色土(3層)・黄褐色土(4・5層)を埋土し、さらに約10cmの厚さで、径2~10cm大の礫・ローム粒子を多量に含み、粘性の弱い黄褐色土(1層)をベースとして、その上に径3~15cm大の千曲川の河原石が敷き詰められている。棺床に敷き詰められた河原石には、秩父古生層の礫・花崗岩・閃緑岩など南佐久地方の産出による礫が含まれていることから、千曲川の河原石であることは明らかである。また、本古墳が南傾斜面に構築されているためであろうか、棺床は南に向ってわずかにレベルを低下させている。



第277図 北西ノ久保2号古墳石室内遺物分布図



第278図 北西ノ久保遺跡南部南斜面全体図



- 1 黄褐色土層 粘性は弱い。ローム粒、小礫、 $\phi 2\sim 10\text{cm}$ 大の礫を多量に含み、固くしまっている。
- 2 暗褐色土層 粘性は弱い。しまっている。
- 3 明茶褐色土層 小礫を含み、固くしまっている。
- 4 黄褐色土層 小礫を含み、固くしまっている。
- 5 黄褐色土層 粘性は弱い。小礫を含む。

第279図 北西ノ久保2号古墳石室実測図

遺物の出土状況

本古墳からは、須恵器蓋・鉄製品・金銅製品・耳環・人骨と多数の玉類が出土しており、大部分は石室内棺床上からの出土である。遺物は左壁中央付近に集中する傾向が認められ、特に玉類はこの傾向が顕著である。

須恵器蓋(280-1)は左壁南端部棺床上より出土し、出土状況から本古墳に共伴する資料と考えられ、本古墳の時間的な考案を加える上で貴重な資料である。鉄製品には直刀・刀子・鉄釘があり、直刀は右壁奥より283-4、左壁中央付近より283-1・2の3点が出土し、既出資料として283-3がある。283-1は鋒を奥壁、刀部を左壁側に向ける形で棺床上に水平に置かれていた。刀子は玄室内に散乱した状態で6点出土した。金銅製品には鴉目金具(283-24)・責金具(283-21)があり、283-24は玄室中央左壁寄り、283-21は左壁中央付近より出土した。耳環は8点出土した。282-138・139・147は玄室内より出土し、他はEトレンチ内より出土した。この他既出資料として昭和54年度に佐久市教育委員会によって行われた試掘の際に1点(282-144)出土し、さらに畑の持主であり、当調査団の調査員である井上行雄氏が畑の耕作中に2点(282-145・146)出土しており、本古墳出土の耳環は総数で11点である。人骨は玄室内中央部よりまとまった状態で出土した。玉類にはガラス小玉・丸玉・管玉・棗玉・切子玉・勾玉があり、左壁中央付近より集中して出土した。出土点数は、試掘時の資料も含めて、ガラス小玉94点、丸玉22点、白玉4点、管玉1点、棗玉1点、切子玉5点、勾玉10点を数える。以上、これらの出土遺物は、棺床上面より出土したものであり、概ね、埋葬当時の位置を留めているものと推定される。

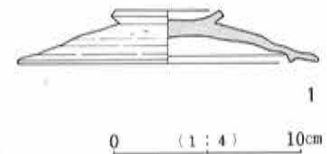
この他の既出資料として、金銅製の匙(283-22)、辻金具(283-23)がある。以下、これらの既出資料も含めて、本古墳の出土遺物について考察を加えていきたい。

出土遺物(第280~283図、図版 九十一・九十二)

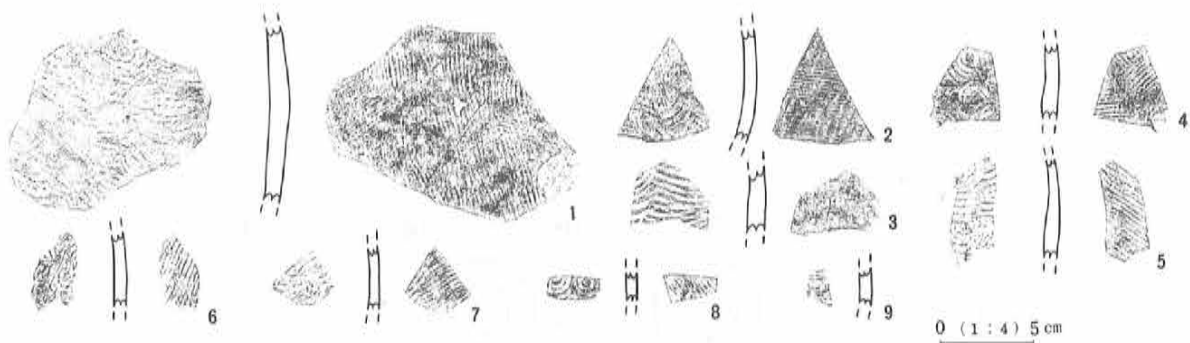
本古墳からは、土師器・須恵器が出土しており、そのうち10点(実測図1点、拓影図9点)が図化できた。

土師器の器種には甕があり、須恵器の器種には甕・坏・蓋がある。

280-1は須恵器蓋で、中央部が凹む環状のつまみで、内面にかえりを有する。天井部は丸味を帯び、端部は直線的に開く。調整は内外面ともロクロヨコナデが施され、天井部上位は回転ヘラケズリ(右回転)が行われる。また、外面には自然釉の付着が著しい。281-1~9は須恵器甕の胴部片で、外面に平行叩き、内面に円弧文様が観られる。この他小片のため図示し得なかったが、土師器甕、須恵器坏がある。



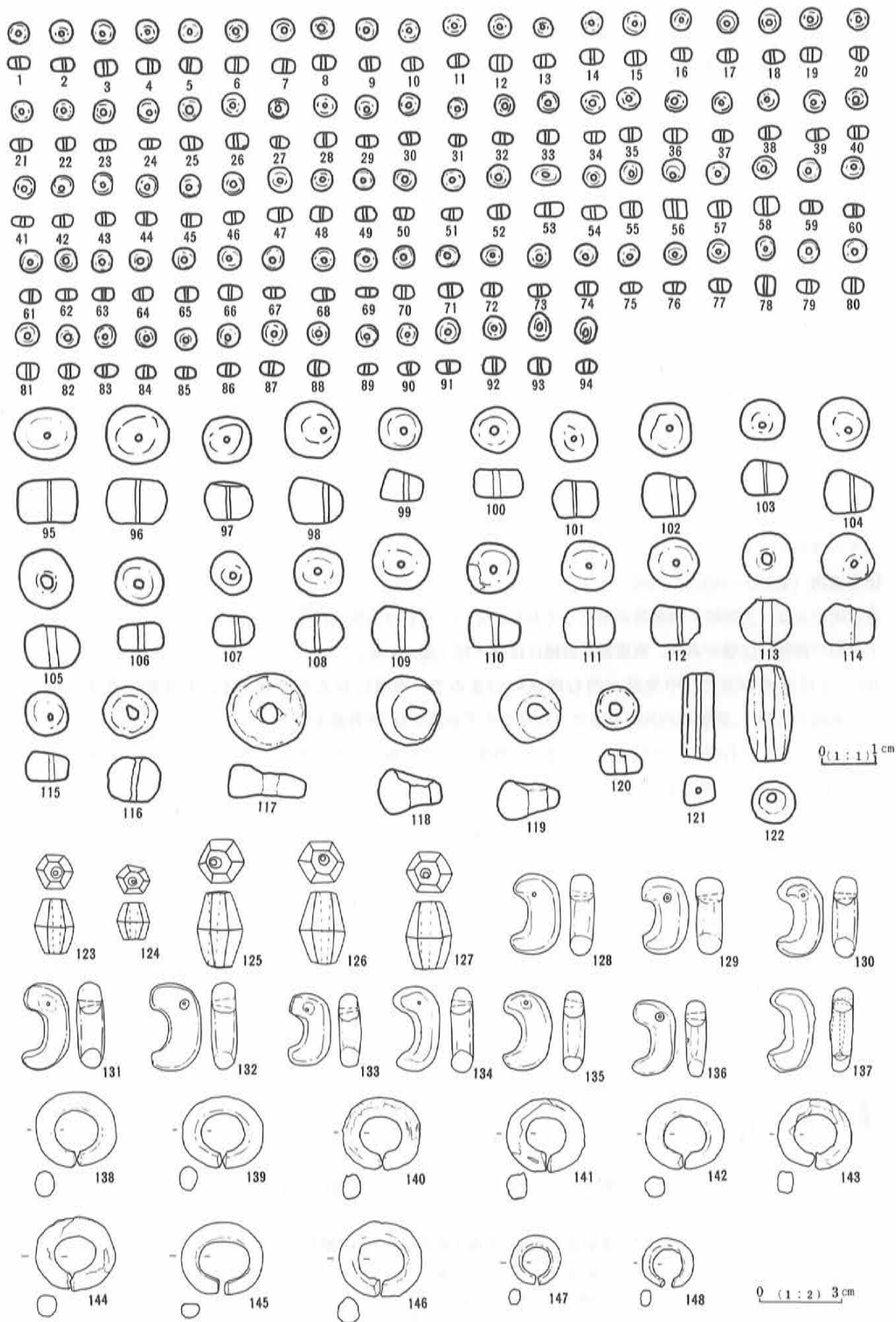
第280図 北西ノ久保2号古墳出土土器実測図



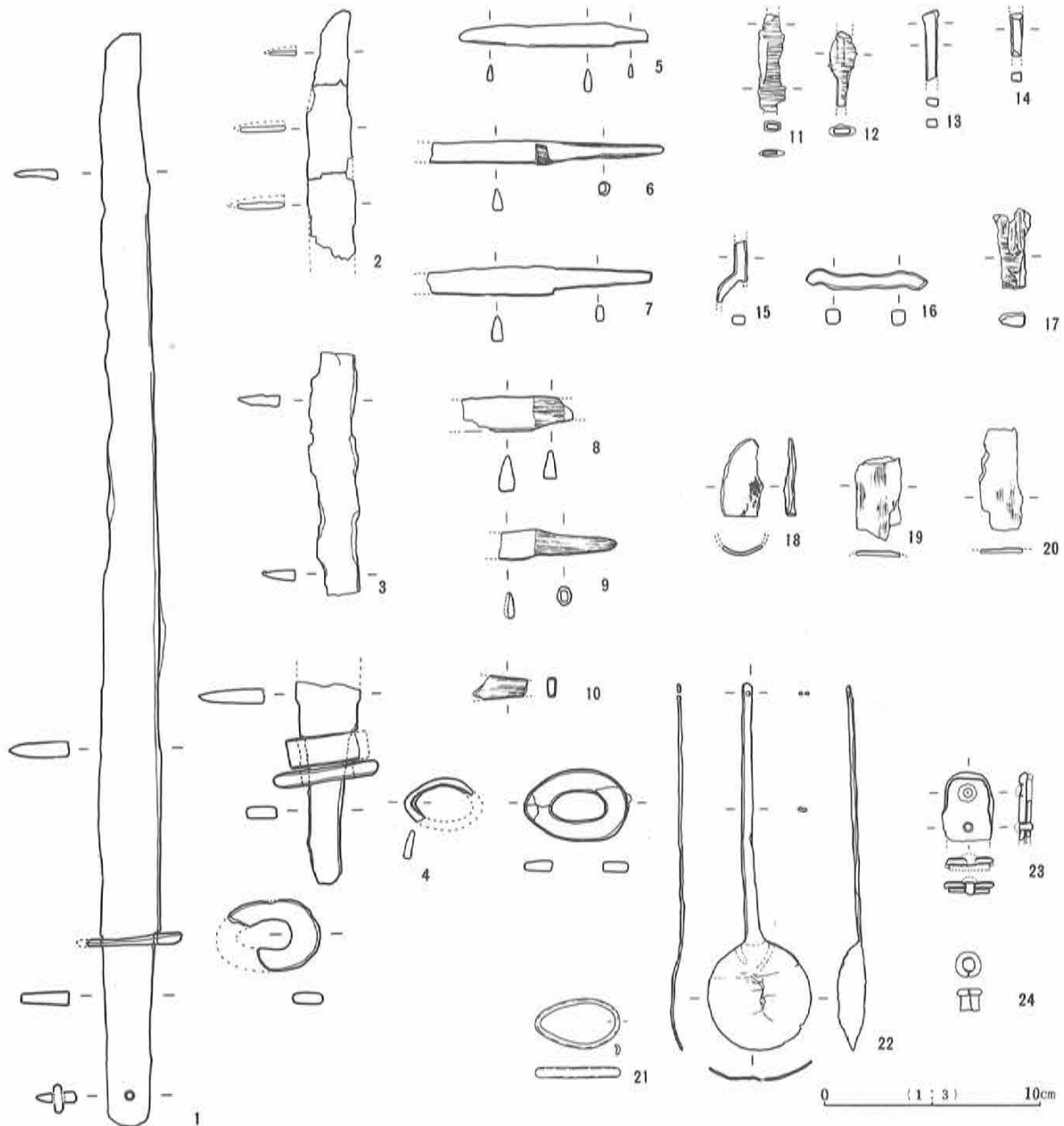
第281図 北西ノ久保2号古墳出土土器拓影図

第64表 北西ノ久保2号古墳出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
280-1	須恵器蓋	5.8 横径部径 16.9 (114.1E) 2.7 (器高)	中凹みの環状のつまみを有する。天井部はやや丸味を持ち、口縁部は外反丸味でかえりを有する。	内) ロクロヨコナデが施されている。 外) ロクロヨコナデが施され、天井部は回転ヘラケズリ(右回り)が施されている。	回転実測B No29 外面に自然釉の付着が著しい。



第282図 北西ノ久保2号古墳出土玉類・耳環実測図



第283図 北西ノ久保2号古墳出土金属器実測図

鉄製品

鉄製品には直刀・刀子・鉄釘がある。直刀は完存品が1振、刃部片2点、茎部1点が出土した。283-1は、全長50.3cm、刃部長41.5cm、最大幅2.9cm、茎部長8.8cm、茎部幅2.3cm、峰厚0.7cmを測る。遺存状態は悪く、刃部・刃関を残さない。また茎部も腐食が著しく旧状を留めていない。茎頭から1.2cmの位置に目釘が錆着している。また、鐔は約1/3が欠損しているものの、短径3.2cmを測る鉄製無窓倒卵形の鐔である。283-2・3は刃部片であるが、腐蝕が著しく旧状を留めない。283-2は鋒と考えられ、残存長は各々11.5cm、11.2cmである。283-4は茎部で刃部はわずかに残存するのみであり、残存長9.4cm、茎部長6.8cm、茎部最大幅2.0cm、鋒厚は関部で0.7cmを測る。鐔と紐を装着しており、鐔は3.3×4.7cmの鉄製無窓倒卵形の鐔である。紐は約1/2が欠損しているが、幅1.5cmで、長径3.6cm前後の楕円形を呈すると推定される。茎部に極くわずかに木質が観察されるが、目釘及び目釘穴は認められない。

第65表 北西ノ久保2号古墳出土ガラス小玉一覧表

挿入番号	最大径 (φmm)	最大厚 (mm)	色 調	穿孔状態	備 考	挿入番号	最大径 (φmm)	最大厚 (mm)	色 調	穿孔状態	備 考	挿入番号	最大径 (φmm)	最大厚 (mm)	色 調	穿孔状態	備 考
282-1	4.0	2.2	青緑色		No13	282-33	4.0	2.5	青緑色		No30	282-65	4.2	2.5	青緑色		No31
282-2	4.1	2.4	青緑色		No14	282-34	4.1	2.1	青緑色		No30	282-66	4.0	2.0	青緑色		No31
282-3	4.3	2.8	青緑色		No15	282-35	4.2	2.5	青緑色		No30	282-67	4.1	2.0	青緑色		No31
282-4	4.0	2.4	青緑色		No16	282-36	4.1	2.5	青緑色		No30	282-68	4.2	2.0	青緑色		No31
282-5	4.3	2.5	青緑色		No17	282-37	3.9	2.2	青緑色		No30	282-69	4.5	1.8	青緑色		No31
282-6	4.0	2.6	青緑色		No18	282-38	4.0	2.4	青緑色		No30	282-70	4.1	2.6	青緑色		No31
282-7	4.0	2.9	青緑色		No19	282-39	4.0	2.3	青緑色		No30	282-71	4.0	2.5	青緑色		No31
282-8	4.1	2.9	緑青色	穿孔のやや大 φ1mm	磨減著しい No20	282-40	4.0	2.4	青緑色		No30	282-72	3.9	2.3	青緑色		No31
282-9	3.9	2.4	青緑色		No28	282-41	4.0	2.0	青緑色		No30	282-73	4.3	2.3	青緑色		No31
282-10	4.0	2.4	青緑色		No30	282-42	4.1	2.1	青緑色		No30	282-74	4.1	2.5	青緑色		No31
282-11	4.1	2.3	青緑色		No30	282-43	4.0	2.2	青緑色		No30	282-75	4.0	2.3	青緑色		No31
282-12	4.2	3.0	青緑色		No30	282-44	4.0	2.3	青緑色		No30	282-76	4.0	2.3	青緑色		No31
282-13	3.9	2.5	青緑色		No30	282-45	4.0	2.4	青緑色		No30	282-77	4.2	2.5	青緑色		No31
282-14	4.0	2.8	青緑色		No30	282-46	4.0	2.0	緑青色		磨減著しい No30	282-78	4.3	3.6	濃紺色		厚い 磨減少ない No31
282-15	4.0	2.6	青緑色		No30	282-47	4.3	2.6	青緑色		No30	282-79	4.1	2.5	濃紺色		磨減少ない No31
282-16	4.1	2.2	青緑色		No30	282-48	3.9	2.7	青緑色		No30	282-80	4.0	3.0	濃紺色		磨減少ない No31
282-17	4.1	2.2	青緑色		No30	282-49	4.0	2.6	青緑色		No30	282-81	4.2	3.2	濃紺色		厚い 磨減少ない No31
282-18	4.0	2.5	青緑色		No30	282-50	4.0	2.1	青緑色		No30	282-82	<4.2>	<2.7>	濃紺色		半欠 No31
282-19	4.0	2.6	青緑色		No30	282-51	4.1	2.4	青緑色		No30	282-83	4.1	2.4	青緑色		石室内
282-20	3.9	2.3	青緑色		No30	282-52	4.1	2.4	青緑色		No30	282-84	3.8	2.5	青緑色		石室内
282-21	4.0	2.3	青緑色		No30	282-53	5.3	2.5	瑠璃色		磨減少ない No30	282-85	4.1	2.1	青緑色		石室内
282-22	3.9	2.5	青緑色		No30	282-54	4.1	2.7	濃紺色		やや磨減 No30	282-86	4.2	2.5	青緑色		石室内
282-23	4.1	2.1	青緑色		No30	282-55	4.0	3.0	濃紺色		やや磨減 No30	282-87	4.3	2.7	青緑色		石室内
282-24	4.1	2.0	青緑色		No30	282-56	4.0	3.5	濃紺色		厚い 磨減少ない No30	282-88	4.2	3.0	青緑色		石室内
282-25	4.1	2.5	青緑色	穿孔のやや大 φ1mm	No30	282-57	4.3	3.2	濃紺色		やや磨減 No30	282-89	4.0	2.0	青緑色		石室内
282-26	4.3	3.0	青緑色		No30	282-58	4.3	3.3	濃紺色		やや磨減 No30	282-90	3.9	2.5	青緑色		石室内
282-27	4.0	2.3	青緑色		No30	282-59	4.2	2.4	青緑色		No31	282-91	4.6	2.6	青緑色		φ大きい 石室内
282-28	4.0	2.5	青緑色		No30	282-60	4.1	2.5	青緑色		No31	282-92	4.3	3.1	濃紺色		厚い やや磨減 石室内
282-29	4.0	2.0	青緑色		No30	282-61	4.0	2.5	青緑色		No31	282-93	5.0	3.0	瑠璃色		大きい 磨減少ない 石室内
282-30	4.0	2.0	青緑色		No30	282-62	4.1	2.0	青緑色		No31	282-94	4.9	2.5	瑠璃色		φ大きい やや磨減 石室内
282-31	3.8	2.1	青緑色		No30	282-63	4.1	2.1	青緑色		No31	穿孔径略1mm弱、重さ略0.05g弱					
282-32	3.9	2.0	青緑色		No30	282-64	4.0	2.2	青緑色		No31						

第66表 北西ノ久保2号古墳出土丸玉一覧表

挿入番号	最大径 (φmm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	色 調	穿孔状態	備 考	挿入番号	最大径 (φmm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	色 調	穿孔状態	備 考
282-95	11.2	8.0	0.7	漆黒色		穿孔面使用磨減により片側凹気味、No6	282-106	8.5	4.9	0.3	黒褐色	両穿孔	全面磨減著しい、穿孔面両面平坦、石室内。
282-96	11.3	8.2	0.9	漆黒色		穿孔面両面凹気味、No10	282-107	8.0	5.7	0.3	黒褐色		全面磨減著しい、穿孔面両面平坦、石室内。
282-97	8.7	7.0	0.5	漆黒色		穿孔面片側凹気味、No23	282-108	9.1	6.7	0.5	漆黒色		穿孔面平坦、凹気味、石室内。
282-98	10.1	8.5	0.8	漆黒色		穿孔面両面平坦、No24	282-109	11.0	8.0	0.7	漆黒色	両穿孔	穿孔面平坦、凹気味、石室内。
282-99	8.0	5.9	0.3	黒褐色		全面磨減著しい、穿孔面両面平坦、No31	282-110	9.3	6.8	0.5	漆黒色		穿孔面両面凹気味、石室内。
282-100	8.9	5.0	0.3	黒褐色		全面磨減著しい、穿孔面両面平坦、No31	282-111	10.0	7.0	0.5	漆黒色		穿孔面凸、凹気味、石室内。
282-101	9.2	7.0	0.5	漆黒色		穿孔面両面凹気味、No34	282-112	9.0	7.5	0.5	漆黒色	両穿孔	穿孔面両面凸気味、石室内。
282-102	10.0	8.2	0.7	漆黒色		穿孔面平坦、凹気味、No35	282-113	9.1	8.3	0.7	漆黒色	両穿孔 φ2mm	良好な形で残存、全面研磨、穿孔面両面凸気味、石室内。
282-103	8.0	6.7	0.3	漆黒色		穿孔面凸気味、凹気味No38	282-114	9.5	7.5	0.4	漆黒色		穿孔面平坦、凹気味、石室内。
282-104	9.7	8.0	0.7	漆黒色		穿孔面両面平坦、No47	282-115	8.5	5.3	0.3	黒褐色		全面磨減著しい、穿孔面両面平坦、石室内。
282-105	11.0	8.0	0.7	漆黒色	両穿孔 φ2mm	良好な形で残存。全面研磨。穿孔面両面凸気味。No50	282-116	10.0	8.2	0.6	漆黒色		良好な形で残存。全面研磨。穿孔面両面凸気味。試掘第1トレンチ内

第67表 北西ノ久保2号古墳出土白玉・管玉・切子玉・勾玉・環玉一覽表

挿図番号	器種	用材	最大径 (φmm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	色調	穿孔状態	備考	挿図番号	器種	用材	最大径 (φmm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	色調	穿孔状態	備考
282-117	白玉	滑石	13.0	6.0	1.4	グレー	片挟り	穿孔面片面平坦僅かに凹気味。	282-128	勾玉	瑪璃	29.3	8.5	6.4	半透明	片挟孔3.5(最大)φmm 1.5(最小)	穿孔最小面凹状に割れている。No7
282-118	白玉	滑石	13.0	8.0	0.8	グレー	穿孔面僅かに凹気味。	穿孔面凹気味。No26	282-129	勾玉	水晶	28.0	10.0	5.2	透明	片挟孔3.0(最大)φmm 1.5(最小)	穿孔最小面凹状に割れている。No8
282-119	白玉	滑石	11.5	7.0	0.9	グレー	穿孔面凹気味。	穿孔面凹気味。No2	282-130	勾玉	瑪璃	29.3	9.0	5.6	半透明	片挟孔3.5(最大)φmm 1.5(最小)	穿孔最小面凹状に割れている。No22
282-120	白玉	碧玉	8.0	4.5	0.2	暗緑色	両挟り	穿孔面片面平坦僅かに凹気味。石室内。	282-131	勾玉	瑪璃	31.2	10.0	5.6	半透明	片挟孔3.9(最大)φmm 1.0(最小)	穿孔最小面凹状に割れている。No25
282-121	管玉	ガラス	16.0	5.8	0.8	半透明コハク色	φ1.5mm	方柱状を呈す。石室内。	282-132	勾玉	瑪璃	31.5	9.0	7.7	半透明	片挟孔4.0(最大)φmm 1.0(最小)	穿孔最小面凹状に割れている。No32
282-122	環玉	碧玉	17.0	8.0	1.4	暗緑色	両挟孔2.5(最大)φmm 1.5(最小)	エンタシス状を呈す。試掘トレンチ内。	282-133	勾玉	瑪璃	26.0	7.7	4.1	半透明	片挟孔3.0(最大)φmm 1.5(最小)	穿孔最小面凹状に割れている。No37
282-123	切子玉	水晶	20.0	14.0	4.3	透明	片挟孔3.5(最大)φmm 2.2(最小)	截頭角錐を2つ合せた形。No5	282-134	勾玉	瑪璃	31.0	8.0	4.6	半透明	片挟孔3.0(最大)φmm 1.5(最小)	穿孔最小面凹状に割れている。No41
282-124	切子玉	水晶	13.5	12.0	2.0	透明	片挟孔3.5(最大)φmm 2.0(最小)	截頭角錐を2つ合せた形。No23	282-135	勾玉	瑪璃	29.0	8.0	5.1	半透明	片挟孔3.0(最大)φmm 1.5(最小)	穿孔最小面凹状に割れている。石室内。
282-125	切子玉	水晶	28.0	16.8	8.7	透明	片挟孔4.5(最大)φmm 2.5(最小)	穿孔内赤色顔料付着。截頭角錐を2つ合せた形。	282-136	勾玉	瑪璃	27.5	7.5	3.7	半透明	片挟孔3.5(最大)φmm 1.5(最小)	認められない。石室内。
282-126	切子玉	水晶	26.0	16.5	8.8	透明	片挟孔4.0(最大)φmm 1.8(最小)	截頭角錐を2つ合せた形。石室内。	282-137	勾玉	瑪璃	30.5	8.0	4.9	半透明	片挟孔3.0(最大)φmm 1.0(最小)	穿孔最小面凹状に割れている。試掘トレンチ内。
282-127	切子玉	水晶	25.0	17.0	7.7	透明	片挟孔4.0(最大)φmm 2.0(最小)	截頭角錐を2つ合せた形。石室内。	凡例 最大径の箇所、管玉、切子玉、勾玉、環玉は最大長。最大厚の箇所、切子玉は最大幅。								

第68表 北西ノ久保2号古墳出土耳環一覽表

挿図番号	環最大径 (φmm)	重量 (g)	断面形 (φmm)	備考	挿図番号	環最大径 (φmm)	重量 (g)	断面形 (φmm)	備考
282-138	30.0	25.5	7×9mm楕円形	やや良好、金張、No1	282-144	29.0	19.7	6.5×8mm楕円形	僅金張の痕跡有、酸化が激しい。試掘トレンチ内。
282-139	29.5	24.6	6×9mm楕円形	やや良好、金張、No4	282-145	29.5	16.8	5.5×6.5mm楕円形	酸化が非常に激しい。試掘トレンチ内。
282-140	28.5	18.9	6.5×9mm楕円形	僅金張の痕跡有、酸化が激しい。No5	282-146	30.0	19.5	7×9mm楕円形	僅金張の痕跡有、酸化が激しい。試掘トレンチ内。
282-141	28.6	28.5	7×9mm楕円形	僅、金張の痕跡有、酸化が激しい。Eトレ耕。	282-147	18.0	4.5	4×6mm楕円形	僅金張の痕跡有、酸化が激しい。石室内。
282-142	28.5	16.3	6.5×7.5mm楕円形	酸化が非常に激しい。Eトレ耕。	282-148	18.3	4.5	3.8×6mm楕円形	僅金張の痕跡有、酸化が激しい。
282-143	27.0	14.3	6×7.5mm楕円形	金張の痕跡有、酸化激しい。Eトレ耕。					

刀子には283-5~10の6点がある。283-5は基部が欠損し、刃部長7.1cm、最大幅1.1cm、峰厚0.3cmを測る。また、茎の刃方側が刃部と同様に薄くなり、さらに刃関のない片関の刀子である。283-6は刃部が一部欠損しており、刃部残存長4.9cm、茎部長5.8cmで茎部に木質が残っている。283-7は283-5と同様に刃関のない片関の刀子で、刃部残存長5.8cm、茎部長4.5cmである。283-8は刃部の一部で残存長4.3cmを測るが腐蝕が著しく遺存状態は極めて悪い。283-9は茎部で茎頭をわずかに欠損する。残存長は5.4cmで木質が残存している。283-10は茎部の小片で、残存長は2.5cmを測り表面には木質が残存する。

鉄釘は283-11~14・17の5点が出土し、そのうち283-11・12・17の3点には釘と直交する木目が観察でき、木棺を組み立てるために使用されたと考える。欠損品であり、残存長3~4cmを測るのみであるため全体の形状は不明である。本古墳から木棺の痕跡は認められなかったが、鉄釘が出土していることから、箱式木棺が使用されたと考えるのが妥当であろう。

この他不明鉄製品として、285-15・16・18・19・20がある。283-18はわずかに内湾しており、円筒形を呈するものとも考えられるが明確ではない。内面には繊維の付着が観察される。283-19・20は幅約2cmを測り扁平で、直刀の破片とも考えられる。いずれも片面に木目痕の付着が観察でき、鞘を装着して副葬した可能性も考えられる。

金銅製品

金銅製品には鴨目金具(283-24)と責金具(283-21)があるが、いずれも緑錆の付着が著しい。283-24は鍛造品で、径1.2cm、残存長1.0cmを測り、端部は玉縁状となる。283-21は長径3.9cm、短径2.3cm、幅0.4cmで倒卵形を呈する。以上の鴨目金具・責金具などの刀装具が出土していることから、本古墳に飾り大刀が存在した可能性も考えられる。

耳環

耳環は既出資料も含めて総数で11点出土した。いずれも胴芯金張りであるが、282-138・139を除き、わずかに金張の痕跡を残すのみで酸化が著しく、緑錆の付着が著しい。形状は総て正円形に近い楕円形で、断面形も楕円形を呈するが、最大径2.7~3.0cmの大型品と約1.8cmの小型品とに二大別できる。282-147・148は最大径1.8cm前後、重さは4.5gと小型品であり、また、282-138・139は残存状態が比較的良好で規模も近似していることから各々に対になると考えられる。他の対応関係については、規模・遺存状態とも近似しているため不明である。

人骨

人骨は玄室内中央部より少量出土した。聖マリアンナ医科大学森本岩太郎教授の鑑定により、女性の大腿骨及び歯であることが判明した。歯は総数で10本出土したが、部位の明らかなものは8本で2本は不明である。部位の明らかな8本について鑑定を行った結果、図版九十二で示すように右上第1・第2大臼歯が各々2本ずつ存在することが明らかとなり、2個体の歯が存在することから、本古墳で追葬が行われたことは自明である。

玉類

玉類はガラス小玉・丸玉・白玉・管玉・棗玉・切子玉・勾玉が出土した。

ガラス小玉は総数で94個出土した。形状は径4mm前後のものがほとんどで、最小は282-31・84が3.8mm、最大は282-53の5.3mmであり、厚さは282-69の1.8mmが最小、282-78の3.6mmが最大で2.5mm前後が最も多い。色調は青系・緑系に二大別され、さらに青系が濃紺色と瑠璃色、緑系が青緑色と緑青色の各々二種類に細分される。青緑色が圧倒的に多く78個、次いで濃紺色11個、瑠璃色3個、緑青色2個であるが、緑青色の282-8・46は青緑色が磨滅によって変化したものとも考えられる。

丸玉は総数22個出土した。素焼きの土器に炭素吸着により黒色に仕上げたもので、さらに表面は漆黒色の光沢があり、これは何に起因するものか今後の分析を待って詳細な検討を加えていきたい。径は8~11.3mmを測り、9mm前後が最も多い。厚さは磨滅の程度により4.9~8.5mmと多様であり、重さは0.3g・0.5g・0.7gが各6個、0.4g・0.6g・0.8g・0.9gが各1個である。このうち遺存状態の良好な282-105・113・116は重さ0.6~0.7gでほぼ球状を呈し全面に光沢が認められるのに対し、282-99・100・106・107・115は磨滅が著しく、重さは0.3gで円筒状となる。以上、損耗の度合によって概ね3形態に分類でき、球状から磨滅により孔の面が平坦となり、さらに円筒状へと変化すると考えられ、また、これらの丸玉が一度に入手されたものではなく、数回にわたり順次入手されたものであると推測される。

白玉は4点出土し、灰白色の粗成の滑石製が3点(282-117・118・119)、暗緑色の碧玉製が1点(282-120)である。滑石製の白玉は、扁平な282-117と全体に丸味を帯びる282-118・119の2形態に分類される。282-117は径13mm、厚さ6mm、282-118・119は径11.5mm、厚さ8mmを測るが、いずれも使用による磨滅が著しく、孔の面、片面または両面が凹み、さらに孔の形状も円形から涙滴状となっている。282-120は、径8mm、厚さ4.5mm、重さ0.2gの小型品で、孔の面が磨滅によりわずかに平坦になっている。

管玉・棗玉は各々1点出土した。管玉(282-133)は半透明琥珀色のガラス製で、形状は長さ16mm、幅5.8mm、重さ0.8gを測り、断面方形の方柱状を呈する。穿孔は片面からであり、孔径1.5mmを測る。棗玉(282-134)は暗緑色の碧玉製で、長さ17mm、最大径8mm、重さ0.8gを測るエンタシス状を呈する。穿孔は両面から行われており、孔中央で段が観察できる。孔径は2.5mm・1.5mmを測る。

切子玉は5個出土した。いずれも透明水晶製である。形状は裁頭六角角錐を二つあわせた形で、長さ25~28mm、最大幅16.5~17mm、重さ7.7~8.8gを測る大型品の282-125・126・127、長さ20mm、最大幅14mm、重さ4.3gを測る中型品の282-123、長さ13.5mm、最大幅12mm、重さ2.0gを測る小型品の282-124の3形態がみられる。穿孔は5個とも片面からの穿孔であり、282-125を除いて下面の孔の周辺は抉ってある。尚、282-125の孔の内面に朱の付着が観察でき、孔に紐状のものが通されていたことが想定される。このように切子玉の孔に朱の付着が認め

られた例として、昭和50年度に調査の行われた、佐久市塚原古墳群内に所在する家地頭1号墳出土の切子玉3個²⁾がある。

勾玉は総数で10個出土した。282-129は水晶製で他は総て瑪瑙製である。形状はいずれも古墳時代後期滴な「コ」の字状を呈し、長さは3cm前後で材質による形態の差異は認められない。穿孔は10個とも総て片面からの穿孔で、裏面は282-136を除いて孔の周辺を抉っている。尚、瑪瑙製の9個はいずれもあまり丁寧な研磨を施されていない、比較的粗雑なつくりである。

この他既出資料として、辻金具(283-23)、匙形の金銅製品(283-22)がある。

283-23は、昭和54年度の試掘の際に出土した辻金具で、半球形の座にとりつけられた足金具である。鉄地金張であるが、わずかに痕跡を残すのみで遺存状態は不良である。また、革紐を銜留めするための釘が2本残存する。

283-22は、井上行雄氏が畑の耕作中に出土した匙形の金銅製品である。全長16.8cm、身幅4.7cm、柄部長11.9cmを測り、柄部にはわずかに鍍金の痕跡が認められる。

次に本古墳の築造年代についてであるが、玄室内棺床より7世紀後半とみられる須恵器蓋(280-1)が出土し、また、古墳時代後期のものとされる「コ」の字状を呈する瑪瑙製の勾玉、後期古墳のうちでも後半期のものに多いとされる銅芯金張の耳環などが出土しており、築造年代を決定する根拠となり得る。更に立地・構造等を考え合わせると、本古墳の築造年代は7世紀後半と想定することができる。

以上、北西ノ久保2号古墳の立地・形状・内部構造・副葬品についての考察を行ったが、最後にその成果を要説しておきたい。

- 1 本古墳は、台地の斜面を利用して構築された、所謂「山寄せの古墳」である。
- 2 本古墳の墳丘の規模は、径15~20m前後と推定される。
- 3 墳丘及び石室上部、羨道部は既に破壊され、奥壁・左壁の一部が残存するのみである。
- 4 奥壁・側壁には集塊岩・安山岩が用いられ、棺床には千曲川の河原石が使用される。
- 5 主体部は自然石乱石積の横穴式石室である。
- 6 玄室左壁に胴張りが認められる。
- 8 副葬品には、須恵器蓋・直刀・刀子・耳環・ガラス小玉・丸玉・白玉・管玉・棗玉・切子玉・勾玉などの出土がみられ、左壁中央付近より集中して出土した。
- 9 玄室内より、2個体分の歯、及び9個の耳環が出土しており、追葬が行われた古墳である。
- 10 木質の残存した鉄釘が出土しており、箱式木棺が使用されたと推測される。
- 11 本古墳の築造年代は、立地・形状・副葬品等から7世紀後半と推定される。

(三石)

註(1) 佐久市教育委員会 1980 『北西久保』

註(2) 佐久市教育委員会 1976 『家地頭1号古墳発掘調査報告書』

2) 第7・8・9号周湮

遺構 (第284図、図版 九十三)

第7・8・9号周湮は台地の南東端、て〜ひー13〜19グリッド内に位置し、第7号周湮が東側、第8号周湮が南東角、第9号周湮が南側の斜面に面している。第7号周湮と第8号周湮、第8号周湮と第9号周湮はそれぞれ溝の一部を共有しているため、一括して記載を行う。尚、第7・8・9号周湮いずれも墳丘は既に失われている。またいずれも主体部は検出されていない。

第7号周湮は台地から斜面へ続く、南西側の第8号周湮との溝の共有部分を江戸時代に造営された第2号特殊遺構によって破壊されている。また、周湮は北側へ至ると浅くなり、最北部付近で立ち上がって終息する。したがって全体の形状はおおむね半円状を呈している。溝幅を含めた全体径は20m、墳丘径13.84m、溝幅2m〜3mを測り、北東部で最も深く60cm、他はおおむね20cm内外の浅い掘り込みである。周湮が東側の斜面部分まで巡っていた可能性は薄く、台地上に半円状の周湮をもち、斜面には周湮をもたない円墳であったと考えられる。

第8号周湮は北西部にあたる溝が検出されただけであるため、全体径18m内外の円墳であったことが推測されるのみである。検出された部分の溝幅は北側では2.5〜3mを測るが、第9号周湮との共有部分は0.8m〜1.2mと極端に細くなり、形状歪む。第9号周湮を避けて築造されているようにも思われる。墳丘端部からの掘り込みは、26〜52cmをはかり、溝底面は緩らかである。

第9号周湮は南側斜面部分が調査区外にあるため、全掘されていない。検出部分はおおむね半円状を呈し、全体形状は第7号周湮と同様に台地上にのみ半円状の周湮をもつ円墳になると考えられる。溝幅を含めた全体径は推定で約16m、墳丘径約12mをはかり、連結する三基の周湮群の中では最も小型である。溝幅は1.2〜2.0mをはかるが第8号周湮との溝の共有部分は幅狭となり、0.9〜1.4mをはかる。墳丘端部からの深さは8〜54cmをはかり、斜面に近づく南側程、墳丘端部の削平が激しくなり、残存値も低くなる。

第7・8・9号周湮の覆土は大雑把にみて一致する。このことはこれらの遺構が築造時代には違いはあるものの、埋没時期はほぼ同時であったことを意味するものである。第1・2層は黒褐色土をベースとしている。第1層はバミスと黄色火山灰を多量に含み、第2層は黄色火山灰を欠く。いずれも覆土の最上層部に位置しており、第1層は第7・8号周湮の一部にのみ認められ、第9号周湮にはみられない。第3・4層は最下層にあたり、周湮側面、底面に密着する。いずれも黄色の砂粒を主体土としており、墳丘・周湮の崩落に伴って形成された堆積土と考えることができる。

遺物の出土状況

第7・8・9号周湮からは弥生土器・石器・土師器・須恵器・埴輪片が出土している。弥生土器の混入が著しく、本周湮の所産期を推定する目安となる土師器・須恵器等の出土は少ない。

第7号周湮からは須恵器・埴輪片・弥生土器・石器が出土している。弥生土器285-2・3 (高坏・鉢)、286-3・4 (縄文?) は覆土1層か、2層中からの出土で明らかに本遺構には共伴しない。また、周湮南側の底面から検出された黒曜石の石核275-182・183も本遺構との共伴性は薄い。本周湮と共伴する可能性がみられる資料は周湮北東部の覆土1・2層中からの出土ではあるが285-1 (土師器壺) や286-1 (須恵器甕) の2点と、墳丘部表採の286-2 (埴輪片) の3点のみである。

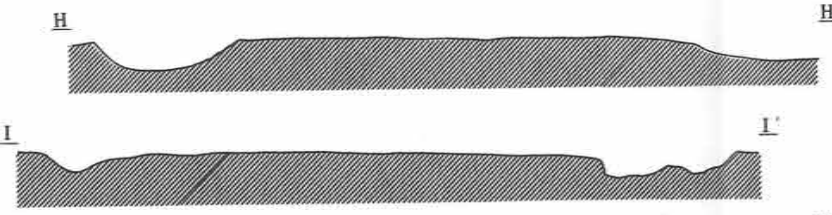
第8号周湮からは所産期を推定する目安となる遺物が検出されていない。

第9号周湮からは土師器・弥生土器・石器が出土している。このうち、弥生土器と石器 (271-108打製石斧) は本遺構の共伴資料とは言えない。285-4 (土師器坏) と285-5 (土師器埴) が本遺構の所産期を推定する資料となり得る。285-4 は西側の覆土第2層中、285-5 は西側の覆土第2層中と、東側の周湮底面に分布している。

(小山)

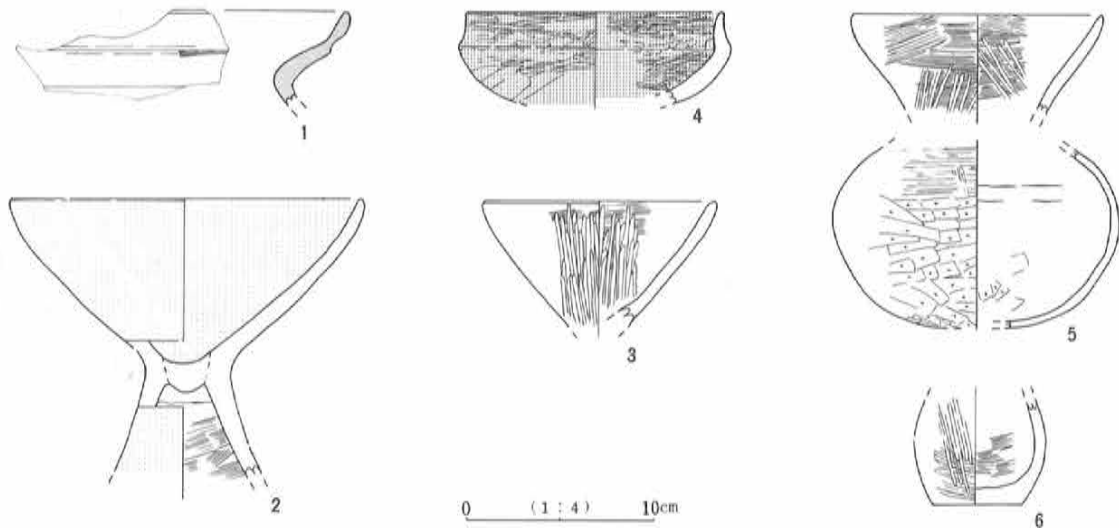


- 1 黒褐色土層 粘性はやや強い。バミスと黄色火山灰を多量に含む。
- 2 黒褐色土層 粘性は強い。バミスを多量に含む。
- 2' 黒褐色土層 粘性はやや強い。2よりきめ粗く、大粒のバミスを含む。
- 3 黄褐色土層 粘性は弱い。2と黄褐色砂粒主体。
- 3' 黄褐色土層 3よりきめ粗い。
- 4 黄褐色土層 砂粒のみ。



標高686.2 m
(1:160) 4 m

第284図 第7・8・9号周遶実測図



第285図 第7・9号周濠出土土器実測図

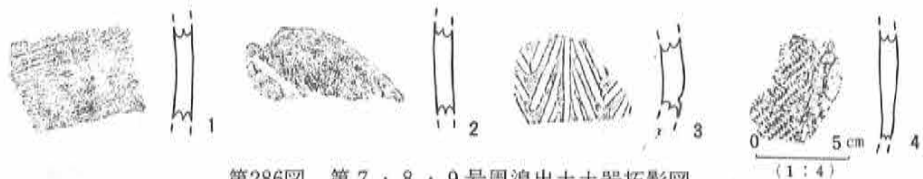
第69表 第7・9号周濠出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
285-1	土師器壺	(28.0) < 5.0 > -	口縁部は稜を有し、受口状に立ち上がる。	内) ヨコナデが施されている。 外) ヨコナデおよびヘラミガキが施され、外縁部にはハケメ調整痕(?)がある。	破片実測B S 7、I区1・2層 胎土は硬質である。
285-2	高坏(弥)	(18.8) < 14.7 > -	坏部は内弯して柄状になる。	内) 坏部に赤色塗彩・横位のヘラミガキが施され、脚部は横位のハケメ調整が施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B S 7、I区1・2層
285-3	鉢(弥)	(12.4) < 6.6 > -		内) 横位のハケメ調整の後、丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B S 7、II区1層
285-4	土師器坏	(13.6) < 3.3 > -	口縁部と体部の境に稜を有する。底部は丸底を呈する。	内) 横位のヘラナデ→横斜位のヘラミガキが施される。 外) 体部中位以上ヨコナデ→横斜位のヘラミガキ、以下は斜位のヘラケズリが施されている。	破片実測A S 9、I区2層 内外面共に黒色研磨
285-5	土師器丸底埴	13.3 - (15.2)	口縁部は「ハ」の字状に開き、端部でわずかに内弯する。胴部から底部にかけてつぶれた球状を呈し、底部は扁平な丸底となる。最大径は胴部中位にある。	内) 口縁部から頸部は横位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施され、底部付近はヘラケズリ痕が残るが、ナデが全面に施されている。 外) 口縁部から頸部は横位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施され、胴部上位はヨコナデ、中位から下位および底部は横位のヘラケズリが施されている。	回転実測B S 9、No 1・2
285-6	小型壺	- < 5.6 > 4.9		内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 胴部下位に横位のヘラミガキが施された後、中位から下位に縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A S 9、No 3

遺物 (第285・286図、
図版 百)

第7号周濠からは、

土師器・須恵器・埴輪・



第286図 第7・8・9号周濠出土土器拓影図

弥生土器・縄文土器・石器が出土している。土師器には、胎土が硬質の有段口縁の壺285-1があり、外面の稜はシャープである。須恵器は甕の破片で、内面に僅かに青海波文が観察できる。混入遺物である縄文土器286-3は曾利系、286-4は加曾利系と思われる。第9号周濠からは、土師器・弥生土器・石器が出土している。土師器には坏・埴があり、285-4の坏は、外面に明瞭な稜を有し、内外面黒色研磨された須恵器模倣の坏である。285-5の埴は、口縁部逆「ハ」の字状に開き、端部で僅かに内弯し、最大径は胴部中位にあるものの、口縁部径と大差ない。以上、第7号周濠の285-1の土師器壺、第9号周濠の土師器埴などから、古墳時代中期後半の特徴を有した土器と考えるが、出土遺物が少ないことと、佐久地方における古墳時代中期の編年が確立していないなどから、遺物から第7・8・9号周濠の構築順を明らかにすることはできない。(高村)

3) 第10号周湟

遺構 (第287・288図、図版 九十四)

本遺構は台地の南西端、つーは-20~28グリッド内に位置している。Y64・69号住居址、第136・143・152号土坑と重複関係を持ち、これらのすべてを破壊している。また、南側斜面上に位置するため、外周の立ち上がりが出流してしまい現存しない。また、墳丘は既に削平されており、主体部も残っていない。

周湟幅を含めた全体径は南北35.36m、東西33.84m、墳丘径は南北23.44m、東西22.88mをはかり、本遺跡最大の周湟である。長軸方位はN-3°-Eをさす。全体の形状は墳丘形態、周湟の外周の形態ともに方形を呈しており、方墳であったことが想起される。溝幅は東辺で約5.38m~8m、西辺で3.36~5.36m、南辺で4.08~5.28m、北辺で3.36~8mをはかり、北東コーナー付近で大きくふくらむ傾向がみられる。

確認面からの掘り込みは墳丘端部から計測すると、南側が最も浅く24cm、西側が最も深く104cmをはかる。掘り込みの断面形は、墳丘部側がより緩やかで、外周側がより急傾斜である。底面はおおむね、平坦な状態で、北東側は特に幅広い。

覆土は以下に記す4層からなり、プライマリーな堆積状況を示していると思われる。

第1層	黒褐色土	パミスと褐色土を含み、きめ細かい。
第1'層	黒褐色土	第1層よりも褐色土を多量に含む。
第2層	黒褐色土	漆黒に近く、きめ細かく、パミスを含む。
第3層	茶褐色土	黄色火山灰と黒褐色土がまざり、粘性は弱い。
第4層	茶褐色土	第3層よりも黒褐色土の含有量が多い。

第1・1'・2層は黒褐色土をベースとする点で共通し、周湟内にレンズ状に堆積する。第3・4層は周湟の側壁に密着して堆積し、構築土の崩落層と見做すことができる。

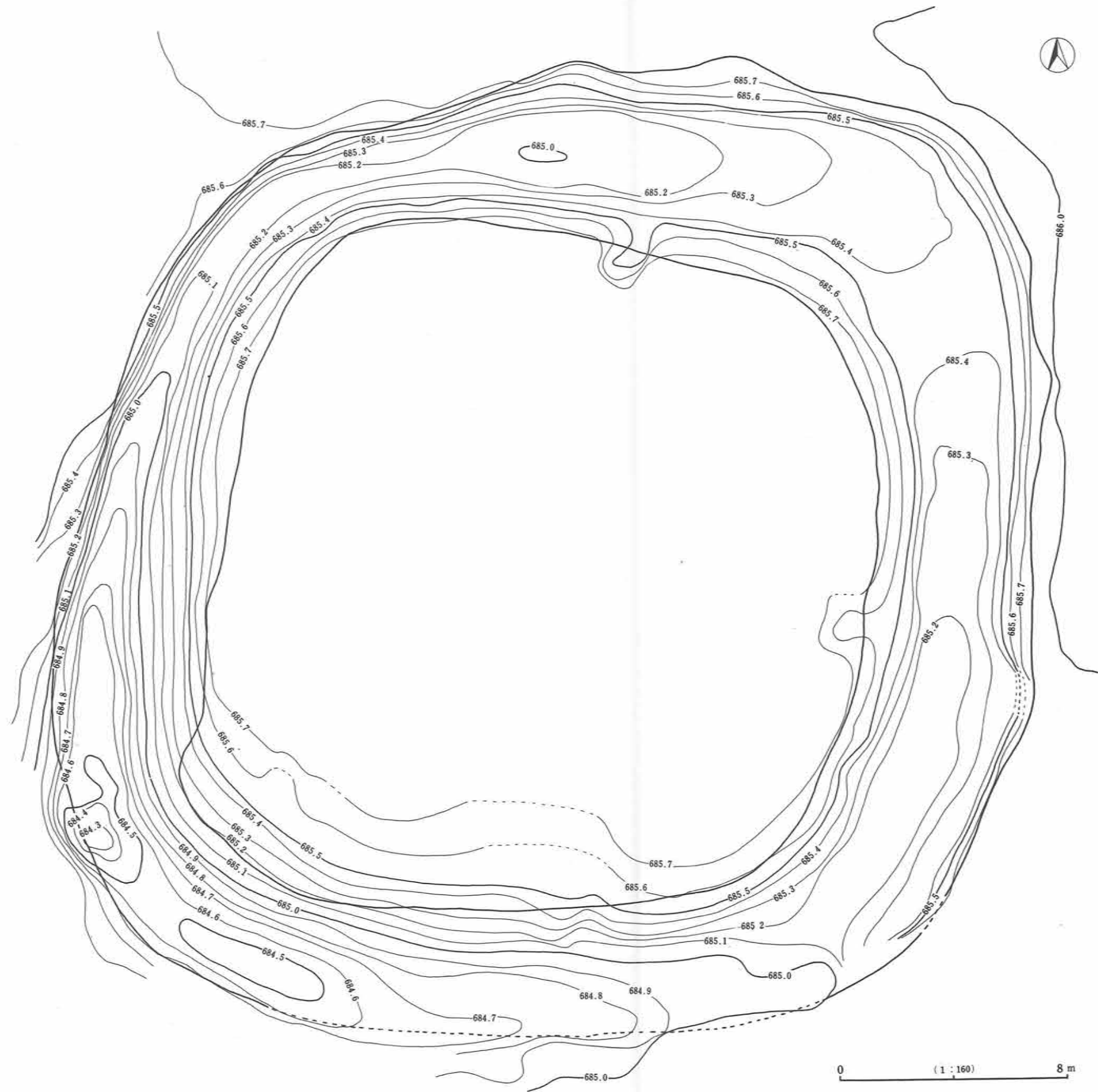
遺物の出土状況

本遺構からは弥生土器・石器・土師器・須恵器・埴輪片が出土している。このうち、弥生土器は極めて多量に出土しているが、いずれも混入遺物と考えられる。図示はしたが、289-11・12 (甕・不明土器) も同様である。また、石器も268-61 (磨製石鏃未成品)、272-116 (局部磨製石器)、273-144 (砥石) などが出土しているが本遺構と共伴する可能性は薄い。

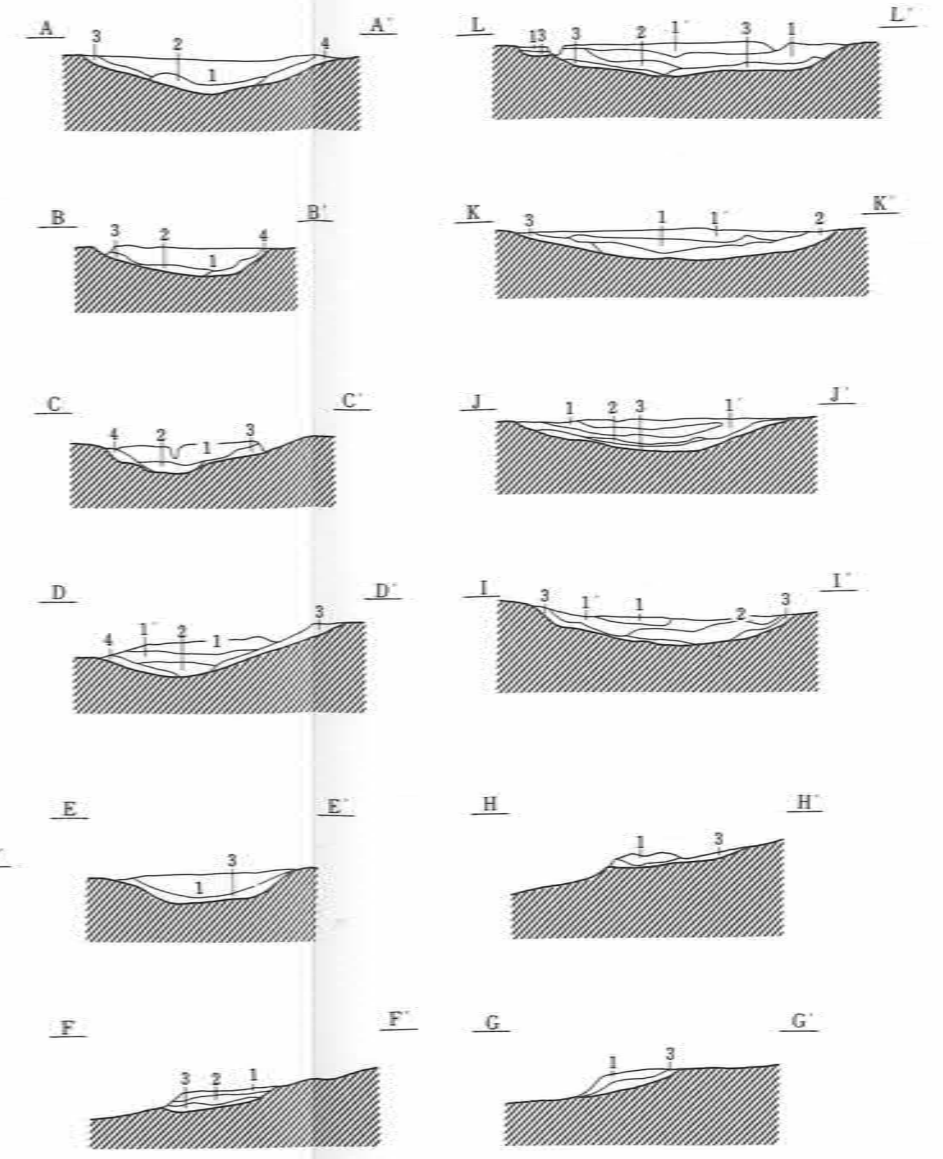
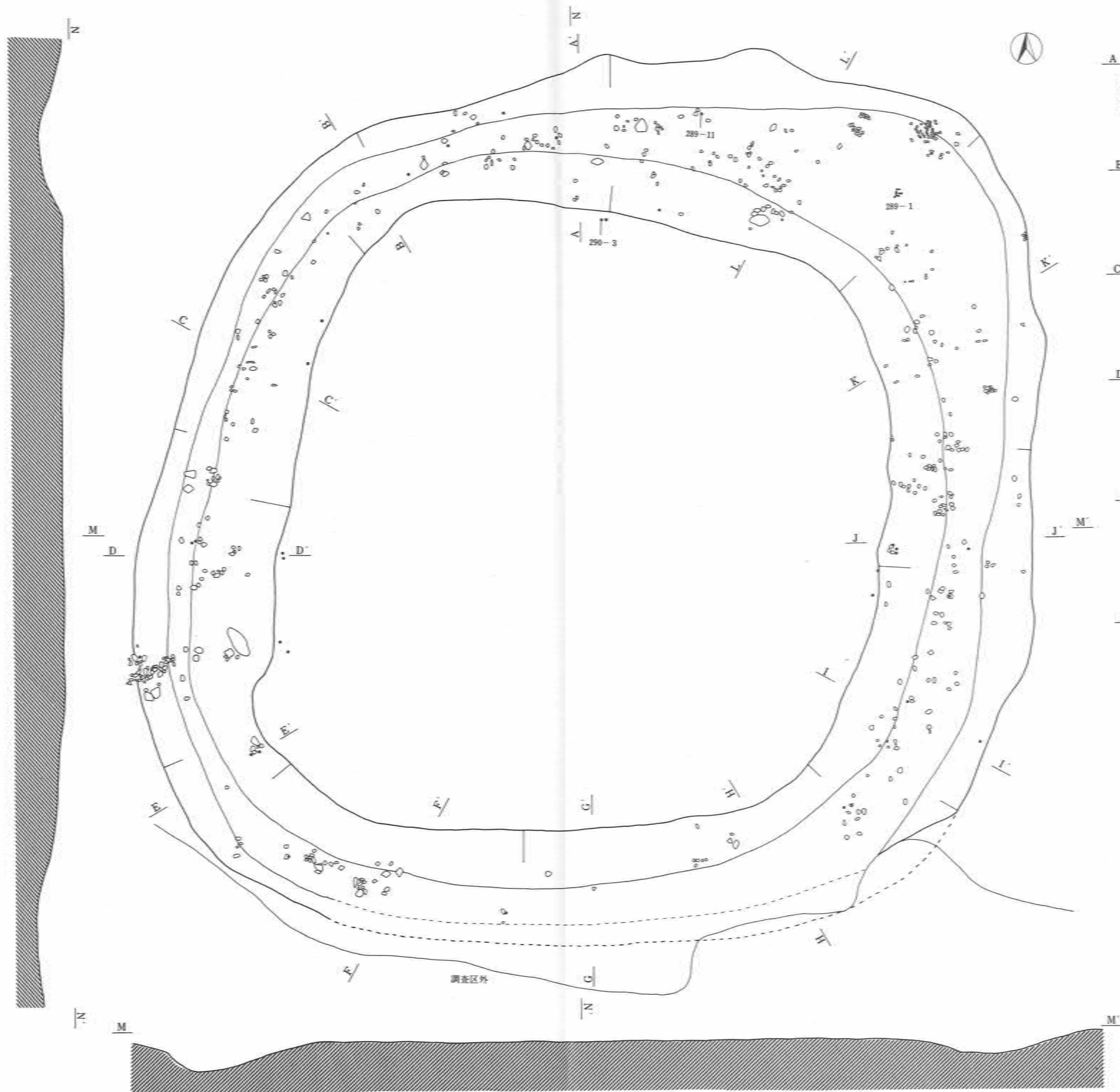
本遺構に共伴すると考えられる土師器・須恵器・埴輪片の出土量は弥生土器にくらべると非常に少ない。図化した289-1~8 (土師器・須恵器)、290-1~3 (須恵器)、291-1~5 (埴輪片) は一応本遺構との共伴性が強いが、ある程度の時代幅も有しているように思われる。

289-1 (土師器壺) は周湟北側中央よりやや東寄りの底面に密着して出土している。本遺構内では唯一の確実に共伴性を首肯できる遺物である。289-2 (土師器甕)・289-5 (土師器坏) は断面図D-D'からE-E'間の覆土第3層中、289-3 (土師器坏) は断面図L-L'からA-A'間の覆土中、289-4 (土師器坏)・289-7 (土師器甕)・290-1 (須恵器甕) は断面図K-K'からL-L'の第1および3層中、289-8 (土師器甕) は断面図A-A'からC-C'の覆土内、289-9 (須恵器高台付坏) はH-H'からI-I'間の覆土第3層中、289-10 (須恵器高台付坏) がJ-J'からK-K'の覆土第2層中、290-2 (須恵器甕) はB-B'からC-C'の覆土第1層中から出土している。289-6 (土師器高坏) は昭和54年度の試掘調査時に出土したものであるが、検出グリッドが本遺構覆土内に全面的に包括されるため、本遺構出土資料として扱った。

埴輪は小片のみで、特に集中して分布する箇所もない。291-1がJ-J'からK-K'の覆土第1層、291-3がD-D'からE-E'の覆土第1~3層、291-2・4・5が本周湟エリア内のグリッド内から出土している。



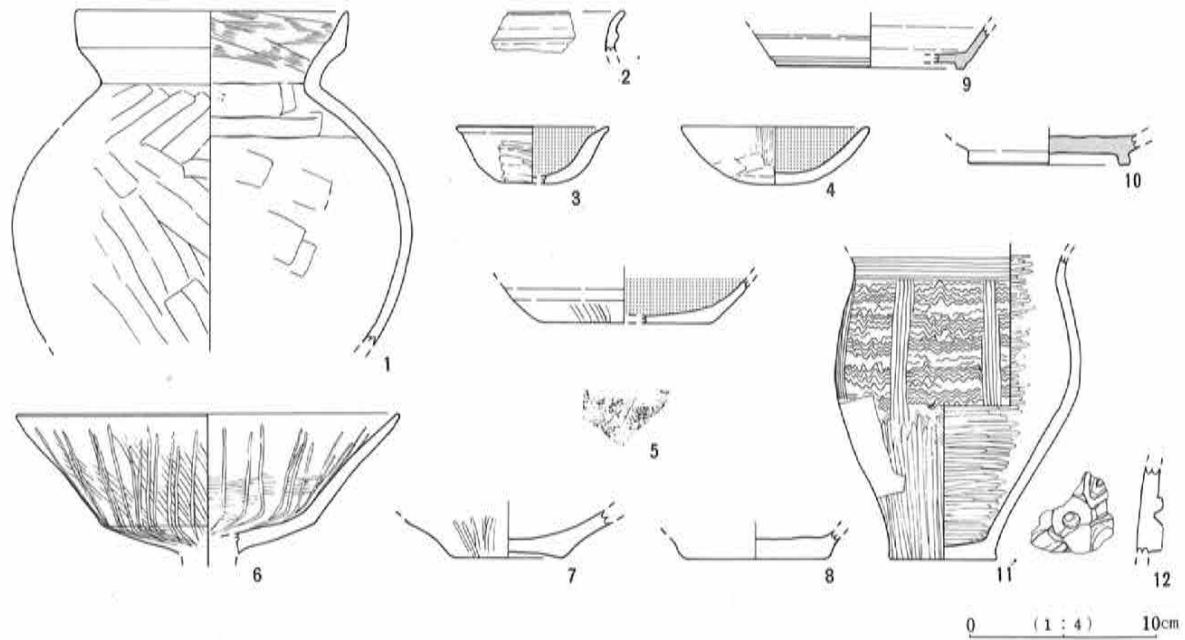
第287図 第10号周漣コンタ測量図



- 1 黒褐色土層 きの細かく、パミスと褐色土を含む。
- 1 黒褐色土層 1よりも褐色土を多量に含む。
- 2 黒褐色土層 きの細かく、パミスを含む。深部に近い。
- 3 赤褐色土層 粘性は弱い。黄色火山灰と黒褐色土が混じる。
- 4 赤褐色土層 3よりも黒褐色土を多量に含む。

標高 685.2m
(1:160) 8m

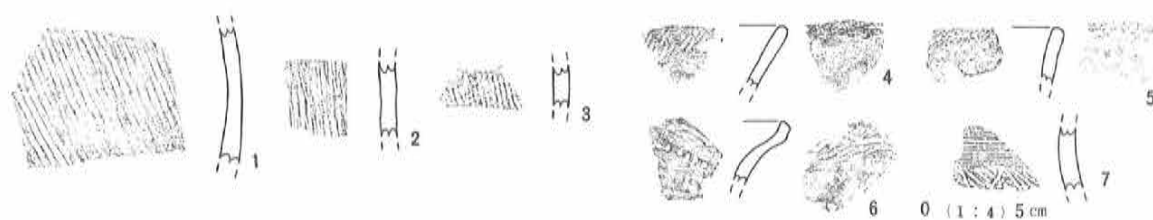
第288図 第10号周達実測図



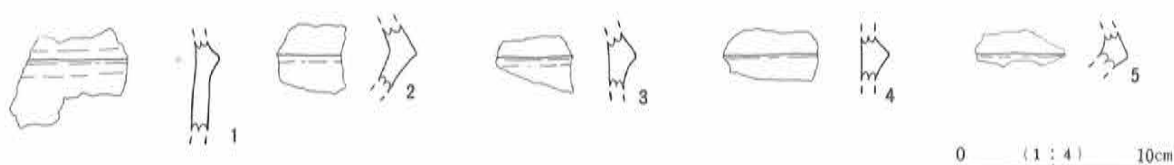
第289図 第10号周濠内出土土器実測図

第70表 第10号周濠内出土土器観察表

種番 図号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
289-1	土師器 壺	14.2 <17.6> — 21.2	最大径は胴部にある。口縁部は外反した後上部で屈曲し、有段状に立ち上がり、胴部は球胴状を呈する。頸部から胴部上位に3段の接合痕あり。	内) 口縁部は横位のハケメ調整の後ヨコナデ、胴部は横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズリの後、粗いヘラミガキが施されている。赤色塗彩(?)が施されている。	回転実測A No10
289-2	土師器 甕	— <2.1> —	有段状を呈する口縁部と考えられる。	内・外面ともにヨコナデが施されている。	破片実測B IV区3層
289-3	土師器 杯	(8.0) 3.0 —		内) ナデ 外) 口辺部はヨコナデ、体部は斜位のヘラケズリ→粗略なヘラミガキが施されている。	回転実測B Ⅹ区
289-4	土師器 杯	(10.0) 3.0 —	口辺部は内弯気味に開き、底部は偏平な丸底を呈する。	内) 黒色処理・ヘラミガキが施されている。 外) 口辺部はヨコナデおよび縦位のハケメ調整が施され、底部はヘラケズリが施されている。	回転実測B Ⅹ区3層
289-5	土師器 杯	— <2.5> (8.7)		内) 黒色処理・暗文風ヘラミガキが施されている。 外) ロクロヨコナデの後、底部周縁部はナデ調整がみられ、底部ヘラケズリが施されている。	回転実測B IV区3層
289-6	土師器 高杯	(20.4) <7.4> —	口辺部はつまみ上げる様にやや薄手である。接合部には割れ口より、独立するホゾが用いられたと思われる。	内) ヨコナデ→体部下半に粗い横位のハケメ調整が施されている。 外) ヨコナデ→粗い斜位のハケメ調整が施されている。 文) 内・外面に放射状の暗文が施されている。	回転実測B み43グリッド内耕作土
289-7	土師器 壺	— <2.5> 5.8		内) 丁寧なヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。赤色塗彩(?)が施されている。	回転実測B Ⅹ区1・3層
289-8	土師器 甕?	— <1.5> (7.7)		内・外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。	回転実測B I区・II区 赤色塗彩とはまた違う赤さ。
289-9	須高 台付 器杯	— <1.8> 10.0	貼り付け高台が施されている。	内・外面ともにロクロヨコナデが施されている。	回転実測B VII区3層
289-10	須高 台付 器杯	— <1.6> (8.8)	貼り付け高台が施されている。	内・外面ともにロクロヨコナデが施されている。	回転実測B X区2層
289-11	甕 (弥)	— <16.0> 5.6	胴部は中位上方で軽ふくらむ。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部下位に斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に簡描横走平行線文(方向・本数不明)胴部上位に6本一組の簡描垂下文を施した後、4本一組の簡描波状文(方向不明)が施されている。	回転実測A No21・25、III区3層
289-12	弥生?	<4.3>	ドーナツ状の突帯を中心に、数本の突帯を有する。	外) 横位のヘラミガキが施されている。	破片実測B VIII区1層



第290図 第10号周湮内出土土器拓影図



第291図 第10号周湮出土埴輪片実測図

また、本周湮内には大小様々な礫が多量に限なく分布している。その多くは第1層中からの出土であり、底面からは浮いている。このような状況を見る限り、これらの礫の多くは墳丘の作石となっていた可能性が強く、墳丘の崩壊に伴って周湮内に陥落したものと考えられる。(小山)

遺物 (第289・290・291図、図版 百)

本遺構からは、土師器・須恵器・埴輪・弥生土器・石器が出土している。このうち実測12点、拓影7点を図化した。弥生土器と石器については遺構の項で述べているように混入遺物と考えられる。土師器には壺・甕・坏・高坏があり、須恵器には長頸瓶・甕・高台付坏・蓋がある。

289-1・2・7は土師器壺で、289-1は口縁部外面、明瞭な稜を有し、その上はほぼ垂直に立ち上がる有段口縁の壺で、口縁部内面は段を有さず緩やかに内湾している。外面赤色塗彩が施されていた痕跡が観察でき、最大径は胴部にあつて球胴状を呈している。289-7の底部も外面赤色塗彩された痕跡がみられ、底部やや上げ底気味で胎土の観察から、あるいは289-1の有段口縁壺の底部かもしれない。289-2は有段口縁壺の口縁部の小片で小形のものと思われる。外面の稜は凸帯状にみえ、その上は外湾して立ち上がっている。

289-3・4・5は土師器の坏で289-3・4は小形品である。289-3は丸底気味の平底と思われ、底部から外傾して立ち上がり、口縁部に盛り上がりが見られる。内面には炭化物の付着が認められる。289-4の坏は器高の浅い丸底気味の平底で、口縁部内湾しながら立ち上がる。外面底部付近ヘラケズリ、内面はやや丁寧な黒色研磨が見られる。289-5の坏は内面丁寧な黒色研磨がなされ、底部ヘラケズリにより成形されている。

289-6は土師器の高坏で、坏部に明瞭な稜を有し、口辺部やや外湾しながら立ち上がり、口縁部付近内湾する。外面の調整はヨコナデの後、斜位あるいは縦位の粗い刷毛目調整がなされ、内面はヨコナデが施されている。内外面とも放射状暗文が行われている。

289-8は土師器甕の底部で、内外面ともに丁寧なヘラミガキがなされている。

289-9・10は須恵器高台付坏で、高台部貼り付けにより行なわれており、断面角張っている。

289-12はドーナツ状の突帯を中心に、数条の突帯を有する破片で、調整・胎土は弥生時代の土器と同様な特徴が見られるが、他に類例がなくどのような形状になるか不明である。他に291-1～5は埴輪の凸帯部分である。

以上、出土土器には古墳時代中期後半と古墳時代後期終末から奈良時代の時期差のあるものがみられ、第13号周湮と同様に、本遺構も古墳時代中期後半に築造され、古墳時代後期終末から奈良時代まで何らかの祭祀が行われていた可能性が強い。(高村)

4) 第11号周濠

遺構 (第292図、図版 九十五)

本遺構は台地南部の東側、た〜つ-14-16グリッド内に位置している。Y68号住居址と重複関係をもち、これを破壊している。また、周濠北側は大幅な攪乱をうけている。

周濠幅を含めた全体径は南北8.44m、東西8.84m、墳丘径南北6.76m、東西7.04mをはかり、本遺跡では最小規模の周濠である。全体の形状はほぼ円形を呈しており、円墳であったことが推測されるが、墳丘及び主体部は既に削平されている。

溝幅は0.5m〜1.0m、墳丘端部からの深さは17cm〜26cmをはかり、全周はせずに西側に幅20cm程の開口部を設けている。断面は墳丘部側面は緩い傾斜で立ち上がるのに対し、外周側面はやや急な立ち上がりを示す。底面はゆるく湾曲している。

覆土は以下に記す一層のみからなる。

第1層 茶褐色土 ローム粒とパミスを含み、粘性は弱くもろい。

遺物の出土状況

本遺構からは弥生土器・石器が出土している。弥生土器の破片は磨耗した破片が比較的多量にみられるが、本遺構の相伴遺物とはなり得ない。また、268-62 (磨製石鏃未成品)も南東の周濠覆土内から出土しているが、これも混入遺物であろう。

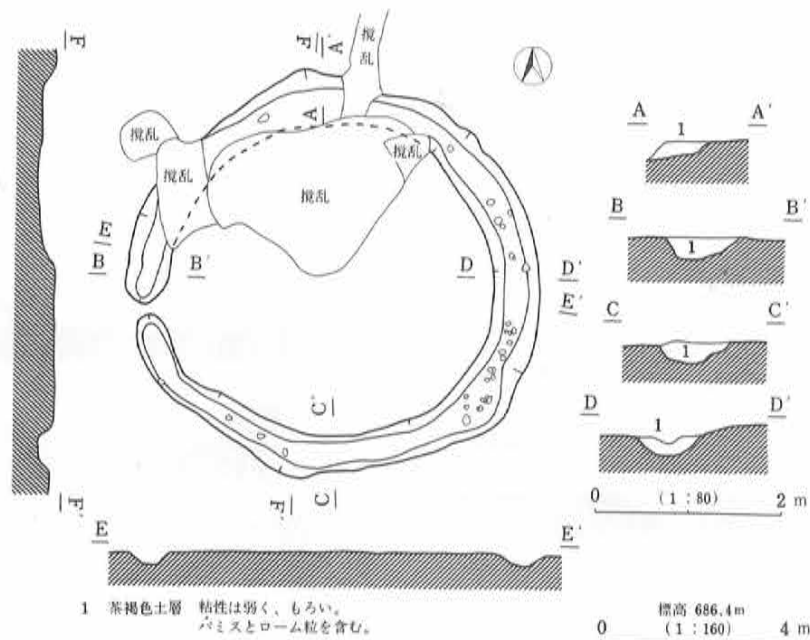
土師器・須恵器は全く検出されていない。

この他、本周濠内にも大小様々な礫が分布している。分布の傾向は周濠底面に密着するものは少なく、底面から5cm内外浮いた覆土中から出土するものが多く、特に東側に集中して分布する。これらの礫も墳丘の構材となっていた可能性が強く、墳丘崩壊に伴って陥落したものと思われる。

遺物

先述したように年代を推定する目安となる遺物に恵まれず、時期決定は難しい。

(小山)



第292図 第11号周濠実測図

5) 第12号周湮

遺構 (第293図、図版 九十五・九十六)

本遺構は台地南部の西端、せ〜つ-11~14グリッド内に位置している。遺構の北東部を横断する第2号溝状遺構によって破壊を受けている。墳丘及び主体部は既に削平されていた。

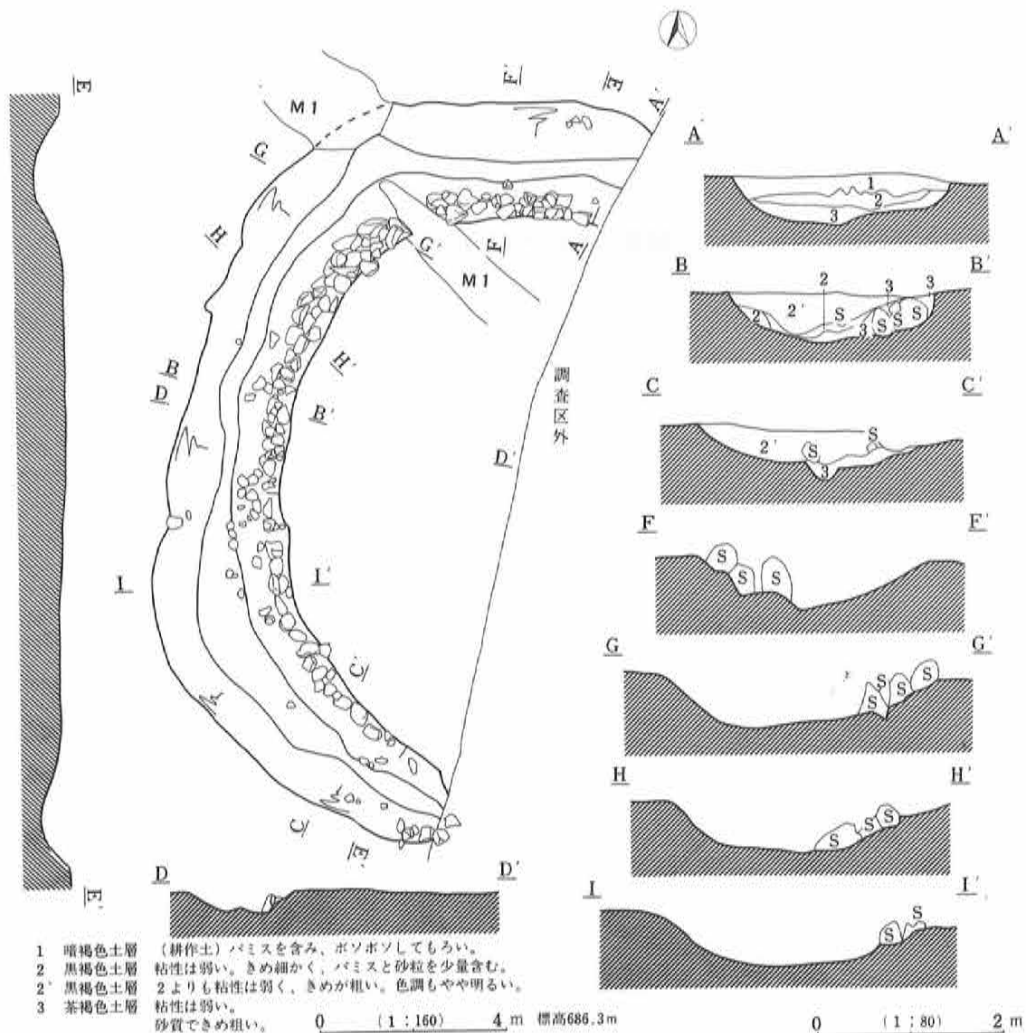
東側は未調査の斜面部分に関わっているため、本周湮の全容を把握できたわけではないが、斜面では周湮が終息する可能性が強く、大体の形状を知ることができたと思われる。周湮を含めた全体径は約15.8m、墳丘径は12mをはかり、おおむね半円形を呈することから円墳であった可能性が高い。溝幅は1.44m~2.96m、深さ24~59cmをはかり、断面形は緩やかな立ち上がりを示す。周湮内側の側面には2~3段に礫が積み上げられており、石垣のように整然とめぐっている。覆土は大略三層からなり、プライマーな堆積状態と考えられる。

遺物の出土状況

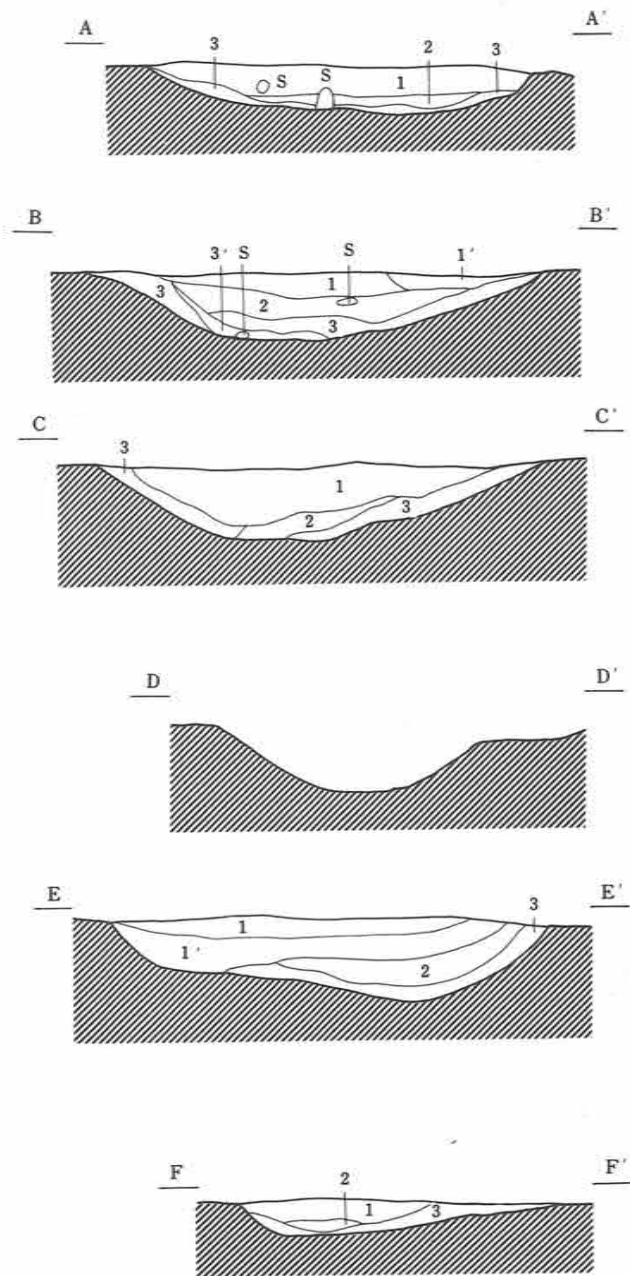
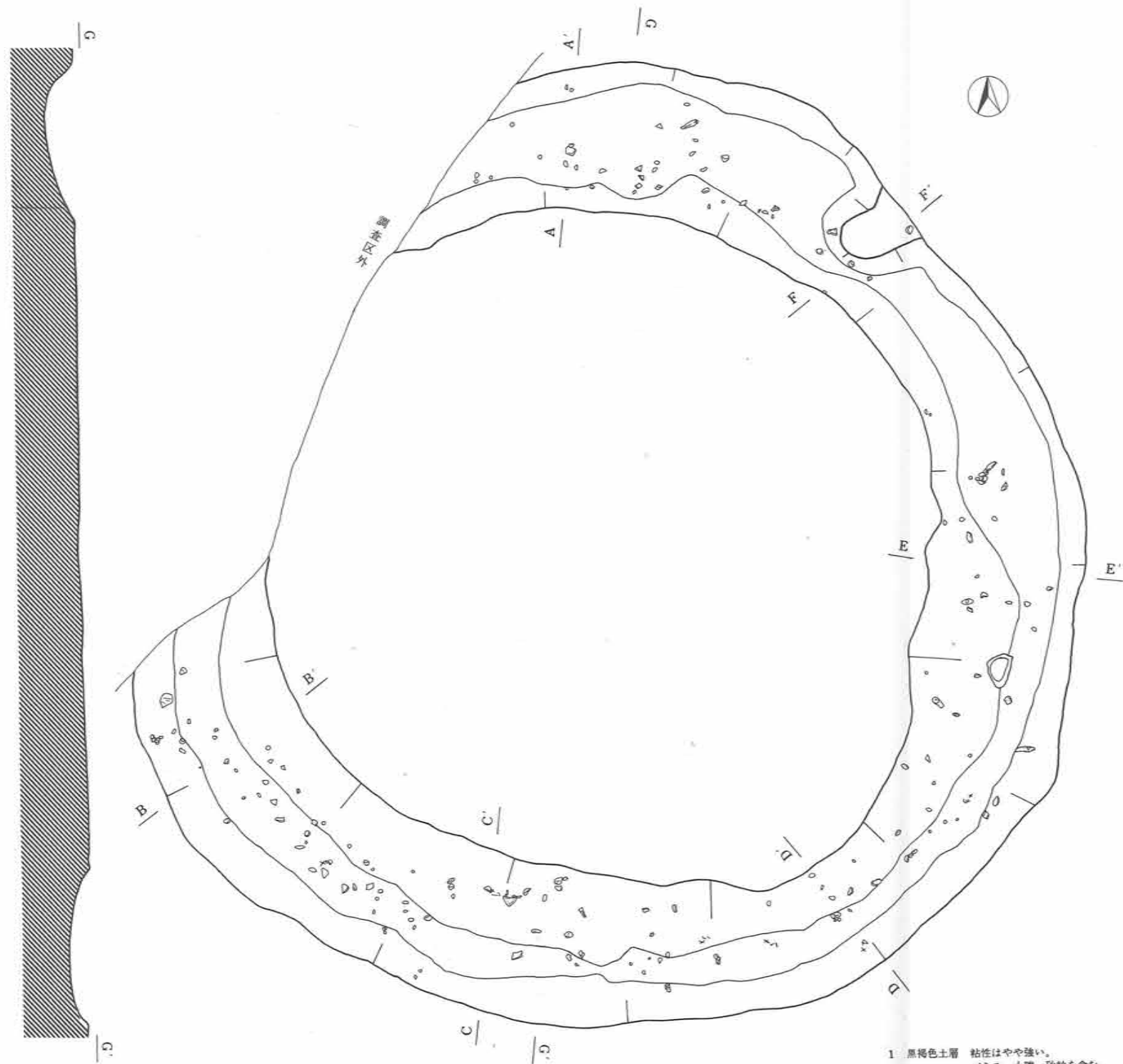
本遺構から検出された遺物は弥生土器が主体を占め、土師器・須恵器はいずれも細片にすぎないが、年代を決定する目安とはなる。いずれも覆土内からの出土である。また、鉄製品306-1が中央部から出土している。(小山)

遺物

本遺構から出土した土師器・須恵器はいずれも細片のため図化できなかったが、口縁部「く」の字状に外反する土師器甕片があり、古墳時代中期と考えられる。(高村)



第293図 第12号周湮実測図



- 1 黒褐色土層 粘性はやや強い。
バミス、小礫、砂粒を含む。
- 1' 黒褐色土層 1よりもやや色が明るい。
- 2 黒褐色土層 粘性は強い。
黄色砂粒主体で、2が混じる。
- 3 黄茶褐色土層 バミスと小礫を含み、漆黒に近い。
粘性は弱い。
- 3' 黄茶褐色土層 3よりも砂粒が少ない。

0 (1:80) 4 m

標高 686.1 m
0 (1:160) 8 m

第294図 第13号周隄実測図

6) 第13号周濠

遺構 (第294・295図、図版 九十六・九十七)

本遺構は台地の中央端部、い〜け-16〜22グリッド内に位置している。北西側の一部は未調査区にある。Y87・100・103・107・123・124・127・128号住居址と重複関係を持ち、これらのすべてを破壊している。

形態は周濠幅を含めた全体径が南北28.48m、東西28.16m、墳丘径南北19.84m、東西19.84m (推定) をはかり、おおむね円形を呈する。従って円墳であったことが想定されるが、墳丘・主体部は既に削平されている。

溝幅は3.2〜4.8mをはかり、北東部および南東部が若干細くなっている。深さは墳丘端部から計測すると39〜88cmをはかり、南側が北側に比べて深い。断面形は底面がおおむね平坦でなだらかな立ち上がりをもつ。

北東部の外周側の側面は長さ2.9m、幅2.5mの半楕円形に削り出されたテラス部分を有しており、また、周濠東側の底面には96×64cmの楕円形を呈する土坑が掘り込まれている。深さは22cm、断面形はU字形を呈する。土坑内覆土は二層からなり、第1層が黒褐色土、第2層が暗褐色土である。覆土直上には平安時代須恵器坏296-4が口縁部を地上に密着させた逆位の状態で検出されている。供膳されたものとも考えられる。

周濠内覆土は大略三層からなりプライマリーな堆積状態を示していると思われる。

遺物の出土状況

本遺構からは土師器・須恵器・弥生土器・石器・鉄製品・羽口が出土している。このうち、弥生土器・石器は本址の共伴遺物ではない。図示した296-8・9 (甕・高坏) もその例外ではない。土師器・須恵器の分布状況は比較的南側へ集中す傾向がみられる。296-9が断面図B-B'の西側の覆土第2層、297-2・3・7・8・12・13・14 (須恵器) がB-B'からC-C'間の覆土第1・2層、296-1・7 (土師器・須恵器)、297-4・6 (須恵器) がC-C'からD-D'間の覆土中、296-5 (須恵器)、297-5・10・11 (須恵器) がD-D'からE-E'間の覆土中から出土している。また、北側からは296-2・3・6 (土師器・須恵器) がE-E'からF-F'間から出土している。埴輪片は2点のみで、C-C'からD-D'間と耕作土中から出土している。金属製品は306-5 (鉸具) がA-A'間西側の覆土中、306-6・11 (金銅製? 釣針・鉸具の頭) がB-B'間西側覆土中、306-7~10 (角釘) がE-E'からF-F'間の覆土中から出土しており、地区不明であるが306-4・13 (鉾・不明) も覆土内から出土している。また、306-3 (羽口) はA-A'からF-F'間の覆土中から出土している。 (小山)

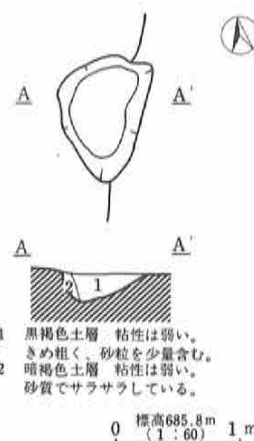
遺物 (第296・297・306図、図版 百・百二)

本遺構からは、土師器・須恵器・弥生土器・石器・金属器・羽口が出土している。

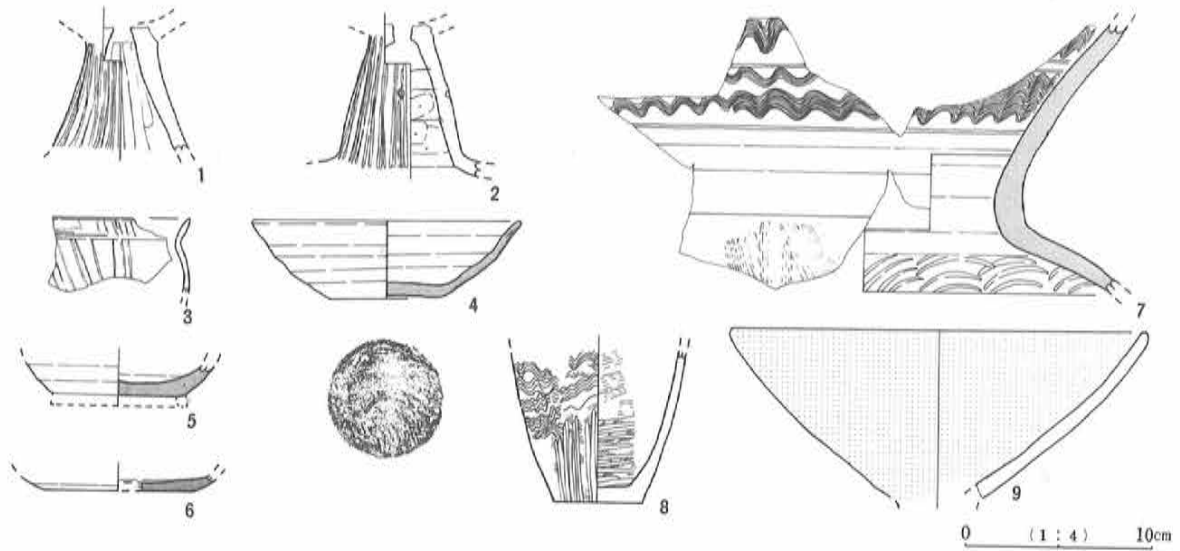
土師器高坏は図示し得たのは2点であるが、その他、脚部が3点あり計5個体は出土している。296-1・2とも柱状になる脚部で裾部大きく開く器形を呈している。296-3の土師器坏は口辺部屈曲して外反しており、古墳時代中期にみられるものである。296-4~6の須恵器坏及び高台付杯は、いずれもロクロヨコナデ調整がなされており、奈良時代から平安時代初頭のものと思われ、また、296-7の大甕は胎土の観察から地元産の可能性が高く、初期須恵器ではないであろう。羽口はガラス質の先端部破片が出土している。

金属器の306-4は鉄製鉾か鑿か漁具の可能性があり、306-5は鉄製鉸具、306-6は金銅製? 釣針、306-7~10は鉄釘、306-11は鉄製鉸具の頭か^(しおで)金具、306-13は鉄製品であるが品名は不明である。

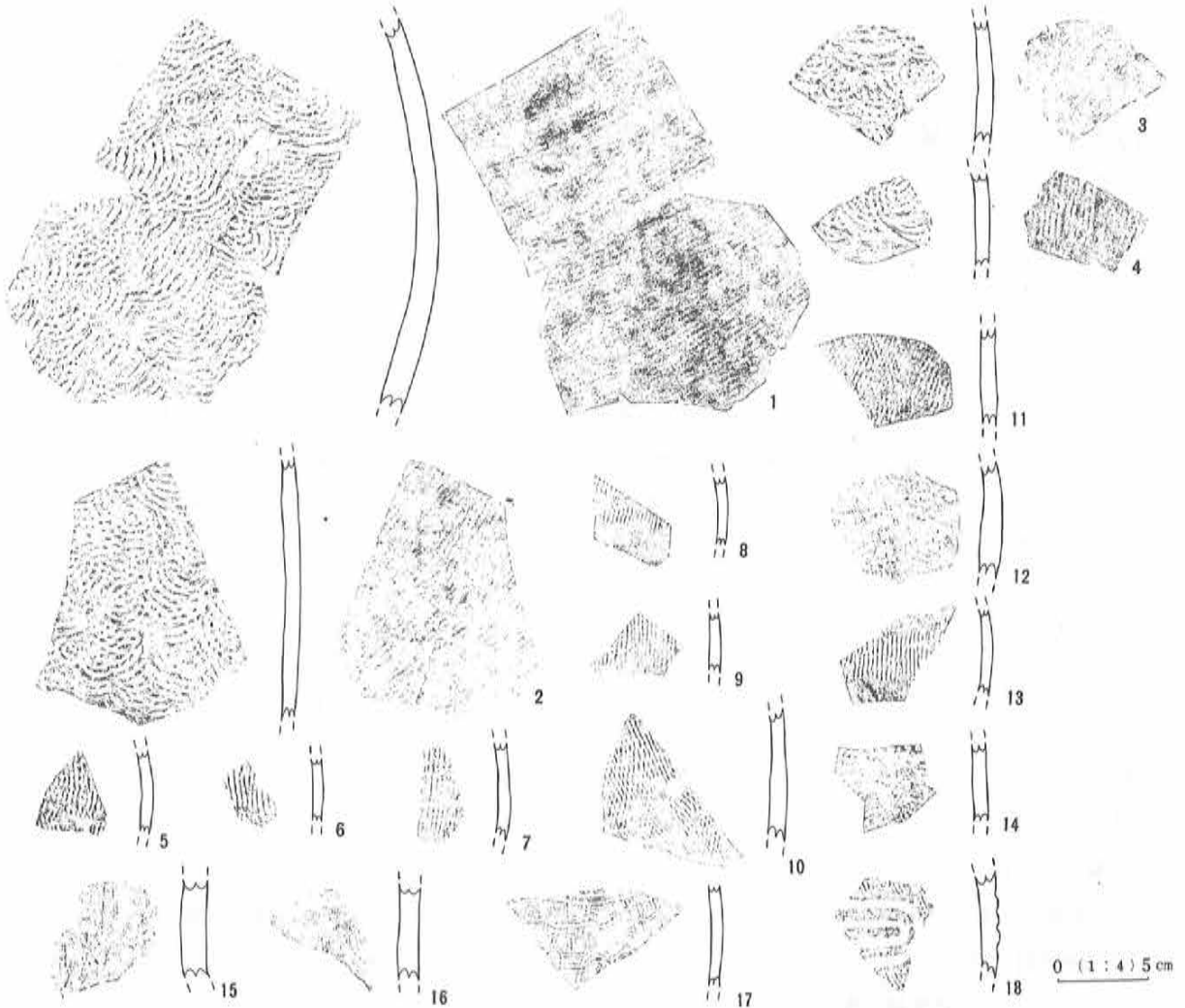
以上、出土土器には古墳時代中期後半と奈良時代~平安時代初頭の時期差のあるものがみられ、本遺構は古墳時代中期後半に築造され、平安時代初頭まで何らかの祭祀が行われていた可能性が強い。 (高村)



第295図 第13号周濠内VI区土坑実測図



第296図 第13号周湟内出土土器実測図



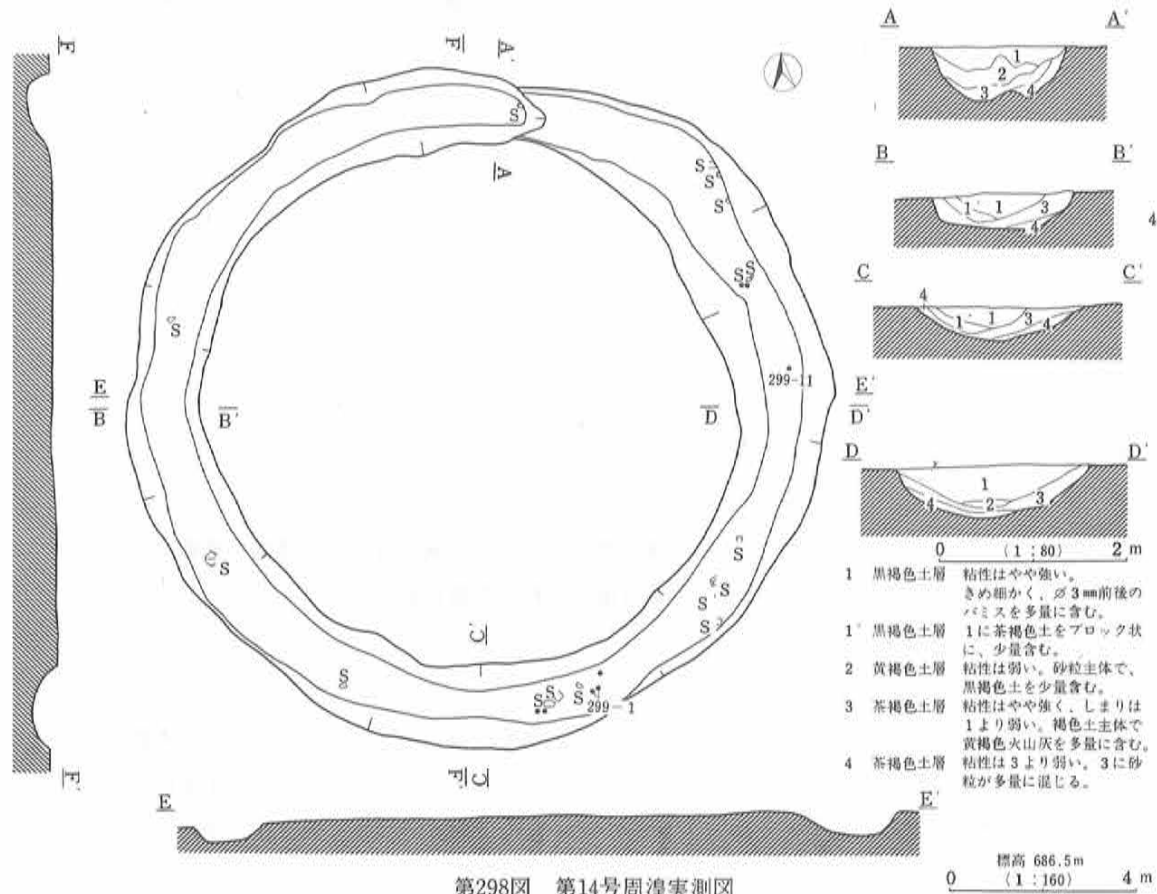
第297図 第13号周湟内出土土器拓影図

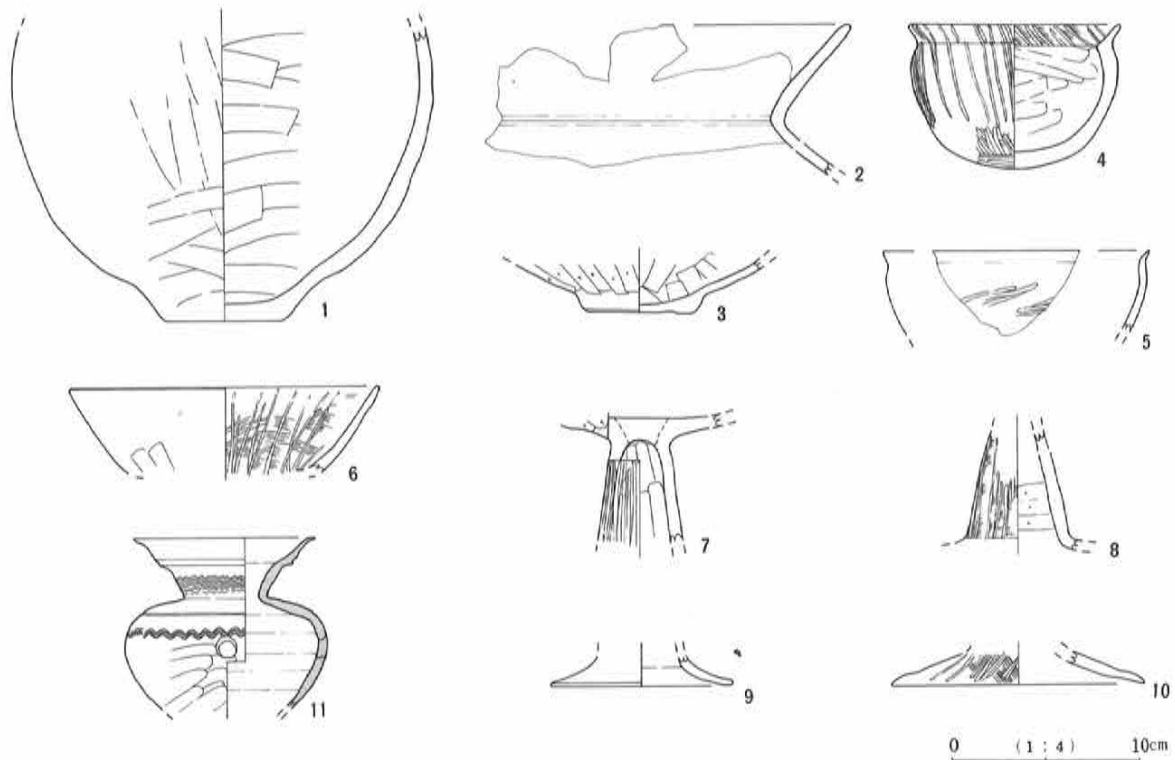
7) 第14号周湟

遺構 (第298図、図版 九十七・九十八)

第71表 第13号周濠内出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
296-1	土高脚器環	— <6.5> —	柱状を呈し、坏部と脚部の接合には独立するホゾが用いられたと思われる。	内) 横位のヘラケズリ→縦位のナデが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B V区ヘルト内
296-2	土高脚器環	— <8.0> —	坏部と脚部の接合には独立するホゾが用いられたと思われる。中央に外面より施された焼成前の穿孔途中の凹みがある。	内) 横位のヘラケズリ、およびナデが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B VII区ヘルト内
296-3	土脚器塊	(6.8) <3.9> — (6.8)		内) 口縁部にヨコナデ、胴部にナデが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部にナデ→口縁部から胴部は軽いヘラミガキが施されている。	破片実測B VII区ヘルト内
296-4	須恵器環	14.2 4.1 6.0	口辺部は内穹気味に開く。	内・外面ともにロクロヨコナデ(左回転)が施され、底部は回転糸切りの後、周辺部にヘラケズリが施されている。	完全実測 No 2
296-5	須恵器高台付器環	— <1.7> 7.0	高台が付いていたと考えられる。	内・外面ともにロクロヨコナデ、底部は回転糸切りが施されている。	回転実測B VI区1層
296-6	須恵器環	— <0.9> (6.0)		内・外面ともにロクロヨコナデ、底部はヘラケズリが施されている。	回転実測B VII区
296-7	須恵器甕	— <14.5> —		内) 頸部以上にロクロヨコナデが施され、頸部以下に押しえ直が観察できる。 外) 頸部にロクロヨコナデが施され、胴部は叩き整形痕がカキメの下に観察できる。 文) 口縁部上位は2-3本のヘラ描線走平行線文が施され、その空間は7-11本の櫛描波状文で埋められている。	破片実測B No 5、I区1層、IV区
296-8	甕(弥)	— <8.0> 4.8	小型の土器である。	内) 胴部中に横位のハケメ調整→ナデ、下位から底部は斜位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 胴部下位から底部に斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 4本一組の櫛描波状文(右回り)が下から上へ施されている。	回転実測A IV区
296-9	高台(弥)	(22.0) <8.9> —	坏部は内穹気味に開き、坏部と脚部の接合には、脚に属するホゾが用いられたことが断面より考えられる。	内) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B V区、E区





第299図 第14号周湟出土土器実測図

本遺構は台地の中央部やや東寄りの、う~か-9~13グリッド内に位置している。Y105・106号住居址、第7号溝状遺構と重複関係をもち、これらを破壊している。

墳丘・主体部は既に削平されている。

周湟幅を含めた全体径は南北14.4m、東西15.04m、墳丘径は南北11.12m、東西11.44mをはかり、全体の形状はおおむね円形であることから円墳であったものと推察される。

溝幅は1.08m~2.36mで北東部が最も太く、北部が最も細い。墳丘端部からの深さは33~57cmをはかり、断面形状は丸味を帯び、緩い傾斜で立ち上がる。

覆土は以下に記す四層からなり、プライマリーな堆積状態を示していると思われる。

第1層	黒褐色土	きめ細かく、粘性はやや強い。パミスを多量に含む。
第1'層	黒褐色土	第1層にブロック状の黒褐色土が加わる。
第2層	黄褐色土	粘性は弱い。砂粒主体で黒褐色土を少量含む。
第3層	茶褐色土	褐色土主体で黄褐色の火山灰を多量に含む。粘性はやや強い。
第4層	茶褐色土	粘性は弱く、第3層に砂粒が多量に混じる。

遺物の出土状況

本遺構からは弥生土器・土師器・須恵器が出土している。弥生土器の混入が著しいものの、本周湟からは比較的土師器・須恵器の出土量も多い。完存品は1点もなく、すべてが周湟底面から浮いた覆土中に分布している。おそらく、墳丘部に供膳されていたものが陥落したものであろう。分布の傾向は周湟東側に比較的に集中し、299-1（土師器甕）が南部東寄り、299-11（須恵器甕）が東部北寄りから出土している他、299-6・10（土師器高



第300図 第14号周湟内出土土器拓影図

第72表 第14号周濠出土土器観察表

挿 番	図 号	器種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
299-1		土師器甕	— <15.4> 6.0	胴部は球胴状を呈する。	内) 横位のヘラケズリが施されている。 外) ヘラケズリが施されている。	回転実測 B No.4、III区
299-2		土師器甕	(11.2) <7.9> —	口縁部は「く」の字状を呈する。	内・外面ともにヨコナデが施されている。	破片実測 B IV区
299-3		土師器甕	— <2.9> 5.6	底面は後から埋めたとおわれ、中央部がドーナツ状に凹む。	内) 斜位のヘラケズリが施されている。 外) 縦位のヘラケズリが施されている。	回転実測 B IV区
299-4		土師器壺	(11.2) <7.6> —	最大径は口縁部と胴部上位では等しい。底部は丸底、口縁部は短かく外反し、胴部から底部は半円状を呈する。	内) 口縁部はヨコナデの後、縦位の暗文風ミガキが施され、胴部上位に斜位のヘラケズリ、胴部中位以下にはナデが施されている。 外) 口縁部から胴部中位はヨコナデの後、縦位の暗文、胴部以下はヘラナデが施されている。	回転実測 B No.2
299-5		土師器坏	(14.0) <4.6> —	口縁部は短かく外反する。	内) ヨコナデの後、縦位の暗文風ミガキが施されている。 外) 口縁部はヨコナデが施され、その下位は軽い横位のヘラミガキが施されている。	破片実測 B I区フク土
299-6		土師器高坏	(16.4) <4.5> —	坏部は外稜を有し、わずかに内弯して開く。	内) ヨコナデ、斜位のハケメ調整の後、暗文が施文されている。 外) 斜位のハケメ調整とヨコナデが施されている。	回転実測 B III区
299-7		土師器高坏	— <7.4> —	脚部と坏部の接合には独立するホゾが用いられたことが、断面より考えられる。	内) 坏部はナデ、脚部は縦位のヘラナデが施されている。 外) 坏部は縦位のナデ、脚部は縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測 B IV区
299-8		土師器高坏	— <6.6> —	柱状部のみ残存している。	内) 横位のヘラケズリが施されている。 外) 横位のハケメ調整の後、縦位の暗文が施されている。	回転実測 B IV区
299-9		土師器高坏	— <1.4> (9.6)	裾部にあたる。	内) 磨減著しく調整不明。 外) ヨコナデが施されている。	回転実測 B I区
299-10		土師器高坏	— <1.8> 13.7	偏平な裾部である。	内) ヨコナデが施されている。 外) 縦位のハケメ調整が施された後、ナデ更に縦位の暗文風ヘラミガキが施されている。	回転実測 B III区
299-11		須恵器甕	9.6 <9.0> —	口縁部は強く外反し、上半部で段をつくって更に外反する。また、口縁部下段は凹線をめぐらした結果、突帯状となっている。胴部は上位で張り、最大径を有し、尖り気味の底部に至る。胴部のもっとも張り出した部分に円孔が穿たれている。	内) ロクロヨコナデが施されている。 外) 胴部中位以上はロクロヨコナデ、以下は斜位のヘラケズリが施されている。 文) 頸部と胴部上位に櫛波状文が、その中間に横走る沈線が一条施されている。	回転実測 B No.1、IV区

坏)が南東部、299-2・3・7・8(土師器甕・高坏)、299-2(須恵器甕)が北東部から出土している。また、西側からは299-5・9(土師器壺・高坏)、299-1(須恵器甕)が北西部から出土している。(小山)

遺物(第299・300図、図版 百)

本遺構からは、弥生土器・土師器・須恵器が出土している。このうち10点を図化した。弥生土器については混入遺物と考えられる。土師器の器種は甕・壺・坏・高坏があり、須恵器には甕・甗がある。

299-1~3は土師器甕で299-1は胴部球胴状を呈し、299-2は口縁部「く」の字状に外反する。299-4の土師器壺は丸底で口縁部短かく外反し、内面に明瞭な稜を有する。299-5の土師器坏は口縁部短かく外反する古墳時代中期に一般的にみられる坏である。高坏は図示しえたのは四点(299-7~10)であるが、他に6個体分の脚部があり、計10個体以上は確実に存在していたことがわかる。いずれも脚部柱状で裾部大きく開く形態をとっており、西裏遺跡第1号特殊遺構出土の高坏より古い段階のものと思われる。

299-11の須恵器甕は木下亘氏によると定型化した器形に手持ヘラケズリという、TK73型式に特徴的に認められる古い技法が使用されており、技法は古い様相を示しているが器形は新しいTK216型式に入るものとしている。以上、299-11の須恵器甕がTK216型式併行と考えられることから、本遺構の所産期は5世紀第三四半期と推測する。(高村)

8) 第15号周湮

遺構 (第301図、図版 九十八)

本遺構は台地の中央東端、きーこー6～8グリッド内に位置している。第7号溝状遺構の分岐した溝と重複関係をもつが、新旧関係は明確ではない。また、土砂の流出の著しい斜面の基部に位置するため、上面が大幅に流されており、遺存状態は悪い。墳丘、主体部は既に失われている。

周湮は東側が未調査区に関わるため、全容は調査されておらず、検出形状は半円状を呈する。周湮幅を含めた全体径は推定で12.2m、墳丘径9.28mをはかる。東側の斜面部分にまで周湮がめぐっていた可能性は薄い、往時は円墳であったと推察できる。

溝幅は112cm～208cm、墳丘端部から計測した深さは5～32cmをはかり、斜面上部の西側の存在は良好であるが、斜面下部の北・南側は大幅に削平されている。断面形はやや凹凸に富むが、底面は平坦で、立ち上がりは緩やかである。

覆土は以下に記す四層からなり、プライマリーな堆積状態を示していると思われる。

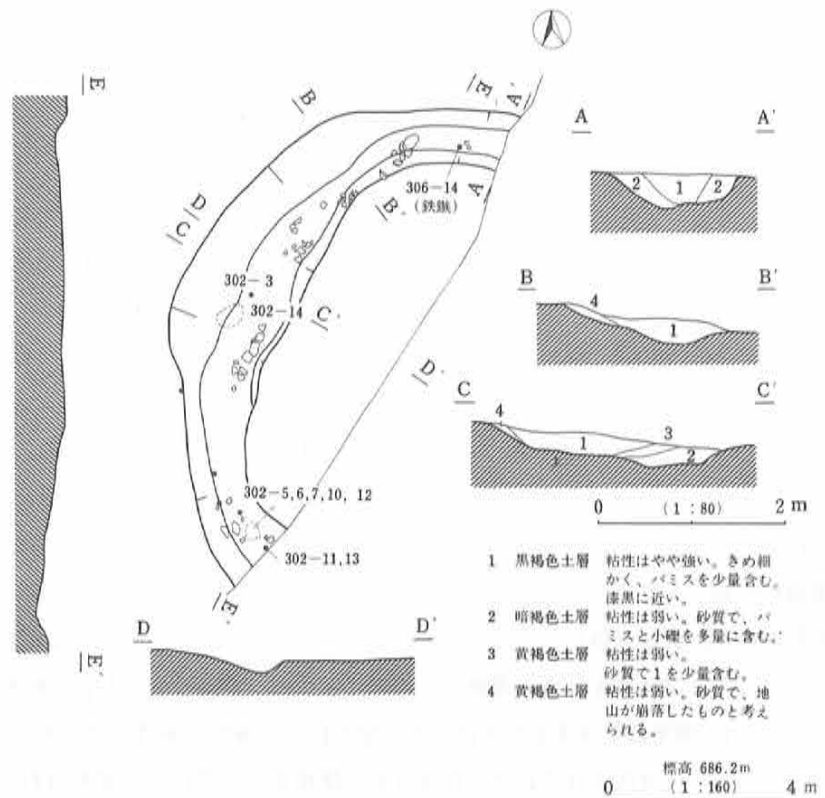
- 第1層 黒褐色土 きめ細かく漆黒に近く、粘性は強い。パミス少量含む。
- 第2層 暗褐色土 砂質で粘性は非常に弱い。パミスと小礫を多量に含む。
- 第3層 黄褐色土 砂質で粘性は弱い。第1層が少量まざる。
- 第4層 黄褐色土 砂質で粘性は弱い。地山が崩落した土と考えられる。

遺物の出土状況

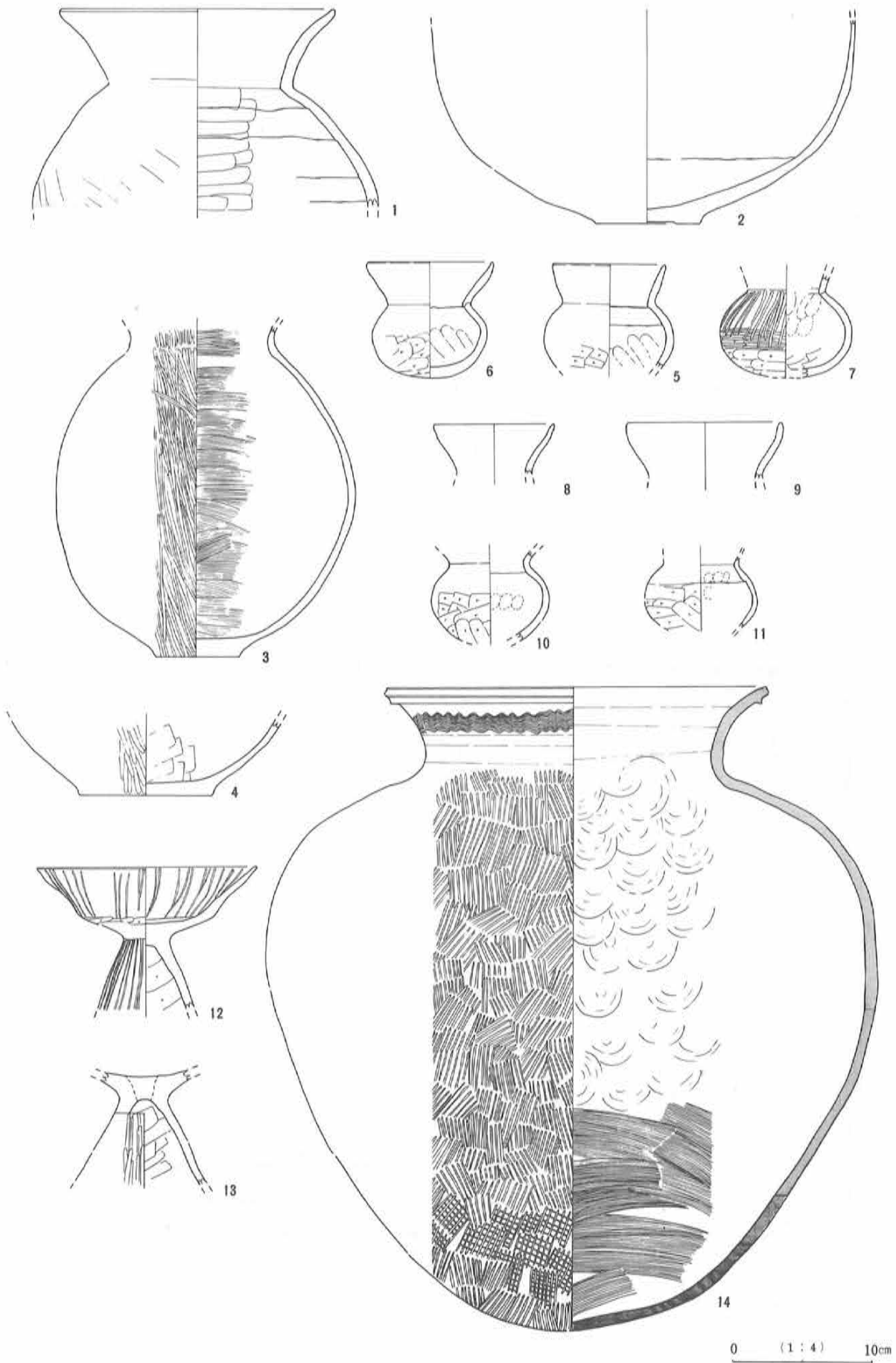
本遺構からは土師器・須恵器・弥生土器・石器・金属器が出土した。このうち、弥生土器・石器269～28は明らかに混入遺物である。これに対して、土師器・須恵器は本周湮の共伴遺物と見做すことができ、極めて多量に出土している。

これらの遺物はいずれも周湮底面からは10～32cm浮いた、第1層中から出土しており、墳丘部に供献されていたものが、陥落した可能性も強い。また、いずれの遺物も著しい土圧を受けたためか、押しつぶされた様な状態で細片化している。

遺物分布は306-14・15(鉄鏃)が北側の調査区外付近、302-3・14(土師器壺・須恵器甕)が東側のほぼ中央部に分布している。南側の調査区外付近には最も多くの個体が集中しており、302-5・6・7・10・11・12・13(土師器埴・高坏)などの供



第301図 第15号周湮実測図



第302図 第15号周濠出土土器実測図

膳具のみがみられる。

この他、周湊内には多量の礫が覆土内に分布している。これらは墳丘を造築する際の構材と考えられ、墳丘の崩壊に伴って周湊内に陥落したと考えられる。(小山)

遺物 (第302・306図、図版 百一)

本遺構からは土師器・須恵器・弥生土器・石器・金属器が出土している。そのうち土師器13点、須恵器1点、金属器2点を実測し、須恵器2点を拓影して図化した。また、遺構の項で述べているように、弥生土器・石器は混入遺物と考えられる。土師器の器種には、壺・甕・埴・高坏があり、須恵器には甕がある。

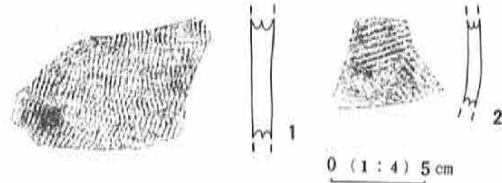
土師器甕には302-1の口縁部「く」の字状に外反し、上端で僅かに内弯する大きな甕があり、内面の調整は口縁部ヨコナデ、頸部以下は横位のヘラケズリがなされている。外面は口縁部ヨコナデ、胴部は刷毛目調整の後、

第73表 第15号周湊出土土器観察表

挿 番	図 号	器種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
302-1		土師器甕	19.6 <14.2> —	胴部に最大径を持つと思われ、口縁部は頸部より「く」の字状に強く外反し、上端で僅かに内弯する。胴部上位に4帯の接合痕がある。	内) 口縁部はヨコナデ、頸部以下は横位のヘラケズリが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部はハケメ調整→ヘラナデが施されている。	回転実測A S 16 III区、け8グリッド内
302-2		土師器壺	— <14.4> 7.4	底面はドーナツ形の凹みを有し、胴部は下ふくれ状となる。	内・外面ともにナデが施されている。	回転実測A I区
302-3		土師器壺	— <23.4> 6.0 21.4	胴部中位下方に最大径を有し、球胴状を呈する。	内) 頸部に横位のヘラミガキ、以下は横位のハケメ調整が施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No 3
302-4		土師器壺	— <5.2> 9.4		内) ヘラケズリーナデが施されている。 外) ヘラナデが施されている。	回転実測B No 8
302-5		土師器埴	8.0 7.3 — 9.2	胴部中位に最大径を持ち、口縁部は「く」の字状に外反しあまり開かない。内面の頸部と胴部上位に粘土の接合痕が観察できる。	内) 頸部以上にヨコナデ、以下はナデが施されている。 外) 頸部以上にヨコナデ、頸部から胴部中位にナデ、胴部下位は斜位のヘラケズリが施されている。	回転実測B No 8、III区
302-6		土師器埴	9.0 8.2 — 9.0	最大径は口縁部と胴部では等しく、口縁部は頸部から「く」の字状に強く外反し、端部で僅かに内弯する。胴部は偏球形を呈し、底部は丸底。	内) 頸部以上にヨコナデ、以下は指頭による押さえが施され、部分的に斜位のハケメ調整が施されている。 外) 口縁部から胴部中位にヨコナデ、下位は斜位のヘラケズリが施されている。	完全実測 No 8
302-7		土師器埴	— <6.2> —	胴部は偏球状に張り出し、底部は丸底を呈すると思われる。	内) 胴部中位以上に指頭による押さえ、底部はヘラケズリ痕が残っている。 外) 胴部下位に横位のヘラケズリが施された後、胴部中位に横位のヘラミガキ、その後頸部から縦位の暗文が施されている。	回転実測A No 8、け8グリッド内
302-8		土師器埴	(11.0) <3.9> —	口縁部は逆「ハ」の字状に開き、上半で屈曲してほぼ直立する。	内・外面ともにヨコナデが施されている。	回転実測B け8グリッド内
302-9		土師器埴	(8.6) <3.7> —	口縁部は逆「ハ」の字状に開き、上半で僅かに内弯する。	内・外面ともにヨコナデが施されている。	回転実測B III区
302-10		土師器埴	— <6.4> — 8.4	胴部は偏球状を呈し、底部は丸底を呈すると思われる。	内) 頸部以上にヨコナデ、以下はナデおよび指頭痕が残っている。 外) 頸部以上にヨコナデ、頸部から胴部上位はナデ、下位は斜位のヘラケズリが施されている。	回転実測B No 8、III区、け8グリッド内
302-11		土師器埴	— <5.0> — 8.0	頸部内面に粘土帯が観察できる。	内) ナデが施され、指頭痕が残っている。 外) 胴部上位にヨコナデ、その後胴部下位に横位および斜位のヘラケズリが施されている。	回転実測A No 9、III区
302-12		土師器高坏	(5.6) <9.9> —	坏部は下位に稜を持ち、口辺部は外反して開き上半で僅かに内弯する。脚部は割合大きく開く。	内) 坏部は口辺部にヨコナデ、底部にヘラミガキ、脚部はヘラケズリが施されている。 外) 坏部は上位でヨコナデ、下位でヘラケズリ、その後暗文、脚部はナデが施されている。	回転実測A No 8
302-13		土師器高坏	— <7.9> —	坏部と胴部の接合には独立したホゾが用いられたと思われる。	内) 坏部にヘラナデ、脚部は斜位のヘラケズリが施されている。 外) 縦位のヘラナデが施されている。	回転実測A No 9、III区
302-14		須恵器甕	27.4 45.9 — 43.5	最大径は胴部上位に位置する。口縁部は外反し、端部に1条の突帯を有する。胴部は上位で張り、底部は丸底を呈する。	内) 口縁部にヨコナデ、胴部に押さえ痕が残るが大半は擦り消されている。 外) 口縁部から頸部にクロヨコナデ、頸部以下は叩き目、一部に格子目状叩き目が観察できる。 文) 頸部に16本一組の丁寧な横線状文が1帯施されている。	回転実測A No 4、III区、<8グリッド内

ヘラナデが施されている。

土師器壺には302-2~4があり、図示できなかったが他に有段口縁壺の口縁部小破片がある。302-2は大きな壺の胴下部から底部の個体で、底面は古墳時代中期によく見られる、ドーナツ状に粘土帯を貼り付けた凹部がみられる。302-3は胴部中位下方に最大径を有し、球胴状になる器形を呈し、外面、丁寧なヘラミガキが施されており、また、胎土は赤色塗彩を施してあるのではないかと間違えるほどの鮮やかな赤褐色を呈している。302-4平底の底部で、内面ヘラケズリの後、ナデがなされており、外面はヘラナデが施されている。その他、有段口縁壺の口縁部破片は、外面の稜にシャープさがなく、退化現象がみられる。



第303図 第15号周湟内出土土器拓影図

土師器埴は大きさのほぼ同じくらいのものが最低6個体(302-5~11)出土しており、小型のものである。302-5は胴部中位に最大径を有し、口縁部直線的に外傾してあまり開かず新しい様相を示している。302-6の埴は最大径が口縁部と胴部ではほぼ等しく、口縁部逆「ハ」の字状に外反して端部で僅かに内弯する。302-6の埴の器形に類似する個体に302-8・9があり、302-5の埴に比べ多いものと思われる。最大径が口縁部と胴部ではほぼ等しい埴が多いと思われることから、古墳時代中期の範囲に入るものと考えられる。

土師器高坏は図示し得たのは2点であるが、他に別個体と思われる脚部が数点出土している。302-12・13とも脚部が柱状とならず、割り合い大きく開くもので、西裏遺跡第1号特殊遺構出土の高坏の脚部に類似するものと思われる。このことから、本遺構出土の高坏は第14号周湟出土の高坏より新しい様相を呈しているものと思われる。

須恵器には、302-14の大甕が出土している。木下亘氏によると内面半磨消しの技法はTK216~208型式に、口縁部器形の突帯が小さく、くずれていることからTK23~47型式に当るとし、波状文が雑なため畿内系の産ではないという意見が得られた。

金属器には鉄鏃が2点出土している。306-14は平根抉三角形鏃で、306-15は異形棘筈被鑿箭式鏃(?)である。

以上のことから、302-14の須恵器大甕がTK23~47型式であるので、5世紀末から6世紀初頭の年代が得られるが、土師器埴・高坏の特徴などから、本遺構は第14号周湟の次にくる年代が考えられ、所産期は5世紀末としておきたい。(高村)

9) 第16号周湟、第168・169・175号土坑

遺構(第304図、図版 九十九)

本遺構群は台地の中央南寄りの東端、く~さ-9~12グリッド内に位置している。Y95・96号住居址と重複関係をもち、これを破壊している。第16号周湟、第168・169・175号土坑は古墳時代の範疇で考えられる遺構群である。第16号周湟と第175号土坑は重複関係を有し、第175号土坑の方が若干新しいが、極く接近した時期に構築された可能性が強いこと、第168・169号土坑の構築位置が第16号周湟を狭んで左右対照の位置関係を有しており、何らかの意味をもって相互に関連している可能性が強いことなどが認められるため、これらの遺構をまとめて記述することにした。

第16号周湟は他の周湟のように円形状、半円形にめぐらず、長さ8.64mの弧状を呈する。溝内に他の周湟と同様に礫が陥落している状況が認められたため、周湟は古墳址とした。溝幅は180~224cm、深さは35~50cmをはかり、断面形は丸底状を呈する。覆土は黒褐色土(第1層)のみからなる。

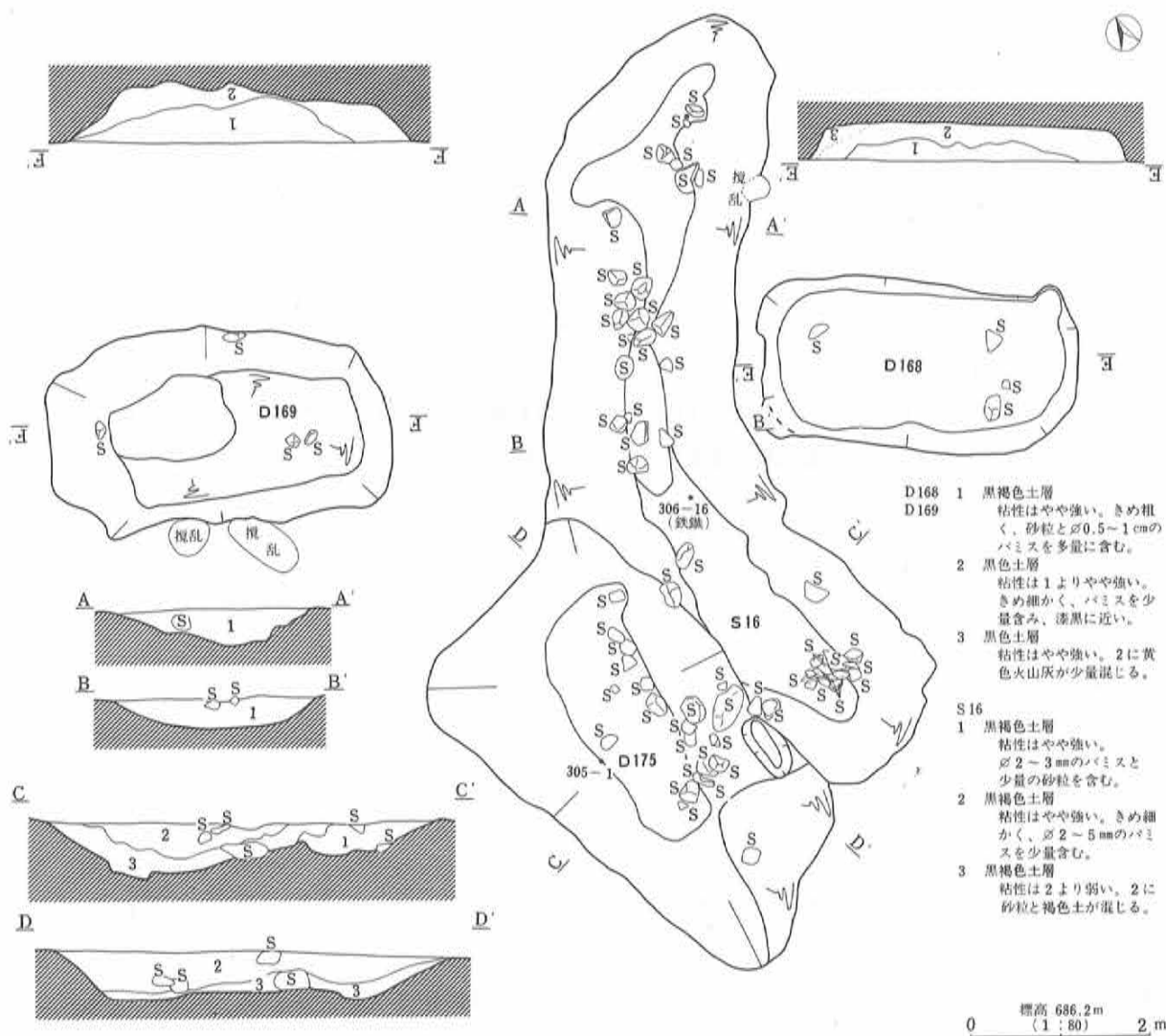
遺物は少なく、中央部底面から306-16(鉄鏃)が出土したにすぎない。

第175号土坑は第16号周湟が埋没したのちに、構築されている。510×282cmの不整形を呈し、深さは最深部で61

cmをはかる。底面は丸味をおび、立ち上がりは緩い。覆土は黒褐色土をベースとした第2・3層からなる。遺物は少なく、共伴遺物は中央西寄りの305-1(須恵器蓋)一点のみである。この他、多量の礫が、西側に偏在して分布している。底面からは20cm前後浮いた状態である。

第168号土坑は第16号周溝の東側に位置する。長軸長348cm、短軸長186cmの長方形を呈し、長軸方位N-72°-Wをさす。深さは24~51cmをはかり、底面はおおむね平坦で、底面からの立ち上がりは急傾斜である。覆土は三層からなる。第1層は砂粒とパミスを多量に含む黒褐色土、第2層はパミスを少量含むきめの細かい黒色土、第3層は第2層に黄褐色火山灰がまざった黒色土である。遺物は弥生土器が混入しているが、本遺構に伴伴すると考えられるものは皆無である。

第169号土坑は第16号周溝の西側に位置する。長軸長380cm、短軸長219cmのやや崩れた長方形を呈し、長軸方位はN-78°-Wをさす。深さは20~65.5cmをはかり、底面は北西部に凹凸がみられるものの、おおむね平坦で底面からの立ち上がりは急傾斜である。覆土は二層からなる。第168号土坑に存在した第3層を欠くが、第1・2層は第168号土坑と同様である。遺物は305-2(土師器坏)の他、土師器高坏などの破片も出土している。弥生土器も



第304図 第16号周溝、第168・169・175号土坑実測図

みられるが、混入遺物であろう。

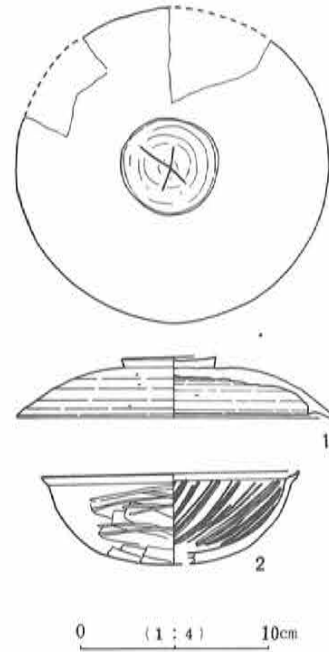
以上、第16号周埴、第168・169号土坑はほぼ同時期に構築された可能性が強く、第175号土坑はこれらよりも遅れて構築されたようである。
(小山)

遺物 (第305・306図、図版 百二)

第16号周埴からは、鉄鏃が出土している。306-16は茎の先端部が欠損した抉入平根三角形鏃である。土器は混入遺物と考えられる弥生土器がほとんどで所産期について言及できない。

第169号土坑からは、土師器杯(305-2)が出土している。305-2は内面に暗文のある、口辺部内稜を有し、短かく外反する器形で古墳時代中期の杯と考えられる。その他、外稜のある土師器高杯の杯部小片が出土している。

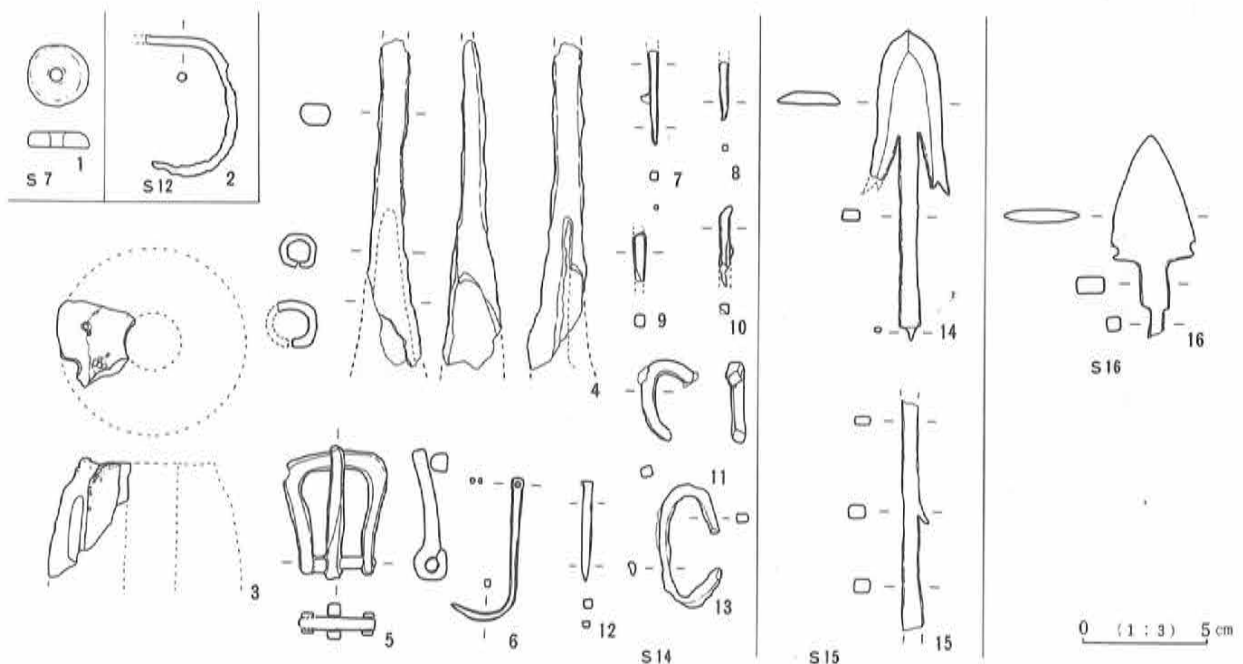
第175号土坑からは、須恵器蓋(305-1)が出土している。305-1はかえりを有した、内外面ロクロヨコナデにより調整され、環状つまみの蓋で7世紀後半のものと言えよう。
(高村)



第305図 第169・175号土坑出土土器実測図

第74表 第169・175号土坑出土土器観察表

挿番 図号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
305-1	須恵器蓋	口径 16.8 器高 3.3	天井部は偏平で、口縁部は僅かに内弯し、かえりを有する。	内・外面ともロクロヨコナデ(右回転)、外面天井部はヘラケズリが施され、つまみ部中央に「×」印のヘラ記号が施されている。	回転実測A S16No.3、D175ベルト内
305-2	土師器杯	13.6 4.9	底部は丸底を呈する。	内) 底部下位はナデ、口辺部から底部中位はヨコナデが施されている。 外) 口辺部にヨコナデ、体部に斜位のヘラナデ、ヘラミガキ、底部にヘラケズリ。 文) 内面体部に縦位の暗文が施されている。	回転実測A D169S区



第306図 北西ノ久保遺跡周埴内出土金属器及び土製品実測図

第4節 特殊遺構

1) 第1号特殊遺構

遺構 (第309図、図版 百三)

本遺構は、台地の南部斜面、第2号古墳の南東に位置し、標高約678mを測る。全体層序第IV a層黒色土層を掘り込んで構築され、全体層序第V層暗褐色土層にまで達する。第2号古墳の調査時に、トレンチを掘り下げる際に遺物が出土したため、土層断面で確認されたのみである。平面プランは明確ではないが、土層断面から径165cm前後のほぼ円形を呈すると思われる。

覆土は、粘性弱く、茶褐色粒子を含む黒茶褐色土層一層のみで構成され、覆土上部には径10~70cm大の礫が多量に検出された。確認面からの深さは23~46cmを測り、底面からの急傾斜で立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。また、南傾斜面上に構築されているため、底面も傾斜に沿って南に向かってレベルを低下させ、北端部と南端部の比高差は60cmを測る。遺物の出土状況は、平面形態が不明なため明確でないが、土師器・灰釉陶器・鉄製品が底面付近より散漫な状態で出土した。

遺物 (第308・309図、図版 百四)

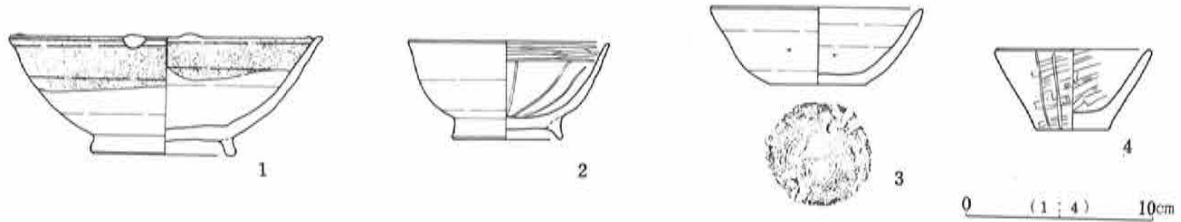
本遺構からは、土師器・灰釉陶器・鉄製品が出土し、さらに台地上面からの混入遺物である弥生土器が多量に出土した。このうち6点が図化し得た。

土師器の器種には坏・高台付坏、灰釉陶器には埴があり、鉄製品には鉄鏃がある。

308-1は虎溪山1号窯式の口縁部に四輪花を有する輪花埴である。輪花は外面から四方を指先で押える輪花手法が用いられる。口辺部は内弯して立ち上がり、端部は若干外反気味となる。調整はロクロヨコナデの後、内面にはコテがあてられ、その結果、外面はナデ調整が施されたのと同じ状態となる。底部は回転糸切りによって成形され、高台が貼付される。また、高台周辺部には、高台を接合する際にナデ調整が行われている。器形に若干歪が見られ、外面下部にわずかにぬた痕の付着が観察される。これはあまりロクロ回転が利用されていないために生じるものであり、このことは、高台断面形が三ヶ月形となる三ヶ月高台でない点からも推察される。灰釉は口縁部を中心に漬け掛けされている。



第307図 第1号特殊遺構実測図



第308図 第1号特殊遺構出土土器実測図

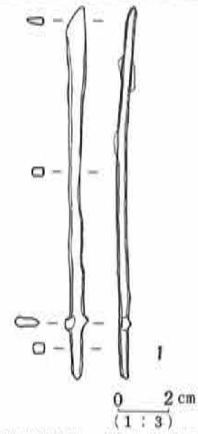
第75表 第1号特殊遺構出土土器観察表

挿 番	図 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
308-1		須高台付器 器環	16.6 6.2 7.8	底部に丸味を帯びる高台が貼付され、口辺部には指頭による4輪花を有す。	内) 平滑な調整(コテによるものか?)が施されている。 外) 全面に回転運動によるユビナデ、底面は回転糸切りが施されている。	完全実測 外面口辺部下位に「ぬた」の付着が認められる。 虎溪山か?色調は灰白色。
308-2		土高台付器 器環	10.6 5.2 5.8	高台が貼付されている。	内) 黒色処理され、口辺部に横位のヘラナデ、体部に放射状の暗文が施されている。 外) ロクロヨコナデ、底面は回転糸切りが施されている。	完全実測 No.4
308-3		土師器 器環	11.2 4.0 5.2	口辺部は内弯気味に開き、口径に比して器高が深い。	内・外面ともにロクロヨコナデ(右回り)が施され、底面は回転糸切りが施されている。	完全実測 No.2
308-4		弥生?	(8.4) 4.3 (4.0)	底部から口縁部は逆「ハ」の字状にはほぼ直線的に開く。	内) 粗い斜位のヘラミガキが施されている。 外) 粗い斜位のヘラミガキ→細かい斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測B No.5

308-2は土師器高台付環で、口辺部は内弯して立ち上がり、端部でやや外反する。外面はロクロヨコナデが行われ、底部は回転糸切りの後、高台が貼付される。また高台周辺部及び底部には高台を接合する際にナデ調整が行われている。内面は黒色処理され、放射状に暗文が施された後、口縁部横位のヘラミガキが施される。

308-3は口辺部で内弯気味に立ち上がる土師器環で、内外面ともロクロヨコナデ(右回転)が施され、内面底部中心は若干凸状となる。底部は回転糸切りにより成形され、未調整である。

308-4は弥生土器の鉢と思われる、混入遺物と考える。口辺部が直線的に立ち上がり、器高4.3cmを測る小型品である。調整は内外面とも粗い斜位のヘラミガキが施され、さらには外面には縦位の細かいヘラミガキが施される。



第309図 第1号特殊遺構出土金属器実測図

309-1は鉄身部の幅が長さに対して狭く、片刃であり、頸部の筥被と茎との境に棘状の突起を有している。また、刃部は鉄身の先端部のみにある端刃で、腸挟及び関は観察されない。このことから本資料は棘筥被関無端片刃箭式の長頸鉄であると考えられる。全長は14.7cmを測り、鉄身部長12.6cm、最大幅0.8cm、峰厚0.3cm、2.1cm、茎部長2.0cmを測り、頸部の断面形は長方形を呈する。棘筥被片刃箭式の長頸鉄は、古墳時代後期から奈良時代に多く見られることから、本遺構に隣接する第2号古墳と関わりを有するものとも考えられる。

この他小片のため図示し得なかったが、台地上面からの混入遺物である弥生時代中・後期の土器片が多量に出土している。

以上、308-4、309-1は混入遺物と考えられ、308-1~3が本遺構の所産期を決定する資料となり得る。308-1は、高台が三ヶ月形でなく、底部に回転糸切り痕が観察され、さらに高台周辺部にナデ調整が行われていることから虎溪山1号窯式の輪花椀であると考えられ、本遺構の所産期は10世紀末~11世紀前半(平安時代中葉)と考える。

(三石)

2) 第2号特殊遺構

遺構 (第312図、図版 百四～百六)

本遺構は台地の南東端な～の-13・14グリッド内に位置している。第7・8号周溝と重複関係を持ち、これを破壊している。

台地の端部、斜面の基部に構築されており、更に東側末調査区の斜面部分にまで展開されている遺構であることが想像されるが、今回の調査では全体の中では西端部の検出のみに留まった。

検出長15.2mをはかる弧状に掘り込まれた遺構であり、西端の中央部には土坑状の掘り込みがみられる。

確認面からの深さは31～46cmをはかり、底面はおおむね平坦面を形成している。この底面の中央やや南寄りから、南北ほぼ一列に並んで墓壙が検出された。この掘り込みが斜面部に相当の広がりをもつ可能性があることは先述したとおりであり、台地の端部から、斜面にかけて大規模な墓域が形成されている可能性も強い。

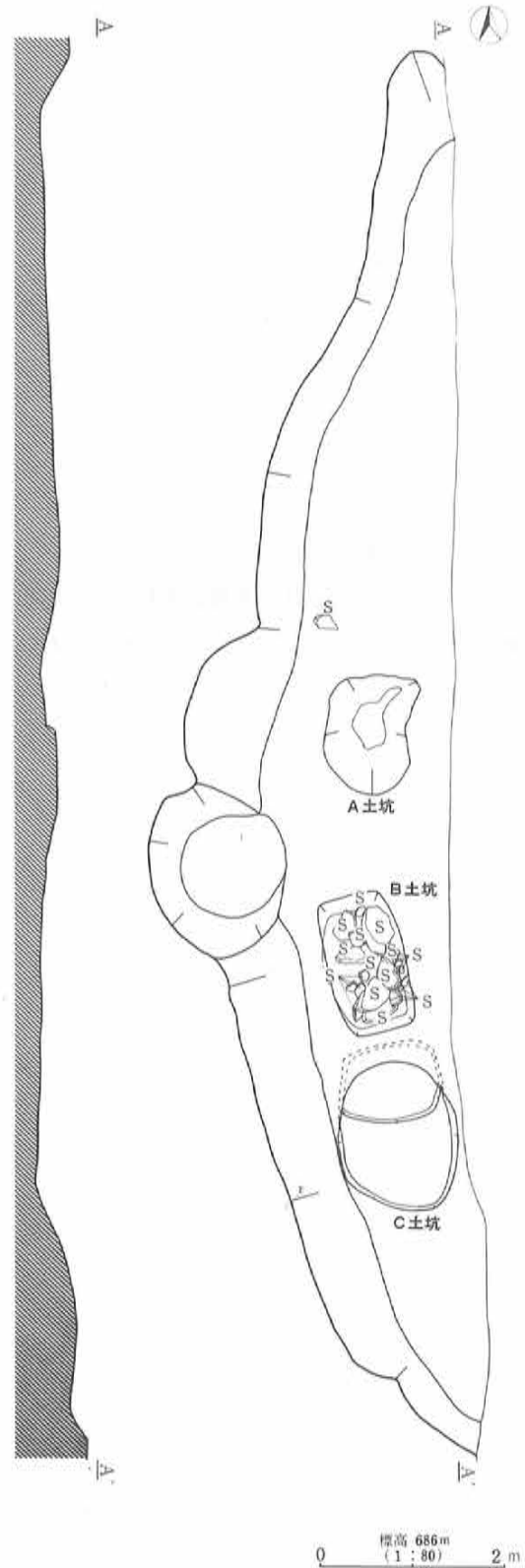
覆土はより耕作土に近い、淡茶褐色土一層のみからなる。

遺物の出土状況

第2号特殊遺構からは弥生土器片が少量出土しているが、これは明らかに混入遺物である。

この他には、本遺構の時代を示す遺物は全く検出されていない。

尚、A・B・Cの各土坑内から出土した遺物、及び人骨については、各土坑の記述の際に説明を加えることとし、ここでは取り扱わない。



第310図 第2号特殊遺構実測図

A土坑 (第311図)

掘り込み平坦部の中央やや南寄りから検出された。三基の土坑の中では最も北側に位置している。

南北の長軸長128cm、東西の短軸長86cmの不整楕円形を呈し、長軸方位はほぼ真北をさす。

深さは最深部で30cmをはかり、底面はおおむね、平坦面を形成している。

覆土は、色調のくすんだきめの細かい砂質の淡茶褐色土一層のみからなり、埋め戻し土であることは明らかである。

遺物・人骨の出土状態

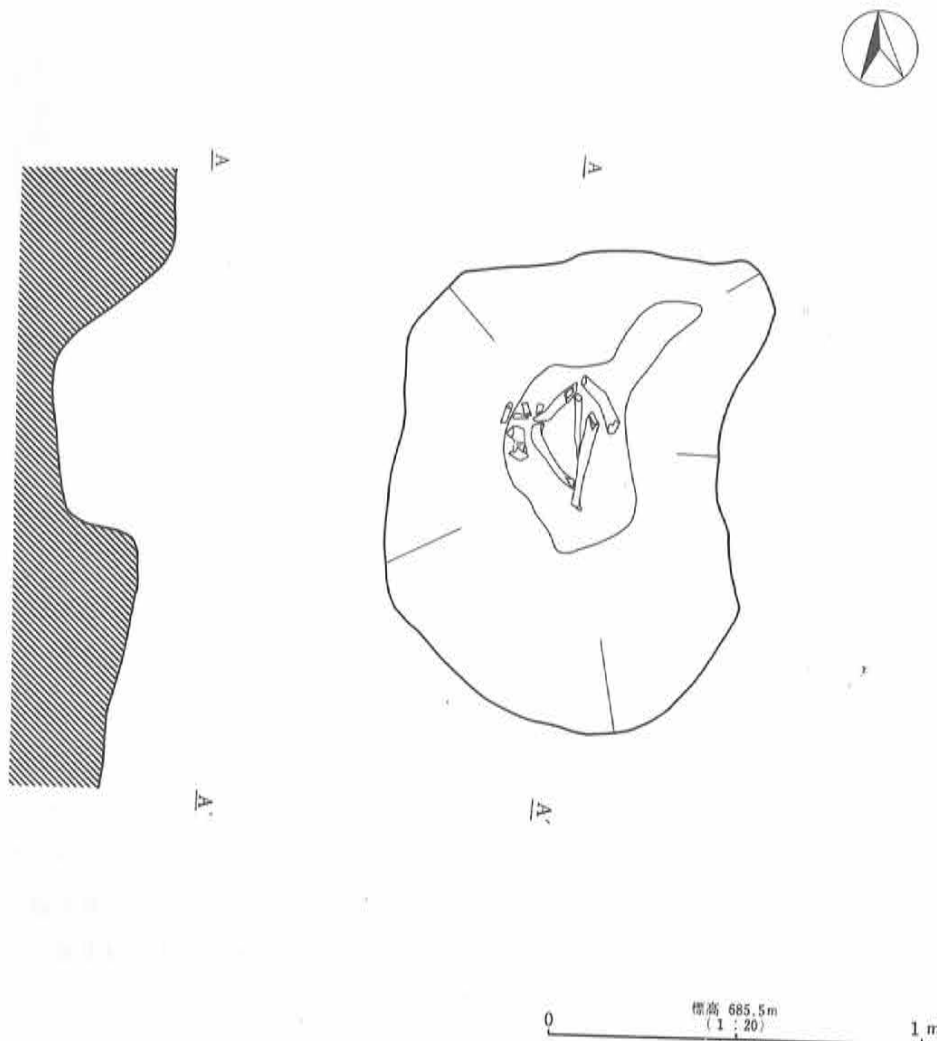
本土坑内からは人骨以外の遺物は出土していない。人骨の遺存状態は不良で、埋葬当時の形状を留めていない。土坑底面に老年期女性人骨の頭蓋骨片、体幹骨、右肩甲骨、両側上腕骨、左の橈骨と尺骨、左腸骨、両側の大腿骨と頭骨、右腓などが散乱しており、埋葬姿勢は不詳である。

(小山)

遺物 (第316図)

死者を弔う際の供膳用遺物は皆無であり、B土坑、C土坑内より主に寛永通宝が出土していることから、江戸時代の墓域と考えられ、本土坑の所産期もB土坑、C土坑と時間的少差はあるが、略同時期と考えられよう。

(羽毛田伸)



第311図 第2号特殊遺構A土坑内出土人骨実測図

B土坑 (第312図)

遺構

掘り込み平坦部の中央南側から検出された。三基の土坑の中では中央部に位置している。

土坑の形状は南北の長軸長が300cm、東西の短軸長が172cmの整然とした長方形を呈している。長軸方位はN-15°-Wをさす。

深さは最深部で125cmをはかり、側壁下部、底面は深水性の良好な砂層の湯川層（全体層序第Ⅲ層）にまで達して構築されている。

底面は北から南へ向って若干傾斜するが、おおむね平坦であり、側壁の立ち上がりは垂直に近く、急傾斜で、西側は若干オーバーハングしている。

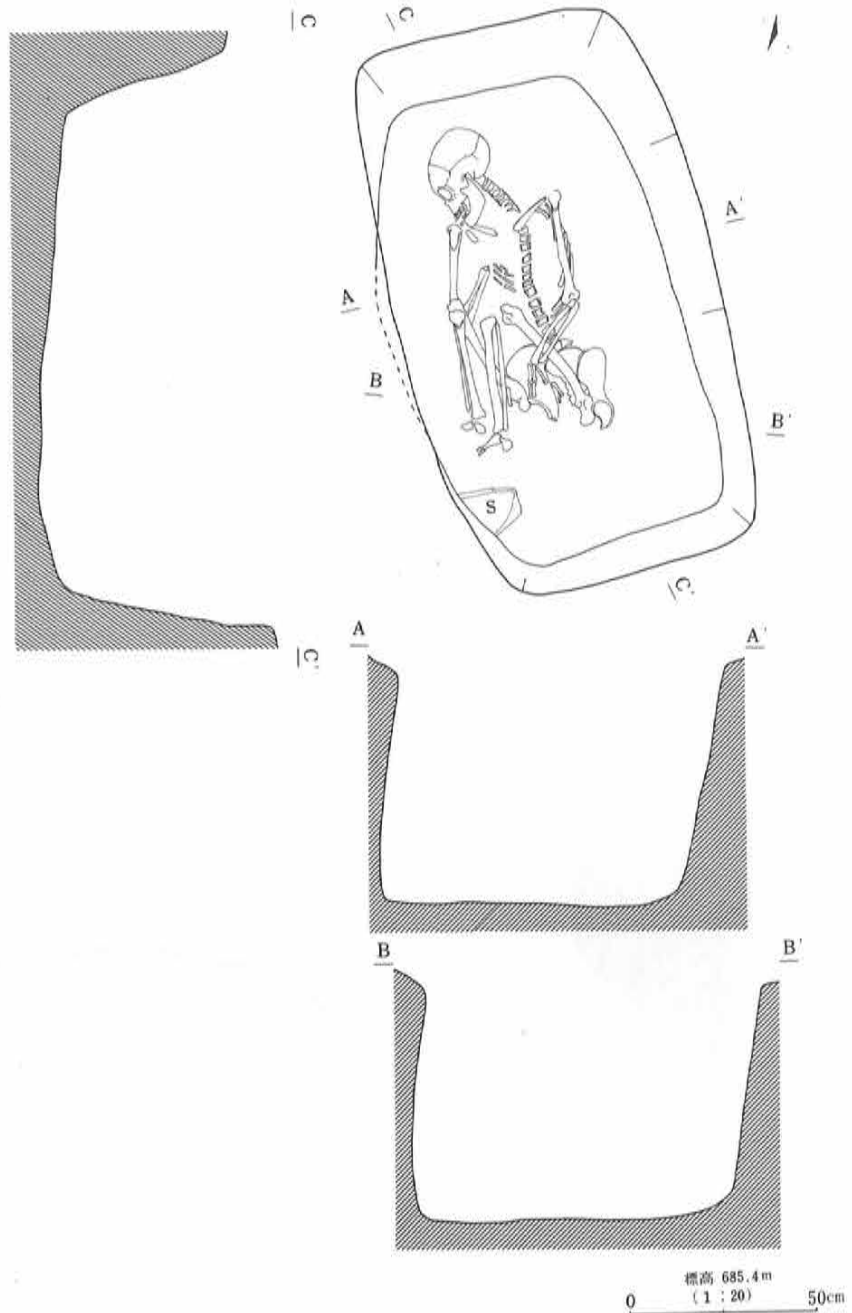
覆土は色調のくすんだ、きめの細かい淡茶褐色土一層のみからなる。

また、覆土の上には多孔質の森泉熔岩(Mad)、板状セツリの発達した平尾熔岩(Had)、塩基性の強い浅間系熔岩などの人頭大の河原石が積み上げられ、一種の墓標を形成していた。A・C土坑には、このような墓標はみられない。

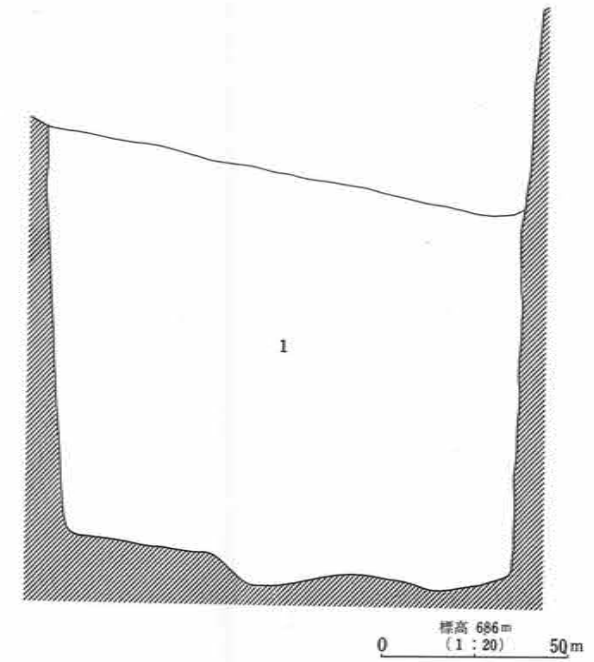
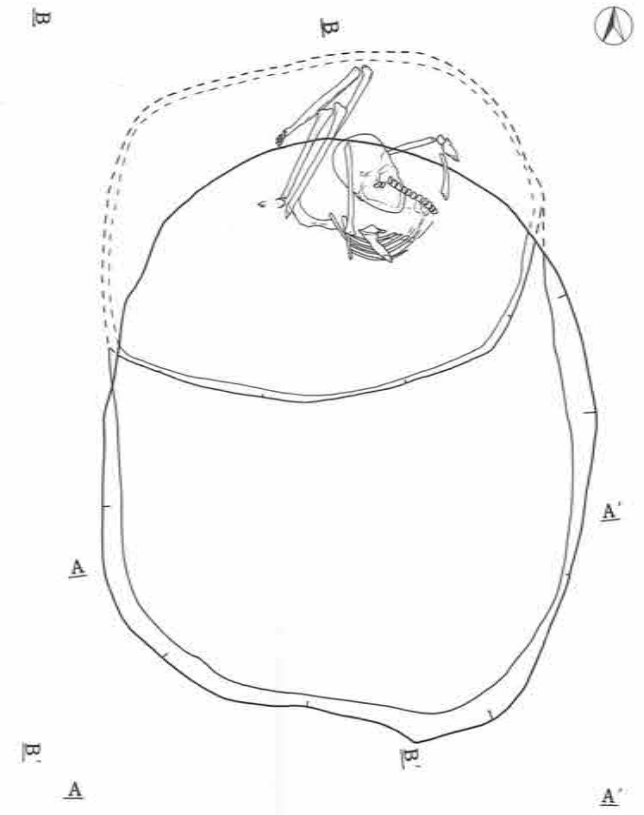
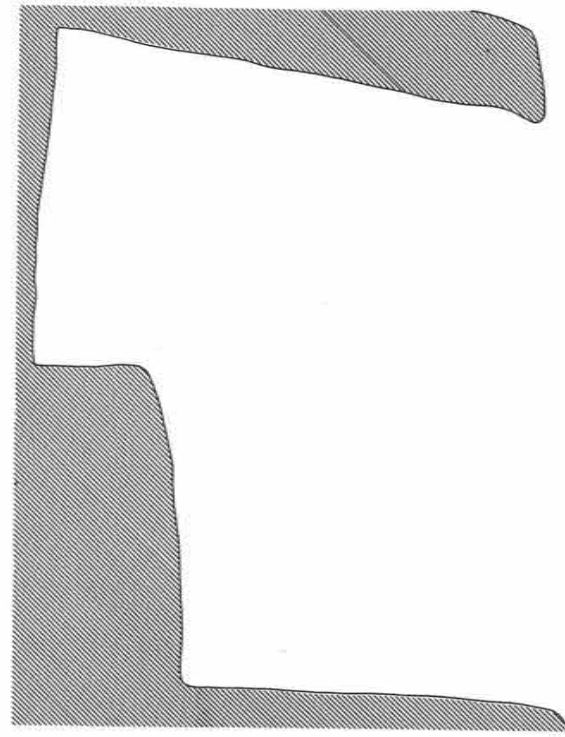
遺物・人骨の出土状態

本土坑からは人骨・貨幣・弥生土器・須恵器が出土している。このうち、弥生土器、須恵器は明らかに混入遺物であるが、参考までに図化した。また、貨幣の中でも北宋銭316-7~9は覆土のかなり上位から出土したものであるため、これも混入遺物と見るべきであろう。本遺構に確実に共伴するのは人骨と貨幣=寛永通宝316-1~6で、いずれも土坑底面から出土している。人骨は右側臥屈葬の状態に埋置されており、ほぼ完全に残っている。頭位はほぼ北向き、顔面は西側を向いている。人骨の下腹部付近には毛髪が抱かれており、寛永通宝は、紐でくくられており、この毛髪に包まれる様な状態で検出された。棺の残痕は認められず、人骨は直葬であった可能性が強い。

(小山)



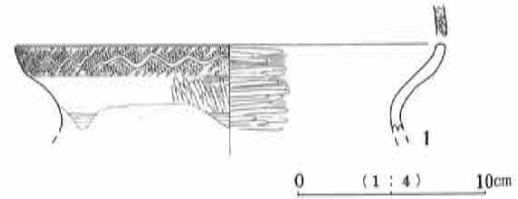
第312図 第2号特殊遺構B土坑内出土人骨実測図



第313图 第2号特殊遺構C土坑内出土人骨実測図

遺物 (第316図、図版 百七)

本土坑で出土した寛永通宝は何れも、背に「文」の字が鑄造されており、316-2・3は鑄造年代が寛文8年(1668年)と判明できることから、本土坑墓の所産期もそれ以降と考えられよう。尚、現代の埋葬風習にも残っている。「三途の川の渡り賃」として六道銭を死者と共に納棺する風習と、本土坑出土の6枚の寛永通宝が人骨と共に出土したことは、興味深いことである。



第314図 第2号特殊遺構内出土土器実測図

その他、混入遺物の316-7・8は北宋銭であり、7は祥符元宝、8は皇宋通宝である。

(羽毛田伸)

C土坑 (第313図)

本土坑は、掘り込み底面の平坦部の南側に位置し、三基の土坑の中でも最も南端に存在する。

土坑の平面形状は南北の長軸長302cm、東西の短軸長263cmの整った楕円形を呈し、長軸方位はほぼ真北をさす。深さは最深部で140.5cmをはかり、底面はおおむね平坦である。底面の北側には側壁をオーバーハングして更に30cm程深く掘り窪められた東西に長軸をもつ、183×243cmの楕円形の落ち込みがあり、ここが埋葬施設の主体となっている。この落ち込みの底面もおおむね、平坦である。側壁および底面は湯川層(全体層序第Ⅲ層)まで達して構築されているため、極めて浸水性に富む。

覆土は色調のくすんだ、きめの細かい淡茶褐色土一層のみからなる。この覆土も砂質であるため、極めて浸水性に富んでおり、人骨の良好な遺存状態はこのような砂粒主体の水はけの良い土質によって支えられていたと考えられる。

遺物・人骨の出土状態

本土坑からは、人骨・貨幣・弥生土器が出土している。このうち、弥生土器は明らかに混入遺物であり、量も少なく、いずれも細片で覆土の上層から検出されている。

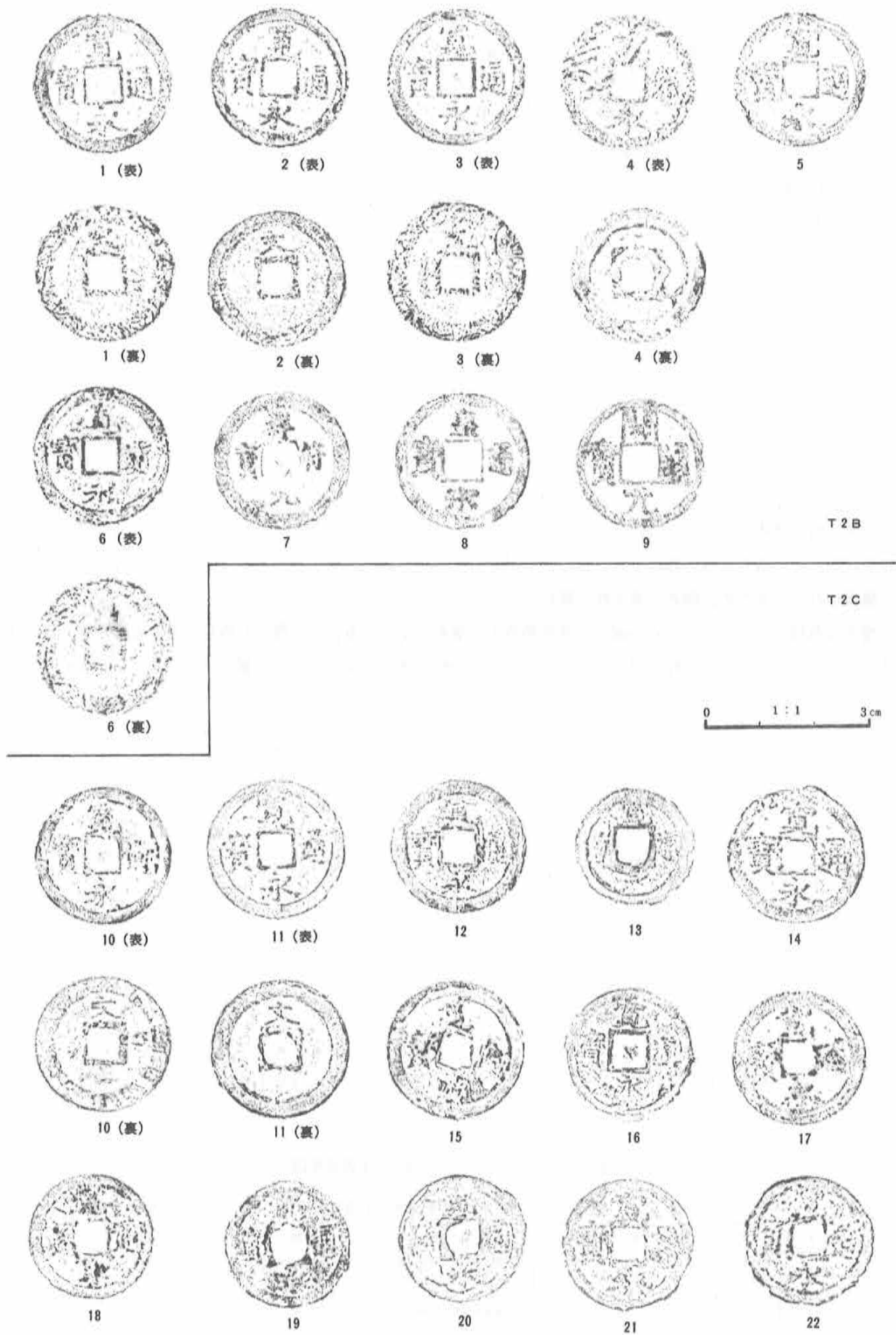
本土坑に確実に伴うのは人骨と貨幣である。人骨は土坑内の北側の落ち込みの最底面から、ほぼ一体分完全な遺存状態で検出された。足部と臀部を底面に密着させた坐位屈葬の状態に埋置されており、頭部は土圧のためか下を向いているが、北側と対座した状態で葬られている。右大腿骨の右脇の土坑底面からは寛永通宝、316・317-10~27、18枚が貼り付いた状態で検出されている。寛永通宝はB土坑出土のもののように紐でくくられた痕跡は認められなかったが、人骨に供膳されたものと考えられる。



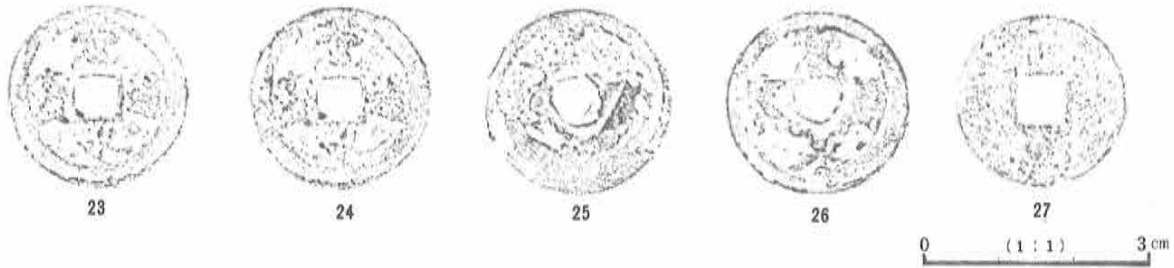
第315図 第2号特殊遺構内出土土器拓影図

第76表 第2号特殊遺構内出土土器観察表

押番 図号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
314-1	甕	(22.6) < 4.5> -	口縁部は広い頸部から外反し、上端で内弯気味に立ち上がり受け口状を呈する。	内) 横位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) ヨコナデ→丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部にLR縄文を地文としヘラ描連続山形文、頸部に簡描横走平行線文が施され、口唇部にもLR縄文が施文されている。	回転実測B



第316図 第2号特殊遺構B・C土坑内出土貨幣拓影図〈1〉



第317図 第2号特殊遺構C土坑内出土貨幣拓影図〈2〉

第77表 第2号特殊遺構B・C土坑内出土貨幣一覧表

押図番号	出土位置	名 称	素材	鑄造年代	発行国	備 考	押図番号	出土位置	名 称	素材	鑄造年代	発行国	備 考
316-1	T 2 B	寛永通宝 「背文」	銅		日本	背に「文」の字、No.1	316-15	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径25mm、No.6
316-2	T 2 B	寛永通宝 正字文	銅	寛文8年 (1668)	日本	背に「文」の字、No.2	316-16	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径23mm、No.7
316-3	T 2 B	寛永通宝 正字文	銅	寛文8年 (1668)	日本	背に「文」の字、No.3	316-17	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径24.5mm、No.8
316-4	T 2 B	寛永通宝 「背文」	銅		日本	背に「文」の字、No.4	316-18	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径23mm、No.9
316-5	T 2 B	寛永通宝	銅		日本	不明、No.5	316-19	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径23mm、No.10
316-6	T 2 B	寛永通宝 「背文」	銅		日本	背に「文」の字、No.6	316-20	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径23.5mm、No.11
316-7	T 2 B	祥符元宝	銅	大中祥符元宝 (1008)	北宋		316-21	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径24mm、No.12
316-8	T 2 B	皇宋通宝(真)	銅	宝元2年 (1039)	北宋		316-22	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径23mm、No.13
316-9	T 2 B	開元通宝	銅	武德4年 (621)	唐		317-23	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径24mm、No.14
316-10	T 2 C	寛永通宝 正字文	銅	寛文8年 (1668)	日本	背に「文」の字 径25mm、No.1	317-24	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径23.5mm、No.15
316-11	T 2 C	寛永通宝 正字文	銅	寛文8年 (1668)	日本	背に「文」の字 径25mm、No.2	317-25	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径25mm、No.16
316-12	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	不明径24.5mm、No.3	317-26	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径24.5mm、No.17
316-13	T 2 C	寛永通宝 四ツ宝銭	銅	宝永5年 (1708)	日本	(広水)径21mm、No.4	317-27	T 2 C	不 明	銅		不明	径20mm、No.18
316-14	T 2 C	寛永通宝	銅		日本	径25mm、No.5							

遺物 (第316・317図、図版 百七)

本土坑より17枚の寛永通宝と不明の穴銭1枚の計18枚が出土した。そのうち、鑄造年代の判明できる寛永通宝は316-10・11・13である。10・11は正字文の寛永通宝で、鑄造年代は寛文8年(1668年)であり、13は四ツ宝銭の宝永通宝で、鑄造年代は宝永5年(1708年)である。他は腐食が激しく、寛永通宝の細分は困難であったが、寛永通宝の径からみると径25mmのものが5枚、径24.5mmのものが3枚、径24mmのものが2枚、径23.5mmのものが2枚、径23mmのものが4枚、径21mmのものが1枚と6種類の径を有し、不明穴銭の径は20mmである。

以上のことから鑄造年代に基づき寛永5年(1708年)以降の土坑墓と考えられ、江戸時代中期としておきたい。尚、六道銭の風習は現代も続いているが、「三途の川の渡り賃」として、穴銭の枚数に規則性がなかったのが、より被葬者に対する、思慕の念が強く18枚という多量の銭を副葬したのか、今後の問題として、6枚の穴銭を被葬者に副葬することの定着化を知る上で貴重な資料といえよう。

(羽毛田伸)

3) 第3号特殊遺構

遺構 (第318図、図版 百五)

本遺構は台地のほぼ中央の東端、き・く-7・8グリッド内に位置している。

第7号溝状遺構と重複関係を持ち、これに破壊されている。

本来ならば形状からみて土坑とすべき遺構であるが、時代性および位置関係が第16号周溝との対応関係をもつことも考えられるため、ここでは敢えて特殊遺構として記載することにした。

平面形状は東西の長軸長296cm、南北の短軸長200cmの崩れた楕円形を呈し、長軸方位N-72°-Eをさしている。

深さは最深部で30cmをはかり、底面は凹凸に富んでおり、立ち上がりは緩やかである。

覆土は三層からなる。第3層は明らかに人為的な堆積であるが、第1・2層は人為堆積か、自然堆積であるか判断が難しい。

第1層は、パミスと小礫を多量に含むきめの細かい黒褐色土、第2層は黄褐色火山灰を多量に含む、第1層よりもきめが粗い黒褐色土、第3層は東側底面にのみブロック状に堆積する灰主体の層である。

遺物の出土状況

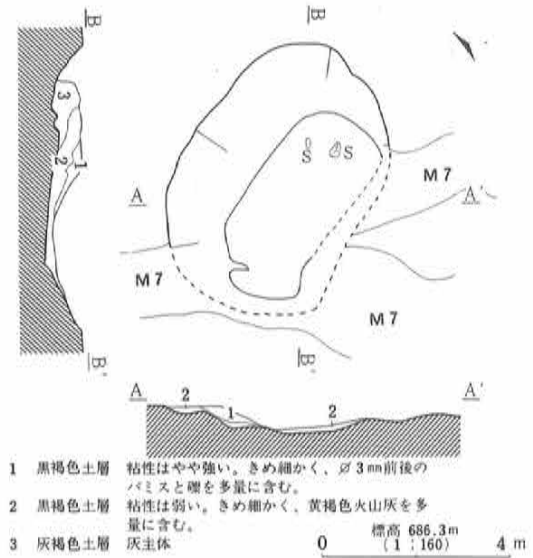
本遺構からは弥生土器・土師器・須恵器が出土している。このうち、最も量が多いのは弥生土器であるが、いずれも細片化したものであり、本遺構との共伴性は薄い。遺構との共伴性が強いのはむしろ量的には少ない土師器・須恵器で、いずれも覆土内からの出土である。

遺物 (第319図)

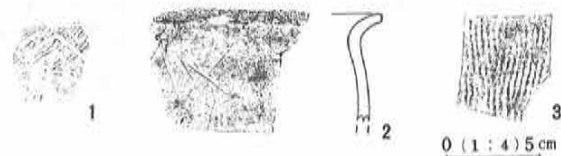
本遺構内出土で、図示し得たものは拓影図の3点であった。上項でも述べているように、共伴性の強い土器についてふれると、須恵器319-3は小片のため、全器形を知り得ないが、甕胴部破片と思われる。外面叩き整形による平行文様が観察でき、内面は叩き整形による同心状の文様をナデ調整により器面を平滑にしている。その他、図示し得なかったが、土師器高坏脚部、壺底部、小形甕口辺部の部位にあたる破片が出土している。高杯脚部破片は裾部外面に放射状の暗文が観察でき、壺底部破片は外面にヘラミガキ、内面刷毛目調整が観察できる。

混入遺物と考えられる319-1は弥生時代中期後半の壺頸部破片で、篋描横走直線文と、篋描連続山形文間に縄文の充填されている文様で、また、僅かの残存であるが、胴部篋描垂下文と垂下文中に櫛描縦走直線文が施文されていたと考えられる。319-3は弥生時代中期後半の甕口辺~頸部破片で、口唇部に縄文が施され、外面煤の付着が著しい。以上、共伴性の強い土器、高坏脚部は古墳時代中期高坏の様相を示し、本遺構の所産期もそれに近い可能性がある。

(羽毛田伸)



第318図 第3号特殊遺構実測図



第319図 第3号特殊遺構内出土土器拓影図

第5節 溝状遺構

1) 第1・2・7号溝状遺構

第1・2号溝状遺構（第322図）

本遺構は台地の中央部のやや南側をほぼ東西横走している溝状遺構である。検出グリッドはき～そー11～24内である。Y89号住居址との重複部分の連続性にやや疑問があるため、Y89号住居址から西側を第1号溝状遺構、東側を第2号溝状遺構としたが、おそらく、台地を完全に横断する溝であると考えられる。Y84・86・89・91・119号住居址、第11号周湟、第4号溝状遺構と重複関係を持ち、これらのすべてを破壊している。本遺跡中でも最も新しい遺構の一つと考えられる。

検出長はおよそ59.6mをはかり、西側部分では若干北側へ、東側部分では若干南側へ蛇行している。

確認面からの深さは60～75cmをはかり、西から東へ向って徐々にレベルを低下させる傾向があり、水の流れのあったことを想定すれば、西から東へ向って流れたことになる。

覆土は三層からなる。第1・3層が黒褐色土、第2層が黄褐色土である。

遺物の出土状況

本遺構からは、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪片、陶器などが出土している。このうち、本遺構の時代性を最もあらわしているのは、1点のみ検出された陶器片で、その他多量に検出された他の時代の遺物は混入遺物と考えられよう。

遺物（第326図）

本遺構出土土器には弥生土器・土師器・須恵器・埴輪片・陶器がある。このうち、須恵器片、埴輪片を参考までに図化した。

須恵器片は外面に平行叩き、内面に円弧押えが施される327-1、外面に平行叩きが施される327-3、外面に波状文が施される327-2などの甕片がみられる。

埴輪片はタテハケの施される327-4が一点のみみられる。

以下、本溝状遺構の年代は陶器にのみ求められる。陶器片は灯明皿の破片であり、所産期は19世紀以降に求められる。従って、本以降の廃絶年代は19世紀以降、近代と考えておきたい。

第7号溝状遺構（第322図、図版 百八）

本遺構は台地の中央部の東側に位置している。検出グリッドはき～こー8～11内である。Y105号住居址、第3号特殊遺構と重複し、これらを破壊している。第15号周湟との重複関係は明確でない。

台地中央部を基点として台地の東端部へほぼ東西に横走する溝で、溝の中央部で2本に枝分れしている。

検出長は19.2m、確認面からの深さは30cm内外をはかる。底面のレベルは西から東（台地の端部）へ向って徐々に低下する傾向にある。断面形は鍋底状を呈し、丸味をおびる。

覆土は二層からなり、第1層が黒褐色土、第2層が茶褐色土である。

遺物の出土状況

本遺構からは弥生土器・土師器が出土しているが共伴性は薄い。弥生土器は参考までに図化した。

遺物（第326図）

図化した弥生土器はいずれも壺で、胴部上位以上を欠損する。326-3には赤色塗彩が施されるが、326-4は無彩である。いずれも中期後半の土器である。尚、本遺構の所産期については不明である（小山）

2) 第3号溝状遺構

遺構 (第320図、図版 百八)

本遺構は台地の南部、つて-17~19グリッド内に位置している。Y71号住居址、第149号土坑と重複関係を持ち、これらを破壊している。

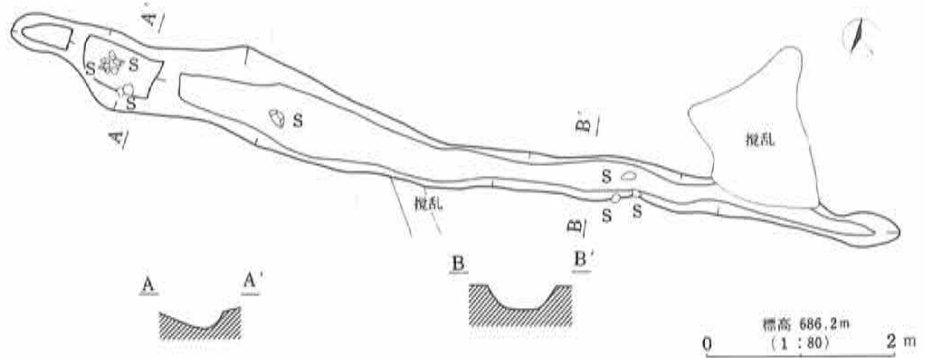
台地の真ん中をほぼ東西に横走る溝であるが、全長は9.66mと短い。

溝幅は24cm~94cmをはかり、西から東へ向って徐々に細くなる。

深さは20~30cmをはかり、底面のレベルは西から東へ向って徐々に低くなる傾向にある。

断面形はゆるいU字形を呈する。

覆土は淡茶褐色土一層のみからなり、より耕作土に近い。



第320図 第3号溝状遺構実測図

遺物の出土状況

本遺構からは弥生土器・土師器が少量検出されているが、遺構との相伴性は薄い。いずれも細片化して磨耗したものである。

遺物

本遺構の所産期を推定し得る遺物は検出されていない。従って時期は不明である。

(小山)

3) 第4号溝状遺構

遺構 (第321図、図版 百八)

本遺構は、台地南部のほぼ中央、さ・し-18・19グリッド内に位置している。

第1号溝状遺構と重複関係を持ち、これに破壊されている。

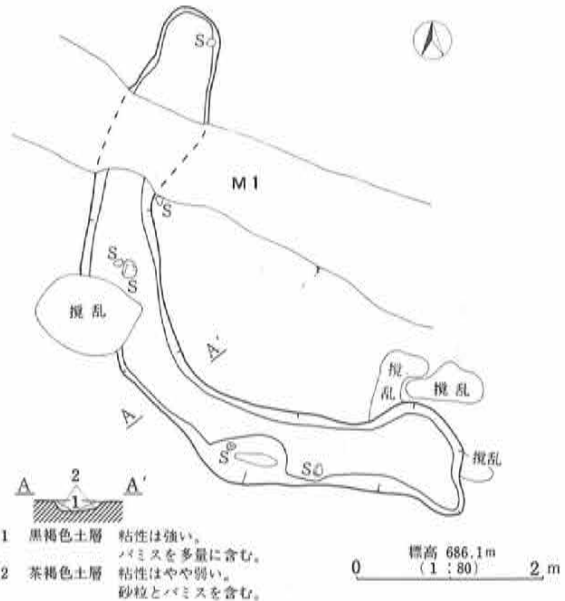
全体の形状は「L」字形を呈する区画性をもった溝であり、北端からコーナー部までの長さが460cm、東端からコーナー部までの長さが370cmを計測する。

溝幅は54~98cmをはかり、コーナー部分が最も細く、東端部分が最も太い。

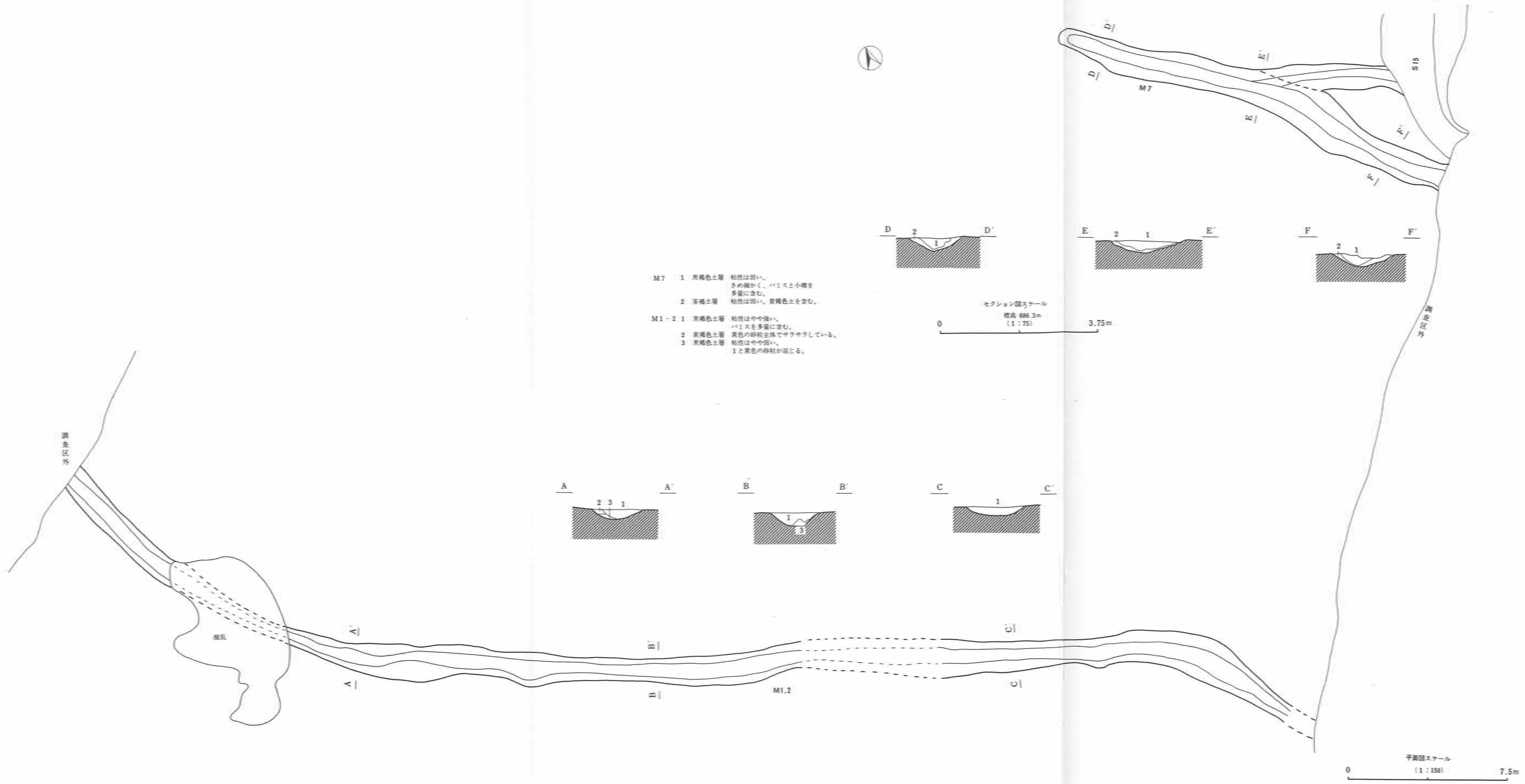
深さは9~23cmをはかり、断面形は底面がおおむね平坦で、立ち上がりが急傾斜の逆台形状を呈している。

覆土は二層からなる。

第1層はパミスを多量に含む粘性の強い黒褐色土、第2層は砂粒とパミスを含む粘性がやや弱い茶褐色



第321図 第4号溝状遺構実測図



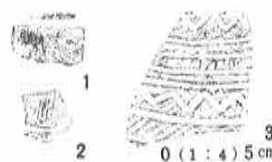
- M7
- 1 黒褐色土層 粘性は弱い。きめ細かく、パミスと小礫を多量に含む。
 - 2 茶褐色土層 粘性は弱い。黄褐色土を含む。
- M1.2
- 1 黒褐色土層 粘性はやや強い。パミスを多量に含む。
 - 2 黄褐色土層 黄色の砂粒主体でサラサラしている。
 - 3 黒褐色土層 粘性はやや弱い。1と黄色の砂粒が混じる。

第322図 第1・2・7号溝状遺構実測図

土である。

遺物の出土状況

本遺構からの遺物の出土量は極めて少ないが、いずれも弥生土器である。完存品は一点もなく、小破片が覆土内に散漫に分布している。本遺構との共伴性はある程度指示できるように思われる。



第323図 第4号溝状遺構内出土土器拓影図

遺物 (第323図)

本遺構の出土遺物には弥生土器があり、器種には壺がある。3点を図化した。

壺323-1~3は、323-1が頸部、323-2・3が胴部の破片である。323-1は頸部に篋描横走平行線文のみが施されると考えられる破片で、外面調整は胴部にヘラミガキ以前の刷毛目調整痕が割明瞭に残っている。323-2は胴部中位の破片で、篋描の区割内に櫛描文を充填した周囲に櫛描の刺突文をめぐらせている。323-3は胴部上位の破片で、LR縄文地上に篋描連続山形文・横走平行線文を交互施している。

以上の遺物が共伴する場合、本遺構は弥生時代中期の溝と考えることもできる。

(小山)

4) 第5号溝状遺構

遺構 (第324図、図版 百八)

本遺構は台地南部の中央やや東寄り、さ・し-13~15グリッド内に位置している。

Y90・98号住居址と重複関係を有し、これらを破壊している。第158号土坑とも重複関係を有するが、新旧関係は明確でない。

おおむね、東西方向に直線的に伸びる溝で、全長は774cmをはかる。

溝幅は80~122cmをはかり、中央部が若干ふくらむ。

深さは25~36cmをはかり、東側で階段状に一段深くなる。

覆土は二層からなる。第1層はバミスとこぶし大の礫を多量に含み、黄褐色土がまじる黒褐色土、第2層は、バミスを含み、黄褐色土がまじった茶褐色土である。

遺物の出土状況

本遺構からは弥生土器、時期不明土器が少量出土している。分布の傾向は極めて散漫であり、遺構との共伴性は薄い。一応、参考までに2点を図化した。

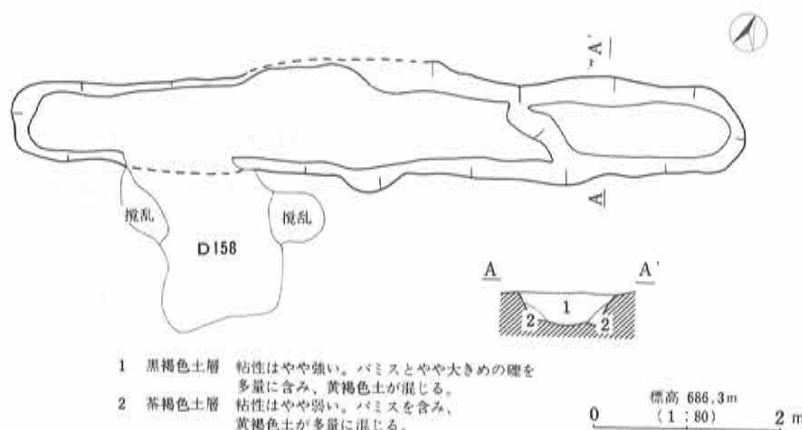
遺物 (第326図)

本遺構の出土遺物には弥生土器・時期不明土器がある。

弥生土器の器種には甕

326-1があり、口唇部に櫛描の刻目、頸~胴部にかけて櫛描斜走直線文が施された後、その上に櫛描波状文が施されている。時期不明土器326-2は器種も不明である。把手か、脚になるものと考えられる。

(小山)



- 1 黒褐色土層 粘性はやや強い。バミスとやや大きめの礫を多量に含み、黄褐色土が混じる。
- 2 茶褐色土層 粘性はやや弱い。バミスを含み、黄褐色土が多量に混じる。

第324図 第5号溝状遺構実測図

5) 第6号溝状遺構

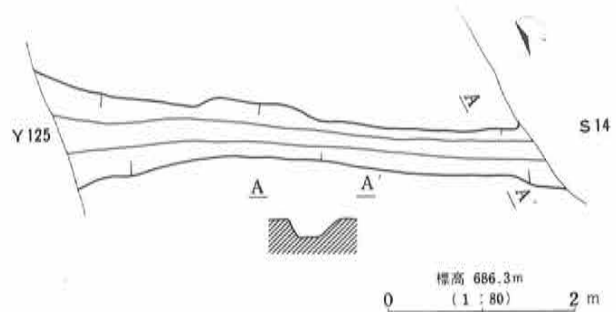
遺構 (第325図)

本遺構は台地のほぼ中央部、え・お-13・14グリッド内に位置している。Y106号住居址を破壊し、Y125号住居址、第14号周溝に破壊されている。従って、本遺構は弥生時代中期後半以降に造られ、後期前半には破壊されていたことになる。

残存長は506cm、幅46~100cm、深さ20cm内外を計測し、断面形は逆台形状を呈する。

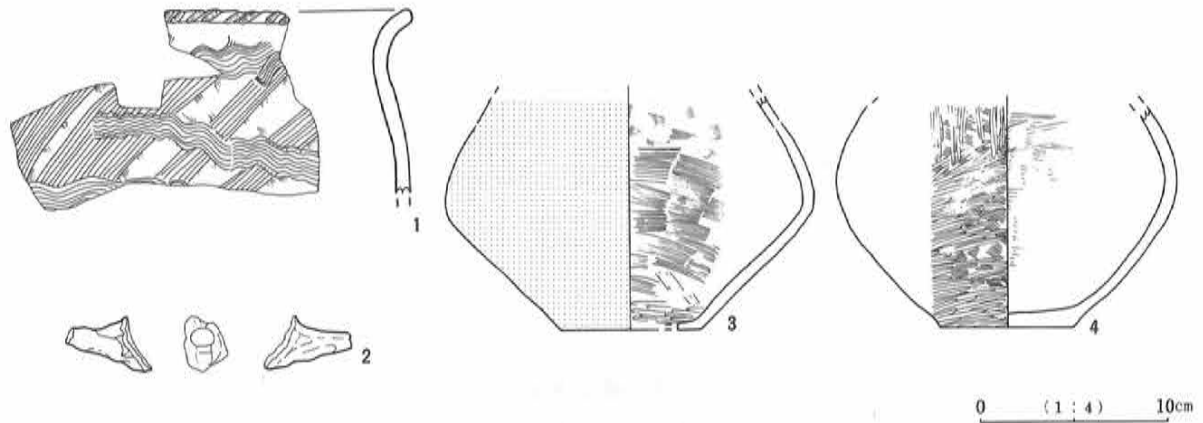
覆土は茶褐色土一層のみからなり、砂質である。

本遺構からは時代性を示すような遺物は全く検出されていないが、先述した重複関係からみれば、弥生時代の溝であったことは間違いない。



(小山)

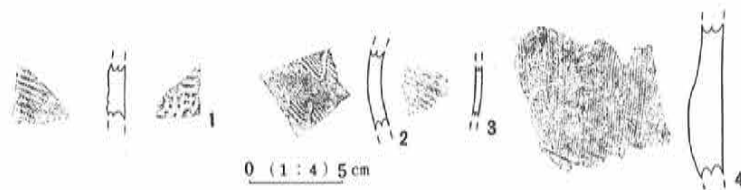
第325図 第6号溝状遺構実測図



第326図 溝状遺構内出土土器実測図

第78表 溝状遺構内出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
326-1	甕	— (9.7)	口縁部は短く外反し、胴部はあまり張らない。	内・外面ともに口縁部にヨコナデ、頸部以下に斜位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部に櫛による刻目、頸部以下に8本一組の櫛描斜走直線文が施された後、8本一組の櫛描波状文が施されている。	破片実測B M5、W区
326-2	?	—			M5、W区
326-3	壺	— (12.8) (7.6)	底部は横から埋める様に成形したと思われる。胴部は中央で大きく張り出し、ソロバン玉状を呈する。	内) 底部に横位のヘラナデ、以上は横位のハケメ調整が施されている。 外) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B M7、I区
326-4	壺	— (11.7) 14.0	胴部は中央で球状に張り出す。	内) 横位のハケメ調整が施されている。 外) 斜位のハケメ調整→胴部中位以下に斜位のヘラミガキ→胴部上位に縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B M7、I区



第327図 第1号溝状遺構内出土土器拓影図

第6節 土坑

1 弥生時代の土坑

1) 第110号土坑

遺構 (第328図、図版 百十)

本土坑は台地南端のほぼ中央、に-19グリッド内から検出された。重複関係はもたない。

プランは南北の長軸長123cm、東西の短軸長105cmの楕円形を呈し、長軸方向はほぼ真北をさす。

深さは最深部で26.5cmをはかり、断面形は底面がおおむね平坦で逆台形状を呈する。立ち上がりは南側が急で他はゆるい傾斜である。

覆土は三層からなり、自然堆積とは考え難い。最上層の第1層は水平に薄く堆積する。砂粒を多量に、パミスを少量含むきめの細かい暗褐色土である。第2層はパミスを含むきめの細かい黒色土で、覆土の中層に小さなまとまりをもって堆積する。第3層は、きめがやや粗く、砂粒を多量に含む暗黄褐色土で最下層に割合厚く堆積する。

遺物の出土状況

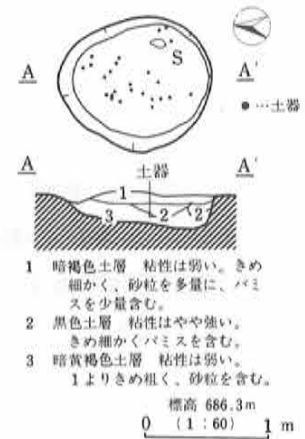
本土坑からは弥生土器片のみが110点検出されている。その出土状態は第3層上から第1層中にかけて最も集中しており、あたかも破片を敷きつめたかのようなようである。

遺物 (第396図)

弥生土器の器種には壺がある。壺396-1はLR縄文を地文として篋描横走平行線文・連続山形文が施される胴部片、396-2は櫛描垂下文の周囲が篋描沈線で区画される胴部片、396-3は篋描連弧文の頂部に円形浮文が貼付される胴部片である。

以上の出土遺物及び出土状況から本土坑の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。

(小山)



第328図 第110号土坑実測図

2) 第120号土坑

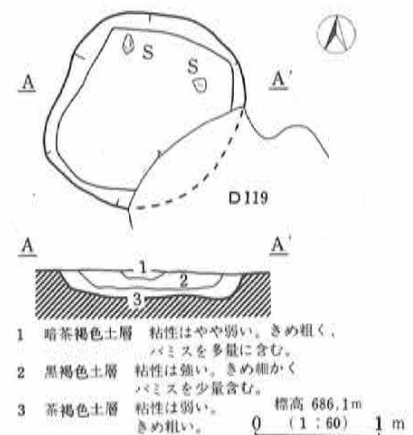
遺構 (第329図、図版 百十一)

本遺構は台地の南端の中央西寄り、と-23グリッド内に位置している。第119号土坑と重複関係を持ち、南東部を破壊されている。170×152 (推定) cmの楕円形を呈し、長軸方位N-63°-Eをさす。深さは最深部で28cmをはかり、底面は平面で逆台形状を呈する。覆土は三層からなる。第1層は暗茶褐色土、第2層は黒褐色土、第3層は茶褐色土である。

遺物の出土状況

本土坑からは弥生土器片が多量に出土している。いずれも3~10cmの細片で、土坑内第2層内を中心として敷きつめられるように密集して分布していた。

遺物 (第396図)



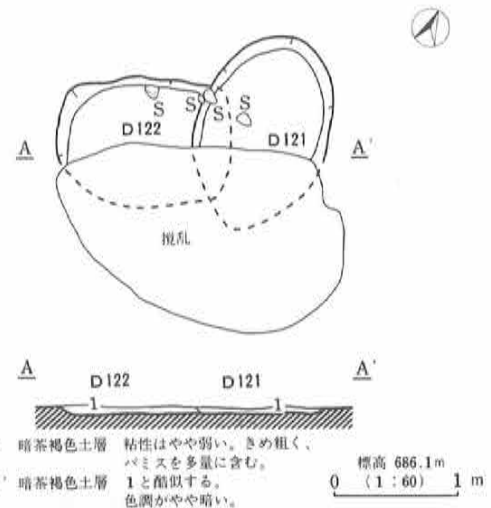
第329図 第120号土坑実測図

図化した396-7~11はその一部である。器種には壺・甕がある。壺には頸部の擬縄文帯を篋描横走平行線文で区画した396-7、胴部に篋描横走平行線文、櫛描山形文を施した396-9、胴部にLR縄文を地文として篋描横走平行線文を数条施した396-8などがある。甕には縄文地文の「コ」の字重ね文を持つ396-10、外稜をもたない受口口縁をもち、口縁部櫛描波状文、口唇部に刻目をもつ396-11がある。この他、赤色塗彩された鉢の小片もみられる。以上の出土土器から本土坑の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。(小山)

3) 第121・122号土坑 (第330図、図版 百十一)

本土坑は台地の南端西側、と-24グリッド内に位置している。第153号土坑を破壊し、南側を近代の攪乱で破壊されている。また、第121・122号土坑相互でも重複しており、第121号土坑の方が新しい。平面形態は第121号土坑が160×98cmの楕円形を呈し、深さは20cm。第122号土坑は140×104cmの楕円形を呈し、深さは12cmをはかる。断面形はいずれも底面が平坦な逆台形状を呈し、覆土は暗茶褐色をベースとしている。

遺物の出土状況 第121号土坑から19点、第122号土坑から9点弥生土器片が出土している。分布は散漫である。遺物(第396図)弥生土器の器種には甕があり、第121号土坑では口唇部に篋描の刻目をもつ貼付口縁の396-12、第122号土坑では口縁部に櫛描簾状文、波状文、口唇部に刻目をもつ396-13などがある。以上の出土土器から本土坑の所産期は弥生時代中期後半と考えたい。(小山)



第330図 第121・122号土坑実測図

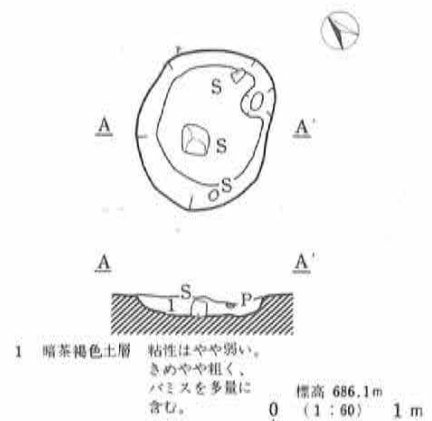
4) 第123号土坑

遺構 (第331図、図版 百十一)

本土坑は台地の南端西寄り、な-24グリッド内に位置している。Y118号住居址を破壊している。130×104cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-36°-Wをさす。深さは最深部で25cmをはかり、断面形は底面が平坦で逆台形状を呈する。覆土は暗茶褐色土一層のみからなる。

遺物の出土状況 本土坑内には弥生土器片が覆土内、底面に極めて多量(189点)に密集した状態で分布している。遺物(第395・396図)弥生土器の器種には壺・甕・鉢がある。壺は頸部に篋描横走平行線文が施される395-15、胴部にRL縄文を地文として篋描横走平行線文・連続山形文が施される396-14、LR縄文を地文として篋描の矩形区画をもつ396-16などがみられる。甕には単純口縁の17-20と受口口縁の21がある。口唇部は縄文施文を基本とするが18には刻目が施される。頸部文様帯は17・18のみが櫛描横走平行線文をもち、他はもたない。胴部文様は櫛描斜走直線文が縦位羽状に施される24・25、波状文が施される20-22、櫛描簾状文、垂下文が施される26、櫛描波状文・幅広い垂下文が施行される23などがみられる。395-1は底部片である。この他、赤色塗彩された鉢の細片もみられる。

以上の出土遺物から本土坑の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。(小山)



第331図 第123号土坑実測図

5) 第124号土坑

遺構 (第332図、図版 百十一)

本土坑は台地南端の中央西寄り、な-23グリッド内に位置している。Y119号住居址の床下から検出された土坑であり、弥生時代中期後半以前の土坑として位置づけられる。

プランは207×158cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-80°-Wをさす。

深さは最深部で64.5cmをはかり、断面形は底面が丸味をおびており、半円形を呈する。

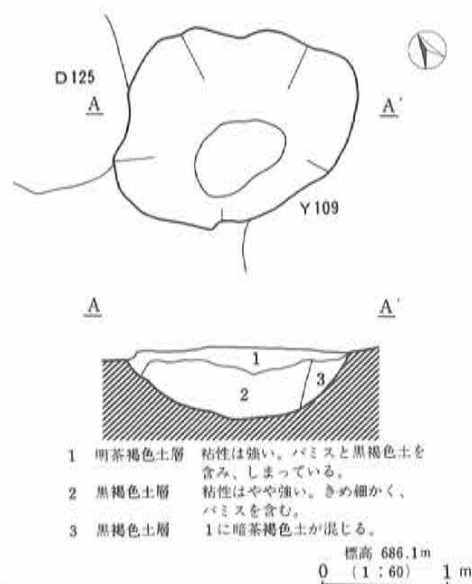
覆土は三層からなる。第1層はパミスと黒褐色土を含む明茶褐色土で、Y109号住居址の貼床層でもある。第2層はパミスを含むきめの細かい黒褐色土、第3層は第2層に暗褐色土がまじった黒褐色土である。

遺物の出土状況

本土坑からは弥生時代中期後半の土器片が5点検出されたのみで、極めて散漫な分布状況である。

遺物 (第396図)

弥生土器の器種には甕があり、胴部に櫛描斜走直線文が施される27がみられる。



第332図 第124号土坑実測図

(小山)

6) 第129・133・134号土坑

遺構 (第333図)

本土坑は台地南部の中央東寄り、た・ち-18グリッド内に位置している。Y67号住居址と重複関係をもち、上面を破壊されている。また、第129・133・134号土坑も相互に重複関係を有し、中央の第129号土坑が最も新しく、第133・134号土坑はほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

第129号土坑は245×145cmの楕円形を呈し、長軸方位N-23°-Eをさす。深さは最深部で60.5cmをはかり断面形は半楕円形を呈する。覆土は三層からなり、第1層が茶褐色土、第2層が暗茶褐色土、第3層が黒褐色土である。第133号土坑は205×165cmの不整楕円形を呈し、長軸方位はN-13.5°-Wをさす。深さは最深部で、27.5cmをはかり、断面形は底面が平坦で逆台形状を呈する。覆土は二層からなり、第1層が茶褐色土、第2層が黒褐色土である。第134号土坑は175×95cmの不整楕円形を呈し、長軸方位はN-63°-Wをさす。深さは最深部で22cmをはかり、断面形は底面が平坦で逆台形状を呈する。覆土は一層からなり、第1層は茶褐色土である。

遺物の出土状況

第129・133・134号土坑からは極めて多量の弥生土器の破片が出土している。第129号土坑は覆土第1層内に最も集中し、密集する。第133・134号土坑は土坑内全体の覆土内・底面に密集した状態で分布している。

遺物 (第395・396図、図版 百十六)

第129号土坑出土の弥生土器の器種には、壺・甕・台付甕がある。壺には胴部に篋描連弧文が施される396-28・29 (同一個体)、LR縄文を地文として篋描横走平行線文・山形文が施される396-30などがある。甕には単純口縁の396-32と受口口縁の396-33があり、頸部はいずれも櫛描横走平行線文が施される。396-32は口唇部に縄文、胴部に櫛描斜走直線文をもつ。また、頸部に櫛描横走平行線文、胴部に波状文をもつ396-31もある。台付甕

には395-3、396-34があり、34は「コ」の字重ね文をもつ。

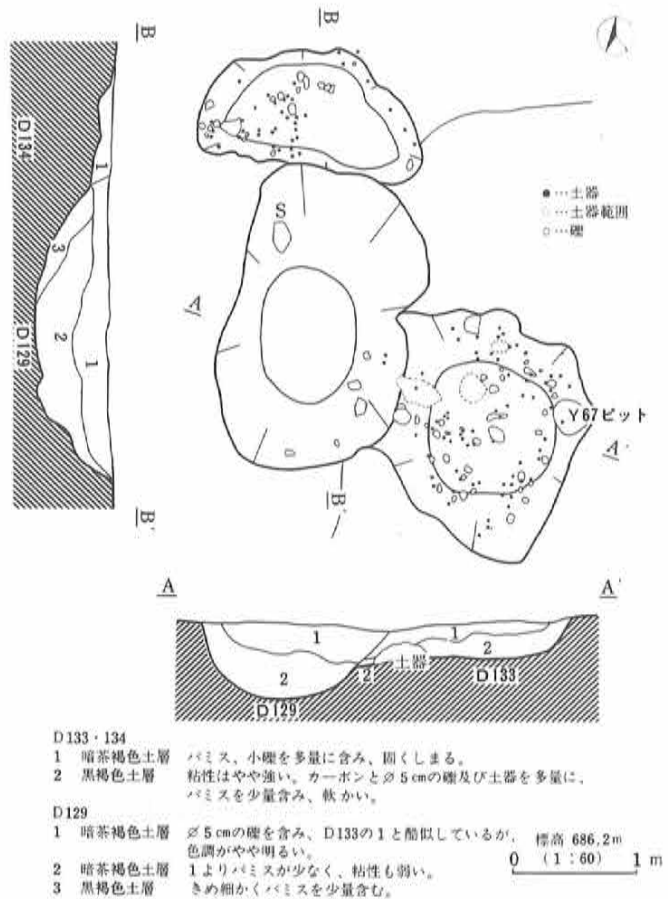
第133号土坑出土の弥生土器の器種には壺・甕・台付甕・深鉢がある。

壺395-6・7は土坑内で細片化して分布していたものである。395-6は頸部以上、395-7は口縁部、胴部下部を欠損するが、いずれも細頸で、胴部中位下方に最大径を有する形態と考えられる。文様はもたず、外面調整は刷毛目調整ののちヘラミガキが施されている。この他、外稜のとれた受口口縁を有する396-43、胴部にLR縄文を地文として篋描横走平行線文・連弧文が施される396-44などがある。甕には単純口縁の396-45・49と、外稜のとれた受口口縁の396-46がある。396-45はLR縄文を地文として篋描横走平行線文を頸～胴部にかけて数段施文し、396-49は篋描斜走直線文を施している。396-46は口縁部に篋描波状文、頸部に篋描横走平行線文が施されている。この他、胴部に篋描斜走直線文が横位羽状に施される396-47・48があり、

47は頸部に篋描横走平行線文が施されている。台付甕395-8は台部片で外面に刷毛目調整痕が明瞭に残る。高坏395-9は小形の脚部片で赤彩はみられない。深鉢396-42は口縁部にLR縄文を地文として篋描波状文が施されている。

第134号土坑出土の弥生土器の器種には壺・甕がある。壺には外稜を有する受口口縁の395-10があり、口縁部・頸部にLR縄文の文様帯を有している。また、胴部上位に篋描文で区画された篋描垂下文、中～下位にLR縄文を地文として篋描横走平行線文・連弧文が施される396-50・54（同一個体）、頂部に円形浮文をもち、篋描連弧文が施される396-51などがみられる。甕には貼付状の口縁部を有する396-52がある。口唇部に縄文、口縁部及び、頸部に篋描波状文が施されている。この他、胴部に篋描斜走直線文が縦位羽状に施される396-53、「コ」の字重ね文が施される396-55などがある。396-55は台付甕になることも考えられる。395-11～13はいずれも底部破片である。

以上、第129・133・134号土坑の出土土器はいずれも中期後半に所産期が求められる。土坑内において他の時期の土器の混入は認められないこと、後期前半のY67号住居址に破壊されていることなどからみて、三基の土坑の所産期は、弥生時代中期後半と考えられる。



第333図 第129・133・134号土坑実測図

(小山)

7) 第131号土坑

遺構 (第334図)

本土坑は台地南部の中央東寄り、ち-17・18グリッド内に位置している。上面をY67号住居址に破壊されている。

プランは140×138cmの円形を呈し、長軸方位はN-71°-Eをさす。深さは最深部で18cmをはかり、断面形は底面がおおむね平坦で逆台形状を呈する。

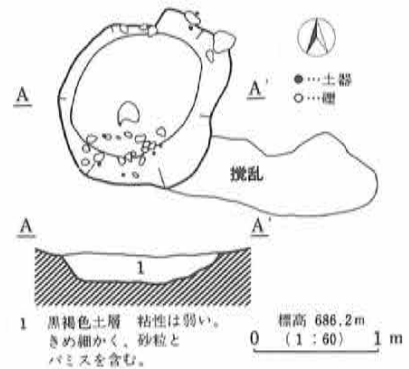
覆土は砂粒とパミスを含むきめの細かい黒褐色土1層のみからなる。

遺物の出土状況

本土坑内からは弥生時代中期後半の土器が多量に出土している。分布は土坑内の全面にわたり、底面、覆土内に密着した状況を呈している。

遺物 (第395・396図)

本土坑から出土した弥生土器の器種には壺・甕・鉢がある。壺には楠描垂下文を篋描文で区画し、周囲に篋描刺突文をめぐらした396-35がある。甕には受口状口縁の396-36・37、単純口縁の396-38がある。36は胴部に楠描斜走直線文、37は口縁部に縄文、楠描波状文、頸部に楠描横走平行線文、胴部に斜走直線文、38は口唇部に楠描の刻目、頸~胴部に楠描波状文、斜走直線文が施されている。395-4・5は底部片である。396-39は受口状を呈する甕形態であるが、内面に赤色塗彩、頸部に穿孔が施される異質な土器である。以上の出土土器から本土坑は弥生中期後半と考えられる。



第334図 第131号土坑実測図

8) 第132・135号土坑

遺構 (第335図)

第132・135号土坑は台地南部の中央東寄り、ち・つ-16・17・18グリッド内に位置する。Y68号住居址を破壊し、Y67号住居址に破壊されており、中期後半以降から後期前半までに構築されている。

第132号土坑は190×108cmの楕円形を呈し、深さは42.5cm、第135号土坑は400×125cmの不整形を呈し、深さは34cmをはかる。覆土は第132号土坑は黒褐色土、第135号土坑は茶褐色土のみからなる。

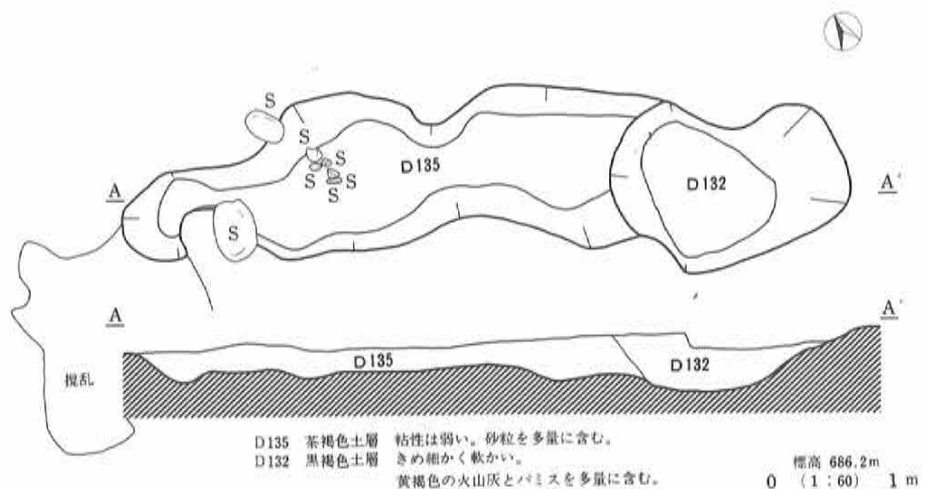
遺物の出土状況

いずれの土坑内も出土遺物は少なく弥生土器が散漫に分布している。

遺物 (第396図)

第132号土坑には壺・甕があり、楠描垂下文を篋描文で区画した396-40、口縁部、胴部に楠描波状文、口唇部に縄文が施される貼付口縁の41がある。

第135号土坑出土土器は図化しなかった。



第335図 第132・135号土坑実測図

9) 第136号土坑

遺構 (第336図、図版 百十二)

本土坑は台地の南端部中央西寄り、な・に-21・22グリッド内に位置している。Y64号住居址、第10号周溝に破壊され、中央部は攪乱をうけている。

308×215cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-18.5°-Wをさす。断面形は半楕円状を呈し、深さは80cmをはかる。覆土は大別三層からなり、第1層が黒褐色土、第2層が暗黄褐色土、第3層が黄褐色土である。

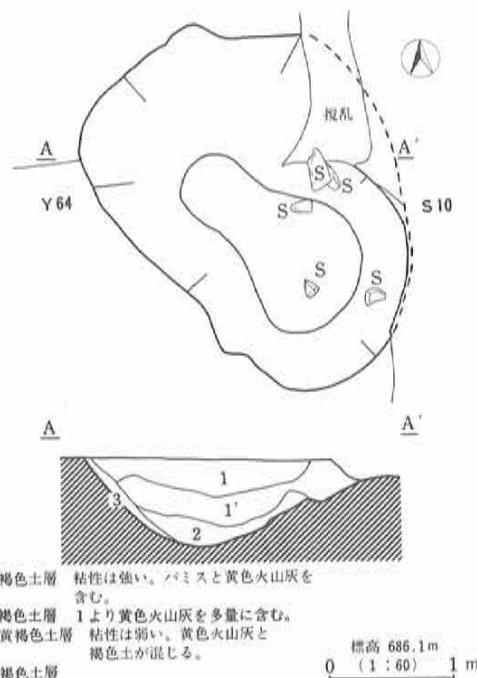
遺物の出土状況

弥生時代中・後期の土器が少量混ざり合って出土している。散漫な分布状況である。

遺物

図化した遺物はない。無文の壺片が主体を占めており、赤色塗彩される高杯・鉢・壺片がこれに準じる。縄文地文で、篋描沈線が施される破片も極く少量みられる。

以上、本土坑の所産期は、Y64号住居址との重複関係から弥生時代後期前半以前と言えるが、遺物から明確な時期決定をすることができない。



(小山)

- 1 黒褐色土層 粘性は強い。パミスと黄色火山灰を含む。
- 1' 黒褐色土層 1より黄色火山灰を多量に含む。
- 2 暗黄褐色土層 粘性は弱い。黄色火山灰と褐色土が混じる。
- 3 黄褐色土層

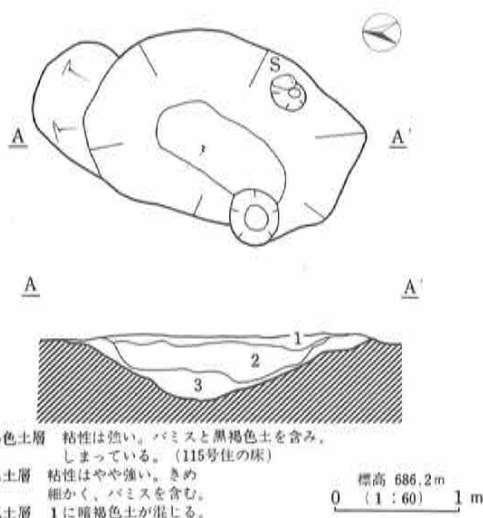
第336図 第136号土坑実測図

10) 第137号土坑

遺構 (第337図、図版 百十二)

本土坑は台地の南端西寄り、に・ぬ-25・26グリッド内に位置している。Y115号住居址の床面下から検出され、弥生時代中期後半以前の土坑である。226×148cmの楕円形を呈し、長軸方向はN-1.5°-Wをさす。深さは44cm、断面形は半楕円形を呈する。覆土は三層からなり、第1層が暗茶褐色土、第2・3層が黒褐色土である。遺物は篋描斜走直線文が施される甕片396-56が1点のみ出土している。

(小山)



- 1 明茶褐色土層 粘性は強い。パミスと黒褐色土を含み、しまっている。(115号住の床)
- 2 黒褐色土層 粘性はやや強い。きめ細かく、パミスを含む。
- 3 黒褐色土層 1に暗褐色土が混じる。

第337図 第137号土坑実測図

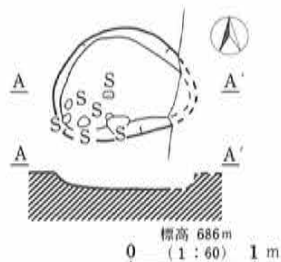
11) 第141号土坑

遺構 (第338図)

本土坑は台地南端中央、に-23グリッド内に位置する。Y64・109号住居址と重複し、Y64に破壊され、Y109を破壊する。115×90cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-88°-Wをさす。深さは24cm、断面形は逆台形状を呈する。遺物は弥生中期後半の土器が少量と小礫が散漫に分布している。

遺物 (第395・396図)

弥生土器の器種には壺・甕がある。壺は胴部にLR縄文地文の篋描横走平行線文、連



第338図 第141号土坑実測図

弧文が施される396-57・58がある。58には粗略な赤色塗彩がみられる。甕には受口状口縁の395-15、396-60・61と貼付口縁の396-59がある。395-15、396-61は受口部がかなり形骸化して直線的となっており、395-15の胴部には櫛描文、396-61の口縁部には縄文がみられる。396-60はしっかりとした外稜を有し、LR縄文を地文として篋描連続山形文が2条施されている。貼付口縁の396-59は口唇部に刻目が施されている。以上の出土土器から本土坑の所産を弥生時代中期後半としたい。

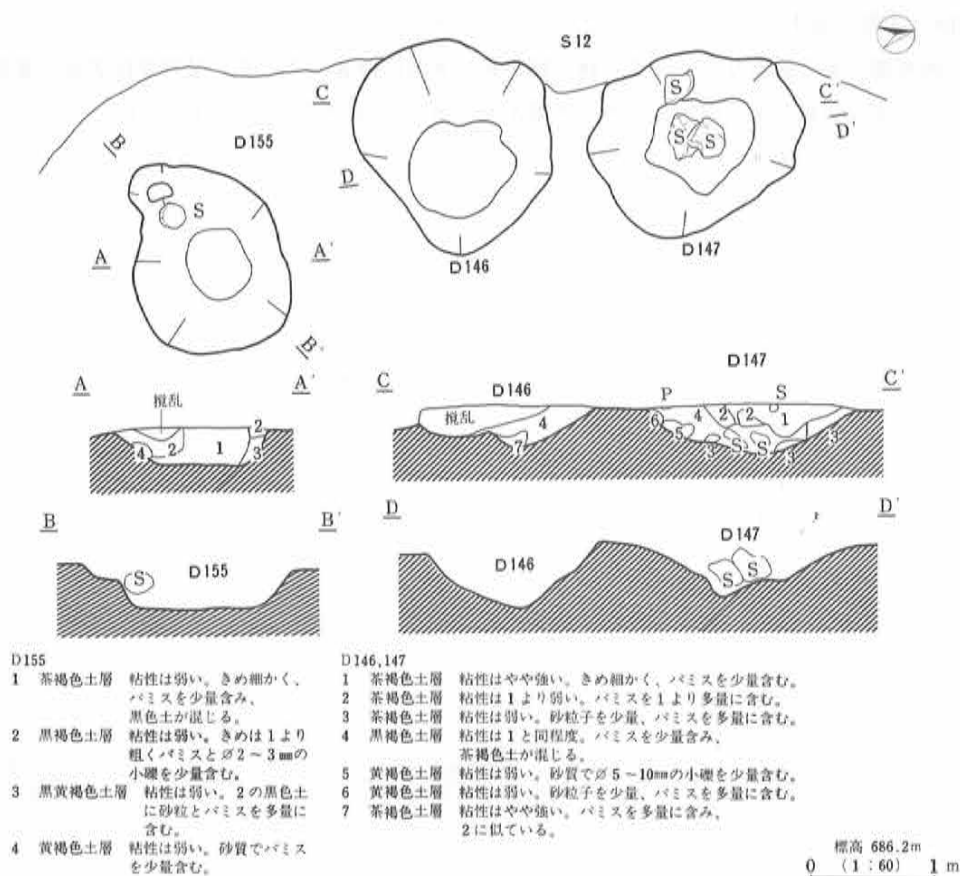
12) 第146・147・155号土坑

遺構 (第339図、図版 百十三)

第146・147・155号土坑は台地の南部東端、そ・た-12・13グリッド内に位置している。一部が第12号周溝と重複し、破壊されている。第146号土坑が170×153cmの円形、第147号土坑が175×142cmの楕円形、第155号土坑が170×130cm楕円形を呈するがいずれも歪みが著しい。深さはそれぞれ52cm、34.5cm、37cmをはかり、断面形は第146・147号土坑が半楕円形、第155号土坑が逆台形状を呈する。覆土は第339図の通りで堆積状態は人為的である。遺物の出土量はいずれも少なく、弥生時代中期後半の土器片が散漫に分布している。

遺物 (第395・397図)

第146号土坑出土の弥生土器の器種には壺・甕がある。壺にはRL縄文上に篋描横走平行線文、連続山形文、篋描刺突文が山形状に施される胴部中位片397-1がある。甕には口唇部に縄文、頸部に櫛描横走平行線文、胴部に斜走直線文が縦位羽状に施される397-2・3がある。第147号土坑出土の弥生土器の器種には壺・甕がある。壺にはしっかりとした外稜を有する受口状の口縁部にLR縄文、篋描連続山形文が施される397-4がある。甕には櫛描波状文を垂下文で区画する胴部片397-5、櫛描斜走直線文が縦位羽状に施される397-6などがある。第155号土



第339図 第146・147・155号土坑実測図

坑の弥生土器の器種には壺・鉢がある。壺には胴部に櫛描垂下文を篋描文で区画した397-15、しっかりとした外稜をもつ、受口状の口縁部にLR縄文が施される397-16などがある。鉢395-19は手捏成形のミニチュア品である。以上の出土遺物から三基の土坑の所産期を弥生時代中期後半としておきたい。(小山)

13) 第150号土坑

遺構 (第340図、図版 百十三)

本遺構は台地南端の中央西寄り、ぬ-24グリッド内に位置している。重複関係はもたない。

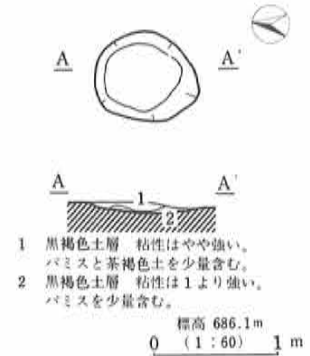
84×70cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-14°-Eをさす。深さは7cmと浅く、断面形は逆台形状を呈する。

覆土は二層からなり、ベースとなる土はいずれも黒褐色土である。

遺物の出土状況、覆土中に弥生時代中期後半の土器の細片が散乱している。

遺物 (第397図) 弥生土器の器種には壺・甕がある。壺には頸部から胴部にかけて櫛描横走平行線文・刺突文を数段にわかって交互に施し、胴部中に篋描連弧文を施した397-7~9、胴部の櫛描垂下文を篋描文で区画した397-10、頸部に櫛描横走平行線文をめぐらし、篋描横走平行線文で区画した397-11などがみられる。また、甕には細かい単位の櫛描斜走直線文が施される胴部片397-12などがみられる。

以上、本土坑は先述した出土遺物の特徴からみて、弥生時代中期後半に位置づけられる。(小山)



第340図 第150号土坑実測図

14) 第149・151号土坑

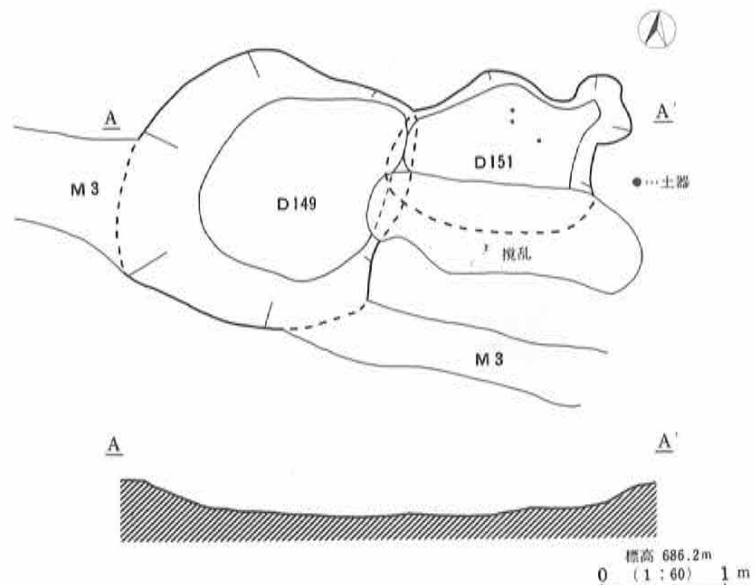
遺構 (第341図、図版 百十三)

本土坑は台地南部の中央東寄り、つ・て-18・19グリッド内に位置している。Y71号住居址と重複関係をもち、これを破壊している。第149号土坑は264×223cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-53.5°-Eをさす。深さは45.5cmをはかり、底面は平坦である。第151号土坑は201×135cm楕円形を呈し、長軸方位はN-59.5°-Eをさす。深さは29.5cmをはかり、底面は平坦である。第

149・151号土坑相互の重複関係は明確でない。遺物の出土量はいずれも少なく、弥生時代中期後半の土器が散漫に分布している。

遺物 (第395図、図版 百十六)

第149号土坑出土土器は図化できなかった。第151号土坑出土の弥生土器の器種には壺があり、細頸の頸部から口縁部が稜のとれた受口状に立ち上がる395-16と小形の395-17がある。16は口縁部に櫛描波状文、頸部に篋描横走平行線文、篋描刻目、縄文を施した細かい模様がみられる、口縁部下端には2個一対の穿孔がみられる。17は頸部に篋描横走平行線文がめぐっている。以上



第341図 第149・151号土坑実測図

の出土置物などから第149・151号土坑の所産期は弥生時代中期後半と考えられる。

(小山)

15) 第161号土坑

遺構 (第342図)

本土坑は台地の南端中央、に-23グリッド内に位置している。Y64・109号住居址、第141号土坑に破壊されているため、全体形状は明らかでなく、測定値も得られない。底面がおおむね平坦な土坑であることは確かである。

遺物の出土状況

弥生時代中期後半の土器片が極く少量出土しており、分布は極めて散漫である。

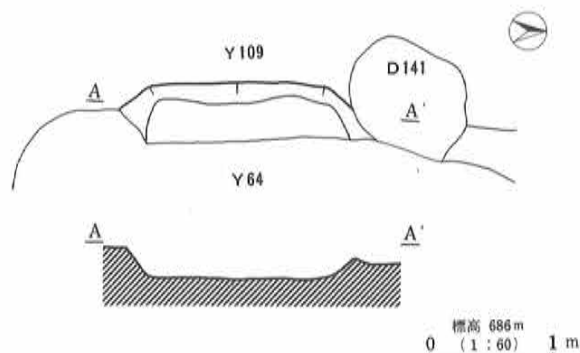
遺物(第397図)

本土坑出土の弥生土器の器種には甕がある。

甕397-18は外稜のとれた受口状の口縁部を有する。口唇部に篦描の刻目、口縁部上端に櫛描波状文が施されている。397-19は頸部に櫛描横走平行線文、胴部に櫛描波状文、垂下文が施されている。

以上の出土遺物および重複関係から本土坑の所産期は弥生時代中期後半以前に位置づけられる。

(小山)



第342図 第161号土坑実測図

16) 第171号土坑

遺構 (第343図、図版 百十四)

本土坑は台地のほぼ中央部、お-14グリッド内に位置している。第170号土坑と西側でわずかに重複関係を持ち、破壊されている。

236×162cmのやや不整の長方形を呈し、長軸方向はN-73°-Eをさす。深さは50cm内外をはかり、断面形は底面がおおむね平坦で、逆台形状を呈する。覆土は厚いが一層のみからなり、人為的な堆積状態を示す。小礫、こぶし大の礫、パミス、砂粒を多量にふくむ、きめの粗い黒褐色土である。

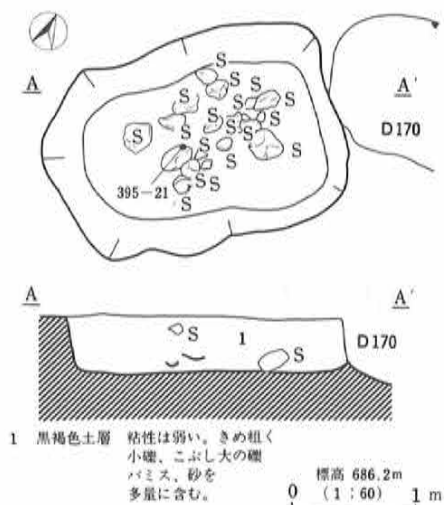
遺物の出土状況

本土坑からは弥生土器と礫がまざりあって出土している。出土状態は底面から20cm以内のレベルに分布し、中央部に集中する傾向がみられる。弥生土器は6点のみで散めて少量であるが、本土坑に共伴するものである。

遺物 (第395図、図版 百十六)

弥生土器の器種には壺395-21がある。口縁端部、胴部下位以下を欠損する。口縁部は「く」の字状に長く外反し、胴部は大きくふくらんで、中位下方で張りをもつ形態を有する。文様は頸部に集中され、櫛描二連止め簾状文が一带、以下に波状文が二帯施されている。同様な器形は在地の弥生土器の中からは見い出せず外来系の土器と見做しておきたい。従って、土坑の所産期も弥生後期後半と漠然とした年代を与えておく。

(小山)



第343図 第171号土坑実測図

16) 第176号土坑

遺構 (第343図、図版 百十五)

本土坑は台地の中央部東側、か・き-12グリッド内に位置している。Y104号住居址と重複関係を持ち、これを破壊しているが、位置関係、出土遺物の内容などをみると、両者の間は、極めて有機的な関連性を有しているように思われる。

プランは384×147cmの長方形を呈し、長軸方位はN-22°-Eをさす。

深さは33.5~51.5cmをはかり、底面はおおむね平坦で、断面形は逆台形状を呈する。Y104号住居址の床面レベルよりは若干低い。また底面はかたなく、軟弱である。

覆土は四層からなる。南方からの流れ込みが優勢な堆積状態を示している。第1層は小礫・パミス・黄色粒子を含む黒褐色土、第2層は小礫・パミス・黒褐色土を含む茶褐色土、第3層は小礫・パミス・茶褐色土を含む黒色土、第4層は礫粒主体の黄褐色土である。

遺物の出土状況

本土坑からは弥生土器が多量に出土している。このうち、土坑内の中央北寄りの底面から出土している395-22・23・24・25は本土坑に確実に共伴する遺物と考えられる。他の遺物は中期後半のものが多量に含まれているため、混入遺物の可能性が高い。この他、北側と南側で対座するように各1個ずつの礫が底面におかれており、本土坑と強い関わりをもっているように思われる。

遺物 (第395図)

弥生土器の器種には壺・甕・鉢がある。

壺365-22は胴部下位に明確な外稜を有し、外稜を境に上位には赤色塗彩が施されている。下位には、縦位のヘラミガキが施されている。365-23は底部の破片である。365-24は内外面に赤色塗彩が施される鉢の底部片である。365-25は内外面に赤色塗彩が施される壺の口縁部片で、ラッパ状に開き、口唇部は面取りされている。甕397-25は口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施される。

以上の出土遺物から本土坑の所産期は弥生時代後期と考えられる。

(小山)

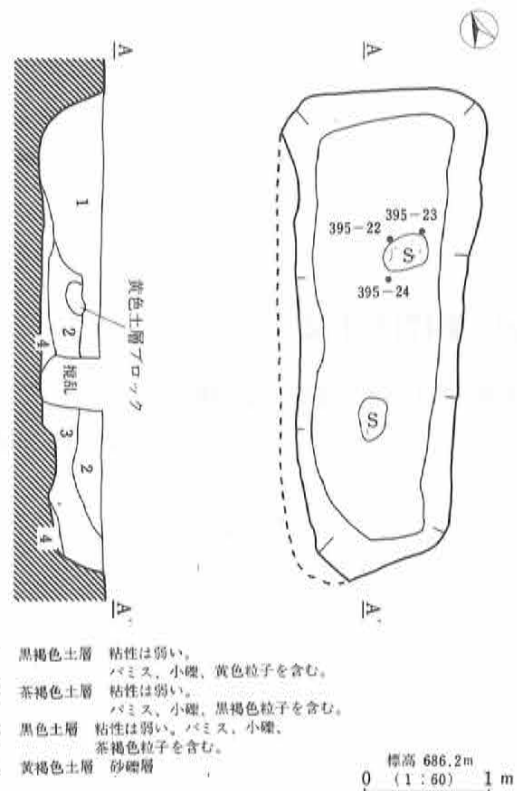
2 中世及び、中世以降と考えられる土坑

1) 第116号土坑

遺構 (第345図、図版 百十)

本土坑は台地南部のほぼ中央、と-19・20グリッド内に位置している。重複関係はもたない。

プランは233×175cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-21°-Wをさす。深さは最深部28cmをはかり、断面形は中央部にわずかに盛り上がりをもつもの、おおむね、弓状を呈する。



- 1 黒褐色土層 粘性は弱い、パミス、小礫、黄色粒子を含む。
- 2 茶褐色土層 粘性は弱い、パミス、小礫、黒褐色粒子を含む。
- 3 黒色土層 粘性は弱い、パミス、小礫、茶褐色粒子を含む。
- 4 黄褐色土層 砂礫層

第344図 第176号土坑実測図

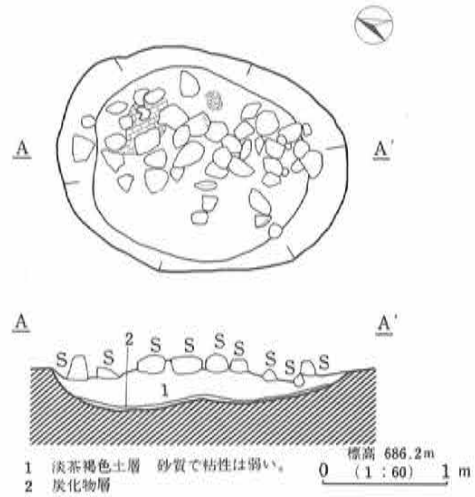
覆土は二層からなる。第1層は砂質の淡茶褐色土、第2層は土坑底面に密着して薄く堆積する炭化物層である。

遺物・礫の出土状況

本土坑の覆土第1層の上面には、径20cm内外の火山礫が炭化物とともに多量に分布している。礫群の分布は、プランの西側に若干偏在する傾向がみられる。

また、貨幣はプランの北端部の第1層上から、1点のみが検出されている。

この他の遺物は本土坑からは検出されていない。



第345図 第116号土坑実測図

遺物 (第346図、図版 百十六)

本土坑からは貨幣が1点のみ検出されている。

貨幣346-1は北宋で発行された元符通宝で、鑄造年代は1098年である。素材は銅製である。

以上、本土坑の所産期については出土した元符通宝の通用年代から考えると、中世と考えることができる。また、性格については、底面に炭化物層が堆積すること、覆土第1層上面に礫群がみられること、プランの北端部に貨幣の供献がみられることなどを勘案すると、墓址あるいは祭祇的な意味をもつ土坑とも考えられるが、明確な答えを導くことはできない。

(小山)



第346図 第116号土坑出土貨幣拓影図

2) 第148号土坑

遺構 (第347図)

本土坑は台地南部の中央東寄り、つ-17・18、て-17グリッド内に位置し、Y71号住居址を破壊している。

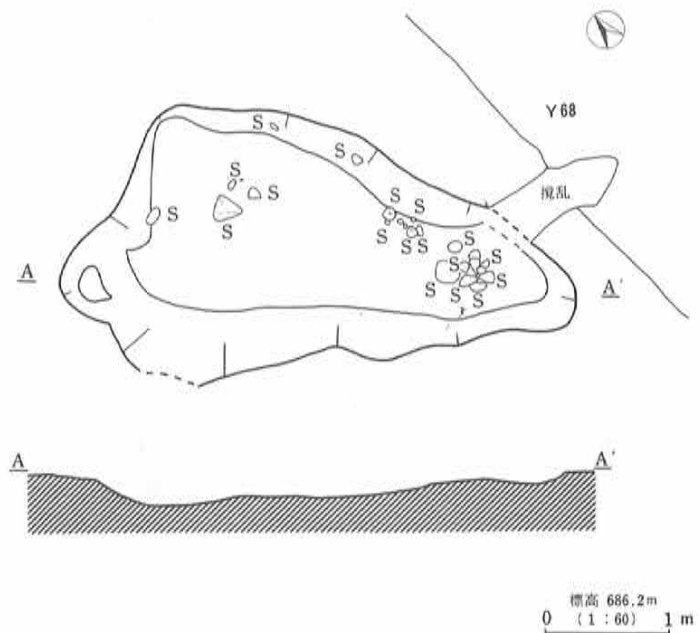
プランは410×182cmの不整楕円形を呈し、長軸方位はN-50.5°-Wをさす。

深さは12~21cmをはかり、底面は起伏が著しい。

覆土は淡茶褐色土1層のみからなる。

遺物は内面に釉薬を施した19世紀以降と考えられる灯明皿の破片などが出土しており、本土坑の所産期も近代以降と考えられる。

(小山)



第347図 第148号土坑実測図

3) 時期不明の土坑 (第348~394図、図版百九~百十五)

本調査では土坑が総数で77基検出されている。このうち先述した弥生時代およびそれ以前の土坑が24基、中世、近代の土坑が2基あり、他の51基の土坑は時期不明である。時期不明の土坑の検出位置・平面プラン・規模などについては第79・80表にまとめ、個々の記述は行わない。ここではこれらの土坑から出土した遺物のうち図化したものについてのみ、説明を加えることにする。

遺物 (第395・396・397・398図、図版 百十六)

第101号土坑、須恵器片、弥生土器片とともに鉄製品398-1が出土している。製品名は不明である。

第114号土坑、弥生時代中期後半の混入土器片とともに、鉄製の刀子398-2、鉄鏃398-3が出土している。遺構との共伴性は明確でないが、本土坑の位置が第7号周溝と第10号周溝の中間点に位置することが興味深い。鉄鏃は平造三角形式と呼ばれるものである。

第119号土坑、本址は土坑としてあるが風倒木址の可能性も強い。弥生時代中期後半の土器片を36点、土製紡錘車1点を混入している。Y119号住居址の遺物が混入したのかも知れない。図化した弥生土器の器種はいずれも甕である。396-4は受口状の口縁部にLR縄文、頸部~胴部に楕円斜走直線文を施したのち、頸部下に楕円波状文を一部施している。396-5はLR縄文地文上に「コ」字重文を施文する胴部片で台付甕となることも考えられる。396-6は胴部に斜走直線文が縦位羽状に施される。398-4は土製の紡錘車と考えられ、径3.8cmをはかり、中央に焼成前の穿孔が施されている。本遺跡内では唯一の弥生時代と考えられる紡錘車である。

第127号土坑、本土坑からは無文の弥生土器片6点とともに、甕の底部片が出土している。共伴性は薄い。395-2は底部に焼成前の一孔が穿たれている。

第140号土坑、本土坑からは少量の弥生時代中期後半の土器・石器2点が出土している。甕395-14はほぼ全形態を知り得る。口縁部は「く」の字状に短く外反し、完全に外稜のとれた受口状を呈する。胴部は中位で張り、最大径を有する。文様は口縁部の受口部に篋連続山形文が一条施されるのみで、文様の省略化が著しい甕と言える。石器は磨製石斧と砥石がある。磨製石斧270-89は閃緑岩製で、大型蛤刃石斧の形態をもつ。基端部は研磨されており、敲石に転用されたものと考えられる。砥石273-150は砂岩製で、偏平置き砥石である。表・裏面の被研磨が著しい。火熱を受けたためか煤が付着し、破碎している。

第152号土坑、弥生土器、土師器、須恵器の破片が混ざり合って出土しているが、本土坑との共伴性は薄い。弥生土器395-18は細頸の壺で、文様は頸部にのみ集中する。篋横走平行線文5条で区画された文様帯の下方2帯間に篋連続山形文が充填されている。397-14は須恵器甕の破片で波状文が施されている。

第158号土坑、弥生時代中期後半の土器が8点出土しているが、共伴性は薄い。甕397-17は口唇部に楕円斜走直線文、胴部に楕円斜走直線文、頸部に楕円波状文が施されている。

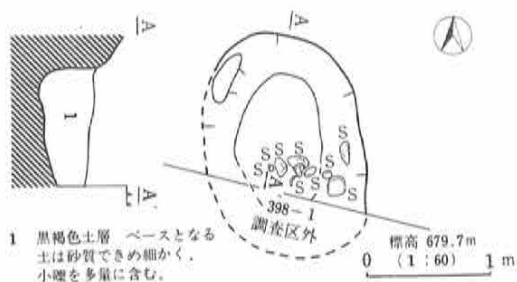
第162号土坑、弥生土器2点、須恵器1点が出土しているが共伴性は薄い。須恵器397-20は甕の胴部片で、内面は円弧押え、外面は平行叩きが施されている。

第165号土坑、弥生時代中期後半の土器片が割合多量に出土しているが、共伴性は薄い。図化した器種はいずれも甕である。395-20は底部片、397-21は口唇部に縄文をもち、頸部は楕円横走平行線文、胴部は楕円斜格子目文が施されている。

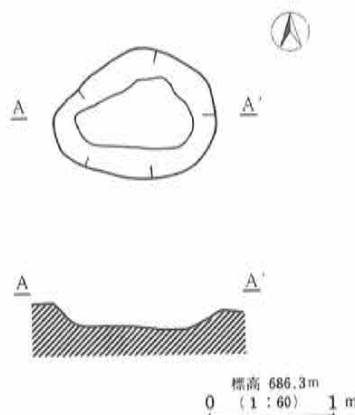
第168号土坑、397-22・23は混入遺物である。

第170号土坑、弥生土器、土師器片が出土しており、397-24は土師器杯の底部片で回転糸切り痕が明瞭に残っている。

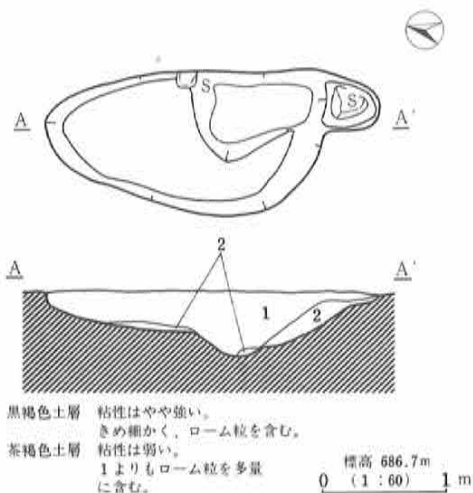
(小山)



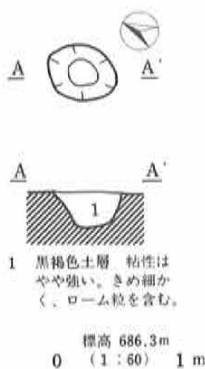
第348図 第101号土坑実測図



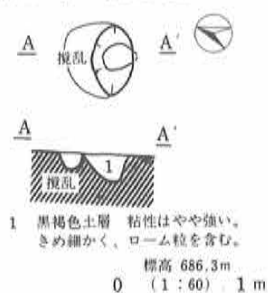
第349図 第102号土坑実測図



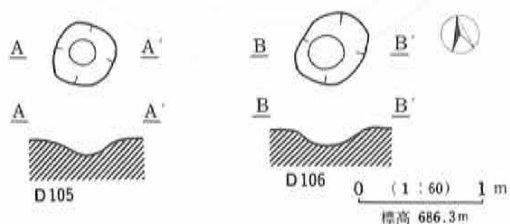
第350図 第103号土坑実測図



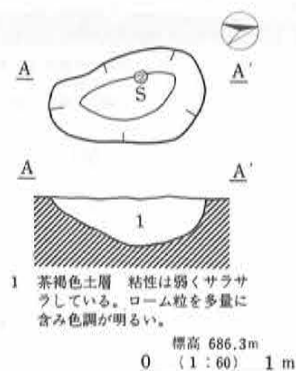
第351図 第104号土坑実測図



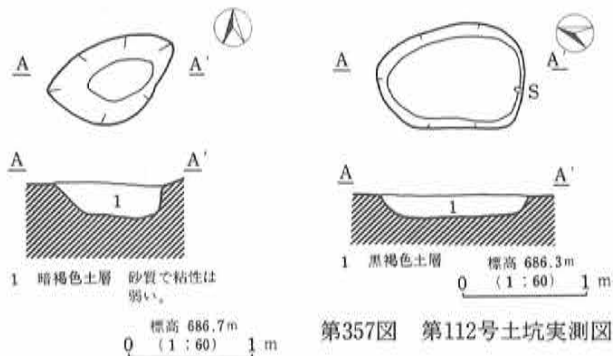
第353図 第107号土坑実測図



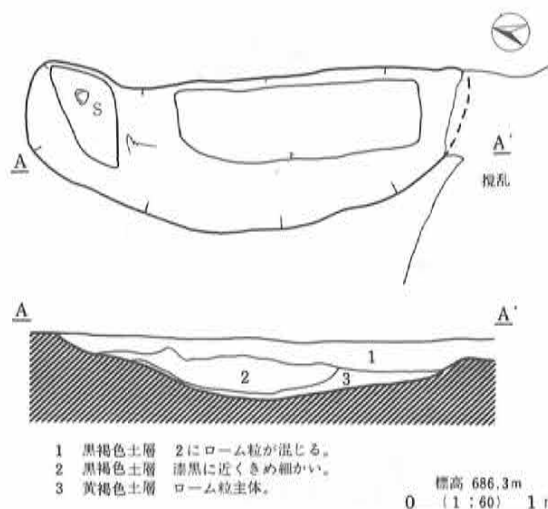
第352図 第105・106号土坑実測図



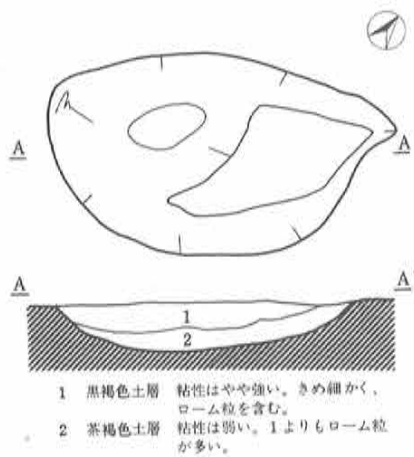
第354図 第108号土坑実測図



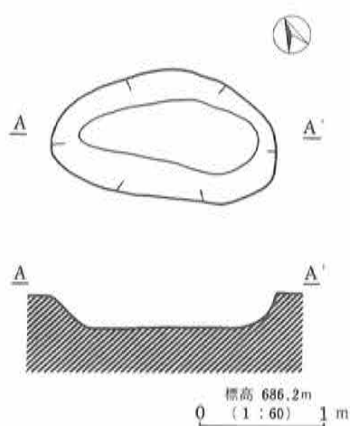
第355図 第109号土坑実測図



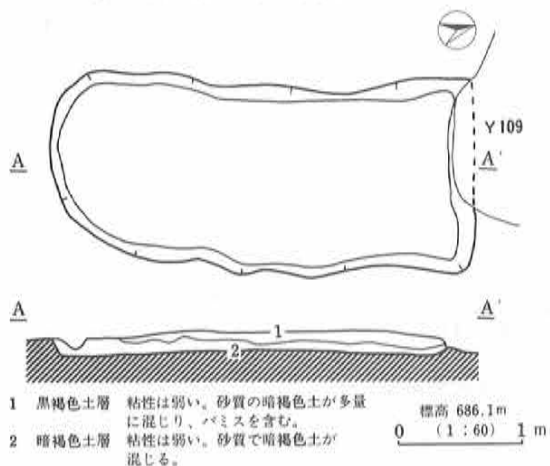
第356図 第111号土坑実測図



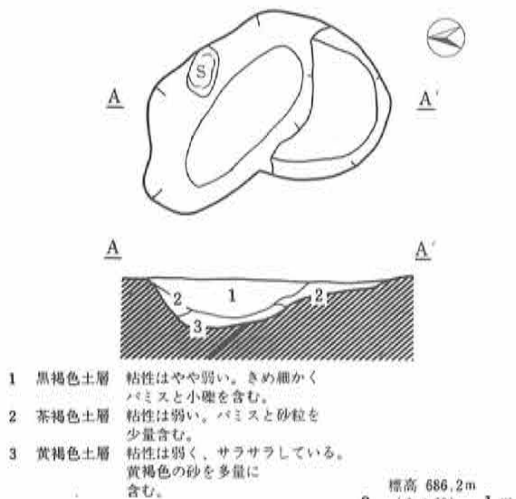
第358図 第113号土坑実測図 標高 686.3m (1:60) 1 m



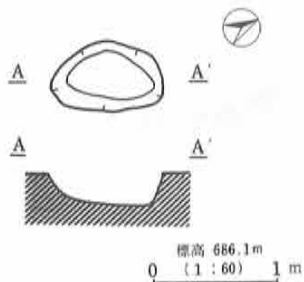
第359図 第114号土坑実測図



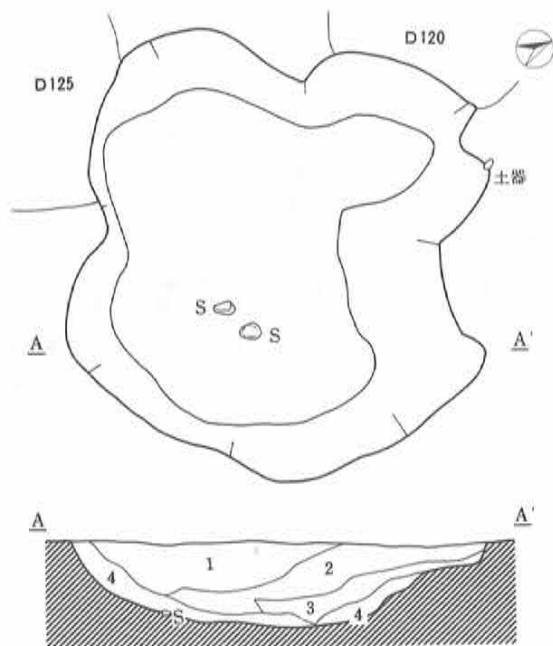
第360図 第115号土坑実測図



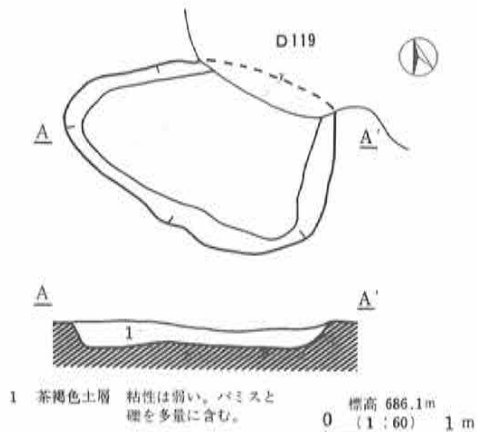
第361図 第117号土坑実測図



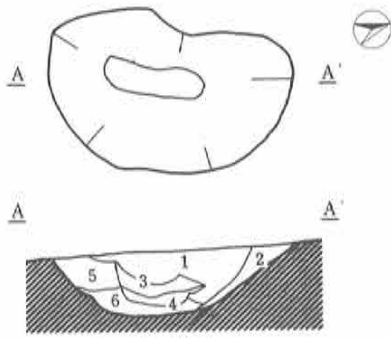
第362図 第118号土坑実測図



第363図 第119号土坑実測図

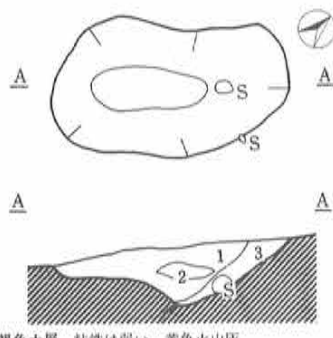


第364図 第125号土坑実測図



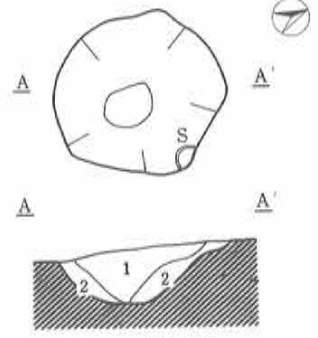
- 1 黒褐色土層 粘性はやや強い。きめ細かく、小礫を少量含む。
 - 2 茶褐色土層 粘性は強い。きめ細かく、黄色火山灰を少量含む。
 - 3 黒褐色土層 1に黄色の砂粒が多量に混じる。
 - 4 黄褐色土層 黄色砂粒主体で黒褐色土を少量含む。
 - 5 茶褐色土層 2と似ているが黄色火山灰が多い。
 - 6 暗褐色土層 きめ細かくもろい。
- 標高 686m
0 (1:60) 1 m

第365図 第126号土坑実測図



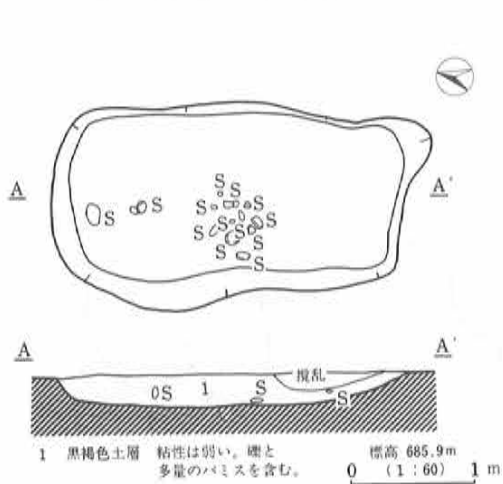
- 1 黒褐色土層 粘性は弱い。黄色火山灰、パミス、砂粒を少量含む。
 - 2 黒褐色土層 1に黄色の砂粒が多量に混じる。
 - 3 茶褐色土層 きめ細かくもろい。
- 標高 686m
0 (1:60) 1 m

第366図 第127号土坑実測図



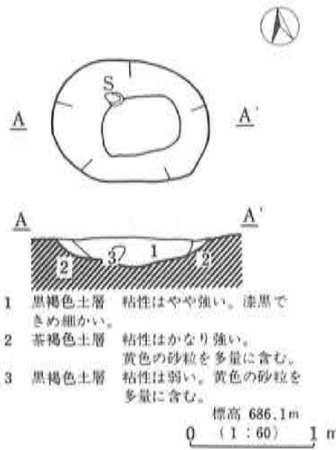
- 1 黒褐色土層 粘性は弱い。黄色火山灰、パミス、砂粒を少量含む。
 - 2 黒褐色土層 1に黄色の砂粒が多量に混じる。
- 標高 686m
0 (1:60) 1 m

第367図 第128号土坑実測図



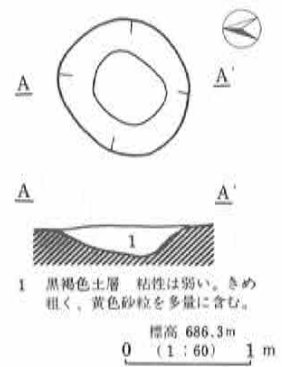
- 1 黒褐色土層 粘性は弱い。礫と多量のパミスを含む。
- 標高 685.9m
0 (1:60) 1 m

第368図 第130号土坑実測図



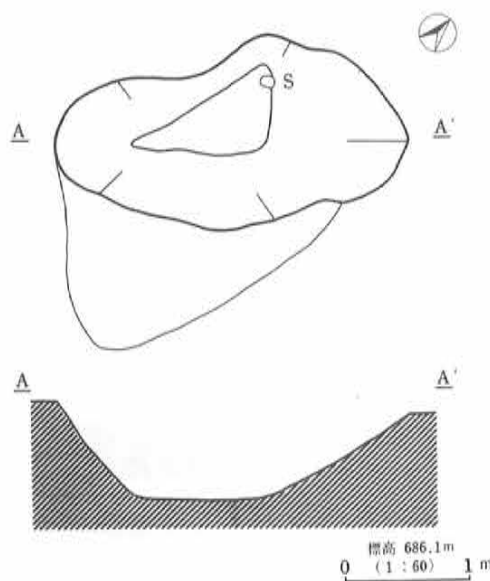
- 1 黒褐色土層 粘性はやや強い。漆黒できめ細かい。
 - 2 茶褐色土層 粘性はかなり強い。黄色の砂粒を多量に含む。
 - 3 黒褐色土層 粘性は弱い。黄色の砂粒を多量に含む。
- 標高 686.1m
0 (1:60) 1 m

第369図 第138号土坑実測図



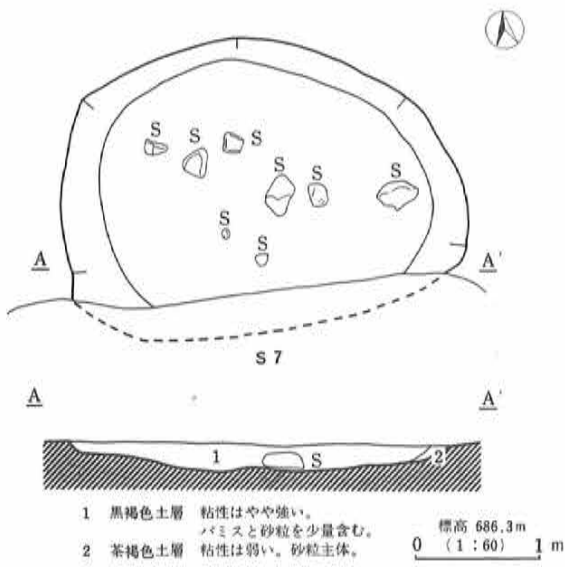
- 1 黒褐色土層 粘性は弱い。きめ粗く、黄色砂粒を多量に含む。
- 標高 686.3m
0 (1:60) 1 m

第370図 第139号土坑実測図



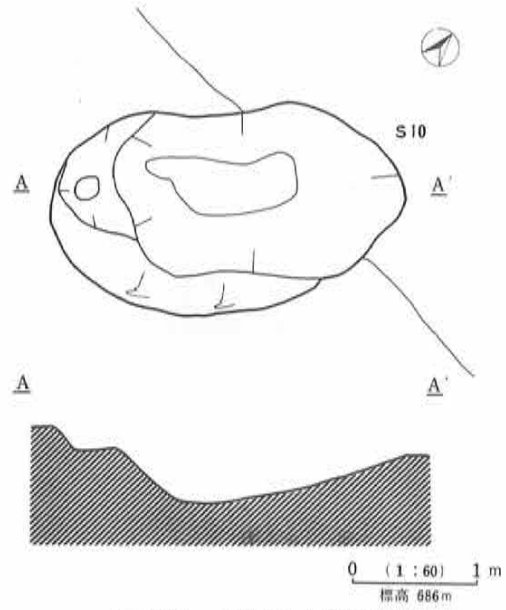
- 標高 686.1m
0 (1:60) 1 m

第371図 第140号土坑実測図

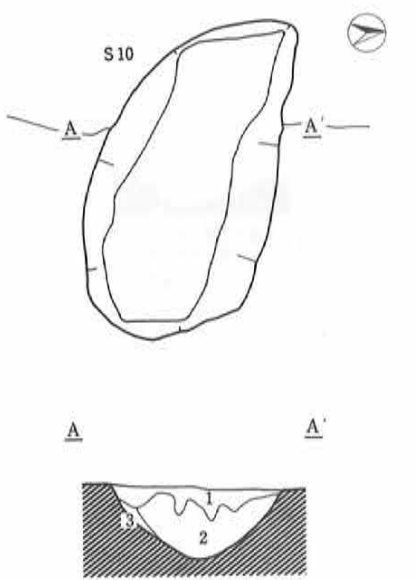


1 黒褐色土層 粘性はやや強い、
パミスと砂粒を少量含む。
2 赤褐色土層 粘性は弱い、砂粒主体。
標高 686.3m
0 (1:60) 1m

第372図 第142号土坑実測図

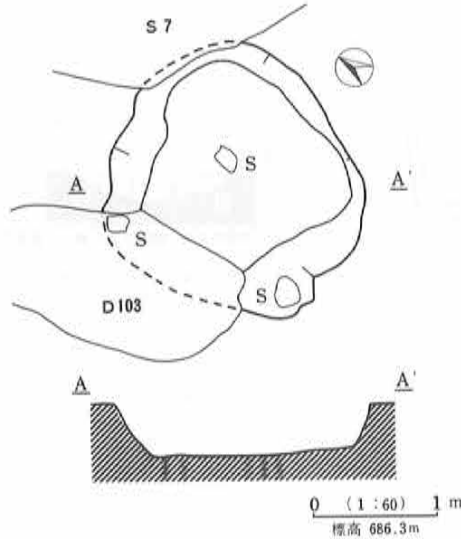


第376図 第152号土坑実測図

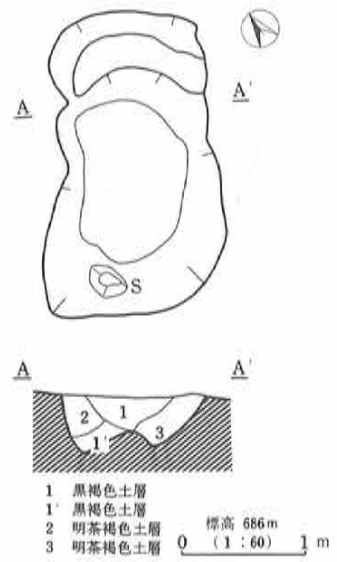


1 淡茶褐色土層 粘性はやや弱い。黒土と砂粒を多量に、パミスを少量含む。
2 黒褐色土層 粘性は強い。きめ細かく、パミスと砂粒を含む。
3 淡茶褐色土層 1と似ているが黄色火山灰を少量含む。
標高 686.3m
0 (1:60) 1m

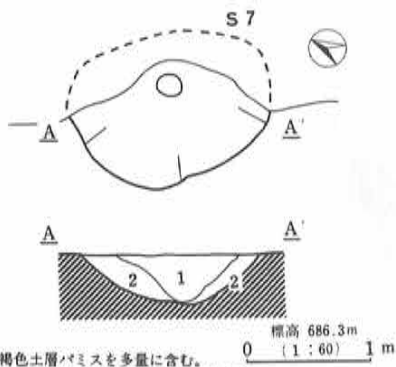
第373図 第143号土坑実測図



第374図 第144号土坑実測図

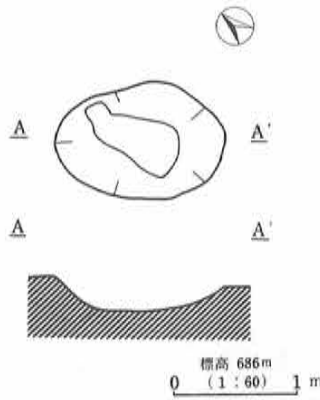


第378図 第154号土坑実測図

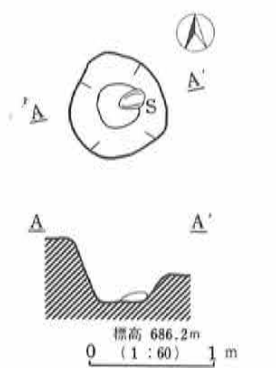


1 黒褐色土層パミスを多量に含む。
2 赤茶褐色土層、黒褐色土、パミスを含有。
標高 686.3m
0 (1:60) 1m

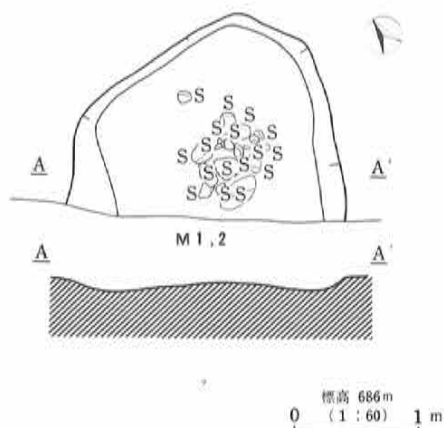
第375図 第145号土坑実測図



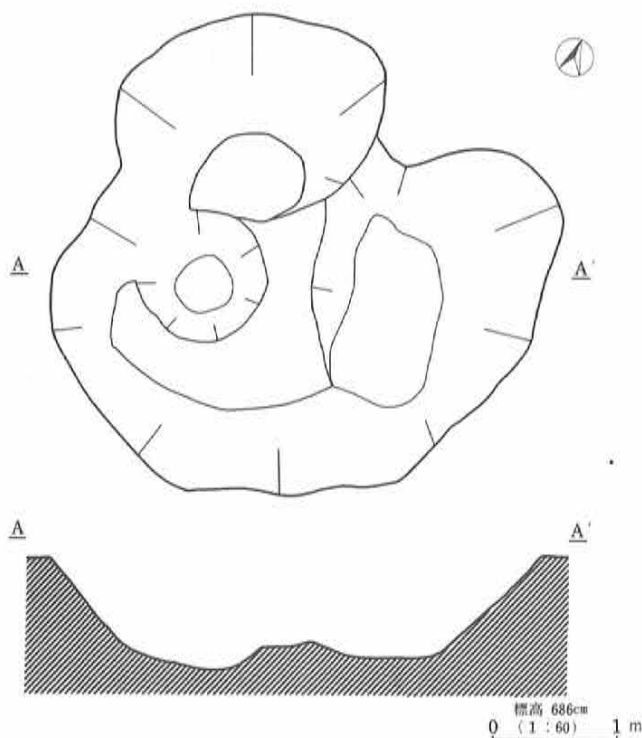
第377図 第153号土坑実測図



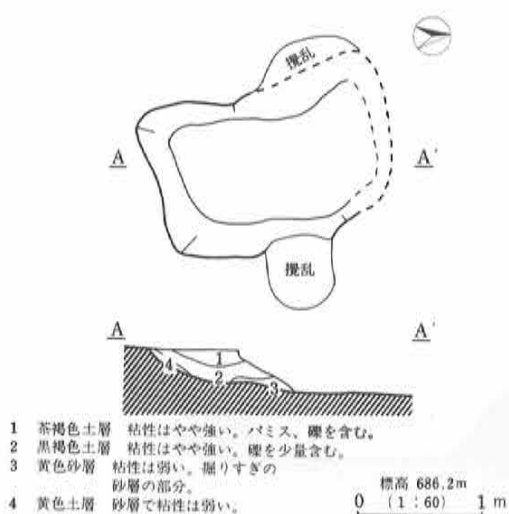
第379図 第157号土坑実測図



第380図 第156号土坑実測図

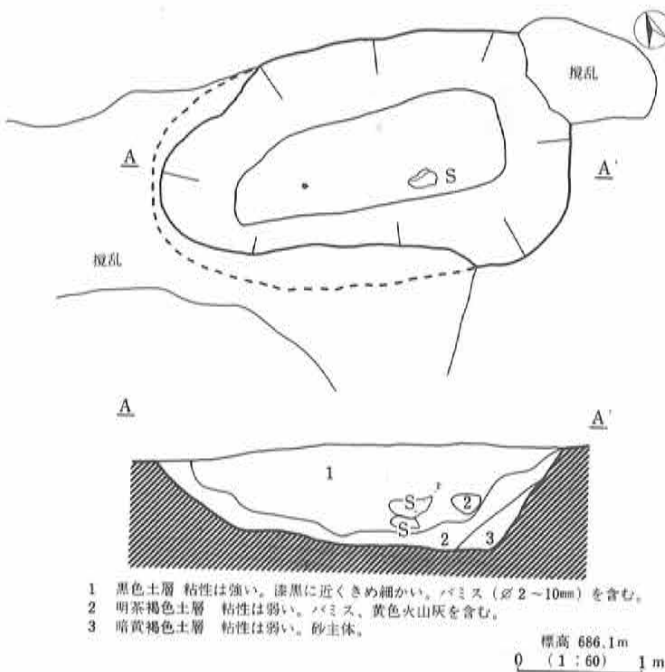


第383図 第159号土坑実測図



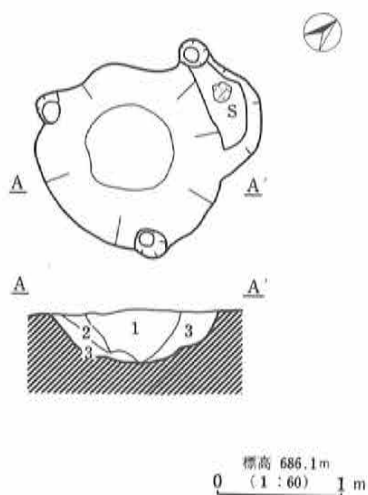
- 1 茶褐色土層 粘性はやや強い。パミス、礫を含む。
- 2 黒褐色土層 粘性はやや強い。礫を少量含む。
- 3 黄色砂層 粘性は弱い。掘りすぎの砂層の部分。
- 4 黄色土層 砂層で粘性は弱い。

第381図 第158号土坑実測図



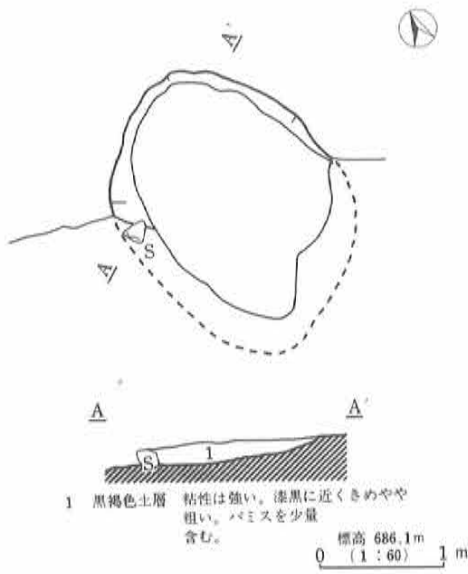
- 1 黒色土層 粘性は強い。漆黒に近くきめ細かい。パミス(径2~10mm)を含む。
- 2 明茶褐色土層 粘性は弱い。パミス、黄色火山灰を含む。
- 3 暗黄褐色土層 粘性は弱い。砂主体。

第384図 第162号土坑実測図

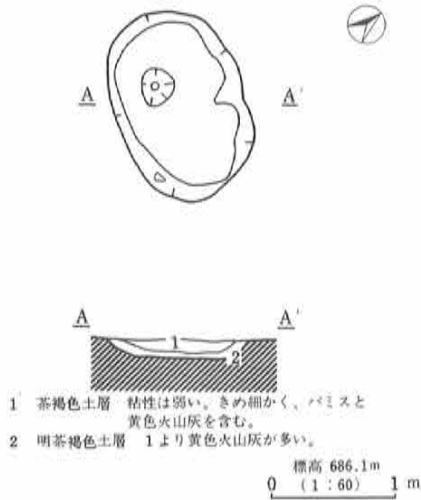


- 1 黒褐色土層 粘性はやや強い。パミス、砂粒褐色土を多量に含む。
- 2 黒褐色土層 1よりも褐色土が増加し粘性は弱い。
- 3 明褐色土層 粘性は弱い。褐色土と砂が混じる。

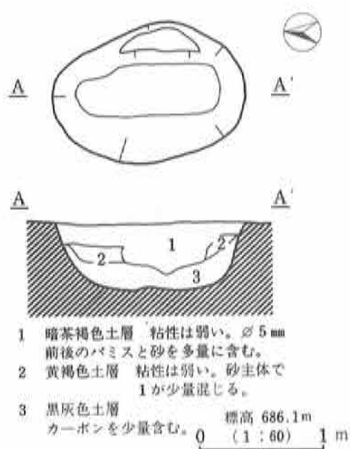
第382図 第160号土坑実測図



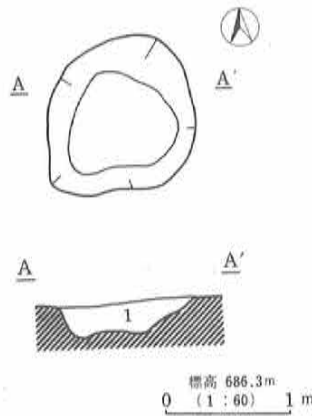
第385図 第163号土坑実測図



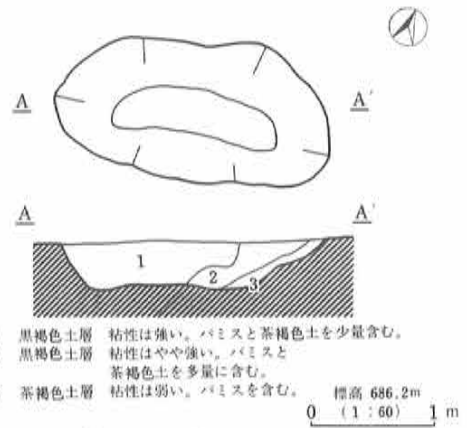
第388図 第172号土坑実測図



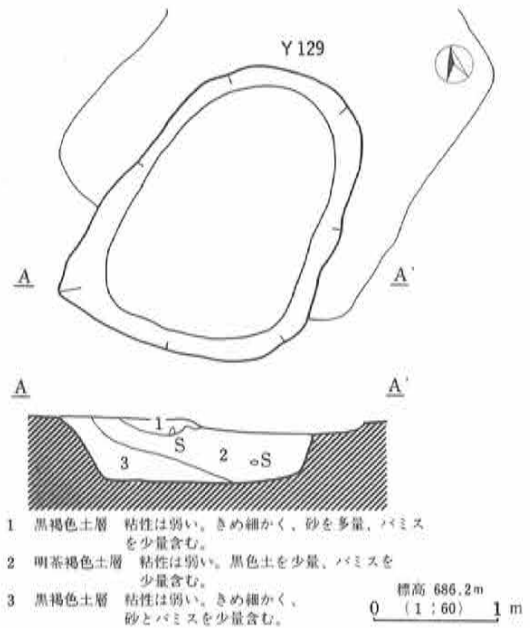
第389図 第165号土坑実測図



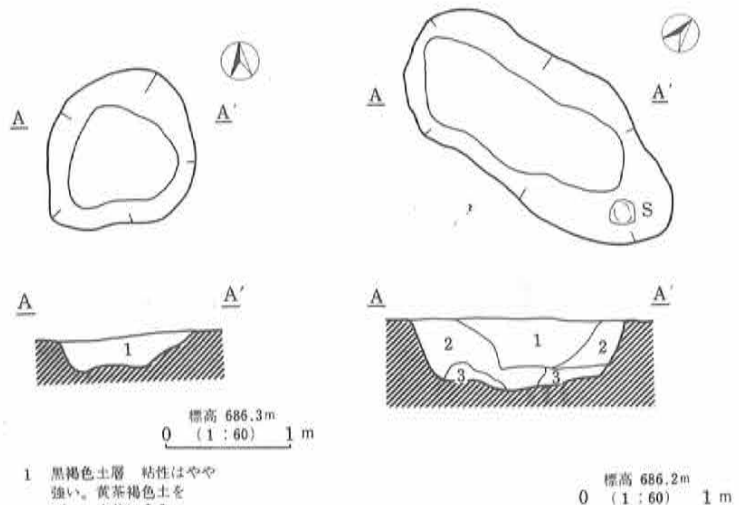
第390図 第167号土坑実測図



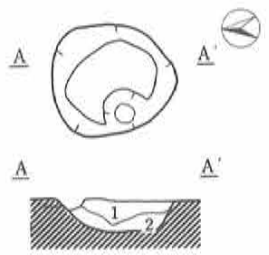
第386図 第164号土坑実測図



第387図 第166号土坑実測図



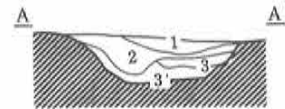
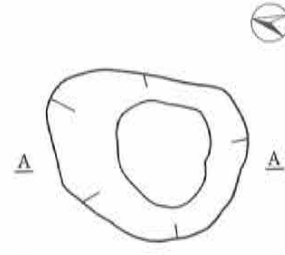
第391図 第170号土坑実測図



標高 686.1m
0 (1:60) 1 m

- 1 明茶褐色土層 粘性は弱い。φ 3mmのバミス、微粒バミス砂粒を含む。
- 2 暗黄褐色土層 粘性は弱い。砂質でバミスを含む。

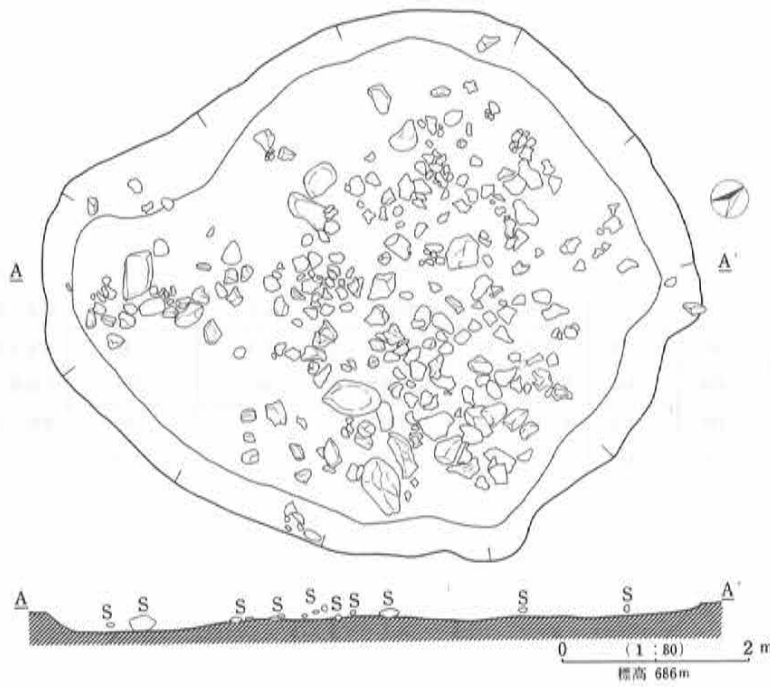
第392図 第173号土坑実測図



標高 686.3m
0 (1:60) 1 m

- 1 茶褐色土層 粘性は弱い。きめ粗く、粗い砂粒を多量に含む。
- 2 黒褐色土層 粘性はやや強い。きめ細かく、バミスを少量含む。
- 3 褐色土層 砂粒主体で黒色土を少量含みもろい。
- 3' 褐色土層 3よりも黒色土が多い。

第393図 第174号土坑実測図



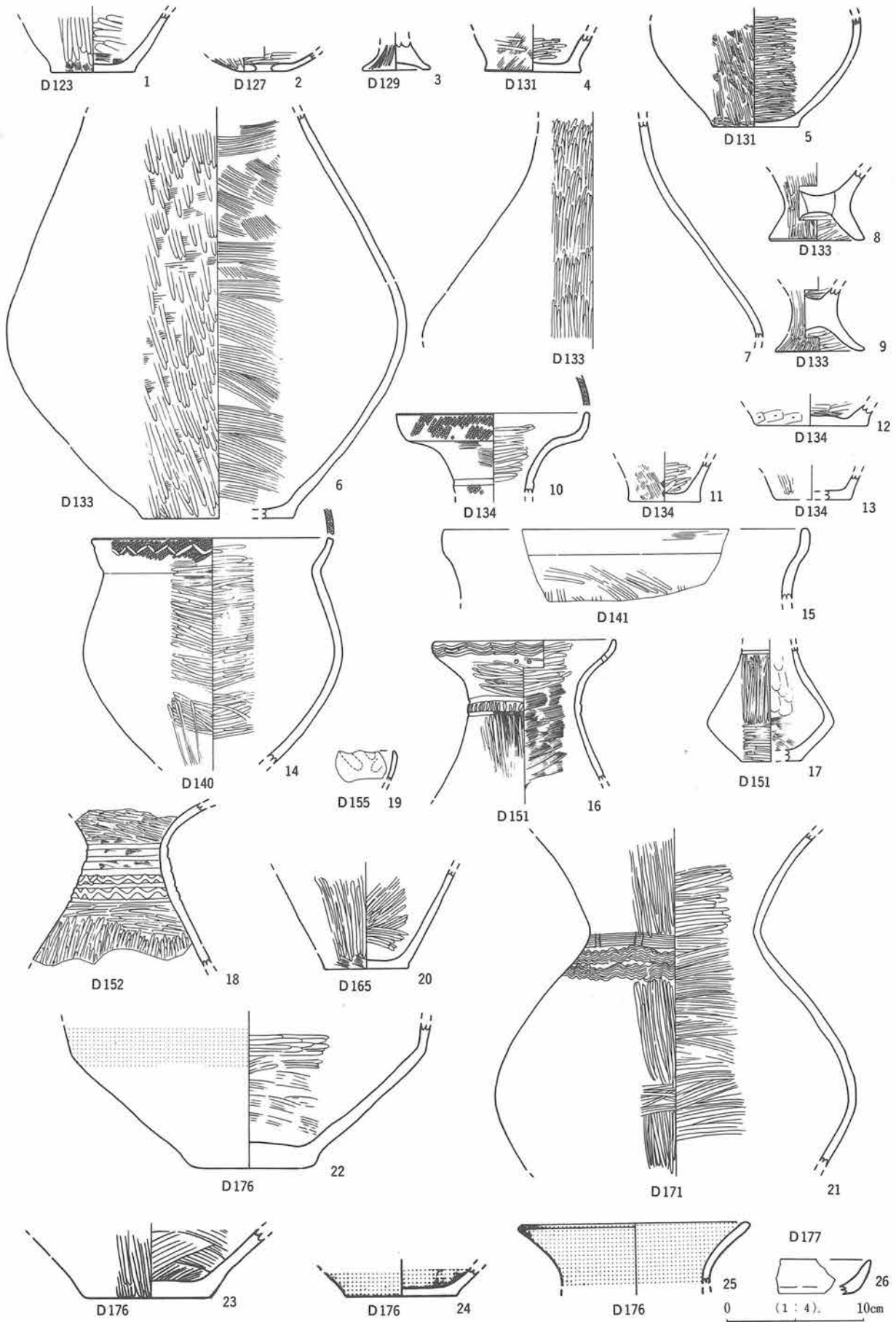
第394図 第177号土坑実測図

第79表 北西ノ久保遺跡土坑一覽表〈1〉

遺構名	検出位置	平面・形態	規 模		長 軸 方 位	断 面 形 状	深 さ (cm)	時 期	備 考
			長軸長 (cm)	短軸長 (cm)					
D101	ま-23	楕円形	(183)	(125)	N-15'-W	-	91	不明	須恵器、鉄製品 398-1
D102	ぬ-14	卵形	129	110	東西	逆台形	27	不明	弥生土器75点
D103	ぬ-17	楕円形	265	115	N-17'-W	半楕円形	52.5	不明	遺物なし
D104	ぬ-17	楕円形	58	45	N	U字形	31	不明	遺物なし
D105	ぬ-17	円形	52	52	N-3.5'-W	半楕円形	11	不明	遺物なし
D106	ぬ-16	楕円形	63	53	N-17.5'-W	半楕円形	11	不明	遺物なし
D107	ぬ-17	楕円形	55	(37)	N-74'-E	U字形	21	不明	遺物なし
D108	ぬ-17	楕円形	125	69	N	半楕円形	36	不明	遺物なし
D109	ぬ-17	楕円形	100	65	N-65'-E	半楕円形	16-24.5	不明	遺物なし
D110	に-19	楕円形	123	105	N	逆台形	26.5	弥生中期	弥生中期土器細片が散在
D111	に・ぬ-18	長楕円形	335	120	N-17.5'-W	半楕円形	41.5	不明	遺物なし
D112	に-18	楕円形	117	81	N-22'-W	逆台形	16.5	不明	遺物なし
D113	な・に-17・18	楕円形	270	162	N-43'-E	半楕円形	44	不明	弥生土器片7点
D114	に-19	楕円形	170	102	N-77'-W	逆台形	28.5	古墳?	弥生土器片、鉄鍔、刀子
D115	に・ぬ-24	長方形	338	148	N-19'-E	底面平坦	19	不明	遺物なし
D116	と-19・20	楕円形	233	175	N-21'-W	半楕円形	28	中世	元符通宝出土
D117	て-19	楕円形	196	100	N-47'-E	半楕円形	42.5	不明	半楕円形のテラスが付属する。 長さ56.3cm
D118	な-22	楕円形	90	56	N-24'-E	半楕円形	27	不明	弥生土器3点
D119	と・な-22・23	不整形	(376)	370	N-10.5'-W	半楕円形	66.5	不明	弥生土26点、土製紡錘車1(風倒木址)
D120	と-23	(楕円形)	170	(152)	N-63'-E	逆台形	28	弥生中期	弥生中期土器細片が散在
D121	と-24	(楕円形)	(160)	98	N-12'-W	逆台形	20	弥生中期	弥生中期土器細片少量出土
D122	と-24	楕円形	(140)	(104)	N-66'-E	逆台形	12	弥生中期	弥生中期土器細片少量出土
D123	な-24	楕円形	130	104	N-36'-W	逆台形	25	弥生中期	弥生中期土器細片散在
D124	な-23	楕円形	207	158	N-80'-W	半円形	64.5	弥生中期	弥生中期土器細片少量出土
D125	な-23・24	楕円形	216	(135)	N-61'-W	逆台形	25.5	不明	弥生土器片38点
D126	ぬ-27	楕円形	191	119	N-15'-E	半楕円形	57.5	不明	弥生土器片4点
D127	ぬ-26・27	楕円形	190	103	N-46.5'-E	逆三角形	49	不明	土師器1点、無文弥生土器6点
D128	ぬ-28	円形	140	133	N-19.5'-W	半楕円形	38.5	不明	遺物なし
D129	た・ち-18	楕円形	245	145	N-23'-E	半楕円形	60.5	弥生中期?	1層中、弥生中期土器細片散在
D130	そ・た-24・25	長方形	278	154	N-11'-W	弓状	25	不明	弥生土器出土
D131	ち-17・18	円形	140	138	N-71'-E	逆台形	18	弥生中期	弥生中期土器細片散在
D142	つ-16・17	楕円形	190	108	N-61'-W	鍋底形	42.5	弥生中期	弥生中期土器細片少量出土
D133	た・ち-18	不整楕円形	205	165	N-13.5'-W	逆台形	27.5	弥生中期	弥生中期土器細片散在
D134	た-18	不整楕円形	175	95	N-63'-W	逆台形	22	弥生中期	弥生中期土器細片散在
D135	ち・つ-17・18	不整形	400	125	N-69'-W	-	34	弥生中期?	弥生中期土器細片少量出土
D136	な・に-21・22	楕円形	308	(215)	N-18.5'-W	半楕円形	80	弥生	弥生中、後期土器少量出土
D137	に・ぬ-25・26	楕円形	266	148	N-1.5'-W	半楕円形	44	弥生中期	Y115号住の床下より検出
D138	オ-21	楕円形	124	97	N-87.5'-W	半楕円形	24	不明	遺物なし
D139	て-16	円形	110	110	N-13.5'-W	半楕円形	14	不明	弥生土器出土
D140	に-24	楕円形	282	148	N-44'-E	半楕円形	68	不明	弥生中期甕395-14、砥石273-150、磨製石斧270-89
D141	に-23	楕円形	(115)	90	N-88'-W	逆台形	24	弥生中期?	弥生中期土器細片少量出土
D142	て-15	楕円形	325	(235)	N-78'-W	弓状	28.5	不明	遺物なし
D143	ぬ・お-20	楕円形	(285)	143	N-63.5'-W	半楕円形	60	不明	弥生土器片2点
D144	ぬ-16・17	円形	224	203	N-18.5'-W	逆台形	35	不明	遺物なし
D145	に-17	楕円形	(160)	(115)	N-41'-W	半楕円形	45	不明	遺物なし
D146	た-13	楕円形	170	153	N-86.5'-W	半楕円形	52	弥生中期	弥生中期土器細片少量出土
D147	そ-13	円形	175	142	N-1.5'-E	半楕円形	34.5	弥生中期	弥生中期土器細片少量出土
D148	つ-17・18 て-17	不整楕円形	410	182	N-50.5'-W	凹凸激しい。	21	近代	19C代の陶器出土

第80表 北西ノ久保遺跡土坑一覧表〈2〉

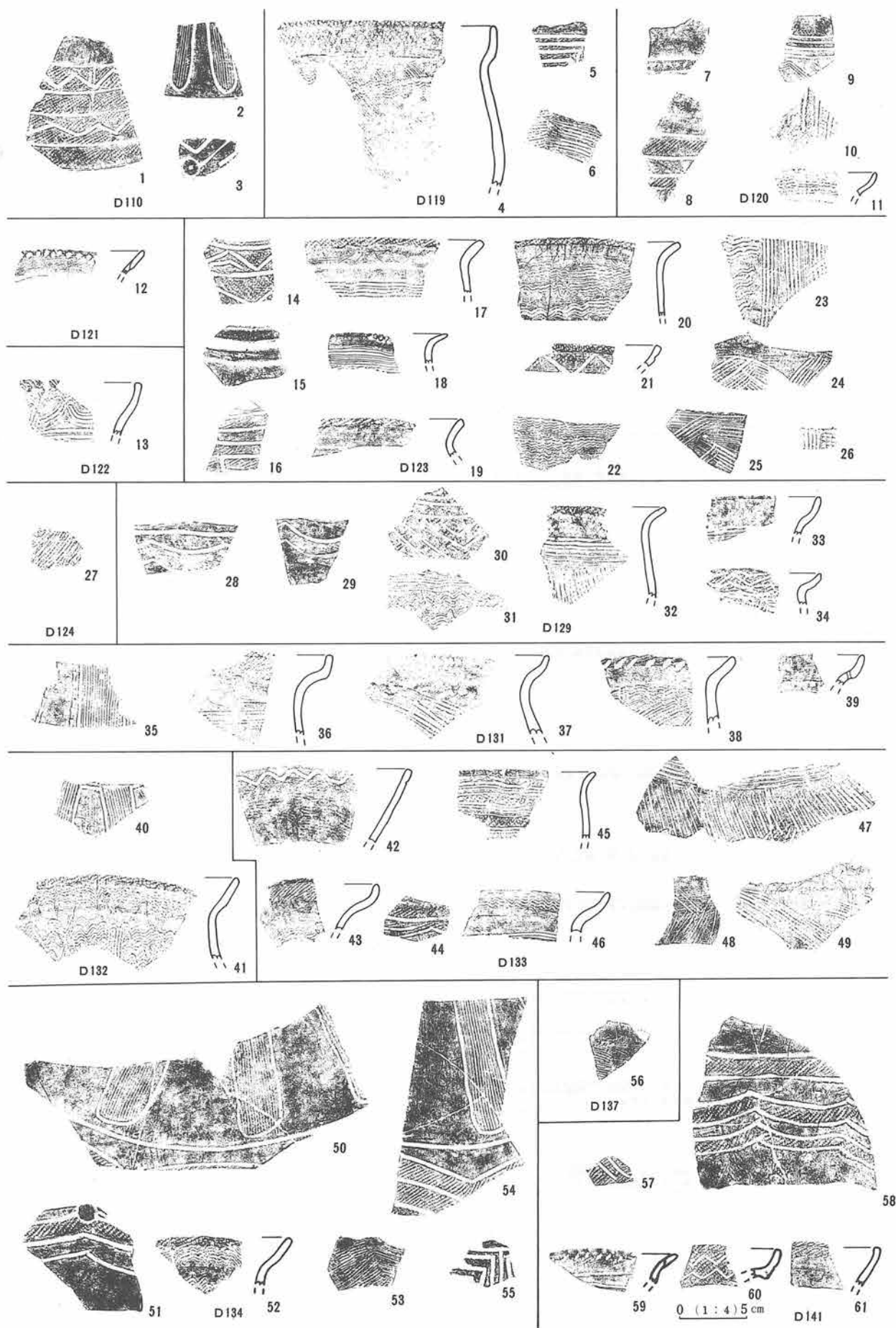
遺構名	検出位置	平面・形態	規 模		長 軸 方 位	断 面 形 状	深 さ	時 期	備 考
			長軸長 (cm)	短軸長 (cm)					
D149	つ・て-18・19	楕円形	264	(223)	N-53.5°-E	-	45.5 ^(cm)	弥生中期	弥生中期土器細片少量出土
D150	ぬ-24	楕円形	84	70	N-14°-E	逆台形	7	弥生中期	弥生中期土器細片散在
D151	つ・て-18	不整形楕円形	(201)	(135)	N-59.5°-E	-	29.5	弥生中期	弥生中期土器細片少量出土
D152	て・と-23・24	楕円形	281	157	N-49°-E	半楕円形	73.5	不明	須恵器甕297-14、土師器、弥生土器
D153	て・と-24	楕円形	137	90	N-47°-W	半楕円形	34.5	不明	遺物なし
D154	に-24・25	楕円形	240	120	N-36°-E	底面盛り上る。	58.5	不明	弥生土器片4点
D155	た-12・13	楕円形	170	130	N-54°-E	逆台形	37	弥生中期	弥生中期土器細片少量出土
D156	け・こ-22	-	-	-	-	-	-	不明	弥生土器片1点
D157	こ-14	楕円形	85	76	N-3.5°-W	逆台形	53	不明	遺物なし
D158	き・し-14・15	不整形	(215)	135	N-44°-W	-	33	不明	397-17、弥生土器片少量出土
D159	ぬ-23 ね-23・24	不整形	-	-	-	-	-	不明	遺物なし(風倒水址?)
D160	ぬ-23	楕円形	184	143	N-21°-E	半円形	39	不明	遺物なし
D161	に-23	-	-	-	-	-	-	弥生中期以前	Y109に破壊されている。
D162	け-18・19	楕円形	(337)	(195)	N-19°-E	半楕円形	82	不明	397-20須恵器甕
D163	こ・き-10	楕円形	(241)	(179)	N-1.5°-E	弓状	10	不明	遺物なし
D164	け・こ-13	楕円形	225	108	N-13°-W	逆台形	43	不明	遺物なし
D165	か・き-18	楕円形	154	110	N-10.5°-W	半楕円形	53	不明	397-21、弥生無文土器片多量
D166	う-15	長方形	242	171	N-36°-E	逆台形	49.5	不明	弥生土器片少量出土
D167	け-12	楕円形	143	119	N-56°-E	半円形	42.5	不明	弥生土器片4点
D168	け・こ-9・10	長方形	348	186	N-72°-W	逆台形	51	古墳中期	
D169	く・け-11・12	長方形	380	219	N-78°-W	逆台形	65.5	古墳中期	
D170	お-13・14	楕円形	253	115	N-4.5°-E	逆台形	57	不明	391-24土師器坏
D171	お-14	長方形	236	162	N-73°-E	逆台形	50	弥生後期?	礫、弥生後期土器混ざって出土
D172	か-15	楕円形	155	104	N-69.5°-W	逆台形	28	不明	弥生土器片2点
D173	き-18	楕円形	100	86	N-3.5°-E	半円形	32	不明	弥生土器片5点
D174	は-14	楕円形	163	127	N-1°-W	半楕円形	32	不明	弥生土器片5点
D175	け・こ・き-11 こ・き-10	-	546	270	N-0.5°-W	-	69	不明	土師器坏片
D176	か・き-12	長方形	384	147	N-22°-E	逆台形	51.5	弥生後期	底面から弥生後期土器出土
D177	た・ち-22	楕円形	703	574	N-44°-E	底面平坦	12	不明	395-26、礫密集



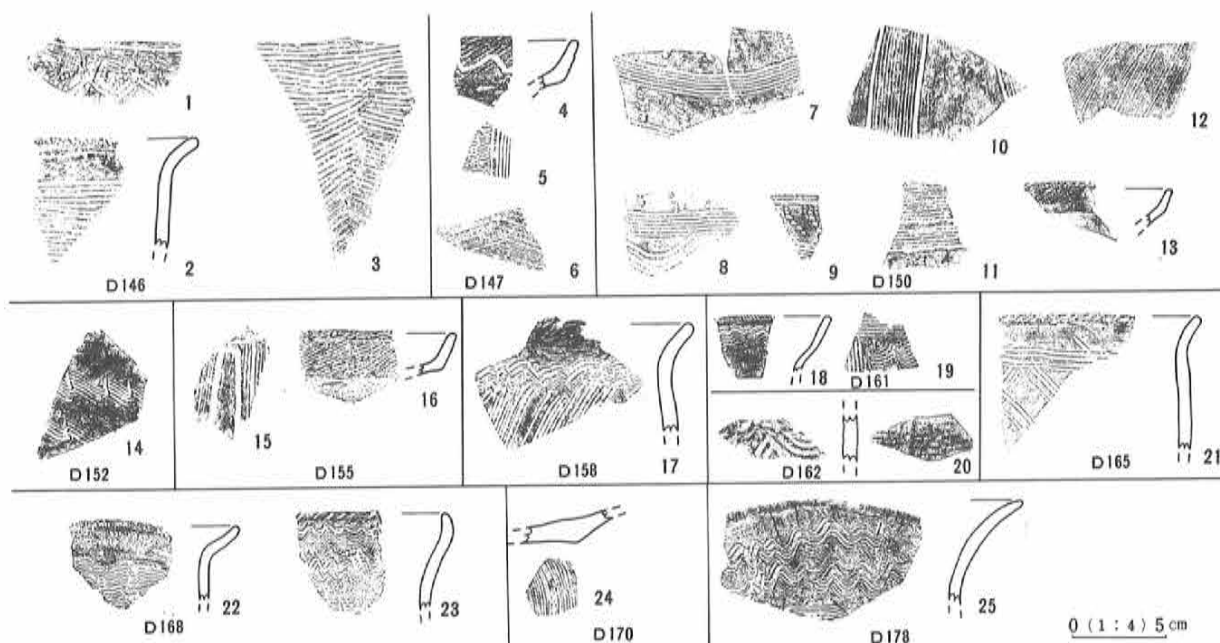
第395図 土坑内出土土器実測図

第81表 土坑内出土土器観察表

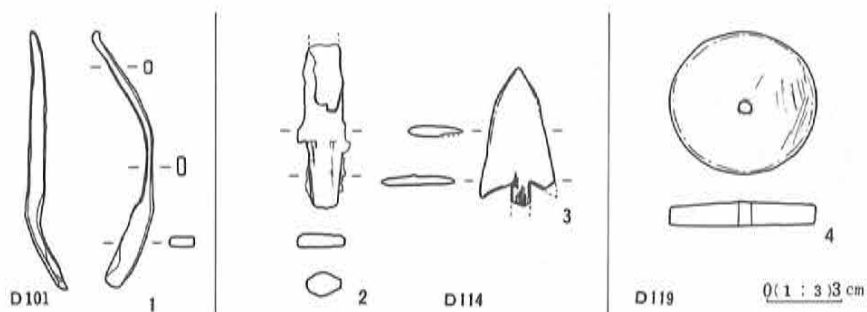
挿 番	図 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
395-1		甕	— (4.3) 6.2		内) 斜位のヘラミガキ→底面付近に僅かなハケメ調整が施されている。 外) 立ち上がり部に縦位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A D123 S区
395-2		甕	— (1.3) (3.2)	底部中央に内外両面から施された。焼成前の1孔を有し、底部は丸底気味を呈する。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 縦位のヘラミガキ→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B D127
395-3		台付 甕	— (2.0) 5.2	底部は5.2×4.2cmの楕円形を呈し、凹レンズ状にくぼんでいる。小型の土器である。	内) ナデが施されている。 外) 縦位のハケメ調整→粗いヘラナデが施されている。	回転実測A D129 1層
395-4		甕	— (2.7) 7.0		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B D131 No.6
395-5		甕	— (8.0) 6.2		内) 斜位のハケメ調整→横位のヘラミガキが施されている。 外) 立ち上がり部に横位のヘラミガキ、以上は斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A D131 No.1・5、1層
395-6		甕	— (29.4) 11.0	胴部は中位下方で大きく張り出す。	内) 胴部上位上方と中位以下に横位のハケメ調整、上位下方は斜位のハケメ調整が施されている。 外) 横位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測Bによる図上復元 D133 No.14・22・23・26・27・36・ 46・59・63・68
395-7		甕	— (15.9) —	頸部は細くしまり、胴部は「無花果形」に張り出すと思われる。	内) ナデが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A D133 No.46
395-8		台付 甕	— (4.8) (7.0)	独立したホゾが用いられている。	内) 甕部は磨減激しく不明、台部は横位のヘラナデが施されている。 外) 縦位のハケメ調整→縦位のヘラナデが施されている。	回転実測B D133
395-9		高 杯	— (4.8) (6.4)	台(脚)部はスリムな感を持つ。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A D133 No.16
395-10		甕	(14.0) (5.8) —	口縁部は頸部から外反し、口縁上部で屈曲し、しっぺりした受け口状に立ち上がる。口唇部は面取りされている。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) ヨコナデ、横位のハケメ調整が施されている。 文) 口唇部・口縁部にL R縄文が施され、頸部はヘラ描横走平行線文の区画中にL R縄文が施されている。	回転実測B D134 No.5
395-11		甕	— (2.9) 5.2		内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整が施されている。	回転実測A D134 No.16
395-12		甕?	— (1.5) 8.2		内) 横位のハケメ調整→横位のヘラミガキ、底部にはヘラケズリ(?)が施されている。 外) 横位のヘラケズリ(?)が施されている。	回転実測A D133 No.12、D134 S区2層
395-13		甕	— (1.7) 5.8		内) ヘラミガキが施されている。 外) 斜位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B D134 No.31
395-14		甕	(17.6) (16.5) (18.8)	最大径は胴部中位にある。口縁部は外傾し内弯気味に立ち上がる。	内) 丁寧な横位のヘラナデが施されている。 外) 胴部にハケメ調整→頸部から胴部に横位のヘラナデ→胴部下位の縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部にL R縄文を地文としたヘラ描連続山形文、口唇部にL R縄文が施されている。	回転実測B D140
395-15		甕	(26.5) (5.3) —		内) 横位のハケメ調整→粗いヘラミガキが施されている。 外) ヨコナデ→斜位のヘラミガキが施されている。 文) 3本一組の櫛描直線文が縦位に施されている。	破片実測B D141、D161
395-16		甕	12.8 (11.4) —	口縁部に径約3mmの焼成前の穿孔を2孔有する。	内) 口縁部に丁寧な横位のヘラミガキ、以下はハケメ調整が施されている。 外) 口縁部に横位のヘラミガキ、頸部に縦位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部にヘラ描連続山形文が3条施され、頸部は横走平行線文が2条施され、その区画内にヘラ描刺突文が充填されている。	回転実測A D151 No.1
395-17		甕	— (8.3) (4.4)	頸部は細くしまり、胴部下位で強く張る。小型土器である。	内) 胴部最大径以上に縦位のユビナデ、以下は斜位のハケメ調整が施されている。 外) 斜位のハケメ調整→胴部最大径以上に縦位のヘラミガキ、以下は横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B D151 No.4
395-18		甕	— (11.9) —	頸部は細くしまり、口縁部は大きく外反すると思われる。	内) 頸部以上に斜位のヘラミガキ、以下は幅の広い横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部以上はハケメ調整→口縁部に丁寧な斜位のヘラミガキが施され、頸部より下は丁寧な横位のヘラミガキ→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に5条のヘラ描横走平行線文が施され、それらによる区画のうち下の2段はヘラ描連続山形文で埋められている。	破片実測A D152 No.2
395-19		鉢	— (2.3) —	やや内弯気味の手握ね土器である。	内・外面に指頭痕が残っている。	破片実測B D155
395-20		甕	— (7.0) (6.2)		内) 丁寧な斜位および横位のヘラミガキが施されている。 外) 底部下位に横位のハケメ調整→全体に縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測B D165 No.5
395-21		甕	— (24.5) 26.3	口縁部は「く」の字状に長く外反し、胴部は中位下方で張り、最大径を有する。	内) 胴部下位に横位のハケメ調整、頸部は横位のヘラミガキが施されている。 外) 文様施文の後、頸部・胴部に縦位のヘラミガキ、胴部最大径位に横位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部に7本一組の櫛描波状文(2連止め・右回り)が施された後、7本一組の櫛描波状文が2帯施されている。	回転実測B D171 No.1 外来系?
395-22		甕	— (10.5) 9.6	胴部は不安定な底部から逆「ハ」の字状に広がり、中位下方で段を有し、ほぼ直立するように上方へつなぐと思われる。	内) 横位のハケメ調整が施されるが、稜の周りは横位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A D176覆土、M6
395-23		甕	— (5.0) 9.0		内) 斜位のハケメ調整が施されている。 外) 丁寧な縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A D176 No.2
395-24		鉢	— (1.8) (8.0)		内) 赤色塗彩が施されている。 外) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B D176底面
395-25		甕	(16.8) (4.5) —	口縁部はラッパ状に外反し、口唇部は面取りされている。	内・外面ともに赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測B D176底面
395-26		土器 師貨小 土皿	— (2.5) —	器高が小さく、底部は割合大きくなると思われる。口縁部はややゆがんでいる。	内) ヨコナデが施されている。 外) 磨減激しく不明。	破片実測B D177



第396図 土坑内出土土器拓影図〈1〉



第397图 土坑内出土土器拓影图 < 2 >



第398图 土坑内出土金属器及び土製品実测图

第7節 礫群およびピット列 (東部南斜面)

東部南斜面の概観 (第399図、図版 百十七・百十八)

東部南斜面の調査区は、第1次調査地区の台地上から連なる約30度の勾配をもつ急斜面とその基部である底面にあたる。この調査区の西隣りは、昭和41・45年に駒沢大学によって発掘調査が行われており、鎌倉時代と考えられる五輪塔、火葬墓塔、詳細は不明であるが中世の墓域に深く関わる遺構・遺物が検出されたという。このような状況から当初はこれらに連なる中世墓域の一端の検出が予想されたのであるが、実際調査で検出された遺構は、時期・性格ともに不明確な礫群6基とピット列が1基で、中世の墓域に直接関わりと考えられる遺構は発見できず、本調査区まで墓域が続かないことが判明した。

斜面中位から基部にかけては大別三層にわたる第I～III層の第2次堆積土が流出し、斜面の傾斜に従って漸時厚く最厚部では220cm以上堆積して、それぞれに文化層を形成している。礫群6基・ピット列1基は斜面中位の黄褐色ローム層上から検出された第1号ピット列、第4・5号礫群を除き、いずれもこの各文化層中に分布し、それぞれ形成時期に相違のあることを示している。以下に各礫群の検出層序を記しておく。

- | | | | |
|-------|-------|------------------------------------|---------|
| 第I層 | 明茶褐色土 | 台地上の湯川層が流出して形成されたと考えられる砂層。…………… | 第1号礫群 |
| 第II層 | 黒褐色土 | 第III層にくらべ色調がくすみ、しまり・粘性も弱い。…………… | 第2・3号礫群 |
| 第III層 | 黒色土 | φ0.5～2cmの赤色のパミスを多量に含み、かたくしまる。…………… | 第6号礫群 |

これら各堆積層中より出土した遺物は第1層中からは近・現代(19世紀以降)と考えられる陶磁器やガラス片、及び台地上から流れ落ちたと考えられる磨耗した弥生土器・土師器・須恵器・埴輪片(第410図参照)など、第II層からは、平安時代の土師器・須恵器(第407・408・409図参照)、第III層中からは遺物が極めて少ないが弥生時代の所産と考えられる打製石斧(第411図参照)などが主体的に出土している。このことから、第I層は近・現代までに、第II層は平安時代前後に、そして第III層は弥生時代前後に形成されたことが推定されよう。

従って、これらの各層中から検出された礫群も、第1号礫群が近・現代、第2・3号礫群が平安時代前後、第6号礫群が弥生時代前後に形成されたものと判断しておきたい。また、文化層中から検出されていない、第4・5号礫群および第1号ピット列については、明確な伴出遺物もなかったため、時期判定することができない。

礫群の性格については、第1号礫群を除き、規格性・配列性があまり認められず、人為的に造られたものなのか、自然営力によって形成されたものなのか、各礫群によって理解が異なる。以下には各礫群毎にそのあり方を示しておこう。(小山)

1) 第1号礫群

遺構 (第400図、図版 百十七)

前述した如く第1層上、シ・スー4～6グリッド内から検出された。礫群内では最も南側に位置する。

西側の調査区外にまで細長く連なる礫群で、検出長約7.3m、幅1m内外を計測する。礫群の中では唯一掘り込みを有するものであり、深さ70cm内外、掘り込み断面は底面が平坦な逆台形状の溝内に大小様々な大きさの礫を充填して形成された礫群である。人為的に形成されたものであることは明白である。

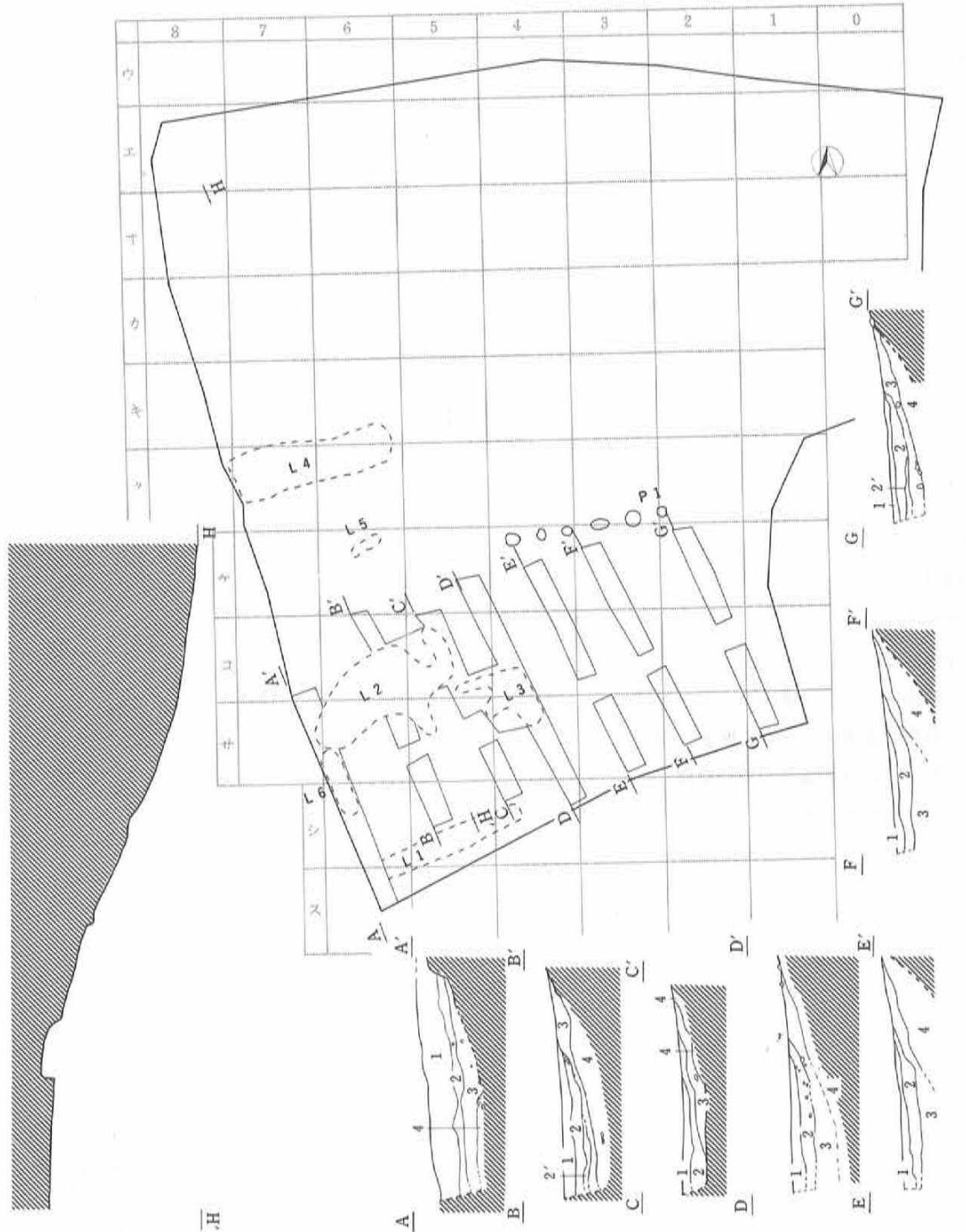
時期は先述したように近・現代に位置づけられ、近接する農業用道路に沿って走っていることは興味深い。遺物はいずれも混入遺物であり、磨耗した内面黒色研磨の坏片を含む土師器が、5点のみ出土している。(小山)

2) 第2号礫群

遺構 (第401図、図版 百十七)

本遺構は斜面低位、調査区西側のコ・サー5～7グリッド内に位置し、礫群中では最も大きな広がりをもつ。

東西750cm、南北490cmの範囲にわたって不規則な広がりを示し、中央部、および西側の2箇所に密集を示す以外は散漫な分布状況である。垂直分布は高低差30cm内外の範囲内におおむね収まっているが、北から南すなわち、斜面の勾配に従ってレベルを低下させる傾向にある。このような状況から、本礫群は台地上、あるいは斜面上部から陥落した礫が斜面が平坦化する基部に至って集束して形成されたもの=自然営力によって形成されたもの



- | | |
|----------|--|
| 1 明茶褐色土層 | 2 次堆積の砂層。磨耗した土器片を含む。 |
| 2 黒褐色土層 | 3 よりも色調が暗く、粘性しまりも弱い。※5mm前後のバミスを含む。 |
| 2 黒褐色土層 | 2 よりバミス含有量が少ない。 |
| 3 黒色土層 | ※0.5~2cmの赤色のバミス(?)を多量に含み、かたくしまる。弥生の包含層か? |
| 4 明茶褐色土層 | 2 次堆積砂層。1 よりも色調は明るく、遺物は含まれない。 |

標高680.7m

0 (1:300) 10m

第399図 東部南斜面全体図

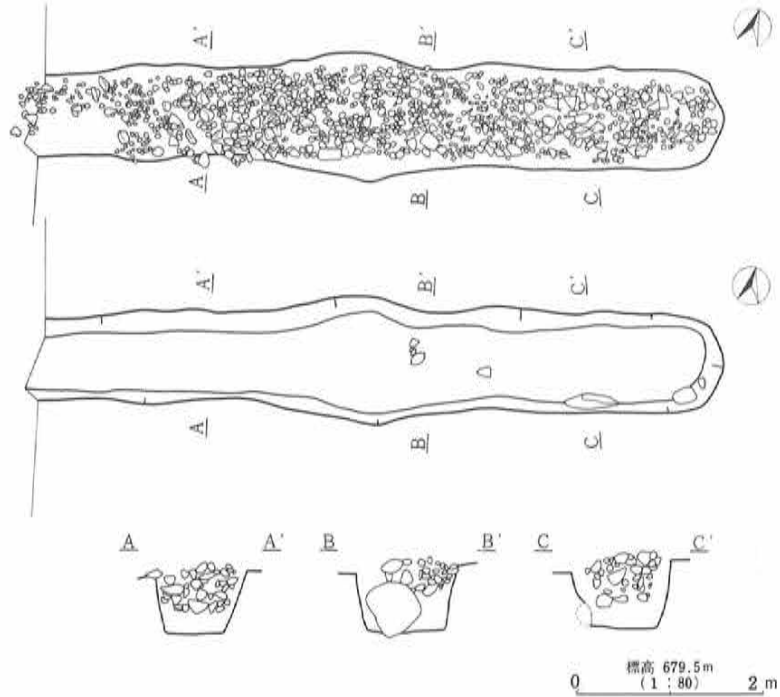
のと理解できる。

遺物の分布状況

本礫群中における遺物の分布状況は、各所に弥生土器・土師器・須恵器の細片が散漫に分布する程度で特に集中する箇所はみられない。

遺物 (第407図)

図化し得たものには弥生土器(?),高坏の脚部がある。細長いスリムな形態をもち、小形の高坏と考えられる。赤色塗彩は施されず、縦位のヘラミガキが丁寧に施されている。(小山)



第400図 第1号礫群実測図

3) 第3号礫群

遺構 (第402図、図版 百十八)

本礫群は斜面基部の中央西寄り、コ・サー4・5グリッド内に位置し、第2号礫群と同じく、全体層序第II層中から検出された。位置関係も第2号礫群の西側に近接するため、両者が同時期に形成された関連性の強い遺構であることが推察される。

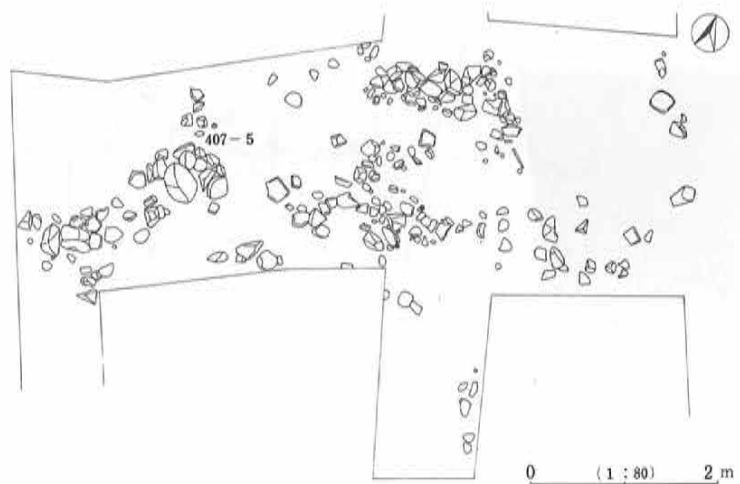
礫群の範囲は、4m×4mの不規則な広がりをもち、第2号礫群に比べると、密集度が濃い。垂直分布は高低差30cm内外の範囲内におおむね収まっている。

遺物の出土状況

出土量は少ないが礫群中各所に土師器・須恵器片が分布する。全体に散漫な分布であるが、南側にやや集中する傾向がみられる。

遺物 (第407図、図版 百十八)

本礫群出土遺物には土師器・須恵器がある。土師器の器種には坏407-3がある。口縁部は内弯して開き、内面は黒色研磨、外面はロクロヨコナデが施されている。底部は回転糸切りが施されるが、周縁部にヘラケズリが加えられている。須恵器の器種には長頸壺・甕・坏がある。長頸壺407-1・2は口縁～頸部、407-4は底部片である。1・2は口縁端部につまみ出しによる突帯を有している。4は貼付による高台を有する。



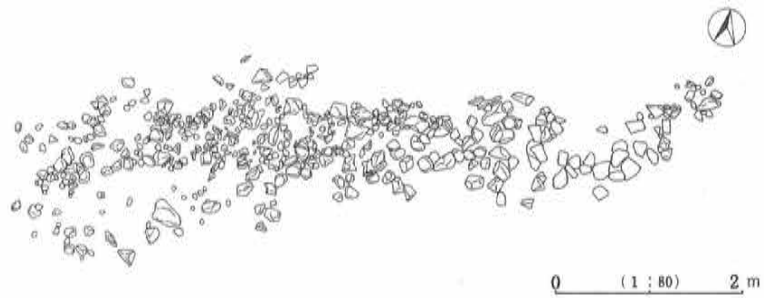
第401図 第2号礫群実測図



第402図 第3号礫群実測図

甕408-1・2はいずれも平行叩き目文が明瞭に残り、2にはカキ目痕が加えられている。坏407-6は内外面ともにロクロヨコナデが施されている。これらの遺物は平安時代前葉の様相を示すものと理解される。

(小山)



第403図 第4号礫群実測図

4) 第4号礫群

遺構 (第403図、図版 百十七)

斜面の中位、調査区の西端、キ・ク-6・7・8グリッド内に位置し、黄褐色ローム層上より検出された。このため、全体層序第I~III層中から検出された礫群との前後関係は明らかでない。

礫群は斜面上に検出長約7.5m、幅1m内外の範囲で細長く分布しており、更に西側の未調査区へ継続する。また大小の平尾の安山岩と塚原泥流の安山岩が混在し、密集した状態である。第1号礫群と平行する位置関係を持ち、何らかの関連も考えられるが、伴出遺物がないため、時代性が明らかでなく、判断しきれない。

(小山)



第404図 第5号礫群実測図

5) 第5号礫群

遺構 (第404図、図版 百十七)

本礫群は斜面中位、調査区のケー6グリッド内に位置し、黄褐色ローム層上より検出された。東西方向直線上の配列をもつ礫群で、7個の集塊岩・安山岩の組み合わせによって構成されている。伴出遺物がなく、時代性は明確にできない。

(小山)

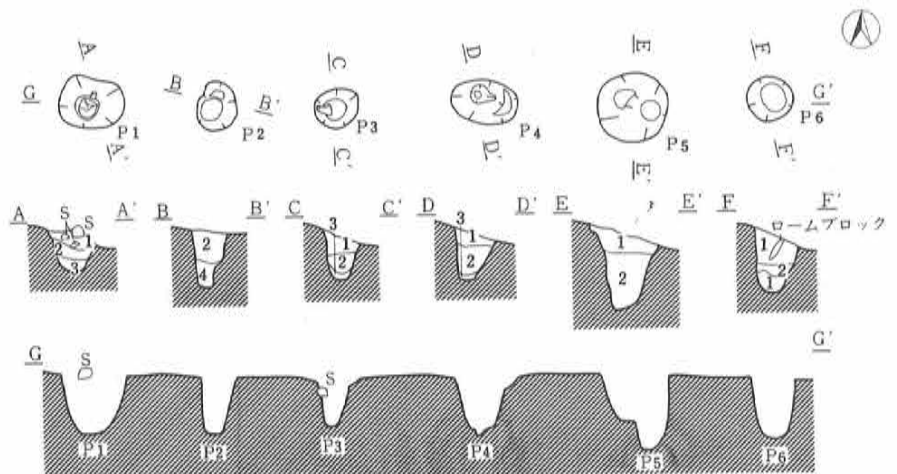


第405図 第6号礫群実測図

6) 第6号礫群

遺構 (第405図)

本礫群は、全体層序第III層、Eトレンチ内において確認された。トレンチ確認であるため、全容は明らかでないが、最も古い時期に形成された礫群である。斜面の傾斜に従って徐々にレベルを低下させる傾向にあり、自然営力によって形成された可能性が強い。伴出遺物がなく、時代性は明確でないが、南側の同じ層



- 1 黒褐色土層 礫を含む。
- 2 黒褐色土層 粘性はやや強い。微量のローム粒子を含む。
- 3 暗茶褐色土層 ローム粒子と多量の小礫(径1-2cm)を含む。
- 4 黒色土層 粘性はやや強い。きめ細かい。

標高 681m
(1:80) 2m

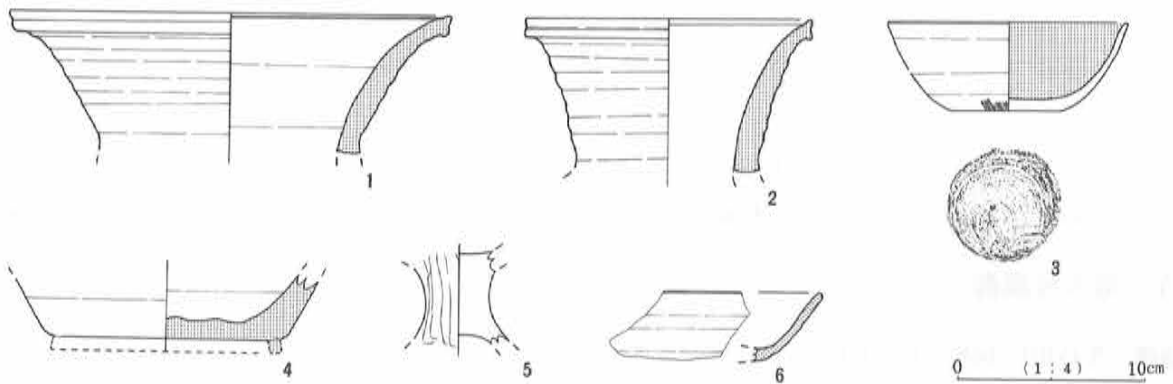
第406図 第1号ピット列実測図

序内から検出された打製石斧410-1が弥生時代に所産が求められることから、本礫群の所産もこれに近いものと考えておきたい。(小山)

7) 第1号ピット列

遺構 (第406図、図版 百十八)

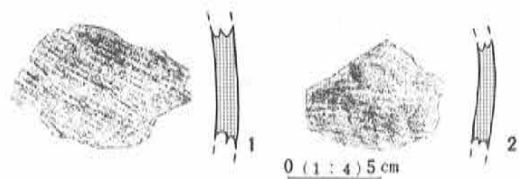
本遺構は斜面下位、調査区中央東寄りのク・ケー3・4グリッド内に位置し、黄色ローム層上より検出された。南側は全体層序第II層が厚く被覆し始めるため、同様なピットの確認ができなかったが、おそらく、同様な配列をもつピット列が存在したと考えられ、本ピット列は掘立柱建物址の一部である可能性が高い。ピット列はほぼ東西直線上に並び、東西長7.8mをはかり、5間の柱穴配置をもつ。各ピットは径45~70cmの円形か楕円形を呈し、深さは44~92cmをはかる。断面形はおおむねU字形を呈し、柱痕は残っていない。遺物は少ないがP₄・P₅内から土器器坏・甕の小片が出土している。本遺構の所産期については明確でない。(小山)



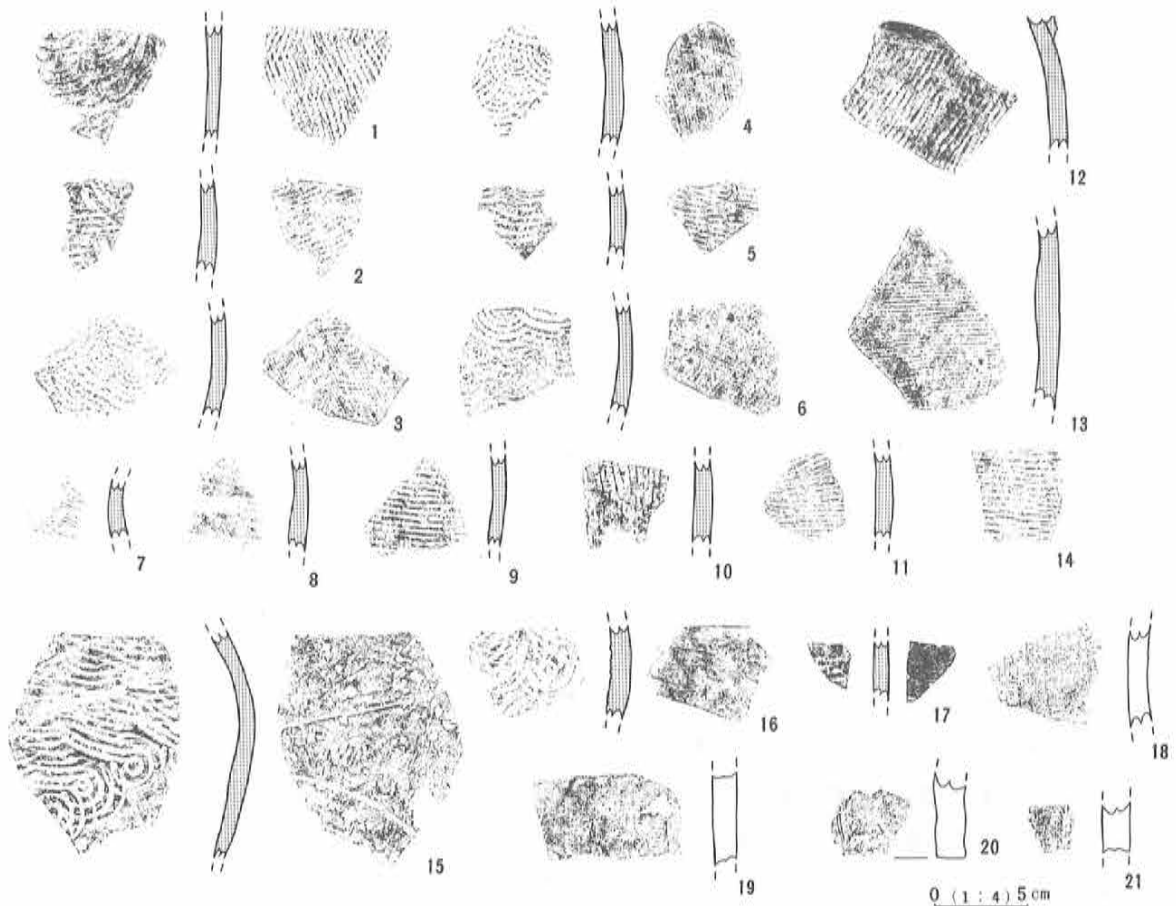
第407図 第2・3号礫群出土土器実測図

第82表 第2・3号礫群出土土器観察表

種番	図号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 査	備 考
407-1		須長頸器壺	(23.4) < 7.3> —	口縁部は端部につまみ出しによる突帯が巡っている。	内・外面ともにロクロヨコナデが施されている。	回転実測B No.2, L.3
407-2		須長頸器壺	(15.2) < 8.0> —	口縁部は端部につまみ出しによる突帯が巡っている。	内・外面ともにロクロヨコナデが施されている。	回転実測B グリッドトレンチ坑 L.3
407-3		土師器坏	(12.8) 4.7 5.8	口辺部は内弯気味に外傾している。	内) 黒色処理・ヘラミガキが施されている。 外) ロクロヨコナデ(右回転)、底部周辺にヘラケズリ、底面は回転糸切りが施されている。	回転実測A No.8 L.3
407-4		須長頸器壺	— < 3.1> (12.0)	高台が貼付されている。	内・外面ともにロクロヨコナデが施されている。	回転実測B No.1 自然粘付着。L.3
407-5		高坏	— < 5.1> —	スリムな脚(台)部である。	内) ナデが施されている。 外) 縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A No.11 L.2
407-6		須長頸器坏	— < 3.7> —		内・外面ともにロクロヨコナデが施されている。	破片実測B No.4 L.3



第408図 第3号礫群出土土器拓影図



第409図 東部南斜面表採土器拓影図

8) グリッド・表採遺物

弥生土器・須恵器・土師器・埴輪などがあるが、大方は台地上から流れ込んだものと考えられる。

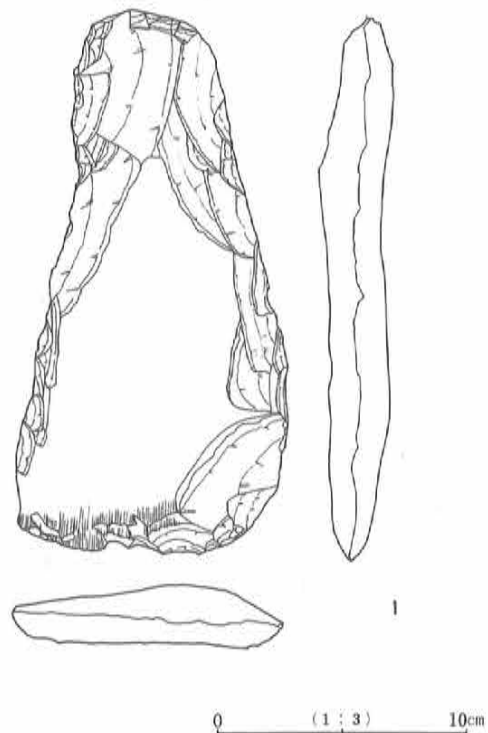
図化した須恵器409-1~14・16は外面に平行叩きが施され、内面には同心円文をもつものが多い。409-15は外面にカキ目痕をもつ。

埴輪片409-18~21はいずれも円筒埴輪と考えられ、タテハケの調整がみられる。

石斧410-1は玄武岩製の大型品で撥形を呈する。弥生時代の所産と考えられ、第III層の年代決定の手掛りとなる唯一の遺物である。

この他、図化しなかったが、外稜を有する須恵器模倣の坏などの古墳時代後期の土師器も少量ながら出土している。

(小山)



第410図 東部南斜面表採石器実測図

第8節 グリッドおよび表採遺物について

遺物（第411・412・413・414図、図版 百十九・百二十）

本調査では台地上において多量の遺物が耕作土中、遺構確認面から出土した。これは台地上の耕作土が20cm内外と薄いため、地下の遺構が著しく攪乱されたからに他ならない。遺物中には完存品あるいはそれに近いものも多い。特に昭和54年度の確認調査において検出された遺物は遺構と共伴する可能製の強いものも含まれているが出土地点が不明確なものや、重複関係が激しい地点から出土したものは、やむを得ず、グリッド出土遺物に含めて紹介することにした。

グリッド出土・表採遺物のうち、土器は49点、石器30点、貨幣4点を図化した。このうち石器については第1節において詳述されているため、ここでは土器・貨幣についてのみ説明を加える。

土器には弥生土器411-1~14、古墳時代土師器412-21、古墳時代須恵器412-23~25、埴輪片412-22、413-15~17、平安時代土師器412-26、時期不明の須恵器413-18、現代陶磁器412-27~31がある。

弥生土器411-1~20はほとんどが弥生時代中期後半の土器と考えられる。器種には壺・無頸壺・甕・台付甕・注口鉢・片口鉢・鉢などの他、容器形土偶と考えられるものもある。

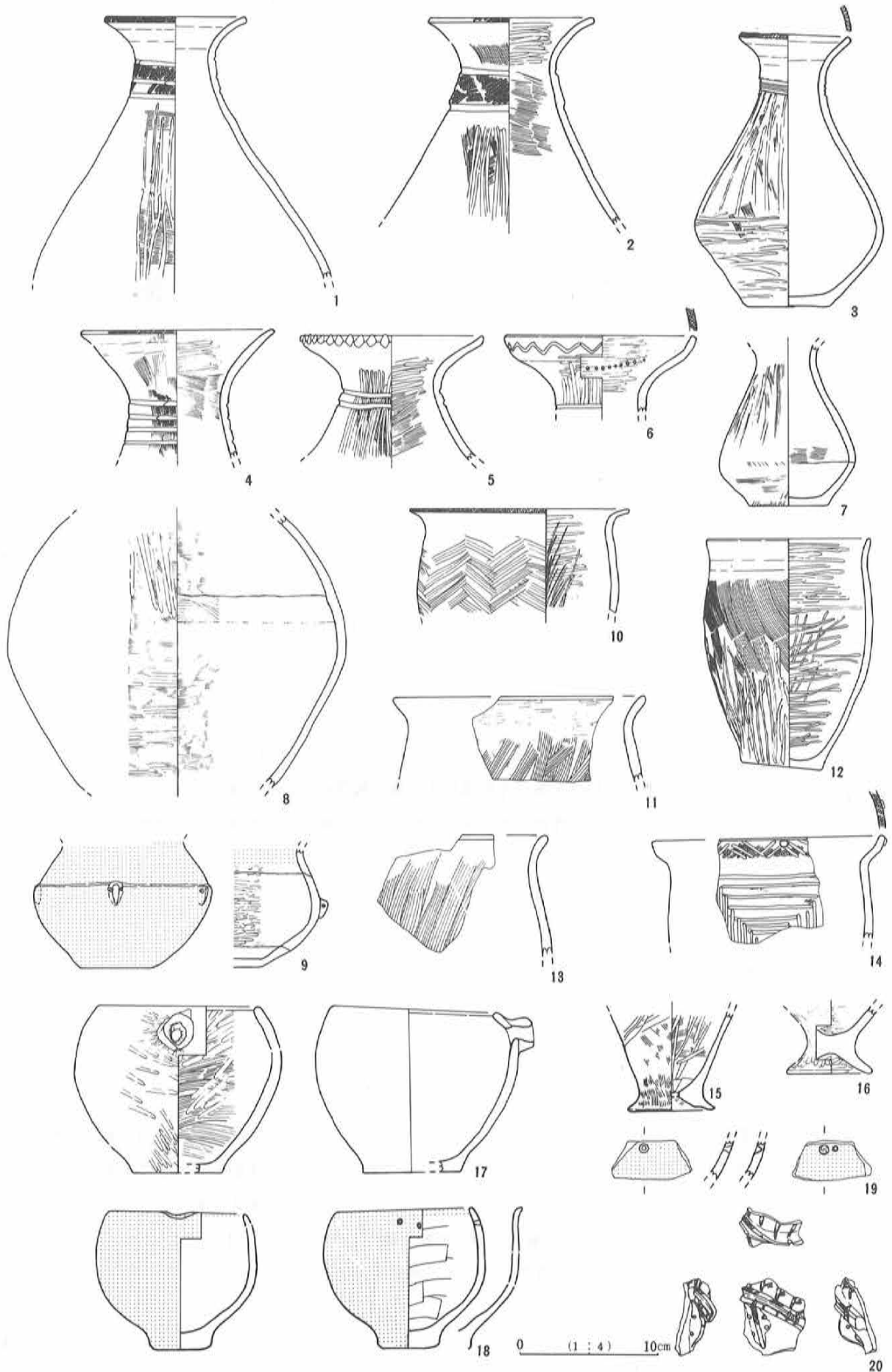
壺には単純口縁の411-1~5と受口口縁の411-6がある。単純口縁の411-1~5はいずれも細頸壺で、口縁部はラッパ状に外反する。口縁端部はすべて面取りされ、1・2・4に縄文、3・5にヘラ描の刻目文に縄文をもつ。外面調整は1・2・3・5がハケメ調整をヘラミガキで消しているが、4のみハケメ調整痕をそのまま残している。受口口縁の411-6は受口部の外稜がやや不明瞭な細頸壺である。口唇部は面取りされ、縄文が施されている。受口部には篋描連続山形文が一条、頸部には篋描横走平行線文が施されている。この他、口縁部を欠損する小型の411-7、無文の胴部片411-8、波状の櫛描垂下文を篋描文で区画した413-1、頸部に4帯の貼付突帯を有する413-1、数条の篋描横走平行線文区画の上部の区画内に櫛描横走平行線文・連続山形文、竹管状の刺突文を充填した413-3、LR縄文地文上に波状の篋描垂下文その下部に円形浮文を貼付した413-4、胴部上~中位に櫛描垂下文を篋描文で区画し、その周囲に篋描列点文、下位に縄文を地文として篋描連続山形文・横走平行線文を施した413-11、413-11と同様な文様構成をもつ小型の413-12、垂下文に篋描の区画をもたない413-13、篋描文上にこぶ状の突起を有する413-7などがある。

また、細頸壺の他に広口壺411-9、413-5、無頸壺か広口壺と考えられる413-14などもある。411-9は胴部中位4箇所吊り手状の孔を穿った突起をもち、外面全面と口縁部内面に赤色塗彩が施されている。413-5は短く外反する口縁部をもち、口唇部は面取りされている。口唇部に縄文、胴部にLR縄文を地文として篋描横走平行線文・連弧文が施され、連弧文の頂部には円形浮文が貼付される。また、最上位の文様帯中には、篋描の刻目文がめぐっている。413-14は、縄文を地文として篋描横走平行線文・連弧文などが施され、胴部中位には、411-9と同様の突起をもつ。

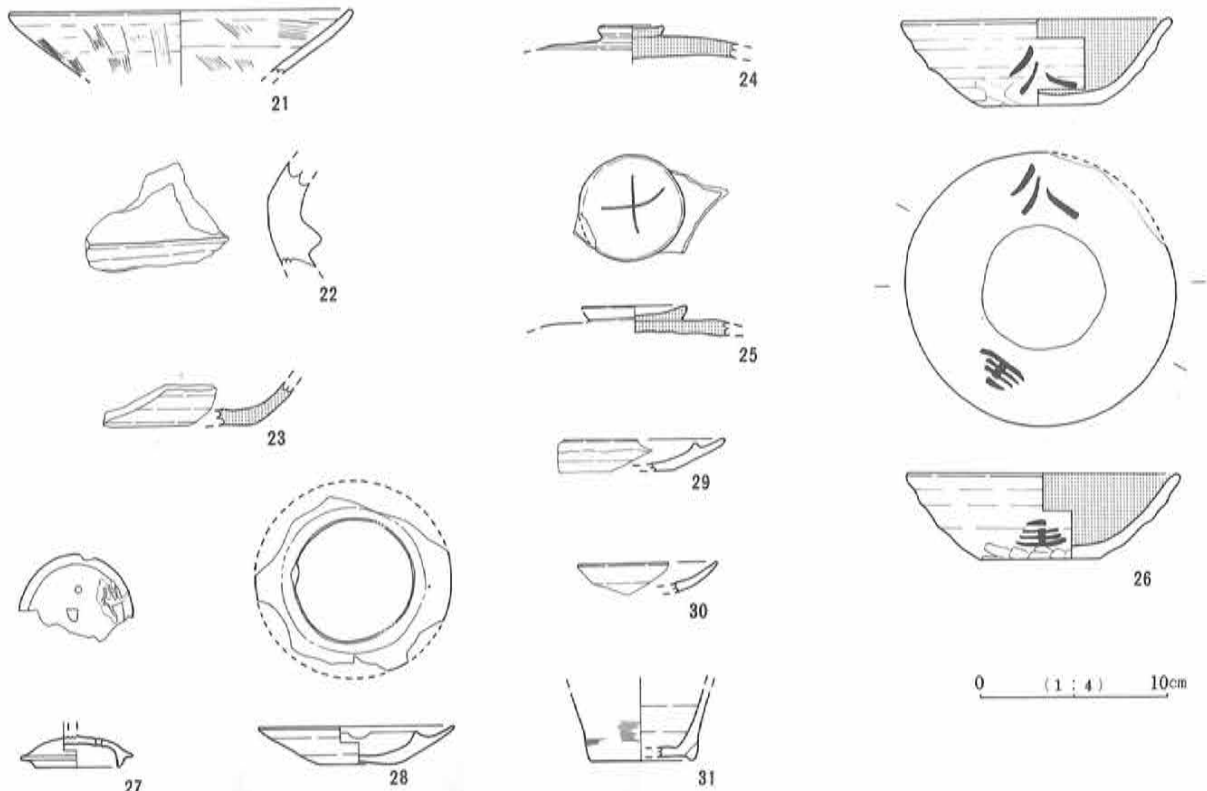
甕にも受口口縁を有する411-14、413-6と単純口縁の411-10・11・12・13がある。受口口縁の甕411-14は受口部は割合しっかりとした外稜をもち、胴部は軽くふくらむ。受口部にLR縄文を地文とした篋描連続山形文、円形浮文、胴部に「コ」の字重ね文をもつ。台付甕になるかもしれない。413-6はやはりしっかりとした外稜をもち、受口部には縄文、頸~胴部には櫛描横走平行線文が施されている。

単純口縁の甕は口縁部が強く外反する411-10と緩く外反する411-11・12・13がある。胴部はいずれも軽くふくらむ。411-10のみ口唇部に縄文が施され、胴部は櫛描斜走直線文が縦位羽状に施されている。411-11・12・13はいずれも口唇部に文様をもち、胴部に櫛描斜走直線文が施されている。この他、甕には櫛描垂下文によって区画された、櫛描波状文が施される413-8などがある。

台付甕には411-15・16がある。いずれも小型の台部を有している。台部は甕部と別途に作られたものでなく底部



第411図 グリッド・表採土器実測図〈1〉



第412図 グリッド・表採土器実測図〈2〉

の粘土板をつまみ出すように成形されたと考えられる。文様は15にのみあり、楕円斜走直線文が施されている。

鉢には注口をもつ411-17、片口をもつ411-18、椀状を呈すると考えられる411-19がある。17は無彩でやや粗めのヘラミガキが施されるのみで、18は外面に赤色塗彩が丁寧に施されている。また、片口の対面には焼成前に2孔一対の穿孔が施されている。19は内外面に赤色塗彩が施される。焼成前に内側からと外側から各1箇所ずつに2孔一対の穿孔が試みられているが、内側からの穿孔は貫通していない。

411-20は容器形土偶の顔面部、頭部及び左耳部の破片と考えられる。頭部の髪は「巻髪」と称されるような形を呈し、耳部には2孔の穿孔がみられる。同様な類例は南佐久郡佐久町館遺跡の既出資料（島田1980）、神奈川県中屋敷遺跡などにみられる。

弥生時代後期の土器には甕413-9・10がある。いずれも頸部に右回りの楕円波状文（二連止め）、口縁部・胴部に右回りの楕円波状文が施されている。

古墳時代の土師器412-21は高坏坏部の口縁部片である。内外面にハケ調整が残る。古墳時代中期（和泉併行期）の所産と考えられる。

古墳時代の須恵器412-23-25は23が坏の底部片、24・25が蓋の天井部片である。23の底部は回転ヘラ切り、手持ちヘラケズリが施され、奈良時代のものかもしれない。24・25は、いずれも中凹みのつまみを有し、25の内面には「十」字状のヘラ記号が描かれている。これも奈良時代まで下がるものであるかもしれない。

埴輪片412-22、413-15・16・17は円筒埴輪か朝顔型埴輪の破片と考えられる。412-22は断面三角形のタガをもち、413-15・16・17はタテハケの調整が施されている。本例を含め、今回の調査で形象埴輪と考えられるものは一点も出土していない。

平安時代の土師器には412-26がある。ロクロヨコナデが施されたのち内面に黒色研磨が施され、底部は回転糸切りののちに、周縁部をヘラケズリしている。口辺部外面には2箇所墨書が施され、それぞれ「久」「主」

第83表 グリッド・表採土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
411-1	壺	10.0 <19.0> -	口縁部は大きく外反し、「ラッパ」状を呈する。胴部は中位下方で張る。	内) 磨減著しく不明。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部には横位のハケメ調整の後、縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にLR縄文、頸部にLR縄文施文の後、ヘラ描横走線文が3条施されている。	完全実測 て16・17グリッド内耕作土
411-2	壺	11.8 <14.5> -		内) 口縁部に横位のヘラミガキ、頸部以下は横位のハケメ調整が施されている。 外) 口縁部は縦位のハケメ調整→上位に横位のハケメ調整、胴部は縦位および横位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 頸部にヘラ描横走平行線文が2条施され、その区画内と口唇部にLR縄文が施文されている。	回転実測A い11グリッド内耕作土
411-3	壺	7.7 19.6 6.0	口縁部は大きく外反し、「ラッパ」状を呈する。胴部は中位下方で張る。	内) 口縁部にヨコナデが施されている。頸部以下は観察不可能。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部には斜位のハケメ調整の後、胴部上位に縦位のヘラミガキ、胴部下位には横位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部にヘラ描刻目文、頸部にヘラ描横走平行線文が4条施されている。	完全実測 に23グリッド内
411-4	壺	13.3 <9.2> -		内) 全面に横位のハケメ調整→口縁部に横位のヘラミガキが施されている。 外) 全面に縦位のハケメ調整→口縁部上位に横位のハケメ調整が施されている。 文) 頸部にヘラ描横走平行線文が4条、口唇部にLR縄文が施されている。	回転実測A み38グリッド内耕作土
411-5	壺	(8.6) <13.2> -	口縁部は頸部から外反し、口唇部でつまみ上げられるように立ち上がる。	内) 口縁部にはヨコナデおよび横位のヘラミガキ、頸部以下は横位のハケメ調整が施されている。 外) 口縁部にヨコナデ→横位のヘラミガキ、口縁部下位から頸部は縦位のハケメ調整→縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口唇部は指頭押捺が成され、頸部はヘラ描横走平行線文が2条施されている。	回転実測B な30グリッド内表採 な30グリッド内耕作土
411-6	壺	13.6 <9.2> -		内) 口縁部に横位のハケメ調整→口縁部から頸部に横位のヘラミガキ、頸部はナデが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ→口縁部上位から中位に横位のヘラミガキ→口縁部下位に縦位のヘラミガキが施されている。 文) 口縁部にLR縄文、口縁部にヘラ描連続山形文、頸部にヘラ描横走線文が施されている。内面に竹管状の刺突が1列に施されている。	回転実測B た19グリッド内
411-7	壺	- <11.3> 5.6	胴部は下位で張る。	内) 胴部下位に横位のハケメ調整が施されている。 外) 胴部上半部に縦位のハケメ調整の後、縦位のやや雑なヘラミガキが施されている。	完全実測 な22、に22グリッド内
411-8	壺	- <19.5> -	胴部は中央で球状に張り出し、最大径部以下はやや直線的に底部へ向かう。	内) 全面に横位のハケメ調整が施されているが、粘土帯と思われる部分のみハケメの単位が大きくなっている。 外) 全面に斜位のハケメ調整→上半に縦位のヘラミガキ、下半に横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A き19グリッド内
411-9	壺	- <8.5> 5.2 13.0	輪積み成形。胴部最大径位に稜を持ち、ほぼ5等間隔で、一孔を有する楕円形浮文を貼付している。	内) 頸部以上に赤色塗彩・横位のヘラミガキ、以下には丁寧な横位のヘラミガキが施されている。底部は磨減著しく不明。 外) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A な22・23グリッド内耕作土 内面胴部に赤色顔料の付着がみられる。
411-10	甕	15.8 <7.6> -	胴部は余り張らず、口縁部は太い頸部から強く屈曲する。	内) 横位のヘラミガキ→細い単位の斜位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部から頸部にヨコナデが施されている。 文) 口唇部にLR縄文、胴部に4本一組の櫛描斜走直線文が縦位羽状(右回り)に施されている。	回転実測B ま46グリッド内耕作土
411-11	甕	11.6 16.7 5.7	口縁部のくびれが弱く、最大径を胴部中位に有する。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナデ、胴部上位に縦位のハケメ調整の後、胴部下位には縦位のヘラミガキが施されている。	完全実測 と16グリッド内
411-12	甕	(15.8) <6.1> -	口縁部は短く緩く外反し、胴部は余り張らないと思われる。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 横位のハケメ調整→口縁部に横位のヘラミガキが施されている。 文) 不規則な7本一組の櫛描斜走直線文が施されている。	破片実測A た19グリッド内
411-13	甕	- <8.5> -	口縁部は短く緩く外反し、胴部は余り張らない。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 口縁部にヨコナデが施されている。 文) 7本一組の櫛描斜走直線文が施されている。	破片実測B た19グリッド内
411-14	甕	(16.8) <7.5> -	口縁部は面取りされており、口縁部は受口状を呈する。	内) 丁寧な横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部にヨコナデ、頸部以下は斜位のハケメ調整が施されている。 文) 胴部にヘラ描「コ」の字重ね文、口縁部はLR縄文を地文とし、ヘラ描連続山形文が施され、直径0.6cmの円形浮文が貼付されている。	破片実測A た19グリッド内
411-15	台付甕	- <6.8> (6.4)	台部は不安定で粗雑な作りである。甕部は直線的に立ち上がる。	内) 甕部は中位に横位のハケメ調整、下位はナデ→胴部全面に雑な縦位のヘラミガキ、底部は大きな単位の横位のヘラミガキが施されている。台部はハケメ調整が施されている。 外) 縦位および斜位のハケメ調整が施されている。 文) 胴部中位に粗雑な櫛描斜走直線文が観られる。	回転実測B へ48グリッド内表採 内外面に僅かに煤付着

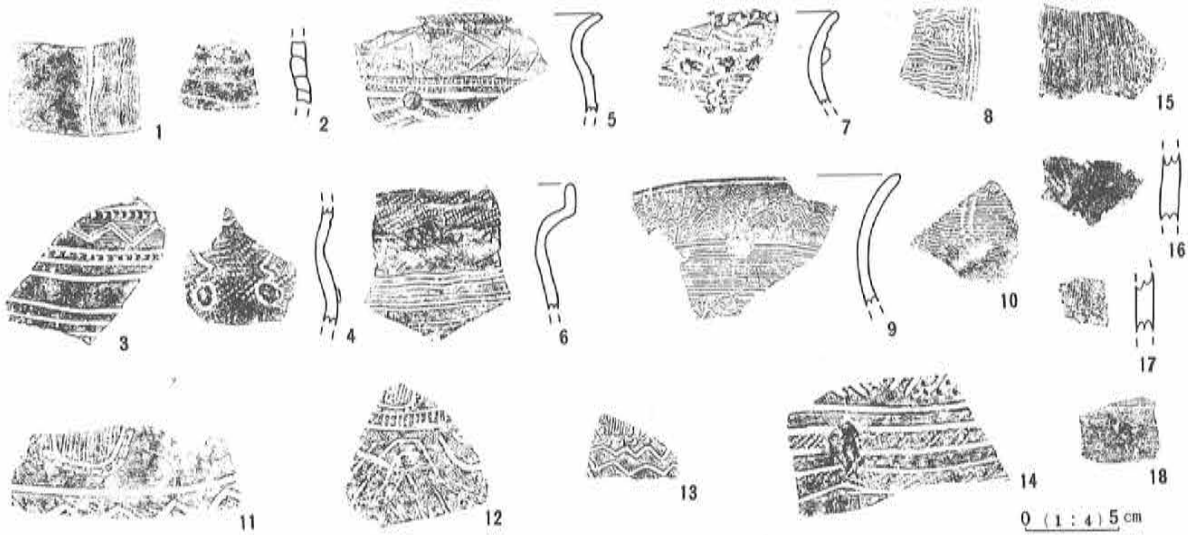
411-16	台付甕	— <4.9> 6.0	台部は「ハ」の字状に短く開き、接合には独立するホゾが用いられたと思われる。	内) 横位のヘラミガキが施されている。 外) 頸部に斜位のハケメ調整、台部は縦位のヘラミガキが施されている。	回転実測A な26グリッド内
411-17	片口注口	11.6 12.1 7.0 14.8	口辺部に一ヶ所貼り付けによる注口を有する。口辺部は内湾する。注口内部はヘラ状工具で整形されている。	内) 斜位のハケメ調整の後、斜位の粗いヘラミガキが施されている。 外) 横位および斜位のヘラミガキが施されている。	回転実測A き28グリッド内耕作土
411-18	片口鉢	10.0 10.2 4.0 11.6	口縁部に焼成前の穿孔を2孔有し、それと対峙する箇所片口を有する。底部はやや丸味を帯び座りが悪い。	内) 横位のヘラミガキ、口縁部に赤色塗彩が施されている。 外) 赤色塗彩・横位のヘラミガキが施されている。	回転実測A 表採
411-19	壺の鉢	— <2.8> —	穿孔は完全なもの途中のもの2孔ある。完全なものは主として外面から施しており、僅かに内面からも工具を当てている。途中のものは、外面から施している。	内) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキが施されている。 外) 赤色塗彩・斜位のヘラミガキが施されている。	破片実測B お17グリッド内
411-20	客土器形偶	— <5.6> —		内面はやや粗時にナデられている。	破片実測B け15グリッド内
412-21	高坏(土)	(18.2) <3.4> —	口縁部は直線的に外傾し、端部でやや内湾する。	内・外面ともにヨコナデの後、縦位・斜位のハケメ調整が施されている。	回転実測B つ18グリッド内
412-22	埴輪	— <5.6> —			破片実測B 表採
412-23	須恵器坏	— <2.4> —		内・外面ともにロクロヨコナデが施されている。底部はヘラケズリが施されている。	破片実測B け9グリッド内
412-24	須恵器蓋	— <1.7> —	貼り付けによるつまみ部は、凹レンズ状にくぼんでいる。	内) ロクロヨコナデ(右回り)が施されている。 外) つまみ部はロクロヨコナデ(右回り)、つまみ部周辺は手持ちヘラケズリが施されている。	回転実測A け9グリッド内
412-25	須恵器蓋	— <1.6> —	貼り付けによるつまみ部は、凹レンズ状にくぼみ、「ヘラ記号」が施されている。	内) ロクロヨコナデが施されている。 外) つまみ部にロクロヨコナデが施されている。	回転実測A け9グリッド内
412-26	土師器坏	14.4 4.6 6.4	口辺部は内湾して開く。	内) 黒色研磨が施されている。 外) ロクロヨコナデが施されている。底部は回転糸切りの後、周辺部ヘラケズリが施されている。	完全実測 墨書2箇所「久」と「主」か? そ27、た27グリッド内
412-27	磁器蓋	4.6 <1.8> —	扁平ながら丸味を帯びる天井部から、口辺部はほぼ垂直に折れ、天井部と口辺部の境には水平な「ツバ状部」を有する。		完全実測A ち16グリッド内 19C
412-28	陶灯明器皿	10.4 2.4 4.0	口辺部は大きく外傾し、器高は低い。内面は口縁部から1.5cm内側に高さ0.5cmの断面三角形のかえりを巡らせ、1箇所丸い切り込みを入れている。	内・外面ともにロクロヨコナデが施されている。	回転実測B ち18グリッド内 内面に淡緑色の釉薬が施されている。19C
412-29	陶灯明器皿	— <1.7> —		内・外面ともにロクロヨコナデが施されている。	破片実測B ち16グリッド内 内面に淡緑色の釉薬が施されている。19C
412-30	陶灯明器皿	— <1.6> —		内・外面ともにロクロヨコナデが施されている。	破片実測B ち17グリッド内 内面に淡緑色の釉薬が施されている。19C
412-31	陶器	— <3.6> (5.6)	底部は回転糸切りの後、高台を貼付しており、胴部は直線的に僅かづつ開き、筒状を呈すると思われる。	内) ロクロヨコナデが施されている。 外) 一部にハケメ調整痕が観られる。	回転実測B 19C つ19グリッド内 外面に釉薬が施されている。

と読み取れる。この土器はY120号住居址の西側から昭和54年の確認調査において検出されているが、本調査では遺構の痕跡がみられず、何故平安時代の完形土器が1点のみ出土したのか理解しかねる。

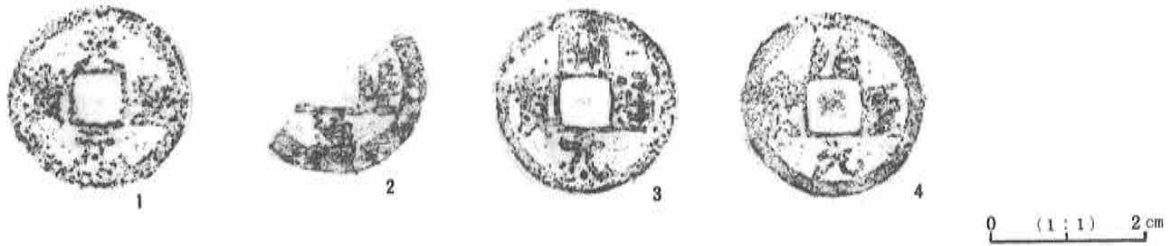
時期不明の須恵器413-18は壺の破片と考えられ、突起を有する。

陶磁器はいずれも19世紀以降の製品である。412-27が磁器蓋、412-28・29・30が陶器灯明皿、412-31が瓶の底部と考えらる。本調査で検出された陶磁器はこの他の細片も同様な年代をもつものであり、中・近世の陶磁器類は確認されなかった。

貨幣は輸入貨幣が4点検出された。414-1・2・4が北宋銭、414-3が唐銭である。414-1は「天聖元宝」、414-2は「元豊通宝」、414-3は「開元通宝」、414-4は「紹聖元宝」でいずれも銅製である。本遺跡内における輪



第413図 グリッド・表採土器拓影図



第414図 グリッド出土貨幣拓影図

第84表 グリッド出土貨幣一覧表

挿図番号	出土位置	名称	素材	製造年代	発行国	備考	挿図番号	出土位置	名称	素材	製造年代	発行国	備考
414-1	Y83 S区1層	天聖元宝(真)	銅	天聖元年 (1023)	北宋		414-3	と-20 グリッド	開元通宝	銅	武徳4年 (621)	唐	
414-2	せ-15 グリッド	元豊通宝(真)	銅	天豊元年 (1078)	北宋		414-4	と-20 グリッド	紹聖元宝(真)	銅	紹聖元年 (1094)	北宋	

入貨幣はこの他に第116号土坑から「元符通宝」、T2号特殊遺構B土坑内から「祥符元宝」、「皇宋通宝」、「開元通宝」の四例が出土している。(小山)

第IV章 総括

第1節 弥生時代

1) 遺構

今回調査の台地上の南半部から弥生時代の遺構は中期後半の竪穴住居址47棟、後期前半の竪穴住居址20棟、中期後半～後期の土坑24基が検出された。第1次調査分の台地上北半部を加えなければ、総合的な弥生集落の考察ができないため、ここでは中期後半と後期前半、各時期の住居址の傾向を指摘するに留めたい。

弥生時代中期後半の住居址

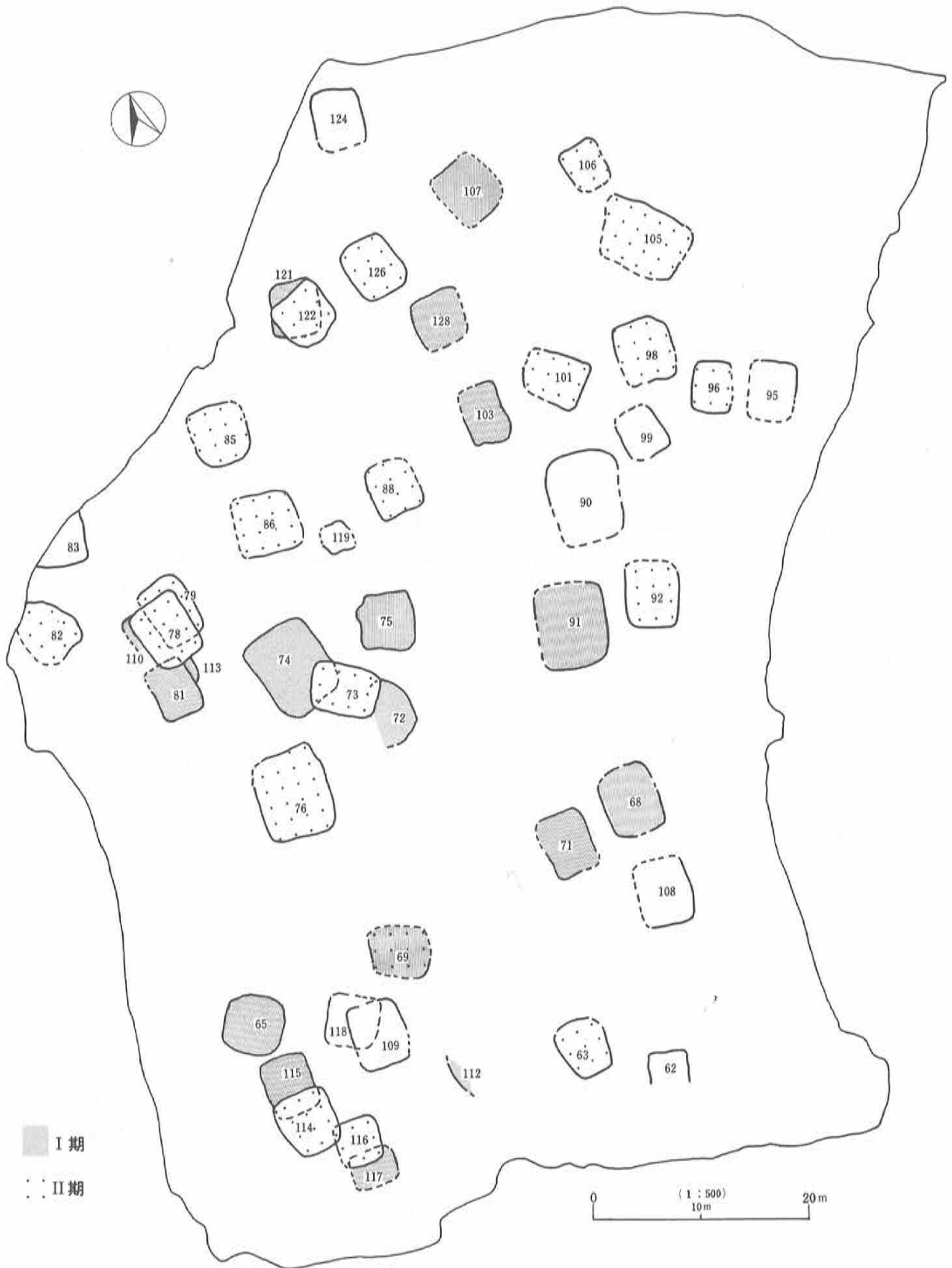
集落について

北西ノ久保遺跡の弥生時代中期後半の集落は調査区台地上の全面にその広がりを見せる。少なくとも2時期(北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ期)にわたる竪穴住居址群で構成されるが、大略的に見ればほとんどが栗林Ⅱ式併行に包括され、ごく短期間に爆発的に発展した集落であることが想像できる。このような傾向は県内・外各地の該期の遺跡で共通する。(長野市では平柴平遺跡、飯田市では恒川遺跡、県外であるが群馬県前橋市清里庚甲塚遺跡がその好例であり、栗林Ⅱ式に併行する段階で爆発的に住居址数が増加し、遺跡規模が拡大される。)稲作文化が完全に受容、消化され、安定した食生活が営まれるようになった段階における急激な人口増加を示す現象ととらえることができよう。北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ期における集落構造の変遷は北側地区の第1次調査分と合せて機会を改めて別稿で分析する。

住居址プランについて

北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ期いずれの住居址も、隅丸方形、隅方長方形を基調とし、長野市平柴平遺跡や同市浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスD地点遺跡第1・2・16・17号住居址などの栗林Ⅰ式にみられるという円形プランの住居址は全く検出されなかった。以下に北西ノ久保Ⅰ期、Ⅱ期各期、時期不明(遺物が検出されていないため)の住居址規模の傾向をみることにしよう。

北西ノ久保Ⅰ期	10㎡未満	—	
	15㎡前後	長方形(長軸464cm、短軸415cm)	Y121号住居址
	20㎡前後	方形(軸長450～520cm)	Y65・75・128号住居址
		長方形(長軸524～535cm、短軸376～453cm)	Y71・103・115号住居址
	25㎡前後	—	
	30㎡前後	—	
	35㎡前後	—	
	40㎡以上	長方形(長軸755～775cm、短軸605～635cm)	Y74・91号住居址
	計測不能	Y72・81・110・112・113・117号住居址	
北西ノ久保Ⅱ期	10㎡未満	—	
	15㎡前後	方形(軸長430～470cm)	Y122号住居址
		長方形(長軸462～470cm、短軸352～395cm)	Y96・106号住居址
	20㎡前後	長方形(長軸465～555cm、短軸420～443cm)	Y63・88・101・126号住居址



第415圖 北西ノ久保 I・II期 (弥生時代中期後半) 住居址分布圖

	25㎡前後	長方形（長軸537～585cm、短軸402～502cm）	Y73・79・85・98・114号住居址
	30㎡前後	長方形（長軸588～670cm、短軸484～500cm）	Y68・78号住居址
		方 形（軸長527～575cm）	Y86号住居址
	35㎡前後	—	
	40㎡以上	長方形（長軸750～780cm、短軸622～642cm）	Y76・105号住居址
	計測不能	Y82・92・116号住居址	
時期不明	10㎡未満	方 形（軸長251～281cm）	Y119号住居址
	15㎡前後	長方形（長軸460cm、短軸400cm）	Y99号住居址
	20㎡前後	長方形（長軸520cm、短軸462cm）	Y95号住居址
		方 形（軸長460～485cm）	Y118号住居址
	25㎡前後	長方形（長軸564～612cm、短軸460～479cm）	Y108・109号住居址
	30㎡前後	—	
	35㎡前後	—	
	40㎡以上	長方形（長軸767cm、短軸700cm）	Y90号住居址
	計測不能	Y62・83号住居址	

各期を通じて、15㎡前後～30㎡未満の規模をもつ方形か長方形プランの住居址が多く、特に20㎡～25㎡級の住居址が平均的な規模と言えよう。微視的にみれば、北西ノ久保I期では20㎡前後の住居址主体、II期では20㎡前後から25㎡前後の住居址主体で、15㎡前後、30㎡前後の住居址も加わり、時期が新しくなると住居址規模がバラエティーに富む傾向がある。この中で子細な時期は不明であるが、床面積6.85㎡の超小型住居址Y119号住居址の存在は極めて特異である。床面積40㎡以上の大型住居址は長方形基調で各期に少なくとも2棟ずつ存在する。北西ノ久保I期においては調査区のほぼ中央にY74・91号住居址2棟が並んで占地し、その周囲を20㎡前後の平均的な規模の住居址がとり囲んでいるようにみえる。北西ノ久保II期では、調査区の北東側に1棟（Y105号住居址）、南西側に1棟（Y76号住居址）が占地している。20～25㎡前後の平均的な規模の住居址は、2棟の大型住居址の周辺部にあり、これらを軸にして集落が展開されていたとも考えられる。

支柱穴の配置、及びその他の柱穴

各期を通じて20～25㎡前後の平均的な規模の住居址は支柱穴4本を基本とし、住居四隅に整然とした方形の配置をもつものが多い。床面積40㎡を越える大型の住居址は、Y90・91・105号住居址は破壊が著しく、支柱穴配置が不明であるため、Y74・76号住居址のデータしか用いることができないが、両住居址ともに6本の支柱穴をもつ。配置はそれぞれ異なり、Y74号住居址は南・北2列の直線上に各3本、Y76号住居址は東西2列の直線上に各3本の支柱穴をもつ。いずれにせよ、規模が超大型の住居址には支柱穴数が増加するのが中期後半の住居址の特徴と言えそうである。

これに関連して、北側支柱穴間の北寄りに存する所謂「棟持柱」をもつ住居址は北西ノ久保I期にはなく、II期ではY76・85・88・98・122・126号住居址など、時期不明ではY124号住居址などにみられる。「棟持柱」は後期の住居址では一般的に付設される傾向がみられることから、II期における「棟持柱」をもつ住居址の増加は、その萌芽的な様相を示していると理解される。

入口施設に関連する南壁際に穿たれるピットはI期でY74・103・115・121号住居址、II期ではY63・76・78・96・101・122・126号住居址、時期不明ではY107・109号住居址などにみられる。円形の平面形状を呈し、南壁下中央に2個一対穿たれるY63・74・76・78・101・103・109・122・126号住居址、南壁下に1個穿たれるY96・115・121号住居址があり、II期の住居址に付設される例が多い。後期の住居址に比べると入口施設の柱穴が付設される

パターンが一般化しているとは言い難く、また、定形化した楕円形の平面プランのものもない。

壁溝

中期後半の住居址の壁残高はY122号住居址が39cmと最大値を示すが、壁が全く残っていないものも多く、壁残高最大値の平均でも約15.8cmと概して浅い。後述する後期の住居址の平均31.7cmと比べればその差は明確である。壁溝をもつ住居址はY65・71・72・74・76・82・83・86・88・90・96・98・101・103・105・108・109・112・114・117・118・121・122・126・128号住居址の25棟、壁溝のない住居址、あるいは重複等により確認されなかった住居址はY62・63・68・69・73・75・78・79・81・85・91・92・95・99・106・107・110・113・115・116・119・124号住居址の22棟で半数以上が壁溝をもち、壁溝をもたないのが原則の後期の住居址とは好対象である。

炉

炉址の規模・形態については第87表にまとめてある。付設される位置は中期後半の住居址の場合、住居址の長軸・短軸線の交点、つまり住居址の中央が基本である。北側の支柱穴間に設けられるY124号住居址はこの中で唯一の例外と言える。また、この時期の住居址内には炉が1箇所に設けられるのが原則であるが、中央部2箇所に並んで設けられているY90号住居址の存在も例外的である。炉の形態は地床炉、地床炉+炉縁石（炉縁石の代わりに土器を立てたものY90に1例あり）、埋甕炉、石敷炉の四種類がある。このうち、地床炉は11例（Y63・68・74・98・99・106・109・116・118・121・126号住居址）、地床炉+炉縁石は17例〔Y69・75・76・78・81・83・85・90（2例）・96・103・107・108・115・122・124・128号住居址〕で合計すると全体の9割近くを占め、弥生中期後半においては地床炉、地床炉+炉縁石の二種類が最も一般的な炉の形態であったことが伺える。炉縁石のあり方は大型の礫を1個のみ据えたものは2例（Y75・124号住居址）と少なく、2個並べたものが5例（Y78・90・92・103・107号住居址）、3個並べたものが5例（Y76・81・85・101・108・122号住居址）、5個以上並べたものが3例（Y69・115・128号住居址）と比較的小型の礫を複数用いた形態が多い。特に北西ノ久保II期に該当するY76・85・101号住居址の炉は「コ」の字形を意識した礫の配置をもち、次期の後期前半（吉田式併行）の「コ」の字状石囲い炉へ連なる要素として注目される。この他、数は少ないが埋甕炉が2例（Y65・105号住居址）、石敷炉が1例（Y114号住居址）ある。埋甕炉は甕の口～胴部を正位で埋置したもので、天竜川水系で一般的にみられるものと強い共通性が伺える。石敷炉は小型の礫を火床上に多量に密集した状態で敷きつめたもので、他に類例を聞かない。

ベッド状遺構

Y74号住居址の東壁下中央南側に方形状の版築されたと考えられるローム主体の堆積土が認められた。ベッド状遺構として確実に位置づけて良いものか判断できない。

弥生時代後期前半の住居址

集落について

今次調査では北西ノ久保III期、後期前半の住居址20棟の間に重複関係は認められなかった。第1次調査でも1・2例の重複関係があるのみで北西ノ久保遺跡から検出された35棟の後期前半の住居址群はある程度の時間的な流れはあるにしても、ほぼ同一時期に形成された集落と見做すことができる。中期後半の集落址との関係は土器様相からみて、一・二型式の断絶が認められる。中期後半段階で一旦集落址が消滅した後に、ある程度の時間を経て再び大規模に展開された集落と理解できる。だが、この集落も永続的な繁栄をみず、ほぼ一型式で把握される後期前半の中の一つの短い時間で北西ノ久保遺跡からほぼ姿を消す。それ以降、北西ノ久保遺跡を形成する台地上全面にわたって、大規模な集落が営まれることは二度とないのである。尚、当該集落の詳細な分析も機会を改めて行うことにする。

住居址プランについて

北西ノ久保III期の住居址群はほとんどが隅丸長方形を基調としており、稀に隅丸方形、小判形に近い住居址が存在する。以下に住居址規模の傾向をみることにしよう。

北西ノ久保III期	10㎡前後	長方形（長軸長398cm、短軸長306cm）	Y102号住居址
	15㎡前後	—	
	20㎡前後	長方形（長軸長488～577cm、短軸長398～413cm） 方形（軸長401～495cm）	Y80・97・127号住居址 Y64・77号住居址
	25㎡前後	長方形（長軸長572～601cm、短軸長445～495cm）	Y93・123号住居址
	30㎡前後	長方形（長軸長598～628cm、短軸長460～514cm） 方形（軸長565、570cm）	Y94・100・120号住居址 Y70号住居址
	35㎡前後	長方形（長軸長662～700cm、短軸長520～521cm）	Y87・104号住居址
	40㎡以上	長方形（長軸長733～803cm、短軸長560～617cm）	Y66・67・89・125号住居址
	計測不能	Y84・111号住居址	

方形を呈する住居址はY64・70・77号住居址、小判形に近い住居址はY87号住居址である。中期に比べると規模の大小問わず確実に長方形プランの住居址が増加し、画一化の傾向が見い出せる。床面積10㎡前後の小型の住居址はY102号住居址1例のみで、20㎡前後～40㎡前後の住居址規模に集中する。20㎡前後は4棟、25㎡前後2棟、30㎡前後4棟、35㎡前後4棟、40㎡以上4棟を数え、中期後半の住居址のように20㎡～25㎡前後の通常クラスの住居址と、40㎡以上の超大型の住居址の両極端に分れるのではなく、相当規模の住居址が段階的にバラつく傾向がみられる。総体では、中期後半の住居址よりもやや大型化していると言えよう。

主柱穴の配置及びその他の柱穴

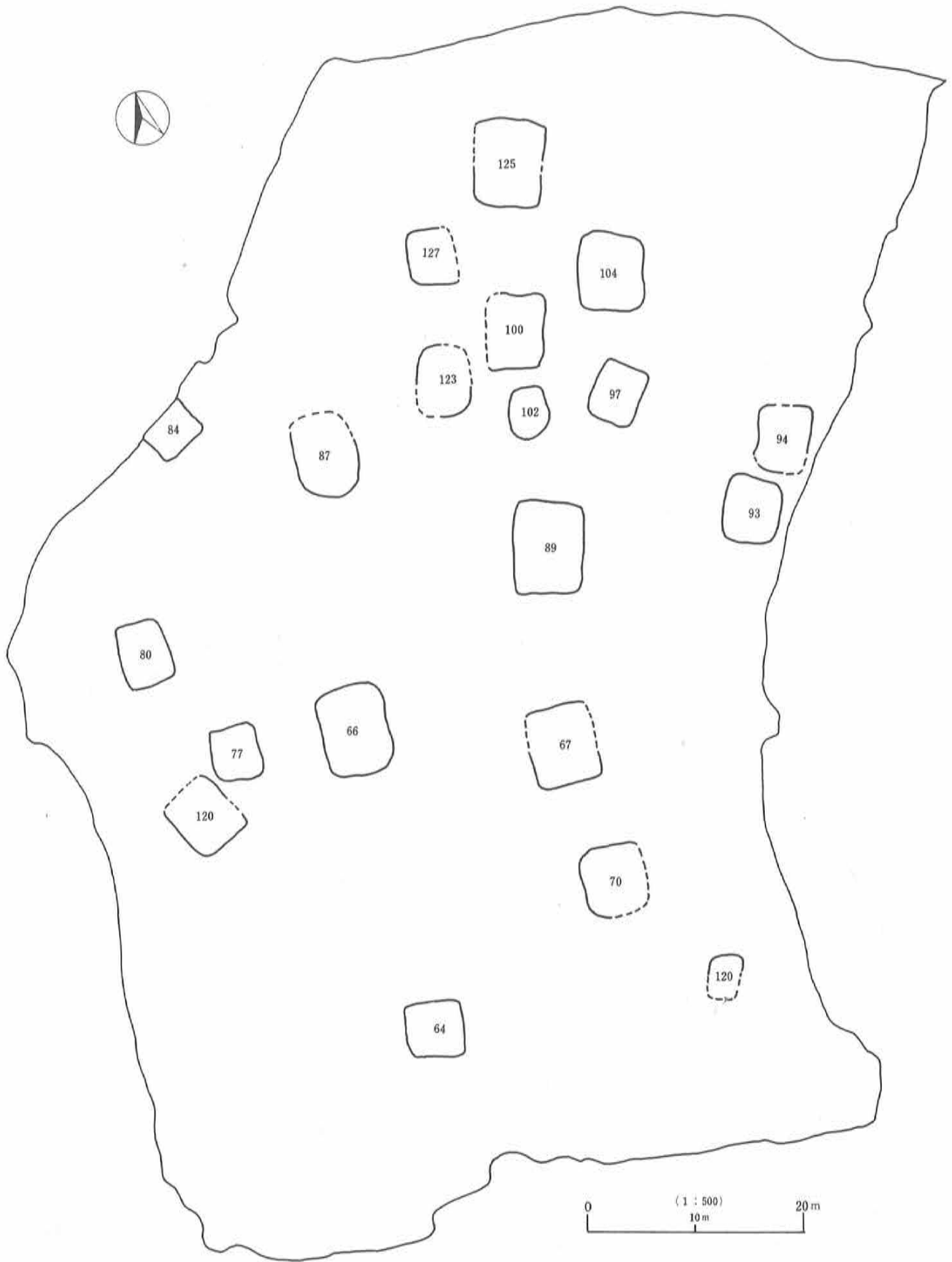
超小型の床面積10.64㎡のY102住居址は北壁下の「棟持柱」があるのみで、明確に主柱穴とできるものは検出されなかった。25㎡前後～35㎡前後の住居址は四隅に整然とした方形配置される4本の主柱穴が基本である。このうち、北壁下に「棟持柱」を有する例はY94・100・104号住居址に、また、南壁下の入口施設に関連するピットはY93・97・100・104・127号住居址に認められた。このうち、Y104号住居址は住居四隅各々2本ずつ、合計8本の主柱穴を有し、「棟持柱」も2本もつ。本遺跡に限らず、当該期の住居址としては極めて特異な柱穴配置を示している。床面積40㎡を越える大型の住居址は、主柱穴4本のY67・125号住居址と、主柱穴6本のY66号住居址がある。Y66号住居址は南北方向直線上に東西各々3本ずつの主柱穴が配置されている。本遺跡では第1次調査も含め、主柱穴を6本もつ住居址は床面積40㎡を越える大型の住居址に限られており、この点については、中期後半の傾向と一致している。超大型住居のその他のピットは、「棟持柱」はY125号住居址、入口施設に関連する柱穴はY66・89・125号住居址で認められた。入口施設に関連する柱穴は、先述の20㎡前後～35㎡前後の床面積を有する住居址も含め、南壁下のほぼ中央に円形プランのピットを2個並べて配置する例が多いが、Y100およびY125号住居址は2個一対の長楕円形プランのピットの外側に、更に円形プランのピットを各1個ずつ配置している。

壁溝

北西ノ久保III期、後期前半の住居址は原則として壁溝をもたない。唯一の例外はY93号住居址で、壁下を全周する壁溝をもつ。また、Y100号住居址は南西コーナーにわずかに壁溝がみられるが、入口施設に関わるものと考えた方がよい。後期前半の住居址に壁溝が付設されない傾向は壁残高の平均が31.7cmと中期後半の住居址よりも約2倍深い傾向と有機的に関連すると考えられる。

炉址

北西ノ久保III期、後期前半の住居址の炉の付設位置は、北側の主柱穴間を原則とする。唯一の例外はY94号住



第416図 北西ノ久保Ⅲ期（弥生時代後期前半）住居址分布図

第85表 北西ノ久保遺跡住居址一覧表 <1>

遺跡名	検出位置	平面形態	規模				長	面積 (㎡)	壁残高 (cm)	長軸方位	炉位置	柱穴ビット	その他の付属施設	時期	備考	
			東	西	南	北										
Y62	ぬ・のー17-18	長方形?	361	-	-	-	342	-	0-3	-	-	主柱穴2	-	中期後半	D5・6・99に破壊される。	
Y63	ぬ・ぬー18-19	長方形	(440)	(515)	(421)	395	395	(380)	(21.77)	0	N-8.5'-W	中央	主柱穴4入口柱2	-	中期後半	
Y64	な-22、に・ぬー21-22-23	方形(台形)	495	495	(460)	380	(480)	447	(22.66)	22-31.5	N-5.5'-E	中央	主柱穴4他3	P5、貯蔵穴	後期	S10、D136に破壊される。
Y65	と・な-25・26・27	方形	523	525	394	379	463	455	19.4	4.5-16.5	N-27'-E	中央	主柱穴4	-	中期後半	
Y66	そた-23、せ・そた-21-22	長方形	560	765	672	633	510	480	40.05	29-50.5	N-5'-E	1、北主柱穴間 2、西南主柱穴間	主柱穴6入口柱2	-	後期	炉2箇所あり
Y67	た・ち・つー16・17・18	長方形	(617)	(733)	(696)	(650)	(590)	(550)	(41.85)	0	N-5.5'-E	北主柱穴間	主柱穴4	-	後期	
Y68	ち・つ・てー16・17	長方形	(484)	(670)	(594)	(537)	(440)	(380)	(29.02)	0-13.5	N-2'-W	中央北寄り	主柱穴3 棟持柱1他2	-	中期後半	D135・139に破壊されている。
Y69	て・と・なー22・23	長方形	(535)	(447)	(407)	(410)	(420)	(450)	(22.46)	3.5-14	N-73'-W	中央	主柱穴4他1	-	中期後半	S10、D118・119・120に破壊されている。
Y70	て・と・なー16・17・18	方形	(565)	570	(540)	463	(480)	(540)	(31.38)	14.5-27	N-12'-E	北主柱穴間	主柱穴3棟持柱1入口柱1)	-	後期	S7に破壊されている。
Y71	つ・て・とー17・18	長方形	453	535	487	535	(405)	(392)	(20.12)	0-18	N-4'-W	-	主柱穴3他2	-	中期後半	Y70、D148・149・151、M3に破壊されている。
Y72	せ・そー20・21、たー21	-	-	-	510	-	-	-	-	2.5-15	-	-	主柱穴2他1	-	中期後半	Y66・73に破壊されている。
Y73	す・せ・そー21・22	長方形	(585)	(474)	(383)	400	(450)	578	(25.95)	4-11.5	N-60'-W	-	主柱穴2	-	中期後半	Y66に破壊されている。
Y74	しーせー22・23、し・すー24	長方形	635	755	692	686	505	596	41.38	2-23.5	N-15'-W	中央	主柱穴6入口柱2	ベッド状遺構あり?	中期後半	Y73に破壊されている。
Y75	し・すー20-21	方形	480	508	469	463	423	407	22.38	4.5-16.5	N-14.5'-E	中央	主柱穴4他1	-	中期後半	西壁に張り出しあり。
Y76	そ・た・ちー23・24	長方形	642	750	737	(645)	582	(560)	(41.62)	0-6	N	中央	主柱穴6入口柱2棟持柱1他2	-	中期後半	D130、Y77に破壊される。
Y77	せ・そー24・25	方形(台形)	401	(402)	418	346	418	373	(17.94)	9.5-17	N-6.5'-E	北主柱穴間	主柱穴4	-	後期	D130に破壊される。
Y78	さ・しー25・26、しー24	長方形	(500)	588	579	(535)	(430)	465	(28.27)	5.5-27.5	N-17'-W	中央北寄り	主柱穴3入口柱7他1	-	中期後半	Y80に破壊される。
Y79	こ・さ・しー25 こ・さー26	長方形	(402)	(557)	560	(528)	(370)	346	(23.53)	7.5-21	N-14.5'-W	-	主柱穴4棟持柱1他1	-	中期後半	Y78に破壊される。
Y80	さ・し・すー25・26	長方形	413	577	476	545	364	325	21.92	31.5-49	N-3.5'-E	北主柱穴間	主柱穴4入口柱2	-	後期	
Y81	し・すー25-26	-	-	-	-	346	-	-	-	2.5-13.5	-	-	主柱穴3	-	中期後半	Y78・80に破壊される。
Y82	こ・さー27-28	-	-	-	560	-	-	-	-	3.5-28.5	-	-	主柱穴2他1	P3は粘土留め	中期後半	西半分調査区外
Y83	く・けー26・27・28	-	-	-	-	-	-	-	-	6-21	-	-	主柱穴1他2	-	中期後半	
Y84	か・き・くー23・24・25	-	-	-	-	443	-	-	-	9.5-38	-	-	主柱穴2入口柱2他2	P6貯蔵穴	後期	M2に破壊される。
Y85	き・くー22-23	長方形	(482)	537	(467)	450	(427)	(482)	(25.17)	8-16	N-4'-E	中央	主柱穴4棟持柱1入口柱2他2	-	中期後半	Y84、S14に破壊される。
Y86	け・こー22-23	方形(台形)	(575)	(527)	(480)	(435)	(553)	(485)	(28.40)	2-26.5	N-88'-E	-	主柱穴2	-	中期後半	D156、M2に破壊される。
Y87	く・け・こー20・21	長方形	520	(700)	(630)	(630)	410	(441)	(33.92)	10-41	N-2'-W	北主柱穴間	主柱穴3入口柱2	-	後期	S13に破壊される。
Y88	け・こー19-20	長方形	420	465	410	428	353	343	(18.10)	15-21	N-8.5'-W	中央東寄り	主柱穴4棟持柱1入口柱2	-	中期後半	
Y89	さ・し・すー15・16・17	長方形	596	787	673	763	565	527	45.54	22.5-32.5	N-17.5'-E	北主柱穴間	主柱穴4入口柱2他1	-	後期	M2に破壊される。
Y90	こ・さ・しー14・15・16	長方形	(700)	(767)	(637)	(697)	(650)	535	(48.36)	0-6	N-5.5'-E	1、(中央西寄り) 2、(中央)	主柱穴1他6	-	中期後半	M5、Y89、D158に破壊される。
Y91	す・せ・そー15・16・17	長方形	(605)	(775)	(650)	(757)	(560)	(585)	(46.21)	4.5-16	N-11'-E	-	-	-	中期後半	Y89、かくらんに大半を破壊される。
Y92	す・せ-13、す・せ・そー14・15	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	他7	-	中期後半	M2に破壊される。
Y93	し・す・せー11・12	長方形	495	572	592	534	420	444	23.61	5-32	N-23'-E	1、北主柱穴間 2、中央西寄り	主柱穴4入口柱2他1	-	後期	
Y94	さ・しー10・11、きー9	長方形	(462)	(617)	(590)	(460)	(440)	(443)	(27.42)	0-20.5	N-69'-E	(中央東北寄り)	主柱穴4棟持柱1他3	P5貯蔵穴?	後期	D163に破壊される。
Y95	こ・さー10-11	長方形	(462)	(520)	(405)	(484)	(407)	(440)	(22.90)	2	N-26'-E	(中央)	主柱穴4	-	中期後半?	Y94、D163・164・175、S16に破壊される。
Y96	け・こー11-12	長方形	(395)	(470)	(365)	(407)	(375)	(317)	(16.90)	0	N-27.5'-E	中央	主柱穴3入口柱1	-	中期後半	D175に破壊される。
Y97	け・こー13-14	長方形	388	507	480	433	356	396	20.18	21.5-33.5	N-42'-E	なし	主柱穴4入口柱2	-	後期	D164に破壊される。炉が見当たらない。
Y98	く・けー12-13	長方形	502	592	512	(490)	(442)	408	(22.69)	3-25	N-0.5'-W	中央	主柱穴4入口柱1棟持柱1他2	-	中期後半	Y97、D167に破壊される。
Y99	こ・さー13-14	長方形	(400)	(460)	(420)	(360)	(392)	(340)	(17.19)	0-8.5	N-15'-W	中央	主柱穴4他3	-	中期後半	Y97、D164、M5に破壊される。
Y100	か・き・くー15・16	長方形	(460)	598	566	(600)	480	(435)	(28.35)	15-36	N-23'-E	北主柱穴間	主柱穴4棟持柱1入口柱2他2	P9貯蔵穴?	後期	S13に破壊される。
Y101	く・けー14・15・16	長方形	(555)	430	433	(343)	485	(523)	(20.98)	4.5-22.5	N-52'-E	中央	棟持柱1他5	-	中期後半	Y100・102に破壊される。
Y102	け・こー15-16	長方形	306	398	325	340	249	235	10.64	23-36	N-10'-E	中央北寄り	棟持柱1他5	-	後期	明確な柱穴なし。
Y103	く・けー16-17	長方形	376	(530)	504	(466)	311	(332)	(18.54)	1-17.5	N-2'-W	中央	主柱穴4入口柱? 2、他1	-	中期後半	Y102・123、S13に破壊される。
Y104	か・き-12-13、14、く-12-13	長方形	521	662	(580)	555	490	467	33.93	32.5-49.5	N-20'-E	1、北主柱穴間 2、中央西南寄り	主柱穴8入口柱2棟持柱2他1	-	後期	D176に破壊される主柱穴、棟持柱は2箇所あり。
Y105	お・か・きー11・12・13	長方形	(622)	(780)	(748)	(682)	(405)	(572)	(40.8)	3-13	N-51'-W	中央	主柱穴1他5	-	中期後半	Y104、D176、M6に破壊される。
Y106	う・え・おー12・13	長方形	(352)	(462)	(370)	(428)	(268)	358	(15.60)	0.5-15.5	N-7'-W	中央	主柱穴3	-	中期後半	S14、M6に破壊される。
Y107	う・え・おー15・16	(長方形)	-	-	-	-	-	-	-	4.5-13.5	-	(中央)	主柱穴3入口柱? 1他2	-	中期後半	D166、Y125、S13に破壊される。
Y108	と・なー15・16・17	長方形	(479)	(612)	558	(565)	(388)	(416)	(27.35)	0.5-10.5	N-7'-E	(中央)	主柱穴3他1	-	中期後半	S7に破壊される。
Y109	な・に・ぬー23・24	長方形	(460)	(564)	550	(568)	(380)	(382)	(23.92)	1-10	N-1'-W	中央南寄り	主柱穴4入口柱2他2	-	中期後半	D119・125・140・141に破壊される。

第86表 北西ノ久保遺跡住居址一覧表〈2〉

遺構名	検出位置	平面形態	規模				壁				面積	壁残高	長軸方位	炉位置	柱穴ビット	その他の付属施設	時期	備考
			東	西	南	北	東壁	西壁	南壁	北壁								
Y110	さ-26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3-21	-	-	-	-	中期後半	Y78・79・80に破壊される。
Y111	に・ぬ-15	-	-	-	-	-	-	-	299	-	-	5.5-16.5	-	中央北寄り	棟持柱1	-	後期	S7に破壊される。
Y112	ぬ・ね-21・22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.5-13	-	-	-	-	中期後半	Y64、S10に破壊される。
Y113	し・す-25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3-6	-	-	-	-	中期後半	Y78・81に破壊される。
Y114	に・ぬ・ね-25・26	長方形	495	566	554	466	362	446	25.87	2-12	N-12.5'-W	中央	主柱穴4	-	-	-	中期後半	
Y115	に・ぬ-25・26	長方形	420	524	426	476	414	354	21.05	3-25.5	N-5'-W	中央	主柱穴4土坑蓋1入口柱1他1	P7蓋棺入り土坑蓋	-	中期後半	Y114に破壊される。	
Y116	ぬ・ね-24・25	-	-	-	-	-	-	354	-	0.5-13.5	-	(中央)	主柱穴2	-	-	-	中期後半	Y114・117に破壊される。
Y117	ね・の-24・25	-	-	-	-	-	-	298	-	0-8	-	-	主柱穴4他2	-	-	-	中期後半	
Y118	な・に-23・24	方形	460	(485)	391	422	(375)	435	(20.94)	2.5-11.5	N-29'-E	中央	主柱穴4	-	-	-	中期後半	D123・124・125・140・154、Y107に破壊される。
Y119	こ・さ-20・21	方形	(251)	281	(268)	(248)	240	200	(6.85)	2.5-10	N-16'-W	-	主柱穴4	-	-	-	中期後半	M2に破壊される。
Y120	そ・た・ち-25・26	長方形	(514)	(628)	(560)	(540)	(460)	(441)	(30.92)	5-11.5	N-30'-W	(中央)	主柱穴2	-	-	-	後期	耕作で大半が破壊されている。
Y121	お・か-20・21	長方形	415	464	414	362	345	288	14.85	3-37	N-6'-E	中央	主柱穴4他4	-	-	-	中期後半	Y122に破壊されている。
Y122	お・か-19・20・21	方形	432	472	395	358	350	390	16.93	1-39	N-20'-W	中央西寄り	主柱穴4入口柱2棟持柱1他3	P5貯蔵穴?	-	-	中期後半	
Y123	き・く・け-17・18	長方形	(445)	(601)	(494)	(534)	(400)	(372)	(25.53)	25-36	N-13'-E	-	主柱穴1他3	-	-	-	後期	S13に破壊される。
Y124	あ・い-17・18	長方形	(422)	(510)	(457)	(458)	(390)	380	(21.00)	0-15	N-2.5'-E	北主柱穴間	主柱穴4棟持柱1	-	-	-	中期後半	S7に破壊される。
Y125	い・う・え・お-13・14・15	長方形	(600)	803	704	(713)	542	554	(45.52)	15.5-35	N-23'-E	北主柱穴間中央西南寄り中央南寄り	主柱穴4棟持柱1入口柱4他3	-	-	-	後期	D166に破壊される。
Y126	え・お-18・19か-18、お-17	長方形	443	528	403	423	392	306	18.30	19.5-34	N-18'-W	中央	主柱穴4棟持柱1入口柱2他3	-	-	-	中期後半	
Y127	え・お・か-16・17	長方形	(398)	488	(480)	400	398	(406)	(20.56)	2-40	N-11'-E	北主柱穴間	主柱穴4入口柱2	-	-	-	後期	S13に破壊される。
Y128	か・き-16・17・18	方形	(454)	(454)	(410)	(444)	(356)	(398)	(18.68)	1-22.5	N-6'-W	中央	主柱穴4他1	-	-	-	中期後半	S13に破壊される。
Y129	い・う-15	長方形	285	231	190	235	221	250	6.28	1-10	N-47'-E	-	-	-	-	-	和泉?	

居址で住居中央付近に設けられている。また、Y97号住居址は炉址をもたない唯一の例である。複数の炉址を有する例はY66・93・104・125号住居址などY93号住居址を除くと床面積35㎡前後、40㎡前後の大型の住居址にどちらかと言えば多くみられ、北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ期中期後半の住居址にくらべると検出例が増加する。Y93号住居址は北側主柱穴間と住居中央に2箇所（地床炉+炉縁石と地床炉）、Y66号住居址は北主柱穴間と西南主柱穴間（P₃・P₄間）に2箇所（いずれも「L」字状石囲い炉）、Y104号住居址は北主柱穴間と中央西南寄り（P₃北）に2箇所（「口」の字状石囲い炉と、地床炉+炉縁石）、Y125号住居址は北主柱穴間、中央西南寄り（P₃北）、中央南側に3箇所（地床炉+炉縁石と地床炉2ヶ）設けられている。

炉の形態は、地床炉、地床炉+炉縁石、石囲炉などがあり、土器敷炉、埋甕炉はない。地床炉はY87号住居址、Y93号住居址の炉2、Y94号住居址、Y111号住居址、Y125号住居址の炉2・3など6例、地床炉+炉縁石はY67号住居址、Y77号住居址、Y80号住居址、Y89号住居址、Y93号住居址の炉1、Y100号住居址、Y102号住居址、Y104号住居址の炉2、Y125号住居址の炉1など9例、石囲炉はY66号住居址の炉1・2、Y70号住居址、Y104号住居址の炉1、Y127号住居址など5例認められ、地床炉+炉縁石が最も多いものの、地床炉、石囲炉もこの時期の一般的な炉であったことが伺える。地床炉の中ではY87号住居址の炉が大型で深度も大きく、特異な存在である。地床炉+炉縁石は大型の礫を一個設置するY93号住居址を除き、比較的小さな礫を一個のみか複数並べて設置する場合が多い。石囲炉は円柱状の河原石（安山岩）を「L」字状に配置するY66号住居址の炉1・2、Y70号住居址の例、「コ」の字状に配置するY127号住居址の例、「口」の字状に周囲をすべて取り囲むY104号住居址炉1の例などがみられる。石囲炉は北西ノ久保Ⅲ期に併行すると考えられる佐久市野馬窪遺跡や若干先行すると考えられる佐久市樋村遺跡などで多くの例がみられ、Ⅲ期に後続すると考えられる佐久市周防畑B遺跡では減少、衰退する。佐久地方では後期初頭から前半（周防畑B遺跡を弥生後期中葉と位置づけるならば）が石囲炉の盛行期と考えることができるのである。

第87表 北西ノ久保遺跡炉灶一覧表

住居	位置	平面・形態	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	長軸方位	深さ (cm)	備考(分類)	時期	住居	位置	平面・形態	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	長軸方位	深さ (cm)	備考(分類)	時期
Y63	中央	逆三角形	108	(91)	N-25°-W	10	地床炉	弥生・中	Y99	中央	楕円形	80	56	N-16.5°-E	5	地床炉	弥生・中
Y65	中央	不整楕円形	124	104	N-40°-W	14	埋甕炉+炉縁石	弥生・中	Y100	北主柱穴間	楕円形	78	59	N-2°-E	8	地床炉+炉縁石	弥生・後
Y66	1北主柱穴間	楕円形	73	66	N	7	石囲炉(L)	弥生・後	Y101	中央	方形	88	87	N-11.5°-E	5	地床炉+炉縁石	弥生・中
Y66	2西南主柱穴間	楕円形	92	74	N-40°-W	6.5	石囲炉(L)	弥生・後	Y102	中央北寄り	楕円形	73	63	N-1.5°-E	5	地床炉+炉縁石	弥生・後
Y67	北主柱穴間	楕円形	139	90	N-29°-E	15	地床炉+炉縁石	弥生・後	Y103	中央	楕円形	71	61	N	9	地床炉+炉縁石	弥生・中
Y68	中央北寄り	-	-	-	-	(10)	地床炉	弥生・中	Y104	1北主柱穴間	不整形	91	88	N-25°-E	6.5	石囲炉(口)	弥生・後
Y69	-	楕円形	117	85	N-12.5°-E	9.5	地床炉+炉縁石	弥生・中	Y104	2中央西南寄り	円形	72.5	68	N-40°-W	7	地床炉+炉縁石	弥生・中
Y70	北主柱穴間	楕円形	86	70	N-18°-E	10.5	石囲炉(L)	弥生・後	Y105	中央	円形	69	63	N-54°-E	15	埋甕炉	弥生・中
Y74	中央	不整形	146	59	N-4.5°-W	5	地床炉 テラスあり	弥生・中	Y106	中央北寄り	楕円形	74	59	N-10.5°-W	7	地床炉	弥生・中
Y75	中央	楕円形	84	64	N	7	地床炉+炉縁石	弥生・中	Y107	(中央)	不整形	135	80	N-29°-W	11.5	地床炉+炉縁石	弥生・中
Y76	中央	不整楕円形	140	110	N	11	地床炉+炉縁石	弥生・中	Y108	(中央)	-	(137)	104	N-28°-E	4.5	地床炉+炉縁石	弥生・中
Y77	北主柱穴間	楕円形	90	76	N-15°-E	7	地床炉+炉縁石	弥生・後	Y109	中央南寄り	円形(テラス有)	64	56	N-15°-E	6.5	地床炉テラス有	弥生・中
Y78	北主柱穴間	円形	115	110	N-2°-E	9	地床炉+炉縁石	弥生・中	Y111	(北側)	楕円形	65	58	N-73°-W	6	地床炉	弥生・後
Y80	北主柱穴間	円形	77	77	N	8	地床炉+炉縁石	弥生・後	Y114	中央	不整楕円形	106	90	N-67°-W	7.5	石敷炉	弥生・中
Y81	(中央)	円形	70	69	N-2°-E	9	地床炉+炉縁石	弥生・中	Y115	中央	楕円形	117	58	N-72°-W	8	地床炉+炉縁石	弥生・中
Y83	-	-	-	-	-	8	地床炉+炉縁石	弥生・中	Y116	(中央)	円形	70	61	N-3°-W	6.5	地床炉	弥生・中
Y85	中央	円形	88	80	N-2°-W	11	地床炉+炉縁石	弥生・中	Y118	中央東北寄り	楕円形	85	59	N-48°-E	10	地床炉	弥生・中
Y87	北主柱穴間	-	-	-	-	25	地床炉(深い)	弥生・後	Y121	中央	楕円形	64	54	N-8°-W	?	地床炉	弥生・中
Y89	北主柱穴間	円形	84	82	N-80°-W	3	地床炉+炉縁石	弥生・後	Y122	中央西寄り	楕円形	93	72	N-30°-W	10	地床炉+炉縁石	弥生・中
Y90	(中央西寄り)	楕円形	82	79	N	7.5	地床炉+炉縁石	弥生・中	Y124	北主柱穴間	楕円形	80	66	N-5°-E	6	地床炉+炉縁石	弥生・中
Y90	(中央)	-	-	-	-	10.5	地床炉	弥生・中	Y125	1北主柱穴間	楕円形	79	68	東西	14	地床炉+炉縁石(?)	弥生・後
Y92	(中央)	楕円形	82	66	(N-11°-E)	4	地床炉+炉縁石	弥生・中	Y125	2中央西南寄り	楕円形	85	59	N-85°-W	6	地床炉	弥生・後
Y93	北主柱穴間	楕円形	71	58	N-35°-E	7	地床炉+炉縁石	弥生・中	Y125	3中央南寄り	長楕円形	130	22	N-19°-E	0	地床炉(?)	弥生・後
Y93	中央西寄り	円形	65	60	N-60.5°-W	7	地床炉	弥生・後	Y126	中央	楕円形	89	66	N-12°-W	11	地床炉	弥生・中
Y94	(中央東寄り)	楕円形	98	61	N-85°-W	17	地床炉	弥生・後	Y127	北主柱穴間	楕円形	68	55	N-6°-E	1	石囲炉(L)	弥生・後
Y98	中央	不整楕円形	80	59	N-25°-W	10	地床炉	弥生・中	Y128	中央	不整楕円形	157	107	N-33.5°-E	8	地床炉+炉縁石	弥生・中

土坑について

弥生時代、あるいはそれ以前と考えられる土坑が23基検出されている。このうち、中期後半、あるいはそれ以前と考えられる土坑は21基、後期の土坑は2基ある。中期後半の土坑は調査区南部(台地上の南端部)に偏在しており、相互に重複関係をもちながら、と〜ぬ-22〜24グリッド周辺、た〜つ-16〜18グリッド周辺、の2箇所に密集したグループを形成している。これらは第124・161号土坑を除くと中期後半の住居址を破壊しており、北西ノ久保II期の集落が廃絶された後に短期間で形成された土坑群であることが理解できる。これらの土坑群の性格については有力な手掛りをとらえることができなかった。但し、多量の土器の細片が密集した状態で坑内に散乱しているD110・120・121・122・123・131・133・134・141・150号土坑は、底面が平坦であることも合せて、中野市安源寺遺跡で弥生時代土坑墓と報告されているものとの類似性が強いように思われる。しかし、土坑覆土に科学的な分析を加える作業を行わなかったため、これらを明確に墓址と位置づけることができなかった。台地上全体に北西ノ久保I・II期合せて100軒近い巨大な集落に対応する明確な墓域は結局、未確認に終る結果となってしまった。土坑には科学的分析が不可欠であることを今後の反省材料として提起し、ここに記しておきたい。

住居址間の接合関係（北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期を通じて）

本遺跡の各遺構からは極めて多量の弥生土器が出土した。この中には出土遺構を違えて接合されたものが8例認められた。こうした現象は北西ノ久保遺跡出土の弥生土器の多くが、破損したのち投棄された遺物であることを示すと考えられる。ここではその詳細を分析する余知がないため、接合関係図を示すのみに留める。

北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ期（弥生中期後半）の接合関係（第417図）

Y90号住居址とY116号住居址との間に1例、Y122号住居址とY126号住居址との間に1例、Y122号住居址とY128号住居址との間に1例、合計3例の接合関係が認められた。Y90号住居址からY116号住居址までは直線距離で65mを測る。Y90号住居址は出土遺物がないため、時期が不明確であるが、この現象からみれば、Y116号住居址との埋没時期の同時性が首肯されることになり、北西ノ久保Ⅱ期に該当する可能性が強い。Y122号住居址とY126号住居址、およびY122号住居址とY128号住居址は5～10mの距離に近接する。Y122号住居址とY126号住居址は北西ノ久保Ⅱ期相互の接合であるから問題はないが、Y122号住居址とY128号住居址は出土土器が示す時期が一致しない。このことはY122号住居址と重複するY121号住居址との新旧関係を当初誤認した際に生じた混乱と理解しておく他ない。

北西ノ久保Ⅲ期（弥生後期前半）の接合関係

Y89号住居址とY100号住居址の間に1例、Y93号住居址とY120号住居址の間に4例、合計5例認められる。Y89号住居址とY100号住居址は16m離れるが比較的近接している。Y93号住居址とY120号住居址は約60m離れているが、4例もの接合関係を有する個体があり、両住居址の同時性及び、強い親縁性を示すものと理解される。

（小山）

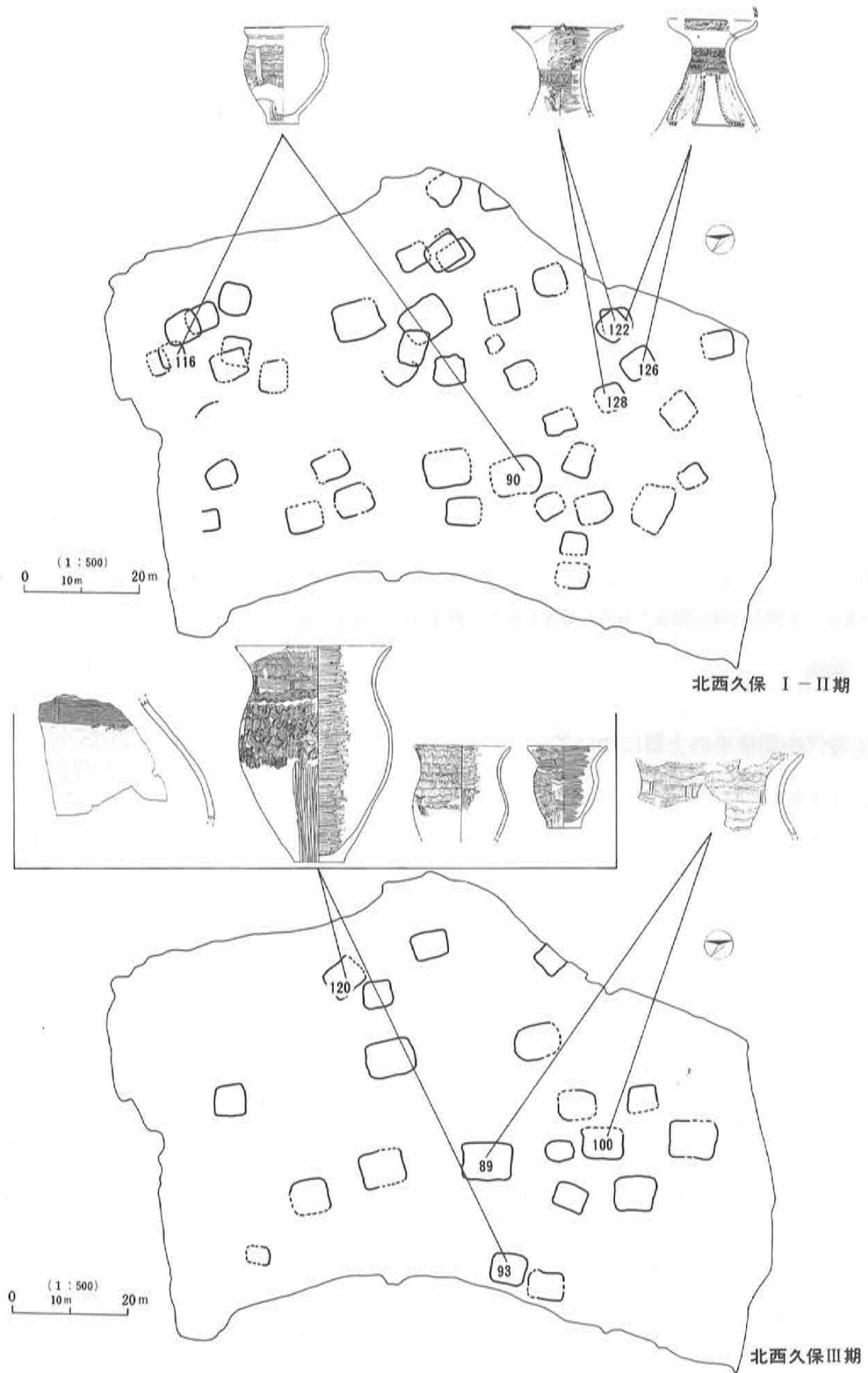
2) 遺物

弥生時代中期後半の土器について

先述した弥生時代中期後半の住居址47棟からは、極めて良好な一括資料が多量に出土した。県内においては当該期の土器が大遺跡の一括資料によって検討されたことはなく、不明瞭さは払いきれないものがあつた。本調査で得られた一括資料は従来の編年観に対する若干の補正、修正を行う内容を具備するものである。ここではまず、千曲川水系の中期後半の土器を象徴する栗林式土器をめぐる研究史を洗い直し、内在する問題点を抽出した後、器種・器形の分類を行ない、県内でも特に不鮮明であつた佐久地方における中期後半の土器の変遷をあきらかにしたい。また、更に県内における当該期の土器のとらえ方に対して若干の問題点の指摘ができればと思う。

栗林式土器をめぐる研究小史および問題点の抽出

昭和6年（1931）中野市栗林遺跡より出土した弥生土器は、神田五六氏によって紹介された（神田1935）後、昭和11年（1936）藤森栄一氏によって信濃の古式弥生土器に位置づけられ、栗林式土器として型式設定された。坪井清足氏らの調査（坪井他 1953）によって型式内容が明示された後、昭和38年（1963）桐原健氏が検討を加え、栗林式土器の諸要素を抽出し、百瀬式土器に先行する型式としての位置づけを与えられた。桐原氏の論考における栗林式土器の諸要素とは、頸部～胴部下位まで縄文を文とした篋描文が加飾される壺（第二類）、頸部・胴部に縄文、篋描文、櫛描文の組み合わせで加飾される壺（第三類）を主とするもので、百瀬式とされる頸部にのみ文様をもつ壺（第四類）を対峙させ、時間差としてとらえようとするものであつた。資料操作に混乱はみられるものの、現在でも栗林式土器編年の最も有力な根拠となっている壺の文様の集約化、簡略化傾向に着目されている点は、現在の編年研究の先駆をなすものとして評価されよう。以降、桐原氏は県内における弥生中期後半の土器の大系化に努められる。昭和47年（1967）岡谷市海戸遺跡の第1次調査において、従来の天王垣外式に後続する型式として、海戸式を設定、諏訪盆地において、天王垣外・海戸式に分離できたから、松本平の百瀬式も2細分



第417図 弥生時代住居址間接合關係図 (1 : 500)

できる可能性がある」と指摘した。これは翌昭和43年（1968）の海戸遺跡第2次調査報告で更に明確化し、天王垣外式（諏訪）=百瀬Ⅰ式（松本）=長峯式（北信）、海戸式（諏訪）=百瀬Ⅱ式（松本）=+（北信）という併行関係を呈示し、百瀬Ⅰ・Ⅱ式の細分を新たに提唱、また、栗林式を天王垣外・百瀬Ⅰ・長峯各型式に先行する型式として位置づけた。昭和43年（1968）、桐原氏は長野県考古学会の「シンポジウム、弥生文化の東漸とその発展」の席上において、先述の一連の論考を集大成する。天王垣外=百瀬Ⅰ、海戸=百瀬Ⅱを重ねて強調したのち、これら諏訪・松本の編年観に北信の栗林式を対応させ、3型式に分類できることを提案、栗林Ⅱ式=天王垣外=百瀬Ⅰ、栗林Ⅲ=海戸=百瀬Ⅱとし、栗林Ⅰ式をこれらに先行する型式にあてた。桐原氏の編年大綱は、百瀬遺跡の一竖穴から一括出土した土器群をⅠ・Ⅱ式に分離してしまった事をはじめとする一括性の無視（同席上において神村氏が批判）、栗林式の3型式細分に際して具体的な資料呈示をしなかったなど、後に笹沢氏に指摘される大きな問題を内包するものであったが、一連の論考を整理すると次のような基準をもって編年の根拠としていたように思われる。

栗林Ⅰ式……縄文を地文とする篋描文が頸～胴部まで限なく加飾される細頸壺及び、縄文、篋描文、櫛描文を組み合わせた文様が頸部・胴部に施される細頸壺などを中心とする土器群

栗林Ⅱ式、天王垣外式、百瀬Ⅰ式……頸部に文様が集中し、胴部に文様がみられない。単純口縁の細頸壺、及び、単純口縁の甕

栗林Ⅲ式、海戸式、百瀬Ⅱ式……翼状口縁（受口）をもつ細頸壺及び翼状口縁をもつ甕

要約すれば施文が胴部にまで及ぶ壺から、頸部のみに集約される壺、単純口縁の壺・甕から翼状（受口状）口縁の壺・甕へという変遷過程を思考されていたように思われる。

昭和46年（1971）笹沢浩氏は桐原氏編年の資料操作の誤りを指摘して痛烈に批判し、新たな資料を用いて北信の栗林式土器を再び検討、新たな分類の基準、編年の修正案を公開した。この内容は、桐原氏による百瀬Ⅰ・Ⅱ式細分の否定、百瀬Ⅰ・Ⅱ式の細分案に対応して立脚する具体的な資料呈示のない栗林Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式を否定、新たな資料、長野市北部中学校西遺跡、国鉄車両基地遺跡第二类土器と栗林遺跡D地点の資料を栗林Ⅱ式、旭幼稚園、百瀬竖穴の資料を百瀬式、百瀬式併行とするものであった。笹沢氏編年案が桐原氏の編年案と大きく異なる点は、栗林Ⅱ式の主要要素が壺A₂→（縄文を地文とする篋描文が頸部及び胴部に施されるが胴部上位か、下位のいずれかの文様を欠く細頸壺）と壺B→（翼状口縁をもつ壺）としていること、また、百瀬式、百瀬式併行土器の主要要素が壺A₃→（文様が頸部にのみ集中する細頸壺）、壺B→（翼状口縁をもつ壺）、壺C→（内弯する口縁部をもつ壺）としていること、また、主体は占めないが櫛描文をもつ壺A₄・C₄などの出現・存在を認めていることなどである。つまり、桐原氏の栗林Ⅱ・Ⅲ式の根拠となった、単純口縁をもつ壺と翼状口縁壺が同時期に存在し、時間差としては扱えられないこと、また、桐原氏が栗林Ⅰ式と認識した壺A₂を栗林Ⅱ式に、栗林Ⅱ式とした壺A₃を百瀬式、百瀬式併行土器に主体を占める要素と指摘した訳である。また、ここで笹沢氏は百瀬式、百瀬式併行土器における櫛描文をもつ壺A₄・C₄の存在を後期初頭の吉田式に通じるものとし、百瀬式、百瀬式併行土器を中期終末の土器として位置づけられた。

昭和51年（1976）笹沢氏は長野市平柴平遺跡の良好な一括資料を用いて、先述の細分案を補強・強化した。栗林Ⅰ式に平柴平遺跡SKY05、栗林Ⅱ式に平柴平遺跡SBY04、百瀬式併行土器に旭幼稚園遺跡出土資料をあて、壺の文様の集約化、簡略化傾向によって、千曲川水系の中期後半の弥生土器の変遷が辿れることを明らかにした。ここでは特に従来破片資料で論ぜられてきた栗林Ⅰ式の型式内容を明確にした点は最大の評価が与えられるであろう。また、中期終末の土器として扱った旭幼稚園遺跡の出土資料に関しては「……定形品は少なく、型式名を設定するには未だ資料不足であるので、百瀬併行土器の仮称型式名として用いる。」として、将来、千曲川水系における栗林Ⅱ式に後続する中期終末の土器に対して新たな型式名が設定される可能性のあることを示唆した。翌昭和52年（1976）笹沢氏は県内の弥生土器全般の編年大綱を発表する。県内の弥生土器を天竜川流域、千曲川流

域に2大別して大づかみにとらえ、中期後半の土器に関しても北信・東信・松本平をほぼ同一の土器分布圏と見做して一つにとりまとめ、栗林I→栗林II→百瀬という大きな流れのあることを示した。前年呈示した編年案に栗林I式には平柴平遺跡SKY03、栗林II式には平柴平遺跡SBY16号住、栗林D地点竖穴を加えて補強し、旭幼稚園の資料は百瀬竖穴の資料と一括して百瀬式として扱っているが、編年の基準となるものは前年示したものとほぼ同一のものであった。以降、しばらく笹沢氏はこれに関する修正、訂正案は示しておらず、他の研究者からの批判、それに関連する修正案も提出されず、栗林式土器をめぐる編年研究は、笹沢氏の1977年の編年案によって確立され、定着した感があった。

昨年来、約10年余り、大方に是認されてきた笹沢氏の中期後半の編年に対して、県内各地域の大規模発掘によって得られた資料をもとに疑問を投げかける声が聞かれるようになってきた。口火を切ったのは山下誠一氏である。昭和61年(1986)飯田市恒川遺跡の報告において、従来の下伊那地方の北原式をI・II式に分割し、当地方の中期後半の変遷過程を北原I→北原II→恒川として整理した。県内の該期の資料との併行関係にも触れ、県内全般にわたって共通要素の多い縦羽状の櫛描文をもつ甕の比較から、北原II=海戸=百瀬=栗林II、北原I=天王垣外=十=栗林Iという併行関係を想定し、特に百瀬式=栗林II式を強調して、千曲川水系における百瀬式の定立に疑問を提出した。百瀬式への疑問は同年開催された三県シンポジウム(『東日本における中期後半の弥生土器』)において益々増大した。設楽博巳氏は笹沢氏の栗林I・II式細分を評価した上で、「栗林II式と百瀬式併行土器群の関係がやや不明瞭」、「時間的な流れが追えても峻別できるものであろうか」として、栗林式と百瀬式の型式差に疑問を示し、また、「松本平の百瀬式と千曲川水系の百瀬式併行土器は簾状文の受容少なく、これを百瀬式と一括することにためらいを感じる」として同一時間帯の中で松本平と、千曲川水系の土器に相違のあることから、山下氏と同様に千曲川水系における百瀬式の定立に矛盾のあることを示唆した。更に県内の中期後半の弥生土器は、南信、中信、北信とそれぞれ伝統的に展開した可能性が強く、天竜川、松本平、北信の編年を分立させて考えるべきであるとした。北信をまとめた千野浩氏も、北信の編年から百瀬式を除外し、栗林式土器の変遷過程で明確な画期が見い出せないことから、様相変化としてとらえ、古～新相と三段階にわたる分類案を提示した。また、筆者も東信(佐久地域)の中期後半の土器の分類を本遺跡の資料を中心として不十分ながら行った結果、千曲川水系における前三者と同様百瀬式の定立に対する疑問を呈示した。

以上が1931年以降の発見から現在までの栗林式土器をめぐる研究史である。実質的な編年研究は前半が桐原氏、後半が笹沢氏によってリードされてきた訳であるが、笹沢氏によって長野県の弥生土器の編年大綱が確立された1977年以降、特に栗林式土器をはじめとする中期後半の弥生土器の研究は昨年まで約10年間、笹沢氏の編年を受け入れるのみに留まり、停滞を余儀なくされた感が強い。これは、長野市平柴平遺跡の調査以降、設楽氏も指摘されるように、大遺跡からの一括資料に乏しかったことにも起因するであろうが、それ以上に、笹沢氏の編年の序列が誤まりの少ない正確なものであったからに他ならない。事実、昨年の三県シンポジウムでも千曲川水系における百瀬式の定立に対する疑問が各研究者から提出されてはいるが、栗林I～百瀬式への時間的な流れの概念を根本からくつがえす意見は聞かれなかった。筆者もその折、住居址90棟におよぶ北西ノ久保遺跡出土資料の不十分な分析を行ったが、笹沢氏の編年を根本からくつがえすような要素を遂に見い出すことができず、結果的には笹沢氏の編年を受け入れて報告することとなった。従って、次に行う北西ノ久保遺跡の中期後半の土器に関する編年試案は研究史上(特に昨年の三県シンポジウム)で得られた若干の問題点に留意しながらも、大筋の流れは笹沢氏の編年を寄り所として行うことになる。以下に留意すべき問題点を掲げておく。

○壺以外の器種の消長・変化……栗林式土器をめぐる編年研究は壺のみに集約されてきた感が強い。ここでは、栗林式土器の組成中にみられる他の器種一甕、台付甕、鉢、甑、高坏などの消長・変化にも検討を加える必要があると考える。

甕——栗林式土器全般にわたる主要要素と考えられる縦羽状の櫛描文が施される甕は型式変

化が少ないことが、あらかじめ予想されるが、他の器形の消長・変化から変遷過程をつかむことができはしまいか。

台付甕——特に「コ」の字重ね文を有する台付甕の消長・変化がとらえられるか？

鉢・高坏——出現の問題、赤色塗彩の傾向が一般化する時期の問題

百瀬式土器の問題……………1977年千曲川水系、松本平の中期終末の土器をとりあえず百瀬式として一括して扱った笹沢氏にしても1976年当初は百瀬式併行土器、また、1986年歴史手帖の「箱清水式土器の文化圏と小地域」においては「栗林式土器とその直後型式」として、千曲川水系において百瀬式土器を定立させることを避けている。松本平の百瀬式と北信の百瀬併行土器の相違が設楽氏によって指摘されている経緯もあり、東信の佐久地方においても中期終末の土器として百瀬式という型式名を使用することは避けておきたい。これは北信の資料によって確立された栗林式土器に対しても同じことが言える。但し、大きくは栗林式の様式の範疇で理解できると考えられ、将来の混乱を避けるためにも、東信（佐久地方）における新たな型式名の設定は行わない。ここでは便宜的に北西ノ久保Ⅰ期・Ⅱ期……という仮称名称を用いて編年し、これらを北信、中信との対比から、東信の栗林Ⅰ式、栗林Ⅱ式、百瀬式の各併行土器として理解することにしたい。将来的には北信、中信、東信各地域の編年をつき合せて、若干の地域差を越えた大枠の大様式が確立されることが望ましいと考える。

北西ノ久保遺跡中期後半弥生土器の分類（第418～423図）

壺類……壺・無頸壺

壺A～E

壺A 細い頸部から口縁部がラッパ状に外反する単純口縁をもち、胴部は中位下方で張るものと、下位で大きく張り出すものがある。2系統に分かれると思われるが、本遺跡出土資料は胴部以下を欠損しているものが多いため、一括して「単純口縁、細頸壺」として扱う。

施文傾向によって5細別する。

- A₁ 縄文を地文とした篋描文が頸部から胴部まで隈なく施文される。
- A₂ A₁の文様構成で胴部上位の文様を欠く。
- A₃ 文様が頸部のみに集中する。篋描文主体
- A₄ 文様が頸部のみに集中する。櫛描文主体
- A₅ 無文

壺B 細い頸部から、口縁部が受口状に立ち上がる。明瞭な外稜をもつものと、稜がとれて丸味を帯びるものがある。胴部は壺Aと同様である。「受口口縁、細頸壺」

施文傾向によって3細別する。

- B₁ 縄文を地文とした篋描文、櫛描文の組合せ文様（主に垂下文）が頸部から胴部まで隈なく施される。
- B₂ 壺Bの文様構成で胴部上位の文様を欠く。
- B₃ 文様が頸部のみに集中する。

壺C 太い頸部から口縁部が受口状に立ち上がる。「太頸壺」、大型品が多い。

施文傾向から3細別する。

- C₁ 縄文と篋描文が施される。

- C₂ C₁の頸部に楯描簾状文が加わるか、楯描文と篋描文のみになる。
 C₃ 無文
 壺D 袋状に内弯する口縁部をもつ。「袋状口縁壺」
 壺E 赤色塗彩される壺。「赤彩壺」
 無頸壺 口縁部が内弯気味に立ち上がり、注口をもつものもある。

甕類……甕・台付甕

甕A・B

甕A 単純口縁を有する甕

文様・形態から4細分する。

- A₁ 口径 \geq 胴部最大径 口径に比べて器高が高い。胴部に縦位羽状の楯描斜走直線文をもつことを基本とし、頸部に楯描横走平行線文、簾状文、波状文をもつ場合もある。
 A₂ 口径 \geq 胴部最大径 口径が大きいのに比べて器高が低い。胴部に斜状か、横位羽状の楯描斜走直線文をもつことを基本とし、頸部に楯描横走平行線文をもつ場合もある。
 A₃ 口径 \geq 胴部最大径 比較的小型品が多い。楯描波状文+垂下文か、波状文が胴部に施される。
 A₄ 口径 \leq 胴部最大径 胴部の張りがA₁~A₃と比べて下方に下がり、文様は楯描波状文、斜格子目文などバラエティーに富み、無文のものもある。

甕B 受口状の口縁部を有する甕 文様を主に置き、4細別する。

- B₁ 縦位羽状の楯描斜走直線文をもつことを基本とする。形態は口径に比して器高が高いものが多いが、口径 $>$ 胴部最大径、口径 \approx 胴部最大径、口径 $<$ 胴部最大径などがありバラエティーに富む。
 B₂ 胴部に楯描波状文+垂下文をもつことを基本とする。口径 \approx 胴部最大径の形態が多く、口径に比して器高は高い。
 B₃ 胴部に斜走、横位羽状の楯描斜走直線文をもつことを基本とする。形態は口径 \leq 胴部最大径が基本で、B₁、B₂にくらべ胴部最大径が下がり、丸味をもつ。
 B₄ 口~胴部に縄文のみが施される。

台付甕A・B・C

台付甕A 「コ」の字重ね文を基本とする。受口口縁と、単純口縁がある。

台付甕B 楯描波状文+垂下文を有する。受口状の口縁部をもつ。

台付甕C 小型品

鉢類……鉢

鉢A・B

鉢A 椀状逆「ハ」の字状を呈するもの。赤彩、無彩で2細別する。

- A₁ 無彩
 A₂ 赤色塗彩

鉢B 椀状の体部から口縁部が屈曲して鐔状を呈する。大型品で赤彩塗彩を基本とする。

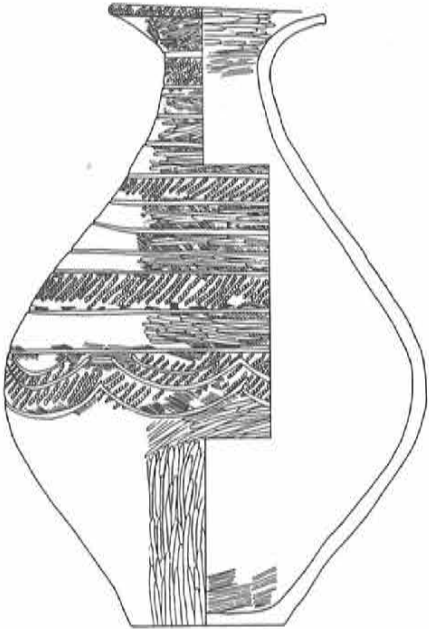
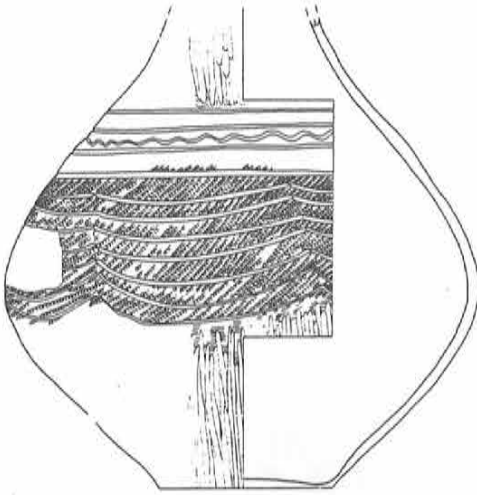
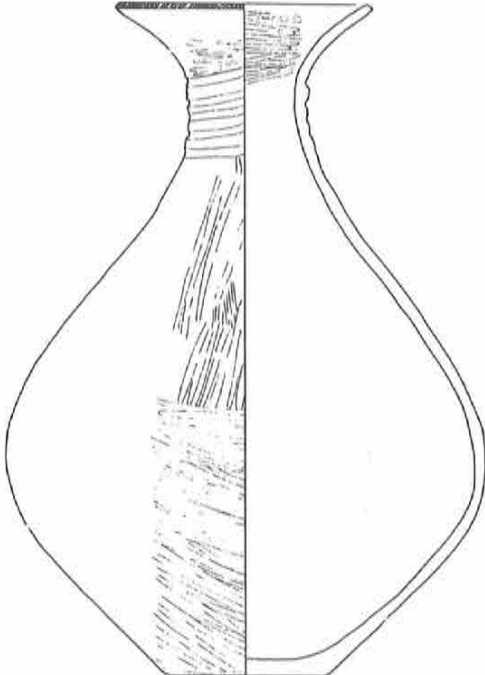
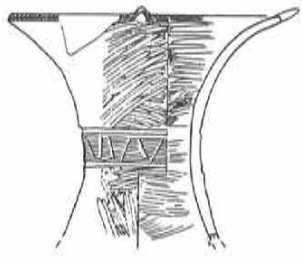
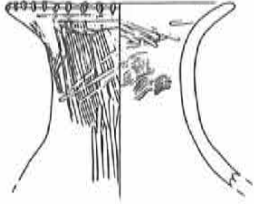
鉢C 口縁部が「く」の字状に外反する。

高坏類……高坏

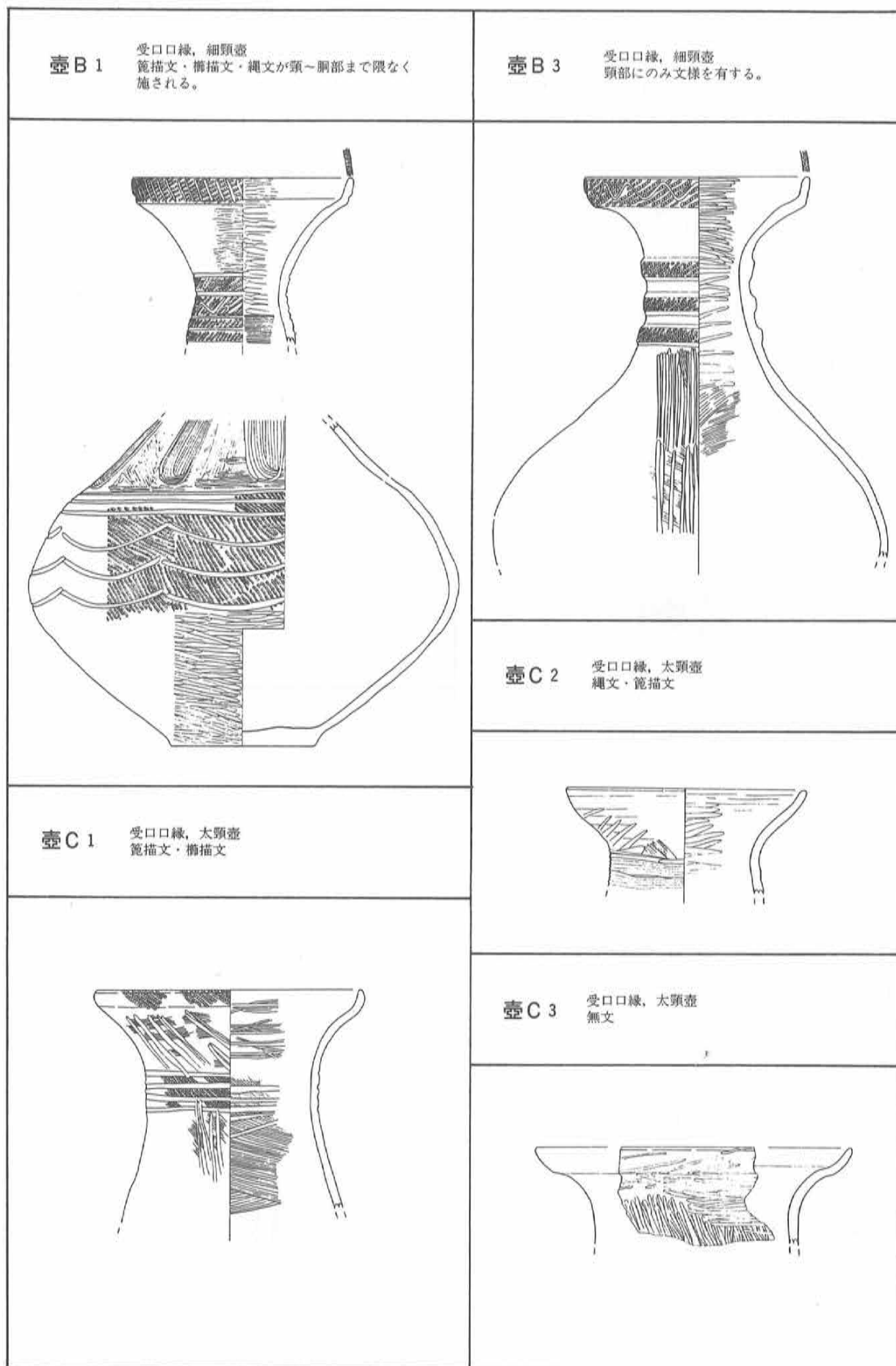
高坏A・B

高坏A 坏部が椀状を呈するもの。脚部は小型と考えられる。

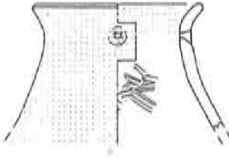
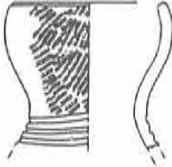
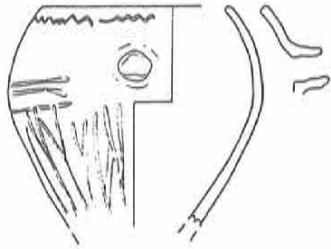
高坏B 坏部は椀状の体部から、口縁部が屈曲し、鐔状を呈する。赤色塗彩の有無で2細別する。

<p>壺A 1 篋描文・縄文が、頸部から胴部まで限なく施される。</p>	<p>壺A 2 壺A 1の文様構成のうち、胴部上位の文様を欠く。</p>
	
<p>壺A 3 頸部のみに文様を有する。 縄文と篋描文</p>	<p>壺A 4 頸部のみに文様を有する。 篋描文と櫛描文</p>
	 <p>壺A 5 文様なし</p> 

第418図 中期後半弥生土器壺A分類図 (1:4)



第419図 中期後半弥生土器壺B・C分類図 (1:4)

壺E 赤色塗彩される。	壺D 袋状に内弯する口縁部をもつ。	無頸壺 口縁部が内弯気味に立ち上がり、注口をもつ場合がある。
		

第420図 中期後半弥生土器壺D・E、無頸壺分類図(1:4)

B₁ 無彩B₂ 赤色塗彩

甗類……甗

甗 形態別に分類することは本調査出土資料では困難である。体部～口縁部が逆「ハ」の字状に直線的に開き、底部中央一箇所に焼成前の円孔を有するものが基本である。

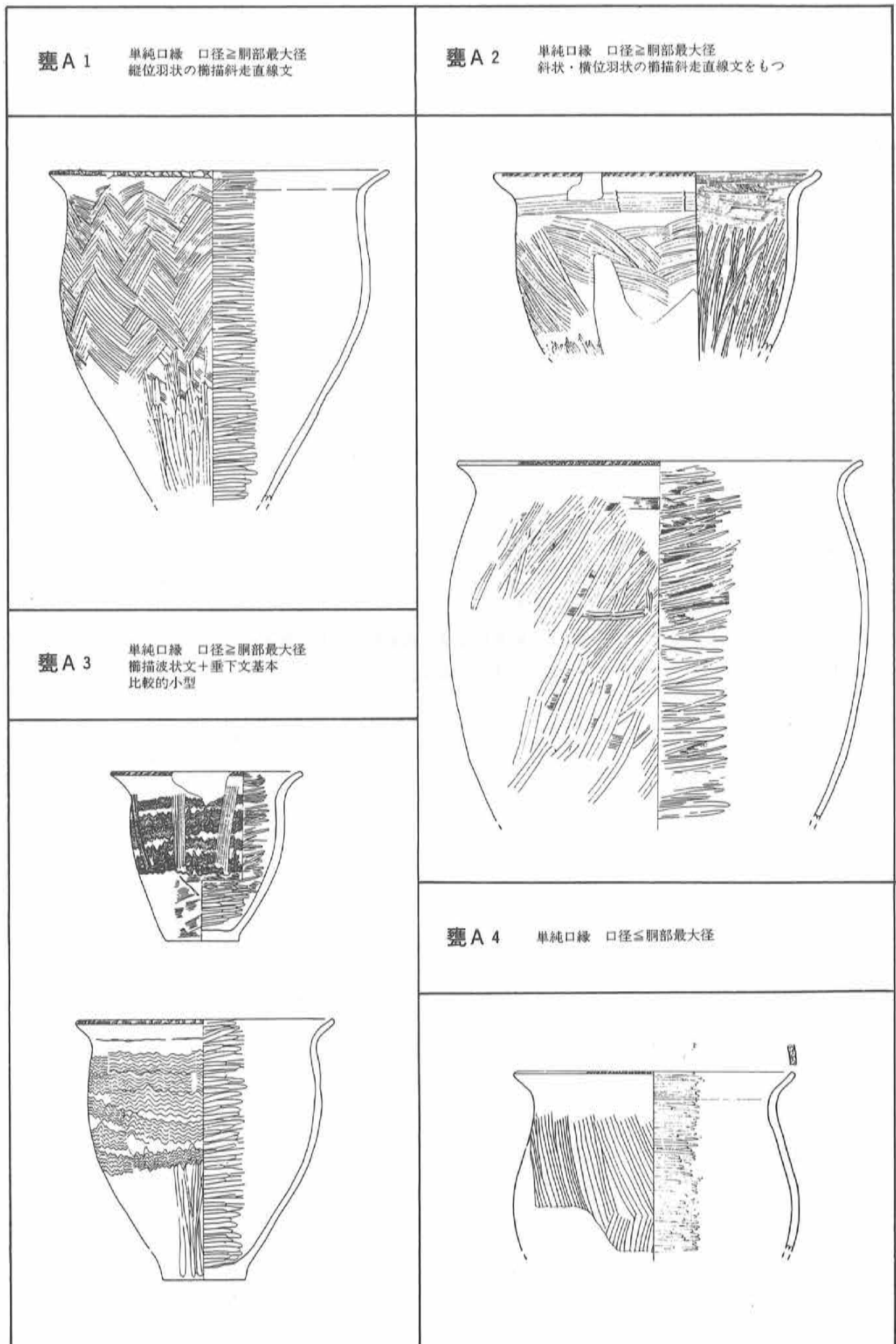
※ 以上に分類された各器種・器形をとりまとめる住居址一括資料の相互比較から、本調査出土資料を北西ノ久保I期、II期と仮称して2大分割し、その消長、変化を探ることとする。

2大分割の根拠

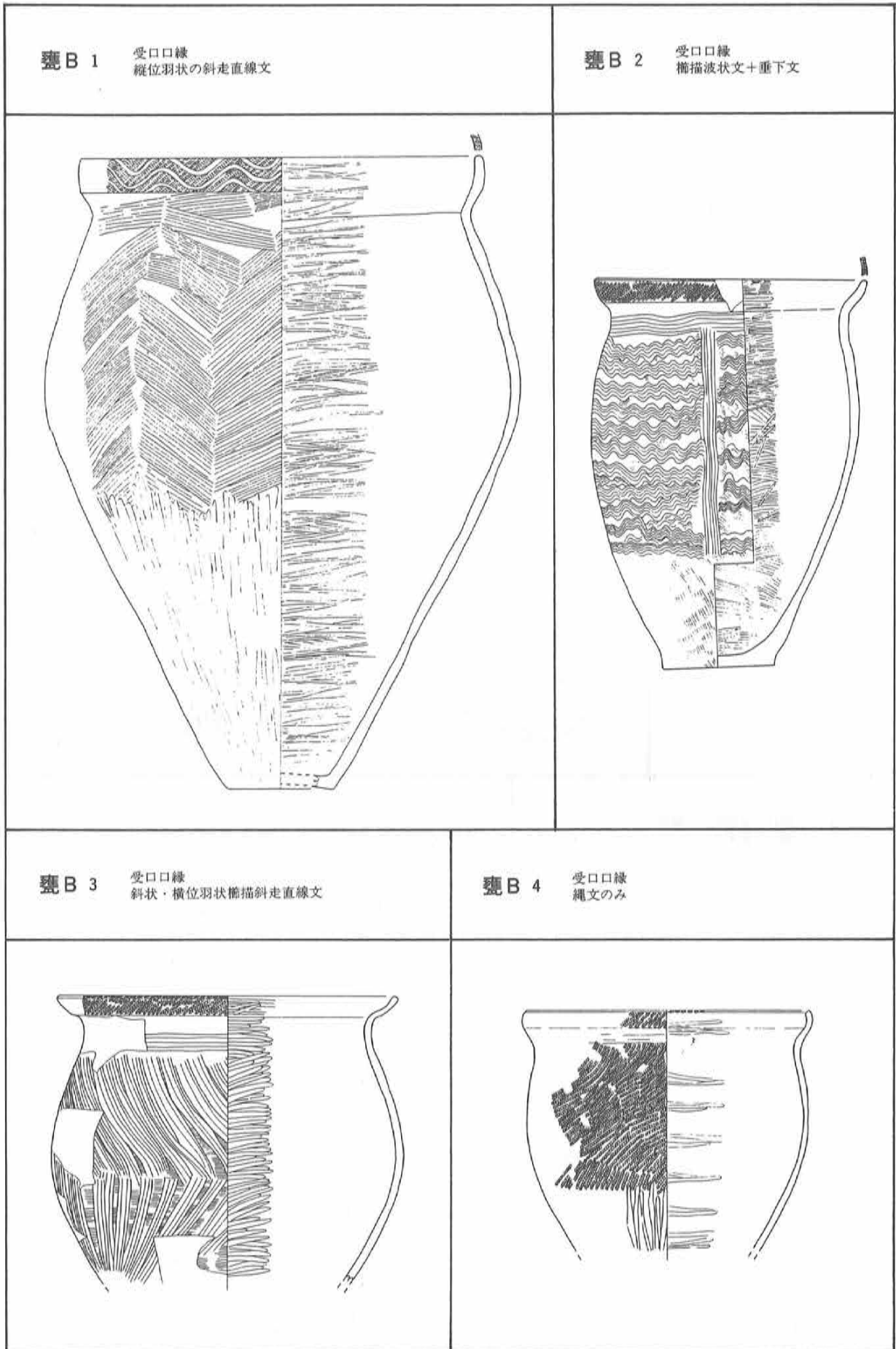
本調査で得られた資料には、笹沢編年による栗林I式に併行すると考えられる古要素(壺A₁主体で構成される一括資料)をもつ資料がない。(壺A₁のような頸部から胴部にまで加飾される古要素をもつ壺はY78・115・128号住居址などでみられるが、いずれも頸部のみに施文される壺A₃と共存しているため、総合的にみれば、栗林I式とは認定できないと考える。)従って、北西ノ久保遺跡の中期後半の弥生土器は大方が栗林II式(ごく一部がその直後型式)に該当する資料と考えられるが、中期後半の住居址相互の重複関係も相当数認められることから、これらを更に2大別して時間的な流れを追うことにしたい。但し、これらの資料を2分割することは従来、笹沢氏の言われた栗林II式から百瀬式への変遷観、細頸壺の文様の集約化、簡略化の傾向(本分類で言う壺A₂→壺A₃への主体の移行)では極めて困難であると言わざるを得ない。なぜなら、本調査で得られた中期後半の弥生土器の壺は、従来、栗林II式の直後型式(百瀬式併行)に主体を占めると言われてきた頸部のみに文様が施される壺A₃がほとんどの住居址一括資料中において主体を占めているからである。従って、ここに笹沢氏の編年観以外の新旧分類要素を見出す必要性が生じる。但し、千曲川水系では栗林式土器成立直前の土器様相は不明確であり、また、栗林I式にしても北信では長野市平柴平遺跡、浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスD地点遺跡、東信(佐久地方)では深堀遺跡2号住居址のみと類例に乏しい現状では、古要素から、本調査出土資料2分割の新たな編年基準を見出すことが困難である。どちらかと言えば内容が比較的整っている後期弥生土器へつながる新要素を、一括資料の中から見出すのが適当であろう。以下に新旧分類の基準になると考えられる新要素を抽出する。

1 壺C(太頸壺)の盛行

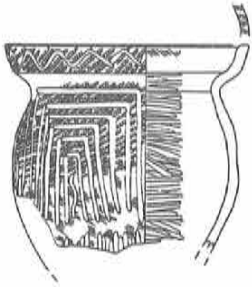
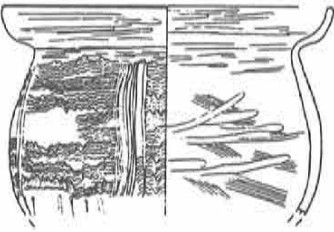
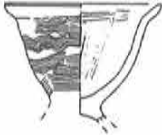

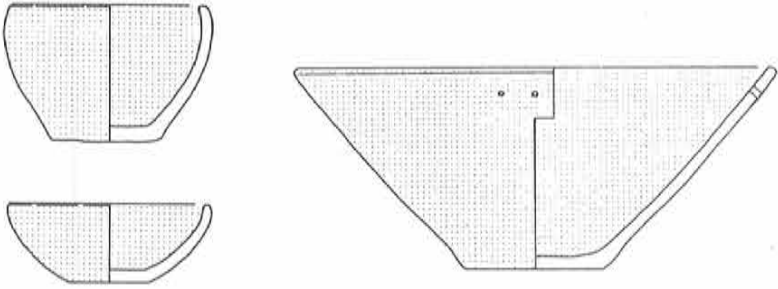
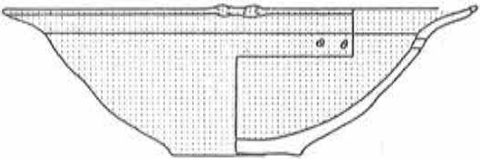
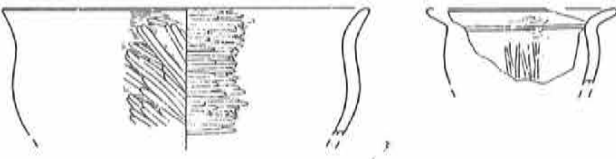
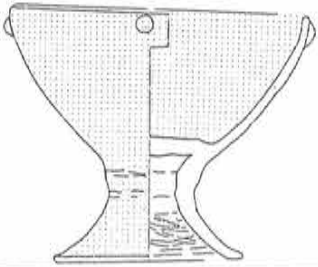
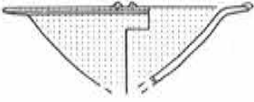

後期吉田式になると栗林式土器の基本的な壺=細頸壺が消滅し、頸部の太い壺のみとなる。中期の最終末段階に後期弥生土器へつながる文様の省略化された太頸の壺が盛行・発展する可能性が強く、一括資料中におけるこれらの存在は新要素と認定できると思われる。



第421図 中期後半弥生土器甕A分類図(1:4)



第422図 中期後半弥生土器甕B分類図 (1:4)

<p>台付甕 A 受口口縁 「コ」の字重ね文</p>	<p>台付甕 B 受口口縁 簡描波状文+垂下文</p>	<p>台付甕 C 小型</p>
		
<p>鉢 A 1 碗状を呈する。 無形</p>	<p>鉢 A 2 碗状、逆「ハ」の字を呈する。 赤色塗彩。</p>	
		
<p>鉢 B 碗状の体部から口縁部が屈曲して 鐏状を呈する。</p>	<p>鉢 C 口縁部が「く」の字状に外反する。</p>	
		
<p>高坏 A 赤色塗彩、小型 坏部が碗状を呈する。</p>	<p>高坏 B 赤色塗彩、小型 鐏状に屈曲する 口縁部をもつ。</p>	<p>甑 底部中央に一箇所に 焼成前の円孔を有する。</p>
		

第423図 中期後半弥生土器台付甕・鉢・高坏・甑分類図

2 壺B（受口口縁、細頸壺）、甕B（受口口縁甕）の受口部の外稜の消失化。

外稜が消失化するものは新しい要素をもつことが1986年の三県シンポジウムの席上で各研究者から指摘された。また、この壺・甕が吉田式の壺・甕へ継承される要素のあることも同席上で千野 浩氏が指摘している。

3 壺の頸部への櫛描文（簾状文、横走平行線文）の施文

吉田式の壺の頸部文様は細い工具による篋描文とともに、櫛描文が大きな位置を占めるようになる。栗林式の壺の頸部文様は太い篋描文をめぐらせることを基本としており、櫛描文をめぐらせることは少ない。従って、極くわずかな櫛描文をもつ壺は、後期へ傾斜する要素の萌芽と考えられる。

これら、後期へ傾斜とすると考えられる1・2・3の要素をもつY63・73・76・78・79・82・85・86・88・92・96・98・101・105・106・114・116・122・126号住居址の一括資料を新段階と仮称する北西ノ久保II期の軸に据えて検討を加えると別添図1・2、第88表のような新旧2分類が可能である。

第88表 北西ノ久保遺跡弥生中期後半住居址新旧分類表

北西ノ久保編年	北西ノ久保遺跡住居址No.	北信編年(笹沢1977)
北西ノ久保I期	Y65、71、72、74、75、81、91、103、110、112 113、115、117、121、128号住居址 ----- Y69号住居址 -----	栗林II式
北西ノ久保II期	Y63、68、73、76、78、79、82、85、86、88、92 96、98、101、105、106、114、116、122、126号 住居址	
不明	Y62、83、90、95、99、108、109、118、119号住居 址	

器種・器形の消長・変化

以上のように北西ノ久保I期・II期に2大分割された、本調査出土資料の各器種、器形の消長・変化を探る。

壺A～E

壺A（単純口縁、細頸壺）

- A₁（文様口～胴部）
（まで隈なく。） 北西ノ久保I・II期いずれにも少量ながら存在する。本遺跡出土資料に先行する栗林I式に主体を占める器形であるが、本遺跡出土資料によって中期終末段階近くまで、残存することが明らかになった。
- A₂（A₁の文様構成のうち、胴部上位の文様を欠く。） 北西ノ久保I・II期にわたって存在するが、A₁と同様極めて量が少ない。従来、北信では栗林II式において主体を占める器形と考えられていたが、本遺跡出土資料を見る限り、栗林II式に併行する部分の多い北西ノ久保I期においても、主体となる器形とはなり得ない。北佐久地方の地域性と考えられることもできよう。Y107号住居址出土の189-7は栗林式土器成立以前からの系譜を引く文様構成をもつ器形と考えられ、今後更に検討を要する。また、櫛描文のみで構成されるY78号住居址出土の73-5の系譜についても今後の検討課題である。
- A₃（頸部にのみ、施文。篋描文） 壺の中で北西ノ久保I・II期の両時期にわたって終始、圧倒的に主体を占める器形。基本的な形態変化は北西ノ久保I・II期にわたってほとんど認められない。外面調整は刷毛目痕をヘラミガキによって消しているものがほとんどである。
- A₄（頸部にのみ、施文。櫛描文） 北西ノ久保II期に一点のみ存在する。縄文の消失化傾向が顕著で、刷毛目調整痕の残存度も高い。

- A₅ (無文) 北西ノ久保 I 期に 1 点のみ存在。特異な器形である。
- 壺 B (受口口縁、細頸壺)
- B₁ (文様、頸~胴部まで限なく) 北西ノ久保 I 期に少量、北西ノ久保 II 期では更に少なく、各期に主体を占める器形とは言えない。垂下文をもつことを基本としている。従来、栗林 I 式のメルクマールとされてきた垂下文の周囲に篋描刺突文がめぐるものも、北西ノ久保 I・II 期、両時期に存在する。伝統的な要素の存在と見るべきであろうか？、また、北西ノ久保 II 期では垂下文の波状化したものもみられる。新要素と見るべきであるかもしれない。
- B₂ (胴部上位の文様を欠く) なし
- B₃ (頸部にのみ、施文) 各期にわたって主体となる器形ではないが、北西ノ久保 I 期で少なく、北西ノ久保 II 期で若干増加すると考えられる。形態は両期に受口部に明瞭な外稜を有するものが多いが、II 期の中に外稜がとれ、丸味を滞びるものも存在する。北西ノ久保 II 期の中で更に時間的な流れがあることを示唆しているように思われる。
- 壺 C (受口口縁、太頸壺)
- C₁ (縄文と篋描文施文) 北西ノ久保 I 期あるいはそれ以前から出現していると考えられるが、主体は北西ノ久保 II 期と考えられる。
- C₂ (頸部に櫛描文が加わる) C₁と同様北西ノ久保 I 期から出現していることが考えられるが、主体は北西ノ久保 II 期と考えられる。本調査での出土量は少ない。縄文地文をもつものから、縄文が消失するものへの変化が考えられる。
- C₃ (無文) 北西ノ久保 II 期において出現すると考えられるが量は少ない。
- 壺 D (袋状口縁壺) 第 1 次調査分の Y42号住居址出土資料中に一点のみみられる。在地で発展した器形とは考えられず、外からの影響力で生じたものと考えられる。
- 壺 E (赤彩壺) 北西ノ久保 I・II 期に極めて少量ながら認められる。本調査出土資料中には良好なものがないが、第 1 次調査分に全形態を知り得るものが存在する。いずれにせよ、北西ノ久保 I・II 期では壺の、赤色塗彩の傾向が一般化していなかったと理解される。

無頸壺 良好な資料に恵まれないため、消長・変化は不明。

甕 A・B

甕 A (単純口縁甕)

- A₁ (口径≧胴部最大径、縦位羽状櫛描斜走文) 栗林式土器の基本的な甕とされている。北西ノ久保 I 期では甕の組成の中でも主体を占めているが、II 期になると量的に減少し、受口化した B₁が増えるように思われる。I・II 期にわたる形態的な変化は少ないように思われる。
- A₂ (口径≧胴部最大径、斜状、横位羽状の櫛描斜走文) A₁に比べると量は少ないが、北西ノ久保 I 期においては甕の基本的な器形の一つと考えられる。北西ノ久保 II 期では極めて少なく、受口化した、B₃へ変化し、これが主体となることも考えられる。A₂は北信地方に主体的な甕のようであるが、佐久地方では少ないように思われる。
- A₃ (小型品、櫛描波状文+垂下文) 北西ノ久保 I・II 期にわたって存在し、甕の基本的な器形の一つと考えられる。I・II 期にわたって大きな変化は見られないが、II 期の中に口径が広がったものもみられるようになる。また、II 期になると受口化、大型化した B₂も増加する傾向がみられる。

A₄ (口径≤胴部最大径) 北西ノ久保I期にも極く少量みられるが、主体は北西ノ久保II期と考えられる。球胴化の傾向が著しく、A₄の口縁部が伸びて、後期の甕へ変化することが想起される。

甕B (受口状口縁をもつ甕)

B₁ (縦位羽状の斜走文) 北西ノ久保I期に出現していると考えられるが量は少ない。主体は北西ノ久保II期にある。甕A₁のI期における盛行、II期における衰退と有機的に関わるものと思われる。

B₂ (楕描波状文+垂下文) 北西ノ久保I期に出現していると考えられるが、主体は、北西ノ久保II期にあり、量的にも増大する。甕A₃からの変化が考えられ、II期では甕A₃と共存する。形態は大型化の傾向が指摘できる。

B₃ (横位羽状の楕描斜走文) 北西ノ久保I期に出現しているが、量は少ない。北西ノ久保II期で主体を占める。北西ノ久保I期で主体を占めた甕A₂からの変化が考えられ、胴部は最大径が下がり、球胴化の傾向がみられる。

B₄ (縄文のみ施文) 北西ノ久保II期に一点のみ、みられる。系譜は全くつかめない。

台付甕A・B・C

台付甕A (「コ」の字重ね文) 北西ノ久保I・II期に存在するが、良好な資料が少なく、変化を指摘するに至らない。但し大きな変化はないように思われる。

台付甕B (楕描波状文+垂下文) 第1次調査分のY15号住居址中にみられ、北西ノ久保II期には確実に存在すると思われるが、資料に乏しく、消長・変化は不明。

台付甕C (小型品) 北西ノ久保II期に存在するが、やはり資料が少なく消長・変化は不明。

鉢A・B・C

鉢A (椀状の鉢)

A₁ (無彩) 北西ノ久保I・II期に存在するが、量は極めて少ない。

A₂ (赤色塗彩) 北西ノ久保I期に存在するが量はやや少ない。II期においてかなり増加する傾向がみられる。

鉢B (大型品、鐙状の口縁部) 北西ノ久保I期に出現していると考えられるが、主体は北西ノ久保II期か?。消長・変化は資料不足のため不明確だが、大きな変化は少ないと考えられる。

鉢C (口縁部「く」の字状) 北西ノ久保II期に形態の異なるものが二点あるが、資料があまりに乏しいため、消長・変化は全く不明。

高坏A・B (椀状の坏部と、鐙状に張り出す坏部) いずれも良好な資料に恵まれない。北西ノ久保I・II期のいずれにも存在すると考えられるが、変化は不明である。概して小型品が多く、赤色塗彩を基本とする。北西ノ久保出土資料に先行する深堀遺跡2号住の栗林I式に併行する土器群中に無彩の高坏があり、無彩から赤色塗彩への変化を考えることもできる。いずれにせよ中期後半の土器組成中において、高坏は基本的に少なかったものと思われる。

甗 (逆「ハ」の字状) 北西ノ久保II期に集中しているが、I期からも確実に存在すると考えられる。消長・変化は不明確である。

まとめ

以上の分析結果から、北西ノ久保 I・II 期各期における器種・器形をとりまとめると、次のようになる。

北西ノ久保 I 期	主体器形……………壺 A ₃ 、甗 A ₁ 、甗 A ₂ 、甗 A ₃ 主体でない器形……壺 A ₁ 、壺 A ₂ 、壺 A ₄ 、壺 B ₁ 、壺 B ₃ 、壺 D、壺 E、甗 B ₁ ~ ₃ 、 台付甗 A、鉢 A ₁ 、鉢 A ₂ 、高坏 A、高坏 B、甑
北西ノ久保 II 期	主体器形……………壺 A ₃ 、甗 A ₃ 、甗 A ₄ 、甗 B ₁ 、甗 B ₂ 、甗 B ₃ 、鉢 A ₂ 主体でない器形……壺 A ₁ 、壺 A ₂ 、壺 B ₁ 、壺 B ₃ 、壺 C ₁ 、壺 C ₂ 、壺 C ₃ 、甗 A ₁ 、 甗 A ₂ 、甗 B ₄ 、台付甗 A、台付甗 B、台付甗 C、鉢 A ₁ 、鉢 B、鉢 C、高坏 A、高坏 B、甑

壺 A₃ は北西ノ久保 I・II 期にわたって、量的にも圧倒的に主体を占めており、当地方の中期後半の弥生土器の基本形と考えられる。また、形態的变化が少ないことから、壺 A₃ を基準にして新旧に分離することはほとんど不可能である。これは主体を占めない器形壺 A₁、壺 A₂ にも同じことが言え、この器形から新旧に分離する要素を抽出することは難しい。壺において新旧に分離する要素は、変化の少ない上記の単純口縁細頸壺 A と共伴する、少数の壺 B (受口口縁細頸壺)、壺 C (太頸壺) に見い出せる。I 期において垂下文をもつ壺 B₁ は II 期では量的に減少し、垂下文に波状化するものが現われる。また、受口部の外稜がとれたものや、文様が集約化された壺 B₃ も II 期にあらわれることなどが指摘できる。

更に、太頸の壺 C の出現及び多用化は最も顕著な新要素と考えられる。換言すれば、壺 C の発展、多用化は後期弥生土器が成立前夜に生起する最も重要な要素として考えることができるのである。以上、壺が一括資料中においては少数の壺 B の変化及び、壺 C の出現、多用化から辛うじて新旧に分離できるのに対して、甗は漸次的な流れを追うことが可能である。大略的に言えば、単純口縁から受口口縁への変化である。これは各器形にほぼ同様な傾向として理解できる。まず単純口縁の A₁ は北西ノ久保 I 期に主体を占め、量も多いが、II 期になると減少し、逆に I 期においては少なかった受口口縁の甗 B₁ は II 期において増加し、主体を占めるようになる。単純口縁の甗 A₂ も I 期盛行したのち、II 期では激減 (ほとんど消滅) し、逆に I 期で少なかった甗 B₃ が II 期で増加する。甗 A₃ は I・II 期を通じて大きな変化を示さず存在するが、I 期から派生したと考えられる受口口縁で大型の甗 B₂ が II 期で増加する。以上、前述したように甗は I 期の単純口縁主体から II 期の受口口縁の共存、多用化へと総括でき、簾状文の受容は終始少ない。

他の器種、台付甗、鉢、高坏、甑については良好な資料が不足しているため、明確な変化を指摘することができない。いずれにせよ、中期後半においてこれらの器種が多用されていなかったことを示しているように思われる。但し、鉢 A₂ は II 期において多用される傾向がみられる。また、鉢について更に言えば、北西ノ久保 I 期の段階から赤色塗彩の傾向が盛行していたことは明らかであり、小型品が多いが高坏についても同様なことが言えそうである。後期において壺、鉢、高坏などに爆発的にみられる赤色塗彩の傾向は、中期後半において、まず鉢・高坏などの供膳形態に対して赤色塗彩を多用する傾向から派生したものと理解できるのである。

これら、I 期、II 期にわたる壺・甗を中心とした器種・器形の消長・変化は換言すれば、I 期における最も安定した中期後半の弥生土器様相 (器種・器形の構成要素が II 期に比べ少ない) から、II 期に至って中期後半の弥生土器の解体の始まる土器様相 (伝統的な古い要素と次期後期へ連なる新しい要素が混在し、器種・器形の構成要素が I 期にくらべ多くなり、バラエティーに富む) を具現しているように思えるのである。今回は一括性を重視し、II 期と大雑把にとりまとめてしまったが、北西ノ久保 II 期の中では壺 B₃ の説明でも触れたように更に時間的な流れが追えるであろうし、後期的要素の更に強い一群を抽出することも可能と考えられる。この点については、中

期最終末期段階から後期最古段階の良好な資料を内包する樋村遺跡の出土資料の分析検討をふまえた上で再検討することにしたい。

佐久地方の他遺跡出土資料の位置づけ

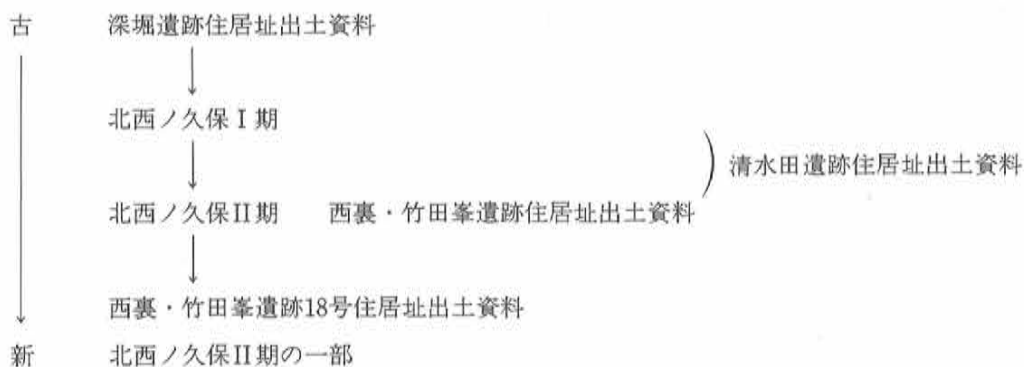
先述の内容をふまえ、当地方の既出資料の位置づけを行いたい。中期後半弥生土器の調査資料は佐久市深堀遺跡（藤沢 1972）、同市和田上南遺跡、清水田遺跡、樋村遺跡、西八日町遺跡、西裏・竹田峯遺跡（佐久埋蔵文化財調査センター 1986）などがある。このうち、和田上南遺跡からは該期の住居址5棟から北西ノ久保I期に併行すると考えられる資料が検出されているが、詳細が明らかでなく、ここでは明確な位置づけを行えない。また、樋村遺跡からは北西ノ久保II期に後続すると考えられる後期への過渡的な様相を示すと考えられる資料、西八日町遺跡からは北西ノ久保I期に先行する古い要素をもつと考えられる資料が検出されているが、資料化されていないため、内容を明示できない。従って、ここでは内容が明らかにされている深堀、清水田、西裏・竹田峯遺跡の出土資料を北西ノ久保I・II期と比較して位置づけておきたい。

深堀遺跡 報告書では住居址2軒と報ぜられているが、土器の実物を見ると第1号住居址と報告したものの中に2号住居址と註記されているものがある。また、第1号住居址は炉も柱穴ももたないため、その存在自体に疑義が生じる。報告書で扱われた出土資料は一括して扱った方が良いように思う。深堀遺跡出土資料の器種・器形の構成内容は、篋描の変形工字文などが施される壺A₁、壺A₃、壺D、甗A₁、甗A₂、甗A₃の他、口縁部に縄文が施される深鉢、甗A₁の形態に篋描連弧文が施される甗など北西ノ久保I・II期にはみられない器種・器形も存在する。これらのみられない要素は北西ノ久保I・II期に先行する古要素と考えられ、また、口～胴部まで加飾される壺A₁が、頸部のみに文様をもつ壺A₃よりも主体を占めていることも勘案すれば、深堀遺跡出土資料の総体は北西ノ久保I・II期よりも古い段階、栗林I式併行に位置づけられよう。但し、問題となるのは壺A₃の存在である。北信では栗林I式土器の組成中に壺A₃は未確認である。深堀遺跡にみられる壺A₃の存在は、次期の北西ノ久保I期における壺A₃の盛行に連なるものと考えられ、佐久地方の地域性として栗林I式併行の古い段階から、文様の集約化・省略化された壺が存在していたと理解しておきたい。

清水田遺跡 住居址1棟のみである。壺A₃と考えられるものが2点、甗A₃が1点、計3点のみのため、明確な位置づけはできないが、北西ノ久保I・II期のいずれかに該当すると考えられる。

西裏・竹田峯遺跡 住居址9棟が検出されている。まとまった資料が検出された西裏第18号住居址を北西ノ久保II期と比較すると、壺A₃、甗B₁、甗B₃、鉢A₁、高坏などの器種・器形において、縄文の消失化傾向が顕著であり、また、壺A₃の外面調整は刷毛目調整痕を明瞭に残していることなどから、北西ノ久保II期よりも後出的な様相を示しているように思われるが、欠落器形が多く、また、これに類似するセットも佐久地方ではほとんどみられないため、現状では北西ノ久保II期の範疇で考えておきたい。他の住居址出土資料については、受口口縁をもつ甗Bが多用される傾向が認められるため、北西ノ久保II期に併行すると考えられる。

以上をとりまとめると、佐久地方の中期後半の弥生土器は次のような変遷をたどり得ると考えられる。



栗林Ⅰ式併行については、西八日町遺跡、栗林Ⅱ式の直後型式併行については樋村遺跡、それぞれの住居址出土資料を分析すれば、更に内容が明らかになるであろう。特に樋村遺跡では、佐久地方の後期弥生土器の中でも最も古い部分に位置づけられる住居址も共存しており、中期から後期への変遷過程を知る上でも重要な意味を内包している。

他地域との比較

先述の佐久地方の中期後半弥生土器の変遷観をもとに県内、県外の他地域の当該資料を比較し、併行関係を考えてみたい。県内の比較地域は北信（長野・中野・飯山）、中信（松本・諏訪）、南信（飯田・下伊那）の三地域、県外は、佐久地方と特に密接な関係が考えられる群馬県にしぼって考えることにするが、かなり勉強不足である。

北信 先述したように栗林Ⅰ式には、不安定な資料ではあるが深堀遺跡住居址出土資料が併行関係をもつと考えられる。但し、深堀遺跡住居址出土資料には、文様が集約化された壺A₃も共存している点が若干異なる。ここでは一応佐久平の地域性として考えておきたい。栗林Ⅱ式には、北西ノ久保Ⅰ期と北西ノ久保Ⅱ期の大方が併行関係をもつと考えられる。本遺跡では従来、栗林Ⅱ式として一括して総称されてきた、器種・器形を、豊富な一括資料の相互比較から2期に分離した。Ⅱ期における太頭の壺Cの出現、増加の傾向、Ⅰ期における単純口縁甕A主体の傾向からⅡ期における受口口縁甕Bの増加、普遍化の傾向がその最も大きな根拠となっている。栗林Ⅱ式の中で時間的な流れが予想されることは設楽博巳氏も指摘されており、今回は一つの具体案を提示できたように思う。但し、この栗林Ⅱ式の2分離案は、豊富な一括資料の相互比較から得られる大枠の土器様相の変化をとらえたものであって、栗林Ⅱ式を分離して新たな型式名を設定しようとするものではない。栗林Ⅱ式の中における時間的な流れは、峻別できるものでなく、栗林Ⅱ式の古相、中相、新相というような漸次的な様相変化として把握すべきであろう。これは次の栗林Ⅱ式の直後型式に併行すると考えられる土器群に対しても同じことが言えよう。栗林Ⅱ式の直後型式（長野市旭幼稚園遺跡出土資料）には、今回は一括資料の内容が貧弱であったため、北西ノ久保Ⅱ期の中にも更に新旧の要素が存在する可能性を指摘するに留まったが、北西ノ久保Ⅱ期に含めたY88号住居址の一括資料と、西裏遺跡18号住居址の一括資料が併行すると考えられる。以上、本稿で示した佐久地方の中期後半の弥生土器の変遷過程は北信の栗林式土器の流れにおおむね準拠する。若干の相違は栗林Ⅰ式に併行する遺跡自体が少ないことが予想されること、栗林Ⅰ式併行の段階から、文様の集約化された壺A₃が存在し、栗林Ⅱ式併行に至ると壺A₃が圧倒的に主体を占めること（北信では栗林Ⅱ式の段階では壺A₂、壺B₁など加飾の多い壺が盛行しているように思われる。）、横位羽状櫛描斜走文が施される甕A₂が北信に比べて少ないことなどがあげられよう。

中信 諏訪地方で天王垣外式、海戸式、松本平で百瀬式が設定されている。併行関係をもつとされる海戸式と百瀬式については、「地区が違うだけで、同じ内容のものを型式名をちがえてとらえてきたという研究史は反省されてしかるべきである。」（設楽 1986）という批判的な意見もあり、ここではこれに従って、諏訪・松本平を一括し、中信として扱うことにする。海戸式の標式となっている海戸遺跡27号住居址出土資料、百瀬式の標式となっている百瀬竪穴の出土資料は、北西ノ久保Ⅱ期と併行関係をもつと考えられる。百瀬竪穴の太頭化した壺Cの存在及び、海戸・百瀬両遺跡にみられる受口口縁の甕Bの存在がその根拠となる。他の器種・器形の構成も、壺A₃（主体的）、壺B₂かB₃、甕A₁、甕A₂、甕A₃、台付甕A、鉢A、小型の高坏Bなどからなり、北西ノ久保Ⅱ期と共通する部分が多いように思われる。型式内容が不明確な天王垣外式については、壺A₂、甕A₁などからなること、また、海戸式に先行し、栗林Ⅱ式と密接な関係をもつ土器（笹沢 1977）とされているため、一応北西ノ久保Ⅰ期に併行するものと考えておきたい。また、海戸・百瀬式に後続する良好な資料として、近年注目を集めている松本市県町遺跡の8号・16号住居址出土資料は、北西ノ久保Ⅱ期の一部（新しい部分）、西裏遺跡18号住居址の出土資料が併行すると考えられるが、佐久地方に良好な資料がないため、詳細な比較はできない。

南信 北原式・恒川式が設定されていたが、飯田市恒川遺跡群の報告において、北原式をⅠ・Ⅱ式に分割する案が提出された(山下 1986)。山下氏は県内当該期の資料との併行関係にも触れ、全県規模で広く分布し共通要素をもつ羽状の櫛描斜走文をもつ甕A₁の比較から、北原Ⅱ式=海戸式=百瀬式=栗林Ⅱ式という併行関係を想定している。本遺跡出土資料の分析によれば甕A₁は相当な時間幅をもち、型式変化が少ない器形であることが明らかで、山下氏の説のようにすべてを横一線に並べることは若干の危惧を感じるが、この併行関係は大略的には是認されよう。従って南信の該期の土器は東・北・中信と土器様相が大幅に異なり、共通要素に乏しいため、詳細な比較はできないが、北原Ⅱ式=栗林Ⅱ式という併行関係から、北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ期は北原Ⅱ式に併行すると考えられる。逆説的に言えば、北原Ⅱ式が分離できる要素を内包していると言え、山下氏自身も「北原Ⅱ式の中にも古様相と新様相がみられる」と述べておられる。北原Ⅱ式に後続する恒川式と佐久地方の西裏18号住等の資料は併行関係をもつことも考えられるが、明らかでない。恒川式は、後期吉田式との関連も指摘されており、その面からの検討も必要であろう。

以上に述べた県内における中期後半の弥生土器の併行関係をまとめると、第89表のようになる。従来の栗林Ⅱ式を新旧に分離すれば、山下氏の併行関係説にみられた、栗林Ⅰ式=天王垣外式というような矛盾も解決できるように思われる。

群馬県 群馬県全域の当該資料にあたっていないので、併行関係を明示することができないが、良好な一括資料が得られている前橋市清里庚申塚遺跡の出土資料を、北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ期の土器群と比較すると、次のような相違が指摘できる。

- 壺・甕の縄文の消失化傾向が北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ期の土器群よりもより顕著である。
- 壺の外表面調整に、刷毛目調整痕が明瞭に残る。
- 甕に簾状文の受容がより顕著である。
- 赤色塗彩された大型の高坏がみられる。

これらの相違点は地域差とするよりも時間的な差異とみるべきであろう。特に大型の高坏は北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ期では全く存在しなかったものであり、後期へ傾斜した様相が伺える。また、簾状文がより多く受容されている傾向、及び赤色塗彩される壺が多い傾向は、中信の百瀬式や、海戸式と共通し、佐久地方との関連よりもむしろ、中信地方との関連の強さが指摘できるのである。北西ノ久保出土資料を中心とする佐久地方との関連が明確なのは今のところ、高崎市浜尻Ⅰ遺跡、などにみられる「水鳥の足」の記号のみである。

群馬県において、清里庚申塚遺跡に先行する時期の資料は近年徐々に増加しているが、依然として少ないのが現状のようである。特に栗林Ⅰ式に併行する土器はほとんどみられない。栗林式土器は北信を起点として千曲川を遡るに従って古い段階の資料が少なくなる傾向をもつようである。

その他の地域 この他、中部高地の栗林系の土器は埼玉県北部にも一つの文化圏を形成し、更に東京・神奈川県にも客体ながら流れ込んでいる。北は新潟県で畿内様式の流れをくむ土器と共存し、未確認情報ではあるが、石川県にまで流れ込んでいるようである。⁽¹⁾また、天竜川水系では北原式と客体ながら共存し、更に南下した愛知県⁽²⁾の朝日遺跡でも発見され、移入経緯は不明であるが、静岡県清水市⁽³⁾でも発見されたと言う。このように中部高地の栗林系土器は当該期にしては比較的大きな文化圏をもち、かつ広域にわたって動いている。その意味については、今は資料が集約できていないため稿を改めて再考することにした。

註(1) 新潟県教育庁 坂井秀弥氏の御教示による。

註(2) 七尾市教育委員会 土肥富士夫氏の御教示による。

註(3) 愛知県教育委員会 1975 『環状2号線関係 朝日遺跡群第1次調査報告書』では百瀬式として紹介

第89表 他地域との併行関係表

佐久平	北信	中信	下伊那
深掘遺跡住居址	栗林Ⅰ式	+	北原Ⅰ式
北西ノ久保Ⅰ期	栗林Ⅱ式	天王垣外式 +	北原Ⅱ式
北西ノ久保Ⅱ期		海戸式 百瀬式	
北西ノ久保Ⅱ期の一部 西裏18号住居址	栗林Ⅱ式直後型式 (旭幼稚園遺跡)	+ 県町遺跡	恒川式

され、高蔵式に共存すると報ぜられているが、石黒立人氏によれば、共伴性は不明確であるという。

註(4) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 山田成洋氏の御教示による。

弥生時代後期前半の土器について

第2次調査では弥生時代後期の住居址が20棟（Y64・66・67・70・77・80・84・87・89・93・94・97・100・102・104・111・120・123・125・127号住居址）が検出された。これらは重複関係をもたず、長軸方位も概ね一致することからほぼ同時期に形成されたと考えられる。出土した土器も多少の時間的な流れがあるとしても同一型式内の範疇でとらえることができよう。ここでは出土した後期弥生土器を前述した中期後半弥生土器に後続する北西ノ久保Ⅲ期としては一括し、器種・器形の分類を行い属性を明らかにすることにしよう。尚、ここであつかう北西ノ久保Ⅲ期の資料は後期前半の吉田式の要素をもつものであるが、北西ノ久保Ⅱ期（中期後半）からスムーズに移行したものとは考え難く、北西ノ久保Ⅱ期と北西ノ久保Ⅲ期の間にもう一・二段階介在する可能性が強いことをあらかじめおことわりしておきたい。

研究史

まず、前提作業として研究史を概略し、吉田式の認識を確認しておきたい。

昭和45年（1970）長野市吉田高校グランド遺跡出土土器を発表した笹沢浩氏は、これらの土器群を吉田式と型式設定した。設定時における氏の吉田式の時間的位置づけは、「中期弥生式土器を一部で止揚し、ある面ではその伝統を継承しながらも、新しい後期弥生土器—箱清水式へと展開を始めている土器群」として善光寺平における箱清水Ⅰ式に先行する後期初頭とされている。また、地域的な広がりについては検討課題とされた。翌昭和46年（1971）桐原健氏は同じ資料に対して、壺が栗林Ⅱ式、百瀬式、恒川Ⅰ式に類似するとして中期後半の土器として位置づけた。これに対し、昭和52年笹沢氏は石器をもたないこと、箱清水式的要素が強いことを掲げ、再度吉田式が後期の土器であることを強調した。その後、発掘調査の増加に伴い、飯山・中野・佐久など千曲川水系の全域にわたって吉田式の要素をもつ土器が分布することが判明し、昭和61年（1986）これをまとめた笹沢氏は吉田式の中にも型式上のバラエティーがあることを予測された。更に飯山市田草川尻遺跡1・2号住居址、佐久市周防畑B遺跡周溝墓出土土器などを、「吉田式から箱清水式土器への過渡的内容をもつものであり、吉田式土器に後続する一型式として存在する可能性がある。」として吉田式にも相当な時間幅があることを示唆した。

以上、研究史上からみて、吉田式は後期弥生土器として位置づけられよう。また、吉田式は当初は後期初頭の点的な型式として位置づけられたが、近年の趨勢では大きな時間幅をもつ、地域的広がりの大きい後期前半の型式として理解するのが適当と考える。このような認識に立って、北西ノ久保Ⅲ期の後期弥生土器を吉田式（後期前半）と位置づけ、以下に分析を行うことにする。

北西ノ久保遺跡後期前半弥生土器の分類（第424～427図）

壺類……壺、無頸壺

壺A～E

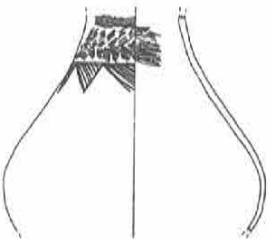
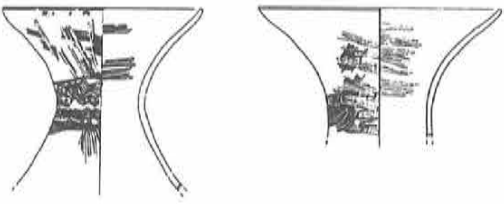
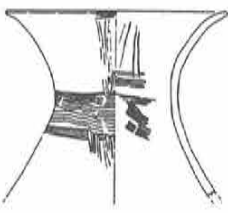

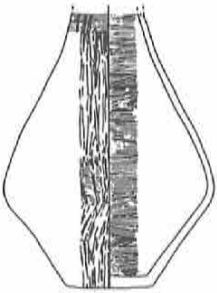
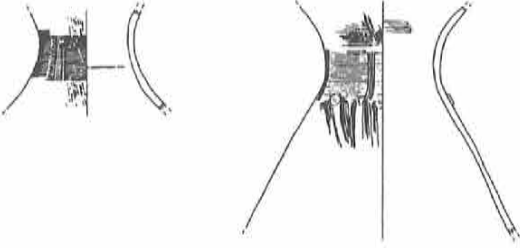
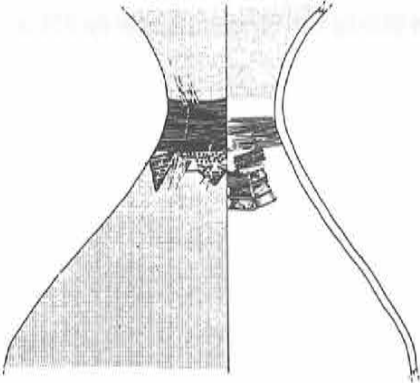
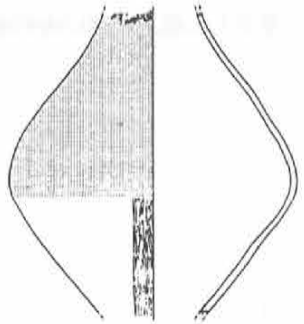
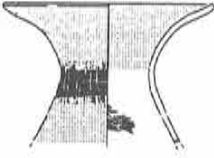
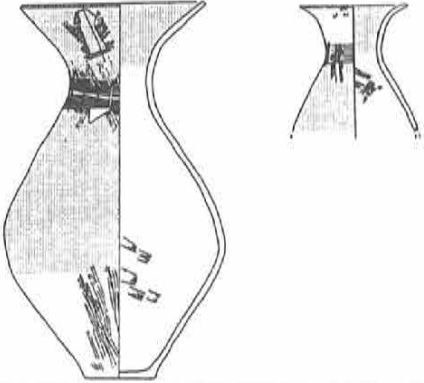
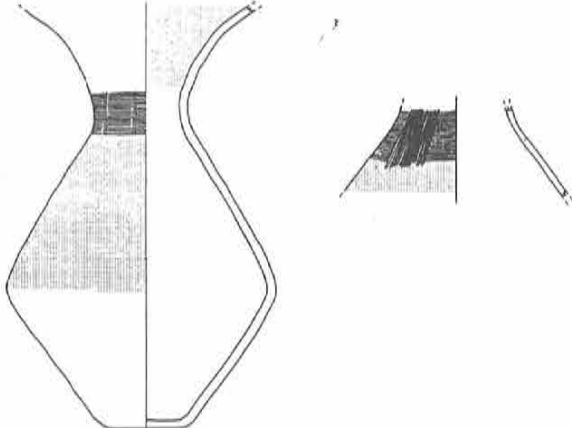
- 壺A 無彩の壺。口縁部が大きく外反し、朝顔状に開くものと上端でやや内弯し立ち上がるものがある。胴部はいずれも中位下方で張り、無花果形を呈すると考えられる。外面調整はいずれもヘラミガキが丁寧に施されており、刷毛目調整痕は消されている。主に頸部文様の相違から6細分する。
- A₁ 頸部櫛描文様帯下に篋描鋸歯文をもつ。
- A₂ 口縁部が上端でやや内弯し立ち上がる。頸部文様帯は篋描文で上・下端を区画した櫛描波状文・斜走文などが施される。
- A₃ 口縁部が朝顔状に開く。文様帯は壺A₂と同じ。
- A₄ 頸部に櫛描横走平行線文が施される。
- A₅ 頸部の櫛描横走平行線文を篋描文を垂下させて区切った「T字文B」が施される。
- A₆ 頸部の櫛描横走平行線文を櫛描文を垂下させて区切った「T字文C」が施される。
- 壺B 赤色塗彩される壺。形態は壺Aとほぼ同様と思われる。頸部文様の相違から5細別する。
- B₁ 壺A₁と同じ文様構成。（鋸歯文）
- B₂ 頸部に櫛描波状文が施される。
- B₃ 頸部に櫛描簾状文が施される。
- B₄ 頸部の櫛描横走平行線文に篋描文を垂下させて区切った「T字文B」が施される。
- B₅ 頸部の櫛描横走平行線文に櫛描文を垂下させて区切った「T字文C」が施される。
- 壺C 胴部下位の最大径に稜をもち、以下はくびれる。
- 壺D 口縁部が折れ曲って垂下する壺。内面に赤色塗彩、外側を向く内面端部に篋描斜格子目文が施される。
- 壺E 赤色塗彩される小型壺。

無頸壺A 口～体部が内弯し、赤色塗彩を基本とする。

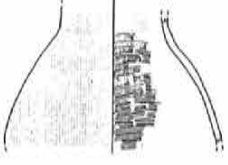
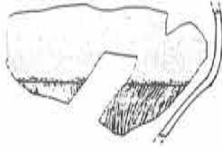



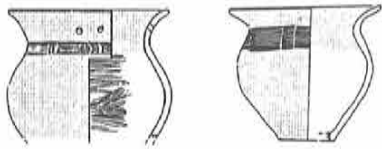
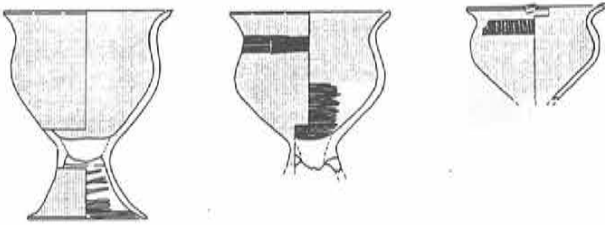
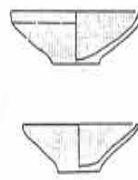

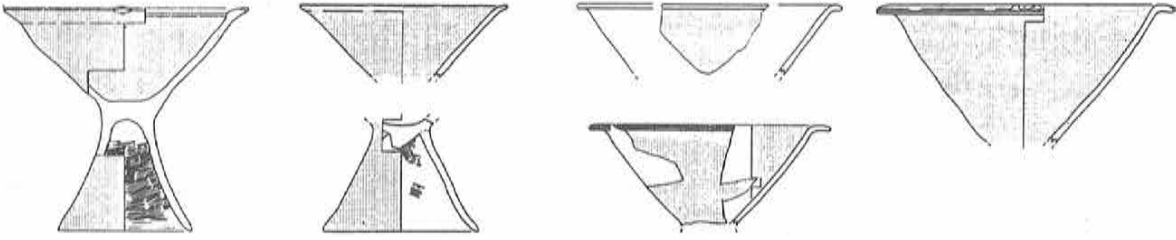
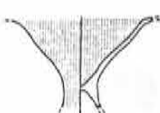
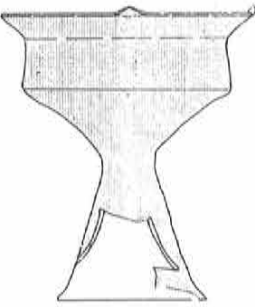
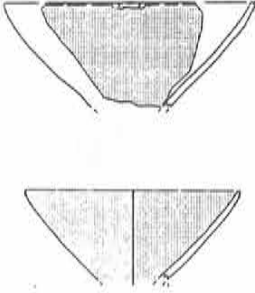


甕類……甕・台付甕

甕A～D

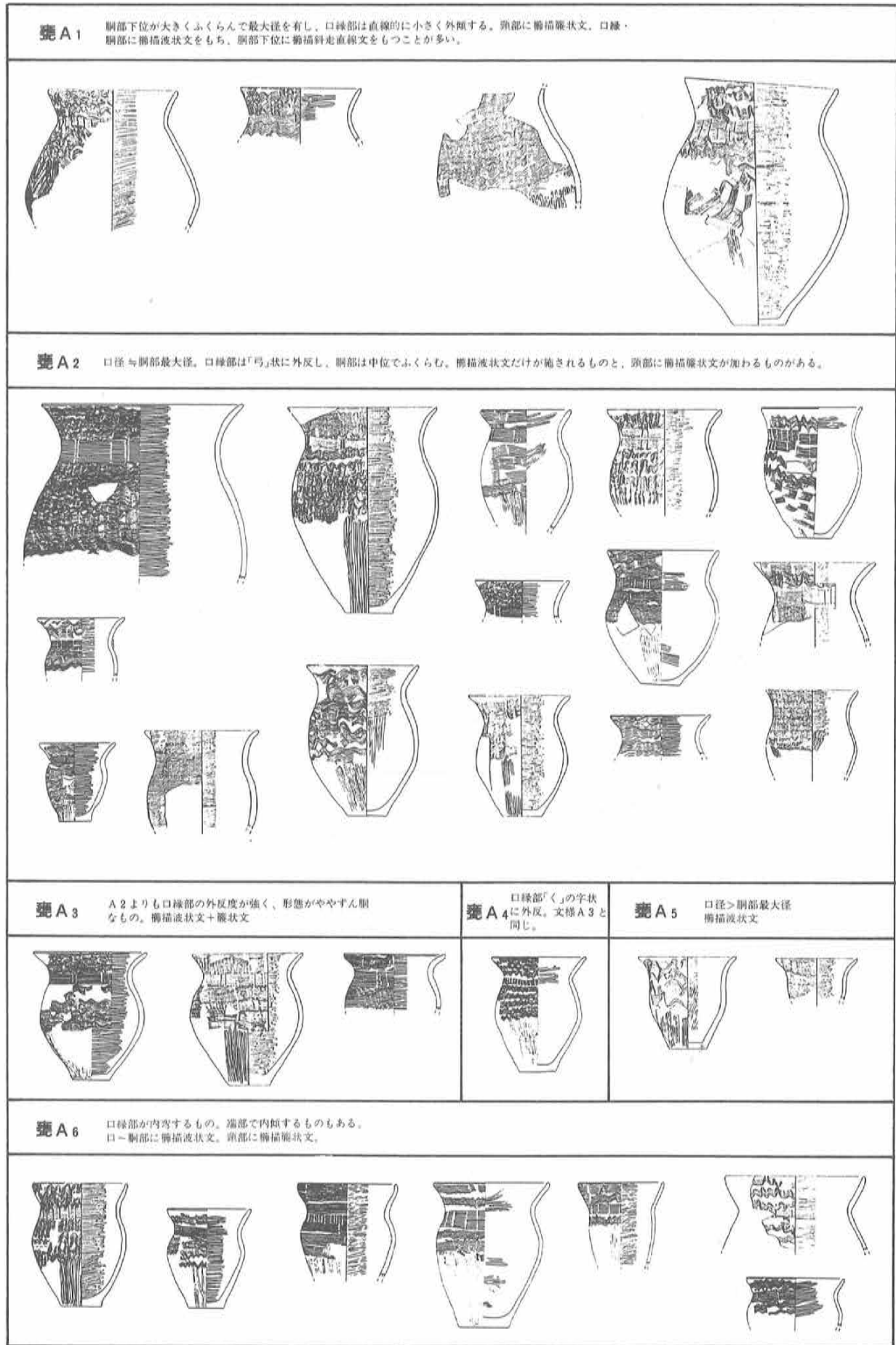
- 甕A 櫛描波状文が施される甕、形態の相違から7細別する。
- A₁ 胴部下位が大きくふくらんで最大径を有し、口縁部は直線的に小さく外傾する。頸部に櫛描簾状文、口縁・胴部に櫛描波状文をもち、胴部下位に櫛描斜走直線文をもつことが多い。
- A₂ 口径と胴部最大径は大差ない。口縁部は弓状に外反し、胴部は中位でふくらむ。口縁部～胴部に櫛描波状文だけが施されるものと、頸部に櫛描簾状文が加わるものがある。
- A₃ A₂よりも口縁部の外反度が強く、形態がややずん胴なもの。口縁部から胴部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施される。
- A₄ 口縁部が「く」の字状に外反する。文様構成A₃と同じ。
- A₅ 口縁部は弓状に外反し、胴部はあまりふくらまず、口径>胴部最大径となる。文様は口縁部から胴部まで櫛描波状文のみ。
- A₆ 口縁部が内弯するもの。端部で内傾するものもあり、形態はバラエティーがある。頸部に櫛描簾状文、口縁部～胴部に櫛描波状文が施される。
- A₇ 小型品。口縁部が短く外反する。口縁部～胴部に櫛描波状文が施され、頸部に簾状文が加わる場合もある。

<p>壺A1 無彩 鋸歯文あり</p>	<p>壺A2 口縁部やや内寄して立ち上がる。無彩 櫛歯の頸部文様帯を髷挿文で区画する。</p>		<p>壺A3 無彩。文様帯はA2と同じ。 口縁部が朝顔状に開く。</p>
			
<p>壺A4 無彩。櫛歯横走平行線のみ。</p>	<p>壺A5 無彩。「T字文B」</p>	<p>壺A6 無彩。「T字文C」</p>	
			
<p>壺B1 赤色塗彩 鋸歯文あり</p>	<p>壺B2 赤色塗彩 波状文</p>	<p>壺B3 赤色塗彩 籠状文</p>	
			
<p>壺B4 赤色塗彩。「T字文B」</p>	<p>壺B5 赤色塗彩。「T字文C」</p>		
			


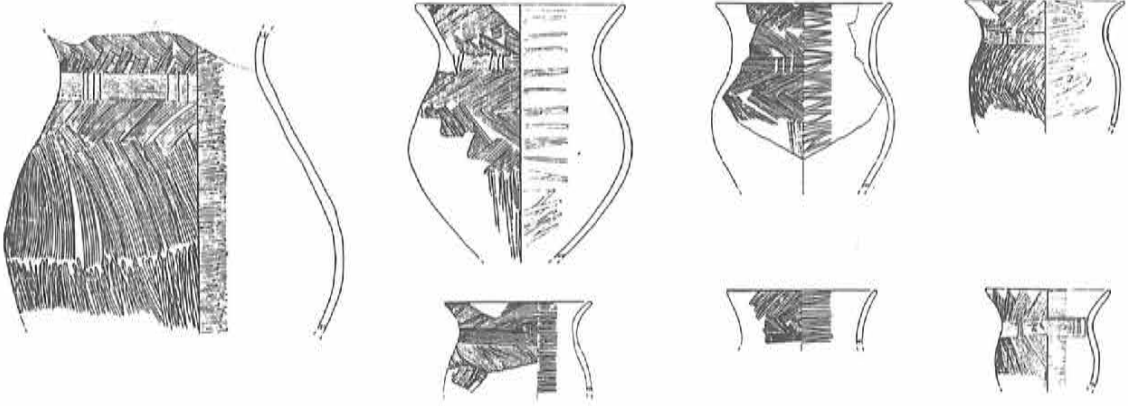
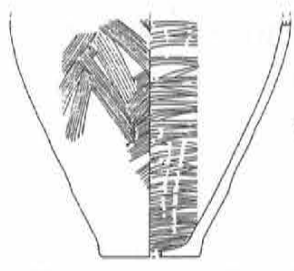




第424図 北西ノ久保遺跡後期弥生土器壺類分類図 (1:8)

<p>壺B6 赤色塗彩 文様体なし</p>	<p>壺C 赤色塗彩胴部下位に 横をもつ</p>	<p>壺D 口縁部が垂下する壺 内面赤色塗彩</p>	
			
<p>壺E 赤色塗彩 小型</p>	<p>無頸壺A 赤色塗彩</p>	<p>鉢A 赤色塗彩。口縁部短く外反、胴部球状</p>	
			
<p>脚付鉢A 赤色塗彩 鉢Aに脚台が付く。</p>	<p>鉢B1 赤色塗彩 椀状を呈する。</p>	<p>鉢B2 無彩 逆「ハ」の字状</p>	
			
<p>高杯A1 赤色塗彩、大型、坏部は椀状の体部から口縁部が屈曲して鐎状を呈する。</p>			
			
<p>高杯A2 赤色塗彩 小型 A1と形態同じ。</p>	<p>高杯B 赤色塗彩、大型。坏部は逆「ハ」の字状 に開いたのち、垂直に屈曲して立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。</p>	<p>高杯C 赤色塗彩大型品。 坏部は椀状を呈する。</p>	<p>高杯D 小型品</p>
			<p>手捏</p>  

第425図 北西ノ久保遺跡後期弥生土器壺類・鉢類・高杯類分類図(1:8)



第426図 北西ノ久保遺跡後期弥生土器甕類分類図 (1 : 8)

<p>甕 A 7 小型品。口縁部が短く外反する。口縁部～胴部に横描波状文が施され、頸部に簾状文が加わる場合もある。</p>		
		
<p>甕 B 1 横描斜走直線文が横位羽状に施される。頸部に簾状文をもつ。形態は A 2 と同じ。</p>		
		
<p>甕 C 横描斜走直線文が縦位羽状に施される甕。</p>	<p>甕 D 無文。形態は A 2 と同じ。</p>	<p>台付甕 A 口縁部は短く外反し、胴部は算盤玉状を呈する。胴部上位に横描波状文、円形浮文。</p>
		
<p>蓋 A 山形を呈し、天井部には焼成前の一孔を有する。</p>	<p>甌 A 口辺部が逆「ハ」の字状に開き、底部に焼成前の円孔を有する。</p>	
		

第427図 北西ノ久保遺跡後期弥生土器甕類・蓋類・甌類分類図 (1:8)

甕B₁ 楕円斜走直線文が横位羽状に施される甕。頸部に簾状文をもつ。形態は甕A₂と同じ。

甕C 楕円斜走直線文が縦位羽状に施される甕。

甕D 無文。形態は甕A₂と同じ

台付甕A 口縁部は短く外反し、胴部は算盤玉状を呈する。胴部上位に楕円波状文が施され、円形浮文が貼付されている。

蓋類……蓋

蓋A 山形を呈し、天井部には焼成前の一孔を有する。煤の付着著しく甕とセットになる。

鉢類……鉢、脚付鉢

鉢A 赤色塗彩品。口縁部は短かく外反し、胴部は球状を呈する。頸部に楕円簾状文、T字文Cが施され、口縁部下位に2孔一対の穿孔を有する場合もある。

鉢B 椀状、逆「ハ」の字状を呈する。赤色塗彩の有無で2細別する。

B₁ 赤色塗彩されるもの。

B₂ 無彩のもの。

脚付鉢A 鉢Aに脚台がついたもの。

高坏類……高坏

高坏A 赤色塗彩される。円錐状の高い脚部をもち、坏部は逆「ハ」の字状に大きく開き、口縁部は水平に屈曲して鐔状に伸びる。三角形の突起が貼付されることが多く、脚部の透し孔はない。大型、小型で2細別する。

A₁ 大型品

A₂ 小型品

高坏B 赤色塗彩される。円錐状の高い脚部をもち、坏部は逆「ハ」の字状に大きく開いたのち、垂直に屈曲して立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。三角形の突起が貼付される。

高坏C 赤色塗彩される。坏部は椀状を呈する。

高坏D 小型品。坏部は不明。

甌類……甌

甌A 口辺部が逆「ハ」の字状に開き、底部に焼成前の円孔を有する。

手捏

各器種・器形の検討

壺 壺の形態はほとんどが無花果実を呈し、朝顔状に開くか、口縁端部でわずかに立ち上がる（壺A・B）。胴部下位にくびれをもつ壺Cは1点のみである。頸部文様は下伊那の恒川式の流れをくむ鋸歯文をもつ壺A₁・B₁、楕円文様帯の上下を篋描文で区画した壺A₂・A₃、「T字文B」が施される壺A₅・B₄の他、楕円横走平行線文が施される壺A₄、波状文が施されるB₂、簾状文が施されるB₃、無文のB₆などがみられ、箱清水式期において定型化し、主体を占める「T字文C」は少ない。赤色塗彩の傾向は約5割程度で特に盛行しているとは言い難い。以上、これらの壺の諸要素は箱清水式土器成立前段階の様相を示すと理解され、吉田式に位置づけられるものと考えられる。また、口縁部の垂下する壺Dは在地系譜からは全く系譜を追うことができない外来系土器と考えられる。おそらく、東海西部以西の影響力をうけ、在地で消化されて成立した器形と考えられるが、今後、多方面からの検討が必要であろう。

甕 甕A₂・B₁の口縁部が弓状に外反する形態が主流を占める。類似する形態の甕A₃・A₄・A₅、や小型のA₇などを含め、次期の箱清水式へ大きな変化を示さず継承される要素である。これらが主体をなす中で甕A₁・A₆・Cの存在が、吉田式に位置づけられることを示すと思われる。甕A₁は吉田式成立と密接な関係をもつと言われる

下伊那郡の恒川式の流れをくむと考えられる器形であり、甕A₀は北西ノ久保II期などにもみられた中期後半の受口口縁をもつ甕(北西ノ久保II期の甕B₁)の系譜上にある器形、甕Cは中期後半からの系譜を引く縦位羽状の櫛描斜走直線文をもつ甕の最後の残映的な器形と考えられる。これら三器形は箱清水式まで継承されることはほとんどないと思われる。この他、無文の甕Dは稀少な存在であるが、群馬県との関係も考えなければならないだろう。以上、甕の諸要素は壺と同様、箱清水式土器成立前段階の様相を示すと考えられる。

台付甕、蓋、鉢、脚付鉢、甑、高坏については箱清水式との大きな変化は見い出せない。これらの器種・器形は、箱清水式前段階の北西ノ久保III期には既に確立され、定型化していたことが伺えるのである。

北西ノ久保II期との比較

器種・器形の内容が明らかにされた北西ノ久保III期の資料を北西ノ久保II期と比較してみよう。壺で系譜がたどれそうなのはII期の壺C(太頸で頸部に櫛描文)とIII期の壺A₂・A₃・A₄である。他は断絶が著しい。III期ではII期で壺A、Bとした細頸壺は全くみられず、頸部文様帯は完全に櫛描文主体に転化し、II期ではほとんどみられなかった赤色塗彩の傾向もIII期では約5割近くなる。II・III期の間には標式資料の吉田式のような櫛描文主体の頸部文様帯を有する壺が介在して良いように思われる。

甕はII・III期で完全に断絶している。II期においては口縁部が一様に短い形態であるのに対し、III期では甕A₂・B₁の形態に代表される後期に特徴的な口縁部の長い甕が確立されている。あえて、II期につながる要素を抽出するとすれば、形態的にはIII期の内弯する口縁部を有する甕A₃、および文様では横位羽状の櫛描斜走直線文(甕B₁)、極く少量残っている縦位羽状の櫛描斜走直線文(甕C)であろう。甕についてII・III期の間には吉田式の標式資料のような口縁部の短かい甕やここでいう胴部が丸く張り出した甕A₁が主体を占める段階が介在するように思われる。

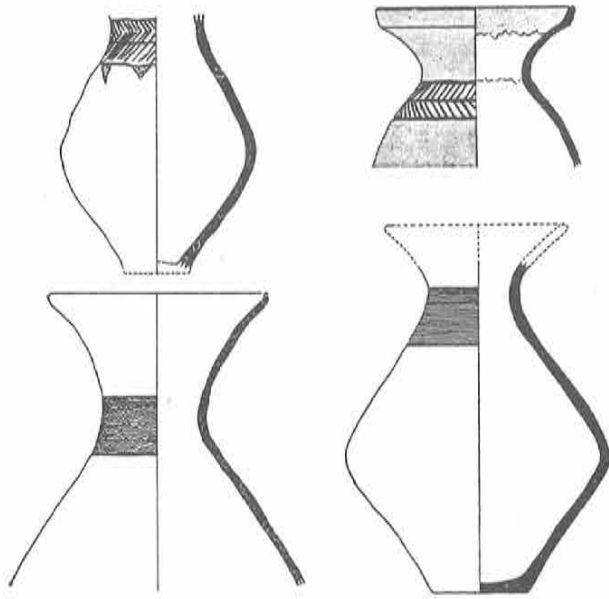
この他、高坏はIII期において大型化、定型化の傾向が著しい。鉢、甑についてはII・III期に大きな変化はないように思われる。いずれにせよ、北西ノ久保II期とIII期の間には少なくとも1段階の隔絶があることが推察される。

佐久地方の他遺跡との比較

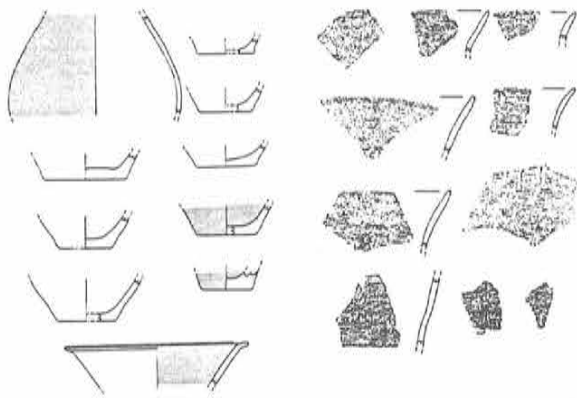
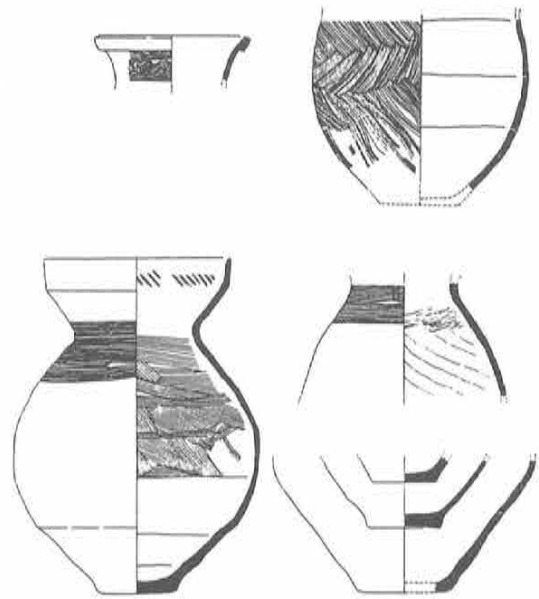
佐久地方既出の吉田式の類例と比較してみたい。佐久地方で吉田式と報告される資料は佐久市西一里塚遺跡(臼田 1980)、一本柳遺跡(臼田 1980)、軽井沢町泉遺跡(渡辺、森嶋他 1979)、佐久市清水田遺跡、周防畑B遺跡(林 1982)、野馬窟遺跡、樋村遺跡、上の台遺跡(林 1982)、西裏・竹田峯遺跡(高村他 1986)、琵琶坂遺跡(林 1986)、佐久町宮の本遺跡(林 1979)などがある。このうち、資料公開されていない清水田、野馬窟、樋村の各遺跡は除外し、一部資料紹介されている西一里塚、一本柳、周防畑Bの各遺跡および全資料の公開されている泉、上の台、西裏・竹田峯、琵琶坂、宮の本遺跡の諸資料との比較を行う。

西一里塚、一本柳遺跡 一部の資料呈示であるため、詳細は不明である。しっかりとした有段状の口縁部を持ち、赤色塗彩される壺も含まれるが、北西ノ久保III期の壺A₁・A₂・A₃と類似する3例の壺がある。北西ノ久保III期と同様の内容を有すると考えられ、ほぼ併行する資料と考えられる。

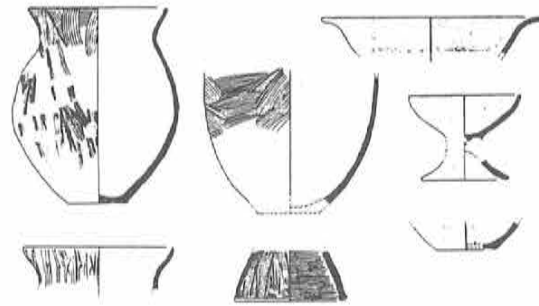
泉遺跡 報告書では吉田式併行とされるが、北西ノ久保III期とは類似する要素が少ない。敢えて抽出するならば、横位羽状の櫛描斜走直線文をもつ甕と頸部に簾状文が施された壺がみられることで、北西ノ久保III期の甕B、壺B₃に類似要素をもつことである。しかし、これらは後期弥生土器の中で伝統的に継承されるものであり、特に甕B(横位羽状斜走直線文をもつ)については、従来、後期弥生土器の古い要素とされてきたが、佐久地方では近年、佐久市池畑遺跡や、瀧峯2号墳の調査によって小型高坏が発生する箱清水式土器解体段階まで、同文様が施文された甕が存在する事実が明らかとなった。このため、甕B₁および、壺B₃の比較から併行関係を説くことは難しい。報告では「第2号住居址の貯蔵形態の土器である壺形土器は、胴下半は箱清水サイズされたものであるが、その口縁部は、弥生中期の受口口縁のあり方を残したものと見えよう。……煮沸形態の甕形土器は10本単位の刷毛目調整であって、櫛描波状文はまだ多くなく一般化して来ていないのが現状である。」として、これらの



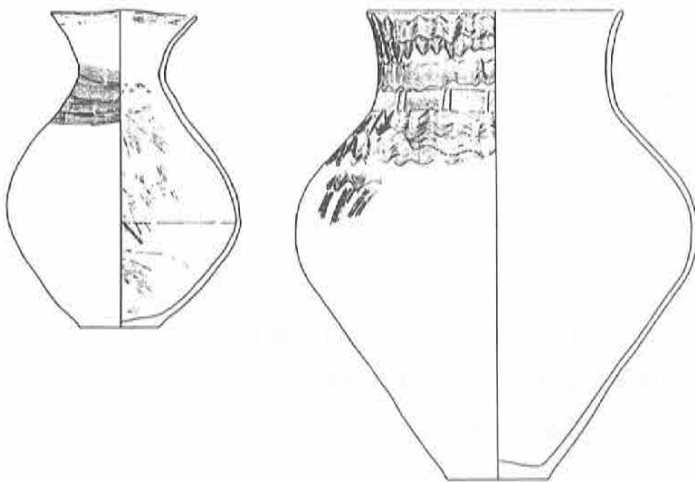
西一里塚・一本柳遺跡



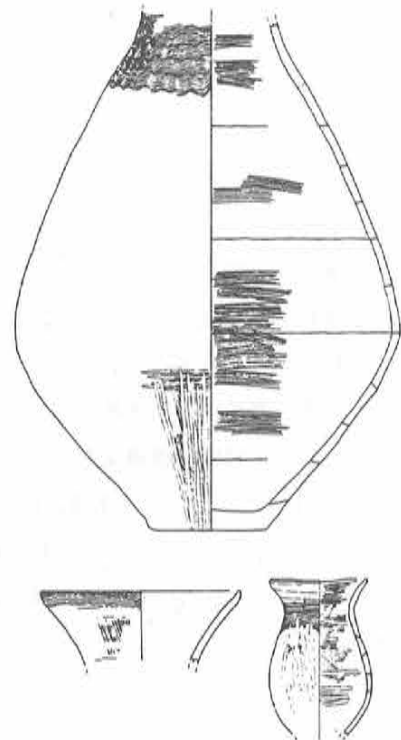
上の台遺跡



果遺跡



竹田峯遺跡1号住



西裏遺跡3号住

第428図 佐久地方の吉田式と報告されている資料(1)

要素をもって箱清水式土器成立直前、吉田式併行と位置づけているが、受口口縁の壺は無彩化され、球胴化が著しく、古墳時代前期有段口縁壺への系譜をたどれるものとも考えられ、また、刷毛目調整の甕は櫛描文の衰退化傾向と考えられる。更に重要なことは、古墳出現期に特徴的な、刷毛目調整の台付甕が共存していることである。このようにみると県遺跡の出土土器は、吉田式というよりも、箱清水式土器の解体期の様相を示しているように思われる。

周防畑B遺跡 壺 形態については北西ノ久保III期で壺A・Bなど無花果形が主体を占めるのに対し、周防畑B遺跡では、胴部下位に外稜をもつ壺Cが主体を占める。頸部文様帯は、鋸歯文をもつ壺B₁の存在は一致するが総体では北西ノ久保III期が「波状文、横走平行線文、T字文B、簾状文、T字文C」などの櫛描文主体であるのに対し、周防畑B遺跡では、「横走平行線文、T字文B」などの櫛描文よりも、細い単位の篋描斜走文の組み合わせが多用され、吉田式とされた所以である。赤色塗彩の傾向は周防畑B出土資料の方がより盛行する。以上、壺について、周防畑B遺跡の資料は箱清水式的な器形壺Cが多いこと、赤色塗彩の傾向がより顕著であり、北西ノ久保III期に後続する要素を示している。頸部文様帯の相違については今後の課題としたい。

甕 甕A₁・A₂・A₃・A₄・A₆などが存在し甕Cはない。北西ノ久保III期にくらべ、A₁が盛行し、A₂とほぼ同じ率で存在する。これも吉田式と言われた所以である。文様は横位羽状の櫛描斜走直線文が波状文とともに多用される点が北西ノ久保III期と異なる。以上甕A₁および、横位羽状の櫛描斜走直線文が盛行する相違はあるものの北西ノ久保III期と、周防畑B遺跡出土資料の間には大きな型式変化は認められないように思われる。高坏はA・B・Dが存在し、高坏A₁、高坏Bの坏部が北西ノ久保III期と比べ浅くなる傾向がある。

総体では壺の器形に比較的大きな変化が認められるのみであるが、周防畑B遺跡出土資料は北西ノ久保III期よりも後続すると考えられる。

上の台遺跡 全形態がわかる資料がないため詳細は知り得ないが、壺Bの存在、鋸歯文をもつ壺の存在から、北西ノ久保III期にほぼ併行すると考えられる。

西裏・竹田峯遺跡 西裏遺跡3号住、竹田峯遺跡1号住出土資料との比較を行う。

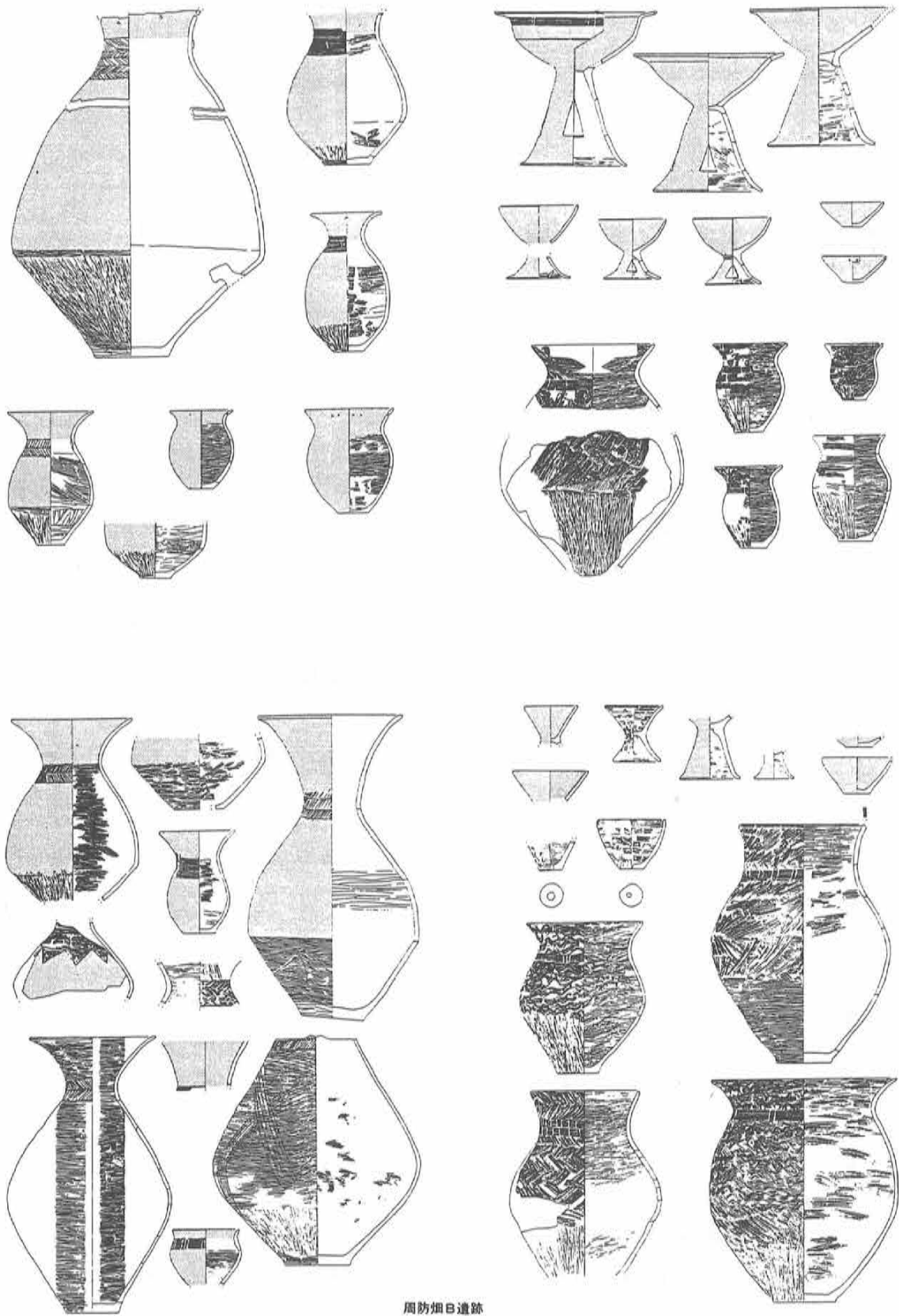
西裏3号住 壺はB₂と、口縁端部が立ち上がり、波状文を有する器形がある。甕は頸部に波状文、簾状文をもつが、北西ノ久保III期の甕Dと類似するものがある。このことから、おおむね北西ノ久保III期に併行する資料と考えられる。

竹田峯1号住 壺は北西ノ久保III期壺A₄と似るが、口縁部の外反度が弱く、甕は北西ノ久保III期のA₁と似るが胴部の張りがかなり強い点で異なる。2点のみのため、詳細に分析はできないが、壺は吉田式の標式資料にどちらかと言えば近く、北西ノ久保III期より若干先行すると考えられる。

宮の本遺跡 表採の壺1点がある。胴部下位に外稜をもつものの塗彩がなく、頸部文様が櫛描簾状文、綾杉文で構成され、T字文Cがみられないことから、報告では吉田式に位置づけている。北西ノ久保III期に類例はなく、後続すると考えられる周防畑B遺跡出土資料中にやや類似するものがみられるが、県遺跡と同様、再考を要する資料である。

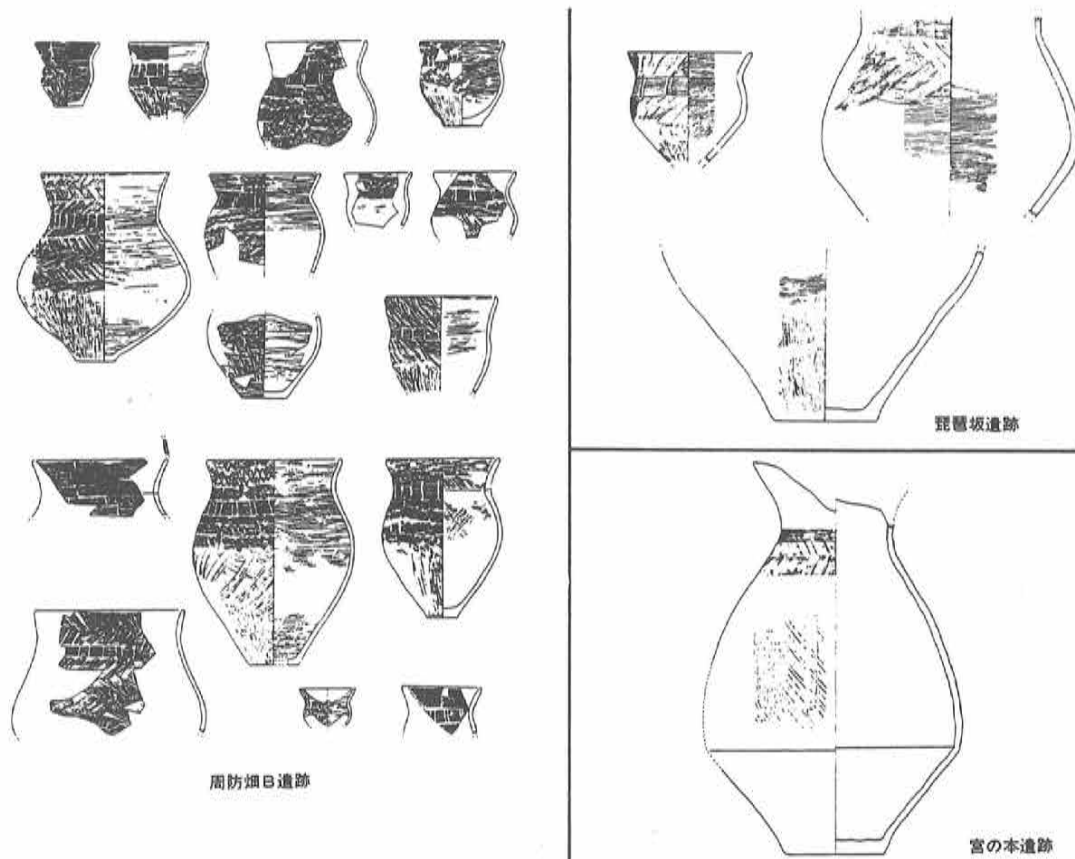
琵琶坂遺跡 資料不足のため、よくわからないが甕A₁と考えられるものがあり、北西ノ久保III期、あるいは、周防畑B遺跡出土資料に併行すると考えられる。

佐久地方の他遺跡の該期資料と比較した結果、西一里塚、一本柳、上の台、西裏3号住が北西ノ久保III期に併行、竹田峯1号住が北西ノ久保III期に若干先行、周防畑B遺跡出土資料が後続すること、また、県、宮の本の資料は吉田式から除外できる可能性のあることが推察された。これは笹沢氏も指摘されたように吉田式と理解される土器の中にも時間的な流れがあることを示すものであろう。今回は分析不足の点が多く、具体的な器種・器形の時間的な変化を指摘できなかったが、この点については、別稿において明らかにすることとしたい。



周防畑B遺跡

第429図 佐久地方の吉田式と報告されている資料(2)



第430図 佐久地方の吉田式と報告されている資料（3）

後期後半の弥生土器について

第171号土坑から、一点出土した395-21がある。在地の系譜からたどり得る器形ではなく、外来系土器と考えられる。渋川市有馬遺跡や高崎市日高遺跡などに同様な器形がみられ、群馬県地方からもたらされた可能性の強い土器と考えられる。

施文方法について

昭和58年（1983）、橋本裕行氏が「信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程（一）」『信濃35-5』において、甕の櫛描文の施文方法について問題提起をしているので、これに沿って北西ノ久保III期の傾向を述べておきたい。尚、北西ノ久保III期の波状文はいずれも中部高地型（右回り）である。

櫛描波状文が施される甕で図化されたもの——42個体	}	(波状文) : (斜走文) 約 5 : 1
櫛描斜走直線文（横位羽状）が施される甕で図化されたもの——8個体		
波状文が施される甕で簾状文を頸部にもつ甕——29個体	}	※ 簾状文をもつ甕 : 波状文のみの甕 約 3 : 1
波状文のみの甕——10個体		
不明——3個体		
簾状文が波状文よりも先に施される甕——16個体	}	約 5 分 5 分
波状文が簾状文よりも先に施される甕——13個体		

簾状文が波状文よりも先に施される甕の波状文の施文順序

口縁部では上から下へ、下から上へと一定の間隔毎に交互に施され、胴部では上から下へ施される甕(24-10・42-1)

口縁部では下から上へ、胴部では上から下へ施される壺(24-12)

口縁部では下から上へ施され、胴部は一帯のみの甕(24-13)

口縁部は一帯のみで胴部は上から下へ施される甕(69-8)

口縁部、胴部ともに上から下へ施される甕(110-4・135-4・159-5・249-3)

不明(13-7・24-9・24-11・135-5・159-3・159-4・260-3)

波状文が簾状文よりも先に施される甕の波状文の施文順序

口縁部から胴部にかけて、上から下へ、下から上へと一定の間隔毎に交互に施される甕
(29-1・159-1・231-3)

口縁部から胴部にかけて下から上へ施される甕(140-1・242-1)

口縁部から胴部にかけて上から下へ施される甕(159-8・202-1・231-4)

不明(96-1・120-4・249-4・260-2)

波状文のみの甕の波状文の施文順序

口縁部から胴部にかけて上から下へ施される甕(120-6・120-9・135-2・135-6・159-6・159-7・177-3)

口縁部から胴部にかけて下から上へ施される甕(169-1)

不明(120-5・120-7・120-8・135-3・177-4)

このように波状文の施文順序は極めてバラエティーに富み、一定の法則性を抽出することは難しい。橋本氏が指摘された一定の間隔毎に波状文を上から下へ、下から上へと交互に繰り返し施す、確実に縦割で行われた施文方法は3例みられる。従来、中部高地型の櫛描波状文は、波状文一帯が器面を一周し、その後、次の帯に施文を移すと考えられてきたが、本遺跡で観察を行った限りでは、案外、橋本氏が指摘されたような、縦割りの施文方法、単に器面を埋めるという意識で施文されたものもあるのではないかという印象がもたれた。この点については、今後、他遺跡の資料にも注意を払って検討を進めていきたい。(小山)

第2節 古墳時代

北西ノ久保遺跡第2次調査において検出された古墳時代の遺構は、古墳時代中期に周滄10基、土坑2基、後期に古墳1基、土坑1基がある。以下、周滄を含めた古墳址を中心にまとめを行っていきたい。

古墳は計11基が検出されている。そのうち周滄のみ検出された遺構は10基で、そのすべてが主体部を残していない。古墳は台地の上部にほとんど集中しており、第1次調査分と合わせると16基が台地上に存在する。ただ1基だけ横穴式石室を有した古墳が台地南端部傾斜地に構築されている。

台地上に存在する周滄の形態は第10号周滄が方形で、円形の周滄をもつものに第11・13・14号周滄が見られ、第11号周滄は西側に開口部を有する。台地の東・南端部で傾斜面にかかる地形的なことから、半円状の周滄をもつものが、第7・8・9・12・15号周滄で、第16号周滄は部分的に周滄をもっている。墳丘の形態は削平されていて不明であるが、周滄の形態から、第10号周滄が方墳、あとはすべて円墳と思われる。第12号周滄の周滄内側に2～3段の礫が石垣のように整然と積み上げられており、墳丘部を構築する際の葺石と考えられる。古墳の主体部については、すべて削平されていて検出されなかったが、竪穴の木棺直葬か礫床をもつ主体部であったと考えておきたい。

墳丘の規模は、第11号周滄が南北676cm、東西704cmで最小のもので、第7・8・9・12・14・15号周滄の6基は、9m～14mの規模をもち本遺跡では中型の規模のものといえよう。第10・13号周滄は、19m～24mの大型のものである。これら古墳の台地上での分布をみると、大型の古墳、第10・13号は台地の中央から西側に間隔を離れて存在し、第7・8・9・12・15号の中型の規模をもち半円状の形態のものが台地の東・南縁辺部に連なって分布し、第7・8・9号などは周滄を共有して構築されている。

各周滄からの出土遺物は、第7号周滄から、土師器有段口縁の壺、第8号周滄は時期決定の目安となる遺物はほとんどなく、第9号周滄からは土師器埴・埴が出土しており、第7・9号周滄は古墳時代中期後半に所産期を求めることができる。第10号周滄からは埴輪、土師器壺・甕・埴・高埴、須恵器長頸瓶・甕・高台付埴・蓋が出土しており、古墳時代中期後半と古墳時代後期終末から奈良時代の様相を示しており、中期後半に築造され、後期終末から奈良時代まで何らかの祭祀が行なわれていた可能性が高い。第11号周滄からは所産期を決定する目安となる遺物は出土していない。第12号周滄からも土師器と須恵器の細片のため時期決定をする資料となり得ない。第13号周滄からは、土師器高埴・埴、須恵器埴及び高台付埴、金属器、羽口が出土しており、第10号周滄と同様に古墳時代中期後半と奈良時代～平安時代初頭の2時期の様相を示しており、築造は古墳時代中期後半と思われるが、奈良～平安時代初頭の2時期の様相を示しており、奈良～平安時代初頭まで何らかの祭祀が行なわれていた可能性が高い。第14号周滄からは土師器甕・埴・埴・高埴、須恵器甕・甕が出土しており、須恵器甕がTK216型式併行であることから、所産期は5世紀第Ⅲ四半期といえる。第15号周滄からは土師器甕・壺・埴・高埴、須恵器甕が出土しており、須恵器大甕がTK23～47型式併行であることと、土師器埴・高埴の特徴などから5世紀末に所産期が考えられる。第16号周滄からは鉄鏃が出土しているが所産期を決定する資料は出土していない。

以上、出土遺物から各周滄の構築順を明確にすることはできないが、第14号周滄が5世紀第Ⅲ四半期、第15号周滄が5世紀末と第14号周滄の方が先だって構築されたことは判明した。また、第7・8・9号周滄は、出土遺物からは構築順は明らかにできないものの、周滄の共有の仕方から、第8号周滄は溝幅も狭く、また、形も円形ではなく、窮屈そうに作られていることから、第7・9号周滄より後から作られたものであろう。出土遺物は総体的に古墳時代中期後半の様相を示しており、北西ノ久保南部台地上に存在する古墳群は大方が中期後半に築造

されたものとして大過ないと考えられる。また、第10・13号周湟からは、古墳時代後期終末から平安時代初頭の遺物も出土しており、これらの古墳が平安時代初頭まで何らかの形で祭祀が行なわれていた可能性が高い。

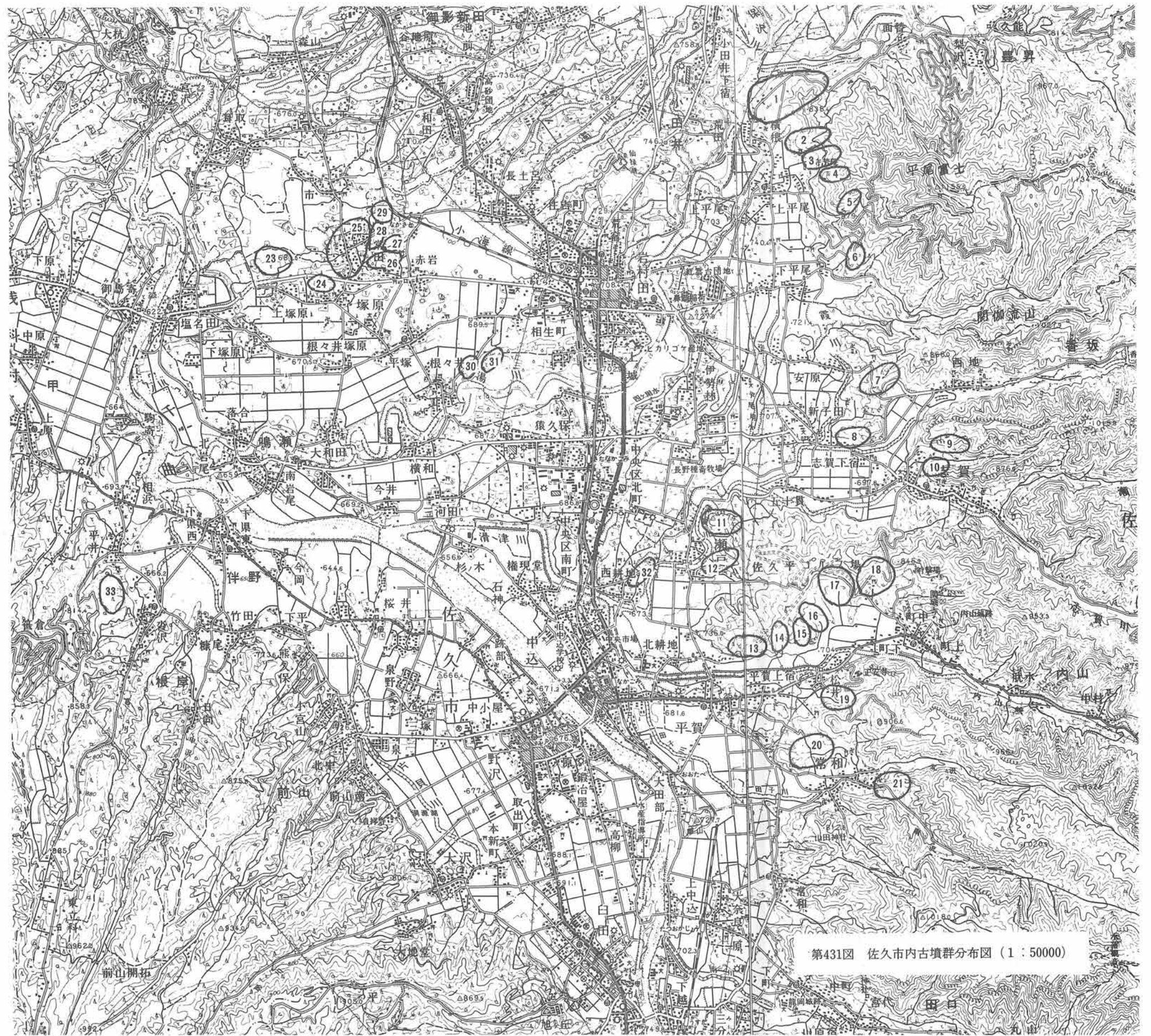
長野県内の5世紀～6世紀初頭の主要古墳については、昭和60年（1985）10月12日の岩崎卓也氏の講演会資料「古墳時代と佐久」によると、高水地区で天神1号古墳の方墳を初めとして、前方後円墳2基、方墳1基、円墳3基、長水・更埴地区で倉科將軍塚前方後円墳を初めとして、前方後円墳8基、円墳2基、上小地区で中曾根親王塚古墳の方墳を初めとして前方後円墳1基、方墳1基、中信地区で安坂2号古墳の方墳を初めとして、方墳2基、円墳1基、諏訪・上伊那地区でフネ古墳の方墳を初めとして、前方後円墳1基、方墳1基、円墳1基、下伊那地区で姫前大塚古墳の円墳を初めとして前方後円墳4基、円墳1基となっている。この時点では、佐久地方にはまだ該期の古墳の存在は知られていなかった。また、小古墳が数個の家族集団の数世代の累積的築造によって群集することが、5世紀代まで遡ることが知られているが、長野県内では発見されていなかった。最近の調査により、当遺跡の他に県内では飯田市石行遺跡において、遺跡の北部地域から5世紀中葉～終末にかけての古墳の周湟と考えられる円形周湟が3基確認されたことが小林正春氏から御教示された。当遺跡と石行遺跡から、今後、県内においても5世紀代の古い群集墳が確認される可能性が高いと思われる。

台南端部傾斜面に構築されていた横穴式石室をもつ古墳は、往時の形態をとどめず奥壁の一部がすでに露出していた。墳丘の径はトレンチ内に確認された溝を周湟と考えると15～20mの規模を有していたものと推定される。石室のプランは羨道部が不明なためはっきりしないが、玄室はわずかに胴張る長方形を呈していたものと思われる。出土遺物は土師器、須恵器、鉄製品、金銅製品、耳環、人骨、玉類などが出土しており、破壊されている古墳にしては豊富な遺物であった。構築年代は須恵器蓋、勾玉、耳環、立地、構造等から7世紀後半と考えられる。北西ノ久保遺跡に隣接して上鳴瀬古墳群が存在するが、石室は露出していないものの小円墳で、この古墳と同時期頃形成されたものではないかと思われる。以下、佐久市内の古墳群を中心に記述を進めていきたい。

佐久市の古墳は総数225基〔昭和59年（1984）現在、佐久市遺跡詳細分布調査報告書による〕が確認されている。これらの古墳は単独墳あるいは群を構成し、主として東部山地に多く見られ、平地や台地、尾根上にも存在する。今まで、佐久地方に存在する古墳は、全て後期から終末期にかけての円墳であると考えられてきたのであるが、最近の調査により4世紀前半代と考えられる瀧峯1・2号墳、また、5～6世紀代と考えられる北西ノ久保古墳群が発見されたことにより従来の古代史観を大幅に修正する必要性が生じている。

佐久市に存在する古墳群の立地と分布を概観してみると、圧倒的に佐久市東部山地の山麓に群集墳が連なって分布していることがわかる。北から横根古墳群（1）、平古墳群（2）、矢口古墳群（3）、矢澤古墳群（4）、城古墳群（5）、丸山古墳群（6）、入大久保古墳群（7）、氏神古墳群（8）、小倉塚古墳群（9）、本郷古墳群（10）、中条峯古墳群（11）、屋敷古墳群（12）、東久保古墳群（13）、東姥石古墳群（14）、月崎古墳群（15）、西和田古墳群（16）、長峯古墳群（17）、大間古墳群（18）、松井日影古墳群（19）、西久保古墳群（20）、天神久保古墳群（21）と佐久市に存在する33の群集墳のうち21がこの地域に分布している。古墳の総数も125基に達し市内の古墳総数の半分以上が集中してみられる。その他、千曲川右岸地域では、浅間連山のひとつ黒斑山の噴火の塚原泥流によって一帯に火山性の自然丘が残った塚原地域に藤塚古墳群（23）、姫子石古墳群（24）、家地頭古墳群（25）、大豆塚古墳群（26）、下大豆塚古墳群（27）、東池下古墳群（28）、鷲林古墳群（29）と総数27基の古墳が集中しており、かなり大きな群集墳である。塚原地域の東南、湯川右岸の河岸段丘上に上鳴瀬古墳群（30）、北西ノ久保古墳群（31）が存在し、御代田町と小諸市の境の西屋敷地籍、田切地形の縁辺部に下前田原古墳群（22）があり、また、志賀川が滑津川に合流する付近の志賀川右岸に瀬戸狐塚古墳群（32）がある。千曲川左岸、佐久市西部地域には瀧峯古墳群（33）が存在するだけである。

では、これらの古墳群の構築年代はどの時期にあたるかということであるが、発掘調査のなされた古墳から類推していきたい。まず、瀧峯古墳群であるが、昭和61年度の調査により、第2号古墳が前方後方型であることが



第431图 佐久市内古墳群分布图 (1:50000)

明らかになった。主体部は墳頂に1基存在し、木棺直葬かもしれない。主体部からの遺物はほとんどなく人間の歯が検出されただけである。遺物のほとんどは周湊内からで佐久地方の在地性を強く残した楠描文の甕や赤色塗彩土器が多く、一方、畿内や東海地方で発生した外来系土器（小型器台、小型高坏）などが見られる。墳丘形態、出土遺物から古墳とするなら県下でも最古式と考えられ、時期は4世紀前半と推定されている。瀧峯古墳群は、ほぼ南北に縦走する山麓の尾根上に4基群集し、ほぼ同時期に形成されたと考えられる。そこから直線距離にして350m北方の一段低い尾根の先端部に方墳と思われる5号墳が存在する。この5号墳は調査がなされておらず、時期決定することはできない。

下前田原古墳群は昭和47年度に発掘調査されており、1・2号墳ともに実施された。第1号古墳は墳丘径、南北16.2m、東西13.5mの円墳で高さ1.75mを計る。主体部は横穴式石室で片袖式プランを呈している。第2号古墳は墳丘径、南北12.5m、東西12mの円墳で高さ1.2mを計る。主体部は横穴式石室で両袖式三味線胴張りプランを呈する。2基の古墳とも前庭部で墓前祭を行った例として報告されている。構築時期は2基ともほぼ同一時期と考えられ、古墳時代終末期とされており、出土遺物から平安時代中期まで祭祀が行われていたとしている。

家地頭古墳群では昭和50年度に第1号古墳が発掘調査されている。古墳は塚原泥流によって形成された自然丘を利用して構築されており、その自然丘は径40mを計る。構築された円墳の墳丘径はそんなに大きくなく、推定径15.7m、高さ3mを計ると考えられている。主体部は横穴式石室で長方形プランを呈し、出土遺物は埴輪、須恵器、土師器、鉄鏃、玉類、馬具などが出土しており、構築年代については、内部主体部及び墳丘の構造から7世紀中葉としているが、埴輪、馬具などは7世紀に降下しない年代としており、年代幅があるものとしている。

下大豆塚古墳群では昭和57年度第1・2号古墳の発掘調査が実施されている。第1号古墳は石室主体部のほとんどが露出していて墳丘の原形を推定し、復元することは不可能としている。第2号古墳も破壊がかなり進んでいて石室の一部が露出していたが、墳丘径5m前後の小円墳と推定している。構築年代は第2号古墳が、鉄鏃や石室プラン、高麗尺の使用などから7世紀中葉から後葉としており、第1号古墳に関しても遺物を欠如していて年代決定には慎重な態度でのぞまなければいけないとしながら、石室の形状、規模から第2号古墳とほぼ近接した時期と報告している。

他に東池下古墳群において昭和49年度に発掘調査を実施しているが報告書が刊行されていないため、構築時期等は不明であるが、主体部は横穴式石室によって構築されていた。

以上、古墳群に関係ある古墳の発掘調査例を列挙したわけであるが、最も群集がある佐久市東部山地の群集墳の調査はなされていない。しかし、土屋長久氏が『信州佐久平の後期古墳群について』で述べているように、径2～5mの小円墳がほとんどで、7世紀後半から末期にかけての群集墳と考えられる。

千曲川の左岸、佐久市西部地域には瀧峯5・6号古墳を除くと瀧峯古墳群は4世紀代のものであり、これらの古墳6基を含めて14基しか存在せず、7世紀代における後期群集墳のほとんどすべてが千曲川右岸地域に築造されていることを考えあせると、古墳時代後期の中心地域は千曲川右岸地域にあった可能性が高いと考えられる。それにしても、佐久市東部山麓に多数の古墳群が存在することは、いったい何を意味するのであろうか。単に石材が容易に入手できることからのみの理由だけではないと思われる。特に平根地区の横根古墳群から丸山古墳群に到る地域と、佐久平ゴルフ場南方の山麓、東久保古墳群、東姥石古墳群、月崎古墳群、西和田古墳群、長峯古墳群、大間古墳群の密集地帯は異常といえるほどの地域であるといえる。立地的に見ても、とても広大な生産地及び集落址を望む地域に築造されているとは考えられず、集落址及び生産地とは離れた地域の墓域かもしれない。

北西ノ久保古墳群はもとより、今後の当地方の古墳研究の課題は生産地、集落址との関連を追求し、更に被葬者の問題にもアプローチするような、多方面からの分析が必要であろう。 (高村)

第90表 佐久市内古墳群一覧表

No.	佐分No.	名称	立地	確認古墳数	備考	No.	佐分No.	名称	立地	確認古墳数	備考
1	22	横根古墳群	山麓	28		18	369	大間古墳群	"	7	
2	24	平古墳群	山頂山麓	2		19	449	松井日影古墳群	"	4	
3	23	矢口古墳群	山麓	3		20	450	西久保古墳群	"	8	
4	68	矢沢古墳群	"			21	451	天神久保古墳群	"	3	
5	69	城古墳群	"	6		22	5	下前田原古墳群	田切台地	2	昭和47年度発掘調査
6	70	丸山古墳群	"	1		23	31	藤塚古墳群	平地	6	
7	140	入大久保古墳群	"	6		24	32	姫子石古墳群	"	2	
8	276	氏神古墳群	"	2		25	33	家地頭古墳群	"	5	昭和50年度家地頭第1号古墳発掘調査
9	292	小倉塚古墳群	"	3		26	34	大豆塚古墳群	"	3	
10	293	本郷古墳群	"	2		27	35	下大豆塚古墳群	"	2	昭和56年度下大豆塚1・2号古墳発掘調査
11	258	中条峯古墳群	"	7		28	36	東池下古墳群	"	4	昭和49年度発掘調査
12	352	屋敷古墳群	"	2		29	37	鷺林古墳群	"	5	
13	354	東久保古墳群	"	5		30	111	上鳴子古墳群	河岸段丘	3	
14	365	東姥石古墳群	"	5		31	116	北西ノ久保古墳群	"	17	昭和57、60年度発掘調査
15	366	月崎古墳群	"	19		32	350	瀬戸狐塚古墳群	"	5	
16	367	西和田古墳群	"	3		33	314	瀧峯古墳群	山頂山麓	6	昭和61年度瀧峯1・2号古墳発掘調査
17	368	長峯古墳群	"	7							

第3節 奈良・平安時代および中・近世

奈良・平安時代の遺構は今回の調査では、南部南斜面から第1号特殊遺構が検出されたのみである。灰釉陶器輪花壇、土師器高台付坏・坏などから10世紀末から11世紀前半に構築された、墓址的な色彩が強い遺構である。南部南斜面は保存目的の確認トレンチ調査であったため、斜面全域の様相は知るよしもないが、第1号特殊遺構の存在から考えると、該期の一大墓群が展開されていることも想定される。今後、再調査の必要性を強く感じる。この他、奈良～平安時代の遺物は、第10・13号周湟や東部南斜面の第2・3号礫群で検出されている。周湟から出土したものは5世紀代に古墳が築造されて以降、奈良・平安時代に至るまで、古墳内やその周辺で何らかの祭祀行為が行われていたことを示唆する。また、礫群から出土した土師器・須恵器については、台地上（第1次調査分）に存在する平安時代の集落址との関連性を考慮する必要がある。

中世の遺構は第116号土坑1基のみである。礫群を有する土坑で燃焼された痕跡が残る。北宋銭元符通宝が一点検出されている。その他、第2号特殊遺構B土坑覆土、及びグリッド、耕作土内から北宋銭が計7枚検出されている他は、中世と認定できる遺物は検出されていない。換言すれば、本調査区台地上、南部南斜面、東部南斜面においては中世の人々の足跡が極めて薄いことが指摘できるのである。台地上においては、近世においても同様なことが言える。その背景には、近代までは墳丘が残存していたと伝えられる古墳群の存在が要因となっていたことが推測されるのである。

近世の遺構は台地の南東端、斜面にかかる位置から第2号特殊遺構が検出された。遺構内には3基の墓墳があり、それぞれから一体分計三体分の人骨と寛永通宝が計24枚が検出された。この遺構が調査区外の斜面下部まで広く展開されることは容易に予測できる。北西ノ久保遺跡を形成する台地の南東部の斜面には、江戸時代庶民の一大墓域が存在する可能性が強いのである。出土人骨については付編に森本岩太郎教授のコメントを掲載しているので、そちらを参考にしていきたい。

註(1) 調査員井上行雄氏の御教示による。

(小山)

引用参考文献

- 県内 弥生中期後半
- イ 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群——般国道153号座光寺バイパス用地内埋蔵文化財発掘調査報告——』
飯山市教育委員会 1980 『鍛冶田』
- オ 大場磐雄他 1956 『信濃史料』 1巻上・下
- カ 河西清光・太田喜幸 1966 「東筑摩郡明科町緑ヶ丘遺跡」『長野県考古学会研究報告書』 1
神村 透 1966 「弥生文化の発展と地域性—中部高地」『日本の考古学III』
神村 透 1967 「高森町北原遺跡」『長野県考古学会誌』 4
神村 透 1969 「弥生文化各説—中部山岳地帯」『新版考古学講座』 4
神村 透 1972 『北原遺跡』
神田五六 1936 「北信濃栗林の弥生式土器」『考古学』 7-7
- キ 北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所編
1986 『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』
桐原 健 1961 「長野県須坂市須坂園芸高校校庭出土の弥生式土器について」『信濃』 13-8
桐原 健 1963 「栗林式土器の再検討」『考古学雑誌』 49-3
桐原 健 1975 「赤色塗彩土器の出現」『信濃』 III27-7
- サ 笹沢 浩 1968 「善光寺平における栗林式土器直前の土器」『信濃』 20-4
笹沢 浩 1971 「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』 23-12
笹沢 浩 1974 「藤森栄一先生と荒山式土器」『長野県考古学会誌』 19・20合併号
笹沢 浩 1976 「弥生時代」『上水内郡誌』 歴史編
笹沢 浩 1977 「弥生土器—中部・中部高地」 3 『考古学ジャーナル』 134
佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『西裏・竹田峯』
- シ 島田恵子 1980 「南佐久郡佐久町館遺跡出土の容器形土偶」『信濃考古』
- チ 千曲川水系古代文化研究所 1980 『編年』
- ツ 坪井清足他 1953 『下高井—長野県埋蔵文化財発掘調査報告』
- ナ 中村龍雄 1974 『関屋遺跡』
長野県教育委員会 1982 『長野県史』 考古資料編・主要遺跡（東北信）
長野県教育委員会 1982 『長野県史』 考古資料編・主要遺跡（中南信）
長野県考古学会 1967 「シンポジウム弥生文化の東漸とその発展」『長野県考古学会誌』 5
長野県考古学会 1968 「弥生文化の東漸とその発展」『長野県考古学会誌』 5
長野市教育委員会 1979 『塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡の第2次調査報告』
長野市教育委員会 1980 『四ツ谷遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
長野市教育委員会 1980 『三輪遺跡—三輪小学校地点遺跡、第1～3次調査報告、付水内坐一元神社（柳原小学校）遺跡調査報告』
長野市教育委員会 1986 『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスB・C・D地点遺跡—』
長野市教育委員会 1986 『塩崎遺跡群IV—市道松節—小田井神社地点遺跡—』
- ニ 西沢寿晃・小松虎 1978 「長野県佐久市月明沢遺跡発掘資料について」『長野県考古学会誌』 31
- ハ 林 幸彦 1986 「北西久保遺跡」『弥生文化の研究7巻—弥生集落—』 雄山閣
- フ 藤沢宗平 1965 「松本平の弥生土器」『信濃』 17-4
藤沢宗平 1974 「弥生時代」『松本市・塩尻市・東筑摩郡誌』 第2巻
藤沢平治 1972 「佐久市中込深堀遺跡発掘調査概報」『長野県考古学会誌』 13
藤森栄一 1931 「諏訪天王垣外発掘の弥生式土器及び石器」『考古学』 3-6、7、19
藤森栄一 1936 「信濃の弥生式土器と弥生式石器」『考古学』 717
藤森栄一 1955 「中部高地・北陸」『日本考古学講座』 4
藤森栄一・桐原健他 1966 「岡谷市庄の畑遺跡」『長野県考古学会研究報告書』 1
藤森栄一・桐原健 1967 「海戸・安源寺」『長野県考古学会研究報告書』 2
藤森栄一・桐原健他 1968 「海戸・第2次調査報告書」『長野県考古学会研究報告書』 4
藤森栄一 1968 「中部高地」『弥生式土器集成』 本編II
- ホ 星 龍象他 1983 「信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程(一)・(二)」『信濃』 III35-5・7
- ミ 宮沢恒之 1967 「飯田市恒川遺跡」『長野県考古学会誌』 4
- モ 本村豪章 1972 「長野市篠ノ井光林寺裏山出土遺物の研究」『東京国立博物館美術誌』

森嶋稔 1978 「弥生式時代」『更級・埴科地方誌』第二巻

県内 弥生後期

- イ 飯山市教育委員会 1976 『岡峰遺跡発掘調査報告書』
飯山市教育委員会 1977 『岡峰遺跡第2次発掘調査報告書』
今村善典 1967 「飯田市座光寺原遺跡」『長野県考古学会誌』4
岩崎卓也・森嶋稔・笹沢浩 1969 「生仁」『長野県考古学会研究報告書』7
- ウ 上田市教育委員会 1984 『和手遺跡』
白田武正 1974 『佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報』
白田武正 1980 「佐久地方の後期弥生土器について」『信濃』32-4
- オ 太田文雄 1980 「北信濃の弥生後期編年について」『信濃』32-4
大場磐雄他 1956 『信濃史料』1巻上・下
岡谷市教育委員会 1981 『橋原遺跡』
- カ 神村 透 1966 「弥生文化の発展と地域性—中部高地」『日本の考古学』III
神村 透 1969 「弥生文化各節—中部山岳地帯」『新版考古学講座』4
神村 透 1985 「長野県下伊那地方の後期弥生土器」『論集 日本原史』
- キ 北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所編
1984 『第5回三県シンポジウム古墳出現期の地域性』
桐原 健 1971 「北信濃の後期弥生式土器」『一志茂樹博士喜寿記念論集』
桐原 健 1975 「赤色塗彩土器の出現」『信濃』III27-7
- ク 群馬・長野・埼玉弥生土器研究グループ 1980 『シンポジウム弥生土器—楠描文の系譜』
- コ 更埴市教育委員会 1971 『下条・灰塚』
奥水利雄・森嶋稔 1976 「佐久市長土呂出土の弥生式土器」『長野県考古学会誌』26
小諸市教育委員会 1981 『五ヶ城』
- サ 佐久市教育委員会 1971 『佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報』
佐久市教育委員会 1971 『佐久市新子田戸坂遺跡緊急発掘調査概報』
佐久市教育委員会 1972 『岩村田一本柳—佐久市岩村田一本柳遺跡緊急発掘調査』
佐久市教育委員会 1973 『岩村田餅田—佐久市岩村田餅田遺跡緊急発掘調査概報』
佐久市教育委員会 1977 『細田』
佐久市教育委員会 1981 『下小平遺跡』
佐久市教育委員会 1984 『上の台遺跡』
佐久市教育委員会 1984 『舞台場』
佐久市教育委員会 1985 『樋村遺跡』
佐久市教育委員会 1986 『琵琶坂遺跡』
佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『西裏・竹田峯』
佐久町教育委員会 1979 『宮の本—長野県佐久町宮の本遺跡発掘調査報告書』
笹沢 浩 1970 「箱清水式土器の再検討」『信濃』22-4
笹沢 浩 1970 「箱清水式土器発生に関する一試論」『信濃』22-11
笹沢 浩 1976 「弥生時代」『上水内郡誌』歴史編
笹沢 浩 1977 「弥生土器—中部・中部高地3」『考古学ジャーナル』134
笹沢浩他 1977・1978 「志平遺跡」『中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』岡谷市その4 長野県教育委員会
笹沢 浩 1978 「中部高地型楠描文の系譜」『中部高地の考古学』
笹沢 浩 1986 「箱清水式土器の文化圏と小地域」『歴史手帖』14-2
- タ 高橋 桂・太田文雄 1977 「北信濃多ヶ峯遺跡第2次発掘調査報告」『信濃』III29-4
竹内恒・土屋長久 1972 「佐久市岩村田東一本柳古墳—佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」『長野県考古学会誌』13
- チ 千曲川水系古代文化研究所 1980 『編年』
千曲川水系古代文化研究所 1981 『箱清水式土器』
茅野市教育委員会 1983 『構井・阿陀堂遺跡』

- ト 豊田村教育委員会 1980 『南大原遺跡—上今井橋架け替工事に伴う発掘調査報告書』
- ナ 中野市教育委員会 1979 『安源寺II—安源寺遺跡第3次発掘調査報告書』
長野県教育委員会 1982 『長野県史』考古資料編・主要遺跡(東北信)
長野県教育委員会 1983 『長野県史』考古資料編・主要遺跡(中南信)
長野県考古学会 1967 「シンポジウム弥生文化の東漸とその発展」『長野県考古学会誌』4
長野県考古学会 1968 「弥生文化の東漸とその発展」『長野県考古学会誌』5
長野市教育委員会 1979 『塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡の第2次調査報告』
長野市教育委員会 1980 『篠ノ井遺跡群—大規模自転車道地点遺跡の調査報告』
長野市教育委員会 1980 『三輪遺跡—三輪小学校地点遺跡第1～3次調査報告、付水内坐一元神社(柳原小学校)遺跡調査報告』
長野市教育委員会 1980 『四ツ谷遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
長野市教育委員会 1981 『箱清水遺跡・大峯遺跡・大清水遺跡』
長野市教育委員会 1982 『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスA・E地点遺跡—』
長野市教育委員会 1986 『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスB・C・D地点遺跡—』
長野市教育委員会 1986 『塩崎遺跡群IV—市道松節—小田井神社地点遺跡—』
- ニ 日本窯業史研究所 1976 『埴地遺跡』
- ハ 花岡 弘 1986 「土師器の成立と古墳時代」『歴史手帖』14—2
林幸彦・花岡弘 1983 「弥生時代の炉—千曲川流域を中心として—」『信濃』III35—4
- フ 藤森栄一 1936 「信濃の弥生式土器と弥生式石器」『考古学』717
藤森栄一 1955 「中部高地・北陸」『日本考古学講座』4
藤森栄一・桐原健 1967 「海戸・安源寺」『長野県考古学会研究報告書』2
藤森栄一 1968 「中部高地」『弥生式土器集成』本編II
- ホ 星 龍象他 1983 「信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程(一)・(二)」『信濃』III35—5・7
- マ 藤田錦次郎 1901・1902 「長野市における弥生式土器の発見」『人類学雑誌』17—170、187
- モ 森嶋 稔 1978 「弥生式時代」『更級・埴科地方誌』第二巻
- ワ 渡辺重義・森嶋稔・森山公一 1979 「北佐久郡軽井沢町遺跡の調査」『長野県考古学会誌』34
- 県外 弥生関係
- ア 相京建史他 1981 『清里庚申塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
相沢貞順・中村富夫 1973 「群馬県北橋村分郷八崎弥生住居址」『考古学雑誌』59—1
- イ 稲岡嘉彰 1972 「新潟県十日町市牛ヶ首遺跡について」『信濃』24—1
- オ 大塚 実 1986 「吉ヶ谷および岩鼻式土器の背景」『土曜考古』第11号
大参義一他 1975 『朝日遺跡群第1次調査報告書』
尾崎喜佐雄・山本良知 1975 「鳥川流域における弥生文化」『水沼遺跡』
- カ 柿沼幹夫 1982 「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第11号
柿沼幹夫 1983 「美里村河輪神社境内出土の弥生土器」『埼玉県立博物館紀要』10
- サ 佐原 真 1959 「弥生式土器製作技術に関する二・三の考察—備描文と回転台をめぐって—」
埼玉県教育委員会 1984 『池守・池上』
- ス 末木 健・新津 健・長沢宏昌 1980 「山梨県敷島金の尾遺跡調査略報」『長野県考古学会誌』第36号
- タ 高崎市教育委員会 1982 『日高遺跡(IV)』
- チ 中山誠二 1985 「山梨県の方形周溝墓」『歴史手帖』13—1
- テ 久永春男他 1963 『瓜 郷』
平野和夫他 1970 『ひらさわ』佐久間町教育委員会
- ツ 向坂鋼二・永房熙 1968 「有東式土器」『遠江考古学研究2』
弥生時代の石器関係
- ア 愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡』
- イ 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』
- オ 大阪文化財センター 1979 『池上遺跡』第3分冊の1・2
大塚晋平・戸沢充則・佐原 真 1981・1982 『日本考古学を学ぶ』(1)・(2)・(3) 有斐閣
岡谷市教育委員会 1981 『橋原遺跡』
小野 昭 1986 「石器の生産」『日本考古学』第3巻
- カ 加藤晋平・鶴丸俊明 1980・1981 『図録石器の基礎知識』I・II 柏書房

- 金関 恕・佐原 真 1986・1987 『弥生文化の研究』第5・6・7・9巻 雄山閣
- キ 北佐久教育会 1955 『北佐久郡志』(自然編)
- 木下亀城・小川留太郎 1967 『標準 原色図鑑』(岩石鉱物) 保育社
- 木下正史 1985 『日本の美術』5 (弥生時代) 至文堂
- 桐原 健 1960 「石器よりみたる信濃弥生文化の一樣相」『信濃』12-12
- 1969 「信濃の磨製石鏃」『信濃』21-10
- 1957 「信濃における石包丁について」『信濃』9-8
- ク 群馬県史編さん委員会 1986 『群馬県史』(資料編2)
- サ 佐久市教育委員会 1983 『中村遺跡』
- 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『西裏・竹田峯』
- ス 鈴木道之助 1981 『図録石器の基礎知識』III 柏書房
- チ 千曲川水系古代文化研究所 1980 『編年』
- ナ 長野県史刊行会 1983 『長野県史』考古資料編全1巻(2)・(3)
- ミ 南佐久教育会 1958 『南佐久郡地質誌』
- 古墳・奈良・平安時代関係
- イ 泉森 皎・伊藤勇輔 1985 『遺物が語る大和の古墳時代』
- 岩崎卓也 1985 「古墳時代と佐久」
- 岩崎卓也 1986 「古墳時代の社会追求の視角」『季刊考古学第16号』 雄山閣
- ウ 上田市教育委員会 1976 『塚穴原第1号古墳発掘調査報告書』
- オ 大山町教育委員会・奈良大学考古学研究室 1982 『向原古墳群第6号古墳発掘調査報告書』
- キ 桐原 健 1964 「善光寺平における古墳立地の考察」『信濃』第16巻第4号
- ク 群馬県教育委員会 1981 『資料編3 原始古代3 古墳 群馬県史』
- コ 後藤守一 1939 「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』
- 後藤守一 1955 「古墳文化」『日本考古学講座5』
- 小諸市教育委員会 1982 『野火付古墳』
- サ 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ-鉄鏃について-」『研究紀要』
- 佐久考古学会 1985 『佐久考古通信No.1-30』
- 佐久市教育委員会 1975 『佐久市下前田原古墳群等学術発掘調査概報』
- 佐久市教育委員会 1976 『家地頭第1号古墳発掘調査報告書』
- 佐久市教育委員会 1980 『北西久保』
- 佐久市教育委員会 1983 『下大豆塚1号・2号古墳』
- 佐久市教育委員会 1984 『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』
- ス 杉山二郎 1980 『正倉院-流沙と潮の香の秘密をさぐる-』
- タ 高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会 1983 『倉賀野万福寺遺跡』
- ツ 土屋長久 1970 「長野県北佐久郡望月町吹上山の神古墳について」『信濃III』22-12
- 土屋長久 1970 「信州佐久平の後期古墳群について」『信濃III』22-5
- 土屋長久 1975 「信濃佐久平古氏族の性格とまつり」
- ト 利根川章彦 1986 「群集墳をのこした人々」『季刊考古学第16号』 雄山閣
- ナ 長野市教育委員会・長野市遺跡調査会 1981 『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
- マ 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相-瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして-」
- 『研究紀要III』 瀬戸市歴史民俗資料館
- 丸山敏一郎 1976 「善光寺平南城の古墳立地について」『信濃III』28-4
- モ 望月町教育委員会 1981 「尾崎4号古墳、大塚第1号・第2号古墳」
- 森 浩一 1979 「鉄」『日本古代文化の探求』

付 編

佐久市北西ノ久保遺跡出土人骨について

聖マリアンナ医科大学教授 森本 岩太郎

1 はじめに

昭和60年9月、佐久市岩村田所在の北西ノ久保遺跡において、江戸時代に属すると思われる古人骨3個体が発掘調査により出土した。佐久埋蔵文化財調査センターからの委嘱により、筆者は現地へ赴いて、そのうちの1個体(T2B)を取り上げた。他の2個体(T2A・T2C)は調査員が取り上げ、後日筆者のもとに届けられた。ここに記載するのは、これらの人骨の所見である。

2 人骨所見

3体の人骨は、南北に直列して並ぶ3基の墓壙から、1体ずつ出土した。いずれも土葬人骨である。

A. T2A 人骨(写真1)

墓壙内から出土したが、埋葬姿勢は不詳である。

老年期の女性人骨1個体分と思われる。保存状態は不良で、わずかな量の頭蓋片と体幹骨のほか、右肩甲骨・両側上腕骨・左の橈骨と尺骨・左腸骨・両側大腿骨と脛骨、右腓骨などの破片が残っているにすぎない。骨質は薄く、軽く、老人性骨多孔症を起こしていると思われる。

頭蓋片としては、右頬骨片と下顎体右半の一部がある。下顎体は萎縮してやや低い。歯および歯槽の状況は次の通りである。

2	
○◎○○○○●	●×××5××

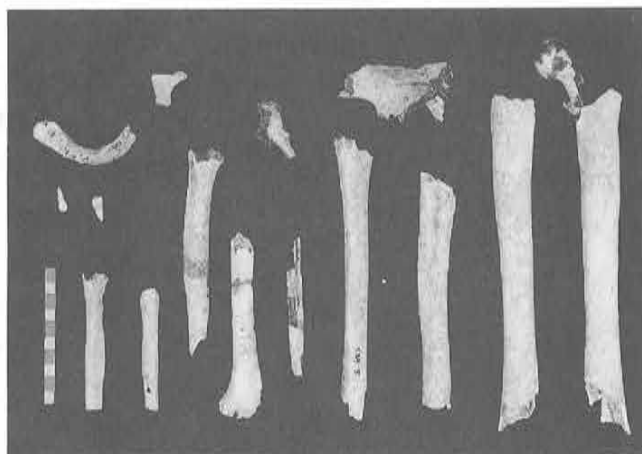


写真1 T2A人骨(女)。頭蓋片(写左上)と上・下肢骨片

ただし、アラビア数字は残存する永久歯、○印は歯槽開放、◎印は歯槽半閉鎖、●印は歯槽完全閉鎖、×印は欠損のため状況不明のことを、それぞれ表す(以下の場合についても同様である)。2は遊離歯である。歯の咬合様式は鋏状咬合型であり、咬耗度は2がBrocaの2度、5が同1度である。

体幹骨については、椎骨および肋骨の小破片が存在するだけである。

上肢骨については、右の上腕骨体横断示数が84.2、橈骨体横断示数が68.8、尺骨体横断示数が75.0である。

下肢骨については、左大腿骨体上部横断示数が69.0を示して超広型に属するのにも、中央横断示数は91.7でピラステル形成が見られない。殿筋粗面および粗線はよく発達している。左脛骨体は栄養孔部における横断示数が、69.2で正脛に近い中脛型に属し、骨体中央部の横断形はMratinのI型である。ヒラメ筋線の発達が良い。

B. T2B 人骨(写真2~10)

墓壙内から北頭位右側臥屈位で出土した壮年期前半の女性人骨1個体分である。人骨の保存状態は極めて良好で、ほぼ全身の骨格が残っている。人骨の前腹部に相当する部位には、比較的長い毛髪でくるくると巻き包まれた6枚の六道銭(寛永通宝)が認められた。この毛髪が被葬者本人のものであるか、それとも遺族もしくは故人

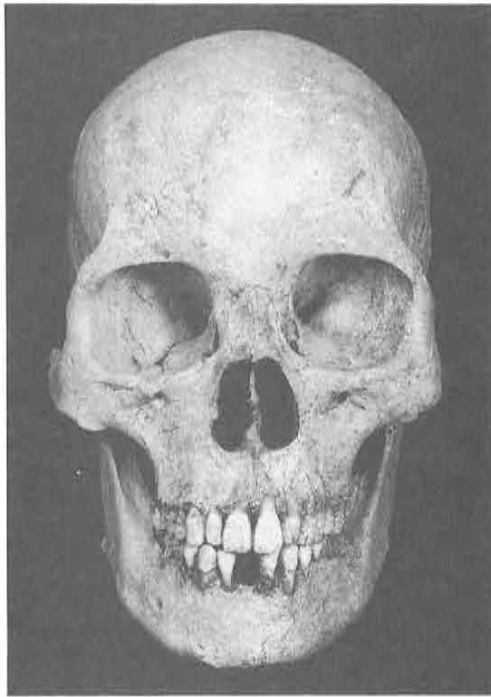


写真2 T2B人骨(女)。頭蓋前面観



写真3 T2B人骨(女)。頭蓋右側面観

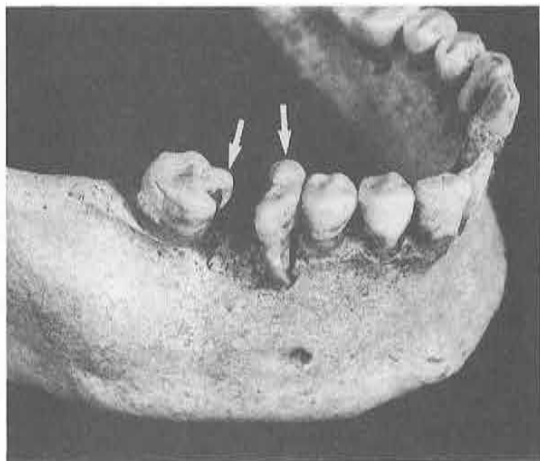


写真4 T2B人骨(女)。右下顎第1大臼歯の遠心半が歯冠・歯根とも齶蝕によりそっくり失われ(右矢印)、また同第2大臼歯の歯冠近心には齶蝕による欠損が生じている。(左矢印)

と親しい身内的な第三者のものであるかは、いまのところ明らかでない。ほかに副葬品は無かった。

頭蓋はほぼ完全で、歯もよく残っている。額はほぼ垂直であり、眉間から鼻根部にかけての曲線はなだらかで乳様突起・外後頭隆起・歯列弓などは小さく、頭頂結節が発達するなど、女性としての特徴をよく備えている。頭蓋冠の3主縫合は、内板では完全に閉鎖しているが、外板ではまだほとんど閉じていない。この頭蓋は主要計測値を第1表に示した。長幅示数は74.6で中頭に近い長頭型に属する。長高示数からは高頭型、幅高示数からは尖頭型であり、また横前頭頭頂示数からは中前頭型に属する。上顔示数(Virchow)によれば額は広上顔型に属し、また眼窩は中眼窩型で、鼻は広鼻型である。鼻根部を見ると、鼻骨上顎縫合の中部が両側とも陥凹しているので、鼻骨間縫合の中部が鋭い稜線を形成している。歯槽性突顎が見られる。歯および、歯槽の状況を次に示す。

● 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7
7 6 5 4 3 2 ●	● 2 3 4 5 6 ●

ただし、数字・記号については前例に準ずる。咬合様式は缺状咬合型で、咬耗度は前歯と大臼歯の一部がBrocaの2度、大臼歯の一部と小臼歯が同1度である。 $\overline{7 \cdot 6}$ に齶蝕があり、そのために $\overline{6}$ は遠心側の半分が失われ、 $\overline{7}$ の歯冠近心には齶蝕を生じている。上・下顎の後歯の歯頸部には歯石の付着があり、特に $\overline{7|6}$ の歯冠の遠心面などは歯石の付着量が多い。この頭蓋の形態小変異の存否については第2表に示した。

椎骨および肋骨については、特記すべき所見は無い。胸骨は胸骨体の破片が残っているだけである。

上肢骨については、まず鎖骨が細く、その骨表面は滑らかである。右上腕骨は最大長が283mmである。左上腕骨の骨体横断示数は71.4で、骨体が細いわりに、三角筋粗面・大結節稜などの筋附着部がよく発達している。左骨

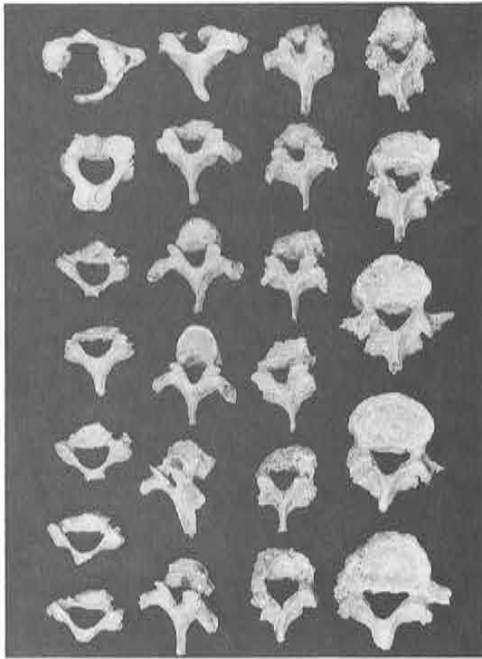


写真5 T2B人骨(女)。椎骨上面観。写真左列上から右列下へ頸椎・胸椎・腰椎の順



写真6 T2B人骨(女)。上肢骨片

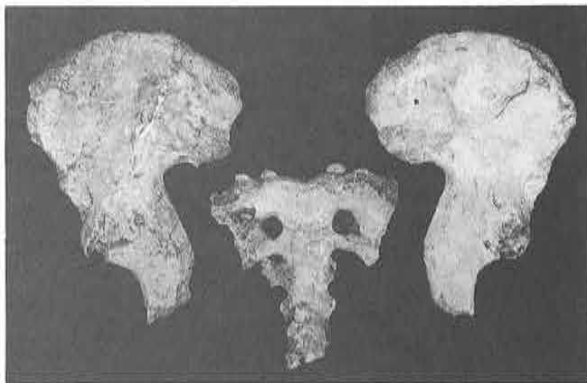


写真7 T2B人骨(女)。骨盤



写真8 T2B人骨(女)。下肢骨

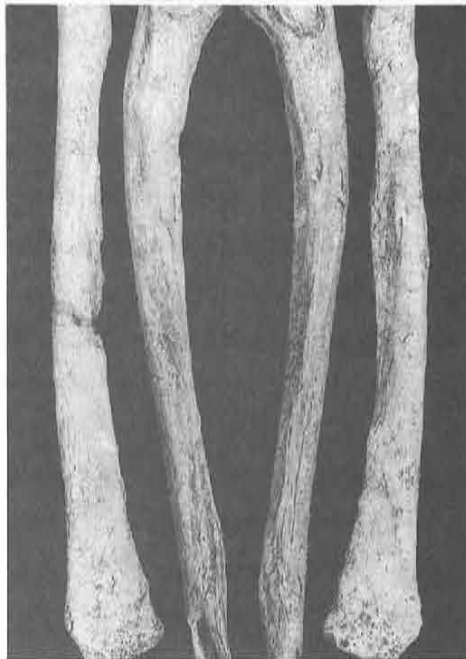


写真9 T2B人骨(女)。桡骨体(写真両端)・尺骨体(写真中央)の慢性梅毒性(?)骨膜炎。

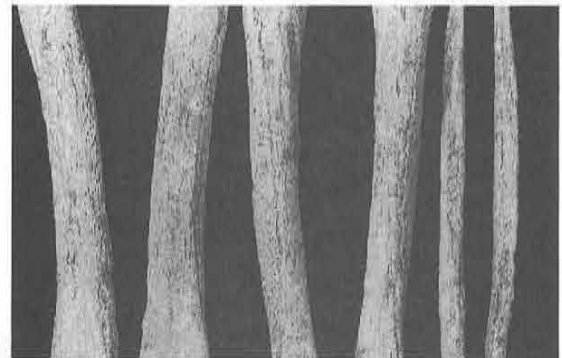


写真10 T2B人骨(女)。大腿骨体(写真左)・脛骨体(写真中央)・腓骨体(写真右)の慢性梅毒性(?)骨膜炎。

の骨体横断示数は71.4で、骨体が細いわりに、三角筋粗面・大結節稜などの筋付着部がよく発達している。左の橈骨と尺骨の骨体横断示数は75.0と80.0である。橈骨と尺骨は両側ともその骨体表面が粗く、凹凸不整に肥厚し、慢性骨膜炎の存在を思わせる。手骨に病的変形は認められない。

下肢骨では、まず両側の寛骨がゆるやかな湾曲の大坐骨切痕をもち、寛骨臼が小さいなど、女性としての諸形態を備えている。左大腿骨体の上部横断示数は68.8を示して超広型に属するが、中央横断示数は83.9でピラステルの形成は見られない。この大腿骨の最大長は385mmである。左脛骨体の栄養孔部における横断示数は75.0、中央における同示数は84.6で、ともに正脛型に属する。この脛骨の最大長は306mmである。左距骨頸上にいわゆる蹲距面が認められる。大腿骨体・脛骨体・腓骨体の表面は両側とも広範囲にわたって粗く、凹凸不整で、慢性骨膜炎があったと思われる。足骨に病的変形は見られない。ちなみに、上・下肢の長骨に見られる骨膜炎による骨表面の変化は軽度であり、計測に大きな支障がないと思われたので、上記の計測値を参考までに示した次第である。

左の大腿骨と脛骨の最大長からPearson式によりこの女性の身長を推定すれば、147.0cmとなる。

C. T2C 人骨 (写真11~19)



写真11 T2C人骨(男)。頭蓋前面観



写真12 T2C人骨(男)。頭蓋左側面観

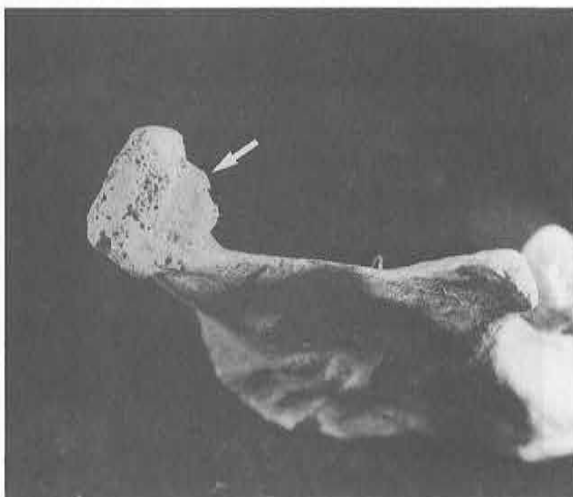


写真13 T2C人骨(男)。右下顎頭の変形性関節症(矢印)。

墓室内から蹲踞位で出土した熟年期の男性人骨1個体分である。埋葬後の土圧により、脊柱の上半部が前方に倒れ、頭蓋は骨盤付近でその顔面部を墓室内底に着けているので、大後頭孔が上方から見える。また両膝も右側へ半ば倒れている。頭蓋の前の墓室内底から寛永通宝が16枚発見された。人骨の保存状態は良好で、ほぼ全身の骨格が残っている。

頭蓋は額が後傾し、眉弓が張り出しているが、鼻根部の陥凹は強くない。乳様突起・齒列弓は大きい、外後頭隆起の発達度は強くない。頭蓋冠の主要縫合は、内板では完全に閉鎖しているが、外板ではまだところどころ閉じていない部分がある。この頭蓋の計測値を第1表に示す。長幅示数は83.4で短頭型に属する。長高示数・幅

高示数によれば、ともに低頭型である。横前頭頭頂示数によると狭前頭型である。顔面頭蓋は上顔示数 (Virchow) によれば中上顔型に属する。眼窩は高眼窩型、また鼻は中鼻型である。歯槽性突顎が見られる。歯および歯槽の状況を次に示す。

7(6)5 4 3(2)○	○ 2 3 4 5(6)7
7 6 5 4 3 ●●	●● 2 3 4 5 6 ●

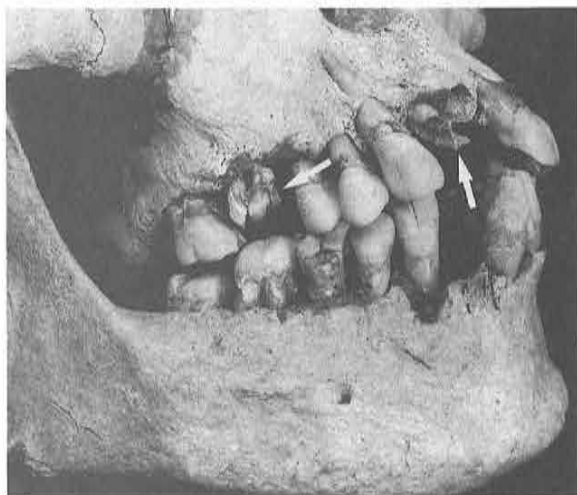


写真14 T2C人骨(男)。右上顎側切歯(右矢印)・同第1大臼歯(左矢印)の歯冠が齶蝕により失われている。下顎の両側中切歯・右側切歯が病的に脱落し、右上顎の犬歯・第1小臼歯と右下顎の第2小臼歯の歯頸部ならびに第2大臼歯の咬合面にもそれぞれ齶蝕が見られる。

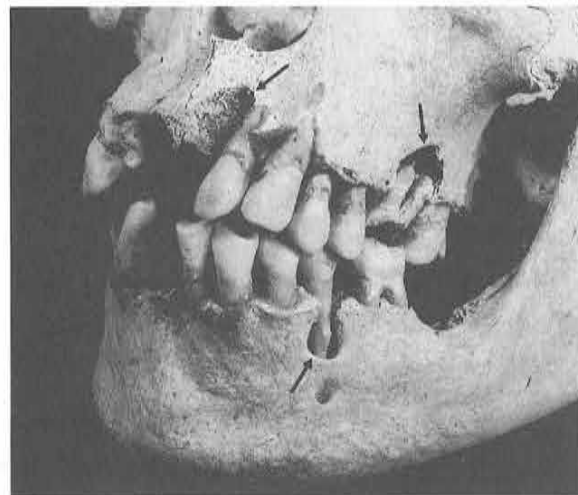


写真15 T2C人骨(男)。左の上顎中切歯(上左矢印)・第1大臼歯(上右矢印)・下顎第2小臼歯(下矢印)の歯根部にそれぞれ大きな歯性膿瘍の痕跡が見られる。

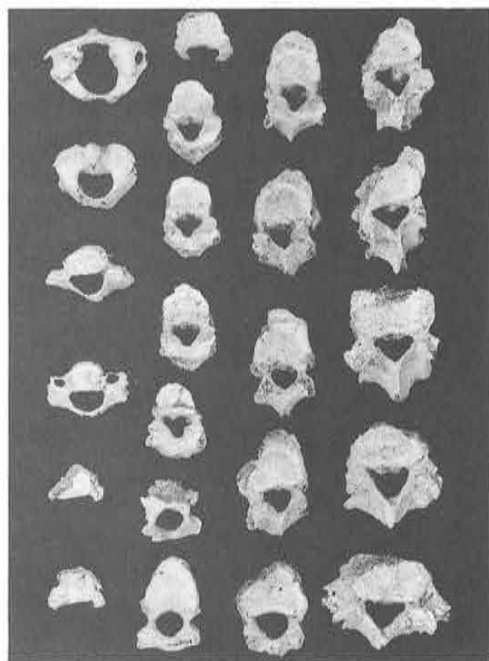


写真16 T2C人骨(男)。椎骨上面観。写真左列上から右列下へ頸椎・胸椎・腰椎の順。第7胸椎～第2腰椎の椎体に変形性脊椎症が見られる。

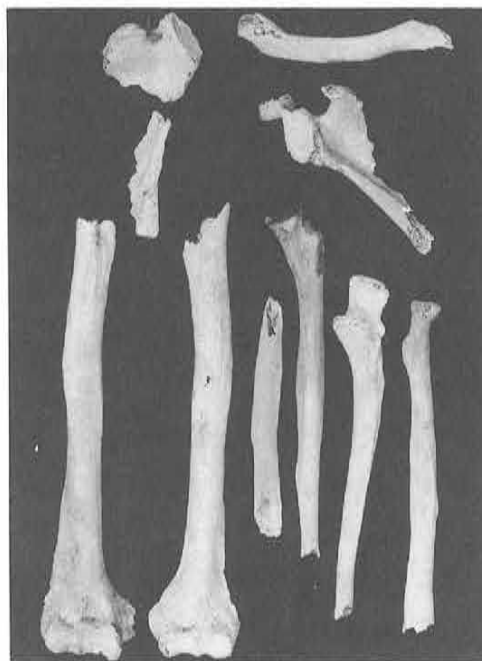


写真17 T2C人骨(男)。上肢骨片

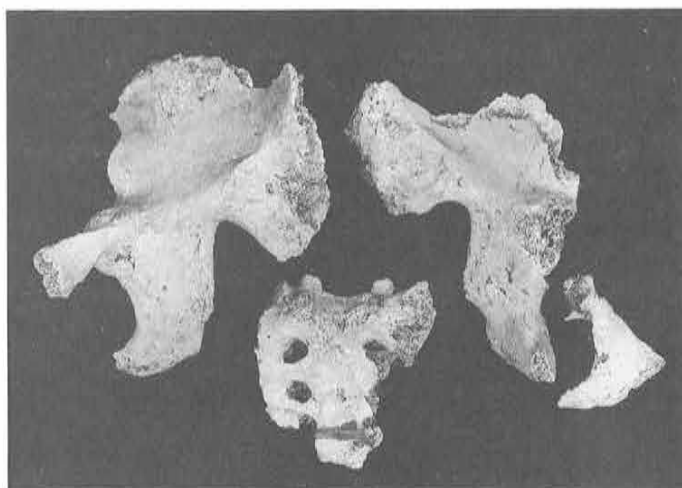


写真18 T2C人骨(男)。骨盤

ただし、数字・記号については前例による。また()内は歯冠が失われて歯根だけが残っている場合を示す。歯の咬合様式は缺状咬合型で、咬耗度は前後歯ともBrocaの2度である。

4・3と7・5の歯頸部に齲蝕があり、7に歯石が付着して

いる。1と6と5に歯性膿瘍が見られる。膿瘍は1が縦12×横7×深6mm、6が縦8×横9×深8mm、5が縦7×横5×深5mm大である。右下顎頭に変形性関節症によると思われる関節面の変形が認められる。

椎骨には、第7胸椎～第3腰椎に変形性脊椎症による椎体縁の骨棘形成が見られる。肋骨には特記すべき事項はない。

上肢骨については、まず鎖骨が太い、左の上腕骨・橈骨・尺骨の骨体横断示数はそれぞれ90.0・75.0・80.0である。上腕骨三角筋粗面などの筋付着部の発達が良い。

下肢骨では、寛骨は大坐骨切痕の湾曲が小さく、寛骨臼が相対的に大きいなどの男性骨盤の諸特徴を示す。恥骨結合面には骨性の縁堤が出来ており、頭蓋縫合の加齢変化に一致する。両側寛骨臼の月状面上部に変形性関節症によると思われる骨棘形成を伴う狭い範囲の関節面の粗面化ないし凹凸が見られる。左大腿骨体の上部横断示数は67.7で超広型に属するが、中央横断示数は104.0でピラステルの形成は見られない。この大腿骨の最大長は377mmである。左脛骨体は栄養孔の高さにおける横断示数が64.5を示して中脛に近い平脛型に属するが、中央横断示数は71.4で正脛型である。この脛骨の最大長は318mmである。距骨頭上いわゆる蹲踞位が認められる。左の大腿骨・脛骨の最大長からPearson式により推定される身長は151.8cmである。

3 若干の考察

A. 骨格と筋

T2B人骨も(壮年期女性)もT2C人骨(熟年期男性)も、骨格における筋付着部がよく発達しているのも、日常的に肉体労働に従事していた者であると思われる。

B. 埋葬状況

T2C人骨は出土時の姿勢から、しっかりした蹲踞位をとって埋葬されたと推測される。その姿勢を保つためには、棺桶(もしくは早桶)に納めるか、または「こも」などに包んで紐でしっかりと縛って埋葬したことと思われる。あるいは桶棺に納める前に縄できつくしばったかもしれない。六道銭を16枚も副葬したのは丁寧なことであった。

T2B人骨も屈葬で、添えられた六道銭が長い毛髪でしっかりと巻き包まれていた。毛髪は死者本人のものか、それとも死者を送る側の者のものかは定かでないが、恐らく後者のものであろう。六道銭は頭陀袋に入れるのが



写真19 T2C人骨(男)。下肢骨

第一表 頭蓋の計測値と示数

(単位はmm、項目の番号は Martinによる)。

項 目	T 2 B頭蓋 (女)	T 2 C頭蓋 (男)
1 頭 蓋 最 大 長	177	175
5 頭 蓋 基 底 長	101	92
8 頭 蓋 最 大 幅	132	146
9 最 小 前 頭 幅	88	88
11 両 耳 幅	118	129
17 Basion - Bregma 高	133	122
26 正 中 矢 状 前 頭 弧 長	125	120
27 正 中 矢 状 頭 頂 弧 長	130	125
28 正 中 矢 状 後 頭 弧 長	106	107
29 正 中 矢 状 前 頭 弧 長	111	109
30 正 中 矢 状 頭 頂 弧 長	116	109
31 正 中 矢 状 後 頭 弧 長	93	91
40 顔 長	101	99
46 中 顔 幅	103	96
48 上 顔 高	64	72
51 眼 高 幅	43	41
52 眼 高 高	33	35
54 鼻 幅	27	26
55 鼻 高	49	52
61 上 顎 齒 槽 幅	61	63
65 下 顎 頭 間 幅	119	124
66 下 顎 角 幅	—	100
68(1) 下 顎 骨 長	110	104
69(3) 下 顎 体 厚	12	13
70a 下 顎 頭 高	56	43
71a 最 小 下 顎 枝 幅	41	36
8/1 頭 蓋 長 幅 示 数	74.6	83.4
17/1 頭 蓋 長 高 示 数	75.1	69.7
17/8 頭 蓋 幅 高 示 数	100.8	83.6
9/8 横 前 頭 頭 頂 示 数	66.7	60.3
48/46 上 顔 示 数 (V)	62.1	75.0
52/51 眼 高 示 数	76.7	85.4
55/54 鼻 示 数	55.1	50.0

普通である。頭陀袋の中に近親者の爪や髪を入れることも広く行われている。六道銭は冥途で三途の川の渡し賃にするとされるが、金属（銭）には魔よけの力があり、死者と親しかった者の体の一部である大切な髪でそれをしっかりと包むことにより、この世に生き残った身内が死者と同一の世界にいることを形で示し、また願ったのかもしれないとも想像される。いずれにせよ、六道銭を毛髪でくるむのは比較的珍しい習俗と思われるので、類例をご存じの方はご教示くださるようお願いしたい。

C. T 2 B 人骨の広汎性骨膜炎

T 2 B 人骨（壮年期女性）の胸骨と両側の橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨・腓骨の骨体には広汎性に増殖性の慢性骨膜炎像が認められたが、この場合は、その原因性疾患として最も可能性の高いのは梅毒（第3期）と思われる。骨梅毒の好発部位は一般に頭蓋・胸骨・鎖骨・脛骨・腓骨であるが、この女性人骨は頭蓋・胸骨・鎖骨に骨膜炎の所見が無い代わりに、脛骨・腓骨だけでなく、大腿骨・橈骨・尺骨にも骨膜炎像が見られた。梅毒による骨の炎症は骨膜炎に始まり、漸次骨炎や骨髄炎を引き起こすと言われ、この人骨に見られたように、骨質の吸収と新生を伴うのが普通である。まれにゴム腫を作ることがあるとされるが、この女性人骨ではゴム腫の有無は確認できなかった。上・下肢の長骨で梅毒性炎症が進むと、骨体が紡錘形に腫れ上がり、髓腔が閉塞すると言われるが、本例ではそこまで病状が進展していない。すなわち、まだ軽度の慢性骨膜炎が起きている段階と言えよう。軽症であるだけに、梅毒に典型的な所見に欠けるうらみがある。梅毒の経過は極めて長く、この人骨の年齢が壮年期の前半にあることを考えれば症状が出揃わないのは当然とも言えよう。ちなみに、江戸時代には我が国にも既に梅毒は伝えられ、幾度も流行を繰り返している。

4 まとめ

北西ノ久保遺跡から出土の江戸時代人骨は成人3個体分（老年女1・壮年女1・熟年男1）である。老年女性（T 2 A）に骨多孔症が認められた。壮年女性（T 2 B）には毛髪で巻きくるんだ六道銭が副葬されていた。その推定身長は147cmで、長骨には軽度の広汎性梅毒性（？）骨膜炎が見られた。熟年男性（T 2 C）の推定身長は152cmで、変形性顎関節症・変形性脊椎症があり、複数の歯性膿瘍が認められた。男女とも、総じて歯の咬耗が進み、病的脱落歯が多く、また蹲踞習慣があったと思われる。

第二表 頭蓋の形態小変異の存否。

(+)は存在、(-)は存在せず。

項 目	T 2 B 頭蓋 (女)		T 2 C 頭蓋 (男)	
	右	左	右	左
内 側 口 蓋 管 骨 橋	(-)	(-)	(-)	(-)
翼 棘 孔 骨 橋	(-)	(-)	(-)	(-)
舌 下 神 経 管 二 分	(-)	(-)	(-)	(+)
床 状 突 起 間 骨 橋	(-)	(-)	(-)	(-)
顎 管 欠 如	(-)	(-)	(+)	(+)
鼓 室 骨 裂 孔	(-)	(-)	(-)	(+)
眼 窩 上 縁 孔	(+)	(-)	(-)	(-)
副 眼 窩 下 孔	(-)	(-)	(-)	(-)
顎 舌 骨 筋 神 経 溝 骨 橋	(-)	(-)	(-)	(-)
副 オ ト ガ イ 孔	(-)	(-)	(-)	(-)
前 頭 縫 合	(-)		(-)	
二 分 頰 骨 ・ 頰 骨 後 裂	(-)	(-)	(-)	(-)
イ ン カ 骨	(-)		(-)	
頭 頂 切 痕 骨	(-)	(-)	(-)	(-)

北西ノ久保・大井城跡（黒岩城）出土須恵器・埴輪の胎土分析

奈良教育大学教授 三辻利一

1) はじめに

胎土分析により須恵器の産地推定をする基本的な方法は古墳・住居址出土須恵器の分析結果を窯跡出土須恵器につき合わせることである。そのためには窯跡出土須恵器の化学特性を十分整理しておかなければならない。ところが、全国各地には5世紀から12世紀にわたる須恵器の窯跡は多数あるので、窯跡出土須恵器につき合わせると云っても容易なことではない。何らかの形で窯跡を整理しなければならない。その一つの方法は窯の推定年代による整理である。出土須恵器の型式により考古学的に窯の年代は推定できる。また、産地推定をする上に見逃してはならない重要な点は須恵器の需要・供給の関係が成立するためには、生産地である窯と供給先である古墳・住居址が同年代のものでなければならないことである。これらのことを考慮に入れると、須恵器生産が未だ全国に普及していなかったと考えられている5～6世紀代の古墳・住居址出土須恵器の産地推定は窯跡の数が少ないため、より容易である。

本項では5～6世紀初の遺跡と推定されている北西ノ久保遺跡・大井城跡（黒岩城）出土須恵器の産地推定の結果を報告する。

表1 北西ノ久保遺跡・大井城跡（黒岩城）分析資料一覧表

資料番号	遺跡名	出土遺構	器種 (挿図番号)	時期
資料 1	北西ノ久保	第14号墳	須恵器 甕 (299-11)	TK216 (5C後半)
資料 2・3		第15号墳	" 甕 (304-14)	TK23・47 (5C後半?)
資料 4		OT1	" 甕	TK47より新しい
資料 5	大井城跡	H2住	" 杯蓋	TK216
資料 6	北西ノ久保	OT1	円筒埴輪	

2) 分析方法

通常、胎土分析による産地推定では須恵器資料を粉末にして蛍光X線分析にかける。粉末にすることによって、測定資料の均質化をはかるとともに、X線の照射、並びに発生する蛍光X線の測定における幾何学的条件を一定にすることができる。筆者らは通常、須恵器資料の表面を研磨してのち、タンダステンカーバイド製乳鉢の中で100～200メッシュ程度に粉砕する。粉末資料は塩化ビニール製リングを枠にして、約15トンの圧力を加えてプレスし、直径20mm、厚さ3mmの錠剤にして蛍光X線分析用試料とする。このような方法で地質調査所から配布されている17種の岩石標準試料、および窯業協会から発売されている3種の粘土試料を使って検量線を作成したところ、どの元素についても良好な直線が得られた。Feの含有量が多い場合には、Rb、Srの蛍光X線強度に若干のFeの吸収効果が認められたが、通常、須恵器には吸収効果の補正を必要とするほどFeは多量に含有されておらず、一窯跡出土須恵器のRb、Srのばらつきの大きさに比較すれば、Feの吸収効果は無視される。

エネルギー分散型蛍光X線分析法で筆者が通常、測定する元素はK、Ca、Rb、Srの5元素である。定量分析には標準試料として岩石標準試料JG-1を使用した。分析値はJG-1による標準化値で表示された。

3) データ解析法

須恵器の産地推定においては古墳・住居址出土須恵器の分析結果を、まず、地元の窯跡出土須恵器の化学特性に対比することを常とう手段とする。しかし、5～6世紀初の須恵器窯跡はこれまでのところ、長野県下には発見されていない。だからと言って、頭から地元産ではないと結論する訳にはいかない。そこで、これまでの研究から引き出された事実を活用することにした。これまでに行われた全国各地の窯跡出土須恵器の分析により、同一地域内の窯跡出土須恵器の化学特性は年代に無関係であることが知られている。したがって、5～6世紀初に長野県下に未発見の窯跡があるとしても、その須恵器の化学特性は、より新しい時代の窯跡出土須恵器の化学特性と同じであると考えられる。そこで、地元、佐久市の6世紀末と推定される石附窯、および、長野市の松ノ山窯の須恵器の化学特性に対比してみることにした。これらに対応しない場合には、5～6世紀代の日本最大の須恵器生産地であった大阪陶邑の須恵器と対比した。大阪陶邑産と推定される須恵器が全国各地の古墳から検出されているという実験データがあるからである。また、名古屋市の猿投窯産の可能性についても検討してみた。

地元、長野産かそれとも大阪陶邑産かを判別する上に、より定量的な産地推定法としても判別分析方法という統計的手法の適用も可能であるが、長野産と大阪陶邑産の須恵器の地域差は分布図上でも十分可能なので、より解り易い分布図上でデータ解析を行うことにした。

4) 分析結果

分析値は表2にまとめてある。この結果を分布図を使って説明する。

図1では、Rb-Sr分布図上で地元産の須恵器との対比を試みた。松ノ山窯、石附窯の須恵器の分析値を包含するようにして、それぞれ、松ノ山領域、石附領域をとってある。これらの分布領域は勿論、定量的な意味をつ訳ではないが、窯跡出土須恵器の地域産を比較したり、また、古墳・住居址出土須恵器の産地定性的に推定したりするには便利である。図1をみると、北西ノ久保遺跡・大井城跡(黒岩城)の須恵器は5点とも松ノ山領域にも、また、石附領域にも対応しないことがわかる。一方、No.6の埴輪は石附領域に対応した。

図2には、Rb-Sr分布図上で大阪陶邑産須恵器と対比してある。大阪陶邑産須恵器としてはTK-73、TK-87、TK-306、TG-22、TK-85、ON-22、TK-305、TK-218、TK-37、TK-303、TK-67、TK-109、TK-15、ON-44、ON-34などの窯跡出土須恵器が分析された。図1と比較すると、大阪陶邑産須恵器は長野県産の須恵器に比べてSr量が少ないことがわかる。そうすると、北西ノ久保遺跡・大井城跡(黒岩城)の須恵器は5点とも大阪陶邑領域に十分対応していることがわかる。No.6の埴輪は逆に、大阪陶邑領域には全く対応しない。

表2 北西ノ久保遺跡・大井城跡(黒岩城)出土須恵器、埴輪の分析値(分析値はJG-1による標準化値で示す)

資料番号	遺跡名	出土遺構	器種 (挿図番号)	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	北 西 ノ 久 保	第14号墳	須恵器 甕 (299-11)	0.481	0.114	2.08	0.616	0.319
2		第15号墳	須恵器 甕 (304-14)	0.574	0.133	2.18	0.656	0.318
3		"	" (304-14)	0.583	0.145	2.17	0.658	0.323
4		OT1	須恵器 甕	0.480	0.197	2.84	0.619	0.359
5	大井城跡	H2住	須恵器 坏蓋	0.497	0.095	2.56	0.564	0.226
6	北西ノ久保	OT1	円筒埴輪	0.259	0.459	3.73	0.296	0.659

図3にはK因子を対比してある。石附窯の須恵器のK量は大阪陶邑、松ノ山窯のものに比べて少なく、K因子でこれらの窯間の相互識別は可能である。そうすると、No.1～5の須恵器は石附領域には対応せず、大阪陶邑領域には十分対応することがわかった。No.6の埴輪はK因子でも石附領域に対応した。

図4にはCa因子を対比してある。松ノ山窯、石附窯の須恵器に比べて明らかに大阪陶邑産の須恵器にはCa量は少ない。これは大阪層群の粘土のもつ化学特性である。そうすると、北西ノ久保遺跡・大井城跡(黒岩城)の5点の須恵器はすべて大阪陶邑領域に対応し、松ノ山領域にも石附領域にも対応しない。なお、No.6の埴輪は石附領域に対応した。

図5にはFe因子を対比してある。長野産の須恵器に対し、大阪陶邑産の須恵器にはFe量が少ないことがよくわかる。そうすると、北西ノ久保遺跡・大井城跡(黒岩城)の5点の須恵器はすべてFe因子でも大阪陶邑領域に対応したが、松ノ山・石附両領域には対応しなかった。これら5点の須恵器は長年、地中で長野県特有の黒色の土壌に覆われていたためか、表面は黒色を呈しており、大阪陶邑産の須恵器とは似ても似つかないようにみえる。しかし、須恵器表面を研磨したところ、色の黒さは消失し、青灰色の地はだが現われた。そして胎土分析の結果は上述したように大阪陶邑産須恵器に対応した。このように、外観上の黒さの故に、5～6世紀代の長野県下の古墳・住居址出土須恵器は大阪陶邑産ではなく、未発見の地元窯の須恵器ではないかと誤判断させる可能性はある。これまでのところ、5～6世紀初めの長野県下の古墳・住居址からは胎土分析によって地元産と判定された須恵器はない。この時期には長野県下では須恵器生産が行われていなかった可能性が大きい。とはいうものの、今後とも、未発見の地元窯の探索は必要であろう。

なお、最近、放射化分析法によりNa量を定量したところ、大阪陶邑産須恵器に比べて、名古屋市猿投窯の須恵器にはNa量が少なく、Na因子によって両者の相互識別が可能であることが明らかになった(後日、データの詳細は公表の予定)。北西ノ久保遺跡・大井城跡(黒岩城)出土の5点の須恵器も放射化分析を行ったところ、Na因子により、5点とも猿投窯産ではなく、大阪陶邑産であることも判明した。

一方、北西ノ久保遺跡出土の埴輪は全因子で石附産須恵器に対応しており、地元、佐久市周辺の粘土で焼成された埴輪とみられる。

「付記」

その後、放射化分析によりNa因子で大阪陶邑群と名古屋猿投群の相互識別が可能となった。北西ノ久保遺跡・大井城跡(黒岩城)の5点の須恵器を放射化分析した結果、No.5、H2住須恵器坏蓋のみは猿投窯産、また、No.1・2・3・4の4点は大阪陶邑産であることが判明したことを付記しておく。

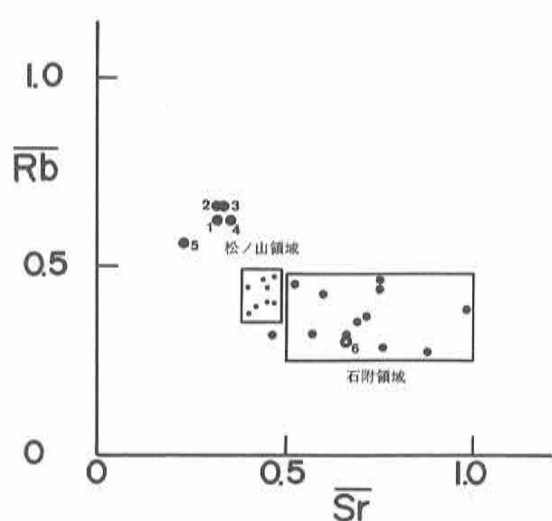


図1 Rb-Sr分布図における地元窯との対応

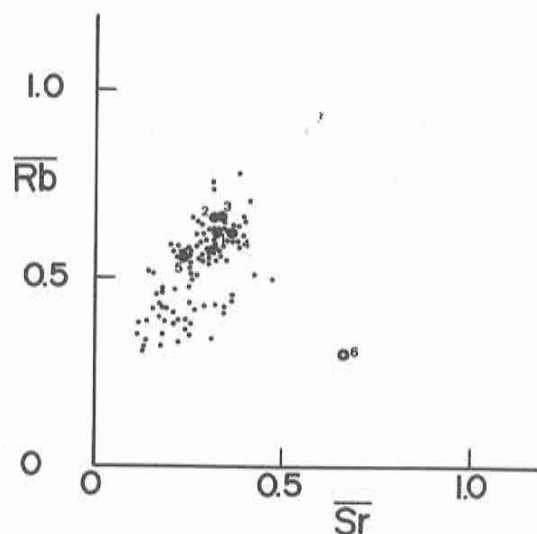


図2 Rb-Sr分布図における大阪陶邑窯との対応

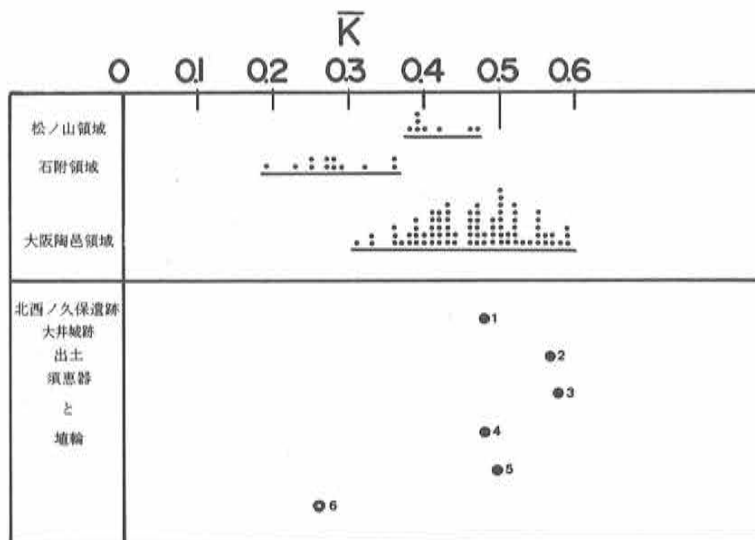


図3 K因子における対応

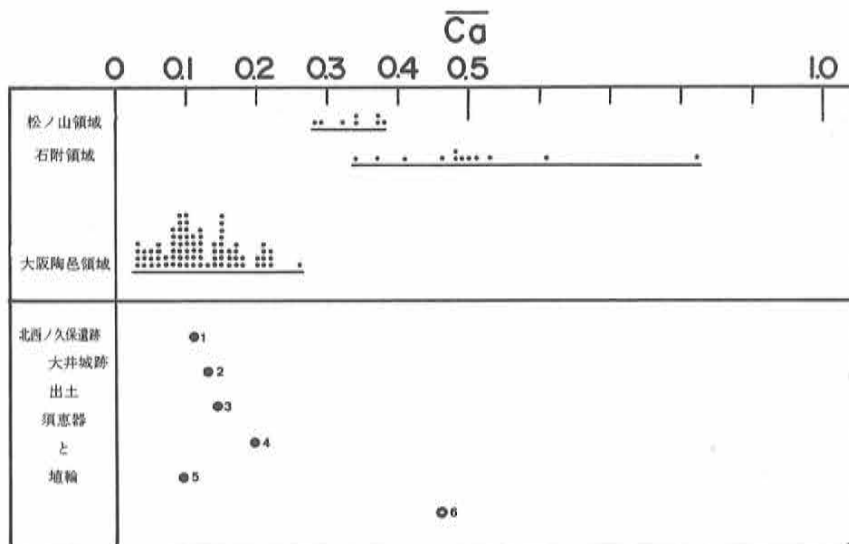


図4 Ca因子における対応

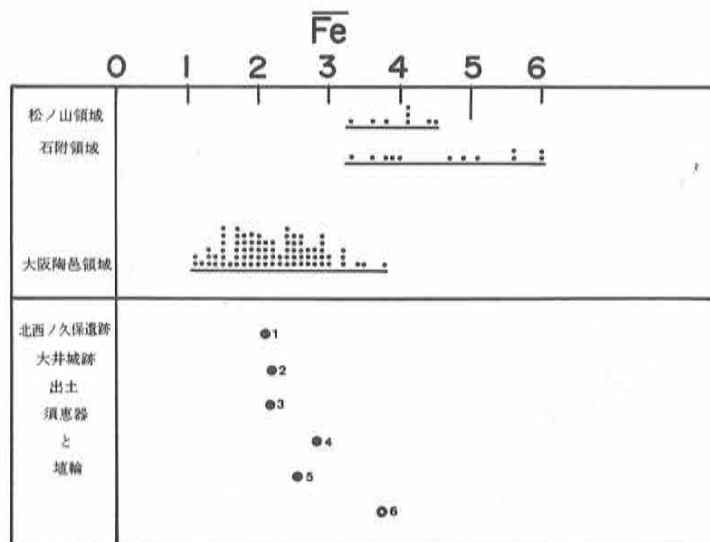
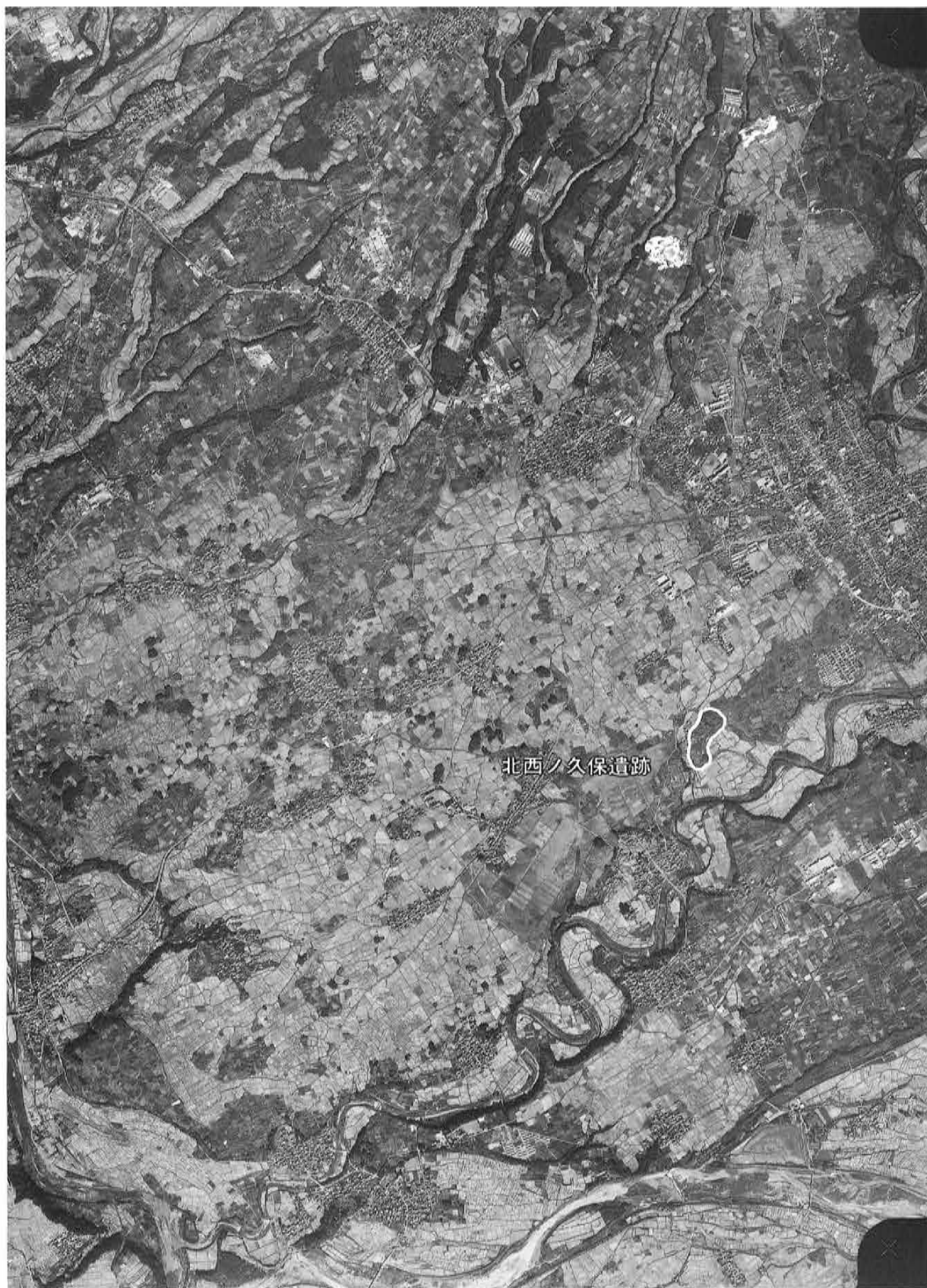


図5 Fe因子における対応



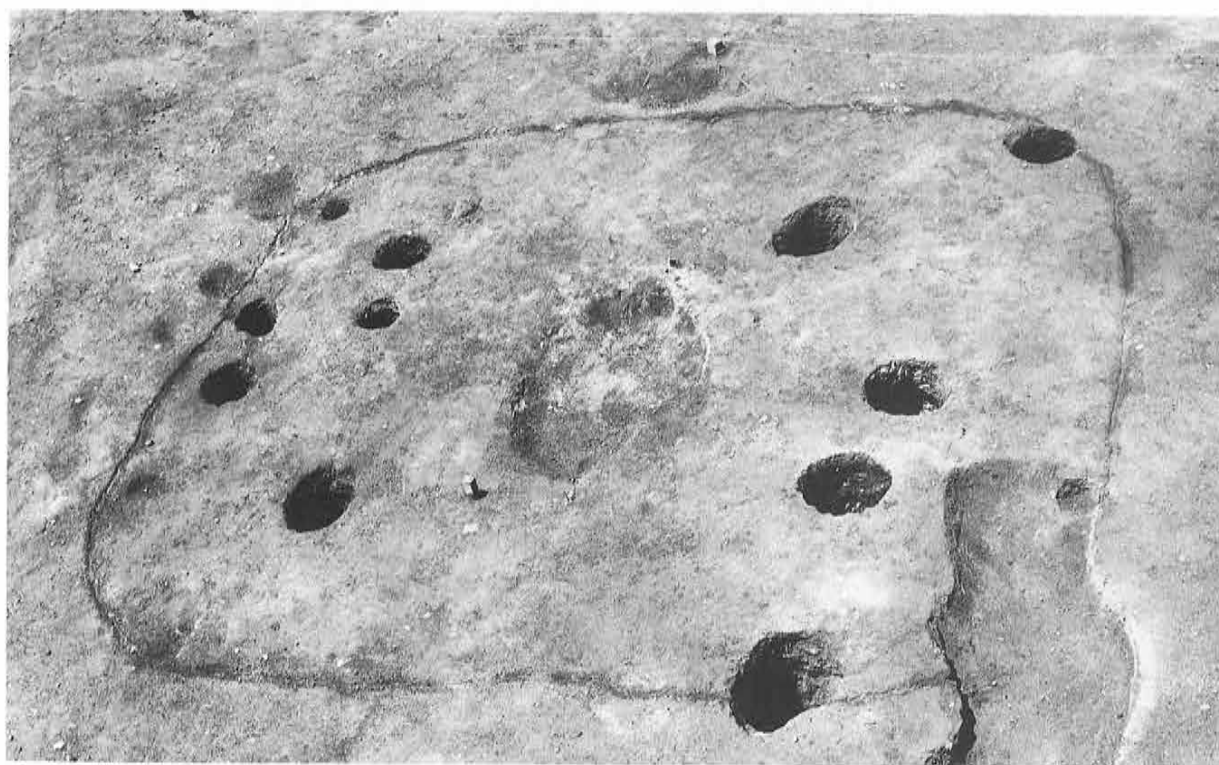
1 航空写真 北西ノ久保遺跡の立地



北西ノ久保遺跡
第2次調査航空写真
(株式会社協同測量社
撮影 1:1,500)



1 Y62号住居址 (西方より)



2 Y63号住居址 (東方より)



1 Y64号住居址 (西方より)



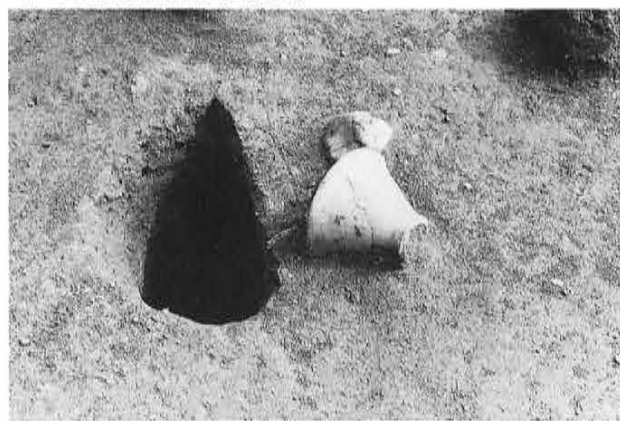
2 Y63号住居址炉址 (西方より)



3 Y64号住居址炉址 (西方より)



4 Y64号住居址遺物出土状況



5 Y64号住居址遺物出土状況



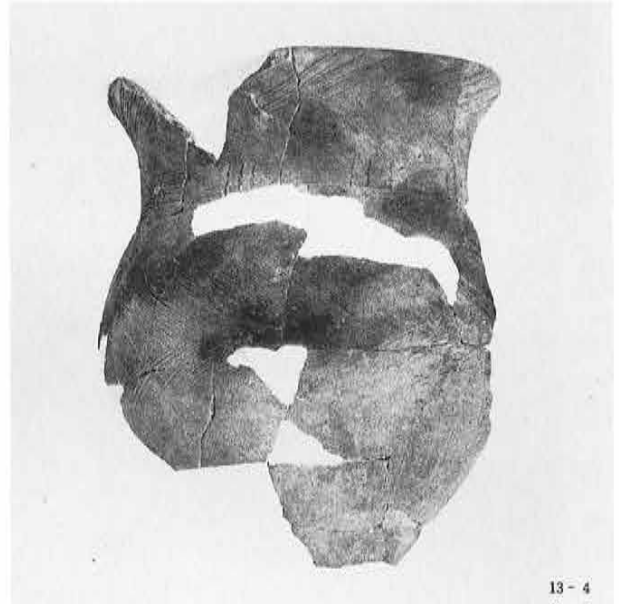
13-1

1 Y 64号住居址出土遺物



13-3

2 Y 64号住居址出土遺物



13-4

4 Y 64号住居址出土遺物



13-2

3 Y 64号住居址出土遺物



14-8



14-9

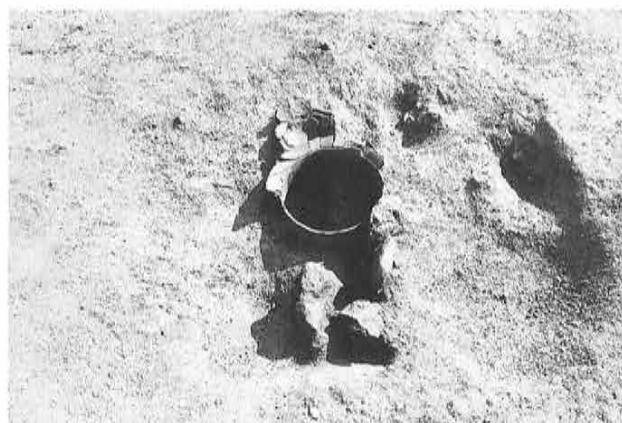
5・6 Y 64号住居址出土遺物



1 Y 65号住居址 (東方より)



2 Y 65号住居址炉址 (東方より)



3 Y 65号住居址炉址 (北方より)



4 Y 65号住居址炉址 (東方より)



5 Y 65号住居址炉址 (北方より)



1 Y 65号住居址炉址 (東方より)



2 Y 65号住居址炉址 (東方より)



3 Y 65号住居址遺物出土状況



18 - 1

4 Y 65号住居址出土遺物



18 - 2

5 Y 65号住居址出土遺物



18 - 3

6 Y 65号住居址出土遺物



18 - 4

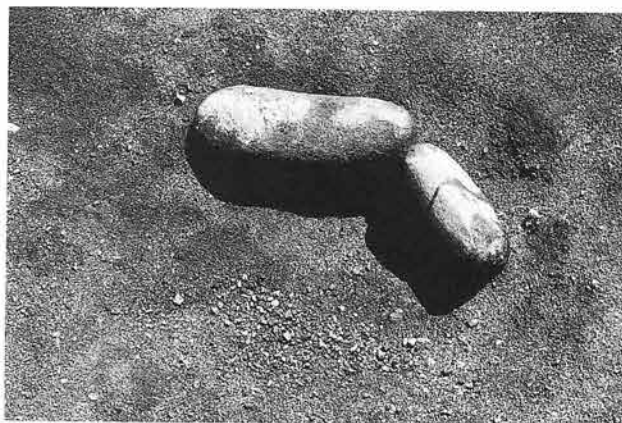
7 Y 65号住居址出土遺物



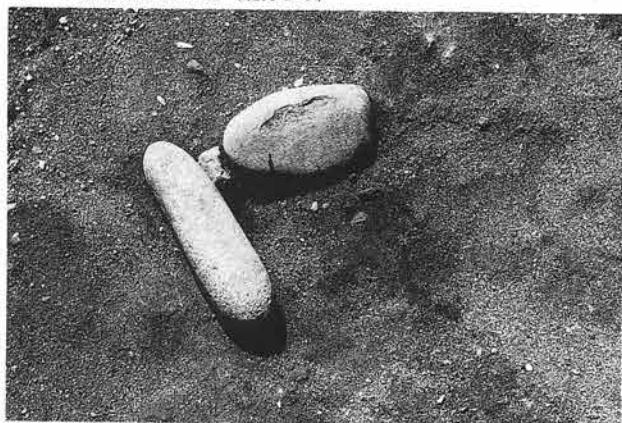
1 Y66号住居址 (東方より)



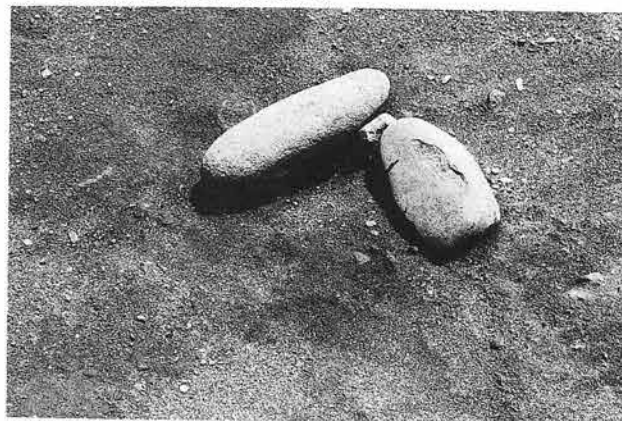
2 Y66号住居址炉址1 (北方より)



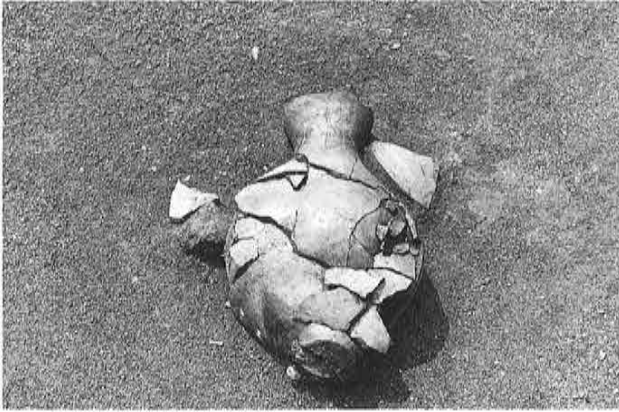
3 Y66号住居址炉址1 (東方より)



4 Y66号住居址炉址2 (北方より)



5 Y66号住居址炉址2 (東方より)



1 Y66号住居址遗物出土状况



2 Y66号住居址遗物出土状况



3 Y66号住居址遗物出土状况



4 Y66号住居址遗物出土状况



5 Y66号住居址遗物出土状况



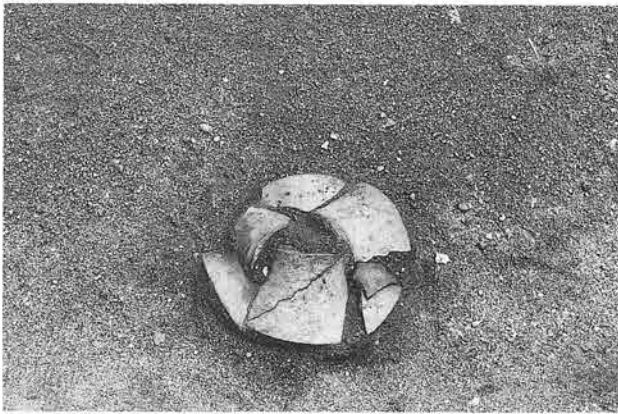
6 Y66号住居址遗物出土状况



7 Y66号住居址遗物出土状况



8 Y66号住居址遗物出土状况



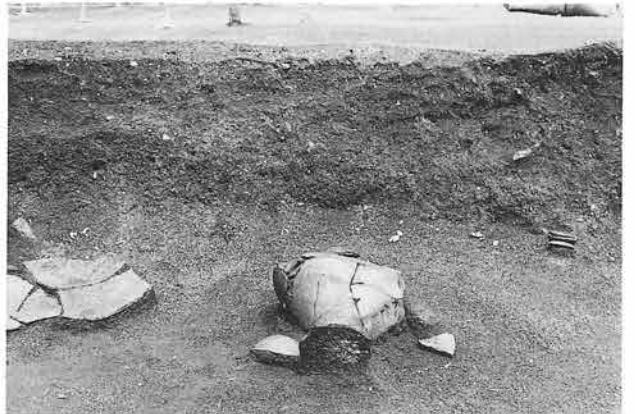
1 Y 66号住居址遺物出土状況



2 Y 66号住居址遺物出土状況



3 Y 66号住居址遺物出土状況



4 Y 66号住居址遺物出土状況



5 Y 66号住居址遺物出土状況



6 Y 66号住居址炉址検出状況 (南方より)



24 - 9

7 Y 66号住居址出土遺物



24 - 10

8 Y 66号住居址出土遺物



23 - 1

1 Y 66号住居址出土遗物



23 - 2

2 Y 66号住居址出土遗物

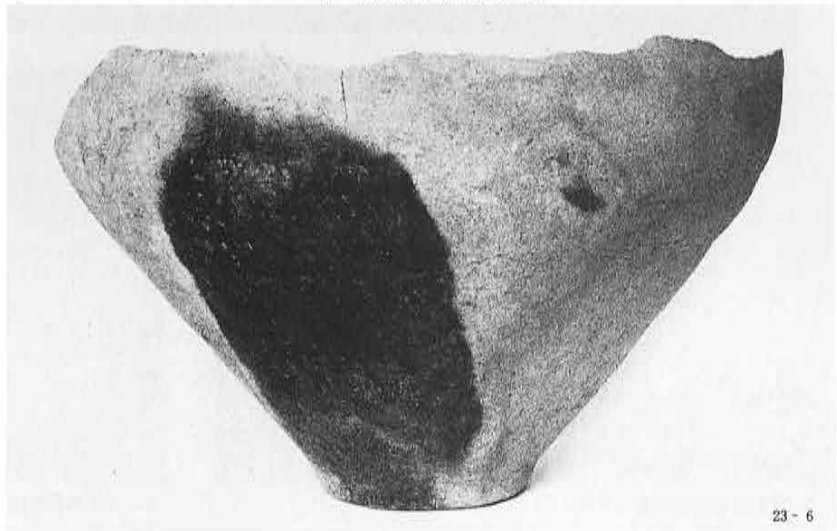


23 - 3



23 - 4

3 · 4 Y 66号住居址出土遗物



23 - 6

5 Y 66号住居址出土遗物



24 - 11

6 Y 66号住居址出土遗物



24 - 12

7 Y 66号住居址出土遗物



24 - 13

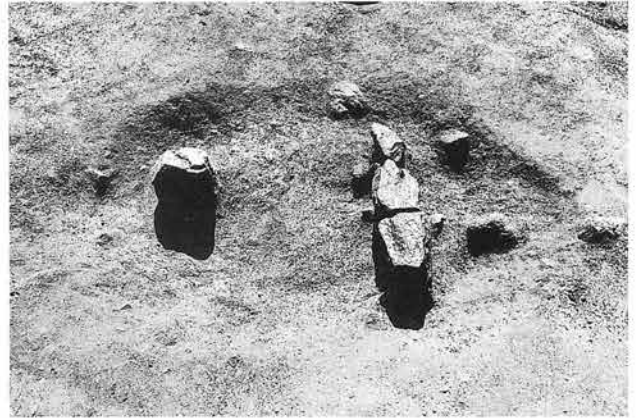
8 Y 66号住居址出土遗物



1 Y67号住居址 (西方より)



2 Y67号住居址完掘 (西方より)



3 Y67号住居址炉址 (西方より)



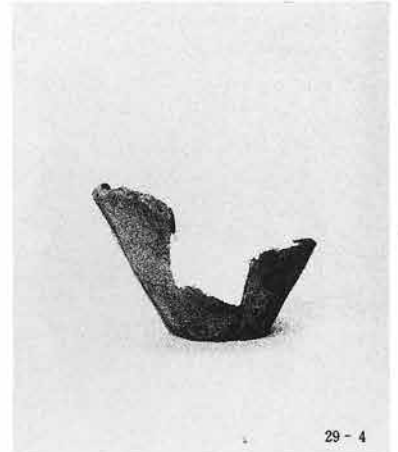
29-1

4 Y67号住居址出土遺物



29-2

5 Y67号住居址出土遺物

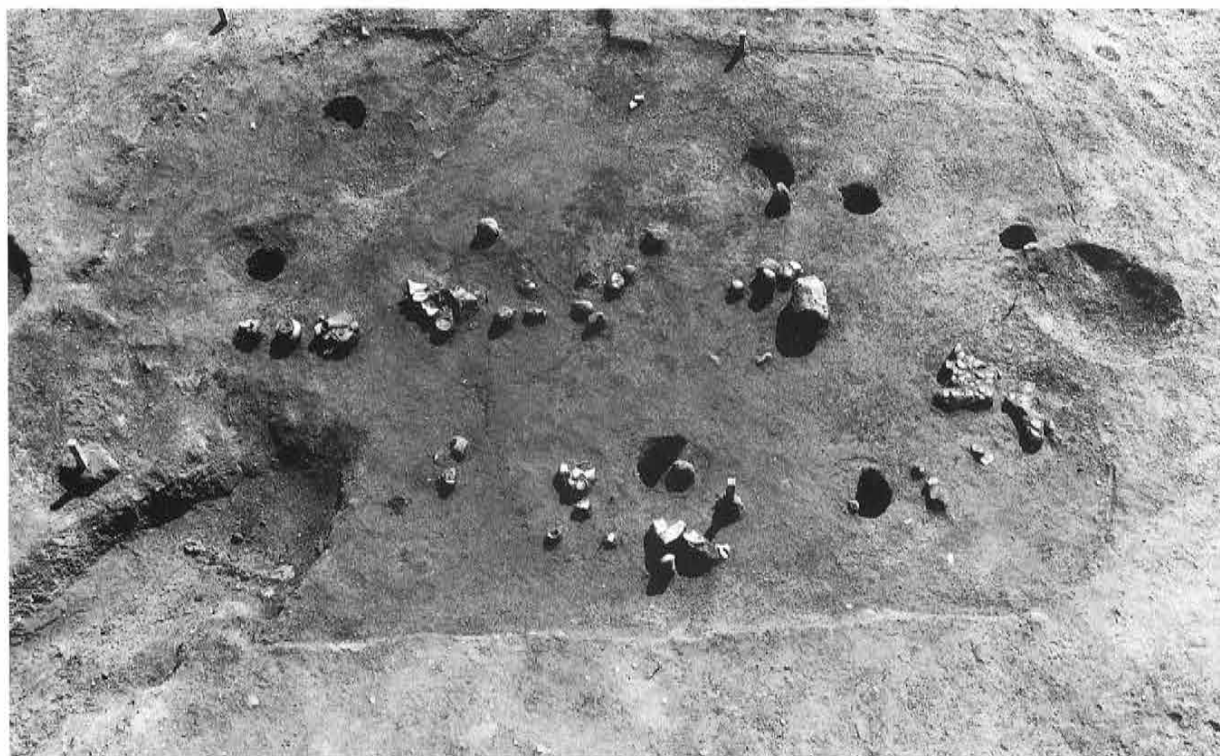


29-4

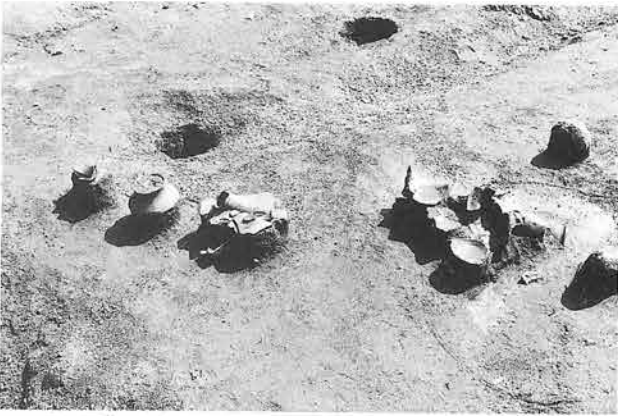
6 Y67号住居址出土遺物



1 Y68号住居址 (西方より)



2 Y68号住居址遺物出土状況 (西方より)



1 Y 68号住居址遺物出土狀況



2 Y 68号住居址遺物出土狀況



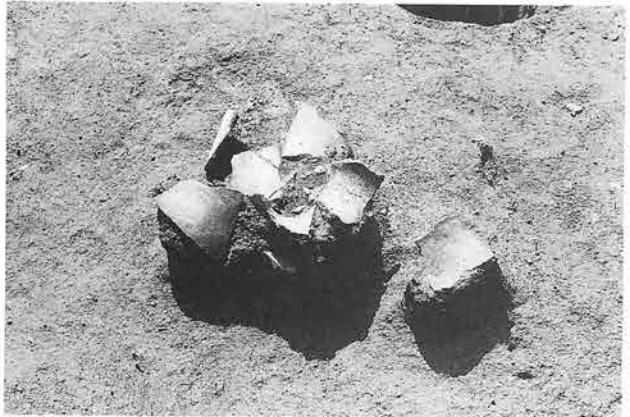
3 Y 68号住居址遺物出土狀況



4 Y 68号住居址遺物出土狀況



5 Y 68号住居址遺物出土狀況



6 Y 68号住居址遺物出土狀況



7 Y 68号住居址出土遺物

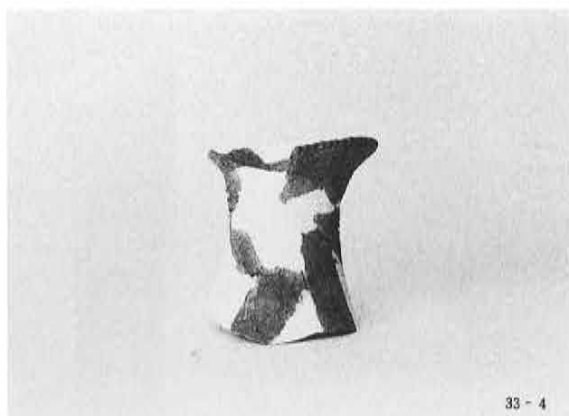
33 - 1



8 · 9 Y 68号住居址出土遺物

33 - 2

33 - 3



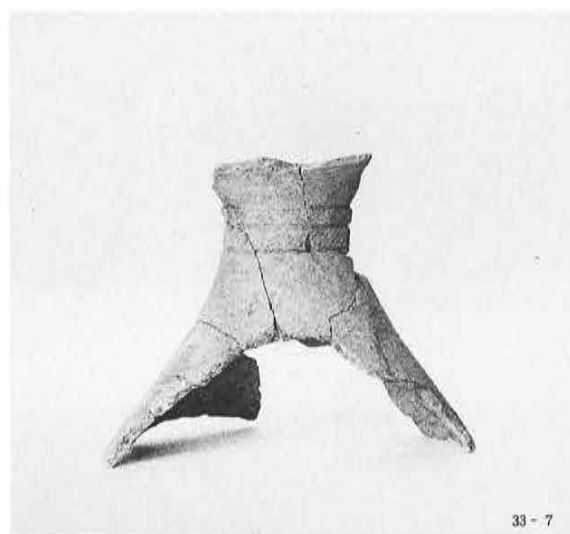
1 Y 68号住居址出土遗物



2 Y 68号住居址出土遗物



3 Y 68号住居址出土遗物



4 Y 68号住居址出土遗物



5 Y 68号住居址出土遗物



1 Y 69号住居址 (北方より)



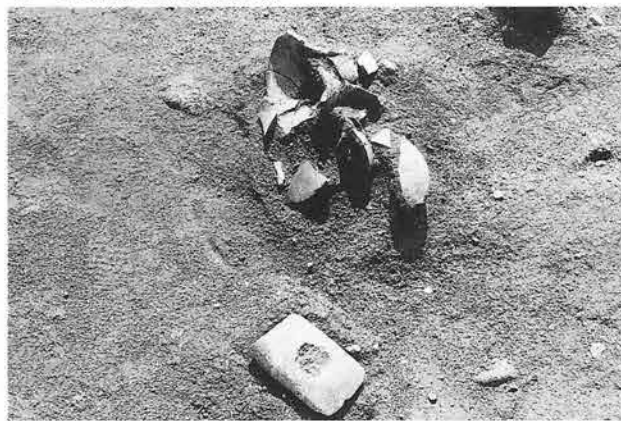
2 Y 69号住居址炉址 (東方より)



3 Y 69号住居址遺物出土状況



4 Y 69号住居址遺物出土状況



5 Y 69号住居址遺物出土状況

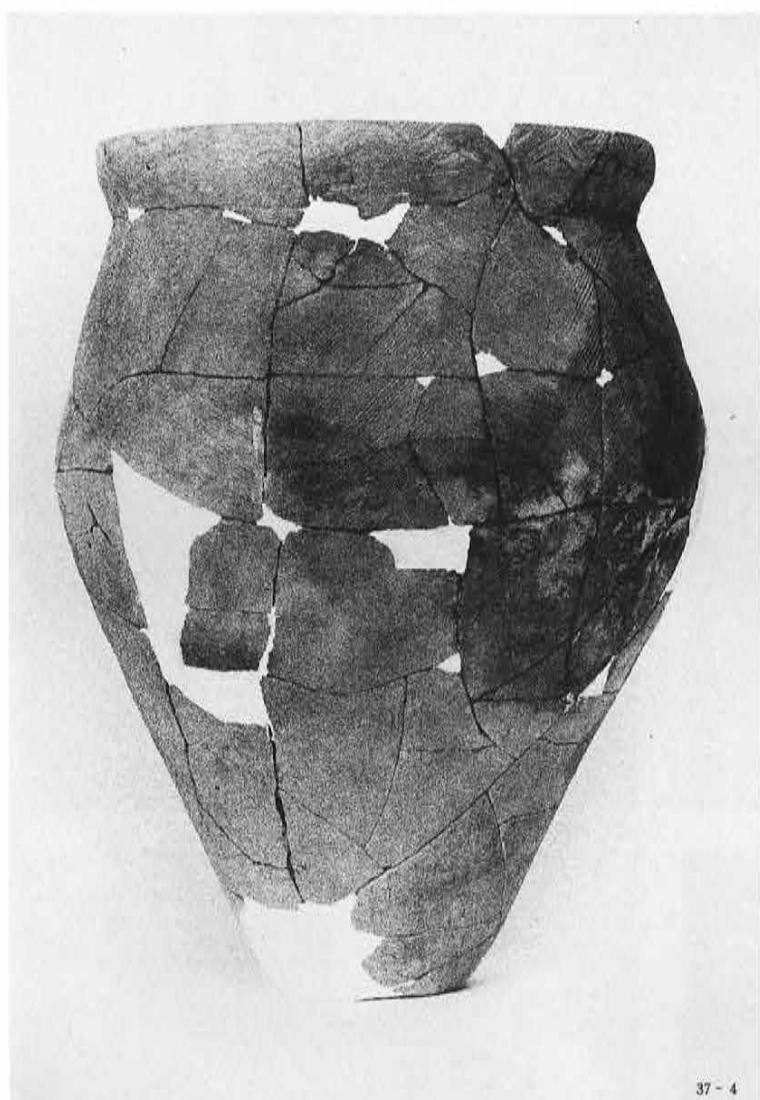


1 Y 69号住居址遺物出土状況



2 Y 69号住居址出土遺物

37 - 1



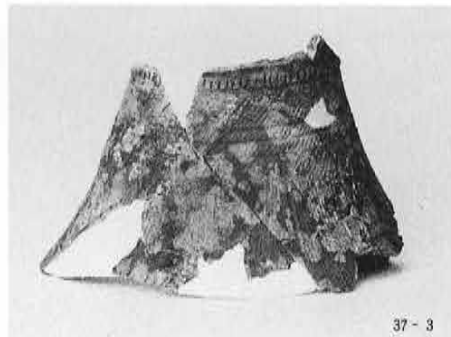
3 Y 69号住居址出土遺物

37 - 4



4 Y 69号住居址出土遺物

37 - 2



5 Y 69号住居址出土遺物

37 - 3



6 Y 69号住居址出土遺物

37 - 5



1 Y70号住居址遺物出土状況 (北方より)



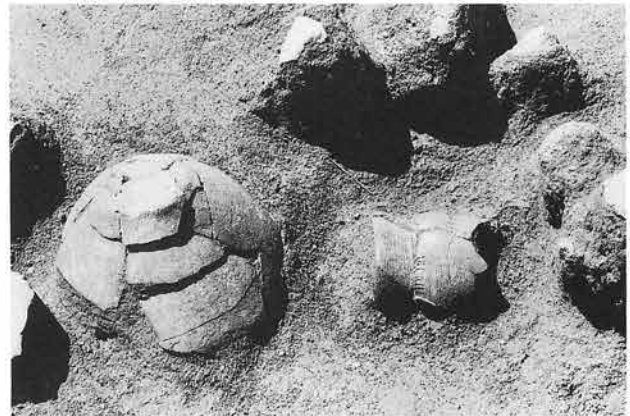
2 Y70号住居址 (西方より)



3 Y70号住居址炉址 (西方より)



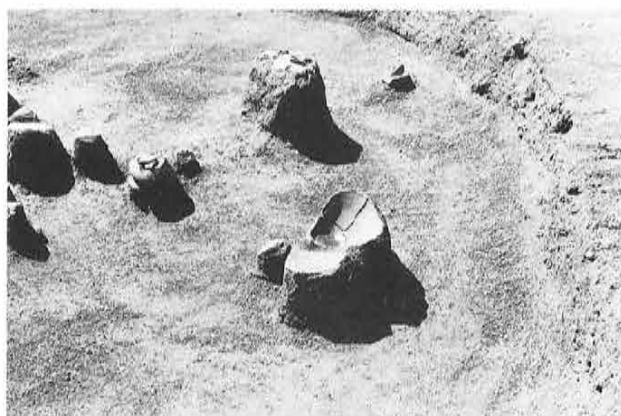
4 Y70号住居址遺物出土状況



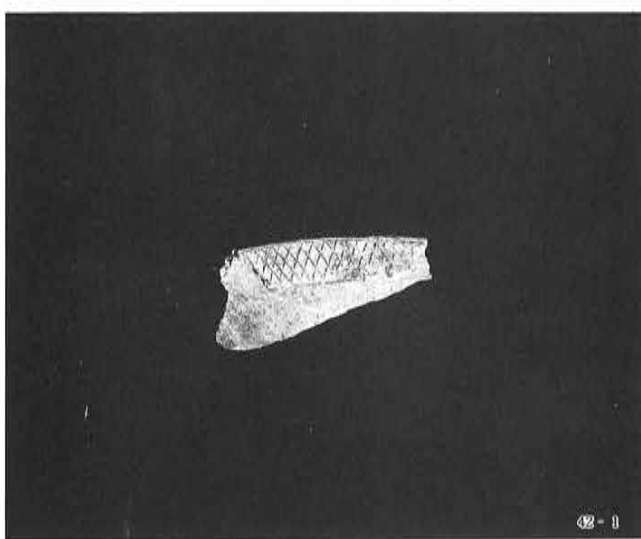
5 Y70号住居址遺物出土状況



1 Y70号住居址遺物出土狀況



2 Y70号住居址遺物出土狀況



3 Y70号住居址出土遺物



4 Y70号住居址出土遺物

42-2



6 Y70号住居址出土遺物

42-4



5 Y70号住居址出土遺物

42-3



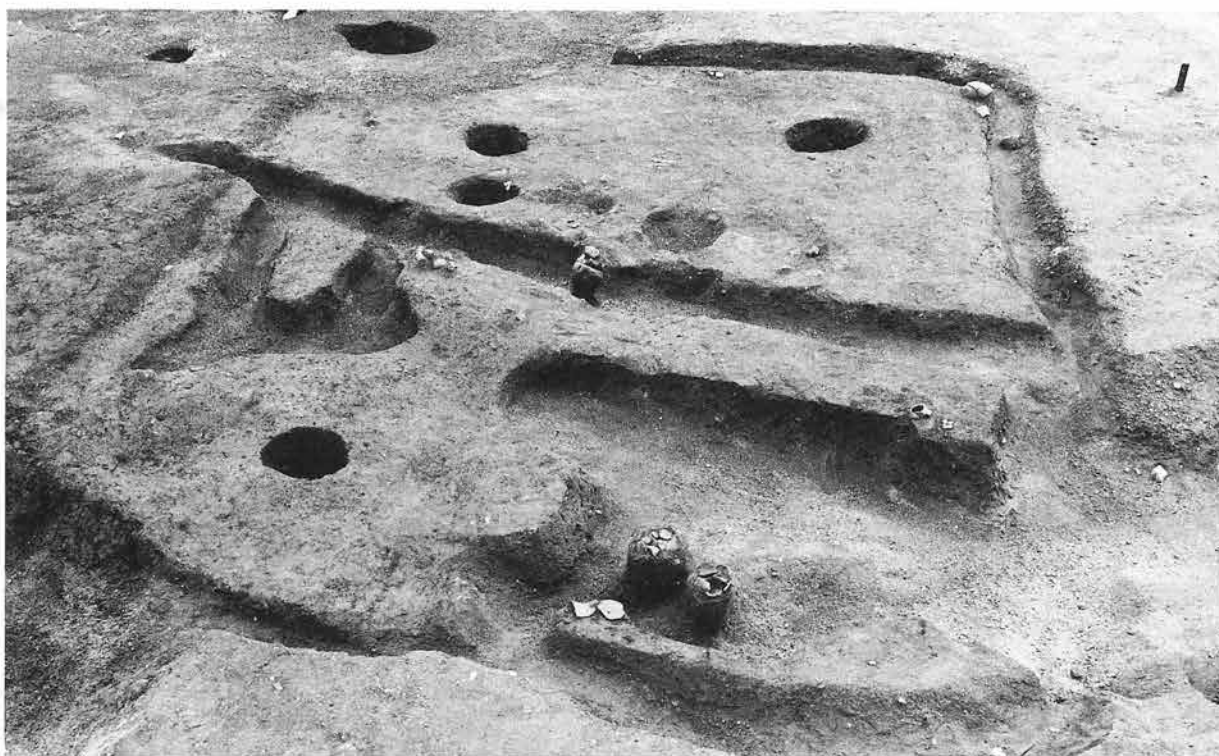
7 Y70号住居址出土遺物

42-6



8 Y70号住居址出土遺物

42-7



1 Y71号住居址（北方より）



45 - 1

2 Y71号住居址出土遺物



45 - 4

3 Y71号住居址出土遺物



1 Y72号住居址 (東方より)



2 Y72号住居址遺物出土状況



3 Y72号住居址遺物出土状況



49 - 1

4 Y72号住居址出土遺物



49 - 2

5 Y72号住居址出土遺物



1 Y73号住居址 (南方より)



2 Y74号住居址 (西方より)



1 Y73号住居址遺物出土状況



2 Y74号住居址ベッド状遺構? (北方より)



3 Y74号住居址遺物出土状況



4 Y74号住居址遺物出土状況



5 Y74号住居址出土遺物



6 Y74号住居址出土遺物



7 Y74号住居址出土遺物



8 Y74号住居址出土遺物



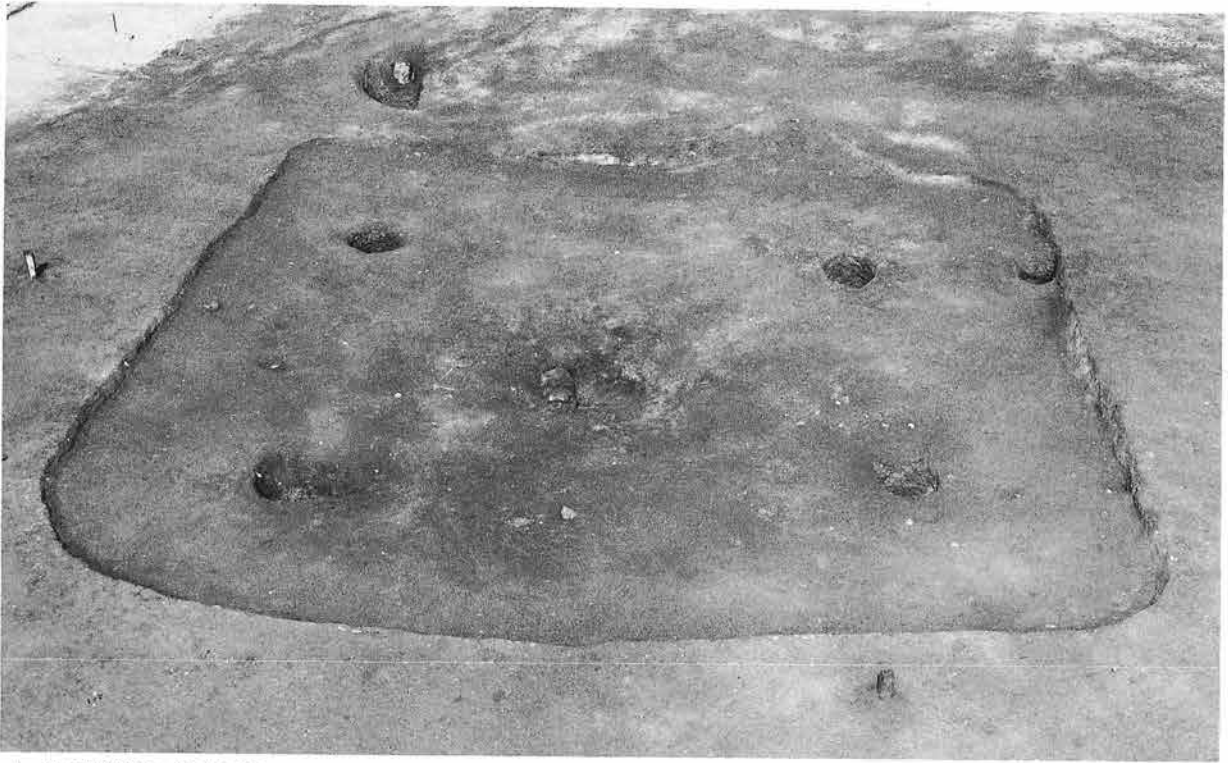
9 Y74号住居址出土遺物



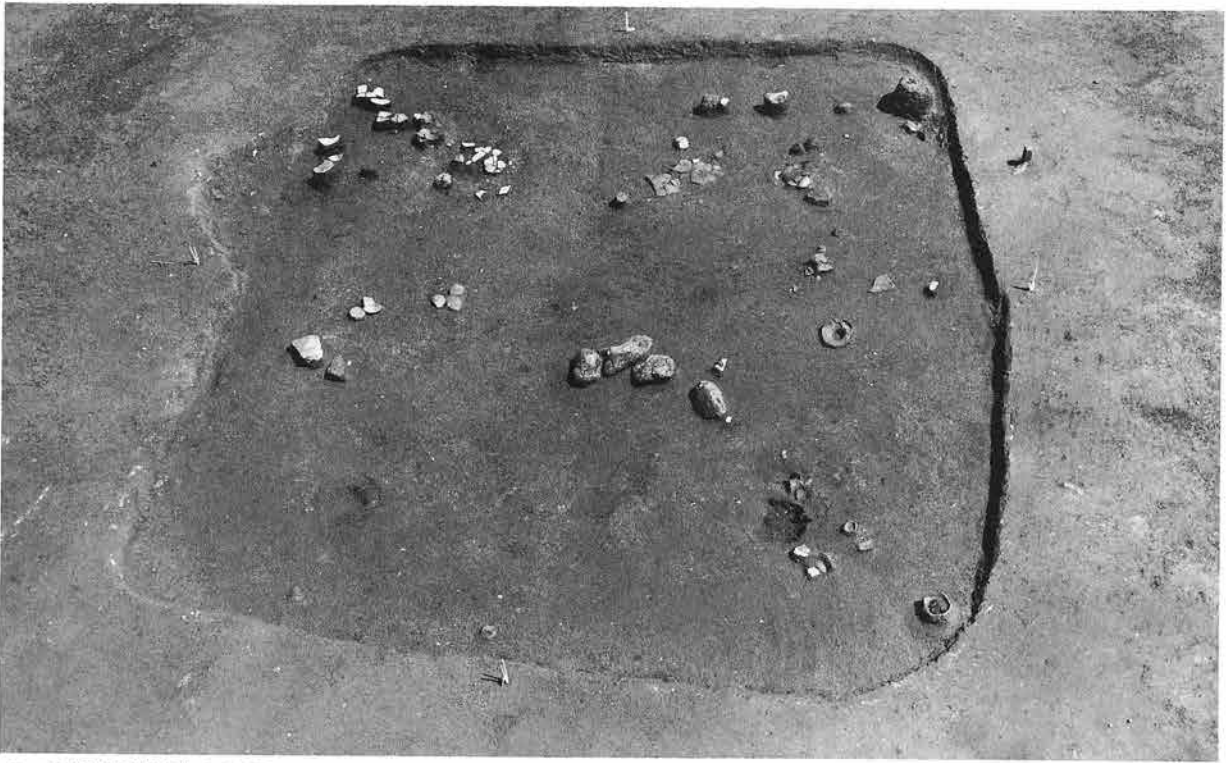
10 Y74号住居址出土遺物



11 Y74号住居址出土遺物



1 Y75号住居址 (東方より)



2 Y75号住居址遺物分布状況 (南方より)



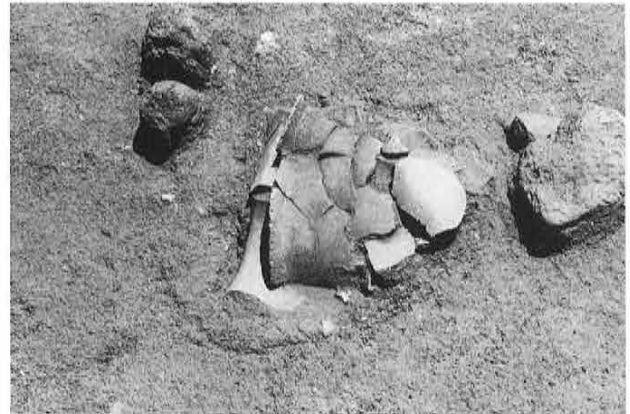
1 Y75号住居址炉址 (西方より)



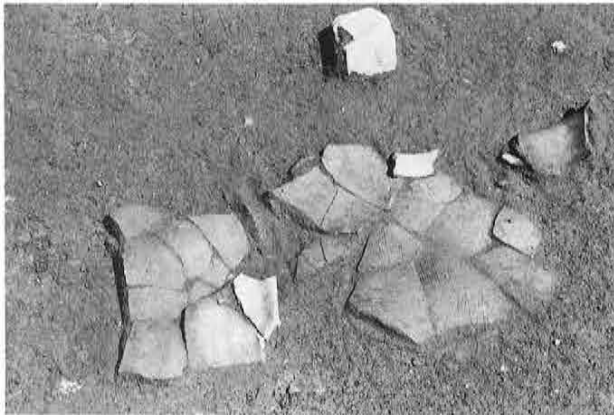
2 Y75号住居址炉址 (北方より)



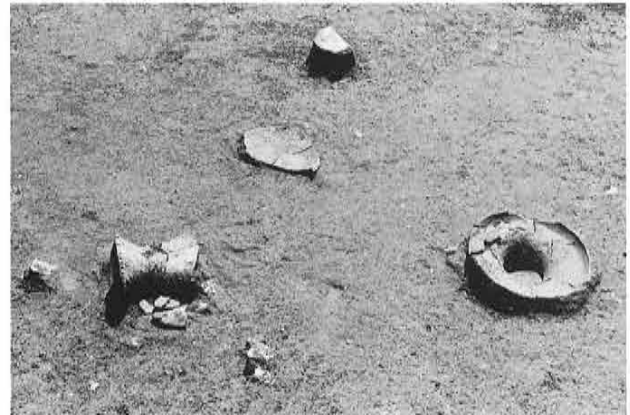
3 Y75号住居址遺物出土状況



4 Y75号住居址遺物出土状況



5 Y75号住居址遺物出土状況



6 Y75号住居址遺物出土状況



7 Y75号住居址遺物出土状況



8 Y75号住居址遺物出土状況



1 Y75住居址出土遺物

61-1



2 Y75号住居址出土遺物

61-2



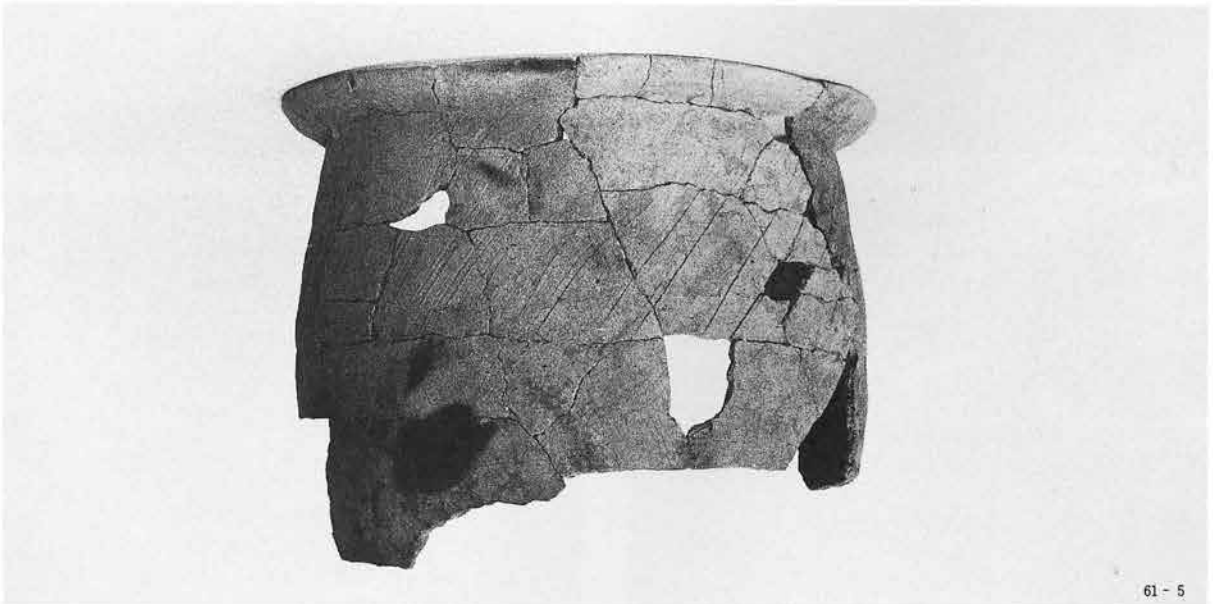
3 Y75号住居址出土遺物

61-3



4 Y75号住居址出土遺物

61-4



5 Y75号住居址出土遺物

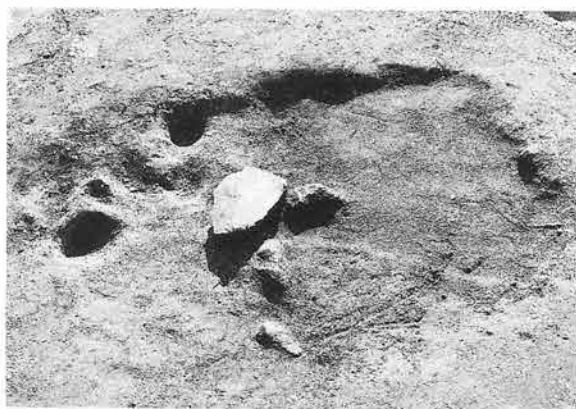
61-5



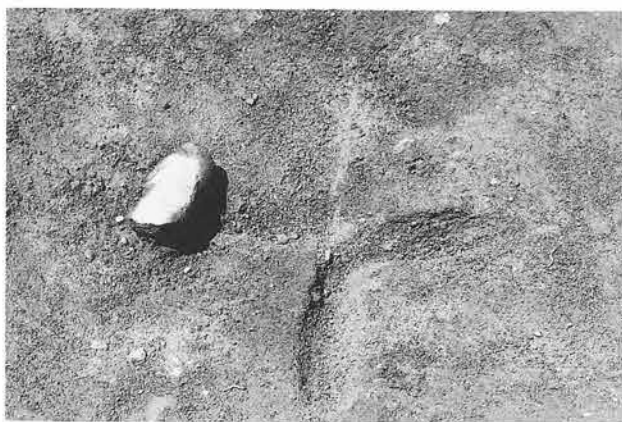
1 Y76号住居址 (西方より)



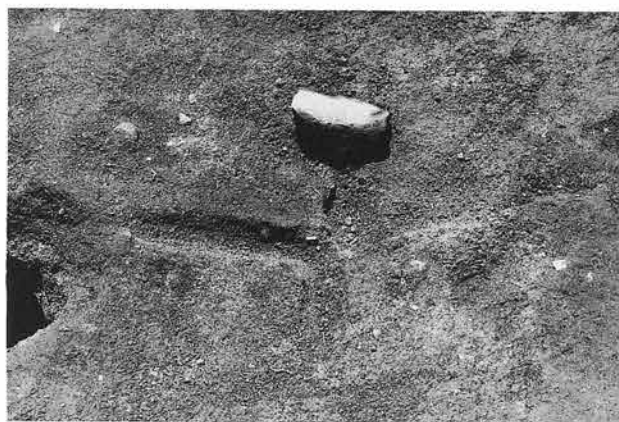
2 Y77号住居址 (東方より)



1 Y76号住居址炉址（東方より）



2 Y77号住居址炉址（東方より）



3 Y77号住居址炉址（北方より）



4 Y77号住居址遺物分布状況（東方より）



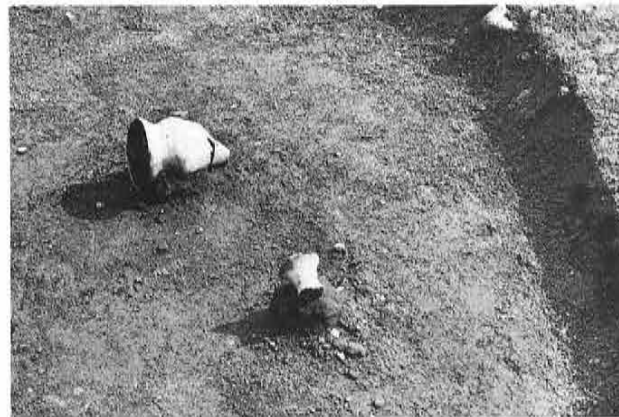
1 Y 77号住居址遺物出土狀況



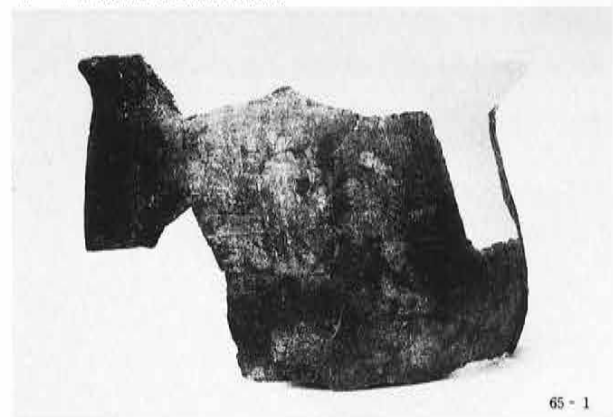
2 Y 77号住居址遺物出土狀況



3 Y 77号住居址遺物出土狀況

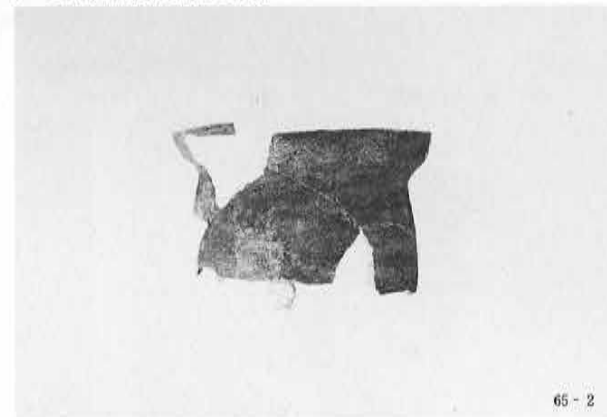


4 Y 77号住居址遺物出土狀況



65 - 1

5 Y 76号住居址出土遺物



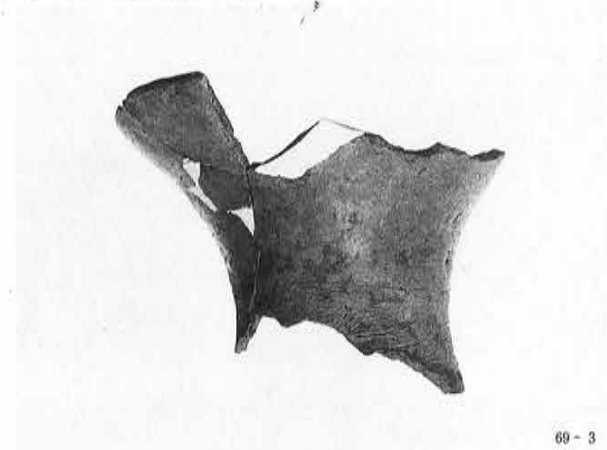
65 - 2

6 Y 76号住居址出土遺物



69 - 1

7 Y 77号住居址出土遺物



69 - 3

8 Y 77号住居址出土遺物



1 Y77号住居址出土遺物

69-2



2 Y77号住居址出土遺物

69-4



3 Y77号住居址出土遺物

69-5



4 Y77号住居址出土遺物

69-8



5 Y77号住居址出土遺物

69-10



6 Y77号住居址出土遺物

69-9



7 Y77号住居址出土遺物

69-12



8 Y77号住居址出土遺物

69-13



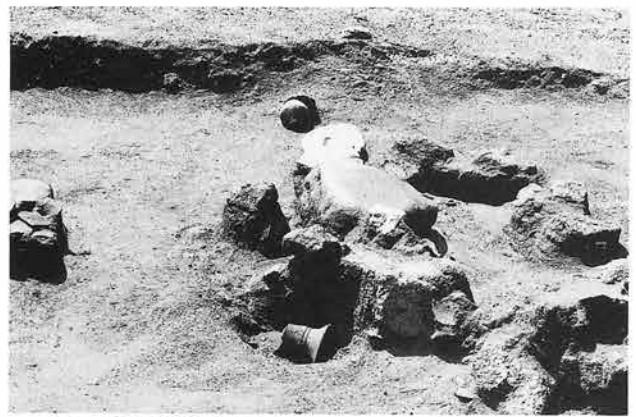
1 Y78号住居址 (東方より)



2 Y78号住居址遺物分布状況 (西方より)



1 Y78号住居址炉址（南方より）



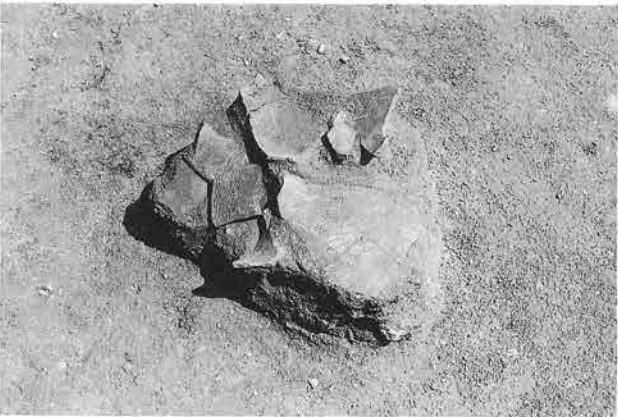
2 Y78号住居址遺物出土状況



3 Y78号住居址遺物出土状況



4 Y78号住居址遺物出土状況



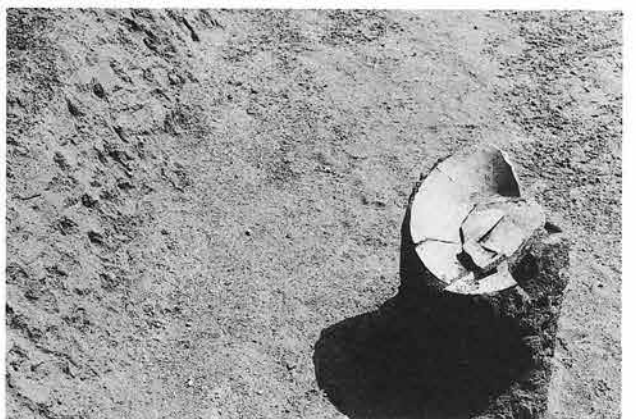
5 Y78号住居址遺物出土状況



6 Y78号住居址遺物出土状況



7 Y78号住居址遺物出土状況

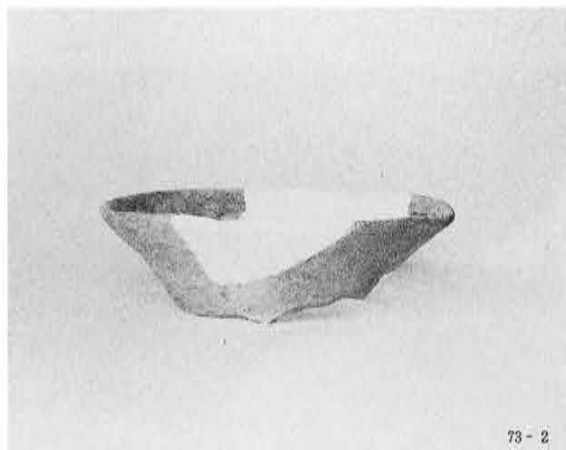


8 Y78号住居址遺物出土状況



73-1

1 Y78号住居址出土遗物



73-2

2 Y78号住居址出土遗物



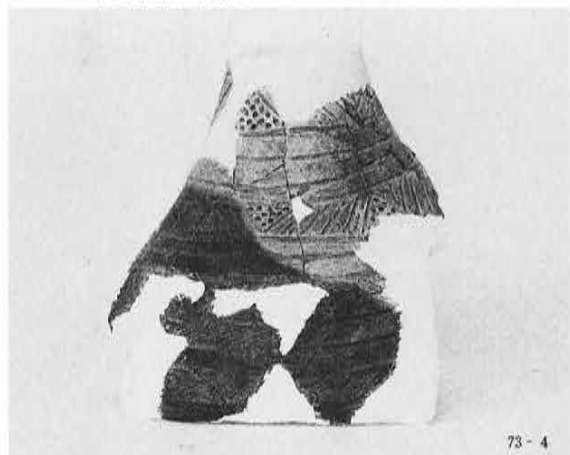
73-3

3 Y78号住居址出土遗物



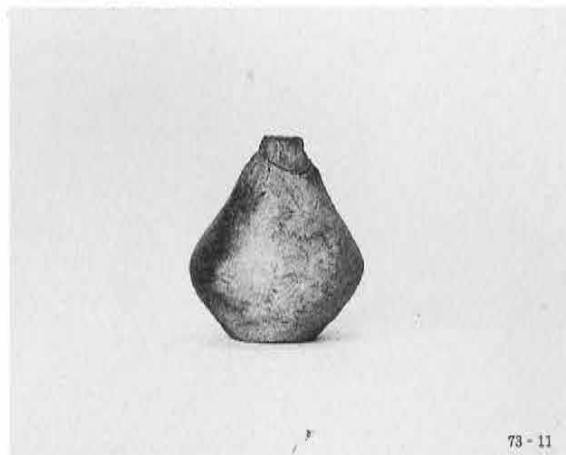
73-10

6 Y78号住居址出土遗物



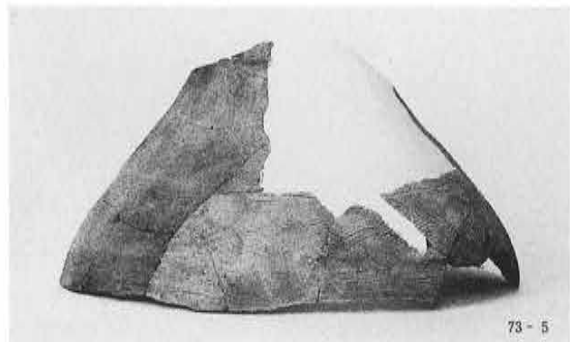
73-4

4 Y78号住居址出土遗物



73-11

7 Y78号住居址出土遗物



73-5

5 Y78号住居址出土遗物



73-18

8 Y78号住居址出土遗物



1 Y79号住居址 (東方より)



2 Y80号住居址 (西方より)



1 Y80号住居址遺物出土状況



2 Y80号住居址遺物出土状況



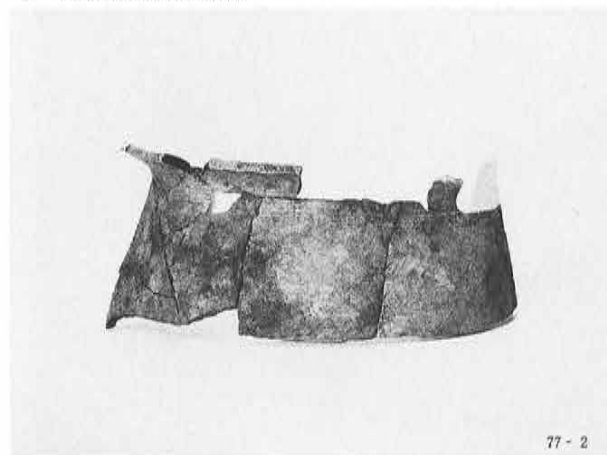
77-1

3 Y79号住居址出土遺物



81-1

6 Y80号住居址出土遺物



77-2

4 Y79号住居址出土遺物



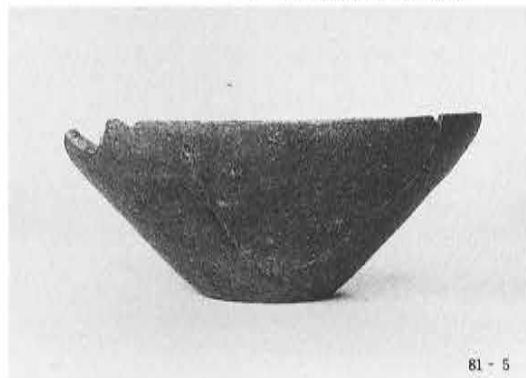
81-2

7 Y80号住居址出土遺物



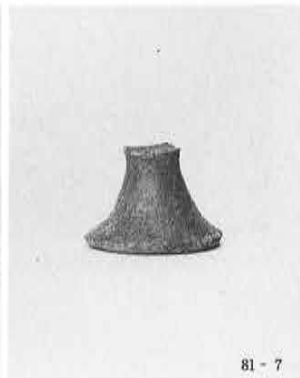
77-5

5 Y79号住居址出土遺物



81-5

8 Y80号住居址出土遺物



81-7

9 Y80号住居址出土遺物



1 Y81号住居址 (南方より)



2 Y82号住居址 (南方より)



1 Y81号住居址炉址（東方より）



2 Y82号住居址P 2内粘土



3 Y82号住居址遺物出土状況



4 Y81号住居址出土遺物



5 Y82号住居址出土遺物



6 Y82号住居址出土遺物



1 Y 83号住居址 (南方より)



2 Y 84号住居址 (北方より)



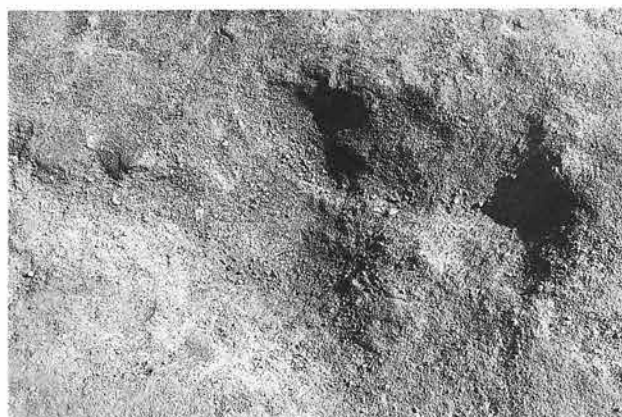
1 Y 83号住居址炉址 (南方より)



2 Y 84号住居址遺物出土状況



3 Y 85号住居址 (西方より)



4 Y 85号住居址炉址 (東方より)



1 Y 85号住居址遺物出土狀況



2 Y 85号住居址遺物出土狀況



93 - 2

3 Y 83号住居址出土遺物



96 - 4

4 Y 84号住居址出土遺物



101 - 5

5 Y 85号住居址出土遺物



101 - 6

6 Y 85号住居址出土遺物



101 - 7

7 Y 85号住居址出土遺物



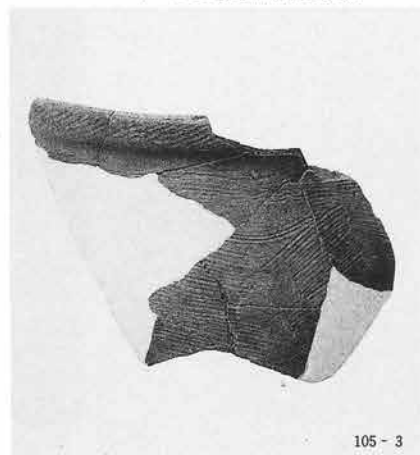
105 - 1

8 Y 86号住居址出土遺物



105 - 2

9 Y 86号住居址出土遺物

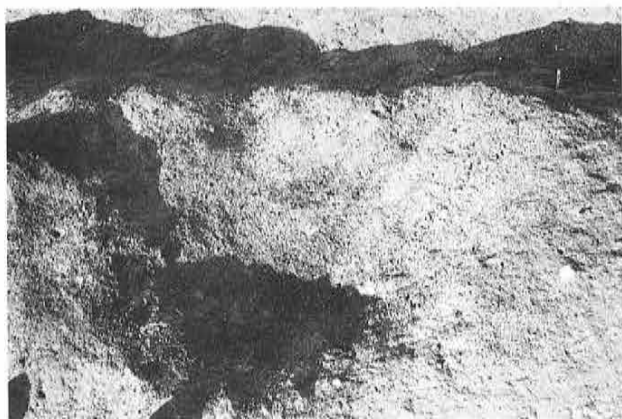


105 - 3

10 Y 86号住居址出土遺物



1 Y87号住居址 (東方より)



2 Y87号住居址炉址 (南方より)



3 Y87号住居址遺物出土状況 (銅劍?)



4 Y87号住居址出土遺物

110-4



112-1

5 Y87号住居址出土遺物



1 Y88号住居址 (南方より)



2 Y88号住居址遺物出土状況



3 Y88号住居址遺物出土状況



4 Y88号住居址出土遺物

110-1



5 Y88号住居址出土遺物

110-2



6 Y88号住居址出土遺物

110-4



1 Y89号住居址 (西方より)



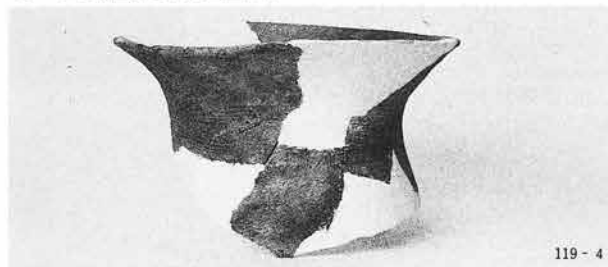
2 Y89号住居址炉址 (東方より)



3 Y89号住居址遺物出土状況



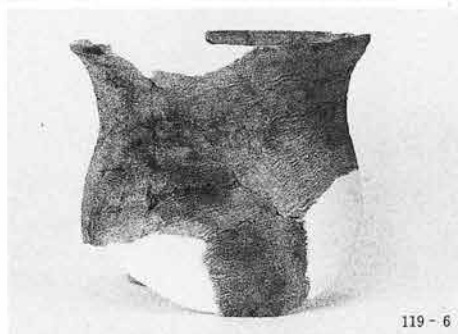
119 - 2



119 - 4



119 - 5



119 - 6



119 - 16

4 ~ 8 Y89号住居址出土遺物



1 Y90号住居址 (東方より)



2 Y90号住居址炉址1・2 (南方より)



3 Y90号住居址炉址1 (南方より)



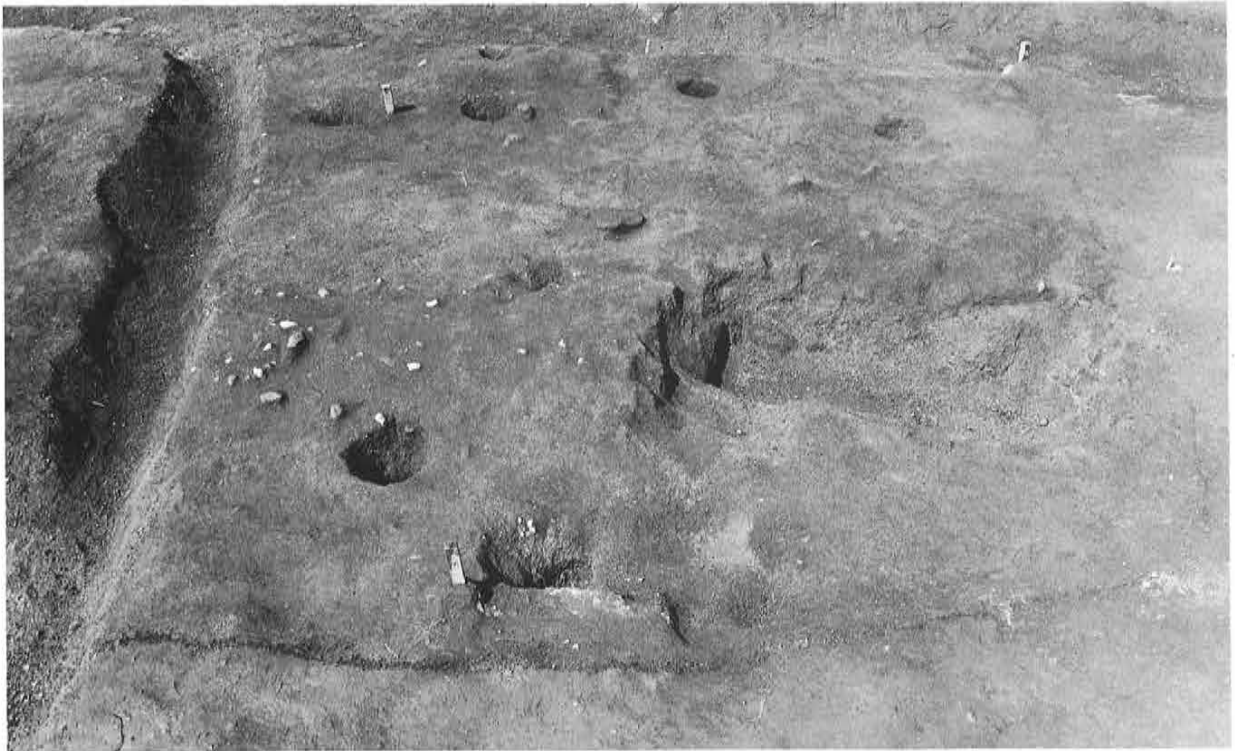
4 Y90号住居址炉址2 (南方より)



5 Y90号住居址出土遺物



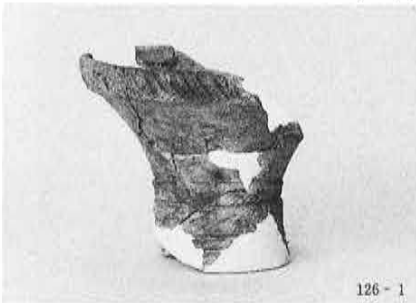
1 Y91号住居址 (西方より)



2 Y92号住居址 (南方より)



1 Y92号住居址炉址 (東方より)



126 - 1

2 Y91号住居址出土遺物



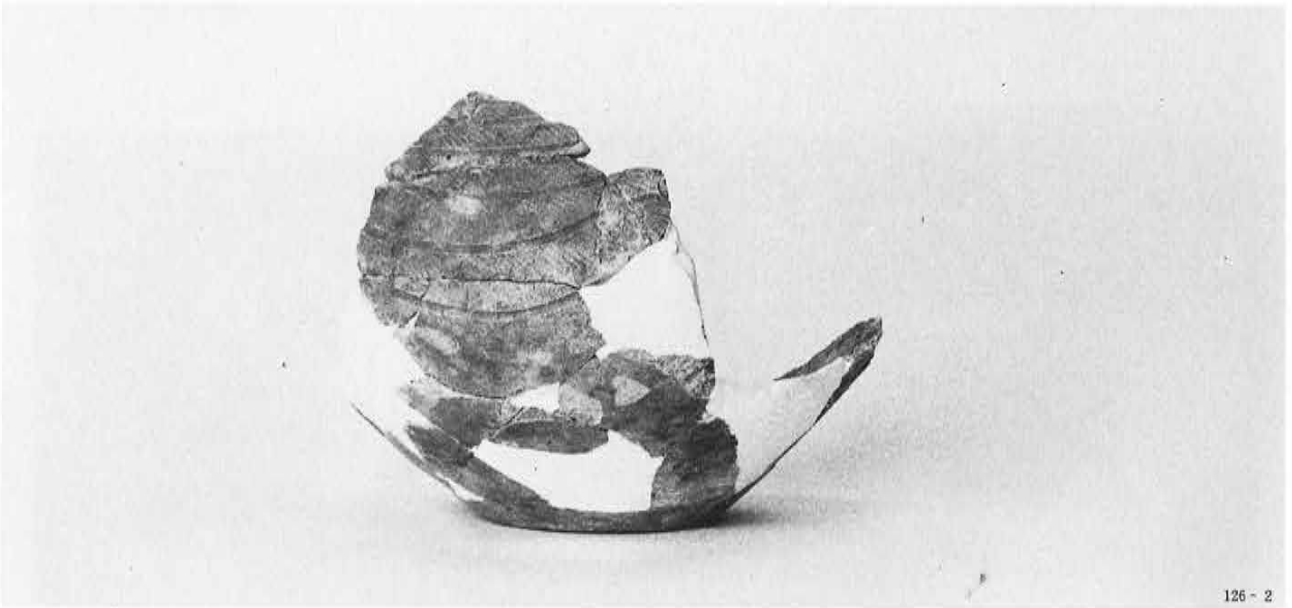
126 - 7

3 Y91号住居址出土遺物



126 - 8

4 Y91号住居址出土遺物



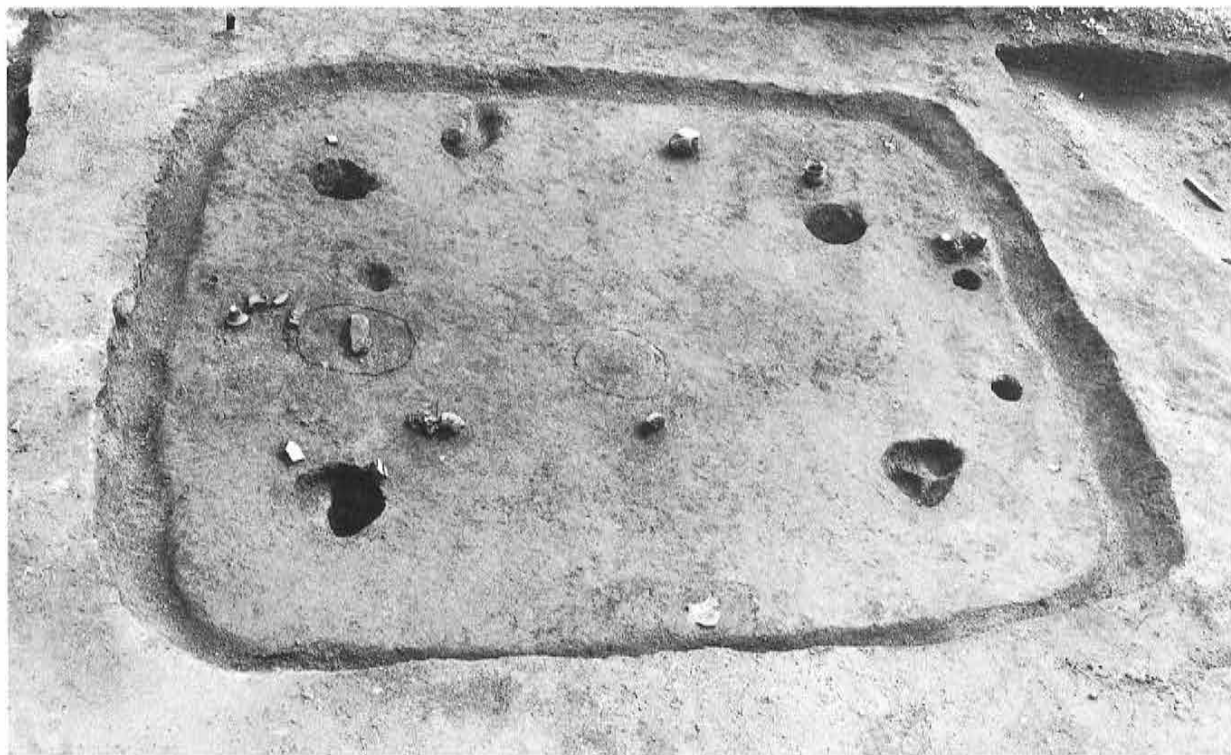
126 - 2

5 Y91号住居址出土遺物



130 - 1

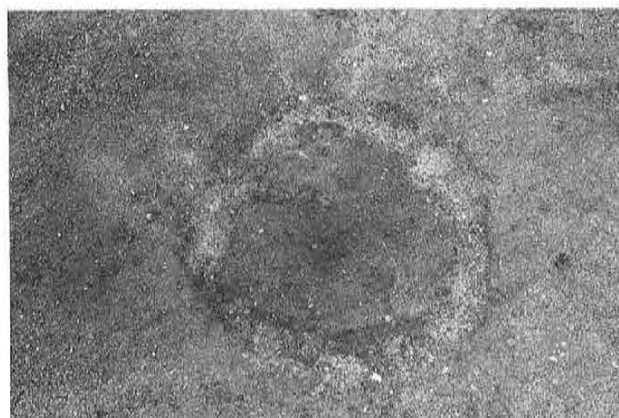
6 Y92号住居址出土遺物



1 Y93号住居址 (西方より)



2 Y93号住居址炉址1 (西方より)



3 Y93号住居址炉址2 (西方より)



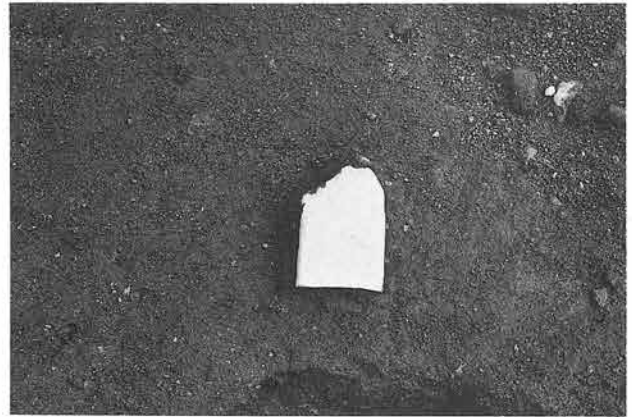
4 Y93号住居址遺物出土状況



5 Y93号住居址遺物出土状況



1 Y93号住居址遺物出土状況



2 Y93号住居址遺物出土状況



3 Y93号住居址出土遺物

135 - 2



6 Y93号住居址出土遺物

135 - 5



4 Y93号住居址出土遺物

135 - 3



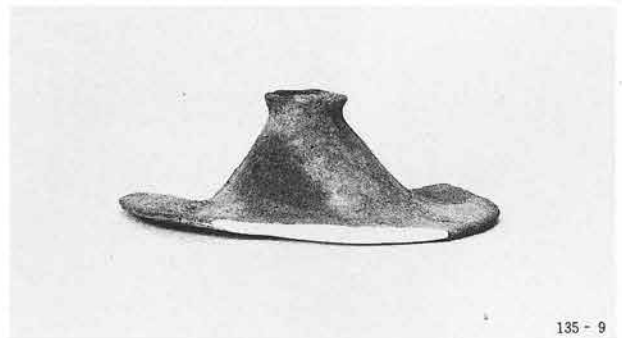
7 Y93号住居址出土遺物

135 - 7



5 Y93号住居址出土遺物

135 - 4



8 Y93号住居址出土遺物

135 - 9



1 Y94号住居址 (西方より)



2 Y95号住居址 (西方より)



1 Y94号住居址炉址（東方より）

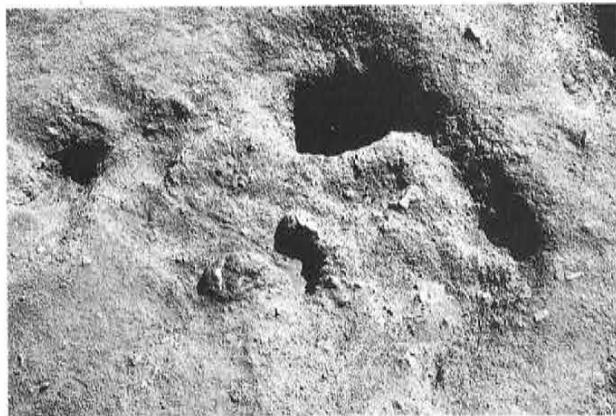


2 Y94号住居址出土遺物

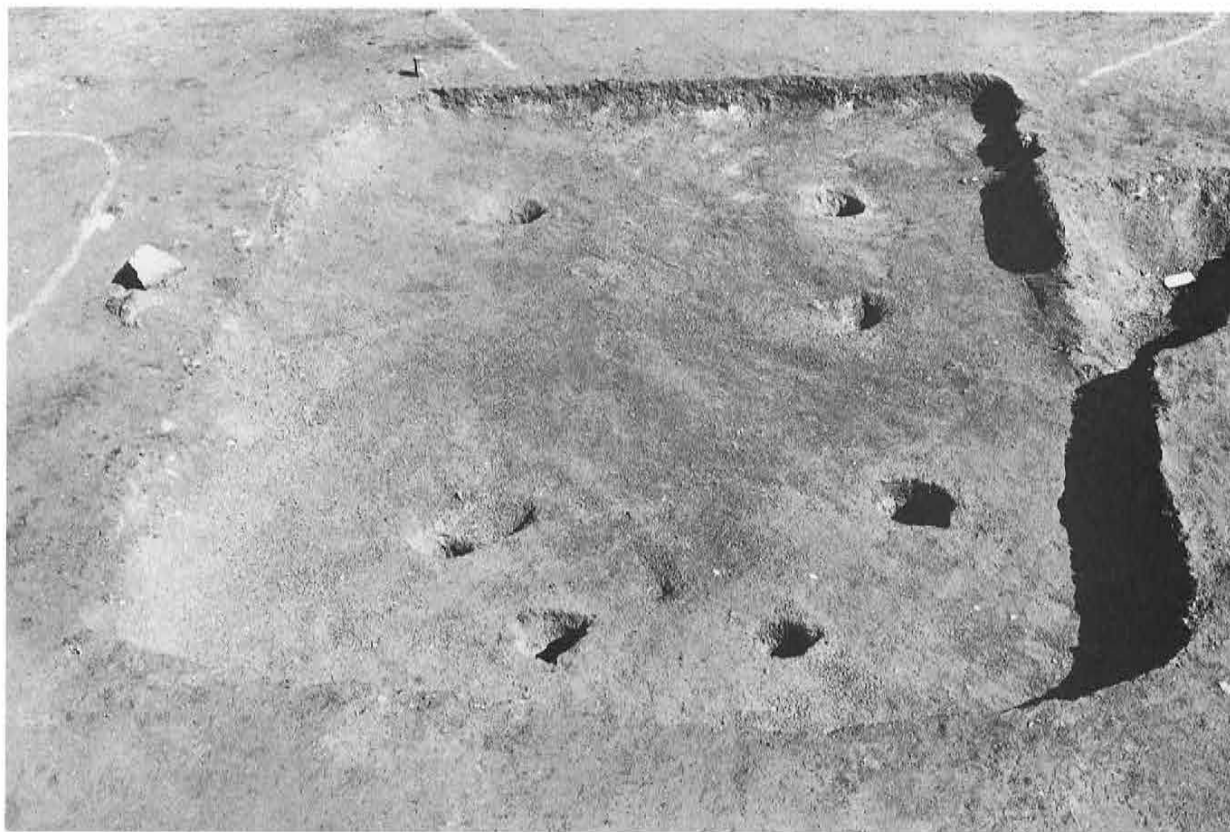
141 - 1



3 Y96号住居址（東方より）



4 Y96号住居址炉址（東方より）



1 Y97号住居址 (南方より)



2 Y97号住居址遺物分布状況 (東方より)



1 Y97号住居址遺物出土状況



2 Y97号住居址遺物出土状況



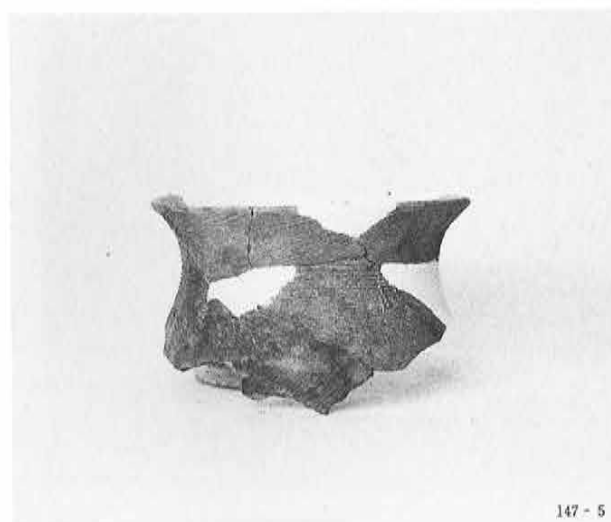
147 - 2

3 Y97号住居址出土遺物



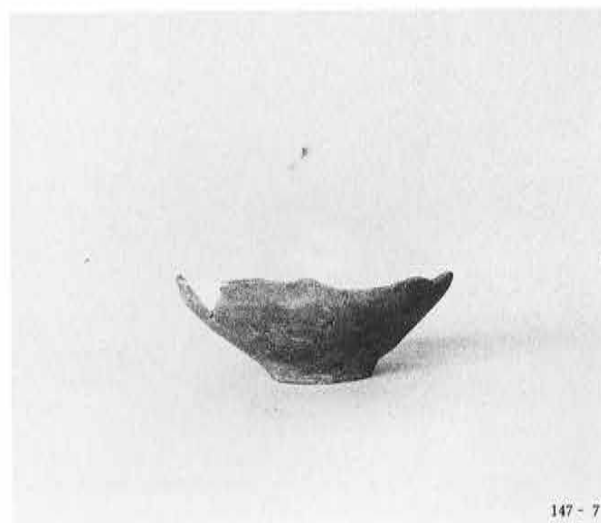
147 - 4

4 Y97号住居址出土遺物



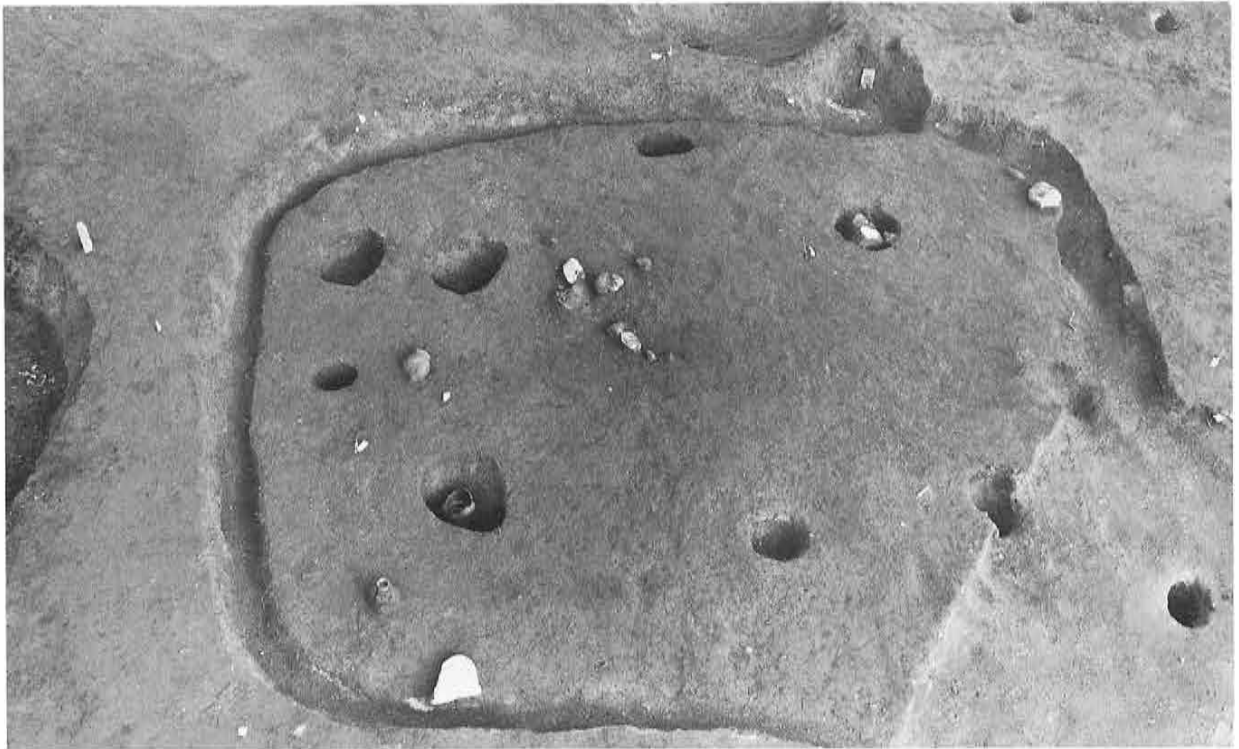
147 - 5

5 Y97号住居址出土遺物



147 - 7

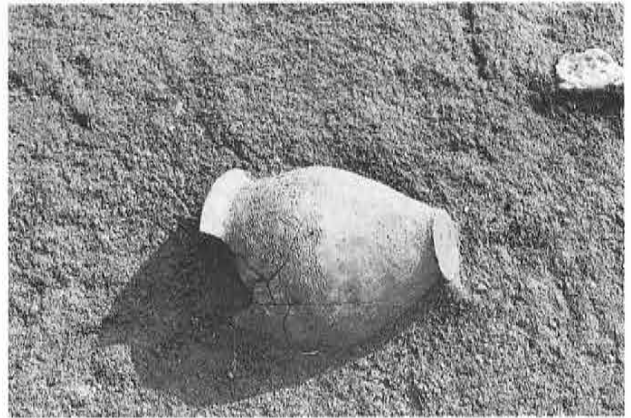
6 Y97号住居址出土遺物



1 Y98号住居址 (東方より)



2 Y98号住居址炉址 (南方より)



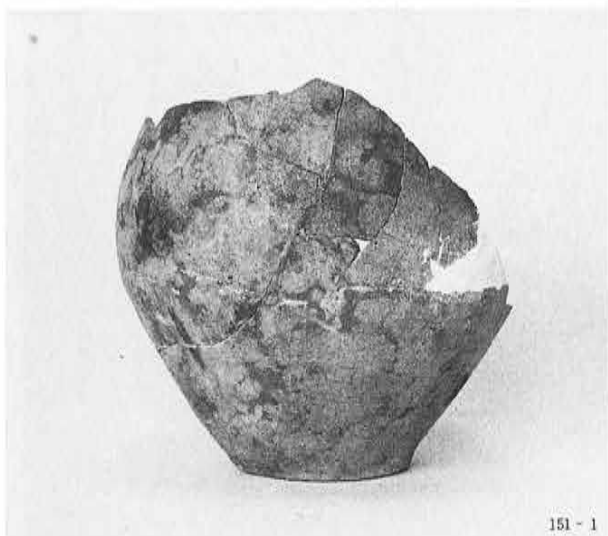
3 Y98号住居址遺物出土状況



4 Y98号住居址遺物出土状況



5 Y98号住居址遺物出土状況



1 Y 98号住居址出土遺物



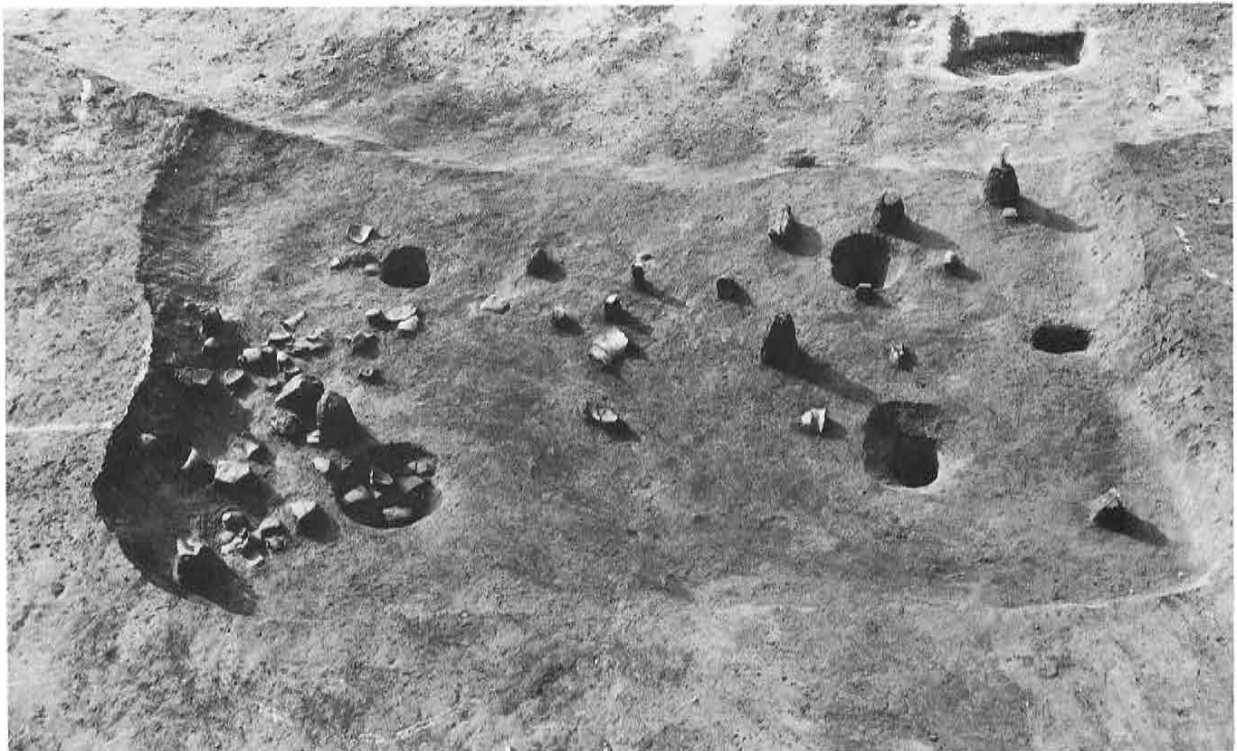
2 Y 98号住居址出土遺物



3 Y 99号住居址 (南方より)



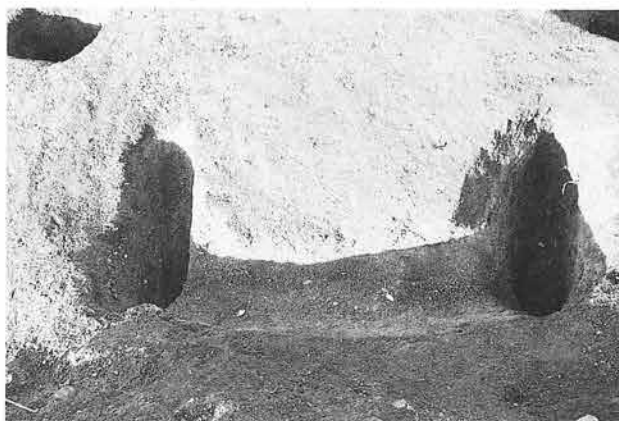
1 Y100号住居址 (南方より)



2 Y100号住居址遺物分布状況 (東方より)



1 Y100号住居址炉址（東方より）



2 Y100号住居址入口施設ピット（南方より）



3 Y100号住居址遺物出土状況



4 Y100号住居址遺物出土状況



5 Y100号住居址遺物出土状況



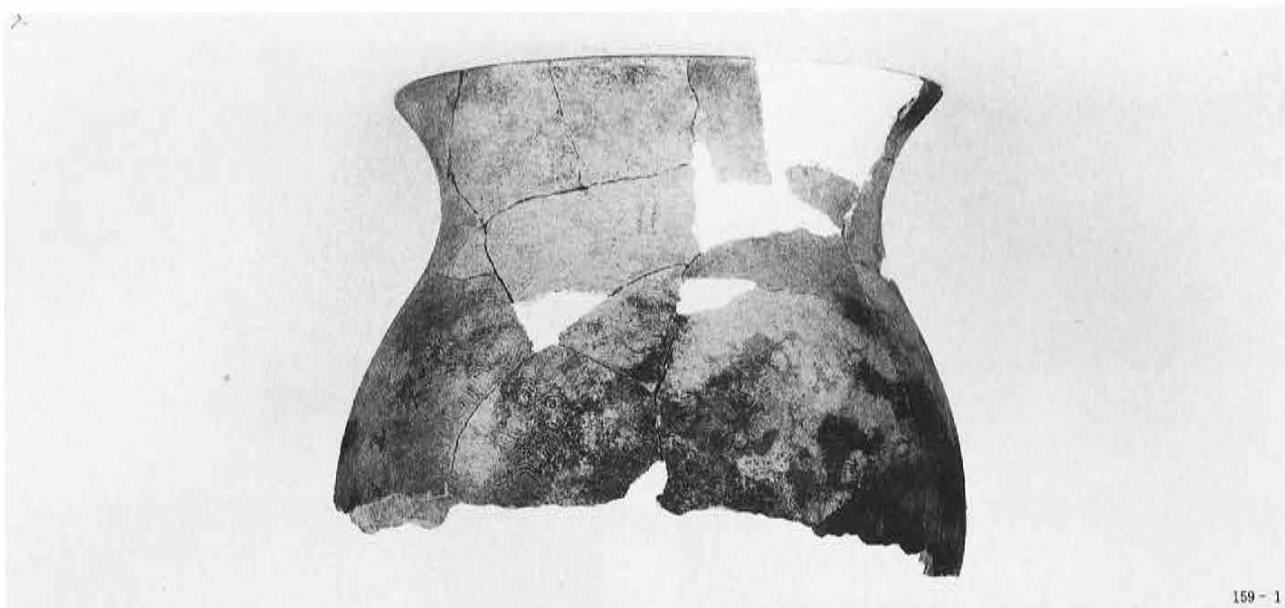
6 Y100号住居址遺物出土状況



7 Y100号住居址遺物出土状況



8 Y100号住居址遺物出土状況



159 - 1

1 Y100号住居址出土遺物



159 - 2

2 Y100号住居址出土遺物



159 - 5

3 Y100号住居址出土遺物



159 - 7

4 Y100号住居址出土遺物



159 - 8

5 Y100号住居址出土遺物



159 - 10

1 Y100号住居址出土遺物



159 - 11

2 Y100号住居址出土遺物



160 - 16

3 Y100号住居址出土遺物



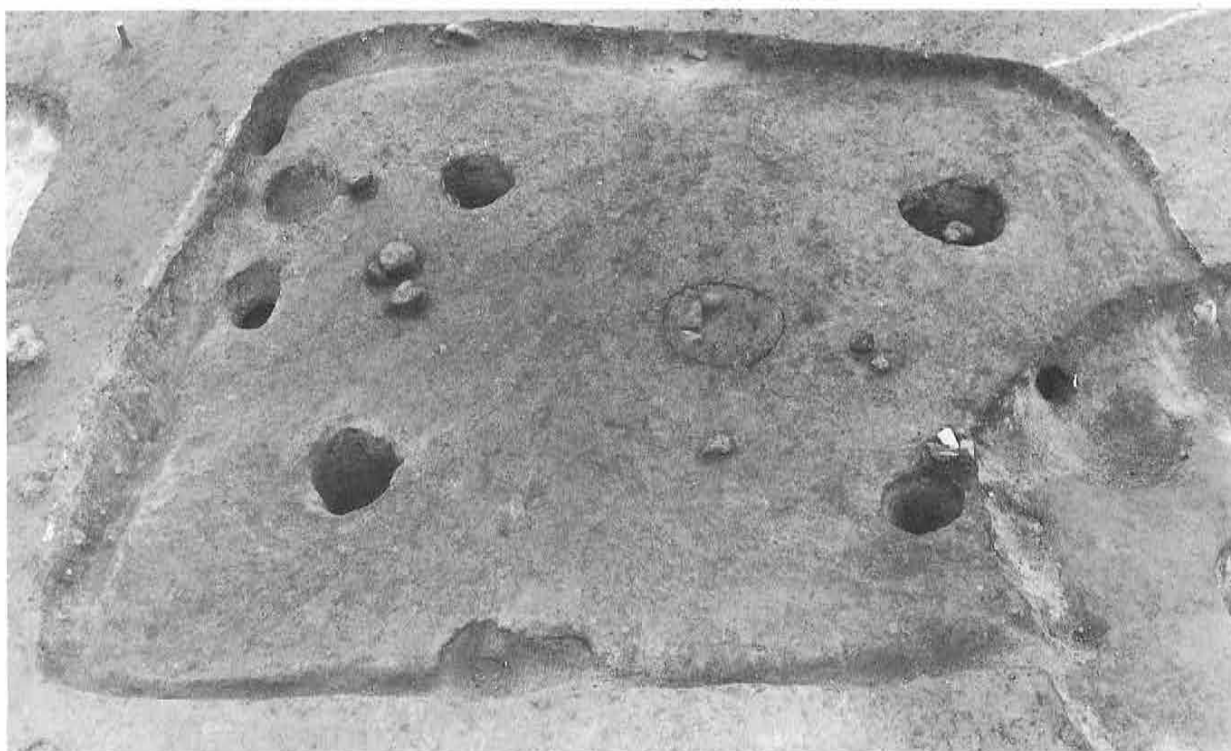
160 - 13

4 Y100号住居址出土遺物



160 - 14

5 Y100号住居址出土遺物



1 Y101号住居址（東方より）



2 Y101号住居址炉址（東方より）



3 Y101号住居址遺物出土状況



4 Y101号住居址遺物出土状況



5 Y101号住居址遺物出土状況



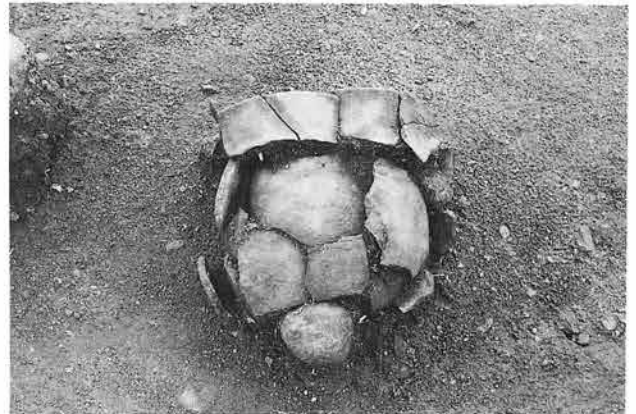
6 Y101号住居址出土遺物



1 Y102号住居址 (南方より)



2 Y102号住居址炉址 (東方より)



3 Y102号住居址遺物出土状況



4 Y102号住居址遺物出土状況



5 Y102号住居址出土遺物



1 Y 103号住居址 (南方より)



2 Y 103号住居址炉址 (南方より)



3 Y 103号住居址遺物出土状況



173 - 1



173 - 2

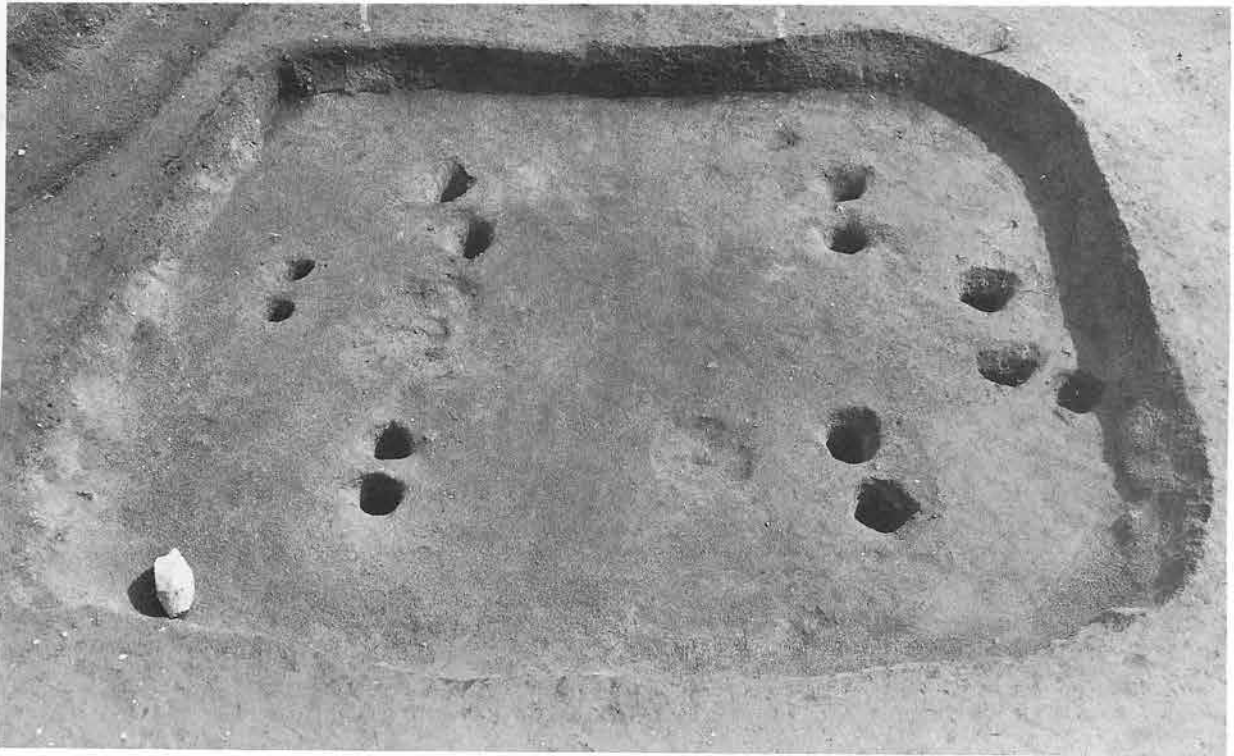
4 ~ 7 Y 103号住居址出土遺物



173 - 4



173 - 5



1 Y104号住居址 (東方より)



2 Y104号住居址遺物分布状況 (西方より)



1 Y104号住居址炉址（南方より）



2 Y104号住居址炉址（北方より）



3 Y104号住居址遺物出土状況



4 Y104号住居址遺物出土状況



5 Y104号住居址遺物出土状況



6 Y104号住居址出土遺物

177 - 4

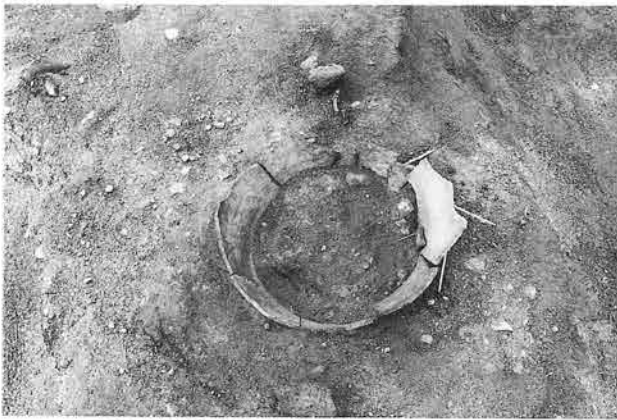


7 Y104号住居址出土遺物

177 - 1



1 Y105号住居址 (東方より)



2 Y105号住居址炉址 (東方より)



3 Y105号住居址炉址



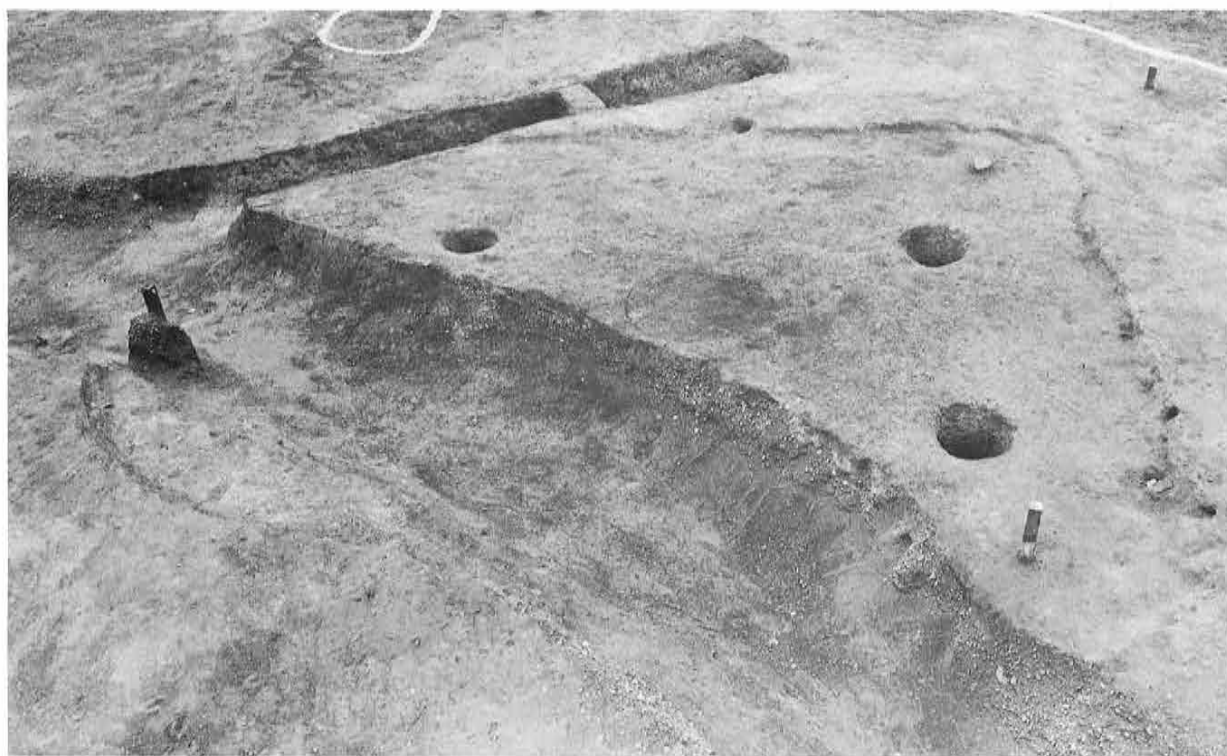
4 Y105号住居址出土遺物

181-1



5 Y105号住居址出土遺物

181-2



1 Y106号住居址 (東方より)



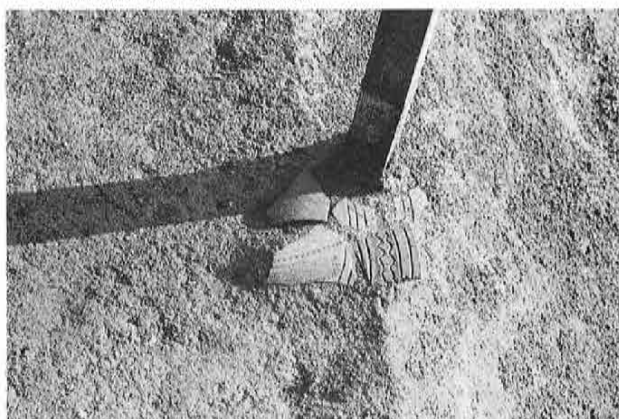
2 Y107号住居址 (南方より)



1 Y106号住居址炉址 (西方より)



2 Y107号住居址炉址 (東方より)



3 Y107号住居址遺物出土状況



4 Y107号住居址遺物出土状況



5 Y107号住居址出土遺物

189 - 1



6 Y107号住居址出土遺物

189 - 2



7 Y107号住居址出土遺物

189 - 3



8 Y107号住居址出土遺物

189 - 4



1 Y108号住居址（西方より）



2 Y109号住居址（南方より）



1 Y109号住居址遺物分布状況（南方より）



2 Y108号住居址炉址（東方より）



3 Y109号住居址（南方より）



4 Y109号住居址遺物出土状況



5 Y109号住居址出土遺物

196-1



6 Y109号住居址出土遺物

196-3



1 Y111号住居址 (北方より)

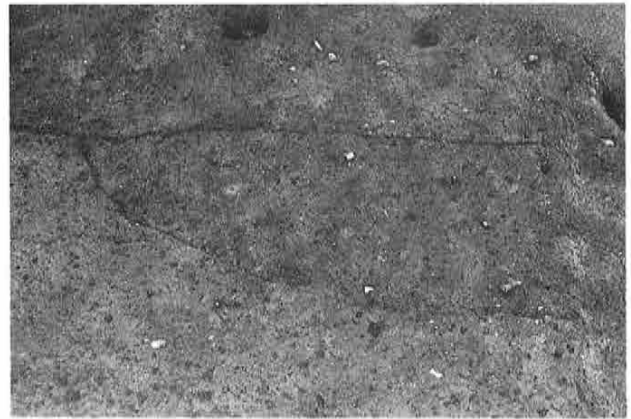


2 Y111号住居址出土遺物

202 - 1



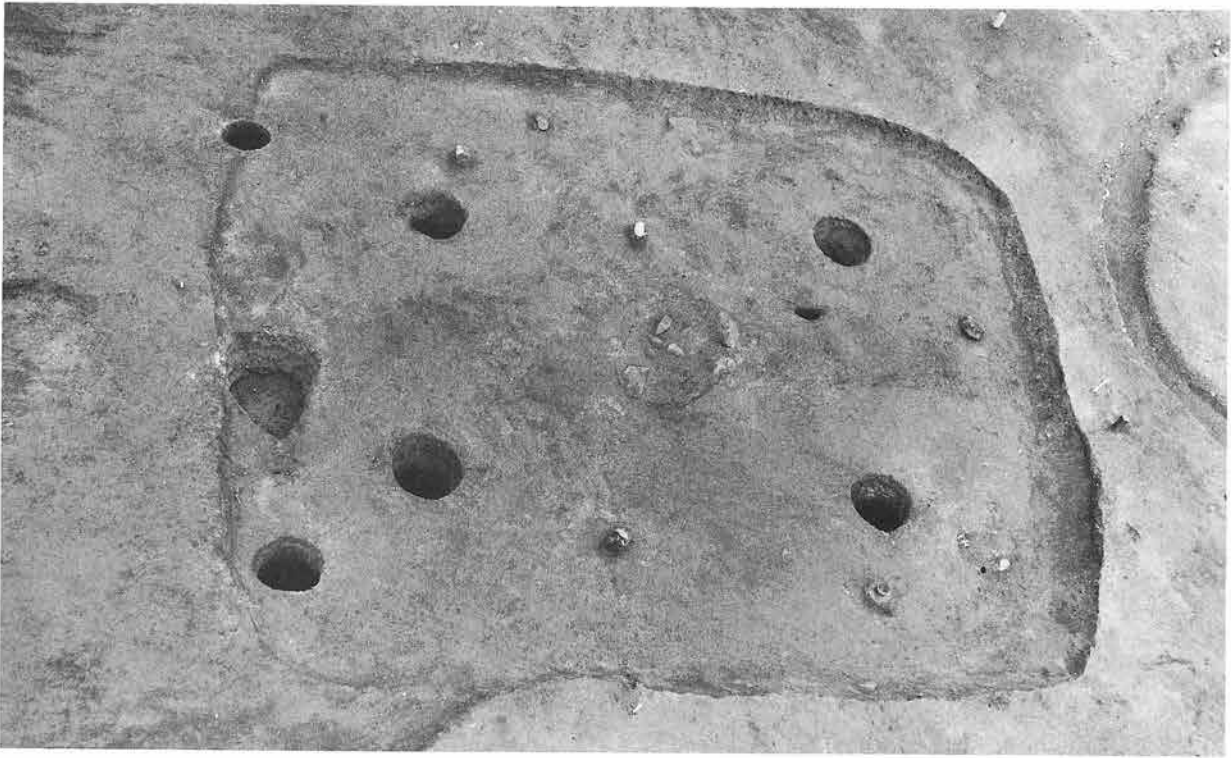
3 Y112号住居址 (西方より)



4 Y113号住居址 (東方より)



1 Y114号住居址 (東方より)



2 Y115号住居址 (東方より)



1 Y114号住居址炉址 (北方より)



2 Y115号住居址炉址 (北方より)



213 - 1

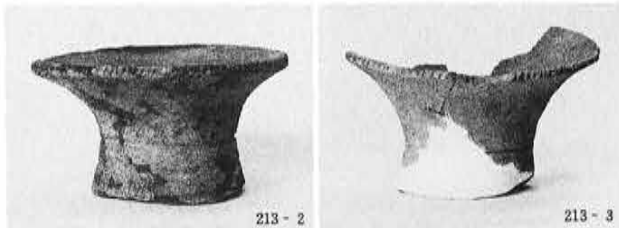
6 Y115号住居址出土遺物



3 Y115号住居址壺棺検出前



4 Y115号住居址壺棺検出状況



213 - 2

213 - 3

7・8 Y115号住居址出土遺物



213 - 4

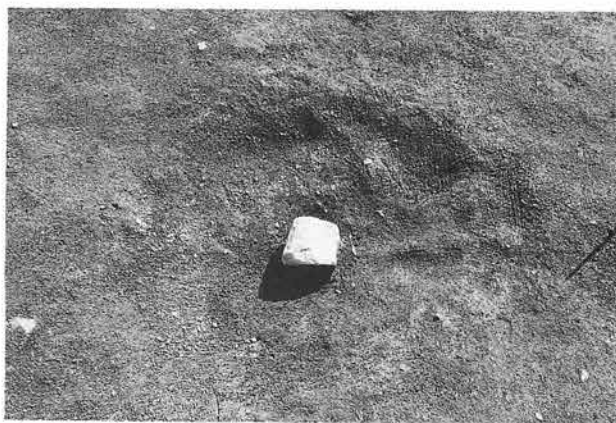
9 Y115号住居址出土遺物



5 Y115号住居址遺物出土状況



1 Y116号住居址 (南方より)



2 Y116号住居址炉址 (北方より)



3 Y116号住居址出土遺物

218 - 3



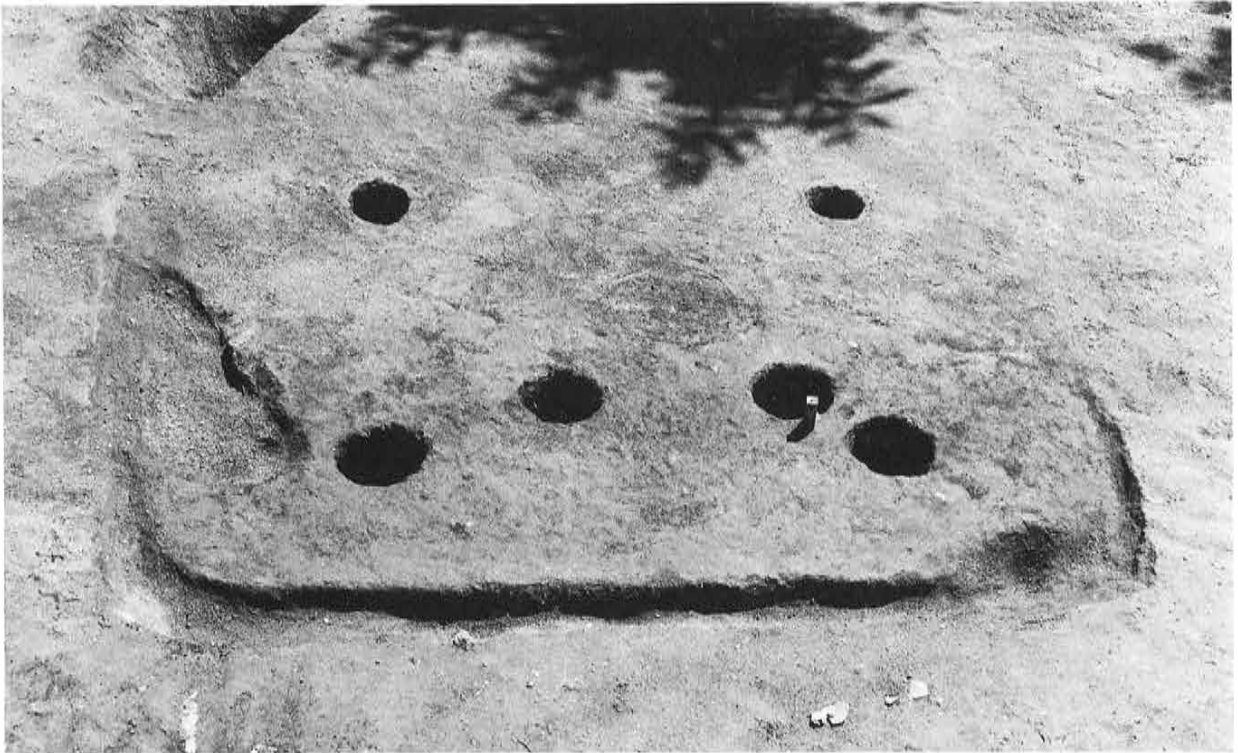
4 Y116号住居址出土遺物

218 - 4



5 Y116号住居址出土遺物

218 - 5



1 Y117号住居址 (北方より)



2 Y118号住居址 (東方より)



1 Y 119号住居址 (南方より)



2 Y 120号住居址 (北方より)



1 Y120号住居址遺物出土狀況



2 Y120号住居址遺物出土狀況



3 Y120号住居址出土遺物



4 Y120号住居址出土遺物



5 Y120号住居址出土遺物



6 Y120号住居址出土遺物



1 Y121号住居址 (南方より)



2 Y121号住居址遺物分布状況 (東方より)



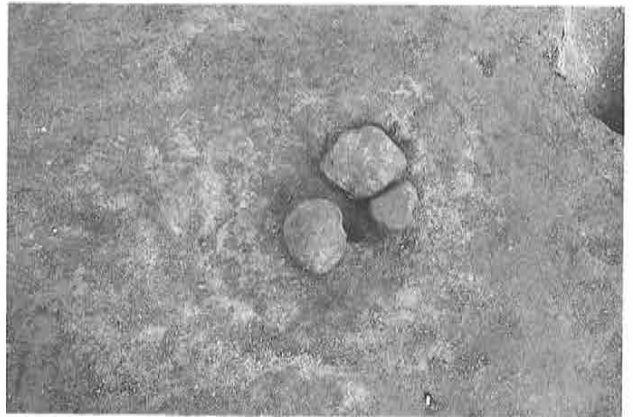
1 Y122号住居址 (南方より)



2 Y121・122号住居址完掘 (南方より)



1 Y121号住居址炭化物検出状況



2 Y122号住居址炉址



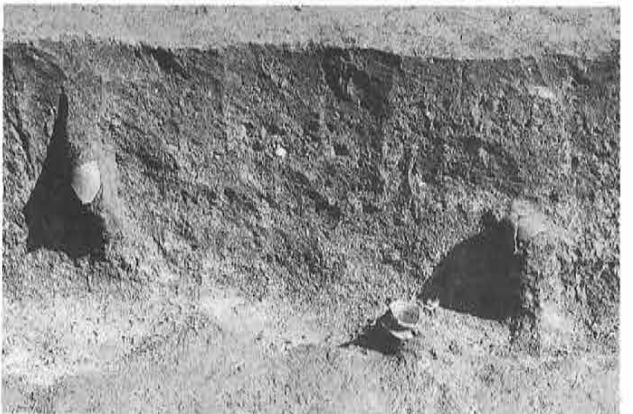
3 Y122号住居址遺物出土状況



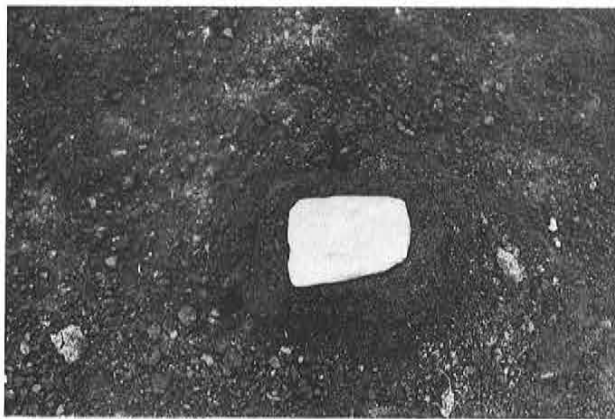
4 Y122号住居址遺物出土状況



5 Y122号住居址遺物出土状況



6 Y122号住居址遺物出土状況



7 Y122号住居址遺物出土状況



234 - 1



234 - 2

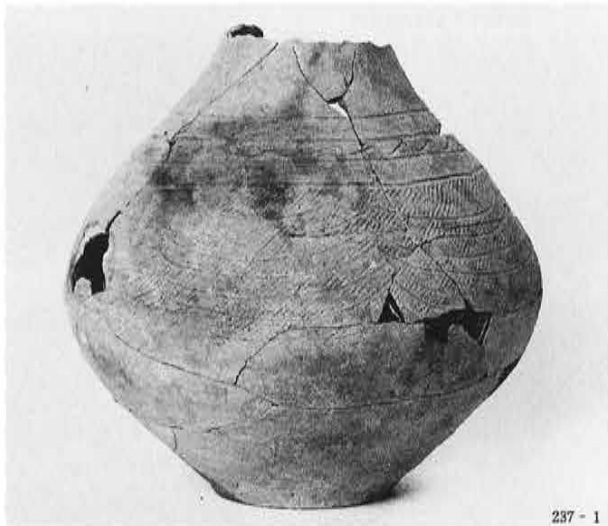


234 - 4



234 - 6

1 ~ 4 Y121号住居址出土遺物



237 - 1



237 - 2

5 Y122号住居址出土遺物

6 Y122号住居址出土遺物



1 Y123号住居址（南方より）



2 Y123号住居址遺物出土状況



3 Y123号住居址出土遺物

242 - 1



4 Y123号住居址出土遺物

242 - 2



1 Y124号住居址 (西方より)



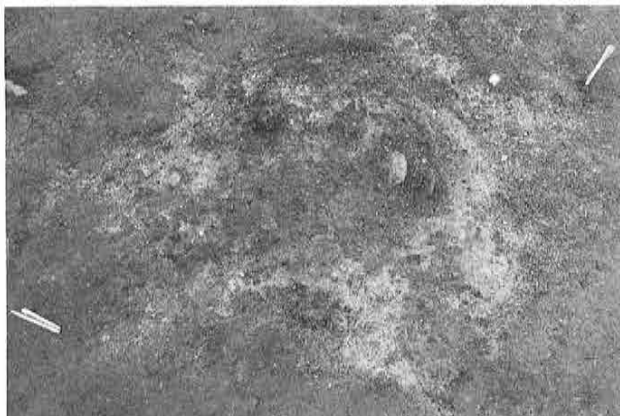
2 Y125号住居址 (西方より)



1 Y124号住居址炉址（西方より）



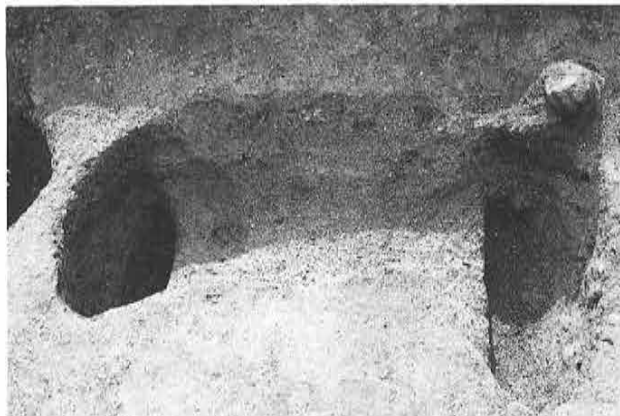
2 Y125号住居址炉址1・2・3検出状況（北方より）



3 Y125号住居址炉址1（西方より）



4 Y125号住居址炉址2（北方より）



5 Y125号住居址入口施設ピット



6 Y125号住居址出土遺物

249 - 8



7 Y125号住居址出土遺物

249 - 9



1 Y126号住居址 (南方より)



2 Y126号住居址炉址 (東方より)



3 Y126号住居址遺物出土状況

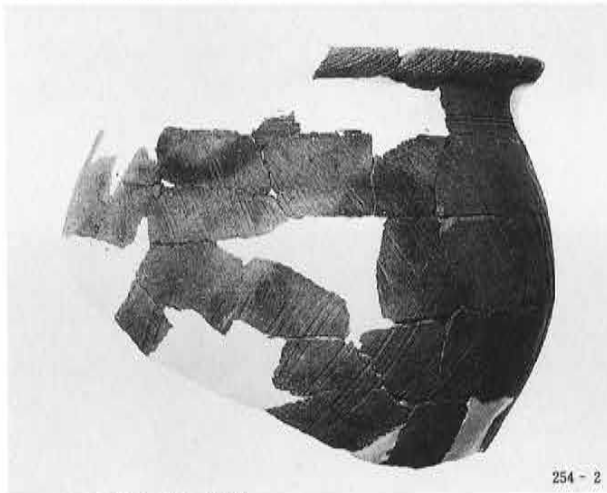


4 Y126号住居址遺物出土状況



254 - 1

1 Y126号住居址出土遺物



254 - 2

2 Y126号住居址出土遺物



254 - 6

3 Y126号住居址出土遺物



254 - 8

4 Y126号住居址出土遺物



254 - 13

5 Y126号住居址出土遺物



254 - 14

6 Y126号住居址出土遺物

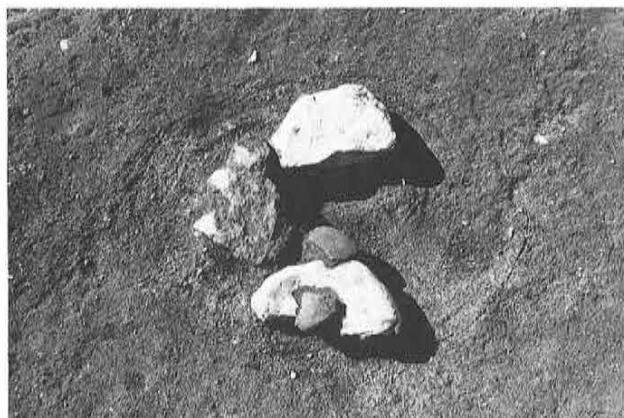


256 - 1

7 Y126号住居址出土遺物



1 Y127号住居址 (北方より)



2 Y127号住居址炉址 (東方より)



3 Y127号住居址遺物出土状況



260 - 1

4 Y127号住居址出土遺物



260 - 2

5 Y127号住居址出土遺物



260 - 6

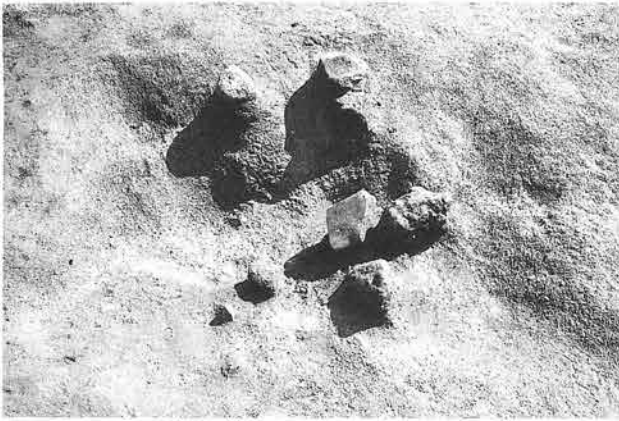
6 Y127号住居址出土遺物



1 Y128号住居址（東方より）



2 Y128号住居址遺物分布状況（西方より）



1 Y 128号住居址炉址 (北方より)

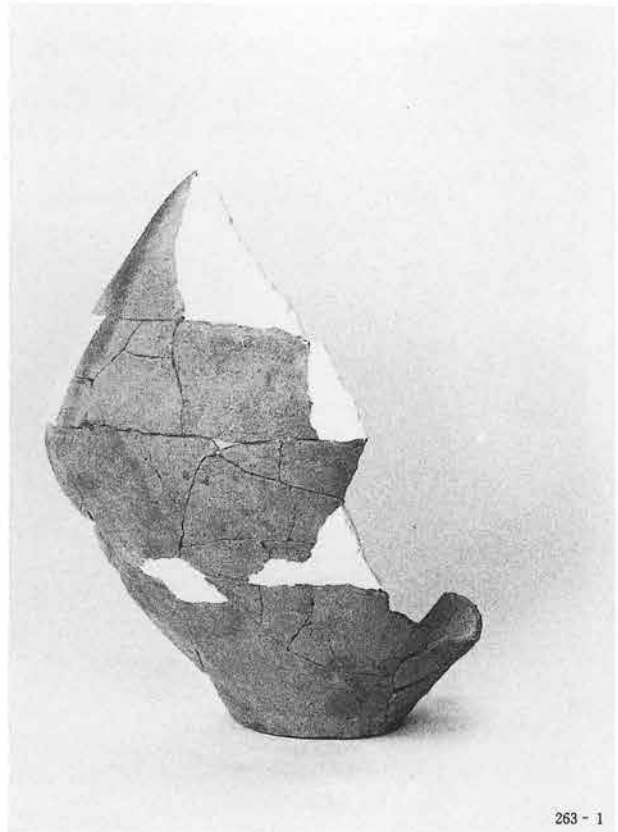


263 - 2



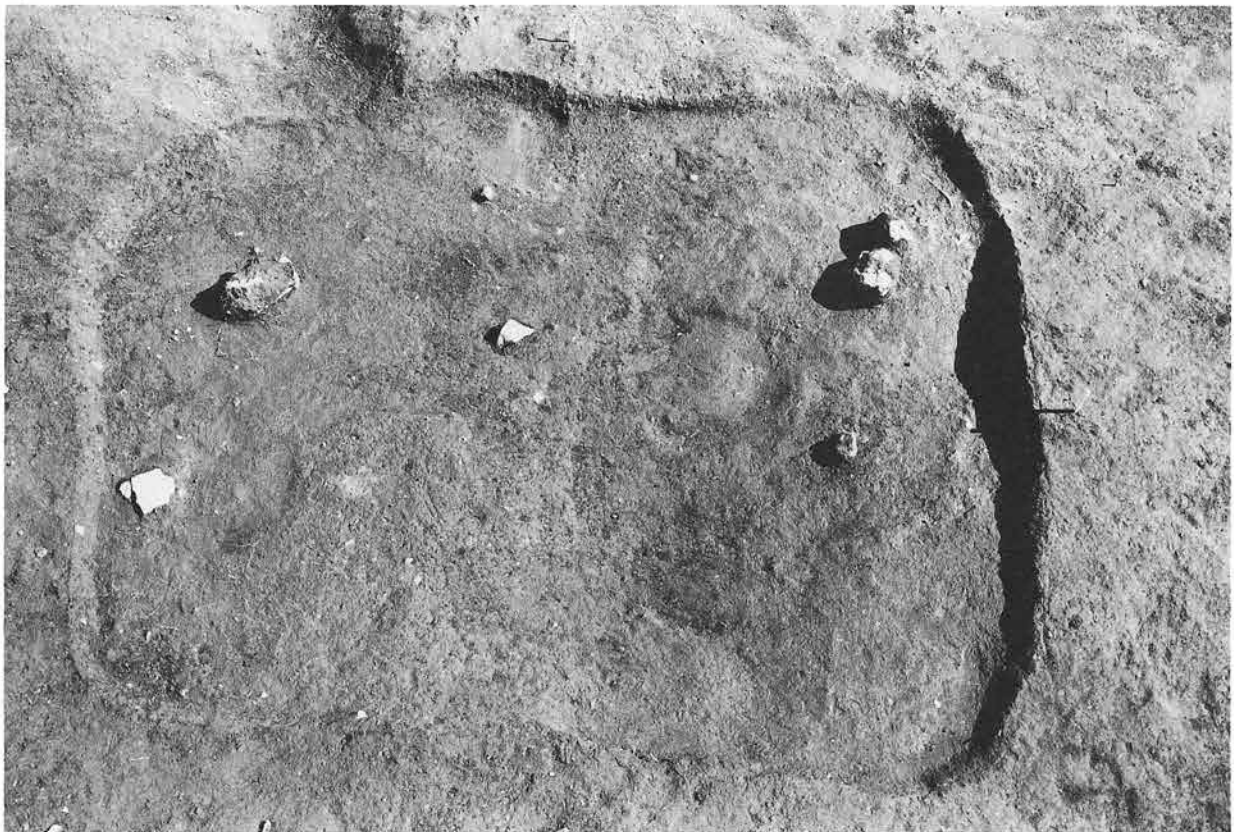
263 - 3

2 ~ 3 Y 128号住居址出土遺物



263 - 1

4 Y 128号住居址出土遺物



5 Y 129号住居址 (東方より)



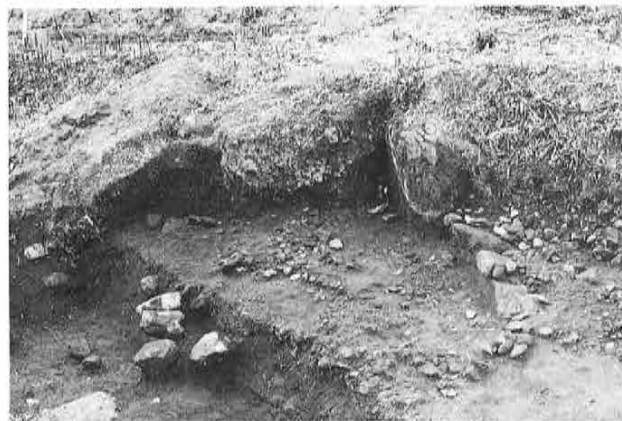
1 北西ノ久保2号古墳遠景(南西方向より)



2 北西ノ久保2号古墳遠景(南西方向より)



3 北西ノ久保2号古墳周辺遠景(南方より)



4 北西ノ久保2号古墳石室検出状況(南東方向より)



5 北西ノ久保2号古墳(南東方向より)



6 北西ノ久保2号古墳(北方より)



7 北西ノ久保2号古墳石室内棺床検出状況



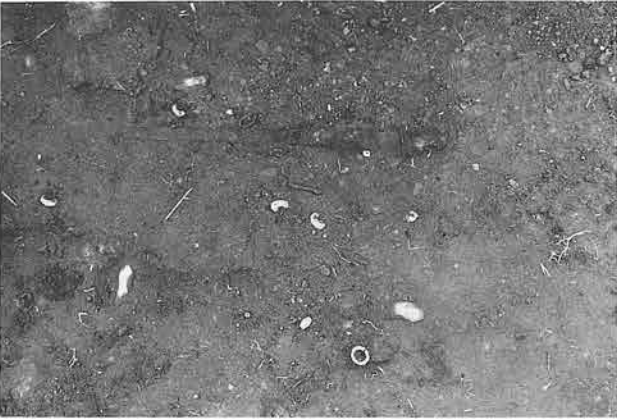
8 北西ノ久保2号古墳周境?



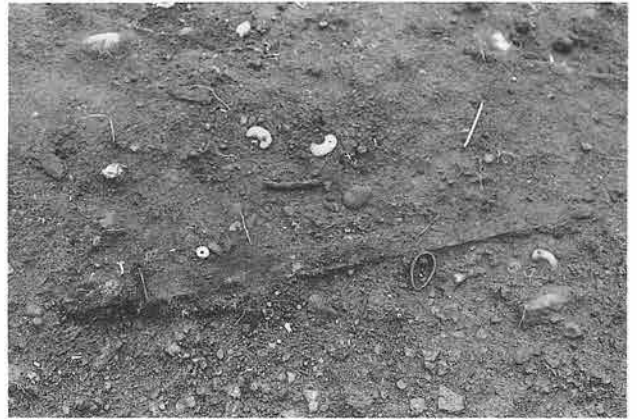
1 石室内遺物分布状況



2 棺床上人骨検出状況



3 石室内遺物検出状況



4 石室内遺物検出状況



5 石室内遺物検出状況



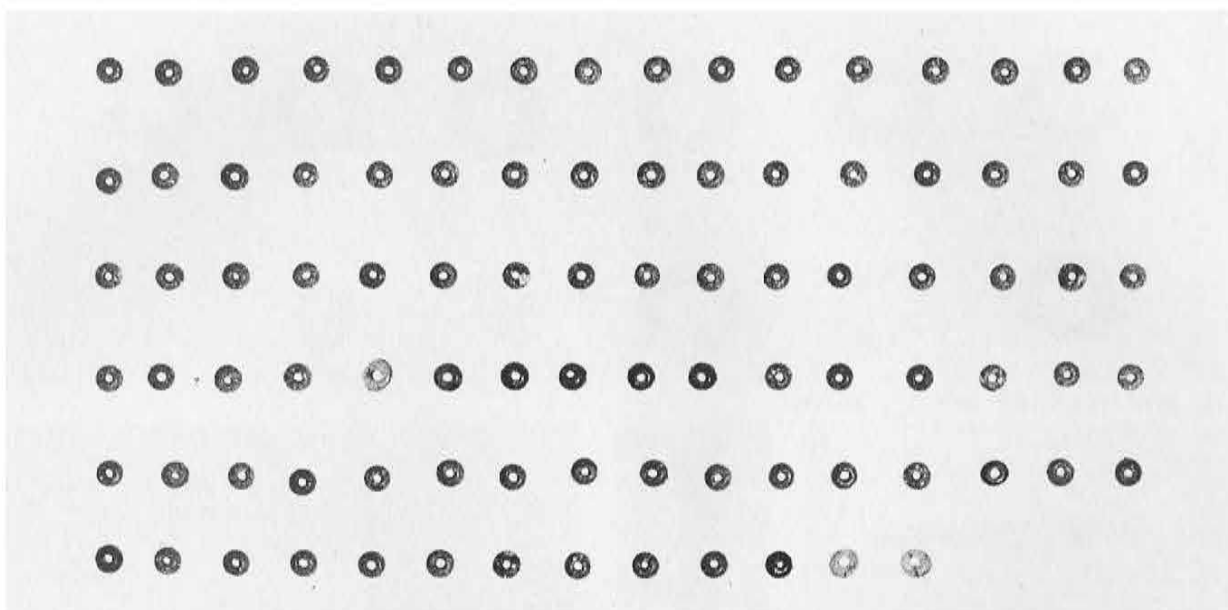
6 石室内遺物検出状況



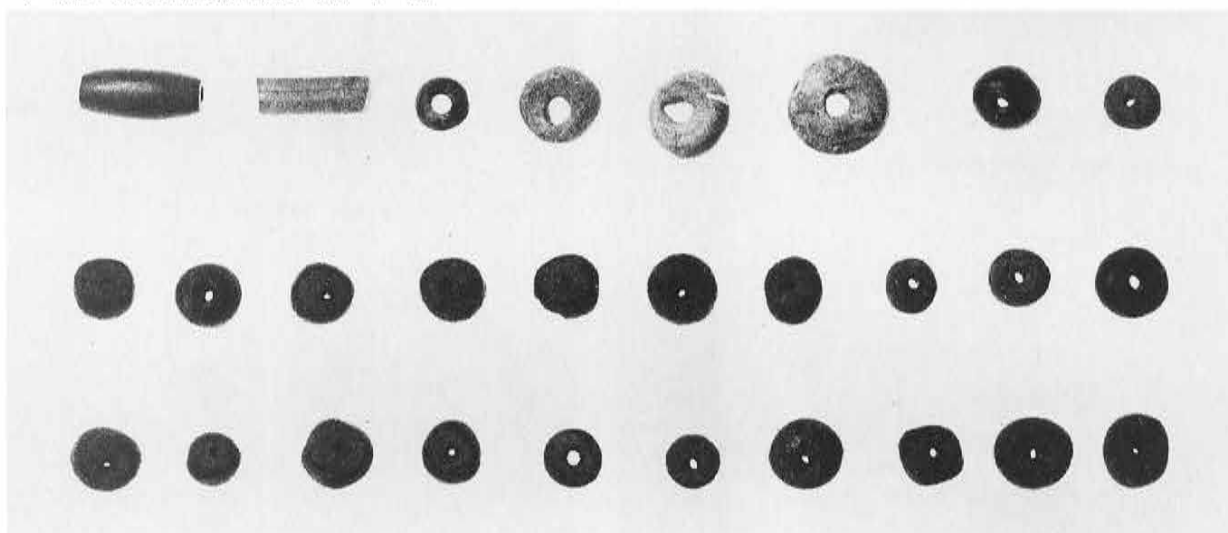
7 石室内遺物検出状況



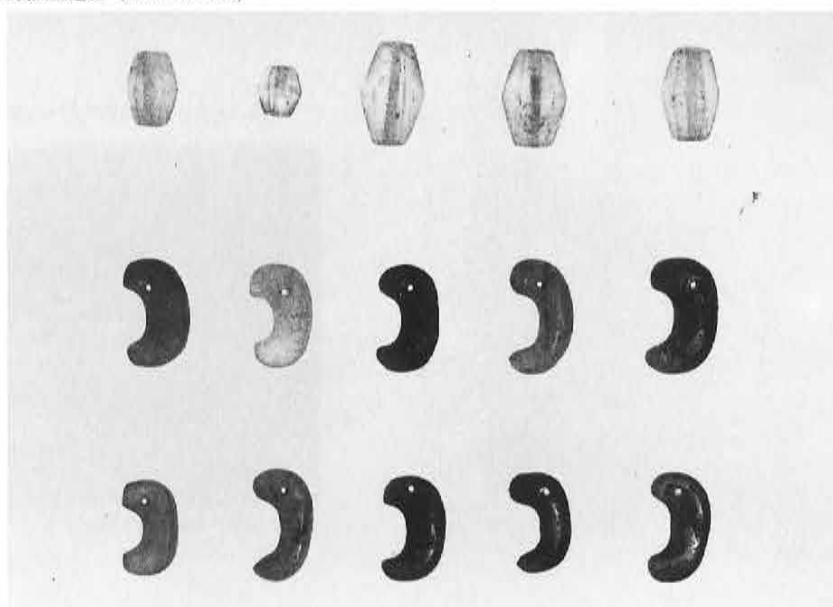
8 石室内遺物検出状況



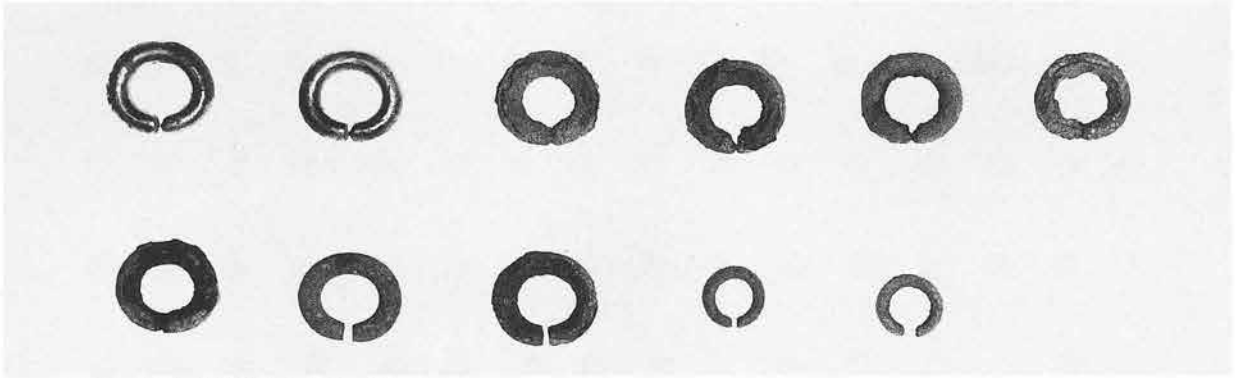
1 北西ノ久保2号古墳出土遺物 (282-1~94)



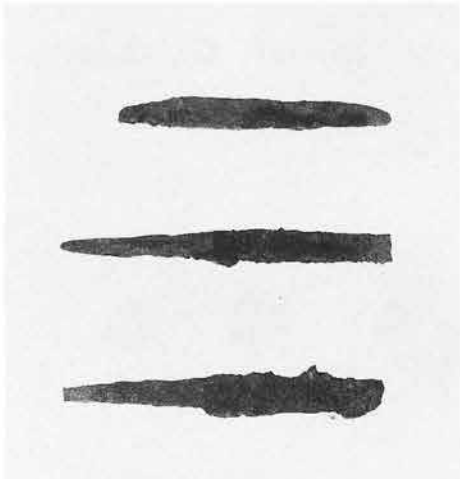
2 北西ノ久保2号古墳出土遺物 (282-95~122)



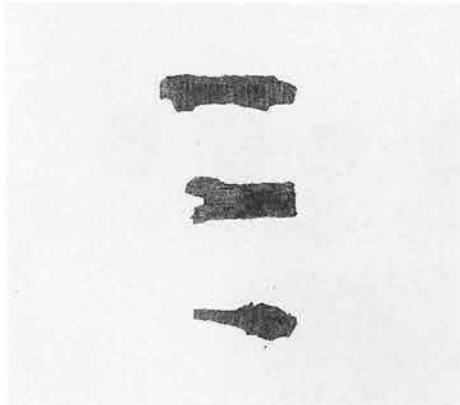
3 北西ノ久保2号古墳出土遺物 (282-123~137)



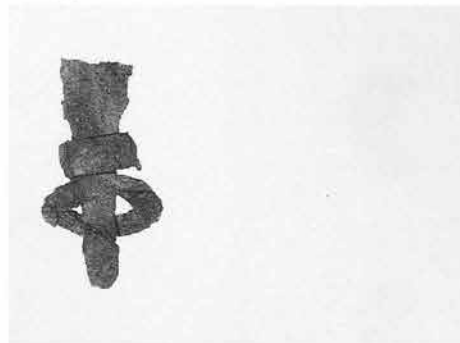
1 北西ノ久保2号古墳出土遺物 (282-138~148)



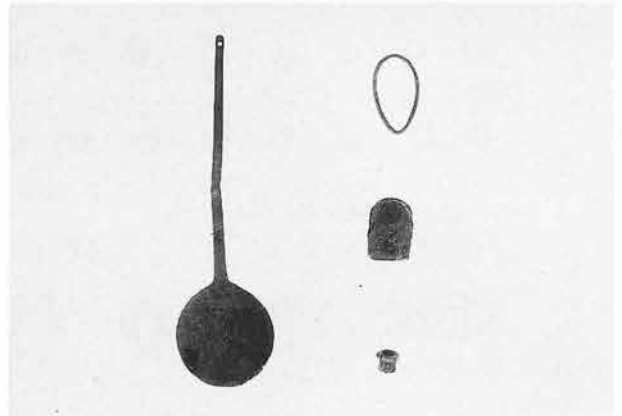
2 北西ノ久保2号古墳出土遺物 (283-5・6・7)



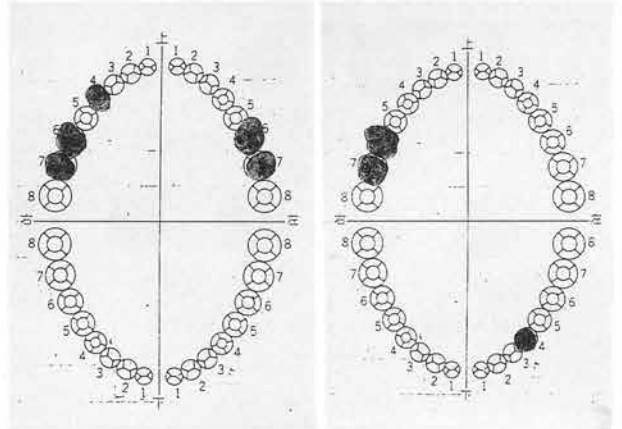
3 北西ノ久保2号古墳出土遺物 (283-11・17・12)



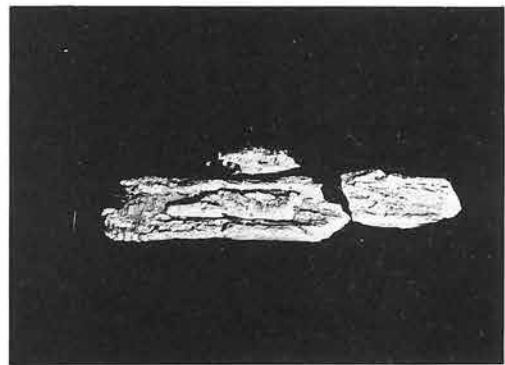
4 北西ノ久保2号古墳出土遺物 (283-4・1)



5 北西ノ久保2号古墳出土遺物 (283-22・21・23・24)



6・7 北西ノ久保2号古墳出土の人の歯



8 北西ノ久保2号古墳出土人骨



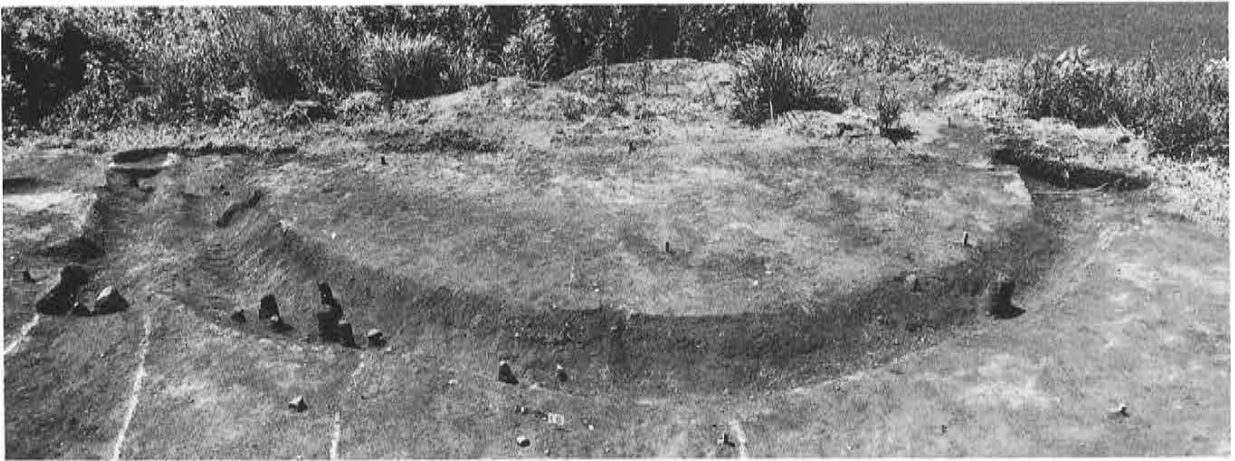
1 第7・8・9号周溝 (北方より)



2 第7号周溝 (東方より)



3 第8号周溝 (北西より)



4 第9号周溝 (北方より)



5 第8号周溝遺物出土状況



1 第10号周湟（北東より）



2 第10号周湟礫検出状況



3 第10号周湟礫検出状況



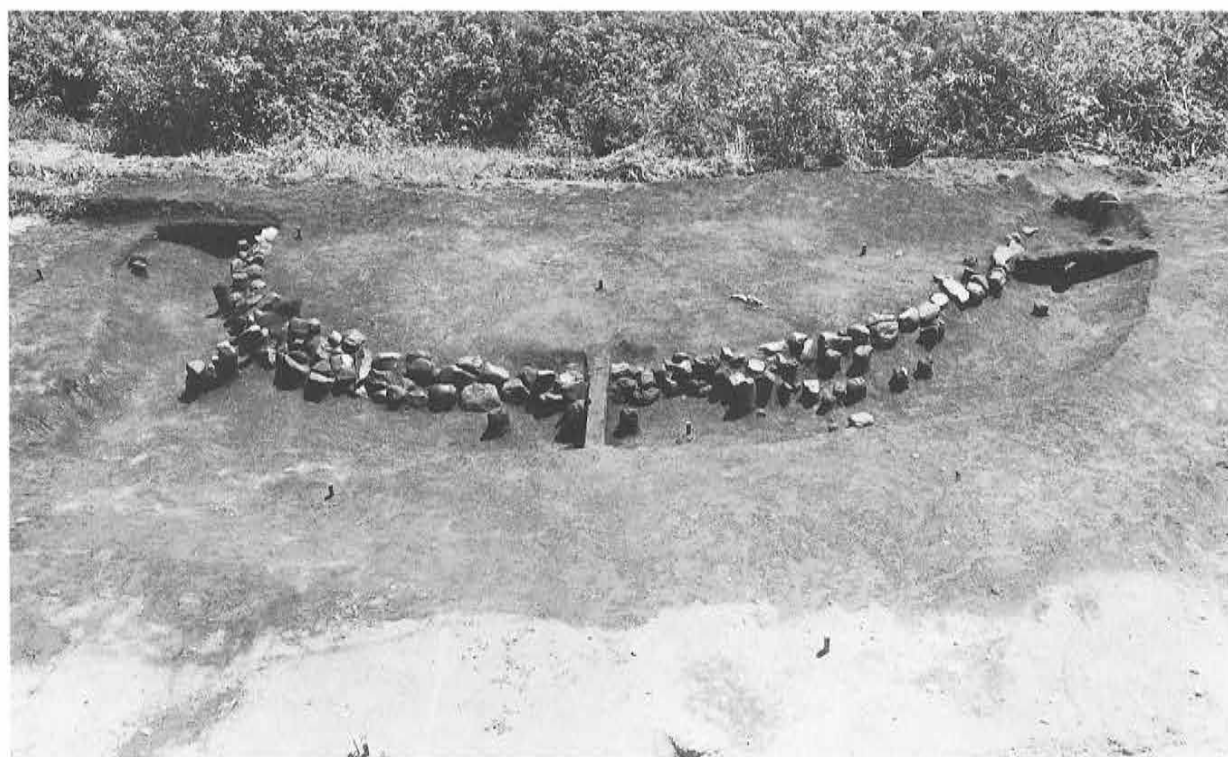
4 第10号周湟礫検出状況



5 第10号周湟遺物出土状況



1 第11号周溝 (北西より)



2 第12号周溝 (東方より)



1 第12号周湮葺石検出状況



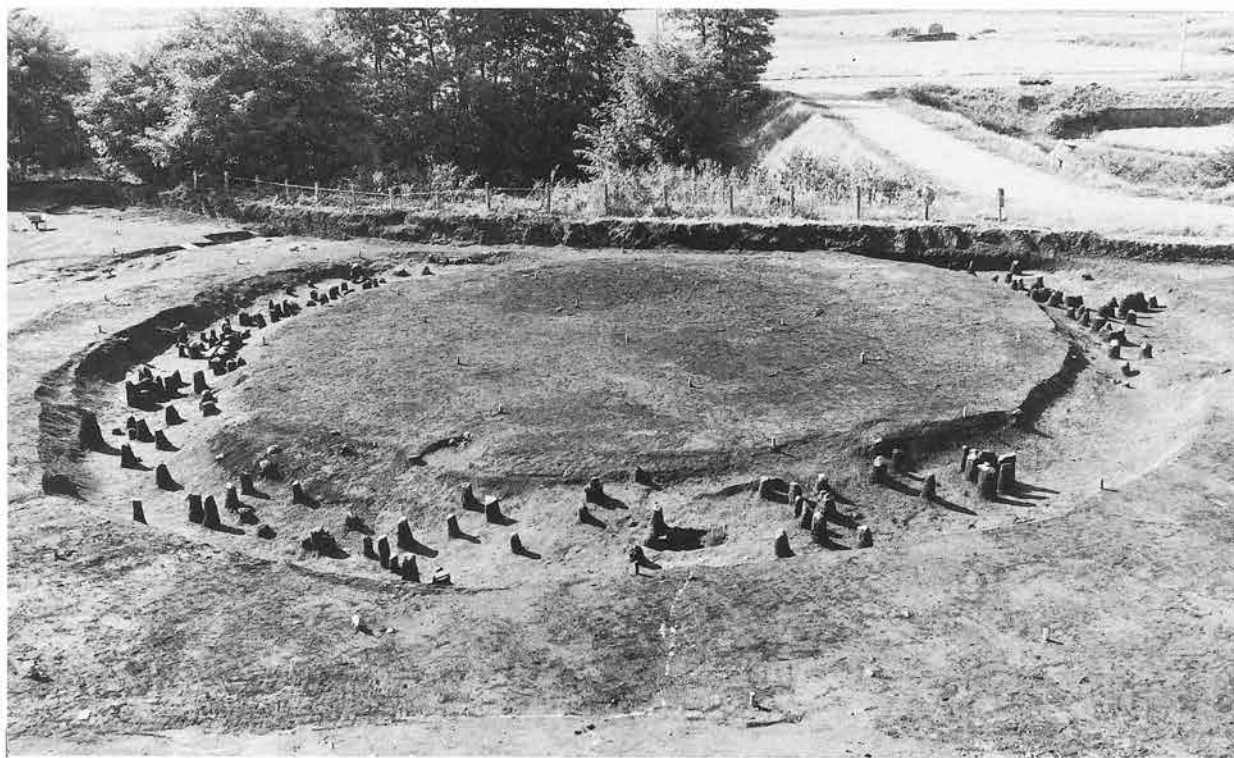
2 第12号周湮葺石検出状況



3 第12号周湮葺石検出状況



4 第12号周湮葺石検出状況



5 第13号周湮（東方より）



1 第13号周滙磔検出状況



2 第13号周滙磔検出状況



3 第13号周滙磔検出状況



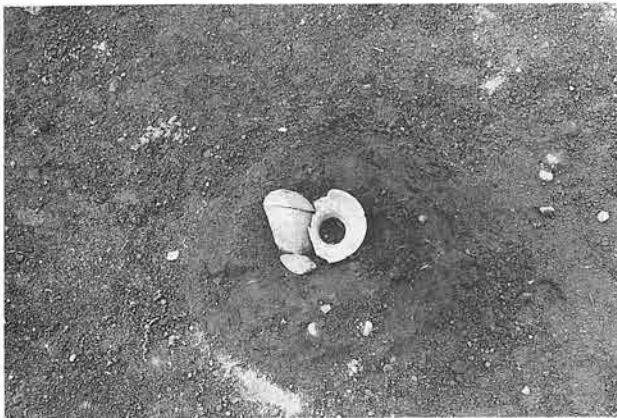
4 第13号周滙内土坑上遺物出土状態



5 第14号周滙(南方より)



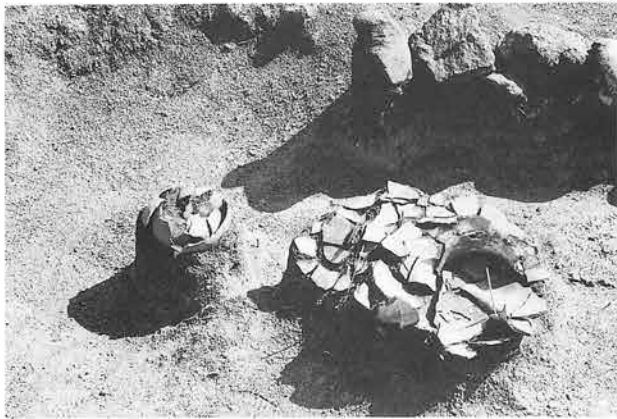
1 第15号周湮（東方より）



2 第14号周湮遺物出土状況



3 第15号周湮遺物出土状況



4 第15号周湮遺物出土状況



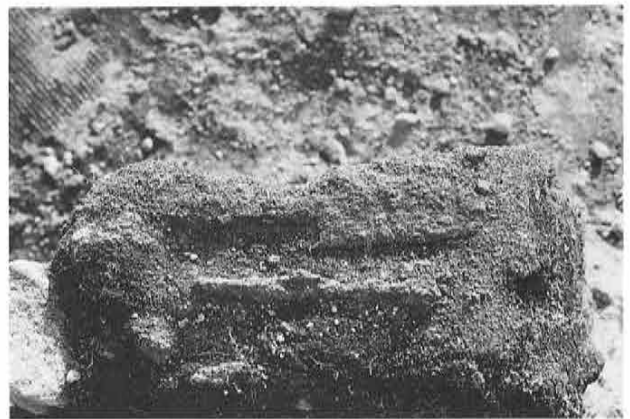
5 第15号周湮遺物出土状況



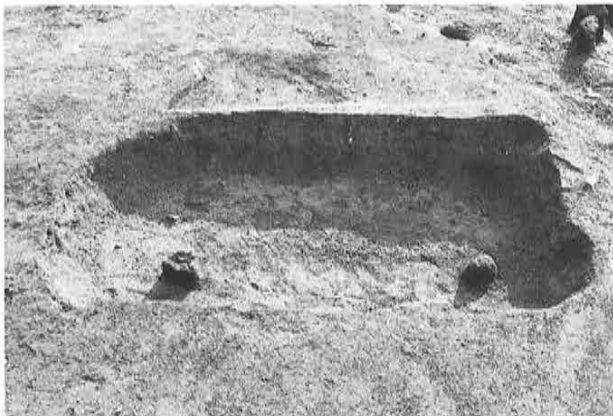
1 第16号周滄（北方より）



2 第16号周滄、第168・169号土坑（北方より）



3 第16号周滄遺物出土状況



4 第168号土坑（北方より）



5 第169号土坑（北方より）



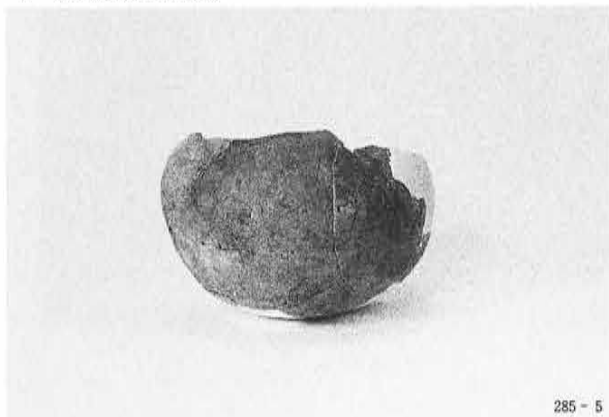
1 第9号周湟出土遗物

285 - 5



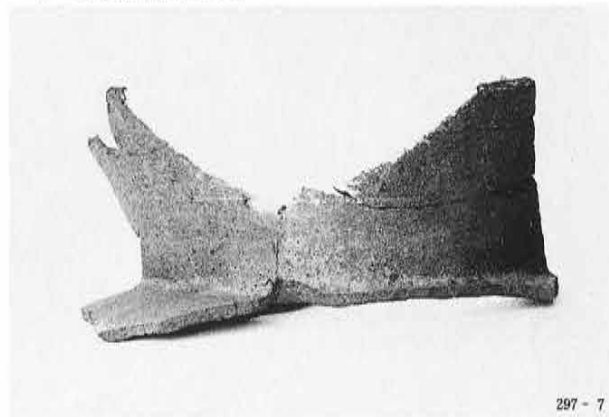
3 第10号周湟出土遗物

289 - 1



2 第9号周湟出土遗物

285 - 5



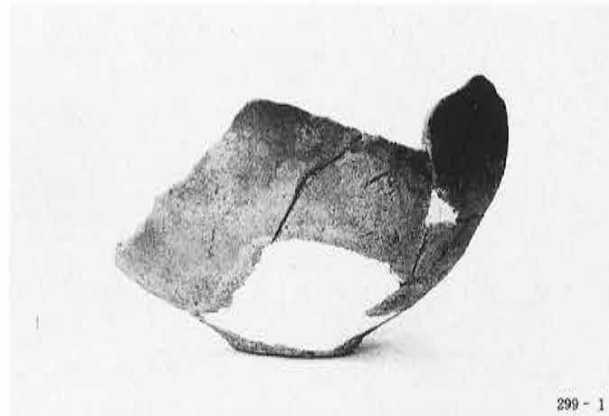
4 第13号周湟出土遗物

297 - 7



5 第13号周湟出土遗物

297 - 4



6 第14号周湟出土遗物

299 - 1



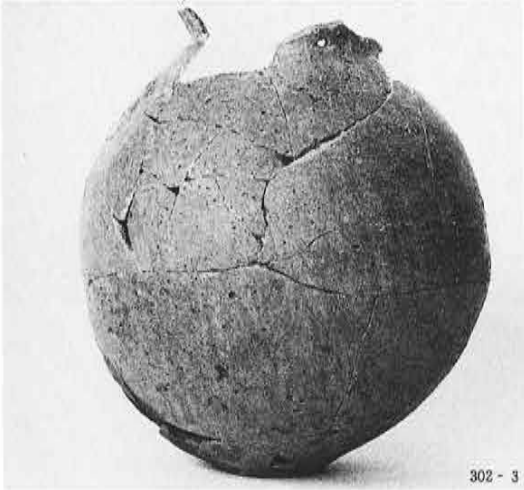
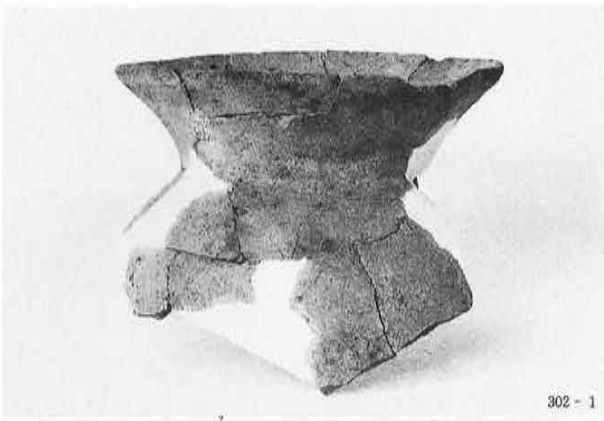
7 第14号周湟出土遗物

299 - 4

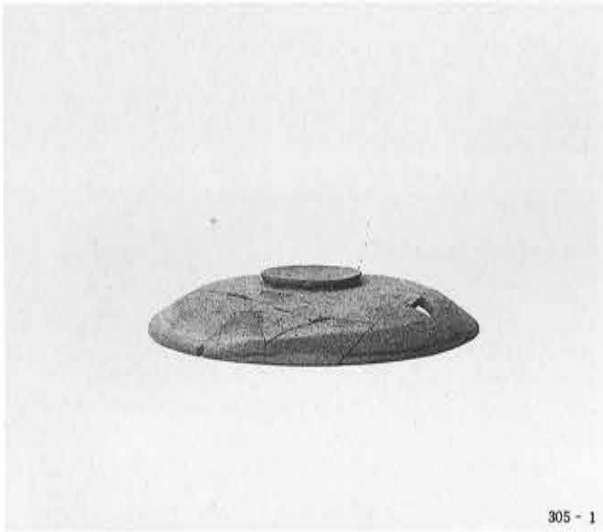


8 第14号周湟出土遗物

299 - 11

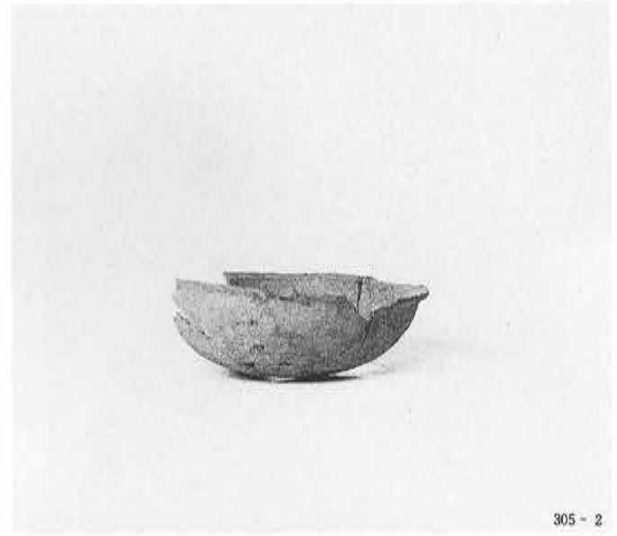


1 ~ 7 第15号周滄内出土遺物



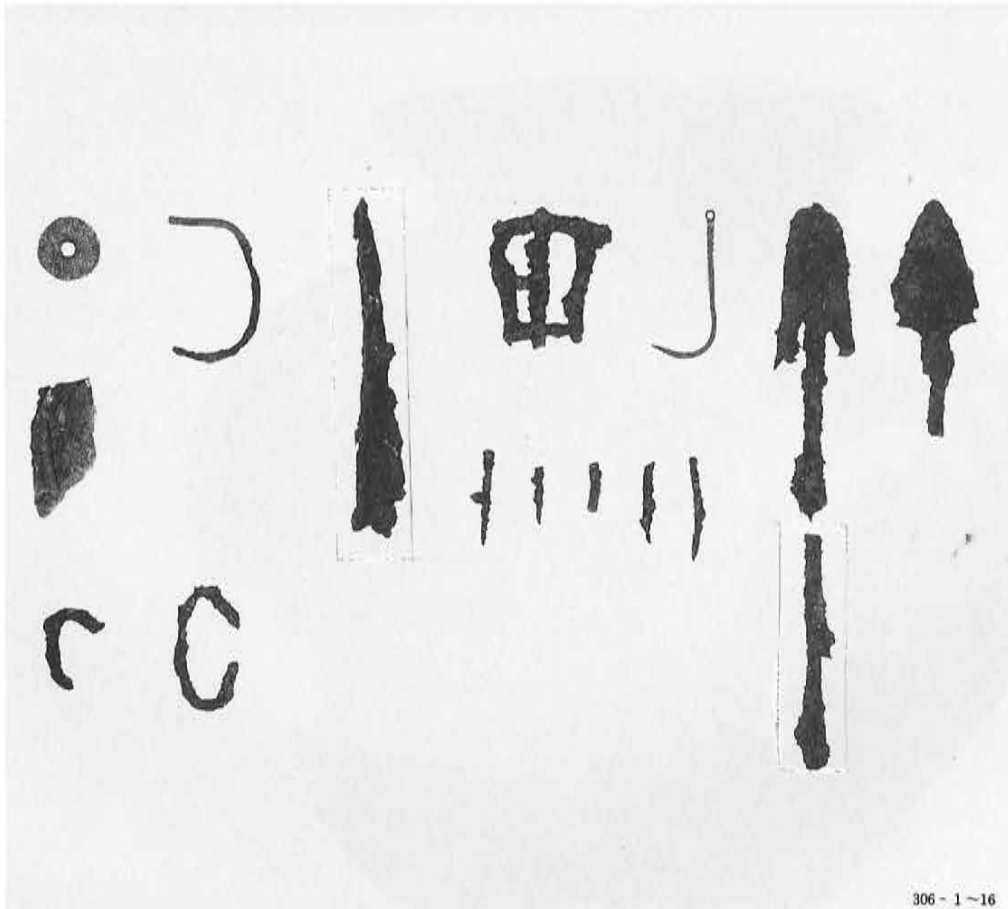
1 第169号土坑出土遺物

305 - 1



2 第175号土坑出土遺物

305 - 2



306 - 1~16

3 周湟内出土金属器及び土製品 (右端は306 - 15のX線写真 撮影佐久市立国保浅間病院)



1 第1号特殊遺構 (南方より)



2 第1号特殊遺構 (南方より)



3 第1号特殊遺構 (北西より)



4 第1号特殊遺構遺物出土状況



5 第2号特殊遺構 (東方より)



308 - 1



308 - 2

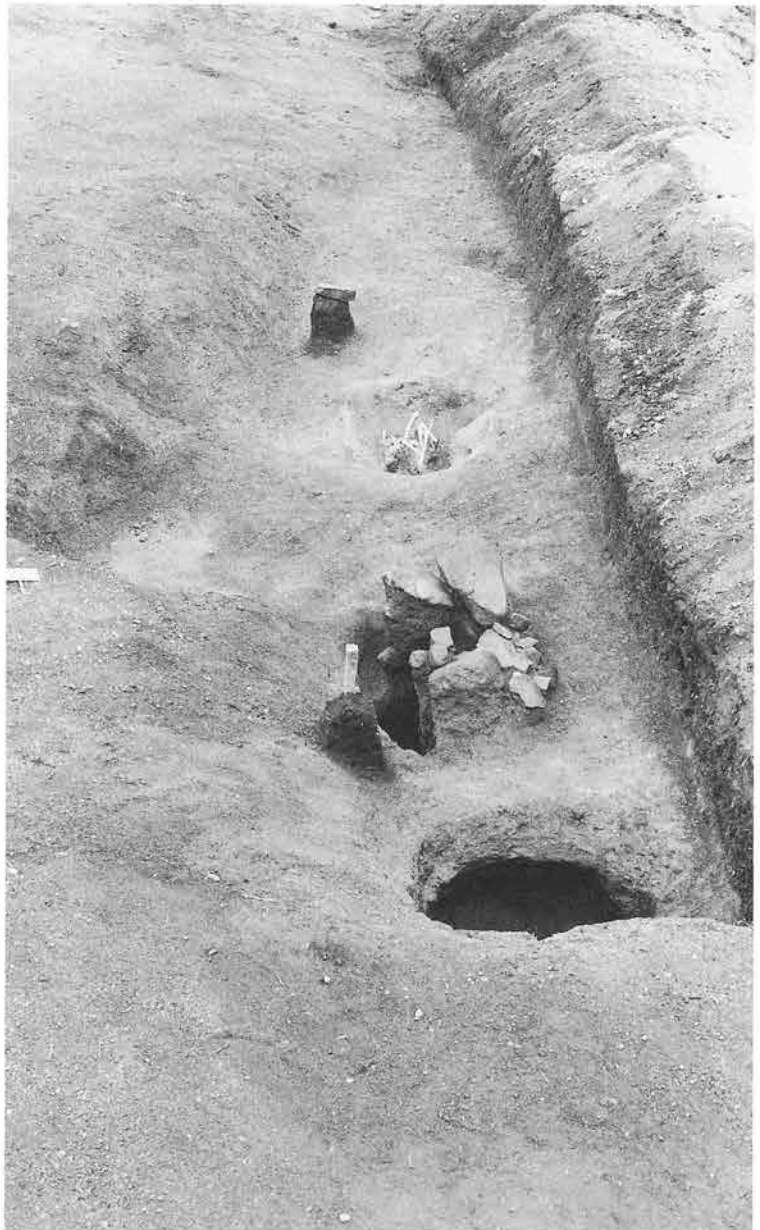


308 - 3



309 - 1

1 ~ 4 第1号特殊遺構出土遺物



5 第2号特殊遺構 (南方より)



6 第2号特殊遺構A土坑・人骨出土状況



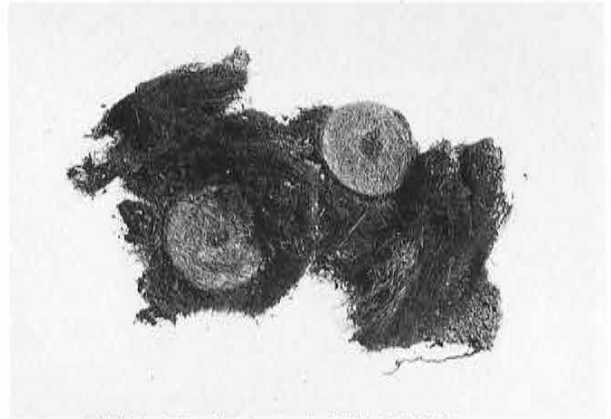
7 第2号特殊遺構A土坑・人骨出土状況



1 第2号特殊遺構B土坑・人骨検出状況（東方より）



2 B土坑出土人骨に抱かれていた毛髪と寛永通宝



3 B土坑出土人骨に抱かれていた毛髪と寛永通宝



4 第2号特殊遺構C土坑（東方より）



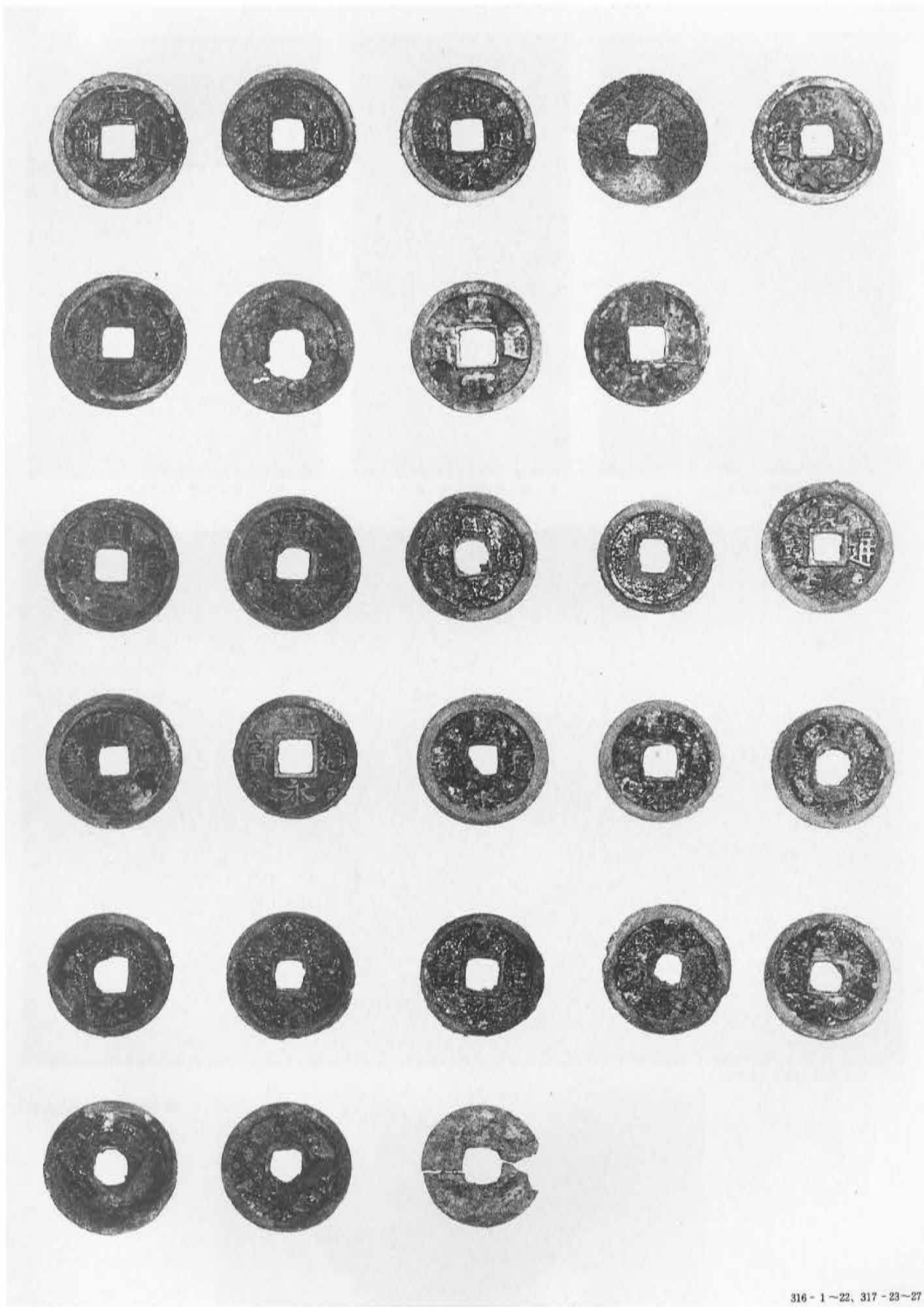
5 第3号特殊遺構（北方より）



1 第2号特殊遺構C土坑・人骨検出状況（西方より）



2 第2号特殊遺構C土坑・人骨検出状況（南方より）



1 第2号特殊遺構出土貨幣



1 第3号溝状遺構（西方より）



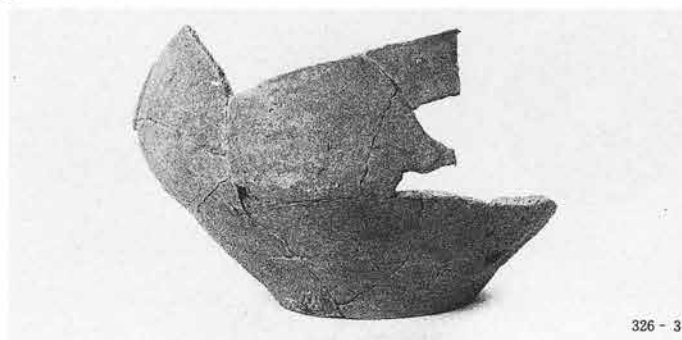
2 第5号溝状遺構（東方より）



3 第7号溝状遺構（西方より）



4 第4号溝状遺構（北方より）



5 第7号溝状遺構出土遺物



1 第101号土坑 (東方より)



2 第101号土坑 (東方より)



3 第102号土坑 (西方より)



4 第103号土坑 (東方より)



5 第104号土坑 (西方より)



6 第107号土坑 (西方より)



7 108号土坑 (西方より)



8 第109号土坑 (北方より)



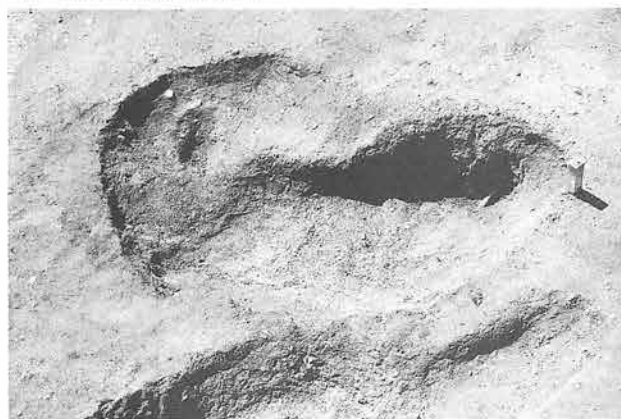
1 第110号土坑 (南方より)



2 第112号土坑 (西方より)



3 第115号土坑 (東方より)



4 第117号土坑 (東方より)



5 第116号土坑 (南方より)



6 第116号土坑北宋銭出土状況



7 第118号土坑 (西方より)



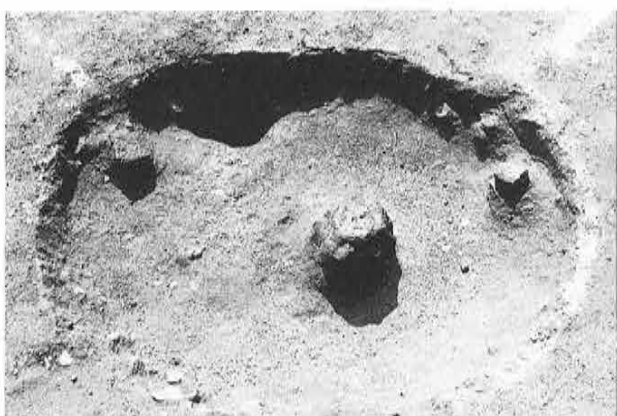
8 第119号土坑 (東方より)



1 第120号土坑 (東方より)



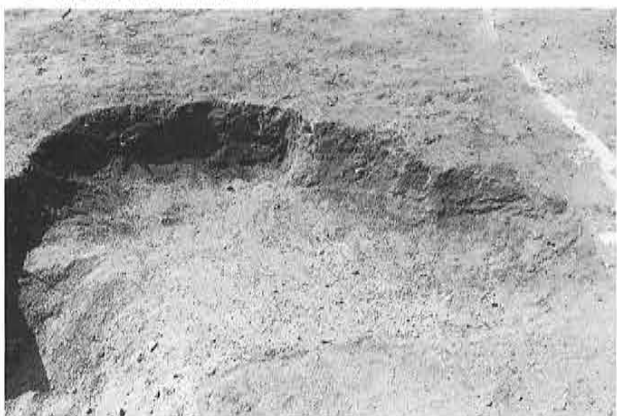
2 第121・122号土坑 (南東より)



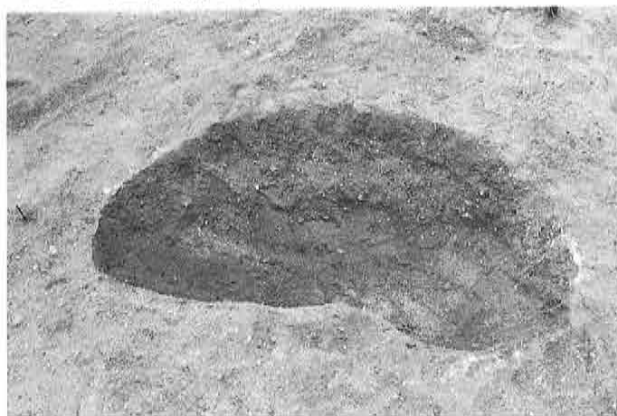
3 第123号土坑 (西方より)



4 第124号土坑 (南方より)



5 第125号土坑 (北方より)



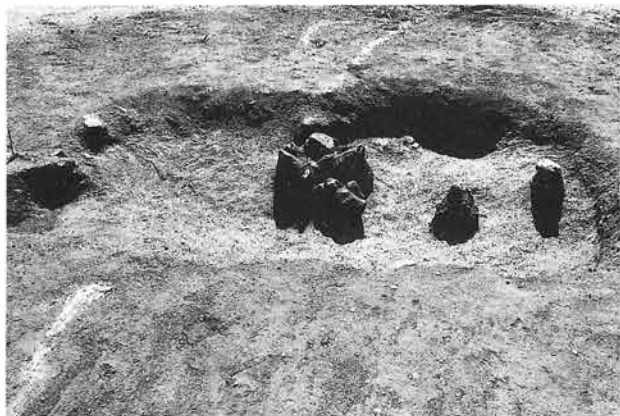
6 第126号土坑 (西方より)



7 第127号土坑 (西方より)



8 第128号土坑 (東方より)



1 第130号土坑（東方より）



2 第136号土坑（北方より）



3 第137号土坑（東方より）



4 第140号土坑（東方より）



5 第140号土坑遺物出土状況



6 第142号土坑（南方より）



7 第144号土坑（南方より）



8 第145号土坑（東方より）



1 第143号土坑 (北方より)



2 第146・147・155号土坑 (西方より)



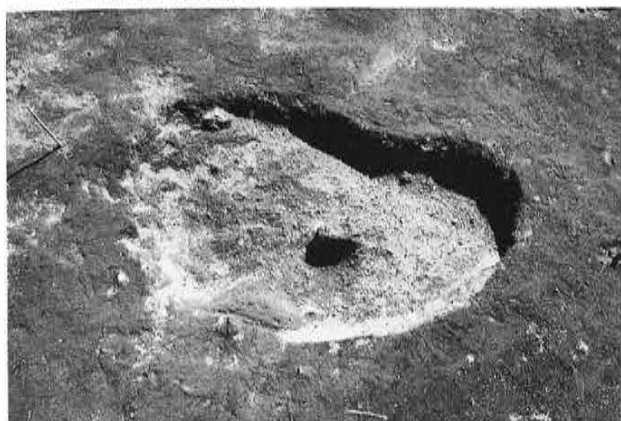
3 第146号土坑 (東方より)



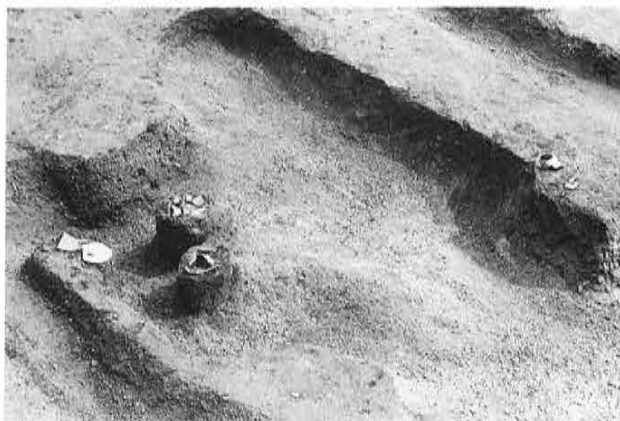
4 第155号土坑 (北方より)



5 第149号土坑 (東方より)



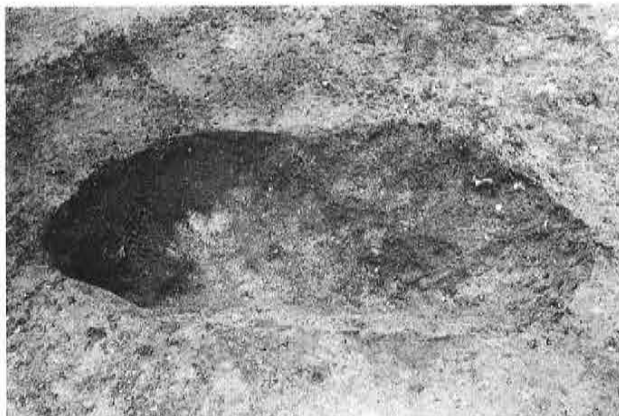
6 第150号土坑 (東方より)



7 第151号土坑 (南東より)



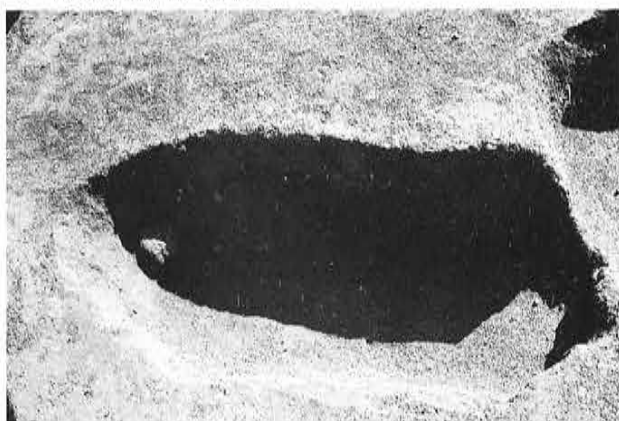
8 第154号土坑 (西方より)



1 第164号土坑 (南方より)



2 第167号土坑 (東方より)



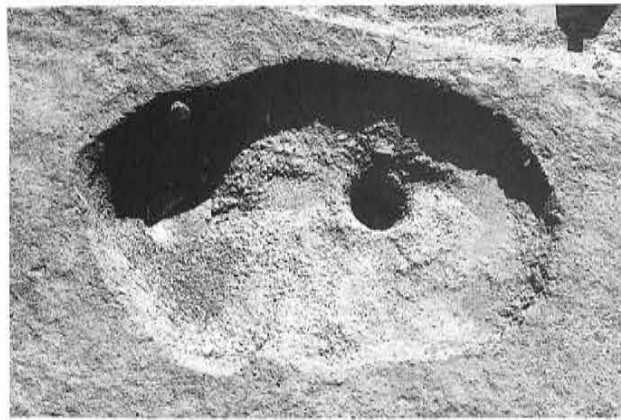
3 第170号土坑 (北方より)



4 第171号土坑 (北西より)



5 第171号土坑遺物出土状況



6 第172号土坑 (北方より)



7 第173号土坑 (西方より)



8 第174号土坑 (西方より)



1 第176号土坑（東方より）



2 第176号土坑遺物出土状況



3 第162号土坑（南方より）



4 第177号土坑（南方より）



395 - 6

1 第133号土坑出土遺物



395 - 14

2 第140号土坑出土遺物



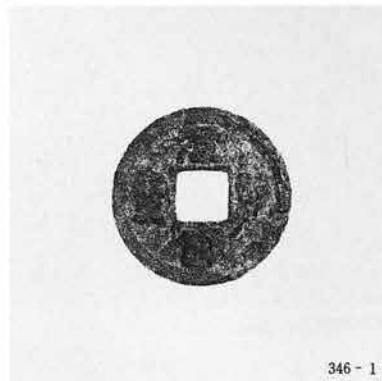
395 - 16

3 第151号土坑出土遺物



395 - 21

4 第171号土坑出土遺物



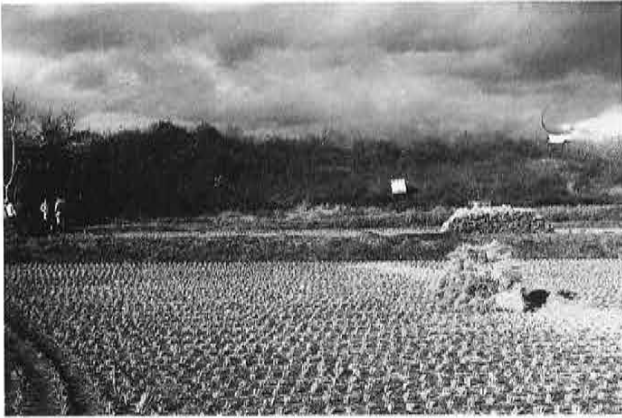
346 - 1

5 第116号土坑出土遺物



398 - 1 ~ 4

6 土坑内出土金属器及び土製品



1 北西ノ久保遺跡東部南斜面遠景 (南方より)



2 北西ノ久保遺跡東部南斜面全景 (南方より)



3 第1号礫群 (西方より)



5 第4号礫群 (東方より)



4 第2号礫群 (東方より)



6 第5号礫群 (南方より)



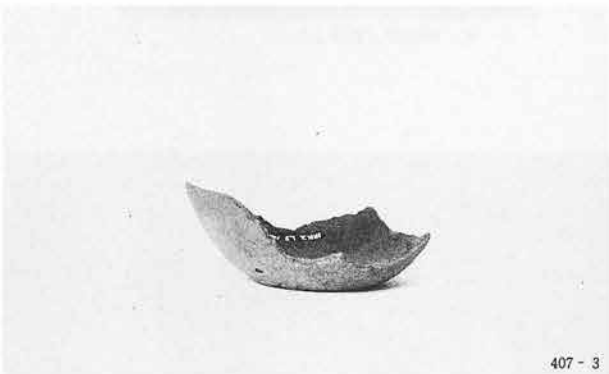
1 第3号礫群 (北方より)



2 第3号礫群遺物出土状況



3 第3号礫群遺物出土状況



4 第3号礫群出土遺物



5 第1号ピット列 (東方より)



1 グリッド・表採遺物

411-1



2 グリッド・表採遺物

411-7



3 グリッド・表採遺物

411-9



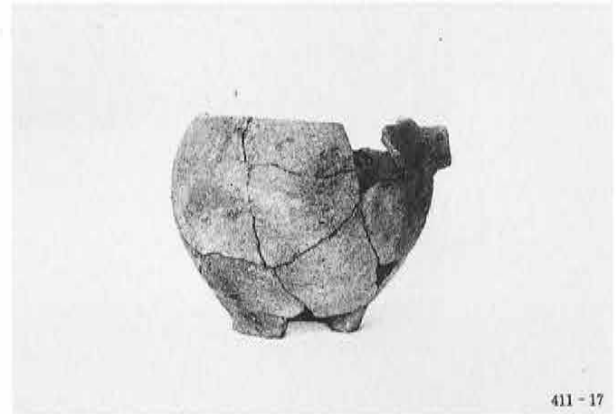
4 グリッド・表採遺物

411-12



5 グリッド・表採遺物

411-17



6 グリッド・表採遺物

411-17



7 グリッド・表採遺物

411-18



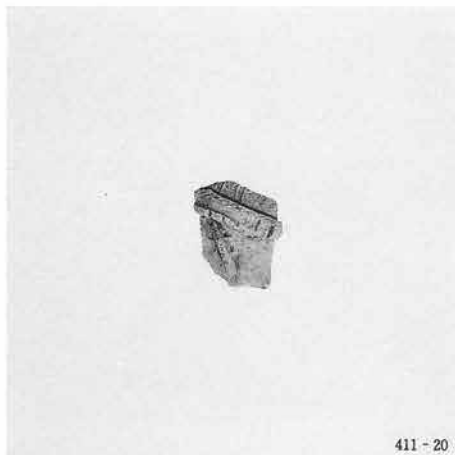
8 グリッド・表採遺物

411-18



411-20

1・2 グリッド・表探遺物



411-20

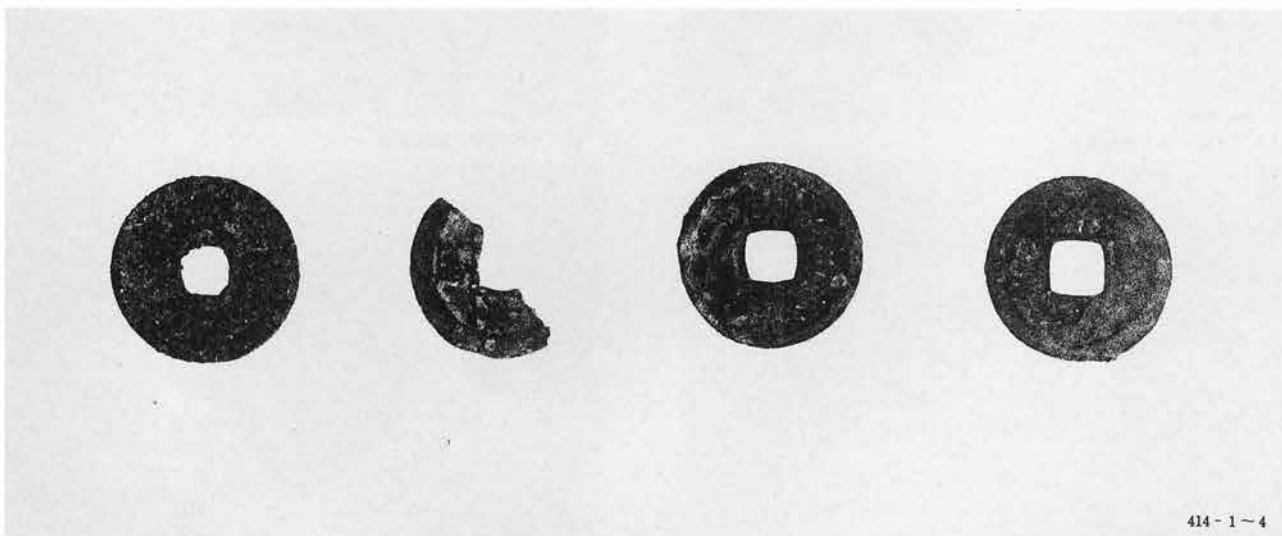


412-26

3・4 グリッド・表探遺物

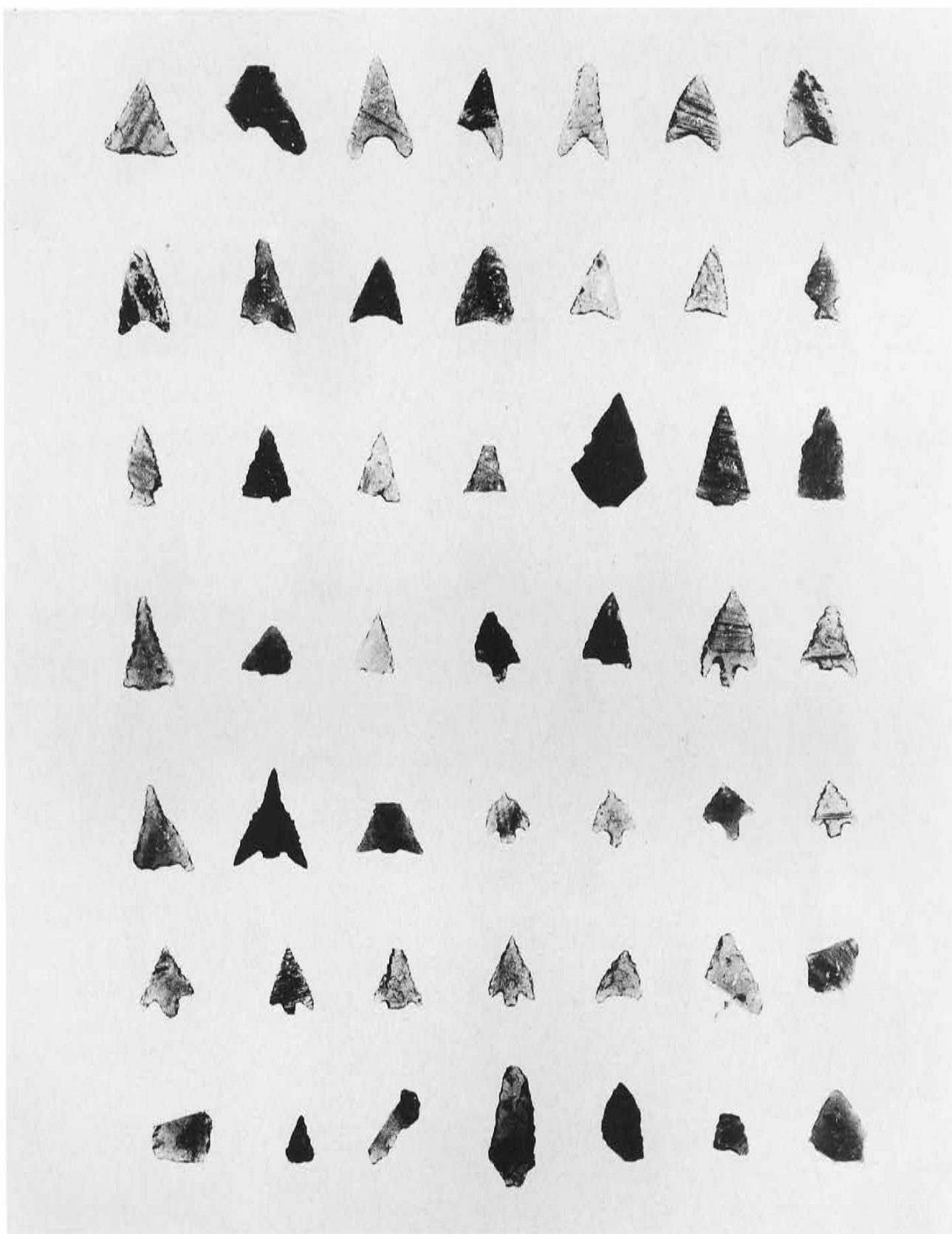


412-26

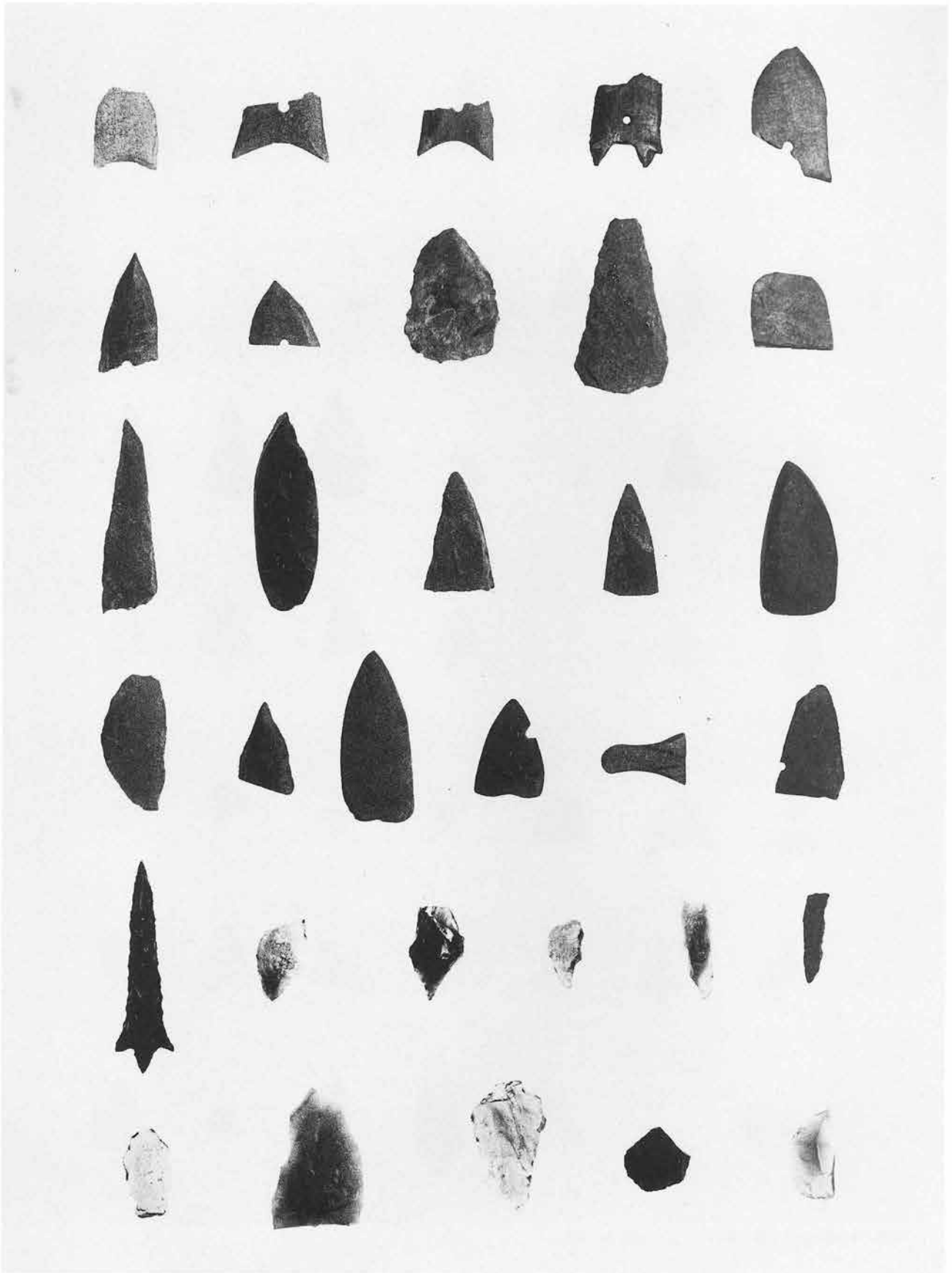


414-1-4

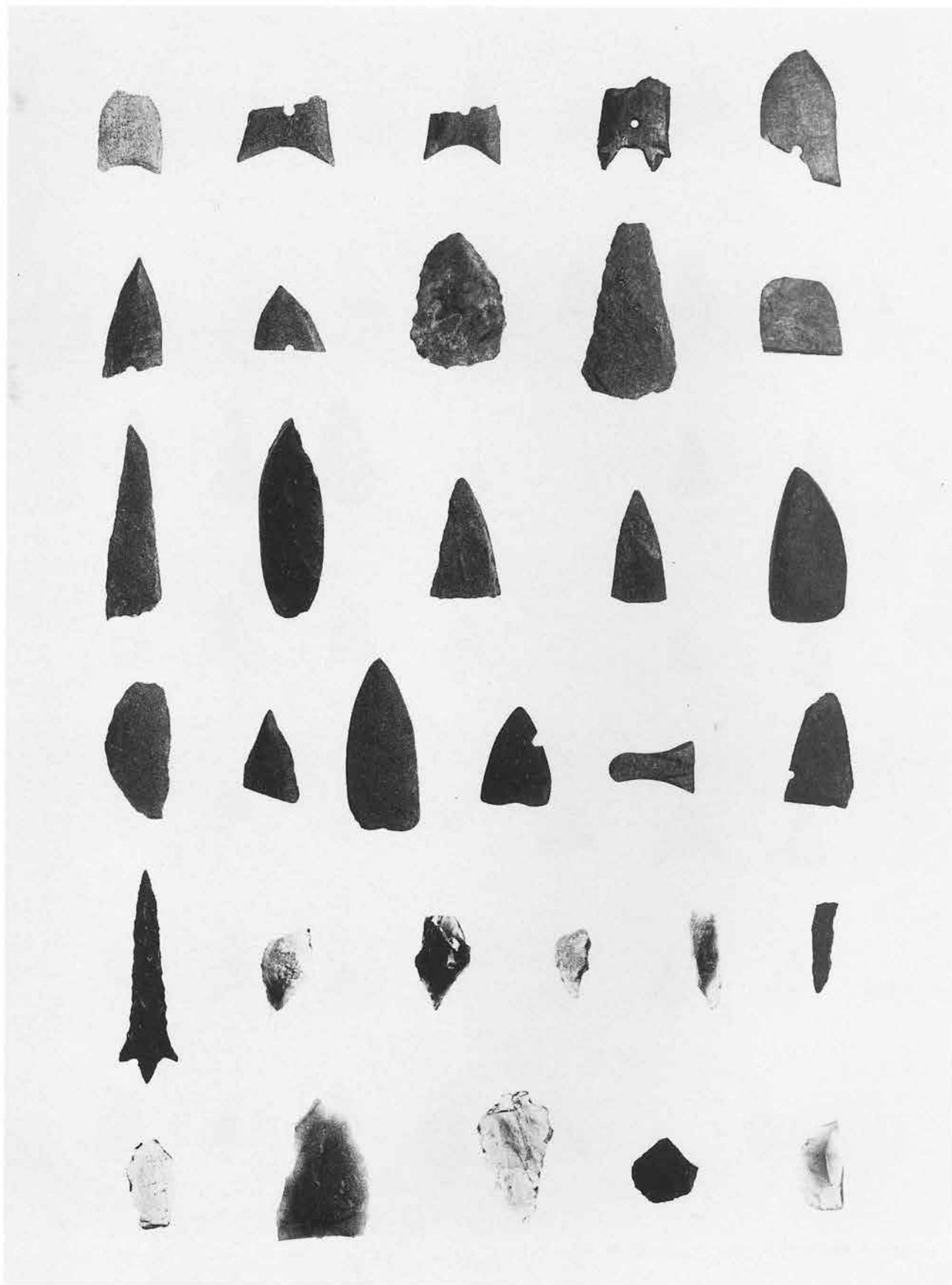
5 グリッド出土貨幣



1 北西ノ久保遺跡出土石器 (267-1~45・268-46~49)



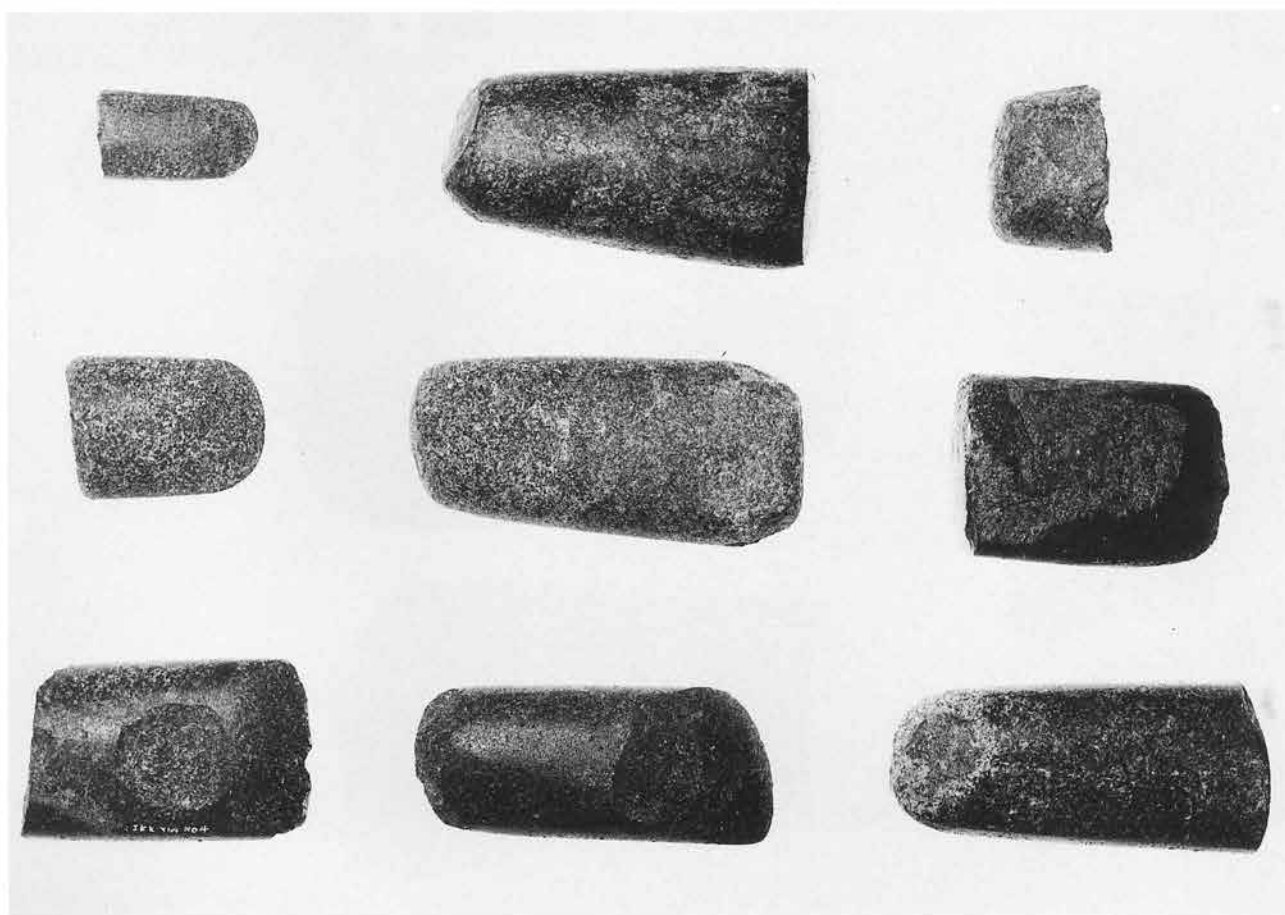
1 北西ノ久保遺跡出土石器 (268 - 50~71・269 - 72~81)



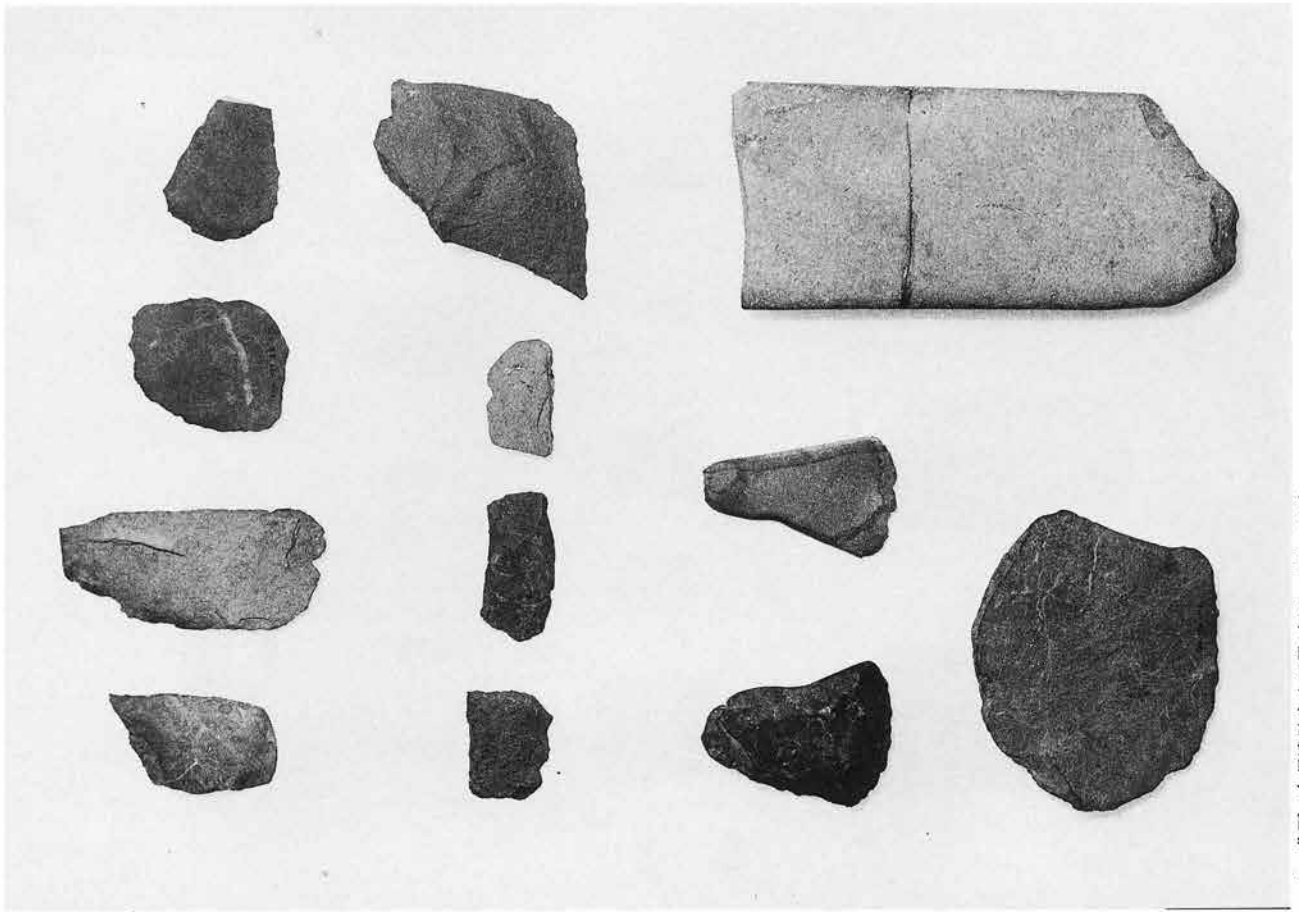
1 北西ノ久保遺跡出土石器 (268 - 50~71・269 - 72~81)



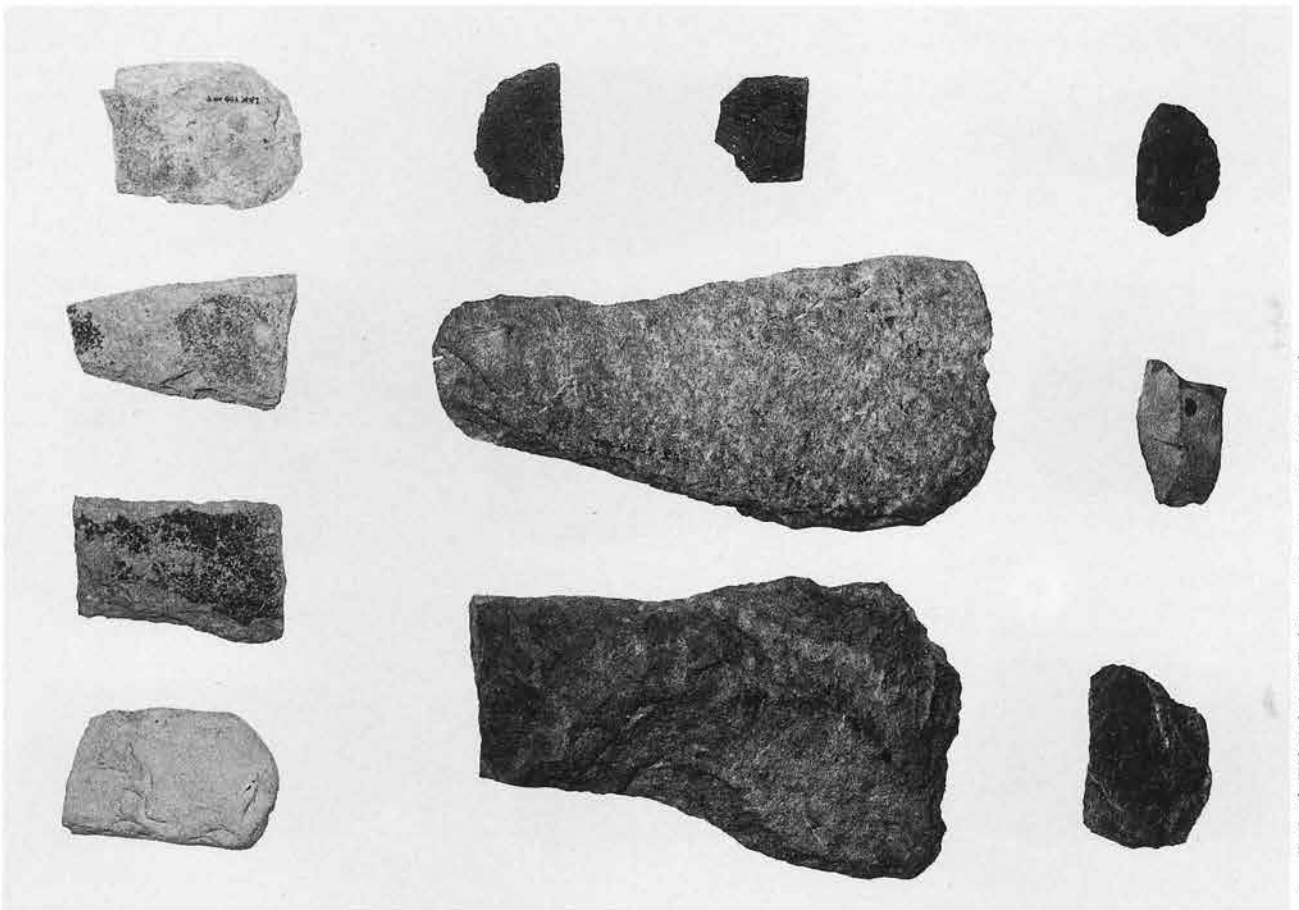
2 北西ノ久保遺跡出土石器 (271 - 91 ~ 105)



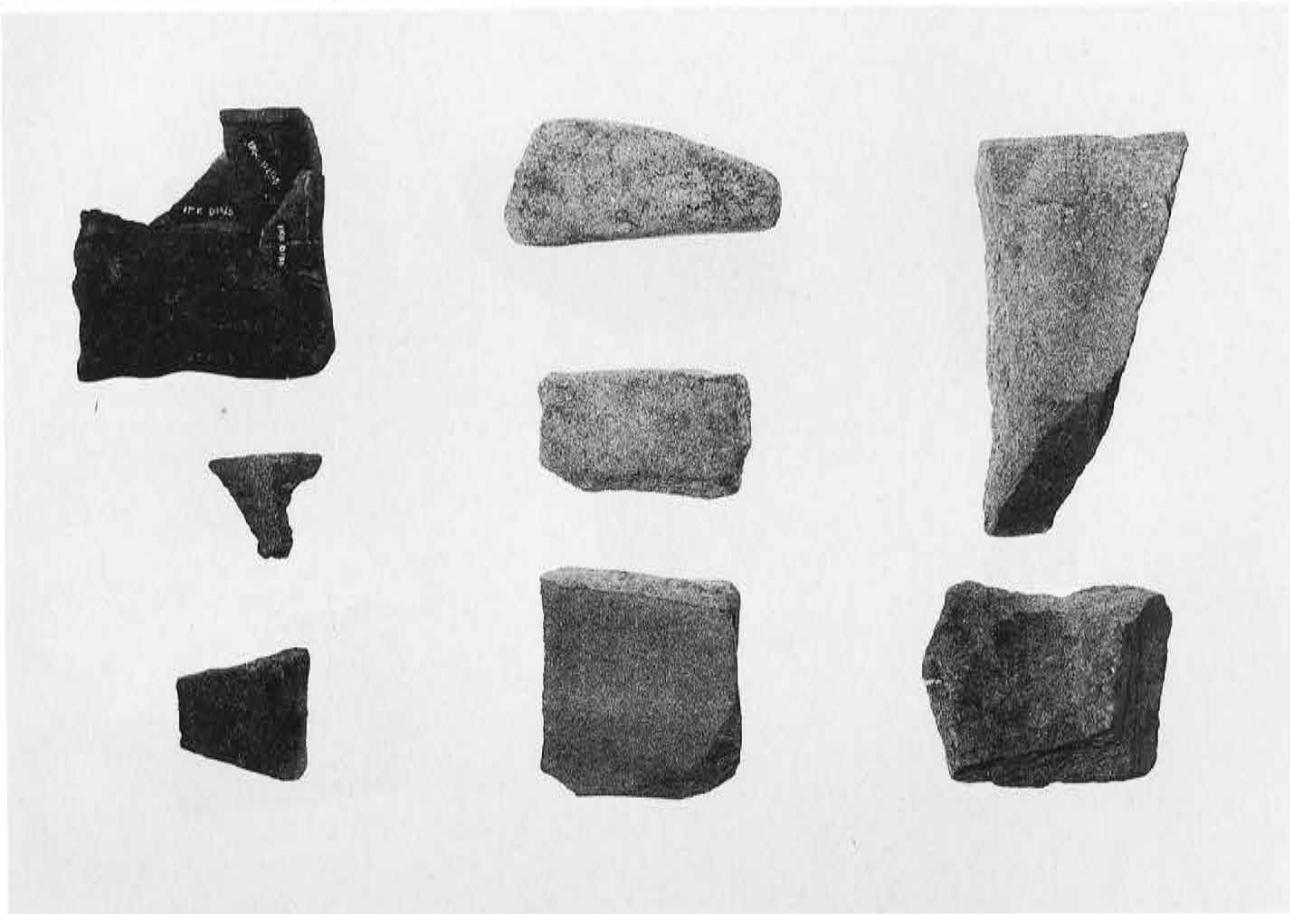
1 北西ノ久保遺跡出土石器 (270 - 82 ~ 90)



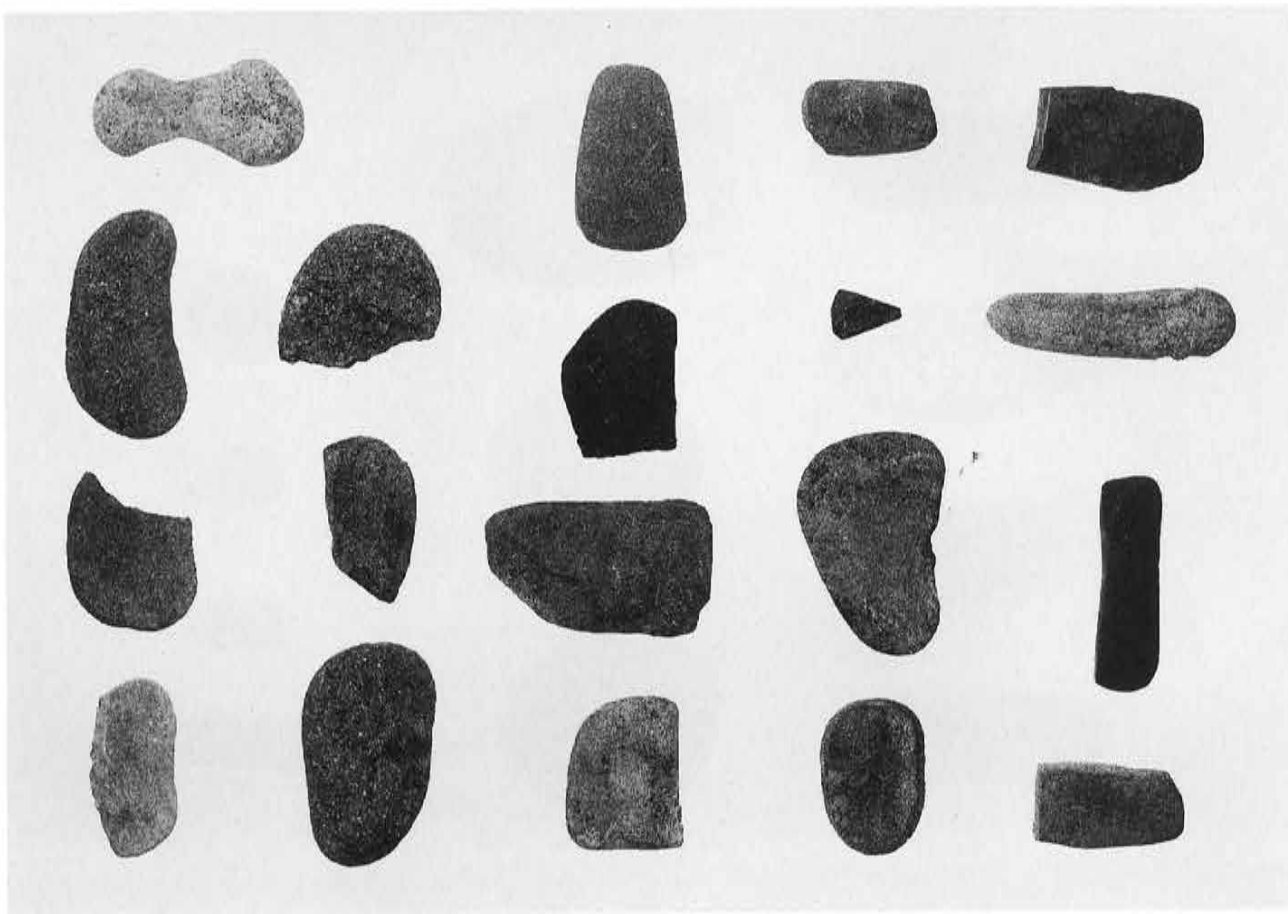
2 北西 / 久保遺跡出土石器 (272 - 117 ~ 128)



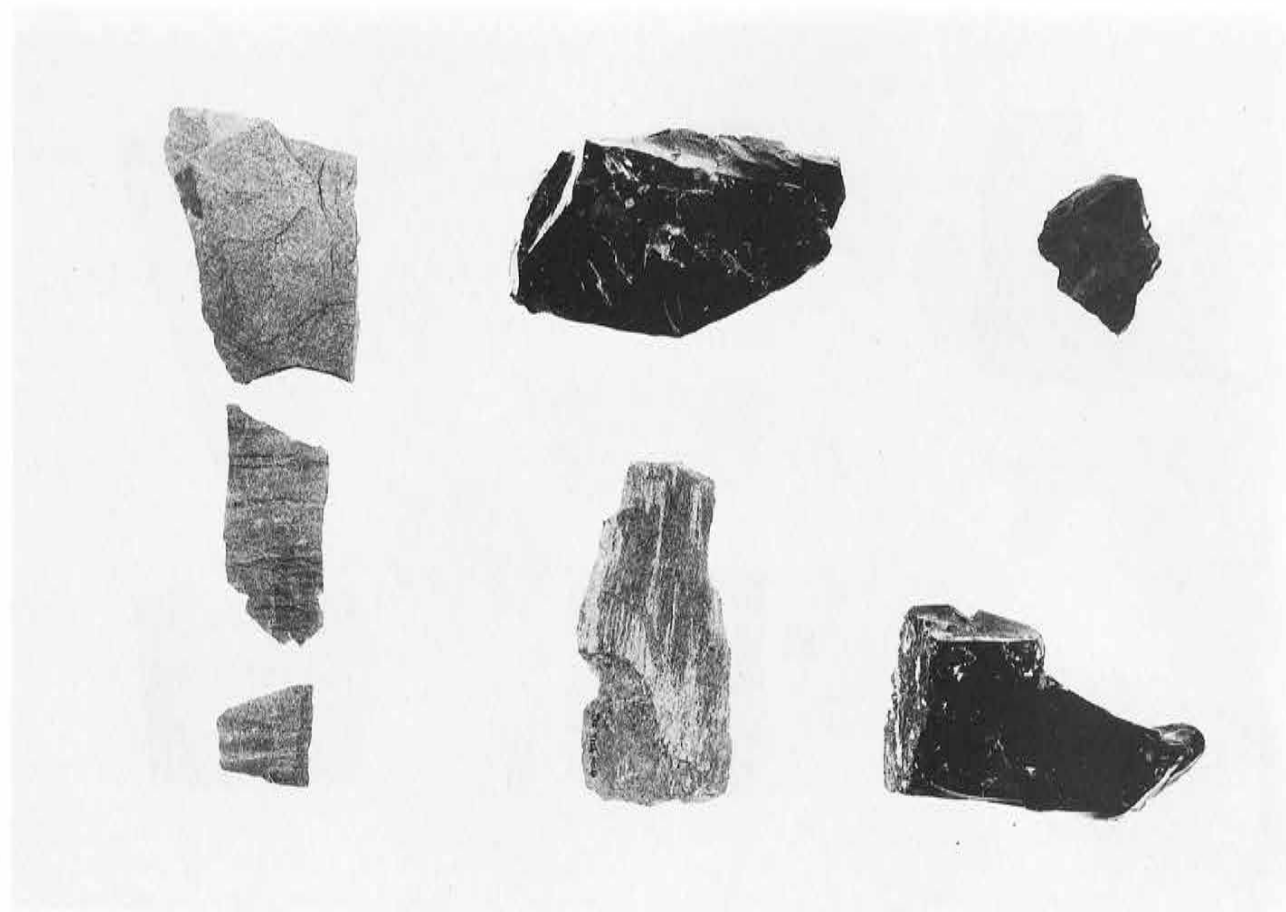
1 北西 / 久保遺跡出土石器 (271 - 106 ~ 111 · 272 - 112 ~ 116)



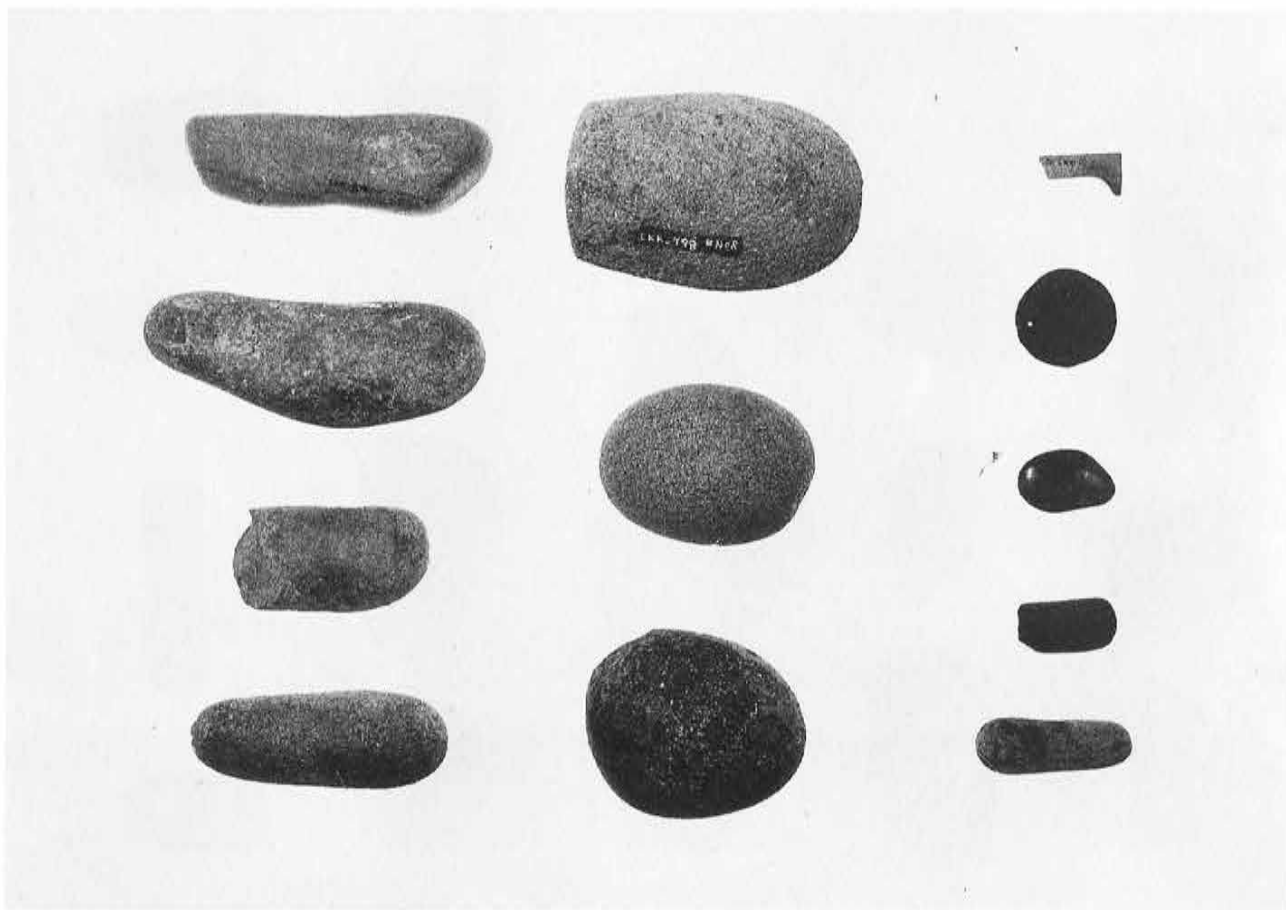
2 北西ノ久保遺跡出土石器 (273 - 148 - 155)



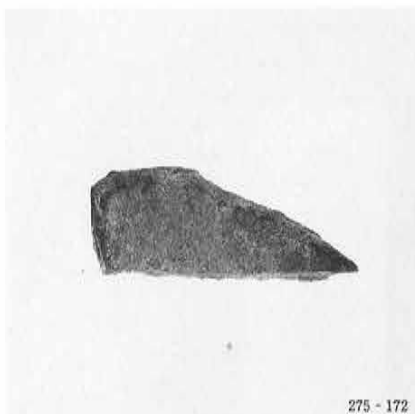
1 北西ノ久保遺跡出土石器 (272 - 129 - 135 · 273 - 136 - 147)



2 北西ノ久保遺跡出土石器 (274 - 168 - 171 · 276 - 182 - 184)



1 北西ノ久保遺跡出土石器 (273 - 156 · 157 · 274 - 158 - 166)



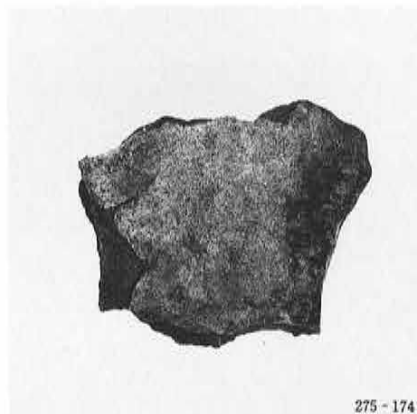
1 北西ノ久保遺跡出土石器

275 - 172



2 北西ノ久保遺跡出土石器

275 - 173



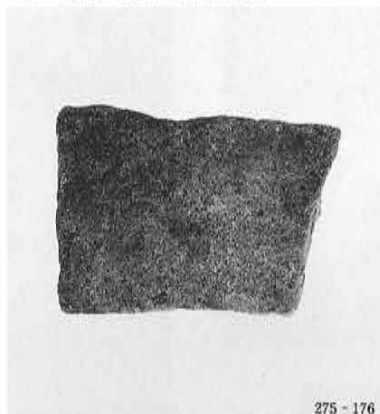
3 北西ノ久保遺跡出土石器

275 - 174



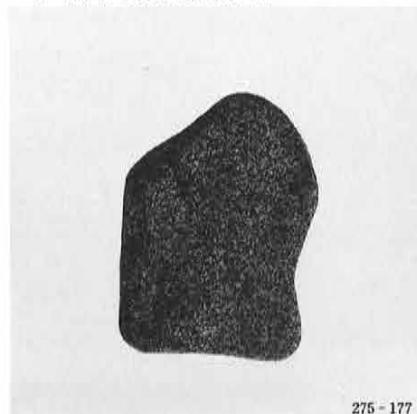
4 北西ノ久保遺跡出土石器

275 - 175



5 北西ノ久保遺跡出土石器

275 - 176



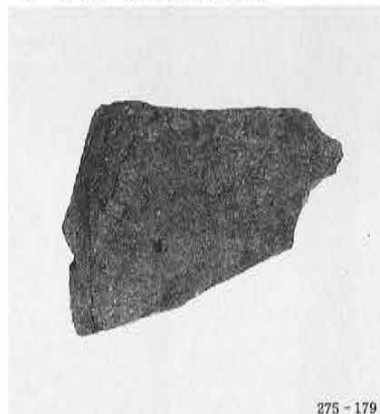
6 北西ノ久保遺跡出土石器

275 - 177



7 北西ノ久保遺跡出土石器

275 - 178



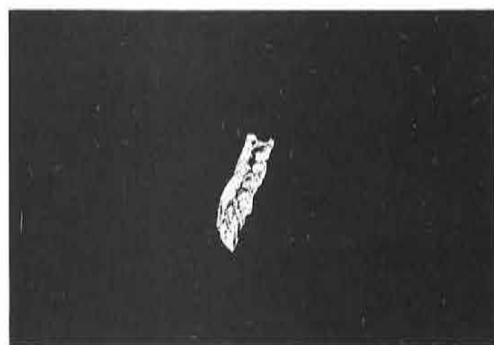
8 北西ノ久保遺跡出土石器

275 - 179

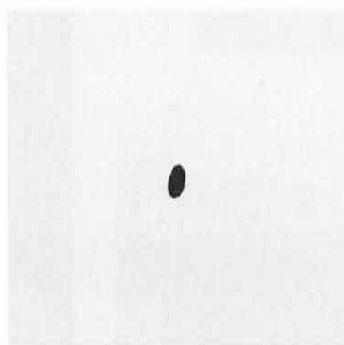


9 北西ノ久保遺跡出土石器

275 - 180



10 Y109号住居址出土獣骨



11 Y65号住居址出土炭化米



12 Y126号住居址出土炭化米

北西ノ久保遺跡発掘調査報告書 後記

“佐久にも大学を、との願いは地域全体の宿望であった。学校法人佐久学園がそれにこたえ、佐久市当局が全面的に協力して短期大学建設が計画され、最終的に位置決定を見たのが昭和57年であった。その予定地北西ノ久保は佐久市の中央部岩村田台地の西寄り標高680m・湯川右岸段丘上の岩村田町内から流下する前川に周囲を限られた独立の一区画で全面積約15,000㎡である。ここは昭和54年に佐久市教育委員会によって台地上全域にわたって重要遺跡緊急調査が行われ相当数の遺跡が確認されていたが、短大建設によって破壊を余儀なくされる事態となったために佐久学園は佐久市教育委員会に調査を依頼され、昭和57年度には第一次調査として台地北東部約7,000㎡が発掘調査され記録保存がはかられた。それによると佐久地方稀に見る弥生時代中期後半以来古墳・奈良・平安時代に続く住居址・周溝・古墳とぼう大な土器・石器・埴輪等遺物が検出され本遺跡の重要性が確認された。

今回は残された南西部約7,000㎡を第二次発掘調査による記録保存をはかるために佐久学園が佐久市教育委員会に委託し、佐久市教育委員会からは佐久埋蔵文化財調査センターに調査実施を委託したものである。

調査は昭和60年5月16日から開始し、台地上から竪穴住居址69棟・古墳址9基・土坑70余基・特殊遺構3基の調査記録・実測・写真撮影を11月13日に終了し、続いて東部南斜面の調査にはいり12月13日第二次調査を完了し、野外調査に満7ヶ月を要した。昭和61年1月から整理作業研究遺物記載復元実測図作製、遺構図・遺物図トレース、写真図版作製、原稿作製に昭和62年3月末日まで15ヶ月を費した。

現地調査は梅雨期の雨・真夏の炎天下火山灰、砂ぼこりに悩まされ、晩秋には霜の凍結等の困難も多く続いたが佐久地方にはじめて見るすばらしい弥生中期以降の遺構や物すごく多量の遺物、1万平方メートル以上の独立台地上の全面発掘による古代人の暮らし、村の生活の変遷の様相の新しい発見が繰返されることに調査員全員が驚異し究明意欲をかり立てられて完成することが出来た。これには調査団の調査指導者・担当者・主任・副主任にそれぞれ適任者を得たことと何れも学生時代からの専攻の実力に物を言わせ、しかも若い情熱を注ぎ込んでこの調査研究に最後まで熱中しつづけた事によって調査補助員まで啓蒙し研究心を盛り立てたことが全体的にすばらしい成果を結んだ大きな原因と考えられる。長期間の現地作業中に事故災害一つなく、多くの集りの中、毎日が楽しい発掘作業で終始した事は佐久市教育委員会・佐久埋文調査センター当局の行き届いた御配慮と若き調査主任の人柄と実践実行実力があづかって大きな力となったことを明記して感謝したい。

昭和61年以降整理段階ではぼう大な出土遺物・うず高く積まれた実測図の整理原稿化には残業休日出勤が繰返され、埋文調査センター研究室には夜毎明る照明のい照明が輝いていた。

佐久平中心部に位置した北西ノ久保大遺跡の発掘調査は完了して記録保存としての本報告書は出来上がった。研究不備な点は出土資料が佐久市教育委員会に保管してあるので今後も再検討し得る。かくして北西ノ久保遺跡は跡型もなく消滅した。しかし今日まで資料が乏しく充分な解明をし得なかった佐久平の弥生中期以後奈良平安時代に及ぶ古代史編年の資料は多く補充されて今後に生かすことができるようになった。その上長期にわたる調査研究に従事された調査員の方々の考古学に対する研究と理解の進歩には驚く程のものが見られ専門的技術を身につけた者も多く今後この人々の活躍にも期待される。

発掘作業の間に行われた現地見学会・一般見学者・出土遺物展示会・例年の少年考古教室など考古学普及活動も盛んであったためか一般の遺跡発掘に対する理解を深められ郷土の歴史に関心がむけられるようになった点も今回の大きな収穫であった。佐久一般の世論としての待望の短期大学の開校が予定され新らしい文化の息吹きがここからも立ちあがるであろうと期待されることも不思議な因縁である。

見ゆるものすべてをつくす発掘も たどるすべなき心の影は 第二次北西ノ久保遺跡発掘調査団長
佐久市文化財保護審議委員 白倉盛男

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	『西裏・竹田峯』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	『池畑・西御堂』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	『芝間』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	『新町II』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	『宿上屋敷、下川原・光明寺』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	『淡瀬・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	『高師町・西大久保』

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第8集

長野県佐久市北西ノ久保遺跡第2次発掘調査報告書
1987年3月

編集者	佐久埋蔵文化財調査センター
発行者	長野県佐久市教育委員会
印刷所	信毎書籍印刷株式会社
